

ストライクウィッチーズ
ズ 扶桑の兄妹 改訂版

u—ya

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如出現した異形の敵「ネウロイ」。

魔力を持ち、魔導エンジンによる飛行脚「ストライカーユニット」を駆り、ネウロイに立ち向かう少女「ウィッチ」。

そして、極稀に存在する魔力を持った少年「ウィザード」。

これはとある世界のとある時代、大切な人々を守るために戦い続けた兄妹の物語である。

※以前書いた、同タイトルの作品の改訂版です。一度は筆を置こうとしましたが、やっぱり諦めきれなかつたため、所々修正しながら再投稿することにしました。勝手に思います、もしよければお付き合いください。

※例によつて、にわかミリタリー知識、急な路線変更、作者の自己満足、ご都合主義等が許せないという方にはブラウザバックを推奨します。

※6 / 24タイトルを少し変更しました。

目次

オリ主及び本作に置けるウイザードの設定（ネタバレあり&随時更新予定）	1
オリジナルキャラクター紹介（ネタバレあり&随時更新予定）	8
第1章『ストライクウイッチーズ編』	
第1話「兄と妹」	24
第2話「第501統合戦闘航空団のウイザード」	28
第3話「兄妹の再会」	44
第4話「父の手紙と妹の渡欧」	
第5話「兄の温もり」	62
第6話「無力な妹」	
第7話「妹の決意」	111
第8話「妹の入隊、兄の左遷（？）」	
第9話「兄妹とリーネ」	144
第10話「初戦果」	156
第11話「妹とバルクホルン」	
第12話「兄とバルクホルン」	174
第13話「扶桑の兄とカールスラント」	192

	の姉	211			
	第14話「海上訓練前夜」	223		第21話「肝油と茶の湯」	356
	第15話「海上訓練とかき氷の思い出」	235		第22話「地上の兄と夜空の妹」	381
	第16話「ブルー・プルミエとの一時と グラマラス・シャリーリーの音速突破」	254		第23話「絶対凍結」	398
	第17話「宮藤兄妹の休日」	271		第24話「酒は飲んでも飲まれるな」	417
	第18話「宮藤兄妹と夜間哨戒」	289		第25話「ラッキースケベとズボン紛 失事件 前編」	446
	第19話「過去の記憶」	311		第26話「ラッキースケベとズボン紛 失事件 後編」	467
	第20話「暴かれた秘密と大いなる誤 解」	337		第27話「宮藤兄妹のお出掛け 前編」	492
				第28話「宮藤兄妹のお出掛け 中編」	

第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	516	第36話「魔眼の涙」	758
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第37話「優しい兄と泣き虫な妹と」	777
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第38話「信じて欲しい妹、信じた兄」	801
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第39話「妹の脱走」	827
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第40話「ネウロイの兄妹(?)とウォーロック」	860
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第41話「ピースの欠けた完全体」	前
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第42話「ピースの欠けた完全体」	中
第29話「宮藤兄妹のお出掛け 後編」	546	第43話「ピースの欠けた完全体」	後
第30話「迷惑」	589	編	911
第31話「規則と苦悩と」	620	第33話「歌姫の悲しみ、堅物大尉の乱」	885
第32話「深紅のドレスと戦場の歌姫」	651	第34話「亀裂」	911
第33話「歌姫の悲しみ、堅物大尉の乱」	651	第35話「鮮血と大粒の涙」	738
第34話「亀裂」	714		
第35話「鮮血と大粒の涙」	738		

第44話「虹の女神」の暴走

936

957

第45話「宮藤兄妹vsウオーロック」

980

第46話「再集結」

第47話「決戦」

第48話「勝利と後始末」

第49話「復活のラッキースケベ」

1060

第50話「再会」

第2章『東の間の平和編』

第1話「ゆつくりと、よく噛んで食べま

第2話「ワイト島で湯治療養

その1

1129

第3話「ワイト島で湯治療養

その2

1151

第4話「ワイト島で湯治療養

その3

1172

第5話「ワイト島で湯治療養

その4

1198

第6話「ワイト島で湯治療養

その5

1221

第7話「ワイト島で湯治療養

その6

1250

- 1269 インターミッション「恍惚の美女」
- 第8話「ゾウさん♪ゾウさん♪パ
パより大きいね♪」—— 1274
- 第9話「俺の妹がこんなに病んでるわ
けない」—— 1306
- 1332 第10話「まさかの○○○○」
- インターミッション「もっさんの
昔語り——またはウィッチとワイザード
の夜」—— 1358
- 1363 第11話「バカと天才は紙一重」
- 1430 第12話「父の新たな決意」——
- 1455 第13話「宮藤博士の実験」—— 1405
- 1479 第14話「宮藤博士の危険な実験」
- 1479 第15話「宮藤博士の狂気の実験」
- 1497 第16話「瘴気病とベイカー兄妹」
- 第17話「火と言葉遣いに御用心」
- 第18話「シスコンは死んでも治らな
い」—— 1523
- 第19話「インペリアルウィッチーズ」

	インターミッションIIII「帝政カー	1547		第5話「リバウの貴腐人」	1704
	ルスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空			第6話「ナンパと熊式鱈折り」	
	団『インペリアルウィッチーズ』			第7話「ウィッチーズ出撃」	1726
1569				第8話「マジノ線」	
	第20話「悠貴・フォン・アインツベル			第9話「ウォーロック擬きとインペリ	
	ン親衛隊大佐」	1580		アルウィッチーズ」	1803
	第3章『白銀の翼編』			第10話「ストライクウィッチーズと	
	第1話「解散命令」	1603		インペリアルウィッチーズ その1」	
	第2話「リバウの貴婦人」	1628			
	第3話「手紙、制服、ワイシャツ、嫉妬」	1653		第11話「ストライクウィッチーズと	
				インペリアルウィッチーズ その2」	1850
	第4話「解散前に……」	1681			

- 第12話「ストライクウィッチーズと
インペリアルウィッチーズ その3」
1873
- 第13話「ソーセージと薬と御機嫌斜
めな妹」
1897
- 第14話「ストライクウィッチーズv
sインペリアルウィッチーズ」
1923
- インターミッションI「魔女と糸繰り
人形」
1948
- 第15話「お兄ちゃん」
1957
- 第16話「マリオネット」
1978
- 第17話「女侯爵と貴婦人のちよつと
した世間話」
1998
- 第18話「北海の緊張、ロンドンの平
穩」
2022
- 第19話「グラフ・ツエッペリン」
2045
- 第20話「帝政カールスラント皇室親
衛隊西方装甲軍」
2068
- 第21話「Missing In
ction」
2089
- 扶桑皇国海軍戦艦ノ項『筑波型戦艦』
2109
- 第22話「ラッキースケベ3連発♪」
2112
- 第23話「孤立と煩惱と」
2137

- 第24話「湧き上がる怒り、秘められた
殺意」—— 2161
- 第25話「泣く子と酒乱には勝てない」—— 2182
- 第26話「夜闇のフソウオオカミ」—— 2182
- 2203 第27話「お〇ぱいは癒し」—— 2228
- 第28話「宮藤兄妹の災難」—— 2250
- 第29話「九四式艦爆乳と58kg爆
弾1発」—— 2270
- 2293 第30話「二難去ってまた一難」—— 2270
- 第31話「淑女は慎ましか」(改訂版)
- 2487 第32話「扶桑海軍ウィザードの恐い
もの」—— 2344
- 第33話「感情の萌芽」—— 2368
- 第4章『ストライクウィッチーズ2編』
プロローグ「親衛隊大佐」—— 2393
- 2399 第1話「佐世保航空予備学校」—— 2393
- 第2話「欧州からの便り」—— 2421
- 第3話「宮藤家の日常」—— 2443
- 第4話「悪夢とすき焼き」—— 2464
- 第5話「航空練習艦隊と第一艦隊」—— 2487

オリ主及び本作に置けるウィザードの設定（ネタバレあり&随時更新予定）

宮藤 優人（みやふじ ゆうと）

CV：内山 昂輝

所属：第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』

原隊：扶桑皇国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊288航空隊

階級：大尉（人類連合軍における階級で、扶桑皇国海軍では中尉）

身長：170cm

体重：58kg

誕生日：8月18（書類上）

年齢：18歳（物語開始時点・外見年齢）

使い魔：柴犬

パーソナルマーク：ライフル弾をくわえた柴犬

使用機材：零式艦上戦闘脚二型甲

使用武器：S-18対物ライフル、九九式二号二型改13mm機関銃、南部十四年式

拳銃（基本的に護身用だが、稀に対ネウロイ戦に使うことも）、M712 シュネルフォイアー（後に南部十四年式拳銃から更新）

特技：射撃

固有魔法：『凍結』

魔法力を冷気に変換、放出する攻撃魔法で物質を瞬間的に凍結させることが出来る。反面、射程は無きに等しく、大型ネウロイ相手だと表面装甲を凍らせるのが精一杯でコアまで届かない。小型ネウロイ程度ならば近付くだけでまるごと凍結可能だか、魔法力を多く消費する。

優人はこの魔法を戦闘より、かき氷やアイスティー作りに利用することの方が多い。

覚醒魔法：『絶対凍結』

固有魔法の上位魔法たる覚醒魔法に分類される。魔法力を冷気に変換させる『凍結』とは違い、手で触れたネウロイに負の温度化のされた魔法力を流し込む魔法で、理論上はどんな大型ネウロイも完全に凍結させることが可能だ。反面デメリットも大きく、ほぼ全ての魔法力を消費し、さらに肉体や精神にも多大な負担を掛ける諸刃の剣である。また、使い方を誤れば味方を巻き込みかねない危険な魔法でもある。

それ故に501においても原隊においても、上官の許可無しでの使用は硬く禁じられている。

○人物

短めの黒髪持つ顔立ちの整った少年（ハルトマン曰く、まあまあイケメン）。外見イメージはインフィニット・ストラトスの織斑一夏。

宮藤一郎と宮藤清佳の息子にして宮藤芳佳の兄。世界でも稀少な存在である魔法力を持った少年『ウィザード』で扶桑海軍から第501統合戦闘航空団『ストラトスウィッチーズ』に派遣されている。坂本と同じく扶桑海軍からネウロイと戦い続けている大ベテラン。部隊の長男的な立場からウィッチ達を見守り、特に妹の芳佳を含めた年少組のことを気にかけている。

『みんなを守る立派な人になりなさい』という父、一郎の教えに従い、10歳の時に扶桑海軍及びウィザード候補生に志願した。初陣を飾った扶桑海軍では同期の坂本、竹井醇、若本徹子や師であり上官である北郷章香と共に参戦。ウラル方面より飛来したネウロイから国を守るために奮闘、徐々にエースの頭角を表していく。事変後、軍の命令で父のいるブリタニアに派遣され、零式艦上戦闘機の開発に従事する（この命令は父の友人である赤坂伊知郎の根回しによるもの）。後にロマーニャへ修業に出掛け、父の訃報を修業先のアンナ・フェラーラの家で知るが、ネウロイの侵攻が始まったため悲しむ間

も無く、遣欧艦隊リバウ航空隊に配属される。リバウ配属後は主にカールスラント方面で多大な戦果を上げるが坂本らリバウ三羽鳥の影に隠れてしまい、あまり目立たなかった。それでも「サムライ（坂本美緒）の右腕」や「冬將軍」等の異名を持ち、エースウィザードとして欧州でそこそこ名は通っている。

妹に負けず劣らずの強大な魔法力の持ち主で、それに裏付けされた巨大なシールドを展開可能。固有魔法『凍結』を使って小型ネウロイを凍り漬けにしたり、装甲の強度を下げたりすることも出来る。しかし、使い勝手の悪さからあまり使わず、新兵時代に加東圭子少尉（当時）から指導を賜った見越し射撃を活かした堅実な戦法を好む。

飛行戦術に関しては格闘戦を好む坂本とは対照的に一撃離脱を得意とする。また、ナイトウィッチのサーニャに次いで夜間飛行の経験が豊富。剣術の心得もあるが、本人は敬遠している。戦闘以外では座学、デスクワーク面で優れ、特にデスクワーク能力はミーナからも重宝されている。

基本的には温厚で面倒見の良い性格で堅物でない程度に真面目。しかし、付き合いが長いが故に遠慮がない坂本に苛立ったり、悪戯をしたハルトマンに拳骨を食らわせる等、短気かつ粗暴な面もある。また少々天然の気があるのか、無自覚のうちに大胆な行動（ペリーヌを口説いたり、食事中に付いたソースを取るつもりで芳佳の頬に舌を這わせたり等）をすることもある。

容姿と性格から異性に好意を抱かれることもあるが、本人は気付いていない。動揺すると口調が変わる。また、ラッキースケベで若干の不幸体質。ある程度まで感情が昂ると、自分では抑えが利かなくなるという悪癖もある。

隊のウィッチ達からの信頼は厚いがズボン窃盗疑惑を掛けられた際、冤罪を主張しても全く信じて貰えなかった。

妹の芳佳に対してはシスコンの一言で彼女の水着姿やベビードール姿に歓喜したり、避けられては生きる気力を失いかけたりしている。

実は宮藤夫妻の実子ではなく、14年前に記憶を喪い自分の名前すらも思い出せずにいたところを宮藤夫妻よって引き取られ、その半年後に養子となった。優人という名前も本名ではなく、母の清佳が名付けた。宮藤家の人々と血の繋がりはないが、芳佳とは本名の兄妹のように仲が良く、両親や祖母からも実子実孫違わぬ愛情注がれて育った。

宮藤家はもちろん、ストライクウィッチーズのことももうひとつの家族として大切に思っている。坂本とは海軍入隊時から長く共に戦ってきた気の知れた仲。

バルクホルンとは関係がギクシャクしていたが、後に妹繋がりで親友となる。

また、唯一の男ということでシャーリーやハルトマンによくからかわれ、特にシャーリーの大胆なスキンシップには度々困惑している。ペリーヌからは坂本との仲を嫉妬されていたが、後に態度は軟化した。

妹はもちろん、リーネやサーニヤ、ルツキーニ達501の年少組からも懐かれ、慕われている。

小さい頃から家や診療所の手伝いをしていたため、家事と応急手当てが出来る。元々インドア派だったことから読書家で自室の本棚には扶桑から持ってきた物の他に、欧州で購入した本を大量に所有している。過去に本が増え過ぎて本棚には入りらなくなつたことがあり、一度新調した。また、年相応に異性に興味が有り、巨乳モノのグラビア雑誌を数冊ほど隠している。後にハルトマンによつてこの事を暴露された。

ちなみに付き合ひの長い坂本は以前から雑誌の存在を知っていたが黙認している。大食いで食ることが好きだが、味覚が子どもで極度に辛いものや苦いものが苦手。

○使い魔

名前は紗綾。キツネ顔の柴犬で性別は雌。主である優人に忠誠を誓っており、妹の芳佳に対しても敬意を払っているが、芳佳の使い魔である九字兼定とは仲が悪い。

○ウィザード

魔法力を有した男性版のウィッチ。数はウィッチより遥かに少なく、扶桑やカールスラントのようなウィッチ人口の多い国を探しても僅か数人程度しか見つからない。

そのうえ、能力の当たり外れも激しいことから軍に入隊可能な者はさらに限られる。それ故にウィザードのみで編成された部隊は存在せず、彼らはウィッチ隊に組み込まれる。俸給をはじめとする待遇はウィッチと同等。

魔法力に関してはウィッチと同じくシールド、身体強化等の基礎魔法が使えるのはもちろん、優人のように固有魔法を持つ者もいる。ほとんどのウィザードはウィッチと同様に20歳前後で上がりを迎え、魔法力は減退する。

オリジナルキャラクター紹介（ネタバレあり&随時更新予定）

◆扶桑皇国

◇赤坂 伊知郎（あかさか いちろう）

CV：池田秀一

所属：人類連合軍西部方面総司令部ブリタニア方面司令部／扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令部

階級：中佐（1930年時点）↓中将（物語開始時点）

身長：182cm

体重：80kg

誕生日：8月12日

年齢：50歳（初登場時は49歳）

航空ウィッチや空母等の主力艦艇を多く有する外征部隊——扶桑皇国海軍遣欧艦隊の司令長官を務める中将。宮藤兄妹や坂本美緒の原隊の上官で、宮藤一郎は同郷の後輩。

人類連合軍の将官でもあり、第一章時点では隷下の艦隊の一部を率いて西部方面総司令部に参加している。扶桑海軍が定期的に支援艦隊の派遣や補給物質の供給を行い、さらに遣欧艦隊所属の航空歩兵が各戦線の統合戦闘航空団に派遣されていることもあつて、総司令部における発言力も非常に強い。

いち艦隊の司令官という立場だが、指揮系統が別であるはずの海防艦（本来ならば海上護衛総司令部隷下）を個人的な取引のカードとして使ったり、事実を改竄した上で芳佳の脱走を揉み消したりと、実際の階級・役職以上の影響力の持ち主であることが窺える。

また、ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官のトレヴァー・マロニー大将とは政敵同士で、互いに弱味を探り合っている（後に赤坂が勝利し、マロニーは失脚する）。彼とはウィッチ・ウィザードに対する考えにも温度差が生じている。

代々海軍で要職を務めてきた名家の出身で、海軍兵学校を主席で卒業した逸材。新米士官であつた第一次ネウロイ大戦時に、対ネウロイ戦におけるウィッチ・ウィザードの有用性を認識し、扶桑海軍変勃発までの期間には竹井少将・山本五十八中将の元で航空歩兵の育成と航空母艦の建造、ウィッチ部隊の創設に尽力していた。

扶桑海軍・連合軍双方で根回しを行い、自身の頑強な支持基盤を構築する等政治力に長けている。反面、作戦指揮は不得手なのか。空母『赤城』を旗艦とする遣欧艦隊がネ

ウロイの襲撃を受けた際は、赤城艦長の杉田大佐と副長の樽宮中佐に殆んどの指揮を丸投げしていた。

統合戦闘航空団、中でも501部隊に信頼を寄せており、利権絡みでマロニーをはじめとするブリタニア空軍から度々圧力かけられている彼女達に協力的である。後輩の息子（養子）である優人にとっては、父が亡くなって（後に存命が確認され、再会もある）以降父親代わりのような存在で、彼の個人的な頼みも聞いている。

表向きは柔和で穏健な印象を受けるが、上層部の人間らしく打算的で黒い面も持ち合わせており、一定の信頼関係にありながらも優人からは「狸親父」。ミーナからも「所詮は（マロニーと）同じ穴の貉」と内心毒づかれている。

愛煙家で、甘い物が苦手。外見イメージは『名探偵コナン』の赤井秀一をやや老けさせた感じ。

◇西野 勤（にしの つとむ）

所属：人類連合軍西部方面総司令部ブリタニア方面司令部／扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令部

階級：中佐

年齢：39歳

扶桑皇国海軍遣欧艦隊に所属する海軍士官で、艦隊司令長官——赤坂伊知郎の副官。所謂、名有りのモブ。

◆ブリタニア連邦

◇石威 紫郎（いしい しろう）

CV：飛田展男

所属：ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官麾下第一強襲部隊『ウォーロック』

階級：？

身長：170cm

体重：46kg

年齢：42歳

ブリタニア空軍の実質的最高指導者——トレヴァー・マロニー大將よりウォーロック開発の全権を任された扶桑人の技術者。不健康肌そうない肌と痩せ過ぎの体格の持ち主。常に猫背で、粘り気のある不気味な笑みを浮かべている。

マロニーから密かに研究施設と開発資金、資材を与えられ、統合戦闘航空団をはじめとするウィッチ部隊に頼らない新戦力の開発を行っていた。

元々は宮藤一郎と共に欧州へ派遣され、ブリタニアの共同研究所で各国の技術者と新

式ストライカーユニットの開発に携わっていた。

技術者として優秀である一方、非常に強い功名心と危険な思想を持ち併せたマツドサイエンティストでもある。新式ストライカーユニットの開発で自身の存在と有能さを世に知らしめようとしていたが、新理論（宮藤理論）を採用したストライカーユニットの開発に成功した宮藤一郎に先を越され、成果を上げられずにいた自らは年齢もキャリアも下である一郎の助手として彼の研究を手伝うこととなる。

このことから表向きは良好な関係を築きつつも、内心では強い嫉妬と敵愾心を抱いていた。

イリスの開発にも関わっており、暴走したイリスが模擬戦の仮想敵機役として集められた各国のウィッチ達を一方向的に虐殺したことに開発陣が戦慄する中、彼一人だけは予想を上回るイリスの性能に歓喜していた。

1939年8月。イリスの暴走によってネウロイのテクノロジを応用した新兵器の研究・開発の中止が決定するも納得せず。研究継続のためにサンプルとして保管されていたコアやイリスの開発データを持ち出し、さらにネウロイから入手したテクノロジを独占する目的で、ストライカーユニット共同研究所を集められた各国の技術者諸とも爆破。開戦準備中のブリタニアからリベリオンへ逃走し、東海岸地域で隠匿生活を送りつつ、ネウロイ研究とイリスに次ぐ新兵器の開発を続けていた。

数年後。マロニーがダウディングを追い落とすことを独自のコネクションで知った石威は密かにブリタニアに戻り、マロニー一派と接触。数年掛けて設計したウォーロックを売り込み、利害の一致もあつて取り入ることに成功する。しかし、手塩に掛けて完成させたウォーロックはガリアの巢に潜んでいたネウロイ群を殲滅するもイリスと同じように暴走。混乱に乗じて乗り込んできたミーナ達や遣欧艦隊陸戦隊によつてマロニー一派共々拘束される。

その後しばらくはウォーロック暴走のショックで放心状態となっていたが、隙を見て見張りの兵士をベルトに仕込んだバックル・ピストルで負傷させ、またしても逃亡を図ろうとする。しかし、その途中でウイザード型ネウロイの襲撃を受け、ビームで眉間を撃ち抜かれて死亡する。

自分が散々モルモット扱いし、利用してきたネウロイの手で殺害されるという因果応報な最期を迎える。

◇ヘンリー・ダグラス

所属：人類連合軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』基地運用群警務隊

原隊：ブリタニア空軍戦闘機軍団第11戦闘機群

階級：大尉

年齢：40歳

501基地警務隊の指揮官を務めるブリタニア空軍及び人類連合軍大尉。名有りのモブ。

◇ヘンリー・ベイカー／ウエンデイ・ベイカー

ガリア陥落時に大陸からブリタニアへ避難してきたブリタニア系ガリア人の兄妹。

兄のヘンリー 屈強な体格の青年で、妹のウエンデイは死病『瘴気』を患った病弱な少女。

避難先のブリタニアで貧困と闘病に苦しみながらも仲睦まじく暮らしていたが、ヘンリーは街の不良グループに避難民という理由で因縁をつけられ、集団暴行の末に死亡。ウエンデイは兄に黙ってこっそり散歩に出掛けたところをブリタニアに駐留していた連合軍兵——兵隊ヤクザというべき素行の悪い兵士数名に連れ去られ、暴力の限りを尽くされた挙げ句殺害された。

ベイカー兄妹と偶然知り合った芳佳は、彼等と楽しい一時を過ごすのが、この時既に2人は故人となっていた。

◆帝政カールスラント

◇悠貴・フォン・アインツベルン

CV：浅川悠

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』

階級：親衛隊大佐

身長：170cm

誕生日：？

年齢：19歳（初登場時）

使い魔：？

パーソナルマーク：ハーケンクロイツ（親衛隊共通）

使用機材：Bf109シリーズ親衛隊仕様

使用武器：白木拵えの扶桑刀、PPK（金メッキと彫刻が施されている）、MP43

特技：人心掌握、ハニートラップ

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』の司令を務める才色兼備の美少女にしてウィッチ。階級は親衛隊大佐。

カールスラント宰相の1人娘であるが、血は繋がっておらず、人種も東洋系——扶桑系と噂されている。故に冴えない風貌の父とは似ても似つかない。

何らかの理由で彼の養女となつたらしいが子細は不明とされる。

背中まで伸ばした艶のある黒髪。大きな瞳。スツと通つた鼻筋。桜色に染まつた形の良い唇。170cmという女性としてはかなりの高身長。膨よかな胸部。キュツとくびれた腰部。スラリと伸びた手足。服を着ていても下の線がよく分かるほど起伏に富んだ發育良好な身体。

これらの特徴を持ち、19歳という年齢には不釣り合いな大人の色香を感じさせるコケティッシュな美女。容姿に優れたウィッチの中でも、彼女の美しさは抜きん出ている。

あらゆる分野に秀でた才女で、殊に政治力に関しては国防空軍ウィッチ部隊総監——アドルフイーネ・ガランドを上回るとされる。

航空ウィッチとしての実力も非常に高く、連盟空軍統合戦闘航空団の主力級にすら引けを取らない。

その美貌及び能力値の高さ。そして天才的な人心掌握能力から、ウィッチをはじめとする親衛隊将兵等から絶大な支持を得ている。

反面、国防軍ウィッチからの受けは芳しくなく、一部航空歩兵からは「政治家と貴族と軍高官の半分と寝た女」と陰口を叩かれている。

父のハインリヒは、その実力を高く評価し、利用してもいる。しかし、同時に親衛隊

内で派閥を形成し、急速に勢力を拡大していく悠貴に危機感を募らせてもいる。

◇グレーテル・ホフマン

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第1飛行隊

階級：親衛隊大尉

身長：165cm

誕生日：？

年齢：17歳（初登場時）

使い魔：？

パーソナルマーク：ハーケンクロイツ（親衛隊共通）

使用機材：Bf109シリーズ親衛隊仕様

使用武器：PPK（金メッキと彫刻が施されている）、MP43、MG42S

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第1飛行隊を務める金髪碧眼の美女。階級は親衛隊大尉。

軍帽をしつかりと被り、柄に豪華な装飾をあしらった軍用サーベルを腰に差す姿は、貴族令嬢のようでありながら軍人然としている。

生真面目でプライドが非常に高く、ウィッチを含む国防軍の將兵をあからさまに見下し、上官に当たる人物に対してすら慇懃無礼な態度を取る傲慢な少女。

目下にはとにかく高圧的で、自分の美意識を周りに押し付ける私の強さも待ち合わせている。

一方、司令である悠貴・フォン・アインツベルンを妄信的に慕っており、彼女の為ならどんな汚れ仕事も平然とこなす。

士官としてもウィッチとしても中々に優秀だが、上述の性格故に同僚や第1飛行隊の部下達からの評判は芳しくない。

◇メリッサ・ガンビーノ

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第2飛行隊

階級：親衛隊大尉

身長：172cm

誕生日：？

年齢：18歳（初登場時）

使い魔：？

パーソナルマーク：ハーケンクロイツ（親衛隊共通）

使用機材：Bf109シリーズ親衛隊仕様

使用武器：PPK（金メッキと彫刻が施されている）、MP43、MG42S

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第2飛行隊を務める親衛隊ウィッチ。階級は親衛隊大尉。

ロマーニャ公国出身の航空ウィッチだが、ある理由から自国の空軍には入隊せず、親衛隊唯一の航空ウィッチ部隊——第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』に志願した。

健康的な褐色肌に、ポニーテールに纏めた濃い紫が掛かった黒髪というロマーニャ系らしい情熱的な容姿の持つが、見た目と釣り合いなほど冷徹かつ酷薄な性格をしていると親衛隊では有名だった。

瞳は空色の輝きを放つ美しいものだが、どこか厭世的な感情を滲ませている。

悠貴達インペリアルウィッチーズ本隊とは別行動を取ることが多く、彼女の率いる第2飛行隊長も44年時点では東部戦線で活動中である。

◇アリョーナ・クリューコフ

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチー

ズ』第3飛行隊

階級：親衛隊大尉

身長：164cm

誕生日：？

年齢：18歳（初登場時）

使い魔：？

パーソナルマーク：ハーケンクロイツ（親衛隊共通）

使用機材：Bf109シリーズ親衛隊仕様

使用武器：MPK（金メッキと彫刻が施されている）、MP43、フリーガーハマー親

衛隊仕様

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第

3飛行隊を務める親衛隊ウィッチ。階級は親衛隊大尉。

シヨートカットの美しい銀髪に雪の如く白い肌。アメジストのような色彩の瞳を持

つ北欧系の美女。

親衛隊員ではあるが、悠貴のように強権にものを言わせるやり方は好まず、ホフマンのように国防軍を見下すこともない。

同僚のホフマンから高圧的な態度で迫られることの多い苦勞人。

面倒見が良いため、ホフマンとは異なり部下達から慕われている。また義理硬い性格でもある。

◇ハインリヒ・ルイトポルト・アインツベルン

所属：帝政カールスラント行政指導部

役者：宰相

カールスラント皇帝——フリードリヒ4世の政務補佐する宰相で、行政指導部の長。

皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』司令——悠貴・フォン・アインツベルンは彼の養女。

就任して間も無く、皇帝をはじめとする皇室の護衛を目的とする武装組織——『皇室警護隊』を創設。これを使い、国家の中央集権化に反対する一派を見事粛清。この功績により皇帝や中央集権派の政治家、貴族、国防軍高官等の信用を得ることに成功する。

軍事組織の保有を許可されたハインリヒと警護隊幹部等は、人材と機能を拡大。『帝政カールスラント皇室親衛隊』とする。

ハインリヒは、実質的私兵部隊である皇室親衛隊の長官に、予てより重用していたライナルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ元帥を、ウィッチ部隊であるインペリアルウィッチーズの司令に娘の悠貴を据え、記録に残せない極秘の任務やカールスラント

宰相の政敵や不祥事を起こした国防軍将兵の肅清といった任務に従事させた。

冷酷で謀略に長けたハイドリヒと、かのアドルフイーネ・ガランド以上に多才な美女である悠貴を上手く使い、国内に置ける自身の立場を磐石なものとした。

反面、国防軍を中心とした対立派閥や自分の目の届かない場所で何やら企てている悠貴の存在に危機感を募らせている。

外見は貧弱な印象の小柄な体格。東洋人を連想させる顔つきにメガネを掛けた小役人風の男性で、一般的なカールスラント人のイメージからはかけ離れている。

◇ライナルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊

階級：親衛隊元帥

冷酷で謀略に長けた皇室親衛隊長官。元国防海軍軍人で、優れた密偵・工作の能力でカールスラントの政治権力を一手に掌握し、カールスラント宰相——ハインリヒ・リュトポルト・アインツベルンに次ぐ行政指導部の実力者となる。

◇ヨハネス・デイトリヒ

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍

階級：親衛隊上級大将

西部からの反攻作戦に備えて編成された親衛隊西方装甲軍——主力は親衛隊第1、2装甲軍団——の司令官。階級は親衛隊上級大将。

下士官あがりの将官であり、士官としての専門教育を受けていないこともあって、軍人としての能力は殆んど評価されていない。反面、部下の将兵達からの絶大な人気を誇る。

カールスラント人男性にしてはかなり小柄で、身長は158cmしかない。

◇ゲラルト・ケプラー

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍第1装甲軍団

階級：親衛隊大将

帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍第1装甲軍団軍団長。階級は親衛隊大将。

◇ヴィルフリート・ビツトリヒ

所属：帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍第2装甲軍団

階級：親衛隊大将

帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍第2装甲軍団軍団長。階級は親衛隊大将。

第1章 『ストライクウイツチーズ編』

第1話 「兄と妹」

扶桑皇国。季節は春。美しい桜並木の中を二人の子どもが手を繋いで歩いていった。ひとりは幼く、小さな女の子。もうひとりは女の子よりも大きく、何歳か歳上であろうが年齢よりもしっかりしているように見える。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん〜?」

小さな女の子が声を掛け、男の子が返事をする。

「お兄ちゃんは男の子だよね?」

女の子はわかりきったことを聞いてくる。それに対し兄と呼ばれた男の子が答える。

「?……間違いない男の子だけど、それがどうしたの?」

「男の子なのになんで魔法が使えるの?」

女の子、いや妹の質問に兄は少しだけ考えてから答える。

「うーん……芳佳と一緒に人を助けたかったからかな?」

「私と?」

芳佳と呼ばれた女の子は目をパチクリさせる。

「うん！俺は魔法で悪い人をやっつけて、芳佳は魔法で悪い人に傷つけられた人を治してあげる。そうやって二人で一緒にやっていけばたくさんの人を守るし、助けてあげられるから」

「そっか〜!!」

芳佳は目を輝かせた。

「じゃあ、大きくなったら私はお医者さんになる！そして怪我をした人を治してあげるの！」

「ふふ、ならその頃までにお兄ちゃんはたくさんの人を守るくらい強い男になるよ！」
兄妹はお互いの夢を語り、互いに応援し合った。互いに優しく温かい笑顔で――。



「……………」

ブリタニアのとある建物の一室。十代後半程の年齢の少年がベットから起きあがる。

「懐かしい夢だな」

幼い日、妹と夢を語り合った日の夢。すでに忘れかけていた記憶。なぜ彼は今夢で見

たのだろうか？

「少し早く起きちゃったな……」

窓から外を見ると空はまだ薄暗い。しかし、眼が冴えてしまい二度寝は出来そうもない。少年はベットから出ると服を着替えた、扶桑皇国海軍の士官の軍服に。

「芳佳、元気かな？」

と、一言呟いて宮藤優人（みやふじ ゆうと）大尉は部屋を出た。



「……………」

扶桑皇国、横須賀にある診療所の一室でまだあどけなさが残る中学生くらいの少女が目覚めます。学校の宿題をしていてそのまま眠ってしまったようだ。

「えへへ……懐かしい夢見ちゃった／＼」

少女もまた夢を見ていた。大好きな兄と桜並木で夢を語り合った日の夢を。嬉しくて頬を軽く赤らめなが微笑む。しかし、その笑顔はすぐに暗くなっていく。

大好きな兄とはもうずっと会っていない。軍の仕事で現在は海外で暮らしているらしいがそれ以外は何もわからない。母によれば「お兄ちゃんの仕事で忙しくて簡単には

帰ってこれない」らしい。

「お兄ちゃんの…バカ…」

宮藤芳佳はどこにいるかもわからない兄に対して呟いた。

「会いたいよ…」

その目には涙が浮かんでいた。

第2話 「第501統合戦闘航空団のウィザード」

第501統合戦闘航空団、通称『ストライクウィッチーズ』。

それは各国のトップエースや将来有望な若いウィッチを有し、ブリタニア本土防衛及びガリア奪回を目的とする多国籍の精鋭部隊である。後に目覚ましい戦果をあげ、伝説となり、世界中の人々の希望となっていく。

その部隊にひとり、魔法力を持って生まれ男性『ウィザード』が所属している。「誰もいない。つて当たり前か」

1944年、3月のある朝。宮藤優人はまだ整備兵もないハンガーへやってきた。彼はいつもより早く目覚めてしまい、朝食までの時間を自分のストライカーを整備して過ごすことにした。デスクワークをすることも考えたが、朝から書類と格闘しようとは思わなかった。

優人の父は彼が10歳の時に欧州へ旅立った。同時に優人も扶桑海軍に入隊し、数々の戦いを経験してエースとなった。現在は第501統合戦闘航空団に配属されている。

優人は自身のストライカーユニット『零式艦上戦闘脚二二型甲』の元へ歩み寄る。扶

桑海軍を代表する機体であり、彼のパーソナルマークであるライフル弾をくわえた柴犬がペイントされている。

「はあく……」

優人は愛機をいじりながら大きな溜め息をついた。彼には悩みがあったのだ、原隊の遣欧艦隊に配属されてから今日に至るまで一度も故郷の横須賀には帰れていない。出来るだけ早いうちに一時的にでも帰省するつもりでいたが戦況は厳しく戦いに明け暮れ、気が付けば18歳になっていた。手紙も中々出せず、家族の現状もよくは知らない。優人は家族の中でも自分にべつたりであつた妹が今どうしているのか心配だつた。8年前、妹から「行かないで」と泣きつかれたことが、つい昨日のことのように感じられる。

「む？ 優人じゃないか？」

「ん？」

後ろから名前を呼ばれ振り向くとそこには彼と同じ軍服を着用し、片眼に眼帯して長い髪をポニーテールに纏めている少女がいた。

「坂本か……おはよう」

「ああ、おはよう」

優人は身体を少女の方に向けて挨拶する。少女は笑顔で返す。彼女は坂本美緒少佐、

501の戦闘隊長を務める扶桑海軍のベテランウィッチ。優人にとっては入隊して以来、長く共に戦ってきた戦友であり、上官であり、また姉のような存在でもある。

よく見ると彼女は汗をかいていた。どうやら、日課の朝の訓練をしていたらしい。

「今日も朝から訓練か？」

「ああ」

「熱心だな」

「お前こそ朝からストラライカーの整備をしているじゃないか？」

「俺はたまたま早く眼が覚めたんだよ。んで朝食まで暇だからさ」

「なるほどな」

坂本はそう呟き、続けて質問をしてきた。

「ずいぶんと大きな溜め息ついていたな？」

「見ていたのか？」

優人は顔をしかめる。

「何か悩みか？ 大方、妹が心配で仕方ないといったところだろう？」

「!？」

自身の悩みを言い当てられ、優人は凶星な反応をしてしまう。さすがに付き合いが長い相手には簡単にわかってしまうらしい。まあシスコンな優人が散々妹の話をしたの

だから当たり前であるが——

「その悩み、近々解決するかもしれないぞ」

「どういうことだ？」

「すぐにわかるさ」

含み笑いをする坂本。そんな会話をする二人を木箱の影から見ている人物が一人。

「それは近付き過ぎです少佐あ……ああ。何故、隣にるのが私ではないのです？」

自由ガリア空軍のトップエース、ペリーヌ・クロステルマン中尉だ。彼女は自身が敬愛する坂本と異性でありながら親しい優人に対して嫉妬心を抱いている。優人の方もペリーヌに対して、多少ながら苦手意識を持っている。

「では、私は風呂で汗を流してくるからな」

「あ、ああ」

「なんなら、一緒に入るか？」

「は？」

優人の目が点になる。

「久しぶりに裸の付き合いでもしな——」

「するか！」

恥じらうこともなく混浴に誘ってくる坂本に対して、顔を真っ赤にして怒鳴る優人。

余程動揺しているのか、口調が少し荒くなっている。

「何を怒っているんだ？昔、浦塩で一緒に入——」

「それ以上言うな！」

優人はさらに強い口調で怒鳴る。坂本が言わんとしたことは優人にとってあまり思いついたくない過去らしい。

「？……。まったく、付き合いの悪いやつだ」

愚痴りながら風呂へ向かって歩み出す坂本。彼女は優人のことを信頼しているのか、それとも親から貞操概念を教えられていないのか。どちらにしても年頃の男女が一緒に入浴など言語道断である。優人は戦友を見送るとストライカーの整備を再開した。

「しよ、少佐と！いい、いいいい一緒に風呂ですつて！？なんて恐れ多い！異性とお風呂に入るなど……破廉恥！不潔ですわ!!」

二人が混浴したことがあると聞いて、その嫉妬がオーラとして視覚化されるほど強くなっている。

「うっ……」

優人はペリーヌの発する威圧感を感じとっていた。



窓から空を見ると日が先ほどよりも高く上っていた。そろそろ食事の時間だ、と食堂へ向かう優人。整備を終えても時間が余っていたため自室で本を読んでいた。彼の部屋には忙しさのため、読むことが出来なかった本が溜まっている。

(今日のメニューは何かな？スープでるかな？)

優人は18歳という年齢にも関わらず、子どもの様に朝食のメニューを予想してワクワクしていた。

ま戦闘とデスクワークで忙しい彼にとつて食事はこの基地における数少ない楽しみなのである。普段の忙しさも過酷な戦闘も忘れ、心から安らげる時間だ。

「あら？優人おはよう！」

誰かに声を掛けられた。声のした方へ目をやる、相手はカールスラント空軍のウィッチ、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐。彼女は第501統合戦闘航空団の司令を務めている。

「ああ、おはようミーナ！」

挨拶をしたミーナに優人も挨拶を返す。本来なら上官であるミーナには敬語を使うべきなのだろうが本人の意向で口調を崩して話している。それは他のウィッチたちも同様である。

「聞いたわよ、悩みがあるんですって?」

「なんだ…もう隊長の耳に入っているのか? (さては坂本だな……)」

優人は自分の悩みのことをミーナに伝えたであろう友人を脳裏に浮かべる。

「ええ……ふふふ、本当に妹さんが大切なのね」

ミーナは手を口に当て上品に笑いながら言う。ミーナは優人の妹のことを知っている。坂本経由で伝わっているのだ。いや、妹のことに限らず優人が坂本に話したプライベートのことは大体ミーナに筒抜けなのである。それ故に優人はミーナに知られたくないことは絶対に坂本の前では話さないようにしている。

「そりや妹は大切さ。眼に入れても痛くないほどに可愛いやつだよ」

軍事基地の廊下でシスコン宣言ともとれる発言している男がここにいる。それもドヤ顔で。これにはさしものミーナ中佐も苦笑いを浮かべていた。雑談をしながら歩いているとさらに二人のウィッチと出会った。

「ミーナ! 優人! おはよう!」

「あら、おはよう。エーリカ、トゥルーデ」

ミーナは挨拶を返す。二人に手を振りながら挨拶したのはミーナと同じくカールスラント空軍ウィッチのハルトマンだ。隣にはもう一人のカールスラントウィッチ、ゲルトルート・バルクホルンがいる。トゥルーデとはバルクホルンの愛称だ。ミーナに続い

て優人も挨拶を返す。

「おはようハルトマン！バルクホルンも」

「……おはよう」

バルクホルンが挨拶を返す。笑顔で挨拶したミーナやハルトマンに対し、バルクホルンは無表情でなんだか素っ気ない。

「皆さんおはようございます」

食堂に到着する。四人に挨拶したのはリネット・ビシヨップ軍曹、愛称はリーネ。ブリタニア空軍からきた新人ウィッチだ。彼女はキッチンカウンターに朝食の乗ったトレイを並べていた。

「おはようリーネ。いつも食事の準備ありがとうございます」

「だって、私にはこれくらいしかできませんから」

「え？」

「い、いえ……何でもありません！」

よく聞き取れなかった優人。聞き返すがリーネは誤魔化し、トレイを取ってテーブルに行ってしまう。テーブルにはスオムス空軍のスーパーエース、エイラ・イルマタル・ユートイライネン少尉とオラーシャ陸軍のナイトウィッチ、サーニャ・V・リトビャク中尉が座っている。二人とも北国出身で透き通るような白い肌をしている。

夜間哨戒明けのためかサーニヤは目が開いておらず、こつくりこつくり船を漕いでいる。エイラはサーニヤが椅子から転げ落ちないように彼女を支えている。

「優人おっつ!!」

「ん? うわっ!」

優人が心配そうにリーネを見ていると誰かが後ろから飛びついてきた。しかもその相手は何やら優人の胸をまさぐっている。

「ルツキーニ、またか?」

振り返る優人。飛びついてた相手はフランチェスカ・ルツキーニ少尉、ロマーニヤ空軍のウィッチ。部隊最年少でみんなの妹分的な存在だ。彼女はよく女性の胸を揉む、何故か男性である優人の胸まで触ってくる。

「どうだ? 少しは変わったか?」

そうルツキーニに尋ねるのはリベリオン陸軍のウィッチ、シャーリーことシャーロット・E・イエーガー中尉。オレンジのロングヘアと男受けしそうなダイナマイトバデいの持ち主だ。

「うん。相変わらず、残念」

「あつはははは! そうかそうか」

優人から離れたルツキーニはつまらないと言った表情を浮かべて言う。シャーリー

は大笑いしている。

「おはよう優人」

「ああ、おはよう」

優人はシャーリーに挨拶を返すと、ルツキーニに向き直る。

「あのかなルツキーニ。俺は男だから、胸がないのは当たり前だよ」

と優人は言う。彼がルツキーニにこれを言うのは何度目になるだろう。これがルツキーニなりのスキンシップなのか、単純に他人の胸が揉むのが好きなのかかもしれないが――

「それにしても、ルツキーニは本当に胸が好きだな」

「うじゅ？優人もおっぱい好きでしょ？」

「……えっ？」

「違うの？優人はいつもシャーリーやリーネのおっぱい見てるから好きなのかな？つて」

「えっ？……ええええええええええ!!」

ルツキーニの話の聞いて顔を真っ赤にしながら叫ぶリーネ。両手を使って、胸を庇うように隠している。

「み、見てない！断じて見てないっ!!」

激しく首を横に振る優人、どうやら凶星のようだ。ムキになって否定する優人に対し、ルツキーニは不満そうな顔をする。

「うっそだあ〜！いつも二人のおっぱいジロジロ見て……むぐつ」

優人はルツキーニが何を言おうとしているか理解し、彼女の口を手で塞ぐ。ルツキーニは「ん〜！ん〜！」と唸りながらジタバタしている。

「優人も健全な男子ってことか〜」

ニヤツと意地の悪い笑みを浮かべるシャーリー。

「もしかして優人って、私達の身体目当てで501にいるの？」

シャーリーと同じ笑みを浮かべて自分の身体を抱きしめるハルトマン。

「まさかオマエ、サーニヤのこともそんな目で……」

ハルトマンの冗談を鵜呑みにしたのか、エイラはサーニヤを守るように抱き寄せながら優人を睨んでいる。一方、サーニヤの意識は夢の中である。

「いやいや、俺はそういうのお互いが認めてないとやらないから」

やましいことなど何もない優人は手を顔の前でブンブンと振りながら言う。

「素敵な考えね。でもみんなの着替えやお風呂を覗いたらダメよ？」

笑顔で言うミーナ。しかし、優人はその表情から凄まじいプレッシャーを感じた。

「不可抗力以外なら極力気をつけるけど……」

「不可抗力なら覗くことを了承しろということか？」

優人の言葉を聞いて、バルクホルンがぎらつと彼を睨んだ。優人の額や背筋に冷や汗が一筋流れる。

「八百万の神々に誓って覗きません！」

そう言いながら優人は頭を下げる。バルクホルンはふんつと鼻を鳴らすとトレイを持って席に着いた。

「おー！みんな揃ってるな」

入浴していたため、遅れた坂本がやって来た。彼女の後ろにはペリーヌがいる、心無しか優人を睨んでいるように見える。これで全員が揃った。

「ハイハイ、皆さん！そろったことだし、お喋りは止めて朝食にしましょう」
ミーナが手を叩きながら言うのと隊員達はテーブルに着いて食事を始めた。



朝食の後。優人は隊長執務室に呼び出されていた。部屋には彼以外に坂本とミーナの二人がいる。

「帰国？扶桑に？」

「そうだ」

優人の質問に坂本が答え、ミーナが続ける。

「ブリタニアに駐留していた扶桑の空母『赤城』が、明日の朝補給物資受領のために本国へ戻ります」

「私も新人ウィッチのスカウトのため赤城に乗艦して帰国する。お前も同行しろ」

と坂本。501の基地が置かれているブリタニアは欧州最後の砦にして人類の反抗拠点である。そして501はそのブリタニアの本土防衛とガリア奪還を目的とした部隊であり戦力はいくらあっても多すぎるといふことはない。優秀なウィッチが加わってくれれば心強い。しかし、優人は一つ疑問を抱いた。

「坂本はともかく何で俺まで？」

優秀な教官であり、人の才能を見抜くことに長けている坂本が直に新人を見極めるのは理解出来る。しかし、適正はあるものの、教官や指揮官としては平凡な優人が着いていく意味がわからなかった。

「赤城はお前の故郷、横須賀に入港予定だ」

「横須賀に？」

「お前はもう何年も帰国していないだろう？」

（なるほど。それで今朝あんなことを……）

優人は今朝坂本に言われたことを思い出し出した。

「しかし、一度に2人も抜けて大丈夫か？」

ブリタニアから出発して扶桑到着するまでひと月はかかり、往復で2ヶ月だ。優人からしてみれば、そんな期間を留守するのは気が引ける。

「大丈夫よ。少しの間なら二人がいなくても問題ないわ」

「しかしなあ……」

渋る優人。扶桑へは以前から帰りたいと思っていたため、帰国出来ることは最高に嬉しい。しかし、いざ帰国するとなると優人は複雑な心情だった。家族、特に妹に会うことは少し不安だった。8年も会っていないため忘れられてる可能性もある。例え覚えていたとしても長いこと自分をほったらかしにした兄のことなんて嫌いになっているかもしれない。

それに501にはミーナ達カールスラント組をはじめ、ネウロイによって国や家族を失った隊員達がいる。彼女達のこともある。優人は帰国を躊躇っていた。

「お前は仲間を信頼していいの？ せっかくなら帰国出来るんだ、中佐の好意に甘えさせて貰え」

坂本がため息混じりに言う。無論、優人として仲間を信じていないわけではない。

「いや、信じていないわけじゃ——」

「はい、そこまで」

ミーナはすつと立てた人差し指で優人の唇を閉じ、彼の言葉を止める。

「あなたは少し気に病み過ぎよ？ 私達に遠慮なんかしないで家族に顔を見せてあげなさい」

ミーナは慈愛に満ちた表情で言うと、優人の唇から指を離す。

「あ、ああ。ありがとう」

優人は赤面しながらも何とか言葉を紡ぐ。

「む？ どうした？ 熱でもあるのか？」

坂本が優人の顔を見て、首を傾げる。

「と、ところでスカウトするウィッチはどんな子なんだ？ ウィッチ訓練校の生徒か何か？」

優人が誤魔化すように質問をする。

「これを見てみる」

坂本は優人の質問に答える代わりに書類を優人さに手渡した。恐らくはスカウトしに行く相手に関する書類だろう。優人は渡された書類に目を通す。

「なっ!?!…」

優人は書類に添付された写真を見た瞬間、目を見開いた。何故ならそこには――

「芳佳?……」

成長しているが間違いない。写真に写っているのは優人の妹、宮藤芳佳だった。

第3話 「兄妹の再会」

1944年4月。扶桑皇国、横須賀。

畑道を一台のトラクターが走っていた。大量のスイカが積んである荷台の後部には二人の少女が座っていた。二人は横須賀第四女子中学校の生徒である。

ひとりには宮藤芳佳。横須賀で小さな診療所を営んでいる家の娘だ。学業成績は中の中、運動も中の中、特技は料理という明るい性格の少女。

もうひとりは山川美千子。芳佳のはとこで一番の親友だ。芳佳からは「みつちゃん」と呼ばれている。

二人は学校を終えて、迎えにきた美千子の祖父が運転するトラクターで家へ帰る途中だった。楽しくおしゃべりしていると横須賀にある扶桑海軍の軍港が見えてきた。

「うわあ！大きな艦！あれかな？昨日入港した軍艦って？」

見慣れない軍艦が入港していることに気付く美千子。

「軍艦？」

「うん」

「戦争の船だね。やだな……」

そう呟いて芳佳は俯いた。

「お父さんとお兄さんのこと？」

美千子は視線を軍艦から芳佳に戻して尋ねる。芳佳は「うん」と答えた。

芳佳の父は大事な仕事があると言って渡欧した。父の仕事を詳しく知らなかったが戦争に関係することだとは聞かされていた。

「お父さんが行っちゃったのは私が6歳の時だったの」

芳佳は父が海外へ旅立った日のことを語り始めた。あの日、父は芳佳が母や祖母に負けない力を持っていることを教えた。芳佳はその力でみんなを守る立派な人になることを、父は仕事が終わったらずっと一緒にいることを約束して芳佳と指切りをしていた。

「あれが最後に見たお父さんの姿。3年後に戻ってきたのは鞆ひとつ分の遺品と死亡通知。軍の機密だからって亡くなった理由も場所も教えてくれなかった」

悲しみに満ちた表情で話す芳佳。彼女は元々人を傷つける戦争や兵器に対して嫌悪感を抱いていた。大好きだった父親を亡くした遠因になったことでより一層戦争嫌いになっている。

「わかっているのは戦争がなかったら父さんは死ななかったし、お兄ちゃんとも離ればなれにならなかつたこと」

5年前、父の死を芳佳は悲しんだ。その上、悲しいとき辛いときに泣いている自分もいつもあやしてくれた兄が側にいなかった。

芳佳は兄に帰ってきて欲しかった。ずっと兄の帰りを待ち続け、すぐに迎ええられるように朝から夜まで玄関の前で待っていたこともある。しかし、自分が中学生になっても兄は帰ってこない。

(お兄ちゃん……もう帰って来ないのかな？私のこと忘れちゃったのかな？)

ふとそんな考えが頭を過り、芳佳は泣き出しそうなのを必死に堪えていた。

その時、トラクターの前に狸が飛び出してきた。美千子の祖父が慌ててハンドルを切り避けようとする。

「きゃあああああ!!」

荷台は大きく揺れ、悲鳴を上げる二人。とつさに荷台の端に掴まったが、美千子はあまりの揺れに手を離してしまう。

「みっちゃん!!」

芳佳は手を伸して美千子を助けようとするが届かなかった。トラクターはそのまま転倒し、エンジンから煙が噴き出していた。荷台に載せてあったスイカはほとんど地面に落ちて割れてしまっていた。

芳佳は地面に倒れていたが目立った怪我もなくすぐに起き上がった。

「美千子!!」

美千子の祖父の声が聞こえた。声のする方に向かうと美千子が手で胸を抑えて苦しそうにうずくまっている。

「みっちゃん!!」

芳佳は慌てて駆け寄ると、傷を見るために美千子を仰向けにした。美千子は胸から多量の出血をしていた。荷台から落ちた際に大怪我をしたのだ。

「よ、芳佳ちゃん……」

怪我のせいか美千子の呼吸は乱れており、とても苦しそうだった。

「喋っちゃダメ!!」

そう言うのと芳佳は治療を行うために美千子のセーラー服を破り、痛々しい傷に両手をかざした。すると芳佳の身体から犬らしき動物の耳と尻尾が頭やお尻に現れた。同時に魔法力の光りが手から発せられ、傷を包む。

芳佳はウィッチだった。同じくウィッチである母や祖母から受け継いだ治癒魔法を使うことができる。この治癒魔法は上手く使うことができれば重傷者も簡単に治してしまう強力な魔法だ。だが、力を制御仕切れていない。使い始めてすぐに疲労感が芳佳を襲い、息が上がってきた。

「はあはあ……ち、力が……」

体力を消耗し、芳佳は今にも倒れそうだった。その時、男女二人を乗せた一台の車が近くに止まった。二人は車から降りると芳佳の元へ駆け寄る。

「落ち着け芳佳！集中しろ！」

男性の方が芳佳の左肩に手を乗せて声を掛ける。芳佳は一瞬後ろを振り返るがすぐに美千子の方へ向き直った。

「意識を乱すな！肩の力を抜いて魔法をコントロールするんだ！」

男は続けて芳佳に助言を行い、芳佳もそれに従った。しかし、魔法力を使った疲労で芳佳の身体は限界に近かった。

「焦るな、お前なら出来る」

（……あれ？この人の声聞いていると、なんだか安心する……）

優しく力強い声で芳佳を励ます男。芳佳はどうか治療を続け、美千子の傷は少しずつではあるが塞がっていく。

（この人って……もしかして……）

そう思った瞬間体力が限界に達し、芳佳は気を失う。倒れたそうになった芳佳を男が……いや、彼女の兄、宮藤優人が受け止めた。



優人と芳佳の家は代々は診療所を営んでいる。元々は秋元診療所と名乗り、二人の祖母である秋元芳子が経営していた。母の清佳が父の一郎と結婚したことを機に宮藤診療所へ改名された。

「た、ただいま……」

優人は8年振りの帰省で少し緊張しながら玄関の戸を開ける。入ってすぐのところにある診察室に母の清佳と祖母の芳子がいた。

「おや？どちら様ですか？」

芳子は優人が成長していたため誰かすぐにはわからなかったようだが清佳は一目見るや自分の息子だと気付いた。

「……優人？」

「8年振り……かな？」

清佳の言葉に優人は頬を指で掻きながら照れくさそうに答える。清佳の目に涙が溜まっっていく。

「優人おっ!!」

「うわっ!」

清佳に抱き着かれる優人。軍で戦っている息子がやっと帰ってきたこと。そしてそ

の息子が立派に成長していたことが嬉しくてと彼を強く抱きしめながら泣いていた。

母を泣かせてしまい、優人は申し訳ない気持ちでいばいだつた。出来れば母の気の済むまでされるがままでいようとも思ったが、美千子という怪我人がいるためそうもいかなかった。優人は母を落ち着かせて、治療を頼んだ。

「まさか事故現場に居合わせるとは……」

優人は帰国していきなりのアクシデントに溜め息を吐く。彼は坂本と居間に座っている。

「はっはっはっ！まあお前の妹もあの娘も無事で良かったじゃないか」

「みっちゃん……美千子ちゃんは大怪我したんだけど……」

呑気な坂本に突っ込みを入れる優人。今、美千子は清佳と芳子から治療魔法を使った治療を受けている。芳佳とは違って力の使い方を理解しており、美千子の傷はみるみる治っていく。優人が診察室の方へ目を向け、母に美千子の容態を聞こうとした時だった。

「みっちゃん!!」

魔法を使った疲労のため、隣で芳佳が飛び起きた。起きて早々に親友の心配をする。

母はそんな娘に「大丈夫よ」と声を掛け

「傷も塞がったし、痕も残らないでしょう」

と続けた。

「良かったあ!」

親友がもう大丈夫だということを理解し、安堵する芳佳。同じく優人も安心していった。彼は嫁入り前の身体に傷が残らないかを心配していたのである。

「相変わらず力の使い方がなつちやいなね。気持ちばかり先に出て」

祖母が芳佳に声を掛けてきた。少しだけ俯く芳佳。

「誰かのために何かしたいってのはわかるけど……私達の力は使い方覚えないと自分の命を落とすことになるんだよ」

と穏やかに言い聞かせる。

「……だって……私だってお母さんやおばあちゃんのようにみんなを助けたいの!」

自分の気持ちを訴える芳佳。自分の力でみんなを助けたい、それが彼女の思いである。

「それに約束したから」

芳佳は父と指切りをした小指を見つめてながら呟く。8年前に父とした約束を今でも胸に抱いている。優人はそんな妹の姿に微笑みながら声を掛けた。

「父さんとの約束覚えてたんだ?」

「うん……ええ?」

芳佳は母や祖母のものとは違う声に話し掛けられ、声がした方へ目をやると隣の二人に気付いた。ここにいるのは美千子と家族だけかと思つていたため、芳佳は驚いて声を上げる。

そして母同様、目の前にいる男性が誰かすぐに気付いた。

「お兄ちゃん……なの？」

恐る恐る訊く芳佳に優人は笑顔で答える。

「うんーただいま」

その言葉聞き、芳佳は兄の胸へ飛び込んだ。

「うおっ!？」

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！お兄ちゃあああん!!」

優人の胸の中で泣き出す芳佳。急に飛び込んだ来た妹に一瞬驚きながらも受け止め、頭を撫でる優人。ずっと会いたかった兄に再会できた、芳佳は嬉しさのあまりに泣き出した、先程の清佳よりも大泣きしている。

「帰るのが遅れてごめんな」

「遅すぎるよ！私、私……ずっと待ってたのに……」

「よしよし……相変わらず泣き虫だな」

優人は芳佳が落ち着くまで頭を撫で続けた。その微笑ましい光景に坂本、清佳、芳子

の三人も自然と笑顔になる。やがて落ち着いた芳佳は優人から離れ、坂本に目を向けた。

「あの……あなたはどなたですか？」

「ああ、すまん。挨拶が遅れたな。私は連合軍第501統合戦闘航空団、通称ストライクウィッチーズ所属、坂本美緒少佐。お前の兄さんの戦友だ」

「すたらいく？……あつ、こんには」

芳佳はなんだかわからないという顔をしていたが取り敢えず挨拶をする。坂本は話を続ける。

「私達は強大な魔力を秘めた将来有望なウィッチを探しているんだ。お前の力を見せてもらった。粗削りだがいいものを持っている！」

「ありがとうございます！」

芳佳は嬉しそうに礼を言う。しかし、優人は横目で坂本を睨んでいた。坂本が次に言わんとしていることがわかっていてるためだ。

「というわけで、その力を生かして一緒にネウロイと戦おう！」

「はい……へっ？」

元氣よく返事をするも言われたことの意味を考えて、呆氣をとられる芳佳。

「それは!？」

「うちの孫を軍隊に連れていく気ですか？」

坂本の言葉に清佳は不安な表情を浮かべ、芳子は坂本を軽く睨みながら尋ねる。娘を、孫を軍隊に入れたくはないのだろう。

「軍隊……お断りします！私、学校を卒業したらこの診察所を継ぐんです！」

坂本の誘いを強い口調で断る芳佳。彼女の夢は診察所を継ぐこと、戦争に行くなど絶対嫌なのだ。

「まあ、診察所を継ぎたいというお前の気持ちは素晴らしい。だが、その力をもつと必要としている人達がいるんだ！」

「坂本!!……やめてくれないか？」

優人は芳佳と坂本の間を割って入った。上官への反抗ともとれる優人の行動だが、彼も母や祖母と同じく芳佳を軍に入れたくないのだ。ましてや死と隣り合わせの戦場へ送るなど許せなかった。

長い間、共に戦ってきた優人と坂本の仲は良好である。しかし、妹が絡んでいるためか今回ばかりは優人は坂本に対し怒りに近い感情を抱いていた。

しばし睨み合った後で坂本が口を開く。

「いや、今日すぐに了解してもらえとは思ってなかったからな」

坂本は微笑むと芳佳の方へと向き直る。

「だが、お前は必ず私のもとへ来ることになる」

「なっ……なんでそんなことわかるんですか？」

「ん？ 勘だよ勘！ それに力のあるものは最もその力を必要としている場所に導かれる」

「そう言う」と坂本は立ち上がる。

「では港で待っているぞ」

「と言つて彼女は玄関から出ていく。坂本が外に出た直後、芳佳があっかんべーをした。優人は芳佳の子どもっぽい行動に苦笑いを浮かべる。

「じゃあ俺も行くよ」

立ち上がる優人。

「えっ……もう行つちやうの？」

芳佳が表情を曇らせる。

「せっかく帰ってきたのに」

芳佳に続いて清佳も残念そうな顔をする。

「数日は横須賀にいるから時間を作つてまた来るよ」

「ホント!?!」

「うん、ホント」

優人は微笑みながら芳佳の頭を撫でる。芳佳は気持ち良さそうに目を細める。流石

にずっとしているわけにはいかないので優人は芳佳の頭から手を離す。芳佳は「あ……」と少し残念そうな顔をする。

「じゃあな！」

「うん！お茶とお菓子用意して待つてるね！」

「おっ！楽しみ！」

そう言つて優人は玄関から外へ出た。手を振つて自分を見送る芳佳に手を振り返しながら、外に停めてある軍用車に向かつて歩く。

車の助手席には坂本が座つて待つていた。優人は「待たせたな」と言つたと運転席へ座り、エンジンを始動し、横須賀軍港へ向かつて車を走らせる。

「やはり妹を戦わせたくないか？」

しばらくすると、坂本が口を開いた。

「当然」

少しだけ声を荒げる優人。

「芳佳を危険に晒したくない。そもそもあいつは性格的に戦い向きじゃない」

優人は少し強めの口調で答える。坂本はふつと笑いを話を続ける。

「しかし、妹が自分の意思で戦いたいと言つたらどうする？」

坂本の問いに対して優人少し考えてから答える。

「本気ならば本人の意思を尊重するが……それはない、今回ばかりはお前の勘もハズレだ」

坂本の勘がよく当たることは知っている。しかし、優人には人を傷つける戦争が嫌いな芳佳が誘いに乗るとは思わなかった。

「いや、まだわからんぞ」

坂本は自信たっぷりの笑みを浮かべている。そんな彼女を横目で見ながら嫌な胸騒ぎがするのを感じつつ、今度は優人が質問をした。

「一ついいか？」

「なんだ？」

「お前に芳佳を推薦したのは誰だ？」



翌日の扶桑海軍横須賀軍港。優人はある人物に面談を求め、相手の執務室を訪れていた。通されると室内には男性が2名。1人は50代の男性。もう1人は彼の副官のようだ、警護するかのように男性の傍らに立っている。

「よく来たね。まあ、どうぞ」

「失礼します」

初老の男性に促され、ソファーへと腰を下ろす。

「欧州での任務、御苦労」

「ありがとうございます」

向かい側に座っている初老の男性、遣欧艦隊司令長官の赤坂伊知郎（あかさか いちろう）中將から労いの言葉を賜り、優人は深々と頭を下げる。

普通ならば、一介の大尉に過ぎない優人が赤坂ほどの立場の人間と簡単に面会出来るものではない。

「長官、早速ですがお訊きしたいことが——」

「妹さんの件かね？」

赤坂が優人の言わんとしていることをズバリ言い当てる。優人が何の用で自分に会いに来たのかを察していたらしい。

「何故よし……いえ、妹を501に？」

芳佳と言いそうになったのを慌てて直す優人。

「元々、海軍が従軍看護婦としてスカウトするためにリストアップしていたウィッチのひとりだったんだよ」

赤坂が説明を始め、真剣に優人は耳を傾ける。

「君の妹さん、芳佳さんと言ったか？彼女の才能はとても魅力的だ。治癒魔法一つとっても使いこなせるようになれば戦場で大勢の兵を救えるだろ？君の祖母の芳子さんのように」

優人と芳佳の祖母である芳子は過去に従軍した経験がある。自身の治癒魔法を大いに活用して重症の患者を一瞬で治療した、百人近く治療してもケロリとしていた、など様々な武勇伝がある。宮藤兄妹は母からそれらの話を聞かされて育った。

「しかし、本人に入隊の意思は皆無です」

「無論、強制はせんよ」

入隊はあくまで本人の自由意思だと言う赤坂。

「我ら扶桑皇国海軍は強大な海軍戦力を持っている。が……ウイッチの数は割りとぎりぎりなんだよ。ましてや稀少な治癒魔法を使えるウイッチや空母に発着艦可能な航空ウイッチとなると」

「ええ」

同意する優人。通常ならば、赤城にも航空ウイッチを8名乗艦させるが、人数を揃えられず彼と坂本しか乗り込んでいなかった。

「陸軍のように宣伝映画で志願者が増えればいいんだがね」

ぼやく赤坂を見て、優人は顔をしかめた。

「あの長官。まだお答えを頂いていませんか？」

「ん？」

「妹の調査書が何故ブリタニアの501にいる坂本に送られたのでしょうか？」

優人は問い詰めるように言うが、赤坂から返ってきたのは予想の斜め上に行く答えだった。

「手違いだよ」

「はい？」

「どういうわけか君ら501の元に推薦するような形で送られてね」

「は、はあ……」

優人は何とも言えない表情を浮かべる。

「そもそも上官でもない私が西部方面総司令部管轄下にある501の人事に口を挟むなんて真似は出来んよ」

「長官も西部方面総司令部に参加する将官の一員では？」

と優人。赤坂は連合軍内においては西部方面総司令部所属の将官。扶桑海軍は近い将来行われる予定のガリア反攻作戦に参加する。それに伴い、赤坂も隷下の艦隊を率いてブリタニアへ向かうのだ。

「501に限らず、西部方面総司令部所属の各国軍はブリタニアの影響を多少なりとも

受ける。あの国は何かと連合軍内の主導権を握りたがるからな」

「まあ、確かに。長官とは反りが合わない方もいることですしね」

皮肉染みた言い方をする優人。この時、彼の頭にはブリタニア空軍のある人物の顔が浮かんでいた。

「その反りがは合わない輩に関することで頼みがあるんだが……」

「頼み？」

赤坂の言ったことを繰り返す優人。赤坂の顔を見してみると、彼は何か企んでいる時の顔をしている。

(嫌な予感……)

赤坂とは対照的に優人は愁眉の表情になっていた。



「失礼します」

赤坂との話を終えた優人は最敬礼して退室する。

「手違い……ねえ」

優人は一言呟くと、外へ向かって歩を進めた。

第4話 「父の手紙と妹の渡欧」

赤坂の厚意により、優人は赤城が出港するまでの数日を休暇として過ごすこととなった。横須賀鎮守府所属の扶桑海軍二等兵、土方圭介が運転する車で実家へ向かっていた。

「悪いな。送ってもらおうことになって」

「いえー！」

車が商店街に入ったところで優人が口を開く。運転中のため土方は前方を向いたまま答える。土方は坂本の従兵なのだが、彼女の命により優人を送ることとなった。

「誉れ高き501部隊のウィザードの方を御送りさせて頂き、光栄です！」

と、誇らしげな土方。ウィッチの従兵は成績優秀、品行方正、謹厳実直でなければならぬとされる。土方もその例に漏れず、堅物で真面目。優人はそんな優等生過ぎる土方のことが少し苦手だ。今も苦笑いを浮かべている。

「大尉、失礼ですが……」

「ん？」

「赤坂長官とは個人的なお付き合いが？」

一介の士官に過ぎない優人が艦隊指揮官である赤坂と事前連絡無しで面談をしていた。土方はそれが気になったらしい。土方以外にも二人が一体どういった関係なのか、知りたがっている将兵はいる。

「長官は父親の友人なんだよ。名前や故郷が同じとか、そんなことが切っ掛けで始まった友情らしい」

遣欧艦隊司令長官である赤坂伊知郎とストライカーユニットの父と呼ばれる宮藤一郎。二人は友人だった。つまり、一郎の息子である優人は赤坂に強力なコネがあるということだ。簡単に話したところを見ると、隠しているわけでは無いらしい。

「その関係で俺のことも随分と気にかけてくれるよ。父さんが死んだ時とか特に……」

父親の死を思い出してもしたのか、声のトーンが低くなる優人。

「大尉にとって赤坂長官は父親代わりのようなものですか？」

「……親は親でも狸親父だけだな」

「は？」

「いや、こつちの話だ」

誤魔化す優人。そんな会話をしているうちに二人は宮藤診療所近くの山道まで来ていた。

「ここでいい、停めてくれ」

「ご実家まで御送りしますが？」

「久しぶりの景色を歩きながらゆつくりと見たいんだよ」

「了解しました！」

土方が車を停めると、優人は礼を言つて車から降りる。

「ありがとう」

「いえ！では、明後日お迎えに上がります」

土方はそう言つて敬礼すると車を方向転換させ、軍港へ戻つていった。土方を見送ると優人は歩き始めた。

「昔のまんまだな」

優人は笑みを浮かべる。8年経つても変わらない景色に懐かしさを嘯み締めながら山道を進み、目的地へ向かう。



優人の実家である宮藤診療所。その玄関に芳佳が立っていた。彼女はなにやらそわそわしていた。「時間を作つて会いに来る」と言つた兄が来るのを待っているからだ。

昨日の今日で来るとは限らない。しかし、芳佳は今日じゃないかと心待ちしていた。

昨日、兄が8年ぶりに帰ってきた。芳佳は嬉しさのあまり大泣きした。あんなに泣いたのは父の死亡通知が来た日以来だった。

「お兄ちゃん……えへへ」

昨日再会した優人の顔を思い浮かべ、芳佳は頬を緩める。久しぶりに会った兄は変わらず優しく、そして格好良くなっていた。

芳佳は優人と一緒に過ごしたいと考えている。話したいこと、聞きたいことがたくさんあった。自分が今まで何をして過ごしていたかということや兄が今まで何をしてきたかということ。

（昨日の女の人はどういう関係なんだろう？）

昨日、自分をスカウトしてきた女性を思い出した。坂本と名乗った彼女は凛々しい風貌の美人だった。

一体兄とはどういう関係なのだろう、芳佳はそれが気になっていた。自分のことで意見がぶつかっていたようだが、芳佳は二人の仲に険悪な雰囲気を感じなかった。実際、優人と坂本は長い付き合いの気の知れた仲である。

（まさか……お兄ちゃんの恋人なのかな？）

兄の恋人かもしれない、芳佳は胸がチクリと痛むのを感じた。ぶんぶんとして首を横に

振ってネガティブな考えを振り払おうとする。

「何してるんだ？」

「ひゃあああああ!!」

後ろから突然声を掛けられ、芳佳は悲鳴と共に飛び上がる。振り向くと待ちわびていた兄がいた。

「おっ、お兄ちゃん？来てくれたの？」

「うん。休み貰えたからな」

「そ、そうなんだ……」

芳佳は恥ずかしいところを見られてしまい、顔を赤くしていた。そんな妹の姿に優人は首を傾げる。

「じゃ、じゃあ！中に入ってお茶にしようよ！おはぎ作ったから！」

「う、うん」

嬉しさと恥ずかしさの混じった声の芳佳。少し戸惑いながらも優人は妹の誘いを受
ける。

手を引かれながら家に入ると居間のちゃぶ台におはぎと扶桑茶が用意されていた。優人は妹の手作りおはぎに舌鼓を打ちながら、彼女の話に耳を傾ける。

「そうしたら猫ちゃんは助かったんだけど、私が木に引っ掛かっちゃって……」

今は芳佳が話しているのは彼女が通っている中学校であった出来事だ。なんでも、木から降りられなくなった黒猫を助けたらしい。

「猫を助けるのもいいけど、危ないことはするなよ」

「お兄ちゃんだって危ないことしてるじゃない……」

軍のウィザードとしてネウロイと戦っていることを言っているらしい。優人が心配なのか、芳佳の声のトーンが僅かに下がる。

「それとこれとは話が違います」

優人はきつぱりと言り返す。

「助ける前に自分の運動能力を考えろよ」

「だって、助けたかったんだもん」

優人からの軽い説教を受けて、芳佳は頬を膨らませながら反論する。

「少なくとも、はじめから先生に頼めば怒られることも木からぶら下がって恥をかくこともなかったんじゃないのか？」

「むう……」

芳佳はさらに頬を膨らませ、優人を軽く睨む。

「ごめんごめん。それよりこのおはぎ美味しいな」

「ホント!?!」

「ホント！ホント！毎日食べたいくらいだよ！」

「もう！お兄ちゃんつたら！」

芳佳は上機嫌になり照れ笑いを見せる。

「まだまだあるよ！今持つてくるね！」

そう言うのと、芳佳は台所へ駆けていった。

（チヨロいな……）

おはぎを少し褒められただけで機嫌を直す。善くも悪くも純粹な妹を見て、優人は将来悪い男に騙されたり、信じた人に裏切られないか心配になった。

そこに一歩下がって二人を見ていた清佳が急須を持つて声を掛ける。

「優人、お茶の御代わりどうぞ」

「ありがとう、母さん」

優人は笑顔で礼を言い、茶を飲み干した湯呑みを差し出す。

「あんなに嬉しそうな芳佳、久しぶりに見たわ」

清佳は茶を注ぎながら嬉しそうに言う。

「おはぎ褒めたぐらいでね」

「あなたが帰って来たからよ。あの子、かなりのお兄ちゃん子なんだから」

クスクスと笑う清佳。優人は困ったような、照れ臭いような笑みを浮かべる。

「ねえ優人。軍を辞める気はないの？」

「えっ？」

急に表情を曇らせた清佳に優人は当惑する。

「家に戻って、芳佳と一緒に診療所を継ぐ気はない？」

続けて問い掛ける清佳。優人は肩を竦める。

「すぐには無理だよ。少なくともネウロイを倒すまでは」

「……優人、母さんは心配なのよ。いつか……いつかあなたが……」

清佳は口ごもる。『いつか息子が戦いで死んでしまうのではないか』、清佳の脳裏にはそんな考えが浮かんでいた。優人が配属されているのは欧州における最前線の一つ、ウィッチャやウィザードの生存率が他の兵科よりも高いとは言っても不死身なわけではない。今大戦が始まって数年、多くの若い命が散っている。

「芳佳やお祖母ちゃんも同じよ。芳佳なんて、あなたを困らせないようにしてるけど、ホントは——」

「言いたいことはわかるよ」

優人が清佳の言葉を遮った。

「でも、俺も父さんと約束したから……」

——みんなを守る立派な人になりなさい。

芳佳だけではない、優人も父とそう約束していた。それ故に海軍のウィザードとなつた。

「……やつぱり、あなた達はあの人の子ね」

清佳は微笑む。結局、どのみちを選ぶかは子ども達であり、本人達の意味が揺るがないならば自分がとやかく言うことではない。

「二人とも何話してるの?」

芳佳がおはぎの御代わりを持って戻ってきた。

「芳佳の成績について訊いてた」

「ええええええ!!ちよ、ちよっとお母さん!しゃべっちゃったの!」

優人は適当なことを言つて誤魔化す。しかし、芳佳は本気で慌てる。優人に自分のカツコ悪いところを知られたくないらしい。

しかし、坂本から渡された調査書を隅々まで読んだため、優人は芳佳の成績がどんなものか理解している。

「さあ、どうかしらね?」

清佳は悪戯っぽく笑う。優人も母親の尻馬に乗る。

「いくら治癒魔法があるとはいえ、今の成績で診療所を継ぐのはなあ」

「もう!二人の意地悪!!」

ニヤつく二人に芳佳は顔を真っ赤にして怒鳴る。

「ごめんごめん。芳佳が可愛いからついね」

優人はぼんぼんと芳佳の頭を撫でる。芳佳は優人を睨み返すが、その姿に迫力は無くどこか可愛いらしい。

「私の話だけじゃなくて、お兄ちゃんの話も聞かせてよ」

芳佳が上目遣いに優人を見る。

「俺？ストライカーユニットを履いて欧州の空を飛んでたよ」

優人が話し出した。『ネウロイと戦っていた』と言わないのは芳佳に心配させないためか、戦争が嫌いな妹を配慮してか、はたまたその両方か。

「すーとらいかーゆーにつと？」

聞き慣れない単語に首を傾げる芳佳。優人はポケットから一枚の写真を取り出した。そこには優人と芳佳の父親である一郎、そして坂本が写っていた。数年ほど前に撮ったものだろう、優人も坂本も今より幾分幼い。優人は写真の背景にある機材を指差した。「これがストライカーユニット。父さんが軍のウィッチやウィザードのために造った魔法の箒だ」

「これをお父さんが？」

「うん、父さんはストライカーを開発するために欧州へ行つたんだよ。坂本が言つてた

よ、『これがなければ、今頃世界はネウロイに征服されていたかもしれない』って」
「お父さん……」

芳佳の表情は誇らし気なものになる。父が欧州でしていたことを初めて知った。彼女は自分の父がどんな仕事していたのかを全く知らなかった。そして父が話に出てきたため、芳佳はずっと知りたかったことを訊くことにした。

「……ねえ、お兄ちゃん」

「うん？」

「お父さんはどうして——」

——どうして死んだの？

芳佳がそう言おうとした時だった。

グワツシャーーン！

「きゃあ!!」

「——っ！芳佳っ!!」

突然、外から大きな音が聞こえてき。優人は咄嗟に芳佳を抱き締める。

「い、今のは？」

清佳が玄関の方へ目を向けながら呟く。優人は護身用に持っていた十四年式拳銃を取り出す。

「母さん、芳佳を頼む！」

「優人!!」

「お兄ちゃん!!」

優人は清佳に芳佳を預けると音の正体を確かめるため、家を飛び出した。外に出ると、診療所の前にある雑木林の方で何かが蠢いているのが見えた。優人は十四年式拳銃を構えながら慎重に近づく。

「うう〜ん……いった〜い」

声が出た。優人が茂みの中を覗き込むと、そこにはストライカーユニットを履いたウィッチがいた。

「あのユニットは……陸軍の!?!」

優人はウィッチが履いているストライカーユニットに見覚えがあった。陸軍の『キ61』、それに彼女が着ている服も陸軍の士官服だ。

「あれは?」

「あつ! さつき話してた。えっと、ストライカーユニット!?!」

優人が心配で追いかけて来たらしい清佳と芳佳。しげしげとユニットを見る。

「きやつ!」

陸軍ウィッチは芳佳の声に驚き、慌てて身体を起こす。

「あ、あの私！扶桑皇国陸軍飛行第47中隊、諏訪天姫少尉であります！」

陸軍ウィッチ、諏訪天姫は自分を見ていた優人達三人に自己紹介をする。黒髪にメガネが印象的な彼女からはドジっ娘オーラのようなものが感じられる。

「あつ、どうも。扶桑皇国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊288航空隊、宮藤優人大尉です」

「母の宮藤清佳です」

「あつ、妹の宮藤芳佳です」

「海軍の方と御家族でしたかあゝ」

間延びした口調で言う諏訪。彼女は海軍の第二種軍装を着ている優人を間近で見ているというのに海軍だと気付かなかつたらしい。

優人の方はというと陸軍にこんなひどい墜落をする航空ウィッチがいたことに驚愕している。

「あの……(´)用件は？」

「あつ！そうでした」

優人が訊くと諏訪は手紙を取り出し、芳佳に向かって笑顔で差し出してきた。

「宮藤芳佳さんに宮藤博士からお手紙です」

「へ？」

「は？」

諏訪の言葉での芳佳と優人の思考は一時停止する。そして、数秒後――

「ええええええええええ!!」

兄妹の叫び声が横須賀の青空に響き渡った

◇ ◇ ◇

諏訪が墜落した数十分後の横須賀軍港。歩哨の立つ門の前には刀を手にした坂本が立っている。待ち人来る、彼女の勘がそう告げている。

やがて、門に向かって走ってくる宮藤兄妹の姿が見えた。どうやら彼女の勘は当たったようだ。

「優人、お前は休暇だったはずだろう？」

「ちよつと休暇どころじゃ無くなつてな」

「ああ、なるほど」

彼女は笑みを浮かべて芳佳に向き直る。二人は家から全力で走ってきたらしい。軍で訓練を受けている優人はともかく、一般の学生である芳佳はバテてしまっている。

「よく決心してくれた！自分の力を活かす気になったようだな！」

坂本に連れられ軍港内に入る優人と芳佳。波止場では一昨日入港した赤城が補給物資を受け取っていた。

「え？宮藤博士からの手紙？」

「ああ」

優人は諏訪の手によって父の手紙が届けられたことを話した。封筒に入っていたのは二枚の写真。一つは父の宮藤一郎が写っているもの、もう一つは優人が芳佳に見せたものと同じ写真。

「陸軍のウィッチには？」

「聞いてみたけど、配達するように命令されただけで詳しくは知らないそうだ」

「ふむ」

優人の話を聞き、坂本は顎に手を当てて考え込む。

「お父さんは生きているんでしょうか？」

と芳佳が訊く。

「それはわからん。だが、確かめてみ——」

「連れてってくださいブリタニアに！行ってお父さんのこと確かめたいんです！」

芳佳は坂本の言葉を遮り、真剣な面持ちで頼み込む。もし父が生きているのなら会いたい、会えなくても生死の事実を確認したい、芳佳はそう思っている。

坂本は優人の方をチラッと見る。坂本と目が合った優人は小さく頷いた。優人の了解を得た坂本は芳佳に視線を戻す。

「いい眼だ！わかった！」

坂本はそう言つて芳佳の肩を叩いた。本人は軽く叩いたつもりだろうが、芳佳は痛そうに肩を押さえている。

「明後日出港だ！」

「あ、ありがとうございます！」

芳佳は笑顔で礼を言う。

「あー、ところで入隊する気は——」

「おい坂本」

まだ芳佳のことを諦めていない坂本。優人は貪欲な戦友に再び苛立つ。

「ありません！戦争だけは絶対にしませんから！」

坂本のスカウトをまたしても突っぱねる芳佳。腕を組みながらそっぽ向く。その頑固さが逆に気に入ったのか坂本は「はっはっはっはっはっはっ！」と高笑いをしていた。

◇
◇
◇

二日後。三人を乗せた赤城が第16駆逐隊の雪風、初風、天津風及び第17駆逐隊の磯風、谷風、浜風、浦風を護衛に伴い出港する。軍港には基地の兵や乗員の家族が見送りをしている。その中には優人と芳佳の家族や再従兄弟も美千子が来ていた。

「芳佳ちゃん！頑張つてね〜！」

「みっちゃん！元気でね〜！」

見送りに来てくれた親友に大きく手を振る芳佳。美千子も力いっぱい手を振る。

「二人とも身体には気をつけるんだよ〜！」

と祖母の芳子は孫二人のことが心配で仕方ない様子。

「芳佳……優人……」

清佳は悲しげな表情を浮かべていた。それでも精一杯の笑顔を作つて愛する我が子達を送り出そうとする。

（優人、芳佳をお願いね……）

「お母さん、お婆ちゃん……行つてきまあああああす!!」

自分の身を案じている家族を見て、芳佳は目尻に涙を浮かべながら精一杯叫ぶ。

（母さん、ごめん。行つてきます）

優人は心の中で母に謝りながら手を振る。こうしてウィザードの兄はウィッチの妹を連れて、再び欧州へ旅立った。

第5話 「兄の温もり」

横須賀軍港を出港してから数時間、航空母艦赤城を旗艦とする遣欧艦隊は夕日に照らされて赤く染まった海上を航行している。

左舷デッキには芳佳がいた。すでに見えなくなった扶桑の方角を見詰めている。夕日の光の具合なのか、それとも家族や友人と離れることが悲しいのか、彼女の目は潤んでいるように見える。

「芳佳」

「お兄ちゃん！」

そこへ優人がやって来た、芳佳の表情が明るくなる。

「やっぱり、みんなと離れるのはつらいか？」

「うん。でも、みんなが送り出してくれたんだから、頑張らなきゃ」

「そっか、芳佳は強いな」

故郷を離れ、異国の地へ向かう芳佳のことを心配していた優人。しかし、思ったより元氣そうな妹を見て安堵する。

「……そう言えば、初めてだよね？」

「うん？」

「お兄ちゃんと船旅」

「言われてみれば……」

優人は自身の記憶を辿る。過去の宮藤家の家族旅行は国内のみ、遠出をする際は鉄道を使用していた。

そして8年前、優人が海軍へ入隊、父の一郎は渡欧。芳佳は母や祖母と船に乗ることは何度かあったものの、優人や一郎とはなかった。

「みんなと離れるのはすごく寂しいけど。でも……」

芳佳は優人の腕に抱き着く。

「その代わりにお兄ちゃんと一緒にいられるから！」

「そ、そっか……」

向日葵のような眩しい笑顔の芳佳が優人の腕にすり寄ってくる。優人の頬に赤みがさしているのは夕日のせいだけでは無いだろう。

「仲が良くてなによりだな」

二人の元へ坂本がニヤケ顔でやって来た。

「あつ、坂本さん」

「何か用か？」

芳佳をスカウトした件が尾を引いているのか、優人は若干不機嫌な口調で応じる。

「整備兵がユニットのことでお前に話があるそうだ」

優人は坂本から連絡を受けると、芳佳に向き直る。

「悪い芳佳。ちよつと行つてくるよ」

「うん、行つてらっしゃい」

少し残念そうに優人を見送る芳佳。優人がデッキからいなくなつたところで坂本が芳佳に話を切り出した。

「どうだ、赤城の乗り心地は？」

「はい、すごい快適です」

「そうか、だが快適なのは艦の上だけだぞ」

微笑んでいた坂本の表情が一変する。

「お前も知っているはずだ、ブリタニアが今どうなっているか」

坂本は説明を始める。

「大陸を制圧したネウロイと戦う最前線だ。そこにいく理由、本当に父上のことを確認するためだけか？」

真剣な表情で問い掛ける坂本に芳佳は俯きながら答える。

「ブリタニアには困っている人がたくさんいるんですよ？」

現在、ブリタニアはネウロイの侵攻によって陥落したカールスラント、オストマルク等からの難民で溢れかえっている。ブリタニア政府が手を尽くしているが受け入れ政策は十分ではない。路地裏に身を寄せている者も多く、その中には避難の途中で大怪我した人間や病人もいる。芳佳はこれらのことを優人から聞いていた。

「ああ、大勢いる」

頷く坂本。

「私守りたいんです。傷付いた人、病気の人、たくさんの方の為に私の力を役立てたいんです！お父さんと約束したんです！」

坂本に自分の胸の内を伝える芳佳。父との約束を果たしたい、自分の力で多くの人を守りたい、それも芳佳の願いだ。芳佳の気持ちを聞くことが出来た坂本は再び微笑む。

「坂本さん、何かすることはありませんか？掃除でも洗濯でも何でもやります！」

「よーし！その意気だ！」

坂本は二日前と同様に芳佳の肩を強く叩いた。

「はっはっはっはっはっ!!」

痛む肩を押さえる芳佳を余所に坂本は高笑いする。



遣欧艦隊が横須賀を出航して約1ヶ月。ブリタニアにある第501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズ基地。

基地の滑走路の隅にはデツキチエアが置かれている。そこにシャーリーとルツキーニが水着姿で寝そべっていた。シャーリーは彼女の愛称「グラマラス・シャーリー」の名に恥じないダイナマイトボディを、ルツキーニは日焼けした健康的な肌を惜し気もなく晒している。

「おお〜おかえり〜!」

空を飛んでいたサーニヤとエイラが降りてくる。シャーリーは身体を起こし、手を振って出迎えた。二人もシャーリーに向かって手を振り返した。

「相変わらず緊張感のない方々ですこと。そんな格好で……戦闘待機中ですよ」

デツキチエアの傍にやって来たペリーヌが嫌味つたらしく言う。陽射しは肌に悪いからと日傘を差している彼女の姿はガリア貴族の令嬢らしい優雅なものだ。

「なんだよ〜? 中佐から許可もらってるし、解析チームもあと20時間、敵は来ないっていつてたぞ。それに見られて減るもんでもな〜い」

と、胸を張るシャーリー。豊かな胸がゼリーのるように柔らかく揺れる。

「ペリーヌは減ったら困るから脱いじゃダメだよ〜」

ルツキーニがシャーリーとペリーヌの胸を見比べながらバカにするように言う。しかし、胸のことならばルツキーニも人のことは言えない。

「大きなお世話です！」

憤慨したペリーヌが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「まったく、間も無く坂本少佐がお戻りになります。そうしたら真っ先に貴女方の緩みきつた行動について進言させて頂きます！」

「告げ口する気？ 感じ悪う〜」

と言って、再びデツキチエアに寝そべるシャーリー。

「ペッタタンコのくせに〜」

ルツキーニが畳み掛けるように続く。

「お黙りなさい！ って、あなたにだけは言われたくありませんわ！」

キツとルツキーニを睨みつけるペリーヌ。するとルツキーニは思い出したように言う。

「ねえねえ、優人も少佐と一緒になんだよね？」

「ああ、何年かぶりに扶桑に帰ってたらしいな」

「扶桑のお土産持ってきてくれるかな？」

「あつははははは！ ルツキーニ、優人にお菓子をおねだりしたもんなん！」

と、ルツキーニとシャーリー。ペリー又は優人の名前を聞いて不快そうに眉をひそめる。

彼女は坂本のことを崇拜とも呼べるほどに尊敬している。そのためか、坂本と親しく一番付き合いが長い優人に嫉妬している。もちろん、ペリー又は上官であり、実力もある彼のことを坂本ほどではないものの、尊敬はしている。ただ、坂本が絡むとどうしても嫉妬心を抱いてしまうのだ。

「そう言えば、新人を連れてくるって……」

「新人!? どんな人!?!」

思い出したように言うシャーリー。ルツキーニが目を輝かせながら反応する。

「確か優人のいも——」

ウウウウウウウウウウ!!

シャーリーが説明しようとすると、彼女の言葉を遮るかのように敵襲を報せる警報が鳴り響いた。

「敵!?!」

シャーリーはデツキチエアから飛び起きた。

「まさか!?! 早過ぎますわ!!」

ペリー又は予報よりも早い敵襲に驚くも、すぐに日傘を畳んでハンガーへ向かう。先

程とは打って変わり真剣な表情となったシャーリーとルツキーニも続いた。

◇ ◇ ◇

ブリタニアに向けて航行中の遣欧艦隊。芳佳はデッキブラシを使って甲板を掃除していた。甲板には他に優人や坂本、乗員が数名いる。

芳佳は赤城に乗船してから艦の仕事を手伝っていた。掃除、洗濯、料理等。特に料理は乗員達に好評だった。

この1ヶ月、芳佳は艦内の生活を忙しくも楽しく過ごしていた。坂本や乗員達との関係も良好なものになっている。

「うくん。まだ見えないなあ……」

芳佳はデッキブラシを杖のように着きながらお尻を突きだして前屈みになったり、背伸びしたりしながら赤城の進行方向を見ていた。

「ブリタニアまではあと半日はかかる。そう慌てるな」

「だって〜！もうひと月ですよ！」

坂本の言葉を聞き、芳佳は軽く膨れっ面になりながら答える。目的地を目の前に逸る気持ちを抑え切れならしい。

「スエズ運河を通れないことが地味に効くな」

ぼやく優人。より速く目的地に着けるスエズ運河を使ったルートが存在する。しかし、現在スエズ運河はネウロイの支配下にある。

「スエズ運河？」

「ああ、そこを通れば20日ぐらいで着け……坂本？」

優人が芳佳に説明していると坂本の様子がおかしいことに気付く。彼女は右目の眼帯を外し、魔眼を発動している。優人は坂本が何を見ているかすぐに理解した。

「敵襲〜!!12時方向!距離4000!」

坂本の叫び声が甲板に響くのとほぼ同時に赤城は戦闘態勢に入る。芳佳は何が起こったのかわからずにおろおろしている。

「て、敵!」

「ネウロイだよ!」

優人が芳佳に教えるのと同時に赤城が正面上空の雲へ砲撃を行った。直後に雲の中から赤い光が一閃、駆逐艦に直撃する。ネウロイのビームだ。

「初風が!」

大破した初風を見て叫ぶ優人。ビームによって切り開かれた雲からエイのようなシルエットの黒い飛行物体が現れた。

「あ、あれが……ネウロイ」

芳佳は初めてネウロイを見る。一撃で容易に駆逐艦を沈めたネウロイの力を目の当たりにして、彼女の目が恐怖に染まり、身体が震える。すると坂本が二人に声を掛けてきた。

「芳佳！お前は非戦闘員だ！医務室へ避難している！優人、妹を連れていけ！」

「了解だ！芳佳、行くぞ！」

「は、はい……」

自分の手を引く優人にどうにか返事をする芳佳。艦内では乗員達が慌ただしく動いている。芳佳は兄に手を引かれながら、揺れる艦の中を医務室へ向かって進む。



目的地のブリタニアを目の前にしてネウロイの襲撃を受けた扶桑海軍遣欧艦隊。敵は大型が1機。駆逐隊が対空砲火で応戦するも、ネウロイの装甲や修復能力に阻まれダメージを与えられない。赤城の甲板では戦闘機隊が発艦の準備をしていた。

「何故ひと思いに攻撃してこない!!」

赤城の艦長、杉田淳三郎大佐は艦橋からネウロイを睨みつけていた。艦橋には彼の他

に副長の樽宮敬嬉中佐。そして、ブリタニアを拠点とした欧州反攻作戦の調整のため、赤城に乗艦していた赤坂の姿もあつた。

「我々を弄んでいるつもりでしょうか？」

と、樽宮。その気になれば簡単に艦隊を壊滅させるだけの火力を備えているにも関わらず、ネウロイは敢えて直撃を避けるようビームを撃っている。

樽宮の推測通りならネウロイは彼等扶桑海軍を敵とすら思っていないということだ。杉田は屈辱のあまり顔を強張らせる。

「杉田艦長、樽宮副長」

赤坂が二人に声を掛ける。

「全戦闘機隊の発進を急がせろ！それとブリタニアのウィッチ隊及び海空軍に応援要請！」

「はっ!!」

杉田と樽宮は赤坂の命令に従った。



医務室へ到着した優人は芳佳を診察台に座らせた。激しい轟音と振動。芳佳は恐怖

のあまり耳を両手で塞ぎ、目をぎゅつと瞑つて震えている。

「二人ともいるか？」

医務室の扉が開き、坂本が入ってきた。芳佳はさすがのような目で彼女を見上げた。

「なんだその顔は？ 情けないぞ。それでも扶桑の撫子か？」

（こいつの中の扶桑撫子はどうなってるんだ？）

坂本の発言に対し、優人は心の中でツツコミを入れる。

「でも……どうしても……震えが止まらないんです」

芳佳は弱々しく答える。坂本は「仕方ないな」と呟くと芳佳の目線に合わせて屈んだ。

「さあ、顔を上げてこつちを向け」

「えっ？」

芳佳が顔を上げると坂本が頬に手で触れ、顔を近付けてきた。

「動くな」

坂本がそう言うと、耳が一瞬ヒヤつとした。何かを耳に着けられたのだ。

「インカムだ。それさえあれば、離れていても私や優人と通話が出来る。ただし、使うのは本当に困った時だけだぞ。いいな？」

「はい」

芳佳が返事をする、艦が大きく揺れた。

「さあて、私はもう行かないと。優人、先にいつてるぞ！」
「ああ」

優人の返事を聞くと坂本は医務室を出た。優人は視線を芳佳に戻す。恐怖が拭いきれていないらしく、まだ震えていた。優人は軽く息を吐くと、芳佳に歩み寄った。

「…………お兄ちゃ——」

近づくと優人に気付き、芳佳は顔を上げる。すると、何か暖かいものに包まれた。芳佳はそれが優人の腕だということがすぐにわかった。

「よしよし。恐いよな？」

「お兄ちゃん？」

「でも大丈夫だ。ネウロイは俺達がすぐにやつつけるから。そうすれば、この恐い時間は終わるから心配するな」

優人は芳佳を抱き締めながら子どもをあやすように言う。小さい頃、芳佳が怯えていた時、優人はいつもこうしていたのだ。

「…………お兄ちゃん」

芳佳は優人の制服をぎゅつと握った。

「大丈夫、大丈夫」

優人はそつと芳佳の頭を撫でる。兄の温もりを感じ、芳佳は少しずつ落ち着いてい

く。

『宮藤大尉！早く甲板へ！』

伝声管から切羽詰まった様子の声が響く。優人は芳佳から離れた。

「じゃあ。俺はいくよ」

しばらくすると芳佳の震えは止まり、優人は離れる。

「お兄ちゃん……私は？」

「ここにいなさい。絶対に外へ出るなよ、ここなら安全だから」

「でも……」

芳佳は心配そうな表情で優人を見上げる。

「大丈夫！俺も坂本も強いから！ネウロイくらい楽勝だ！」

優人は芳佳に笑いかけながら言うともう一度、芳佳の頭を優しく撫でた。

「行ってくるよ。ちゃんとここにいるんだぞ？」

優人はそれだけ言って医務室から出た。その後ろ姿は欧州へ旅立った日の父のもの

とどこか似ていた。

（お兄ちゃん……死んじゃったりしないよね？）

芳佳は兄の背中を不安気に見つめていた。



『対空砲火止め！回避運動中止！総員、戦闘機隊の発艦に備えろ！』

赤城の甲板では九九式艦上戦闘機で編成された戦闘機隊16機が発艦準備をしていた。その最前列には坂本と優人がいた。二人はストライカーユニット『零式艦上戦闘脚二二型甲』を履き、魔導エンジンを始動していた。優人は九九式二号二型改13mm機関銃を装備している。坂本も同じく13mm機関銃を持ち、背中には扶桑刀を背負っていた。

「優人、妹は？」

「医務室から出ないように言ってきたよ」

「そうか」

端的な会話をする坂本と優人。二人が空を見上げるとネウロイが赤城を見下ろすようにホバリングをしていた。

「奴め、誘っているのか？」

「すぐに叩き落としてやるさ」

優人は13mm機関銃を強く握った。

「坂本美緒！発進する！」

「宮藤優人！出るぞー！」

まずは坂本が次に優人が発艦した。戦闘機隊も二人に続いて順次発艦していく。その間にも駆逐艦『浦風』がネウロイの攻撃を受け、大破する。坂本は自分に続く、優人や戦闘機隊にインカムで指示を出した。

「ネウロイはコアを潰さなければ倒せん。全戦闘機隊はコアを探しつつ、敵の攻撃を攪乱せよ！私は奴の上に回り込む。優人、お前は私に着いてこい！」

「了解だ！」

『了解！』

優人と戦闘機隊のパイロット達は指示に従って行動する。左右に展開する戦闘機隊。ネウロイは坂本、優人に向かって、下面からビームを放つ。二人は集中砲火を交わしながら上昇し、敵の上をとる。

「上ががら空きだ！」

坂本は眼帯を外し、ネウロイを見下ろす。普段は眼帯で隠しているが、坂本の右目はネウロイのコアを見つけ出すことが出来る魔眼だ。坂本がコアを探し始めると、ネウロイの上面が赤く輝く、ビームを撃ってきたのだ。

「坂本！」

優人は叫ぶと坂本の前に出てシールドを張り、彼女を守る。

「大丈夫か？」

「ああ」

自分を心配する優人に坂本が答え、再びネウロイへ目を向ける。

「まるでハリネズミだ。コアがどこにあるかも落ち落ち調べられん」

「思ったより厄介だな」

優人は舌打ちをした。直後、二人を援護するため戦闘機隊がネウロイに接近し、機銃で攻撃する。

「迂闊に近付くなー」

優人が叫ぶのとほぼ同時に、数機の九九式が撃ち落とされる。パイロット達はどうか脱出したようだ。

「言わんこつちやない……」

優人は顔をしかめる。ウィッチやウイザードのストライカーユニットよりも大型かつ旋回性能で劣り、シールドも張れない戦闘機で大型ネウロイに挑むのはあまりに無謀だ。それでなくても、九九式艦上戦闘機の武装は対ネウロイ戦に使うには貧弱だ。

「コアは我々に任せて、お前達は後方支援を！」

坂本は戦闘機隊に命じた。

「坂本！俺が奴を引き付けるから、その隙にコアを探してくれ！」

「わかった、頼むー」

優人の進言を受け、坂本は彼に囿役を任せることにした。危険な役割だが、坂本は優人のことを信頼している、彼ならば大丈夫だと。優人はネウロイに接近し、13mm機関銃を撃ち込む。ネウロイは自分を攻撃してきた優人に狙いを絞り、多数のビームを撃ち込んでくる。

（よし！食い付いた！）

優人は笑みを浮かべ、ビームを回避しながら射撃を続けた。その間、坂本は魔眼でコアを探している。優人が引き付けいるお陰で、落ち着いて探せるのだ。

（きつい猛攻だな。だが……）

（私がコアを見つければ！）

二人がそう思った瞬間、複数の閃光が見えた。目をやると、後方支援を行っていた戦闘機隊が全機撃ち落とされていた。ネウロイにやられたらしい、しかし目の前のネウロイは二人が相手をしている。

「まさか!？」

坂本がそう呟いた瞬間、彼女に複数のビームが向かってきた。反射的にシールドを張る坂本、そしてビームのきた方向を見る。そこには最初に現れた個体と同形状のネウロイがもう一体いたのだ。

「もう一体だど!?」

「きついな……」

二人に驚く暇も与えず、二体のネウロイはそれぞれ優人、坂本に向かってビームを放つ。シールドを張って防御する二人、そのまま一対一の戦闘となった。

◇ ◇ ◇

「二人とも……戦っているんだ」

呟く芳佳。彼女は医務室の窓から外の戦況を眺めていた。兄と兄の友人がネウロイを相手に赤城や艦隊を守るため戦っているのに芳佳は何もできずにいる。

（私は何も出来ないの?。私だって……お兄ちゃんを、坂本さんを……みんなを助けたい）

薄暗い医務室の中で俯く芳佳。その時、カチャカチャという音が芳佳の耳に入った。音がした方へ目をやると、机の上で医薬品の入っている瓶が艦の振動によりぶつかり合って音を立てていた。机には他にも包帯、ガーゼ等が並んでいる。

（私は戦えないけど……これなら!）

芳佳は決意し、診察台から立ち上がった。

第6話「無力な妹」

「くそっ!」

優人はビームを回避しながら13mm機関銃で報復を見舞う。しかし、ネウロイは優人がダメージを与える度に自己修復を行う。

「こんなデカイだけのエイ……コアさえ潰せば……」

優人は坂本をチラッと見た。彼女もビームの猛攻に圧され、コアを探すことが出来ない。

先程、赤城の艦橋から二人に連絡があった。ブリタニアの基地から第501統合戦闘航空団の仲間達が発進したとのこと。ひとりひとりがエース級の実力を持つ、仲間くればネウロイも倒せるだろう。それまで自分達が、艦隊が保つか。

「いや、保たせる!」

優人は首を横に振り、弱気な考えを振り払う。仲間がくるまでなんとしても艦隊を守らなければならない。旗艦の赤城には自分の妹が、芳佳がいる。妹を、艦隊を絶対に守るんだ。優人はそう決意すると13mm機関銃を再び構える。その時だった。

「お兄ちゃん!坂本さん!」

「えっ?」

聞き覚えのある声がインカムに入り、優人は間の抜けた声を出す。その声に優人より赤城に近い位置にいる坂本も反応し、甲板を見下ろした。そこには大量の薬瓶や包帯を詰め込んだ救護袋を持った芳佳がいた。坂本は芳佳に向かって怒鳴った。

「そこで何をしている!?!」

「坂本? どうした?」

「お前の妹が甲板にいるんだ!」

「なに!?!」

医務室にいるように言っただけの芳佳が甲板にいることを知り、当惑する優人。彼は甲板にいる芳佳の姿を自分の目で確認するとすぐに芳佳のインカムへ通信を入れる。

「芳佳! 部屋から出るなと言っただろ! 戻れ!」

「お兄ちゃん、よかった。坂本さんも無事ですな」

普段温厚な兄の怒鳴り声に芳佳はびくつとしますが、二人が無事だと知ると安堵する。

「芳佳! 戻れって言ってるだろ!」

「わ、私も……私に出来ることがしたいの!」

再度怒鳴る優人に自分の想いを訴える芳佳。

「今はお前に出来ることなんてない! 言うこと聞け!」

優人は一層強く怒鳴る、まるで親が子どもを叱りつけるような言い方だ。優人が芳佳に気を取られているとネウロイが彼に向かって向かってビームの雨を降らす。優人は咄嗟にシールドを張るが、防ぐことが出来なかった一発が右腕を霞めた。

「ぐっ！」

腕に痛みが走り、優人は顔を歪める。

「お兄ちゃん？お兄ちゃん!!」

「大丈夫だよ！いいからお前は医務室に戻ってろ！」

それだけ言うと、優人は芳佳との通信を切った。

「大丈夫か？」

再びインカムから声が聞こえてきた。今度は優人の身を案じる坂本の声だ。

「ああ、問題ない」

戦友に心配を掛けまいとする優人。実際、戦闘継続に支障はなさそうだ。

「それにしても、お前の妹は無茶なやつだ」

「ホントだよ！」

苛立った声で返す優人。彼は芳佳に対して怒っているというよりは心配で仕方ないのだ。今いるのは死と隣り合わせの戦場、妹には自分で自分の身を守る術がない。芳佳にもしものことがあるば——。

「だが、あの勇氣は大したことものだ。やはり兄妹だな、ああいうところは誰かにそつくりだ」

坂本は笑みを浮かべながら言う。彼女の言葉に優人は眉をひそめた。下では轟音と共に大きな水柱が上がっていた。駆逐艦が『浜風』がネウロイの攻撃で撃沈したのだ。

「お前の相手は、こつちだ！」

坂本は叫ぶ。連続発砲により銃身が赤熱化していた13m機関銃を捨て、扶桑刀を抜くとネウロイに斬りかかる。一閃、ネウロイの右翼が切り裂かれる。

「坂本さん……すごい……」

坂本の戦いに圧倒され、甲板の芳佳は呟いた。ネウロイは坂本の攻撃に一瞬怯みながらもすぐに再生していく。

「今だ！」

その一瞬を逃す坂本ではない。彼女は反転しながら、魔眼を開いてネウロイを見る。「見つけた！」

とうとうコアの位置を掴んだ坂本。すぐに優人に知らせる。

「優人！ 奴らのコアは上部中央付近だ！」

「了解！」

優人はコアの位置に照準を合わせる。ネウロイはそうはさせまいと言わんばかりに、

優人へ向かってビームを連射した。

「お兄ちゃん！」

兄の危機に芳佳は思わず叫ぶ。直後、彼女の背後で爆発が起きた。振り返ると、機銃のひとつが煙を上げていた。消火器を抱えた乗員が走り回っている。

「怪我人だ！衛生兵！」

衛生兵を呼ぶ声にハツとなり、芳佳は負傷者の元へと駆け寄った。負傷者は腹部から出血していた。甲板に仰向けで横たわり、左手で傷口を押さえ、苦しそうに唸っている。「しっかりとしてください！私が助けますから！」

そう言うとき芳佳は両手を傷口にかざし、治癒魔法を使った。傷口が光に包まれる。

芳佳は優人と再会した日のことを思い出していた。あの日、事故で重傷を負った親友、美千子。彼女のことを自分の力で救うことが出来なかった。その場に居合わせた優人、坂本によってどうにか美千子は助かった。

（今度こそ……今度こそ……）

芳佳は今度こそ自分の力で救いたかった。しかし、美千子の時同様、力をうまく制御出来ず、治癒魔法はまともに働いていない。

「何してる！やめろ！」

衛生兵が芳佳と負傷者の間に入ってき

「私、治癒魔法が使えるんです！」

「あんたウィッチか？だが、これだったら俺が治療した方がマシだ！余計なことするな！」

そう言われ、芳佳の手から治癒魔法の光が消える。芳佳は必死の表情で衛生兵に訴えた。

「でも、私にも何か手伝わせてください！」

「無茶言うな！ここはお前みたいなお子どもの居る場所じゃないんだ！部屋で大人しくしていろ！」

衛生兵はキツイ言い方をする。だが、それは負傷者を助けない、子どもを危険な場所に居させたくないという思いゆえの言葉だ。

「嫌です！そんなの嫌なんです！」

涙目になりながら、激しく首を振る芳佳。自分だって誰かを救いたい、それが芳佳の思いだ。

衛生兵は少し迷ったものの、芳佳の気持ちを汲んで彼女に手伝いをさせることにした。

「……だったら、包帯が足りない……あるだけかき集めて持ってきてくれ」

「は、はい！」

芳佳は救護袋を持ち、医務室へ走った。



空では優人や坂本の奮戦もむなしく遣欧艦隊の被害は拡大していく。既に艦隊は赤城と駆逐艦『谷風』『雪風』『天津風』の4隻、ネウロイ襲撃前の半数となっている。

「戦闘機隊！坂本少佐と宮藤大尉を残して全滅！」

赤城の艦橋に新たな被害報告が入る。迎撃に出た九九式戦闘機が全機撃墜されたのだ。

「くそっ！」

杉田は悔しさのあまり拳をパネルに叩きつける。杉田のすぐ後に立っていた赤坂も額から冷や汗を流している。

「援軍はどうした!?ブリタニアのウィッチ隊はまだ来んのか!?!」

杉田がそう叫んだ直後、赤城が大きく揺れた。

「至近弾！このままでは航行不能になります！」

「——っ！援軍の到着まで、なんとかしても保たせるんだ！」

厳しい戦況の中、杉田は祈るように命じた。



ネウロイの攻撃で赤城は激しく揺れ、艦内各所の絶叫が伝声管から伝わってくる。芳佳はあまりの揺れに立ち上がることが出来ず、艦内の通路にペタリと座り込んでしまっている。先程の至近弾を受けた時の大きな揺れで、集めた大量の包帯が救護袋から零れ落ち、転がって通路に多数の白いラインを描いていた。

衛生兵や優人に言われた言葉が芳佳の脳裏に浮かんでくる。

——ここはお前みたいな子どもの居る場所じゃないんだ！

——今はお前に出来ることなんてない！

芳佳は壁に手をつけてゆっくり立ち上がる。

「私に出来ることなんて……何もないのかな？」

芳佳は俯き、力なく呟く。その時、ネウロイのビームが赤城を直撃した。



ネウロイのビームが赤城に直撃した。甲板には穴が空き、内部で誘爆が起きる。凄ま

じい衝撃が、赤城全体に伝わる。

「しまった!」

「芳佳!」

坂本と優人は赤城を見下ろす。妹がいる艦がネウロイの攻撃を受け、黒煙を上げていく。優人の顔は一気に青ざめた。

「芳佳! 芳佳! 聞こえるか? 芳佳!」

インカムで芳佳に呼び掛ける。しかし、返事がない。優人は再度呼び掛ける。

「芳佳! 芳佳! 頼む、返事してくれ! 芳佳」

そうしている間にも、目の前のネウロイはビームを撃ってくる。

「今はお前に構ってる暇は無いんだよ!」

優人はシールドでビームを弾き、怒鳴りながら13mm機関銃を乱射する。彼の劍幕に圧されでもしたのだろうか? ネウロイは一旦、優人と距離をとった。

「芳佳! 芳佳!」

優人は最愛の妹の名を呼び続けた。



赤城の格納庫、通路へ続く扉が先程の衝撃で開いている。その扉の側に芳佳は倒れていた。

「芳佳！芳佳！芳佳！」

(…………お兄ちゃん…………?)

芳佳はインカムから聞こえてくる声が兄のものだと理解した。しかし、今の芳佳には返事をするどころか、瞼を開ける気力もなかった。

「芳佳！芳佳！」

朦朧としている意識の中、自分を呼ぶ声が兄とは別の人間ものに変わっていく。

(この声…………お父さん?)

「……………よしか……………芳佳……………芳佳」

(ごめんなさい、お父さん……………私、何も出来ない……………お兄ちゃんみたいに誰かを守れない)

自分の名を呼ぶ父の声に対し、自身の不甲斐なさを詫びる芳佳。すると、瞼の裏にある光景が浮かんできた、8年前に父を送り出した時のものだ。

——芳佳……………お前にはお母さんやおばあちゃん、お兄ちゃんに負けない大きな力がある。その力でみんなを守るような立派な人になりなさい。

あの日、父に言われた言葉が聞こえきた。

(お父さん……)

幻聴か何かだろうが、久々に聞いた父の声は芳佳にとって、とても心地良かった。

「芳佳!!」

「!」

再び優人の声が聞こえ、芳佳は大きく瞳を開いた。身体を起こして前を見ると、ストライカーユニットが置いてあった。それは横須賀を出航する前、優人が見せてくれた父の写真に写っていたものと同型のストライカーユニット、零式艦上戦闘脚だ。芳佳は立ち上がり、ユニットへ近づいた。

「私に……出来ること……」

芳佳は手でユニットを撫でながら呟いた。



同時刻、赤城の艦橋。

「駆逐艦『谷風』に直撃! 応答ありません!」

また被害報告が上がる。遣欧艦隊の被害は限界に近付いていた。

(この戦力差ではどうにもならんか……)

赤坂は奥歯を噛み締める。杉田は軍帽を深く被り直しながら、赤坂に進言する。

「長官、もうこの辺りでよろしいかと思います」

「……そうだな。総員退艦！雪風と天津風に乗員の救助を打電！」

赤坂が命じた時だった。

「どうした!?!何が起きている!?!」

樽宮が甲板の異変が起きていることに気付く。

「どうした?」

杉田が尋ねる。

「中央エレベーターが作動中！誰かいます！」

「何!?!」

杉田が甲板に視線を落とす、赤坂も彼に続いて甲板に目をやる。何者かがエレベーターで上がってくるのが見えた。

第7話「妹の決意」

「くそっ！何で返事が無いんだよ！」

空では優人が苛立っていた。芳佳から返事が返ってこない。優人はすぐにでも芳佳の元へ向かいたかったが坂本ひとりにネウロイ二体の相手をさせるわけにいかず、応戦しながらインカムで呼び掛けを続けていた。

「芳佳……無事でいてくれ……」

優人祈るように呟きながら、もう一度赤城を見下ろした。

「……なんだ？」

優人はあることに気付いた。赤城の中央エレベーターが作動している。甲板に何かが上がってくる。それはひとりの少女だった。使い魔と一体化した証である耳と尻尾、背中に13mm機関銃を背負い、足には零式艦上戦闘脚二二型甲を履いている。

「芳佳!？」

優人は驚きの声を上げる。エレベーターで上がって来たのはユニットを履き、決意の表情で空を見上げている芳佳だった。驚いているのは優人だけではない。艦橋の面々も同じだ。

「誰だあれは!? 何故ストライカーを装備出来る!？」

驚く杉田に樽宮が説明する。

「坂本少佐が連れてきた少女です。名前は……」

「宮藤芳佳さん、宮藤優人大尉の妹さんだ」

と赤坂。艦隊司令官という立場故か、彼は二人よりも冷静である。

「大尉の!? では彼女も宮藤博士の!？」

芳佳の素性を知り、杉田は息を呑む。優人はインカムを使い、ストライカーを履いて甲板に上がってきた芳佳に呼び掛ける。

「芳佳! 何やってる!?! 何でストライカーを履いてるんだ!?!」

「お兄ちゃん、私も戦う! 艦を……みんなを守るために!」

優人の問い掛けに答える芳佳。彼女は素人の身でネウロイと戦うつもりだ。戦争嫌いで坂本からの入隊も断り続けていた彼女が艦隊のみんなを守るために自ら戦場へ臨もうとしている。

「よせ! 訓練もしたことがないお前じゃネウロイと戦えない! 大人しく艦内に……」

「お願い、やらせてお兄ちゃん! 私はみんなを守りたいの! お父さんとの約束を果たしたいの!」

止めようとする兄に自分の気持ちを訴える妹。決意のこもった力強い声。その声を

聞き、優人は芳佳に昔の自分を重ねた。人々を守るため戦うと誓った昔の自分に――。

「わかった、やってみろ！俺とお前と坂本でみんなを守るぞ！」

「うん！」

芳佳は力強く頷くと、すぐにユニットへ魔法力を注ぎ込む。魔導エンジンが始動し、足元に巨大な魔法陣が現れる。

「あれは？」

坂本も芳佳の展開した魔方陣に気付き、赤城の甲板に目を向ける。

「危険だ！止めさせろ！」

杉田が芳佳の飛行を制止しようとする。芳佳はウィッチではあるが軍属ではなく、あくまで客人として赤城に乗り込んでいた。そんな少女をネウロイと戦わせる訳にはいかない。

「杉田艦長、甲板員に発艦を指示させろ」

「長官?! やらせるおつもりですか!？」

赤坂の言葉に耳を疑う杉田。しかし、このままではブリタニアのウィッチ隊が来る前に艦隊は壊滅してしまう。状況を打破するには芳佳のウィッチとしての才能に賭けるしかない。赤坂はそう考え、彼女にすべてを委ねるつもりだ。

「行きますー！」

甲板員の合図を確認すると芳佳は発進し、滑走路を滑る。しかし、またもやネウロイのビームが赤城を襲う。それによって引き起こされた爆発、振動で芳佳の体勢が崩れる。

芳佳はどうにか持ち直すが甲板を出た瞬間、海面へと落下していく。

「飛んでえええええ!!」

必死に飛ぼうとする芳佳。

「飛べえええええええ!! 芳佳ああああ!!」

優人が叫ぶ。それに応えるように芳佳は着水寸前で水飛沫をあげながら上昇を始めた。ぎゅつと瞑っていた目を開くと、芳佳は自分が飛べたことに気付いた。

「飛べた? 飛べたああああ!!」

芳佳は両手を振り、歓喜の声を上げる。

「本当に飛んだ、訓練もしないで……」

「なんてやつだ。初めてストライカーを履いたというのに……」

優人と坂本は感嘆の声を漏らす。芳佳はそのまま坂本の方へ飛んでいく。

「坂本さああああん!!」

「おいーどこへいく?」

速度を落とせないのか、坂本の横を通過していく。

「私、手伝いまゝす！」

離れたところから叫ぶ芳佳。すると、坂本と戦っていたネウロイが標的を芳佳に変え、集中放火を放つ。

「きゃあああああ！」

芳佳は悲鳴をあげてながら巨大なシールドを張る。ネウロイの攻撃は完全に防がれた。

「あのシールド……さすが俺の妹だ」

妹が展開したシールド見て誇らしげな優人。坂本が芳佳へ近付いていく。どうやら、あちらのネウロイは坂本の指示の元、二人で倒すつもりらしい。

「頑張れ芳佳。坂本、芳佳を頼む！」

先程の初飛行、巨大なシールド、優人の心にあつた心配は期待へと変わっていた。それに坂本ならば芳佳の力を上手く引き出せるはずだ。

優人は自分が相手をしていたネウロイに改めて向き直った。このネウロイは芳佳が飛び立つ際に赤城を攻撃していた。

「よくも妹の初飛行を邪魔してくれたな」

優人はネウロイを睨み付けた。妹を攻撃されたことで彼の怒りは頂点に達している。

優人は魔法力をありつたけ込めた巨大なシールドを展開する。大きさは芳佳と同等

だ。

「覚悟しろー！」

優人はそのままネウロイ目掛けて突撃した。ネウロイは巨大なビームを打ち込むも速度が僅かに落ちるだけで優人は止まらない。

さらに優人がネウロイの目の前まで近付くと突如装甲が凍りついた。魔法力を冷気として放出する優人の固有魔法『凍結』だ。冷却されたことによつて強度の低下した装甲をシールドを活かした体当たりでぶち破り、コアを破壊した。ネウロイは白い破片となつて四散する。

「はあはあ……撃墜……」

優人の呼吸は乱れていた。火力の高い敵との戦いと固有魔法の使用。優人はかなり消耗していた。

「芳佳……坂本……」

優人は妹と戦友のいる方へ向かっていった。

◇ ◇ ◇

坂本は自らを囿にし、その隙に芳佳にコアを狙うように指示した。しかし、芳佳が銃

を構え、照準を合わせているとネウロイの集中放火による妨害を受けてしまい、一旦下がらる芳佳。

「大丈夫か？」

駆け寄ってきた坂本が芳佳の身を案じる。

「はい、すいません。でも大丈夫です」

とは言っているものの、芳佳の呼吸が乱れていた。初めての飛行と実戦で彼女の体力はそろそろ限界だ。

「もう一度、お願いします」

「わかった。気を引き締めろ、最後のチャンスだ！」

「はい！」

坂本はビームを引き付けるため、再びネウロイに接近していく。

(さつきと同じこととしても、またやられちゃう。どうすれば……)

芳佳はビームを避ける方法を懸命に考える。すると、坂本の動きが目に入る。彼女はネウロイの表面スレスレを飛んでいた。

「そうか！」

芳佳はネウロイに接近し、坂本と同じく、表面スレスレを飛ぶ。ネウロイは芳佳を撃ち落とそうとするが、ビームの死角に入った彼女には当たらない。

(しつかりしろ、宮藤芳佳！私がやるんだ！私がみんなを守るんだ！)

芳佳は機関銃を構え、坂本に教えられたコアのある部分を撃った。装甲が剥がれ、コアが露出した。

「あれがコア!？」

芳佳は身体を反転させ、コアを狙おうとする。しかし、コアとの距離は開いていく。

(ダメ……もう……)

芳佳の身体は限界を迎え、引き金にかけた指にも力が入らない。

「お兄ちゃん……」

助けを求めるように優人を呼ぶ芳佳。

「よく頑張った！偉いぞ！」

直後、インカムから声が聞こえた。同時にコアへ十数発の銃弾が命中する。コアを失い、ネウロイは四散した。

「……終わった……のかな？」

降り注ぐネウロイの破片の中、芳佳は気を失う。ストライカーの魔導エンジンは止まり、海へ落下しそうなところを坂本に抱き止められる。

「芳佳！」

優人は慌てて妹へ駆け寄る。先程、コアを撃ったのは彼だ。

「落ち着け。疲れて気を失っているだけだ。」

「そうか。よかった」

坂本の言葉に胸を撫で下ろす優人。

「まったく、お前の妹は大したやつだ」

坂本は腕の中の芳佳は見て微笑む。

「芳佳。本当に頑張ったな」

優人は芳佳の健闘を称え、頭を撫でてやる。

「ん？あれ？」

「気がついたか？」

目を覚ました芳佳に坂本が声を掛ける。

「坂本さん……お兄ちゃんも……」

芳佳は二人の姿を確認する。

「みんなが助かった。お前が頑張ったからだよ」

優人は芳佳に優しく微笑む。

「でも、私……また最後に失敗したし」

「あそこまでやれたら上出来だ。見てみる」

そう言つて坂本は下を指差す。赤城の甲板、艦橋、そして海上の救命ボートから乗員

たちが芳佳たちに手を振っている。

「お前が守った人達だよ」

優人の言葉を聞いて、嬉しさのあまり芳佳は涙を流した。

（お前の子どもたちは空が似合うな）

赤坂は盟友の顔を脳裏に浮かべながら空の宮藤兄妹に向かって微笑み、手を振る。

◇ ◇ ◇

雪風、天津風を除いた陽炎型駆逐艦5隻撃沈、空母赤城中破という甚大な被害を出しながらも遣欧艦隊はブリタニアへと辿り着いた。

幸いにも赤城の乗員と501への補給物資は無事であり、ブリタニアには食糧艦『間宮』と共に工作艦『明石』が派遣されている。扶桑から遠く離れた欧州でも艦艇の修理は十分可能だ。

優人と芳佳は坂本と共に軍手配の車で父からの手紙にあつた住所へ向かった。やがて、車は田舎町に入る。のどかな風景は宮藤兄妹の故郷、横須賀とどこか似ている。しばらくして、優人と芳佳は石の土台だけ残して消失した廃墟は到着する。

「……この手紙にあつた場所？」

芳佳は父の手紙を大事そうに持ちながら呟く。

「ああ。宮藤博士は5年前までここでストライカーユニットの開発をしてたんだ……あの事故の日も」

坂本がそう説明すると手紙を握った芳佳の手が下がっていく。もし父が生きていて、今もブリタニアにいるなら優人や坂本が知らないはずがない。少し考えればわかることだった。

「芳佳」

「お兄ちゃん……お兄ちゃんと坂本さんは知ってたの？」

芳佳は優人に尋ねる。顔は見えないが彼女がどんな表情をしているか、兄の優人には容易に想像できる。優人は強い罪悪感を覚えた。

父の手紙が今頃来たのは検閲によるトラブルであることは容易に想像できたものの、芳佳と同じく父を慕っていた優人は生存を期待した。その結果、妹にぬか喜びをさせ、父を失った悲しみを再び向き合わせる事となってしまうた。

「ごめんな」

「済まん」

短い沈黙の後に二人が謝る。

「ううん、謝らないで。私の方こそ我儘言っでごめんなさい」

芳佳は振り返り、首を左右に振る。

「坂本さん、ここまで連れてきてくれてありがとうございます」

微笑みながら言う芳佳。二人には芳佳が無理をしているのだと、すぐにわかった。

三人は研究所の廃墟を去り、父の墓がある墓地を目指した。

「私達も、かつては博士とここで過ごししてたんだ。その手紙もやはり、その頃に出されたんだろう」

坂本は目的地向かって歩きながら語った。

「お父さんって、いつも間が悪いんですよ」

父の墓の前に辿り着くと、芳佳が口を開いた。

「私の小学校の入学の日に出ていって、死んだ知らせが届いたのは10歳の誕生日。今頃になって突然手紙が届いて、もしかしたら思って思ったけど……親子なのに縁がないのかな？」

墓標を撫でながら切なそうに言う芳佳。すると、扶桑語で文字が刻まれていることに気が付いた。

「その力を多くの人を守るために」

優人は墓標の文字を読み上げた。その言葉は父が自分達兄妹によく言い聞かせていた言葉だ。

「……父さんは欧州でも口癖の様に言っていたよ。ストライカーユニットもそんな父さんの想いから生まれたんだ」

優人が懐かしむように言う。すると、芳佳の肩が震えだした。

「……坂本、外してくれ」

「わかった」

優人に言われ、何かを察してた坂本は踵を返し、宮藤兄妹から離れていく。

「——っ！」

「ん!? 芳佳?」

堪えきれなくなったらしい、坂本がいなくなると芳佳は優人の胸に飛び込んできた。

「ごめん……少しだけここのままでいさせて、お願い……」

芳佳は震える手で優人の服を握り締めながら言う。優人はそんな芳佳を優しく抱き締めた。

「う、うあああああああああああ!」

思いが溢れたように芳佳は声を上げて泣き出した。優人は芳佳がすべて吐き出すまで妹を抱き締め、頭を撫で続けた。

◇
◇
◇

「落ち着いた？」

「うん、ありがとう」

空が茜色に染まる頃になって、ようやく落ち着いた芳佳。いっぱい泣いてすつきりしたようだが、目が腫れてしまっている。

「そろそろ行くか？」

坂本が二人のところに戻ってきた。

「はい」

芳佳の返事を聞き、優人と坂本が車へ戻ろうとすると芳佳が声を掛けてきた。

「あ、あの。お兄ちゃん、坂本さん……私をストライクウィッチーズに入れてください

!!」

「……何!？」

散々入隊を断られていた芳佳からの志願に坂本は面食らう。

「え？お前、入隊はしないって……」

優人も同様だ。

「ここに残って私の力を役立てたい、もつとたくさんの人達を守る為に……きっとお父さんもそう願ってると思うから」

芳佳はもう一度、父の墓標に目をやる。その目には決意の光が灯っていた。

「そうか」

芳佳の志願とその動機に感激し、坂本の表情が段々と笑顔になっていく。

「よし！わかった！あとは私に任せろ！一人前のウィッチになれるようビシビシ鍛えてやるからな！覚悟しているよ！」

「はい！」

芳佳の返事を聞くと坂本は高笑いをする。その笑いはいつもより豪快かつ上機嫌だ。

「まったく……父さんを出すなんて卑怯だぞ」

反対出来ないじゃないか、と不満気を言いつつも優人は笑顔だ。

「じゃあ、一緒に頑張ろうか！」

「お兄ちゃん……うん!!」

芳佳で笑顔で、そして力強く頷いた。

第8話 「妹の入隊、兄の左遷（？）」

「あれ？」

まだ空が薄暗い中、寝間着の芳佳が目を覚ますといつもと違う天井が見えた。見慣れている実家のものより高く、部屋の様式も違う。芳佳は身体を起こした。自分が寝ていたのも、使いなれた布団ではなく、見慣れないベッドだと気付く。まだ完全に目覚めていないのか、瞳は眠たそうな半開きである。

ベッドの隣にある窓からはこれまた見慣れない風景が見えて、芳佳は驚く。景色をよく見ようと窓の方へと近寄った。時間はまだ早朝、空はまだ薄暗い。

「そうだ。私、ウィッチーズ隊に入ったんだ」

芳佳は窓の外に広がるブリタニアの景色を見ながら呟く。今、芳佳がいるのはブリタニア本当から突き出た半島にあるストライクウィッチーズ基地だ。

「坂本さん？」

岬の突端に坂本がいることに気が付く。日課の鍛錬をしているらしい。これから世話になる相手、芳佳は改めて挨拶しに行こうと思ひ、制服に着替えて部屋を出る。

芳佳が岬の突端にまでやって来ると窓から見たのとように坂本が鍛錬に励んでいた。

幼少からの鍛練と実戦により、洗練された彼女の剣技は美しく。背筋を凜と伸ばし、ポニーテールに纏められた髪を揺らしながら愛刀を振るう姿はまさに扶桑の「サムライ」。本人が意識しているかは不明だが、構えた刀の切っ先が欧州へ向けられている。「芳佳か？昨日はよく眠れたか？」

芳佳の気配に気付いた坂本が振り返る。

「はい。えーつと、坂本……少佐はこんな時間から朝練ですか？」

「はっはっはっはっ！お前と私は海軍だから『少佐』は付けなくていいぞ。もちろん、優人にもな」

「はい！坂本……さん」

「それでいい！ここは最前線だからな。常に敵に備え、訓練の出来る時は少しでもやっておく、それが生き残る秘訣だ」

「最前線……ですか……」

最前線という言葉聞いて、芳佳は不安げな表情になる。

「はっはっはっは！そんな顔をするな、お前には素質がある。私が見つちり教えてやるから安心しろ」

「よろしくお願いします！」

坂本から激励によって、芳佳の顔から不安が拭い去られた。挨拶が終わったところで

芳佳はずっと気になっていたこと訊くことにした。

「あ、あの……ひとつ聞きたいことが」

「ん？なんだ？」

もじもじしている芳佳を見て、坂本は首を傾げる。

「お兄ちゃんと坂本さんは……その……」

「私と優人が？」

「恋人……なんですか？……」

「……………」

予想外の質問に坂本は目を点にしたが、すぐに笑って返してきた。

「はっはっはっはっ！いや、優人とは善き戦友だがそういった関係ではないぞ」

「そうですか！」

優人と坂本が男女の関係でなかったことがわかり、安心する芳佳。

「私はお前の兄を取ったりしないから安心しろ」

と、からかうように言う坂本。

「えっ!?!いや、その、はい……」

「俺がどうしたって？」

「ひゃああああ!!」

頬を染めていると突然後ろから声を掛けられ、芳佳は飛び上がる。

「お、お兄ちゃん?なんでここに?」

聞き覚えのある声に振り向くとそこには優人がいた。

「なんでつて?もうすぐブリーフィングが始まるからお前達を探しにきたんだよ。ところで何の話をしてたんだ?」

「なんでもない!なんでもない!なんでもないんだから!!」

手をぶんぶんと振りながら、必死に誤魔化す芳佳。頬をだけでなく、顔全体が赤くなっていた。

「そうか?……」

「はっはっはっはっ!」

優人は首を傾げ、坂本は高笑いする。そんな三人の様子をを宿舎の一室から望遠鏡で見てる人物が一人。

「さ、坂本少佐と……き、兄妹揃って仲良くして。なんなの一体!」

自由ガリア空軍、ペリーヌ・クロステルマン中尉である。彼女は自分が敬愛する坂本と兄妹揃って親しい二人に激しく嫉妬していた。

ちなみにペリーヌは坂本の鍛練を終始部屋から望遠鏡を使って見ていた。軽いストーカー行為ではあるが彼女は自由ガリア空軍のトップエースだ。目を瞑っておこう。



しばらくして、優人がブリーフィングルームへ来ると501のウィッチ達が既に集まっていた。まもなく、新人である芳佳の紹介が行われる。

皆が席に着きそれぞれの待ち方で待っている。サーニャは机に突っ伏して、枕を抱いて眠っている。昨晚、夜間哨戒をしていたから眠いのだろう。ルツキーニも寝て

いる、しかも机の上に毛布を敷いて堂々と。ルツキーニは昼寝好きだ、基地のあちこちに寝床を作り、毎日のように昼寝をしている。夜も自室ではなく、それらで寝ていることが圧倒的に多い。

(寝る子は育つって言うけどな……)

寝ているルツキーニを見ながら優人は苦笑いを浮かべる。

「よっ！久しぶりだな優人」

と頭の後ろで手を組んでいるシャーリーが優人に声を掛けてきた。

「シャーリー、久しぶり」

「聞いたぞ、新人はお前の妹なんだってな？」

興味津々のシャーリー。新人が優人の妹だということは既に基地全体に知れ渡って

いる。

「ああ、まさか坂本が妹をスカウトするとは思わなかったよ」

「嬉しそうだな、このシスコン！」

「うるさいな……」

シャーリーののからかいに眉をひそめる優人。自覚はしているものの、他人から言われるのは嫌らしい。

シャーリーとの会話が終わると最前列で愛刀を手にかけている坂本の隣に座った。後ろの席にはペリーヌが座っている、優人が席に座った途端に彼女からプレツシャーを感じたのは気のせいではないだろう。

「優人おひさ〜！」

また誰かに声を掛けられ、優人は声が出た方へ目をやる。

「ああ、久しぶりハルトマン」

優人は声の主に挨拶を返す。彼に声を掛けたのはハルトマン、離れた席から優人に手を振っている。隣にはバルクホルンが座っている。

「バルクホルンも久しぶり」

「ああ」

優人はバルクホルンにも挨拶するが彼女からは相変わらず素っ気無い返事が返って

きた。

(俺なんか嫌われることしたか?)

バルクホルンと話す度に優人は同じことを考える。しかし、心当たりは何もない。優人は溜め息を吐くとハルトマンに向き直った。

「聞いたぞ、俺達が留守の間に撃墜数が200機になったそうだな。すごいじゃないか！」

「でしよ〜?もつと褒めてくれてもいいんだよ?」

優人から賞賛され、えへんと誇らしげに胸を張るハルトマン。

「さすがは501Wエースのひとりだな!バルクホルン共々、頼りにしてる」

「じゃあ、そのエースにお菓子恵んで!」

「調子に乗るな」

優人に一蹴され、ハルトマンは膨れっ面で不平を言う。

「えええ〜!優人のケチ〜!お菓子頂戴!お菓子お菓子お菓子!!」

「あくあく!なあんにも聞こえないなあ!」

優人は両耳を塞ぎ、わざとらしく聞こえないふりをする。少し意地が悪い。

「ハルトマン、静かにしろ」

「ちえ〜……」

バルクホルンに注意され、ハルトマンは口を尖らせながらも大人しくなる。そのタイミングを狙ったかのようにミーナが芳佳を連れて部屋に入ってきた。壇上に上がるとミーナが手を叩いた。

「はい皆さん注目。今日から皆さんの仲間になる新人を紹介します」

全員の視線が集まったところでミーナは説明を始めた。

「坂本少佐と宮藤大尉が扶桑皇国から連れてきてくれた、宮藤芳佳さん。宮藤大尉の妹さんよ」

「宮藤芳佳です。よろしくお願いします!」

皆に向かってお辞儀をしながら元気の良い挨拶をする芳佳だが、身体の正面で手がぎゅつと握られているところを見ると緊張しているようだ。

(似てない兄妹だな……)

シャーリーは優人と芳佳を見比べる。確かに二人はあまり似ていないがそういう兄妹もいるだろう、と深くは考えなかった。

「階級は軍曹になるので、同じ階級のリーネさんが面倒見てあげてね」

「あつ、はい……」

ミーナの指示にリーネはどこか浮かない表情で返事をする顔と顔を伏せる。

「はい、じゃあ必要な書類、衣類一式、階級章、識票なんかはここにあるから」

そう言いながらミーナは必要なものが入った木箱を見せた。芳佳はその上に置いてあつた拳銃、ワルサーPPKを見て表情を暗くする。

「あの」

「はい？」

「あの、これは要りません」

芳佳は拳銃をミーナに返す。

「何かの時には持つておいた方がいいわよ」

「使いませんから……」

「そう」

ミーナは少し心配そうな顔をしたが、持つこと拒否する芳佳から拳銃を受け取った。

(そういえば、戦争や銃みたいな人を傷付けるものが嫌いだつたな)

優人は芳佳が武器や戦争に嫌悪感を抱いていることを思い出していた。父の死によつてそれが強くなることは想像に難くない。

「はっはっはっはっ！おかしなやつだな！」

坂本が高笑いする。

「何よきれいごと言つて。ねえ、どう思う？」

「んあ？」

ペリー又は芳佳の行動に毒づき、後ろのルツキーニに問い掛ける。しかし、先程まで寝ていたルツキーニは寝ぼけた反応しかなかったため、ペリー又は痲癩を起こす。

「なによなによー！」

そう言つてブリーフィングが終わつていないのに部屋から出て行つてしまふペリー又。机の上で寝ていたルツキーニといい、普通ならば許されることではないがミーナは苦笑いを浮かべるだけだった。

「あらあら、仕方ないわね。個別の紹介は改めてしましょう……では解散！」

ミーナが表情を引き締めてそう告げると全員が起立、気をつけの姿勢になる。ミーナは全体を見回すと何も言わずに部屋から出ていく。

「ひゃあつ!!」

ミーナが去つた後、キョロキョロしていた芳佳が悲鳴を上げた。ルツキーニが芳佳に飛び付き、胸を揉んでいたのだ。ルツキーニの行為に芳佳は顔を真っ赤にする。

(あれ? ルツキーニはいつの間にあそこに?)

優人は一瞬で壇上に現れたルツキーニと彼女が寝ていた席を交互に見る。

「どうだ?」

「残念賞……」

シャーリーの問い掛けにルツキーニが残念そうに答える。

「リーネはおつきかった」

そう言つてニヤつきながらリーネを見るエイラ、リーネは顔を赤くして恥ずかしそうに俯く。

「あつはははは！私ほどじゃないけどね」

シャーリーは笑いながら自身の豊満な胸を持ち上げる。

芳佳は少し複雑そうな表情で自分の胸を触る。残念賞と言われたのを気にしているようだ。

「私はシャーロット・イエーガー。リベリオン出身で階級は大尉だ。シャーリーって呼んで」

「はい」

右手を差し出ししながら自己紹介をするシャーリー。芳佳が返事と共に握手する。しかし、シャーリーが悪戯で思いつき握り返したため、芳佳は痛みで顔を歪めた。

「あつはははは！食べないと大きくなれないぞ！」

胸を張つて豪快に笑うシャーリー。芳佳は彼女の胸を驚いたように見る。大きくなれないとは胸のことを言っているのか、体格のことを言っているのか、恐らくは前者だろうが。

「つまんな〜い。優人も全然なかったし、兄妹揃つて残念〜」

「だから、俺は男なんだけど……」

シャーリーに抱きつき、彼女の胸に顔を埋めながらぶー垂れるルツキーニ。優人が呆れていると今度はエイラが芳佳に挨拶をした。

「エイラ・イルマタル・ユータイライネン、スオムス空軍少尉。こっちはサーニヤ・リトヴァク、オラーシャ陸軍中尉」

立ったまま眠っているサーニヤを支えながら自分と彼女の自己紹介も代わりに行うエイラ。自分がまだ挨拶をしていないことに気付いたルツキーニも続く。

「あたしはフランチェスカ・ルツキーニ！ロマーニヤ空軍少尉！」

「よ、よろしくお願いします」

律儀にお辞儀をする芳佳。全員の挨拶が終わると坂本が口を開いた。

「よし！自己紹介はそこまで！各自に任務につけ！リーネと宮藤は午後から訓練だ」

「はい！」

芳佳はハキハキと返事をする。

「返事だけはいいな！」

坂本はそう言って微笑むとリーネに向き直る。

「リーネ、新人に基地を案内してくれ」

「……了解」

芳佳とは対照的におずおずと返事をするリーネ。芳佳は改めてリーネに挨拶する。

「私、宮藤芳佳。よろしくね」

「リネット・ビショップです」

挨拶を交わすとリーネが案内を始める。他の隊員達も各々自由行動に移った。

◇ ◇ ◇

501基地内の隊長執務室。そこではミーナと優人の二人がそれぞれの机の上に重ねられている書類を黙々と片付けていた。カリカリカリカリ、と筆を走らせる小さな音が室内に響く。

501部隊の隊長であるミーナはその立場上、毎日のようにデスクワークに追われている。彼女を手伝うことも優人の仕事だ。本来ならば、坂本がやるべきなのだろうが根っからの武人肌である彼女はデスクワーク面ではあまり頼りにならない。

「一息つきましようか？」

書類が半分には達したところでミーナが口を開いた。

「うん……そうする」

グロッキー状態になりつつある優人は力なく返事をする。

「あなたは砂糖とミルクが入った方が好きよね？」

「あ、ありがとう」

優人はプルプル震える手でカップを受け取る。彼はかなりの甘党であり、コーヒーをブラツクで飲むことが出来ない。優人は砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを口に含むと手の震えが止まり顔も笑顔に変わる。疲れているとはいえ、コーヒーマ杯でここまで幸せそうな顔をする人間も珍しい。

「はあ……」

ミーナがコーヒーマカップを片手に溜め息を吐く。単に書類の疲れだけではなさそう
な彼女の表情。

「何かあったのか？」

ミーナの様子が気になった優人はカップを机の上に置くと訊ねた。

「えっ？」

「いや、何か気にかかっているみたいだからさ」

と、優人に訊かれたミーナは言葉に詰まらせるが「いずれ分かることだから言うけど」と話を始めた。

「総司令部の判断であなたは別の部隊へ異動になりそうなのよ」

「異動？どこへだ？」

「ワイト島へよ」

「ワイト島？ワイト島分遣隊か？」

優人は目を丸くする。ワイト島はブリタニア本島南岸に隣接し、501基地の西に位置する小さな島だ。気候は温暖で温泉も湧いているが、それ以外は何もない。配置されているワイト島分遣隊も二線級として扱われている。

「まだ正式な辞令は出ていないから、すぐにではないけれど……」

「おいおい、俺が何をしたって言うんだ？」

納得がいかない優人。彼は基本的には命令や規則を遵守しており、問題という問題を起こしたこともない。上層部の人間に目をつけられる覚えもなく、自身が僻地へ左遷される理由がわからなかった。

「私達の上官、マロニー大將があなた達兄妹の配属に関して、リベリオンのサリヴァン姉妹の件を持ち出したのよ」

「トレヴァー・マロニー、ブリタニア空軍大將」

マロニーの名前を口に出すと同時に不快そうに顔を歪める優人。ミーナもやれやれ、といった感じで溜め息を吐くと詳細を話始めた。

「サリヴァン姉妹のように血を分けた兄妹が同じ部隊に配属されて、兄妹揃って死ぬようなことがあれば連合軍のいい恥さらしだ……とこのことよ」

サリヴァン姉妹。揃って同じ航空ウィッチ部隊に配属され、欧州で戦っていたリベリオンウィッチ5人姉妹のことだ。

彼女達は「姉妹で力を合わせてネウロイと戦いたい」と主張した。

新興国故に慢性的なウィッチ不足に陥っていたリベリオン軍は本人達の希望を受け入れ、姉妹5人を同じ部隊に配属した上で大々的に宣伝した。

この時点では軍上層部の温情による、美談とされていたが、1942年に姉妹が全員戦死したことで裏目に出てしまう。主戦場の欧州から離れていたリベリオンでは反戦意識を抱く国民が少なくなかったために、これらの温情や美談が非難の的となってしまう。

「表向きは……だろ？」

「おそらくは、西部戦線における扶桑の影響力が強くなることを警戒してのことでしょうね」

最前線で戦う自国のウィッチやウィザードの数が多いいほど、その国の発言力が強くなる。

501部隊に参加しているブリタニアウィッチこそリーネだけだが、同部隊の基地がブリタニアに置かれ、補給の大半もブリタニアが担っている。それ故に501部隊の運用や西部戦線に対して強い発言力を持っている。

そして、ブリタニア空軍における実質的最高指導者の立場にあるマロニーにとって、他の国が台頭してくることが面白くないのだ。

「あなたや美緒の上官の赤坂中将は隷下の艦隊や航空ウィッチ隊の欧州派遣に積極的なもの。マロニー大將は目障りに思うでしょうね」

「つまり、とぼつちりか」

「助けてもらったら？」

渋面になっている優人にミーナが提案した。

「赤坂長官にか？」

「お父様の代からの個人的な付き合いがあるんでしょう？何よりストライカーユニット開発という多大な貸しがあるもの、やってくれるわよ」

そう言つてコーヒーを口を含むミーナ。総司令部からの命令と言つてもマロニーの独断ようなものだ。取り消すなら今しかないだろう。

それにどういふわけか最近ネウロイの襲撃が不定期になり始めている。そんな時期に人員が減るのは部隊にとつても痛いことだ。それでなくても、統合戦闘航空団は個人の特異な能力を戦略に組み込んでいるため、一人欠けるだけで部隊全体の能力が大きく変動する可能性がある。補充要員が来ても元に戻せるとは限らない。

「でもな……」

「妹さんを自分の目の届く範囲に置いておきたいでしょ？」

「……直訴してみるかな」

ミーナに痛いところを突かれた優人は少し考えてから決断する。

「私だってあなたにいなくなったら寂しいもの。1人だと書類仕事大変だし……」

「後者の方が本音だろ？」

「あら？そんなことないわよ」

クスクス、と笑いながら自分を見るミーナを優人はジト目で見つめ返した。

第9話 「兄妹とリーネ」

芳佳の入隊して数日。坂本とミーナが地上から芳佳とリーネの飛行訓練を見ていた。そこへ優人が遅れてやってくる。

「うちの妹が世話になってます。ミーナ中佐、坂本少佐」

優人はおどけた口調で話掛けると、二人の間に立った。

「書類はもういいのか？」

坂本が優人に訊く。

「今日の分は終わったよ」

「お疲れ様」

ミーナは一仕事終えた優人を笑顔で労う。優人はミーナに向かって頷くと空に視線を移した。

「中々上達しないわね」

ミーナは芳佳の飛行を見て呟く。初飛行で赤城を救うほどの大活躍が嘘に思えるほど、不安定な飛行で今にも墜落してきそうだ。

「魔法力は高いんだが、コントロールが出来ていないんだ、あいつは」

芳佳の現状を簡単に説明する坂本。それを聞いてからミーナはリーネの方へ視線を移した。

「リーネさんは相変わらず訓練ではうまくやれているわね」

坂本と優人もリーネの方に目をやる。芳佳とは違い、彼女は綺麗に飛んでいる。

「実戦で訓練の半分でも出来ればな……」

惜しいな、といった感じの坂本。

「そうねえ。優人、危ないわよ」

「えっ?」

ミーナからの突然の注意。何が危ないのかわからずに間の抜けた声を出す優人。

「おにいちゃくん!どいてええええええええ!!」

「芳佳?……でっ!!」

空を飛んでいたはずの妹の声が背後から聞こえ、優人が振り向こうとした瞬間、背中
に衝撃が走った。コントロールを失い、飛行コースから大幅に外れた芳佳が後ろから
突っ込んで来たのだ。ちなみに坂本とミーナは衝突の直前、優人から一步離れている。

「いたたた……あっ!お兄ちゃん、大丈夫!?!」

ぶつかった兄の心配をする芳佳。彼女はうつ伏せに倒れた優人の上に乗っかっている。

「……………」

優人は何も言わず。いや、痛みで何も言えずピクピク痙攣している。

「訓練中の事故で負傷者1名か」

「優人、大丈夫かしら」

妹の体当たりを受けた優人は坂本の肩を借りて医務室へ運ばれた。

◇ ◇ ◇

夕方。訓練を終えた芳佳とリーネが昨日と同じように滑走路でへばっていた。二人が肩で息をしながら横たわっているとバルクホルンが近づいてきた。

「バルクホルンさん」

肩で息をしながら声を掛けるリーネ。しかし、バルクホルンはリーネを無視して芳佳に目を向けた。

「新人」

「は、はい！」

バルクホルンに声を掛けられ、芳佳は飛び起きる。

「()は最前線だ、即戦力だけが必要とされている。死にたくなければ帰れ」

芳佳を厳しく突き放すバルクホルン。彼女のきつい言葉に芳佳は俯く。

「私もみんなの役に立ちたいと……」

「ネウロイはお前の成長を待ちはしないし、兄の七光りで優秀なウィッチにはなれない」

兄の七光り、その言葉が芳佳の胸に突き刺さる。

「後悔したくなければ、ただ強くなることだ」

バルクホルンは背中を向けて言うと言葉から離れ、基地へと歩いていく。後悔したくなければ、それは彼女の経験から来る言葉でもある。芳佳は何も言い返せず、濡れたような瞳でその背中を見つめることしか出来なかった。



その頃、ロンドンに置かれている連合軍司令部の一室では、二人の男性がソファーに座り、顔を突き合わせていた。

一人は扶桑海軍遣欧艦隊司令長官の赤坂伊知郎中将。もう一人はブリタニア空軍戦闘機軍団司令官で501部隊の上官でもあるトレヴァー・マロニー大將だ。

「私はブリタニアの防衛のために人員を派遣しているだけでしてね。別段、何かを企んでいるわけではないんですよ。どうも、そのあたりを誤解されてるのではないかと思

ましてね」

「私は何も誤解などしていないがね」

赤坂が意向を探るとマロニーはすぐさま否定した。優人に頼まれるまでもなく、赤坂はマロニーに掛け合っていた。

同盟関係にあり、ネウロイ発生時には相互に協力する体制を整えたほど友好的な扶桑とブリタニア。しかし、この二人の関係はともフレンドリーには見えない。

「閣下、あなたが私のやることをいちいち気に入らないのは存じております。しかし、それで彼がとぼちちりを受けるのは少々理不尽ではありませんかな？」

赤坂の言葉を聞いて、マロニーの肩がピクツと動く。

「……まるで私が個人的な都合で宮藤大尉を左遷しようとしているような口ぶりじゃないか」

「違うと？」

「とんでもない言い掛かりだ。私は宮藤家の血筋断絶を懸念しているだけだよ」

白々しいことを言うマロニー。赤坂は顔をしかめるが、すぐに穏やかな表情を取り繕った。

「いかがですか？ここは宮藤兄妹を揃って501に配属させてみるのは？宮藤博士のお子である二人が最前線で戦うことは、連合軍はもちろんブリタニアにとってもいい宣伝

になると思うのですがね」

少しでもブリタニアに利益があるように見せる赤坂。しかし、マロニーは赤坂の提案を鼻で笑い飛ばした。

「それには及ばんよ。近い将来、ウィッチに頼らなくて済むようになる」

「それはどういう——」

「君は知らなくていいことだ」

自分を見下すかのようなマロニーの物言いに、赤坂は奥歯を噛み締めた。



夜。芳佳は滑走路の先に座ってそこから見える景色を眺めていた。雲の少ない夜空には綺麗な三日月が浮かび、海からは静かな波の音が聞こえる。そんな美しい風景に反し、芳佳の表情は暗い。

「ここにいたのか？」

「お兄ちゃん」

優人が芳佳の元へやってきた。彼は夜になってから姿が見えなくなった芳佳を心配し、探しにきていた。昼間の事故が聞いているのか、歩き方が少しぎこちない。

「お兄ちゃん、背中は大丈夫なの？」

「何とかね」

優人は笑って見せるが芳佳は俯いてしまう。

「ごめん、私がつぶかったせいで……」

「大丈夫だから気にするな。お前こそ、こんなところでどうした？」

優人はそう訊ねながら芳佳の隣に座る。

「うん、ちよつとね……」

「バルクホルンあたりにきついこと言われたのか？」

「ええ!?!何でわかるの!?!」

優人に言い当てられ、軽く動揺する芳佳。

「ふふ、お兄ちゃんにわからないことなんてないさ」

と得意気と言う優人。実際はハルトマンからバルクホルンのことを聞いていたからだ。

「あいつは他人にも自分にも厳しいやつだから、ついそういう言い方をしちゃうんだよ」
妹を気に掛けつつ、バルクホルンのこともフォローする優人。彼は妹の味方をする
が、仲間のことも大切に思っている。どちらか一方の肩を持つたりはしない。

「でも……私、魔法が下手なの。お兄ちゃんの妹なのに……」

表情を曇らせる芳佳。バルクホルンに「兄の七光り」と言われたためか、エースとして活躍している兄に引け目を感じているらしい。

「俺だって初めからエースだったわけじゃないよ。魔法だって上手く使えなかったし」

「それでも、私よりはマシだよ……」

「どうだろうな」

と優人は苦笑いを浮かべ、自身の新人時代を語り始めた。

「俺はお前みたいに訓練も無しに飛べなかったし、たまに自分の魔法でストライカーを凍らせて、墜落しかけたこともあるんだぞ」

「えっ……」

冗談のような話に言葉を失う芳佳。しかし、「冗談だよな？」と訊いてみると優人は「本当だ」と言っただけは、と乾いた笑い声を上げた。どうやら、事実のようだ。

「そんな俺でもこうして戦ってこれたんだ。初飛行であれだけの活躍をしたお前に出来ないはずないよ」

優人は励ましながら芳佳の頭を撫でる。この頭撫では芳佳が小さい時から、ずっとやってきた癖のようなものだ。

「深く考え過ぎるな。ゆっくりでも良いんだ、一歩ずつ前に進んでいけば、その先にはお前が大勢の人の役に立つ未来が待っているはずだよ……」

「お兄ちゃん……ありがとう！」

笑顔で礼を言う芳佳。ようやく笑顔になった妹を見て、優人も嬉しくなり、「どういたしまして」と返すと思い出したように話を振った。

「そう言えば昔、芳佳に似ているウィッチがいたよ」

「私に？」

「うん。魔法力がうまく使えなかったり、誰かを守る為に無茶したり、やたら泣き虫だったり……」

「わっ、私は泣き虫じゃないよ!!」

ムキになって怒鳴る芳佳。その反応が面白かったのか、優人はニヤニヤしながらからかい始めた。

「そうかあ？久しぶりに会ってから何度も泣いてるぞ？」

「もう!!お兄ちゃんは どうして そんなに意地悪なの!？」

「痛い痛い」

芳佳は顔を真っ赤にしながら優人のことをポカポカと叩く。優人は芳佳の攻撃ガードし、痛がりながらも楽しそうに笑っている。

「宮藤さん？大尉も」

「お？」

「えっ?」

後ろから声が聞こえ、二人が振り返るとリーネがいた。

「リネットさん」

「どうした?」

「あの、大尉……これを……」

優人が立ち上がると、リーネはまるで怯えるような表情で一枚の紙を差し出してきた。彼女の様子からしてラブレター等ではないだろう。

「除隊申請書?」

優人は目を疑った。受け取った書類は除隊申請書だった。優人が理由を訊く前にリーネが口を開いた。

「わ、私……ウィッチーズを辞めようかと」

「ええっ?!リネットさんあんなに上手なのに?」

驚いた芳佳は立ち上がる。訓練で上手くやっているリーネは自分より優秀に見えている。そんなリーネが何故辞めようとするのか、芳佳には分からなかった。

「ううん、全然そんなことないわ」

「上手だよ」

芳佳は屈託のない笑顔で言う。

「訓練だけなの。実戦では全然だめで飛ぶのがやつと……」

「えっ、訓練で出来れば……」

「訓練も無しにいきなり飛べた宮藤さんとは違うの!」

焦りや劣等感からか、感情が少しだけ爆発してしまつたりネ。悪気はなかつたようですぐに「ごめんなさい……」と消え入りそうな小さな声で謝る。

「あのなりーネ」

今度は優人が話始める。

「お前はまだ頑張りようはあると思うし、芳佳の言う通り訓練は上手くいってるんだから、何も辞めることないと思うけど……」

優人は諭すがりーネは俯いてしまい、何も答えない。

「とりあえず預かつておくよ」

優人は小さな溜め息を吐き、除隊申請書をポケットにしまった。

「数日待つ、それでも考えが変わらないようならこれはミーナ中佐に提出する。それでいいな?」

りーネは優人の言葉に小さく頷き、一言「失礼します」と言うと共に基地に向かって逃げるように駆けていった。

「リネットさん……」

「……………」
扶桑の兄妹は遠ざかるリーネの背中を心配そうに見つめていた。

第10話 「初戦果」

翌日。早朝からネウロイの出現を知らせるサイレンが基地内に鳴り響いた。

「監視所から報告が入ったわ!」

ブリーフィングループに隊員全員が集まるとミーナがボードに張つてある地図を指しながら説明する。

「敵はグリット東1-4地区に侵入。高度はいつもより高いわ。今回はフォーメーションを変えます」

ミーナに続いて坂本が編成の指示を出した。

「バルクホルン、ハルトマンが前衛! シャーリーとルツキーニは後衛! ペリーヌは私とペアを組め!」

「残りの人は、私と基地で待機です!」

『了解!』

ミーナの命令に全員が従い、基地に約半数を残してネウロイ迎撃に出撃した。

「行っちゃったね」

「そうですね……」

芳佳とリーネは出撃したメンバーを滑走路から見送っていた。

「今出来ることって何だろう?」

「足手まといの私に出来る事なんて……」

「リネットさん!」

リーネは基地の中へ走って行ってしまふ。彼女と入れ替わるようにミーナが芳佳の元へやって来た。

「芳佳さん、ちよつといいかしら?」

「あつ、はい」

芳佳が頷くとミーナが話を始める。

「リーネさんはこのブリタニアが故郷なの」

「えっ……」

「ヨーロッパ大陸がすでにネウロイの手に落ちていることはお兄さんから聞いてるわね?」

「はい」

芳佳は以前赤城で優人から欧州の現状を聞かされていた。

「欧州最後の砦。そして故郷でもあるブリタニアを守る。リーネさんはそのプレッシャーで、実戦だとだめになっちゃうの」

「リネットさん……」

ミーナから話を聞き、心配そうに呟く芳佳。祖国防衛のプレッシャーに周りはエース級はばかり、リーネの気持ちもわかる気がした。

「芳佳さんはどうして、ウィッチーズ隊に入ろうと思ったの？」

「はい！困っている人達の力になりたいくて！」

質問に力強く答える芳佳にミーナは微笑んだ。

「リーネさんが入隊した時も同じ事を言っていたわ。その気持ちを忘れないで。そうすれば、きっとみんなの力になれるわ」

ミーナは優しく微笑むと基地内へ戻って行った。ミーナが去った後、芳佳は何かを決意した表情で空を見上げていた。



その頃、坂本をはじめとする出撃メンバーがネウロイと交戦に入った。しかしネウロイは特に反撃することもなく、あっさり撃墜された。

「手応えがなさすぎるわ……」

海に落ちていくネウロイを見て、ペリーヌは違和感を覚えた。

「おかしい、コアが見つからない」

坂本は上空から魔眼でコア探していたが、それらしきものは全く見当たらない。

「まさか！陽動ですよ!?!」

ペリーヌの言葉を聞いて坂本はハツとなった。

「だとしたら基地が危ない!!」

おそらく目の前のネウロイは自分達を引き付けるための囮、コアを持った本体は今頃基地へ向かっている。



「リネットさん」

芳佳はリーネの部屋の前に立っていた。そして、部屋の中にいるであろうリーネに向かって語りかけた。

「私、魔法もへたっぴで叱られてばかりだし、ちゃんと飛べないし、銃も満足に……使えないし、ネウロイとだつてホントは戦いたくない。でも、私はウィッチーズにいたい。私の魔法でも誰かを救えるのなら、何か出来る事があるのならやりたいの」

芳佳は自分の想いを伝える。リーネは部屋の中で、ドアに背中を預けながら聞いてい

た。

「そして、みんなを守れたらって……」

「……………守る……………」

芳佳の「守る」という言葉を聞いて目を見開くリーネ。それは自分がウィッチを志した時に、そして501基地に来た時に誓ったことだった。

「だから私は頑張る。だからリネットさんも……………」

芳佳の話が終わるとリーネはドア越しに彼女の方を向いた。何か言おうとしていると、基地内に再びサイレン音が響き渡った。



サイレンが鳴った直後の待機室にはミーナと優人、エイラの姿があった。

「出られるのは私と優人、エイラさんだけね」

ミーナが言う。続いて優人がエイラに質問する。

「エイラ、サーニャは出られないのか？」

「夜間哨戒で魔力を使い果たしてる。ムリだな」

エイラは両手の人差し指を交差させながら言う。

「そう……じゃあ、三人で行きましょう」

ミーナがそう言って出撃しようとした時、芳佳が待機室へ駆け込んできた。サイレンを聞いて走ってきたのだろう、息が上がっている。

「私も行きます！」

出撃を進言する芳佳。

「まだ貴方が実戦に出るのは早すぎるわ」

「足手まといにならないよう、精一杯頑張ります！」

真剣な表情で芳佳を制するミーナ。芳佳は同じく真剣な表情で言い返す。優人は何も言わずに二人のやり取りを見ている。

「訓練が十分でない人を戦場に出すわけにはいかないわ。それにあなたは、撃つことのためにめらいがあるの」

そう言うミーナに優人も内心同意している。芳佳は訓練中も銃を使うことを渋っていた。もし引き金を引くことが出来なければ、敵を倒すどころか自分や仲間の身も守れない。しかし、芳佳は引き下がらなかった。

「撃てます！守るためなら！」

「とにかく、貴方はまだ半人前なの」

「でも……」

それでも、と言い続ける芳佳。するともう一人待機室に入ってきた。
「私も行きます！」

リーネだ。芳佳と同じく彼女も出撃を進言する。

「リネットさん……」

「二人合わせれば、一人分ぐらいにはなります！」

引つ込み思案な普段の彼女からは想像出来ない堂々とした態度にミーナは驚かされた。優人は何かを決意したその表情を見て、ミーナに進言する。

「ミーナ、出撃させよう」

「優人！でも……」

「ネウロイが来てる。二人を説得する暇なんてないだろう？」

優人の言葉を聞き、ミーナは二人を見据える。二人の表情は真剣そのもの、簡単には引き下がりそうもない。

「……90秒で支度しなさい」

ミーナは彼女達の出撃を許可した。

「はい!!」

二人は力強く返事した。それから五人は基地から空へ上がった。優人がS—18対物ライフル芳佳が13mm機関銃、ミーナとエイラがカールスラントのMG42、リー

ネがボーイズMk. I対装甲ライフルを装備している。

「敵は三時の方向から基地に向かってくるわ！私と、優人、エイラさんが先行するから、芳佳さん、リーネさんはここでバックアップをお願いね」

「はい！」

「はい！」

芳佳とリーネは順に答える。

「じゃあ、頼んだわよ」

「了解」

そう言つてミーナは優人、エイラと共に先行する。三人を見送ると、リーネが芳佳に話し掛けた。

「宮藤さん。本当は私、怖かったです……」

「私は今も怖いよ。でも、うまく言えないんだけど……何もしないでじっとしている方が怖かったの」

「何もしない方が……あつ！」

何かに気付いたリーネが顔を上げる。

「どうしたの？」

「ほら、あそこ！」

リーネが指差した先では戦闘の光が見えた。先行した三人がネウロイと交戦を開始していた。

「速い……」

エイラが呟く。ミーナとエイラはMG42で射撃を行うがネウロイのスピードに翻弄され、弾が当たらない。しかも、ネウロイは三人のことなど眼中になく、真つ直ぐ基地に向かっていく。

「今までより圧倒的に早いわ、一撃離脱じゃ無理ね。速度を合わせてー!」

「了解」

「ん……」

優人を口頭でエイラはサインで返事をする、ミーナの指示に従ってネウロイの速度に進行方向を合わせる。そして、ネウロイの後方から攻撃を開始する。芳佳とリーネはその様子を遠くから見ていた。

「……ネウロイ?」

「そうみたいですが……」

「近づいてくるよー!」

芳佳に言われ。リーネは慌ててボーイズライフルを構える。優人、ミーナ、エイラの三人はネウロイの後部に弾を撃ち込んでいく。

「加速した!」

とエイラ。ネウロイは後部をパージし、軽量化によって加速する。三人は分離した胴体はどうにか回避するが、その隙にネウロイは三人を引き離し、基地の方へ進んでいく。

「速すぎる、不味いわね。優人お願い!」

ミーナが一番射程の長いS-18対物ライフル持つ優人に命じる。優人はすかさずライフルを構え直すが、ふいに「あつ……」という気の抜けた声を漏らした。

「どうしたの?」

ミーナが訊ねる。

「弾詰まりだ」

「ええっ!?!」

「ナニやってんだ!!」

エイラから怒号が飛ぶ。そうしている間にもネウロイは遠ざかって行った。

「だめ!全然当てられない!」

後方ではリーネが狙撃を行うも、高速で左右にぶれるネウロイに当てられないでいた。

「大丈夫!訓練であんなに上手だったんだから!」

焦るリーネを芳佳が励ます。

「私、飛ぶのに精一杯で射撃を魔法でコントロール出来ないんです!」

「だったら、私が支えてあげる。そうすれば撃つのに集中できるでしょ?」

そう言つて芳佳はリーネを肩車した。リーネが射撃に魔力を振り分けられるように芳佳が二人分の飛行を請け負うつもりだ。

「どう?これで安定する?」

「あ……はっ、はい……」

芳佳の行動に頬を赤らめるリーネ。二人のインカムにミーナから通信が入る。

「リーネさん、芳佳さん! 敵がそちらに向かっているわ! 貴方達だけが頼りなの、お願い!」

「はい!」

返事をする芳佳とリーネ。リーネは再びボーズ Mk. I を構える。射撃が得意なリーネと空を飛ぶ素質を持つ芳佳、二人の力を合わせればベテランにも負けないだろう。

(そうだ! 敵の避ける未来位置を予測して、そこに……)

リーネが策を思い付くなり、実行した。

「宮藤さん! 私と一緒に撃つて!」

「うん! わかった!」

リーネの指示に従い、芳佳は片手で13m機関銃を構える。リーネは魔法力で視力を上げた眼でネウロイを捉える。

「今ですー！」

リーネの合図で二人は射撃を開始する。ネウロイが芳佳のフルオート射撃をかわすと、今度は避けた先でリーネが放った数発の魔法弾がすべてネウロイに直撃する。一発がコアを撃ち抜き、ネウロイ破片となって砕け散る。

「すーい!!」

芳佳がネウロイを仕留めたリーネの射撃に感動しているとリーネが跳びついてきた。

「やったー! やったよ宮藤さん! 私初めて皆の役に立てた! 宮藤さんのおかげだよ!! ありがとう!!」

初戦果に興奮したリーネが芳佳に抱き着く。それによってバランスを崩した二人は海へ落下していった。

「あはははははははははは!」

海に落ちた二人はすぐに海面から顔を出すと、笑い合った。

「〃芳佳〃でいいよ! 私たち友達でしょ?」

「じゃあ、私も〃リーネ〃で!」

「うん! リーネちゃん!」

「はい！芳佳ちゃん！」

そう言つて、リーネは再び芳佳に抱き着いた。

「あははははははは！」

「り、リーネちゃん。苦しい……」

リーネの豊満な胸につぶされそうになる芳佳。そんな二人を優人は上空から見ていた。

（もう心配無さそうだな）

「ねえ優人」

「ん？」

ふと、ミーナが優人に声を掛ける。

「さっきの嘘でしょう？」

「え？」

「弾詰まり」

「ああ、バレてたか」

優人はあははと乾いた笑い声を出す。

「まったく！上手くいっただからよかつたけれど、一歩間違えたら取り返しがつかなくなっていたわよ？」

少々おかんむりな様子のミーナ。部隊や基地を預かる司令としての彼女の立場を考えれば当然と言えよう。それにマロニー大將をはじめ、ブリタニア空軍には自分達501を快く思っていない人間も少なくない。彼らに付け入る隙など与えてはならない。

「悪かった。処分は受けるよ」

「なら、今日の分の書類お願いね」

「……そんな殺生な」

山積みの書類を思い出し、優人の顔が一気に青ざめる。

「いいですね？ 宮藤大尉」

「……はい、中佐殿」

笑顔で威圧するミーナに逆らえず、優人はガクツと肩を落とした。



ところ変わって、連合軍総司令部。赤坂は再びマロニーの執務室を訪ねていた。「まだ諦めていなかったのかね？」

デスクにいたまま、呆れたようすのマロニー。

「だから、こうして頼みに来たんですよ」

と、マロニーのデスクの前に立つ赤坂が言う。

「ええ、そもそも『兄弟姉妹を同じ部隊に配属させない』というのはリベリオン軍のルールです。それを連合軍管轄の501で適応するのはお門違いではありませんか?」

「申し訳ないが宮藤大尉の異動はもう決定したことだ」

頑として首を縦に振らないマロニー。赤坂は攻め方を変える。

「ブリタニアは輸送船団を護衛する艦艇が不足しているそうですかね?」

護衛艦の話を持ち出すとマロニーの顔がにわかには引き締まった。

「扶桑海軍から海防艦を何隻か提供することが可能ですが?」

「代わりに宮藤兄妹を二人とも501置いておけというのかね?」

「悪い話ではないでしょうか?」

赤坂に提案され、考え込むマロニー。ブリタニアは過去の船団護衛や対ネウロイ戦等によつて、多くの艦艇を損失している。ブリタニアのような島国にとつて、ネウロイによる通商破壊は死活問題。輸送船団を護衛する艦艇

や航空ウィッチは必要不可欠である。

それにブリタニアの首相であるチャーチルは海軍相から今の地位に就いた。ここで扶桑の海防艦を手に入れ、海軍に恩を売っておくことは、国のトップに貸しを作ることにもなる。しかし、ただ赤坂の話に乗ることは面白くない。

「君は頼みに来たと言ったがね」

一通り考えたマロニーは立ち上がり、窓から外の景色を見る。

「あまり頼まれていたような感じがしないんだがね」

赤坂は奥歯を噛みしめてソファから立ち上がると、マロニーに向かって頭を下げた。

「後生です！宮藤兄妹の501配属を許可して頂きたい！」

マロニーが振り返ると、赤坂は屈辱で震えていた。こうして、宮藤優人大尉のワイト島転属は取り消されたのだった。



その夜。なんとか書類を片付けた優人はミーナと別れ、執務室を後にする。

「ふう……」

優人は自分の肩をトントンと叩きながら、溜め息を漏らす。膨大な量の書類整理は何度やっても慣れない。終わらせたばかりの今も、達成感より明日も同じ量をこなさなくてはならない、という憂鬱感が彼の心を支配している。

クシヤ！

「ん？」

何気無しにポケットへ手をつ突っ込むと、紙のような何かに触れた。取り出してみると昨晚、リーネから受け取った除隊申請書が出てきた。大切な書類をずつとポケットの中に入れたまま忘れていたらしい。優人は意外とズボラなのだろうか。

「これは返さないとな」

優人は呟くと、リーネの部屋へ向かって歩を進める。リーネは初戦果を上げたことで自信をつけ、芳佳という友達も出来た。一緒に戦う友が一人でもいれば、プレッシャーに押し潰されることもないだろう。

やがて、リーネの部屋に辿り着いた優人はドアをノックもせずにかけてしまう。

「リーネ、入るぞー！」

「へっ？」

「あっ……」

優人の視界に飛び込んできたのは純白のズボンとブラのみを着用しているリーネだった。彼女は着替え中だったらしい。優人はノックをしなかったことを後悔すると同時にリーネのグラマラスボディに目が釘付けになった。

「い……い……い……」

あまり男性に免疫のないリーネ。下着姿を見られて彼女の顔はみるみる赤くなって

いく。

「いやあああああああ！」

バチーン！

「ぶっ！」

優人の顔を目掛けて飛んできた平手が、彼の頬に真っ赤な紅葉を作った。

第11話 「妹とバルクホルン」

カールスラント空軍所属のウィッチ、ゲルトルート・バルクホルンはストライカーで空を飛んでいる。近くには戦友のエーリカ・ハルトマン、ミーナ・デイトリンデ・ヴェルケの姿もある。三人は眼下に広がる光景から目を逸らせずにいた。自分たちが生まれ育った祖国が炎に包まれている。そして、それを焼いた巨大ネウロイが我が物顔で空に居座っている。

（貴様が！……貴様が！！……）

バルクホルンは怒りに任せてネウロイへ銃を乱射する。残りの二人も彼女に続いて攻撃を行う。シールドで身を守りながら、ネウロイの装甲を削っていき、やがてコアが露出した。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

そのまま銃弾をコアへと叩き込む。コアを砕かれたネウロイは白い破片となり、燃え盛る街へと落ちていく。そして、その先にはひとりの少女がいた。



「クリスツ!!」

ベッドから飛び起きたバルクホルンの目に入ったのは燃え盛る街ではなく、自室の風景だった。過去の記憶を悪夢として見ていたために魘され、びつしよりと汗をかいていた。

「……なんで今頃、あんな夢を」

眩くバルクホルン。室内にあるチェストの上に置かれた写真立てが倒れていた。

◇ ◇ ◇

朝。食堂の厨房で芳佳とリーネが仲良く朝食を作っていた。

「ねえ、芳佳ちゃん聞いた？カウハバ基地が迷子になった子どものために出動したんだって」

とリーネ。彼女と芳佳は協同撃墜で初戦果を上げて以来、すっかり親友となっており、リーネの方から話題を振ることも多くなった。

「へ〜！そんな活動もするんだ？すごいねえ！」

「うん！ たったひとりの為にね！」

「でも、そうやって一人一人を助けられないとみんなを助けるなんて無理だもんね！」
「そうだね！」

芳佳の考えにリーネが同意する。楽しげに会話する二人の後ろから声がした。
「みんなを助ける、そんなものは夢物語だ」

二人が振り返るとバルクホルンが朝食を取りに来ていた。

「えっ？なんですか？」

よく聞き取れなかったため、芳佳は聞き返した。

「すまん。独り言だ」

バルクホルンはそう言うと、二人に背を向け、テーブルの方へ行ってしまう。芳佳とリーネがバルクホルンの背中を見つめていると、別の人間がやってきた。

「おはよう。芳佳、リーネ」

優人だ。彼は眠そうな目を擦りながら、二人に挨拶をする。昨晩は遅くまで書類仕事をしていたのか、あまり眠れていないようだ。

「お兄ちゃん、おはよう！」

「おはようございます！優人さん！」

優人とは違い、元気よく挨拶をする芳佳とリーネ。芳佳は大好きな兄が来たことで一層元気になったようにも見える。リーネの方も下着姿を優人に見られたことはもう気

にしているはいないようだった。思い出したくはないだろうが……。

「おっ？今朝は扶桑料理か？」

優人は用意された朝食を見て喜ぶ。遠く離れたブリタニアで故郷の料理を食べられることが嬉しいのだろう。

「うん！リーネちゃんと一緒に作ってくれたの！」

「私は、少し手伝っただけで……」

照れているのか、リーネは頬を赤らめながら言う。

「二人はいいお嫁さんになるな！」

優人は笑顔で言う。優しく、家庭的な二人ならば、嫁の貰い手はいくらでもありそう
だ。

「そうかなあ、えへへへへ！」

「お嫁さん……私もいつかは……」

優人に褒められて喜ぶ芳佳。リーネは誰かと結婚した自分の姿を想像し、顔がさらに赤くなる。そんなやり取りをしていると、他のメンバーもやって来た。食堂は賑やかになる。

「……………」

一番最初にテーブルに着いていたはずのバルクホルンは食事にまったく手をつけて

いなかった。何か考え事でもしているのか、ぼーっとしている。そんな彼女の両隣にミーナとハルトマンがやって来た。

「どうしたのトゥルーデ？浮かない顔して」

心配したミーナがバルクホルンの顔を覗き込む。

「いつも食事だけはしっかり食べるのに、今日は食欲無さそう」

「……そんなことはない」

ハルトマンの言葉を否定し、バルクホルンは食事を始める。しかし、スプーン一口分だけ食べると手が止まり、芳佳の方へ視線を向ける。

「あいつがどうかしたか？」

バルクホルンが芳佳を見ることに気付いた優人が訊ねる。彼女はスプーンを持った手を下げるだけで何も答えない。

「おかわり〜!!」

ルツキーニが皿を高く上げておかわりを頼んだ。バルクホルンとは違い、ルツキーニは食欲旺盛だ。

「あつ、はーいー!」

芳佳はおかわりを渡すためにテーブルへ向かう。テーブルに来ると殆ど手をつかずのバルクホルンの朝食が見えた。

「あ、あの……お口に合いませんでした？」

芳佳が訊くが、やはり何も答えず席を立ち、食事を片付けるため厨房へ向かう。
(一体、どうしたんだ?)

明らかにいつもと違うバルクホルンを優人は怪訝そうに見つめる。

「バルクホルン大尉じゃなくても、こんな腐った豆なんて……とてもとても食べられたもんじゃありませんわ」

ペリーヌが文句を言う。確かに、なじみのない他国人にとつて納豆はただの腐った豆に見えるだろう。その上、扶桑でも白米と混ぜて食べるほどくせのある納豆をそのまま出してしまったことが問題だろう。

「納豆は体にいいし、お兄ちゃんや坂本さんも好きだつて……」

「さ、坂本さんですつて!? 少佐とお呼びなさい!!」

「坂本さん」という呼び方にペリーヌが過剰反応し、芳佳に詰め寄る。

「私だつてさん……付けで……」

今度は顔を赤ランプのように真っ赤にする。声も小さくなり、よく聞き取れなかった。
た。

「扶桑海軍じゃ、けつこうそんなもんだよ……」

と優人が芳佳にフォォローを入れる。すると、ペリーヌの顔がカアツと赤くなり、彼に

向かって声を荒げた。

「ここは501です！大尉！あなたは妹さんをもつとしっかり指導なさるべきですわ！！」

「えっ、俺の責任？」

「当然ですわ！大体あなたはいつもいつも坂本少佐に馴れ馴れしくして！」

身を乗り出しながら、ギャーギャーと騒ぐペリーヌ。彼女に気圧されている優人からは上官の威厳というものが感じられない。

「大体あなたは普段から坂本少佐に慣れ——」

「おかわりい〜〜！！」

ペリーヌの言葉はルツキーニのおかわり要求にかき消された。いつまでたつてもおかわりが来ないため、彼女は涙目になっていた。

ルツキーニの一言で興が冷めたのか、ペリーヌはプイッとそっぽ向き、何も言わなくなった。優人はルツキーニに感謝した。



優人とミーナは今日も隊長執務室で書類仕事をしていた。相変わらず、山積みの書

類。優人に割り当てられている書類の量がミーナのそれよりも多く見えるのは気のせいではないだろう。

「そう言えば……」

ふと、何かを思い出したミーナが筆を止める。

「あなたの異動、取消しになったみたいよ」

「そうか？よかった」

心底ホツとする優人。まだ半人前の芳佳と違う部隊になることはもちろんだが、自分だけが最前線から離れることにも抵抗があった。

「噂だと、赤坂中将はあなたの異動取消しと引き換えに鵜来型海防艦二隻をブリタニアに提供したそうよ」

「とんでもない取引だな」

「その分、ネウロイを倒して帳消しにしないとね」

ミーナの言葉で、肩が一気に重くなるのを感じた優人は海防艦から隊員達の休暇申請に話を逸らした。

「シャーリーとルツキーニが休暇申請を出しているな。またアフリカに行くつもりか

？」

「砂と石ばかりでバイク飛ばし放題だって、ルツキーニさんが言ってるわ」

ミーナは前にルツキーニが楽しそうに話していたことを思い出しながら言う。その話なら優人も知っている、ルツキーニから何度も自慢されたからだ。今回出された申請書を見終えると、優人はあることに気付いた。

「そう言えば、バルクホルンは一度も休暇申請を出していないな」

優人はバルクホルンが休んでいるところを見たことがない。大半の隊員は何度か休暇申請をしているのだが、バルクホルンだけが全く申請をしていない。

「ええ、休暇もかなり溜まっているのに……」

「一日くらい休ませた方がいいんじゃないか？」

「そうしようと思ったんだけど、私に休みはいらなくてトウルルーデが……」

ミーナは溜め息を吐く。ずっとバルクホルンと共に戦ってきたミーナ。他人以上に自分に厳しいバルクホルンのことが心配で仕方ないのだ。

「やっぱり、妹さんのことか？」

「まだ思い詰めているみたいなの……」

バルクホルンの妹、クリステイアーネ・バルクホルン、愛称はクリス。数年前、カールスラント撤退戦時にバルクホルンの撃墜したネウロイの破片を浴び、精神的ショックもあって昏睡状態に陥ってしまった。

現在、クリスはブリタニアの病院に入院している。バルクホルンはそのことに責任を

感じ、給料を全て妹の入院費に注ぎ込んでいる。

「あなたから休むように言って貰えないかしら？」

「いや、俺が言ったってバルクホルンは聞き入れないだろ？」

優人は自分とバルクホルンの微妙な関係に溜め息を吐く。

「わからないわよ？あなたとトゥルーデって似てるもの」

「俺とバルクホルンが？」

優人は首を傾げた。優人とバルクホルンは見た目はもちろん、性格や価値観も異なる。ミーナは二人のどこが似ていると言うのだろうか。

「実はトゥルーデにはね……」

ミーナがバルクホルンについて語り始めた。



リーネは食堂でアフターヌーン・ティーパーティーの準備をしていた。ティースタンには彼女手作りのスコーン、ケーキ、サンドイッチ等が載せてある。

「芳佳ちゃん、遅いなあ」

一緒に準備をするはずだった親友が姿を見せず、心配するリーネ。

「ごめん！遅れた！」

食堂へ駆け込んでくる音と共に声が聞こえた。リーネが振り向くとそこには割烹着を着て、肩で息をしている芳佳がいた。

「どうしたの？心配したよ？」

「ごめんね、広すぎて掃除が大変なの」

どうやら芳佳はこの広い基地を一人で掃除していたらしい。赤城の時といい、かなりの働き者である。

「さっ！手伝うね！」

そう言って芳佳も準備を始める。準備の最中、芳佳がリーネに話しかけた。

「ねえ……」

「なあに？」

「私って……バルクホルンさんに嫌われているのかな？」

芳佳は表情を曇らせながら言う。

「え？どうして？」

「うん、なんか避けられているような気がして……」

芳佳の言う通り、バルクホルンは冷ややかな目で芳佳を見たり、声を掛けても無視して離れてしまうことが多い。

「気のせいだよ。だって、バルクホルン大尉は誰にでもそんな感じだよ？」

リーネは落ち込み気味な芳佳を励ます。

「あつ、ミーナ中佐とハルトマン中尉は別だけどね」

「え？」

思い出したように言うリーネに聞き返す芳佳。

「戦いが始まった時からずっと一緒だったんだって。あの三人」

「へー」

リーネは人差し指を立てながら説明し、芳佳は感嘆の声を漏らす。芳佳より少し先輩のリーネはメンバーの過去にも多少詳しい。

「確か優人さんと坂本少佐も、その頃から三人と知り合いだったみたいだよ」

「えっ？本当に？」

「本当だよ」

「ひゃあああ!!」

突然後ろから聞こえた声に驚き、飛び上がる芳佳とリーネ。

「お兄ちゃん？」

二人が振り返ると、優人が立っていた。芳佳が優人に背後を取られたのはこれで三度目だ。どうして彼は毎度毎度、足音を消して忍びよってくるのだろうか。

「優人さん、どうしたんですか？」

リーネは準備担当ではない優人が何故食堂に来ているのかと疑問に思う。

「少し手が空いたんで二人の手伝いに来ただけど、準備は終わってるみたいだな」

優人はティースタンドを見ながら言う。並べられた料理の美味しそうな匂いが優人の鼻を擽る。

「ねえ、お兄ちゃん」

「うん？」

「バルクホルンさんって、その時からあんな感じだったの？」

「あんな？」

優人はどういう意味かわからずに聞き返す。

「真面目っていうか、厳しいっていうか」

芳佳の質問にされ、優人は腕組みをして「うーん」と唸りながら過去を振り返る。

「そう言えば、あいつには初対面でいきなり殴られたっけな」

「えっ……なんで!?!」

「バルクホルンやミーナ、ハルトマンとは、補給で立ち寄ったカールラント空軍の基地で出会ったんだけどな。基地のウィッチと話してるところをナンパしていると勘違いされてさ」

「さ、災難でしたね」

顔をひきつらせるリーネ。優人とバルクホルンは出合い方が最悪だったようだ。

「でも、バルクホルン大尉は何でそんな誤解を？」

「実はそのカールラント基地のウィッチの中に……つて、そろそろティーパーティーが始まる時間じゃ？」

「あつ、ほんとだ！」

「芳佳ちゃん、大変！」

時計を見て、二人は慌て出す。芳佳とリーネは優人に手伝ってもらい、ティースタンドやティーカップ等の食器を宿舎のテラスへ運んだ。



ネウロイの襲撃は定期的、ゆえに襲撃の合間にはくつろぐ時間もある。今日は宿舎のテラスに集まり、アフタヌーン・ティーパーティーが開かれる。これは常在戦場の緊張感をほぐすため、リーネが企画・提案したものである。

「作戦室からの報告では、明後日が出撃の予定です。ですので皆さん、今日はゆつくり英気を養ってください」

ミーナはカップを片手に立ち上がり、音頭をとる。続けて坂本が連絡を入れる。

「宮藤とリーネ、二人はこの後訓練だ」

「はい！わかりました！」

二人は揃って元気な返事をする。お茶会が始まり、芳佳は紅茶を口にする。しかし、マナーを知らないため、扶桑茶を啜るように音を立ててしまった。

「もう、下品なんですから……」

芳佳の飲み方を見て、頭を押さえるペリーヌ。

「えっ?」

「芳佳ちゃん、紅茶は音を立てないで飲むの」

リーネが優しく教える。芳佳は何がいけなかったのかを理解し、恥ずかしさで顔を真っ赤にする。

「扶桑の家じゃ言われなかったからな。仕方ないよ」

優人は芳佳にフォローを入れ、紅茶を静かに飲む。

「大尉はマナーを心得ていらっしやるようですね」

ペリーヌが感心したように言う。坂本が絡んでいないためか、彼に対して普通に接している。ちなみに優人、芳佳、リーネ、ペリーヌは同じテーブルに座っている。

「新人時代に駐欧武官経験のある上官のウィッチから教わったからな」

「なんで教えてくれなかったの？」

アフタヌーン・ティーパーティーの作法を理解しているらしい兄の姿を見て、芳佳は抗議の目を向ける。

「いや、言う前に飲んじやったから……」

「飲む前に教えて!!」

芳佳は顔を真っ赤にして理不尽に怒り、頬を膨らませプイつとする。どうやら相当恥ずかしかつたらしい。

「ごめんごめん……夕飯作るの手伝ってあげるから機嫌直せよ」

「……ホント!?!」

「うん、約束する」

「やったあ〜!!」

優人と一緒に料理が出来ると聞いて、一気に上機嫌になる芳佳。ペリーヌはさつきまでの不機嫌はどこに言ったと言わんばかりにジト目で芳佳を見ている。ティースタンドの料理を食べ始めたところで、リーネが優人に質問する。

「優人さんって、お料理が得意なんですか？」

「それほどでもないけど、よく母親の手伝いをしていたからな」

「扶桑の男性は台所に立たないって聞きましたわよ？」

話に興味を示したペリーヌが質問してきた。

「まあ確かにそういう家庭が多いけど、俺らの家にはそう言った考えはなかったな」

「お父さんは家事とかしてなかったよね？」

と芳佳がサイドイッチを手に取りながら言う。

「たまにしてたけど、ひどかったよ」

「ひどい？」

リーネが首を傾げる。

「世間からは魔導エンジン権威だとか、人類の大恩人だとか言われているけど。研究以外はからつきしな人だったんだよ、料理に至っては下手なんてもんじゃなかったし……」

優人の脳裏には野菜を大小様々なサイズに切ったり、火をしつかり通さなかったり、適量を適当と認識したり、隠し味と称して不要な物を大量投入する父の姿が浮かんでいた。その時の料理を思い出して気分でも悪くなったのか、優人は口元を抑えている。

「お父さんらしいね」

サイドイッチを頬張りながら呑気な口調で言う芳佳、らしいで済んでしまうのは彼女が父親の料理を経験していないからだろう。優人はそんな芳佳の口元には少しだが食べカスがついていることに気付いて、ハンカチを取り出した。

「芳佳、こっち向いて」

「えっ? 何? ……んっ? んん…」

「口の周りを汚して、女の子なんだからもう少し気を付けなさい」

優人はそう言いながら、ハンカチで芳佳に口を拭いてやる。その口調はまるで子どもを注意する母親である。

「ぶはー! えへへへ、ありがとう!」

兄の厚意を受け入れ、笑顔で礼を言う芳佳。そんな仲の良い兄妹を見てリーネは微笑み、ペリーヌは14歳にもなって兄の世話になっている芳佳を呆れてた表情で見ている。

「……………」

「どうしたの? トウルーデ」

優人達のテーブルに視線を向けているバルクホルンにハルトマンが訊ねた。

「何でもない…………」

バルクホルンはそう誤魔化すと紅茶を口につけた。

第12話 「兄とバルクホルン」

501基地の風呂場は坂本の発案により、扶桑海軍設営隊が建築したものだ。ローマ式を模した石造りで、浴槽の中心には天使像が立っている。

「〜♪」

夕食後、芳佳はリーネと一緒に風呂に入っていた。芳佳は頭に畳んだタオルを乗せ、湯船に浸かりながら鼻歌を口ずさんでいる。

「芳佳ちゃん上機嫌だね」

隣にいたリーネが芳佳に微笑んだ。彼女はタオルを使って髪を上げている。

「うん！お兄ちゃんと料理出来たから！」

満面の笑みで答える芳佳。ティータイムの時にした約束通り、優人は芳佳と夕飯を作った。ちなみに隊員の半数からは「優人って料理出来るの？」と言った反応をされ、彼は若干傷ついていた。

「そう言えばリーネちゃん、さつきミーナ隊長からお給料貰ったんだけど……」

芳佳が思い出したように言う。夕飯後、隊員達はミーナから給金を受け取っていた。何故かはわからないが、バルクホルンだけが受け取っていないかった。

「1ポンドってどれくらい?」

「確か扶桑のお金は…」

「円だよ」

「えーつと…最近のレートは……」

リーネが頬に指を当てて考えていると、天使像から声がした。

「今は1ポンドは19・6円だ」

「さ、坂本さん入ってたんですか!?!」

「ああ…気付かないとは注意力が足らんな」

声の主は坂本だった。彼女は二人から死角になる像の影にいたらしい。芳佳は坂本に教えられたレートで給料の金額を計算を始めた。

「うーん、19・6円って大体米俵一俵分くらいだから…10ポンドって御飯4000分!?!」

芳佳は自分の給料の高額さに驚きの声を上げる。彼女にとってお金の価値は御飯何杯分か、で判断するものらしい。

「ちゃんと計画的に使えよ?ちなみに今回の俸給は半月分だ」

「へっ!?!坂本さん、なんでこんなに貰えるんですか?」

平凡な女子中学生だった自分が急に高給取りになってしまったことに芳佳が当惑す

る。

「いいか？ 私達は常に最前線に立っているのだ」

坂本は真剣な面持ちで、ゆっくりと語り始める。

「それは明日死ぬかもしれない危険と隣り合わせだ。だから……」

「だから？」

「悔いを残さぬよう、せめてお金だけでも困らないようにとの配慮だ」

そこまで話すと坂本はシャワーを浴びるため湯船から上がった。芳佳は坂本の話聞き、自分が死と隣り合わせの戦場にいることを再認識した。料理、洗濯、掃除等をやっていたため、そのことを忘れかけていたのだ。

「そんな理由のお金だったら、私欲しくないな……」

芳佳は表情を曇らせながら言う。いつ死んでもいいように渡される高額な給金、元々の戦争嫌いもあつて芳佳は素直に喜ぶことが出来ない。

「それでも私は、実家に仕送り出来て助かるけどね」

「仕送り？」

リーネの言葉に芳佳が反応する。

「私には兄弟がたくさんいるから」

「そうなんだ？ 私もお母さんやお祖母ちゃんに送ろうかな？」

そう言つて笑い合う二人。そして――

(同じ湯船にだなんて、何て恐れ多い)

坂本と一緒に入浴している芳佳に嫉妬しているペリーヌもいた。



夜の待機室。明かりも点けずに窓辺に立っているバルクホルン。視線は外に向けられていますが、彼女の目に景色は映っていない。

(今ごろ思い出すなんて……クリス……)

「どうした？明かりも点けないで」

後ろから声が聞こえ、バルクホルンは振り返る。そこには優人がいた、手には何かの書類を持っている。

「妹さんのことでも考えていたのか？」

「優人、何か用か？」

優人の質問を無視し、逆に質問をするバルクホルン。こんな態度をされれば気を悪くしそうなものだが、優人は顔色ひとつ変えずに用件を言う。

「ああ、お前にこれを渡したくてな」

優人は持っていた書類をバルクホルンに差し出す、それは休暇申請書だった。あまり自信はなかったものの、ミーナに頼まれた通り、バルクホルンに休むよう説得しに来たのだ。

「休暇溜まつてるだろ？たまにはゆっくり身体を休めろ」

「必要ない」

バルクホルンはそう言つてそつぽ向く。

「そうは見えないぞ。お前、不調気味だろ？」

優人は今日一日のバルクホルンを思い出しながら言う。体調管理を徹底している彼女が食事を摂らず、訓練中の動きもよくない。いや、以前からバルクホルンの戦い方に優人は違和感を感じていた、まるで死に急いでいるかのようにも思えた。優人は診療所の息子であるためか、人の心身の不調に関しては人一倍敏感である。

「休暇がてら妹さんの見舞いにでも行つてこい。大切な家族だろ？」

「私はネウロイを倒さねばならない。お前のように妹と戯れている暇などないんだ」
僅かに声を荒げるバルクホルン。

「それにはクリスの姉である資格も、会いに行く資格はない」

人一倍責任感の強いバルクホルン。祖国を陥落させ、妹を負傷させてしまったことで自責の念に駆られている。ウィッチーズでネウロイを倒し続けることが彼女なりの贖

罪なのだろう。

「違うだろ?」

そう言う優人。彼の言葉に反応するバルクホルン。

「なに?」

「お前は逃げているだけだ……」

「貴様っ!!」

優人の言葉を聞き、怒りを感じたバルクホルンは彼の胸ぐらを掴む。だが、優人は構わず続ける。

「お前が休まずにひたすら戦うのは不安や苦悩を忘れたいから……」

「!?」

「妹さんに会いに行かないのはそれらを思い出したくないから……」

「違う!」

自分の心の内を抉るような優人の言葉、その言葉に動揺しながら必死に否定するバルクホルン。

「逃げたな、ゲルトルート・バルクホルン」

普段の優人からは想像も出来ないほど冷たい口調で言う。

バキッ!!

怒りを抑えきれなかったバルクホルンは優人を殴った。殴られた勢いで優人は倒れる。

「お前に何がわかる！ 国も家族も無事で！ 妹と一緒に過ごせるお前に何がわかるんだ！！」

バルクホルンは倒れた優人を見下ろしながら叫ぶ、目には涙が浮かんでいた。彼女はしばらく優人を睨み付けた後、はや歩きで待機室から出ていった。

「痛っ……」

優人はバルクホルンに殴られた頬を擦りながら立ち上がった。魔法力こそ使っていないなかったものの、普段から鍛えている彼女の拳は重かった。しかし、本当に傷ついたのは彼ではない、バルクホルンの方だ。ふと優人は窓の方を見た、そこには頬に痣を作った自分の顔が映っていた。

「お前は最低な男だよ」

優人は窓ガラスに映っている自分に向かって呟いた。

◇ ◇ ◇

翌日。格納庫には訓練のため芳佳、リーネ、バルクホルンが坂本に集められていた。

三人の前には坂本、その隣には書類仕事のためミーナの執務室へ行く途中、坂本に捕まった優人が立っている。

「今日は編隊飛行の訓練を行う！優人、バルクホルン！お前達はロツテの一番機を担当しろ！」

「了解だ」

「了解」

坂本の命令に優人とバルクホルンに順に返事をする。優人は昨日のこともあり、気まぐさを感じているがバルクホルンの方は表面上ならいつも通りに見える。

「優人の二番機にリーネ！」

「はいっ！」

「バルクホルンの二番機には宮藤が入れ！」

「えっ……」

次に坂本は芳佳とリーネに指示を出した。リーネはハッキリと返事するが芳佳は当惑気味にバルクホルンへ視線を向ける。

「宮藤！返事はどうした！」

「はっ、はいっ！」

坂本の怒鳴られて芳佳はようやく返事をした。優人もバルクホルンの方をチラッと見る。

(訓練が終わったらまた話してみるか……)

優人はそう思いつつ、今は訓練に集中することにして空へと上がる。坂本が芳佳とリーネにロツテ戦術と訓練内容の説明を行う。今回の訓練は優人とリーネが逃げ、バルクホルンと芳佳が追いかけるという単純なものだ。

「よし！始めろ！」

坂本の合図で訓練がスタートする。

「リーネ、着いてこい！」

「はいっ！」

「いくぞ、新人」

「はいっ！」

優人とバルクホルンがそれぞれの二番機に指示を出し、編隊飛行に移る。それとほぼ同時に警報が鳴り響き、基地上空には信号弾が打ち上げられてる。ネウロイの襲撃だ。

「敵襲だ！グリッド東、07地区、高度一万五千にネウロイが侵入！」

と叫ぶ坂本。訓練に参加していた全員と基地から飛び立ち合流したミーナ、ペリーヌがネウロイが侵入した空域へ向かう。

「予定じゃ出撃は明日のはずだろ？」

「最近、奴らの出撃サイクルはブレが多いな」

ネウロイ襲撃の不定期化に愚痴をこぼす優人と坂本。

「カールスラント領で動きがあったらしいけど、詳しくは……」

「カールスラント！」

ミーナの口から出た祖国の名にバルクホルンが反応した。

「どうした？」

「……いや、なんでもない」

坂本が訊ねるが、バルクホルンは誤魔化した。

「よし！ 隊列変更だ！ ペリー又はバルクホルンの二番機に！ 宮藤兄妹は私とケツテを組め！」

戦闘隊長たる坂本が隊員に指示を出した。

「ケツテ？」

「三人一組のこと」

首を傾げる芳佳に優人がわかりやすく説明する。

「また！」

「ふえっ！」

坂本と組むこととなった芳佳のことをキツと睨みつけるペリーヌ。彼女は百歩、いや百万歩譲って優人ならまだ我慢出来るが芳佳は許せないらしい。

「敵発見！」

坂本が魔眼でネウロイを補足した。すかさずミーナが隊員達に指示を出す。

「バルクホルン隊は突入!!」

「了解!!」

バルクホルンはそう答えるとネウロイに向かってを開始する。続いてミーナは坂本に指示を出した。

「少佐は援護に！」

「了解！二人とも着いて来い！」

「了解！」

「はい！」

優人、芳佳は坂本に続いて上昇する。優人はS—18対物ライフルを構え、発砲する。各隊が一撃離脱戦法を繰り返す中で優人はバルクホルンの方を見てあることに気が付く。

(ペリーヌが遅れている……いや、バルクホルンが突っ込み過ぎているのか?)

いつも視界に二番機をいれているバルクホルンがペリーヌを無視しているような動

きをしている。そのことにはミーナも気付いたらしい。

「やっぱりおかしいわ!」

「え?」

ミーナが突然言い出した。リーネはミーナが何のことを言っているのか分からず聞き返す。

「バルクホルンよ!あの子はいつも視界に二番機を入れているのよ!なのに今日は一人で突っ込みすぎる!」

そう言われてリーネもバルクホルンを見る。バルクホルンはネウロイに急接近し、ホバリングしながらビーム発射口に銃弾を浴びせている。それはあまりにも危険な行為だった。

「あそこを狙って!」

「はいっ!」

リーネはミーナからの指示を受けて対装甲ライフルを構え、バルクホルンとペリーヌが攻撃しているビーム発射口を撃つ。命中後、バルクホルンとペリーヌは離脱するがネウロイからの激しい反撃を受ける。バルクホルンはビームを回避するが、避けた彼女の後ろにはペリーヌがいた。ペリーヌは咄嗟にシールドを張るが、勢いではじき飛ばされる。そして飛ばされた先にいたバルクホルンと激突した。ネウロイはその隙を逃さず

にバルクホルンを攻撃する。バルクホルンは咄嗟にシールドを張ったが不完全なシールドでビームは防ぎ切れず、貫通。持っていたMG42のマガジンに着弾、誘爆して飛び散った金属片がバルクホルンの胸に刺さる。バルクホルンは頭から地面に向かって落下していく。

「バルクホルン！」

「大尉！」

「バルクホルンさん！」

優人、ペリーヌ、芳佳が順に叫ぶ。優人は持っていたS—18対物ライフルを捨て、墜ちていくバルクホルンに駆け寄る。芳佳、ペリーヌも続いた。

「おのれっ!!」

怒りを露にした坂本がネウロイに接近する。優人はどうにかバルクホルンを空中でキヤッチし、彼女を抱きかかえながら森の中へ降りていった。バルクホルンを地面に寝かせると優人は軍服の胸元を開き、傷の具合を確認する。

「出血がひどいな……」

「私のせいだ……どうしよう……」

自分のミスのせいで上官を負傷させてしまい、ペリーヌは狼狽えた。

「これじゃ動かせない。芳佳頼む！」

「お願い……大尉を助けて」

兄とペリーヌの言葉に芳佳は力強く頷き、治癒魔法を発動する。

「焦らない……ゆつくりと、集中して……」

そう自分に言い聞かせる芳佳の手から青白い光があふれ出し、バルクホルンを包み込む。

「こんな力が……」

芳佳の強力な治癒魔法を初めてみたペリーヌは思わず声を漏らす。直後、ネウロイが空にいる三人だけでなくこちらにも攻撃してきた。

「治療の邪魔すんな！」

そう怒鳴りながら優人はシールドを展開した。妹と同じく強大な魔力を持っているだけあって、彼のシールドは大きく、強固である。優人はネウロイのビームを防ぎながらペリーヌに指示を出した。

「ペリーヌ！俺は二人を守るから空に戻ってくれ！」

「わ、私が……」

「今、空には三人しかいない。エースもいなくなつて戦力が落ちている。誰かが戻らないと……」

「け、けど……私では」

「失敗をいつまでも引きずるな！」

優人に怒鳴られ、ペリーヌはビクツとなる。

「切り換えろ！俺の代わりに坂本の背中を頼む！」

「……お二人とも、バルクホルン大尉をお願い致しますわ」

優人の叱咤激励によって、顔からは動揺の色が消えたペリーヌはブレン軽機関銃を強く握り直し、空へ戻っていった。その間にもネウロイの攻撃はより激しくなっていく、優人のシールドが赤く点滅する。

「弱いところを狙いやがって！」

「お兄ちゃん！」

芳佳が優人の心配をして振り返る。優人は芳佳に笑い掛けながら言う。

「心配するな！俺のシールドは頑丈だ、破られたことは一度もない。お前は治療に専念しろ！」

「はっ、はい！」

優人の言葉で芳佳は治療を再開する。しばらくすると治療魔法の効果が出たのか、気を失っていたバルクホルンが目を覚ます。

「今、治しますから！」

芳佳がバルクホルンを励ますように言う。

「私に張り付いていては、お前たちも危険だ。離れろ……私なんかにかまわず……その力を敵に使え……」

「嫌です！必ず助けます！仲間じゃないですか！」

「敵を倒せ！私の命など……捨て駒で良いんだ……」

「断る」

「二人に自分を見捨てるように言うバルクホルン。その言葉を優人が突っぱねる。

「なに？」

「俺達は父親からみんなを守れって言われてるんだよ」

「それにあなたが生きていけば、私達よりもっともつと大勢の人を守れます！」

優人、芳佳が順に言う。二人の言葉にバルクホルンが答える。

「無理だ……みんなを守るなんて出来やしない。私は、たったひとりでさえ……もう行け、私に構うな」

「頼むから生きようとしてくれないか？」

「優人？」

「妹さんは、クリスマスは今この時も病院で戦ってるんだ！お前のところに帰ってこようとしてるんだ！なのにお前が逃げてどうするんだ」

「!？」

優人の言葉を聞いて目を見開くバルクホルン。会話をしている間にネウロイの攻撃はさらに激しくなっていた。

「確かにお前の言う通りだ！みんなを守るなんて無理かも知れない！」

「でも！だからって傷ついている人を見捨てることは出来ません！」

「少なくとも俺達兄妹の魔法が届く距離にいる人々は全員守ると決めている！」

「バルクホルンさんも！」

「他の仲間もだ！」

まるで事前打ち合わせたかのように交互に言葉を発する兄妹。そんな二人を見てバルクホルンは思った。

（優人の言う通りだ、私は逃げていたんだ。また誰かを守れないかも知れないという不安から逃れるために戦うことばかりを考えて……）

バルクホルンの治療が終わるまであと少しのところ、上空のネウロイが三枚の翼の先端からビームを収束して放ってきた。

「ぐっ……」

あまりに強力なビームを受け、苦悶する優人。なんとか防ぎ切るも魔法力が心許なくなってきた。

「優人！」

「バルクホルン！」

後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには残ったMG42と芳佳の13mm機関銃を持ったバルクホルンが立っていた。

「守ってくれてありがとう、やつは私が！」

そう言うバルクホルンの目には強い光が宿っていた。

「頼むぞ！エース！」

優人が笑顔で送り出すとバルクホルンはネウロイ目掛けて突っ込んでいく。

「うおおおおおおお！！」

坂本達の攻撃で露出したコアに銃弾を叩き込み、ネウロイを撃破する。すると、ミーナがバルクホルンに飛んで駆け寄ってきた。

「ミーナ」

バルクホルンがミーナに気づいて振り返る。すると、ミーナがバルクホルンに平手打ちをした。バシッと乾いた音が響く。

「何をやっているの！貴女まで失ったら私達はどうしたらいいの！故郷も何もかも失ったけれど、私たちはチーム、いえ家族でしょ！この部隊の皆がそうなのよ！あなたの妹のクリスだって、きつと元気になるわ！だから、妹の為に新しい仲間の為に死に急いじゃダメ！みんなを守るのは私達ウィッチーズだけなんだから！！」

沸き上がる想いを抑えられなくなったミーナはバルクホルンを抱きしめた。眼に涙を浮かべたその顔は隊長のものではなく、友人を想う一人の少女のものだった。

「すまない、私たちは、家族だったんだよな。ミーナ、休みを……休みをもらえるか……見舞いに行ってみる」

バルクホルンの言葉にミーナは微笑みながら頷いた。

「やっとその気になったようだな」

と坂本も微笑んでいた。

第13話 「扶桑の兄とカールスラントの姉」

バルクホルンが撃墜された日の夕方。芳佳とリーネ、ペリーヌは一足早く基地に帰投していた。

「あゝああ。結局何もやれなかった……」

「そんなことないよ」

「そうかなあ」

戦闘であまり役に立てなかったと思っっている芳佳をリーネは励ます。実際はエースであるバルクホルンを瀕死の重症から救った大活躍なのだが、怪我人を助けることが当たり前な芳佳はそれを誇ろうとしない。

「あつ……」

二人の元にペリーヌがやって来た。入隊時から何故か芳佳に敵意を剥き出しにする彼女がまた突つかかってくると思ひ、芳佳は反射的に身構える。

「……ありがとう」

ペリーヌは頬を染めて恥ずかしそうに呟く。

「えっ?……」

「一応、礼だけは言っておくわ」

「……うん！」

自分の失敗を助けて貰ったことに礼を言うペリーヌ。芳佳は予想外のことに少しキョトンとするが、すぐ笑顔で返事をする。ペリーヌはさらに続けた。

「それと、貴女のお兄様、宮藤大尉は……以前からわかっていましたが、その……素敵な方ですわね。坂本少佐の次ぐらいに……」

「えへへへ！ありがとうございますー！」

兄が誉められたことで芳佳の笑顔はさらに眩しくなる。坂本の次に素敵、というのはペリーヌからすれば最大級の賛辞である。元々、彼女は坂本が絡まないところでは優人のことも尊敬する上官として見ている。

「宮藤く！トウルーデを助けてくれたんだって？」

ハンガーにやって来たハルトマンが芳佳の背中に抱き着く。

「トウルーデ？」

「バルクホルン大尉のことよ」

トウルーデがバルクホルンの愛称だということをリーネが教える。

「いえ、あれはお兄ちゃんがいたからで……」

「なら兄妹二人でトウルーデを助けてくれてありがとう！」

大切な友人を助けてもらい、大喜びのハルトマン。芳佳も自然と笑顔になる。誰かの役に立てた実感で芳佳は高揚している。

「あつ、戻ってきた！」

リーネが優人、坂本、ミーナ、バルクホルンの帰還に気付く。芳佳達は滑走路に降りてきていた四人に手を振って出迎える。バルクホルンも照れ臭そうに笑いながら、軽く手を上げた。

◇ ◇ ◇

夜。ようやく休暇を取る気になったバルクホルンは執務室にいるミーナに休暇申請書を提出し、部屋を出た。そのまま、自室へ向かうとしたところで誰かに呼び止められた。

「バルクホルン」

声の主は優人だった。

「優人……」

「傷は大丈夫か？」

「ああ、お前達兄妹のおかげでな。むしろ負傷する前より調子が良いくらいだ！」

ガッツポーズをして絶好調であることをアピールするバルクホルン。今の彼女の表情は憑き物が落ちたかのように晴れやかだ。

「そうか。いや、治したのは芳佳だろ?」

「私と治療をしてくれたお前の妹を守ったのはお前だ、感謝している。もちろん、お前の妹にも」

「そりゃ、まあ……どういたしまして……」

ストレートに感謝され、優人は照れ臭そうに頭を掻いた。誉められることになれていないらしい。

「それと……すまなかつたな」

「何で謝るんだ?」

唐突に謝罪をするバルクホルン。優人は何故彼女が謝るのかわからなかった。

「昨晚、殴ってしまっただろ? 本当にすまない」

そう言いながら頭を下げるバルクホルン。

「なつ、何言ってるんだ!?! お前は別に悪くないだろ? 俺が余計ことを言ったから……俺こそ悪かった」

そんなバルクホルンを見て、優人は慌てて言い返す。実のところ、バルクホルンは優人の言動に腹を立てたというよりは彼が自分の妹と仲良く過ごしている姿に嫉妬して

しまっていた、というのが殴った一番の理由だったりする。

「いや！どんな理由であろうと友人に手をあげてしまったんだ！許されないのは私の方だ！」

「友人？」

「あつ、すまない。馴れ馴れしかったな……」

バルクホルンは頬を赤く染めて恥ずかしそうに言う。どうやらバルクホルンは素っ気ない態度を取りながらも、優人のことを友人だと思っていたらしい。バルクホルンはそのまま話を続ける。

「私達は歳も階級も同じだ、それにお互いに妹がいる。お前さえ良ければ、その、今からでも友人になって欲しい」

「……………」

「い、いや！嫌なら別にいいんだ！」

優人から返事がないため、不安になり眼を背けるバルクホルン。今までの態度や手をあげてしまったことを考えれば仕方ないか、と彼女は思った。しかし、優人の方はバルクホルンの言葉をが嬉しくて頬が緩むのを抑えられずにいた。

「……………今からなるのは無理だ」

「えっ？」

優人の言葉に反応してバルクホルンは視線を戻す、そこには笑顔の優人がいた。「俺達はとつくに友達で家族だろ？」

優人にそう言われてパアッ、と笑顔になるバルクホルン。普段はあまり笑わない彼女だが、その笑顔を優人は素直に可愛いと思った。

「あつ、それと」

「なんだ？」

「ミーナから聞いた。お前は書類仕事で苦労していると……」

「ま……まあな」

優人の目が虚ろになる。バルクホルンの言葉で机に積まれた大量の書類を思い出たしまったらしい。

「その書類仕事！私がやらせてもらおう！」

「えっ？」

「お前には借りがある！毎日は無理だが、3日に一度くらいは代われる！」

「本当にいいのか!?!」

「カールスラント軍人に二言はない！」

キリツとした表情で宣言するバルクホルン。ここまで言われると断りづらい。押し付けるわけではない、相手の厚意に甘えるだけだ。優人はそう心の中で言い訳をしつ

つ、バルクホルンの申し出を受けた。

「じゃあ、頼むよ」

「任せろ！」

バルクホルンは胸を張ってそう言うのと、今度は頼みごとをしてきた。

「それと機会があつたら、兄妹で妹に会いに来てくれないか？」

「もちろんだ！しかし、お前が不調になるほど悩むなんて……妹さんは一体どんな子なんだ？」

「クリスか？お前の妹と少し雰囲気似ているな」

「芳佳と？」

バルクホルンの妹が芳佳と似ている、そのことを優人は意外に思う。彼はバルクホルンをそのまま小さくしたような規律に厳しい、生真面目な少女を思い浮かべていたからだ。彼女の妹は意外にお転婆なのだろうか。

「あつ、でもクリスの方がずっと美人だな」

「……なに？」

バルクホルンのシスコンな発言に反応し、優人の眉がピクツと動いた。

「お前の妹がどれほど美人か知らないが……芳佳の方が美人だ！」

優人の方も負けじとシスコン発言をする。

「なんだと!？」

「芳佳の方が美人だと言ったんだ!」

「確かにお前の妹も美人だが……クリスの方が上だ!」

「いや、芳佳だ!」

「いやー!クリスだ!」

「芳佳だ!」

「クリスだ!」

「芳佳!」

「クリス!」

不毛な争いを繰り広げる二人の大尉、両者一步も譲らない。統合戦闘航空団に所属する二名のスパーパーエースがこんなことをしていると知ったら、世のウィッチやウィザード達は幻滅するだろう。

「……………」

「……………」

二人はしばらくにらみ合いを続ける。

「……ぷっ………」

「……ははっ………」

「ははははははははっ！」

言い争いをする自分達が可笑しく思えたのか、笑い合う優人とバルクホルン。優人は笑いながら、昨日執務室でミーナと話したことを思い出していた。

『実はトウルーデにはね……姉バカなところがあるの』

『姉バカ？バルクホルンが？』

『意外かも知れないけど本当よ……ね？あなたと似ているでしょ？』

（確かに似ているな。俺とバルクホルンは……）

言われた時は信じられなかったが、今のバルクホルンを見て納得する優人。優人はバルクホルンに向かって右手を差し出した。

「それじゃあ、改めてよろしく！ゲルトルート・バルクホルン！」

「あ……ああ！よろしく頼む！宮藤優人！」

バルクホルンはそう言って握り返す。同世代の男性とあまり関わりのない彼女にとって優人は初めて出来た異性の友人だ。嬉しさのあまり力が入り過ぎており、優人は若干の痛みを覚えた。



翌朝。廊下を走る芳佳とリーネの姿があつた。

「寢坊しちやつた！」

「芳佳ちゃん！きつともうみんな起きてるよ！」

二人は料理担当だが今日は寢坊してしまつたらしい。身だしなみからもそれが伺える。芳佳は髪に寢癖が残つており、リーネはネクタイを締め忘れている。

二人が食堂に到着すると、ペリーヌ、シャーリー、ルツキーニが入り口から食堂内を覗き込むように見ていた。芳佳は三人が一体何をしているのか気になり、声を掛けた。

「皆さんどうしたんですか？」

「あつ！芳佳、リーネ！おはよお！」

二人に気付いたルツキーニが挨拶をする。

「それがなあ……まあ、中見てみるよ」

「えっ？」

「なに？」

シャーリーに言われて、芳佳とリーネは中を見る。食堂には坂本、ミーナ、ハルトマンがテーブルに着いて朝食を待っている。夜間哨戒をしていたサーニヤとそれに随行していたエイラは今寝ているためいない。次に二人はキッチンの方に目をやる。そこにはエプロンをして朝食を作っている優人とバルクホルンがいた。

「ん？おはよう。つてお前ら何してる？」

優人が入り口の五人に気付き、声を掛けてきた。

「朝食ならすぐに出来るから、座って待っていてくれ」

と優しく微笑むバルクホルン。五人は戸惑いながらも言葉に従い、席に着いた。

「優人、味噌汁味見してくれ」

「ああ……おっ！いい味出てるな！」

「ふふっ！私の本気を出せばこんなものだ！」

バルクホルンの作った味噌を小皿を使って味見する優人と、優人に味噌汁を誉められ胸を張るバルクホルン。

「ねえシャーリー。二人つてあんなに仲良かったっけ？」

いつもと違う二人を見てルツキーニがシャーリーに訊ねる。

「いや、仕事以外で話しているとこあんまり見たことないぞ」

シャーリーもどういふことかわかっていなかった。二人を含め、後から食堂にきた五人は急に仲が良くなった優人とバルクホルンを見て、軽く動揺している。

「まるで新婚夫婦みたいだな」

「新婚！……」

「……夫婦！」

ハルトマンがにやつきながら言う。その言葉を聞き、リーネとペリーヌは顔を赤くする。

「美緒。扶桑のことわざではこういうことを『雨降つて地固まる』つて言うのかしら？」
「二人が受けたのはビームの集中放火だかな」

二人が揉めていたことを実は知っていたミーナと坂本が微笑みながら言う。

「なんかお兄ちゃん……楽しそう……」

軽く膨れる芳佳。彼女は優人とバルクホルンの仲の良さに嫉妬していた。

その数十分後、基地宿舎の廊下にて。

「芳佳だ！」

「クリスだ！」

「芳佳！」

「クリス！」

「何やってんだ？うるさくて眠れやしないぞ」

「喧嘩？」

またしても不毛な争いを繰り広げる優人とバルクホルンが呆れ目のエイラと眠そうに目を擦っているサーニャによって目撃された。

第14話「海上訓練前夜」

それはある夕方のこと。501基地内のハンガー、シャーロット・E・イエーガー大尉のストライカーユニット『P-51D(44-14888号機)』を固定している発進ユニットの上で寝ていたルツキーニが欠伸をしながら目を覚ます。

「ふあくく。あつー！」

ルツキーニは何かを見つけた。シャーリーのストライカーに引掛かけてあるゴグルだ。ルツキーニは無邪気な笑顔を浮かべて駆け寄る。

「ていつていていくん！」

ガシャン!!

「えっ?」

シャーリーのゴグルを取った拍子に、整備中だった彼女のストライカーを盛大に引っくり返してしまった。転倒したストライカーユニットはバラバラになり、こぼれたオイルと部品がハンガーの床に広がる。

「にやあああああああああああ〜っ!」

ルツキーニは両手で頭を押さえ、猫のような悲鳴を上げる。ルツキーニは慌ててスト

ライカーを起こし、元に戻そうとする。

「いちち……ど、どうしよ、どうしよ！あれ？この部品はどこだっけ？こつち？こつちだっけか……？」

無論、彼女にメカニックとしての知識は無い。部品を適当に組み合わせ、なんとか元に戻そうと試みた。

◇ ◇ ◇

同時刻、同基地内の食堂にはルツキーニ以外の11人が集まっていた。

「悪いなあ、遅くなっちゃって」

リベリオン陸軍のウィッチ、シャーリーことシャーロット・E・イエーガー大尉は苦笑いを浮かべながら、仲間達に謝罪する。

「ごめんなさい……」

「御迷惑をおかけしました……」

シャーリーに続いて、リーネと芳佳も頭を下げる。

「まったく、あなた方のせいで食事の時間がずれてしまいましたわ」

文句を垂れるペリーヌ。本日、夕食当番だった芳佳とリーネがシャーリーと共に基地

の売店に入り浸っていたために大遅刻。慌てて戻ってきた二人を優人が手伝ったものの、食事の時間が二時間程遅れてしまった。

「お前たちは一体何をしていたんだ？」

坂本は溜め息を吐きながら訊く。

「水着を……」

「ん？」

「水着を買いに……」

坂本の質問リーネが恐る恐る答える、それに芳佳が続く。

「明日着る水着をシャーリーさんに選んでもらって……」

明日は基地本島東側の海岸にて、訓練が行われる。海上で飛行不能になり、海への墜落したことを想定した訓練だ。今朝、ミーティングルームでこの話を聞いた際に海水浴だと勘違いした芳佳は万歳のポーズで喜んでいた。確かに、訓練の合間は海で遊ぶことが出来る。その体力が残っていれば、の話だが。

「いやあ、二人をより魅力的に見せる水着を選ぶのに夢中になっていたら、つい時間を忘れたんだよ」

「明日が楽しみなのはわかるけど、前日から羽目を外し過ぎてはダメよ」

頭を掻きながら言うシャーリーにミーナがやんわりと注意する。三人はもう一度謝

罪してからテーブルに着いた。

「お兄ちゃん」

芳佳は優人の隣に座ると、彼に声を掛けた。

「ん？どうした？」

「その、ごめんね。ご飯遅れちゃったし、お兄ちゃんにも手伝ってもらうことになっちゃって」

申し訳なさそうに言う芳佳に優人は笑顔で返す。

「確かにみんなにも迷惑が掛かったが、次から気を付ければ良いよ。それに……」

優人は芳佳に顔を近付け、耳元で囁いた。

「時間を掛けて選んだ水着を着た、可愛い芳佳を見るのが楽しみだし……」

優人の言葉を聞いた途端、芳佳の顔が真っ赤になる。恥ずかしさを誤魔化すためか、食事をパクパクとかき込んだ。優人がそんな妹を可愛く思っていると、彼の向かい側に座っているバルクホルンの声が聞こえてきた。

「まったく、盛大な遅刻だな。最速を目指すりべリアンが聞いて呆れる」

バルクホルンの嫌味を含んだ物言いに、むっとするシャーリー。

「なんだよ堅物、悪かったって言ってるだろ？」

「それが反省する人間の態度か!? 大体貴様は普段から軍人としての自覚が……」

「お前から静かに食事しろよ」

口喧嘩を始めたバルクホルンとシャーリーを優人が宥める。性格が正反対であるため普段からよく衝突する二人だが、険悪な感じはなく喧嘩友達のような関係だ。

「バルクホルン、シャーリーはちゃんと反省してるんだからあんまりネチネチ言うなよ」
「なっ！私はただ、この自由で野放図なりベリアンに規律を叩き込もうとしただけだ！ネチネチ言つてなどいない！」

バルクホルンはテーブルの上に身を乗る出すと、ムキになって否定する。

「自覚してないだけだろ？」

「リベリアン！貴様あ！」

シャーリーにからかわれ、憤慨するバルクホルン。どうやら優人は喧嘩を止めるはずが、火に油を注いでしまったらしい。

「おい！落ち着けよバルクホルン！」

「なんだ優人！お前はリベリアンの味方をするのか!?見損なつたぞ!!」

バルクホルンが裏切り者を見るような目で優人を睨む。

「いや、そういう訳じゃ……」

「そっだぞバルクホルン！優人とアタシは大の仲良しなんだから」

「おっ、おい！」

優人が弁明しようとする、いつの間にか隣にいたシャーリーがニヤつきながら思いつき彼の腕に抱き着く。抱き着かれた上に豊満な胸が押し付けられ、優人は顔を赤くする。

「シャーリー、当たってる当たってる」

優人が周りに聞こえない声で言う。その声はやや上ずっていた。

「ふふ……当たてるんだよ」

とニヤつくシャーリー。彼女は優人の反応を見て、楽しんでる。

「な、何をしているリベリアン！ そんなに気安く異性に抱き着くなど……」

バルクホルンの顔が真っ赤になり、ワナワナと震える手で二人を指差しながら怒鳴る。

「言つたる？ アタシらは仲良しなんだよ。それにリベリアンじゃ、これぐらい挨拶代わりだぞ」

「なっ?! リベリアン人は一体どういう神経をしているだ!!」

「少しくらいスキンシップしたって良いだろ〜？ 減るもんじやないし」

「そういう問題か!? 離れろ！ 優人が困ってるだろ!!」

そう言うバルクホルンはもう片方の腕に抱き着き、優人をシャーリーから引き剥がそうとする。

「なあ優人。バルクホルンがああ言ってるけど、迷惑か？」

「えーつと……」

シャーリーが抱き着く腕にさらに力を込め、首を傾げながら悲しげな声で聞く。無論、優人をからかうための演技だが、そんな仕草をされれば彼女にその気が無くても勘違いしてしまう。

「優人！はつきりしろ！」

バルクホルンも腕の力を強くする。優人は美女二人から両腕に抱き着かれ、胸をムギユツと押し付けているためガチガチになってしまっている。世の男達がこの光景を見れば、優人に対し羨望や嫉妬のこもった目で見るだろう。

「と、殿方に人前で堂々と抱き着くなんて……」

「二人とも、大胆……です……」

「宮藤大尉……モテモテ……」

（私もサーニヤから、あんな風に抱き付かれないナ）

「にやはははは！優人、顔真っ赤！」

「優人って意外とヘタレなのね」

「はっはっはっはっ！」

顔を赤くしながら呟くペリーヌとリーネとサーニヤ。やや邪な考えを抱くエイラ。

優人の様子を面白がるハルトマン。優人をヘタレ認定をするミーナ。三人を微笑ましく思ったのか、高笑いをする坂本。メンバーがそれぞれ違った反応をする。すると、芳佳がガタツと音を立てて席から立ち上がった。

「バルクホルンさん！シャーリーさん！お兄ちゃんから離れて下さい！」

芳佳はそう怒鳴ると正面から優人に抱き付き、バルクホルンとシャーリーから優人をひっぺがす。

「なっ!？」

「うおっ!？」

普段の芳佳からは想像もできないほどの力に驚く二人。芳佳は優人に抱き付きながら、二人を睨んでいる。

「ハイハイ。トウルデー、シャーリーさん！それくらいにして食事に戻りなさい、みんな迷惑してるのよ?」

ミーナが手を叩きながら言う。

「ぐっ……すまない」

「は〜い」

バルクホルンはばつが悪そうな表情で謝罪し、シャーリーは気の抜けた返事をする。

「あの、芳佳?」

「……………」

(離れないな……)

ようやく解放された優人は席に戻ろうとするが、芳佳が抱き着いたまま離れようとしていない。むしろ先程よりも腕の力が強くなっている、声を掛けても、心ここにあらず、と言った感じで反応がない。

「芳佳！」

優人は少し大きめの声を出した。すると、芳佳は我に返ったようにビクツとなる。

「席に戻りたいんだか？」

「あつ、ごめんなさい」

芳佳はそう言うと、優人から離れ席に戻る。優人も席に着き、食事を再開した。食事が終わる頃、ミーナがあることに気付いた。

「あら？ルツキーニさんはどこかしら？」

「そういえば、見当たらないな。まだどこかで寝ているのか？」

と、坂本。昼寝をしても食事の時間には目を覚まして、食堂に現れる彼女が今日に限っていない。

「俺が探して来ようか？」

みんなよりも早く食事を終えていた優人がルツキーニ搜索を申し出た。

「お願い出来るかしら?」

「了解した」

優人はミーナ頼みを快諾すると席を立ち、食堂から出ていく。

「それじゃあ、芳佳さん、リーネさん後片付けお願いね」

「はい」

「……………」

リーネからは返事が来たが、芳佳は何か考えごとをしているのか返事がなかった。

「芳佳さん?」

「え? あつ、はい! わかりました」

芳佳はミーナが自分に呼んでいることに気付き、慌てて返事をする。ミーナはそんな

芳佳を見て、首を傾げた。

◇ ◇ ◇

優人はルツキーニを探しに食堂から出ると、彼女の居そうな場所を考え始めた。基地中に存在する彼女の寝床のどれかに居るだろうが、その数が多い。それらすべてを見て回るの骨が折れる。

(そう言えば、シャーリーが昼間にストライカーを改造してたな)

ルツキーニはシャーリーといることが多い。昼間、シャーリーがストライカーのエンジンの改造と試験飛行を行っていたので、もしかしたらと思ひハンガーへと向かう。

「あつ、いたいた」

優人はさつそくルツキーニを見つけた。優人は彼女の元へ近付いていく。

「ふー…これで元通り……だよね？」

顔と服をオイルでまみれにした状態でルツキーニは眩く。どうやらストライカーユニットは外見だけなら元通りに出来たらしい、外見だけなら。

「うええ、オイルでべとべとお。何か拭くもの拭くもの……」

「ルツキーニ？」

「にやつ!!」

急に後ろから声を掛けられ、ルツキーニはビクツとなる。ゆつくり後ろを振り向くと彼女を探してきた優人が立っていた。彼は気付かれずに人の背後取るのが上手い。気配を消す技術を身に付けているのか、単に影が薄いだけなのか。

「ゆ、優人。どうしたの？」

「いや、ごはんの時間になっても来ないから探しに来たんだよ」

ルツキーニの質問に優人が答える。彼女がシャーリーと優人のストライカーを壊し

たことはバレていないらしい。ルツキーニはホツと胸を撫で下ろす。

「ルツキーニこそどうした？汚れてるな？」

「えっ!?!いや、その……それよりもごはん行こうよ！お腹空いちやつた！」

ルツキーニはそう誤魔化すと、全速力ハンガーから出て行った。優人はルツキーニの様子がおかしいとは思ったが、特に追及はしなかった。

第15話「海上訓練とかき氷の思い出」

海上訓練当日。501のメンバーは集合場所であるミーティングルームに集まっている。美しい水着姿を披露しているウィッチ達の中にサーフパンツ履いているウィザード、宮藤優人の姿があった。

(今さらだが、女の中に男が一人っていうのはなあ……)

落ち着かない様子の優人。普段は友人や家族のような感覚でウィッチ達と一緒にいる彼だが、今は水着に着替えて肌を露出しているせいで異性として強く意識してしまっている。

水練着姿の坂本やワンピース水着を着ているバルクホルンやハルトマン、リーネは比較的露出が少ないが、ミーナをはじめとする他のウィッチ達はセパレーツタイプの水着だ。特にミーナとサーニャはトップを胸元や背中、ボトムは両サイドを紐やシングルストラップで縛っているセクシーなデザインだ。目のやり場に困りつつも、つつい彼女達胸やら足やらに目を向けてしまう。優人も男だと言うことだ。

「お、お兄ちゃん……」

「ん？どうした芳……佳……」

優人が振り向くとそこには水着姿の芳佳がいた。水着といつても扶桑の水練着ではなく、背中が大きく開き両脇も穴が空いているややハイレグ気味のワンピース。それを着ている彼女はいつもより大人な雰囲気だ。

「どう……かな？」

芳佳は顔を赤くして、もじもじしながら水着の感想を求める。

「そ、それが？……」

「うん、基地の売店でシャーリーさんを選んでもらったの」

優人は予想外の妹の水着姿に言葉を失う。兄が何も言わないため、不安になった芳佳は目をギョツと瞑る。しばらく見とれた後、優人はようやく口を開いた。

「よく似合ってる！すごく可愛い！」

優人は興奮気味になりながら芳佳の水着姿を褒める。この喜び様、さすがはシスコンである。

（でかした！シャーリー！）

おそらく優人はシャーリーに対して、今までで一番感謝したことだろう。

「本当？よかつたあ！」

兄に褒められ、パアツと笑顔になる芳佳。シャーリーに着てみるよう言われた時は大人っぽ過ぎる、笑われたら、似合ってなかったらどうしようと悩んでいた彼女だが優人

に寝められたことでそれらの不安は芳佳の頭から消え失せた。

「あ、それとねお兄ちゃん」

「うん？」

「訓練が終わったら遊べるみたいだし、一緒にどうかな？」

頬を軽く染めながら言う芳佳。断る理由もないのだが、優人はある疑問を抱いた。

「いいけど、リーネや他の娘とは良いのか？」

と優人。兄妹とは言え、彼は男の自分と遊ぶよりは同世代の女の子と一緒に過ごした方が楽しいはず、と考えている。

「リーネちゃんとも遊ぶよ！ただ、お兄ちゃんとは何年も一緒に海水浴をしていないから……」

と俯く芳佳。優人とは何年も離れていたため、最後に一緒に海水浴をしたのは芳佳が小学校に上がる前だ。芳佳は離れていた分、優人と新しい思い出作りがしたいらしい。それは優人も同じだ。

「迷惑かな？」

「そんなことないさ。俺も芳佳と海水浴したいから」

「お兄ちゃん」

優人からOKの返事を貰って喜ぶ芳佳。兄と海水浴が出来ることが余程嬉しいよう

だが、妹と過ごせると言うことで優人の方もかなり浮かれている。

「優人、芳佳さん。二人の世界に入らないでくれるかしら？」

と頭を押さえながら言うミーナ。彼女の言葉で宮藤兄妹は現実に戻った。周りを見てみれば、ウィッチ達がそれぞれ自分達に呆れて溜め息を吐いていたり、温かい目で見ていたり、ニヤついた表情を浮かべていたりしていた。

「妹との思い出作りを大切にするとは、さすが優人だ」

うんうん、と頷きながら優人を称賛するバルクホルンもいた。

「……あはははは」

「ご、ごめんなさい」

優人は苦笑しながら頭を掻き、芳佳は恥ずかしさで顔を真っ赤にする。

「あたし達は誘ってくんないのかあ？」

「遊んでくれないのおく？」

とニヤついているシャーリーとルッキーニ。ちなみにシャーリーはトレードカラーでもある深紅のセパレーツの水着を、ルッキーニはタンキニタイプの水着を着ている。

「いえいえ！皆さんともちゃんとあそびますから！」

芳佳は顔の前でぶんぶんと手を振りながら言う。

（やっぱり、すごいな……）

一方、優人はスイカのようなシャーリーの胸を見て、固唾を呑む。水着によって強調されている部隊最大のダイナマイトボディ。彼は昨晚、それを押しつけられていた。しばらく見詰めていると、優人の視線にシャーリーが気付いた。

「どこ見てるんだあ〜？」

優人は慌てて目を逸らすが、時既に遅い。シャーリーはクスクスと笑い、周りに聞こえない声で語りかける。

「別に変なことでも悪いことでもないさ。年頃なんだし、健全健康！」

ニツと笑うシャーリーはさらに言葉を続ける。

「でも、そういう視線は意外と解るから気を付けるよ？」

「……善処します」

優人は罰が悪そうな顔をする。以前、ルッキニーに言われたことを思い出し、改めて気を付けようと心の中で誓うのだった。



それから十数分後の基地本島東側の海岸。

「やつほーう!!」

海上訓練を行うはずだが、完全に海水浴気分なシャーリーとルツキーニは海岸に着くなり駆け出し、海に向かって勢い良く飛び込む。二人が水柱を作つて飛び込んだ先には、見事なクロールを披露しているバルクホルンは競泳するかのように全力で泳いでいた。彼女に続くハルトマンはキュートなお尻を海面から出しながら犬かきをしている。

「肌がヒリヒリする……」

「腹へつたナ……」

サーニヤとエイラは泳がずに浜辺で海を見つめながら大人しく座っていた。二人はオラーシヤとスオムスの出身であり、母国と比べて暑く、眩しいブリタニアの太陽は苦手らしい。

「よつと……こんなもんかな?」

サーニヤとエイラのすぐ隣では優人が固有魔法を利用して、いくつかの氷を作り、それらをテーブルの上に並べていた。エイラはその様子に目を細めた。

「ナニしてんだオマエ?」

「それはなんですか?」

サーニヤがテーブルの上に置いてあるハンドルの付いた機械を指差して訊ねる。テーブルには他にガラスの器が人数分置いてあつた。

「うん?これはな、とっても良いものだよ」

優人は笑いかけながら思わせ振りに言う。氷の一つを機械にセットし、ハンドルを回し始めた。サーニヤとエイラは彼の意図がわからず、首を傾げた。

「なんでこんなの履くんですか!？」

突然、大声が海岸に響き渡る。優人とエイラ、サーニヤが声のした方に目をやると、芳佳とリーネは訓練用のストライカーユニットを履かされていた。

「何度も言わずな! 万が一海上に落ちた時の訓練だ!」

「他の人達もちゃんと訓練したのよ。あとは貴方達だけ」

竹刀を片手に吼える坂本と慈愛に満ちた表情を浮かべるミーナ。これから芳佳とリーネはストライカーを履いたまま、海に入るのだ。ミーナの言うようにこの訓練は他のメンバーも既に行っている。もちろん優人もだ、彼はこの訓練で溺死しかけたことが軽いトラウマになっている。

「つべこべ言わずさっさと飛び込め!!」

そして坂本の怒鳴り声で芳佳とリーネは悲鳴を上げながら、海へ飛び込む。しかしユニットの重さで、そのまま沈んで行く。

「……浮いてこないな」

坂本は懐中時計を取り出し時間を見る、既にかなりの時間が経っていた。

「飛ぶようにはいかんか」

溜め息交じりに言う坂本。ストライカーを履いて空を飛ぶのと海を泳ぐことはまったく違う。空を飛ばば羽のように軽いストライカーユニットも海の中では重石にしかならない、初めてこの訓練を行えば二人のようになるのは当然だ。坂本もそれを理解しているはずだが、訓練を受けずに空を飛べた芳佳なら海でも、と期待していたのかもしれない。

「そろそろ限界かしら？」

ミーナは指を顎に当てながら言う。ようやく二人が海面から顔を出した。二人は酸素を求め、沈まないよう必死に手足をバタつかせる。

「いつまで犬かきをやっとするかー！ほら、ペリーヌを見習わんかー！」

と、坂本が言う。すると、溺れかけている二人の後ろをペリーヌが泳いでやって来た。「まったくですわ」

悪戦苦闘する二人を横目にペリーヌは貴族の令嬢らしい優雅な平泳ぎで通り過ぎて行つたのだつた。

「そんな……いきなり……むりっ……」

芳佳とリーネは水泡だけを残し、再び海の中に沈んで行つた。



「よし！みんな休憩だあ！」

坂本の号令がかかり、隊員達は岸へ上がった。訓練で疲労困憊の芳佳とリーネもユニットを引きずり、海から這い上がってくる。息も絶え絶え、二人は砂浜まで戻ると倒れ込んだ。疲労せいで身体が鉛のように重く感じていることだろう。

「二人とも大丈夫か？」

心配そうな顔をした優人が二人の元へ近寄り、声を掛ける。彼は競泳を終え、先に戻ってきていた。

「お兄ちゃん。私、もう動けない……」

「私も……」

寝そべったまま答える芳佳とリーネ。今の二人には顔を上げるのも億劫らしい。優人はあははは、と苦笑する。

「お疲れ様。これでも食べて元気出せ」

そう言う優人の手にはかき氷の入った器が二つ。

「あつ！かき氷！」

優人から差し出されたかき氷を見て、芳佳は疲労などなかったかのように飛び起きた。

先程、サーニヤが訊ねた機械は氷削機だった。固有魔法を使っていたのはかき氷の材料が必要だったからだ。仲間達に振る舞うつもりのかき氷は初めて海上訓練を受ける芳佳とリーネへのご褒美も兼ねている。

「ほら、リーネも」

「かき氷？」

ゆつくりと身体を起こし、かき氷の入った器とスプーンを受けとるリーネ。かき氷を知らないのか、首を傾げている。

「いただきま〜す〜ん〜おいしい」

「ホント！冷たくて甘くて、美味しい」

かき氷を口に含み、笑顔になる芳佳とリーネ。二人が食べているかき氷には王道であるイチゴのシロップがかかっている。ひんやりした氷とイチゴの甘さが五臓六腑に染み渡る。

「それはよかった」

用意した甲斐がある、と優人も嬉しそうに笑う。他のウィッチ達にも既にかき氷が配られていた。

「こんなのがウマイのか？」

氷を削ってシロップをかけた程度のものが美味しいのか、と怪訝そうなエイラ。とりあ

えず一口味見する。

「ん……美味しいナ」

「……美味しい」

エイラだけでなく、サーニヤもかき氷がお気に召したようだ。

「つんめたあ〜い！」

「ん〜！美味しい〜！」

満足気なハルトマンとルツキーニ。勢いよくかき氷を掻き込んでいる。

「あつ！そんなにガツガツ食べたら！」

「うっ……くうう……」

「うじゃあ……痛い」

様子を見ていた芳佳が慌てて注意するも遅かった。二人の頭にキーン、という音と共に痛みが走る。これは急激な冷たさが痛みに変換され脳に伝わって起きる頭痛。所謂、アイスクリーム頭痛だ。

「がつついたりするからだ」

とバルクホルンから厳しい一言。そう言う彼女も頭痛に襲われているのか、眉間にシワを寄せて痛みを耐えている。

「アタシはこれで！」

シャーリーはイチゴのシロップではなく、彼女が普段なら愛飲しているリベリオンのコーラを掛けていた。

「私達はサルミアッキ乗せてみようカナ?」

「エイラ……やめて」

コーラをかけるシャーリーを見て、母国スオムスの伝統的なお菓子を乗せようとするエイラをサーニヤが本気で止める。余程嫌なのか、必死さが表情に現れている。

「あれ?」

器が一人分余っていることに気付く優人。誰かがまだかき氷を口にしていない。周りを見渡してみると、少し離れたところでペリーヌがしゃがみこんでいるのが見えた。優人は彼女の様子に違和感を感じ、近付いて声を掛ける。

「ペリーヌどうした?」

「宮藤大尉!いい、いえ何でもありませんわ」

慌てた様子で答えるペリーヌ。彼女は苦悶の表情を浮かべながら、手で右足を押さえていた。優人がやや強引にペリーヌの腕を掴み、手をどけてみる。

「この傷どうした!?!」

ペリーヌの足には何か鋭い物で切ったような傷があった。急に真剣な眼差しに変わった優人がペリーヌに迫る。

「浜辺にガラスのようなものが埋まっていたみたいで……」

不注意で怪我をしてしまったことが恥ずかしいのか、目を背けるペリーヌ。

「でも、問題ありませんわ。痛っ!」

そう言っただけでペリーヌは立ち上がりとうとする足に激痛が走る。深く切ってしまったのか出血が止まらず、彼女のきめ浜辺の砂を赤く染める。治療が必要だが、芳佳は訓練で疲れている。バルクホルンの時のように治癒魔法をまとも使えるか怪しい。

「仕方ない」

「え? きやつ!」

ペリーヌの視界が大きく変わり、目の前に優人の顔が現れる。優人はペリーヌを抱き上げた、所謂お姫様抱っこの体勢である。

「た、大尉!? 何をなさいますの!」

「その怪我じゃ歩けないだろ?」

優人の行為にペリーヌは顔を真っ赤にして狼狽える。優人は構わず基地の医務室へ向かって駆けていく。

「文句なら後で聞くよ。医務室に着いたら下ろすから我慢してくれ」

「……では、御願いますわ」

下手に騒いだから、今の姿をシャーリーやルッキーニに気付かれる。二人にからかわ

れるのが嫌なのか、やけに素直に応じるペリーヌ。彼女は耳まで真っ赤だった。

ウィッチ達は優人とペリーヌが去った後もかき氷パーティーを続けていた。優人が誰にも告げずに医務室へ向かったため、誰も二人がいなくなったことに気付いていないようだ。

「芳佳ちゃん嬉しそうだね」

リーネが自分の隣にいる芳佳に声を掛けた。芳佳は鼻歌を歌いながらかき氷を食べている。

「なんか懐かしくなっちゃって」

「懐かしい?」

「うん。小さい頃、お兄ちゃんがよく作ってくれたの」

芳佳は軽く頷くと昔語りを始めた。



それは芳佳が5歳、優人が9歳の時の夏の話だった。当時、二人の家、宮藤診療所の近所にアイスクリーム売りをしている年配の男性がいた。アイスクリームが食べたかった芳佳は頑張ってコツコツとお小遣いを貯めた。夏の終わり頃、ついに買うことが

出来たのだが……。

『うわあああああん!』

『芳佳、どうしたの?』

優人が家で読者をしていると、服を汚した妹が泣きじやくつて帰ってきた。アイスクリームを買いに行き、喜んで帰って来ると思っていたのが泣き顔だったため、優人は喫驚している。

『ぐすつ……アイス、落としちやつたの』

『あゝ、そういうことね』

納得した優人は芳佳の服についた土を払いながら、詳しく話を聞く。買うまではよかったが、喜びのあまり家に向かって駆け出した芳佳は途中で転んでしまい、アイスを地面に叩きつけてしまったらしい。

妹がアイスを買うためだけに夏のはじめからお小遣いを貯めていたことは優人も知っていた。そのことや今の妹の気持ちを考えると非常に心が傷んだ。

『ほらほら、泣かないの』

『うっ……だつて……だつてえ』

優人が頭を撫でて慰めてやるが、芳佳は中々泣き止まない。優人は困ったように笑うと芳佳に居間で待つように言って、台所へ向かった。しばらくして、戻ってきた優人は

細かく削れた氷が盛られている茶碗を持ってきた。

『これって?』

『雪だよ』

優人が持つてきたのは削った氷に砂糖を振り掛けた『雪』と呼ばれるもので、いちごやレモンのシロップが登場するまでかき氷はこちらが主流だった。

在り合わせで急遽用意したもので、とてもアイスの代わりにはならない。しかし、芳佳はそんなこと気にしなかった。

『あつ、美味しい!』

一口食べると芳佳の表情がパアツと明るくなった。

『そっか』

つられて笑顔になる優人。苦肉の策で用意した代用品、それでも妹は喜んでくれた。優人はそれだけで幸せな気分になる。

『お兄ちゃんは料理上手だね!』

『料理ってほどじゃないし、こんなの誰だって上手く作れるよ』

材料さえあれば、と付け加える優人。芳佳はすぐさま否定した。

『そんなことないよ! すごく優しい味がするよ!』

『優しい?』

優人は首を傾げる。自分が味見した時は普通に甘かったただけなので、優人には芳佳の言っていることがわからなかった。

『ありがとうお兄ちゃん!』

『!……う、うん』

向日葵のような笑顔で礼を言われた優人は照れ臭いのか、軽く頬を染めてそっぽ向いていた。

◇ ◇ ◇

「へー、そんなことがあったんだ」

芳佳の思い出話を聞いたリーネはにこやかな笑顔を浮かべる。宮藤兄妹の昔話で心が和んだようだ。

「優しい兄さんだな」

芳佳の話に聞き耳を立てていたシャーリーが顔を見せる

。彼女は一人っ子なので、兄のいる芳佳のことを少し羨ましく思っている。

「はい!・自慢のお兄ちゃんです」

大好きな兄のことを褒められた芳佳は誇らしげに空を仰ぐ。

「あれ？」

空を見上げていると太陽の前を何か横切ったことに気付いた。

「どうしたの？」

リーネもつられて空を見上げながら、芳佳に訊く。

「今、太陽のとこ、何か横切った」

「へ？」

気の抜けた声を出すリーネ。シャーリーも視線を空に向ける。

「何が？」

太陽を凝視するシャーリー。すると、一つの機影が見えた。彼女は瞳に映ったものが

何かをすぐに理解した。

「敵だ！」

「あ！」

「ネウロイ！」

シャーリー、リーネ、芳佳は順に叫ぶ。真剣な表情に変わったシャーリーは踵を返し、

迎撃に出るため基地へ向かって走り出した。

「シャーリーさん！」

芳佳とリーネはシャーリーの後を追おうとするが、海上訓練の疲労がまだ回復してい

ない芳佳は滑りこける。その直後、ネウロイの出現を知らせるサイレンが島全体に鳴り響いた。それを聞いて、ウィッチ達も基地へと駆け出す。

「敵は一機！レーダー網を掻い潜って侵入した模様！」

岩場に設置してある電話で情報を受け取った坂本がミーナに伝える。

「もう！また予定より二日早いわ！」

ミーナは厳しい表情で不満を吐露する。

「誰が行く？」

「既にシャーリーさん達が動いているわ！」

坂本の問いにミーナが基地の方を見ながら答えた。

第16話 「ブルー・ブルミエとの一時とグラマラス・ シャーリーの音速突破」

「あつたあつた」

医務室に來た優人は救急箱を見つけた。ベットの端にペリーヌを座らせると、彼女の前に跪いて手当てを始める。ペリーヌのお嬢様らしい容姿と優雅な雰囲気も相俟って、優人の姿は姫に忠誠を誓う騎士のようだった。

「いつ……」

包帯を巻いている途中で、ペリーヌは一瞬だが苦痛に顔を歪めた。

「あつ、悪い」

「大丈夫ですわ。どうぞ、続けてくださいまし」

ペリーヌに言われ、優人は手当てを再開する。優人は診療所の息子。医学に関しては素人だが、応急処置程度ならば、ある程度心得ている。初陣を飾った扶桑海事変やリバウ基地でも仲間達の傷を見ていた。今回は久々だったのか、少しだけ荒っぽい。

「とりあえず、これで大丈夫だな」

包帯を巻き終えた優人は救急箱を片付ける。ペリーヌは彼の手当てに感謝し、深々と

頭を下げた。

「ありがとうございます、宮藤大尉」

「せっかく綺麗な足をしているのに、傷を残すわけにはいかないからな」

「褒めても何も出ませんわよ？」

と照れを隠すかのようにペリーヌは髪をかきあげた。美しいブロンドがふわつと宙に浮かぶ。優人はその仕草に少しだけドキツとした。ふと、彼はペリーヌの水着を改めて見た。彼女の水着は青のセパレートツタイルで大きめのトップで清楚さを、小さめのボトムでセクシーさを、そしてフロントにあしらわれたリボンで可愛さを演出している。

「なんですの？」

優人の視線にペリーヌが気付いき、怪訝そうに彼を見る。

「馬子にも衣装、とでもおっしゃりたいのかしら？」

ペリーヌは軽く悪態をつくど、腕を組んでそっぽ向いた。相変わらず当たりがきついように見えるが、これでも以前に比べればかなり軟化している。

「あつ、いや……似合ってるなって思ってたさ」

「えっ？」

優人からの予想外の言葉に目を丸くするペリーヌ。優人はさらに続けた。

「ペリーヌは気品さや優雅さとマッチして大人っぽい。なんて言うか……すごく綺麗

だよ」

「……………」

「……………」

「……………」

(これつてもしかして……軽いセクハラ?……)

優人は純粋にペリーヌの水着姿を褒めたのだが、彼女が何も言わないため、地雷を踏んだかもと優人は冷や汗を掻く。

「お、お褒めの御言葉をありがとうございます」

ペリーヌは頬を染め、礼を言う。面と向かって異性に容姿を褒められたことがあまりないのだろうか。

(ペリーヌって、こんな顔もするんだな)

優人はペリーヌの顔をまじまじと見る。正直なところペリーヌに苦手意識があった優人だが、今の彼女のことは可愛いと思っている。

「さて、そろそろ着替えたよな?更衣室まで送るよ」

優人はそう言うのと再びペリーヌを抱き上げた。すると、ペリーヌの口から可愛らしい声漏れる。

「ひゃっ!……大尉!もう抱えて頂く必要はありませんわ!」

「無理はするなよ。傷が塞がったわけじゃないんだ」

ペリーヌの身を案じる優人。包帯を巻いたといつても、足を床に着けば痛みが走る。無理をすれば、包帯に血が滲むこともあり得る。

「で、でも——」

「基地には他に誰もいないんだ。見られる心配はないよ」

「そういう問題じゃー……いえ、わかりましたわ」

根負けして大人しくなるペリーヌ。優人のこういった強情なところは妹の芳佳とどこか似ている。ペリーヌは抱えられている時点で自分に拒否権はない、怪我を悪化させたら軍務に響く、等の言い訳をして自分を納得させていた。しかしながら、彼女は満更でもなさそうにも見える。

（優しくて、頼もしくて……宮藤さんがお慕いするのも頷けますわね……）

優人の横顔を眺めるペリーヌの口元は自然と緩んでいた。

「どうしたんだ？ニヤニヤして」

「もし私に兄がいたらこんな感じかと思ひまして……」

ネウロイの侵攻で家族と故郷を失ったペリーヌ。気丈に振舞っていても、内心では辛い時に甘えられる兄か姉のような存在を欲していたのかも知れない。ペリーヌは坂本の件とはまた違った理由で芳佳に嫉妬してしまいそうな自分に苦笑する。

「ペリーヌも妹みたいなものだよ」

「私が？」

「うん。寂しがりやなくせに意地っ張りな妹」

「私は貶されていますの？」

ペリーヌの眉毛が不快そうにピクピクと動く。

「芳佳だけじゃなく、お前やリーネ、ルッキーニやサーニャにエイラ。みんな俺の可愛い妹だよ」

部隊にいる歳下ウィッチの殆どを妹のようだと言う優人。同じく歳下であるはずのハルトマンやシャーリーが妹分に入っていないようだが、理由は何となく想像できる。

「ふふ、ずいぶんと大勢の妹さんをお持ちですね。『お兄様』♪」

「なんか照れ臭いな……」

『お兄様』という言葉に反応して、今度は優人が頬を染める。妹同然と思っているも、実際にそう呼ばれるのは照れ臭いようだ。

「あら、嬉しそうに見えますけど？よろしければ、時々こう呼びたいでしょうか？」
優人は何も答えず、恥ずかしそうに目を逸らした。ペリーヌは優人の様子を見て、悪戯が成功した子どものようにクスクスと笑う。

やがて、二人は更衣室前の廊下に到着する。海上訓練後、風呂で砂や海水を落として

から着替えるために更衣室の脱衣棚のカゴの中にはウィッチ達の制服やズボンが収まっている。ちなみに優人の入浴はウィッチ達の後となっている。

「あつ、しまった」

優人は気付いた。ペリーヌを連れてきたはいいが、男である自分が彼女の入浴や着替えを助けるわけにはいかない。とりあえず、隣にある休憩所のソファアにペリーヌを降りした。

「もう、こういっただことは先に気付いて頂かなくては困りますわ」

呆れたように言うペリーヌ。優人は誤魔化すようにはは、と乾いた笑い声を上げる。優人の抜けているところを知り、心の中で言った“頼りになる”を取り消したくなった。

「とりあえず、ここで待つてくれ。誰か呼んで来るよ」

「あつ、あの大尉」

踵を返して休憩所から離れようとする優人をペリーヌが呼び止めた。

「ん？」

「訊いてはいけないことだったら申し訳ないのですけど……」

ペリーヌが遠慮勝ちに訊ねる。

「大尉の固有魔法は、妹さんとはまったく違うものですわよね？」

ペリーヌは以前からの疑問をぶつけてみた。宮藤家、正確には母方である秋元家の血を継いで生まれたウィッチないしウィザードは皆強力な治癒魔法を受け継いでいる。それを活かして代々診療所を営んできた。しかし、芳佳の兄であるはずの優人は治癒魔法を受け継いでおらず、まったく関連のない攻撃系の固有魔法を使う。

「えーつと……それは」

優人は頭を掻きながら口ごもる。ペリーヌの質問に困っているようだが、その瞳には僅かに影が射していた。

「まあ、調べればわかることだから言うけど——」

優人が意を決して説明しようとする、基地内にネウロイ襲撃を知らせるサイレンが鳴り響いた。

「ネウロイ!？」

「くそっ！また予報が外れた！」

優人はウンザリしたように怒鳴る。迎撃に出るため、ハンガーで向かおうとする彼をペリーヌが再び呼び止めた。

「お待ちください大尉！私も行きますわ！」

「何言ってるんだ！お前は怪我してるだろ！」

「ストライカーを履けば、足の怪我等気になりませんわ！」

そうやってペリーヌは痛みを耐えながらよろよろと立ち上がり、ハンガーへ向かおうとする。彼女の両肩をガシツと掴んで引き留める。

「ほら、痛むだろう?」

「くっ……」

渋面になるペリーヌ。しかし、彼女自身、今の自分がいつでも足手まといだということとはわかつている。仲間の足を引っ張る訳にはいかない、とペリーヌは大人しく座り直し、優人を上目遣いに見上げた。

「大尉、ご武運をお祈りいたしますわ」

「ありがとう。ペリーヌの分も戦ってくるよ」

優人はペリーヌに微笑み返すと、ハンガーへ向かって駆け出した。

「お気をつけて……お兄様」

ペリーヌは足に巻かれている包帯をいとおしいそうに見つめながら呟いた。



その頃、いち早くネウロイに気付いた芳佳達三人は基地の滑走路近くに到着していた。

「は、走るのも速い……」

芳佳とリーネを大きく離して走っていくシャーリー。彼女の背中を見ながら芳佳は呟く。芳佳とリーネは訓練の疲れもあつてか、ハンガー目前でへばってしまっている。

「シャーリー!」

「優人! もう来てたのか?」

シャーリーがハンガーにたどり着くと既に優人が自分の零式の魔導エンジンを始動していた。着替える暇がなかつたため、水着のままユニットを履いている。シャーリーも優人に続いて、自身のP-51に魔法力を流してエンジンを始動する。

「宮藤優人! 発進する!」

「イエーガー機! 出る!」

優人は13mm機関銃をシャーリーはBARと愛用のゴーグルを装備して出撃する。

「シャーリーさんとお兄ちゃっ!? ……はうっ!」

芳佳が自分より先にハンガーに来ていた兄に驚く暇もなく、優人とシャーリーは滑走路にいた芳佳の頭上スレスレを飛んで離陸した。そのため芳佳は前のめりに倒れ、空に向かって尻を突き出すような姿勢になる。

「大丈夫!」

「むう……」

自分を心配するリーネに芳佳は滑走路にぶつけてしまった顔を押しさえながら答える。

「芳佳ちゃん！ 私たちも！」

「うん！」

二人は自分達のストライカーユニットへ急いだ。

◇ ◇ ◇

「優人、シャーリーさん、聞こえる？」

ネウロイ迎撃のため、空へ上がった二人のインカムに通信が入る。

「ミーナか？」

優人はミーナからの通信に応答する。現在、基地のハンガーには3つほど並べられた木箱の上に地図や通信機を置いた簡易指揮所が設置されている。

「敵は一機、超高速型よ。既に内陸に入られてる」

「敵の進路は？」

シャーリーが訊ねる。ミーナは地図の前にいる坂本に目をやる。同時に坂本はネウロイの進行方向に合わせて地図上にまっすぐ線を引き、ネウロイの目標と思われる場所に印を付ける。

「方角はここから西北西、目標はこのまま進むと……ロンドン！」

坂本はミーナと顔を見合わせると、通信機のマイクを自分に向ける。

「ロンドンだ！ シャーリー、直ちに単騎先行せよ！ お前のスピードを見せてやれ！」

シャーリーに先行するよう指示を出す坂本。速度重視の改造が施されたストライカーユニットを駆る彼女に優人は着いていくことが出来ない。かといってシャーリーが優人に合わせて飛んではネウロイがロンドンに到達してしまう。

「了解！」

シャーリーはゴーグルをかけてスピードを上げた。あっという間に最高速度に達する。慌てて空に上がった芳佳やリーネはもちろん、併走飛行をしていた優人のことも引き離していた。

「せっかく出撃したのに出番は無さそうだな」

遠ざかっていくシャーリーの背中を見ながら優人は呟く。



「頼んだわよ、シャーリーさん」

と呟くミーナ。彼女と坂本が滑走路から空を見上げているとルツキーニが大分遅れ

て基地に戻ってきた。

「あく、シャーリー行っちゃった。まさか、*「あのまま」*なのかな……」

と不安そうに呟くルツキーニ。坂本とミーナは彼女の言葉を聞き逃さなかった。

「何が*「あのまま」*なんだ？」

坂本がルツキーニに聞いただす。

「えつとね。昨夜あたし、シャーリーのストライカーをね……あひつ?!」

ルツキーニは坂本の問いに答えようとするが途中でただならぬ気配を感じ、身をすくませる。

「……あ、あの……何でも……ないです」

ルツキーニがそう言いながら振り返ると明らかに目が笑っていないミーナがいた。

「続けなさくい。フランチエスカ・ルツキーニ少尉、うふふふ」

優しいが威圧のこもった声で言われ、ルツキーニの顔は青ざめる。彼女は観念して昨晚、シャーリーのユニットを壊してしまったこと。そして、それを適当につなぎ合わせて形だけ取り繕っていたことを説明した。

「何だつて!?!」

そのことはインカムを通して、すぐに優人にも知らされた。シャーリーのユニットの状態を知り、優人は顔には動揺の色が伺える。

『シャーリーにも帰投するように呼び掛けているんだが、応答がないんだ!』
「わかった!俺が直接連れ戻す!」

そう言つて、優人はスピードを上げた。追い付いてきた芳佳とリーネも後に続く。シャーリーのストライカーユニットは奇跡的に動いているようなものだ。このまま飛び続けられ、良くて空中分解。最悪、魔導エンジンが吹き飛ぶ可能性もある。

「離される〜!」

「追い付けないよ〜!」

三人は必死に追い掛けるが、シャーリーとの距離はどんどん開いていく一方だ。

「シャーリー!おい!シャーリー!」

優人はインカムでシャーリーに呼び掛ける。彼は焦っていた。

(なんだ?全然加速が止まらない。今日はエンジンの調子がいいのか?)

一方のシャーリーは自分のユニットの状態がいつもと違うことに気付き始めていた。しかし危機感等はなく、むしろ加速の止まらないD-51に高揚していた。

(この感じ。似てる……似てる……あの時と!)

シャーリーの脳裏にボンネヴィル・フラッツの記憶が蘇る。そこは表面が塩で覆われたリベリオン大陸の中央にある平原。多くのスピード狂が自分のマシンを持ち込み、速度を競った。軍に志願する以前、シャーリーは自身の手で改造したりベリオン製のバイ

ク『レッドマン・スカウト』で地上最速記録を更新。今、その時と同じ感覚を覚えていた。

「シャーリー！聞こえないのか？シャーリー！」

優人の必死の呼び掛けも魔導エンジンの轟音に掻き消され、シャーリーの耳には入らない。

「いつけええええええええええつ！」

シャーリーは固有魔法『超加速』を発動し、一気に加速する。そして、ついに彼女は音速の壁を超えた。その際に生じた衝撃波で優人、芳佳、リーネは吹き飛ばされそうになる。ゆつくりと目を開けたシャーリーは自分が音の無くなった空間を飛行していることに驚く。

「これは？あたし、マツハを超えたの!?!これが超音速の世界?すごい!すごいぞ!やった!あたしやったんだ!」

「聞こえるかシャーリー!返事しろ!」

バレルロールをしながら喜ぶシャーリーの耳によくやく優人の声が届いた。

「優人!やったぞ!あたし、音速を超えたんだ!」

「止まれええええ!!敵に突っ込むぞ!!」

「……え?ん?」

優人の言葉を聞いて現実に引き戻されたシャーリーは正面に目を向ける。自分が追いついてきたネウロイが眼前に迫っている。まるでシャーリーに向かって突っ込んで来ているかのようだ。

「ええええええ〜っ」

最早止まることの出来ないシャーリーは悲鳴を上げながら、慌ててシールドを展開する。マツハを超えた彼女は弾丸のようにネウロイを貫通する。コアも破壊していたらしく、ネウロイは水蒸気爆発のような煙を上げて四散する。

「て、敵……撃墜」

優人は予想外の結果に驚愕しながら基地へ報告を入れる。彼の後ろでは芳佳とリーネが唾然としている。

『シャーリーさんは!?』

シャーリーの身を案ずるミーナの声がインカムに入る。優人は目を凝らして周囲を見る。すると、白煙の中から飛行機雲を引いて上昇していくシャーリーが見えた。優人は安堵し、芳佳達と共にシャーリーに近づいていく。

「無事だ！シャーリーは無事……ん？」

シャーリーの無事を基地へ報告していた優人は彼女の様子がおかしいことに気付く。シャーリーが履いているユニットのプロペラと、使い魔のウサ耳と尻尾が消えていた。

ユニットはシャーリーの足からスルツと脱げ、海に落下していく、シャーリーも少し遅れて落ちていく。

「なっ!?! あいつ意識が無いのか!?!」

「あわわわわわ!!」

「全然無事じゃなくいつ!」

三人は頭から海へ落ちていくシャーリーを追い掛け、急降下する。海面ギリギリのところまで三人はシャーリーをキャッチした。

「はっ!?!」

「ええええっ!?! なんで!?!」

優人は目の前の光景に目を見開き、芳佳は驚きの声を上げる。今のシャーリーはゴージャク身にかけていない、所謂生まれのままの姿だ。さらに宮藤兄妹がシャーリーの豊富な胸を片方ずつ驚掴みにしてしまっている。

無論、不可抗力である。リーネにはシャーリーの裸体があまりに刺激的だったらしく、顔を背けて目をギュツと瞑っていた。

『どうした? 何があつた!?!』

坂本からの通信で固まっていた優人は我に返った。芳佳とリーネにシャーリーを任せる。シャーリーの裸体を見ないように背を向けて報告する。

「あつ、ああ。シャーリーを確保した！けど……」

『けど、なんだ!?!』

はつきりしない優人に坂本が苛立つて怒鳴る。すると、別の声が聞こえてくる。

「ああ……おつきい」

「きやああああ〜！芳佳ちゃん、何やってるのお〜っ!?!」

芳佳はシャーリーの胸を揉みしだきながら心地よさそうな声を出す、その表情は穏やかだ。リーネはそんな芳佳を見て悲鳴を上げる。

『おい！状況を正確に説明しろ!』

マイクに向かって怒鳴る坂本の隣では察しのいいミーナが頬を赤く染めている。

「説明出来ることじゃないんだよ!!」

「腹へったあ〜……」

優人が坂本に怒鳴り返すと共に、幸せそうな顔をしたシャーリーの口から呑気な寝言が漏れた。

第17話「宮藤兄妹の休日」

宮藤優人と宮藤芳佳、扶桑皇国出身の兄妹は優人の自室にいる。

「……………」

「……………」

二人は窓から外を眺めていた。優人は頭を掻き、「ついてないな」といった感じに肩を竦める。彼の隣に立っている芳佳はガツクリと肩を落としている。

「すごい嵐だな」

「……………うん」

優人の言葉に芳佳は力なく答える。501基地は嵐に見舞われている。黒く厚い雲が空を覆い、激しく降る雨粒は窓ガラスを打ちつけ、遠くからは雷鳴が轟き、波はいつもより高い。

「そう落ち込むなよ」

シヨボくれている芳佳の頭を優人は頭をポンポンと叩いた。

今日二人は兄妹揃って休暇だった。以前は忙しかった優人もバルクホルンがデスクワークを代わってくれるようになってからは大分余裕が出来た。

そこでミーナに休暇を申請すると彼女の粹な計らいで芳佳と同じ日に休暇となったので二人で街まで出掛けることにしたのだ。芳佳は大いに喜び、今日という日を楽しみにしていた。

しかし、生憎の嵐。この悪天候ではブリタニア本土に繋がる石畳の道もおそらく水没してしまっている。街へ行くどころか島から出ることも出来ない。

「せっかくのお休みだったのに……」

と芳佳。兄とのお出掛けが中止になってしまったことが余程堪えているらしい、いつも元気な彼女の表情が曇っている。

「また今度行けばいいだろ？」

一方の優人は嵐を眺めているうちに母国の台風を思い出し、残念がりながらもどこか懐かしさを感じている。

優人は芳佳から離れ、本棚に向かう。そこには無数の本が並べられているが、前述の忙しさ故に優人が手をつけたものは全体の3分の1。読み終えたものはさらに少ない。

優人は本をひとつ手に取るとベッドに腰掛け、読み始める。続いて芳佳も適当な本を選び、開いてみた。それはカールスラント本だった。かなり分厚い、ハードカバーの専門書。中身は溶鉱炉の三面図や各地域における鉄鋼の生産量のグラフ、よくわからない専門用語が圧倒的に多い文章等。

「ううう……」

専門用語で武装した文章に頭を襲われ、芳佳は目を回した。元々勉強が得意ではなく、どうにか成績を中の中に留めている芳佳。彼女にとってこの手の本は天敵である。

他の本も試し読みしてみたが、挿し絵が少なく文字の細かいものばかり。最初の専門書ほどではないが、芳佳の苦手なタイプの本だった。

「あれ？」

芳佳は本棚に見覚えのある本が置いてあることに気付く。手に取って表紙を確認してみると、やはり自分が思った通りのものだった。

「お兄ちゃんこれって？」

芳佳は優人に尋ねる。声を掛けられた優人は視線を本から芳佳に移す。

「ああ、それね」

そう言って優人は読んでいる本を閉じた。



隊長執務室ではミーナとバルクホルンが書類と格闘をしていた。デスクワーク面でも優秀なバルクホルンのおかげでミーナの予想より早く書類が片付いていた。

「ふう……」

「お疲れ様トウルデー」

「デスワークを終えたバルクホルンにミーナが扶桑茶を手渡す。

「すまないミーナ」

礼を言いながら受け取るバルクホルン。この扶桑茶は優人が帰国した際に扶桑の実家から持ってきたもので、優人はデスワークを行う二人のために扶桑茶と煎餅を差し入れたのだ。湯呑みではなくマグカップに注がれているため、やや違和感がある。

「しかし、ミーナも大変だな。これだけの書類仕事をこなさなくてはならないとは……」
「まあね。優人が手伝ってくれるおかげで助かってるわ」

「ミーナは微笑みながら言う。

「私だったら、耐えられないけどねえ」

ソファーに寝っ転がっているハルトマンが煎餅をボリボリかじりながら言う。彼女はデスワークを手伝いに来たわけではなく、煎餅が目当てでここにいる。そんなハルトマンをバルクホルンが睨み付ける。

「ハルトマン！せめて座って食べる！行儀の悪い！」

「え、別にいいじゃん。ここには二人しかいないんだし……」

ハルトマンは口の周りを煎餅のカスだらけにしながら言う。

「そういう問題か!!」

バルクホルンはガタツと音を立てながら椅子から立ち上がる。

「いいかハルトマン? カールスラント軍人たるもの! 一に規律、二に規律、三も規律で四、五、六、七、八、九も規律だ!!」

「優人と芳佳、休みなのに今日は大雨なんだよね」

「そうか、せつかくの休みだというのに……つて話を逸らすな!!」

自分の話を真面目に聞こうとしないハルトマンにバルクホルンが怒鳴る。ミーナは二人のやり取りを見て微笑んでいる。元々私生活でだらしがないハルトマンをバルクホルンはよく叱るが最近はより熱心である。宮藤兄妹に助けられて以来、笑うことが多くなったバルクホルン。憑き物が落ちたとはこういうことだろう。バルクホルンが明るくなったことにミーナはもちろん、説教を鬱陶しがっているハルトマンも内心は喜び、優人と芳佳に感謝している。

「ところでさ」

バルクホルンの説教を聞き流していたハルトマンが話を振る。

「ハルトマン! 少しは私の話を——」

「優人と芳佳って、すごい仲良いよね?」

再び宮藤兄妹の話題を出すハルトマン。

「兄妹の仲が良いのは悪いことではないわ」

とミーナが言う。

「異性の兄妹にしては仲良すぎじゃない？普通は距離とか壁とかがあったりするもんじゃないの？」

「それは兄妹によるんじゃないかしら？」

「でもなあ……」

納得のいかない様子のハルトマン。既に反抗期に入っけていてもおかしくない年齢の芳佳が優人になつていることが引つ掛かっているらしい。いや、なつくどころか最早べつたりである。

「人のことを観察する暇があるなら、自分の部屋を片付けたらどうだ？」

バルクホルンは衣服、瓶、缶詰、本等が埋め尽くす陽に散乱しているハルトマンの部屋を頭に浮かべながら言う。

「いやあ、あの仲の良さは絶対何かあるよ」

「何かって？」

「う〜ん」

ミーナの質問にハルトマンは少し考えてから答えた。

「『芳佳、俺はお前が』とか『ダメだよ！私達兄妹なんだよ！』とか」

「!？」

「……なんちゃって」

舌を出しながら冗談だということをアピールするハルトマン。彼女の声真似はあまり似てないがバルクホルンは本物の優人と芳佳の会話を聞いていたように錯覚し、動揺していた。

（まさかな……）

バルクホルンはそんなはずはないと自身に言い聞かせ、落ち着くために扶桑茶を口にする。



「いい匂い！シャーリー何してるの？」

「おっ？ルツキーニ」

ルツキーニが食堂やって来るとシャーリーがエプロン姿でキッチンに立っていた。普段、彼女が台所に立つことはあまりないので、かなり新鮮だ。

「お菓子作りに挑戦してたんだよ」

シャーリーはそう言ってやや焦げ気味のバタークッキーを見せる。

「わあ！おいしそ〜う！ねえねえ食べていい!？」

クツキーを目の前にしてルツキーニは興奮気味に尋ねるが、シャーリーが良いと言う前に食べ始めた。

「ん〜美味しっ!」

「夕飯が入らなくなるから食べすぎなよ?」

「は〜い!」

シャーリーは注意を素直に聞くルツキーニ。しかし、彼女はガツガツとバタークツキーを頬張っている。

「さて……」

シャーリーはエプロンを外すと、比較的出来の良いバタークツキーを3つの袋に分け始めた。

「うじゅ?それどうするの?」

「ああ、優人と芳佳とリーネにな」

シャーリーは白い歯を見せながら笑う。彼女は先日、気を失って海に落下しそうになったのを三人に助けられた。そのお礼にと三人のためにバタークツキーを作ったのだ。優人に渡す袋には、何故か気合いの入ったラッピングがされている。

「じゃあ、ちよつと行ってくるから。食べ終わったらお皿を片付けておいてくれよ?」

「は〜い〜！」

バタークッキーを食べてご機嫌のルツキーニが元気良く返事をする。シャーリーはまず優人の部屋に向かった。

◇ ◇ ◇

「何故私についてくる？」

自分の隣を歩いているシャーリーにバルクホルンが尋ねる。

「ついて行ってる訳じゃない、たまたま同じ方向に用があるだけさ」

シャーリーは肩を竦めながら答える。先程廊下で出会った二人は互いに軽く挨拶をして別れるつもりだったが、計らずも同じ方向に歩を進めていた。

「用と言うのはそれか？」

バルクホルンがシャーリーが抱えている袋を指差しながら訊ねる。

「ああ、優人と芳佳とリーネにバタークッキーをな」

「クッキー？それでお菓子の良い匂いがするの……」

「やらないぞ？」

「人の物を取る趣味はない」

フンと鼻を鳴らすバルクホルン。

(そういえば、男に何か渡すのは初めてだな)

一方のシャーリーは珍しく緊張していた。そのおおらかな性格からバルクホルンより異性との付き合いが多いシャーリーも男友達に贈り物をするには無かつたらしい。

「そういうお前はどこいくんだよ？」

「私も優人のところだ。茶を差し入れて貰ったからその礼を言いな」

シャーリーの質問に答えるバルクホルン。彼女は手に紙袋を持っている。アマゾネスのコーヒード、おそらくはお返しの商品だろうが、砂糖やミルクがないことからバルクホルンは優人が甘党なのを知らないようだ。会話をしているうちに二人は優人の部屋の前に到着する。

「ん?」

バルクホルンは部屋の中から聞こえてくる話し声を捉えた。シャーリーもそれに気が付いたらしい。

「なんだ? 芳佳も一緒なのか?」

「そのようだな」

ドアの向こうからは部屋の主である優人の他に芳佳の声も聞こえてくる。

「ちよつと待てバルクホルン」

ノックをしようとするバルクホルンを制止し、ドアに耳を押しつけるシャーリー。二人の会話を聞こうとしているらしい。

「リベリアン！貴様は何をしている！」

「だってあいつら兄妹が二人っきりの時に何を話してるのか気になるだろ？」

「やめろ！盗み聞きは軍旗違反、というよりプライバシーの侵害だぞ！」

「お堅いなあ……ちよつとだけだつて」

ニヤツと笑い聞き耳を立てるシャーリー。バルクホルンも本音を言うに興味があるのだが、彼女の生真面目な性格がそれを許さない。彼女の頭の中では今、天使と悪魔が戦っている。しかし、悪魔の誘惑に負けなかつたバルクホルンは再度シャーリーを止めようとする。

「？」

シャーリーの様子がおかしい。眉を寄せていたと思つたら目を見開き、表情を固めた。気になったバルクホルンは思わずドアに耳を当てた。

「そんなにジロジロ見ないでよ」

と羞恥心に染まつた芳佳の声が聞こえてきた。次に優人の声も聞こえてくる。

「もつとよく見せろ」

「やめてよもう！」

「コラ隠すな！」

「やだ！恥ずかしいよ」

二人の会話を聞き、シャーリーとバルクホルンは揃って固まる。中では一体何が起きているのだろうか。

「まったく暴れるなよ」

「お兄ちゃん、そんなとこ触ったら汚いよ」

「汚くなんてないから大丈夫だよ。お兄ちゃんに任せろ」

“触る”、“汚い”、“任せろ”。それらの単語が二人の妄想を掻き立てた。

「な、なななな!? 優人のやつ！一体ナニしてんだ!?!」

「し、しししし知るか！あいつはな、な、ナニをしているんだ!?!」

動揺しながら小声で話すシャーリーとバルクホルン。ナニの発音がどこかおかしくなっている。

「優人のやつ、周りが女ばかりの環境で相当溜まってたのか!?!だから妹に——」

「優人はそんな男じゃないだろ!!」

友人のことを信じ、シャーリーの考えを否定するバルクホルン。しかし、先程ハルトマンの冗談が彼女の頭を過る。

（そんなはずがないそんなはずがないそんなはずがないそんなはずがないそんなはずが

ない)

バルクホルンは自分に言い聞かせ、必死に落ち着こうとする。

「そんな太いに入るの？」

「確かにちよつとキツイかな？まあ大丈夫だろう？入れるぞ」

そうしている間にも兄妹の会話は続く。 “太い”、 “入る”、 “キツイ”、 “入れる

” という言葉に過剰反応するシャーリーとバルクホルン。

「なあ、中に入って止めた方がいいんじゃない？明らかにヤバイだろう？」

とシャーリーが言う。バルクホルンが答える前にまた中から声が聞こえてきた。

「あつ、もうちよつとで出そう！」

「!?!」

優人の声にハツとなつてドアを見るシャーリーとバルクホルン。二人は決断を迫られた。

「バルクホルン！ドアを破れ！」

「よしー！」

シャーリーの言葉にバルクホルンは頷いて返すと魔法力を発動させ使い魔の耳と尻尾を生やす。

「はああああ!!」

バン!と音を立て、拳でドアを破る。同時にシャーリーと共に部屋へなだれ込んだ。
「優人!!お前、何をしている!?!」

優人をビシツと指差して叫ぶバルクホルン。しかし、彼女の目の前にあったのは『海軍ラムネ』と書かれた瓶を持っている優人と一冊の本と一枚の写真を手にしている芳佳だった。

「……あれ?」

予想していたものとは違う光景に間の抜けた声を出すシャーリー。

「……………」

突然の出来事に扶桑の兄妹はすぐには反応出来ずにいた。そして、優人はいきなり部屋に入ってきた二人の方を見て、質問に答える。

「何って扶桑から持ってきたアルバムを見ていたんだけど……」

「……………」

室内を沈黙が支配する。

「えっ?でも芳佳が恥ずかしがる声が……」

我に還ったシャーリーが芳佳を見る。

「小さいときの写真に恥ずかしいのがあって……」

芳佳は顔を真っ赤にしながら答える。

「じゃあ、〃触る〃とか〃汚い〃とかって……」

「ベッドの下に写真が入っちゃって、取ろうとしたら芳佳が——」

「だって埃溜まってそうだし」

「最近はちゃんと掃除しているから大丈夫だよ」

「でも〃太い〃とか〃キツイ〃とか——」

「手じゃ届かないからラムネ瓶で取ろうとしたんだよ。床とベッドの間の幅が狭かったけどなんとか奥まで届いた」

「じゃあ、〃出そう〃ってのは」

「写真が取れそうだったから」

聞かれるがままに答える兄妹。二人はまだ状況が飲み込めていないらしい。

「は、はは、はははは！そうだよな！」

顔を引きつらせて笑うシャーリー。すると、今まで黙っていたバルクホルンが口を開く。

「きよ、兄妹水入らずを邪魔して悪かった。じゃあ、私たちはこれで……」

「待て！」

回れ右をして部屋から出ていこうとするバルクホルンの肩を優人が掴む。いつの間にか間合いを詰めていたらしい。バルクホルンはビクツとすると、優人の方へ振り向

く。

「お前から盗み聞きしてたのか？というかあれの説明は無いのか？」

優人はバルクホルンに弾き飛ばされ、窓に突き刺さったドアを指差しながら言う。ドアと窓枠は歪んでおり、窓ガラスは割れ、そこから雨水が入り込み水溜まりを作っていた。

「すまん！」

バルクホルンは勢いよく頭を下げ、謝罪すると理由を説明する。

「お前たちの会話を聞いて、その、てっきりお前が妹に……」

バルクホルンそこまで話すと顔を真っ赤にして黙り込んでしまう。今日の優人は頭が冴えているのか、それとも元が聡明なのか、バルクホルンの表情と僅な説明で二人が何を勘違いしたのかを理解した。

「んなわけあるか!!」

優人は額に青筋を立てて怒鳴った。

「誰が妹相手に欲情なんてするか！変な妄想してんじゃねえ！この変態軍人!!」

完全にキレている優人、口調も荒くなってしまう。

「なっ、誰が変態だ！そもそもこれはリベリアンが言ったことで——」

「あたし!？」

シャーリーに責任を押し付けるバルクホルン。

「ほう?」

優人はシャーリーを睨み付けた。

「いやだつて……女ばかりの部隊で男が一人だけだから溜まっているのかなつて、普通は思うだろ?……」

いつもと違う優人に驚いているのか、弁解になつていない弁解をするシャーリー。彼女の話を聞いて優人の表情は怒りから呆れ顔に変わっていく。

「お前らが俺のことをどう思っているかよくわかつた」

優人と溜め息をしているとミーナと坂本がやって来た。

「何の騒ぎだ?」

「何で優人の部屋のドアがこんなことになっているのかしら?」

ミーナは眉をピクピクさせながら訊ねる。

「ミーナ、少佐!これはだな……」

「そこの変態軍人達が壊したんだよ」

「なつ、優人!」

「あたしも!?!」

指差されながらまたも変態呼ばわりされるバルクホルンとシャーリー。ミーナ

は険しい表情でバルクホルンとシャーリーを見る。

「バルクホルン大尉、シャーリー大尉。説明なさい」

有無を言わさない口調で問いただすミーナ。バルクホルンとシャーリーは震えながらゆつくりと説明する。

その後、ミーナにこつてり絞られた二人は、部屋の掃除と破損した窓やドアの応急処置、一週間のトイレ掃除等を命じられ、優人の部屋の修理代を給料から引かれることとなった。ちなみにバルクホルンの給料が妹の入院費以外の目的で使用されたのはこれが初めてである。

「お兄ちゃん、バルクホルンさんとシャーリーさんは何を勘違いしたの?」

「お前にはまだ早い」

「え〜」

芳佳は優人の言葉に不満そうに唇を尖らせた。

第18話「宮藤兄妹と夜間哨戒」

1944年8月16日。ロンドン、連合軍総司令部。宮藤優人は原隊の上官である扶桑海軍中将赤坂伊知郎から呼び出しを受けて、彼の執務室を訪れていた。

デスクワーク中の赤坂に挨拶をすると彼の副官が風呂敷の包みを持ってきた。優人が風呂敷を解いてみると、中からブリタニア語で商品が書かれた菓子箱が出てきた。

「洋菓子……ですか？」

優人は箱から副官に視線を移して訊ねる。副官ではなく、デスクの向こう側に座っている赤坂が「ああ」と応じた。

「天城の艦長からの祝い品だね」

付け加える赤坂。赤坂がネウロイの攻撃で中破して以来、扶桑からの補給任務を引き継いだ同型の航空母艦天城。この菓子はその天城の艦長が赤坂へご機嫌取りもかねて持ってきたものだ。

「高価な物らしいが、私は医者から止められているのと甘いものが苦手だね」

「だから自分に？」

「嫌いかな？」

「いえ……」

優人は軽く首を振ると蓋を開けてみる。箱の中には一口サイズのチョコレートがたくさん並べられていた。と言つてもただのチョコレートではなく、少量のウイスキーをチョコレートでコーティングしたウイスキーボンボンと呼ばれるもの。要はウイスキー入りのチョコレートだ。

「失礼ですが、何のお祝いでしょうか？」

疑問を抱いた優人が質問する。

「言われるまで忘れていたんだがね。誕生日だそうだ」

「それはおめでとうございます」

「この歳になると、めでたくもなんともないよ」

社交辞令染みた祝福をする優人。赤坂は書類へ目を向けたまま、自嘲気味に答える。

彼は本日で51歳になる、確かに祝われて喜ぶような歳でもない。むしろ歳を取ったことを実感して、少々物悲しくなる。

「501で引き取つて貰えないか？軍務の一環だと思つて」

「かしこまりました」

優人は軽く会釈して応じると箱を閉じ、風呂敷を包みを直した。

お菓子ならば501のウィッチ、特にルツキーニとハルトマンあたりが喜ぶだろう。

しかし、食欲旺盛な二人のことだ。ウイスキーボンボンを見つけた途端全部食べてしまいかねないので注意が必要だが、二人のお菓子に対する執念の前にはそんな警戒は無意味だろう。またウイスキーはアルコール度数が高い。酒に慣れていない年少組に渡すのは少し考えた方がいいかもしれない。

優人がそんなことを考えていると赤坂が大きな溜め息を吐いた後に右手の親指と人差し指で眉間を抑える。

「お疲れのようですね？」

優人が心配そうに言うのと赤坂はようやく書類から優人に視線を移した。

「最近は各国軍の將軍達とケンカばかりしているからね」

重たい肩をトントンと軽く叩く赤坂。扶桑とブリタニアの同盟を基礎として発足した人類連合軍。その内部では常に各国の思惑が錯綜している。ネウロイという共通の敵の出現によりどうにか共闘しているが、一枚岩には程遠く、西部方面総司令部に置いても扶桑、ブリタニア、カールスラント、リベリオン等が陸海空の指揮権を巡って対立している。航空戦力に至っては同じブリタニア空軍であるはずの戦闘機軍団司令官マロニー大将の一派と爆撃機軍団司令官のアーサー・ハリス大将の派閥が反目し合っている有り様だ。

「心労お察しします」

「ありがとう。まあ、隣に呼び出されているミーナ中佐の方が私より苦勞していると思うがね」

赤坂はそう言って窓に目をやる。連合軍総司令部の隣にはブリタニア軍司令部がある。優人が赤坂から総司令部へ呼ばれたようにミーナと坂本も501の上官でもあるマロニーから呼び出されていた。

優人も窓の外へと視線を移した。赤坂の執務室からはブリタニア軍司令部の建物を見ることは出来ないが、優人の頭の中には司令部の姿がくつきりと浮かび上がっていた。

「聞いたところによると501に回す予算の削減をするようだ。ブリタニア軍もつまらん嫌がらせをする」

呆れ顔で言う赤坂。連合軍全体では501や次いで設立されたオラーシヤの502、503部隊の活躍が高く評価され、統合戦闘航空団は506まで設立が決定されている。その一方、自国の利益を優先する傾向にあるブリタニア軍は統合戦闘航空団を生み出した国にも関わらず、その強化には消極的。上官のマロニーも戦果を上げ続ける501のことを疎ましく思っている。

「その程度ならまだ可愛いもの。作戦のどさくさに紛れて艦砲で吹き飛ばされたりしなければ……」

優人が当て付けるように言う。彼の物言いに副官は不快そうに眉を潜めたが、赤坂は気にしなかった。

優人の言ったことは例え話ではなく実際に起きたことなのだ。ある海軍大将の策略により、友軍から弓引かれたことを優人は今でも忘れない。

「君がそのことを許せないのは理解できる。しかし、過去を引きずり続けていては君自身にとつても良くない」

「は？」

赤坂の説教に何かしらの意図を感じ、優人は聞き返した。

「人は前に、未来に向かって成長するものだろうか？取り分け君らのような若者は」

そこまで話すと赤坂はタバコを取り出し、口にくわえる。副官が近付き、ライターでタバコに火を着けた。

「これはまだ内密なんだが……」

タバコを吸い、煙を吐きながら赤坂は再び話始める。タバコ嫌いな優人は煙で噎せ返りそうになった。

「近々大きな作戦がある。君にも力を貸して欲しいんだ」

赤坂の眼差しが真剣な物に変わる。

（それが本題か……）

優人も顔を引き締めた。

「つまり、長官の未来のために力を貸せと？」

「私のためじゃない。人類のためだよ」

「それはガリア反攻作戦の中核が501だと言うことですか？」

赤坂は優人の質問に答える代わりに副官に目配せをした。上官の意を察した副官は書類を一枚手を渡した。書類の中身はまだ試案段階の作戦書だった。

「……なるほど」

優人はサツと目を通すと、それだけ言うと副官に書類を返した。

「驚かないのかね？」

淡泊な反応を示した優人に赤坂は意外そうな顔をする。

「いつかは命じられると思っていましたから」

「そうか、詳しい内容は追って話すよ。この事は他言無用で頼む」

「わかりました。では失礼致します」

優人はそう言って立ち上がり、敬礼すると風呂敷包みを持って退室していった。



一時間後、雲海広がるブリタニア上空にはカールスラントのユングフラウ社が開発した輸送機『J u 5 2』が飛行していた。この機体は離着陸距離の短さから愛用され、501基地においても人員輸送機として使用されている。

「むう……」

機内では坂本が腕と足を組みながら、むすつとした表情を浮かべていた。

「不機嫌さが顔に出てるわよ？坂本少佐」

向かい側に座って本を読んでいたミーナが指摘する。

「優人が怯えているじゃない」

「別に怯えてない。て言うか、俺に振るな」

ミーナに話の矛先を向けられた優人。彼はちょうど同じタイミングで用ができた二人に便乗してロンドンに来ていた。

「わざわざ呼び出されて何かと思えば、予算の削減だなんて聞かされたんだ。顔にも出るやい」

仏頂面のまま坂本が答える。坂本とミーナを呼び寄せたマロニーは二人顔を見るなり、開口一番に予算削減を言い渡した。予算や物資の大半をブリタニアに頼っている501にとって由々しき問題。二人はすぐさま抗議したが、削減額を多少抑えられた程度で予算会議は終了した。

「彼らも焦っているのよ。いつも私達ばかりに戦果を挙げられてはね」

坂本とは違いミーナの表情は穏やかだが、彼女も内心は業腹だろう。

「連中が見てるのは自分たちの足元だけだ」

と腹の虫が治まらない様子 of 坂本。この顔をリーネやルツキーニが見たら怯えるだろう。

「戦争屋なんてあんなものよ。もしネウロイがいなかったら、あの人達、今頃人間同士で戦いあっているのかもね」

「さながら世界大戦だな」

表情一つ変えずに物騒なことを言うミーナに坂本はニヤリと笑みを浮かべる。

「……縁起でもない」

あまり面白くなかったらしい優人は肩を竦めている。彼の肩には坂本とミーナの付き人として司令部に同行しついでた芳佳がもたれ掛かって眠っている。口から垂れた涎が制服に染みを作っているが、優人は気にしないことにした。

「よく眠っているな」

機嫌を直した坂本はお昼寝中の子どものように熟睡している芳佳に目を向けた。昼間の訓練か、それとも重苦しい雰囲気 of 予算会議に参加して疲れたのか輸送機がロンドンを飛び立ってすぐに芳佳は寝入ってしまった。

戦友の妹で、自らの教え子でもある芳佳。そのあどけなさが残る寝顔はとても軍人とは思えないほど無邪気なもので坂本の頬は自然と緩む。

「ああ。この寝顔は何年経っても変わらない」

優人はまるで櫛でとかすかのように妹の髪を撫でる。子どもの頃、自分に甘えてくる芳佳に優人はよくこうしていた。

「お兄ちゃんが一緒だと安心するのかしらね」

芳佳の顔を覗き込む坂本とミーナ。ミーナはちよつとした悪戯心から芳佳の頬を軽くつついて見ると、口から「ん……」という声漏れた。

「可愛い……なんだか私も妹が欲しくなったわ」

「やらないぞ」

優人の眼差しが急に真剣なものへと変わり、ミーナを睨む。妹のこととなると優人は生真面目で堅物なバルクホルン以上に冗談が通じなくなる。芳佳に嫌いと言われたら、それがエイプリルフールの嘘だとしても本気にして、世界の終わりのような絶望的な顔をする事受け合いだ。

「あらあら、あなたの妹さんを取ったりしないわよ」

ミーナの方はクスクスと笑い返す。少し前までは優人のシスコンぶりに呆れていた彼女だが、最近ではそんな優人を可愛く思えてきている。

「ところで優人、それは何だ？」

坂本が優人の膝の上に置かれている風呂敷包みについて訊いてきた。

「ああ、これは赤坂長官からの頂き物だ。甘い物が苦手だから引き取ってくれ……つてね」

「まさか、赤坂長官はそんなお前呼び出したのか？」

「まあな」

呆れた様子 of 坂本に優人は曖昧な返事を返すと菓子 of 箱に目を向ける。

（誕生日か……）

何故か複雑そうな表情を浮かべる優人。すると眠っていた芳佳が目を覚ました。

「ふあく……おはよう、お兄ちゃん」

口に手を当て、欠伸を噛み殺しながら身体を伸ばす芳佳。優人に挨拶しながら、眠たい目をゴシゴシと擦っている。

「早くないけど、おはよう。中佐と少佐にも挨拶しなさい」

「うん……えっ？」

起きたてで、ぽけーつとしている芳佳。まだ頭の覚醒が完全ではないため、優人の言ったことを理解するのに数秒かかった。

「（ぶ）ごめんなさい！私居眠りしちゃったみたいで！」

バツと二人の方へ振り返り、勢い良く頭を下げて謝罪する芳佳。居眠りにしてずいぶんとグツスリだったが、誰もそのことを指摘しなかった。

「いや、こちらこそすまなかつたな。せつかくだから、ロンドンの街でも見せてやろうと思つたのに……」

申し訳なさそうな顔をする坂本。四人は時間があればロンドンの街に出掛けるつもりでいたが、残念ながら予算会議で時間を潰してしまい、それは叶わなかつた。

「いえ、そんな」

本音を言えば、以前雨で潰れた休日の分まで優人とショッピングがしたかつた芳佳。しかし、こればかりはどうしようもないと自分に言い聞かせる。

「就寝時に眠れなくなるから、お昼寝はほどほどにね」

「はい」

ミーナのやんわりとした注意に返事をする、芳佳の耳に声が聞こえてきた。

『〜♪』

それは歌声だつた。気になつた芳佳は優人に訊ねた。

「何か聞こえない？」

「ん？ああ、これはサーニヤの唄だよ」

「基地に近づいたな」

「私達を迎えに来てくれたのよ」

優人の説明に坂本とミーナが補足する。それを聞いて芳佳はJ u 5 2と並行して飛んでいるサーニャに向かって手を振った。

「ありがとう！」

芳佳の姿をチラリと見たサーニャは頬を染め、J u 5 2から離れ雲の中に入ってしまった。恥ずかしくなったらしい。

「サーニャちゃんって、なんか照れ屋さんですよね」

芳佳はミーナの方を振り返りながら言う。サーニャはとても大人しい性格で人付き合いが苦手。異性に対してはそれが特に顕著で、優人も慣れて貰うのに時間が掛かった。

「うふふ、とつてもいい子よ。唄も上手でしょ?……あら?」

とミーナが微笑むと、同時にサーニャの歌が止まった。索敵能力のあるサーニャの魔導針が何かを捉えていたのだ。

「どうしたサーニャ?」

坂本が訊ねると、サーニャは呟くような小さな声で答えた。

『誰か、こつちを見えています』

「誰か?」

怪訝そうに呟く優人。

「報告は明瞭に、あと大きな声でな」

「すみません。シリウスの方角に所属不明の飛行体、接近しています」

坂本の注意を受けて、サーニヤは報告し直す。今度は幾分はつきり聞こえた。

「ネウロイかしら？」

とミーナ。彼女の表情は部隊を指揮する時の真剣なものへと変わっている。

『はい、間違いないと思います。通常の航空機の数ではありません』

「私には見えないが？」

そう言う坂本は魔眼で目標を見ようと眼帯を上げている。

『雲の中です。目標を肉眼で確認できません』

「そういうことか……」

サーニヤの説明を聞いて、納得する坂本。彼女の魔眼は厚い雲や建造物等を透視する

ことはできない。

「ど、どうすればいいんですか？」

「どうしようもないな」

慌てる素振りも見せずに平然と答える坂本。

「そんなあ！お兄ちゃん！どうしよう!!」

「まずは落ち着こうか」

優人は自分にすがり付く妹に落ち着かせようとする。

「悔しいけど、ストライカーが無いから仕方がないわ」

慌てる芳佳とは違い、優人ら三人は落ち着いている。これが新人といくつもの激戦を
潜り抜けたベテランの差なのだろう。

「あつ！まさか、それを狙って?！」

「ネウロイがそんな回りくどいことなどしないさ」

坂本は軽く微笑みながらミーナの推測をやんわり否定する。ネウロイが人類の隙を
突くような作戦行動を行った前例は無い、そもそもネウロイには思考能力がないという
のが定説だ。芳佳はミーナの話聞いてますます不安になったのか、オタオタしながら
三人の顔を交互に見る。

『目標は依然、高速で近づいています。接触まで約3分』

サーニヤからさらなる報告が入り、優人は窓から外の様子を伺う。静か雲海が広がる
ばかりでネウロイの姿を確認出来ないが、遠くの雲がうごめいているようにも見えた。

「サーニヤさん！援護が来るまで時間を稼げればいいわ。交戦は出来るだけ避けて」

『はい』

サーニヤはミーナの指示に答えると、慣れた手つきでフリーガーハマーのセーフティ

を外した。

『目標を引き離します』

「無理しないでね」

サーニヤを気遣うミーナ。サーニヤは芳佳達を戦闘に巻き込まないよう、J u 5 2 から距離を取る。

「よく見ておけよ」

「は、はい」

坂本に言われ、芳佳は窓に張りつきながら上昇していくサーニヤを目で追う。

「サーニヤちゃんにはネウロイが何処にいるのか、分かるんですか？」

「ああ、あいつには地平線の向こう側にあるものだって見えているはずだ」

「へえ〜」

芳佳のは不思議そうに声を吐く。

「それでいつも夜間の哨戒任務に就いてもらっているのよ」

「お前の治癒魔法みたいなもんさ。さつき歌を聞いただろ？あれもその魔法の一つだ」

「歌声でこの輸送機を誘導していたのよ」

ミーナと坂本が芳佳に説明している間に、サーニヤが魔導針でネウロイを捉えた。敵を認めたサーニヤは普段の引つ込み思案な彼女からは想像できないほど凛々しい表情

を浮かべる。

サーニャは接近中のネウロイにフリーガーハマーを向け、ロケット弾を二発撃ち込む。ロケット弾が炸裂してできた光球が雲に大穴を開ける。

「やつぱり、すごい威力だな」

フリーガーハマーの破壊力に感嘆の声を漏らす優人。見とれているうちにサーニャがもう一発撃ち込む。

「反撃して……こない？」

違和感を感じながらもフリーガーハマーを撃ち続けるサーニャ。しかし、ネウロイは反撃するどころか何の反応も示さない。

「すごい……」

「さすがだな」

「ええ、見えない敵相手によくやっているわ」

芳佳、優人、ミーナが感嘆の声を漏らす。

「私にはネウロイなんて、全然……」

芳佳は光球で明るく照らされている雲の海を見ながら言う。

「サーニャの言うことに間違いはない」

と坂本。彼女はサーニャの索敵能力を信頼しているらしい。

「サーニヤ、もういい。戻ってくれ」

坂本はフリーガーハマーの残弾数を鑑みて、サーニヤに戻るよう伝える。

「でも、まだ……」

サーニヤは肩で息をしながら答える。彼女はまだネウロイを撃破していない。

「ありがとう。ひとりでよく守ってくれたわ」

「……………」

ミーナの言葉を聞き、サーニヤはおとなしく戦闘を終了する。輸送機の四人とサーニヤはネウロイ出現の報を受け、出撃した501のウィッチ達と合流。基地に帰投した。

◇ ◇ ◇

雨天に出撃した501のメンバーは冷えた身体を温めるためにシャワーを浴び、それからミーティングルームに集合することとなった。

501基地のミーティングルームは元々客間だった部屋で天井は高く、調度品やソファア、グラランドピアノが置かれている。それ故に戦闘で疲れた身体を休めるのに適した空間となっている。

すでに室内にはシャワーを終えて、部屋着や寝間着に着替えた一同が集まっていた。部屋に置かれた椅子には身体が温まって眠くなったらしいルツキーニが猫のように丸くなって寝息を立てている。

「それじゃあ、今回のネウロイはサーニヤ以外誰も見ていないのか？」

シャワーを終えたバルクホルンが髪を拭きながらミーティングルームに姿を見せる。「ずっと雲に隠れて出てこなかったからな」

と坂本がバルクホルンの質問に答える。

「でもサーニヤが見たんなら確かだろ？ たく近頃の予報はどうなってるんだか……」

優人がアテにならなくなりつつある解析チームの予報に不平を漏らす。芳佳が入隊する以前は一週間に一度と定期的だったネウロイの襲撃も最近では5日置きと間隔が小さくなっている。

「けど、何も反撃してこなかったって言うけど、そんな事あるのかな？ それ本当にネウロイだったのか？」

「……………」

ソファアのひじ掛けに寄りかかりながら疑問を口にするハルトマン。彼女の言葉を聞き、表情を曇らせるサーニヤ。別にサーニヤを疑っている訳ではないのだが、思ったことをすぐ口に出してしまうのがエーリカ・ハルトマンというウィッチである。

「恥ずかしがり屋のネウロイ！」

場を和ませようと慣れない冗談を言うリーネ。ミーティングルームを沈黙が支配する。「なんてことないですよね……ごめんなさい」

ネウロイではなく自分が恥ずかしくなってしまう、身を縮ませるリーネ。

「だとしたら、ちょうど似た者同士。気でも合ったんじゃないやなくて？」

紅茶のカップを手にしたペリーヌが、サーニヤを横目に辛辣な言葉を吐く。さらに肩を落とすサーニヤ、その隣ではムツとなったエイラがべくつと舌を出す。

「ネウロイとは何か。それが明確になっていない以上、この先どんなネウロイが現れても不思議ではないわ」

ミーナがカップを回しながら言う。自分の考えを述べながらハルトマンやペリーヌの言葉で落ち込んでいるサーニヤをフォローしている。この細かい気遣いが彼女がウィッチ達から信頼される理由のひとつだろう。

「確かに、少し前までネウロイがビームを撃つなんて誰も予想出来なかったしな」

ミーナに同調する優人。彼や坂本が初陣を飾った扶桑海軍。その頃のネウロイは小型や中型が殆どで人類側の航空機と同じく実弾を使った機銃や爆撃が主戦法だった。今のように大型が出現したり、ビームを撃ってくるなど誰も思わなかった。

「仕損じたネウロイが連続して出現する確率は極めて高い……」

「そうね」

自身の経験を元に語るバルクホルンにミーナが頷く。

「そこではばらくは夜間戦闘を想定したシフトを敷こうと思うの。サーニヤさん！」

「はい」

「優人」

「ん……」

「芳佳さん！」

「は、はい！」

ミーナに指名された三人が順に返事をする。芳佳は呼ばれるとは思っていなかったのか、声が少しだけ裏返る。

「当面の間、貴方達三人を夜間専従班に任命します」

「えっ!?! 私もですか!?!」

サーニヤや優人ならいざ知らず、自分までもが選ばれた理由が分からず芳佳は当惑する。

「今回の戦闘の経験者だからな」

当然のように言う坂本。

「私はただ見ていただけで……」

芳佳が自信がないことを伝えようとすると優人が声を掛けてきた。

「まあまあ、夜間飛行の経験を積めるチャンスなんだし」

「で、でも……ぎやつ！」

素つ頓狂な声を上げる芳佳。背後にいたエイラが身を乗り出し、芳佳の頭の上に手を置いてのしかかかってきたのだ。

「はいはいはいはい！私もやる！」

手を上げて、自主的に夜間専従班に志願するエイラ。彼女に潰されている芳佳をリーネが心配そうに見ている。

「いいわ。じゃあ、エイラさんを含めて四人ね」

あつさりとエイラの主張を受け入れるミーナ。こうして夜間専従班は優人、芳佳、サーニヤ、エイラの四人となった。

「ネウロイの襲撃が不安定なのに夜間哨戒に四人も割けるのか？」

優人が不安を吐露すると、すかさず坂本が提案してきた。

「ならばローテーションにしよう。まずは優人、次はエイラでどうだ？」

「じゃあ、そうしましょうか」

「そう言うことなら俺も異存はないよ」

ミーナと優人が坂本の提案に賛成する。

「ごめんなさい。私がネウロイを取り逃がしたから……」

しよんぼりとしたサーニヤがか細い声で言う。

「ううん。そんなこと言ったんじゃないから」

「誰もお前のせいなんて思っていない。そんなに落ち込むな」

芳佳と優人が励ますが、サーニヤの表情は曇ったままだった。この日、サーニヤがこれ以上口を開くことはなかった。

第19話「過去の記憶」

1930年、大きな港で栄える扶桑皇国の横須賀。三浦半島を挟んだ入り江には学校があり、その裏山にはこの土地で代々続く診療所が建っている。造りは純和風で、『よろづ疾患 宮藤診療所』と書かれた看板以外はさほど特徴もない。

「この子が？」

「ああ。今朝、横須賀港の前にいたんだ」

診療所内では二人の男性が丸椅子に座った4、5歳くらいの少年を挟むようにして立っている。

一人は宮藤一郎。この診療所の一人娘である宮藤清佳、旧姓秋元清佳と結婚した男性で四年ほど前に竹田商会という重工メーカーに入社した若手設計者だ。

もう一人は赤坂伊知郎。扶桑皇国海軍横須賀鎮守府に勤務する中佐で、一郎にとっては同郷の先輩であり、歳の離れた友人でもある。

「三人とも」

奥の居間から清佳が顔を出した。

「そこじゃなんですから、こちらへお上がりください」

「あ、すみません。ほら坊や行くぞ」

赤坂は恐縮すると、少年の手取つて居間に上がった。部屋には清佳だけでなく彼女の母親、芳子もいた。卓袱台には茶の淹れられた湯呑みとオレンジジュースの注がれたコップが置かれていた。

「僕にはオレンジジュースを用意したんだけど、大丈夫？嫌いじゃない？」

「えっ？あつ、はい。ありがとうございます」

自分に優しく微笑み清佳に対して、少年は戸惑つたような顔をしながらも礼を言い、コップのジュースを口に含む。

「あ、美味しい」

オレンジの甘酸っぱさが口一杯に広がり、少年の口許が緩む。家に来てからずっと無表情だった少年に笑顔が見られ、清佳はどこかホツとする。

「えーつと？名前は何て言うのかな？」

一郎が少年に訊ねる。すると少年は両手で頭を抱えて表情を曇らせた。

「……わからない」

「えっ？」

「何も思い出せない……」

少年は頭から手を離すと一郎へ向かつて身を乗り出した。

「僕は誰なの？なんでここにいろの？誰か教えて！」

半狂乱になる少年。彼は今朝、横須賀軍港の門前に一人で立っていたところを赤坂によつて保護されていた。

少年は記憶を喪つているらしく自分が誰なのか、何処から来たのか、誰と一緒にいたのかまったくわかつていないようだった。

「母さん、どう？」

しばらくして少年が落ち着くと、芳子による彼の診察が始まった。

「どうもこうも、こんな症状は私も初めてだよ」

清佳に訊かれ、少年を診ていた芳子は困ったような表情でそう言った。

「ちよつとでも思い出せることはないかい？お家の手掛かりになりそうなの……」

「……………」

芳子は少年を不安がらせないように笑顔で優しく問い掛けた。少年は何か思い出さうと思考を巡らせ始める。芳子達四人は彼が答えるのをじつと待つ。

「……………」

「ユ？」

「……………」

無理に思い出そうとして頭痛がしたのか、少年は苦悶に表情を歪めると両手で頭を抑

える。

「無理に思い出そうとしなくていいのよ？辛いことさせてごめんさい」

手を少年の肩に置きながら励ます清佳。少年の反応を見て芳子は「うくん」と唸る。

「以前、知り合いの医者に聞いたけど。こういうことは何か強いショックを受けて起くるものらしい」

「強いショック……ですか？」

一郎が芳子の言葉を繰り返す。芳子は「うん」と頷き、説明を付け足す。

「思い出したくないような、ひどい体験をしたとか」

「そんなー」

思わず声を上げる清佳。こんな小さな子どもが記憶を失うほどのつらい体験をしたかもしれない。

俯かせている少年の顔を横から見てみると、その目には不安や恐怖の入り混じった感情が色濃く映っている。

「何か治す方法は？治癒魔法を使ってみては？」

と赤坂。彼は従軍時代に多くの将兵を救った芳子の魔法力と治癒魔法をあてにしていた。

「それは難しいことです」

芳子は渋面を作って答える。

「治癒魔法は怪我や病気等の身体的な物に作用するものです。こういった精神的なものには……」

「効果がないと?」

「ええ。記憶が自然に戻るのを待つしか」

「うゝむ」

赤坂はどうしたものか、と険しい表情を作る。ここへ来る前に扶桑海軍の軍医にも診せたが、芳子と同じ意見だった。宮藤家の治癒魔法でも無理となると完全にお手上げ、記憶に戻るのを待つにしてもいつになるのか。

「あの赤坂さん」

少年を心配そうに見ていた清佳が赤坂に視線を移す。

「この子、どうなるんでしようか?」

「軍の方で引き取り手を探そうと思っておりますが……」

歯切れの悪い物言いの赤坂。次に清佳は一郎へ目を向けた。

「アナタ」

「……わかった」

妻の意を察した一郎は頷くと少年の方へ向き直った。

「ねえ君、しばらくウチにいないかい？」

一郎の言葉に反応して、少年はゆつくりと顔を上げた。

「丁度部屋も一人分空いてるし、僕は留守にすることが多いから代わりに二人の手伝いをしてくれると助かるんだけどな」

「え？」

少年は目を丸くする。一郎からの突然の申し出に理解が追い付いていない。

「お、おい！引き取るつもりか？この前、子どもが産まれたばかりだろう？」

赤坂の声色が変わる。宮藤夫妻には半年前に産まれた女の子がいる。それなのに一郎と清佳はもう一人子どもを、しかも身元の分からない得体の知れない少年を引き取るうというのだ。

「大丈夫ですよ、赤坂さん」

自分達を気遣う赤坂を一郎が宥める。

「でも……僕、何もわかりません。お手伝いなんて……」

「心配だよ、坊や」

今度は芳子が語りかける。

「私達が教えるから、やっていくうちに覚えるよ」

「で、でも……素性のわからない僕がここにいて、もし後で迷惑が掛かったら……」

「おや？歳のわりに随分しつかりしてるんだね？」

出来すぎた性格の少年に芳子は半分感心し、半分呆れる。

「そんな心配しなくていいのよ？あなたは何も知らないんだから」

そう言つて清佳は少年を抱き締め、頭を優しく撫でる。

「もしあなたを知っている人が来て悪いことをするなら、私達が守つてあげるから」

抱き締める腕に力が込められる。少年は清佳から感じる温もりや鼓動に安心したよ
うな、嬉しいよ、はたまたむず痒いよ、不思議な気持ちになり、戸惑いつつもそ
れに応えるように清佳の胸に顔を埋めた。そんな少年を愛らしく思い、清佳は慈愛に満
ちた表情で微笑んだ。

「あ、あのー！」

少年はしばらくして清佳から離れると宮藤家の人間の顔を順に見つめ、頭を下げた。

「よ、よろしくお願ひします！」

「本人も異存は無いようですし。赤坂さん、僕らに任せて頂けませんか？」

少年の意思を確認した一郎は赤坂に許可を求めた。

「まあ、宮藤家の皆さんが良いなら私から言うことは何もないよ」

と赤坂。難色を示していた彼だったが、宮藤家の人々の人情味とそれに触れた少年の
表情が日に照らされたように明るく変わったのを見て、態度を軟化させる。赤坂もなん

だかんだで少年のことを気に掛けているのだ。

「決まりだね！じゃあ、さっそく名前を決めようか？」

「名前？」

清佳が芳子の方へ振り返る。

「名前がないと呼ぶのに困るんじゃないのかい？」

「確かに、何が良いかしら？」

母の意見に同意すると清佳は頬に手を当て、眉間に皺を寄せながら考え始める。そこへ一郎が「そう言えば」と割って入る。

「彼は『ユ』がつく何かに引っ掛かってたみたいですね？」

「自分の名前か、大切な何かの名前に『ユ』が入っているのかもしれないな」

赤坂も加わる。彼の話聞いて清佳の表情が弛んだ。少年の名前を思い付いたらしい。

「じゃあ、優人っていうのはどう？」

「ゆうと？」

少年がぼかん、とした顔で繰り返す。

「そう優人！優しい人って書いて優人、今日からあなたは優人よ」

「優人……優しい人、僕が？」

「ええ、あなたはとても優しそうな目をしてるもの」

そう言つて笑いかけながら清佳は少年、いや優人の手を握る。すると、狙いすましたかのように隣の部屋から赤ん坊の泣き声が響いてきた。

「あら？大変。ちよつと失礼します」

清佳は赤坂に一礼すると、我が子のもとへ急いだ。

「赤ちゃん、いるんですか？」

「そうだよ。半年くらい前に生まれたんだ」

一郎は優人に向かつて身体を傾けると次に隣の部屋へと続く襖に目をやる。それと同時に襖が開かれ、赤ん坊を抱いた清佳が居間に戻ってきた。

「うるさくしちゃつて、ごめんなさい」

清佳は申し訳なさそうに頭を下げる。赤ん坊はすでに泣き止んでいる。

「ほら、芳佳。お兄ちゃんにこんにちわつて……」

清佳はそう言つて座ると優人の顔が見える位置まで赤ん坊、芳佳を下げる。優人と目を合わせた芳佳は初対面の彼にキョトン、とした顔を向けるもすぐに笑顔になった。眩しすぎる笑顔に優人の頬がほんのり赤く染まる。

(可愛い……)

優人と芳佳は出会つてすぐに互いのことが気に入った。



1944年8月17日、ブリタニアの501基地。

「ううん……」

目を覚ました優人はまだ眠たい目を擦り、自室のベッドから身体を起こした。

「……夢か」

幼い日の芳佳との夢といい、最近はやたらと過去の記憶を夢で見る。昔の夢を見て目を覚ますなんて老人のようだと、と思い優人は笑みを零した。

「さてと……今日は久々の夜間飛行だな」

頭が覚醒すると共に本日の予定を思い出した優人は両頬をパンパンと叩いて気合を入れる。夜に飛ぶのは随分久しぶり。昼と夜では勝手が違う空において、芳佳に情けない姿を見せたり、ナイトウィッチのサーニャの足を引っ張らないようにしなくては、と表情を引き締める。

「あつ……」

寝間着から制服に着替えようとベッドから降りると、壁に掛かっている時計が目につき、優人は声を漏らす。朝食の時間がとつくに過ぎていた。

「大遅刻だ」

優人は青ざめると、大急ぎで収納から制服を取り出した。

◇ ◇ ◇

優人起床の数分後。

「悪い！遅れた！」

そう言つて食堂に駆け込んだ優人。慌てて身嗜みを整えたため、髪に寝癖が残つていた。

そんな彼を最初に迎えたのはリーネだった。

「おはようございませう優人さん。ちよつと冷めちやつてますけど、どうぞ」

そう言つてリーネは厨房のカウンターから、朝食を乗せたトレイを手渡した。

今朝のメニューはトースト、サラダ、そしてベーコンエッグ。このベーコンエッグはブリタニア式の朝食には欠かせない料理。ブリタニア空軍ではパイロットが出撃する際の特別食として振る舞われている。

「遅刻だぞ、優人」

と、厳しい視線を向けるバルクホルン。続いてミーナがいつもの穏やかな表情で優人

に声を掛けた。

「ごめんなさい、先に食事済ませちゃったわ」

「いやいや、寝坊した俺が悪いんだし」

ミーナにそう返すと、優人はテーブルへ移動して芳佳の隣に座った。

「お兄ちゃんが寝坊なんて、珍しいね」

「ああ、昨日遅くまで本読んでたから」

優人は照れ臭そうに頭を掻くとトーストをかじった。宮藤兄妹は早起きすることが多い。芳佳は坂本と朝練、もしくは朝食当番。優人は朝の読書かストライカーの整備。バルクホルンが手伝ってくれる以前は前日残した書類の片付けも日課だった。

芳佳は入隊当初から寝坊することがたまにあったが、優人は今回が始めてだ。他のウィッチ達も意外そうな顔で優人を見ている。

「あら、ブルーベリー？でもどうしてこんなに？」

紅茶のお代わりを淹れるため、優人と入れ替わりに厨房へ向かったペリーヌがどつきりとブルーベリーの盛られたザルを見つける。

「私の実家から送られてきたんです。ブルーベリーは目にいいんですよ」

とエプロン姿のリーネが微笑む。彼女の父親は裕福な大商人、娘のいる501へ送られてきたブルーベリーなも半端ではない。今、その極々一部が朝食後のデザートとして

出されている。

「いっただき〜！」

食欲旺盛なハルトマン。ブルーベリーの器を手に取ると勢い良く掻き込んだ。

「まあ、きれい」

ハルトマンに続いてブルーベリーの器を取ったミーナが感嘆の声を漏らす。リーネが洗ったばかりで細かな水滴のついたブルーベリーに窓から射し込む日の光が反射して宝石のようにキラキラと輝いている。

「そう言えば、ブリタニアでは夜間飛行のパイロットがよく食べるとい話を聞くな
……」

「へ〜、そんな効果が……」

バルクホルンと優人も興味深そうにブルーベリーを見る。優人の口からはパン屑が落ちていたため、お行儀が悪い。

「芳佳！ シャーリー！ べ〜して、べ〜！」

ブルーベリーを食べ終えてしまったルツキーニ。食事中的芳佳とシャーリーのところに、ひよこつと顔を出すと二人に舌を出すようせがむ。

「ひよこつ〜」

「んべ」

芳佳とシャーリーは言われた通りに舌を出す、ルツキーニも自分の舌を出して二人に見せた。三人の舌はブルーベリーによって紫色に染まっている。

「「きやはははははは!!」」

三人はお互いの舌を見て笑い合う。ナプキンで上品に口元を拭いていたペリーヌがその様子を呆れ顔で見ていた。

「まったくありがちなことを……」

「お前はどうかんだ?」

後ろからそろりと近づいたエイラが指を突っ込み、ペリーヌの口を開かせる。すると、紫色に変わった歯が見えた。そして――

「ん?」

タイムリング悪く、ペリーヌの前を坂本が通りかかった。

「……何事もほどほどにな」

ペリーヌの歯を見て、そう言いながら立ち去って行く坂本。敬愛する上官に醜態をさらしてしまったペリーヌは半泣きになりながらエイラに詰め寄っていく。

「な、なんてことなさいまして! エイラさん!!」

「ナンテコトナイって」

笑みを浮かべながら早歩きで逃げていくエイラ。昨夜、ペリーヌがサーニャに嫌味を

言ったことを根に持っていたエイラはこの場で仕返しをしたのだった。

「……おいしい」

無表情のまま、パクパクとブルーベリーを食べるサーニヤ。彼女はブルーベリーが気に入った様だ。

「皆、朝から元気だな……」

優人は賑やか食堂の風景を微笑ましそうに見ると、自身もブルーベリーの器に手を伸ばす。

「あれ？」

器を見て目を丸くする優人。リーネから渡された時にはブルーベリーが入ってははざだが、いつの間にか空になっていた。顔を上げてみると、不自然に頬袋の膨らんだハルトマンが目映った。

「……ハルトマン」

「優人のブルーベリーなんて知らないよ」

「まだ何も言っていないんだが？」

ハルトマンに盗み食いをされたことは明らかだが、追及しようとしても煙に巻かれてしまいそうなことやブルーベリーがまだ残っているであろうことを考え、冷やかな目で見るだけに留めた。

「さて、朝食が済んだところで……」

朝食を食べ終えたところで、坂本が夜間専従班の四人に声を掛けてきた。

「お前たちは夜に備えて寝ろ!!」

「……………え？」

芳佳は朝食を食べ終えた直後に寝ろと言われたため、自分の耳を疑った。

「あの坂本さん。私達、朝ごはん食べたばかりなんですけど……………」

「お前たちには、しばらく夜間中心の生活をしてもらう」

「しばらく、つて？」

キョトンとした顔で訊き返す芳佳、坂本は簡潔に答えた。

「ネウロイを倒すまでだ!」

「ナア、少佐」

「ここでエイラが手を上げる。

「なんだ? エイラ」

「本当に兄藤まで夜間飛行に参加させるのかヨ?」

「あ、兄藤?」

妙なアダ名をつけられた優人は顔をひきつらせる。宮藤兄妹を区別するために優人の方をアダ名で呼ぶことにしたようだが、それならば名前で呼んだ方が早い気もする。

「不服なのか？」

と眉を潜める坂本。

「いや、不服っていうかさ……」

優人に対し、懐疑的な目を向けるエイラ。優人の実力を疑っているというよりは彼を警戒しているようにも見える。

坂本は自分と並んで航空歩兵としてのキャリアが501で一番長い優人の何が不満なのか理解できなかった。

「心配ないわ」

エイラが歯切れの悪くしているとミーナが口を挟んできた。

「優人は夜間戦闘も優秀よ。サーニャさんが来る前はダンフォード軍曹と夜間哨戒に出ていたもの」

ダンフォード軍曹とは501の初期メンバーの一人であるブリタニア空軍のナイトウィッチ、ペトラ・ダンフォード軍曹だ。優人は彼女とロッテ組んで夜間哨戒に出ていた。

やがてダンフォード軍曹がブリタニア側の判断で転属になると、優人はオラーシャ軍からサーニャが送られるまでのナイトウィッチ不在期間に夜間哨戒を行っていた。

「まあ……ミーナ隊長がそう言うなら……」

澁々ながらも了承するエイラ。

「ほら、わかつたら夜間哨戒に支障が出ないように早く寝ろ！」

坂本に促され、夜間専従班の四人は食堂から部屋に向かった。



自室で眠っている優人を除いた芳佳、サーニヤ、エイラの三人は臨時夜間専従班詰め所となっているサーニヤの部屋にいた。起きたばかりですぐには眠れないのか、三人はベッドで足を伸ばしてくつろいでいる。

部屋はカーテンと札状の紙によって光を遮られ、真つ暗に暗くなっている。部屋の壁にはカレンダーが掛けられており、18日に丸印がつけられていた。

「さつき起きたばかりなのに……何も部屋の中まで真つ暗にすることないよね」

「暗いのに慣れろって事ダロ？」

愚痴をこぼす芳佳に対し、足を動かしながら横になっているエイラが理由を説明する。隣ではサーニヤがお気に入りネコペンギンのぬいぐるみを抱いて横になっている。

「ごめんね、サーニヤちゃんの部屋なのにこんなにしちゃって……」

声を掛けられ、サーニヤは芳佳に向けて顔を上げる。

「別に……いつもと変わらないけど……」

「そうなんだ……でも、なんかこれ御札みたい」

光を遮るため、カーテンに貼つてある紙の一枚を手に取りながら芳佳は呟く。札状の紙には魔法陣が描かれており、西洋風の御札に見えなくもない。

「オフダ？」

芳佳の言葉に反応して、エイラが身体を起こす。

「お化けとか、幽霊とかが入って来ませんようにつておまじない」

「私、よく幽霊と間違われる……」

仰向けの体勢で天井を見上げていたサーニヤが言う。

「へへ、夜飛んでるとありそうだよねえ」

「ううん、飛んでなくても言われる……いるのかいないのかわからないって」

「あはは……」

サーニヤの言葉に芳佳は苦笑いを浮かべる。

「ツンツンメガネの言う事なんか気にすんナ。暇だったらタロットでもやろう？」

「タロット？」

タロットを提案したエイラの方を芳佳が見る。

「占いダヨ、私は未来予知の魔法が使えるンダ。ま、ほんのちよつとの先だけどナ」

そう言つて、エイラがベッドの上にタロットカードを並べる。芳佳はその中の一枚が引いた。

「どれどれ……」

エイラは芳佳の引いたカードを覗き込む。カードの絵の中央には翼を持つ天使のよ
うな女性が、左右にはルツキーニやハルトマンに良く似た少女がそれぞれ描かれてい
る。

「ふーん、よかつたナ。素敵な恋人ができるつて」

「えっ、そうなの!？」

それを聞いて。パアツと芳佳が笑顔になる。

「誰か好きなやつとかいないの力？」

「好きな人……うーん」

エイラに聞かれ、芳佳は考え込む。すぐにある人物の顔が出てきたが、直後に芳佳は
真っ赤になる。

「いるけど、その人じゃないと思う……」

「なんで？」

「だって、その人は……」

そこまで言うとは芳佳は言葉を止め寝つ転がる。そして、部屋から持ってきた枕に顔を埋めて足をバタバタ動かし始めた。

（なんで私はこんなにドキドキしてるの〜!）

「なんだ？」

「宮藤さん？」

そんな芳佳の見て、エイラとサーニヤは不思議そうに首を傾げた。

◇ ◇ ◇

夕方になり、ルツキーニが廊下から夜間専従班詰め所と優人の部屋に向かって叫ぶ。

「夕方だぞ〜！おつきろ〜！」

「ん……」

ルツキーニの元気な声で目を覚ました優人はすぐさま時計を確認する。寝坊した今朝とは違い、時計の針は夜間専従班の起床予定時刻を差していた。

「大丈夫だな、ふあくよく寝た」

優人は両手を上げて背伸びをする。今朝、坂本から寝ろと言われた際は起きたばかりで眠れるか心配した彼だったが、ベッドで横たえているうちにいつの間にか寝入ってい

た。質の良い眠りが出来たのか、身体がいつより軽い気がした。

「スー……スー……」

「ん？」

自分しかいないはずの部屋で誰かの寝息が聞こえる、しかも優人のすぐ隣からだ。目をやると、そこには――

「な、なあああああああ!!?痛っ!!」

驚いた優人は叫び声を上げながらベッドから転げ落ちる。頭と背中と腰を強く打ち、痛みで涙目になる。

「ふああ……うるさいなあ……」

優人と一緒にベッドで眠っていた人物が彼の叫び声で目を覚ます。

「何してるんだよ!?!ハルトマン!!」

その人物はエーリカ・ハルトマン。彼女は優人が寝ている間に部屋へ忍び込み、彼のベッドに潜り込んでいたらしい。

「何って……寝てたんだよ?」

見てわからない?とでも言いたげな表情で答えるハルトマン。目はまだ眠たそうな半目だ。

「それくらいわかるわ!!俺が聞きたいのは、何で俺の部屋の俺のベッドで俺と一緒に寝

ていたのかということだよ!!」

「いや、だつて部屋で昼寝したらトウルルーデに叩き起こされるし……どこか別の場所で寝よう……」

どうやら彼女はバルクホルンの目から逃れるために優人の部屋に侵入してきたようだ。

ちなみにハルトマンは夜間専従班ではない。ただ昼寝がしたいだけである。

「それでなんで俺の部屋に来るんだ!」

「親しい相手とはいええ、男部屋で女が寝ているとは誰も思わないでしょ? 灯台下暗し……つてやつだよ」

ハルトマンはそう言つてベッドの上に立つと、手を腰に当てながら得意気に胸を張る。

「お、おい! お前なんて格好してるんだよ!」

「えっ?」

優人に指摘され、ハルトマンは顔を下へ向ける。今、彼女は上はタンクトップのみ、下はノーズボン、つまりは半分裸の状態だ。

「あつ、なんかスースーすると思つたら」

「あほか!! つて早く服を着ろ! ズボンを履け!!」

平然と言うハルトマンを怒鳴りつけると優人は室内を見回した。ハルトマンの服は部屋のどこにも見当たらない。彼女はこんな無防備な格好で宿舍内を彷徨いた上で男の部屋に浸入し、男が眠っているベッドに潜り込んだというのか。

「あつれ〜?」

優人の反応を見たハルトマンがニヤニヤと笑みを浮かべた。

「優人つてば、もしかして私のセクシーボディに欲情しちゃっ……いでっ!!」
「するか!!」

調子に乗り出すハルトマンに対し、優人は拳骨を喰らわせる。その直後に、部屋のドアが開かれた。

「何を騒いでいるんだ優人! 声が廊下まで——」

優人の怒鳴り声を聞きつけたバルクホルンが最悪のタイミングで部屋に入ってきてしまう。彼女は優人とハルトマンを見て、数秒固まった後にワナワナと震え出した。

「バ、バルクホルン?」

「これはどういうことだ?」

「いや、これは……」

バルクホルンは二人を睨みつけた。明らかに誤解をしている彼女に優人は事情を説明しようとする。

すると、二人の様子を見ていたハルトマンが悪戯っぽく笑った後に両手で顔を覆って泣き真似を始めた。

「酷いよ優人お……」

「「えっ？」」

ハルトマンの言葉に優人とバルクホルンは揃って、気の抜けた声を漏らす。

「私、嫌だつて……こんなによくないっていったのに」

「は、ハルトマン？」

「部屋へ強引に連れ込んで、無理矢理……」

「はあ!? 何言い出すんだ!？」

泣きながら訴えるハルトマン。もちろん優人は何もしておらず、ハルトマンはさも被害者かのように演技をしているだけだ。しかし、それがあまりにリアルだったため、優人はやましいことがないにも関わらず焦り出してしまふ。

「汚されたあ……優人のケダモノオ……」

「ハルトマン! マジでやめてくれ!」

嗚咽混じりに次々と恐ろしい言葉を紡ぎ出すハルトマン。優人は必死に懇願するも時既に遅し、怒りを全身から醸し出したバルクホルンがいつの間にか目の前まで来ていた。

「優人……お前が仲間になんか淫らな行いをするやつだつとは……」

生真面目な性格のバルクホルン。ハルトマンの悪戯を真に受けてしまった彼女は親の敵でも見るような目で優人を睨みながら手をコキコキ鳴らしている。魔法力を発動し、使い魔の耳と尻尾も出ている。

「見損なつたぞ」

「ちよっ！話を……」

「問答無用!!」

聞く耳を持たないバルクホルンの剛拳が優人の顔にめり込んだ。

第20話「暴かれた秘密と大いなる誤解」

夕刻の食堂にはミーナと坂本以外のメンバーが集まっていた。もちろん、ハルトマンの悪巧みによつて顔を大きく腫らした優人と、彼を本気で……しかも魔法力を使つて殴つてしまったバルクホルンの姿もある。

「本当にすまない!!」

優人を殴つた右拳を左手で抑えながら勢い良く頭を下げるバルクホルン。彼女らしい何の飾りもない真つ直ぐな謝罪だが、やや愚直な感じ気もする。

「いや、わかってくれば良いから!」

と優人。芳佳の治療魔法を受けながらグツタリと椅子に腰掛け、天井を仰いでいる。バルクホルンの拳がまだ効いているようだ。

「はい、終わったよお兄ちゃん」

芳佳の治療が終わり、優人は手で顔に触れる。腫れは完全に引き、痛みや痺れも残っていない。

「ありがとう芳佳。すっかり治療魔法をマスターしたな」

「ううん、まだまだだよ」

ニツとはにかみながら自分を誉める優人に芳佳は嬉しさと照れ臭さの入り混じった笑顔で返した。

「まったくトウルデーってたら……暴力的なんだから」

頭の後ろで腕を組みながら他人事のように言うハルトマン。バルクホルンから鉄拳制裁を受け、彼女の頭には鏡餅のような三段重ねのタンコブができていた。

「ハルトマン！元はといえばお前が！」

自身が元凶であるにも関わらず呑気なハルトマンにバルクホルンは思わず声を荒げた。

「そもそも！あんな裸同然の格好で異性のベッドに入るなど、非常識極まりないぞ！嘆かわしい！」

「またまたお堅いことを」

「お堅い!?これはカールスラント軍人として、というか人としてごく当たり前の考えだ！」

「そんなこと言つて、本当はトウルデーも優人に添い寝したかったんじゃないの?」

「な、なななななななな!?!何を言っているんだ貴様は!?!」

ハルトマンの言葉に顔を真っ赤にして、分かりやすく動揺するバルクホルン。彼女を尻目にハルトマンは優人へ向き直った。

「優人はどう？ トウルルーデと一緒にベッドで寝たい？」

「え？ えーつと……」

言葉を濁す優人。バルクホルンほどではないが、顔に赤みが差していた。

「もしかしてシャーリーやリーネとが良い？ 優人は胸が大きい方が好きだし」

「えええ!!」

自身の胸をニヤケながら見るハルトマンの言葉でリーネもバルクホルン並に真っ赤になる。一方のシャーリーは恥ずかしがる様子もなく、豪快に笑っている。

「あつははははは！ なんだ優人？ それならそうと言ってくれば良いのに……」

シャーリーにそう言うと言と椅子から立ち上がり、優人に向かって両手を広げた。

「ほら、あたしの胸に飛び込んでおいで」

「いやいやいや！ 俺はそんなつもりは！」

優人は頭を振りながら2、3歩ほど後退る。シャーリーは逃がさない、と言わんばかりに優人と同じ歩数だけ彼に近付いた。

「そんな遠慮すんなよ」

「ダメ！ シャーリーのはあたしのなの！」

とルツキーニが優人とシャーリーの間に入り、両手を左右に伸ばして通せんぼする。シャーリーの胸は事実上ルツキーニの特等席のようなもの。とられたくないルツキー

ニは涙目で優人を睨んだ。

「大丈夫だよルツキーニ。シャーリーをとったりしないから」

優人はルツキーニを安心させるように微笑みかけた。

「うじゆう……絶対だよ」

ルツキーニは優人に念を押すと甘えるようにシャーリーの胸に顔を埋めた。シャーリーはそれを受け入れ、ルツキーニの頭を優しく撫でてやる。

（助かったか……）

ルツキーニの介入でシャーリーの身体を使った誘惑（正確にはただのからかい）を回避することが出来た優人はホッと胸を撫で下ろした。

（お兄ちゃん、リーネちゃんやシャーリーさんみたいな大きい子が好きなのかな？……）

芳佳は自分の胸に視線を落とし、手で触ってみる。ルツキーニに残念賞と言われた501入隊日から既に4ヶ月。坂本の特訓により魔法力のコントロールは良くなってきているが、胸の成長度はほぼゼロ。寄せて上げる、という芸当も出来ない。芳佳は二人との明らかな胸部格差に溜め息を吐いた。

「芳佳？」

「えっ？あつ……何？」

落ち込んでいた芳佳は優人に声を掛けられてハッと顔を上げる。

「座ったら？」

優人は隣の椅子を引いて芳佳に座るよう勧める。

「そ、そうだね……よいしょつと」

「……芳佳」

「何？」

「そこは俺の膝」

「えっ？ ああ！ ご、ごめん！」

優人に指摘され芳佳は慌てて尻を椅子へ移動させる。

「大丈夫か？ 体調でも悪いなら——」

「大丈夫！ 大丈夫だから！」

両手を顔の前で振りながら言う芳佳。椅子と間違えて兄の膝に座り、そのことを言われるまで気付かなかったという自分でも信じられないような間違いをしてしまい、恥ずかしくて顔から火が出そうだった。

「おっ？ お兄ちゃんに甘えたかったのか？」

「芳佳つてば可愛い〜！」

一部始終を見逃さなかったシャーリーとルツキーニが芳佳を見てニヤニヤと笑みを浮かべている。

「ち、違いますよ！ちよつと考えごととしてて……」

「考えごとつてなあに？」

「えっ、えーつと」

リーネに訊ねられるも胸について悩んでいたとは言えず、芳佳は口ごもった。

「あらあら、考えるということを知らない豆狸さんが悩むだなんて！」

口に手を当てて、わざとらしく驚くペリーヌ。

「明日は槍でも降るのかしら？」

「ひどーい！て言うか誰が豆狸ですか!?!誰が!?!」

カチン、ときた芳佳は抗議するもリーネ、バルクホルン、サーニャ以外のウィッチ全員が一斉に芳佳を指差した。

「お兄ちゃん、みんながいじめるよ〜」

「よしよし、元気だしな」

膨れっ面の芳佳を優人が慰める。無論、ウィッチ達は芳佳をいじめているわけでない。むしろ可愛がつており、先程のからかいもその一環だ。

「それにしても……」

優人が食堂内を見回した。

「なんだが、いつもより暗いな」

「暗い環境に目を合わせる訓練だって、坂本少佐が」

疑問を口にした優人にリーネが答える。普段ならば、夕食時に食堂内の電気が点けられるのだが、今日は蠟燭のみである。

「その坂本とミーナは？」

「二人は資料室だ。過去に出現したネウロイのことを洗い直すつもりらしい」

今度はバルクホルンが答えた。

「なるほどな」

納得する優人。昨晚、ミーティングルームでは何も言わなかったが、ミーナはサーニヤにしか見つけられなかったネウロイのことが気になっている様子だった。

「これは？」

と芳佳。テーブルの上に置かれたティーカップには琥珀色の見慣れないお茶がいつの間にか注がれていた。

「マリーゴールドのハーブティですわ！これも目の働きを良くすると言われていますのよ」

髪をかきあげながら得意気と言うペリーヌ。このマリーゴールドはペリーヌが基地内の花壇で育てたものである。心なしか、彼女をスポットライトが照らしているように見える。

「あれ？それって民間伝承じゃ？」

「失敬な！これはおばあ様のおばあ様のそのまたおばあ様から伝わるものでしてよ!!」

リーネに迷信と否定されそうになり、ペリーヌは憤慨する。

「う、ごめんなさい」

ガルルと犬のような唸り声を上げながら睨むペリーヌに身を縮ませるリーネ。

「山椒みたいな匂いだね？」

「サンシヨ？」

ハーブティを飲んで、芳佳は実家の診療所で漢方として使用していた山椒を思い出す。リーネには何のことかわからないようだ。

「芳佳、リーネ！もつかいべくして。べく」

またもやひよこつと顔を出したルツキーニが二人にせがんだ。

「べく」

言われた通り舌を出す二人。ブルーベリーの時のように変色はしていない。ルツキーニは眉をヒクヒクさせた後、騒ぎ出した。

「つまんな〜い!」

「……………」

ルツキーニの叫び声を聞いたペリーヌは居心地の悪そうなに顔を伏せる。

「どつちらけ〜」

さらにエイラからのとどめの一言。

「べ、別にウケを狙った訳ではなくってよ!」

エイラを睨みつけ、抗議するペリーヌ。

「……まずい」

サーニヤが呟く。ペリーヌが親切心で出したハーブティには低評価が下されてしまった。

「つまんない! ないないない! つまんない!」

「ルツキーニ、そんなこと言っちゃってしょうがないだろ?」

「だつて〜!」

尚も騒ぎ続けるルツキーニをシャーリーが宥めようとすることも収まらない。

「ほらほらルツキーニ、シャーリーを困らせちゃ駄目だぞ?」

見かねたハルトマンがルツキーニに声を掛ける。自分のことを棚に上げる彼女に優人とバルクホルンは正直どの口が言うんだ、と突っ込みたくなった。

「良いもの上げるから落ち着きなよ」

「良いもの!?! なになになに! 美味しいお菓子?」

ルツキーニが興奮気味に訊ねる。

「もつと良いものだよ、じゃじゃ〜ん！」

ハルトマンが数冊の雑誌を取り出し、天井に向かって掲げる。

「ふえええ!!」

「ひっ!!」

「なっ!!」

リーネ、ペリーヌ、バルクホルンは雑誌を見るなり顔を赤くした。特にリーネはネウロイのビーム発射口並に真っ赤だった。

ハルトマンが見せたのはグラマラスな体型の水着美女が表紙を飾っているグラビアのプリン本。扶桑、ブリタニア、カールスラント、ロマーニヤ、リベリオンの各国で出版されている雑誌が一冊ずつ、計五冊だ。

「うわあ〜!おっぱいがいっぱいだあ〜!」

ルツキーニは自分好みのたわわな果実に目を輝かせるとロマーニヤの雑誌を手を取った。

「そ、それは……」

青ざめる優人。これらのグラビア雑誌は優人がこっそり購入し、自室に隠していた彼の私物。

大型の封筒に入れ、床板の裏にテープで留めていたため意識して探さない限りは見つ

からないはずだが、妙なところで鋭いハルトマンの嗅覚は誤魔化せなかったようだ。

優人は就寝中に部屋に鍵をかけて置かなかったことを後悔しつつ、頭の中で新たな隠し場所を思案し始めていた。

「優人の部屋を物色してたら見つけたんだ！」

とドヤ顔で言うハルトマン。彼女は『黒い悪魔』というアダ名を持っているが、優人にとつて今のハルトマンは悪魔そのものだ。

「エイラ、前が見えないわ。どうかしたの？」

「さ、サーニヤにはまだ早いんだナ！」

「早い？……つて、何のこと？」

少し離れた場所からエイラがサーニヤの両目を手で塞いでいる。固有魔法『未来予知』でハルトマンがグラビア雑誌を出すことを予知したらしく、エイラの動きはかなり俊敏だった。

「ほお……これは中々大胆な水着だな」

シャーリーが顎に右手の人差し指と親指を当て、ニヤつきながら母国リベリオン合衆国のグラビア雑誌をマジマジと見る。掲載された写真にはサイズがやや小さめのセパレーツを着た女性が映っていた。

「我が祖国の物まで！優人！お前は軍の基地にこんないかがわしい雑誌を！」

バルクホルンのもとにはカールスラントの雑誌が渡っていた。狼狽えながらも優人を睨むが、その表情には威厳や気迫というものがまったく感じられない。

バルクホルンに続き、震える手でブリタニアの雑誌を握り締めていたペリーヌも優人に向かつて吠える。

「こ、こんな破廉恥な物を?!大尉!貴方を見損ないましたわ!リーネさん、貴女も何か言つて差し上げなさい!」

「えつ……えつちなのは良くないと思いますけど、優人さんも年頃の男の子ですし。これくらいは普通……なのかな?」

これ以上ないほど赤面しながらも、バルクホルンやペリーヌに比べて柔軟な考えを示すリーネ。

彼女は8人兄弟の真ん中、弟相手に似たようなことがあったのかもしれない。

「ふむふむ、なるほどね」

すべての雑誌を見終えたハルトマンは一つの推測を述べた。

「どうやら優人は胸がデカくて長いブロンドの髪をした女がタイプみたいだねえ」

扶桑以外の四か国の雑誌はグラマラスボディと美しく長い金髪を持った女性がメインだった。

ペリーヌとリーネは互いの顔を見合わせる。リーネは胸が大きく、ペリーヌは長いブ

ロンドの髪である。

「もう勘弁して……」

公開処刑同然の状況下、頭を抱えて踞る優人。自室に侵入され、顔面にストレートを喰らい、さらには他人に知られたくない秘密を暴かれた。

彼にとって今日は厄日であり、忘れられない日となるだろう。

「……お兄ちゃん」

今まで黙っていた芳佳に声を掛けられ、優人は恐る恐る頭を上げる。

「私！頑張るから！」

（……何を？）

とは訊けない優人であった。

（アイツもおっぱいが好きなのカ？）

心の中でそう呟くエイラ。ミーナの命令とは言え、男である優人がサーニャと一緒に飛ぶことを良く思っていないかった。しかし趣味の方向性に似たものを感じ、若干の親近感を抱き始めていた。

◇
◇
◇

しばらくして。優人、芳佳、サーニヤの三人は誘導灯の点いた滑走路の前に立っていた。もう一人の夜間専従班メンバーであるエイラは基地待機だ。

夕食時のことが尾を引いているのか、優人は少し疲れているようにも見える。

「ふ、震えが止まんないよ」

「どうして？」

何やら怯えた様子の芳佳。彼女の顔を覗き込みながらサーニヤは不思議そうに首を傾げた。

「夜の空がこんなにて怖いなんて思わなかった」

芳佳はカタカタと小刻みに震えながら目の前に広がる漆黒の闇を見つめる。暗すぎてどこが空でどこが海かもわからない。一歩足を踏み出せば暗闇の中に吸い込まれそうだ。

「初めての夜間飛行ならそうなるよな」

優人が芳佳に共感を示す。彼も新人時代に夜間飛行を経験しているが、初めての夜空はとても怖かった。

「無理ならやめる？」

サーニヤが芳佳を気遣う。芳佳は順に優人とサーニヤの顔を見た。

「て……て、手つないでもいい？お兄ちゃんとサーニヤちゃんが手を繋いでくれたら、

きつと大丈夫だから」

(っ!?!……可愛い)

小動物のように震えながら自分に助けを求める芳佳にドキツとする優人。サーニヤの方も頭の魔導針が緑色からピンク色に変わっている。心なしか使い魔の尻尾も嬉しそうに揺れているように見えた。

サーニヤが自身の左手と芳佳の右手を繋ぐと優人も芳佳の左手に自分の右手を繋いだ。

(小さいな……)

優人は自分のに比べて小さい芳佳の手を握る。彼の口許から笑みが零れた。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

優人の言葉に小さく頷くサーニヤ。二人はストライカーユニットのプロペラを回転させる。

「えっ? ちよ、ちよつと!?!心の準備が! あ、あう、あああ! うわあ!」

芳佳の準備ができないまま、二人は滑走して離陸してしまふ。優人とサーニヤに手を引かれて飛ぶ芳佳の姿はまるで二人に拐われているかのようだった。やがて三人は視界の悪い雲の中を飛び始める。

「手、離しちや駄目だよ！絶対離さないでね！」

「芳佳、ちよつと怯えすぎ」

何度も念を押す芳佳。優人は妹のあまりの怯えっぷりに呆れたように言う。

「もう少し我慢して。雲の上に出るから」

と芳佳を励ますサーニヤ。雲の上まで来ると、そこは満天の夜空だった。芳佳はその景色を見て目を輝かせた。

「すごいなあ！私一人じゃ絶対こんなところへ来れな、かったよ！ ありがとうお兄ちゃん！サーニヤちゃん！」

「どういたしまして」

はしやく芳佳の姿を見て笑みを零す優人。

「いいえ、任務だから」

サーニヤは無表情のままだが、やはりどこか嬉しそうだった。



同時刻、501基地宿舎。薄暗い廊下を少々お冠な様子のバルクホルンが歩いていた。

「まったく、優人のやつは！」

夕食時のことを思い出して唸るように呟く。

「年頃の男子なら仕方ないかもしれないが……いやいや！ 最前線であんな物を読むなどと！ 許さん！ 断じて許さん！」

かなり大きめの独り言を漏らすバルクホルン。堅物で尚且つウブなところのある彼女の脳裏にはグラビア雑誌に掲載されていた刺激的な写真が焼き付いて離れない。

「……男は女のああいう仕草に弱いのか？」

月明かりの射し込む窓の前まで来たバルクホルンはそう呟きながら夜空を見上げた。

「……確か、雑誌の女性はこんな感じだったか？」

何を思ったのか身体を少しだけ前に傾け、さらに片腕で胸を見せつけるように持ち上げると、目の前に相手がいるつもりで上目遣いになる。

「わ、私と一緒に浜辺を散歩してみなくい？」

と空いてる方の手で投げキッスをしながら雑誌に書かれていたグラビアモデルの台詞を言ってみた。

台詞は菌切れが悪く色つぼさもないが、セクシーポーズはある程度再現出来ていた。

「……ないな」

魔が差して思わずやってしまったが、やはり自分はこんなことをするキャラではな

い。そもそも規律を重んじるカールスラント軍人のやることではない、そう思ったバルクホルンは姿勢を直立に戻した。

バサツ！

「ん？」

背後から書類が落ちるような音が聞こえ、振り返るバルクホルン。そこには驚きのあまり目を見開き、両手で口許を抑えているミーナがいた。

「み、ミーナ！」

狼狽えるバルクホルン。ミーナの表情からして、一部始終を見ていたのは明らかだ。

「と、トウルデー。貴女過労？疲れが溜まってるの？」

「あ、いやミーナ。これはだな——」

「そ、そうよね！貴女だってウィッチである前にひとりの女の子だもの……毎日、軍務軍務じゃ息が詰まるわよね」

そう言つて床に落とした書類を拾うミーナ。彼女は明らかに誤解している。

「ミーナ、話を——」

「近いうちにまた休暇を取つて出掛けてみたらどうかしら？ロンドンにリーネさんお勧めのおしゃれな喫茶店があるらしいからお茶を飲んでケーキを食べてリラックステキきたら……いえ、そうしなさい！」

ミーナの方も余程動揺しているらしい。バルクホルンの話も聞かず、MG42の連射速度を再現したかのようなマシンガントークを披露する。

「はい！休暇申請書と外出申請書、提出は明日で構わないわ！それじゃ私はこれで！」

書類を押し付けるように渡すと、ミーナは逃げるように廊下の奥へ消えていった。

「ミーナ……違うんだ……」

弁解すら出来なかつたバルクホルンは膝から床に崩れ落ち、自身の軽率な行動を悔いた。

第21話 「肝油と茶の湯」

1944年8月18日 早朝 501基地の食堂――

「これは？」

食堂のテーブルの上に置かれたお猪口を怪訝そうに覗き見るペリーヌ。お猪口には彼女にとって未知なる液体が注がれていた。

「肝油です、ヤツメウナギの。ビタミンたっぷり目で目に良いんですよ」

と芳佳。彼女は扶桑の漢字で『肝油』と書かれた紙が張つてある一斗缶を抱えている。「スンスン……なんか生臭いぞ？」

肝油の臭いを嗅いだハルトマンが顔をひきつらせる。

「魚の脂だからな、栄養があるなら味など関係ない」

バルクホルンが澄ました顔で言い切る。昨晚、ミーナとひと悶着あつた彼女だが、健気にも一晩で復活していた。

「お肌には良さそうだけど……」

不思議そうにお猪口を覗き込むミーナ。彼女もいつも通りに振る舞っている。

変に気を遣うとバルクホルンは余計に気にしてしまう。昨日の一件をなかつたこと

にするのがミীনナりの優しさなのだ。

「これを飲んでまで、美肌が欲しいとは思わないな」

テーブルを挟んだ向かい側には神妙な顔をした優人が座っている。彼と坂本は過去に肝油を飲んだことがあるため、どんな味がするのかを知っている。

「おっほほほ！いかにも宮藤さんらしい野暮ったいチョイスですこと！おほほ！おほほほほ！」

ペリーヌが嫌味たつぷり込めて高笑いする。その姿はやけに活き活きとしていた。

「いや、持ってきたのは私だが……」

坂本が指摘する。ペリーヌに嫌味を言われたためか、唇が少しだけ尖っている。

「ありがたく！頂きますわ！」

ペリーヌは坂本の言葉に一瞬固まったかと思うと大慌てでお猪口を手取る。そして、海老反りなりながら肝油を一气飲みするという貴族令嬢にあるまじき姿を見せた。

「うっ……」

肝油を飲み干したペリーヌは顔面蒼白になり、悶絶し始める。

「うええ何これこれ！」

肝油を飲んでいたルッキニーが舌を出して不快感を露にする。今の彼女にブルーベリーやマリーゴールド時のように舌を出せとせがむ余裕はない。

「エンジンオイルにこんなのがあったな……」

「飲んだことあるのかよ」

エンジンオイルを想起するシャーリーに突っ込みを入れながら優人も肝油を一口あおった。

「……不味い」

優人も肝油の不味さに顔を歪ませる。一度経験したことで多少は耐性がついているのか、周りほど重症ではなさそうだ。

「ぺっぺっー」

「……………」

飲んで直ぐに吐き出したエイラ。隣のサーニヤも凍りついたかのように固まっている。

「私や優人も新米の頃に無理矢理飲まされて往生したもんだ」

頭を掻きながら笑う坂本。この肝油は過去に遣欧艦隊が補給物資として501基地に持ち込んだものの、使い道がなくて長い間坂本の部屋に死蔵されていた。放置されている間に劣化が進み、ただでさえ不味いものが余計に不味くなっていた。

「お気持ち……お察し致しますわ……」

ペリーヌが力なく呟いた。彼女はテーブルに手を着き、倒れないようにするのがやつ

とだった。

ちなみに肝油は夜盲症の症状緩和には役立つが、飲んで目が良くなるということはない。

「もう一杯♪」

誰もが辟易する中でただ一人、ミーナが笑顔でお代わりを要求する。彼女はシャーリーがエンジンオイルと形容するほど不味い肝油を気に入ってしまった。

隣ではハルトマンが信じられないものを見る目でミーナを見ている。普段、物怖じすることのない彼女もさすがに今のミーナにはドン引いている。

「まずい……」

味は関係ないと言っていたバルクホルンも肝油の不味さに撃沈していた。

「リーネ、口直ししたいから朝しよ……っっていない？」

優人がカウンターから身を乗り出して厨房を見回してみるが、リーネの姿どころか朝食もなかった。

実はリーネは幼い頃風邪をひいた時に東洋の薬だと言われて飲んだ肝油がトラウマになっている。朝食の支度中肝油の存在にいち早く気付いた彼女は自分が食事当番だということに構わず自室へ逃走していた。



基地宿舎 サニーニヤの部屋兼臨時夜間専従班詰め所――

昨日と同じく芳佳、サニーニヤ、エイラがベッドに横になっっている。

この日のブリタニアは抜けるような真夏の空が広がっていた。うだるような暑さが芳佳に高温多湿な扶桑の夏を嫌でも思い出させる。

「あ〜……」

と軽い呻き声を出しながらお腹を抑える芳佳。気温が高くて寝苦しい上に朝食時の肝油のダメージも胃に残っているらしい。

「ねえ、エイラさんとサニーニヤちゃんの故郷ってどこ？」

苦しみを少しでも紛らわそうと芳佳は二人に質問をする。

「私スオムス」

「オラーシャ……」

エイラとサニーニヤはぐったりとした様子で答える。二人も肝油と暑さに参っている。「えつと、それってどこだっけ？」

小国から大国まで様々な国が存在する欧州。学業の成績が芳しくなく、山村育ちで世界事情に疎い芳佳は未だ欧州の地理を殆ど理解していない。

「スオムスはヨーロッパの北の方、オラーシヤは東」

寝そべっていたエイラが顔を上げ、ぎっくりとした説明をする。

「そっかあ……えっ？ヨーロッパって、確かほとんどがネウロイに襲われたって……」

「うん、私のいた街もずっと前に陥落したの」

エイラと同じく横になったままのサーニヤが説明する。

「じゃあ、家族の人達は？」

「みんな街を捨ててもつと東に避難したの。ウラルの山々を超えたもつと……ずっと向こうまで」

「そっかあ、よかつたあ」

サーニヤの話聞いてホッとした様子の子の芳佳。

「何がいいンダヨ？話聞いてないの力？オマエ」

エイラはベッドから起き上がり、呆れ顔で言う。

「だって、今は離ればなれでもいつかはまた皆と会えるって事でしょ？」

「あのな、オラーシヤは広いンダゾ？ウラルの向こうだったって扶桑の何十倍もあるンダ。人探しなんて簡単じゃないゾ」

エイラは両手を大きく広げ、オラーシヤの領土が広大であることアピールをする。

「だいたいその間にはネウロイの巣だつてあるンダ」

黒海周辺に出現したネウロイの侵攻によって、国土をウラル山脈東側のシベリア地域と中東地域に二分されてしまっているオラーシャ帝国。今大戦の最も過酷な戦線の一つであり、502と503の二つの統合戦闘航空団を抱えている。

「そっか、そうだよ。それでも私は羨ましいな」

父を亡くした芳佳にとつて、会えなくとも父親のいるサーニヤのことが羨ましい。今は優人が一緒にいるものの彼は兄、父親にはなれない。

「強情ダナ、オマエ」

呆れ顔になるエイラ。

「だって、サーニヤちゃんは今早く家族に会いたって思ってるんでしょ？」

芳佳が訊くとサーニヤが黙ったままコクンと頷いた。

「だったら、サーニヤちゃんの家族だって……絶対早くサーニヤちゃんに会いたって思ってるはずだよ」

言葉を続ける芳佳。サーニヤは合いの手を打つように再度頷く。

「そうやってどっちも諦めないでいれば、きつといつか会えるよ。私だってお兄ちゃんとまた会えたし」

「あつ……」

「そんな風に思えるのって素敵なことだよ」

優しく微笑む芳佳に見つめられ、サーニヤは頬を染めた。

——諦めなければ、きっといつか会える。

芳佳に言われると素直にそう思うことが出来て、サーニヤにはそれが不思議だった。

◇ ◇ ◇

一方、もう一人の夜間専従班員である優人は夜に備えて眠ろうとしたところを坂本から茶の湯に誘われていた。

何故このタイミングで自分と茶を飲もうとするのか分からなかったが、何か大事な話があるんだろうと思いい彼女の部屋へ赴いた。

「入るぞ」

「おお！来たか！」

ドアを開けると、ちょうど茶を点て始めていた坂本がサバサバとした顔で迎える。彼女は畳を八畳ほど並べて作った床の間に腰を下ろしていた。

501のメンバーには士官、下士官問わず全員に個室が与えられている。各部屋の風景には持ち主の性格が表れていて、坂本の部屋には床の間の奥に『質実剛健』と書かれた掛け軸が吊るされ、その前には彼女が愛用している軍刀が刀掛けに飾られている。

「どうぞ？」

優人が床の間に腰を下ろすと、坂本が抹茶の淹れられた茶碗を差し出した。優人は作法に習い、茶碗を時計回りに2回ほど回してから口許に運んだ。

士官教育の一環として習っていただけあって、二人の茶道の姿勢は堂に入っていた。

「うっ……」

「はっはっはっ！相変わらずの子ども舌だな」

抹茶の苦味と渋味に顔を歪めた優人を見て、坂本がからかうように笑う。頼れるお兄さんの雰囲気を持つ優人だが、味覚の方は子どもっぽい。極度に苦いものや辛いものが苦手なのだ。それ故にコーヒーもブラックでは飲めない。

そのことを気にしているのか、坂本に茶化された優人は表情を険しくした。

「そんな顔をするな、ほら羊羹だ」

間宮から取り寄せたらしい羊羹。口に運ぶと和菓子らしい上品な甘さが広がり、優人の頬が自然と弛む。そんな自分のことを坂本がニヤニヤとしながら見ていることに気が付き、優人は慌てて顔を引き締める。

「で……なんだ？」

「ん？なんだとは何だ？」

優人の唐突な質問に対して、意味を理解できなかった坂本が繰り返す。

「何か話があったんじゃないのか？」

「何もないが？」

「真正正銘、茶だけ？」

なおも信じられないような顔をする優人に坂本が「そうだが？」と返した。

「なら、他のやつでもよかつたんじゃないのか？」

と優人。本日は基地待機という形で夜間のローテーションに組み込まれるとはいえ、夜間専従班である優人を茶の湯の為だけに戦闘隊長のすることは思えない。

「強いて言えば、お前と二人きりで茶が飲みたかつたからかな」

坂本は口説き文句のような台詞を平然と言うと、自分の分の羊羹を口に運ぶ。

「よく澄ました顔でそんなこと言えるよな」

呆れる優人。この言葉を他の人間、特にペリーヌや坂本の従兵の土方あたりが聞いたら勘違いしてしまうだろう。しかし、そこは付き合ひの長い優人。坂本が無自覚かつ思わせ振りの言動には慣れてる。

「私は何かおかしなことを言ったのか？」

「お前って、昔の方が察しが良かったよな？」

「ん？」

「もういいよ……」

優人は諦めたかのように溜め息を吐くと再び茶碗を手に取り、茶を啜った。ズズズツという音が室内に響く。

欧州では不作法とされるこの飲み方も茶道では正しい作法。『飲み終わったので次に進んで下さい』という合図でもある。

「そう言えば、今日はお前の誕生日だったな？」

お茶の途中で坂本が口火を切った。

「……正確には『宮藤優人』になった日だな」

優人が訂正する。14年半程前、記憶を喪っていた優人は宮藤夫妻に引き取られると同時に今の名前を貰った。その半年後の8月18日に宮藤家の籍に入り、宮藤優人となった。この日は芳佳の誕生日であり、優人の誕生日にもなった。

これらのことを知っているのは宮藤家の人間以外では、赤坂と坂本を含めた数人のウイツチぐらいだ。

「そして、父さんの命日でもある」

優人と坂本は航空歩兵として初陣を飾った扶桑事変後、軍の命令でブリタニアの研究所へ派遣されていた。優人の父、一郎が扶桑海軍から依頼されていた新型ストライカーユニットの『十二試艦上戦闘脚』、後の零式艦上戦闘脚の開発を航空歩兵という立場から手伝っていた。

魔導エンジンの小型軽量化と高出力化、航空歩兵の足を異空間に収納する宮藤理論を実用することで試作機が完成。開発が一段落し量産の目処が立つと、優人と坂本は一時ロマーニヤへ修行に出掛けた。その約2ヶ月後、ブリタニアの研究所が爆発。一郎は安否不明となり、後日死亡認定された。奇しくもその日は優人が14歳、芳佳が10歳の誕生日を迎えた日だった。

「すまないな。命日なのに墓参りにも行かせてやれな——」

「気にするなよ。別にお前が悪い訳じゃない」

優人が坂本の謝罪を遮った。今はネウロイに対する警戒体勢が続いている状況で自分や芳佳だけが基地を離れるわけにはいかない。優人はもちろん、芳佳もそのことを理解している。

「もう5年か……」

僅かな沈黙の後に坂本がおもむろに口を開いた。

「今でも思うよ。あの時ロマーニヤに行かなければ……研究所に残っていれば……つて」

優人が虚空を見つめながら思いを吐露する。いくら悔やんでも過ぎた時間は戻らない。今さら言っても仕方のないことだが、それでも優人は口に出さずにはいられなかった。

「……もしお前が研究所に残っていたら、芳佳は父だけでなく兄も失っていた。二人して死ぬよりは良かったはずだ」

坂本が語気を強めながら言う。そして、ゆっくり優人に近付くと右手を彼の頬に当てた。

「優人、お前は絶対に死ぬな。ウィザードの素養を持つ人間はこの先何人も現れるだろうが、兄として芳佳の傍に居られるのはこの世にお前一人だけだ」

坂本は優人の目を見つめ、諭すように語りかける。優人にとつて坂本は姉も同然、一緒にいた時間は家族のそれよりも長く。父の死を知った直後、悲しみに暮れていた優人を励ましてくれたのも彼女だった。

「……ありがとう」

心が幾分軽くなった優人は微笑みながら礼を言う。その頃、部屋の扉の向こうでは「少佐と大尉は一体二人で何をされているのかしら？」

優人が坂本の部屋に入る姿を目撃していたペリーヌがドアに耳をピツタリくつつけて、二人の会話を拾おうとしていた。

「まさか!？」

ペリーヌの脳内を悩ましい妄想が駆け巡った。

『ようやく二人きりになれたな坂本』

『よ、よせ優人……今の私達は上官と部下なんだぞ?』

『そんなことを言う口はこうやって……』

『あつ……』

妄想終了。

「い、いけませんわ! 確かにお二人はお似合いですけれども……でも! でも!」

そう叫び、自分の妄想で悶えるペリーヌを遠目で見ているウィッチが二人。

「シャーリー、ペリーヌ何してんの?」

「今日は暑いからな、ああいうやつも出てくるさ」

ルツキーニとシャーリーから哀れみと軽蔑の入り雑じった目で見られていることをペリーヌが知る由もなかった。



同時刻。いつもより気温の高い寝苦しい昼から解放された芳佳、サーニヤ、エイラの三人が部屋から出てくる。

「うわあ、汗でベタベタ……」

寝汗で身体中がベタベタになった芳佳はぼやく。そんな彼女にエイラがある提案をする。

「じゃあ、汗かきついでにサウナに行こう」

「サウナ？」

聞き慣れない単語に首を傾げる芳佳。

「ほう、宮藤はサウナ知らないのか？ふふっ」

そう言うエイラはほくそ笑んだ。

数分後――

「うう〜……これじゃさつきとかわんないよお〜」

頭にタオル、身体にバスタオルを巻いている芳佳はサウナに入ると早々にのぼせてしまっていた。

「スオムスじゃ風呂よりサウナなんダゾ」

白樺の枝を片手に足を開いて、くつろいでいるエイラが説明する。隣には足を閉じ、手を膝の上に乗せて、きちんと座るサーニヤの姿があった。

三人は汗止めも兼ねて頭にタオルを巻いている。しかし、はちまき状に巻いて頭の天辺を開けているサーニヤ、エイラとは違い、芳佳はぐるぐる巻きにして頭の上まで隠れている。そのせいで熱がこもり、慣れていないこともあつて二人よりものぼせるのが早

かった。

「サーニヤちゃんって肌白いよねえ〜」

肩、背中、うなじ。透き通るような白い肌に芳佳は見とれて素直な感想を口にする。

「あ……」

芳佳の視線にサーニヤが気付く。

「何処見てンダ、オマエ！」

そこへエイラが割って入り、芳佳を睨む。

「いっつも黒い服を着てるから、余計に目立つよね」

「……………」

芳佳に言われて、恥ずかしそうに目を逸らすサーニヤ。

「サーニヤをそんな目で見ンナーアアアアア〜!!」

エイラの絶叫がサウナのみならず、基地全体に響き渡った。



「こっちこっち」

「本当に大丈夫なの？」

芳佳を案内するエイラ。タオルを脱ぎ捨てた彼女達は温まった身体を冷やすため、サウナに隣接する人工池に来ていた。

「サウナの後には水浴びに限るンダ」

「確かに冷たくて気持ちいいけど……」

と無い胸を手で隠しながらエイラに続く芳佳。この池とサウナは風呂同様、扶桑海軍の設営隊が作ったものだ。池は水浴び用に水質管理されていて、外部からは覗けないようになっている。とはいっても裸で外に出るのは抵抗がある。

「恥ずかしがるナヨ、女同士ダロ？」

そう言うエイラは身体の発育がいい。芳佳やサーニヤに比べて手足がすらりと伸び、胸もある。

「だって……」

芳佳が言い返そうとすると、どこからか唄声が聞こえてくる。

「〜♪」

二人が声のする方向へ行くと、夕日に照らされたサーニヤが大岩の上に腰をかけて歌っている。水浴びをして髪が濡れているせいか、いつもと雰囲気が違う。

芳佳とエイラは何故か物音も立てずにコソコソと忍び寄り、岩陰からサーニヤを覗き見る。

「なぜだろう？……なんかこう、ドキドキしてこないカ宮藤？」

「う、うん」

同意を求めたエイラに対し、芳佳が頷く。そんな二人に気が付き、サーニヤが振り向いた。

「あつ！ああ……ご、ごめん！」

サーニヤと目が合い、やましいことがあったかのように慌てて謝る芳佳。

「何で謝るの？」

サーニヤは不思議そうな顔をして尋ねた。芳佳が頭を掻きながら答える。

「いや、邪魔しちゃったから……あの、素敵だねその歌」

「これは昔、お父様が私のために作ってくれた曲なの」

芳佳に歌を褒められ、顔を伏せながら話すサーニヤ。

「お父さんが？」

「小さい頃、いつまでも雨の日が続いて……私が退屈して雨粒の音を数えていたら、お父様がそれを曲にしてくれたの」

オストマルク、ウィーンの音楽院に留学していたサーニヤの父。雨の日に退屈していた娘に作曲した歌をプレゼントしていた。

「サーニヤはお父さんの勧めでウィーンで音楽を勉強してたンダ」

エイラが説明する。ウィーンで両親と共に音楽を学んでいたサーニヤ。ネウロイの侵攻が始まるとウィッチに志願。その後、所属していた部隊が欧州に取り残されたため、サーニヤは本国の疎開に間に合わずにブリタニアまで撤退してきた。そのせいで両親と離ればなれとなってしまうた。

「素敵なお父さんだね」

一緒に岩の上に座り、サーニヤの話聞いていた芳佳が羨ましそうに言う。水浴びによつて髪のはねが垂れ下がり、別人のような雰囲気醸し出している。

「宮藤さんのお父さんだつて素敵よ？」

「えっ？何で？」

「オマエのストライカーは宮藤博士がオマエの為に作ってくれたんだろ？それだっけ羨ましいつてことだよ」

隣で寝そべっていたエイラがサーニヤの代わりに答える。

「えへへへ」

父のことを褒められ、照れ臭そうに笑う芳佳。

「だけど……せつかくならもつと可愛い贈り物のほうが良かったかも」

「贅沢ダナアゝ高いんだゾ、アレ」

「あははは」

エイラに言われ、苦笑いを浮かべる芳佳。

「それにお兄さんの宮藤大尉も……」

「お兄ちゃん？」

「ええ……優しく格好良くて、素敵なお兄さんよ」

ニコツと微笑むサーニヤ。何気にサーニヤが芳佳に笑顔を見せたのはこれが初めてだ。

「えへへ！ありがとう、自慢のお兄ちゃんなんだ！」

大好きな兄のことをサーニヤが誉めてくれた。自分のことのように嬉しくなった芳佳も満面の笑みを返す。

「でもお兄ちゃんってば……すぐ女の子にデレデレしちゃうんだよ」

「デレデレ？」

サーニヤが不思議そうな顔をして聞き返す。

「最近はバルクホルンさんやシャーリーさんとよく一緒にいるみたいだし。海の時なんて、ペリーヌさんとどこかに行ってみたいだし」

芳佳の頬が軽く膨れる。501のメンバーと兄妹で仲良くしたいと思う反面、他のウィッチと優人が楽しそうに話していたりすると、どうしても嫉妬してしまう。

「ふくん、なるほどナ」

「へ？何ですか？」

悪戯な笑みを浮かべて自分を見るエイラに芳佳が訊ねる。

「オマエの兄貴が好きなんダロ？」

「そりや、兄妹ですし」

「兄妹としてカ？男としてカ？」

「え？……えええっ!!」

エイラの質問の意味を理解した芳佳は大声を出しながら顔を真っ赤にする。

「兄妹としてに決まってるじゃないですか!!」

「本当カヨ？」

「本当ですよ!!」

ムキになって否定する芳佳。そんな芳佳を見て、エイラは新しいオモチャを見つけた

ような表情を浮かべている。

「宮藤さん、お兄さんに恋してるみたい」

クスリと笑うサーニヤ。

「もお……サーニヤちゃんまで……」

身体を冷やすため水浴びをしたばかりだと言うのに、芳佳は自分の顔がサウナに入っていた時よりも熱くなっている気がしていた。



その頃、浴室前の脱衣場では坂本との茶の湯を終えた優人が入浴に訪れていた。「たまには明るいうちの風呂もいいな」

優人は制服を脱ぎながらは優人はひとりごちる。普段、彼はウィッチ達の入浴後に風呂に入る。そのため、入浴が遅くなってしまふことが多い。

501に来たばかりの頃に美少女達が浸かったお湯に入るといふことで、変に意識してしまっていたことは記憶に新しい。

「久々に肩まで浸かってさっぱりするかな?」

腰にタオルを巻くと、浴室に向かう優人。彼はウィッチ三人分の衣服やズボンが脱衣棚のカゴに置いてあることに気付かなかった。

「久々の一番風呂だあ〜!」

と大きめの独り言を言いながら優人は浴室へ通じる扉を勢い良く開いた。

「「え?」」

「……へ?」

素っ頓狂な声が浴室内の壁を反響する。風呂に入ろうとした優人と水浴びから帰っ

た芳佳、サーニヤ、エイラの三人が不運にも真正面から向き合う形で鉢合わせってしまった。三人の一糸纏わぬ裸体が優人の瞳に映る。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

突然のことにお互いどう反応していいのか分からず、思考がフリーズする。芳佳達が全裸なのに対し、優人がタオルを腰に巻いているのは不幸中の幸いと言うべきか。数秒して、三人のウィッチが自分達の置かれた立場に気付き、少しずつ顔を赤くしていく。

「……………き——」

「失礼しました」

芳佳が叫ぼうとしていたため、優人はそれよりも早く扉を閉めた。この状況で叫ばれ、他のウィッチ達に駆けつけられた場合、優人に命と尊厳はない。

「……………綺麗な肌してたな。ってイヤイヤ！」

妹を含めた美少女三人の裸体を脳裏に浮かべて、ウツトリしかけた優人はイカンイカンと頭を左右に振る。しかし、至近距離でバツチリ見てしまったために瞼の裏に焼き付いてしまった映像は彼の頭から出ようとしない。

「お兄ちゃん!!」

「へぶっ!!」

浴室から勢い良く扉を開けて芳佳が出てきた。扉の前にいた優人はその勢いで壁に叩きつけられた。

「あれ? お兄ちゃん? どこ?」

「()だよ……」

「え?」

芳佳が振り返った先には壁と扉に挟まれている優人の姿が見えた。やがて扉が元の位置に戻ろうとゆっくりと動き出し、解放された優人は床に倒れた。

「お兄ちゃん! 大丈夫!」

芳佳が仰向けに倒れている優人の頭と背中の下に手を入れ、上半身を抱き起こした。

「つて、そうじゃなかった……お兄ちゃん! 何で入ってきたの!」

顔を覗き込んで心配していたかと思つたら、急に大声を出す芳佳。兄とはいえ、異性に風呂を覗かれたことに怒り心頭らしい。

サーニヤとエイラも芳佳に続いて脱衣場に来ていた。二人はサウナで使っていたタオルを巻いて、身体を隠している。サーニヤは頬を染めながら困惑し、エイラはサーニヤを守るように抱き寄せながら優人を睨んでいる。

「不可抗力、事故だよ」

優人は痛みに耐えながら、力無く弁解する。

「もう！恥ずかしかったんだから！」

「なら前を隠せ……」

サーニヤやエイラと違い、タオルを巻いてすらいない芳佳は胸元を超至近距離で優人に晒している。

男の性というものか、痛みで首を動かせないのか。優人は目を逸らそうともせずに対してポリュームのない妹の胸を凝視している。

「えっ？……きやああああああああああ！」

そのことに気付いた芳佳は優人を支えていた両腕で胸を隠した。

「ぶっ!!」

支えを失い、床に頭を強打する優人。彼の意識はそこで途切れた。ハルトマンの悪戯から始まった彼の災難はまだ続いているらしい。

第22話「地上の兄と夜空の妹」

1944年8月18日の夕刻、兄藤痴漢行為事件（命名エイラ）という事件が発生した。宮藤優人大尉の不注意から入浴中の宮藤芳佳軍曹、サーニャ・V・リトヴァク中尉、エイラ・イルマタル・ユートイライネン少尉と風呂場で鉢合わせてしまったのだ。

この件はユートイライネン少尉によつて第501統合戦闘航空団司令ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐に報告され、同少尉から宮藤大尉への厳しい処罰を求める声が強く上がった。

しかし、こういった事態を避けるために用意されていた『ウィツチ入浴中』の札を掛け忘れていた少尉達にも非があり、さらに宮藤軍曹とリトヴァク中尉も大尉への強い処罰を望まず、騒動中に宮藤大尉が負傷したことや三人に対して宮藤大尉が扶桑式謝罪法（土下座）で必死に謝罪したことから不問に付された。



同日の夜、501基地宿舎。

「はあ〜……」

夕食を終えたウィッチ達が談話を楽しんでいるミーティングルーム。その隅っこでは優人は膝を抱えて、大きく溜め息を吐いていた。

「優人のやつ、一体どうしたんだ？」

ソファアに座ったシャーリーが重たい空気を纏った優人を遠目で見ながら言う。

「あの落ち込み具合、頭からキノコが生えてきそうだね」

と目を眇めるハルトマン。ミーティングルームには二人の他にリーネ、ペリーヌ、バルクホルン、ルツキーニが集まり、テーブルを囲んでお茶をしていた。皆紅茶を飲んでいたが、ルツキーニのみ「眠れなくなるといけないから」とリーネがホットミルクを用意していた。飲んですぐに身体が温まったルツキーニは二日前の夜と同じく椅子で丸くなつて眠っている。

「なんでも、夕方から芳佳ちゃんに無視され続けてるみたいで……」

リーネが説明すると周囲から驚きの声が上がった。

「はあ？あの『お兄ちゃん大好き』を絵に描いたような芳佳が？」

「稀有なことがあるものですわね」

シャーリーとペリーヌが信じられないと言った顔をする。

「そうなんだよ……」

話を聞き付けたらしい優人。今の彼は顔が幽霊のように青く、ゾンビのようにふらついた足取りでウィッチ達の元へ近寄る。

「ひっ!？」

あまりに変わり果てた優人を見て、リーネが悲鳴を上げた。

「スゴク怒ってるみたいで……目があつたら背けられるし、近付くとそっぽ向かれるし、声を掛けたら逃げられるし……それにそれに」

「こりゃ重症だな……」

ブツブツと蚊の泣くような声で呟き続ける優人を見て、シャーリーの顔がひきつる。芳佳が優人を無視しているのは、言うまでもなく風呂場の一件が尾を引いているためだ。優人もそれは理解している。

「気持ち痛いほど分かるぞ優人!」

優人のシスコン仲間であるバルクホルンが床を蹴って立ち上がる。

「私も……クリスから露骨に避けられたり、拒絶されたりしたら……」

「バルクホルン……」

目に涙を浮かべて固い握手を交わす扶桑の兄バカとカールスラントの姉バカ。数ヶ月前まで言葉など殆ど交わさなかった二人だが、現在はシスコン同士ということもあって周りがドン引くほど距離が縮まっている。

「で……どうすんの？このままだと優人は一生芳佳に口を聞いて貰えなくなるよ？」
「いつ……一生……だと？」

ハルトマンの言葉を聞いて優人は膝から崩れ落ちた。顔色が真っ青から真っ白に変わり、目からは涙が滝のように流れている。

「ハルトマン中尉、トドメを刺さないでくださいまし」

軍人としてもウイザードとしても使い物にならなくなってしまった扶桑海軍大尉を横目で見て、ペリーヌは溜め息を吐いた。

「優人さん、温かい紅茶をどうぞ」

「あつ……ありがとう」

優人はリーネから紅茶のカップを受け取り、口をつける。紅茶を飲んで多少は落ち着いたらしい。涙が止まり顔色も良くなった。

紅茶を渡したリーネとペリーヌは優人のことを部隊のお兄さん役の様な存在として認識していただけに、あまりに普段と掛け離れた今の優人に内心当惑している。

「だが、ハルトマンの言うことにも一理ある。早急に手を打たねば……」

バルクホルンが真剣な面持ちで言う。ウイツチの中で一番優人の親身になっているのは彼女だろう。

「避けられている原因に何かお心当たりはありませんの？」

「……実は——」

ペリーヌに訊ねられた優人は意を決して風呂場での出来事を話始めた。

「なるほど、そういうことか」

優人の話を聞いて納得したシャーリーがポンツと手を叩いた。いくら家族とはいっても芳佳は年頃の女の子、男である優人に超至近距離で裸を見られてしまつては怒り心頭に発するの当然だろう。

「札を立てておかなかつた三人も三人ですけれど、宮藤大尉も不注意過ぎですわ」

「返す言葉もございません……」

ペリーヌから厳しい言葉を賜つた優人はガックリと項垂れる。

「あの……多分、芳佳ちゃんは怒っているわけではないと思うんです」

リーネが手を挙げながらおずおずと言う。

「いやいや、怒つてないならなんで優人を避けるんだ？」

とシャーリーが怪訝そうな顔をして訊く。

「えつて、その……見られちゃつたから……恥ずかしくて優人さんの顔を直視できないんだと……思います」

段々と赤くなりながらもリーネはどうか言い切る。要するに芳佳は羞恥心や気まぐさから優人を避けている、ということだ。

「原因はわかったけど……どうしたら?」

優人がすぎるような目でウィッチ達を見る。

「定番だけど、プレゼントでご機嫌取りとかは?」

「プレゼントか……そう言えば、今日は俺と芳佳の誕生日だ」

シャーリーが提案すると優人が思い出したように呟いた。

「あら、兄妹で同じ誕生日ですの?」

「まあな……」

ペリーヌの質問に優人は曖昧な返事をする。厳密には違うが、話す必要を感じなかったため優人は詳しい説明をしなかった。

「おつ! 誕生日ならちようど良いじゃんか! バースデープレゼントとして自然に渡せるな!」

「でも、プレゼントなんて今から用意出来るの?」

ハルトマンが欠伸を噛み締めながら訊く。バルクホルンとは違い、あまり真剣ではなさそうだ。

「うーん、今から買い物には行けないしなあ……」

優人は考え込んだ。普段から妹を溺愛している彼ならば1ヶ月くらい前からプレゼントを用意していそうなものだが、軍務の多忙さや父の命日と重なっていることから芳

佳が喜んでくれるかどうか分からず、準備に逡巡してしまっていた。

「だったらバースデーカードにしたらどうだ？」

「バースデーカード？」

シャーリーの口から出た聞き慣れない単語を優人が繰り返した。

「バースデーカードって言うのは……誕生日を迎えた人にメッセージを添えて送るカードなんです」

シャーリーに続くようにリーネが説明する。どうやらリベリオンや欧州では極一般的なの習慣のようだ。

「おつ、それなら今日中に出来そうだな！みんな！作り方教えてくれ！」

仲間からアドバイスを貰った優人は彼女達の指導の元、早速カード制作に取りかかった。



同時刻、芳佳、サーニヤ、エイラの三人は月明かりに照らされた雲の海を飛んでいた。「ごめんね、二人ともお兄ちゃんが……うう」

謝罪の途中で芳佳は赤面した顔を両手で抑えた。至近距離で裸を、超至近距離で胸を

見られてしまった。このことは当分忘れられそうもない。そして、芳佳が今日以上に恥ずかしい思いをすることはおそらく一生ないだろう。

「まったくダメ！」

エイラが苛立たし気に吐き捨てる。色白な肌が印象的な彼女も顔が真っ赤にしていた。こちらは羞恥心ではなく怒りが原因だ。

「ミーナ隊長も坂本少佐も何で兄藤みたいな痴漢を部隊に置いて置くンダヨ！」

「うう……酷い言われよう」

エイラの言葉を聞いてへこむ芳佳。不可抗力とはいえ、裸を見られている。エイラが怒るのも当然と言えば当然だ。しかし、エイラは自分よりもサーニヤを見られたことに憤慨している。

「エイラ……そんな言い方をしてはダメよ」

とサーニヤがエイラを注意した。

「で、でも……アイツは」

「エイラだって、お姉さんのことを悪く言われたら嫌でしょ？」

「うっ……」

言い負かされてしまうエイラ。『無傷のエース』、『ダイヤのエース』と称される彼女も

サーニャ相手では形無しだ。

「何でサーニャは兄藤の肩を持つンダ？」

エイラは不満気に唇を尖らせた。

「私は何度か宮藤大尉と夜空を飛んだことがあるから」

「ナ、ナンダツテエエエエエエ!!」

驚愕に染まったエイラの叫び声がブリタニアの夜空に木霊する。エイラは優人とサーニャがそこまで親しい関係だとは思ってなかった。続いて芳佳もサーニャに訊ねる。

「サーニャちゃんって、お兄ちゃんと仲良かったの？」

「そこまでじゃないけど……、501に来たばかりの頃に大尉と夜間哨戒に出ていたから」

サーニャによれば、彼女が配属されて数日間は優人と組んで夜間哨戒に出ていたらしい。ナイトウィッチチであるサーニャに夜間飛行で教えることは何もないので、哨戒ルート確認の意味合いが強かったようだ。

母国やウィーンでも見たことがないウィザード相手にサーニャは緊張していたが、優人は優しくしてくれたので少しずつ慣れていったとのこと。

(お兄ちゃん……って、サーニャちゃんとも仲良しだったんだ)

顔を俯かせる芳佳。小さい時から優人が自分以外の女の子と仲良くしている姿を見ると胸が痛んだり、モヤモヤしたりしていた。成長するに連れて、それが嫉妬という感情なのだと理解していった。

このことを母に相談すると「大好きなお兄ちゃんを盗られたくないのね」と微笑ましそうに笑っていたが、芳佳は優人を盗られることはもちろん、誰かに嫉妬心を抱いてしまう自分自身が嫌だった。

「大尉はよく宮藤さんの話をしてくれたの」

「私の？」

芳佳は目を丸くする。

「可愛くて優しくして、自分には勿体無い最高の妹だって……毎日聞かされたわ」

「シスコン極まれりダナ」

サーニヤから優人の新たなシスコンエピソードを聞いて、エイラは怒る気も失せる。呆れ顔のエイラに微笑むとサーニヤは芳佳に視線を戻した。

「大丈夫よ宮藤さん」

「へっ？何が？」

「嫉妬しない人なんて一人もないわ。それに大尉にとって一番大切な人はあなただから……」

「へっ? はっ? えへへ……あ、ありがとう」

まるで自分の心を見透かしているようなことを言うサーニヤに芳佳は頭を掻きながら照れ笑いを返す。これも魔導針の力なのだろうか。

「ねえ聞いて……」

芳佳がストライカーを吹かして、二人の前に出る。

「今日はね、私とお兄ちゃんの誕生日なの!」

「え?」

芳佳の告白を聞いて面食らうサーニヤ。

「ナンダ? 兄妹揃って同じ日なのカ? 何で黙ってたんだヨ?」

と訊ねるエイラ。

「私達の誕生日は父さんの命日でもあるの。何だかややこしくてみんなに言いそびれちゃった」

「あつ……」

訳を説明する芳佳。彼女の話を聞いたサーニヤの瞳に影が宿る。

「馬鹿ダナア、オマエら。こういう時は楽しいことを優先したっていいんだゾ?」

命日という言葉を発してからほんの少し元気だけ無くなった芳佳に対し、エイラが励ますように言う。

「ええ、そういうものかな？」

「そうダヨ」

微笑むエイラ。彼女らしい優しさに元気づけられ芳佳とサーニヤもつられて笑顔になる。

「宮藤さん……耳を澄まして」

サーニヤは芳佳の隣に来るとそつと囁いた。

「え？」

サーニヤの言う通り、耳に神経を集中させる芳佳。やがてインカムから雑音混じりに人の声や音楽が聞こえ始める、それは次第に内容がわかるほどハッキリしてきた。

「……あれ？何か聞こえてきたよ？」

「ラジオの音……」

不思議そうな表情を浮かべる芳佳にエイラがボソリと呟く。心無しか、その声はいつもよりもぶつきらぼうだった。

「夜になると空が静まるから、ずっと遠くの山や地平線からの電波も届くようになるの」

「へええ、すごいすごい！こんなことできるなんて！」

説明を聞いて芳佳が興奮してはしやぎだす。

「うん、飛ぶ時はいつも聞いているの」

「二人だけの秘密じゃ無かったのかヨ」

エイラがサーニヤに近寄り、少し不満気な表情で囁いた。

「ごめんね。でも、今夜だけは特別」

クスリと微笑みながら言うサーニヤ。これはサーニヤから芳佳へのプレゼントらしい。

「……ちえつ、しようがないナ」

速攻で許すエイラ。そして、腕を頭の後ろで組んでローリングしながら離れていった。

「えっ? どうしたの?」

エイラの反応が気になり、芳佳がサーニヤに尋ねる。

「うん、あのね……」

「あのな! 今日にはサーニヤも……」

エイラがサーニヤの代わりに答えようとした。その時――

「あっ!?!」

リヒテンシユタイン式魔導針が激しく点滅した。同時に微笑んでいたサーニヤの表情が強張る。

「どうしタ!?!」

エイラがサーニヤを心配して問い掛ける。すると、サーニヤが受信した音が夜間専従班のインカムに流れてくる。

「!?……ナンダ!?!」

「これ歌だよ!」

その音にエイラと芳佳が反応する。低いうなり声のような不気味な音、しかしそのリズムには聞き覚えがあった。



同時刻、501基地管制塔。

「これが……ネウロイの声?」

基地管制塔の司令室では坂本とミーナもスピーカーから大音量で流れてくるネウロイの歌を聞いていた。今までに無かったネウロイの行動に二人とも困惑している。

「サーニヤを真似てるってのか!?!……サーニヤは!?!」

「夜間飛行訓練中のはずよ、宮藤さんたちと一緒に!」

ミーナはローテーション表を確認しながら答える。

「すぐ呼び戻せ!」

「無理よ……この状態じゃどこにいるのかも……」

ネウロイは歌うだけでなく、魔導波に酷似したものによる電波干渉を起している、501基地に設置されている最新のレーダーが機能していない。レーダースコープの表示画面は激しく乱れ、何も読み取れない。基地は目を失ったも同然、通信も繋がらない。「そうか……敵の狙いは……」

坂本はネウロイの目的に気付き、唇を噛んだ。

◇ ◇ ◇

歌が続く夜空。サーニヤはその場を動くことも出来ずに黙ったまま、虚空を見つめていた。

「……どうして?」

茫然としながら呟くサーニヤ。ネウロイが歌を唄い、魔導波を使っている。その上、歌はいつも自分が口ずさんでいる歌に間違いない。

「敵か!?サーニヤ!!」

「ネウロイなの!?どこ!?」

「二人とも避難して!」

何かを感じ取ったサーニャはそう告げるユニットの回転数を上げて急上昇する。
「あっ!?!」

急に自分達から離れて行ったサーニャを見て、芳佳が驚きの声を上げる。直後に雲の中を高速で移動していたネウロイがサーニャ目掛けてビームを発射した。直撃は免れたが、掠めたビームによってサーニャの左足のストライカーを吹き飛ばした。

「サーニャ!!」

バランスを崩し、落ちてくるサーニャをエイラが抱き止めた。

「バカー!ひとりですごする気だヨ!」

無茶をしたサーニャをエイラが怒鳴りつけた。

「敵の狙いは私……間違いないわ。私から離れて……一緒にいたら……」

「馬鹿!ナニ言つてンダ!」

「そんなこと出来るわけないよ!」

震えながら言うサーニャにエイラと芳佳が反論する。

「……だつて——」

「……宮藤、サーニャを頼むゾ」

「え?……う、うん」

エイラはサーニャを芳佳に任せると、自身のMG42を背負い、サーニャのフリー

ガーハマーを手取る。

「どうするの?」

と芳佳が訊くとエイラが二人に向かって振り返った。

「サーニャは私に敵の居場所を教えてください。大丈夫、私は敵の動きを先読み出来るからやられたりしないよ」

再びネウロイが高速で接近してくる状況の中、エイラは優しく語りかけた。

「あいつはサーニャじゃない。あいつはひとりぼっちだけど、サーニャはひとりじゃないダロ? 私達は絶対負けないよ!」

力強いエイラの言葉に芳佳もサーニャに微笑んだ。

「……………うん」

サーニャは頷くと芳佳の肩に乗せた手に力を込める。

第23話 「絶対凍結」

芳佳、サーニヤ、エイラの三人がネウロイと遭遇したとの報を受け、指令室のミーナと坂本を除く501の隊員達が緊急出動していた。編成は指揮者の優人の下、バルクホルンとハルトマン、ペリーヌとリーネ、シャーリーとルツキーニでそれぞれロッテを組んでいる。

接敵予想空域に向け、ストライカーの航空灯を光らせながら夜空を飛んでいる7人のウィッチとウィザード。耳に着けたインカムからは未だにネウロイの歌が流れている。「全員周囲の警戒を怠るな！何か見つけたらすぐに報告してくれ！」

S-118 対物ライフルを装備した優人がウィッチ達に指示を出す。彼はサーニヤに次いで夜間飛行経験が豊富なことから戦闘隊長代理に任ぜされた彼はミーナ、坂本の代わりに指揮を取っていた。この判断には優人より先任であるバルクホルンも賛成している。

『了解』

返事をする、ウィッチ達は周囲に目を凝らす。レーダーこそ使い物にならなくなっているものの、最後に芳佳達を捉えた位置はおおよそ分かっている。

それにサーニヤのフリーガーハマーが作る火球は遠くからでも十分目視出来る。ネウロイと交戦中ならば、三人の居場所を見つけることはそれほど難しくはないはずだ。

(芳佳……サーニヤ……エイラ……)

優人は心の中で三人の名を呟く、同時にS-18対物ライフルを握る手に力が入る。サーニヤの能力、行動を模倣している今回のネウロイは今までとは明らかに異質。インカム越しに聴こえる歌はサーニヤのメロディと似てはいたが、うなり声のように不気味なもの。美しい夜空に似つかわしくなくそれは優人の心を不安に掻き立てた。

(俺がついていけば……くそっ！)

優人は二日前の夜にミーナに進言したことを後悔していた。夜間専従班は自分を含めた常時4人体制にしておくべきだった。芳佳はもちろん、サーニヤやエイラもウィッチである前に年齢相応のか弱い少女。そんな彼女達を孤立に等しい状態にしてしまった。通信が繋がらない、正確な位置もわからない、ネウロイが他にどんな能力を備えているのかもわからない。

段々と大きくなっていく不安は、優人の脳裏に幾つかの映像を浮かび上がらせていた。5年前、ロマーニヤへ発つ日に見た父の顔、修業中に届いた父の死亡通知とブリタニアの霊園に建てられた墓石。それから連想される大切な人の死。優人は余計な考えを追い出すために頭を振った。

「三人とも……無事でいてくれ」

祈るように呟く優人。今日が父の命日であるためか、思考がややネガティブになってしまっていた。

「優人さん！あれ！」

リーネが声を上げ、見つけた何かを指差した。優人や他のウィッチ達がりーネの指差した先に目をやると漆黒の影がこちらへ向かってくるのが見えた。ネウロイだ。

「大型のネウロイ!?……こんな時に」

バルクホルンが唇を嚙む。一刻も早く夜間専従班の元に駆けつけたいということなんだ邪魔が入ってしまった。

「総員！フォーメーション・ブラボー！正面の大型ネウロイを叩く！」

優人がすかさず指示を出す。彼も焦っているのか、声の上擦ってしまった。

優人とウィッチ達は攻撃を仕掛けるために敵の上空へ移動した。眼下のネウロイは大型の輸送機、もしくは旅客機を思わせるようなシルエットをしている。両翼にプロペラらしきものが6つほどついているが回転はしていない。航空型のネウロイがレシプロ式のストライカーや航空機とは違った未知の原理で飛行しているということを改めて実感させらる。

「攻撃開始！」

優人は号令と共に右手を降り下ろして攻撃の合図をする。いつもは坂本やミーナがやってくるように指揮を取る姿には扶桑海軍士官らしい貫禄が出ていた。

「了解！いくぞハルトマン！」

「うん！ちやつちやつと片付けて三人のところに行こう！」

優人の指示を受け、まず前衛のバルクホルンとハルトマンが急降下しながら突撃、ネウロイに接近すると同時に二人が持つMG42が火を吹く。装甲は容易く削られ、ネウロイから大量の水蒸気が吹き出る。

MG42はリーネのボーイズライフルやサーニヤのフリーガーハマーと比較すると1発あたりの威力は劣っているが、諸国の軽機関銃よりも速い連射速度によって短時間に多数の弾を目標へ叩き込むことが可能。高速で移動するために射撃時間の短い航空歩兵に重砲される。

射撃を終えた前衛の二人が上空へ離脱を始めると優人はシャーリー、ルッキニーの中心ペアにも合図をしようと手を上げた。しかし、何故か優人は下ろすことなく固まった。

「なに?！」

優人は思わず驚きの声を漏らした。バルクホルンとハルトマンの攻撃を受けて相応に損傷したはずのネウロイが一瞬目を離れた隙に元の状態まで再生していた。

「うじゅっ!?何あれ!?もう治ってるよ」

「ま、マジか!？」

優人に続いてルッキーニとシャーリーも驚愕する。バルクホルンやハルトマンの魔法力を付加した3挺のMG42による攻撃をまともに受けたというのに何事もなかったように飛んでいる。優人はセオリー通りの一撃離脱戦法を中止し、ネウロイの分析を始める。

「リーネ！試しにあそこを撃ってみてくれ！」

優人がネウロイの上部中央を指差しながら射撃を指示する。

「は、はい！」

返事をするリーネ。夜間戦闘の経験が無いため緊張してしまっているのか、声が上擦っていた。しかし、初戦果以前とは違ってプレッシャーで実力が半減することはなく、指示された場所を正確に狙撃した。

「ダメか……」

優人の表情が険しくなる。特殊な儀式で威力を向上させた大質量の魔導弾を使用するボーイズライフルの銃撃を受けたというのにネウロイの装甲は石を投じた水面のようの一瞬で元に戻ってしまった。

ネウロイもやられてばかりではなく、複数のビームを発射して報復を行う。優人や

ウィッチ達はシールドを張って防御した。4ヶ月前、ブリタニア近海で遣欧艦隊を襲ったネウロイのそれに比べれば大した火力ではなく、飛行技術の優れたエース級のウィッチならばシールド使わずとも回避可能だ。問題は魔導弾すらものともしない異常な再生能力だ。

「再生特化型ネウロイ……ということですか？」

「みたいだな」

ペリーヌの分析に優人が同意する。魔法力を付加した武器でも再生能力が低下しないネウロイは攻撃力や機動力の優れたタイプよりもよっぽど厄介だ。装甲を削り、露出したコアを破壊出来なければネウロイは倒せない。最悪、コアすらも再生する可能性がある。もしそうだった場合はウィッチやウィザードでも手に負えない。

「……とんだ誕生日プレゼントだな」

不安をやわらげるためか、優人は自分でも笑えないと思うような冗談を呟く。彼の額を一筋の冷や汗が流れていた。



その頃、サーニヤの行動を模倣するネウロイと接触していた芳佳、サーニヤ、エイラ

の三人は――

「ネウロイはベガとアルタイルを結ぶ線の上をまつすぐこつちに向かつてる。距離約3200……」

「こつちか？」

エイラはサーニヤに指示されたコースに照準を合わせてた。

「加速してる。もつと手前を……あと3秒」

「当たれヨー！」

エイラはサーニヤの指示通りに通りに狙いを修正すると心の中で3つ数えてロケット弾を数発連射、同時に大出力のビームが四人の真下を通過する。エイラが撃ち込んだロケット弾は炸裂して光球を生み出し、雲の海を照らした。

「外した!？」

エイラは雲の中を通過するネウロイの影を目で追いながら叫ぶ。

「いいえ、速度が落ちたわ。ダメージは与えてる……戻ってくるわ!」

「戻ってくんナ!」

再びネウロイ接近を感知するサーニヤ、エイラははすかさずロケット弾を撃ち込んだ。しかし、ネウロイは見切ったかのように交わしてしまい、雲に穴が空いただけ

だった。

「避けた!？」

芳佳が思わず声を上げる。

「クソッ!出てこい!」

苛立ちながらも攻撃を続けるエイラ。最後の一発が着弾し、悲鳴と爆炎を上げながら黒い影が雲から飛び出した。

「出た!」

芳佳とエイラが同時に叫ぶ。真っ直ぐ向かって接近してくるネウロイ。エイラは弾を撃ち尽くしたフリーガーハマーを捨てるとMG42を構え、ネウロイと正面から撃ち合いを始めた。

「エイラ、ダメ、逃げて!」

エイラの身を案じたサーニヤが悲痛な声を上げる。

「そんなヒマあるカ!」

既に回避する時間が無くなっていったエイラはMG42を撃ち続ける。多数の銃弾を浴び、ネウロイの装甲は少しずつ碎けて破片となっていくが速度は大して変わらない。

「!」

三人の目の前に巨大なシールドが現れる。これは芳佳のシールド、膨大な魔法力を活かした彼女の得意技だ。その大きさが夜間専従班を守る。

「気が利くナ、宮藤！」

MG42を撃ちながら、エイラは感心したように言う。

「大丈夫！私達、きつと勝てるよ！」

「それがチームダ！」

勝利を微塵も疑わず、ネウロイに立ち向かう芳佳とエイラ。そんな二人を見て、サーニヤの表情が変わる。

「サーニヤちゃん!？」

さつきまで芳佳の背中に身を預けていたサーニヤが芳佳の13mm機関銃を構えると、トリガーを引いた。エイラとネウロイに集中砲火を浴びる。やがて、コアが剥き出しになり、とどめの一発が命中した。コアを失ったネウロイは爆風の崩壊し、それによって発生した衝撃波の奔流が三人を襲うも芳佳のシールドがすべて防ぎきった。



芳佳達がネウロイを撃破する少し前、別のネウロイと交戦中の優人率いる増援組は攻撃を継続していた。しかし、いくら攻撃をくわえてもそれを上回る速度で再生してしまふ。ネウロイとの戦闘……というよりイタチごっこは未だに続いていた。

「ダメだ！再生が速すぎる！」

BARの弾倉を交換しながらシャーリーが苦悶の表情を浮かべる。

「ハアハア……キリがありませんわ」

ペリーヌも息を切らしている。

「優人！このままではジリ貧だぞ！」

バルクホルンがネウロイに向かってS-18対物ライフルを撃ち続けている優人と言う。優人の攻撃ももちろん効果がなく、ネウロイは時たまビームで反撃をしながら悠々と空を飛行している。舐めきったようなネウロイの行動に腹立だしささえ覚えた。

（もう……あれを使うしか……）

優人は周囲に目を凝らした。隊員達、特に夜間飛行の経験が無いリーネとペリーヌは緊張からか魔法力の消耗が普段の戦闘よりも激しい。残弾も心許なくなり始め、優人は奥の手の使うことにした。

「全員シールドを張ってそのまま動くな！」

優人はそれだけ言うとS-18対物ライフルを捨て、ネウロイに突っ込んで行った。一番優人に近い場所にいたバルクホルンが声を上げる。

「優人！何をするつもりだ！」

優人は何も答えず、連射されるビームを回避しながらフルスピードでネウロイに向

かっていく。ほどなくして、ネウロイに取り付いた優人は装甲にゆつくりと手を触れる。それと同時に彼の髪や目が蒼く輝き出した。

「絶対……凍結!」

ネウロイに触れた優人の手が蒼白い光を発する。命令通り優人の後ろでシールドを張っていたウィッチ達は一瞬で夜空を明るく照らしたその強い光に思わず目を瞑った。

「——っ!」

一番最初に目を開いたバルクホルンの視界に飛び込んできたのは全身凍り漬けになっているネウロイとその少し上でホバリングをしている優人だった。他のウィッチ達も順に目蓋を開き、同じ光景を目にする。

「な、なんだ……ありや!?!」

「ネウロイが……凍ってるよ?」

シャーリーとハルトマンが目丸くしながら呟く。ネウロイは低温が苦手とされ、冬には活動も鈍くなる。しかし、丸ごと凍りついたネウロイを見たのは、おそらくここにいる501メンバーだけだろう。

「やったー! 優人すごーい! ネウロイ、カッチンコチン!」

全員が茫然とする中でルッキニーだけが大はしやぎする。やがて、凍結の影響で飛行能力を失ったネウロイは海へと落ちていった。落下したネウロイは海面に接触した衝

撃で粉々に碎かれ破片となり、海中に沈んでいった。これならば再生能力も関係ないだろう。

「はっ！ゆ、優人！無事か!？」

ハツと我に返つたバルクホルンが優人の身を案じて声を掛ける。

「ハアハア……だ、大丈夫——」

優人は息絶え絶えの状態で大丈夫、と言おとするも途中で気を失つてしまう。同時に零式のプロペラも回転を止め、優人の足から脱げていく。海へと落ちていく愛機を追うようにして優人も落下していった。

「優人さん!」

「大尉!」

「あたしに任せろ!」

頭から落ちていく優人を見て、リーネとペリーヌが悲鳴を上げる。二人の悲鳴に反応するようにシャーリーが優人を追い掛け、急降下する。ユニットは無理だったが、優人のことは海面ギリギリのところで見事キャッチした。奇しくも落下からシャーリーに助けられるまでの優人の姿は音速を突破した際の彼女のそれと酷似していた。無論、服はちゃんと着ている。

「シャーリー……助かったよ……」

やや憔悴したような顔で優人は礼を言う。彼は所謂お姫様抱つこの状態でシャーリーに抱えられている。

「まさか、女の子にお姫様抱っこされるとは思わなかったけど……」

そう言つて苦笑する優人にシャーリーがいつもの豪快な笑いを飛ばした。

「あつはははは！これでいつかの借りは返したからな」

右目を瞑つてウインクするシャーリー。眩しすぎるその笑顔に優人が軽く頬を染めていると他のウイツチ達が駆け寄つてきた。

「優人さん、大丈夫ですか？」

心配そうな顔をしたリーネが優人の顔を覗き込んで訊ねる。

「ははは……少し頑張り過ぎたかな？でも、大丈夫だよ」

「ねえねえ優人お！」

今度はルツキーニがズイツと顔を寄せてきた。

「さっきのつて何？」

「一瞬のうちにネウロイを凍らせてしまいましたわね」

ルツキーニとペリーヌが大型ネウロイを丸ごと、しかも一瞬で凍結させた優人の技に興味を示す。優人の固有魔法『凍結』のことは二人も知っているが、大型ネウロイ相手だと表面装甲を凍らせるのがやっとで完全に凍結させるほど強力なものではなかった

はずだった。

「あれは『絶対凍結』って言って……まあ、俺の必殺技みたいなものかな？」

ザックリとした説明をする優人にハルトマンが唇を尖らせた。

「そんなあるなら、もつと早く使えばよかったのに……」

「そう簡単に使えるものではないんだ……そうだろ優人？」

バルクホルンが優人に荷担する。

「まあ、魔法力の殆どを使うか——」

「あつ……あれ見て！」

何かに気付いたルツキーニが優人の言葉を遮った。優人とウィッチ達も彼女につられて目をやると少し離れた場所に複数の発光が見えた。それはエイラがネウロイに向けて発射したロケット弾が生み出した火球だった。

「芳佳達か!？」

「向こうも交戦中みたいだね……」

バルクホルンとハルトマンが順に呟く。芳佳達三人は思ったよりも近くにいたらしい。

「よし！私とハルトマン、ペリーヌとリーネで引き続き救援に向かう！シャーリーとルツキーニは優人を連れて先に帰投しろ！」

「ちよつ……ちよつと待て！俺も行くよ」

戦闘隊長代理である自分を差し置いて指示を出すバルクホルンに優人が異を唱えた。するとバルクホルンは呆れたような顔をして優人を見た。

「その状態で一端の戦力のつもりか？」

と優人を指差すバルクホルン。

「あつ……」

自分の状態を再認識した優人が間の抜けた声を出す。今の彼には魔法力もストライカーもなく、シャーリーに抱えられてる。自力で飛ぶことも出来ない彼は芳佳達を助けるどころか逆に足手纏いだ。

「指揮は私が代行する。構わないな？」

「……わかった」

バルクホルンの言葉に優人は不満を呑み込むようにして小さく頷く。バルクホルンの判断が正しいのはわかっているが、優人は芳佳達のことを心配なのだ。ストライカーさえあれば今すぐにでも三人の元へ飛んでいくだろう。

「戦闘隊長代理の代行か……変なの……」

「うるさいぞハルトマン」

「はいはい」

気の抜けた声で応じるハルトマンにバルクホルンは顔をしかめたがそれ以上は何も言わず、指名した三人を連れてフリーガーハマーの火球に向かっていった。

「さて……あたしらも行くな？」

「そだね」

「……………」

シャーリーの言葉にルツキーニは笑顔で、優人は無言で頷いた。

（気付かれてたかな？）

絶対凍結を使った優人は魔法力の消耗だけでなく肉体的にも精神的にも大きな負担が掛かっている。優人はバルクホルンがそのことに気付いているように思えた。

「身体は大切にしろよ」

と真剣な眼差しを向けるシャーリー。彼女も優人の負担に気付いているようだった。

（こいつら……エスパーかよ）

勘の鋭い友人達の気遣いに優人は苦笑いを浮かべた。



真下の雲に大きな穴が空いたところで奔流が止み、同時に歌が再びインカムに流れて

きた。

「まだ聞こえる……」

エイラが呟く。

「何で？ やったんじゃ？」

確かにネウロイを倒したにも関わらず、歌が聞こえてくる。しかし、今聞こえている歌はネウロイのものとは違っている。美しいピアノの旋律だ。

「違う……これはお父様のピアノ」

そう言つてサーニヤは、空を見上げながら片肺で上昇していく。

「そっかーラジオだ！ この空のどこかから届いているんだ！すごいよ！ 奇跡だよ！」

芳佳はハッと気付き、その奇跡的な体験に立ち合えた嬉しさではしやぎ出す。

「いや、そうでもないかも」

とやんわり否定したのはエイラ。

「えっ？」

「今日はサーニヤの誕生日だったんだ。正確には昨日かな。」

「えっ？……じゃあ私達と一緒に？」

キョトンとしていた芳佳はサーニヤが自分達兄妹と同じ誕生日だと理解するまで少し時間がかかった。

「サーニヤのことが大好きな人なら、誕生日を祝うなんて当たり前ダロ？世界の何処かにそんな人がいるんなら、こんなことだって起きるンダ。奇跡なんかじゃナイ」

「エイラさんって優しいね」

「そんなんじやネーヨ、バカ」

芳佳と優人に褒められて恥ずかしくなったのか、悪態をつくエイラ。

「バカって……」

バカと言われて、顔をひきつらせる芳佳。しかし、不思議と嫌な気はしなかった。

「お父様……お母様……サーニヤはここにいます。ここにいます」

サーニヤは空の向こうにいる両親に語りかけていた。電波に想いを乗せるように、祈りを捧げるように。すると、サーニヤを中心に夜空一面がオーロラのように輝いた。それはゆっくり広がりながら、地平線の向こうへ消えていった。

「お誕生日おめでとう、サーニヤちゃん！」

芳佳はサーニヤの誕生日を祝福する。すると、サーニヤは芳佳を真っ直ぐ見つめた。

「あなたとお兄さんもでしょ？」

「えっ？」

「お誕生日おめでとう。芳佳ちゃん」

芳佳のことを自然と名前前で呼ぶサーニヤ。

「オメデトナ」

サーニヤに続き、どこかさっぱりとした表情でおめでとう、と言うエイラ。

「……ありがとう」

二人からの祝福の言葉に優人は微笑み、芳佳は目尻に涙を浮かべながらも笑顔になっていた。

（帰ったらお兄ちゃんにも言わなきゃ……）

誕生日は嬉しい日だと改めて感じた芳佳は無性に優人と会いたくなっていた。

第24話「酒は飲んでも飲まれるな」

501基地にはウィッチ達が暮らす宿舎がある。宿舎には厨房や食堂、医務室に手術室、そして更衣室と風呂がある。元々宿舎内は男子禁制だったが、ウィザードである優人の参加を切っ掛けに男女共用となった。優人のことを信頼してくれているのか、それとも異性に対する警戒心が薄いのか、部隊指揮官のミーナをはじめとするウィッチ達の多くは彼と同じ宿舎に住むことに対して特に難色を示したりはしていない。中には年頃の男子の私生活に興味を示す者もいる。

「えーつと……あつ、あつた!」

自室に戻った優人は部屋に置かれたチェストの一番下の引き出しから風呂敷の包みを取り出す。風呂敷を解くと中から洋菓子の箱が出てきた。これは16日に原隊の上官である赤坂伊知郎扶桑海軍中将から賜った物だ。

優人はこれから、ミーティングルームにて妹の芳佳や501の仲間達とデブリーフィングを行う。デブリーフィングとは戦闘後に報告や検証を行う会議のことだ。優人と芳佳は基地へ帰投後、デブリーフィング中に飲むお茶やお菓子を用意しに厨房へ向かったが、お菓子が見当たらず。優人が自室で保管していたウィスキーボンボンなら

丁度良いだろうと取りに来ていた。

元々は貰ったその日のうちに隊の皆で食べようとしていたものだが、ネウロイの出現によつて存在を忘れてしまつていた。

「ん……大丈夫そうだな」

箱を開けて中身を見てみる。ハルトマンが部屋に侵入した際に盗み食いされていなか心配だったが、中のチョコレートは一つも欠かすことなく残つていた。

「さて……うっ！」

菓子を持つてミーティングルームへ行こうと立ち上がった途端、優人は立ち眩みを起こした。身体に力が入らず、左右にふらふらと揺れる。その姿は酔つ払いの千鳥足の様だったが、優人は酒など一滴も飲んでいない。

「無茶し過ぎたかな？」

優人はすぐに原因を察した。ネウロイとの戦闘中に『絶対凍結』を使用したのが原因だ。

『絶対凍結』は固有魔法の上位魔法たる覚醒魔法に分類されるもの。魔法力を冷気に変換させる『凍結』とは違い、手で触れたネウロイに負の温度化のされた魔法力を流し込む魔法で、理論上はどんな大型ネウロイも完全に凍結させることが可能である。反面デメリットも大きく、ほぼ全ての魔法力を消費し、さらに肉体や精神にも多大な負担を掛

ける諸刃の剣であり、501においても原隊においても上官の許可無しでの使用は硬く禁じられている。

「ぐっ……」

疲労感が波のように押し寄せ、限界に達した優人は一言呻くと床へと倒れ込んだ。

◇ ◇ ◇

一方、同じく基地に帰投している他のウィッチ一同はデブリーフィングのためにミーティングルームへ移動していた。出撃前のブリーフィングや作戦会議等はブリーフィングルームで、日々のミーティングと作戦後のデブリーフィングはミーティングルームで行われる。

「ふああ……ねむ……」

シャーリーがソファアーの上で大きく口を開けて欠伸をする。ソファアーにもたれ掛かるようにして座り、大きく欠伸する姿は本人のおおらかな性格を表していた。隣にはルッキニーが座っていて、既に鼻ちようちんを揺らして眠っている。

「リベリアン、少しは隠すようにしたらどうだ？」

「あ、悪い。つい……な」

バルクホルンに注意され、シャーリーはぼつが悪そうに頭を掻く。

「ふあゝ……あつーごめんなさい！」

同じく欠伸を漏らしてしまつたリーネ。すぐさま頭を下げて、謝罪する。

「呑気な方々です……ふあ」

呆れたように言いつつペリーヌも欠伸を漏らした。人目を気にせず豪快に欠伸をしたシャーリーとは違い、二人は手で口許を隠している。その動作は育ちの良さを感じさせる上品なものだった。

「まつたく、緊張感の無い……」

そう言うバルクホルンも時折口を堅く閉じて欠伸を噛み殺している。

「時間が時間だし、しょうがないんじゃない？」

とハルトマン。日付が変わつて8月18日、時計の針は既に丑三つ時を差している。さらにネウロイとの戦闘からくる疲労が眠気を倍増させ、一同の目蓋を重くしていた。

「私も早く寝たいよ……」

「昼間あれだけ寝てるのに、よく昼夜逆転しないナ」

エイラが呆れ目でハルトマンを見る。ハルトマンの睡眠時間はお昼寝好きのルッキニーをも遥かに上回る。それこそバルクホルンが起こさなければ丸一日を睡眠に費やすんじゃないかと思うほど。ハルトマンはそれでも足りないらしく、過去に『80時

間くらい寝たい』と漏らしていたこともある。

「皆さ〜ん、お茶ですよ〜」

そこへ割烹着姿の芳佳がワゴンを運んでやって来た。ワゴンには人数分の湯呑みと急須が乗っている。前回ミーティングルームに集合した際はリーネの淹れた紅茶のカップがテーブルに並べられていたが、本日は芳佳が淹れた扶桑茶らしい。

「みんな、おかえりなさい」

「今日は御苦労だったな」

一足遅れてミーナと坂本も顔を出し、一同を労う。

「あれ？芳佳ちゃん、優人さんは？」

芳佳が湯呑みをテーブルに並べ始めたところでリーネが訊く。宮藤兄妹はお茶の用意のため、二人揃って厨房へ向かったのだが、優人だけが戻ってきていない。

「あれ？先に戻つてると思ってたのに……」

と怪訝そうな顔をする芳佳にバルクホルンが訊ねる。

「一緒じゃなかったのか？」

「お茶菓子を取りに部屋に行つてから、そのままここに來るつて言つてました……」

「……………むにや？……………お茶菓子？」

お菓子の存在を察知したルツキーニがパチン、と鼻ちようちんが割れる音と共に目を

覚めました。

「うん、貰い物のチョコレートだって……」

「チョコ!?!」

チョコレートという単語で完全覚醒し、ルツキーニは弾かれたように立ち上がる。

「うん。ウイスキーボンボンって名前の——」

「それって、ウイスキーボンボンじゃありませんこと?」

天然なボケをかます芳佳にペリーヌが突っ込みを入れた。

「そう!それ!」

頷く芳佳。余談だが、ウイスキーボンボンのボンボンの由来はガリア語で「良い」を

意味する形容詞「bon」を二つ重ねたものだ。

「貰い物って……誰からだ?」

と訊くシャーリー。

「えーつと……確か赤坂さんって人から」

「赤坂?まさか赤坂伊知郎中将か?」

予想外の人物が出てきて、バルクホルンが驚いたような顔をする。

「バルクホルンさん知ってるんですか?どういう人なんですか?」

「そんなことも知らないんですの?……扶桑海軍の遣欧艦隊司令長官ですわ」

バルクホルンの代わりに呆れ顔のペリーヌが答える。

「司令長官？何をする人なんですか？」

「貴方はそんなことまで……」

「簡単に言うと、欧州に派遣されている扶桑海軍で一番偉い人よ」

ペリーヌの後に続くようにしてミーナが答える。元々軍人志望でないことを差し引いても、軍の常識にはかなり疎い芳佳。この様子では自分の原隊が扶桑海軍であることを理解しているのかすら怪しい。ミーナの説明はそんな彼女にも分かりやすいようにざっくりとした物になっている。

「そして、宮藤博士の友人でもある」

坂本が付け加えた。

「お父さんの？」

「ああ、優人が博士の研究所に派遣されたのも赤坂長官の働きかけがあったからだ」

「へえ……お父さんは偉い人と友達だったんですね」

感心する芳佳。尤も彼女の興味は軍人として赤坂よりも父の友人としての赤坂の方にあるようだ。

「そんなことよりも……優人遅くないか？」

シャーリーがミーティングルームの入口に目を向けて言う。

「確かに、部屋へ菓子を取りに行っただけにしては遅いな
バルクホルンも同意する。」

「お兄ちゃん、どうしたんだろ？ちよっと見てきますね」

芳佳は割烹着を脱ぐと、そう言い残して部屋を出た。

「ミーナ、少佐」

バルクホルンは立ち上がると二人に近寄った。

「どうしたバルクホルン？」

「先に報告しておきたいことがある」

「何かしら？」

「実は……」

バルクホルンはおもむろに口火を切った。



「お兄ちゃん？」

優人の部屋に來た芳佳はドアを半分開いて中の様子を伺う。明かりが点いておらず、

暗くて室内がよく見えない。

「いないの?」

芳佳は再度呼び掛けるが、返事どころか物音一つしない。部屋にはいないのかと思いい、芳佳がドアを閉めようとした。その瞬間、月明かりが部屋に射し込み、床に倒れている優人を照ら出した。

「つ——!?!お兄ちゃん!?!」

うつ伏せに倒れている兄を見つけた芳佳は慌てて駆け寄った。

「お兄ちゃん! どうしたの? お兄ちゃん!」

優人の背中に両手を置き、ゆさゆさと揺らす。優人は「うう……」と唸りながら目を覚ました。

「あれ? 芳佳?」

「よかつたあ……」

優人が意識を取り戻したことに安堵した芳佳は目に涙を浮かべる。優人は状況が呑み込めていないのか、室内をキョロキョロと見回した。

「俺どうしたんだ?」

「お兄ちゃん倒れてたんだよ?」

「倒れ? あつ、そつか」

「もう、びつくりしたんだから」

涙を拭いながら少しだけ怒ったように言う芳佳の頭を優人は優しく撫でた。

「今日は戦闘で張り切り過ぎたみたいだな。心配掛けてごめん」

優人が謝ると同時に部屋の照明が点灯し、室内を光で満たした。ドアの方へ目を向けるとミーナと坂本が部屋の入口に立ち、二人を見下ろしていた。

坂本の右手がスイッチに添えられている。どうやら彼女が明かりを点けたらしい。

「坂本さん、ミーナ隊長。どうしたんですか？」

「芳佳さん……私達はお兄さんと話があるから。先にミーティングルームに戻っててもらえるかしら？」

芳佳の質問には答えず、代わりにミーティングルームへ行くよう促すミーナ。

「えっ……でも」

芳佳は優人を心配そうに見つめる。優人は芳佳を安心させようと優しく微笑み、ウィスキーボンボンの箱を渡した。

「大丈夫だよ、一回寝てすっかり元気になれたから。ほら、これ持って先行きな」

「う、うん……」

芳佳は尚も心配そうだったが、箱を受け取るとミーナと坂本の間を抜けるようにして部屋から出ていった。

「優人、お前『絶対凍結』を使ったな？」

芳佳の足音が聞こえなくなったところで坂本が切り出した。二人は先程バルクホルンから報告で優人が『絶対凍結』を使ったことや魔力切れを起こして墜落しかけたこと等を知った。

「ああ、そうしないとやられていたからな」

「身体は大丈夫なの？怪我は？」

「ないよ。強い疲労感はあるけど」

そう答えて優人は自分の肩をトントンと叩いた。ミーナはホッと胸を撫で下ろすと重ねて訊いた。

「魔法力回復にどれくらいかかりそう？」

「そうだなあ……」

優人は少し考えてから二つ目の質問に答えた。

「戦闘可能になるまで、4、5日。完全回復には一週間は必要だな」

「では、あなたには数日の飛行禁止と戦闘禁止を命じます。魔法力と体力の回復に努めて下さい」

「了解」

優人が了承すると今度は坂本が口を開いた。

「状況が状況だけに今回は不問にするが、次は必ず私かミーナに許可を——」

「わかってるよ、俺だって無闇矢鱈に力を使いたくないからな」

「それともう一つ。先の戦闘で失ったあなたのユニットやS-18対物ライフルに関する始末書、ちゃんと書いてね」

「うっ……り、了解」

始末書という単語を聞いて顔をひきつらせた優人はそう答えると、芳佳を追い掛けるようにミーティングルームへ向かった。

「ミーナ、優人も他の連中も疲れている。デブリーフィングは早朝にすらそう」

「そうね」

坂本の提案に賛成するミーナ。

「しかし、サーニヤの行動を真似るネウロイと異常な再生能力を持ったネウロイか……」
坂本が顎に手を当てて考え込む。ネウロイ出現の間隔が狭まったばかりか、複数の個体が同時に姿を見せた。

ブリタニア近海で遣欧艦隊が襲撃された際も二体だったが、それらは同型で外見はもちろん、能力やコアの位置も全く同じだった。しかし、今回はそれぞれが違ったタイプ。一方はサーニヤの行動を模倣することで歌声や魔導波に近い能力を手に入れ、もう一方は魔法力を上乘せした銃弾さえも受け付けないほどの再生能力を備えていた。後者は単純に強敵と形容出来るが、前者は言葉では上手く言い表せない不気味さを感じる。

「二体目のネウロイは明らかにサーニヤに拘っていた。行動を真似してまで……」

「ネウロイに対する認識を改める必要があるのは確かなようね……」

「二体目の方は魔導弾も効果がなかったと聞いた。コアまで再生する可能性も否定できん」

「考えたくないわね」

「やれやれ、と肩を竦めるミーナ。彼女の言葉に全員が同意したことだろう。もしコアを破壊しても倒せないネウロイが一度に多数出現するような事態になればはブリタニアは、いや人類は終わりだ。」

「上の連中……このことをどこまで知っていると思う？」

坂本は窓辺に移動し、空の月を眺めながらミーナに訊いた。

「さあ……もしかしたら、私達よりもっと多くのことをつかんでいるのかもしれないわね」

そう言ってミーナも坂本と並んで窓辺に立った。

「うかうかしてはいられないか」

二人はそう言葉を交わすと、踵を返して部屋を出た。



ミーナ、坂本との会話を終えた優人はミーティングルームへ向けて歩を進めた。途中、ポケットから一枚のカードを取り出した。それはウィッチ達のアドバイスを受けて作った芳佳へバスデーカード。ブリタニア語で『HAPPY BIRTHDAY』と書かれ、その下には数本の蠟燭の立ったバスデーケーキと芳佳の使い魔の豆芝が描かれていた。

「微妙だな……」

カードの出来の悪さに溜め息を漏らす優人。人間とは思議なもので、アイデアを思いついたり、何か完成させた直後は「素晴らしい」「傑作だ」と自画自賛するのだが、時間が立つてから改めて見てみると駄作と卑下してしまう。

優人もこのバスデーカードを完成させた直後は「中々の出来映え」と感じていたが、冷静に見てみると幼稚園児の工作ばりの完成度に思えてしまう。やや、落ち込んだ様子で廊下を進んでいくと、入口の前でバルクホルンと鉢合わせた。彼女は膝を抱えるようにして床に座り込み、顔を伏せていた。

「バルクホルン？こんなところで、どうしたんだ？」

「グスツ……優人お……」

優人の声に反応したバルクホルンは目に涙を滲ませていた。鼻の頭が真っ赤に染ま

り、声も鼻声になっていた。そう、バルクホルンは泣いていたのだ。それも以前優人と揉めた時はまた違った女性らしい泣き方だ。他のウィッチがバルクホルンを泣かせるようなことをするとは思えず、優人は当惑した。

「ど、どうしたんだ？」

「聞いてくれるか？」

「う、うん」

濡れた瞳で優人を上目使いに見るバルクホルン。その可愛らしい表情に不謹慎にも優人はドキツとしてしまった。

「みんな、私のことを……堅物軍人だの、石頭だの、女子力捨ててるだの言うんだ」

バルクホルンは嗚咽混じりに話始める。

「私だって、ホントはもつと緩やかに毎日を過ごしたいんだ！年頃の女の子らしくお洒落したいんだ！可愛い服だつて着たいんだ！化粧だつてしたいんだ！恋とか経験して見たいんだ！でもでも！私はウィッチだろ!?軍人だろ!?今は戦時中だろ!?みんなを守るために戦わなきゃならんし！それにカールスラント軍人である以上は規則や軍務に忠実であるべきだと思うんだ！だから我慢しているのに、耐えてるのに、それなのに

……」

「……えっ？」

優人は目を点にした。バルクホルンの女の子らしい部分にはさほど驚いていない。それよりも彼女がこれだけの本音を一度にぶちまけたことに唾然としてしまい、内容が頭に入らない。

「確かに私の、言動や立ち振舞いは、女らしくはないかも知れないが……うううー！」

両手で顔を覆い、火がついたように号泣するバルクホルン。あまりにいつもと違い過ぎる彼女に優人は動揺を禁じ得ない。しかし、それでも何とかバルクホルンを励まさないければと声を掛けた。

「そ、そんなことないよ。バルクホルンは十分女の子らしいよ」

「グス……どこが？……」

「ええと、笑うととても可愛いし。厳しいようで皆のことを見守ってるし。普段からハルトマンの世話も焼いているだろ？優しいお姉さんのようだし。何より女の子らしさで悩むところがスゴく女の子らしいよ！」

「そうか……私にもは女らしいところが……」

優人の長口上が功を奏し、バルクホルンの表情が明るくなる。励ましが上手いきき、優人はホツとする。

「ありがとう優人！おかげで自信がついた！礼をしなればな」

そう言うバルクホルンは制服の上着を脱ぎ、さらにシャツのボタンにも手を掛け始

める。

「ちよ、ちよ！何やってんだ！」

「なにつて……私は礼をしよう」と

「何故ストリップする!？」

優人は顔を真っ赤にしながら重ねて訊く。対するバルクホルンは特に羞恥心も見せず、朝起きて顔を洗うかのような自然さでシャツを脱ぎインナー姿になる。

「お前、胸が好きなのだろう？ほら好きにしていどうぞ？」

「は?」

優人は耳を疑った。ついさっきまで泣き上戸状態だったバルクホルンが一転、痴女発言をしている。両方とも普通の彼女からはとても想像できない姿だ。

「遠慮することはない!ルツキーニがシャーリーにやっているように私の胸に顔を埋めるといいー!」

と自身の胸を持ち上げるバルクホルン。優人は全力で頭を振った。

「いやいやいや!そんなこと出来るわけないだろ!」

「む?何故だ?そうか!恥ずかしいんだな?ならお前を私の弟にしてやろう!」

「なんでそうなる!?!」

「姉弟ということならば恥ずかしながらに堂々と甘えられるだろう?さあ、お姉ちゃん

の胸に飛び込んで——」

「なんだその理屈は!？」

発言どころか思考回路そのものがおかしくなってしまうているバルクホルン。しかし、この程度はまだ序の口であった。

「何をしているんだ貴様らあ!」

ミーティングルームから怒号が響く。強面で厳格な鬼教官を思わせるような怒鳴り声だった。優人はビクツツと身体を振るわせながら声のした方へ視線を移す。

「えっ? ハルトマン?」

意外なことに声の主は厳格さとはまるで無縁のハルトマンだった。しかし、バルクホルンと同じくいつもと様子が違っていた。いつも授章式ぐらいでしか着用していない軍帽を被り、表情を強張らせ、鋭い目付きで優人を睨んでいる。

「デブリーフィングに遅れてきたかと思えば、逢い引き……いや、淫行か。いい身分だな」

口調も完全に別人となっているハルトマン。優人は今の彼女に教官モードの坂本を上回る厳格さを感じていた。

「あ、あの……どちら様ですか?」

恐る恐る訊く優人にハルトマンは目を剥いた。

「貴様は同僚の名前も忘れたのか！大馬鹿者があ！」

「えええ！ご、ごめんなさい！」

ハルトマンからの二度目の怒号。あまりの迫力に優人は反射的に謝ってしまふ。

ハルトマンはさらに続けた。

「いいから！宮藤大尉！カールスラント軍人たるもの！一に規律、二に規律、三も規律で

四、五、六、七、八、九も規律だ！」

「いや、俺は扶桑海軍じ——」

「口答えるな！」

「はっ、はいいい！」

直立不動の姿勢となる優人。普段大人しい人間が怒ると恐いと言うが、おおらかな人間の怒りもまた凄まじい。

「あつははははは！ハルトマン中尉つてば恐い！」

そこへ豪快な笑い声と共にサーニヤが現れた。

「リトビヤク中尉！貴様は私をバカにしているのか！」

「また怒ったあ！恐い！でもおもしろい！」

「貴様！」

「サ、サーニヤ!？」

三度驚愕する優人。いつも大人しく引つ込み事案なサーニヤが鬱陶しいくらい明るい。そればかりか、人の神経を逆撫でするような言動をとっている。

(一体、どうなっているんだ?)

優人は混乱していた。三人とも普段とは丸つきり別人のようだ。自分が少し目を離している隙に一体何があつたのか、彼女らは酒癖の悪い人間が酔っ払って豹変したようだった。

(ん? 酒? ……まさか!?)

優人の脳裏にある考えが浮かぶ。それを確かめるため、優人はハルトマンがサーニヤに気を取られているうちにミーティングルームに駆け込んだ。

「あらあら、そんなに慌ててどうしましたの?」

ペリーヌを思わせる上品な口調で優人を迎えたのはシャーリーだった。

「シャーリー、お前もか」

と優人。バルクホルン、ハルトマン、サーニヤの豹変を先に見たためか、今のシャーリーにはさほど驚いていない。

「私がどうしましたの?」

「いつもならここで『よお! 遅かったじゃんか優人!』って言いそうだなあ……とと思って
「さ」

「あら嫌ですわ、まるで私がおはしたくない娘のような」

口に手を当て、頬を赤らめるシャーリー。バルクホルンといい、彼女といい、普段とのギャップでやたらと優人の心を刺激する。

おしとやかなお嬢様モードのシャーリーを無視し、優人はテーブルに目を向けた。芳佳に渡したウイスキーボンボンの箱が開けられており、さらにチョコを直接覆っている小さな包みが9個ほど開けられていた。ミーティングルームに集まった面々が一人一個ずつ食べたらしい。

「やっぱりか……」

優人の睨んだ通りだった。ウイッチ達はアルコール度数の高いウイスキーを摂取したことに悪酔いして人格が豹変していたのだ。しかし、一口で別人のように変わってしまった。もうあたり、501のウイッチ達は酒に弱いのだろうか。

優人は残りのメンバーのことが気になり、室内を見渡した。まずソファアの上で眠っているルッキニーを見つける。仔猫のように丸まって彼女は顔がやや赤いこと以外はいつも通りで、優人は拍子抜けしてしまった。

「兄藤」

誰かが優人に声を掛けてきた。エイラだ。彼女もウイスキーボンボンを食べたように顔を赤くなっている。

「どうしたんだ？鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「い、いや何でも……」

エイラも特に変わったようには見えない。優人は安堵するが、それも束の間。すぐにエイラにも異変が現れた。

「ぐ……ウワアアアア!!」

「エイラ!」

突然、右手を押しさえて苦しみ出すエイラ。叫び声と苦悶に歪んだ顔がただ事でないことを物語っている。

「う、腕が……焼けるように熱い……アアアアアア!」

「しっかりとしろエイラ!俺の声が聞こえるか!」

苦しみのあまり床に倒れ込むエイラ。ネウロイとの戦闘によるものなのか、それとも何か急性の病気なのか。優人はエイラに向かって必死に呼び掛けながら、拙い医療知識を記憶の棚から引つ張り出して原因を探る。

「離れ口、兄藤」

「何言ってるんだ!すぐに手当てしないと……」

「早く!ワタシがワタシでなくなる前に!」

「……ええ?」

意図の掴めないエイラの発言に優人は目を点にした。エイラはさらに続ける。

「これで最期だと思うから言うゾ。エイラ・イルマタル・ユートイライネンは世を忍ぶ偽りの名、私の真名はエターナル・フォース・ブリザード……ダ」

「……………」

優人は理解した。エイラもウイスキーで酔っているというのを、そしてエイラは酔うと不思議ちゃん通り越して中二病を患ってしまうということ。

「ちよつと、静かにしてくれませんか？せつかくのティータイムが台無しになっちゃうでしょ？」

「あつ、悪……………」

優人が謝りながら苦情が飛んできた方へ振り返ると、そこには脚を組んで椅子に座っているリーネがいた。

「ちよつと、何見てるんですか？そんないやらしい目を向けなくてくれますか？気持ち悪い」

と吐き捨てるリーネ。彼女も酔っているらしい。いつもと比べて口調がきつく、目も鋭い。しかも養豚所の豚を見るような蔑みの目で優人を見ていた。その視線と言動は見事優人の心に突き刺さり、深い傷を負わせた。

「(イ)、(イ)めん……………」

「リーネさん！お茶をお持ちしましたわ！」

優人がへこんでいると、ペリーヌがカップを持って部屋に入ってきた。彼女はリーネに頼まれて、厨房まで紅茶を淹れにいったのだ。

「……ペリーヌさん」

リーネはカップの中身を見た途端、不機嫌そうな表情を険しくした。リーネに睨まれ、ペリーヌはオドオドし始める。

「な、なんででしょうか？」

「私はダージリンティーが飲みたいと言ったんですよ！これオレンジ・ペコーじゃないですか？」

「ひっ！も、申し訳ありません」

ペリーヌはすかさず頭を下げた。リーネに相当怯えているのか、身体を小刻みに振らせている。

「ガリア貴族の令嬢は紅茶の区別もつかないんですか？ブリタニアはあなた方ガリアの人々に屋根を貸してあげてるんですよ？なのにお茶淹れも満足に出来ないんですか？」

「ふええええ！ごめんなさ〜い！」

リーネにきつく言われ、ペリーヌは目尻に涙を浮かべる。この二人は完全に力関係が逆転していた。強気なペリーヌは気弱なパシリに、いつも優しくおっとりしているリー

ネはいじめっ子のようになってしまっている。

(お前ら誰だよ)

豹変したウィッチ達に向かって心の中で呟く優人。なんとかしなければとは思うものの、この件は完全に優人の手には終えない。日頃から隊を纏めているミーナと坂本に期待するしかないだろう。

「おにくちゃん!」

「うわっ!」

突然何者かに抱き着かれた優人。相手が誰かは声と呼び方ですぐにわかった。優人はすぐさま振り返り、注意する。

「芳佳、危ないだろ。お兄ちゃん危うくぎっくり腰になるところだったぞ」

「えへへ!ごめんなさ〜い!」

やはり抱き着いてきたのは芳佳だった。当然、彼女もウイスキーボンボンを食べて酔っ払っているようで顔がいつもより赤い。ご機嫌なことを除いてはいつもと変わらないように見える。

「あつ、そうだ!お兄ちゃん!」

「ん?」

「19歳のお誕生日おめでとう!」

と満面の笑みで兄の誕生日を祝福する芳佳。妹からの祝福に優人は面食らったが、すぐに笑顔と祝いの言葉を返した。

「ありがとう！芳佳こそおめでとう！」

「えへへ！」

互いに祝福し、祝福されるのが宮藤兄妹の誕生日。「おめでとう」と言い合うだけで幸せで胸が一杯になる。

「あつ！そうだ！」

優人はポケットのの中からバースデーカードを取り出し、芳佳に手渡す。

「これって？」

「一応、誕生日プレゼント……なんだけど。ごめん、今年はそんな物しか用意できなくて……」

優人はぼつが悪そうに頭を掻く。しかし、芳佳は気にしなかった。

「ううん！お兄ちゃんからのプレゼント、すごく嬉しいよ！私こそ何も用意できなくて……ごめん」

芳佳は申し訳なさそうに顔を伏せる。

「ブリタニアに来てから色々忙しかったんだし、仕方ないさ」

「で、でも……あつ、そうだ！」

何かを思い付いた芳佳。大きく背伸びをすると自分の唇を優人の唇に押し付けた。つまり、軽いキスをしたのである。

「!？」

あまりの出来事に唇を押さえながら後ずさる優人。そんな兄を見て、芳佳は悪戯っぽく笑う。

「えへへ！お兄ちゃんの唇、奪っちゃった！」

普段の芳佳から絶対こんなことはしない。彼女も周りと同じく酔いが回っているのだ。

「私からのプレゼントは私のファーストキスでくす！」

「よ、芳佳……おま——」

「ふあく……なんだか眠くなってきたやつだ」

「えっ？」

「お休みなさ〜い」

芳佳は睡魔に誘われるまま床に寝転がり、優人の説教を聞くことなく夢の世界へ旅立ってしまった。

「こんなところで寝るなよ」

優人は呆れつつも芳佳を抱き上げ、ミーティングルームから出ていった。ちなみに悪

酔いしたウィッチ達の騒ぎは宮藤兄妹と入れ替わるようにミーティングルームにやって来た坂本とミーナによってなんとか鎮静化されたらしい。



日が登った数時間後、一旦仮眠を取っていた宮藤兄妹は揃って目を覚ました。

「ひどい目にあった」

寝間着から制服に着替えた優人が自室から出てくる。悪酔いしたウィッチ達の姿が彼の頭から離れない。それとほぼ同時に隣の部屋から同じく制服に着替えた芳佳が出てきた。

「ふあ……あつ、お兄ちゃんおはよう！」

優人の姿を認めた芳佳は欠伸を噛み殺し、挨拶をする。

「お、おはよう」

優人も挨拶するが、気まずさから視線は芳佳から逸らしている。一方、芳佳はキスをしたことを忘れていらしい。

「お兄ちゃんどうしたの？」

芳佳が優人の視界に入る位置に移動しながら訊ねる。

「何でもないよ」

優人はすかさず目を背けた。芳佳も負けじと優人の視線を追い掛ける。そんなやり取りを一分近く続けた後、芳佳が膨れっ面で訊いてきた。

「なんで目を合わせてくれないの？」

「……………芳佳さ、ミーティングルームのこと覚えてる？」

「えっ？……………ミーティングルームの……………」

芳佳は記憶を辿った。段々と数時間前のミーティングルームの出来事を思い出し、芳佳の顔は真っ赤になった。

「わ、わ、私……………なんてことを」

「思い出した？」

「……………」

芳佳は優人の問いに答えず、脱兎の如きスピードで部屋に逃げ帰り、ボタンと音を立ってドアを閉めた。ちなみに芳佳以外で自分が酔っていた時のことを覚えていたウィッチは一人もいなかった。

第25話 「ラツキースケベとズボン紛失事件 前編」

日が登ったばかりでまだ薄暗い明け空。レシプロストライカーのプロペラ音がブリタニア南東部上空に響いていた。音を追うようにして空を見上げるとストライカーユニットを装着して飛んでいるウィッチの姿が確認出来た。サーニヤだ。

サーニヤが履いているユニットはオラーシャ帝国のミール・ガスウダールストヴァ設計局が開発したMiG60。サーニヤの機体は初期型に見られた様々な不具合を修正した後期型。高々度用の魔導エンジン『AM-35A』を搭載し、夜間用の塗装が施されている。

「ふあ〜……」

夜間哨戒を終え、愛機と共に基地へ帰投中のサーニヤが欠伸を漏らす。ナイトウィッチである彼女はブリタニアと仲間達の安眠を守るために昨晩から今朝にかけて哨戒任務に従事していた。その疲労とネウロイが現れなかった安堵感が強い眠気となって襲い掛かり、彼女の目蓋を重くしている。

(帰投したらずぐベッドに入ろう……)

サーニヤは心の中で呟くと基地の滑走路へ降りていった。降下する直前にもう一度、

大きめの欠伸を漏らしていた。



数十分後。基地内に起床ラッパが鳴り響き、宿舎の自室から優人が出てくる。何年も愛用して普段着も同然となつている扶桑海軍第二種軍装の制服をビシツと着こなし、廊下で軽くストレッチをする。

「ふあ……」

ふと欠伸を漏らす。昨晚、遅くまで読書をしていたので寝不足なのだ。

本は心を豊かにしてくれる物だったり、現実逃避の道具だったり、退屈な物だったり、人によって印象は様々だ。本から蓄積された言葉や知識は人生の糧になる、という人間がいるが、つい最近まで多忙だった優人の部屋には知識よりも未読の本が蓄積されている。

「寝坊しちゃった……」

隣の部屋から芳佳が出てくる。彼女は寝間着のまま着替えておらず、手に枕を抱えていた。目は眠たそうな半開きで、髪も所々寝癖になっている。

「おはよう芳佳」

「お兄ちゃん？おはよお」

目覚めが悪い芳佳は舌足らずな口調で答えるが顔は優人ではなく、自室のドアに向けられている。自分と間違えてドアに挨拶する妹にシスコンは呆れつつも可愛いと感じてしまった。

「お〜い……お兄ちゃんはこっちだよ」

「ふえ？」

気の抜けた声を漏らした芳佳は、今度こそ優人の方を向く。早くも目蓋が下がり始め、さらに目が細くなっている。

「ほら！今日は坂本に朝練を見て貰うんだろ？顔洗って、髪直して、制服に着替えなさい」

芳佳の目を少しでも覚まそうと、優人は彼女の頬をペシペシと叩くが芳佳は「う〜ん」と鈍い反応したのみで覚醒には至らない。そのままゆったりとした動きで部屋へ戻っていった。

寝坊したというのに焦ることなく、のんびりとしている妹。このような状態で朝練に行けば、坂本の「馬鹿者っ!!」が炸裂するだろう。

「遅刻遅刻！……きやつ！」

「うわあつ！」

心配そうに芳佳を見ている優人に誰かがぶつかった、ペリーヌだ。18cm身長差があるため、まるでペリーヌが自分の顔を優人の胸に埋めるかのようになった。

「いたた……」

痛みで涙目になったペリーヌは、優人から離れるとぶつかって赤くなつた鼻を右手で押さえる。

「大丈夫か？」

優人は顔を傾けて訊ねる。慌てぶりから察するに彼女も寝坊したのであるが、同じく寝坊した芳佳とは対照的に髪から服装まで身がすっかり整えられている。貴族生まれであるペリーヌの育ちの良さ故か、軍人としての自覚の差が出てしまっているのか。あるいはその両方か。

「宮藤大尉？失礼致しました！」

ペリーヌは自身の前方不注意を詫び、ペコリと頭を下げる。ペリーヌの顔を見た優人はあることに気付いた。

「あれ？眼鏡は？」

「あつ！私としたことが……」

ペリーヌは自己調達の青い制服と並んで、自身のトレードマークである眼鏡を掛け忘れていた。それが原因で優人にぶつかったのだろう。

服も髪も完璧なのに視力が低い人間にとって必需品であるはずの眼鏡を忘れるというミス。以前のペリーヌならあり得なかった。寝坊したことといい、最近一緒にいることが多くなったリーネのドジツ娘属性が移ったのかも知れない。

「ペリーヌにもこういうことがあるんだな……フツツ」

自然と笑みを零す優人に憤然としたペリーヌは抗議の目を向ける。

「大尉っ!」

「ごめんごめん! それにしても……」

優人は軽く謝罪すると顔を近付け、ペリーヌのことをマジマジと見る。

視力低下がかなり進んでいるペリーヌは裸眼では視覚がぼやけてよく見えない。それ故に入浴時や水泳時も眼鏡を離さず、外すのは就寝時のみ。何気に優人がペリーヌの素顔を見たのは初めてだ。

「何ですの? 人の顔をジロジロと……」

「いや……眼鏡がないとペリーヌの美人顔がよく見えるなあ、つて」

「……へっ?」

素で口説き文句のようなことを言う優人。ペリーヌは何を言われているのかすぐには分からなかったが、程なくして言葉の意味を理解し、茹で上がったロブスターのように顔を真っ赤にする。

「——っ!」

「ちよっ……ペリーヌ!」

声にならない悲鳴を上げたペリーヌは、まるで逃げるかのように廊下を駆けていった。ボヤけてよく見えないはずの視界で全力疾走していくのはかなり危険だが、今のペリーヌにはそんなことを考える余裕はない。

「なんだ?」

「お兄ちゃん」

「ん?」

優人が走り去っていくペリーヌの後ろ姿を不思議そうに見ていると、制服姿に戻ってきた芳佳に声を掛けられた。今度は眠い目ではなく、ジト目で優人を見上げていた。

「おっ? ちゃんと起きたか?」

「ペリーヌさんと何してたの?」

「えっ?」

「口説いてたよね?」

ズイツと顔を寄せてくる芳佳。その迫力に優人はたじろぎ、冷や汗を掻く。

「く、くど?」

「まあペリーヌさんは美人でスタイルも良いし、お兄ちゃん好みの金髪さんだしね」

「よ、芳佳？ 一体どうし——」

「何でもないですよ〜だ！」

あからさまに怒りを見せた芳佳はべ〜と舌を出すと、早歩きで優人から離れていった。呆然としながら去っていく妹を見つめっていると、優人の耳が豪快な笑い声を捉えた。

「あつはははは！ なんだ？ 朝から妹を怒らせたのか？」

「シャーリーか？ 人の不幸を笑……って何だ!? その格好は!？」

振り返った優人は驚愕する。後ろにいたシャーリーはなんと下着姿だったのだ。

「なんて格好しているんだ!!」

「いやあ、最近夜も暑いからさ。ジャージだと蒸して寝苦しいんだよねえ」

と頭を掻くシャーリー。彼女が着ているピンク色の下着はレースの付いたトップスと、小さなリボンの付いたローライズのボトムからなっている。

アダルトイナデザインのトップスはシャーリーの丰满な胸をよりセクシーに魅せ、一見清楚な印象受けるボトムも明らかにサイズが小さく、お尻がはみ出ている。

シャーリーは基本的にトレードカラーの赤いジャージを寝間着にしているが、今日のような真夏日はこの下着を着て眠っている。

「暑いのはわかったから、そんな格好で俺の前に現れないでくれ！」

目のやり場に困った優人はシャーリーから顔を逸らして懇願する。確かに夏の暑さの中では快適かもしれないが、朝からこんな刺激的な姿を見せつけられては優人の心臓と理性が持たない。

狼狽する優人に悪戯心を擽られたシャーリーは、ニヤリと笑みを浮かべて優人との間合いを詰める。

「おつ？あたしのダイナマイトボディに悩殺されたか？前から思ってたけど、優人って意外とボウヤだよな？」

「お前なあ……」

自分をからかってくるシャーリーに対して、優人は顔を背けたまま視線だけをシャーリーに戻して睨み付ける。

「そう怒るなよ。お詫びに一緒に風呂入って背中流してやるからさ」

「はああっ!？」

顔を逸らすことも忘れ、優人は素っ頓狂な声を上げる。シャーリーは優人の反応見て、ゲラゲラと腹を抱えて笑い出した。

「あっははははは！ホントお前は期待通りの反応をしてくれるよな！」

「——っ！」

面白がるシャーリーに青筋を立てる優人。いつもなら一方的にからかわれて終わり

だが、やられっぱなしなのは癩だと反撃に出る。

「なら一緒に入って貰おうじゃないか!」

「……………え?……………ええええええええ!?!」

優人の口から出てきた予想外の言葉に、今度はシャーリーが顔を赤くして叫ぶ。

「は、入るって……………本気?」

急に汐らしくなったシャーリーはモジモジしながら上目遣いに優人を見る。優人はさらに畳み掛けた。

「何恥ずかしがってんだよ、お前が言い出したことだろ?」

「で、でもさ……………あたしは冗談のつも——」

「まさか自分から言い出して……………やっぱり止めます、なんて言わないよな?」

「むっ!……………」

優人の挑発に眉を潜めるシャーリー。いつもの彼女ならば、この程度挑発は軽く流せそうなものだが、今はそれが出来ないほど動揺しているらしい。

「よ、よおし!入ってやろうじゃんか!混浴上等!」

「お、おう!それでこそグラマラス・シャーリーだ!」

最早後には引けなくなった二人は風呂場に向かって並んで歩き始める。

「や、止めるなら今のうちだぞ!」

「そ、そつちこそー！」

強気に挑発し合うシャーリーと優人。しかし、心の中では互いに軽はずみな言動を取ったことを悔いていた。

（しまった！このままじゃ、ホントにシャーリーと混浴することになー！）

（まさか優人が挑発してくるなんて……マズい！マズいぞー！）

後悔先に立たず、口は災いの元。今の二人にぴったりの言葉だ。こんなことになっても意地を張って、「やっぱり止めよう」と言えない二人の元に救世主にも魔王にも見える人物が声を掛けてきた。

「聞こえたわよ、二人とも」

「ん？」

「えっ？」

優人とシャーリーが声に振り返ると、そこにはミーナがいた。微笑みながらも自分達を威圧するミーナに二人は身震いする。

「仲が良いのは素敵なことだけれども、混浴はダメよ。男女間のけじめはしっかりつけましようね？何か間違いがあったら大変でしょ？」

「は、はいっ！」

「Yes Ma, am！」

直立不動の姿勢から見事な敬礼をする優人とシャーリー。眉まで上げた手はカタカタと震えている。

「よろしい！優人、私は出掛けるから書類の方お願いね。リーネさんも連れていくから朝食当番も」

「仰せのままに！」

優人の返事にミーナは満足そうな顔で頷くと、二人の間を通り過ぎて行つた。優人とシャーリーはしばらく固まっていたが、5分して我に帰ると優人は厨房へ、シャーリーは着替えるため自室へ向けて全力疾走して行つた。



その頃、ペリーヌ・クロステルマンの自室では――

「うう……心臓が落ち着きませんわ……」

優人との会話の後、部屋に駆け込んだペリーヌはドアに背中を預けるようにして立っていた。両手を胸に当て、激しく脈動する心臓を必死に静めようとしていた。顔からも熱が引いておらず、部屋の空気がやたらと涼しく感じられた。

――ペリーヌの美人顔がよく見えるなあ。

「もう…宮藤大尉があんなキザなことをおっしやるなんて！」

優人の言葉を思い出し、憤慨するペリーヌ。以前ならば、同じことを言われたとて、多少照れ臭くなる程度でここまで取り乱したりすることはなかった。

自分は一体どうしてしまったのか、と考えているとベッドの上に置かれた手鏡が目についた。ペリーヌはそれを手に取ると、自分の顔を映してみる。彼女はまだ眼鏡を掛けていない。

「……コンタクトにしてみようかしら？」



同時刻。基地滑走路脇の草地には、木刀を手にした芳佳が真摯な表情で素振りをしてきた。隣では坂本が其を見守っている。

「せいっ！やあ！せいっ！やあ！せいっ！やあ！」

声を上げ、一心不乱に木刀を振り下ろす芳佳。そんな彼女の姿に坂本は感心する。

「ほお……今日は一段と気合いが入っているな」

体格が小柄なこともあって木刀を振る、というより振られている観のある芳佳。いつもなら坂本から「腰が入っていない！」「利き手の力が足りていない！」等とお叱りを受

ける。

しかし、今日は普段よりも力強く、声もよく出ている。飛ばし過ぎてすぐにバテるのかと心配していた坂本だが、そんな様子もない。

(何さ、お兄ちゃんつてば)

兄がペリーヌを口説いていた(ように見えた)風景を思い浮かべ、木刀を握る芳佳の手に力が込められ、素振りがさらに速くなる。

「せいっ！やあ！せいっ！やあ！」

(何やら殺気だっているな……)

芳佳の様子が気になりはしたものの、坂本は特に追求せずに指導に集中した。芳佳のかけ声と木刀が鋭く風を切る音が周囲に響いた。



さらに舞台は代わり、基地の食堂へ移る。食堂内には優人、バルクホルン、シャリーリーの三人がいた。彼らが着いているテーブルの上には優人がふかした大量のジャガイモが大皿に盛られていた。

「だ〜れも起きてこないな」

フオークにジャガイモを刺したシャーリーが不思議そうに食堂内を見舞わず。いつもは賑やかな食堂も今日は優人達三人だけ。大袈裟な表現かもしれないが、まるでお通夜のようなのである。

「まったく……どういつもこいつも弛んでいる!」

バルクホルンはそう言うのと、大口を開けてジャガイモを頬張る。規律の緩さに彼女は苛立っていた。

「芳佳は坂本と朝練、ミーナとリーネはさつき出掛けたよ。あとは何も聞いてないけど」
バルクホルンの向かい隣に座っている優人はそう説明すると、自分のフオークにジャガイモを突き刺し、口に運んだ。

「まあ、しばらくはネウロイも来ないはずだし。いいんじゃない?」

とシャーリーがお冠なバルクホルンを宥める。バルクホルンは口の中のジャガイモを飲み込むとシャーリーを睨んだ。

「樂觀的過ぎだリベリアン、備えよ常にだ」

「これだからカールスラントの堅物は」

シャーリーが呆れ顔で言うのとバルクホルンはドン、とテーブルを叩いて立ち上がる。

「貴様が緩すぎるだけだ!そもそも貴様はだな!……」

食堂へ来る前に何かあったのか、ピリピリとしているバルクホルン。シャーリーに馬

鹿にされたと思つたらしい。

「落ち着けよバルクホルン！」

このまま喧嘩になることを危惧した優人がバルクホルンとシャーリーの間に入った。

「なんだ!?!お前はまたリベリアンの味方をするのか!?!」

「いやいや、そうじゃなくて……」

「大体お前は、いつもいっつもリベリアンやリーネの胸ばかり見て!?!この前なんて、いかがわしい雑誌を集めて!」

「ちよつ……それは今関係無いだろ!」

自分に矛先を変えたバルクホルンの言葉にムツとなる優人。バルクホルンは構わず続けた。

「ある!?!お前のそういつたスケベなところが私は許せんのだ!軍人足るもの清廉潔白であるべきだ!」

「お前なあ……」

睨み合うバルクホルンと優人。二人が妹以外のことで喧嘩するのは大変珍しい。

「まあまあ、二人ともそう興奮すんなよ。同じ大尉同士なんだし、仲良く……なつ!」

「わっ!」

「へ?きやつ!」

シャーリーに背中を押され、バランスを崩した優人はバルクホルンを巻き込んで転倒してしまふ。突然のことに驚いたバルクホルンの口からは普段聞けないような可愛い悲鳴が漏れる。

「いたた……あつ……」

「ふえっ!?!」

目を開けて二人は互いの顔が目の前にあることに気が付いた。優人がバルクホルンを押し倒す形になっていて、しかも互いの吐息がかかり、鼻と鼻がくつつく距離だった。「えっ……えっ」と

女の子特有の甘い香りが優人の鼻を擦る。困惑しながらも弁解しようとするが、上手く言葉が紡げない。さらにまずいことに、優人の右腕が制服越しとはいえバルクホルンの胸を驚掴みにしていたのだ。

「な……な……な……な……な……な……」

「(づ)。(づ)めん!」

みるみる赤くなるバルクホルンの顔を見て我に返った優人はすぐさま立ち上がり、逃げるように食堂を後にした。

「顔が……優人の顔が……あんな近くに……」

バルクホルンもぼとなくして身体を起こし、赤面した状態で床にペタンと座り込ん

だ。

「青春だねえ……」

元凶であるシャーリーは二人の様子をひとしきり楽しんだ後に他人事のように眩き、次のジャガイモを口に運んだ。

◇ ◇ ◇

「まったく！シャーリーのやつ……」

廊下の壁に手を付き、呼吸を整えていた優人はシャーリーへの怒りを露にする。

不可抗力とはいえ、押し倒した上に胸を掴んでしまった。おそらくは怒り心頭であるうバルクホルン。ほとぼりが冷めるまで優人は彼女と顔を合わせることが出来なくなった。当然、朝食も否応なく中断である。

「ジャガイモまだ一つしか食ってないぞ……ん？」

優人は廊下の隅で丸まっている布の様なものを視界の端で捉える。何だ？と思つて摘み、拾い上げるとそれはウィツチ用のズボンだった。色は生成り、形はローライズ。優人はこのズボンに見覚えがあつた。

持ち主に届けようと優人が立ち上がった途端、狙い済ましたかのように本人が現れ

た。

「あっ！優人おっおっはー！」

ブンブンと手を振り、スキップをするかのような軽い足取りで近付いてくるのはエーリカ・ハルトマン。

先日の出撃で撃墜数が250に達した501部隊の誇るスーパーエースだ。

今日は彼女自身の表彰式があるというのにそんなもの知らんとはかりに盛大な遅刻をする。しかもまったく懲りた様子がない。優人は理解した、バルクホルンの機嫌が悪かった一番の理由はハルトマンだと。

「おはよう、これお前のだよな？」

「あっ！私のズボン！優人が盗んだの!？」

「違う！そこに落ちてたんだよ！」

ズボンが落ちていた場所を指差して怒鳴る優人。善かれと思って拾ったというのに泥棒扱いされては堪ったものではないだろう。

「そなの？拾ってくれてありがと！」

訝しげな表情から一転、パアツと笑顔となったハルトマンは優人からズボンを受け取る。すると優人は疑問をぶつけてきた。

「お前、まさか下履いてないんじゃない？」

「履いてるよ？ほら！」

ハルトマンは制服の裾を持ち上げて見せる。

「あ、よかった。って……それルツキーニのしろ？」

確かにハルトマンはズボンを履いていたが、それは彼女の物ではない。ルツキーニが「しましま〜！」と呼んで愛用している青のストライプのズボンだった。

「いや〜、自分のが見当たんなかったからさ」

「……盗ったのか？」

「む〜……人聞き悪いなあ。黙って借りただけだよ」

「それを盗ったって言うんだよ！」

優人の怒声が飛ぶがハルトマンはあくまでマイペースだった。

「まあまあ、細かいこと気にしない」

そう言ってハルトマンは黙って拝借した、事実上窃盗したルツキーニのズボンの両端に指を引っ掛け、優人が目の前にいることも構わずにスルツと下ろした。

「おい！何してるんだ!？」

「何……って、ズボン脱いでるんだよ？」

見てわからない？、とでも言いたそうな顔をするハルトマン。以前、半裸状態で優人のベッドに侵入したことといい、彼女には羞恥心というものがないのだろうか。

「何も廊下のど真ん中で脱ぐことないだろ！」

怒鳴る優人。彼はハルトマンが脱ぐ寸前に両手で顔を覆ったのだが、誘惑に負けて指と指の間からチラチラと見てしまっている。男とは、なんと悲しい生き物よ。

「いいじゃん減るもんじゃなし……よつと」

シャーリーが言いそうな台詞を吐きながらハルトマンは自分のズボンに着替え終えた。

「ところで、朝ご飯何？」

「カールスラントから届いたジャガイモをふかしたよ」

「うわぁー！ やったー！ おイモだ！ おイモー！」

好物のジャガイモの話聞いたハルトマンは、嬉しそうに飛び跳ねながら食堂へ向かっていく。幸せ一杯と言った表情の彼女を見送りながら、優人は溜め息を吐いた。

まだ朝のうちだというのに優人はすでに疲労困憊。起きたばかりなのに、ベッドに入りたくなってしまう。

「はあ……」

「優人おー！」

「ん？ぶっ！」

ハルトマンに大声で呼ばれ、顔を上げた優人の顔面に何かが投げつけられた。手に

取って見ると、それはハルトマンが先程まで履いていたルッキニーのしましまズボンだった。

「それルッキニーに返しといて〜!」

「いや、自分で返せよ!」

「よろしくね〜!」

優人の苦情を無視したハルトマンは、ブンブンと手を振ると再びジャガイモの待つ食堂を目指した。かと思えば何かを伝え忘れたのか、もう一度優人の方を向いた。

「私の脱ぎたてだからって、変なことに使わないでよお〜!」

「使うかあ!!」

「きゃ〜!こっわ〜い!」

ハルトマンはわざとらしく怯えると、踵を返して廊下の奥へと消えていった。ハルトマンの姿が見えなくなると、優人はルッキニーのズボンに目をやった。微かに残ったハルトマンの体温がズボンから優人の手に伝わる。

「……ハルトマンの、脱ぎたて……いやいやいや!」

優人はイカンイカンと激しく首を振り、邪な考えを頭から追い出そうとする。

「ルッキニーを探そう!」

優人はズボンをポケットに突っ込むと、ハルトマンとは逆方向へ歩を進めた。

第26話「ラッキースケベとズボン紛失事件 後編」

優人が退室した数分後。食堂には朝食を摂っていたバルクホルンとシャーリーの他、朝練をしていた芳佳と坂本及び二人に付き合っていたペリーヌ、ルッキーニ。そして、午後に表彰式が待っているハルトマンの姿があつた。

「うむ……これは、事件だな」

健気にも数分で復活していたバルクホルン。彼女は綺麗に畳まれた状態でテーブルの上に置かれている扶桑の水練着を真剣な眼差しで見ている。すぐ隣で椅子に座っているシャーリーは何やら薄く笑みを浮かべている。

テーブルを挟んだ向かい側には腰に手を当てる、仁王立ちしている坂本。恥ずかしそうに頬を染めてモジモジしている芳佳、ペリーヌ。

少し離れた席ではルッキーニとハルトマンがふかしたジャガイモを頬張っている。

「あのう、私の服を……」

芳佳が恐る恐る口を開く。テーブルに置いてある水練着は芳佳の物。今の彼女は何も履いていないらしく、服の裾を掴んで下半身を隠すように下へ伸ばしている。

「いや、これは証拠物件だ」

「えっ!?でも……」

バルクホルンに言われ、裾を掴む芳佳の手に一層力が入る。

「何も着けていないのか? なら、私のを貸してやろう」

そう言つて自身のズボンに手を掛けるバルクホルン。今履いているズボンを脱いで芳佳に貸すつもりだ。

「ええええええええ!? 待つてください!!」

「遠慮するな」

「し、し、し……しますっ!!」

普段のバルクホルンからは想像できない奇行に顔を真っ赤にして叫ぶ芳佳。しかし、バルクホルンの手は止まらず、彼女のズボンは下へと下がっていく。ハルトマンといい、何故カールスラント空軍のウィッチは人前でズボンを脱ぎたがるのだろうか。

「まあ待て、しばらくこれで我慢しろ」

坂本はそう言いながら自身の士官服を芳佳に着せてやる。扶桑ウィッチの中では長身の部類に入る坂本。彼女の服は芳佳が着るにしては丈が長いが、そのお陰で下半身を晒さずに済む。真下から覗いたりしなければ……。

「坂本さん……ありがとうございますー!」

芳佳は頭を下げ、笑顔で感謝を述べる。隣のペリーヌは水練着姿となった坂本を恍惚

とした表情で見つめ「ほへえ〜」と声を漏らした。

「何を遠慮することがあるか……変なやつだ」

バルクホルンは脱ぎかけていたズボンを元の位置に戻し手を離す。パチンとゴムの音が響く、規律に厳しい彼女はズボンのゴムもきつめらしい。

「では、捜査に入る。何故ペリーヌのズボンが無くなったかだ」

腰に手を当てながら言うバルクホルン。本日の朝、芳佳、ペリーヌ、ルツキーニは坂本の指導の元で訓練を行っていた。その後、四人は汗を流すために風呂に入った。入浴後、服を着るためペリーヌが更衣室に戻ると彼女のズボンが紛失していた、そして芳佳の水練着が更衣室に落ちていた。

「元々履いてなかったとか？」

「そんなわけありませんでしよー」

シャーリーにからかわれ、ペリーヌは気色ばむ。確かに彼女にノーズボン状態で基地を徘徊するような特殊な趣味はない。

「ということは、誰かが盗んだ可能性が高いわけだ」

バルクホルンが分析する。それに反応し、5人の話に聞き耳を立てていたルツキーニがジャガイモを口に運ぶ途中で手を止める。

「さて、そこで。クロスステルマン中尉の前に更衣室にいた人物は？」

顎に手を当てるバルクホルン。彼女に問われ、ハルトマンを除くウィッチ達の視線がルツキーニへと集まる。皆の視線を感じたルツキーニは、カタカタと小刻みに身体を震わせた。

「フランチェスカ・ルツキーニ少尉……」

自分に疑いの目を向けるバルクホルン。彼女に名を呼ばれたルツキーニはジャガイモの刺さったフォークを投げ捨て、逃走する。

「うじゅっ！」

「あっ！逃げたー！」

シャーリーが声を上げ、バルクホルンと共にルツキーニを追う。二人に逃走経路を塞がれたルツキーニは背を向け、逆方向へ走り出す。その際に彼女が無断拝借したペリーヌの白いズボンが見えた。

「私のですわ！」

決定的な証拠を押さえたウィッチ達はハルトマン以外の全員でルツキーニを追い掛ける。

しばらくは食堂内を駆け回っていたルツキーニだが、何故か証拠物件として扱われていた芳佳の水練着を手に取り、廊下へ逃れていった。

「（めんなさ〜い！）」

「待って！ルツキーニちゃん！」

「お待ちなさい！」

「こらあ！」

「止まれえ！」

「罪を重ねるのかあ！」

ルツキーニを追い続ける芳佳達。食堂内には周囲の騒動にも素知らぬ顔でジャガイモを貪り続けるハルトマンだけが残った。

「あつ……美味しい〜！」



「いないな……」

事件のことなど知る由もない優人はルツキーニを探し、基地内を闊歩していた。

ルツキーニがいるとすれば彼女が基地のあちこちに作っている隠れ家。既に優人は自分が認知している限りの場所を見て回ったが、ルツキーニ 発見には至っていない。

もしかしたら、優人が与り知らない場所に新しい隠れ家が作られているのかも知れない。

「仕方ない、シャーリーに相談してみ……ん？」

優人は廊下の奥から走ってくる人影に気付く、ルツキーニだ。ようやく見つけた尋ね人が自分の方へ走ってきたので、優人は手を振る。

「ルツキーニ！ 丁度良かった、お前に——」

「うじゅあああああ！」

「……何だ？」

優人は自分の脇を猛スピードで通り過ぎていくルツキーニを目で追う。ルツキーニの様子から何か悪戯をして、誰かに追い掛けられているというのは想像出来る。しかし、彼女が扶桑の水練着を抱えながら走っている理由は皆目検討が付かない。

首を傾げていると、複数の足音と息遣いが聞こえてきた。振り返ると芳佳、坂本、ペリーヌ、バルクホルン、シャーリーが目前まで迫ってきていた。5人は優人の前まで来ると足を止めた。

「お兄ちゃん、ルツキーニちゃんは?！」

「こつちに来なかつたか？」

芳佳と坂本が重ねて質問する。

「向こうへ行つたけど……って、何だその格好は?！」

優人はブカブカの士官服を着た芳佳と水練着姿で堂々としている坂本を交互に見る。

芳佳は優人の質問に答える代わりに頬を染めて俯いた。

「芳佳？」

「優人！それより今はルッキーニだ！」

バルクホルンが宮藤兄妹の間に割って入った。押し倒しの件は既に頭から消えてい
るらしい。

「なんか悪戯したのか？」

「いや、それがさ——」

「詳しい話は後だリベリアン！」

説明しようとしまシャリーを、バルクホルンが遮る。

「早く追跡を再開しなければ、ルッキーニをロストしてしまうかもしれん！」

「確かにな……」

バルクホルンに同意する坂本。大袈裟なようだが、強ちバカにも出来ない。ルッキーニは食う寝る遊ぶのアニマルライフで培われた身体能力と動物的な勘、さらに自由奔放な性格も合間って神出鬼没などころがある。一度見失ってしまった後の搜索は困難を極めるだろう。

「よし！すぐに追うぞ！優人、お前も来い！」

「わ、わかった！」

坂本の指示を受ける優人。ルツキーニが何をしたのかわからないが、ここは協力しようと思った。

ルツキーニを追って基地本部から中庭に出た一堂は手分けした。シャーリーとバルクホルンは入口を出て左方向へ、芳佳とペリーヌは右方向に駆けていく。

「坂本、俺たちは——」

優人が坂本の方に目をやると、彼女はまるで猫でも捜しているかのように基地本部入口付近の茂みの陰を覗き込んでいた。

「おい！ルツキーニ〜！」

「猫じゃあるまいし、そんなところにいるわけっ！……いるかも……」

茂みの中で猫のように丸くなっているルツキーニを脳裏に思い浮かべた優人は中庭の茂みを片っ端から探すことにした。

芳佳とペリーヌは中庭内の林に向かっていた。並んで走っていた二人だが、途中からペリーヌのペースが段々と落ちていく。

「あつ……んう……す、擦れるう」

ペリーヌの頬に赤みが差し、口からは熱い吐息と甘い声が漏れ始める。

普段、彼女は愛用している白いズボンの上にストッキングを重ね履きしている。今はズボンをルツキーニに盗られているのでストッキングを直に履いている。そのせいで

彼女の身体の名称し難い部分にストッキングが擦れてしまう。

「もう……もうダメ……」

限界を向かえたペリーヌは足をふらつかせ、前のめりに倒れる。

「待てえ〜！」

一人で追跡を続けていた芳佳はルツキーニを木の上に追い詰めていた。この木もルツキーニの隠れ家のひとつのようで、一番太く頑丈そうな枝にはロマーニャ国旗がデザインされたお気に入りの毛布が掛けられている。

「ルツキーニちゃん！返して！私の服！」

「へへ〜ん〜ん〜ここまでおいでえ〜」

木の枝に寝転がるルツキーニは余裕の笑みを浮かべて手招きする。その挑発的な態度にムツとなった芳佳は誘われるがまま、木によじ登る。

お世辞にも運動が得意とは言えない芳佳。ブカブカの制服を着ていることもあって、木登りは大いに手こずった。

「よいしょ……ええ？」

芳佳が辿り着く頃にはルツキーニの姿が消え、枝には毛布だけが残っていた。ふと下に目をやると、いつの間にか下に降りていたルツキーニが基地本部へ引き返して行くのが見えた。

「ま、待って！」

「芳佳、ルツキーニは見つかった……た……か」

芳佳と合流した優人は言葉を失う。上述の通り、芳佳は水練着を着ていない。坂本から借りた士官用の制服をセーラー服の上に重ね着することで下半身を隠している。

丈の長い制服のお陰で前後左右からお尻や名称し難い部分を見られる心配はない。しかし、ズボンを履いていない以上、真下からの視線に対する防御は無きに等しい。

つまり、木の上にいる芳佳を下から見上げている優人にはすべて見えてしまっているのだ。小振りなお尻はもちろん、名称を記すことが難しいデリケートな部分も。

「あ……あ……きやあああああ！」

見られていることに気付き、涙目の茹でダコとなった芳佳は悲鳴を上げながら両手で尻を隠す。木から手を離れたことで支えを失った身体は地面へ向かって落ちていく。

「ぶっ！」

ほぼ真下で呆然としていた優人の顔に程よい弾力のお尻が直撃する。強打による衝撃は顔を介して脳に伝わり、優人はそのまま気絶した。



木から降りた後もバルクホルンとシャーリーに追われていたルッキーニだが、なんとか追跡を振り切つてエイラの部屋へ逃げ込んだ。

「ん？」

気配と物音で侵入者に気付いたエイラが、ベッドから身体を起こす。北国育ちでブリタニアの夏の暑さがつらいエイラはシャーリーと同様に下着を寝間着にしていた。シャーリーのとは違つてデザインはさほど凝つておらず、サイズは大きめで今にもずり落ちそうだ。

ベッドには夜間哨戒後に寝惚けて部屋に入ってきたサーニヤも眠っている。こちらも白く清楚な印象の下着姿だ。夜間哨戒で疲れているからか、ルッキーニの来訪に気付くことなく眠っている。

エイラと目が合ったルッキーニは唇の前に人差し指を立てて、「しく」とジェスチャーで静かにするよう伝える。

「なんダヨ？」

訝しげな視線を向けるエイラを尻目にルッキーニは窓辺まで移動するとカーテンと窓を開ける。薄暗かつた室内に日光と海風が入ってくる。

窓から顔を出して下方を覗き込むと一階の窓枠が見えた。ルッキーニは窓から一階へ降りるつもりだ。しかし、各階の天井が高めに造られているため、すぐ下の階でも距

離がある。掴まれるような場所もない。強いて言えば、すぐ隣にある縦樋くらいだ。
「そでだー！」

何かを閃いたルツキーニはエイラ達の方へ近付く。ベッドの上には二人の制服やズボンが綺麗に畳まれている。

ルツキーニはエイラがズボンの上に重ね履きする白ストッキングに手を伸ばすと、何の迷いもなく持ち去ろうとする。

「あつ、コラー・ワタシのー！」

エイラの制止を振り切つてルツキーニはエイラのズボンを縦樋に通し、壁に足をつけてラペリングの要領で降りて行つた。芳佳の水練着は口にくわえている。

ルツキーニを追い掛けるため、エイラは急いで制服に着替える。その際、自身の白ストッキングの代用としてサーニヤの黒ストッキングを借りた。

「ゴメンー！」

純真無垢な寝顔をしたサーニヤに謝罪し、エイラは廊下に出た。

借り物のストッキングでは落ちかないのか。モジモジと太股を擦り合わせ、恥じらうように頬を染める。

程無くして、ルツキーニを探しているシャーリーとバルクホルンがやって来た。

「ルツキーニは？」

と訊ねるシャーリー。

「し、下に逃げタ」

「追うぞ！」

「ああ！」

バルクホルンに頷くシャーリー。エイラもルツキーニからストッキングを取り返すため、二人に続く。

「とう！ジャジャーン！」

窓から一階に飛び込んだルツキーニは、効果音を発して着地する。芳佳の水練着を右手に持って、エイラのストッキングをマフラーのように首に巻いている姿は無駄に格好良く見える。

「見つけたぞ！」

「逃がしませんわよ！泥棒猫！」

「いたぞ！」

「カエセ！コラー！」

右から坂本とペリーヌ。左からバルクホルン、エイラ、シャーリーの三人が迫ってくる。

「泥棒じゃないよー！」

左右から挟撃されたルツキーニは唯一の逃走経路である前方へ逃げていく。再び中庭に出るのかと思いきや、左側の機械室に駆け込んだ。ルツキーニが中庭へ逃走した思ったウィッチ達はそのまま真つ直ぐ走っていった。

「ふう〜……」

扉越しに足音が通り過ぎるのを確認したルツキーニは息を漏らす。

「(ハハ)はっ……にやっ!」

暗くて何も見えない室内。床に落ちていた空き瓶で転びそうになったルツキーニは何かに掴まろうと反射的に手を伸ばす。その手はたまたま近くにあった警報レバーを下ろしてしまった。基地内にネウロイ出現の警報が鳴り響く。



数分後。警報を聞いてハンガーまでやって来たウィッチ達はストライカーを装着していた。その中には気を失った優人と、彼を背負っている芳佳の姿もあった。芳佳の力と体格では優人を抱えきれないため、魔法力を使用している。

「優人……どうしたんだ?」

「えっ……えーっと、あはは……」

シャーリーに問われた芳佳は乾いた笑い声を上げて誤魔化する。制服から飛び出した豆芝の尻尾が忙しなく動いていた。

「それより、ネウロイが出たんですか？」

「しばらくは来ないはずなんだけどなあ……」

おかしいな、と頭を掻くシャーリー。

「ネウロイの分析は後だ！ ユニットを履け！」

「は、はいっ！」

「は〜い」

「……………」

一足先にストライカーユニットを装着していたバルクホルンが三人に向かって怒鳴る。芳佳は強張った声で、シャーリーは気の抜けた声で返事をする。当然、気を失った優人は何も答えられない。

「やっぱり……何かいつもと違うナ」

使い魔である黒狐の耳と尻尾を生やし、愛機B f 1 0 9 G—2の魔導エンジンを始動するエイラ。やはり違和感があるのか、制服の裾を捲って拝借した黒ストッキングに覆われた下半身を見直していた。

「さ、坂本さん！ 私、履いてません！」

「私もちよつと透け透けで……」

もじもじと足を閉じる芳佳とペリーヌ。ノーズボン状態で空を飛ぶ、なんてことをすれば魔女ではなく痴女になってしまう。

殊に、優人にバツチリと見られてしまった芳佳の中では、これ以上誰かに見られたくない羞恥心とネウロイを倒さなければという使命感が衝突していた。

「はっはっはっはっ！問題ない！任務だ任務！空では誰も見ていない！」

と嘯く坂本に二人は「ええええ！！」と驚愕の声を上げる。同じウィッチでも二人と坂本では感性が大分異なるようだ。

「私も行きます」

やや遅れてサーニヤもハンガーに入ってくる。彼女は未だ夢の中にいるかのような茫洋とした表情をしている。

「うわっ!? さ、サーニヤ?」

「あれ? エイラ、それ私のズボン?」

ギクツとした表情のエイラに訊くサーニヤ。プロペラによつて巻き起こされた風がフワツとベルトを捲り、サーニヤの真っ白なヒモズボンが一瞬だけ姿を見せた。

「……………ん……………」

意識が戻らず出撃不可な優人はキャットウオークに降ろされた。魔され、耳を疑うよ

うな寝言を呟いていた。

「尻が、大量の尻が……落ちて……くる」

◇ ◇ ◇

その頃。機械室から出てきたルツキーニは壁に背を預け、しょんぼりとしていた。

「怒られるよね、きつと。スイッチ入れたのバレたら……」

「何のスイッチ入れたって？」

「うじゅっ!？」

突然の声にビクツと身体を跳ね上がらせるルツキーニ。小刻みに震えながら声のした方へ視線を移すと、ハルトマンが壁越しにニヤリと笑っているのが見えた。

◇ ◇ ◇

場面は再びハンガーへ。

「脱げって！ヒドイじゃないカ！」

「だって、私のだから」

自分のズボンを取り返そうと、サーニヤは無言を言わずにぐいぐい引つ張る。まだ寝惚けているのか、まずはストライカーを腕がせなければならぬことに気付かない。

「坂本さん！スースーします！」

ノーズボンのままストライカーを履いた芳佳が、足元を見つめながら言う。

「我慢だ芳佳！」

「はっ、はい！」

「何をやっているんだこいつら……」

コメディ映画のワンシーンと化しているハンガーの光景を目にして、バルクホルンは眉を寄せる。怒りを通り越して呆れ果てた彼女は仲間から目を背けた。

「出撃だ！全機続け！」

「りようか〜い」

坂本に代わって号令を掛けたバルクホルンに、シャーリーのみがのんびりとした口調で返事をする。

「みんな待つて！」

ハンガーの出口から声がする。そこには声の主であるミーナとリーネの二人が立っていた。

「ミーナ中佐！」

はなかったのだろうか。

「さすがだなあ！ミーナ中佐！」

「いいえ、今回のお手柄は私ではありません」

坂本から称賛に首を振ったミーナの視線がハルトマンへ移る。

「この混乱の中、素晴らしい冷静さでした。ハルトマン中尉」

「どうもどうも」

「ハルトマン、やったな！お前こそカールスラント軍人の誇りだ！」

「見事だ中尉！」

「すごい！」

「お見事ですわ！」

「やるなあ〜！」

満更でもなさそうなハルトマンを一同が口々に褒め称える。

「さあ！今から表彰を始めましょう！つと……その前に芳佳さんとペリーヌさんは待機室で着替えてらっしゃい」

とミーナ。スットキングタイプのスボンを履けばいいエイラやサーニヤとは違い、芳佳とペリーヌは一度衣服を脱がなくてはならない。

「は〜い！分かりましたあ！」

「少し失礼させて頂きますわ」

ズボンが手元に戻ってきた芳佳とペリーヌ。満足気な表情で待機室へ向かっていく。
「さあて……」

ミーナは二人を見送ると、ルツキーニに向き直った。

「騒動を起こしたルツキーニ少尉には罰が必要ね」

「ひっ!」

蛇に睨まれた蛙ならぬ灰色狼に睨まれた仔猫。ルツキーニの顔色が健康的な褐色から蒼白なものに変わった。見るに見かねたシャーリーが助け船を出す。

「まあまあ、ここはルツキーニの言い分も聞いてやってくれないか?」

「シャーリー……」

「ルツキーニ、何であんなことしたんだ?」

「うん、実はね……」

ルツキーニは語り始めた。午前中に芳佳、坂本、ペリーヌと一緒に風呂に入ったルツキーニは三人よりも早く上がり、脱衣場で服を着ようとした。

しかし、入浴前に脱いでカゴに入れたはずのズボンが無くなっていた。困ったルツキーニはペリーヌのズボンを黙って借りてしまったらしい。早くに名乗り出ればよかったが、ペリーヌやバルクホルンが事件と大事にしてしまい、怖くて言い出せなかつ

た……とのこと。

「事情はわかかったが、勝手に借りるのはよくないぞ」

「うじゅじゅ……ごめんなさい」

坂本からのお叱りを受け、ルツキーニは萎縮する。

「じゃあ、ルツキーニのズボンを盗んだやつがいるってことか」

「まだ事件は終わっていないということか……」

とエイラとバルクホルン。そこへようやく目を覚ました優人がやって来た。気を失っている間に悪夢でも見たのか、冷や汗を掻いている。

「あれ？問題は解決したのか？」

「優人、もう大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ。迷惑掛けたな……」

坂本の質問にそう返すと優人は汗を拭くためにハンカチを取り出した。その拍子に同じポケットに入っていたルツキーニのズボンも一緒に出てきて、滑走路に落ちる。

『あああああ〜っ！』

ウィッチ一同が本日三度目の驚愕の声を上げる。声が今まで一番大きく、基地全体に響き渡った。

「な、何だ？」

突然声を上げた仲間達に優人はたじろいだ。

「優人、まさかお前だったとは……」

失望した、といった風な顔をする坂本。続いてバルクホルンも滑走路に落ちたルツキーニのズボンを指差して怒鳴る。

「優人？ お前がズボンの窃盗犯だったのか!？」

「えっ？ 窃盗？ あっ、いやいやいや！ これはな——」

足下に落ちたズボンに気付いた優人は事情を説明しようとするが、すぐさまシャーリーに遮られた。

「優人お前！ 隠し持ってたグラビア本じゃ我慢出来なかつたのか!？」

「いや、だから——」

「オマエ、シスコンかと思ったらロリコンだったのか……」

エイラは蔑みの目を優人に向ける。

「ちよっ、話を——」

「優人さんがそんな人だったなんて……」

「芳佳ちゃんに何て説明すればいいの?」

リーネは涙ぐみ、両手で顔を覆う。サーニヤは瞳を潤わせ、顔を地面へ伏せた。

「話を聞いてくれて！ これはな、今朝食堂から出た時にハルトマンから渡されて——」

「嘘つけえ！何でハルトマンがルッキーニのズボンをお前に渡す!?」
「そくだよお！あたしの……しましまあ〜！」

怒り心頭なバルクホルンの隣で泣き出してしまふルッキーニ。状況的に不利な優人は完全に犯人扱いされてしまっている。

「だからそれは！ハルトマン！お前も説明しろ！」

「ふあ〜……ごめん。眠いから私は部屋に戻って寝るよ」

「あつ！おい！」

梯子を外されそうになった優人は慌ててハルトマンを追い掛けようとするが、その進路はバルクホルンとシャーリーによって塞がれた。

「何処へ行くつもりだ？」

「話はまだ終わってないだろ？」

優人をギリギリと睨む二人。普段、おおらかなシャーリーも可愛がっているルッキーニがことだからか表情からは怒りが醸し出されている。

「宮藤優人大尉」

背後からミーナの声が聞こえる。それも普段彼女が発している歌手を思わせるような澄んだ声ではなく、低く凄みのある恐ろしげなものだった。

ゆつくりと振り返ると、ドス黒い炎のようなオーラを纏ったミーナが優人に向かって

微笑んでいた。

「この隊における唯一の司法執行官として質問します。あなたは軍法会議の開催を望みますか？」

「……勘弁してくれ！」

理不尽な処罰を受けたくない優人は逃亡を図った。

「優人！待たんか！」

坂本の指揮の下、今度は優人を標的とする追い駆けつこが始まった。ルッキーニとは違ってアツサリと捕まった優人はハルトマンが目覚ますまでの数時間、阿鼻叫喚の尋問に晒されることとなった。

第27話 「宮藤兄妹のお出掛け 前編」

優人がズボン窃盗の冤罪をかけられた日の夜。彼は妹、芳佳の部屋を訪れていた。

既に寝間着に着替えた芳佳は、ベッドの上に腰を降ろしていた。兄が訪ねてきたというのに顔も身体も優人のいる収納側ではなく、反対の窓側に向けられていた。心なしか、頬が膨らんでいるようにも見える。

「あのく……芳佳さん？まだ怒ってらっしやいます？」

「……………」

優人の質問に芳佳は無言で答える。沈黙は肯定の証、芳佳は間違いなく怒っている。夕食時からもうずっとこんな感じで、兄をシカトし続けている。

「せめて話を聞いてくれないかな？」

「エツチな人とお話なんてしません」

「うっ……」

優人の哀願を一蹴しながらも口は開いた。しかし、不機嫌なのは変わらない。妹の言葉は矢となり、昼間の騒動ですり減らされた兄の心に鋭く突き刺さる。

「昼間のあれは不可抗力でー」

「この前は胸、今日はお尻と……」

芳佳がぼそりと呟く。声が怒りの込もったものから羞恥を含んだものに変わっていた。

「お兄ちゃんの変態!」

「うぐつ!」

「痴漢!変質者!覗き魔あ!」

「うがつ!」

次々に放たれる罵倒という名の矢が精神的に疲れきっている優人の心にダメージを与え続ける。シスコン兄貴な優人として妹からの罵倒は弩級戦艦の艦砲や大型ネウロイの高出力ビームより遥かに強力。魔力シールドも無意味だ。

「もうお嫁に行けない……」

芳佳は体勢を正座から体育座りに変えて膝に押し当てる。顔を確認することは出来ないが、耳がピンク色に染まっているあたり、顔面は真っ赤になるだろう。

「ど、どうすれば機嫌直してくれるのかな?」

「何したって許してあげない!もうお兄ちゃんなんて知らない!」

「そんな……」

絶交宣言とも取れる芳佳の発言に優人は絶望する。土下座したい心地になりつつも

兄の威厳や上官としての沽券がそれを阻んでいる。尤も、両方ともすでに微妙なのだが……。

(……こうなれば！)

切り札を使うことにした優人の目がキラリと光る。

「芳佳！」

「……何？」

「デートしよう！」

「えっ？」

予想外の申し出にキョトンと呆気にとられたような顔となった芳佳は怒りや羞恥心も忘れ、優人のいる方へ振り返る。

「この前のお出かけは雨で中止になっちゃったからさ。近いうちにロンドンまで遊びにいかないか？」

「あつ……うん、行きたい！」

洋の東西を問わず、女の子のご機嫌取りの定番といえはショッピング。女心が分からない鈍感男子の優人だが、彼も伊達に長い時間ウィッチ達と寝食を共にしてきたわけではない。

(よしー！)

先程とは打って変わってご機嫌となった芳佳を見て、優人は心の中でガッツポーズをする。何気にデートを一番喜んでいるのは優人だったりする。



二日後――

501基地から北西へ100キロほど行った場所にあるブリタニアの首都ロンドン。ブリタニアの政治と経済の中心地で世界でも有数の大都市。連合軍の総司令部もここに置かれている。

日が傾いていない時間帯で、人通りが多い。会社員、主婦、学生等と様々な人々が大通りを活歩いている。その中に私服姿の宮藤兄妹が紛れていた。

「うわあ〜!」

ロンドンの街並みを前に目を輝かせているのは妹の芳佳。

彼女が着ているのは扶桑から持って来た衣服の中で唯一の外出着で、お気に入りでもある水色のワンピース。ベルトを翻し、きよろきよろと忙しなく周囲を見回している。初めて目にする異国の街、彼女にはいろいろと物珍しいようだ。

「(こらこら！一人で行くなよ！)」

好奇心の赴くまま街中を掛ける芳佳を優人が追う。お上りさんな妹とは違い、何度か来たことのある兄の方は落ち着いている。

優人の服装は下が紺色のズボン、上に白いTシャツと黒色のノースリーブのジャケットを羽織っている。清楚な印象を受ける芳佳の服装に対し、優人の私服からはシックで大人びた雰囲気を感じる。

「お兄ちゃん、あれ！両側に塔があつて面白い橋！」

とタワーブリッジを指差す芳佳。この橋はテムズ川に架かる二つの橋の一つで、建設当時は世界最大の跳ね上げ橋として有名だった。

タワーブリッジとは別にロンドンブリッジもあるのだが、タワーブリッジの独特なデザインと景観した作りからロンドンブリッジと混同している観光客も多い。

「タワーブリッジだな。ロンドンの観光名所の一つだよ」

「でも工事中だね」

芳佳は目を凝らして見る。タワーブリッジの車道部分が破損しており、歩行者専用道も封鎖中で渡れそうにない。

「街の人が話してたけど、ネウロイの攻撃が車道に当たったらしいな」

「えっ!? 私達、どこかで失敗したっけ？」

自分達がネウロイを取り逃がしてしまったのか、と慌てる芳佳。

「501基地方面を通らないネウロイもいるんだよ。まあ、そうなくてもロンドンには第11統合戦闘飛行隊がいるから心配ないさ」

「第……11？」

「第11統合戦闘飛行隊、通称『グロリアスウィッチーズ』欧州最大のウィッチ部隊だよ。俺達以外にも複数のウィッチ隊が基地を構えてブリタニアを守ってるんだ」

「へえ、ブリタニアにいるウィッチ隊って私達だけじゃなかったんだ？」

「そりゃそうだよ」

苦笑する優人。いかにエース級の航空歩兵で編成された501と言っても、たったの12名ではブリタニアへ侵攻するネウロイをドーバー海峡上で迎撃するのが関の山。一部隊でブリタニア全土を防衛するには数的にも距離的にも不可能。

大陸反攻作戦の拠点たるブリタニア全域を守るにはブリタニア空軍の指揮下にあるグロリアスウィッチーズや当部隊に入隊している多数の亡命ウィッチの存在が不可欠なのだ。

「グロリアスウィッチーズかあ、どんな人達がいるんだろ？」

芳佳はまだ見ぬウィッチ達に胸をときめかせる。

「ねえお兄ちゃん！ロンドンの基地に行つてウィッチの人達に会えないかな？」

「それは難しいな」

まるで友達の家を訪ねるか、観光地に行くかのように平然と提案する芳佳に優人は難色を示す。

意図的に自由な空気を作っている統合戦闘航空団に席を置いているため忘れがちだが、軍事基地というものは遊びに行くような気分に入れる場所ではない。

「ていうか今日は俺とデートするんだろ？余所に浮気しないでくれる？」

と軽口を叩く優人に芳佳はムツとする。

「もう！わかつてるよ！お兄ちゃんも女の人の胸とかお尻とかジロジロ見ないでよね！」

「お前なあ……」

自分のことを完全に変態扱いしている妹に優人は肩を竦める。デートに誘って機嫌を取ることに成功はしたものの、覗きの件は未だに尾を引いているようだ。

「お兄ちゃんはすぐデレデレするんだから……」

「はいはい、わかったよ。で、どこいく？ロンドンで行ってみたいところとかある？」

と訊く優人は少々うんざりしているようにも見える。

「お兄ちゃんにお任せするよ」

「責任重大だな」

顎に手を当て、うーんと唸る優人。ただ一緒に遊んでやれば良かった子どもの頃とは違う。初めてのロンドンを楽しんでもらえるよう、優人は妹をエスコートしなければならぬ。

しかし、相手が妹とないえデートに誘っておきながらノープランとは、これいかに。「おっ。」

何気無しに目をやった古書店の壁に映画のポスターが張られていた。

二人組の男女が互いの背中に手を回して見つめ合っている姿を描いたそれは年頃の女の子が好きそうな恋愛系の映画だった。

「映画とかどうか？あれなんて面白そうじゃない？」

「うくん……ブリタニアの映画はよく知らないからなあ」

「そっか」

提案が却下され、優人は落ち込む。特に恋愛映画に興味があるわけではないのだが、劇中のキスシーン等を利用すれば芳佳のウブな反応が見れるのではないかと、と邪な期待を抱いていた。

「なら、動物園とかは？」

「あつ！行ってみたい」

動物園と聞いて、芳佳の表情がなんとも嬉しそうなものに変わる。小さな物だが地元

にもある映画館より、遠出をしなければ行けない動物園の方が彼女には魅力的らしい。「えーつと、ロンドン動物園行きのバス乗り場は……あっちだな」

制服の裾を引っ張られる感触がした。なんだと思つて振り返ると、恥ずかしそうに顔を俯かせている芳佳がいた。

「どうした？」

「えつと……人がいっぱいではぐれそうだから。手、繋いでもいいかな？」

芳佳は軽く頬を染め、もじもじしながら訊ねる。無論、「はぐれそうだから」と言うのは優人に甘える為の口実である。

「もちろん、ほら」

「あつ……ありがとう」

優人が差し出した手を芳佳は笑顔で取る。しっかりと握り返しながらも必要以上に力を込めない優人の優しい手つきが芳佳の胸を幸せでいっぱいにした。

「ところで、その鞆には何が入ってるんだ？」

優人は芳佳が肩に掛けていている鞆に目を向けて訊ねる。この布製の鞆は芳佳が扶桑にいた頃から日用に使用していた物だ。

「えへへ、内緒」

そう言つてニツコリと笑う芳佳に優人は首を傾げた。



ロンドンの中心部たるシティ・オブ・ロンドンの駅にちよūd列車が到着していた。扉が開かれ、同時に大勢客が下車する。紳士服を着た気難しそうな中年男性、ドレス姿の穏やかそうな婦人、子ども連れの若い夫婦等とこちらも街中と同様に様々なタイプの人間が認められる。乗客の殆どが下車したところで、カールスラント軍の制服を着た二人組がホームに出てきた。

一人は長身と小麦色の肌が印象的な女性。その整った顔立ちは美男子にも見えるが、制服の上からでも起伏がわかるスタイルの良さが女性であることを物語っている。

対照的にもう一人は雪のように美しい銀色の髪と白い肌が特徴的な小柄な少女。その外見から子供のようにも見えるが、どこかしっかりとした大人の雰囲気を感じられた。

「さて先生、どこかに行こうか？」

「……………」

長身の女性“ヴァルトルト・クルピンスキー中尉”は微笑みながら、少女の方へ目をやると声楽家のような美しい声で話掛ける。

「……………」

少女は何も答えずにスタスタとホームを進んでいく。 “先生” と言うのは彼女の、 “エディータ・ロスマン” のあだ名だ。

「先生？」

「……………」

「せ〜んせい？」

「……………」

「先生ってば〜」

ひたすら無視するロスマン。ここまで徹底して無視されれば気を悪くしそうなものだが、クルピンスキーは笑みを崩さない。

「ねえ、先生ってば〜！」

「あらクルピンスキー、いたのね」

一際大きい声を出してようやくロスマンはクルピンスキーに振り向いた。しかし、その言動はやや素っ気ない。

「さつきからいたよ。て言うか一緒の列車に乗ってたじゃないか」

「残念ね。ホームの人混みを利用すればあなたを撒けると思ったのに」

本気で残念そうな顔をするロスマン。あからさまに嫌悪感を示す彼女にクルピンス

キーは肩を竦めた。

「つれないなあ……列車の中じゃ、駅に到着するギリギリまでボクの肩に寄り掛かって眠ってたのに……」

「伯爵様、記憶を捏造しないで頂けるかしら？」

ロスマンはゴミを見るような目でクルピンスキーを見る。ちなみに伯爵というのはクルピンスキーの通称で、ペリーヌのように爵位を持った貴族の家の生まれというわけではない。

「なら現実に見せてみせようか？そのベンチに座って、エディータがボクに身体を寄せて……」

クルピンスキーは手を伸ばしてロスマンの肩を抱こうとするが、ロスマンは露骨に嫌そうな顔をして間合いを取る。

「あなたに身体を預けて眠るくらいなら、硬くて冷たいコンクリートの上で夜を越す方がましね」

ロスマンは冷たく言い放つが、やはりめげなかったクルピンスキーは笑みを浮かべた。

「毒舌で容赦のないエディータも魅力的だよ」

「……今すぐ黙るか、死ぬかなさい」

ロスマンは一言そう言うと、歩調を速めた。困ったような顔をしたクルピンスキーは「待つてよ」と慌てて追い掛けた。やがて二人の姿は人々に溶け込んで見えなくなつた。



その頃、ロンドン動物園行きバス乗り場へ向かっていたはずの宮藤兄妹はウエディングドレスショップ前にて足止めを食つていた。

「わあ〜！すごい綺麗〜！」

シヨールウインドウ越しに見える純白のウエディングドレスに感動して、芳佳は目をキラキラと輝かせる。

「お〜い、動物園に行くんじゃないのか？」

と優人が訊くが、ウエディングドレスを見入っている芳佳の耳には届いていない。恍惚とした表情から察するにウエディングドレスを着た自分の姿でも思い浮かべているのだろうか。

年頃の乙女そのものである今の芳佳の姿はとても微笑ましく、初めは呆れていた優人も横から眺めているうちに自然と笑顔になる。

「やっぱり、ウエディングドレスを着た洋風の結婚式に憧れるのか？」

「う〜ん……」

今度は聞こえたらしい芳佳。優人の質問に芳佳しだけ考えてから答える。

「ウエディングドレスも素敵だけど、やっぱり白無垢も良いなあって……」

和風の神前式か洋風の教会式か、どちらにするかを決めあぐねている様子の芳佳。

二人の両親、宮藤一郎と清佳は神前式だった。幼い日、母の花嫁姿を写真で見たことがある芳佳は白無垢に強い憧れを抱いている。しかし成長するにつれ、ウエディングドレスにも興味を持つようになっていった。

「しかし、芳佳が結婚のことまで考えていたなんてなあ」

「それって私は結婚出来ないってこと？」

意外そうな顔をする優人の言葉に反応して、芳佳はムツとした表情となる。

「いやいや、そういう意味じゃ！ちよつと意外だっただけで……」

慌てて弁解する優人の顔を冷や汗が伝う。扶桑にいた頃の芳佳は世情に疎く、将来は単純に祖母や母が営む診療所を継ぐ以外の選択肢は全く考えていなかった。

さすがに眼中にないわけではないだろうが、結婚や異性との交際することにまで考えが至っていないものと優人は思っていた。

「でも、芳佳もいつかはお嫁に行くんだよな。寂しくなるなあ」

優人はフフ、と寂し気な笑みを零す。まだまだ子どもだと思っていたが、芳佳も恋に恋するお年頃。ネウロイさえ現れなければ扶桑で彼氏の一人も作っていただろう。

そんな考えが頭を過り、喜びと寂しさの入り交じった複雑な気持ち心が心に滲む。まるで我が子の成長を見守る親のような心境に至っている自分に対し、「老けているのか？」と優人は自嘲する。

「……ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「お兄ちゃんは結婚したいって思う？」

急に真剣な眼差しを向ける芳佳に優人は無難な答えを返した。

「まあ、いつかはしたいと思ってるよ。軍務で世界を飛び回っていけば、俺みたいなのでも好きな人を見つけれらるだろうし」

「……………」

芳佳は何も言わずに顔を俯かせる。優人はまだ20歳にも満たない若造だが、航空歩兵としては大ベテランで年齢的にも精神的にも芳佳よりずっと大人だ。本人は自覚していないが容姿も性格も悪くはない。

いつか相応の相手と結ばれ、子も設けて、幸せな家庭を築いていくことだろう。その時は妹として、家族として大好きな兄と兄の伴侶となる女性の幸せを願い、笑顔で祝福

しなくてはならない。頭では理解しているし、納得もしている。しかし、芳佳にはそれがどうしようもなく寂しく、物悲しく思えた。

自立心が人並みに強い優人のことだ。結婚すれば、横須賀の実家を出て結婚相手と二人暮らしをするだろう。兄が遠く行ってしまふのではないか。自分のことを忘れてしまふのではないか。そんな不安が冷たく硬い鎖となって、芳佳の胸を締め付ける。

「芳佳？」

ふと声を掛けられた。芳佳が顔を上げると黙り込んでしまった自分を心配している兄の顔が見えた。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「……ううん、大丈夫」

芳佳は首を振るが、優人にはとても大丈夫には見えなかった。

「お兄ちゃんの結婚を想像して寂しくなった？」

悪戯っぽく笑う優人。落ち込んでいようと茶化されたりすれば芳佳はブンブンとなつて怒り、それがきっかけで元気を取り戻したりする。妹のことを理解している優人流の励まし方と言えよう。

しかし、芳佳の反応は優人の予想とは違う汐らしいものだった。

「うん、寂しい」

「芳佳……」

ストレートに自分の気持ちを吐き出す芳佳。優人の表情からも笑顔が消える。

「お兄ちゃんと……ずっと一緒にいたいな」

「……………」

「ごめんね、我が儘言つて。もう大丈夫だから」

と芳佳は笑顔を向けるが、その瞳はいつもよりも濡れていた。健気な妹をいじらしく思った兄は妹の肩に手を回して自分の方へ寄せる。二人の身体がピッタリとくつつき、まるで肩を寄せ合う恋人のようだ。

「お、お兄ちゃん？」

突然のことに芳佳は頬を染めて困惑する。斜め上に見える優人の顔を目で追う。

「ずっと一緒にいられる方法ならあるぞ？」

「えっ？」

「お前が俺と結婚すれば良いんだ」

「えっ……ええええええええええっ!？」

優人の口から飛び出た爆弾発言。芳佳は驚きのあまり悲鳴にも似た盛大な叫び声を上げる。聞き付けた周りの人々は何事だ、と一齐に振り向いた。

「お、お、お兄ちゃん……わ、私達は……兄妹だよ？」

「ん？だから？」

「だから……っつて」

「俺と離れるのは嫌なんだろう？」

「嫌だけど、でも……」

消え入るような声で呟く芳佳の表情はみるみるうちに真っ赤に染まる。バクバクと暴れる心臓を落ち着かせようと握った両手を胸に当てる。

1分近く経った後、何かを決意した芳佳はまだ赤みの残る顔を上げて優人に問う。

「お兄ちゃん！」

「ん〜？」

「こ、子どもは何人欲しい……ですか？」

芳佳は声の上擦り、口調も敬語になっている。優人は妹の言葉に一瞬目を点にした後に吹き出してしまった。

「ぷっ！……」

「お兄ちゃん？」

「くく……あつはははははは！」

腹を抱えて愉快そうに笑う優人を見て、自分がかかわれていたことに気付いた芳佳はカツとなる。

「お兄ちゃんっ!!」

「ごめんごめん、芳佳が可愛いもんだからついからかいたくなっちゃってさ」

「もう!こっちは真剣に考えたのに!」

芳佳はそう言つてポカポカと可愛らしいパンチを繰り出す。優人は「痛い痛い」と言いながらも笑顔だった。

「おや?どこのカップルかと思つたら」

「ん?」

「え?」

じゃれあつてるところに声を掛けられ、二人が振り向くと優人よりも背の高いボーイッシュな顔立ちの女性と背丈が芳佳とほぼ同じくらいの少女が立っていた。

「やあ!優人君!」

「お久しぶりね、宮藤大尉」

「クルピンスキー!?!ロスマン曹長!?!」

優人は目を疑つた。こんなところで顔を合わせると思わなかったが、目の前にいるのはミーナやバルクホルンと同じくカールスラント空軍のウィッチで東部方面総司令部直属の航空ウィッチ部隊たる第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』の一員でもあるエディータ・ロスマン曹長とヴァルトルト・クルピンスキー中尉だった。

「そんなお化けを見たような顔しないでよ」

と肩を竦めるクルピンスキー。対する優人は驚きを隠せずにいる。

(この人達、誰なんだろう？ お兄ちゃんの知り合い)

芳佳はと言うと、急に現れた二人組が誰か分からず頭にいくつもクエスチョンマークを浮かべていた。

「な、何で二人がロンドンに!？」

「東部の戦局が少しだけ安定したから、先生とお忍び旅こー」

「ロンドンまで食材探しに来たのよ。一人で来るつもりだったのに、ニセ伯爵が勝手に着いてきたのよ」

クルピンスキーの言葉を遮り、ロスマンが嫌味混じりの説明をする。クルピンスキーはロスマンの物言いに「ひどいや」と苦笑すると芳佳に目を向ける。

「しかし、こんな可愛い恋人がいて、しかもウエディングドレスの下見にロンドンまで来るなんて。優人君も隅におけないな」

「こっつーこいびつ!!」

クルピンスキーが口にした『恋人』という言葉に、芳佳はボンツと音と出そうな勢いで赤面する。

「恋人? こいつは俺の妹だよ」

優人はクルピンスキーの発言を訂正しつつ、茹で蛸となつてゐる芳佳の頭をポンポンと撫でた。

「あら？妹さんだったの？」

意外そうな顔をするロスマン。彼女も芳佳を優人の恋人だと思つていたようだ。

「そう言えばフラウからの手紙に書いてあつたつけな」

思い出したように言うクルピンスキー。フラウとはハルトマンの愛称だ。彼女やバルクホルンの原隊であるJG52において「早く大きくなれよ」という愛情を込めてそう呼ばれたそう。

「ちよつと待て、あいつ変なこと書いてないだらうな？」

優人が追及する。ハルトマンからの手紙と聞いて、彼は妙な胸騒ぎを覚えた。

「フラウの手紙は教えてくれたよ。色々とね……」

ニヤニヤと何かをほのめかしたクルピンスキーは再び芳佳に視線を向ける。宝塚の男役のようにも見えるクルピンスキーに顔をジロジロと見られ、芳佳は困惑する。

「なつ……なん、ですか？」

「君可愛いねえ♪よかつたら一緒にお茶でー」

「おい！芳佳に色目使うな！」

クルピンスキーの毒牙から守ろうと、優人は芳佳を守るようにして抱き締めた。

「ふえ……お、お兄ちゃん」

人前で抱き締められた芳佳は耳まで真っ赤にする。

「おやおや、妹の恋路を邪魔するなんて悪いお兄ちゃんだな……いったああああ!」

クルピンスキーが突然悲鳴を上げる。ロスマンが彼女の足を力一杯踏みつけていたのだ。

「痛いよ、先生え〜」

クルピンスキーは涙目で訴えるが、ロスマンはそれを無視して宮藤兄妹へ歩み寄った。

「不愉快な思いをさせてごめんなさい。お詫びに食事をご馳走させて貰えないかしら？」

「食事?」

と優人がロスマンの言葉を繰り返す。腕時計を確認すると、針は既に正午を指していた。

「ええ、近くに良いお店を見つけたの。値段は少し高めだけど、代金は伯爵様が持つから心配いらないわ」

「先生!?!」

「せっかく申し出だ、喜んで受けるよ。超高級フルコースを頼んでも構わないか?」

「ちよっ！優人君!？」

「ええ、もちろんよ」

ロスマンはニッコリといい笑顔を浮かべて頷くと、クルピンスキーにも無慈悲な笑顔を向ける。

「良いわよね、伯爵様」

「……うっ、はい」

ロスマンの問いにクルピンスキーは酷く黄昏れた声で答える。許可を出してから訊くのは地味に酷い。

「それじゃあ、行きましようか？お店はこっちよ」

と言ってロスマンは宮藤兄妹を店まで案内する。そのすぐ後ろをクルピンスキーがぐったりと項垂れながら着いていく。

「ほら、俺達も行くぞ」

「……………」

「芳佳？どうかしたか？」

「……ううん、何でもないよ。お料理楽しみだね!」

「ロスマンの見立ては確かだからな」

そう言って二人も歩き始める。優人は気付かなかったが、芳佳は右手で鞆を強く握り

締めていた。

第28話 「宮藤兄妹のお出掛け 中編」

ロスマンとクルピンスキーに案内された店は高級とまではいかないものの、中々にセンスが良い。開戦前に母国からブリタニアへ移り住んだロマーニヤ人が始めた店で、オススメメニューの店長こだわりのパスタ料理ポロネーゼは創業時から人気があった。

店内の調度品はどれも手作り風の木製で、至るところに飾られた観葉植物が彩りを添えていた。カウンターの脇に設置された蓄音機から再生される曲は店の落ち着いた雰囲気とマッチしている。

ロスマンお勧めの店を優人はすぐに気に入ったが、扶桑の大衆食堂しか経験のない芳佳はそわそわと忙しくしていた。

「へえ、じゃあ妹ちゃんは扶桑で坂本少佐にスカウトされたんだ？」

「はい、いきなり『一緒にネウロイと戦おう』なんて言われてびっくりしちゃいました」
クルピンスキーの問いに対して、芳佳は苦笑交じりに答える。

元々、芳佳は初対面の相手とも物怖じせず話せる明るい性格。4人が注文したポロネーゼが運ばれてくる頃にはクルピンスキーやロスマンともすぐに打ち解けていた。

「やっぱり、可愛い子はウィッチとしても優秀なのかな？」

「可愛いだなんて……えへへ」

クルピンスキーの言葉に芳佳は照れ臭そうに頭を掻いた。

ウィッチには容姿に優れた女性が多いとされるが、無論可愛さと優秀さに直接的な関係はない。

「お兄様から見て、妹さんの実力はいかがなもののかしら？」

フオークにパスタを巻きながらロスマンが訊ねる。坂本と同じく優秀な教官であるロスマン。訓練校にも通わず、いきなり統合戦闘航空団へ招聘されたほどの逸材に興味を抱いたようだ。

「まあ、魔法力は俺よりも上だし。潜在能力は高い……かな？あははは」

乾いた声で笑う優人の脳裏には失敗ばかり重ねている訓練中の芳佳の姿が浮かび上がっていた。

相変わらず芳佳は本番に強いが、訓練ではパツとしない。この前も滑走路上に配置された阻塞気球を避けて飛ぶ訓練をしていたのだが、途中でコントロールを失った芳佳は気球へ片っ端から突っ込んで全基割ってしまった。カーデイントンの訓練センターからの借りものであったため、割った分は当然501が弁償することとなった。

ただでさえ予算を削減されて厳しくなりつつある501の台所事情をさらに圧迫してしまった。訓練に失敗した芳佳が落ち込むのはもちろん、兄である優人も肩身が狭い

思いをしていた。

食事をすることで嫌な記憶を忘れようと考え、優人はボロネーゼを口に運んだ。欧州での生活が長かったため、パスタをフォークに巻いて食べる姿が堂に入っている。

「美味しい、さすがは店長のこだわりメニューだ」

ボロネーゼを口にすると、優人は満足気な表情で感想を述べる。

「今度こそ……あれ？」

一方、芳佳の方は難儀していた。お茶会の時とは違い、扶桑の蕎麦やうどんのように音を立てて啜るのはマナー違反だと優人から事前に教わった彼女はどうか西洋の食べ方をマスターしようかと奮闘しているが、食事開始から失敗の連続。巻いたそばからスルツと抜けてしまい、傍から見ると遊んでいるようにしか見えない。

「難しいか？」

「うん……」

やや落ち込み気味の芳佳。このままだとせつかくの料理が冷めてしまう。いじらしく思った優人はフォークを芳佳の借り、代わりにパスタを巻いてやると芳佳の鼻先へ突き出した。

「ほら、あーんしな」

「えっ……」

優人の行為に芳佳の頬がほんのりと赤くなる。

「じ、自分で食べるから」

「このペースじゃ食べ終える前に陽が暮れるぞ？はい、あーん」

澄ました顔でフォークを向けてくる優人の厚意に芳佳は戸惑ったものの、すぐに観念してパスタを食べた。

「美味いだろ？」

「味なんてわからないよ……」

芳佳は口をモグモグと動かしながら目を伏せる。頬の赤みが増し、すぐに顔全体が熟れたトマトのように変化していった。

「顔が赤いな？熱でもあるのか？」

「お兄ちゃんの……にぶちん……」

「ん？あつ……頬っぺたにソースが付いてるぞ」

「え？……ど、どっち？右？左？」

「右だよ右！そっちは左……ああ、もうしょうがないな」

焦れつつも思った優人は顔を近づけると芳佳の頬に付いたソースをペロツとひと舐めする。

「よし、取れた」

「へ?」

何をされたのかすぐには分からなかった芳佳だが、数秒中に優人が自身の頬に付いたソースを舐め取ったことを理解する。既に真っ赤に染まっている芳佳の顔からはシユーとお湯が沸騰するような音と共に湯気が出てきた。

向かいでその光景を見ていたクルピンスキーは口笛を吹き「見せつけてくれるねえ」と言葉を投げ掛け、食べさせるところまでは微笑ましく見ていたロスマンも妹の頬に舌を這わせた兄に対し、絶句している。

「な、な、な……なんで舐めたの!」

兄の奇行に動揺した芳佳の怒鳴り声が店内に響き渡り、客や店員の視線が優人達にいるテーブルへ集中する。

「え? いやだから、お前の頬つぺたにソース付いてたから」

「それでなんで舐めるの!」

「いや、なんとなくだけど……」

「なんとなくで舐めないで!!」

バアンとテーブルを叩いて立ち上がる芳佳。そこで自分が外食していることを思い出し、周りを見回した。店内のほぼすべての人間が彼女に注目している。

「……頭冷やしてきます」

周りの目に気付いた芳佳は逃げるかのように速足でトイレへ向かって行った。

あちこちからはひそひそと話し声が聞こえてくる。クルピンスキーはともかく、ロスマンは居心地が悪そうだった。

「……何がいけなかったんだ？」

「あなた、本当に分かってないの？」

ロスマンが顔を手で抑え、何とも言えない表情を浮かべる。相変わらずクエスチョンマークを浮かべている優人はとりあえずお冷やを飲んで喉を潤わせる。

各国から様々な人員が集まる統合戦闘航空団。招聘されたウィッチ達は皆相応の実力を備えている。反面、様々な性格、価値観、お国柄のウィッチが集まるため、良く言えば個性派集団、悪く言えば変人の巣窟となっている。

その中で優人は比較的常識人であるが、あくまで「比較的」。シスコンの件もさることながら、彼も立派な変人である。

「優人君って意外と大胆だよねえ、最近はフラウと寝たみたいだし」

「ぶふうっ!？」

クルピンスキーの急降下爆撃のような発言に優人はお冷やを吹き出した。驚いたせいで水が変なところに入ったのか、大きく咳き込み涙目となる。

「ゲホゲホ……な、なんだと？」

「昼間つからベッドに連れ込んだんでしょ？僕だってまだなのに、何だか妬けちやうなあ」

クルピンスキーは悪戯っぽく笑う。対する優人は声を荒げて抗議する。

「冤罪だ！ハルトマンが俺の勝手にベッドに入ってきたんだよ！てか何でそんな……つて手紙か!」

ベッドの件をクルピンスキーに伝える人間がいるとすればハルトマンとハルトマンが書いた手紙だろう。ミーナやバルクホルンもクルピンスキーとは旧知だが、二人はこんな話を他所に漏らしたりはしない。

何故軍内で厳しい検閲を受けるはずの手紙に男女が共寝したことを書けるのか、という疑問が優人の頭を過つたが、めんどくさがりなくせに変なところで狡猾なハルトマンのこと。上手く暗号化したのだろう。

「フラウからの手紙によると、最近はおトルーデと仲が良いみたいだね？第一印象は最悪だったのに……」

「検閲官は仕事をしていないのか？ていうかあれはお前のせいだろうが!」

いい加減な仕事をしているらしい検閲官を恨みつつ、優人は忌々しそうな目でクルピンスキーを睨み返した。

優人がバルクホルンらカールスラントウィッチと出会ったのは大戦初期のこと。当

時少尉だった優人や中尉だった坂本をはじめとする扶桑海軍航空歩兵の多くはリバウに配属されていた。

リバウは欧州に置ける遣欧艦隊の拠点だった港。基地に駐留していた23及び24戦隊のウィッチ達を中心とした扶桑海軍航空隊は『リバウ航空隊』と呼ばれ、当時の新鋭機だった零式で長距離を移動。北はスオムス、東はオラーシヤ、南はオストマルク、西はカールスラントと各前線で八面六臂の活躍を見せていた。

ある日、カールスラント国境におけるネウロイとの戦闘後、補給に立ち寄ったカールスラント空軍基地で501や502のカールスラント組と出会った。カールスラント空軍においてウィザードの存在が大変珍しかったため、基地に入るなり優人の周りにはウィッチの人だかりができた。その際、クルピンスキーの悪ふざけによって「扶桑の色魔ウィザードが基地のウィッチを手当たり次第口説いている」と誤解したバルクホルンの拳が優人の顔面にめり込むこととなった。

「それにしてももう3回もトウルルーデに殴られているんだよね？もしかして優人君ってDM？」

「はっ。」

優人の額に青筋が浮かび上がる。普段温厚な人間のマジギレは恐ろしい、クルピンスキーはすぐさま謝罪する。

「ごめんごめん！謝るから許してよ。ね？」

「本当にそう思っているのか？」

優人は訝しげにクルピンスキーを見る。

「心から悪ふざけをして申し訳ないとー」

「思っていないと思うわよ？」

ロスマンが優人に加担する。

「だろうな」

優人もロスマンに同意する。ヴァルトルート・クルピンスキーという女の辞書に反省や学習という言葉は載っていない。

実際、ロスマンから度々説教や制裁を受けているにも関わらず、懲りずに新人ウィツチを口説き続けている。

「つと、そんなことより聞きたいことがあるんだけど？」

「何？僕の性感帯なら太腿の内側だよ？」

自分を先回りし、笑顔でセクハラ発言をするクルピンスキーに優人もニツコリと笑顔を作って答える。

「わかった、今度そこを扶桑刀でエグってやるよ」

「わぁーお、想像しただけで痛い」

「そんなことより聞きたいことって何かしら？」

痛みを想像して顔を歪めるクルピンスキーを他所に、ロスマンが脇道に逸れた話題を元に戻そうとする。

「501に来るはずのストライカーユニットの予備部品が届かないんだが、何か知らないか？」

優人がそう訊ねると、ロスマンとクルピンスキーは気まずそうに視線を合わせる。二人のその仕草で優人の中の疑問が確信に変わり、深く溜め息を吐いた。

「やっぱりラル少佐か……」

「ええ、多分……」

優人の言葉にロスマンは申し訳なきような顔をして頷いた。

カールスラント空軍少佐グンドユラ・ラル。オラーシャ西部を担当するクルピンスキーやロスマン等ベテランウィッチを多数擁する第502統合戦闘航空団の司令を務めるウィッチで、自身も250機以上の撃墜スコアを誇る優秀なウルトラエースウィッチ。502の司令に就任する前は多数のエースを排出したカールスラント空軍第52戦闘航空団にて中隊長を務めていた。この部隊はロスマンやクルピンスキー、バルクホルン、ハルトマンの原隊でもある。

豪放磊落な人物で「判断は部下に任せ、責任は自分が取る」というスタンスで隊をま

とめる姉御肌な頼もしい人物のだが、手癖がかなり悪い。欲しい人材や物資は他隊のものであろうと構わず、あの手この手で掠め取ろうとする。

実際、それぞれ503と501に配属されるはずだったオラーシャ軍のアレクサンドラ・イワーノヴナ・ポクルイーシキン大尉や優人と同じく遣欧艦隊24戦隊を原隊とする下原定子少尉がグンドユラの裏工作によって502に着任している。ミーナはもちろん、第503統合戦闘航空団司令のプロニスラヴァ・サフォーノフ中佐、カールスラント空軍の第5戦闘航空団、スオムス陸軍のラガス少将等々、グンドユラを目の敵にしている者は多い。

しかし、カールスラント陸軍のマンシユタイン元帥やスオムス軍最高司令官のマンネルヘイム元帥と繋がりがあるため言うほど問題にはなっていない。直属の上官であるトレヴァー・マロニー空軍大将と不仲を通り越して対立関係にある501からすれば、その点は大変羨ましく思っている。

「ああ、そうそう！優人君に渡す物があったんだ！」

予備部品の件から話を逸らそうとクルピンスキーは別の話題を振り、制服のポケットから1枚の白い封筒を取り出した。

「何だこれは？」

優人はクルピンスキーから受け取った封筒を見ながら訊ねる。封筒の色は白く、赤い

ハート型のシールで封がしてある。

「僕からの愛が精一杯詰まったラブレターだよ！」

そう言つてクルピンスキーは右手で指鉄砲を作り、ふざけて優人の心臓に撃ち抜く動作をしてみせる。しかし、優人から返つてきたのは「へえ」と素っ気ないものだった。

冗談を言つたクルピンスキーに対し、優人だけでなく、隣に座っているロスマンまでもが冷たい目を向ける。

「……というのは冗談でーラル隊長からだよ！」

二人の目に耐えられなかったクルピンスキーは慌てて訂正する。

封筒に視線を戻した優人はシールを丁寧に剥がし、中身を取り出してみる。

「やっぱり……」

中から出てきたのは優人が予想した通りの物だった。

「もし優人君に会つたら渡すように言われててね」

クルピンスキーの言葉に優人は頭を抑えた。中身は502への異動嘆願書、それとは別に『君が欲しい byグンドユラ・ラル』と書かれた1枚のメモ用紙が入っていた。嘆願書の存在とグンドユラの人柄に関する知識がなければ勘違いしてしまいそんな内容だ。

「まったく、あの人は……」

ウンザリだと言わんばかりの表情をする優人。彼の脳裏にはある苦い記憶が蘇っていた。



それは8ヶ月程前の1943年12月のことだった。スオムス国の首都ヘルシンキにおいて統合戦闘航空団司令による合同会議が開催されることとなった。

506まで創設が決定している統合戦闘航空団のうち、既に結成、実戦投入されている501、502の司令及び503の副司令が業務の合間を縫って部下と共にヘルシンキに赴いていた。

関係書類の荷物持ちという命を受けた優人もミーナに同行してヘルシンキに来ていた。

「えーつと……会議室はこっちだったな」

会議が行われる予定のスオムス軍施設内廊下に優人の姿があつた。会議が始まる前に用を足しておこうとトイレに行つていた優人は会議室へ戻る途中で道に迷っていた。

「あれ？こつちじゃなかったか？」

「どうかしたのか？」

背後から声を掛けられ、優人が振り返るとオレンジがかかった淡い茶髪をボブカットにしている長身の女性が立っていた。

カールスラント空軍の制服と黒いコルセットを身に纏っているその女性はクールビューティという言葉がよく似合い、ミーナとはまた違った大人っぽさがある。

「これはラル少佐！お久しぶりです！」

優人は右手を上げて敬礼する。

「宮藤大尉だったか……君もヘルシンキに来ていたんだな」

声を掛けてきた女性——グンドユラ・ラルは優人に返礼しながら言う。

「ビフレスト作戦以来か……随分と背が伸びて良い男になったじゃないか」

「いえ、そんな」

優人は照れ臭そうに笑う。社交辞令の一環かもしれないが、それでも女性からお褒めの言葉を賜ったことに悪い気はしない。グンドユラほどの美人ならなおのこと。

二人が顔を合わせるのにはカールスラントからの撤退作戦であるビフレスト作戦時以来なので、約3年ぶりの再会となる。優人ら遣欧艦隊の航空歩兵を中心とするリバウ航空隊もこの作戦を支援していた。故に501のカールスラント組やグンドユラの他にもカールスラント空軍のウィッチには知り合いが多い。

「ところで、キョロキョロしていたようだが誰か探しているのか？」

グンドユラが腕を組みながら再度訊ねる。

「あく、それがですね。トイレで用を足して、会議室に戻るところなんです……」

「まさかとは思いますが……迷子か？」

「……そのまさかです」

優人は罰が悪そうに肯定する。自身を見据えるグンドユラから目を逸らすと右手の人差し指で頬を掻いた。グンドユラはフツと微笑んだ。

「まあ、完璧な人間よりは多少抜けている方がとっつきやすいだろう」

「それ褒めてるんですか？」

「もちろんだ」

とグンドユラは笑顔で首肯するが、それでも優人はちよつぱり切なさを覚えた。そんな優人を見て、何故かグンドユラは軽く舐めずりをする。

「私もこれから会議室へ向かう。着いて来るといい」

「……感謝します」

優人は覇気の無い声で礼を述べると、グンドユラの後に続いた。

扶桑にいた頃、外出時は妹の芳佳と常に手を繋ぎ、「離しちやダメだよ？迷子になるからね」と言い聞かせていた。そんな自分が18という年齢にも関わらず、しかも初見とはいえ建物内で迷子なるなど優人自身思いもしなかった。501の仲間知られれば、

当分はこのネタで弄れるだろう。

落ち込んでいるうちに会議室に着いた優人はグンドユラと共に大きめの扉をくぐり、入室する。

「あれ？」

優人は室内の風景に違和感を覚える。部屋は会議室で間違いないが、優人が戻りたがっていた会議室ではないように思えた。

統合戦闘航空団司令の合同会議が行われるのは第1会議室。この部屋はおそらくは第2ないし第3会議室なのだろう。

室内に窓はなく、明かりも点いていないため薄暗い。会議室独特の無音や沈黙という言葉が似合う会議室独特の雰囲気も合間つて、不気味な印象を受ける。

「ラル少佐、ここはー」

バタン！

優人の問い掛けを遮るかのように扉の開閉音が室内に響く。扉を閉めたのはもちろんグンドユラだ。次に彼女は扉を内側から施錠した。

「これでいい……」

グンドユラはガチャツという施錠音に満足気な声を上げる。

「あ、あの……ラル少佐？」

「ん?」

優人が恐る恐る声を掛けると、グンドユラはゆっくりと彼の方へ向き直った。

「な、何故鍵を?」

「誰にも邪魔されたくないからだ」

と笑顔で答えるグンドユラだが、彼女は飢えた獣が視界に獲物を捉えた時の目をしていて、優人は身震いした。

「君と二人つきりで話がしたくてな」

グンドユラはそう言うのと上着とシャツのボタンを外し始めた。

コルセットより上の位置に付いているボタンをすべて外し終えると、軍人には似つかわしくない凝ったデザインの下着と白く、豊かな胸が開かれたシャツから姿を現す。

「しよ、少佐!」

「どうした? 何を緊張している?」

狼狽えた様子の優人に薄ら笑みを浮かべたグンドユラは一步一步ゆっくり近付いてくる。対する優人も同じ歩速で後退る。

やがて優人が壁際まで追い詰められると、すかさずグンドユラは飛び掛かるように一瞬で間合いを詰めた。優人は冷たく硬い壁と制服越しに伝わるグンドユラの温かく柔らかな身体に挟まれてしまう。

「ちよつと!? 一体何のつもりですか!？」

優人はグンドユラの肩を掴み、サンドイツチ状態から逃れようとするが、すぐに両手首を掴まれ、壁に押し付けられてしまう。

「落ち着け、別を取って食おうって言うんじゃないさ。君にお願いがあつてな、この第2会議室に連れ込んだのはその為だ」

優人の左頬に顔を寄せて囁くグンドユラ。やはりここは第1会議室ではなかったようだ。

「お、お願い……ですか? それはどのような?」

優人は恐る恐る訊ねる。押し付けられる豊満ボディ、シミ一つ無い白い肌、女性特有の甘い香り、吸い込まれそうな水色の瞳に見据えられ、優人の思考は麻痺してしまい、逃走という選択肢が頭から消えつつあった。

そのことを見越したグンドユラは一步後退し、優人を一時的に解放する。

「簡単なことだ。この書類にサインをしてくれればいい」

グンドユラは一枚の書類を取り出して優人に見せる。それは502の異動嘆願書だった。これにサインするということは優人が自分の意思で501から502へ転属することを意味する。

書類偽造や連合軍人事部への賄賂等の狡猾な手法でウィッチを中心とした人材とス

トライカーユニット等の物質を手に入れようとする強欲女——グンドユラ・ラル。

少し前に書類を偽造して『魔眼』が使える坂本を掠め取ろうとしていたが、今回はウィザードたる優人を手に入れるため、彼に対して色仕掛けを用いている。ご丁寧に普段着ないような勝負下着まで身に付けている。

「知つての通り、我々502が担当するオラーシヤは欧州屈指の激戦区。特に冬は厳しい寒さの中で戦わなくてはならない」

グンドユラの表情が急に険しくなり、東部戦線の実情を語り始めた。

「502のウィッチ達が欧州の戦いを経験したベテラン揃いと言つても所詮は年相応のか弱い乙女。守ってくれる騎士（ナイト）のような存在が必要なんだ。宮藤大尉、君のようなウィザードがな」

「なら、ブリタニアにいる俺よりも東部戦線に展開している部隊から引き抜きば——」

「それは私も考えた……カールスラントの第5戦闘航空団にも一人いるんだが、ロスマンの件で警戒されてしまつてな」

グンドユラは肩を竦める。ロスマンを502へ引き抜く際、カールスラント空軍第5戦闘航空団の面々が「グンドユラが基地へ近付けば発砲する」と脅しをかけた話はブリタニアまで届いている。

故にポクルーシキン大尉がグンドユラの代行として基地を訪れた。嘘か真か、この

時ロスマンは金庫に隠されそうになったそうなの。

「それに今の欧州には君以上のウィザードはいないだろうしな」

「いやいやいや！俺はそれほどの者じゃありませんよ！少佐の見込み違いです！」

激しく頭を振る優人。現在欧州で戦っているウィザードは10人にも満たない。なのでウィザード内でトップになること自体はさほど難しくない。

しかし、優人には大ベテランに相応しい実力と経験があるのも事実だ。

「そんなに謙遜することはないだろう」

グンドユラは再度身体を密着させる。意図的に押し付けられた胸が下着越しに当たり、ひしやげる。

「君は扶桑海軍変からの大ベテラン、坂本少佐の右腕と称されるほどの腕利き、紳士的でウィツチウケも良い。私はそんな君が……」

妖艶な表情を浮かべたグンドユラは優人の左耳に唇を近付け、

「欲・し・い」

と甘く囁いた。熱い吐息が耳にかかり、優人はビクツと身体を震わせる。さらにグンドユラはスリスリと身体をすり寄せ、優人を誘惑する。

「も、申し訳ありませんが……ラル少佐のお誘いには乗れません！」

理性を総動員して申し出を断る優人だが、グンドユラはその程度では引き下がらな

かった。

「私の背中の傷のことは知っているな？」

「え？……は、はい」

突然話題を変えられ、優人は戸惑いつつも頷いた。グンドユラが未だに耳元で話しているため、くすぐったくて仕方ない。

「寒くなつてくると痛むんだよ。就寝時はコルセットをしていないからゆっくり眠ることも出来ず、辛いんだ」

「それはお気の毒ですが……」

「君は診療所の息子らしいな？502に転属して傷を看てはくれないか？」

「御言葉ですが、俺に出来るのは応急処置ぐらいで……」

「治せと言わない」

グンドユラは一呼吸置いてから更なる誘惑を始めた。

「毎晩共に寝て、私の身体を暖めてくれればいい」

「はああっ!!」

とんでもない申し出に優人は素つ頓狂な声を上げる。対するグンドユラは余裕な笑みを絶やささない。

「な、何馬鹿なことを!?!悪い冗談は止めてください!!」

「私は至って真剣だ。この頃、寝不足で肌もボロボロになってしまった」

グンドユラはそう言うが、優人には艶々とした物凄く健康的な肌にはか見えな。寝不足な割には目元に隈も見られない。

「まあ、共寝に付き合わせるのだけではこちらとしても申し訳ない。私の頬へのキスと多少のボディタッチくらいは認めよう」

「いい加減にしてください!」

露骨過ぎる誘惑をしてくる痴女——いや、魔女に優人は思わず声を張り上げた。

「と、とにかく!501の仲間を裏切るような真似は出来ません!」

「…そうか」

優人がきつぱりと断ると、それまで笑みを浮かべていたグンドユラの表情が曇る。

「こんな手は使いたくなかったが……やむを得んな」

「……え?」

グンドユラの言ったことの意味がよく理解出来なかった優人は聞き返そうとするが、グンドユラはそれよりも先に動いた。優人の両手首を掴み、下着に包まれた自身の胸へ押し当てる。

「ちよ、ちよつ!ちよつとおおおおおお!?!」

あまりのことに優人は今日一番の盛大な叫び声を上げる。故意ではないとは言え、優

人は今グンドユラの女性的な部分を思いつきり掴むという世の男達が羨む状況に陥っている。

手の平からは下着の生地、指から柔肌の手触りと温もりを感じ、これ以上ないような幸福感と物凄く悪いことしているような罪悪感が心に流れ込む。早く手を離さなければと思いつながらグンドユラが逃がさないとばかりに手首をガツシリ掴んでいるために叶わない。

優人がグンドユラに「手を離して下さい！」と言おうとしたその時、部屋の奥からパシャパシャというシャッター音とフラッシュの光が起きた。

「撮れたか？」

グンドユラが優人から離れて振り返ると、コの字テーブルの影からセーターとストラップを着用したブルネットの女性が姿を現した。服装と雰囲気から優人は彼女が軍人でないとすぐに理解する。

「バッチリです！」

女性は右手の親指をグツと立て、右目でウインクをする。快活かつ茶目つ気のありそうな声。優人は彼女からはどこかシャーリーと似た雰囲気を感じた。

優人の視線に気付いた女性はニッコリ笑って自己紹介をする。

「私はデビー・シーモア。リベリオンのグラフィ誌と契約しているカメラマンです！」

「な、何で一般人がここに？」

「私が潜り込ませた」

デビーと名乗った女性の代わりにグンドユラが優人の質問に答える。彼女は既にシャツや上着のボタンを留め直し、いつもの凛々しい姿に戻っていた。

「彼女に頼みがあつてな」

「頼みつて……まさか!？」

グンドユラの意味有り気な言葉に優人はハツとなり、二人の思惑に気付いた。

「宮藤大尉がラル少佐を襲っているところ、しっかりとカメラに収めさせて頂きました
！」

デビーは左手に持ったカメラを掲げ、優人に屈託のない笑顔を向ける。自分の状況を理解した優人の顔から血の気が引いていく。

「この写真をバラ卷かれたくなかつたら、うちに来て貰おうか？」

（は、凶られた!……）

502への異動嘆願書を片手でヒラヒラと掲げ、黒い笑みを浮かべるグンドユラを見て、優人は彼女の恐ろしさを思い知った。



「はあ……」

場面は現在、ロンドンのレストランへ戻る。ヘルシンキの出来事を回想し終えてすぐ肩に疲労感がのし掛かり、優人は頭を抑えて溜め息を吐いた。

あの後、ミーナがグンドユラの意図に勘づいて第2会議室に飛び込んで来てくれたため、どうにか501に留まることが出来た。もちろん、フィルムもカメラごと没収したので、弱みも握られずに済んでいる。

基地へ戻ってから優人はグンドユラのハニートラップにまんまと引つ掛かってしまった罰として数日分の書類仕事をミーナから押し付けられたり、若干のトラウマから基地の女性陣に対して不信感を抱いたりしていた。

「あの人もホント意地が悪いな」

再び封筒に目を向けた優人は眉をしかめる。その気がないにも関わらず、わざわざラブレター風になっている点からは立派な悪意を感じる。

世の中には自分宛に届いたラブレターが実は同級生の悪戯だったり、外見を紛らわしくしたただけのただ手紙だったりでぬか喜びをする人々もいるというのに残酷なことだ。

「そんなこと言つて、ラル隊長の身体を堪能できたことが実は嬉しかったりしてー」

ニヤニヤとおちよくなるように笑みを浮かべるクルピンスキー。優人は護身用を持つ

てきた十四年式拳銃をぶつ放してやりたい衝動に駆り立てられたが、表面上は平静を装い、ギリリとクルピンスキーを睨んだ。

「あんまり舐めたこと言うどドーバーの海に沈めるぞ?」

「へえ……優人君、僕に勝てるつもり? JG52のエースの一人であるこの僕に?」

普段、飄々としているクルピンスキーの口から挑発するような言葉が飛び出す。しかし、優人も負けてはいなかった。

「試してみるか? 俺だって、鬼より恐いリバウ航空隊の一員だぞ」

何故か火花を散らす優人とクルピンスキー。そんな二人を他所にロスマンは黙々と食事を再開していた。

「このボロネーゼは最高ね」



一方、頭を冷やしにトイレへ行った芳佳は洗面台の前に立ち、鏡の中の自分と睨めっこしていた。

「もう、お兄ちゃんつてば!」

プンプンに怒っている芳佳は優人に舐められた右頬に手を当てる。

まさか兄があんなことをすると予想だにしていなかった。指でソースを掬って舐めるのならまだ分かる。しかし、優人がやったのは芳佳の頬を舐めると言う、ある種の変態行為。

もちろん、優人があんな奇行に出たのは相手が妹の芳佳だからだろう。クルピンスキーやロスマンはもとより、501のウィッチ達が相手ならばこんなことはしない。とうかヘタレのところがある優人が異性相手にそんな大胆真似は出来ない。逆に言えば、さっきの行いは芳佳を異性として強く意識していないから出来たことと言えよう。「席に戻ったらガツンと言ってやるんだから！」

小さな決意を胸に抱き、芳佳はギョツと右拳を握り締める。トイレから出ると近くのテーブルから話が聞こえてきた。

「ねえ、あの二人って宮藤優人とヴァルトルート・クルピンスキーじゃない！」

「エディータ・ロスマンもいるわ。小さくて可愛い！」

きやあきやあと黄色い悲鳴を上げる3人の少女達。彼女らはブリタニア空軍やファラウエイランド等のブリタニア連邦加盟国の空軍の制服を着用している。おそらくは第11統合戦闘飛行隊のウィッチだろう。

優人、ロスマン、クルピンスキー。欧州で名が通っている航空歩兵を生で見興奮している。

「宮藤優人……直に見てみると結構格好良いじゃない!」

優人を見詰めていたアウストラリス空軍のウィッチが両手を頬に当て、身体をくねらせる。

「あんだ、東洋人が好みだったっけ?」

とファラウエイランド空軍のウィッチが訊ねると、ブリタニア空軍のウィッチがそれに続いた。

「思い切つて声掛けてみたら? デートくらいして貰えるかもよ?」

「それはどうかしら?」

ファラウエイランド空軍のウィッチが異を唱えた。

「宮藤優人はクルピンスキーとデキてるみたいよ?」

(……えっ?)

ファラウエイランド空軍ウィッチの言葉を聞いて、芳佳は目を見開いた。ファラウエイランドウィッチはさらに詳しく説明する。

「クルピンスキーがラブレター渡してたもの」

「そういえばあの二人、さつきからずっと見詰め合ってるわね?」

ブリタニア空軍ウィッチの話を聞いて、芳佳は優人達のいるテーブルに目を向ける。

確かに優人とクルピンスキーは見詰め合っている。実際は睨み合っているだけなの

だが、芳佳になんとなく二人が良いムードになって見えていた。
(そんな……お兄ちゃん、恋人がいるなんて一言も)

混乱する芳佳の脳裏には以前坂本から言われた言葉が浮かび上がった。

——私はお前の兄を盗ったりしないから安心しろ。

501に着任したあの日、坂本が優人の恋人なのか気になった芳佳は思い切って訊いてみた。坂本は「私」は「盗ったりしない」と言っていたが、あれは遠回しに自分とは別に優人には恋人がいるという意味だったのではないか。そして、その相手はクルピンスキーなのではないか。

その考えに至った瞬間、芳佳は足元が崩れ落ちるような不安と胸が締め付けられるような痛みに苛まれた。

(……なんなの、これ？すごく苦しくて、痛い)

ウエディングドレスシヨップの前で感じた寂しさとは違う。優人が他の女の子と話している時に感じる嫉妬とも違う。何なのかわからない感情、芳佳は苦しみをすこしでも緩和しようと胸の前で両手をギュツと握った。

「あれ？芳佳。何突っ立ってるんだ？」

トイレの入り口に立つ芳佳に気付いた優人が声を掛ける。彼と目が合った途端、より強い苦しみが波のように押し寄せてきた。

「ーっ!?」

耐えられなくなった芳佳は優人から目を逸らし、店の外へと一目散に駆け出した。

第29話 「宮藤兄妹のお出掛け 後編」

芳佳がレストランを飛び出してから数時間が経っていた。陽は傾き始め、昼夜問わず賑やかな都市の中に夕陽が幻想的な風景を作り出している。

赤とオレンジで彩られた景色は見るものを虜にし、街自体が醸し出す雰囲気は立ち入るものを魅了する。

「はあ……」

夕暮れの街中を芳佳は当てもなく、トボトボと歩いていた。その顔にはいつもの快活さはなく、愁眉の表情を浮かべていた。

ぐうううううう！

ふと腹の虫が悲鳴を上げる。昼食を中断し、宛もなく街中を歩き回っていた芳佳。少し前から空腹感に襲われていた。

何か買って食べようかとも思ったが、財布は鞆ごとレストランに置いてきてしまった。取りに戻りたいところだが、引き返せば優人と顔を合わせてしまうかもしれない。

「お兄ちゃん……」

芳佳は右手で胸をぎゅつと握り、切な気に呟いた。言い表し難い、モヤモヤとした得

体の知れない感情が未だ胸中で渦巻いている。

少し考えればわかることだった。本人が自覚しているかどうかはわからないが、妹の鼻根目無しに見ても優人は魅力的な男性なのだから、付き合っている人がいたつておかしな事じゃない。芳佳がそんな人はいないのだと、現れるとしてもまだまだ先のことだと勝手に思い込んでいただけの話。

（私……一体どうしたんだろう？）

芳佳の優人に対する愛情はあくまでも兄妹愛であり、恋愛感情を抱いているわけでない。それは芳佳自身が一番良くわかっている。しかし、優人とクルピンスキーの間に恋人の疑惑が出た瞬間、兄を失うような強い不安に駆られた。

これは兄離れの出来ない妹の子ども染みた独占欲から来るものなのか。それとも――

「そこのお嬢さん！」

ふと、しゃがまれた声が聞こえ、振り返ってみれば年季の入ったカールスラント空軍の軍服を着た老人が三人、仁王立ちしていた。

「ええと……」

戸惑う芳佳の返事を待たずにリーダー格らしい白髭の老人が重ねて訊ねる。

「お？もしかやお嬢ちゃん、扶桑の航空ウィッチではないかの？」

「えっ……分かるんですか？」

ズバリ言い当てられた芳佳は目を丸くする。

「分かる！」

と二人目の小太りの老人が力強く頷く。

「伊達に長生きはしとらん！わしら三人は人の本質を見抜くのが得意なんじゃよ！」

「カ、カ、カ、カ、カ、カールスラント空軍人の観察眼は世界一いいいいいいいい！」

小太りの老人が胸を張ると、続いて三人目の老人が奇声を上げる。彼は少しボケてしまっているようだ。

「本当はわしらもブリタニアの防衛戦に加わるべく、義勇兵としての参戦を申し出たのじゃが……」

老人達は芳佳にした最初の質問のことなど忘れ、勝手に身の上話を始めた。

「あのトレヴァー・マロニーとかいう空軍大将めが！『それには及びません』などと、慥無礼な返事を寄越しておって！わしらはまだ第一線で通用する腕前じゃ！」

白髭の老人が鼻息も荒く、憤慨する。続いて、小太りの老人も怒りを露にする。

「どうやらこの老人達は空軍に義勇兵として志願したものの、年齢を理由に断られた元カールスラント空軍人のようだ。」

「あのマロニーとか言う無能、いずれ他の将官に嵌められて失脚するぞい！全財産賭け

てもいい！」

「ブ、ブ、ブ、ブ、ブ、ブリタニア空軍大将の無能っぷりは世界一いいいいいいっ！」
またもやボケの入った老人が吠える。周囲の人々は芳佳や老人達を変な目で見据えると、なるべく離れるようにして通り過ぎていく。

「何あれ？」

「女の子をナンパか？」

「あんなじいさん達が？」

「もしかしなくても変質者？」

「警察呼ぶか？」

なんて声もチラホラと聞こえてくる。人々の視線に耐えられなくなった芳佳は脇道に逸れた話を戻そうとする。

「あ、あの……」

「おお！そうじゃった！わしらはお前さんが悩んでいるようなので声を掛けたんじやったな！」

白髭の老人が自分達が何をしようとしていたのかを思い出す。三名の老人という名の奇人達に一抹の不安を抱きながらも芳佳は成り行き上、仕方なく悩みを相談する。

「……ふむふむ、なるほど！これは人生経験豊かなわしらになんとも相応しい悩みじゃ

あないか!」

白髭の老人は最近よく見えなくなっている目を輝かせて、自画自賛する。

「お前さんの悩み、わしら三人が解決してしんぜよう!」

「あ、ありがとうございます」

芳佳はひきつり気味の表情を浮かべつつも、三人組に礼を述べて頭を下げる。

「その代わり……」

老人達の目が怪しく光ったと思えば、両手の平を芳佳に向けてかざした。

「お嬢ちゃんの良い乳をわしらに揉ませてくれえええええ〜っ!」

「へっ!?!きやつ、きやああああああ!!」

迫りくる6本の腕。芳佳は悲鳴を上げ、身を守るように両腕で身体を抱き締める。しかし、厭らしく伸ばされた老人達の腕は胸まであと数ミリというところでピタリと動きを止めた。

訳もわからず芳佳が首を傾げていると、白髭の老人がゆっくりと口を開いた。

「……無い」

目が悪くなっている気付かなかったが、芳佳の胸は老人が期待したほどのボリュームがない。真つ平というわけではないが、質量と空気抵抗が共にほぼゼロとも言えるその胸に老人達は失望を隠せないようだ。

「なんとということだ！扶桑人は胸の育ちがあまり良くない貧乳ばかりとは聞いていたが、まさかこれほどは！」

「ふ、ふ、ふ、ふ、扶桑軍ウィッチのツルペタは世界一いいいいいい！」

小太りの老人、ボケた老人が順に叫ぶ。大声で貧乳、ツルペタと好き勝手言う老人達に芳佳はムツとした。芳佳でなくとも扶桑ウィッチ達が同じことを聞けばブチギレることだろう。

「そんな、私ペタンコじゃありません！少しはその、ありますよ！それに着物は胸が小さい方が綺麗に着れるんですから！」

胸を揉まれる心配がなくなつたというのに触られなかつたら触られなかつたで悔しいのか、芳佳はムキになつて反論する。しかし、胸の大小と形の良さに価値を見出だす老人達は「つまらん」の一言だけを溜め息混じりに漏らすだけだった。

「ちよつと待て！」

失望のあまり黙り込んでいた白髭の老人の目が再びギラリと光った。

「胸がないならば……尻と腿はどうじゃ？」

そう言つて白髭の老人は芳佳の下半身に目をやった。彼の言葉に促され、他の二人も目を向ける。

ベルト越しに足や臀部を舐めるように眺める。白く、健康的で、弾力のある太腿や尻

「うっ……ごめんなさい」

怒鳴られた芳佳はビクツツと肩を震わせ、縮こまる。軽い説教の後、優人は老人達のことを訊いた。

「で……こちらのおじいさん達は？」

「ジジイとは失礼な！わしらを年寄り扱いするつもりか若造!!」

「え？あ、えーつと……失礼しました」

白髭の老人の剣幕にたじろぎつつ、優人はとりあえず謝罪する。面倒なのに捕まったなあ、と思った優人は老人達に気付かれないように小さく溜め息を吐いた。

「わしらとて第一線くらい張れるわ！なのに、トレヴァー・マロニー空軍大將はわしらが義勇兵として戦線復帰の嘆願書を出すと、『歴戦の勇士の方々は後方で士気の鼓舞に当たって頂きたい』などと断りの手紙を寄越しおって！」

「未来ある若者達が身を粉にして戦っているというのに、お陰でわしらは惰眠を貪る毎日じゃあ〜！」

小太りの老人が白髭の老人の言葉を継いだ。

「は、はあ……」

第一線級の戦力を自称する退役軍人達の言い分に、優人は何とも言えぬ表情を浮かべる。彼も今回ばかりは普段嫌悪しているマロニーの判断を強く支持する。

「あの、それで……妹が何か？」

「おお、そうじゃった！お前さんは妹の躰がなっておらん！目上の者を敬う心が足りん！」

白髭の老人がビシツと優人を指差して吼える。

「……と言いますと？」

優人の質問に答えたのは小太りの老人だった。

「わしらが触らせると言ったら、黙って尻や腿を触らせんか！ケチんぼが！」

「ふ、ふ、ふ、ふ、扶桑人のケチっぷりは世界一いいいいいいっ！」

「……今なんつった？」

老人達の言いたいことを理解した優人の口調が乱暴なものに変わる。聞いた者が身震いするような低く、冷たい声で訊き返した。対して、白髭の老人が動じることなく応じた。

「じゃから、冥土の土産にお前さんの妹の身体を——」

バキツ！ドゴツ！ベキツ！

色ボケした老人達の言葉を遮るかのように低く、鈍い殴打の音がロンドンの夕空に響いた。三人の老兵は一人の若造にそれぞれワンパンで打ちのめされ、石畳に仰向けで倒れた。

「ふう……いくぞ芳佳」

スツキリとした表情になった優人は芳佳の手を握ると老人達とは反対の方向へ歩き出した。

「う、うん」

芳佳は心配そうな顔で老人達を一瞥するも、手を引かれるままにその場から離れていった。

つい先程まで優人と顔を合わせるのが辛かった芳佳だが、兄が自分を探しに来てくれたことに内心ホッとしていた。

「お、おのれ！扶桑の若造があー！」

宮藤兄妹が立ち去って間もなく、怒りを露にした白髭の老人がプルプルと身体を震わせながらゆっくり上体を起こした。彼に続いて、他の二人も身体を起こす。

「わしらは諦めぬぞ！あのナイスな形の尻をいつか必ず……！」

「カ、カ、カ、カ、カ、カールスラント軍人の粘り強さは世界一いいいいいいっ！」

執念深い老人達は扶桑ウィザードへの復讐と扶桑ウィッチへのボディタッチを強く決意するのであった。あと力んだら腰が折れた。



その約一時間後――

芳佳を見つけたのはいいが、501基地最寄りのバス停へ向かう最終バスは既に出てしまっていた。

仕方なく、宮藤兄妹はホテルに泊まることにする。宿泊に選んだのは純洋風のいかにもホテルといった外観の建物。ロンドン市内のホテルの中では宿泊料金が比較的安い、それが決め手だ。

チェックインを済ませた優人は501基地へ連絡するためにフロントの電話を借りていた。

『もしもし』

優人の電話はすぐにミーナへ取り次がれた。受話器から疲労を孕んだ声が聞こえる。おそらくはデスクワークの最中だったのだろう。

「あ、ミーナ。俺だけだ」

『私の名前を呼ぶあなたはどこのだなたかしら？』

受話器から聞こえてくる抑揚の無い声。優人の表情が僅かに引きつる。

「俺だよ、優人だ」

『電話では相手の姿が見ない、故に声を少し変えるだけで色々な人物に成り済みますこと

ができます。あなたが妹とロンドンへ遊びに行つたまま門限を過ぎても帰つてこない宮藤優人大尉だと、どうやって証明するつもりなのかしら?」

当然と言えば当然だが、相当お冠らしい。いつもなら歌手を想わせるミーナの澄んだ声に心地好ささえ感じるが、今は押し潰されんばかりの凄まじいプレッシャーが感じられる。優人は嘔吐してしまいそうだった。

「門限までに帰らなかつたことは謝るよ」

『あなた、一体どこからかけてるの?』

「ロンドンの三流ホテル……」

優人はやや不貞腐れ気味に答える。『三流』という侮辱的な発言が耳に届いたのか、フロントのボーイと支配人が優人を睨みつけていた。

『ホテル?』

「宿泊施設の……」

『ああ、そのホテルね……なんて私が言うとも思つたのかしら?』

関西出身の扶桑人を思わせるミーナの見事なノリツツコミに優人はパチパチと軽い拍手をする。

「嫌味や説教なら後でいくらでも聞くから、少しだけ俺の話聞いてくれないか?」

『いいでしょう。あなたに処分を言い渡すのはそれからでも遅くないわ』

或いは本気かも知れない無慈悲なミーナの言葉。優人は冷や汗を拭いながら掻い摘んで事情を説明した。

◇ ◇ ◇

優人が電話をしている頃、芳佳は波乱万丈な一日の疲れを落とすため客室に設置された風呂に入っていた。

小柄な芳佳が湯の張られたバスタブに曲げた膝を抱えた状態で座っているので、肩どころか顎の下までお湯に浸かっている。湯気に包まれた湿度たつぷりの空間と浴室内に反響する音が心地好い。

「はあ……」

お湯の温かさに頬が緩み、自然と息が漏れる。そのまま時間が経つのも忘れてリラックスしていると低めの声が芳佳の耳に響いた。

「妹ちゃん、入るよ?」

「ーっ!?!」

突然聞こえた声に反応して芳佳は顔を上げる。浴室の扉が開かれ、一糸纏わぬ姿のクルピンスキーが入ってきた。

「クルピンスキーさん!?なんで!」

突然の来客に驚いた芳佳は裏返った声で訊ねる。

「僕と先生もこのホテルに泊まっているんだよ。部屋に荷物置いたら急にお湯に浸かりたくなっちゃって……」

「どうして、こつちのお風呂に入るんですか!」

「君ともつとお近づきになりたくてさ。扶桑の風習に倣って裸の付き合いをしようと思っただよ」

平然と応じたクルピンスキーはシャワーのハンドルを捻る。高く設置されたシャワーヘッドから熱いお湯が降り注ぎ、クルピンスキーの褐色の肌を伝ってタイルへ流れる。衣服で隠れている部分が白くなっていなくていいところを見ると、彼女の褐色肌は日焼けしたのではなく生まれつきのようだ。

(お兄ちゃんよりも大きいな……)

小柄で凹凸の少ない芳佳とは違い、手足がスラリと伸びていて起伏もあるクルピンスキー。彼女の身長は175cmと女性でありながら優人よりも5cmほど高い。カールスラント人と扶桑人の平均身長に開きがあると言ってもクルピンスキーのように扶桑人男性よりも高身長な女性は大変珍しい。

まさにお湯も滴るいい女。モデルのようなクルピンスキーの身体と綺麗な肌は同性

である芳佳も思わず見とれてしまう。その視線は段々と下へ向かい、彼女の豊満な胸を捉える。

「おつきいな……」

「ん？何か言った？」

芳佳がボソリと呟くと、声に気付いたクルピンスキーと目が合う。芳佳は両手を顔の前で振って必死に誤魔化した。

「い、いえ！何でもありません！」

「そんなに熱い視線で見つめられると照れちゃうよ」

薄く笑みを浮かべながら濡れた髪をかき上げ、満更でもなさそうに言う。クルピンスキーはバスタブに足を伸ばし、爪先からゆっくりと湯に身体を沈めた。溢れたお湯がタイルを満たし、沸き立った湯気が天井へと立ち上る。

「ふうく……たまにはお湯に浸かるのもいいね」

肩まで浸かったクルピンスキーはえも言われぬ湯の心地良さに息を漏らす。

「いつもはシャワーだけなんですか？」

「実はシャワーも久しぶりなんだ。502基地にはサウナしかなくてね」

「うっ……あれは苦手です」

数日前にサーニャとエイラに誘われた501基地のサウナ。そこで逆上せかけてし

まったことを思い出し、芳佳は表情をひきつらせる。

「そう？うちの部隊では好評なんだけどなあ」

言いながらクルピンスキーはバスタブの壁面にもたれかかり、天井を仰いだ。その体勢によって突き出されるかのように強調され胸に芳佳は再び釘付けになる。

（リーネちゃんやシャーリーさんよりは小さいけど……クルピンスキーさんのものすごい……）

さすがは兄妹と言うべきだろうか。豊満な胸に対して興味津々なところは優人とそっくりだ。

「ところでさ……」

ふとクルピンスキーは口火を切った。彼女の胸を注視していた芳佳はハツとなって、顔を上げる。

「君は、優人く……お兄ちゃんについて悩みでもあるの？」

「え？」

スバリと言い当てられた芳佳はギクリとする。その仕草を見逃さなかったクルピンスキーはニツと悪戯つぽく笑い、重ねて訊いた。

「あるんだね？」

「ど……どうして？」

「レストランから出ていく直前の君の様子を見ればわかるよ」

と得意気なクルピンスキー。彼女は優人と目が合った芳佳がすぐさまレストランから飛び出して行ったことから原因が優人であることを察していた。おそらくはロスマンも同じだろう。見透かされている気がした芳佳は躊躇いがちに訊ねた。

「お兄ちゃんとクルピンスキーさんは……恋人同士なんですか?」

「え?」

芳佳からの予想外の質問にクルピンスキーの目が点になる。芳佳の方もクルピンスキーの予想外の反応に「あれ?」と首を傾げる。

「どうしてそう思うのかな?」

「だ、だって……お兄ちゃんにラブレターを渡したり、見つめ合ったりしてたってレストランのお客さんが……違うんですか!」

「えーつとね……」

芳佳が話したとんでもない思い違いに苦笑しつつ、クルピンスキーは説明した。ラブレターは502部隊司令グンドユラ・ラルの悪戯であること、見つめ合っていたのではなく睨み合っていたこと、優人とクルピンスキーがあくまで友人だと言うこと。

芳佳もまた、優人とクルピンスキーが恋人だと勘違いした時に寂しさとも嫉妬とも違うモヤモヤとした感情に苦しんだことを話した。

「それじゃあ、お兄ちゃんとかルピンスキーさんは……」

「恋人みたいな特別な関係じゃないよ。ただのお友達さ♪」

さらにクルピンスキーは男としては魅力的だけどね、と付け加えてウインクする。

「そ、そうですか……」

「妹ちゃんって意外とおつちよこちよいなんだね♪それも恋人の存在にシヨックを受けるほどのお兄ちゃん子ときたもんだ♪」

「うう……」

クルピンスキーの追い討ち、芳佳は恥ずかしさのあまり顔を半分ほどお湯の中に沈める。口から漏れた息が湯面をブクブクと泡立てていた。

クルピンスキーの答えにホツと安堵した芳佳だったが、心のモヤモヤが完全に晴れたわけではなかった。

何故自分はいかほど苦しんでいたのか、優人と目が合った時に波のように押し寄せてきた感情は何だったのか。

（なんだったんだろう……）

芳佳の心情を察したクルピンスキーはフツツと微笑むと、胸に抱く感情を理解できずにいる彼女の耳元へ顔を近付けた。

「もしかして、お兄ちゃんに恋してる?」

「え?.....ええええええええええ!!」

クルピンスキーに囁かれた芳佳は燃え上がりそうな勢いで顔を真っ赤にし、声を張り上げた。浴室の壁を反響した耳をつんざくような叫び声にクルピンスキーは一瞬だけ笑顔をひきつらせた。

「そんな.....だ、だって.....お兄ちゃんは、その.....」

クルピンスキーの一言で激しく動揺する芳佳。次第に声が小さくなり、後半はほとんど聞こえなくなってしまう。その姿を可愛らしく思ったクルピンスキーはクスクスと笑う。

「違うのかな?」

「ち、違いますよお!変なこと言わないで下さい!」

芳佳はムキになって否定すると、プイツとそっぽ向いた。その姿を愛らしく感じたクルピンスキーは指で芳佳の顎をクイツと持ち上げ、自分の方に向かせる。

「な、何ですか?」

クルピンスキーの顔が芳佳の眼前まで迫り、ねっとりとした熱い眼差しで見据えてくる。中性的な印象の整った顔立ちをしている彼女は非常に魅力的で、芳佳は思わず息を呑んだ。

「それならさ.....僕が食べちゃおうかな?」

「た、食べちゃ?……ひゃああつ!!」

芳佳の口から甲高い悲鳴が上がる。クルピンスキーの空いている方の手が脇腹に触れたからだ。

さらにクルピンスキーはもう片方の手も芳佳の身体に這わせる。上は鎖骨から下は足首まで、なぞるように手と指を動かす。それに合わせて、芳佳の口からはくすぐったいのを我慢するような声が漏れ聞こえてくる。

「んっ……くっ、クルピンスキーさん。やめ……」

「妹ちゃんの肌は赤ちゃんみたいにスベスベでプニプニだね……いや、芳佳ちゃんって呼ばせて貰おうかな?」

「な、なんて呼んでも……んっ……いい、ですから……手を離っ……くうっ……ふ……」
必死に声を我慢する芳佳の姿が余計にクルピンスキーの悪戯心を煽り、彼女の手つきは少しずつ大胆なもの変わっていった。

「んんっ……い……やあ……」

「芳佳ちゃんは本当に可愛いなあ……そんな反応されると虐めなくなっちゃうよ……」
「いじっ……ひゃん!」

芳佳の口から一層甲高い声が飛び出した。クルピンスキーの手が芳佳の発展途上で慎ましやかな膨らみに触れたのだ。

「さっきの『おつきい』って？僕の胸のこと？」

「ひっ……あっ……」

「どうなのかな？」

クルピンスキーはあくまで穏やかに問い質す。その間も手は休むことなく動き続ける。

「そ、です……ご、ごめつ……な、い……ひ、やっ」

「別に怒ってるわけじゃないけど……まあ、今日のところはこれくらいにしておこうかな？あんまりやり過ぎたら優人君に殺されそうだし」

芳佳とのスキンシップをたっぷり楽しみ、満足したクルピンスキーは手を離れた。

解放された芳佳はハアハアと熱い息を弾ませ、ぐったりとバスタブの端にもたれ掛かる。

クルピンスキーによる拷問(?)が行われたのはほんの1分程度だったのだろうが、芳佳には30分ほどに感じられた。

「く、クルピンスキーさん……ひどい、です……よ、お」

必死に呼吸を整えつつ、芳佳は抗議の目を向けた。クルピンスキーの気まぐれで中断されたからよかったものの、あのまま続けられていたら大事な「ナニか」を失っていたような気がして芳佳は恐々とする。

未遂で終わった老人達の件といい、今日の芳佳はやたらとセクハラの被害に合う。

「ごめんごめん、お詫びに良いこと教えてあげるから」

「良いこと……ですか？」

クルピンスキーに対する警戒を解くことが出来ない芳佳は訝し気に訊く。

「うん、君のお兄ちゃんが喜んでくれることだよ」

クルピンスキーは自信たっぷりの笑みを浮かべ、ウインクした。

◇ ◇ ◇

基地への連絡を終えた優人はゲンナリと疲れきった様子でホテルの廊下を歩いていった。疲労のあまり身体がやたらと重く感じ、歩くというよりは足を引き摺るという表現が正しいかもしれない。

「大丈夫？」

並んで歩くロスマンが心配そうに優人を見上げる。買い物に出ていた彼女は手に紙袋を持っている。

「大丈夫……じゃないな」

優人は絞り出すような声で言う。ここまで疲労困憊な優人は『絶対凍結』を使用した

時以来だ。

「ミーナ中佐に報告は出来たの？」

「出来たけど……でも」

優人は途中で言葉を止めると、カタカタと震える右手で口を塞いだ。

「怒ってた？」

「ああ、威圧感で吐くかと思った」

「相当ね……」

受話器越しにベテランウィザードが嘔吐するほどの威圧感を放つウィッチ——ミーナ・デイトリンドンデ・ヴィルケ中佐。

ロスマンはミーナに畏敬の念を抱くと共に彼女の神経を逆撫でしなくなり、苦情の電話も軽く受け流している自分達502の隊長——グンドユラ・ラル少佐のことを改めて尊敬した。

「明日基地に帰るのが怖い」

本気で怒っているミーナはネウロイよりも怖い。優人の脳裏を『脱走』や『逃亡』という単語が過る。彼を不憫に思ったロスマンは提案をする。

「よ、よかつたら今夜一緒に飲まない？ 良いお酒が手に入ったの」

そう言ったらロスマンは紙袋を開いて見せた。中には扶桑の酒である麦焼酎、芋焼酎、

米焼酎が入っていた。

芋焼酎は芋独特の香り強く、ほんのりとした芋の甘みがある。

麦焼酎は芋と比べるとややあっさりめ、麦の香ばしい香りと味わいがある。

米焼酎は米のほのかな甘みとフルーティーな香りがあつて、すつきり爽やかな味がする。

「焼酎？」

「ええ。以前から扶桑のお酒に興味があつただけけれど、オラーシヤじゃ中々手に入らなくて……かといつてペテルブルグからだと扶桑には行けないし」

ネウロイに阻まれ、502部隊が配備されているペテルブルグから扶桑へ向かうことは現時点では不可能。

赤坂が指揮する扶桑海軍遣欧艦隊が502やオラーシヤ西方に駐留する連合軍へ補給及び支援を行っているが、さすがに個人の嗜好品にまで手は回らない。

「ブリタニアにだつてないはずだろ？」

「少し前に移住した扶桑人が酒蔵を開いているのよ」

「さいですか……」

ネウロイの侵攻もなく、平和な扶桑からわざわざ最前線であるブリタニアへ移住するとは物好きがいたものだ、と優人は思った。

「それで？」

「うん？ああ、申し出なら喜んで受けるよ。美人から誘われていることだし」

「あら？口説いてるの？」

「い、いや……そういうわけじゃ」

「ふふ……冗談よ」

悪戯つぼく笑うロスマン。アダルトな雰囲気に残ったあどけない笑顔に優人は少しドキツとしてしまい、優人は目を逸らした。

「あなたって、なんとなくサーシャさんと似ているわね」

「サーシャさん？ポクルイーシキン大尉のことか？」

優人は念を押すとロスマンは首肯する。ポクルイーシキン大尉のフルネームはアレクサンドラ・I・ポクルイーシキン。サーシャとはオラーシャにおけるアレクサンドラの愛称である。

「彼女は隊長をはじめとするうちの隊員達に苦労させられているのよ。主にニセ伯爵を筆頭とした問題児三人組のせいで……」

「はは！ポクルイーシキン大尉とはいい友達になれそうだな」

同じく個性的な仲間達に振り回されることの多い優人は心からそう思った。

「ふふふ、そうね」

他愛のない雑談をしているうちに泊まっている部屋の前に到着する。

「あの、宮藤大尉」

優人がドアノブに手を触れると、狙い済ましたかのようにロスマン声を掛ける。

「ん？」

「妹さんのことだけど……何か事情があるみたいだし。あまり叱らないであげて」

「元々そんなつもりないよ」

なんだかんだ言っているも余程のことがないと妹のことを怒れない。宮藤優人はそれだけ甘くて、優しいお兄ちゃんなのだ。優人は再びドアノブを掴み、妹の待つ室内へのドアを開いた。

「あ、優人君！先生も！」

「は、伯爵!?!」

部屋でくつろいでいると思ったクルピンスキーが優人達の部屋に居たため、ロスマンは少し驚いたような声を上げた。

「何でお前なんかがいるんだよ?」

優人はムスツとした表情で問い質す。疲れを癒してくれる「お兄ちゃん!おかえりなさい」の妹ボイスを期待していたというのに部屋で待っていたのが芳佳ではなく、クルピンスキーだったことが癪に触つたらしい。

「そんな言い方しないでよ、傷つくなあ」

と肩を竦めるクルピンスキーだが、優人には彼女が傷ついているようには見えなかった。

「で、何であなたがここにいるのかしら?」

ロスマンが苛立ちを孕んだ声で詰問するとクルピンスキーは楽し気に答えた。

「ちよつとしたサプライズの用意をね♪」

クルピンスキーは二人にウインクすると、バスルームへ向かつて大声を上げた。

「妹ちゃくん!お兄ちゃんが帰ってきたよ!」

「は、は〜い」

「芳佳?」

緊張でもしているかのように何処かぎこちない芳佳の返事。優人が怪訝そうな顔をして待っているとバスルームから芳佳が出てきた。出てきたのだが――

「お、お兄ちゃん……おかえりなさい」

「よ、芳佳!なんだその格好!?!」

恥じらいながら現れた芳佳の服装に優人は度肝を抜かれた。

芳佳が着ていたのは女性用の衣服ではあるが下着の一種。それもただの下着ではない、ベビードールと呼ばれる物だ。

色は清楚な白、レースの施されたトップスからは透明感のある薄い布が付き、ボトムはサイズがやや小さく両側が紐で紐で結ばれている。

「えへへ……に、似合うかな？」

芳佳はもじもじと腰を揺らし、恥ずかし気に訊ねる。女子中学生が着るにしてはベビードールはあまりにセクシー過ぎる。

芳佳のベビードール姿を見てクルピンスキーは悦に入り、ロスマンは表情を固めて絶句している。

「な、なんて良いかつ……いや、何でそんなの着てるんだ!？」

狼狽えつつも、優人は芳佳から真意を問い質そうとする。あと少し本音が漏れている。

「クルピンスキーさんに貸して貰って……お兄ちゃんが喜んでくれるかな、って頑張って着たんだよ。このドレス……」

ちよつと恥ずかしいけど、と付け加えて芳佳は紅潮した頬を搔いた。

つまり、芳佳はクルピンスキーに騙されているのだ。セクシーなドレスだ、お兄ちゃんが喜んでくれる等の言葉で人の良い芳佳を巧みに誘導し、カップル等が夜の一時を楽しむために使うベビードールを着せたのだ。

元々はロスマンに着せようと思っていたのだろう。クルピンスキーが着るにしては

サイズが小さい。特にトップスには胸が入らない。

(や、ヤバい！鼻血出そう！)

あどけなさの抜けない芳佳にベビードールはミスマッチな気もするが、優人的にはストレートなセクシーさと背伸びをしている感のある今の芳佳はドストライクだったのだ。

しかも風呂上がりで肌が上気し、髪は濡れて艶があるので普段より色っぽい。辛抱たまらなくなつた優人の鼻へ血と熱が上がってくる。

「あ、あのね宮藤さん。それはドレスではなくて……」

ロスマンが芳佳に近寄り、ベビードールについての正しい知識とクルピンスキーの邪な思惑を耳に囁いて説明する。

すると芳佳は全身が焼けるのではないかという熱に襲われ、顔は赤ランプのように赤く点滅し、鼻や耳からは蒸気が噴射される。

「ち、違うの！お兄ちゃん！こ、これはね！私がエツチな子だから着てるんじゃないから！クルピンスキーさんが！クルピンスキーさんが嘘つきだから！」

(ああ……生きててよかった)

激しく動揺しながら必死に弁解する芳佳だったが、芳佳ベビードール姿に感動している優人の耳には届いていない。

優人には今の芳佳が天使のように神々しい存在にでも見えてるのだろう。神に祈るかのように両手を合わせ、目からは涙を流している。

芳佳の純情な心を踏みにじったクルピンスキーだが、少なくとも『お兄ちゃんが喜ぶ』は結果的に嘘ではなかったようだ。

「いやあ、眼福眼福♪良いものを見させて貰ったよ♪」

「こんのっ！エロ伯爵うううううっ！」

「ぶふう!!」

ブチギレたロスマンの飛び蹴りが、クルピンスキーの顔面に炸裂した。



ロスマンの手によって制裁を受けたクルピンスキーは彼女に引き摺られるようにして部屋を後にし、室内には優人と芳佳が残った。

二人が泊まっている部屋には幅98cmシングルベッドが2つに、2人分のスペースがあるコンパクトソファア、ミニテーブルが置かれているオーソドックスな客室だ。その隅では芳佳が体育座りで落ち込んでいる。

芳佳はベビードールから部屋に備え付けられていたホテルの寝間着に着替えていた。

正確にはシルクで作られた気品のある光沢を生み出す薄いグリーンのナイトガウン。芳佳が普段寝間着に使っている甚平と似ているようで違う、純洋風の着衣。中々に大人っぽい。

「お〜い」

「……………」

「よ〜し〜か〜さ〜ん？」

「……………」

呼び掛けても返事がない。優人は困ったな、といった感じで頭を掻いた。

「そんなに落ち込むなよ」

「…………お兄ちゃんにエッチな格好を見られた」

「あく、それはごちそうさ…………じゃなくてもう忘れよう？ね？」

優人の本音が出かけてしまっている。世の中広しと言えど、妹のベビードール姿を喜ぶ兄など彼くらいだろう。

「それよりお腹空いてるだろ？晩ご飯にするぞ？」

そう言つて、優人は芳佳の鞆の中から風呂敷の包みをひとつ取り出した。この包みには芳佳が早起きして作った昼食用の弁当が入っている。

「それ…………」

「わざわざ作ってくれてたんだな？」

「うん……お兄ちゃんと久しぶりにお出掛けするのが嬉しくって」

えへへ、と照れ臭そうに笑う芳佳。優人は「ありがとう」と一言礼を言う。ソファーやテーブルのある方へ移動し、包みを解いた。6・5寸程の三段重箱が現れ、中にはお握りや唐揚げ、卵焼き、御浸し等色とりどりのおかずが詰められていた。

妹の手作り弁当に大喜びの優人はまるで長い「待て」からの「よし！」の命令を貰った飼犬のようにながつかう。すっかり冷え冷えになってしまっていることも気にしない。

明らかに胃に負担のかかる食べっぷりで行儀も良くないが、美味しそうに食べて貰えることが何より嬉しかった芳佳は何も言わなかった。

「ごちそうさま」

妹の手作り弁当を綺麗に食べ終えた優人は膨れた腹をポンツと叩き、幸せそうな顔で天井を仰ぐ。

「お粗末様でした」

と芳佳が弁当を片付けながら応じる。こちらも幸せそうな笑顔だ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？」

「ごめんね、せつかくの誘ってくれたのに……何かお詫び出来ないかな？」
と申し訳なさそうに優人に訊く。

「もういいよ。お前の手作り弁当が食べられたことだし、満ぞ——」

面白いことを思いついたような顔をした優人は言葉を言い直した。

「じゃあ、膝枕して貰おうかな？」

「えっ？あつ、うん」

兄の予想外のお願いに芳佳は面食らうが、すぐに正座の体勢になりポンポンと膝を叩いた。

「どうぞぞ」

「ん」

優人は身体を寄せ、ゆっくりと芳佳の太腿に頭を置いた。白く、程よい弾力と張りのある太腿を後頭部で感じながら優人は目を閉じる。

「どう……かな？」

「お前の太腿……柔らかくて気持ちいいよ」

「……お兄ちゃんのえっち」

「何でやねん」

と他愛のない会話する二人だが、それがどうしようもなく幸せに感じられ、出来るこ

とならずつとこのままでいたいとさえ思う。

「ねえお兄ちゃん、起きてる?」

静かに優人の顔を眺めていた芳佳だったが、膝枕を始めて数分経ったところで声を掛ける。

「起きてるよ、なんだ?」

優人は目を閉じたまま答える。芳佳は一息置くと、真剣な面持ちで優人に訊ねた。

「私が行き遅れちゃったら……貰ってくれる?」

「そうだなあ……つて、ええええええええええええ!」

質問の意味を理解した優人は驚きのあまり声を張り上げ、弾かれたように飛び起きた。

「ちよつと待てよ!自分じゃわからないかもだけど、お前は美人だし、優しい、家事全般が得意だし!行き遅れる要素が見当たらないよ!そもそも俺達は兄だ——」

「ふふ……」

「えっ?」

肩を震わせ、クスクスと笑う芳佳。それに気付いた優人は昼間のウエディングシヨツプ前で彼自身がしたように、芳佳に自分がかかわれたことを理解する。

「芳佳、お前」

「ふふくんだ、昼間のお返しだよ♪」

呆然としている優人に芳佳はペロツと舌を出して、騙されたでしょ？とふざけて言う。兄のプライドを傷付けられた優人は額に青筋を立てた。

「このヤロ！許さん！こうしてやる！」

怒りのまま勢い良く芳佳に飛び掛かった優人は、こちよこちよとガウン越しに彼女の脇腹を擦り始めた。

「ふえ？ひやつ、あは、あははははは!!」

「ほらほら、どうだ！」

「きやはははははは！擦りたい！だめえ！ごめんなさい！許してえ！」

「いや、まだまだ反省が足らん！」

「そんなつ！あは、はははは！やめ、許し……きやははははははははは!!」

弱点である脇腹を攻められ続けた芳佳は喉が潰れんばかりに声を上げて爆笑し、目には涙を浮かべていた。

5分ほど擦り地獄を味わい、漸く解放された芳佳は笑い過ぎて息も絶え絶えの状態ですベツドに大の字で転がる。

「はあはあ……もう、お兄ちゃんの意地悪」

呼吸を整えながら不平を言う芳佳に優人は開き直って見せる。

「何言つてんだ、兄貴をからかうような悪い子にお仕置きをするのは当然のことだろ？」
「むう……」

自分のことを棚に上げる兄に対し、芳佳は不満そうに唇を尖らせる。優人はそんな妹に添い寝するように横になる。

「当分は結婚出来なくてもいいかな？」

「え？なんで？」

「結婚して家を出たらお前の手料理が食べられなくなるし、こうやってお前とじゃれ合うことも出来なくなるからさ」

優人は両手を頭の後ろで組んで天井を見上げる。

「少なくともお前にいい人が見つかるまでは独身のままで……」

「すすすす……」

「芳佳？」

隣から可愛いらしい寝息が聞こえ、優人がチラリと目をやる。芳佳は既に寝入っていた。
た。

「寝ちまったよこのお姫様は……」

ほんの数秒前まで話をしていたはずの妹の寝顔を見て苦笑すると、芳佳を隣のベッドへ寝かせるために俗に言うお姫様抱っこで持ち上げる。

起こさないように気を配りながら静かに移動し、ゆつくりとベッドへ下ろした。

「……お兄ちゃん」

「あ、ごめん……起こしちゃったか？」

「……すすす」

「寝言かよ……」

優人はスヤスヤと眠る芳佳の髪をそつと梳くと、甘い香りがしてきた。浴室で使ったシャンプーやボディソープの匂いが混じった年頃の少女らしい香りだ。

「まったく、なんでお前はこんなに可愛いんだよ」

子どもの頃から変わらない妹の可愛らしい寝顔。優人は自然と笑みを零した。

近い将来、兄と妹は些細なすれ違いで互いを傷付けることになるのだが、今の優人には知る由もなかった。

第29. 5話「酒は飲んでも飲まれるなⅠⅠまたは一夜の過ち(?)」

「んう……あれ？」

目を覚ました優人の瞳が見慣れない天井を捉える。いつもなら目を開けると大きな木材を使用した梁が巡らされた天井と梁に取り付けられた電球が見えるのだが、今日は小さなシャンデリアと軽く装飾が施された天井が視界に現れた。

(昨日はホテルに泊まったんだっただな……)

まだ目が覚めきつていない優人は眠たい目を擦り、気だるい身体をゆっくりと起こした。

「痛っ!」

ふと激しい頭痛に襲われて優人は反射的に頭を押さえる。苦痛に歪む顔を伏せると、痛みが治まるのをじっと待った。この痛み方に覚えがある。二日酔いのそれだ。

「飲み過ぎたかな?……いつつ」

昨晚、芳佳の寝顔を堪能した優人はロスマン、クルピンスキーの二人が泊まっているこの部屋を訪れていた。ロスマンと約束した通りクルピンスキーも入れて3人で焼酎

で酒盛りをしていた。調子に乗って飲み比べまでしたせいで途中から記憶が全くない。吐き気や胃のむかつきがないだけマシだが、優人の経験上今日は辛い一日になるだろう。

ふと室内を見渡すと、室内には彼が寝ていた物を含めシングルサイズのベッドが二つにミニテーブル、チェスト、イージーチェア等の調度品が並べられ、ミニテーブルには空になった焼酎の酒瓶3本と同数のグラス、その他にも複数の洋酒が無造作に置かれている。

しかし、一緒に飲んでいたはずのロスマンとクルピンスキーの姿が見当たらない。

「ん？なんかスースーす……る？……ぶふうう!!」

布団の中を覗き込んだ優人は思わず吹き出した。二日酔いの頭痛に気を取られて気が付かなかつたが、パンツ一枚履いているだけのほぼ全裸状態だった。

さらに視界の端で恐ろしいものを捉えた気がして恐る恐る目を向けると、そこには素肌にシャツという悩むしい格好で寝息を立てるロスマンの姿があつた。布団の中に潜り込み、猫のように丸くなっている。

「……ううん」

艶かしい声を漏らすロスマン。色つぼく潤んだ唇、ベッド上に乱れた美しい銀髪、大きめのシャツに包まれた華奢さの際立つ身体、白くきめ細かい肌。それらすべてが年齢

に見合わず小柄な彼女を扇情的に魅せ、優人は思わず息を生唾を呑んだ。

(下は履いてるのかな?……つて、何考えてんだ!!そんなことより……)

自分でも気付かないうちにシャツの裾へ手を伸ばしていた。理性を総動員して腕を引つ込めるとロスマンから顔を背け、煩惱を追い払おうとパンパンと両頬を叩く。

(ど、どういうことだ!?!な、なんでこんな格好?それにロスマン曹長と同じベッドに……?)

ほぼ全裸姿の男女が同じベッド眠っていた、前夜に酒を浴びるほど飲む、それが原因で記憶を失う。これらの要素から導き出される答えは一つ。

必死に他の可能性を探るだが、何も思い付かない。記憶を辿ってみるも、元々なかったかのように何も思い出せない。代わりに悩ましい妄想が膨らみ、既に眠気と二日酔いが吹き飛ばした。

「お、俺は……取り返しのつかないことを?」

優人が頭を抱えてビクビクと震えているとバスルームの扉が開かれ、中からバスローブ姿のクルピンスキーが出てくる。

「あつ……優人君、起きたんだ?おはよう」

タオルで濡れた髪を拭きながら、軽く手を上げて優人に挨拶をする。

先に目覚めた彼女は朝シャワーを浴びていた。広く開かれたバスローブの胸元から

は豊かな谷間が覗き、薄い生地はキユツとしまった腰を強調し、短い丈は美しい生足を露出させる。シャワーの熱い湯を浴びたことで灯された紅が肌を鮮やかに彩っている。

否でも応でも女性らしさを感じさせられる美しいボディラインに優人は釘付けとなる。

「おやおやあ？君は何処を見てるのかなあ？」

クルピンスキーに指摘され、優人は慌てて目を逸らすが時既に遅し。クルピンスキーはニヤニヤと笑みを浮かべる。

「シャワー上がりの女を前にして、何か期待しちゃった？」

「…………殴るぞ」

「おおっと、恐い恐い。冗談だよ冗談」

キツと睨み返されたクルピンスキーは両手を軽く上げて降参のポーズを取る。優人は『期待しちやった？』と言われた際に不覚にもドキツとしてしまった自分を憎く思った。

「…………ところで、何で俺は…………こんな格好でロスマン曹長と…………その、寝てるんだ？」

訊いていいものか分からなかったが、意を決した優人は単刀直入に切り出してみる。

「あれ？覚えてないの？」

「えっ？」

「昨晚の優人君すごかったのに……」

そう言つてクルピンスキーはクスリと唇を綻ばせる。対する優人は顔から血の気を引いていくのを感じた。

「な、何だその反応は!?! 俺はクルピンスキーやロスマン曹長に何をしたんだ!?!」

「クルピンスキーじゃなくてさ……昨日みたいに“トウルト” っと呼んでくれないかな?」

僅かに頬を紅潮させたかと思えば、流し目で優人を見るクルピンスキー。

「トウルト、つて……え?」

「先生のこととも名前で呼んでたよ、エディータつて。女の子を可愛がったことはあるけど、誰かに可愛がってもらつたのは僕も彼女も初めてで——」

「じよ、冗談が過ぎるぞー!」

質の悪いイタズラであることを期待しつつ、優人は声を張り上げた。それに反応してか、背後のロスマンが「うくん」と唸り、身を振る。

優人の言葉にクルピンスキーは手で眉間を押さえ、やれやれと溜め息を吐いた。

「本当に覚えてないのかな? 優人君は誠実な男だし、やつたことの責任はちゃんと取ってくれると思つただけだなあ……」

そして、ゆつくり顔を上げると魅惑的な笑みを作つてトドメの一言を見舞う。

「戦争が終わったら、僕らを扶桑に連れて行ってよ？酒で覚えてないかもだけど、君は確かにそう言ったんだからさ♪」

小悪魔を思わせる表情でクルピンスキーは告げる。すると優人は身体の活動と思考を停止し、石像のように動かなくなった。

「プツ……：フラウの手紙通り、からかい甲斐のあるイイ男だね」

シヨツクのあまり固まってしまった優人を見て吹き出すクルピンスキー。その悪戯な笑顔は彼女から多大な影響を受けたハルトマンのものと酷似していた。

一方、別室に泊まっている芳佳は……。

「お兄ちゃん……えへへ♪」

枕を抱き締め、幸せそうな寝顔で兄の名を呟いていた。

第30話「思惑」

1944年8月下旬のある晴れた日。ブリタニア第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』基地の講義室では芳佳とリーネが並んで席に着き、優人の軍事教練を受けていた。

「で、あるからして……1937年7月に勃発した扶桑海事変は、ウラル方面から大陸側の領土に中規模で侵攻してきたネウロイを扶桑皇国軍が迎え撃った戦いで……」

指示棒を片手に教壇の上から講釈を垂れる優人。教練指導は基本的に坂本が一人で行っていたが、最近では優人、ミーナ、バルクホルンも加わり4人体制となっている。実技を坂本とバルクホルンが、優人とミーナは主に座学教官を務める。

優人が担当するのは人類とネウロイの戦史、本日の内容は彼や坂本初陣を飾った扶桑海事変。黒板には事変に関する記録資料、扶桑海や大陸側の皇国領土の地図、当時活躍したウィッチを取り上げた記事等々、あらゆる資料が所狭しと貼られている。

地図を見ると分かるが、扶桑皇国はブリタニアと同じ海洋国家で大陸に程近い場所に位置している。また、事変末期に大陸領土を占領したネウロイが扶桑本国へ侵攻するという構図は、現在の西部戦線の状況と酷似している。

「事変当時、扶桑ウィッチ隊は陸海軍共に宮藤理論を採用した新型ストライカーユニットが相当数配備されていた。しかし、航空歩兵の実戦経験の無さやネウロイに対する情報と認識の不足等が大きなマイナスとなり、開戦から約一年経った1938年夏の大攻勢で大陸の皇国領土は遂にネウロイに呑み込まれた。次にネウロイは扶桑本土へ侵攻せんとしたが、陸海の航空歩兵と連合艦隊を動員した『挺身作戦』が実施され、扶桑海沖にてネウロイの殲滅に成功。その代償として事変終結までに民間人を含めた多数の犠牲者が……」

まるで歴史評論家にでもなったかの様な優人は、熱心に解説を続ける。長口上は欠伸の種というがリーネは真剣な眼差しで聞き入っていた。

事変当時はまだ対ネウロイ用の戦術が確立されておらず、コアの存在も末期まで知られていなかった。優人と坂本も他の同期生達も今の芳佳やリーネよりも幼く、ウィッチやウィザードとしての実力も新兵に毛が生えた程度のものであった。そんな彼らが一致団結してネウロイに立ち向かい勝利し、国を守ったという事実にはリーネは心をときめかせていた。

「はあ……」

一方、教官殿の妹君である芳佳は教練にまったく身が入っていない。頬杖を着きながら視線を向けている窓外には吸い込まれそうな青空が広がっているが、芳佳は溜め息を

漏らす彼女は心ここに在らずといった表情で虚空を見つめていた。

「芳佳ちゃん！芳佳ちゃん！芳佳ちゃんってば！」

「えっ？な、何リーネちゃ……ん」

リーネに呼ばれて我に還った芳佳が振り返ると、いつの間にかすぐ目の前にまで来ていた優人が見下ろしていた。

「芳佳、ちゃんと聞いてたか？」

「えっ……えっ……あはは」

芳佳は笑って誤魔化そうとするが、そんな手が通用する訳もなく、すぐに優人のお説教が始まった。

「あはは……じゃないだろー！」

優人が声を荒げた。芳佳はもちろん、隣に座るリーネもビクツと肩を跳ね上げた。

「教練をろくに聞かず余所見をするなんて、坂本やバルクホルンだったらカンカンだぞ！」

そう言う優人も既にカンカンである。

「うう……ごめんなさい……」

雷を落とされ、芳佳はシユンと萎縮する。素直な態度で反省の意を示す妹をいじらしく思った兄の表情が怒気を含んだものから穏やかなものへと変わる。

「まあでも、集中力が切れたんなら仕方ないな。区切りも良いし、今日はここまでにしよう」

なんだかんだ言っているも余程のことがないと妹のことを怒れない。宮藤優人はそれだけ甘くて、優しいお兄ちゃんなのだ。無論、それで良い筈はないだろうが。

「明日続きやるから、教本をよく読んで復習しておきな」

「はいっ！」

揃って返事をする芳佳とリーネ。優人は講義室を後にする。廊下を歩く優人の足音が聞こえなくなつたところで芳佳が口を開いた。

「えへへ……怒られちゃった」

芳佳は頭を掻きながら乾いた笑い声を上げる。優人も言っていたが、もし担当教官が坂本だつたら笑い事では済まされない。「弛んでいる」と怒鳴られ、罰としてリーネ共々滑走路50往復を命じられるだろう。

「芳佳ちゃん、なんだかぼんやりしてたけど。何か悩み事？」

「悩み事って言うか……」

心配そうな表情で問うリーネに、芳佳も表情を雲らせながら話始めた。



それは優人の教練が始まる数時間前。基地兵站群戦闘脚整備中隊の面々がストライカーユニットの整備を行っているハンガーにおぼんを持った芳佳が姿を見せた。

おぼんには扶桑伝統のお菓子であるおはぎ、それにおそらくは扶桑茶が淹れられている急須と湯呑みが人数分載せてある。

『いつもありがとうございます！』

芳佳は開口一番に日頃の感謝を述べる。整備中隊の面々は一旦手を止め、芳佳の方へと振り返る。

『お菓子作ってみましたんですけど、皆さんで食べてください』

心を込めて作ったおはぎを笑顔で差し出す芳佳だったが、整備兵達は視線をユニットへ戻し何事もなかったかのように整備を再開する。

『あ、あの、これ、扶桑のお菓子で……』

自分を無視するかのような反応に芳佳は悲しげな表情をする。見兼ねた一人の整備兵が目をユニットに向けたまま簡潔に説明する。

『すみません。ミーナ隊長から、必要最低限以外はウィッチ隊との会話を禁じられていますので……』

『えっ?』

整備兵の話聞いて、芳佳は信じられないといった顔をする。優人を覗く基地の男性陣らがミーナの命令でウィッチ達との接触を禁じられていることを知らなかったのだ。



「へえ、そんな事があったの？」

ハンガーでの一件を聞いたリーネは相槌を打つ。

「なんでミーナ中佐はそんな規則を作ったんだろう？リーネちゃん知ってる？」

「私も命令があるのは知っていたけど、あまり気にしていなかったから」

「ええ〜！こんな命令絶対変だよ！変過ぎる！リーネちゃんもそう思わない？」

納得がいかないとばかりに憤慨する芳佳。リーネに同意を求めると、彼女は顔を伏せてモジモジしながら答えた。

「えっ……私、兄弟以外の男の人とほとんど話した事なくて……」

「ふくん、学校とかは？」

「ずっと女子校だったから……」

元々引つ込み思案なところのあるリーネ。優人と普通に会話が出来ることから男性恐怖症というわけではなさそうだが、異性に対する免疫はあまり無いようだ。

「そうなんだ……」

「うん。ごめんね」

「ううん……」

気にしないで、と首を振る芳佳。ふと二人の耳に船の汽笛音が聞こえてきた。窓から外へ目を向けてみると、一隻の航空母艦が基地周辺の海を航行しているのが見えた。

「ほらあれ、赤城だよ！」

「アカギ？」

「うん、私の乗ってきた艦。修理しているって聞いたけど、直ったのかな？」

扶桑皇国海軍の航空母艦『赤城』。ネウロイの攻撃を受けて中破したものの芳佳、優人、坂本の活躍によって撃沈は免れた。ブリタニアに到着後は同じく派遣されていた工作艦『明石』による修理を受けていたのだ。

「芳佳ちゃん、リーネさん」

「よっ」

修復された赤城の航行を眺めていると、サーニヤとエイラが講義室に現れた。

「サーニヤちゃん、エイラさん」

「二人共どうしたんですか？」

リーネが少し驚いた顔をして訊ねる。サーニヤとエイラの主な任務は夜間哨戒で皆

とは睡眠サイクルが違う。普段ならまだベッドに入っている時間帯だ。

「ミーナ中佐に呼ばれたの……」

少し眠そうな顔のサーニヤが答え、エイラが言葉を継ぐ。

「ウィッチとウィザードは全員ブリーフィングルームに集合だつてサ。オマエらも来いヨ」

「はい！何だろうか？」

「うゝん」

作戦前でもないのに何故ブリーフィングルームに全員が集められるのか。芳佳とリーネは理由が思い付かず、首を傾げた。



その頃。教練指導を終えた優人は何をする訳でもなく宿舎内をウロウロしていた。

「また、甘やかしちゃったな……」

廊下を進みながら優人は深い溜め息を吐いた。理由は教練中の芳佳への対応だ。

新米とはいえ自分も芳佳も軍人。同じ部隊にいるからには兄妹であると同時に、士官の下士官、上官と部下の関係だ。いくらミーナの意向で隊内に自由な空気が作られてい

るとは言っても軍務中はまだ少し厳しく接しなければならぬ。……のだが、どうも甘やかし過ぎてゐる節がある。

叱るところはちゃんと叱ることの出来る優人だったが、説教直後の落ち込んだ芳佳にはどうも弱い。

芳佳が6歳の時に家を出て、何年も帰らず寂しい思いをさせてしまった、という罪悪感もある。

(父さんや母さんなら、もっと上手くやれただらうなあ……)

今は亡き父と扶桑の実家で自分兄妹の帰りを待っているであろう母の姿を脳裏に浮かべ、物思いに沈んでいる優人の頬にヒヤッと冷たい物が触れた。

「うおっ!」

突然のことに驚き、優人は肩をビクツと揺らした。何だ、と思つて振り返ると飲料水の瓶を持ったシャーリーとバルクホルンが立っていた。

「よっ! 優人!」

シャーリーはニツと悪戯つぽく笑つて挨拶する。

「芳佳達の教練はもう終わったのか?」

バルクホルンが訊ねる。優人は「ああ」と頷いた。

「お疲れさん! ほら飲め、アタシのおごりだ!」

「ありがとう、シャーリー」

差し出された瓶を優人は受け取り、礼を述べる。瓶のラベル確認してみると、シャーリーが日頃から愛飲しているリベリオンの炭酸飲料水でコーラだった。

キンキンに冷えたコーラ瓶。これが優人の頬に触れた物の正体だ。リベリオンから501基地への補給物資の一部として定期的に送られてくる。

「優人、リベリオンの飲料など飲むな。身体に悪いぞ」

険しい顔をしたバルクホルンが大真面目に忠告する。規律に厳しい彼女は健康やそれを支える食物、飲料にもうるさい。

「何だよ？別に毒が入っている訳じゃないだろう？」

シャーリーもすかさず反論する。性格の違いからよく口論となる二人だが、最近はこの文化の優劣を巡って張り合うことが多い。

「健康を損なえば毒も同じだ。そんな糖分まみれの炭酸水や脂肪と塩分の塊に等しいハンバーガーばかり食べていると、脳みそが腐るぞ」

いつもより毒舌なバルクホルン。ちよつとした口喧嘩にも祖国カールスラントの誇りを賭けているが故の言動である。

「代謝がいいから健康に問題はないよ。それにしても食の楽しみ方を知らないなんて、カールスラント人は哀れだなあ」

なんとも挑発的な口調のシャーリー。彼女も負けてはいない。

「な、なんだと!？」

理性を重んじながらも内心激情家なバルクホルンは、あっさりとは挑発に乗ってしま
う。

「我々を侮辱するのも大概にしろ!この南瓜胸!」

「へえ、このグラマラスボディを誉めてくれるんだ?光栄だね!」

シャーリーは見せつけるように胸を持ち上げる。バルクホルンの言った通り南瓜の
ように大きい。

「誰が誉めるか!」

完全にシャーリーのペースとなつている。ネウロイの撃墜スコアならばバルクホル
ンの圧勝だろうが、口論となるとより柔軟な思考と達者な口を兼ね備えているシャ
リーがバルクホルンに言い負かされることはない。

(まったく、コイツらは……)

優人はうんざりとした表情で溜め息を吐いた。二人の喧嘩は毎度のことながら呆れ
させられる。根つからの頑固者である両者の衝突に決着が着くことはなさそうだ。

口論を続ける二人を尻目に、優人はコーラ瓶の栓に手を掛ける。

プシュー!

「うわっ!？」

開けた瞬間、コーラが物凄い勢いで吹き出した。コーラは優人の顔面に直撃、目にも入ってしまった。炭酸の刺激で強い痛みを感じた優人は思わず目を瞑る。

「あく悪い優人! その瓶、来る途中で一度床に落つこととして転がしたんだっただけ!」

「早く言ってくれ! あく! もうっ! 何か拭くものは!？」

「何をしているんだリベリアン! ほら優人、私のハンカチを使え!」

バルクホルンは制服のポケットからハンカチを取り出し、優人に渡そうとする。

「ありがとうバルクホルン。いたた……」

痛みで目を開けていられない優人は、どうにかバルクホルンのハンカチを受け取ろうと両手で手探りする。

むにゅ!

「……え?」

優人の手がハンカチとは違うものに触れた、いや正確には掴んでいる。

手の平や指の腹に伝わる感触は布のようだが、形は丸く非常に柔らかい。両手でそれぞれ大ききの違うものに触れているらしく、右手の方は左手のそれよりも大きい。

触れているだけで、えも言われぬ温もりと幸福感で心が満たされ、優人はムニムニと数回ほど揉んでみる。

しばらくして痛みが引くと、優人はゆっくり目を開いた。

「……………」

「な、な、な……なあ!？」

最初に見えたのは何故か面食らっているシャーリーと茹で蛸のように顔を真っ赤にしたバルクホルン。

段々と視界が回復し、次に見えたのは――

「……………あつ」

優人の口から間の抜けた声が漏れる。彼が触れ、いや掴み、揉みしだいていたのはシャーリーとバルクホルンの胸だったのだ。右手でシャーリーの右胸を、左手でバルクホルンの左胸をガツチリ掴んでいる。

「え、えーつと……………ごめつ――」

「何をするんだああああああああ!!」

「うわっ!」

怒りのまま魔法力を発動し、本気の正拳突きを繰り出すバルクホルン。間一髪で躲す優人。避けた拳が壁にめり込み、周囲に亀裂を入れたのを見て優人は青ざめる。

「どさくさ紛れて……………ふ、婦女子の胸を揉むなどと。は、恥ずかしくないのかあ!？」

怒り狂ったバルクホルンはフーフーと嵐のように息を弾ませ、睨み殺さんばかりの鋭

い眼差しで優人を見ている。

「お、落ち着いてくれバルクホルン！これは誤解だ！」

「ごかい？……そうか、お前は私の胸を掴んだ上に5回も揉んでいたのか？わざわざ教えてくれてありがとう」

バルクホルンは聞く耳を持たないばかりか、怒りのボルテージが鰻登りだ。

一方、シャーリーは僅かに紅潮した頬をポリポリと搔き、気まずそうに優人から目を逸らしている。バルクホルンのように怒るわけでもなく、どうしたらいいのか分からないといった感じだ。

優人は及び腰になりながらも身を守るように両手を前に突き出して弁明を続ける。

「ま、待つて……お願いだから話を——」

「おい！お前達！」

「は、はいっ！」

ふと背後から坂本の声がある。優人は反射的に素っ頓狂な声を上げると、手を突き出したまま回れ右する。手を出したままなのが問題だった。

むにゅん！

「あ……」

「むっ？」

再び両手の平に伝わる柔らかな温もり。優人の両手は次に捉えたのは上官にして隊内で最も付き合いの長い戦友、坂本美緒少佐の胸だった。晒しを巻いている時もあるためあまり大きい印象はないが、年相応に豊かなものが実っている。ちなみにバルクホルンよりも大きい。

危機的状況下でまたしても優人に災難が舞い込んでしまった。泣きつ面に蜂とはこのことだろう。

「……………楽しいか？」

「あ、いや……………その……………こ、これは」

「優人おー！」

「バルクホルンも一生のお願いだから落ち着いて！」

前方には剣気を放つ坂本、後方には興奮状態のバルクホルン。前門のドーベルマンに後門ジャーマンポインター。怒れる2頭に挟まれた哀れな柴犬は恐怖のあまり冷や汗を滝のように流す。

「弛んでいる……………」

聞いた者が身震いするほど低い声で呟いた坂本は普段から肌身離さず持っている愛刀を胸の位置まで上げ、ゆっくりと鞘から引き抜いた。刀身に反射した陽の光が坂本の顔を恐ろしげに照らす。

「ま、待て坂本！」

「天誅！」

優人の懇願も空しく、ネウロイに向けられるはずの白刃が振り下ろされた。

◇ ◇ ◇

数分後。第501統合戦闘航空団のウィッチ及びウイザードは全員ブリーフィングルームに集められていた。

部屋ではミーナが体格の良い中年男性2名と共に待っていた。

「総員！扶桑海軍遣欧艦隊司令長官、赤坂伊知郎中将に敬礼！」

ミーナの号令と共に一同が一齐に敬礼する中、緊張しているのか、芳佳とリーネのみが半歩遅れていた。優人はそそっかしい妹達を横目で見ながら小さく溜息を吐いた。

「座つてくれたまえ」

赤坂に促され、着席する一同。修理を終えた赤城と共に基地にやって来たのは優人、坂本、芳佳の原隊における上官、赤坂伊知郎と彼の副官を務める扶桑海軍士官だった。ここにはいないが、他にも将兵が数名ほど着いてきている。

遣欧艦隊司令長官で人類連合軍の将軍の一人でもある赤坂は、前線で戦う将兵達に

とつては雲の上の存在。彼の来訪は501基地のアットホームな空気を厳かなものと一変させた。

上層部の人間と直にあつた経験ないリーネはガチガチに緊張してしまっている。

芳佳とルツキーニは艦隊司令長官、中将という肩書きがピンとこないのか、不思議そうに目をパチクリさせている。

ほぼ毎朝が夜間哨戒明けでブリーフィング中は枕を抱きながら眠っていることの多いサーニヤは話を聞かなければ、と頑張つて目を開けている。

年長組の面々は慣れたもの。緊張するよりも、何故赤坂ほどの立場の人間が呼び出しではなく、わざわざ基地を訪問したのか。その理由が気になっていた。

「ミーナ中佐。連絡も無しに失礼した」

「い、いえ。そんな……」

軽く頭を下げて非礼を詫びる赤坂に、ミーナは恐縮する。

「どうしても501の諸君にも話しておかねばならないことがあつてね」

「反攻作戦についてですよね？」

「反攻作戦？」

話の内容を察する優人と事情がよくわかっていない芳佳。

「君には一足早く知らせてあつたな？とところで宮藤大尉、何かあつたのかね？」

赤坂は真つ赤に腫れ上がった優人の左頬と頭にできている見事なタンコブを見て怪訝そうに訊ねる。それぞれバルクホルンと坂本の手によるもので、とても痛々しい。

「階段から転げ落ちまして……」

優人は適当なこと言つて誤魔化した。気にはなつたものの、赤坂はそれ以上追及せず、一同へ視線を戻し、本題に入った。

「我々連合軍総司令部はガリア反攻作戦の発動を正式に決定した。ブリタニアに駐留する連合軍とウィッチ部隊の大部分を以てノルマンデーから上陸し、ガリアを解放する」

（ガリアへ……遂にこの時が……）

赤坂の言葉を聞いてペリーヌは膝に置いた両拳をギュツと握り締めた。漸く祖国奪還の為の作戦が決行される。ブリタニアに落ち延びてから、どれだけこの日を待ち望んだことだろう。

ペリーヌだけではない、ウィッチ部隊を含む自由ガリア空軍の将兵達やブリタニアに逃れた大勢のガリア国民が一日も早い故郷への帰還を望んでいる。

バルクホルンも武者震いが止まらない。ガリアが解放されれば、近隣のヘルギガ、ネーデルラント。そして、母国カールスラントの奪還にも繋がる。妹や国の人々に故郷の土を踏ませてやれる。

「上陸部隊を5つのビーチから上陸させるため、ウィッチ部隊を主力とした航空戦力が制空権確保と航空支援に動く、海上からは遣欧艦隊とブリタニア海軍を中心に編成された大艦隊が上陸予定地に艦砲射撃を行う予定となっている」

赤坂が説明を始めると、彼の副官が大きな資料をボードに貼り付けた。それは西ヨーロッパの地図で、ブリタニアやガリア、カールスラント等の地理が描かれている他、赤い円と黒い印がそれぞれ上陸予定地とガリア北東部に書き足されている。

「上陸後、主力部隊はネウロイ掃討しつつ内陸へ侵攻する。最終目標はここだ」
赤坂は地図の黒円をバンと手で叩きながら宣言する。

「ネウロイの巢……」

バルクホルンが黒円を見据えながら呟く。この印が描かれた座標にはガリア陥落とほぼ同時期に出現したネウロイの巢が存在し、ドーバーを渡ってブリタニアに侵攻してくるネウロイはすべてここから現れる。

「巢を破壊し、ガリアからネウロイを一掃する」

「お言葉ですが中将閣下！我々にはまだ巢を破壊する術は……」

「そもそも巢に近付くことすら！」

ミーナと坂本が異を唱える。ウィッチをはじめとする連合軍が上陸に成功しようと、何十体何百体のネウロイを駆逐しようと、ネウロイを無尽蔵に産み出している巢を破壊

しなければイタチごっこの繰り返し、本当の意味でガリアは解放出来ない。しかし、人類には巢を破壊する術がない。そもそも破壊可能なのかすらわかっていない。

人類が巢へ攻撃を仕掛けた前例はなくもないが、巢中から出現した多数のネウロイによつて接近を阻まれてしまい、悪戯に戦力を消耗しただけで終わっていた。

「心配は無用だよ。ミーナ中佐、坂本少佐」

赤坂は二人の異見を待っていたと言わんばかりにフツと笑ってみせる。

「巢に接近する方法も破壊する方法も考えてある」

「それは、どのような？」

赤坂はミーナの質問に応じる代わりに坂本と優人の顔を順に見ながら二人に訊ねた。

「少佐と大尉は『挺身作戦』を覚えているかね？」

「ええ、覚えていま——」

そこまで言いかけて坂本はハツとなる。赤坂が言わんとしていることが分かったのだ。

挺身作戦。優人の教練でも触れたこの作戦は、扶桑海事変最終決戦時に実施された陸海合同の作戦である。

目標はコアを有した巨大ネウロイ。皇国領土に侵攻してきたネウロイ群の親玉、現在はマザーネウロイと呼ばれている特殊なタイプのネウロイだ。

作戦内容は扶桑皇国大本営会議において不承不承ながら扶桑海軍が提供した囹艦隊が多数の小型ネウロイを引き付け、手薄となった親玉のネウロイのコアを陸海のウィッチ達で叩くというシンプルかつ大胆なもの。

海軍軍令部の参謀達による作戦への猛烈な反対や妨害はあったものの、優人らの活躍によつてマザーネウロイを撃破。扶桑本土は守られた。

「あの作戦における艦隊がそうだったように連合軍主力部隊がネウロイを引き付ける。君達501は遊撃隊として巢を直接攻撃して貰いたい」

「私達がつ……ですか？」

驚いて思わず声を上げるリーネ。大声で周囲の注目を浴びた彼女は頬を染め、恥ずかしさから顔を伏せる。赤坂は頷くと話を続けた。

「1939年に出現したある巢に対して戦闘機の一個小隊が決死の覚悟で内部に侵入、威力偵察を行った。瞬く間に全滅したが、直前の報告で巢の中心部には大型ネウロイと同様にコアが存在することがわかった」

「アタシ達が破壊するの？」

「簡単に言ってくれるヨナ」

ルツキーニは舌足らずな口調で訊き、エイラはぶつきらばうに不平を漏らす。

赤坂の副官は総司令部の将官相手に平然と普段の口調で話す二人に対して不快感を

露にし、優人やウィッチのほぼ全員が冷や汗を流した。

「ユーティライネン少尉の言い分は尤もだ」

赤坂自身は特に気にしていない。

「ネウロイとて馬鹿ではない。大部分を他所に引き付けられたとしても巢を無防備にはしないだろう。それにあれほど巨大なネウロイの巢だ。比例してコア本体の大きさも強度も桁違いと思われ、リトビヤク中尉のフリーガーハマーを含め航空歩兵の火力では不足かもしれない」

「そんなに……」

ウィッチ用の火器としてはおそらく最大の威力を誇るであろう自身のフリーガーハマーが通用しない可能性にサーニヤの瞳が不安に揺れた。

「そこで私の出番、ですよね？」

「お兄ちゃん？」

唐突な優人の発言に芳佳に首を傾げ、赤坂は「ああ」と頷いた。

「宮藤優人大尉、君と君の覚醒魔法『絶対凍結』が巢攻略の要だ」

「覚醒魔法？絶対凍結？」

聞き慣れない単語に芳佳の頭上にまた一つクスチョンマークを浮かぶ。サーニヤとエイラも怪訝そうに優人を見ている。彼女ら3人は優人の『絶対凍結』を知らなかつ

た。

「理論上はどんな大型のネウロイだろうと完全に凍結させることが可能な優人の切り札だ。一撃必殺の強力な魔法だが、魔法力を消費が激しい上に肉体や精神にも多大な負担を掛かるので多用は出来んが……」

坂本が芳佳らの3人のために簡潔な説明をする。

「すごい魔法……」

「そんなモンがホントにあるのかヨ？」

素直に称賛するサーニヤと懐疑的なエイラ。

「へえ……お兄ちゃんつて、すごい」

芳佳はちよつと驚いたような顔をする。その声からは気が抜けていて、本当に理解しているのかかなり怪しい。

「破壊出来ないのなら凍結させればいい」

赤坂が坂本の言葉を継ぐように話を再開する。

「巢のコアがいかにかに巨大であろうと、大尉の『絶対凍結』を受ければ完全に機能を停止させるはずだ」

「コアを凍死させるのか……」

シャーリーが小声で独り言ちる。コア凍結が成功すれば、ガリア全域を我が物顔で闊

歩しているネウロイ群の殲滅はほぼ確実。しかし、シャーリーはガリアに対する希望の裏に不確定要素からくる不安があるように思えた。

「宮藤大尉が安心して任務を全うできるように残ったネウロイの駆逐を任せる」

他のウィッチ部隊と連合軍の主戦力がネウロイ群の大部分を引き付け、501のウィッチ達が道を開き、たった1人のウィザードがコアを凍結させる。挺身作戦よりもさらに大胆な作戦だ。

「そして宮藤大尉に宮藤軍曹！」

「は？」

「は、はいっ！」

赤坂が宮藤兄妹を名指しする。声を掛けられるとは思わず、虚を衝かれた芳佳は素っ頓狂な声を上げる。その声がおかしくて、ウィッチの何人かは失笑していた。

「まず大尉、君はコアの凍結をより確実にするため極力戦闘や飛行以外の魔法力使用を控えてくれ。次に軍曹、君は兄さんの直俺を任せたい……」

「私か？」

芳佳はキョトンとした顔で訊き返す。何故大ベテランの坂本や100を優に越える圧倒的な撃墜スコアを誇っているカールスラント組の3人ではなく新米の自分が選ば

れたのか。

「君ならば強力なシールドでネウロイの攻撃から兄さんを守り、『絶対凍結』使用後の肉体的な疲労や万が一の負傷を治癒魔法で治療することが出来るだろう?」

(なるほど、そういうことか)

坂本は中で幾つかの疑問が解消された。何故赤坂が政敵であるマロニーに鵜来型海防艦を譲り渡してまで優人を501に残したのか、何故外征部隊の指揮官である赤坂が海上護衛隊隷下の海防艦を取引の材料として使えたのか、何故扶桑海軍上層部がそれを許したのか。

すべては赤坂が扶桑ウィザードを切り札とした扶桑海軍主導の作戦を発案、実施するため。そして、いち早くネウロイの巢を破壊した実績を得ると共に西部戦線における扶桑皇国の揺るぎない地位を確立するためだ。

紳士風に振る舞っていても、やはり赤坂は上層部の人間らしく腹に一物持っている。現場第一主義の坂本からすれば最前線で命を掛けて戦う自分達ウィッチを、なにより親友と親友の妹を政治に利用しようという赤坂の腹積もりには業腹だが、ペリーヌの故郷ガリアを解放する方法が他に無いのも事実。今回は怒りを収めよう。

「まずは地上戦力をノルマンディー海岸に上陸にさせ、橋頭堡を築く。そこからは君達の仕事だ」

赤坂はもう一度ウィッチ達を見渡した。

「この反抗作戦が失敗すれば人類は戦力の大部分を喪失し、以後防戦一方となるだろう。ガリアやカールスラントを奪還する機会は永遠に失われる」

半分脅迫とも取れる赤坂の発言にミーナ、バルクホルン、ハルトマン、ペリーヌの4人は一層顔を引き締める。

「散って言った多くの命に報いる為に、君らの祖国を取り戻す為に、どうか私に協力して貰いたい」

そう言つて赤坂は深く頭を下げた。

(長官も狸だな……)

優人は真つ直ぐ見据える父の友人に、疑心と敬意の入り混じった複雑な感情を抱いた。



ロンドン ブリタニア軍司令部――

司令部内のある執務室。部屋の主であるブリタニア空軍大将トレヴァー・マロニーはデスクの向こうに立つ副官の報告を聞いていた。報告内容は501基地に赴いた赤

坂についてだ。

「反攻作戦の詳細をか？」

「ええ、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐以下、ウィッチーズ全員と扶桑のウィザードにすべて説明しようです」

「我々の頭越しに……」

しかめっ面のマロニーはデスクの上に置いた右拳を握り締めた。

ブリタニア空軍において大将の階級と戦闘機軍団司令官という重要なポストに着いている彼は連合軍内においても第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の上官という立場にある。連合軍総司令部の意向はすべて彼を介して501に伝えられ、501からの報告もまた彼を通さなければならない。

しかし、赤坂はマロニーに一報すら入れなかった。自身を軽視する扶桑海軍の将官にマロニーは怒りを覚えた。

「扶桑の狸が提案した作戦を支持するなど、チャールズ卿は何を考えている」

赤坂が提案した作戦については連合軍内でも意見が分かれている。

元々作戦指揮よりも軍政で力を発揮するタイプの赤坂は、連合軍内においても自身の支持基盤を構築していた。それ故に彼の作戦案を支持する者も多いが、1人のウィザード頼りな部分に懐疑的な意見も少なくない。特に地上戦力の中心となるカールスラン

ト、リベリオン両陸軍の将官達は巢を破壊する際に自らの指揮する部隊を囿として使われることに猛反発していた。

それでも作戦の実施が決定したのは他に有効な手段がないこと。ブリタニア首相のチャーチルがウィッチや扶桑に対して好意的なこと。ここ最近で活動が活発化したガリアのネウロイがブリタニアへの大規模侵攻を企んでいるのではないか、という不安からブリタニア政府首脳陣が赤坂を後押ししたためである。

冗談ではない、とマロニーは思った。小娘と若造ばかりの部隊や扶桑の狸に手柄渡してなるものか。連合軍内の主導権を握るのも、戦後の軍事バランスで優位に立つのも我が祖国ブリタニアだ。そして、*“アレ”*を開発した自分こそがその中心にいるべきだ。

「例の命令を*“モグラ”*に伝えろ！」

「っ!? よろしいのですか!？」

副官は信じられないといった感じで確認する。

「我々より先に奴らがガリアの巢を破壊してしまえば、*“アレ”*が日の目を見る機会を永遠に失う! すべては祖国の、ブリタニアの為だ!」

「……了解しました」

副官は敬礼すると踵を返して部屋から去っていった。

「出る杭は打たれる、分相応に生きろ小僧」

1人になったマロニーは執務室の天井を仰ぎながら独り言ちた。

◇ ◇ ◇

場面は再び501基地へ。用件を終えた赤坂は既に基地から去っていたが、彼とは別に扶桑海軍の客人がもう1人訪れていた。

「失礼しまゝす」

芳佳はブリーフィングを終了後、ミーナから呼び出しを受けた。部隊長執務室の扉を開いて室内を見渡すとミーナと坂本と他に赤城艦長の杉田淳三郎大佐の姿があった。

「おお、宮藤さん！お会いしたかった！」

「こちらは赤城の艦長さんよ、ぜひあなたに会いたいと仰つて」

笑顔で近づいている男性と芳佳の間にミーナが割つて入り、紹介する。

「杉田です。乗員を代表して貴方にお礼を言いに来ました」

自分を芳佳に近づけまいとするようにも見えるミーナの行動に杉田は一瞬だけ驚いたような顔をしたが、すぐ笑顔に戻り芳佳に話かけた。

「お礼？」

何のことかわからずに聞き返す芳佳。

「あなたのおかげで遣欧艦隊の大事な艦を失わずに済みましたし、何より多くの人命が助かりました。本当に感謝しております」

「いえ、私は何も。あの時はお兄ちゃんや坂本さんが……」

心からの礼を述べる杉田。大したことをしたつもりもなかつた芳佳は戸惑う。

「いや、確かにあの時お前が居なければ全滅していたかもしれん。誇りに思ってもいいぞー！」

杉田の後ろにいた坂本も同意する。彼女は弟子のことを誇らしく思っている。

「そうかな、えへへ」

頭を掻きながら照れ臭そうに笑う芳佳に、杉田が包みを差し出した。

「全乗員で決めました。これをあなたにと」

「あらあら、よかつたわね」

「ありがたく受け取っておけ」

と笑顔で促すミーナと坂本。

「はい！ありがとうございますー！」

二人に促され芳佳は笑顔で包みを受け取った。杉田は芳佳を見て微笑むと、表情を引き締めミーナの方向を向いた。

「反攻作戦の前哨として、我々も出撃が決まりました」

「あなた方も、ですか……」

杉田とミーナ、先程まで笑顔だった二人の表情は一転して艦や部隊を預かる指揮官のそれになる。

「反攻作戦、つて……さつき長官さんが言つてた？」

念を押すように訊ねる芳佳に、杉田は「ええ」と頷いた。

「今日はその途中で寄らせて頂いたのです。明日には出港なので是非、艦にも来てください。皆が喜びます」

「えっ……はい！」

突然の申し出であつたが芳佳は快活に返事をする。扶桑からブリタニアまでの一ヶ月を共に過ごした赤城乗員のみんなにまた会える、と思うと芳佳は嬉しかった。

「残念ですが、明日は出撃予定がありますので」

「あ……」

ミーナがやんわりと断り、それを聞いて残念がる芳佳。

「そうですか、残念です」

見送りを期待していた杉田も心底残念そうにする。

第31話 「規則と苦悩と」

リーネが基地本部内廊下の壁に背を預けて立っていると執務室のドアが開かれ、芳佳が出てきた。杉田から贈られた包みを大事そうに抱えている。

「芳佳ちゃん」

「リーネちゃん！待っていてくれてたの？」

「うん！それなあに？」

「これはね……」

風呂敷の包みに視線を向けて訊ねるリーネ。芳佳は微笑み返すと、執務室に呼び出された理由と中でのやり取りを嬉しそうに話した。

自分の力でたくさんの命を救えたことを改めて実感した芳佳は欣喜雀躍して喜び、そんな彼女の眩しく愛らしい笑顔にリーネも連られて笑みを零した。

「艦長さんって大佐だから、ミーナ中佐より偉いんだよ？」

「へえ、そんなに偉い人だったんだ……」

芳佳は惚けたような発言をする。ほんの数カ月前まで一般人だったことや元々興味がなかったせいで彼女は相も変わらず軍関係の知識に疎い。階級のことすらもちゃん

と理解しておらず、将官である赤坂のことも「スゴく偉い人」程度の認識しかない。

「艦長さんが代表してお礼に来てくれたなんて、凄いね！」

「えへへ♪」

「宮藤さんっ!!」

「ふえっ!!」

基地本部から中庭に出たところで、白地の封筒を手にした一人の少年が目の前に現れた。リーネとのお喋りに夢中になっていた芳佳は、突然現れた名も知らぬ少年に驚いて素っ頓狂な声を上げる。

彼は赤城に配属されている扶桑海軍の少年兵、艦長の杉田について基地を訪れていた。横須賀からブリタニアへ来る途中の艦内で何度か顔を合わせていた芳佳はぼんやりとだが彼を覚えていた。

二人と同一歳だろうが、男だけあって背は芳佳よりも頭一つ、リーネより頭半分程高い。幼さを残しながらも端正な顔立ちは少年から大人へ成長する途中といった趣である。

「さ、先の戦いでの宮藤さんの勇戦敢闘には大変敬服しました！艦を守って頂き……た、大変感謝しています！」

「あ、はい。どういたしまして……」

少年兵は声に緊張を孕みつつも真つ直ぐな感謝の意を述べる。対する芳佳は当惑気味に応じる。

「あの……その、ですね。これ！受け取ってください！」

と、少年兵は芳佳に封筒を差し出した。相当勇気を振り絞つたらしい。少年兵の頬には赤みが差し、震える手には汗が滲んでいた。

「えっ?」

「わあ！ラブレターじゃない?」

封筒の中身を察したリーネがキョトンとする芳佳に囁く。

「ラブレター?」

「うん、受け取つてあげたら?」

リーネは促すと芳佳が持っていた包みを預り、彼女の両手を空ける。親友の言動に戸惑う芳佳だったが拒否する理由もない。

芳佳は躊躇いがちに手を伸ばし、封筒を受け取ろうとする。すると芳佳の指が僅かに少年の手に触れた。

「あつ!」

心臓がドキンと跳ね上がり、二人の頬は赤く染まる。急に顔を合わせるのが恥ずかしくなった芳佳と少年兵は顔を伏せ、動悸の鎮静に努める。

(わあー！うわあー！)

芳佳達の初々しいやり取りを見てテンションの上がっているリーネの両目がこれ以上ないほど爛々と輝く。

「あ、あの……」

芳佳が沈黙を破らんとしたその時、少年兵の手中にあつた手紙が突然の強風に飛ばされて宙を舞った。芳佳と少年兵は反射的に目で追う。

手紙は弧を描いた後、重力に引かれるまま落下していく。落ちた先には、いつになく厳しい表情をしたミーナが立っていた。

「このようなことは厳禁と伝えたはずですが？」

やや威圧的な口調のミーナ。普段にこやかな笑みを絶やさない彼女が、いつになく厳しい表情で少年兵をキツと睨みつけている。

「すみません、是非とも一言お礼が言いたくて」

「そうです。何も悪いことしてません」

二人の言い分にミーナは小さく頷く。芳佳達の気持ちを多少は理解してくれているようだが、厳格な姿勢を崩すことはなかった。

「ウィッチーズとの必要以上の接触は厳禁です。従って、これはお返しします」

「申し訳……ありませんでした……」

手紙を突き返された少年兵は、逃げるように走り去ってしまった。芳佳はその後ろ姿を哀しげに見つめていた。



十数分後――

ミーナは自室の窓際に佇んでいた。外へと視線を向ければ穏やかに波打つ海が広がり、遠方にはガリアの国土がうつつすらと確認出来るが、憂いを湛えたミーナの瞳には映っていない。

「聞いたぞ」

「美緒」

不意に背後から声を掛けられる。振り返るとドアの前に坂本が立っていた。ノックをくらいしたであろうに、物思いに耽るミーナはノック音も彼女が部屋に入ってくる気配にもまったく気付かなかった。

「手紙を突き返したそうだな？」

「そういう決まりだもの」

ミーナは再び窓の外へ目を向ける。いつの間にか夜になっていた。日中は雲の少な

い澄んだ青空を鏡のように映していた海も夜間は月明かりで神秘的に輝いている。

「まだ忘れられないのか？」

「……………」

ミーナは何も答えない。沈黙は肯定の証とはよく言ったものだ、この先人の教えは今のミーナにぴったりと当てはまる。坂本は彼女と並ぶようにして窓辺に立ち、同じ景色を静に眺める。

カールスラント組やペリーヌのように祖国や愛する人達を失ったことがなく、本当の意味でミーナの悲しみ、苦しみを理解出来ない自分では彼女の傍に居てやることしか出来ない。坂本にはそれが歯痒くてならなかった。

(アイツの時もこうだったな……)

フツと笑みを零す坂本の脳裏には付き合いが一番長い親友の姿が浮かび上がっていた。



同時刻——

入浴を終えた芳佳はリーネと共に部屋へ戻り、杉田に渡された風呂敷包みを解いた。

「わあ、扶桑人形だあ！」

芳佳は喜びの声を上げる。杉田をはじめとする赤城の乗員達から贈られたのは扶桑陸軍の著名なウィッチ、穴拭智子をモデルにした扶桑人形だった。

ストライカーユニットと巫女装束を身に纏い、凜とした表情で扶桑刀を手にした姿はまさしく扶桑の撫子。災厄たるネウロイ退ける人類の守り手だ。

「可愛い〜！」

ベッドに置かれた人形を見て、リーネが羨ましそうに言う。

「お礼、言いたいな……！」

床に座り込み、人形を眺めながら自身の気持ちを吐露する芳佳。同時に昼間のミーナを思い出していた。

芳佳が知っているミーナは綺麗で、淑やかで、優しく慈愛に満ちた大人の女性——包容力のある母のような存在。しかし、少年兵に手紙を突き返した時のミーナは見たことのないような恐い顔をしていた。あの様子では出撃がなかったとして見送りを許して貰えそうにない。

「変だよ、こんなのって……ひゃっ！」

表情を暗くしている芳佳の頭を不意に誰かがわしゃわしゃと撫でた。背後を振り返ると、いつの間にか優人が立っていた。

「優人さん」

「お兄ちゃん……」

「なくに辛気くさい顔してんだ？」

顔を傾け、芳佳の顔を覗き込む優人。間も無く消灯時間、ウイツチ達に続いて入浴を終えた優人は扶桑海軍の第一種軍装から寝間着として使っている半袖のTシャツとハーフパンツに着替えていた。浮かかない顔した妹に優しく微笑んで見せると、次にベッドの上の扶桑人形に視線を移した。

「おっ？それが杉田大佐からの？穴拭さんの扶桑人形か」

「お兄ちゃん、知ってるの？」

「知ってるも何も、今日の授業で話したはずなんだけど？」

「えっ……そ、そうだっけ？」

「お前なあ……」

惚けたようなことを言う妹に優人は眉をひそめる。叱られそうになっている芳佳に助け舟を出す形で、リーネが話を振った。

「確か扶桑海事変で活躍した『扶桑海三羽鳥』の一人でしたよね？」

扶桑海事変中、宮藤理論を採用した97式戦闘脚にしたのを機に目覚ましい活躍を見せ、『扶桑海三羽鳥』と呼ばれた扶桑皇国陸軍の穴拭智子、加藤武子、加東圭子及び古式

劍術の使い手である黒江綾香——通称『魔のクロエ』。彼女ら4人の上官で、当時扶桑皇国陸軍飛行第1戦隊の戦隊長を務めていた江藤敏子。優人や坂本の師にして上官——『軍神』北郷章香。現在カールスラント空軍ウィッチ隊総監の地位にあり、当時観戦武官として事変に参戦していたカールスラントウィッチ——アドルフイーネ・ガランド。

教練中、ずっと考え事をしていた芳佳とは違い、優人の話を真面目に聞いていたリーネの頭には、扶桑海事変で活躍したウィッチや扶桑皇国軍将兵の名前はすべて頭に入っている。

「ああ、『扶桑海の巴御前』って呼ばれてて、宣伝映画の主役にも選ばれていた俺達の先輩さ」

「優人さんと坂本少佐は穴拭さんと親しかったんですか？」

「まあ面識はあるし、一緒にネウロイと戦ったりしたけど。親しいってほどじゃないな」

優人は腕を組み、一息吐いてから言葉を続ける。

「俺はどちらかと言えば、圭子さんに世話して貰ってたからな」
「加東圭子さん、ですか？」

リーネが確かめるように訊くと、優人は小さく頷いた。

「俺の射撃技術は、圭子さんにご指導を賜って磨いた物だからな」

「ふえ〜」

リーネは感嘆の声を漏らした。人に歴史あり、優人や坂本のようなエースも芳佳やリーネと同じく右も左も分からない新人時代を過ごし、先達の指導を受けて成長してきた。当たり前のことであるが、改めて考えると感慨深いものがある。

「ところで芳佳」

少しばかりの昔話を終え、優人は芳佳に向き直った。

「お前は何でそんな不景気な顔してるんだ？」

「……うん、あのね」

芳佳は順を追って一つずつ話し始めた。基地の整備兵におはぎを差し入れた時のこと、芳佳が赤城の少年兵からラブレターらしき手紙を貰ったこと、ミーナが基地の規則を理由に手紙を突き返してしまったこと、扶桑人形のお礼を兼ねた赤城の見送りにいけないこと。

優人は真剣な面持ちで、時折相槌をうちながら芳佳の話に耳を傾ける。しかし、さすがはシスコンというべきか「芳佳がラブレターを貰った」の件で一瞬だが、不機嫌そうに眉を顰めていた。表情の微妙な変化にリーネは気付いていたが、気にしないことにした。

「なるほどねえ……」

大体の事情を理解した優人はソファチェアに腰を下ろし、天井を仰ぐ。

「何でミーナ中佐は、男の人と仲良くしちやダメだなんて……」
今まで気にしていなかったリーネも芳佳と同じ疑問を口にする。

よくよく考えればおかしな話。柔軟な思考と広い視野を併せ持ち、システマチックな軍隊において各々の個性を重んじて活かす統合戦闘航空団の特性を表したような性格のミーナ。やることさえやっていけば、シャーリーのストライカーユニットの改造やルツキー二の隠れ家作り等の自由過ぎる行動も容認している彼女が優人を除いた男性陣との接触を禁ずる、という他の統合戦闘航空団にはない規則をわざわざ作り、このことに関しては何子定規になって譲らない。

ウィッチが他の将兵と男女の仲になることで軍務に支障が出ることを懸念しているのかもしれないが、軽い世間話すら許さない徹底ぶりに加え、基地の男性陣のほぼ全員を殊更に冷遇するやり方は少々異常である。

「お兄ちゃん、何か知らない？」

芳佳の問い掛けに対し、優人は少し間を置いてから

「……悪い、俺もよくは知らないんだ」

と言葉を返した。

「そっか……」

再び表情を曇らせる芳佳。優人はそんな妹を見て胸を痛めた。ミーナが男性陣に

ウィッチとの接触禁止を厳命する理由を本当は知っている。しかし、それはミーナのプライベートに関することで、規則を作った理由の半分は彼女の私的なもの。

信頼する上官であり、親しい友人でもあるミーナの心情を明かして、泥をつけずに二人に話す上手い方法が思い付かず、敢えて「知らない」と言っただけだ。

「納得出来ないだろうけど、軍にいる以上命令や規則は絶対だから……」

「でも、こんなの絶対おかしいよ」

「芳佳ちゃん……」

優人の言葉にも、ミーナの規則にもやはり納得がいかず、己の心情を訴える芳佳。リーネもまた、彼女を気遣い哀しげな声を漏らした。

（仕方ないな……）

物憂げな妹の姿を見て、居たたまれなくなった優人は踵を返して廊下へと向かう。

「どこへ行くんですか？」

「ん？部屋に戻って寝るんだよ。明日は出撃なんだから、二人も早く寝ろよ」

リーネの言葉にそう返すと、優人は部屋から出ていった。



数時間後、ミーナの部屋――

501部隊司令を務めるミーナの私室は他の隊員よりも一回りほど大きい。室内にはカールスラントから持ってきたのだろうソファにスツール、デスク、立派な飾り時計とアップライトのピアノ等が置かれている。シンブルだが女性らしい部屋だ。

カールスラント空軍の制服から寝間着のキャミソールに着替えたミーナがベッドに入ろうとした矢先、深夜にも関わらず来客があった。優人だ。

この時間帯は夜間哨戒に出たサーニャ以外は皆眠りに就いていて、ネウロイの襲撃でも無い限りは誰も起きてはこない。そんな時刻に耳朶を打ったドアのノック音。ミーナは思わず身構えたが、相手が優人だとわかると警戒心を弛めて室内に招き入れた。

「どうぞ？」

ミーナは手でソファを指し、座るよう促す。優人が一言「失礼」と言つて座るのを確認したミーナも自らはベッドの端に腰掛ける。シーツに包まれたマットが僅かに沈んだ。

「こんな時間に女性の部屋へ押し掛けるなんて……あなたはもう少し紳士的だと思つただけれど？」

ミーナが溜め息混じりに嫌味を言う。親しい間柄とは言え、男性に無防備な姿を晒すことに抵抗がある彼女はキャミソールの上にカーディガンを羽織り、胸元を庇うように

して腕を組んでいる。

「悪い、急ぎの用があつて」

軽く弁明する優人。いつもの彼ならミーナのキャミソール姿に目移りしてしまうだろうが、話の内容が内容だけに彼女の顔をジッと見つめている。

「それで？」

「昼間に芳佳が貰った手紙の話だけど……何も突き返すことな——」

「美緒にも言ったことだけど、ウィッチとの必要以上接触は厳禁。そういう決まりだからよ」

「俺という例外を除いて……な」

ミーナが隊規を持ち出すことは優人も予想していたらしい。わざと嫌味つたらしい言い方をする彼にミーナは不快感から眉を顰めた。

「優人……あなたにはいろいろと助けて貰っているから言わないようにしていたけれど……」

そこまで言つて一呼吸置いたミーナは、軽く目を伏せて言葉を続けた。

「少し芳佳さんを甘やかし過ぎているんじゃないかしら？」

「……………」

普段の彼女からは考えられないほど冷淡な口調のミーナに、優人は片眉を僅かに動か

しつと沈黙で応じる。

「あなたはウィザード、他の兵とは違うのよ」

「どう違うんだ？」

決して仲の悪くない、むしろ良好な関係のミーナと優人。二人からは険悪な雰囲気か醸し出されている。その様子を見ると芳佳をスカウトしようとした坂本と睨み合っていた時の優人を思い出される。

「説明しなければそれが理解できないほど、あなたは浅はかな人間ではないはずよ？」

戦闘隊長であり、優人を501に引き抜いた張本人でもある坂本は、男女の違いこそあれ同じ航空歩兵にまでウィッチとの接触禁止を命じることに難色を示していた。ミーナもまた日頃からのコミュニケーション不足が作戦行動時の連携にまで影響を及ぼすことを懸念し、彼のみ特例扱いとなっている。

優人とウィッチ達の交流を温かく見守っているミーナだが、ヘルシンキの会議に優人を同行させたり、艦で片道1ヶ月ほどかかる扶桑への一時帰国を命じたりと、基地要員に対してほど露骨ではないにしても501のウィッチ達と物理的な距離なを置かせるような試みも時折見られた。

「せめて、見送りだけでも許可してくれないか？」

「明日は出撃よ。あなたも知っているでしょ？」

「なら赤城の出航より先にネウロイを倒せばいいわけだな？」

「それは——」

「頼むよ、この通りだ！」

優人は頭を下げて懇願する。世話になった艦を見送るという妹のささやかな願い、甘いと言われようとそれだけは譲れなかった。

「……考えておきます」

「恩に着る」

優人の気持ちを多少は汲み取ったらしい、頭には入れておくつもりのみいな。しかし、却下はされなかったもののすぐに許可は出来ないようだ。

「じゃあ、俺はそろそろ御暇するよ」

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

軽く挨拶した優人は踵を返し、部屋を出ようとドアへ向かう。

「どうしたの？」

と、問うみいな。優人はドアノブに手を掛けたところで手を止めていたのだ。

「……みいな、俺も父さんを亡くしてる」

みいなに背を向けたまま、優人はゆっくりと口を開いた。

「大切な人を失ったお前の気持ち……すべてとは言わないけど、幾らかは理解しているつもりだ」

「……………」

「ミーナ、一つだけ聞かせてくれ。お前は人を愛したことを後悔してるのか？」

「っ——」

ミーナの瞳に少なからず動揺の色が映る。同時に自分の領域に土足で踏み込まれた不快感から、優人の背中を睨みつけた。

「悪い、余計なことだったな」

優人は謝意を述べると、ドアを開けて部屋から出ていった。ひとりになったミーナの胸には優人の言葉が突き刺さっていた。

——愛したことを後悔してるのか？

「私は……私は……」

◇ ◇ ◇

深夜、基地食堂——

食堂内にはテーブルの椅子に腰掛け、グラスで酒を呷る者が一人——優人だ。ミーナ

の部屋を訪れた後、自室に戻るも寝付けなかった彼は寝酒を飲み、食堂まで来ていた。傍らには現在ロンドンの酒蔵で購入した麦焼酎の瓶がある。

この麦焼酎は502のロスマンに教えても貰った酒蔵で購入した物だ。扶桑より移住した人々や弟子として迎え入れた現地のブリタニア人や大陸からの難民が中々本格的な酒造を行っていた。

芳佳とロンドンへ出掛けたあの日、門限までに基地へ帰れなかった優人はこの酒蔵で購入した数本の焼酎のうち、少々高価な芋焼酎を献上することでミーナのご機嫌を取ることに成功している。

「ふう……」

身体から力を抜くかのように優人は息を吐いた。同時にグラスの中でカラン、という氷同士がぶつかる音が彼の耳朶を打つ。

賑やかな食事時とは違い、優人しかいない深夜の食堂を静寂が支配している。大勢で騒ぐことが嫌いなわけではないが、僅かな音が空間全体に響き渡るかのような静けさに心地好さを感じている。その一方で耳に残るミーナの言葉に煩悶していた。

——芳佳さんを甘やかし過ぎているんじゃないかしら？

「その通りだな……」

そう独り言ちた優人はグラスを傾け、中の麦焼酎を一気飲みする。

(今のままじゃ、ダメだよな)



1935年10月扶桑皇国、横須賀——

鮮やかな朱色の紅葉が舞う秋晴れの日。市内に建っているとある小学校では授業参観が開かれていた。

4年生の教室では、生徒達が親を題材に書いた作文を順番に読み上げていた。内容は主に自分の父親ないし母親が就いている仕事のこと、家庭内でのこと、旅行へ連れて行って貰ったこと等。一人が読み終わる度に教室内で拍手が起こり、親は我が子の作文に感動して目に涙を浮かべていた。

「次は……宮藤優人君、読んで下さい」

「はっ、はい！」

クラス担任の女性教師に差され、幼き日の宮藤優人が席から立ち上がる。緊張しているのか、声がやや上擦っている。

教室の後ろには生徒の保護者達が横に並ぶようにして立っている。その中には、優人の養父である宮藤一郎の姿もあった。

一郎は穏やかな表情で愛する息子を見守っている。妻の清佳は、二人の娘で優人の妹でもある宮藤芳佳の授業に出ているため、優人の教室には一郎だけが訪れている。

「ふうく……僕のお父さんは竹田商会という会社でウィッチやウィザードが使う飛行機械の設計をしています」

深呼吸で気持ちを落ち着かせた優人は、父が聞き取りやすいように大きな声でゆっくりと作文を読み始めた。出だしから察するに、内容は一郎の仕事について書いた物らしい。

「父さんは、会社内では腕利きの設計師として尊敬されています。でも、会社の人から聞いた話だと成功より失敗の方が多いいみたいです」

優人がそこまで読み上げると、教室内が笑いに包まれた。生徒、担任、保護者達の視線が一斉に一郎に向けられる。

「あ、あははは……」

恥ずかしそうに表情をひきつらせる一郎。優人は振り返って悪戯っぽい笑顔を父に向けると、また前を向いて続きを読み出した。

「けど、成功した時の父さんの発明はすごいものだど皆が誉めてくれます。また、どんなに忙しい時でも父さんは家族のことを忘れたりはしません。僕を、妹を、母を愛してくれています。そんな父さんが、僕が大好きです。終わり」

読み終えると同時に、今度は盛大な拍手が教室全体を包みこんだ。優人は「大好き」と言ったことが少し恥ずかしいのか、作文用紙で顔を隠しながら席に着く。一郎は、その後ろ姿を誇らしげに見つめ、心中に感謝を述べた。

（ありがとう、優人）

◇ ◇ ◇

1939年8月ブリタニア——

「どういふことだよ!？」

ブリタニアのとある田舎街に存在するストライカーユニットの共同研修所。その地下にある研究資料や工具が散らかった一室には扶桑海軍少尉にしてウイザードでもある宮藤優人が、新理論を採用したストライカーユニットの開発者である父——宮藤一郎に対し、怒りに身体を震わせて詰問していた。

「何で……どうしてあんな物を!？」

優人は一郎に視線を向けたまま、部屋の奥にある円形状の水槽を指差した。特殊な液体で満たされた水槽内には正十二面体の水晶のような物体が妖しく輝いている。

「あれが何か分かってるだろ!？」

「……………」

「俺のっ！…………俺達の力を信じてくれてたんじゃないのか!？」

「……………」

「黙ってないでなんとか言えよ！」

「……………」

父に食って掛かる優人。しかし、当の一郎は何も答えようとせず、真つ直ぐ優人を見据えるだけだった。

言い訳はしないが、理由を話してくれる訳でもない。だんまりを決め込む一郎に、優人は苛立ちを募らせていく。そして、感情任せに思つてもいないことを口にし始めた。

「血の繋がらない他人と話すことは何もない、つてか？」

—— 止せ。

「それは違つ——」

「黙れ！」

—— やめろ。

「許さない…………」

—— それ以上言うな。

「何がお前には力がある、だ…………」

己の口からは吐き出される言葉を止めなければ、きつと何か事情があるんだ、父を傷付けてはいけない、と思いつながらも優人は自分の心を制御することが出来なかった。

「あんたを父親とは認めないっ！」



1944年8月現在、ブリタニア第501統合戦闘航空団基地――

「……………さん……………優人さん……………」

「う、うくん……………」

誰かの声が眠っている優人の耳朶に触れた。歌手を思わせる澄みきった小気味良い声。声の主は語りかけながら優人の身体をユサユサと優しく揺らしていた。触れている手は小さく、柔らかい。どうやら女性――いや、少女のものらしい。

まだ眠りの淵に片足を突っ込んでいる状態の優人。夢と現実の区別がついていない。目蓋が開かず、身体は鉛のように重い。さっぱり働かない頭では、聞こえる声が誰なのかも分からない。

ふと扶桑の典型的な朝食を想起させる炊きたてのご飯の香りが優人の鼻を刺激した。

（ああ、夢か……………）

自分は501基地宿舍の自室で眠っている筈だ。ウィッチの誰かが起こしてきたとしても部屋で朝食の匂いを感じるわけがない。優人は寝惚けた頭で、そう結論付けた。

「……………あと5分」

夢ならば起きる必要はない。そう思い、お決まりの台詞を言う

「寝ンナツ！」

「いつ!?!」

自分を起こしていた人間の物とは別の、特徴的な声が耳朶を打つ。やや遅れて鈍い音も響き、優人の後頭部頭に痛みが走った。

「いつつ……………あれ?」

痛みに耐えながら優人が顔を上げると、目の前にサーニヤとエイラの姿があった。サーニヤは不思議そうに、エイラは不機嫌そうに優人の顔を見つめていた。

「サーニヤ、エイラ。俺の部屋で何してるんだ?」

「食堂がオマエの部屋ナノカヨ」

「……………えっ?」

エイラの冷やかな突っ込みを受けて、優人は室内を見渡す。彼女が言った通り、優人は自室ではなく食堂のテーブルに突っ伏して眠っていた。窓から射し込む朝日と小鳥達の囀り音が、1日の始まりを告げている。

段々と頭が回り始め、昨夜自分が寝酒を嗜んでいたことやいつの間にか寝てしまっていたことに気が付く。

テーブルの上からグラスや酒瓶が消えているが、おそらくサーニヤ達が片付けたのだろう。

「そっか、寝ちゃってたか……」

「夜中に酒飲んで朝まで眠りこけるナンテ。随分とイイ身分だな」

自分をジト目で見据えて嫌味を言うエイラに、優人は苦笑を返した。

「悪い悪い、つてもうこんな時間か。朝飯用意しないとな」

時計を確認すると同時に自分が朝食当番だったこと思い出した優人は、ゆっくりと腰を上げる。

「あの、これ……」

サーニヤがキツチンカウンターを指差した。

「……えっ？これって？」

カウンターを見てみると、大皿一杯のおにぎりがお置かれていた。

「おにぎりです。扶桑の料理本で作り方を見たことがあって……優人さん、おやすみだったから……作ってみました」

雪のように白い頬を僅かに紅潮させ、サーニヤはか細い声で説明する。

「じゃあ、俺の代わりに？」

「……はい」

「そういうことだ！」

サーニャは照れながら、エイラは胸を張って答える。よく見ると二人ともエプロンをしている。サーニャにはネコペンギンが、エイラのエプロンにはフードを被った黒い小人のような絵が描かれている。

「二人共、ありがとう！」

優人は笑顔で礼を述べると、キッチンカウンタ―に視線を戻した。皿に盛られたおにぎりのうち、半分は見事な三角形になっているが、もう半分はやや歪なものとなっている。前者はサーニャの、後者はエイラの作品である。

「食べてもいいかな？」

「どうぞ」

「夜間哨戒明けで疲れているのに、わざわざ作ってやったんだカラナ。心して食べるヨ」
二人の了解を貰った優人は、丁寧に作られたサーニャ作のおにぎりに手を伸ばす。おそらくは初めてだろうが、形はもちろん、海苔も綺麗に巻かれていて、サーニャの料理の腕と女子力の高さが垣間見える。

「頂きます」

おにぎりを手に取り、まず一口食べる優人。その美味しさと意外な中味に目を丸くする。

「ん〜♪美味しい。中身沢庵なんだな？梅干しかと思っただけど」

「冷蔵庫に余ってたから使いました。ダメですか？」

サーニヤが心配そうに訊ねる。

「合わないことはないけど、おにぎりとは別に食べることの方が多いかな？」

「ウルサイツ！サーニヤの料理にケチつけるヤツはこうダツ！」

優人の言い分が気に入らなかつたエイラは、優人の手から食べかけおにぎりを奪い取り、パクリと食い付いた。

「おっ、おい！エイラ！」

「文句言つて、早く食べないのが悪いンダゾ！」

優人を睨みつつ、エイラはサーニヤの手作りおにぎりを頬いっぱいに味わう。飲み込んだ瞬間、彼女は至福の表情を浮かべた。

「いや、そうじゃなくて……それ俺の食べかけだから」

「エイラ、優人さんと間接キスしちゃってるわ」

「エツ!?!」

二人の言葉に数秒間思考を停止させたエイラだったが、やがて意味を理解し、顔を

真っ赤にして怒鳴った。

「な、な、ナンテことするンダアアアアアア!!」

耳をつんぎくようなエイラの怒鳴り声。優人とサーニヤは、反射的に両手で耳を塞いだ。

「サーニヤならともかく、どうして兄藤ナンカと！気色悪い！」

「そこまで言わんでも……」

意中にならない異性との間接キス。大抵の女性は嫌がるだろうが、ここまであからさまに嫌悪感を示されると男としてショックを通り越して心が折れそうになる。エイラほどの美少女からなら尚更だ。

「て言うか、サーニヤならともかく……つて？」

「う、ウルサ〜イ！余計な詮索するナ！エ口藤！」

「はっ!?!エ口藤!?!」

あんまりなアダ名を進呈され、優人は条件反射で絶句する。

「ソウダ！風呂を覗くような痴漢にはこれで十分だ！」

動揺のあまり過ぎたことを蒸し返すエイラ。その言葉を聞き、初めて父親以外の男に裸を見られた時のことを思い出したサーニヤは、視線を床に向けて落とし、エイラ並みに顔を真っ赤に染める。

「そんな……あれはわざとじゃないよ。それに俺だつて見たくて見たわけじゃ——」
「ナンダと!?ワタシ達の裸に見る価値ナンテナイって言いたいのカ?」

「いや、そんなことは……お前達は二人共色白の綺麗な肌してるし。エイラなんて、歳の割りにいい身体して——」

「ヘンタイ!ヘンタイ!ヘンタイ!!」

「ぶっ!」

茹で蛸の涙目になったエイラは、優人の顔に己のエプロンを叩きつけると全力疾走で部屋から飛び出していった。

残った二人の間には暫しの沈黙が訪れる。サーニヤは以前視線を下げっており、優人も罰が悪そうに頭を掻いている。

「あ、あの……」

沈黙を破つたのはサーニヤだった。

「お風呂のこと……もう、気にしてませんから……」

健気に優人を気遣うサーニヤだが、その表情は赤みが差したままである。

「あく……でも俺が不注意だったわけだから……って、これどうしたんだ?」

優人はサーニヤの手に何枚か絆創膏が貼られていることに気付き、驚愕する。

「あつ……これは包丁で指切っちゃったり、炊きたたのご飯で火傷しちゃったりして……」

普段のサーニヤなら料理中に怪我などしない筈だが、夜間哨戒明け故に寝不足だったことで注意力が散漫になっていたらしい。

「ピアノリストにとつて指の怪我は致命的だろ？大丈夫か？」

優人はそう言うのと、心配そうな表情でサーニヤの両手を取る。

その時だった。突然、優人の身体から使い魔の柴犬——『紗綾』の耳と尻尾が現れ、手には光が灯り出した。その青く、温かく、優しい光は芳佳や母達が使う治癒魔法の光だった。

「えっ？」

「あっ……」

サーニヤはもちろん、優人自身何が起きているか理解できずに気の抜けた声を漏らした。

光はサーニヤの傷を癒し、ピアノの奏でる繊細で綺麗な手に戻していった。光が消えると共に手から痛みが無くなったことに気付いたサーニヤは絆創膏を剥がして両手の平を確かめる。

「……治ってる」

サーニヤは驚き、目を見開いた。治癒魔法に驚いたのではない。攻撃魔法を使うはずの優人が、芳佳とまったく同じ治癒魔法を使ったことに驚いているのだ。

「優人さん、これって……」

「俺にもわけが……」

突然発動した治癒魔法。優人の中の驚愕は僅かな動揺に変わっていた。

第32話「深紅のドレスと戦場の歌姫」

朝食時、宿舎食堂――

「じゃあ、お兄ちゃんはこので寝てたんですか？」

と、サーニヤとエイラに確認する芳佳。夜間哨戒の疲労と眠気が本格的に出てきたのか、サーニヤはウトウトと舟を漕いでいる。半睡状態のサーニヤを支えながらエイラが応じる。

「夜間哨戒から帰ってお茶を飲もうと食堂に来てみたら、オマエのアニキが寝てたんだ。びっくりしダゾ」

エイラは優人が突っ伏して眠っていた席を指差し、不満げに唇を尖らせる。

ほんの10分程前、優人と一悶着あったエイラは脱兎の如きスピードで食堂を出た。数分程、自室に戻って頭を冷やしていたが、愛しのサーニヤとヘンタイ（優人）を二人きりしてしまったことに気付き、慌てて食堂に舞い戻ってきたのだ。

「あたしもびっくりしたよ」

モグモグとおにぎりを食べていたシャーリーが、芳佳とエイラの会話に合いの手を入れる。

「ライスボールかと思つて食べてみたら、具も塩気もない米の塊だったなんて……」
「うじゅ……味しなくい」

シャーリーとルツキーニが食べているのは、エイラが作ったやや形の崩れたおにぎり。塩も具も海苔も無く、白米のみで味気も無い。不味くはないが食い切れたものでもない。

元々料理上手なサーニヤならいざ知らず、出来る料理がサンドイッチ程度のエイラに西洋とは勝手が違う扶桑の料理は難があつたようだ。

「エイラのおにぎりは微妙だけど、サーにゃんのは美味しいよ〜」
「……………」

シャーリー、ルツキーニに続くハルトマンのストレート過ぎる感想に、エイラは不愉快そうに片眉をピクピク動かす。

テーブル中央の大皿には二人が作ったおにぎりが山のように盛られているが、サーニヤのおにぎりは次々消えていくのに対し、エイラのおにぎりには中々手が伸びない。
「で、でも……これなら扶桑のお米の味がよく分かりますよ?」

「具と塩と海苔は用意しましたから、皆さんのお好みでどうぞ」

エイラをフォローするリーネと厨房から具材を取ってきた芳佳。梅干、鮭、おかかと定番の具材が皿に盛られてテーブルに並べられる。

余談であるが、『おおか』という鯉節の呼び名は皇室の宮中に住む女官が使っていた独特の言葉で、それが広く一般にも使われるようになったそうなの。

「そう言えば、坂本少佐はどちらに？」

「ミーナ隊長と優人もいないね？」

朝食の席に姿を見せない上官達の所在を、ペリーヌとルツキーニが訊ねる。すると、

サーニヤが一瞬だけ眼を開け――

「優人、さんは……おにぎり食べて……お部屋に……」

と、だけ言うとテーブルに突っ伏して再び夢の中へ沈んでいった。エイラが戻ってきた頃には、優人は既に朝食を済ませて食堂を出ていた。着替えとその他の身嗜みを整えるためだろう。

「ミーナは昨日やり残した書類を片付けてから来るって……少佐は朝練してたみたいだし、シャワーじゃない？」

と、ハルトマンが残りの二人のことを説明する。

「それにしても優人め。深夜に酒盛をして酔い潰れるなど、弛んでいる証拠だ」

「そんなカリカリすんなよ。優人だって寝つけなくて酒が欲しくなることもあるんだろ？」

手厳しいバルクホルンをシャーリーが宥める。

「普段から規則正しい生活をしていれば、自然と眠りに就けるはずだ。酒に頼ることはない」

不機嫌そうに眉間にシワを寄せ、おにぎりにパクつくバルクホルン。食べているのはエイラのおにぎりだが、機嫌が悪いのは味が微妙だからではなさそうだ。

「そんなこと言って、トウルルーデだって昨日は眠れなかったんじゃないの?」

「ん?」

口元に米粒をつけたハルトマンがニヤニヤと笑みを浮かべながらバルクホルンの顔を覗き込む。バルクホルンは扶桑茶をすすりながら横目で怪訝そうな視線を送る。

「優人に胸揉まれたことを思い出して、ムラムラしちゃってさ♪」

「ツ!?ゲホゲホツ!ハルトマン!な、何を言い出すんだ!」

ハルトマンの口から飛び出た予想外且つ破廉恥な発言にバルクホルンは咽返る。

「男に触られたのがきっかけて遂にトウルルーデにも遅めな思春期が——ぎやつ!」

「調子に乗るな!!」

鍛え上げた拳で下品な戦友を黙らせるバルクホルン。

「いったあゝい。コブできたじゃん!トウルルーデの暴力女ツ!」

ハルトマンがすぐさま抗議するも、バルクホルンはフンと鼻を鳴らしてそっぽ向いて

しまう。

「何だ何だ？カールスラントの堅物大尉殿はムツツリスケベだつたのかあ？」

「ムツツリイ♪スケベエ♪」

ニヤついたシャーリーがバルクホルンを茶化すと、ルツキーニもその尻馬に乗る。しかし、ルツキーニはムツツリスケベの意味を理解しておらず、ただバルクホルンをからかってはしゃいでいるだけである。

好き勝手言う二人に対し、バルクホルンは頬に青筋を浮かべて必死に怒りを抑えていた。

「まったく、騒々しいですわね」

食事を終え、ナプキンで口元を拭いていたペリーヌはシャーリー達の言動に呆れて独り言ちる。

朝から晩までとにかく騒がしい501基地。嫌いではないがせめて食事時ぐらいは静かにして欲しい、とガリアの貴族令嬢は切実に思う。

「あれ？ペリーヌさん？」

厨房からお茶の御代わりを持ってきたリーネ。改めてペリーヌの顔を見て、彼女がいとも違うことに気付いた。

「眼鏡、どうしたんですか？」

美しいブロンドの髪、自己調達の青い制服と並んで己のトレードマークである眼鏡を

ペリーヌは掛けていなかった。以前、寝坊して忘れたことがあったが、今日は余裕を持って起床してきたため、忘れたわけではなさそうだ。

「え？ああ……き、今日からコンタクトにしましたの」

「イメチェンですか？」

「まあ、そんなところですよ」

リーネの問いに答えると、何故かペリーヌ頬を染めて気まずそうに目を逸らした。そして彼女の言葉が終わると同時に――

ウウウウウウウウウウ!!

と、基地内にネウロイ出現の警報が鳴り響いた。



約1分前、宮藤優人の部屋――

朝食を軽く済ませて自室に戻った優人は、扶桑海軍の制服に着替えていた。

顔を洗い、食堂で眼を覚ました時は寝癖がついていた髪もキツチリ整えられ、人前に出ても恥ずかしくない姿となっている。

「……何だったんだ？さっきのは？」

ベッドに腰を下ろし、神妙な面持ちで両手の平を見つめる優人。

食堂で彼の手から発現し、サーニヤの手の傷を治した光は紛うことなき治癒魔法。妹の芳佳、母の清佳、祖母の芳子等、秋元家に生まれた女性が一族の血と共に受け継いできた癒しの力だ。養子であり、両親の血を引いていない優人が使えるような代物ではない。

「一体………うつ?!………」

じつと手を眺めていると、頭に頭痛が走った。同時に3つの映像が優人の脳裏に浮かび上がる。

一つは和風造り家の屋内、一つは降り積もった雪で白銀に染まっている田舎の風景。どちらも身に覚えのない景色だが、何故か懐かしく感じる。

そして、もう一つは長い黒髪をした優しそうな女性がこちらに向かって微笑んでいる映像だ。

（この人は……誰だ!?)

顔立ちからして扶桑人、歳は20歳前後から20半ば程。前述の二つの映像と同じく、覚えはないが何処か懐かしい感じがする。女性は艶やかな唇を開き、何を語り掛けている。

（何だ?何を言っている?)

現れた映像はまるで就寝時に見る夢のようにフワフワとしながらも強く現実味を帯びている。おそらくは過去の記憶、優人が宮藤家に引き取られる以前のもの。

そう直感した優人は必死に思い出そうとするが、後一步のところまでシャットアウトされてしまう。

ウウウウウウウウウウ!!

「——ッ!? 敵襲っ!?!」

基地の警報が耳朶を打ち、優人は一気に現実へ引き戻された。すぐさま部屋から飛び出し、ブリーフィングルームへ向かって駆け出した。

◇ ◇ ◇

ブリーフィングルーム——

警報を聞き、501のメンバーはブリーフィングルームに集合していた。壇上に上がったミーナの言葉に、一同は耳を傾ける。

「ガリアから敵が進行中との報告です」

「今回は珍しく予測が当たったな」

皮肉めいた笑みを口元に湛える坂本。ミーナは「ええ」と頷き、報告内容を補足する。

「現在の高度は15000。進路は真つ直ぐこの基地を目指してるわ！」

いつも通り簡潔に状況を説明するミーナ。昨晚、優人の一言で現れた動揺は既に瞳から消えているように見える。少なくとも表面上は。

「よしー」

席から立ち上がった坂本は、勤務表を確認しながら指示を出す。

「今日の搭乗割りは……バルクホルン、ハルトマンが前衛！ペリーヌとリーネが後衛！宮藤兄妹は私とミーナの直掩！シャーリーとルツキーニ、エイラとサーニャは基地待機だ！」

「お留守番〜お留守番〜♪」

「ユニットのセッティングでもするか……」

歌を口ずさんで楽しげなルツキーニと趣味に興じるつもりでいるシャーリー。二人は真剣な面持ちの出撃メンバーとは対照的にはお気楽な様子を見せている。

夜間哨戒と朝食作りで疲れているサーニャは枕を抱いて眠っていきおり、「スー……スー……」と可愛らしい寝息を立てている。

ここまではいつもと変わらぬ501の日常風景である。しかし、いつもと違うところもある。一つは何故かエイラの姿がないこと、理由は優人とサーニャの二人のみが知っている。そしてもう一つは――

「お兄ちゃん、一緒に出撃だね」

「ああ、そうだ——」

そこまで言い掛けて優人はハツとなり、緩んだ表情を引き締める。

「芳佳、遊びに行くんじゃないんだぞ」

「あつ……うん、ごめんなさい」

久しぶりに大好きな兄と一緒に空を飛べる、と大いに喜ぶ芳佳だったが、優人は彼らからぬ厳しめな言動を取った。

てつきり笑顔で「そうだな」「一緒に頑張ろう」と言ってくれると思っていたので芳佳はしょんぼりとする。

「お前達、どうかしたのか？」

宮藤兄妹の私語を耳で捉えた坂本が二人を交互に見ながら訊ねる。優人は小さく首を振って応じる。

「何でもないさ」

「む？・そうか……」

付き合いの長さ故か、優人の態度に僅かながら違和感を感じ取っていた坂本。しかし、ネウロイが接近中なこともあり、それ以上は追及しなかった。

「よし！準備にかかれ！」

坂本の号令を受け、優人ら出撃メンバーはハンガーへ向かう。

（お兄ちゃん……どうしたんだろう？）

芳佳は移動中、何の前触れもなく自分への態度が激変した兄——優人の背中を怪訝そうに見つめていた。自分が何かしてしまったのか、と思ったが心当たりがない。強いて言えば昨日優人の教練をちゃんと聞いていなかったことぐらいだが、優しい兄がそれくらいで自分に辛く当たるとは思えない。

到着するなり優人は自身のパーソナルマークの柴犬が描かれた零式を履き、エンジンを始動させる。発進ユニット側面の武器ラックからS—18対物ライフルを取り出し、弾薬の装填を確認する。

いつもなら隣の発進ユニットでストライカーを始動している芳佳を心配して「大丈夫か?」「緊張していないか?」と過保護気味に訊く優人だが、今日はそれもなし。まるで芳佳を避けているかのようだ。

「いっつてらっしや〜い!」

元気一杯に手を振るルツキーニ、愛機の整備をしにハンガーに姿を見せたシャーリーに見送られ、優人は妹やウィッチ達と共に大空へと飛び立った。



数分後、ドーバー海峡上空――

「敵発見！」

基地を発つてほどなく、坂本が遠方より接近中の飛行物体を視認する――ネウロイだ。

「タイプは？」

「確認する！」

ミーナに詳細を問われ、坂本は敵を見定めるため眼帯を外して魔眼を発動させる。巨大なキューブ状の大型ネウロイが見えた。

「300m級だ！いつものフォーメーションか？」

坂本がミーナに確かめると、彼女は「そうね」と短く返す。

「よし！突撃！」

坂本の号令を合図にウィッチ達が動く。まず前衛のバルクホルン隊が先行し、ペリーヌ隊がそれに続いた。

501だけではない。己の存在を脅かす天敵の接近を察知したネウロイもまた迎え撃つため、戦闘態勢に入る。

「えっ!？」

「なにつ!？」

驚きの声を上げるハルトマンとバルクホルン。二人がネウロイに照準を合わせた瞬間、ネウロイは300mの大型から多数の小型に分かれたのだ。

「分裂した!？」

「こんなネウロイもいるのか!？」

部隊内で実戦経験が一番長い自分達でさえ見たことのないタイプのネウロイ。優人と坂本は驚きの声を上げる。

「右下方80、中央100、左90」

一方のミーナは冷静だった。彼女の固有魔法『三次元空間把握』を使い、小型に分裂したネウロイの数と位置を把握する。

「総勢270機分か。勲章の大盤振る舞いになるな!」

呆れたように言う坂本。各個体に見た目以上の戦闘能力は無さそうだが、数が厄介だ。注意を怠ろうものなら、あつという間に包囲され、袋叩きにされかねない。

「あなたはコアを探して」

「了解」

「バルクホルン隊、中央」

「了解」

「ペリーヌ隊、右を迎撃」

「了解」

「優人、あなたは私についてきて。左の90機を叩くわよ！」

「了解」

次々との確な指示を出していくミーナ。統合戦闘航空団司令の名に恥じぬ采配に感服しつつ坂本、バルクホルン、ペリーヌ、優人が順に応じる。

「芳佳さん、あなたは坂本少佐の直掩に入りなさい」

「了解！」

「いい？ 貴方の任務は少佐がコアを見つけるまで敵を近づけないことよ」

最も経験の浅い芳佳。緊張した面持ちの彼女を振り返り、ミーナはやるべきことを細かく伝える。

「はい！」

芳佳が応じるとミーナは身を翻し、敵の真っ只中へ突入していった。芳佳、坂本以外の隊員も彼女に続く——戦闘開始だ。

先陣を切ったミーナのMG42と優人のS-18の銃口から無数の銃弾が放たれ、ネウロイ群を次々と破片に変えていった。二人に負けじとWエースも戦果を上げる。

「これで10機！」

「こっちは12機！久しぶりにスコアを稼げるな！」

「ここの所全然だったからね！」

不敵な笑みを浮かべて言葉を交わすハルトマンとバルクホルン。数々の激戦を乗り越えてきた二人からは余裕が見てとれる。

「いいこと？ 貴方の銃では速射は無理だわ。引いて狙いなさい」

「はい！」

「私の背中には任せましたわよ！」

リーネに指示を出すと、ペリーヌはネウロイ群の中央へ急降下していく。

「これを使うと後で髪の毛が大変なのよね……トネール！」

ペリーヌは愚痴を零しながら固有魔法『雷撃（トネール）』を発動する。彼女の身体から放出された雷撃が周囲のネウロイを一瞬で蹴散らし、破片に変えていく。

「フーン！ わたくしにかかればこのくらい……」

ペリーヌがそう言って逆立つ髪を押さえていると、その背後に忍び寄っていたネウロイが碎け散る。そのことに気付いたペリーヌが振り返ってみると、リーネの構えるボーイズライフルの銃口から白煙が上がっていた。

同士討ちになりかねない状況でも冷静な援護射撃を決めたリーネからは自信を喪失していた新兵の面影はもはやない。

「や、やるじゃない」

言葉通りペリーヌの背中を守ったリーネ。彼女を見上げるペリーヌは複雑そうに苦笑する。

「お兄ちゃん、みんな……すごい」

上空から仲間達の戦闘を見ていた芳佳は感嘆の声を漏らす。

「あっ!?!」

実弾とビームが飛び交う中、4機の小型ネウロイが上昇し、坂本と芳佳の方へ迫る。芳佳が13mm機関銃の引き金を引くと、ネウロイは破片となつて砕け散った。

「その調子で頼むぞ!」

「はい!」

坂本の激励に芳佳ははつきりとした声で応じた。

「キリが無いよ!」

撃つても撃つても一向に減る気配のないネウロイの大群に愚痴を零すハルトマン。

「コアは一体どいつなんだ!?!」

と、苛立たしげに呟くバルクホルン。さしものWエースも残弾を気にし始めていた。

「坂本!」

「コアは見つかった?」

コアを探す坂本のところに優人とミーナが上がってきた。

「駄目だ」

「また陽動じゃないだろうな？」

リーネが初戦果を上げた時のことを思い出す優人。しかし、坂本はそれをやんわり否定する。

「それはない、コアの気配はある。ただし、どうもあの群れの中にはいない」

「戦場は移動しつつあるわね」

「ああ、大陸に近寄っているな」

ミーナと坂本は眼下に見えるヨーロッパ大陸に目を向け、言葉を交わす。

「——ッ！上っ!？」

気配を感じて振り返る芳佳。太陽を背にした数機のネウロイが急降下してきていた。

「くそっ！見えない！」

芳佳の声に反応して坂本も振り返るが、逆光で視界を遮られてしまう。

「行きますす！」

躊躇うことなく迎撃に向かう芳佳。シールドでビームを防ぐと13mm機関銃を発砲し、ネウロイを次々と撃破する。芳佳を援護するために優人とミーナも射撃を行う。

「よし！いいぞ！もう少し頼む！」

「はい！」

攻撃を続けつつ、坂本の指示に応じる芳佳。

「見つけた！」

坂本の魔眼がとうとうコアを特定した。直後にコアを持った個体は急降下し、4人のすぐ横を通り過ぎていく。

「あれなの？」

「ああ！」

降下していくコアを見据え、頷く坂本。

「全隊員に通告。敵コアを発見、私たちが叩くから」

インカム通して全体に命令するミーナ。

「了解」

と、命令に応じるウィッチ達。

「いくわよ！」

「了解」

ミーナ、優人、芳佳、坂本の4人はコアを追いかけて雲の中へ突入する。

「いた！」

雲の外に出て視界が開けると急降下を続けるコアを視認する。4人はコアに集中砲

火を浴びせた。優人の撃った一発が霞め、コアは弾かれたかのように別方向へ飛んでいく。

「逃がすかよっ!」

優人は透かさず反転し、不規則挙動を繰り返すコア持ちネウロイに照準を合わせる。トリガーを引こうとしたその時、優人の脇を芳佳が通り過ぎ、射線上に飛び出してきた。

「なっ?! 芳佳!」

優人は驚きのあまりスコープから眼を離した。彼の位置からでは芳佳とネウロイがほぼ重なって見えてしまうため、誤射する危険がある。

やむなく優人は狙撃を中止した。一方、芳佳はコアを逃がさぬように速度を上げる。同時に射撃を行い、数発の12.7mm×99弾を叩き込まれたコアは四散、白い破片となつて降り注ぐ。四人はシールドを張つて破片から身を守ろうとする。

「ッ!?!」

破片のひとつが坂本のシールドを容易に貫通し、彼女の額を霞めた。

「美緒っ!!」

気付いたミーナが悲痛な叫び声を上げる。二人より高い位置にいた宮藤兄妹や離れた場所でも戦っていたウィッチ達は誰もこのことに気付かなかった。

「芳佳ちゃんすっご〜い!」

と、芳佳に飛びつくリーネは親友の初戦果を自分のことのように喜んでいる。「フン、あんなのまぐれですわよ」

腕を組みをして、パイっとそっぽ向くペリーヌ。そこへバルクホルンがフォローを入れる。

「いや、不規則挙動中の敵機に命中させるのは中々難しいんだ」

「芳佳、やるじゃ〜ん!」

「えへへ。そ、そうかな?」

エースであるハルトマンからの賛辞をうけて、照れ笑いを浮かべる芳佳。

「芳佳」

やや遅れて優人も近寄ってくる。

「お兄ちゃん! やったよ! 私、ネウロイを——」

「何で飛び出した?」

「……えっ?」

「俺が狙撃しようとしていたのはわかったよな? 何で射線上に飛び出したんだ? 危うく撃つところだった」

周りが芳佳を誉め称えていたのに対し、優人は険しい表情で詰問するかのよう質問する。

「あつ……ごめんなさい」

「もう少し自重しろ」

「……はい」

優人の厳しめな言葉に落ち込む芳佳。何やらギスギスとした雰囲気の中、宮藤兄妹にウィッチ一同は首を傾げる。普段の優人なら妹の初戦果に大喜びしそうなものだが、一体どうしたというのだろう。

「あれ？ペリーヌ、眼鏡は？」

宮藤兄妹のやり取りでしん、としてしまった空気を何とかしようとするハルトマンが話を振った。ペリーヌは自慢のプロンドをかけあげながら、したり顔で答える。

「コンタクトにしましたのよ」

「コンタクト？何でまた？」

「眼鏡の方が使い勝手が良いんじゃないのか？」

ペリーヌが眼鏡からコンタクトに変えたと聞いて、バルクホルンと坂本が怪訝そうな顔をする。

「二人共わかってないなあ」

意味深な笑みを浮かべたハルトマンがチツチツチツ、と人差し指を振る。

「年頃の女の子が急に眼鏡からコンタクトにイメチェンなんて、異性を意識してるから

に決まってるでしょ?」

「む? そういうものか?」

顎に手を当てて、分析する坂本と

「わからないな、コンタクトにしたぐらいで何になると言うんだ?」

よくわからないと言った感じのバルクホルン。年頃の乙女らしからぬ軍人氣質を持ち合わせている二人は、戦闘以外は万事疎い。

ペリーヌが洒落つ気を出したことで、異性への意識がどう繋がるのか理解できないらしい。

「……………」

ガールズトークに華を咲かせるウィッチ達を他所に、ミーナは悲しげな表情で廃墟を見詰めていた。その視線が錆び付いた一台の車を捉えると、誰にも声を掛けることなく廃墟へ降下していった。

「ミーナ?」

「えっ?」

廃墟へ向かって降りていくミーナにバルクホルンとペリーヌが気付く。

「おーい、どこにいく——」

「待て!」

後を追おうとするハルトマンを制する坂本。

「ひとりにさせてやろう」

「……そうか。ここはパ・ド・カレーか」

坂本に言われ、バルクホルンは眼下の廃墟がパ・ド・カレーだと理解する。

「パ・ド・カレー……ダイナモ作戦か」

と、優人はミーナの後ろ姿を目で追いながら独り言ちる。

◇ ◇ ◇

ミーナは廃墟と化したパ・ド・カレーの地に降り立つとユニットを脱ぎ、車へ近付く。ドアを開けると運転席の上にある赤いリボンのかかった包みを見つけた。

「……あつ」

リボンをほどいて包みを開く、中には一通の手紙と一着のドレス。ミーナはそれが誰のものなのかをすぐに理解した。

(クルト……)

悲しみが波のように押し寄せ、ミーナは涙を流した。こぼれ落ちる涙が手紙を濡らした。

ダイナモ作戦——501が結成される少し前に実施された撤退作戦。カールラント、オスマルク、ガリアの国民をダンケルクに集め、そこからドーバー海峡を越えてブリタニアに撤退させる大規模な作戦だ。

カールラント、ブリタニア、ガリアの連合軍は遅滞戦術を繰り返し、民衆の避難が完了するまでネウロイの足止めして時間稼ぎを行った。ミーナたち501のカールラント組もこの作戦に参加していた。

民衆全てと連合軍の大部分の撤退が完了した時点でカレー基地は放棄され、本作戦に参加した全ウィッチ隊は対岸のブリタニアへ移動命令を受けた。しかし、整備兵や基地守備隊は更なる撤退を支援するため、現状を死守する命令を受けていた。彼らは自分達が撤退のための囿であり、全滅は免れないことも理解していたが、同胞を守るため、最後までに任務を全うし、その命を散らしていった。

その中にはミーナの想い人であり、彼女が小さい頃から兄のように慕っていた幼馴染でもあった整備兵——クルト・フラツハフェルトもいた。



同日夕刻前、501基地——

本日分の仕事を全て終わらせたミーナは自室に戻ると、カレー基地跡で見つけたドレスに着替えた。そして、鏡の前に立ち、ドレスを身に纏っていた自分の姿を確認する。亡き想い人——クルトから贈られたのは背中と胸元が大きく開かれた深紅のイブニングドレスだった。同じ素材で作られた夜会靴も用意されている。

(見透かされていたのね……)

まだカールスラントが健在であった大戦初期のこと。隣国オストマルクの陥落と同じくして、最前線への転属を言い渡されたミーナは音楽家になる夢を断念、コンサートホールで着るはずだった青いドレスを暖炉で燃やし、戦いに臨む覚悟決めた。いや、決めたつもりだった。

新たなドレスの贈り主——クルトは音楽を諦めきれないミーナの心の内を見抜いていたのだろう。ピアニストであっただけに繊細で器用な指をしていた彼はストライカーユニットの整備兵として軍に志願した。愛する女性と共に戦うために、愛する女性を傍で支えるために。しかし、クルトはダイナモ作戦で戦死した。生きている限り再び会うことのかなわなぬ場所へ旅立ってしまった。

(クルト。今の私を見たら、あなたは何て言うかしらね)

彼の死によって心に深い傷を負ったミーナは、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』が結成されると部隊司令の立場を利用して基地の男性陣がウィッチと必

要以上に接触することを禁じた。自分が味わった悲しみ、苦しみを若いウィッチ達から遠ざけるために。

優人に対しても、ウィザードだと割り切りながらも無意識のうちにウィッチ達から遠ざけようとしたことが数回あった。反面、心を病んだバルクホルンに意図的に近付けていたこともある。

もしかしたら心の何処かで自分と基地の現状を変えて欲しい、と思っていたのかもしれない。

「ミーナ、俺だけど？入ってもいいか？」

ふと室内に響く優人の声とノック音。それらの音に耳朵を打たれ、ミーナは現実に戻った。

「ええ、どうぞ」

ドアの方へ振り返り、言葉を返すミーナ。ドアが開かれ、優人が部屋に入ってくる。準備は整ったぞ。後は……」

ミーナのドレス姿を見るなり、言葉を止める優人。完全に開ききっていないドアのノブに手を置いたまま、じつとミーナを見据えている。

(綺麗だ……)

優人はお世辞抜きにそう思った。ミーナの緋色の髪に合わせたような深紅のドレス。

光沢のある素材が上品さと優雅さを演出し、身体を形作る優美な曲線をより美しく魅せている。

「どうしたの?」

「え? あ、いや……ステージの準備が出来た。後は歌姫の……お前の登場を待つだけだ」
女性らしい色香が漂うミーナを直視出来ず、優人は目を逸らした。その頬はミーナの髪やドレスにも負けないほど鮮やかな紅が灯っている。

自身のドレス姿を見て、幼い少年のようにウブな反応を示す優人のことが可愛らしく思えたミーナは口元を右手で隠しながらクスクスと上品に笑う。

「ふふふ、そう? じゃあ……」

ちよつとした悪戯心が芽生え、ミーナは優人の隣に移動すると彼の腕を取った。まるで恋人にするかのような自然な動作に優人は困惑する。

「おつ、おい! ミーナっ!」

「お迎えありがとう、宮藤大尉。このままステージまでエスコートしてくださいさる?」

「うっ……はい」

ガチガチに緊張してしまっている優人には、そう答えるのが精一杯だった。

悪戯は成功。ミーナはやや子どもっぽい笑顔を作り、静かな笑い声を上げていたが、優人の耳には自身の心臓のバクバクと激しく脈動する音しか聞こえていなかった。



数分後、501基地近海――

日が傾き始めた頃、赤城は反抗作戦に参加するため、501基地の港から出港する。甲板では芳佳に手紙を渡そうとした少年兵が名残惜しそうに基地を見詰めていた。

「やっぱり……こなかった」

と寂しそうに呟く少年兵。すると彼の耳が魔導エンジンの音を捉える。3つの影が彼のすぐ後ろを通り過ぎていき、巻き起こされた突風で飛ばされて軍帽が宙を舞う。

「あっ！」

軍帽を目で追うように少年兵は振り返る。その際、彼や甲板上にいた乗員たちが目にしたのは3人のウィッチ。

「宮藤さん！」

赤城を見送りにきた芳佳、坂本、リーネの姿だった。

「みんなありがと〜！頑張ってね〜！私も頑張るから〜！」

芳佳は赤城と並行して飛行すると、甲板の乗員たちに向かって力いっぱい手を振った。

「芳佳ちゃん、よかったね！」

「うん！ちゃんとお礼言えた」

微笑むリーネに向かって嬉しそうに振り返る芳佳。

「世話になったからな」

「はい！」

坂本の言葉に頷く芳佳。赤城の乗員たちも「ありがとう！」と芳佳たちに向かって手を振した。戦地に赴く彼らには何よりの手向けになったことだろう。

「みんな嬉しそう」

乗員たちの姿を見てリーネが言う。

「よかった」

芳佳は礼を言うことが出来たことを喜びつつ、許可をくれたミーナに感謝する。

3人が基地に戻ろうとしたその時、インカムに通信が入ってくる。赤城の艦橋でも同じものを捉えていた。

「艦長、通信が入っています」

「ん？つなげ」

杉田は通信に耳を傾ける。聞こえてきたのは歌声だった。それも聞き覚えのある澄んだ声音の旋律。

「おお！これは……全艦に繋げ！」

「了解！」

通信兵は杉田の命令に従い、歌を全艦に流した。

◇ ◇ ◇

同時刻、501基地宿舍ミーティングルーム――

歌は501基地のミーティング・ルームから送られていた。室内には優人と赤城を見送りに行った3人以外のウィッチが集まっていた。

室内のほぼ中央に置かれたマイクを前に唄っているのはドレス姿のミーナ。目を閉じ、両手を胸元の位置で合わせ、戦地に赴く男達の無事を祈るように唄う。

ピアノの伴奏はサーニャ。白魚を思わせる繊細で美しい指が、鍵盤の上を舞う。

バルクホルンは穏やかな表情でカメラを回し、部隊の記録係としての役目に精を出している。

無線の調整を担当するのは、機械全般に強いシャーリー。彼女のおかげで、基地の敷地外にいる芳佳達3人や赤城の乗員、そして501基地全域に歌を届けることが出来た。

(戦場の歌姫か……)

壁に背を預けて歌を聞いていた優人の脳裏に、ふとそんな言葉が浮かぶ。確かに今のミーナに相応しい呼び名だ。

サーニヤの伴奏に合わせてミーナが歌っているのは『リリー・マルレーン』。哀しくも美しい旋律を奏でる彼女の姿は眩しい程に輝いて見える。過去に後ろ髪引かれ、足踏みをしていた一人の少女。このコンサートがきっかけとなり、少しずつ前へと進み始めたのだ。

ウィッチとミーナの歌に送られ、扶桑海軍航空母艦赤城は夕陽に向かい去っていった。

見送りから戻ってきた芳佳たちがミーティング・ルームに顔を出すと、ちょうど歌い終えたミーナが自分の歌を聞いてくれたウィッチ、ウィザード、そして必要な機材を運ぶため宿舎への立ち入りを特別に許可された数人の整備兵に向かって、優美な所作で一礼する。やや遅れてミーティング・ルームに拍手の称賛の響き渡る。

「とつても……素敵な歌でした」

芳佳はうつとりとした表情で心からの感想を述べる。

「ありがとう」

自分の歌に感動してくれた芳佳にミーナもまた、いつもの慈愛に満ちた笑顔を返し

た。直後、芳佳の背後からエイラの手が伸びて、芳佳の柔らかな両頬を引つ張る。

「ほへ？にやにひゆるんでふか〜？（何するんですか〜？）」

「サーニヤのピアノはどうした〜？サーニヤの〜？」

引つ張っていたのはエイラだった。真つ先にサーニヤのピアノを褒めなかつたことが気に入らないらしい。

「ふおっへもふへひへひふあ〜（とつても素敵でした〜）」

「えい！もつと褒めろ！」

「ふおへへまふっへふお〜（褒めてますってば〜）」

エイラは餅のように伸びる芳佳の頬つぺを限界ギリギリまで引つ張ろうとする。室内を満たしていく一同の笑い声と楽し気な空気。ミーナの心も幸福で満たされていった。



同日、深夜――

ミーナはドレス姿のまま、自室の窓から景色を眺めていた。明かりの消えている室内にノック音が響く。ミーナが振り返ると、ドアのところに穏やかな笑みを口元に湛えた

坂本が立っていた。

「いい歌だった」

「ありがとう」

坂本からの賛辞に微笑みながら礼を言うミーナ。坂本も昨晚と同じく、窓辺にミーナと並んで立った。

「見送りの許可を出してくれて、感謝している」

「あなたも行きたかったんでしょ？」

「ああ、世話になった艦だからな」

ミーナは坂本に目を向けると、表情を優しげなものから厳しいものに変える。

「昨日ね、優人に言われたの。愛したことを後悔しているのか……って」

「……………」

「確かにあの人を失った時、本当に辛かったわ。こんな思いをするくらいなら好きにならなければ良かった……ってね」

自身の心情を語り始めるミーナ。坂本は何も言わずにミーナの横顔を見つめながら彼女の話には耳を傾ける。

「でも……そうじゃなかった」

「そうか……」

「でも、失うのは今でも恐ろしいわ。それなら……失わない努力をすべきなの！」
そう言うとミーナはワルサーPPKを取り出し、銃口を真っ直ぐ坂本へ向ける。坂本は特に驚いた様子もなく、落ち着いた物腰で身体をミーナの方へ向ける。
窓からは月明かりが射し込み、見つめ合う二人のウィッチを照らしていた。

第33話「歌姫の悲しみ、堅物大尉の乱心、青の一番の嫉妬」

1944年8月末の某夜。ブリタニア、第501統合戦闘航空団基地――

昨日から本日の夕刻まで、当基地の港には桑海軍遣欧艦隊所属艦赤城型航空母艦『赤城』が停泊していた。空母と言っても既に第一線を引いた古参の艦で、扶桑から欧州への補給や人員の派遣が主な任務である。しかし、近々実施される予定のガリア反攻作戦においては、第一陣として攻撃に加わることとなる。

第501統合戦闘航空団司令ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケは愛する人から3年越しに贈られた深紅のイブニングドレスを身に纏い、航空歩兵、基地要員、そして赤城の乗員等を観客とした細やかなコンサートを開催した。聞いた者を魅了するミーナの歌声、ウィッチ達もその他の将兵達も穏やかな表情で聞き入っていた。

空母赤城及び艦長の杉田大佐をはじめとする総勢約2000名の乗員達は501のウィッチとミーナの歌に見送られて戦線へと発つていった。

久方ぶりに喉を鳴らし、晴れやかな表情で自室に戻ったミーナはドレス姿のまま自室の窓辺で佇み、余韻に浸っていた。

そんな彼女の元へ、坂本が歌の感想と見送り許可の礼を言いに訪れていた。短い会話の後、ミーナは隠し持っていた拳銃を取り出し、坂本へ向ける。

「なんだ？随分と物騒だな」

唐突に銃口を向けられた坂本。特に驚いた様子もなく、おどけた口調でミーナに理由を問う。

ミーナが手にしているのはシルバーモデルのワルサーPPK。501基地でウイツチないしウイザード用に採用されているカールスラント製の護身用拳銃だ。護身用といっても十分な威力、優れた命中精度、高い安全性を備えた極めて完成度の高い拳銃である。

華やかなドレスにはおおよそ似つかわしくない代物を右手に構えたミーナは真剣な眼差しで、坂本を見据える。坂本もまた、ミーナの意図を推し量ろうと同じように見つめ返している。

「約束して……もうストライカーは履かない、って」

「……それは命令か？」

坂本が確かめるように訊ねる。すると、ミーナは強張らせていた表情を僅かに曇らせた。

「そんな格好で命令されても説得力がないな」

フツと口元に笑みを湛える坂本。対するミーナは追いつめられたような表情を浮かべている。

「私は本気よ！今度戦いに出たら、きつとあなたは帰ってこない」

昼間の戦闘時、キューブ型ネウロイのコアを芳佳が撃ち抜いた。その際に飛び散った破片が坂本のシールドを突き抜け、彼女の額を掠めていた。戦闘中の、しかもほんの一瞬のこと。誰にも気付かれていないと高を括っていた坂本だが、ミーナには見られていたのだ。

ウィッチやウィザードは20歳前後を境として急速に魔法力が減退していく。もちろん個人差があり、飛行に必要な魔法力や身体強化はある程度保てる場合もあるが、それでも最終的には完全に失う。特にシールドの弱体化は顕著だ。

芳佳の母方——秋元一族のように変わらず魔法力を維持している者もいるが、殆どは成人すると同時に魔法力を失っていく。それは坂本とて例外ではない。

日に日に魔法力が少しずつ、だが確実に衰えてきている。彼女自身が誰よりもそれを自覚していたため、成人と共に減退していく魔力量を少しでも維持しようと毎日欠かさず早朝鍛錬を行っていた。しかし、既に坂本の魔法力はシールドをまともに機能させることも出来ぬまでに衰えてしまっていた。

「だったらいつそ自分の手で、というわけか？矛盾だらけだな……お前らしくもない」

「違う！違うわ！」

頭を振るミーナ。不安と恐怖を湛えた瞳は今にも泣き出しそうなほど潤んでいる。

「私は……まだ飛ばねばならないんだ」

それだけ言うとうと坂本はドアへと向かう。ミーナは両手で銃を構え直し、部屋を出ていこうとする坂本に再び銃口を向ける。

拳銃には実弾が込められている。しかし、彼女に撃てるはずがない。本人以上にそのことが分かっていた坂本は構わずに廊下に出る。

「坂本」

不意に呼び止められ、坂本は声のした方へ目を向ける。

「む……優人か」

「よお、こんな時間にどうしたんだ？」

声の主は優人だった。既に入浴を済ませた彼は半袖のTシャツとハーフパンツというラフな格好をしている。

「……聞いていたのか？」

「何を？」

「いや、何でもない。私はもう寝る、お前も早く休め」

坂本はそれだけ告げると自室へ歩を進めた。月明かりだけの薄暗い廊下、奥へと消え

ていく親友の背中を見つめて優人は独り言ちる。

「……聞いてたに決まってるだろ、バカ美緒」

彼女を名前で呼ぶのは随分と久しぶりのことだった。やがて坂本の姿が完全に見えなくなり、優人はミーナの部屋をノックする。すぐに「どうぞ」という声が聞こえ、優人はドアを潜る。

室内には、先程と同じドレス姿のミーナが窓際に佇んでいた。手に銃はない。デスクの引き出しにでもしまったのだろう。

「優人……どうしたの？」

いつもと変わらぬ、柔らかな表情で問うミーナ。しかし、ミーティングで歌っていた時と比べ、表情から明るさが幾分失われていることを優人にはすぐ理解出来た。

「……坂本のことだけど」

「——ッ!？」

優人が口火を切ると、ミーナのハツと目を見開いた。

「止めても無駄だと思っただろ？」

「聞いていたの？」

「正しくは……聞こえた、かな？」

優人を睨み付け、ミーナは咎めるように訊く。優人は軽く弁明すると、話を戻した。

「付き合いが長いからわかる。あいつは超がつくほどの頑固者だ。昔からウイツチとして誰かを守りたい、って想いが強かったし。いつの頃からか戦いの中で自分の存在価値を見出だすようになった。毛利の3本矢じゃないけど、この3つと魔法力が僅かでもある限り坂本は引き下がらない」

「だからって、シールドを張れなくなった美緒を戦わせるなんてこと……」

「安心しろ」

優人が僅かに語気を強める。

「あいつのことは俺がなんとかする」

もう誰も死なせない、もう誰にもこんな想いはさせない。父を失ったあの日、心に強く誓った決意の言葉を優人は改めて胸に抱いた。



翌朝、501基地本部隊長執務室――

室内では、ミーナが1人で物思いに耽っていた。昨晚、優人が言っていた「なんとかする」というのは具体的にどうということなのか。彼には何か坂本を戦場から遠ざける手立てがあるのだろうか。

説得——いや、それは無駄だと言っていた。隊内で坂本との付き合いが最も長い優人が言うのだから間違いないだろう。しかし、ならば一体どうするつもりなのか。

コンコン！

考え込むミーナの耳に小気味良いノック音が響く。顔を上げて扉の方に目をやると、小脇に資料を抱えた坂本と同じく資料らしきものが詰め込まれた段ボールを抱えた芳佳が扉前に立っていた。

「ちよつといいか？」

と、ミーナに訊ねる坂本の隣では、芳佳が「よいしょつ」と重そうな段ボールを抱え直す。

「悪いな、便利に使って」

「いえ、これくらいへっちゃらです」

詫びる坂本にそう返した芳佳であったが、その足取りはよたよたとしていて、あまりへっちゃらではなさそうだ。

「データだ、この前出たネウロイのな」

と、ミーナに告げる坂本。昨晚のことなど無かったかのように振る舞う彼女に、ミーナは眉を擡める。

坂本な報告書やリーダー記録等の資料を広げ、自己解釈を交えた分析を始める。

「8月16日と18日に来襲したネウロイだが、奴の出現した時に各地で謎の電波が傍受されている。周波数こそ違うがサーニヤの歌っていた声の波形と極めてよく似ている」

「ええ」

と、気の抜けた声で応じるミーナ。

「歌!？」

二人から少し離れた場所に立っていた芳佳は、ハツとなつて夜間哨戒に参加した夜のことを思い出した。

サーニヤ、エイラと共に戦い、撃破したあのネウロイは確かにサーニヤの歌を歌っていた。

「あのネウロイは、サーニヤの行動を再現していたて見て間違いなさそうだな」

「……ええ」

「分析の規模をもっと広げよう。しばらくは忙しくなるぞ!」

「そうね……」

鈍い反応を繰り返すミーナと、彼女を急かすように語勢を強める坂本。芳佳はそんな二人のやり取りをただ見つめていた。

「優人、それにバルクホルンやハルトマンにも今のうちに知らせておきたいな」

(お兄ちゃん……)

優人の名を聞いて、芳佳は僅かに顔を伏せた。脳裏に浮かぶのは昨日の、いつになく恐い顔をした優人の姿。いつも優しい兄が急に自分を突き放すような態度取るようになった。一晩考えてみたが、理由は分からずじまい。

——もう少し自重しろ。

あの時、優人に言われた言葉は未だ槍のように芳佳の胸に突き刺さっている。彼女は今、大好きな兄に対して恐怖にも似た感情を抱いている。

「三人を……へ」

「あのっ！」

坂本が優人達を呼ぼうとしたその時、芳佳が口を挟んできた。

「バルクホルンさんなら今日は非番です。夜明け前に出ていきましたよ」

「どこへ？」

と、訊ねる坂本。

「ロンドンです」

「ロンドン？」

坂本が芳佳の言葉を鸚鵡返しする。

「意識不明だった妹さんが目を覚ましたって……バルクホルンさん、慌ててストライ

カーを履いて出て行くこうとするのを皆で止めたんですよ。いつもはあんなに冷静な人なのに」

ハンガーでの一件を思い出し、笑みを零す芳佳。その屈託のない笑顔を眩しく思えてならないミーナは、芳佳から目を逸らした。

「無理もないわ。バルクホルンにとって、妹は戦う理由そのものだもの」

ミーナは寂しげな表情で、さらに続ける。

「誰だつて自分にとつて大切な……守りたいものがあるから、勇気を振り絞つて戦えるのよ」

「……は、はい」

心に重く響くミーナの言葉。芳佳は、ただ頷くことしか出来なかった。



ロンドン、とある病院――

ネウロイがカールスラントを侵攻した際に負傷し、そのまま長い間昏睡状態にあったバルクホルンの妹――クリスことクリステイアーネ・バルクホルン。

病院からクリスが目を覚ましたとの連絡を受け、バルクホルンはハルトマンの運転す

るキューベルワーゲンで基地を発ち、病院へ向かった。病院に到着すると、電撃戦の如きスピードでクリスの病室へと駆け込んでいた。

バダンツ！

「きゃあつ!？」

逸る心を抑えられなかったバルクホルンは、病室のドアを乱暴に開いてしまふ。室内でシーツを取り替えていたナースが驚いて悲鳴を上げた。

「病室ですよ！お静かに！」

「あ、ああ……すみません。急いでいたもので……」

ナースに注意され、罰が悪そうな顔で謝罪するバルクホルン。マナー面で他者から注意を受けるなど、規律に厳しい普段の彼女からは想像できない。

「フフフ……」

慌てて病室へ飛び込んできたバルクホルンがおかしかったのだろう。ベッド上で身体を起こした少女——クリスが、クスクスと可愛らしく笑っていた。

「クリス……」

振り向いたバルクホルンの瞳に最愛の妹の姿が映る。おそろおそろベッドへ近付くバルクホルン。そんな姉を迎えるようにクリスは両手を差し出し、姉妹は力強く抱き締め合った。互いの温もりをすべて感じ取ろうと、ギュツと手に力を込める。ハルトマン

と看護師は、そんな二人を穏やかな表情で見守っていた。

しばらく抱き合った後、姉妹は改めて向き直る。

「お姉ちゃん、私が居なくて大丈夫だった？」

クリスがそう訊ねると、バルクホルンは途端に慌て出した。

「な、なにを言う、大丈夫に決まっているだろう。私を誰だと——」

「あくもう全然ダメダメ」

ベッドのすぐ隣にある椅子に腰を下ろしたハルトマンがバルクホルンの声を遮り、言葉が続けた。

「この間まではひどいもんだったよ？ やけっぱちになって無茶な戦い方ばかりしてさ
く」

「お姉ちゃん？」

と、クリスは窘めるようにバルクホルンを見る。

「お、お前！ 今日は見舞いに来たんだぞ、そういうことは——」

「だって本当じゃん」

妹の前で恥を搔かされたバルクホルンはすぐさま抗議するが、ハルトマンは全く意に介さない。

「ないない！ そんな事は無いぞ！ 私はいつだって冷静だ！」

バルクホルンは身を乗りだしながら、ムキになって否定する。妹に心配かけまいとしているのだろうか、今の彼女は冷静な人間には程遠い。

「お姉ちゃん、なんか楽しそう」

以前よりも明るく、感情豊かになっている姉を見てクリスが安心したように言う。
「そ、そうか？」

クリスの言葉に少しだけ戸惑うバルクホルン。

「優人と芳佳のおかげだな」

「優人さん?……芳佳さん?」

ハルトマンの口から出てきた聞き覚えのない名前に、クリスは首を傾げる。

「うん、扶桑から来たウィザードとウィッチの兄妹。優人が兄で芳佳が妹」

ハルトマンが宮藤兄妹についての簡潔に説明をすると、ベッドに腰を下ろしたバルクホルンが言葉を継いだ。

「芳佳の方はお前に少し似ていてな」

「私に!? わあ! 会ってみたいな!!」

自分と似ているらしいウィッチの存在を知り、クリスは爛々と目を輝かせる。

「そう言うと思つて事前に約束してある」

「本当!? お友達になつてくれるかな?」

「ハハハ、かなりの変わり者だけど、良い奴だ。きっと良い友達になれるさ。あつ、似てると言っても当然お前の方がずつと美人だからな！」

腕を組んで自信満々に断言するバルクホルン。クリスはキョトンとする。

「姉バカだねえ……」

相変わらずの溺愛っぷりにハルトマンは完全に呆れている。

「なっ!? 私は事実をいつたまでぞぞ！」

「優人がここにいたら『芳佳の方が美人だ!』とか言うだろうな」

シスコン二人が不毛な争いをしている光景を思い浮かべ、ハルトマンは肩を竦める。

「いや! クリスの方が美人だ! 優人! いい加減に認めろ!」

「いない人間に怒鳴ってどうするのさ……」

無駄に上手いハルトマンの声真似に身体が反応してしまったのだろう。バルクホルンは現在501基地にいる優人に向かって怒鳴る。優人本人に聞こえたところで、やはり不毛な争いが繰り返されるのだろう。

「優人さんはどんな人なの?」

芳佳の話聞いたクリスは優人についても訊ねる。

「優人か……」

「顔はまあまあイケメンかな? それに良い人だよ」

バルクホルンよりも先にハルトマンが優人について語った。バルクホルンは頷き、言葉を継ぐ。

「ああ、妹や仲間を思いやる良い奴だ。歳相応にスケベなのが玉に瑕だが」「体を張ってネウロイからトゥルーデを守ってくれたし。ねえ？」

ハルトマンは意味深げな笑みを浮かべ、確認するような視線をバルクホルンに送る。「ふーん」

二人の話を聞き終えたクリスは、ニヤニヤしながら姉の顔を見上げた。

「ん？どうしたクリス？」

「なんかお姉ちゃん、優人さんの名前を呼ぶ時の声がすごく優しいよ？」

「そうか？」

クリスに指摘されるも自覚の無いバルクホルンは首を傾げる。すると、ニヤリと悪い笑みを浮かべたハルトマンが語り出した。

「そりやそうだよ。トゥルーデは優人にお熱だから」

「な……なあああああつ!？」

ハルトマンの発言にボンツと湯気が出そうな勢いで赤面する。

「何を言い出すんだハルトマン!？」

「ホントのことでしょう？よく優人のことを目で追っているし、芳佳にもまるで未来の

義妹みたいに気にかけてるし」

「ちつがああああああう!!」

病院にいることを忘れ、凄まじい怒鳴り声を上げるバルクホルン。鼓膜が破れんばかりの怒号にクリスとハルトマンは思わず両手で耳を塞いだ。

「私はいいつのことなど何とも思っていない!! あ、いや、別に優人のことが嫌いだとかどうでもいいとかではなくてだな。あくまで……そう! あくまで友人としての感情であつて! 芳佳のことも友人の妹は自分の妹も同然と——」

「わかつたから静かにしなよ」

ハルトマンは耳を塞いだままバルクホルンを宥める。声があまりに大きすぎるため、敷地外の通りにも響いてしまっている。他の患者や病院の職員からすればいい迷惑だ。

「ふうん……それじゃ、私がお付き合いしようかな?」

「え?」

クリスの口から出た予想外の言葉にバルクホルンとハルトマンは揃って気の抜けた声を漏らした。

「付き合う、つて……優人と?」

「はい!」

ハルトマンが言葉の意味を確かめるように訊くと、クリスは満面の笑みで頷いた。

「お姉ちゃんの彼氏さんなら遠慮したかもですけど、違うみたいですし」

「ちよつ、ちよつと待て！恋愛などお前にはまだ早いぞ！第一優人に会ったこともないだろ!？」

「そもそも歳の差が有り過ぎだしね」

バルクホルンはもちろん、さしものハルトマンもクリスの考えに難色を示す。

「でも二人の話だと、とつても素敵な人みたいだし。それに恋に歳なんて関係ないよ」

「だ、ダメだ！ダメだ！」

バルクホルンが頭を激しく振つて猛反対する。長い眠りから目覚めたばかりの妹にマセた発言をされて、気が動転してしまっている。

「男はみんな羊の皮を被った狼なんだぞ！優人も例外じゃない！破廉恥な本を買い集めたり！他のウィッチの着替えや風呂を覗いたり！この前なんて私の胸を触った上に押し倒——」

バルクホルンは、そこまで話して言葉を止めた。思い出してしまったのだ、ズボン紛失事件が起きた日のことを。正確にはシャーリーが悪戯で優人の背中を押し、そのままバルクホルンを押し倒す形で倒れたことを。

彼女の脳裏に浮かんでいるのは、あの時互いの息が掛かるほどの距離まで迫った優人の顔。至近距離で初めて見た異性の、同世代の男の顔だ。

バルクホルンの顔はこれ以上ないほど顔を真っ赤なり、頭部からは水蒸気のようなものがシユウウウ、と音を立てながら噴き出している。

「おーい？ トウルデー？」

ハルトマンがバルクホルンの前で手を振ってみるが、固まったまま微動だにしない。まるでオーバーヒートしたコンピュータようで、しばらくは元に戻りそうもない。

「あちゃ〜……こりや重症だねえ」

ハルトマンは困ったなあ、と言った感じに後頭部を搔くと、クリスにいる方へ振り返った。

「でも本気？ 優人と付き合おうなんて」

「ふふ、ごめんなさい。冗談です♪」

そう言いながら、チラつと可愛らしい舌を出して笑うクリス。

どうも自分の預かり知らなぬところで、同世代の男子と友達になっていた姉をからかっていたらしい。容姿は確かに芳佳と似ているが、性格面ではハルトマンに負けず劣らず小悪魔などころがあるらしい。

「とんだ妹だねえ……」

ハルトマンはふう、と一息吐くと部屋に掛かっていた時計を確かめる。そろそろ面会時間が終わる。

「おっと、そろそろ帰らないと……じゃあ、また来るからねえ」

ハルトマンは左手で固まったまま動かないバルクホルンの手を引きつつ、右手をクリスに向けて振り、別れの挨拶をする。

「は〜い！また来て下さいね」

クリスも笑顔で手を振り返し、姉と姉の戦友を見送った。

二人が部屋を後にしてしばらくすると、入れ違いで眼鏡を掛けた優男風の中年男性が病室に入ってきた。

「あれ？お姉さん達はもう帰ったのかい？」

「少し前に」

「そうか。嬉しそうな顔を見る限り、お姉さんと楽しくお話出来たようだね？」

「はい！」

男性の問いに、クリスはニッコリと微笑みながら答える。男性は軽く頷くと、クリスの向かい側にあるベッドに腰を下ろした。

彼はクリスと同室で、彼女と同様最近まで昏睡状態となっていた入院患者である。今朝知り合ったばかりの間柄だが、彼から父性的なものを感じ取ったクリスは男性のことを父のように慕っていた。

年齢は40前後。顔立ちからして扶桑人。顔には大きな火傷の跡のような大きな傷

があるが、本人の優しい表情と声色のおかげでクリスはもちろん、他の患者や病院スタッフも恐いとは思わず、むしろ好印象を抱いている。

「お姉さんとは何を話したのかな？」

「えーつと、お姉ちゃんのことと……あつ、そう言えばおじさんって扶桑の人なんですよね？」

「ああ、そうだよ。8年くらい前かな？仕事で欧州に来たんだ」

「お姉ちゃんのお友達に扶桑から来た兄妹さんがいるみたいなんです」

「兄妹？」

「えーつと、名前は宮藤……優人さんと芳佳さんだったかな？」

クリスが二人の名を口にした瞬間、男性は眼鏡の奥にある目を光らせた。



病院の玄関を出た頃には、バルクホルンも自力で歩けるまでには回復していた。とは言っても顔にはまだ朱色が差している。

「クリス、いつからお姉ちゃんをからかうように……」

妹に手玉に取られてしまい、げんなりとするバルクホルン。妹が心身共に健康なのは

喜ばしいことだが、ああ言った冗談は心臓に悪い。

「まあまあ、大目に見てあげたら？」

ハルトマンはバルクホルンを宥められつつ、キューベルワーゲンを停めた通りへと歩みを進める。

「あれ？」

「どうした？」

何かに気付いたハルトマンが正面を指差す。バルクホルンもつられて目をやると、純白の軍服を着こなした数人の男性がこちらに向かって歩いてきていた。彼らは世界的エースである二人に目もくれず、すぐ脇を通りすぎていった。

「あれ？扶桑海軍の制服だよね？」

「ああ」

ハルトマンの問いに首肯するバルクホルン。男性達が着ていたのは、優人や坂本と同じ扶桑海軍の第一種軍装と見て間違いない。

扶桑海軍の士官達が何故ここに？と思ったが、戦友か上官の見舞いにも来たのだから、とあまりに気にしなかった。

やがてキューベルワーゲンのところまで戻ると、ワイパーに挟まっている一通の手紙が目についた。

「何だ、これ?」

反則切符かと思つたが、封筒に入れられているため違う。ハルトマンが手に取つても興味がないのか、すぐにバルクホルンに渡した。

「何でこんなものが?」

訝しげに封筒を見るバルクホルン。裏返して宛名を確認した途端、彼女の表情が僅かに険しくなつた。

「どつたの?」

ハルトマンも自分の目で確かめる。

「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ殿?」

「ミーナ宛?」

ミーナに宛てられた手紙。バルクホルンは嫌な胸騒ぎを覚えた。



同時刻、501基地宿舎――

「あつ……坂本少佐」

自身が最も敬愛する上官の後ろ姿を廊下で見つけたペリーヌ。何故か廊下の角へ隠

れて、そつと様子を窺う。彼女は今日も眼鏡ではなくコンタクトである。慣れないが故につけるのに時間がかかり、部屋を出るのが遅れてしまっていた。尤もそのおかげで坂本を見つけられたのだが。

（はっ！私つたら、何をコソコソと……堂々とすればいいんですわ！堂々と！）

隠れる理由など無いことに気付いたペリーヌは坂本の後を追いつつ、心の中で自問自答を始める。

（いつから私は物陰からコソコソと真似ばかりするようになったんでして？そうよ！宮藤さんですわ！あのちんちんチクリンの豆狸が現れてからというものっ！少し前まで坂本少佐の隣に居たのはわた……いえ、宮藤大尉でしたわね）

宮藤兄妹相手に二度の敗北を喫していることに気付いたペリーヌはガツクリとする。芳佳はともかくとして、ずつと坂本の近くにいた優人には勝つことは容易ではない。

ペリーヌの中では、坂本に向けているものと同質の感情が優人に対して芽生えつつある。しかし、彼女はそのことをあまり自覚していない。

「あの、坂本少佐。今度、私に左捻り込みを教えて頂くといい約束を……」

ガチャツ！

「……ん？」

ペリーヌは思い切つて坂本に話し掛けるが、一瞬遅かった。坂本はペリーヌに気付か

ず、誰かの部屋へと入っていった。

「へっ!？」

ペリーヌは慌ててドアに駆け寄り、ネームプレートを確認する。プレートには『YOSHIIKA MIYAFUZI』とある。つまり、芳佳の部屋だ。

「ここは宮藤さんの? どういうことですか?! 坂本少佐が何故あのチンチクリンの部屋に!? まさか!？」

いつぞやと同じように、ペリーヌの脳内を悩ましい妄想が駆け巡った。

『もう逃がさないぞ。私の芳佳』

『坂本さん、ダメです。あなたにはお兄ちゃんというものが——』

『そんなこと言う口はこうして……』

『あっ……』

以上、妄想終了。

「あ……あ、あの二豆狸いいいいいい!!」

勝手な妄想を抱き、理不尽にキレるペリーヌであった。



一方、扉一枚向こう側にある芳佳の部屋では芳佳と坂本が向かい合っていた。「あの、お話って?」

突然の坂本の訪問に芳佳は戸惑いつつも、用件を訊ねる。

「ん、楽にしろ。自分の部屋だろ?」

そう言う坂本も言葉の調子が外れている。彼女の態度に違和感を感じるも、芳佳は「はい」と言われた通りにする。

坂本は一つ咳払いをしてから口火を切る。

「よくやった!」

「えっ?」

「昨日の戦いだ! 初戦果だったろう?」

坂本は教官という立場上、芳佳やリーネに対して叱ることが多く、誉めるのはあまり得意ではない。

「こういうことは優人やミーナの方が上手いな、と坂本は自身の不器用さに内心呆れる。

「あつ……はい!」

漸く誉められていることに気付いた芳佳は、パツと表情を輝かせる。

「でも、それもみんな坂本さんが鍛えてくれたおかげです! これからもいっぱい、いろん

なことを教えて下さい！よろしくお願いします！」

と、深々とお辞儀をする芳佳。

（もつと頑張らないと！頑張ってお兄ちゃんや坂本さんみたいにならないと！きつとお兄ちゃんは、私がまだまだ甘えん坊で頼りないから厳しくしてるんだ！いつまでも甘えてちゃダメ！もつと頑張つて、強くなつて、お兄ちゃんと同じくらいすごいウィッチにならないきゃ！）

人々を守るとは別に『兄や坂本と肩を並べられるくらいのウィッチになる』という目標を芳佳は密かに抱く。

慢心した様子は一切見られず、更なる指導を求める教え子に、坂本は目頭が熱くなるのを感じた。僅かに瞳を潤ませたかと思えば、いつものように高笑いをする。

「はっはっはっはっはっはっ！よく言つたぞ芳佳！確かにお前はまだまだ尻の青いヒヨッコだ！初戦果など序の口に過ぎん！これから一層ビシビシしごいてやらねばならんな！」

（あれよりも厳しくなるの？）

坂本の話の聞くうちに、芳佳の表情が段々と暗くなつていく。改めてご指導願つたことを早くも後悔し始めていた。

「そうだ！では、さっそく明日から訓練メニューを三倍に増やそう！」

「うええええ〜!?!」

芳佳は思わず悲鳴を上げる。坂本のスパルタ式指導は時に脱落者を生むほど過酷。そのさらに三倍など、きついなんてものではない。

「何だ、その顔は?」

「い、いえ! 頑張ります!」

坂本に睨まれた芳佳は反射的にと気を付けの姿勢になる。

「そうだ! それでこそ扶桑の撫子だ! はっはっはっはっはっはっ!」

「……な、なんて羨ましい!」

ドアの向こう側では妄想の世界から帰還したペリーヌが話を盗み聞きし、嫉妬に胸を焦がしていた。

「あゝ?」

「ひっ!?!」

芳佳に用があつて部屋の前まで来ていたリーネが背後から声を掛ける。やましいことがあるペリーヌは思わず飛び上がった。

「ど、ど、どういたしましたのリーネさん!?!」

ペリーヌが慌てた様子でリーネに振り返る。その挙動不審ぶりが恐ろしかったのか、リーネは飛び跳ねるような早歩きで数歩後退し、ペリーヌから距離を取った。その時

だった。

ガチャツ!

「へっ? ああ……っ!?!」

不意にドアが開かれる。ドアに体重を掛けていたペリーヌは、そのまま勢い良く芳佳の部屋の中へ倒れ込んだ。

ゴンツ!

ペリーヌはもろにおでこを床にぶつけ、鈍い音が廊下に響いた。

「ペリーヌ? リーネ? お前達何やってんだ?」

ドアを開けた張本人——坂本は、ペリーヌとリーネを交互に見ながら問う。

「えっと、あの……ペリーヌさんが——」

「がるるっ!」

リーネに睨み付け、唇の前で人差し指を立てながら唸るペリーヌ。おでこは赤く染まり、ぶつけた痛みで涙目になっている。

「ひっ!?!」

怯えたリーネは可愛らしい悲鳴を上げ、もう一步後退する。

「あつ……どうしたのペリーヌさん? おでこ真っ赤だよ?」

芳佳はペリーヌの顔を覗き込むと、赤くなった彼女のおでこに優しく手を添える。

「なっ！……何なさいまして!? 何でもありませんわ!」

驚いたペリーヌは思わず怒鳴り返すと、尻餅をついたまま芳佳から距離を取る。

「ちよつと熱っぽくない?」

ペリーヌのおでこに触れた右手を己の額に当て、熱を計る芳佳。

「ほ、ほ、ほつといて頂戴!」

動揺のあまりペリーヌの声が一段と高く、大きくなる。

「さあさあ、訓練の時間だぞお前達!」

坂本が自らの両手をパンパン、と叩きながら言う。

「そうだ! それで芳佳ちゃんを呼びに来たんだっけ?」

リーネはペリーヌの奇行のせいで忘れていた用事を思い出した。

坂本は少々呆れたように小さな溜め息を吐くと、声を張り上げた。

「なら、ささつと準備にかかれ!」

「はっ、はい!」

怒声を飛ばされた三人は、脱兎の如きスピードでハンガーに向かった。

第34話 「亀裂」

501基地近隣の訓練地域。緑が青々と生い茂るこの丘陵地帯では、ウィッチ達による訓練が行われていた。

参加者は芳佳、リーネ、ペリーヌ、シャーリー、ルツキーニの五人。訓練内容は、2対2の空中模擬格闘戦。

芳佳とペリーヌ、シャーリーとルツキーニがそれぞれロットを組み、四人の上空ではリーネがホイツスルを片手にジャツジを行う。

ウィッチ達は、各々が愛用している銃に似た模擬を手に飛び交い、ストライカーユニットのエンジン音を蒼空に響かせる。

「宮藤さん！後ろを取られてましてよ！」

「う、うん！」

背後を取られるペリーヌ、芳佳ペア。ペリーヌは、長機として2番機の芳佳を注意する。一方の芳佳は、動きがどこかぎこちない。

対ネウロイ戦とは違い、模擬戦は同じ航空歩兵を相手にする。素人目には敵機が変わっただけの同じ空中戦に見えるが、実際はいろいろと勝手が違う。対ネウロイ用の戦

術とは別の手法が必要になる。

芳佳は飛行速度を維持しつつ、ペリーヌと位置の入れ替えを繰り返して振り切ろうとするも、性格の相性が良いシャーリー、ルツキーニペアはぴつたりとくつついて離れない。

「につひひくん♪いったき〜！」

芳佳の背後を取り、勝利を確信するルツキーニ。ペイント弾が装填されたM1919 A6に酷似した模擬銃を構えて照準を合わせる。しかし――

「ほえ？」

引き金を引こうとしたその瞬間。芳佳の姿が突如、視界から消えた。かと思えば自分達の背後に現れる。

「あの技はっ!？」

驚きのあまり目を見張るペリーヌは他所に、芳佳の模擬銃から放たれたペイント弾がルツキーニとシャーリーストライカーをオレンジ色に染め上げた。

「ああ〜っ!？」

「うお〜っ!？」

撃墜判定を受けた二人は驚きの声を上げる。後ろを取って有利だったにも関わらず、あつさり逆転されてしまった。

「ペリーヌ、宮藤ペアの勝ち！」

リーネはホイッスルを響かせて模擬戦終了を報せた後、ペリーヌと芳佳の勝利を宣言する。

「すごいよ、芳佳ちゃん！」

さらに芳佳へ駆け寄りながら、興奮気味に彼女を称賛する。自分のことのように嬉しいそうだ。

「やられたあ〜！おつかしい〜なあ？絶対後ろについてたはずだったのにい！」

撃墜され、悔しがるルツキーニ。負けたことよりも一瞬で後ろに回られたことに納得がいかない彼女は、腕を組んで考えを巡らせる。

「大分成長したなあ、芳佳」

「え、そうですか？」

リーネに続いて、シャーリーからも称賛の言葉を贈られた。嬉しくなった芳佳は満面の笑みとなる。

そんな芳佳の背後に、ニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべたルツキーニが忍び寄り、彼女の憤まじやかな胸へ手を伸ばした。

「ひゃあっ!？」

「どれどれ〜？どれどれ〜？」

まるで品定めでもするかのように芳佳の胸を揉みしだき始めたルツキーニ。芳佳はあたふたしながら抗議の声を上げる。

「なっ、何するの〜!?」

「ぎゅんねんっ!こっちはちつとも変わりなくし!」

「ん、見りや分かる」

シャーリーはルツキーニの鑑定結果に強く頷き、同意の意を示す。同時に腕を組み、芳佳とは違つて豊満な己の胸を強調するように持ち上げた。

「も〜!コラ〜!」

胸のことでバカにされ、芳佳は両腕を振り上げてプンスカ、と怒る。すかさずシャーリーが己の本心を交えたご機嫌取りをする。

「でも、腕を上げたのは確かだ」

「本当ですか?」

「うん!でも高々度だったら、こうはいかなかつただけどねえ〜♪にひひ!」

と、はにかむルツキーニ。

「私達、案外良いペアなのかも知れないね?」

そう言いながら、芳佳は少し離れたところにいるペリーヌに笑顔で振り返る。しかし、当のペリーヌは――

「御冗談を！まっぴら御免被りますわ！」
と、そっぽ向いた。



ところ変わって、501基地宿舎大浴場――

訓練を終えたウイツチ達は、掻いた汗を流そうと大浴場に来ていた。

浴槽では髪をポニーテールに上げたシャリーリーの掛け声にルツキーニがバタ足ストレッチをしている。楽しそうではあるが、マナー面から言えばよろしくない。

壁際のシャワースペースでは、芳佳とリーネが身体と髪を洗っている。

「すごいね、芳佳ちゃん！この前入隊したばかりなのに、もう一人前のウイツチみたい！」

リーネは三つ編みから解いた淡いブラウンの髪を洗いながら、芳佳に話し掛ける。
髪を下ろした彼女は、スタイルの良さも相まって雰囲気は普段より大人っぽい。

「えへへ、そうかなあ」

と、照れ臭そうに笑う芳佳。

「でも、バルクホルンさんには『まだまだだあ〜！』って言われちゃいそう」

「私なんて、もつとまだまだだよ。羨ましいなあー！」

そう言つてリーネが背伸びすると、たわわな胸がゼリーののように柔らかく揺れた。

「わ、私はリーネちゃんのこと、すごいと思うけどなあ……」

「ええく？どこがあ？」

さらに大きく揺れるリーネの胸。

「どこが、つて……」

芳佳の視線は、自然とリーネの顔から破壊力抜群の巨乳へ移っていた。



さらに10分後、大浴場に隣接する脱衣所――

「宮藤さん！いつの間にあんな大技、覚えたんですの？」

風呂から上がり、さっぱりとした顔で脱衣所にやって来た芳佳を迎えたのは訝しげな表情をしたペリーヌだった。

湯上がり故、上半身はリボンを中央にあしらった青いブラ、白地のズボンと重ねて履くストッキングのみ、というセクシーな出で立ちだった。

「あれ？ペリーヌさん、いたんですか？」

「ずつとしましてよ！」

ストレートに失礼な発言をする芳佳の天然ぶりに、ペリーヌの怒鳴り声が裏返る。彼女は勢いに任せて話を続けた。

「左捻り込みは、坂本少佐の得意技ですのに！宮藤大尉——あなたのお兄様ならともかく！何故、あなたが！」

「え？私はただ、見ててこんな感じかな、つて？」

激しく詰め寄るペリーヌに対し、芳佳は平然と答える。が、ペリーヌはそんな答えでは納得しなかった。

「嘘おっしゃい！あんな高等テクニック！見よう見まねでできたら苦労しませんわ！内緒で坂本少佐に教えて貰ったんでしよう！卑怯ですわよ！！」

「そんなっ!?嘘なんか言つてません！」

あらぬ疑いを掛けられた芳佳はすぐさま反論する。しかし、怒りと嫉妬で感情的になっているペリーヌの耳には入らない。

「あくまでしらばっくれませすのね。いい度胸ですこと！」

「そんなこと言われても……」

「宮藤さんっ！」

「はっ、はい！」

一際鋭い眼光で睨まれ、芳佳は反射的に直立不動の姿勢となる。

「私、あなたに決闘を申し込みましてよ！」

「け、決闘くっ!？」

自分に向けてビシツと人差し指を突きつけるペリーヌの申し出に、芳佳は驚愕の声を上げた。

◇ ◇ ◇

同時刻、基地食堂――

「芳佳が左捻り込みを？」

柴犬の可愛らしいエプロンを身に付け、厨房で昼食の準備をしていた優人は、シャーリーから訓練中の話を聞いて目を丸くした。

カウンターに寄り掛かる体勢で優人と話していたシャーリーは「ああ」と頷き、言葉が続ける。

「あたしも驚いたよ。芳佳があそこまで腕を上げていたなんて……」

「……そっか」

嬉しそうに口元を綻ばせる優人。『左捻り込み』とは、優人や坂本等、扶桑のゼロ・ファ

イターが得意とする空中格闘戦の高等テクニックである。敵に背後を取られた際に、宙返りと失速を組み合わせて、逆に敵機の背後を取る。

坂本が芳佳に教えたという話は聞いていない。つまり誰かに教わることなく、見取り稽古の要領で自分のものにしたということだ。本人の才能や坂本の指導によるところもあるだろうが、一番は直向きな心で毎日厳しい訓練に臨み続けた芳佳自身の努力の賜物であろう。

予想よりも遥かに早い妹の成長に驚きはしたものの、嬉しい気持ちの方が上回っている。反面、その成長を少し寂しく思う自分もいる。

「なんだ、大丈夫そうじゃんか？」

「ん？」

「いやあ、昨日から芳佳との仲がギクシャクしてたみたいだからさ。喧嘩でもしたのかな？つて」

「そう言うわけじゃ……ただ、いつまでも甘やかしてはられないと……」

「少し極端じゃないか？」

「……………」

シャーリーに指摘された優人は、凶星を突かれたように無言で応じる。

彼女の言う通り、優人は芳佳のためを思うあまり、つい厳しくし過ぎてしまっている。

昨日の初戦果だつて、本当は芳佳の頭を撫でて「よく頑張ったな!」「偉いぞ!」と誉めてやりたかつた。しかし、誉めれば慢心してしまふんじゃないか、という考えが頭を過り、代わりにキツイ言葉が出てしまつていた。

「余計なお世話かもしれないけどさ……」

シャーリーは一息吐いてから言葉を続ける。

「あんまり慣れないことすんなよ。下手に厳しても逆効果だと思ふし、甘えさせることも厳しく接するのと同じくらい大切だろ?」

「そうかもしれないけど……」

「少くとも任務外では、普段通りで良いじゃないか? 何事もやり過ぎは良くないし、芳佳以上にお前が辛いだろ? いつもより元気ないし」

「そう見えるか?」

自覚症状のない優人は首を傾げる。シャーリーは頷くと、カウンターに押し付けている己の胸を指差した。重量感のある胸はむにゅつ、と潰れて横に広がり、よりインパクトを増している。

「あたしと会話する時、お前は10秒に一回は胸をチラ見るのに、今日はまだ一回も見えないぞ」

「なんだよ、その判断基準。てか、別にチラ見なんてしてないぞ!」

と、ムキになつて否定する優人。

「そんな隠そうとするなよ。お前が巨乳好きだつてことは、もうバレちゃつてるんだからさ」

「うっ……」

いつぞやの公開処刑を思い出し、優人は悔しそうに呻いた。シャーリーはそんな優人の顔を眺めて、ニヤニヤと笑みを浮かべている。

「ねえねえ優人！これ何い？」

「扶桑の料理ですか？」

ふと食堂の方から声がする。シャーリーと共に風呂から戻つて来たルツキーニとリーネだ。不思議そうな顔をした二人は、テーブルに置かれた大皿を——正確には、皿に盛られた料理を指差して訊ねる。

野菜に黄金色の衣を纏わせた揚げ物のような料理。扶桑ではお馴染みの料理だが、欧州の人間にとっては未知の存在。香ばしい匂いが鼻腔を撩り、少女達の好奇心と空きつ腹を刺激する。

「それは天ぷら、つて言つて……扶桑料理の一つだよ」

優人が説明すると、ルツキーニは目を爛々と輝かせた。

「食べてもいい!？」

と、重ねて訊くルツキーニはもう待ちきれないとばかりに口から涎を垂らしていた。

「手は洗った？」

「ばっちし！」

ルツキーニは両手の平を優人に向けて広げ、自身たつぷりに言う。

「ならどうぞ」

「やったあー！ いただきますー！」

「いただきますー！」

優人から許しを貰った二人は、一番手前に置かれた人参の天ぷらを手に取り、口に運ぶ。

「ん〜！ おいしく〜！ サクサクしてるう〜！」

「ホントに美味しい！ 中のジューシーさはそのままなんですねー！」

初めて触れる天ぷらという文化だが、どうやら二人は気に入ったようで、すっかりご満悦だ。

皿には他に、玉ねぎ、ピーマン、ジャガイモ、蓮根等の野菜の天ぷらが並んでいる。

「おっ？ じゃあ、あたしも」

美味しそうに食べるリーネ達を見て、シャーリーもカウンターから離れ、テーブルへ向かう。

「これを試してみるかな？」

何気無しに玉ねぎの天ぷらを摘まみ、パクついた。

「おおお〜！マジで美味しいな！」

シャーリーも二人と同じく天ぷらに感動する。

「これならいくらでも入っちゃう！はぐはぐ！」

すっかり天ぷらの虜となったルツキーニは、二個目三個目と次々口の中へ放り込んでいく。

「ルツキーニちゃん、他の人の分も残さないよ！」

ルツキーニの旺盛な食欲を見て不安になったリーネが、慌てて注意する。

「こりやもう少し作つといた方がいいかな？」

そう思った優人は、柴犬が描かれた柴犬のエプロンを外すと、追加の野菜を取りに食糧庫へ向かう。

（ついでに芳佳の様子も見てくるかな？）



同時刻、部隊長執務室――

バルクホルンとハルトマンは基地に戻るなり、ミーナの執務室を訪れていた。

デスクの向こう側には椅子に腰掛けたミーナ。その隣に坂本が立っている。

「悪いが、中身は勝手に見させて貰った」

バルクホルンは真剣な面持ちで言う、キューベルワーゲンのワイパーに挟まっていた手紙をデスクの上に置いた。

「『深入りは禁物、これ以上知りすぎるな』。これはどういうことだ?」

「興味あるね」

いつになく真面目な顔をしたハルトマンがバルクホルンの言葉を継ぐ。

二人が脅迫状と言っても差し支えない内容の手紙を持ってきたことをきっかけに、重々しい空気が執務室内を流れ始めた。

「やましいことなど、何もしていない」

僅かな沈黙の後、坂本がおもむろに口を開いた。

「だろ? ミーナ」

「えっ? ……ええ、そうよ」

考え事でもしていたのか、坂本に同意を求められたミーナはやや遅れて反応する。

「私達はただ、ネウロイのことを調べていただけで……」

「それでどうしてこんなものが届く!?!」

惚けたような態度を取る二人に苛立ったバルクホルンが声を張り上げ、デスクに身を乗り出す。

「差出人に心当たりは？」

対して、ハルトマンは冷静な口調で訊ねる。

「ありすぎて困るくらいだ」

坂本はやれやれ、と言った感じで右手を腰に当てる。

「そうね」

坂本の意見に同意するミーナ。

「私達のことを疎ましく思う連中は、軍の中にいくらでもいるはずだから……」

ミーナは困った表情で言う。ウィッチやウィザード等の航空歩兵は、ネウロイに正面から戦いを挑み、尚且つ打倒し得る存在である。

その有効性は各国で認められており、ネウロイとの戦いにおける人類の切り札として第一線で活躍し、今日まで軍のどの兵科よりも多くのネウロイを倒している。

軍内外立場を問わずウィッチやウィザードを信頼し、好意的な者が多いが、快く思わない人間も数としては多くいる。

20歳にも満たない若い男女が殆どの部隊が自分よりも多大な戦果を上げていることに対する嫉妬だったり、『所詮は小僧と小娘だ』という軽蔑だったり、彼らが持っている

る魔法という強大な力に対する畏怖だったり、と理由は様々。

501をはじめとする統合戦闘航空団は特に風当たりが強く、各国軍の指揮系統から独立しているため、いずれかの国に拠点を置きながら、その国の指揮下にならないことや連合軍管轄の多国籍部隊という特性上、競争の焦点になりやすく、相手の立場によつては部隊そのものが邪魔者と認識されかねない。

「が、こんな品のない真似をする奴は見当がつく」

坂本が言うと、他の三人は手紙から彼女に視線を移した。坂本は自らの推理を続けた。

「おそらく、あの男はこの戦いの核心に触れる何かを既に握っている。私達はそれに触れななだらう」

「あの男、つて?」

バルクホルンが訊くと、坂本は一呼吸置いてからその人物の名前を述べた。

「トレヴァー・マロニー。空軍大将さ」

ブリタニア空軍大将トレヴァー・マロニー。ブリタニア空軍において戦闘機軍団司令官——実質的最高指導者の地位にいる狡猾で強かなその男は、特にウィッチの存在を疎ましく思っており、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』にとつて、ネウロイよりもよっぽど質の悪い存在である。



同時刻、基地格納庫――

ペリーヌから決闘を申し込まれた芳佳は、気乗りしないながらも彼女に気圧される形です承し、二人でハンガーまで来ていた。

「そつちじゃなくてよ」

壁に掛けられている模擬銃へ手を伸ばした芳佳に、ペリーヌが声を掛けた。

芳佳が振り返ると、既にストライカーを履いたペリーヌが、発進ユニットの武器ラックからブレン軽機関銃 Mk. 1 を取り出していた。

「でも…それは……」

芳佳は午前中の訓練と同様、模擬銃を撃ち合うものと思っていた。しかし、ペリーヌは実銃を使用するつもりでいる。当然、装填されているのはペイント弾ではなく、殺傷能力のある実弾だ。

「私達、これから決闘するんですのよ？」

と、ペリーヌ。誇り高きガリア貴族の令嬢である彼女にとって、これから行うのは己のプライド懸けた決闘である。模擬銃やペイント弾を使った訓練やお遊びではない。

「そんなつ……私嫌です！本物の銃を人に向けるなんて！」

実銃の使った勝負に拒否反応を示す芳佳。ペリーヌは、そんな彼女を鼻で笑った。

「まさか、本当に撃つはずありませんでしょ？気分ですわよ、気分」

決闘と言つても芳佳を傷付けるつもりは毛頭ない。あくまで形式だけ、真剣勝負だと互いに強く自覚するためだ。

「だからって嫌です！私、そんなことをするためにウィッチーズに入ったんじゃないよ、せん！」

彼女が501に入隊したのは亡き父との約束を果たすため、兄やウィッチーズの仲間達と共にネウロイという脅威から人々を守るためである。

その為にはやむを得ず使用している銃や戦争には、人を傷付ける存在だと強い嫌悪感を抱いている。例え発砲しないとしても、そんなものを人に向けたくないのだ。

「まったく……入隊の時も、あなたそんなお馬鹿なこと言つてましたわね？言つてるでしょう？形だけですから」

芳佳の梃子でも動かないような頑固さに、ペリーヌは眉間を押さえながら呆れたように溜め息を漏らす。

「十秒以上後ろを取つた方の勝ち。だったらいいでしょう」

「……………はい」

芳佳は不承不承ながら小さく頷くと、自身のストライカーユニットを固定している発進ユニットへ移動する。ストライカーを履き、武器ラックから九九式二号二型改13mm機関銃を取り出した。

(安全装置は……うん、かかっている)

安全装置を確認し、魔導エンジンを始動させようとしたその時――

「二人共、何してる?」

「――っ!?!」

突如、耳朶を打つ第三者の声。二人がハツとなつて振り返ると、すぐ後ろのキャットウォークに優人が立っていた。彼を見るやペリーヌと芳佳は身体が硬直させた。

「大尉!?!」

「……お兄ちゃん」

「何をしているのか、つて訊いてるんだ……」

重ねて問われ、二人は答えに詰まる。彼女は優人はもちろん、ミーナや坂本にも何も伝えず、許可を取らずに飛ばうとしていたのだ。

「……二人共こつちにこい。銃は持ったまま」

優人にそう言われ、芳佳とペリーヌはゆっくりとストライカーから脚を出すと、躊躇いがちに優人の元へ歩み寄った。

「で、もう一度訊くけど……何をしている？」

蛇に睨まれた蛙のように畏縮してしまっている二人に、優人は再三問い質す。すると、ペリーヌが恐る恐る口を開いた。

「み、宮藤さんと……飛行訓練を行おうと」

「そんな予定は聞いていないが？それに！」

「あっ!？」

優人はペリーヌのブレン軽機関銃 Mk. 1 を取り上げ、弾倉を外して中身を確かめた。

「実弾まで使って……決闘と言っているのが聞こえたけど、殺し合い形式の訓練か？随分と物騒だな」

優人の物言いは決して威圧的ではないが、それ故に得も言われぬ凄みがある。上官相手に食って掛かることもあるほど強気なペリーヌが、冷や汗を掻いていた。

「誤解です！撃つつもりはありま——」

「そう言う問題じゃないだろ!!」

格納庫全体に優人の怒鳴り声が響き渡る。弁明を遮られ、ペリーヌは肩をビクツと震わせる。

撃たなければいい、というわけではない。味方に銃を向けること自体が大問題なの

だ。しかも二人は訓練、飛行、実銃及び実弾の使用を無許可で行おうとしていた。

「お前は士官という責任ある立場なんだ！もう少し自制心というものを働かせろ！」

「……申し訳ありません」

すっかり縮こまってしまったペリーヌは、顔を俯かせながら絞り出すような声で謝罪する。

「芳佳、お前もだ！何でペリーヌの言われるがままにした!？」

「ごめんなさいっ！」

頭から怒号を浴びせられた芳佳は身体を小刻みに震わせ、泣きたくなるのを必死に堪えていた。

「お前、昨日の初戦果や今日の訓練のことで少し天狗になってるんじゃないのか？」

「——っ!？」

優人に罵れたその瞬間、芳佳の中で何か弾けた。

「……………なんで」

「あ?」

「なんでそんな風に言われなくちゃならないの?」

13mm機関銃を掴む芳佳の両手に力が込められる。

「私、頑張ってたのに……もつと強くならなきゃ、つて思ってたのに……なんで認めてく

れないの?」

「み、宮藤……さん?」

芳佳は段々と早口になっていく。ストレートに感情を表現する彼女が、今は沸々と沸き上がる怒りを少しずつ声に滲ませる。

普段の芳佳から想像出来ないの一面に、ペリーヌは当惑する。

「私のことが嫌いになったんならそう言えればいいじゃない!急に厳しくされて、冷たくされて、意味わかんないよ!」

「お止めなさい!」

感情任せに言葉を発する芳佳。これ以上言わせては取り返しのつかないことになりかねない。そう思ったペリーヌは、慌てて止めに入る。

「宮藤大尉にだって、きっと何か理由が……妹であるあなたのことを思っただけで敢えて厳しく接しているとか——」

「そんなのありがた迷惑だよ!」

声を荒げる芳佳に、ペリーヌは思わずたじろいだ。

「軍隊に入ってから、何年も家に帰って来なかつたくせに!偉そうにお兄ちゃん面しないでよ!そもそも私達、本当は“兄妹でも何でもなし”んだから!!」

「……えっ?」

芳佳の言ったことの意味が、ペリーヌにはよく理解出来なかった。どういふことか訊くよりも先に――

パァン！

「あつ……」

唐突に響く乾いた音。それと同時に強い衝撃を左頬に受け、芳佳の視界は右へ僅かにずれる。ヒリヒリと焼けるような痛みが走り、芳佳は自分が叩かれたのだと理解する。

「……」

左手で頬にゆつくりと手を添え、正面へ向き直ると、右手を振り抜いた優人が自分を睨み付けていた。彼が芳佳の頬を叩いたのだ。

「あつ……」

自分を叩いた兄を見つめ返していると、芳佳の目頭はジーンと熱くなり、溢れた涙が頬を伝った。

「お兄ちゃんのバカ！大っ嫌い！もう死んじやえ！」

「ちよつと、宮藤さんっ！」

優人を罵倒した芳佳は、踵を返すとストライカーへ向けて一目散に走って言った。

ペリーヌの制止も聞かず、ストライカーを履いてエンジンを始動し、そのまま空へ逃げるように飛び立っていった。

ウウウウウウウウウウウウウウ!

それとほぼ同時に、ネウロイ出現を知らせる警報が基地全体に響き渡った。

第35話 「鮮血と大粒の涙」

勢いに任せて基地を飛び出した芳佳は、宛てもなく空を彷徨っていた。叩かれた左頬の痛みと涙は既に止まっているが、瞳は白ウサギのそれと同じく真っ赤になっている。

（何であんなこと言っちゃったんだろう？）

少し空を飛んだおかけで頭が冷え、芳佳は落ち着いて考えられることが出来るようになっていた。脳裏に浮かぶのは、ほんの数分前の格納庫での一件。

（お兄ちゃん……傷付けちゃったよなあ）

優人につきつく叱られた瞬間、自分でもどうしようもないほどの怒りが彼女の胸中へ大波のように押し寄せてきた。いつもの芳佳なら怒ったとしても、あれほどまでに感情が暴走したり、相手を傷付けるような発言をしたりはしなかっただろう。

しかし、自分の頑張りを否定するかのような兄の物言いが引き金となり、心のどこかに存在していた不満が怒りと共に爆発してしまった。

（帰って謝らなきゃ、だよね）

そう思いつつも、芳佳は基地へ向けて旋回することが出来ない。

少し前、ロンドンへ出掛けた時にも似たようなことがあった。あの時は、他のテープ

ルに座っていた客の憶測を真に受けてしまい、優人とクルピンスキーが付き合っている
と誤解したのだ。大好きな兄を取られてしまうという強い不安に耐えられず思わずレ
ストランを飛び出てしまった。

しかし、今回は違う。自分の心ない言葉は間違ひなく兄を——優人を気付けた。すぐ
にでも帰って謝らなければ、という想いが強い反面、嫌われてしまったらどうしよ
うという不安も強く、優人と顔を合わせることにすら恐ろしい。

「はあ……」

意気地のない自分を情けなく思い、芳佳は深い溜め息を吐いた。直後、着けているこ
とすら忘れていたインカムから声が聞こえた。

『ネウロイ出現！グリッド東23地区、単機よ！ロンドンに向か……』

声はミーナのものであった。基地本部管制塔より航空歩兵各員へネウロイの出現を報
せている。

（ネウロイ……！）

ミーナからの通信を聞いて、芳佳は沈んでいた表情を引き締めた。

通信によればネウロイは現在、グリッド東23地区で観測されたようだ。今、芳佳が
飛行しているこの空域に程近い。

先行するべきか、仲間達を待つべきか——

「行かなくちゃ!」

一瞬も迷うことなく決断する。のんびり待っていてはネウロイに逃げられてしまう。それに相手は一機、入隊した時よりも実力をつけた今の自分なら倒すことは無理でも足止めくらいは出来るはずだ。決めるや否や、芳佳はストライカーの速度を上げ、ネウロイのいる空域を目指した。

程無くして、グリッド23地区に到達した芳佳は周囲に目を凝らしてみるのが、ネウロイらしき機影は見当たらない。

(どこだろう? 大分近付いてるはずなんだけど……)

白い雲が漂う快晴の空とドーバーの美しい海を瞳に映しながら、しばらく飛行していると、遠方で赤く輝く何かを視界の端で捉える。

(見つけた!)

芳佳は、背負っている九九式二号二型改13m機関銃を構えて光った方向へ近付いていく。

すぐに雲上を飛行するネウロイを視認するが、芳佳は違和感を覚えた。目の前のネウロイは全長1mほどしかない小型で、彼女が今まで見てきた中では最小の個体だ。

(ちっさいけど、ネウロイには違くないよね? これなら、私ひとりでもやつつけられるかも!)

芳佳がそう思った瞬間だった。ネウロイが急に速度を上げ、芳佳から離れていった。「うえっ!？」

突然のことに驚く芳佳だったが、すぐさま速度を上げ、ネウロイに追い縋ろうとする。すると、今度は逆に芳佳との距離を一気に詰め、彼女の周囲をぐるぐる回り始めたのだ。

当惑する芳佳だったが、それでも13mm機関銃の銃口を突き付ける。ネウロイもまた、ビームの発射口である赤い装甲を芳佳へ向ける。

「あっ!？」

自分に向けて赤く輝き出したネウロイの装甲。芳佳は反射的に引き金を引こうとしたが、カチツ!カチツ!と音が鳴るだけで弾は出なかった。

(あっ!安全装置が!)

13mm機関銃は安全装置が掛けられたままだった。すぐさま解除しようとするも慌てているせいか、いつもより手間取ってしまう。

ネウロイからすれば今の芳佳は格好の的だ。しかし、ネウロイは何故か攻撃を中断し、代わりに姿を変え始めていた。

「よし!……あっ、ええ!？」

安全装置を外し、ネウロイに視線を戻した芳佳は思わず声を上げる。

芳佳の真横を並ぶようにして飛んでいたネウロイは人の形に——もつと言えば芳佳と同じ年頃のウィッチを連想させる姿に変形していた。

髪や使い魔の耳のようなものがある頭部。服着ているかのような上半身。脚部のストライカーユニットやズボンの部分まで再現されている。

(ネウロイが……人の形に!?)

驚愕のあまりネウロイを見つめたまま固まる芳佳だったが。無意識のうちに引き金に掛けられた己の人差し指を弛めてしまっていた。



同時刻——

格納庫で他のウィッチ達と合流した優人とペリーヌは、坂本に事のいきさつを説明しながらネウロイ迎撃のため空へ上がっていた。

「では、芳佳はネウロイが現れる直前に飛び出して行ったんだな？」

坂本が確認すると、優人が申し訳なきそうに答える。

「すまない。俺の監督不行き届きで——」

「その件は後にしろ」

優人の言葉を制すると、坂本は状況から芳佳の行動を推測した。

「芳佳のことだ。ネウロイの出現の報せを聞いて、単身迎撃に向かったのかもしれない。急ぐぞ！」

「……ああ」

坂本の言葉に頷くと、優人は遠方に目を向けた。芳佳の姿もネウロイの機影もまだ確認出来ない。

（芳佳……無事でいてくれ！）

優人はそう念じながら、九九式二号二型改13mm機関銃を強く握り締めた。



一方、芳佳は人型ネウロイと向き合いながら、考えを巡らせていた。

（この前戦ったネウロイは、サーニヤちゃんらの歌を歌ってた。もしかしたら、私達の真似をしているの？）

斯様な考えと共にネウロイに対する警戒心を少しずつ解いていく芳佳。引き金に掛けられた指を離し、13mm機関銃を構えた腕も段々と下がっていった。すると、ネウロイは両手を広げ、再び芳佳の周りを回り始めた。

「まるでウイツチみたい……」

ネウロイの行動に戸惑いつつ、思ったままのことを口に出す芳佳。

ネウロイは太陽を背にして芳佳の直上に位置取り、そのままゆつくりと降下する。

「えっ？ちよつと!?!ちよつと待って〜!」

慌てて両手を前に出し、ぎゅつと目を閉じる芳佳。ネウロイは彼女の言葉を聞き入れ

たかのように1m手前で停止する。

「……あ、あれ?」

ゆつくりと目を開けた芳佳は、本当に止まってくれたネウロイを見てポカン、となった。

そのままネウロイと並行して雲上を飛行しながら、芳佳はネウロイに語り掛ける。

「あの……初めまして。あなたは誰なの?」

ネウロイは芳佳の問いには答えず、ただじっと見つめ返している。

「……つて、ネウロイだよね?それは分かってるんだけど……」

ネウロイに声を掛け続けていくうちに、芳佳の中の困惑が少しずつ好奇心へと変わっていった。



同時刻、501基地本部管制塔――

「芳佳さんが、ネウロイと接触したのは間違いないわ。でも、そこから先はサーニヤさんにも分からないって……」

基地に残ったミーナは、管制塔からウィッチ達に指示を出していた。その声には不安の色が滲んでいる。

「すみません……」

ミーナのすぐ後ろでは、魔導針を頭上で輝かせたサーニヤが申し訳なさそうな顔をしている。

「アイツ、まさか捕まったンじゃ!?!」

隣にはエイラが立っている。他の隊員と睡眠サイクルが違う二人はネウロイの気配を察知し、慌てて起きてきたため制服を着ていない。夏場の寝間着として使っている下着のみの格好は目のやり場に困る。

『どういふことだ!?!』

スピーカーから坂本の苛立ちを湛えた声が返ってくる。



「離れるようには言えないのか!? こっちから呼び掛けているが、通じないんだ!」

『こちらダメ! ネウロイが、何かジャミングのようなものを仕掛けているのかも』

(……芳佳ッ! ……………)

坂本とミーナの会話を聞きながら優人は歯噛みする。自分があんな風に叱りつけたりしなければ、感情任せに手を上げたりしなければ。優人の胸中には後悔や罪悪感などという言葉では足りない、強い慚愧の念が渦巻いていた。



しばらく並行していた芳佳と人型のネウロイ。芳佳が手を伸ばしてみると、ネウロイはすつと身を引いた。

「あ…………えっ?」

次に芳佳は距離を取ってみる。すると、ネウロイは鏡のように芳佳の動きを真似した。

「もしかして、私のことからかかっているの? ねえ、待つてよお! ねえつてば!」

まるで遊びに誘うようなネウロイの機動。芳佳は触れようと追い掛ける。

「えいつーやつーほらっ！それっ！あはは！あははははっ！」

敵であるはずのネウロイと楽しげに飛ぶ芳佳。その笑顔は年相応だが、軍人としてはあまりに無邪気過ぎるものだった。

「——っ!？」

いつの間にか心から笑っている自分に気付き、芳佳はハツと我に還る。

(何で……何で、私笑ってるの?)

目の前にいるのはネウロイ。今日に至るまで幾つもの国へ侵攻し、多くの人命と平穏な生活を奪ってきた人類の敵。

自分はネウロイから多くの人を守るために戦っているはずなのに、そのネウロイに笑いかけるなんて……。

「……ねえ」

声を掛けると、ネウロイはのんびりとした機動で芳佳の元へと戻り、再び彼女と並行する。

「あなた達は、本当に私達の敵なの?……あっ！」

芳佳の質問に答える代わりに、ネウロイは胸部を開いて、弱点であるはずのコアを無防備に露出させた。

「——っ!？」

芳佳は驚きながらも、赤く輝く半透明の十二面体に目を奪われた。



「まだ追い付かないのか、ミーナ!？」

と、問う坂本。出撃した面々は既にグリッド東23地区に到達していたが、芳佳の姿は見当たらない。

『それが……』

インカムからノイズ混じりにミーナの声が聞こえてくる。

『ネウロイは、ガリア方面へ引き返しているわ。巢に戻るつもりじゃ……』

「おい、どういふことだ!」

優人が声を荒げる。真っ直ぐロンドンを目指していたはずのネウロイが、芳佳と接触した途端に侵攻を中断し、巢へ引き返していった。

その不可解な行動が、妹の身を案じる兄の心を不安に駆り立てた。

(奴ら、まさか芳佳に罠を……!?)

そんな考えが脳裏を過るのとほぼ同時に、坂本は遙か遠方に何かを見つけた。すかさず右手で眼帯を持ち上げ、魔眼を発動させる。

見えたのは、二つの人影。一つは芳佳、そしてもう一つは……。

「芳佳の他にウィッチがもう一人いる。いや、コアが見える……あれはネウロイだ！」
「なにっ!？」

坂本の言葉に反応して、優人の表情が険しくなる。妹の、弟子の危機を感じ取った二人は、我が身も省みずに突撃していった。

一方、芳佳は敵意や警戒心が完全に消えた穏やかな表情を浮かべ、人型ネウロイの胸元で輝くコアへと手を伸ばしていた。

当然、ネウロイにどのような意図があるかは分からなかったが、芳佳にはまるで触れて欲しい、と言っているように思えたのだ。

『芳佳っ!』

『何してるっ!?!』

コアに指先が触れようとしたその時、インカムから優人と坂本の怒鳴り声が飛び込んできた。芳佳がハツとなって振り返ると、優人と坂本が自分に向かって全速力で突っ込んで来るのが見えた。

「あ、お兄ちゃん?……坂本さん?」

「撃て!撃つんだ!」

坂本が叫ぶが、芳佳は従わなかった。

「違うんです！このネウロイは——」

「何してる！いいから撃て！」

芳佳は人型ネウロイから敵意が感じられないこと、他のネウロイと違うことをどうにか伝えようとする。しかし、事情を知らない坂本は聞く耳を持たない。

「ダメです！待って下さい！」

ネウロイに背を向け、芳佳は守るように両腕を広げる。

「惑わされるな！そいつは人じゃない！」

「違うんです！そんなことじゃ——」

「撃たぬなら退け！」

そう叫び、坂本は13mm機関銃を構える。彼女から敵意を感じ取ったのか、人型ネウロイはコアを装甲で覆い隠すと、芳佳から離れるように上昇していった。

「おのれ！」

ネウロイが芳佳から離れたところで、坂本は引き金を引いた。銃口から発射される12.7mm×99弾。

ネウロイはそれを難なく回避し、両腕からビームを放って反撃する。坂本はいつも通りシールドを張って、ネウロイの攻撃から身を守ろうとする。しかし、彼女は今この瞬間において、自らの魔法力が減退していることを完全に失念していた。

「——っ!?!坂本っ!」

叫び声と共にビームの射線上へ割り込んだ優人は、戦友を守るためにシールドを張ろうとする。

「何っ!?!」

しかし、突如ストライカーユニットが失速し、優人はバランスを崩した。そして、ネウロイのビームはシールドを張り損ねた彼の13mm機関銃に直撃、弾倉の誘爆を引き起こした。

暴発した銃が吹き上げた黒煙に混じって、血が飛び散り、背後にいた坂本の顔に付着した。

「がっ!?!……」

弾倉の爆発に巻き込まれた優人は短い悲鳴を上げて落ちていった。魔力の供給失い、ストライカーユニットが脚から脱げていく。

「お兄ちゃん!」

「優人さん!」

墜落していく優人を芳佳が真っ先に追う。追いついてきたリーネと二人で優人の元へ向かい、どうにか地上への落下を阻止する。

「……………」

坂本は空中で佇んだまま、動けずにいた。眼前で起きたショッキングな出来事に、思考が麻痺してしまっている。

目の前で戦友が負傷した。自分を庇って、大量の血を流し、頭から地へ落ちていった。自分のせいで、大怪我を負わせてしまった。

やがて意識がはつきりしてくると、坂本はネウロイに目をやった。

「き……貴様ああああああつ！」

坂本は怒りのままに吼えると、13mm機関銃を感情任せに乱射しつつ、ネウロイ目掛けて突撃していった。



近くに島を見つけた芳佳とリーネは、負傷した優人をその砂浜に寝かせていた。

「優人さん！聞こえますか!? 優人さん!!」

リーネが倒れ伏した優人に向かって呼び掛けるが、優人は気を失ったまま目を覚まさない。

傷は胸部にできていたが思いの外深く、溢れ出た血が扶桑海軍の第二種軍装と砂浜を紅に染め上げる。

「いや……いや……」

芳佳は歯をカチカチを鳴らしながら首をゆっくりと横に振った。こんなはずじゃなかった、こんなの嘘だ、というかのように……。

「……ま、待ってて……今治すから、ね」

そう言つて、倒れるように両膝を着いた芳佳は震える両手を傷口にかざして治癒魔法をかけ始めた。しかし、その光りはとても弱々しく、辛うじて傷を覆う程度のものだつた。

（なんで？……どうして治らないの？お願い！治つて！）

芳佳の治癒魔法は明らかに機能していない。必死に治療を施すも傷は一向に塞がらず、流れ出る血も止められない。それでも芳佳は治癒魔法をかけ続けるようとする。しかし、乱れきつた心では魔法のコントロールなど出来るはずもなく、いたずらに魔法力と体力を消耗するだけであつた。

——お兄ちゃんのバカ！

格納庫で優人言い放つた言葉が脳裏に浮かんでくる。

——大っ嫌い！

（……違う）

——もう死んじやえ！

(違う！)

——死んじやえ！

(違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！)

優人への罵倒が脳内で何度も繰り返され、その度に芳佳は否定するように激しく頭を振る。

(……どうしよう。私のせいだ、私があんなことに言つたから……)

芳佳の両手から治癒魔法の光が完全に消え、代わりに瞳から大粒の涙がポロポロと流れ出した。

(どうしよう……どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！どうしよう！)

「芳佳ちゃん？どうしたの？芳佳ちゃん!」

涙を流しながらカタカタ、と震える芳佳にリーネが声を掛けるが、優人の負傷ですっかり気が動転してしまっている彼女の耳には入らない。

(お兄ちゃんが……お兄ちゃんが死んじやうっ!!)

その考えに至った直後、芳佳の目の前が真っ暗になった。



その頃、扶桑皇国横須賀——

501基地が置かれているブリタニアと宮藤兄妹の故郷である扶桑は9時間ほど時差がある。現在、ブリタニアは昼過ぎだが、扶桑の横須賀は午後9時頃。小さい子どもであれば床に就く時間帯だ。

ガシャーン!

宮藤兄妹の実家——宮藤診療所の台所から食器の割れる音が響いた。

「どうしたんだい?」

音を聞きつけた芳子が台所に顔を出すと、清佳がしゃんがんで食器の破片を拾っていた。

「優人のお茶碗、割っちゃって」

清佳はそう言つて苦笑すると、芳子に割れた茶碗を見せた。

それは確かに優人が海軍へ入隊する直前まで使っていた茶碗で、優人が家を出てからは息子がいつ帰つて来てもいいように、と清佳が大切に保管していたものである。

「おや? 珍しいね、あんたが食器を割るなんて……」

どこかそそっかしいところのある孫娘の芳佳ならいざ知らず、しつかり者の娘が食器を落として割るなど、随分久しぶりのことだ。

「ホント、何やってんだかね」

清佳は自嘲気味に言うのと、破片拾いを再開する。

「優人と芳佳がブリタニアから帰ってきた時の為に、いつでも出せる場所へ移そうとしたんだけど」

「そのお茶碗、優人にはもう小さいんじゃないのかい？」

「それもそうね。新しいの買わなきゃ」

クスリ、と笑みを零す清佳だったが、左手に集めた茶碗の破片に視線を落とした途端、何故か表情を曇らせた。

「……二人のことが心配かい？」

芳子の問い掛けに清佳は小さく頷く。

「芳佳の面倒は優人がちゃんと見てくれると思うけど……優人の方は……」

「あの子、しつかりしているようで芳佳以上に無茶なことをするからねえ。芳佳も芳佳で頑固だし」

芳子は顎に手を当てて言う。母の話を聞いて、清佳は何年か前のことを思い出していた。

その日は清佳の誕生日だったが、激しい土砂降りが起きた日でもあり、清佳はその年小学校に上がったばかりの優人と、まだ3歳だった芳佳に対し、絶対外には出ないよう言い聞かせていた。

しかし、優人はそんな悪天候にも関わらず、母の誕生日プレゼントを買いに行くんだ、と傘を差して隣町まで出掛けてしまった。幸い優人はプレゼントを手にして無事帰ってきたものの、彼が戻るまで清佳は気が気でなかった。

海軍への入隊後を除き、あの日ほど息子を心配したことはなかった。あの日ほど息子を怒ったことも、あの日ほど嬉しいかつたことも……。

（優人、芳佳。二人共、今どうしているの？ご飯をちゃんと食べてる？何か悩みはない？怪我とかしていない？）

扶桑より遠く離れた異国の地——ブリタニアで頑張っているであろう息子と娘を、母をひたすら想い続けた。

第36話 「魔眼の涙」

坂本は憎悪にまみれた表情で人型ネウロイを睨み付けると、素早い動作で九九式二号二型改13mm機関銃を構えた。

怒りに任せて銃を乱射し、自分が被弾する危険性も省みずに真正面からネウロイに突っ込んでいく。しかし、ろくに照準も合わせない状態での射撃が、航空ウィッチさながらの機動を取る人型ネウロイに当たるはずもなく、いたずらに弾をばらまくだけであつた。

(よくも、よくも……よくもおお！)

戦闘で僚機を失つたことがなく、そのことを誇りとしていた坂本。そんな彼女の目の前で、隊において最も長く苦楽を共にした戦友が自分を庇って負傷してしまった。

この事実が日頃の冷静さを彼女から奪っている。猪突猛進としか言えない戦いぶりが坂本自身の精神的・感情的な動揺を物語っていた。

対する人型ネウロイは、激昂した坂本の剣幕に気圧されたのか、それとも複数のウィッチ相手では分が悪いと判断したのか、逃げの一手だ。

「坂本少佐っ！突出し過ぎるな」

「一人で突っ込み過ぎだよおー」

仲間達が追い付いてきた。バルクホルンとハルトマンが無茶な戦いぶりに警告を発するも、強い怒りの感情が胸中で渦巻いている坂本の耳には届かない。

今の坂本の耳に聞こえているのは13mm機関銃の発砲音のみ、彼女の眼に映っているのは戦友の仇である人型ネウロイだけだ。

やがて弾倉内の弾をを撃ち尽くした坂本は、13mm機関銃を投げ捨て、背中 of 愛刀に手をかける。

「おのれええええええ!!」

抜刀と共に怒号放った坂本は、ネウロイとの距離を一気に詰めようとする。その時だった。

「——っ!?!」

突如、坂本の眼前へ進行を妨げるかのように一筋の光が降ってきた。鉄をも瞬時に溶解させるほどの高熱を帯びた赤い閃光——ネウロイのビームだ。坂本がハツとなって顔を上げると、別個体のネウロイが彼女の真上に陣取っていた。

(新手!?)

新たに現れたネウロイも人の形をしており、使い魔の耳を連想させる頭部の装飾とストライカーユニットを模した脚部を持っているが、ウィッチに似た一体目とは細部の形

状が異なる。女性用のズボンに相当する部位は再現されておらず、ウィッチよりもやや大柄でガッチリとした体格に短めの頭髪のような形状の頭部も相まって、その姿には男性的な印象を受ける。

芳佳と接触した個体がウィッチを模して変形したネウロイならば、こちらはウィザードを想わせる風貌をしている。

「邪魔をするなっ!」

行く手を阻んだ二体目の人型ネウロイに向かって吠えようと、坂本は刀を両手で構えて上昇しようとする。対して坂本を静かに見下ろす人型ネウロイは右腕を構えてビームを放った。

「お止めください!少佐!」

追い付いたペリーヌが背後から坂本に抱き着ついた。感情的になっている上官を制しつつ、シールドを張ってビームから自分達の身を守った。

「離せペリーヌ!」

「ダメですわ!」

「上官命令だ!離せ!」

「その命令には従えません!」

頭を振って命令を拒否するペリーヌ。二人が争っている隙に、人型ネウロイはビーム

でウィッチ達を牽制しながら離脱していく。

「離してくれ！やつは！やつらは優人を！」

ペリーヌの腕の中でもがきながら、遠ざかっていく二体の人型ネウロイを鋭く睨みつける坂本。しかし、ペリーヌもまた坂本を離すまい、行かせまいと腕に力を込める。

「離すわけには参りませんわ！今のままネウロイと戦えば、宮藤大尉だけでなく少佐まで……」

段々と小さくなり、嗚咽が混じり出すペリーヌの声を聞いて、坂本はハツとする。

「……ペリーヌ、泣いているのか？」

「……………」

ペリーヌは何も答えなかった。代わりに密着した坂本の背中にコツン、と額を押し付けた。

「……………すまない」

ペリーヌの言葉でいつもの冷静さを取り戻した坂本は短く詫びると、インカムを使って基地へ連絡を入れた。



ネウロイとの戦闘で負傷した優人は基地へ搬送されると、直ちにストレッチャーに乗せられ、基地内の手術室に運ばれていった。

間も無く、基地の嘱託医——アラン・ロフティング医師と彼の元で働くウイステリア・ピース看護師が駆け付け、緊急手術が開始されようとしていた。

手術室の前では、ミーナがウイステリアから優人の容態を聞かされていた。

「宮藤大尉についてですが、銃が暴発した際に飛び散った破片が胸部に多数突き刺さっています。出血も酷く、大変重篤な状態です」

「……助かるんでしょうか？」

予想より重症を負っていた優人。501の隊長として気丈に振る舞いながらも、ミーナの瞳には近しい人間の負傷からくる動揺が見てとれる。

「それが……輸血用の血液が足りなくて」

「そんなっ！ウイツチやウイザードに輸血するための血液は優先的に用意されるはずですよ！」

「書類上は保存されていることになっていますが、保管庫内に見当たらないんです」

「えっ!?!」

ウイステリアが告げると、ミーナは目を見開いた。501の隊員や整備兵などの基地要員に輸血するための血液は、ストライカーの部品や武器弾薬等と共に補給物資として

総司令部経由で送られてくる。

数日前、補給が来た際にミーナ自ら届いた物資と内訳書を照らし合わせ、不備が無いことを確認していた。輸血用の血液も間違いなく全員分届けられていたはずだった。

「それに加えて、宮藤大尉の血液型はA B型のRhマイナス。2000人に一人という珍しい型で、調べましたが基地内にはウィッチ隊の皆さんを含め適合者が一人もいません」

「……分かりました。周辺の基地や街に連絡して、輸血者を募ってみます」

「なるべく急いで下さい。大尉の容態は、もってあと2、3時間……いえ、それ以下かも」
ミーナはウイステリアの言葉に小さく頷き、「宮藤大尉をお願いします」と軽く一礼してからその場を後にした。



浴槽から立ち上る湯気で満たされた宿舎の大浴場。そのシャワースペースでは髪を下ろし、右目の眼帯を外して魔眼を露にした坂本が、降り注ぐシャワーの湯を頭から浴びていた。

正午前は訓練を終えたウィッチ達で賑やかだった浴場も、今は彼女一人の貸切状態。

シャワー音と天井から水滴の落ちる音だけが浴場内に響いている。

坂本はシャワースペースに茫然と立ち尽くしたまま石鹸で身体を洗うことも、シャワーを終えて熱い湯に浸ってリラククスする様子もない。ただシャワーベッドに向けてるようにして顔を上げ、ひたすら湯を被る。

(優人……)

ふと露になっっている魔眼から一筋の涙が溢れ出た。その雫はシャワーの湯と共に肌を伝い、床へと流れ落ちていった。

「……………くそおおっ!!」

ガンツ!

静寂に支配されていた浴場内に、怒りに満ちた叫び声と鈍い打撃音が響き渡る。坂本が己の右拳を強く握り、壁に叩きつけたのだ。

余程の力を込めたのだろう。魔法力を使われないながらも拳を受けた壁には罅が入っていた。当然、坂本自身も無事では済まず、ゆつくりと壁から引き抜いた拳には血が滲んでいる。

「……………くっ……………うう」

左手で右拳を押さえた坂本は小刻みに震え出した。普段の凜々しい姿からは想像出来ない弱々しい姿は、彼女もまた年齢相応のか弱い少女であることを物語っている。

坂本は戦闘時のことを振り返った。脳裏に浮かぶのは自分を庇った時の優人の後ろ姿。黒煙に紛れて飛び散った大量の血。そして、その血が頬に付着した感触。

ミーナに言われるまでもない。自身の魔力がシールドをまともに使えなくなるほど減退していることはわかっていた。だが、まだ空は飛べる。魔眼も使える。シールドでビームを防げないなら避けてしまえばいい。そう思っていたし、やってのける自信もあった。しかし、長年シールドを使って戦ってきた癖が簡単に抜けるはずもなく、坂本はネウロイのビームをシールドで受けようとした。

その結果、減退のことを知っていた優人が彼女の身代わりとなった。本当は自分が負うはずだった傷を自分が守りたかった人間の一人に負わせてしまった。

さらに自分を見失い、芳佳が隊に来る以前のバルクホルンのような……いや、それよりも危険な戦闘スタイルでネウロイに向かっていった。ペリーヌが止めてくれなければ、坂本も優人と同様ネウロイに撃墜されるか、最悪戦死していただろう。

(何が……サムライだ、何が501の戦闘隊長だ)

目尻に涙を浮かべた坂本は膝から床へ崩れ落ちた。過信から仲間が撃墜される原因の一旦を作り、怒りのままに暴走して醜態を晒し、仲間の敵を討つどころか傷一つ付られなかった。

「うっ……ふっ……うわあああああつ!!」

坂本は久し振りに、本当に久し振りに大声を上げて泣いた。幼い子どものように、ポロポロと涙を流しながら……。



数分後、ブリーフィングルーム――

ミーナが召集をかけると、すぐにウィッチ達が集まった。

芳佳、坂本、リーネの姿はなく、全員が揃ったわけではなかった。が、緊急を要するため、壇上に上がったミーナは今室内にいるメンバーにのみ急ぎ状況を説明した。

「輸血用の血が足りない?」

事情を聞いたバルクホルンが確認するように繰り返すと、ミーナは「ええ」と頷いた。

「もし血液や輸血者が見つからなかったら、宮藤大尉はどうなりますの?」

ペリーヌが訊ねると、ミーナは顔を伏せ唇を軽く噛みながら答える。

「……あと3時間。いえ、2時間以内に輸血が出来なければ……宮藤大尉は助からないわ」

「そんな……」

優人に命のタイムリミットが迫っていることを知らされたサーニャは、今にも泣き出

しそうな表情で呟く。隣に座るエイラがそれに気付き、慌てて彼女を励ました。

「た、たった2000分の1の確率だろ？すぐ見つかる！ナンテコトナイッテ！」

「……うん」

だが、サーニヤの表情は暗いままだった。

「ねえねえ、シャーリー。アタシの血、優人と同じ赤色だけどダメ？」

涙を瞳いっぱい溜めたルツキーニが、シャーリーの肩をユサユサと揺らしながら問う。

「残念だけど、輸血っていうのは血液型が合わないと出来ないんだよ」

「うじゅう……」

シャーリーに諭され、ルツキーニは肩を落とした。優人を助けたいのだろうが、血液型が合致したとしても彼女の年齢では輸血は難しいだろう。

「事は一刻を争います。皆さんには近隣の街や基地に出向いて——」

ジリリリリン！

ミーナの言葉を遮るように司令部直通の赤電話が鳴り響いた。音につられ、ウィッチ達の視線が自然と電話に集中する。

「電話？」

「まさか……もうマロニーが嗅ぎ付けたのか!？」

電話の着信音で一同が沈黙する中、ハルトマンとバルクホルンが順に呟いた。二人もミーナも優人の負傷にばかり気を取られ、トレヴァー・マロニーという男の存在を忘れていた。

各国の指揮系統から独立した部隊である501を疎ましく思っているマロニーは、当部隊をブリタニア空軍の指揮下に置くため、虎視眈々とウィッチーズの落ち度や弱みを探っている。

もし今の状況が彼の耳に入っていたとしたら、他の基地や部隊に圧力をかけた上で、優人への輸血と引き換えに指揮権の譲渡を持ち掛けてくる可能性が高い。当然、芳佳の一連の独断専行や命令無視に関しても口出ししてくるだろう。

「……………」

しばらくは出ることを躊躇して無言で赤電話を見つめていたミーナだったが、意を決して手を伸ばし、取った受話器を耳に当てた。

「はい。第501統合戦闘航空団司令、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐です」
『ミーナ中佐か。私だ、扶桑海軍の赤坂だ』

「——つ!?赤坂中将!?!」

受話器の向こうから予想外の人物の声が聞こえ、ミーナは驚きの声を上げた。

『突然すまないな。宮藤大尉が戦闘で負傷、それもかなりの重症を負っていると聞いた

ものでね』

「なっ!? 何故中将がそのことを!？」

西部方面総司令部所属にしている將軍の一人とはいえ、まだブリタニア軍にすら報告していない優人の容態を何故彼が知っているのだろうか、とミーナは心中で訝しがった。

『蛇の道は蛇、とだけ言っておこうか』

ミーナの問いには応えず、煙に巻くような言動を取る赤坂。

『輸血の件なら心配要らんよ。今しがた、遣欧艦隊から輸血者を飛行挺で派遣した。あと30分もすればそちらに到着するはずだ』

「了解しました。では、受け入れ準備を——」

『それとだ。宮藤大尉の状態について、飛行挺のパイロットを通して私に事細かく報告して欲しい。マロニー大尉の耳に届くよりも先に』

「……それは命令でしょうか?」

ミーナは表情を険しくしながら訊く。

『あくまで要請だよ。私には君ら統合戦闘航空団に命令する権限などない』

白々しいことを言う赤坂の言葉に耳を傾けながら、ミーナは眉を寄せた。501の運用において、ブリタニア空軍やカールスラント空軍に並ぶ発言権を持つ扶桑海軍将官の“要請”は“命令”ほどの強制力が無いにせよ、無下に出るものではない。

マロニーが狐だとすれば、彼の政敵である赤坂は狸。連合軍という組織内において、利権絡みの化かし合いを繰り広げる二人はブリタニアと扶桑、空軍と海軍、ウィッチーズに協力的であるか否か等々の違いがあれど所詮は同じ穴の貉。隙を見せてはいけないことに変わりはない。

「ならば、こちらからも一つ条件を提示させて頂いてもよろしいでしょうか？」

『それは内容次第だが、何だね？』

赤坂が訊ね返すと、ミーナはおもむろに口を動かした。



約30分後、宿舎内脱衣所前――

「少佐っ！」

「……ペリーヌか」

風呂から上がり、坂本が脱衣所から廊下に出ると、すぐ近くの休憩所のソファアームに座っていたペリーヌが立ち上がった。坂本を待っていたらしい。慣れないコンタクトは外され、眼鏡を掛けている。

「あの……お伝えしなければならぬことが……」

「優人の容態についてか？」

と、問う坂本。ひととおり泣いたことで落ち着きを取り戻したのか。いくらか疲れているような印象を受けつつも、表情と所作にいつもの凛々しさが戻っているように見えた。

「はい」

ペリーヌは頷き、ブリーフィングルームでのことを語り始めた。優人の容態、輸血のこと、赤坂が派遣した輸血者のこと等々。治療中の優人がいる手術室を目指して歩きながら、一つ一つ順序立てて説明する。

「では、輸血の件は心配ないんだな？」

「はい。つい先程、輸血者の方が到着されましたわ」

一通り説明を終えたペリーヌは僅かな沈黙を挟んだ後に、ハンガーの一件より心の隅に引っかかっていた疑問をぶつけてみた。

「あの、少佐」

「ん？」

「宮藤大尉とみや……芳佳さんは、もしや義兄妹なのですか？」

芳佳は優人に向かって『私達、本当は〃兄妹でも何でもない』と言っていた。言葉通りに受け取るならば、二人は血の繋がりが無い義兄妹ということになる。

「そうか。そう言えばミーナ以外にその話をしていなかったな」

坂本は思い出したように呟くと、優人について自分の知りうる限りのことを語り始めた。

14年程前、優人は記憶を失い、自分の名前すら分からなくなっていたこと。宮藤家に引き取られ、宮藤夫妻の養子になったこと。夫妻から名を与えられ、『宮藤優人』として今日まで生きてきたこと等々。

ペリーヌは坂本に合わせて歩を進めつつ、真剣な面持ちで時折頷きながら、彼女の話に耳を傾けた。

「そういった事情がありましたのね……」

ペリーヌは特に驚くというよりは納得していた。養子ならば、才あるウィザードであるはずの優人が、代々母方の直系に受け継がれてきた治癒魔法を有していないことや優人と芳佳が兄妹にも関わらず容姿が似ていないことにも説明がつくからだ。

「養子になる前の記憶については？」

「それが未だに何も思い出せないらしくてな。まあ優人自身、特に意識して思い出そうともしてないようだがな……」

「……とおっしゃいますと？」

「はじめこそ自分が何者かも分からず不安がっていたようだが、芳佳や宮藤家の人々と

暮らしているうちに気にならなくなったらしい」

自分が誰かも分からず、家族や友人のことも全く覚えていない。記憶を失ったばかりの頃の優人を取り巻く不安と恐怖がどれだけのものなのか、他者には想像も出来ない。

そんな状況下でも宮藤家の人々と出会えのは幸運だった。養子に迎えられ、両親や祖母から惜しみ無い愛情を注がれて育った優人は自身の境遇を悲観することなく生きてこれたのだ。

それでも家族と血の繋がりが無いことには、やはり重い目を感じていたのだろう。だからこそハンガーでの芳佳の発言に激昂して、彼女に手を上げてしまった。

「……妹の方はどうしている？」

坂本が芳佳のことを訊ねると、ペリーヌは僅かに表情を険しくする。

「まだ部屋で眠っています。リーネさんがついて下さっていますわ」

リーネと共に優人の救助に当たっていた芳佳は、目の前で大好きな兄が撃たれ、負傷したことに強い精神的ショックを受けていた。さらに錯乱した状態で使用した治療魔法が魔法力と体力を激しく消耗させた。

他の仲間達が遅れて駆けつけると、体力的にも精神的にも限界を迎えた芳佳は気を失い、優人と重なるように倒れていた。

「目の前で家族が撃たれたんだ、無理もないな」

坂本は優人だけではなく、芳佳のことも気がかりだった。

優人が負傷した直接の原因は坂本だが、きつかけは芳佳の独断専行と命令無視。軍規に疎い芳佳がそのことを理解しているかどうかは分からない。しかし、芳佳の性格とハンガーでの一件を鑑みて、おそらく彼女は自分のせいだと思ったことだろう。

「大尉も少佐もあの子に甘過ぎます」

ふとペリーヌが不機嫌さを孕んだ口調で語り始めた。

「今まで世界を守ろうと戦ってきたのは私達です。なのにあの子ったら突然やって来て、大尉に怪我までさせて……」

「ペリーヌ……」

語りの途中で歩みを止め、俯くペリーヌ。坂本も一旦動きを止め、彼女に向き直った。「厳しい言葉をかけられて、カチンとなるのは分かりますけど。誰だって好きで憎まれ役をやっているはずありませんわ。むしろ可愛い妹にきつく接しなければならぬ大尉の方が辛——」

「ペリーヌ！」

段々と泣き声混じりとなつていくペリーヌを、坂本は大声で制した。ハツとなつて顔を上げたペリーヌは怒られると思つたのか、シユンと萎縮する。

しかし、予想とは裏腹に坂本はペリーヌの頭をそつと撫でた。その優しい手つきにペ

リーヌは「え？」と目を丸くした。

「ありがとう」

不思議そうに自分を見上げるペリーヌに、坂本は穏やかな表情で告げる。

「戦闘中、怒りで目が曇っていた私の目を覚ましてくれただろうか？本当に感謝している」
「少佐……」

敬愛する上官からの慈愛に満ちた温かい言葉に感動を覚えたペリーヌは瞳を潤ませ、頬を染めながら見つめ返した。

「と、いかんいかん。優人のところへ急がねばな」

坂本は思い出したように言うと、手を引つ込めた。ペリーヌは「あつ……」と残念そうな声を上げた。

「輸血者は今どこにいる？」

「確か、手術室前に……あつ、いらつしやいましたわ！」

そう言つてペリーヌが指差した先では、手術室前のベンチに腰掛けた輸血者らしき男性がミーナと話をしていた。

「美緒」

近付いてくる坂本に気付いたミーナが声を掛ける。

「ミーナ、話はペリーヌから聞いた。それで、そちらの方が？」

「ええ、優人への輸血を申し出て下さったのよ」

ミーナが簡潔に説明すると、男性は立ち上がった一礼する。

男性はノーネクタイで黒色のスーツを着こなし、紳士帽のような洒落た帽子をやや深めに被っている。そのせいで顔は半分ほどしか確認出来ないが、鼻が低いことから扶桑人の男性だというのが分かる。帽子越しに眼鏡と火傷の跡のような傷も確認出来た。

遣欧艦隊から派遣されたそうだが、体格からして軍人には見えない。軍属の技術者か何かだろうか。

「第501統合戦闘航空団戦闘隊長の坂本美緒です。この度は宮藤大尉の為に——」

坂本が一礼して謝意を述べると、フツツという笑い声が彼女の耳朵を打った。声につられて顔を上げると、男性は帽子を脱いで顔を見せていた。

「久しぶりだね、坂本少尉。いや、今は少佐だったね。大分遅れてしまったけど昇進おめでとう」

「なっ!? あ、あなたは——」

坂本は目を見開いた。彼女は男性の顔、声、口調に覚えがあった。それは数年前に起きた事故で、この世を去った人物のものと瓜二つ——いや、本人そのものだったのだ。

第37話「優しい兄と泣き虫な妹と」

優人が撃墜された日の夜、501基地宿舎——

優人と同じく仲間に運ばれて帰投した芳佳は自室のベッドで眠っていた。傍らでは椅子に腰掛けたリーネが、心配そうな表情で見守っている。窓から射し込む月光に照らされた芳佳の寝顔は安らかには程遠く、どこか苦しげに見えた。

少し前、リーネと同じく芳佳を心配したバルクホルンが様子見がてら優人の容態を報告せに部屋を訪れていた。「手術は無事終了。破片はなんとか摘出されたが、助かるかどうかは五分五分」、「ロフティング医師によれば今夜が山になる」とのこと。

ふとリーネの視線が窓辺に置かれた宮藤兄妹の父——宮藤一郎の写真へと移る。
(芳佳ちゃんのお父さん……ブリタニアで亡くなったんだよね)

一郎は芳佳が10歳、優人が14歳の誕生日を迎えたその日に死亡したとされている。早過ぎる父の死。幼い少女にとって、運命というにはあまりに残酷な現実。とても受け入れられるものではなかっただろう。

そして今、彼女が心から慕い、部隊内で誰より遠慮なく甘えることが出来るほど気を許している兄が目の前で撃たれ、血を流し、倒れた。手術を終えた今も病室で生死の境

をさ迷っている。

(もし、このまま優人さんが死んじゃったら……)

ふと脳裏に気を失う直前の芳佳の顔が浮かんだ。少しの油断が負傷や戦死に繋がりがねない実戦においても弱音一つ吐かない芳佳が、完全に怯えきった表情を浮かべ、奥歯をガチガチと鳴らしながら震えていた。

父に続いて兄まで失うかもしれない、という恐怖に心を支配された芳佳の精神は既にボロボロとなっていている。このまま優人が死んでしまったら、芳佳はどうなるのだろうか。廃人になるかもしれない。それを免れたとしても心に深い傷を負うことは確実で、少なくとも今までの宮藤芳佳ではいられなくなる。芳佳にとって優人はそれほど大きな存在なのだ。

「……………う、ううん」

ふいに芳佳の口から小さな声が漏れ聞こえ、物思いに沈むリーネの耳を打つ。リーネが顔を傾けると、芳佳はゆっくりと目蓋を開いた。

「大丈夫？」

目を覚ました親友に、リーネは穏やかな表情で語り掛ける。

「……………あ、あれ？」

「芳佳ちゃん、良かった」

ホツと安堵するリーネ。芳佳はまだ意識がはつきりしていないのか、反応が鈍い。ゆつくりと上体を起こすも、身体が鉛のように重く感じた。

「ハイは？」

キヨロキヨロと室内を見渡した芳佳は、自分の部屋にいたのだと理解する。

(私…………どうして…………)

何故部屋のベッドで眠っていたのか、芳佳は己の記憶を辿ってみた。すると、血まみれの状態で砂浜に倒れる優人の姿が脳裏にフラッシュバックし、ハツとする。

「お兄ちゃんは!? お兄ちゃんはどうなったの!? リーネちゃん、教えて!!」

血相変えた芳佳がリーネの肩を掴んで問い質すと、彼女は曇った表情で見つめ返しながら答える。

「手術は終わったけど、まだ助かるかどうか分からない、って先生が…………」

「それって…………助からないかもしれないってこと?」

重ねて訊ねる芳佳に、リーネは否定も肯定もせず無言で応じた。彼女は優人が死ぬかもしれない、などと面と向かって言えるほど老練でも残酷ではなかった。

「そんな…………」

しかし、芳佳はそれを肯定と受け取ったらしい。シヨックのあまりリーネの肩を掴んでいた両手からは力が抜け、両腕がだらんと垂れ下がり、視線も膝へ落とされる。

「芳佳ちゃん……」

何か励ましの言葉をかけなくては、と思つたリーネだったが、良い言葉が思い付かず、自身もつられるようにして俯いてしまう。

「リーネちゃん……どうしよう」

暫しの沈黙の後、芳佳が震える声で言葉を発した。

「私、お兄ちゃんに酷いこと言っちゃつた……」

声だけでなく身体も震え始め、瞳には涙が浮かぶ。

「兄妹じゃない、って……大嫌い、って……死んじゃえ、って……」

「……うん」

リーネは小さく頷いた。ハンガーでの一件は、既にウィッチ全員の耳に入つていて、とだが、リーネは「聞いたよ」と遮ることはせず、真剣な面持ちで芳佳の言葉に耳を傾けた。

「本当はそんなこと思つてないのに……お兄ちゃんはお兄ちゃんなのに……」

「うん」

「大好きなお兄ちゃんなのに……なのに……なのに……」

「うん」

「このままお兄ちゃんが死んじゃつたら、私……私……私……」

段々と涙声になっていく芳佳。リーネはベッドに身を寄せると弱々しく震える芳佳を抱き締めた。

「……リーネちゃん？」

「優人さんを助けようよ」

抱き締められた芳佳は戸惑った表情でリーネを見上げる。リーネは聖母のような優しい微笑みを浮かべながら芳佳に告げる。

「病室に行こう？ バルクホルン大尉の時みたいに芳佳の治癒魔法で優人さんを助けるの」

「……無理だよ」

と、再び俯く芳佳。

「見てたでしょ？ 私の治癒魔法、全然効いてなかった。お兄ちゃんの血、止められなかった」

「大丈夫だよ。あの時の芳佳ちゃん、少し混乱しちゃってただけだから。今度は絶対上手くいくから優人さんのところに——」

「無理だよっ！」

頭を降りながら大声を発する芳佳。リーネは僅かにビクツとする。

「結局、無理だったんだよ。誰かの役に立ったり、誰かを守ろうだなんて……私にはお母

さんやお祖母ちゃんみたいに治癒魔法を上手に使うことも、お兄ちゃんみたいに強いウィッチになることも出来ない。私は口先ばかりで何も出来ない役立つで……」

「芳佳ちゃん……」

「こんな時、お母さんやお祖母ちゃんがいてくれたら……」

リーネは自身の目を疑った。彼女はつきり、芳佳がすぐさま優人の病室へ向かうとばかり思っていたが、その予想は大きく裏切られた。

どれだけ失敗を重ねようと諦めずに頑張ることが出来る芳佳が、出来るかどうか考えるより先に行動に移る芳佳が、初戦果を上げる前の自分と同じか、それ以上に卑屈な考えに染まっていたのだ。

本心ではなかったとはいえ、大好きな兄に暴言を吐いてしまった自責の念とその兄を失うかもしれないという恐怖に押し潰された芳佳は完全に自信を喪失してしまっている。

「いい御身分ね、宮藤芳佳」

ふと部屋の入り口の方から声がする。リーネが振り返ってみると、ペリーヌが開かれたドアに背を預けるように立っていた。

「お兄様が大変な時にこのうのと寝ているなんて」

「このうのとだなんて……芳佳ちゃんは目の前で優人さんが撃たれたから……」

芳佳の心情を省みない嫌味な言動を取るペリーヌ。芳佳に代わり、リーネが反論する。

「あなたは黙ってなさい！」

ペリーヌはリーネをキツと睨み付けると同時に声を張り上げた。

「黙りません！」

普段の気弱なリーネであれば、容易く気圧されたことだろう。しかし、今の彼女は違った。ペリーヌに一步も引かず、毅然とした態度で言い返す。

「芳佳ちゃんは優人さんが負傷した時に、真つ先に駆け寄って治療をしていたんです！」
「そんなの当たり前です！この娘の独断専行が原因なんですから！」

ペリーヌはそれだけ告げると、リーネの横をすり抜けて芳佳に駆け寄った。

ポロポロと涙を感じに流し、両腕で自分の身を守るように抱き締めながら震えている芳佳を、ペリーヌは険しい表情で見下ろした。

「……ペリーヌさ——」

パチツ！

「——ッ!?!」

視線を感じた芳佳が顔を上げると、その頬にペリーヌが平手打ちを見舞う。突然のことに芳佳は思わず目を見開いた。

「私の見込み違いだったようね……」

「……え？」

「あなたなら、起きてすぐに宮藤大尉の元へ駆けつけると思っていましたのに。出来るかどうかなんて頭で考える前に治療を行うと思っていましたのに」

「……」

「結局、お兄様に付き添って貰わないと何も出来ない人間だったのかしら？」

抑揚の無い声で浴びせられる侮蔑を孕んだペリーヌの物言いに、芳佳は返す言葉もなかった。再び俯こうとすると、ペリーヌが右手で芳佳の顎を掴み、強引に上を向かせた。

「昼間、あなたがハンガーから出ていった後のことを話すわ。黙ってお聞きなさい」

「あ……」

先程の侮蔑的な発言とは打って変わって、今度のペリーヌの言葉からは有無を言わさぬ口調ながらに優しく諭すかのような穏やかさも感じられた。

「宮藤大尉は……あなたのお兄様は泣いていらつしやいましたわ。何故かお分かり？」

「わ、私が……酷い、ことを……言ったから？」

「いいえ」

ペリーヌは首を左右に振って否定し、自ら問いの答えを告げる。

「あなたを叩いてしまったからよ」

「えっ?」

「大切な妹であるあなたに手を上げてしまったからよ」

そう語るペリーヌの脳裏にある情景が浮かび上がる。それは芳佳が飛び出していった直後、ネウロイ出現を知らせる警報が鳴り響くハンガーでのこと。

◇ ◇ ◇

ネウロイ出現直後、ハンガー――

芳佳が飛んで行ってしまった空を見上げ、茫然と立ち尽くす優人の瞳には小さな雫が光っていた。

見てはいけないものを見てしまったような心情になりつつも、ペリーヌは恐る恐る声をかける。

「た、大尉……?」

「どうしよう、ペリーヌ」

「え?」

「俺……芳佳を叩いちゃったよ。それにあいつのこと何も理解しないまま、頭ごなしに否定して、叱って、傷付けた。一線を越えると感情の制御が利かなくなるのが悪い癖

だって、子どもの頃から言われてたのに……なのに……」

完全に取り乱している優人の頬を一筋の涙が伝う。握り締めた拳は震え、いつもより小さく見える背中が彼の後悔と内に秘めた弱々しさを物語っていた。

ペリーヌはどう言葉を掛けていいか分からず、優人の後ろ姿を眺めながら彼が落ち着くのを待つことしか出来なかった。

◇ ◇ ◇

(お兄ちゃん……)

ペリーヌの話を聞いた芳佳は言葉を失った。ハンガーでの一件で兄に嫌われてしまったばかりと思っていたからだ。しかし、実際は寧ろ逆だった。

思えば兄は——優人は昔からそうだった。常に自分よりも芳佳のことを想い、どうすれば芳佳を笑顔に出来るか、どうすれば芳佳が喜んでくれるかを考えてくれていた。

幼い頃の記憶の中にある優人は、いつだって自分に微笑み掛けていた。その優しく、温かな笑顔はずっと変わらずに芳佳に向けられていた。いつの日か、それがすっかり当たり前に感じるようになり、芳佳は心のどこかで『困ってもお兄ちゃんが助けてくれる』と、知らず知らずのうちに優人に甘えてきっていた。

改めて知った兄の優しさ、そして自分自身の情けなさに芳佳は涙する。

「いつまでそうやって泣いているつもり？ 他にもつとやるべきことがあるでしょう？ 一体、いつになつたらいつもの宮藤芳佳に戻ってくれますの？」

手厳しい言葉を投げ掛けながらも温かみのある言葉、ペリーヌの口元には笑みが湛えられていた。今まで黙っていたリーネも芳佳の肩に手を置き、励ますように微笑んだ。

制服の袖で涙を拭つた芳佳は、いつも通りの晴れやかな表情で二人に向き直る。

「ペリーヌさん、リーネちゃん。ありがとう」

宮藤優人のただ一人の妹——宮藤芳佳は快活な口調で礼を述べると、部屋を出た。大好きな兄を元へ向かうため、母から授かった力で大好きな兄を助けるために。



同じ頃、基地食堂にはシャーリー、ルツキーニ、サーニヤ、エイラが集まっていた。

優人の手術が無事終わったという知らせはウィッチ全員に伝わっていたが、本人が目覚めますまでは安心できない。芳佳の命令違反の件もあり、普段明るいシャーリーやルツキーニまでもが気落ちしていた。

「優人、大丈夫かなあ？」

厨房から戻ってきたシャーリーに対し、ルツキーニが不安そうに訊ねる。

「今は待つしかないな。ま、いいからこれを食べえ」

シャーリーはそう言うと、テーブルの上に大皿を一枚置いた。皿には、優人が昼食に作っていた天ぷらが盛られている。シャーリーは、これを取るために厨房へ入っていたのだ。

「にやつ！天ぷらあー！」

沈んでいたルツキーニの表情が、夏の太陽のように輝いた。昼に味見（という名目の摘まみ食い）をしたルツキーニは、すっかり天ぷらを気に入っていたのだ。

「……でも」

浮かない表情をしたサーニヤが、二人に問い掛ける。

「芳佳ちゃん、命令違反して大丈夫なんですか？」

現在、ミーナ達カールスラント組と坂本の4人が芳佳の処分について話し合っている。

いかに軍隊らしからぬ寛容な雰囲気の特徴の501とはいえ、芳佳の件を不問することとは出来ない。さすがに死刑ということささないだろうが、結果を鑑みて相応に重い罰が下されるだろう。

「あつ」

ふとサーニヤの隣でタロットカードを並べていたエイラが声を上げる。

「どうしたの?」

と、訊くサーニヤ。

「宮藤占ってタ」

エイラの場合、優人のことは『兄藤』または『エロ藤』と呼ぶので、宮藤と呼ぶのは芳佳の方である。

「何て出たの?」

良い結果を期待しながら訊くサーニヤだったが、残念ながらエイラが見せたのは

「死神」

という突発的な事故や試練、そしてものごとの終わりを暗示する不吉なカードだった。

(縁起でもない……)

サーニヤとシャーリーがまったく同じ台詞をそれぞれの心中で呟き、ガツクリと肩を落とした。

「……なんか、ふにやふにやで美味しくない」

一方、ルッキーニは時間が経過したことですっかり萎びてしまい、サクサク感を失った天ぷらにしよんぼりしていた。



所変わってミーナの自室では、カールスラント3人組と坂本が芳佳の処分について話し合っていた。

椅子に腰掛け、机に頬杖着いたミーナの前に坂本、バルクホルン、ハルトマンが並んで立っている。

まずバルクホルンが、確認の意味も含めて芳佳の行動を振り返る。

「独断専行、命令無視、その結果上官を負傷させて、しかも敵も取り逃がすとは、重罪だな」

「え？もしかして、軍法会議でバーン？」

バルクホルンの隣に立つハルトマンが右手で指鉄砲を作り、ふざけて撃つ真似をする。

「そこまでは言っていない！」

不謹慎な発言するハルトマンを、バルクホルンが諫める。

「そうだよねえ〜！だったら、私なんて何回も死んでるよねえ♪」

重々しい空気が漂う室内で、ハルトマンだけがいつも通り明るい。

別にハルトマンが異常に能天気なわけでも無神経というわけでもなく、ただ場の雰囲気や少しでも和ませようという彼女なりの気遣いなのだ。しかし、死という言葉に敏感なミーナはハルトマンの発言に目を見開いた。

「ミーナ……」

ふと右肩に手が置かれる。ミーナが顔を上げると、坂本が彼女を心配そうに見つめていた。

「大丈夫、大丈夫よ。それよりも坂本少佐、あなたには当分飛行禁止を命じます」

「……了解した」

普段の坂本ならば、こんなにあっさり従うことはなかっただろう。しかし、優人を負傷させた一因が自分にある以上従わないわけにはいかなかった。

「エーリカ、もうちよつと真剣にだな」

「判断は宮藤大尉が目覚めてからにします」

ハルトマンを窘めるバルクホルンの言葉を遮るように言うミーナ。

ミーナの判断に納得したのか、それとも何も考えていないのか、ハルトマンがすぐさま「ほーい」と返事をする。対して、バルクホルンは異を唱えた。

「甘いぞ、ミーナ」

別に芳佳に厳しい処罰を下せ、というわけではない。処罰が遅ければ、それだけブリ

タニア空軍のトレヴァー・マロニー大將が介入してくる可能性が高くなるのだ。

ミーナも坂本もバルクホルンの言い分を理解してはいた。しかし、優人が助かるかも分からない今の状況下では、正しい判断を下せる自信がなかった。

◇ ◇ ◇

深夜――

芳佳はリーネ、ペリーヌと共に優人が眠る病室を訪れていた。

無機質な心電図計の音だけが響く殺風景な病室。病院着に着替えさせられた優人がベッドに横たわっている。

（お兄ちゃん……）

兄の姿を確認した芳佳が近寄ろうとしたその時、心電図計が心拍数の異常を観測した。

「芳佳ちゃん！心拍数が！」

心電図計を確認したリーネが、芳佳達に振り返る。芳佳とペリーヌは慌てて優人に駆け寄った。

「お兄ちゃん！」

「大尉！」

芳佳とペリーヌが順に呼び掛ける。優人の表情は苦悶に歪み、身体も震えている。

「私、先生を呼んでくるっ！」

そう言つて病室を飛び出すリーネ。

「お兄ちゃん……今助けるから……」

改めて決意する芳佳。傷がある優人の胸元へ両手をかざすと、使い魔である豆柴の耳と尻尾を出現させた。

部屋にいた時と違い、心を強く持ち直している。ベッドを挟んだ向かい側で見守つてくれているペリーヌの存在も心強かった。

（お兄ちゃんはいつも私のことを助けてくれた……だから、今度は私がお兄ちゃんを助けるんだ）

芳佳は大きく深呼吸した後、治癒魔法を発動させた。両手の平からが発せられた青い光が、優人の胸元を優しく包み込む。心なしか、優人の表情がほんの少し和らいだように見えた。

「落ち着いて……集中して……」

自分自身に言い聞かせながら治癒魔法をかけ続ける芳佳。

兄を助けたい、その一心でかけた治癒魔法の光は今までで一番強く、大きく、明るい

輝きを放っていた。

◇ ◇ ◇

東の空が明け始めた頃――

病室には芳佳達の他、リーネに呼ばれて駆けつけてきたロフティング医師や容態の悪化を聞きつけた坂本とミーナの姿もあった。

「もう大丈夫です」

ロフティングはミーナ達に優人の回復を告げると、ベッドの端に突っ伏して眠っている芳佳に視線を移した。反対側では、ペリーヌの同じ体勢で眠っている。

「この娘の魔法のおかげですよ」

芳佳と彼女の治癒魔法を称賛したロフティングは、看病をウィッチ達に任せて退室する。すると、優人がうつすらと目を開いた。

「ん……」

「優人！」

坂本が声を掛ける。優人は鈍いながら反応し、坂本達の方へ首を動かした。

「坂本……ミーナ、リーネ。あれ？」

目が覚めたばかりで状況が呑み込めていないらしい。優人は半開きの目蓋を擦りな

がら、ゆつくりと上体を起こした。

「ここは？俺は一体？」

「病室よ」

「病室？」

ミーナの言葉を鵲返しする優人。ミーナに続いてリーネが説明する。

「昨日の戦闘で撃墜されたんですよ？覚えてませんか？」

「……昨日？」

優人は記憶を辿った。ハンガーを飛び出した芳佳を追いかけ、ウィツチのようなネウロイが芳佳と一緒にいて、その後坂本を庇い、ネウロイに撃たれた。そこまで思い出すと、優人はハッと目を見開いた。

「芳佳は!?芳佳はどうなった!?無事なのか!？」

重傷を負っていた人間のものとは思えないほどの剣幕で、三人に詰め寄る優人。目覚めてすぐに妹の心配をするとは彼らしいが、あまりの迫力にリーネは「ひっ！」と短い悲鳴を上げた。

「シー……」

唇の前に人差し指を立てたミーナが静かにするよう促し、次に優人のすぐそばで眠っている芳佳を指差した。

「良かった、無事だな。坂本も……」

「少しは自分の心配をしろ！」

突然、坂本が声を張り上げた。先程の優人とはまた違った迫力に、またもリーネが「ひっ！」と悲鳴を上げた。

「負傷したのは……お前、なんだぞ。私のせいで……なのに……」

ギョツと拳を握り締める坂本。優人はどう返せばいいか分からず、目を瞬かせた。

「さて、芳佳さんとペリーヌさんに毛布を持ってこないといけないわね。リーネさん、手伝ってくれる？」

「え……あ、はい。分かりました」

何かを察したミーナが、リーネを連れて退室する。芳佳とペリーヌが眠っているため、実質優人と坂本の二人きりとなる。

「えーつと……坂本？」

「……………」

優人は気まずそうに頬を掻きながら声を掛ける。坂本は答える代わりに優人へ近寄り、倒れ込むようにして彼の胸に顔を埋める。

「うおっ!?……………どうした？」

「……………助かって、本当に良かった」

優人の胸に顔を押し付けながら、坂本はか細い声で言う。男である優人に比べて、幾分小さい身体をふるふると震わせる。

「泣いているのか？」

「泣いてなどいないっ！ただ……震えが止まらないだけだ。身体の震えが止まるまで胸を貸せ、強く抱き締めろ」

「……それは命令ですか？坂本少佐」

「そうだ、命令だ。馬鹿者……」

「了解」

不器用な親友を気遣ってか、上官と部下の体を取る優人。言われた通り坂本の背中に手を回し、そのまま彼女を抱き締めた。



「ん……」

終夜治療と看病を続け、力尽きたように眠っていた芳佳は、窓から射し込む明るい日射しで目を覚ました。

茫然とした目で室内を見渡していた後に、身体を起こした優人が自分を見ていること

に気が付いた。

「あつーああーお兄ちゃ——」

「シー……」

喜びのあまり声を上げようとした芳佳に対し、優人はミーナがやったように自身の唇の前に人差し指を立てて、注意する。芳佳は反射的に自分の口を両手で塞いだ。

次に優人はベンチの方を指差した。芳佳が目をやると、毛布を羽織ったリーネとペリーヌが寄り添うように眠っていた。坂本とミーナは既に退室したのか姿がない。

「良かった」

目を覚まさせた優人に安堵する芳佳だったが、すぐに謝らなければならないことがあるのを思い出して、表情を曇らせる。

「あ、あの……お兄ちゃん……ごめ——」

「ごめんな、芳佳」

「……えっ？」

芳佳の謝罪を遮り、先に謝る優人。何故優人が謝るのか理解出来なかった芳佳は、キョトンとする。

「頬っぺ……叩いちやったる？」

そう言つて優人は、芳佳の頬を手で触れる。芳佳よりも大きくて力強く、それでいて

優しい手だ。

「妹を傷つけるなんて……悪いお兄ちゃんだよな」

「あ、ああ……」

申し訳なさそうにする優人。怪我をしたにも関わらず、自分のことを第一に考えてくれる優しい兄。芳佳の目から自然と涙が溢れ、ボロボロと零れ落ちていった。

「よ、芳佳!?!どうしたの!?!お腹痛いの!?!」

先程までのイケメンっぷりはどこへ言ったのか。突然泣き出した妹に、優人は激しく狼狽える。

「お兄ちゃああああああん!!」

「うおっ!?!」

堪えきれなくなった芳佳は、飛び付くようにして優人に抱き着き、遠慮のない大声で泣き出した。

「ごめんなさい! 馬鹿な妹でごめんなさい! 我が儘な妹でごめんなさい! いつまでも甘ったれた妹でごめんなさい!」

「そんなことない。俺にとって芳佳は大切な大切な……自慢の妹だから……そんなに自分を卑下しないで」

「うっ、うわあああああああ!!」

今までにないほどに泣きじやくる妹に戸惑いつつも、優人は芳佳の気が済むまで抱き締めてやることにした。

(やれやれ、朝から女の子を二人も抱き締めることになるとは……これって、美味しいのかな?)

そんなことを考えつつ、優人は芳佳の頭を優しく撫でた。

第38話「信じて欲しい妹、信じた兄」

優人が目を覚ましてから約一時間後、部隊長執務室――

軍規違反を犯した芳佳の処罰を決定するべく、ミーナは本人を執務室に呼び出した。間もなくバルクホルンとハルトマンに付き添われた芳佳が部屋を訪れる。

奥の机に着いたミーナは険しい表情で芳佳を見据え、彼女の傍らに立つ坂本は落ち着いた様子で目を閉じている。

「宮藤芳佳軍曹」

静寂に支配されながらも張り詰めた空気の漂う中で、ミーナがおもむろに口火を切った。軍規や軍刑法、軍法会議について書かれた書類が挟んであるクリップボード越しに芳佳を見ながら告げる。

「あなたは独断専行の上、上官命令を無視、これは重大な軍規違反です」

「……はい」

厳しい視線を投げかけるミーナに対し、芳佳は小さく頷いた。

「この部隊における唯一の司法執行官として質問します。あなたは軍法会議の開催を望みますか？」

「……あ、あの」

「返答がないので、軍法会議の開催は望まないと判断しました」

芳佳の言葉を遮り、ミーナは話を進める。本来、軍法会議を開催するかどうかの決定権は軍規を犯した側、つまりは芳佳にある。これは上官によつて部下が不当な権利侵害を受けることを避けるための措置だ。しかし、芳佳に対して不利に働いていた。

今回の一件における芳佳の行動を軍法に照らし合わせると、良くて逃亡罪か違令罪、悪くて抗命罪に該当する。

もし芳佳が軍法会議の開催を主張すれば、他の部隊から法務士官が派遣され、厳密な調査を行った上で裁判が行われるだろう。しかし、501基地の場所はブリタニアで、直属の上官が日頃から501を疎ましく思っているブリタニア空軍のマロニー大將である以上、派遣される法務士官は彼の息のかかった人間である可能性が極めて高い。

そうなれば、芳佳に下される判決はほぼ間違いなく死刑、それを免れても禁固刑。彼女はブリタニア軍ではないので、判決に関わらず扶桑海軍に戻して本国送還となる可能性が高いが、最前線という理由で刑が執行されてしまう可能性も否定できない。それに狡猾なマロニーのことだ。おそらく、芳佳の件に乗じて501へ介入してくるだろう。

芳佳と部隊を守るためには、軍法会議の開催だけは避けなければならぬ。ミーナは芳佳が軍規に詳しくないのいいことに、有無を言わずに軍法会議を開かず隊内処分

で済ませようとしていた。

「今回の命令違反に対し、勤務、食事、衛生上やむを得ぬ場合を除き、明日から10日間の自室禁錮を命じます。異議は？」

「あの……私、ネウロイと……」

「改めて訊きます。異議は？」

「まあ待てミーナ」

何かを話そうとする芳佳を無視し、語気を強めて訊ね返すミーナを、さらに坂本が制する。

「芳佳、何故撃たなかった？」

芳佳をじつと見据える坂本は、ミーナ相手に萎縮してしまっている彼女を気遣い、なるだけ穏やかな口調で問う。

「え？」

「あの時、何故お前はネウロイを撃たなかった？」

「……撃てなかったんです」

繰り返し訊ねる坂本に、芳佳は俯きながら答える。

「人の形だからか？ あれはお前を誘い込む罠だ」

「でも……私、あの時……何かを感じたんです」

芳佳には、聞いて貰いたいことがたくさんあった。人型ネウロイから他のネウロイとは違うものを、敵意ではない何かを感じたこと。あのネウロイは自分に何かを伝えようとしていたように思えたこと。分かり合えるかもしれないこと。

しかし、場の緊張感のせいだからか。せつかく発言が許されたというのに、芳佳は人型ネウロイと接触した際に感じたことを上手く説明することが出来なかった。

「ネウロイは人類の敵だ」

人型ネウロイに対する芳佳の述懐を危険視したのか、坂本は真剣な面持ちでびしやりと言いつつ。

それに本人に自覚はないだろうが、考えといい、ネウロイを庇ったことといい、一連の彼女の行動は明らかかな利敵行為。こんなことが今後も続けば芳佳は隊内で立場を失うかもしれない。

「それと私達は部隊として、ウィッチーズという名のチームとして動いているんだ。1人の身勝手な行動は周りを危険に晒しかねない。今回の優人のように……」

「……………」

俯いたまま、芳佳は黙って応じる。自分の行動が原因で兄に、優人に怪我をさせたことを改めて理解し、芳佳は瞳を潤ませる。

（私にそんなことを言う資格など無いがな……）

坂本は心の中で自嘲気味に呟くと、フウと息を吐いてからミーナへ振り返る。

「……ミーナ。芳佳にも芳佳なりの理があるようだ。ここは私の顔に免じて自室禁固は勘弁してくれ」

「坂本少佐。ですが——」

「頼む」

何か言おうとするミーナを遮り、坂本は頭を下げた。数日前の夜、ミーナの部屋を訪れた優人も自分に頭を下げていた。無論、芳佳の為に。

「分かりました。芳佳さんには今日から一週間、トイレとハンガー内の清掃を命じます。良いですね？」

二人の戦友の姿が重なって見え、険しかったミーナの表情が自然と緩み、硬かった口調も柔らかなものへと変わる。同時に張りつめていた部屋の空気も和らいでいく。

「……はい」

一方、芳佳の表情は暗いままだった。それもそのはず、彼女が望んでいるのは処分の軽減ではない。

「では、退室して下さい」

ミーナのそう言うと、芳佳は心ならずも一礼し、執務室を後にする。バルクホルンとハルトマンもやや遅れて退室し、室内にはミーナと坂本の二人だけとなる。

「……ありがとう、美緒」

暫し沈黙を置き、ミーナが礼を述べる。

「何のことだ？」

「あなたのおかげで、芳佳さんを傷つけずに済んだわ」

ミーナは机に視線を落としながら自分の行いを振り返る。彼女の取った行動は、芳佳と部隊を守るためには最善と言えるものだった。

脅迫状の一件を考えれば、この件も既にマロニーの耳に入っているとみて間違いない。もたもたしていれば、バルクホルンが懸念したように芳佳の処遇について口出ししてくるだろう。

軍法会議を開かない隊内処分ならば、部隊内部だけの問題であり、501で最も階級の高いミーナの判断で処分内容を決定出来る。その判断に司令部や他の部隊が介入することは不可能であり、必要以上に書類を残す必要もない。芳佳の経歴に傷はつかないし、マロニー一派にあら探しをされる心配もない。

問題は、芳佳の心情に対する配慮が欠けていたことだろう。ミーナに心の余裕があれば、あのような高圧的な態度を取ることもなかった。軍法会議のことなどおくびにも出さずに、普段通りの優しい口調で芳佳に語りかけつつ、彼女の言い分にもしつかりと耳を傾けただろう。しかし、親しい間柄の友人——優人の負傷によって少なからず取り乱

してしまい、規則通りにことを進めのがやっとなつた。

もし今回負傷したのが坂本で、あの場に彼女がいなかったとすれば、彼女からフオリが入らなかつたとすれば、ミーナの芳佳を助けようと必死になる気持ちばかりが先行して、高圧的な言動で芳佳を心理的に追い詰めてしまっただろう。

「ダメな隊長ね、私は……」

ミーナは目を閉じ、自嘲気味に呟く。

「優人の代わりに私が芳佳さんを守らなければならぬのに……」

「ミーナ……」

坂本はミーナに近付くと、彼女の背中へ両腕を伸ばし、自分の方へ抱き寄せた。

「えっ!?……ちよっ!美緒!?何を!」

突然のことに、ミーナは頬を染めて当惑する。

「ミーナ……すまなかつた……」

「え?」

「優人が撃たれてよく分かつた。私に銃を向けたあの夜、お前がどれだけ苦しかったか

……」

坂本はミーナの背中へ回した腕に一層力を込めた。

「お前にずつとつらい想いをさせていたんだな。私こそバカな女だ」

「……ホント、バカよ」

ミーナは震える声で言葉を返し、嗚咽交じりに語りだした。

「あなたも優人も……私や皆に、こんな想いをさせて」

「……すまない」

「私達は……家族なの、よ。誰も欠けてはいけないの、12人全員、でストライクウィッチーズなのよ」

「すまない」

「謝るくらいなら、もう二度としないで」

ミーナの目尻に涙が浮かぶ。

「すまない。それは無理だ……」

「っ!?!……バカ……」

「すまない」

「本当にバカ」

それからしばらくの間、執務室ではミーナが「バカ」と言い、坂本が「すまない」と応じるやり取りが続いていたそうなの。



リーネが廊下で忙しく指を動かしていると、執務室から処罰を言い渡された芳佳が出てきた。リーネは弾けるような笑顔を浮かべ、芳佳に駆け寄った。

「芳佳ちゃん！優人さん、もう大丈夫だって！」

「……うん」

「良かったね！」

「……うん」

「うん？」

鈍い反応を示す芳佳の顔を、リーネは不思議そうに覗き込む。

「そうだ！ねえ芳佳ちゃん、お風呂行こうよ！お風呂！」

「え？」

「ね？ほら、早く早くう！」

リーネは芳佳の返事を聞くよりも先に彼女の手を取り、大浴場へ向かって駆け出した。

「ちよ、ちよつと待って！」

唐突な誘いといっぴになく積極的なリーネに、戸惑う芳佳であった。



湯気に包まれた大浴場には、執務室に残った坂本とミーナ、ペリーヌを除くウィッチ達が集まっていた。

浴槽にはシャーリーとルツキーニ、芳佳と同じく執務室からやって来たバルクホルンとハルトマン。シャワースペースでは、エイラとサーニヤが身体を洗っている。

全体的に仲の良いウィッチーズだが、これほどの大人数で一緒に入浴を楽しむ光景は意外と珍しい。無論、男性かつ怪我人である優人の姿はない。

「来ましたあ〜！」

「あ、こつちこつち〜！」

リーネと彼女に手を引かれた芳佳が浴室に姿を見せると、ルツキーニが手招きする。彼女に促された二人は、浴槽に張られた湯の中へゆつくりと身体を沈める。

「なあ、芳佳。トイレとハンガーの掃除だつて？」

すぐ隣にいたシャーリーが声を掛ける。さらに芳佳の首に腕を回し、自分の胸に抱き寄せた。グラマラス・シャーリー自慢の巨乳が眼前まで迫り、芳佳は顔を真っ赤する。

「自室禁固は勘弁して貰えてよかつたなあ〜！」

「シャーリーなんか5回も禁固刑くらつてたもんね〜？」

「バカ言え！4回だ4回！」

ルッキーニに茶化され、シャーリーはムキになって否定する。そこへ犬掻きをしていたハルトマンが近づき、シャーリーの尻馬に乗るように言う。

「私い、6回っ！あはははははっ！」

胸を張りながら自慢気に語るハルトマン。彼女につられて、ウィッチ達も笑う。

問題児とも形容出来るほどに個性的なウィッチをも有する501において、禁固処分はさほど珍しいものでもないようだ。

「みんな聞いて！」

芳佳はそう言つて浴槽の中で立ち上がった。一同の視線が彼女に注目する。

「あの、私ネウロイに……今までと違う何かを感じたの。もしかしたら、ネウロイと戦わずに済む方法があるのか——」

「何をバカなことをっ！」

真つ先に反応したのはバルクホルンだった。彼女は憤然と立ち上がると、鋭い眼光で芳佳を睨みつける。

「芳佳ちゃん」

芳佳のことを案じたリーネが制する。しかし、芳佳は主張を止めなかった。

「でもあの時はネウロイと分かり合えて——」

「今まで奴らが何をしてきたか知ってるのか?」

反論など許さないと云わんばかりに、バルクホルンは芳佳の言葉を遮る。

「人に仇なすことばかりだ。優人だつて、お前の兄だつて撃たれたんだ。なのにお前はネウロイの味方をするのか?」

意思疎通や相互理解によるネウロイとの和解の可能性は、この戦争の意義を揺るがす大問題である。しかし、今の二人にそんな考えはない。

バルクホルンにとってネウロイは、妹を傷つけ、国焼き、家族をはじめとする大切な人々の命を奪った怨敵。決して相容れことのない絶対悪だ。彼女に限らず、ネウロイに国を追われた人々の多くは、ネウロイを徹底的に殲滅すべき対象、憎き敵と見ている。

「今回のネウロイは他と違います!」

それでも、と芳佳は反論を続ける。怒りや憎しみの感情から異を唱えるバルクホルンに対し、芳佳は直感に忠実。理屈などなく、人型ネウロイと触れ合つて感じたことを素直に口に出しているのだ。

「お前は違いが分かるほど戦つたのか!」

バルクホルンが芳佳の発言を一蹴すると、浴室内が沈黙に支配された。本大戦の初期から戦い続けてきたバルクホルンの言葉が、芳佳の心に鉛のように重く押し掛かる。

「にやははははっ!人型が出たのは聞いたけど、だからつてなあ〜」

ふと快活な声で笑うハルトマン。二人の間に流れる険悪な空気を吹き飛ばそうとしたのだろうか。

「カウハバ基地のコトカ？ 所詮噂じゃん？」

シャワースペースでサーニヤの頭を洗ってあげていたエイラが、浴槽へ振り返って口を挟む。

「でも……この間の唄うネウロイは？」

「それが罠だったじゃないカ！」

サーニヤが芳佳の味方をしようとするが、エイラに一蹴されてしまい、シヨボくれる。

「……………」

黙り込む芳佳。全員は無理でも何人かは自分の言い分を理解してくれると思っていたが、考えが甘かった。

ウイツチに限らず、すべて連合軍の将兵にとってネウロイは人類を脅かす存在。経験の浅い新兵一人の説得で、その意識が変わるはずはない。芳佳自身、つい昨日までネウロイを敵としか認識してなかった。

「……………あっ!？」

突如、芳佳の身体が跳ね上がる。ルッキーニが彼女の背中に己の人差し指を這わせていたのだ。あまりの撥つたさに、芳佳はゾクゾクと小刻みに震える。

「芳佳あく元氣出せよお〜♪うりゃ♪」

「ひ、ひゃああああつ!？」

続いて、左右の尻を両手でギュツと掴まれ、芳佳は悲鳴を上げる。さらに背後から手を回し、芳佳の両胸をムニムニと揉み拉いた。

「ダブルボンバー!!」

「やめて〜!」

「ルツキーニちゃん!」

ルツキーニの餌食になっている芳佳をリーネが助けようとするが、どう助ければ分かわらず逡巡する。

「少しは育つタカ?」

エイラが訊ねる。彼女とルツキーニと趣味の方向性が似ているそうなの。

「……ない」

隣で自分とエイラの胸を見比べたサーニヤが哀しげに呟いた。二人共スレンダーな体型をしているが、サーニヤはエイラと比べて微妙に発育が悪いことを内心気にしている。

「やっぱもの足んない……あつ!」

と、不満そうに言うルツキーニ。視線をエイラから真正面へ戻してみると、すぐ目

の前に大きく実った美しい果実——つまりは、リーネの胸を見つけた。

「な、なあに？ルツキーニちゃん？」

自分をジツと見つめてくるルツキーニに対し、リーネは引き攣った笑みを浮かべ、お
ずおずと訊ねる。

「ニヤ〜リ！」

擬音を口に出しながら笑みを浮かべるルツキーニ。その目は、獲物に襲いかかろうと
狙いを定める肉食獣のそれだ。

「いやああああ〜！」

「ニヤヒヤヒヤヒヤ！ウリヤリヤリヤリヤ！」

身の危険を感じたリーネは脇目も振らず、一目散に逃げ出した。同時にルツキーニ
も、湯を撒きながらリーネを——正解には、たぶたぶと揺れる胸を全力で追い掛ける。

しかし、ルツキーニの興味はより大きな獲物に移る。それはリーネをも上回り、部隊
最大を誇るシャーリーの巨乳だった。ルツキーニはすかさず飛び込んだ。

「にゃ〜ん♪やつぱ、これだよねえ〜♪」

胸の谷間に顔を埋めたルツキーニは至福の表情を浮かべる。シャーリーもルツキー
ニを受け入れ、頭を優しく撫でてやる。

「楽しいのかなあ？」

心底幸せそうなルツキーニのを見て、ハルトマンは脳裏に疑問符を浮かべつつも、同時に興味を抱いた。

「馬鹿なだけだ」

頭痛を覚えたバルクホルンが、頭を押さえながら言い捨てる。

「うりゃー！」

「うわああっ！」

試しにバルクホルンの胸を揉んでみるハルトマン。予想していなかったバルクホルンは、悲鳴と共に身体を仰け反らせる。

「な、何てことするだあっ!!」

醜態を晒してしまったバルクホルンは、すぐさまハルトマンを怒鳴りつける。

「トウルーデって、結構あるよね♪」

が、ハルトマンは至ってマイペース。バルクホルンの柔らかな胸の感触と面白い反応を楽しむ。

「こ、こ、こんなもの！戦いに必要ない！」

「こんもの、つて……胸が無くなったら優人に愛想尽かされるかもよ？」

「な、何でそこで優人が出てくるんだあゝっ！」

「にやははは！トウルーデ、顔を真つ赤あゝ！」

「ぷっ！フフ……」

いつも通りの賑やかな光景に、芳佳は自然と笑みを零した。しかし、その笑顔も長くは続かず、すぐに雲つてしまう。

（どうして……誰も信じてくれないの？）

信じてもらえない悲しみから瞳を潤ませる芳佳。ふと脳裏に人型ネウロイの姿が浮かび上がる。

（あれは間違い？……ううん、違うよね？）

自問自答を繰り返す芳佳だったが、答えは出ない。

「……私……どうしたらいいんだろう？」

芳佳は自分にしか聞こえない、悲しみを孕んだ声で呟いた。



入浴後、基地宿舎――

朝は快晴だったドーバーの空もウィッチ達が入浴を終えた頃には真つ黒な群雲に覆われ、雨を降らせていた。日光も分厚い雲によって遮られ、景色は昼間にも関わらず薄暗い。

この天気の変化は、まるで芳佳の心境を反映したかのようだった。
「…………どうしよう」

宿舎の廊下。ある一室のドアの前には、何やらもじもじとしている芳佳の姿があった。風呂から上がった芳佳は自室には戻らず、この部屋の前前で来ていた。部屋のプレートには『YUTO・MIYAFUZI』とある。優人の部屋だ。

「う〜ん…………やっぱりダメー！」

ドアをノックしようとして右手を伸ばす芳佳だったが、音を響かせる前に頭を振りながら手を引つ込める。

約十分前からこの調子だ。大好きな兄——優人の会いたいと思つて訪ねに来たというのに、部屋へ入る決心がつかない。

（お兄ちゃんなら、もつとちゃんと話を聞いてくれるかもだけど…………だけど…………）

ウィッチーズの誰からも理解を得るところか、しっかりと言い分を聞いて貰うことすら出来なかつた芳佳。入浴直後、彼女の足は自然と優人の部屋へと進んでいった。

優人が自分の話に耳を傾けてくれることを期待したのか、それとも単に慰めて欲しかつたのか。それは芳佳にも分からなかつた。確かなのは、兄に甘えようとしていることだけだつた。

散々暴言を吐いて傷つけ、自分の行動が原因で大怪我までさせた。その癖、落ち込ん

でいるところを慰めて貰おうとしている。また兄に助けて貰おうとしている。

「私……最低だよね……」

「何が最低？」

「ひゃあああああつー！」

突然、背後から声があった。驚いた芳佳は悲鳴と共に飛び上がる。

「お、お兄ちゃん？」

振り返ると、病院着姿の優人がすぐ後ろに立っていた。

「よお、どうした？」

「もう、驚かさないうでよ！ どうして、いつもいつも足音立てずに近付いて来るの!？」

プンスカと怒る芳佳。対する優人は困ったような顔をする。

「いやあ……そう言われてもなあ。それよりも、俺に何か用？」

「あ……えつと……」

優人に訊ねられ、芳佳は言葉に詰まった。優しい兄のことだ。入浴時のことや人型ネウロイのことを話せば、励ましてくれるだろう。相談にも乗ってくれるだろう。しかし、そんな虫の良いことが許されていいはずがない。

芳佳はこれ以上優人に迷惑は掛けたくなかった。かといって、上手い言い訳も思い付かず、ただただ無言で俯いた。

「……………」

「……芳佳、顔上げて」

見兼ねた優人が優しく語り掛けると、芳佳をゆっくり顔を上げた。

「お見舞いに来てくれたんだな？」

「えっ？……あ、うん」

優人の問いに、芳佳は思わず頷いた。

「ちよつと、話相手になつてくれない？」

「……えっ？」

「ロフティング先生に『部屋に戻つてもいいけど、安静にして下さい』つて言われてさ。本読むかトイレに行くかしかやること無くて暇なんだよ。可愛い妹と楽しいおしゃべりがしたいなあ……なんて」

「でも……お兄ちゃんは怪我してるし。ゆっくり休んだ方が——」

「お前と過ごす時間が何よりの薬だよ。ほら、突っ立ってないで入るぞ！」

「あつ！ちよつと！」

芳佳は問答無用で手を引かれ、部屋に連れ込まれてしまう。

彼女がこの部屋に入るのは随分と久しぶりのこと。最後に入ったのは、勘違いしたバルクホルンにドアを破壊されたあの日。今日と同じように大雨が降っていた。

（久しぶりのお兄ちゃん部屋の部屋。お兄ちゃんのおいがする）

「男性である兄の部屋からは、自分のとも他のウィッチのともまた違った趣が感じられ、改めて入ってみると妙に意識してしまう。」

これは芳佳が女性と成長しているからなのか、それとも……。

「芳佳」

ベッドに腰掛けた優人が、ぼーっと突っ立っている芳佳に声を掛け、すぐ隣のスペースをポンポンと叩いた。「ここに座りなさい」ということだろう。

芳佳は躊躇いがちになりながらも優人の左隣に腰を下ろした。すると、優人は芳佳の肩に左腕を回し、グイッと自分の方へと引き寄せた。

「お兄ちゃん？どうしたの？」

突然密着され、戸惑う芳佳。宮藤兄妹は普段からよくスキンシップをしているが、抱き着いたり、寄り添ったり等は優人の方からはあまりしてこない。それはどちらかと言えば芳佳がすることで、優人はせいぜい頭を撫でる程度だ。

「ん？妹成分の補給」

「い、妹成分？」

聞き慣れない単語に芳佳は疑問符を浮かべて、鸚鵡返しする。

「妹成分って、言うのはな。兄が妹とのスキンシップで補給するエネルギーのことだよ。」

これを定期的に補給しないと、世の兄貴達はミイラみたいにカラカラになっちゃうんだ」

「ええっ!?!じゃあ、私と離れたらお兄ちゃんはミイラに!?!」

「いやいや、冗談だから」

すぐ嘘だと分かりそうなものを、芳佳は簡単に信じてしまう。優人が思っていた以上に彼の妹は天然らしい。

「あ、冗談?そっか……」

ホツと胸を撫で下ろす芳佳。だが、優人の方は騙されやすい妹の将来が少し不安になった。

「それで?」

「え?それで、つて?」

「何か悩みがあつて、俺に相談しに来たんじゃないのか?」

「ふえっ!?!な、無いよ!」

芳佳は首を左右に振る。凶星を突かれ、分かりやすく動揺している。

「顔に書いてあるぞ?な・や・み、つて」

「か、書いてない!書いてない!」

と、芳佳はブンブンとさらに激しく首を振る。すると、優人は芳佳の顎を持ち上げて

自分の方へと向かせた。

「あ……」

身体を密着させていたため、優人の顔が眼前に来る。至近距離で見つめられた芳佳の頬には赤みが差し、思考が一瞬停止する。

（お、お兄ちゃんの顔が……こんなに近くに……）

「あるんだろ？話してくれないか？」

「……………」

「自分をひっぱたくような兄貴なんて信用出来ないか？」

「——っ!?違くて!そうじゃなくって!お兄ちゃん大好きだけど!……その!」

意地の悪い訊き方をする優人。慌てた芳佳は両手を顔の前で振って必死に否定した。

「俺が好きなら教えてくれないか？」

優人はズイツと顔を寄せて微笑んでみせる。

「あう……言うから、もう許して……」

ゼロ距離まで迫った兄の顔。芳佳の顔は一層赤くなり、頭からは煙が出ていた。

しばらくして頭から熱が引くと、芳佳はポツポツと語り始めた。接触した人型ネウロイと分かり合えたかもしれないこと。そのことを他のウィッチ達にも話したが、訝しがられるばかりだったこと。バルクホルンからは全否定されたこと。

優人は最後まで口を挟まず、芳佳の言葉にしつかりと耳を傾け、時折頷きながら話を聞いていた。

「なるほど、皆には信じて貰えなかったと……」

優人が確認するように訊くと、芳佳は小さく頷いた。

「バルクホルンさんなんて、すっごく怒ってた」

「まあ、だろーうな」

優人は苦笑する。確かにネウロイと戦わずに済むなら、意思の疎通が可能で話し合いで解決出来るのなら、それが一番だろう。これ以上、ネウロイとの戦争で誰も傷つかずに、死なずに済む。しかし、出来るか出来ないかに関わらず、人類すべてがその考えを支持するとは限らない。少なくともカールラントやガリア等の祖国をネウロイに蹂躪された人々は間違いない。少なくともカールラントやガリア等の祖国をネウロイに蹂躪された人々は間違いない。少なくともカールラントやガリア等の祖国をネウロイに蹂躪された人々は間違いない。少なくともカールラントやガリア等の祖国をネウロイに蹂躪された人々は間違いない。

多くの人間が平和を求めているのは確かだが、人は理屈よりも感情で動く生き物だ。中でも怒りや憎しみなどの感情は特に心を支配しやすく、理性で抑え込むのは容易ではない。

どれだけ理想的で平和的な解決法も、激しい怒りを抱いた者の前では無力だ。この戦いの行方がどうなろうと、人々のネウロイに対する憎悪は増しこそすれ、決して消えはしないだろう。

「でも私……やっぱり、やっぱり確かめたい」

芳佳は一緒に空を舞い、自分の弱点であるはずのコアを晒して見せたネウロイのことを思い出していた。

「……芳佳、報告書は？」

「え？」

「このことをちゃんと報告書に纏めて提出したのか？」

「……ううん」

芳佳が首を横に振ると、優人はニツと笑みを浮かべた。

「なら今から書こう」

「でも、私……書類は苦手で」

「俺が教えてあげるよ。皆を納得させたいんだろ？俺に考えがあるんだ。まず必要なのは、なるだけ客観的な内容の報告書」

「……分かった。やってみるよ」

「よしー！」

兄に背中を押され、芳佳は力強く頷いた。そんな妹を見て優人にも俄然やる気が出てきた。



さらに一時間後、部隊長執務室――

501基地の部隊長執務室にはミーナと坂本、そして二人に芳佳の書いた報告書とある作戦の立案書を提出しに来た優人の姿があった。

優人は今朝と違って病院着ではなく、扶桑海軍の第二種軍装を身に纏っていた。

「……正気なのか？」

作戦立案書に目を通した坂本が険しい表情で問う。

「おかしく見えるのか？」

と、訊き返された坂本は眉を顰める。むしろ彼女は優人がおかしくなっていることを望んでいた。一番付き合いの長く、心から信を置いている戦友が、こんな馬鹿げた作戦を提案するなど認めたくなかったからだ。

「では宮藤大尉、確認します」

机の椅子に腰掛けたミーナは優人を上目遣いに見据え、確かめるように訊いてきた。

「あなたは、先日出現した人型ネウロイとの接触及びコミュニケーションを目的とした作戦を提案しているのですね？」

第39話「妹の脱走」

昨日、ドーバー海峡上空――

人型ネウロイの腕から放たれた熱と赤みを帯びたビーム。それが優人が抱える九九式二号二型改13m機関銃の弾倉に着弾した。銃が暴発し、周囲に黒煙を撒き散らす。

「がっ!?!……………」

機関銃より飛び散った多数の破片が胸に突き刺さり、優人は凄まじい激痛に襲われる。出血と共に力も身体から抜けていき、すぐに意識を保てなくなる。

(芳佳……………)

朦朧とした意識の中で、優人は最愛の妹に向かって手を伸ばす。霞んだ視界では、芳佳がどんな表情をしているかすら分からない。

〈邪魔しないで…………〉

(……………えっ?)

意識が途切れようとしたその瞬間、何者かの声が聞こえてきた。それは耳を通してではなく、優人の脳内に直接響いていた。



現在、第501統合戦闘航空団基地部隊長執務室――

「宮藤優人大尉。あなたは、先日出現した人型ネウロイとの接触及びコミュニケーションを目的とした作戦を提案しているのですね？」

ミーナが確認すると、優人は「はい」と頷いた。彼とミーナの間にある机の上には、二枚の書類が置かれていた。

一つは、優人の助力によって芳佳が書き上げた人型ネウロイに関する報告書。もう一つは、優人が芳佳の話を頼りに人型ネウロイの意図を推測した上で、具体的な方法を纏めた作戦立案書である。

「芳佳が……いえ、宮藤軍曹が接触した人型ネウロイは、我々が今まで戦ってきたネウロイと明らかに違っています」

優人は真剣な面持ちで己の考えを述べ始める。立案する作戦の内容せいか、或いは自分が真剣だと言うことを示すためか、彼の口調は随分と硬い。

「宮藤軍曹は銃の安全装置を外すのに手こずり、意図的ではないにせよネウロイに無防備な姿を晒していました。そしてネウロイは自身に銃口を向けない軍曹に対して警戒

心を緩め、自分に戦闘の意志がないことを伝えようと人型の……正解に言えばウィッチに似せた姿へと変身しました」

「あくまで仮定の話だな？」

不機嫌そうに眉を寄せた坂本が優人に食って掛かる。話を遮られた優人も不快そうに顔を歪めた。

「坂本少佐……大尉、続けなさい」

ミーナは右手で坂本を制すると、優人に話の続きを促す。

「報告書にもあるように、ネウロイは人型へ変形後、じゃれつくかのように宮藤軍曹の周囲を飛び回りました。これは我々とネウロイではコミュニケーション手段が大きく違っているため、行動で非戦の意を伝えようとしたと思われる。さらに軍曹がいくつか質問してみると、ネウロイは装甲を開放、弱点であるはずのコアを無防備にさらけ出しました。まるで触れて欲しいかのように……」

優人はミーナに身体を向けつつ、時折坂本の方をチラチラと伺う。彼女は腕を組み、相変わらず仏頂面を浮かべていた。

ミーナは優人の長口上に耳を傾けつつ、彼と二枚の書類を交互に見比べていた。

「我々の介入よって中断されましたが、ネウロイはコアを通して宮藤軍曹に何かを伝えようとしていた可能性があります。本作戦の目的は、宮藤軍曹を再度ネウロイと接触さ

せて意思疎通を図ることで——」

「甘いな」

またしても坂本が優人の話を遮る。優人は射るような眼で彼女を見返した。

「なに?」

「今回ネウロイが人の型を取ったのは、お前の妹を毘にかけるためだ。大方、自分達のテリトリーに引きずり込んで——」

「たった一人のウィッチ相手に、そんな搦め手が必要とは思えない。それに人型ネウロイはこつちが撃たなければ撃ち返してこなかった、と芳佳も——」

「お前は忘れたのか!? 扶桑海事変やリバウで何があつたのかを……」

「……………」

声を荒げて問い質す坂本に、優人は視線は外さず無言で応じる。

「奴らとの戦いでどれだけ多く命が散つていったと思つている? どれだけの犠牲が出たと思つている!? ネウロイと和解だと? 芳佳を再びネウロイと接触させるだど!? ……ふざけるのも大概にしろ!」

ペリーヌやカールスラント組とは違い、帰る国がある扶桑組も扶桑海事変においてウラル方面より飛来したネウロイに危うく国を侵されかけ、軍人・民間問わず多く人命が奪われている。故に、坂本がネウロイに対して抱いている敵対心はバルクホルン以上な

のだ。

「……………ふざける?」

激昂する坂本に対し、優人は嘲笑するように鼻を鳴らした。

「俺に言わせれば、シールドも張れないほど弱体化した状態で戦場に出ることの方がよっぽどふざけてるけどな」

「——っ?!なんだと!?!」

「二人共やめなさい!」

憤慨した坂本が優人に掴みかかるが、すぐさまミーナが止めに入る。部隊長からの一喝に、優人も坂本も口を噤んだ。

「まったく……………」

ミーナは右手で眉間を押さえながら、大きく溜め息を吐く。少しだけ間を置いてから再び口を開く。

「宮藤大尉、あなたの主張は分かりました。しかし、この作戦を実施するわけにはいきません。少なくともすぐには……………」

はつきり言ってウィッチやウィザードを含めた人類の総戦力は、ネウロイのそれを下回っている。

ブリアニアに駐留している連合軍の全戦力を投入したとしても、ネウロイに占領され

たヨーロッパは疎か、ガリアの解放すら危うい。確かなのは作戦の成否関わらず多大な犠牲を強いるということ。

もしネウロイとの意思疎通が可能性ならば、人間同士の戦争のように話し合いの席を設け、休戦の後に講和を結ぶことも出来るだろう。人類は、これ以上戦闘で死傷者を出さずに済み、交渉によつては占領された国土の返還も夢ではない。しかし、それは希望的観測に過ぎない。

人類にとつてネウロイはまだ未知の存在。意思を持った知的生命体なのか、それとも地震や台風等と同じく災害の一種——現象なのか。それすらも分かっていない、不確定要素ばかりだ。

提出された報告書も優人の手助けによつて形にはなっているが、芳佳自身の主観的な見解が所々見受けられ、客観的な判断材料になり得ない。

優人の主張通り、人型ネウロイが芳佳と何らかのコミュニケーションを図ろうとしたのか、それとも坂本が言うように芳佳を罠にかけようとしたのか。情報が不足している現状では、判断しかねる。そして隊員達の命を預かる身としては、薄氷を踏むような作戦などを承出来ない。

「検討はしておきます。今はまず退室して、頭を冷やさない」

「……………了解。失礼します」

優人はやや間を置いてから敬礼すると、退室するために

踵を返して扉へ向かう。が、ドアノブに手を掛けると同時に訊くべきことを思い出し、ミーナの方へ振り返る。

「そう言えば、一体何処の誰が俺に血液を提供してくれたんだ？」

自分の血液型が珍しいものであることを理解している優人は、血液を提供してくれた人物のことが気になっていた。一目会って礼を述べたいとも思っている。

「輸血者に対しては……機密事項です」

「?……了解した」

ミーナの対応に違和感を覚え、頭の中で疑問符を浮かべた優人だったが、特に追及することなく退室する。

「お兄ちゃん」

廊下に出ると、芳佳が待っていた。優人を見るなり、小走りで駆け寄って来る。

「芳佳、どうした？」

「………私のために、坂本さんと喧嘩しないで」

そう訴える芳佳は肩を震わせ、今にも泣き出しそうな表情で優人を見上げている。

優人が自分の味方をしてくれることや自分を助けてくれることはすごく嬉しい。しかし、大好きな兄である優人と、尊敬する上官たる坂本。この二人の関係が自分のせい

で険悪なものに変わってしまうことが芳佳には耐えられないのだ。

「あれは喧嘩じゃなくて話し合い。少し意見がぶつかっただけだよ」

妹を安心して貰いたい優人は、なんとか誤魔化そうとする。しかし、先程の坂本とのやり取りは誰がどう見ても立派な口喧嘩である。ミーナが止めなければ取っ組み合いになつていたかもしれない。

「それよりも……お前、疲れてるんじゃないのか？」

優人は身体を傾け、芳佳の顔をじつと覗き込む。顔色があまり良くない、目元にも隈ができている。

昨日の晩、芳佳は優人を助けるために一晩中治療魔法を使い続けたため、ろくに眠れていなかったのだ。

「少し仮眠取つたらどうだ？ 昼までには起こすから」

「でも——」

「いいから！ お兄ちゃんの言うことを聞きなさい」

まるで子どもに言い聞かせるような口調の優人に、芳佳は心ならずも「はい」と答え、小さく頷いた。浮かない顔をした妹の頭を優人は優しく撫でてやる。

「坂本もミーナも、俺がちゃんと説得するからな」

そう言つてニツコリと微笑むと、芳佳の脇を通り過ぎて行つた。

（また……お兄ちゃんに迷惑掛けちゃった……）

残された芳佳は、優人に頼ってしまったことを後悔していた。同時にあることを決意する。

「やっぱり……やっぱり、自分で……」

◇ ◇ ◇

数時間後、501基地格納庫――

ドーバー海峡の空は、今朝に引き続き雨雲に覆われている。降り続く雨は激しさを増し、雨音が隔壁を通してハンガー内にまで漏れ聞こえるほどだった。

「う〜ん」

照明のおかげで悪天候でも陽の下のように明るい格納庫内では、シャリーが腕組みしながら唸り声を上げていた。彼女の視線は、床に置かれた一組のストライカーユニットの残骸に向けられている。

残骸の正体は、優人の愛機――扶桑皇国海軍で採用されている『零式艦上戦闘脚二二型甲』である。芳佳や坂本も愛用している機種だが、1944年現在においては旧式化が進み、新型且つより高性能な紫電二一型――通称『紫電改』に主力ユニットの座を譲

りつつある。しかし、軽快な運動性能と魔力の弱いウィッチでも扱える手軽さから、後方部隊や訓練用としてはまだまだ現役である。

優人が負傷した際に両脚から脱げ、地上に落下した彼の機体。芳佳とリーネが優人を介抱した浜辺の近くで発見・回収されていたが、当然ながら原型は留めていない。

「これって……やっぱりそうだよな？……でも、誰が何の為に？」

格納庫の床に片膝着いたシャーリーは、優人のストライカーを調べながら難しい顔で独り言ちる。彼女の傍らには、いかにも退屈そうな表情をしたルツキーニが唇を尖らせている。

「シャーリーってば、何ブツブツ言ってるのおく？優人のお見舞いはあく？」

「おつ？悪い悪い、そうだったな」

と、腰を上げるシャーリー。彼女はルツキーニと、優人の見舞いに行くという約束をしていた。

ルツキーニはもちろんだが、シャーリーも優人のことが心配で仕方なかった。優人の回復を聞いて、すぐに駆けつけるつもりだったが、目覚めたばかりの病人の元へ押し掛けるのもどうかと思ひ、夕食後あたりに見舞うつもりでいたのだ。

「早く行くおくよお！優人、待ってるよお？」

「分かったから落ち着けよ、ルツキーニ」

ピョンピョン、と可愛らしく跳ねながら自分を急かすルツキーニを宥めるシャーリー。格納庫内の照明を消して、ルツキーニと二人で優人の部屋へ向かう。

しばらく経って、誰もいなくなった格納庫に芳佳が姿を見せる。

真剣な面持ちでキャットウォークを歩いていると、さらにウィッチがもう一人、小走りで追いついてきた。リーネだ。

「芳佳ちゃん!」

「えっ? リーネちゃん!?!」

驚いて振り返る芳佳に、リーネは焦った様子で駆け寄る。

「また出ていったら、今度こそ禁固処分になっちゃおうよ?」

「どうしても確かめたいの!」

芳佳がやらんとしていることを理解していたリーネは、彼女を心配して引き止めようとする。しかし、芳佳の決意は堅かった。

「……私、ネウロイのことは分からない。でもね! 芳佳ちゃんのこととは分かる! 諦めないと、真っ直ぐなところ……だから、私も一緒に行く!」

リーネの表情が泣き出しそうなものから一転、強い覚悟を湛えたものに変わる。

「えっ?」

「すぐに支度するから!」

自分の発言に面食らう芳佳を他所に、リーネは踵を返し、一旦自室へ戻ろうとする。
「ダメっ！リーネちゃん！」

リーネの背中に向かつて、叫ぶ芳佳。立ち止まったりリーネの肩は小さく震えていた。
「……………どうして？……………私じゃダメ？優人さんと違って頼りない？」

「違うの」

芳佳は左右に首を振ると、自らの胸の内を訴えた。

「これは、私一人でやるって決めたの。お願い」

「……………」

リーネは何も返さず、ゆっくりと芳佳に向き直った。見えたのは潤んだ芳佳の瞳、今度は彼女が泣き出しそうになっている。

「……………ごめんね」

「……………」

堪えきれなくなったリーネは、芳佳の元へ駆け戻り、彼女の小さく華奢な身体を抱き締めた。

「早く帰ってきてね」

「……………うん」

強く、それでいて優しいリーネの抱き方に、芳佳は優人と似た温もりを感じていた。

心地好きそうに目を閉じると、リーネの背中に手を回して彼女を抱き返した。

「ずっと待つてるからね」

「うん」

一度よりも強い領きを返す芳佳。大切な親友に見送られ、彼女は大雨の中を飛び立っていった。



同時刻、優人の部屋――

部屋に戻った優人は、第一種軍装の上着をソファア―に脱ぎ捨てると、ベッドに身を投げた。仰向けに寝転がり、ぼんやりと天井を眺める。

(……あいつと、あんな風に口喧嘩したのはいつ以来かな?)

ふと、そんな疑問が優人の脳裏に浮かぶ。501に配属されてからというものの、優人が坂本に振り回されたり、彼女の遠慮の無さに愚痴を零すことはあっても、喧嘩らしい喧嘩をしたことはなかった。

リバウに配属されたあの頃、優人は父を亡くしたばかりで最前線へ送られ、坂本はろくな経験もない身で隊を指揮しなければならなかった。心に余裕のなかった者同士の

二人は、互いに辛く当たってしまい、しばらくの間は口喧嘩が絶えなかった。幸いにも扶桑海軍の同期である竹井醇子の仲裁や本人達の精神的な成長で、すぐに落ち着いていった。二人にとってはあまり思い出したくない恥ずべき記憶である。

その後も意見の不一致から今回のように口論となる機会がたまにあつた。もしかしたら今も昔も相手が坂本だから遠慮なく感情ぶつけられたのかもしれない。それは坂本も同じだろう。

(頭冷やして、もう一度話そう)

コンコンっ！

「おっ！」

ふと室内に響く小気味良いノック音。現実に戻った優人は、ゆっくりと身体を起こした。

「は〜い、どちらさん？」

「……わ、私だ」

「バルクホルン？」

ドアをノックをしていたのはバルクホルンだった。てつきり芳佳か、頭を冷やした坂本が訪ねてきたとばかり思っていた優人は、以外な訪問者に驚きながらもドアへ歩み寄り、出迎える。

「突然すまないな」

優人と顔を合わせたバルクホルンは、申し訳なさそうに言う。

「別にいいけど、何か用か？」

優人が訊ね返すと、バルクホルンは恥ずかしそうに俯いたかと思えば、すぐに顔を上げた。

「その、だな……服を脱げ……」

「……………はい？」

あまりに唐突な脱衣命令に、優人は己の耳を疑った。

「じゃなくてだ！」

バルクホルンは顔を真っ赤にしながら激しく頭を振った。

「お前は、ロフティンク医師から許可が下りないうちは、風呂に入れないと聞いた」

「まあ、怪我人だからな」

「そこでだ！私が、お前の身体を清拭する！」

そう言つてバルクホルンは、優人からはドアで死角になつてゐる場所から1台のワゴンを引っ張り出した。ワゴンにはお湯の入った洗面器と、数枚ほどのタオルが置かれていた。

「清拭？」

清拭というのは、お湯を絞ったタオル等を使い、怪我や病気で入浴ができない人間の身体を拭いて清潔することである。

「ああ」

確認するように訊ねる優人にバルクホルンは頷いて返す。先程の「脱げ！」は、「私が身体を拭いてやるから服を脱げ」ということだったのだ。

「いや、それくらいは自分で出来るし。わざわざ拭いて貰わなくても——」

「自分でやったのでは背中に手が届かんではないか！501のウィザードが身体を不潔にしたままでは、隊の沽券に関わる！」

「そんな大袈裟な」

「大袈裟ではない！とにかく、部屋に入れて貰おう！」

「お、おい！」

優人の意見を見無視して強引に入室するバルクホルン。こうなると彼女はテコでも動かない。優人は不承不承ながら、彼女の厚意を受けることにした。

優人は、バルクホルンに背を向けるようにしてベッドの端に正座すると、シャツのボタンを上から順に外していく。

バルクホルンも制服を濡らさぬように上着のみ脱いで、シャツの袖を捲る。洗面器のお湯にタオルを沈め、ぎゅうつと力いっぱい絞った。

「じゃあ、頼むよ」

スルツとシャツを脱ぐ優人の頬に、僅かではあるが赤みが差している。バルクホルンが拭くのは上半身だけだろうが、それでも女性に身体を見せるのは照れくさいらしい。

一方、言い出しつぺのバルクホルンもまた、後ろ姿とはいえ目の前に異性の裸が現れたことで緊張してしまい、顔を強張らせていた。

「い、いくぞ」

意を決して手を伸ばすバルクホルン。優人の腰部にタオルを当てて、下から上へと丁寧に優しく拭いていく。

「ど、どうだ？痛くないか？」

「うん……大丈夫、気持ちいいよ」

「そ、そうか……」

緊張を孕んだ声で短い会話する二人の男女。疚しいことなど何もなければずなのに、何故かいけないことをしている気持ちになる。

(き、気まずい……)

暫しの間沈黙が続き、優人はなんとも言えない居心地の悪さを感じ始めていた。至近距離で背中を向けている相手が無言を貫く、それだけで多大なストレスとなる。

「あ、雨すーいな」

「……そうだな」

「……………」

「……………」

「そう言えば、妹さんどうだった？見舞いに行ったんだら？」

「思ったより元気そうだった」

「そうか……」

「……………」

「……………」

「……………」

「この前貸した本は——」

「すまない、まだ読んでいないんだ」

「そ、そっか……」

「……………」

「……………」

「……………」

（バルクホルンとの会話って、こんなに苦痛だったか？）

いくら話を振っても長くは続かない。芳佳がブリタニアに来る前、二人の関係はギク

シヤクしていて会話もならなかったが、その頃よりも今の状況の方が遥かにしんどい。

「……優人」

優人の胃に僅かながらの痛みが走り始めたのと同じタイミングで、バルクホルンが声を掛けてきた。

「その……芳佳はどうだった？」

「え？ どう、つて？」

優人が訊き返すと、バルクホルンの手の動きが止まった。

「今朝、風呂場で少々キツイこと言ってしまった。落ち込んでいなかったか？」

「あ……」

芳佳の心配をしてきているバルクホルンの言葉に、優人はハツとなる。どうやらバルクホルンが部屋を訪ねた理由の半分は、芳佳のことを訊くためだったらしい。

ネウロイと和解出来るかも、という芳佳の考えを感情論で否定しつつも、内心では彼女のことを気にかけている。なんだかんだ言っただけでバルクホルンも優人に劣らず、甘いのだ。

「大丈夫だよ。あいつはお前が思っているよりも強い、落ち込んでみすぐりに立ち直るさ」

「そ、そうか」

ホツと胸を撫で下ろすバルクホルン。その安心したような声に、優人は自然と笑みを

零す。

「お前も案外過保護だな」

「なっ!?!」

優人には見えないが、茶化されたバルクホルンの頬がポツと赤く染まる。照れを隠すかのように声を張り上げた。

「せ、背中はもう終わりだ！次は前を拭く！こつちを向け！」

「いや、前は自分で——」

「いいから！怪我人は黙って言うことを聞け！」

「はいはい」

気の抜けた返事をしつつ、優人は身体をバルクホルンに向けた。

「——っ!?!」

優人の裸体を正面から見たバルクホルンは、何故か慌てて目を逸らした。かと思えば、チラチラと優人の身体を見てくる。

（海上訓練の時も思ったが、意外と鍛えられているな……）

インドア派なこともあって普通よりも若干痩せている感のある優人だが、軍で鍛えられているだけあって筋肉質ではないにしても無駄な贅肉がなく、引き締まっている。しかし、さすがに腹筋は割れていない。

「どうした？」

「いや、何でもない……」

バルクホルンは正面の清拭を行おうとする。しかし、ある疑問が彼女の頭を過つたので、思いきつて優人に聞いてみた。

「優人……」

「なんだ？」

「お前は……大きい女性が好みだったよな？」

「大きい？」

優人に聞き返されると、バルクホルンは顔を真っ赤に染めて付け加えた。

「む、胸のことだ」

「あ……ああ……」

質問の意味を理解した優人は、罰が悪そうに右手の人差し指で己の頬を搔いた。

「も、もし……もしの話だが！わ、私から胸がなくなったら、お前は私から愛想を尽かしたりするのかわ？」

バルクホルンは視線を足元へ落とすと、胸の前で両手の人差し指を突き合わせ、もじもじとしながら訊く。

「どうやら彼女は、入浴時にハルトマンから言われたことを気にしているらしい。」

「あ、いや……別に愛想尽かしたりは……そもそも女の子の価値は胸で決まるものじゃないし」

「そうか……」

と、安堵するバルクホルンの胸が少しだけ揺れる。優人はその僅かな動きを視界の端で捉え、そのまま彼女の豊かな胸を凝視する。

(前に不可抗力で触ったことがあるけど……結構すごかったよな?)

シャーリーやリーネには及ばないものの、ハルトマンが言った通り中々大きい。張り」と形の良さなら負けていないだろう。

事故でバルクホルンの胸を掴んだ時に感じた制服越しとは思えないほどの柔らかい感触を思い出し、優人は固唾を飲む。

「——っ!? 優人、お前! どこを見ている!?!」

優人の邪な視線に気付いたバルクホルンが、両腕で胸を庇いながら怒鳴る。

「あ……い、いや……別に」

「何が別にだ! 私の胸を見ていただけろう!?! そうだろう!?! このスケベ!!」

怒りに駆られたバルクホルンは、優人に顔を近付けて問い詰める。

「ちよっ、ちよっ……落ち着けて!」

むにゅ!

「……なっ!？」

「……あつ……………」

顔を眼前まで突き出してきたバルクホルンを押して退がらせるために両手で前に出した優人だったが、うつかり彼女の両胸を掴んでしまう。突然のアクシデント、一時的に思考を停止させた二人の口から間の抜けた声が漏れる。

扶桑のことわざに『二度あることを三度ある』というものがある。物事は繰り返し起こる傾向があるものだから失敗を重ねないようにという戒めであるが、バルクホルンの胸を過去に二度触ったことがある優人は、経験を活かして失敗を未然に防ぐことが出来ず、今回三度目を迎えてしまった。

「え、えーつと……………」

優人が何か弁解しようとしたその時だった。

「優人おー! お見舞いに来たよおー! つて、うじゅ?」

「どうだ? 少しは良くなっ——」

お見舞いに来たルツキーニのシャリーが、ノックもせずには部屋へ入室してきた。優人とバルクホルンの姿を見るなり、二人はピタッと動きを止める。

「リベリアン!?! ルツキーニ!?!」

二人の声に反応して、バルクホルンがドアの方を向いた。ルツキーニは「何でバルク

ホルンがいるの？」といった感じに首を傾げているだけだが、シャーリーは驚きのあまり目を見開いている。

それもそのはず。部屋に入った途端、半裸の男がワイシャツ姿の女性の胸を両手で揉んでいたのだ。驚かない方が無茶である。

「あ、あはは……あははははは」

顔をひきつらせたシャーリーは、渴いた笑い声を上げる。彼女は、優人とバルクホルンが『男女の営み』の最中だと勘違いしていた。

「悪い、邪魔したな！」

「待てリベリアン！」

「シャーリー！誤解だ！」

バルクホルンと優人は、ルツキーニを連れて撤収しようとするシャーリーをなんとか呼び止め、必死に事情を説明した。

「あつははははは！なあんだ、そんなことかあ！」

真相を知ったシャーリーは、安心したように笑う。

「あたしはてつきり、優人とバルクホルンが隠れて付き合ってた、仲がかなり進展しているのかと思ったよ！」

「私と優人はそうだった関係ではない！」

「プイツとそっぽ向くバルクホルン。シャーリーではない、自分の胸を揉んだ優人だ。」

「ともかく、誤解されずに済んだか……」

清拭を終えた優人が、シャツを着ながら呟く。彼はこれまでも覗きやら、ズボン窃盗等の冤罪をかけられている。

「ねえ優人」

シャツのボタンを留め終わると、ルツキーニが上目遣いに優人を見てきた。

「ん〜?」

「怪我、もう痛くない?」

「心配?大丈夫だよ、しばらく休めばまた飛べるようになるから」

「ホント?」

ルツキーニはズイツと顔を寄せながら念を押す。

「本当だよ。心配してくれてありがとう」

と言つて頭を撫でてやると、ルツキーニは気持ち良さそうに目を細めた。部隊最年少である彼女は、隊の皆から妹分のように思われているが、優人に懐いて甘える姿はまるで仔猫のようだ。

「あたしも心配だったんだけど?」

優人に近付いたシャーリーがニイと口角を吊り上げ、顔を傾けた。

「あ、ああ。シャーリーも……その、ありがとう」

シャーリーの眩しい笑顔が眼前まで迫り、優人は思わずドキツとする。

「どうやら大丈夫そうだな。10秒置きにあたしの胸をチラ見してるし」

そう言うときシャーリーは自慢の胸を強調するように持ち上げる。優人は、慌てて彼女の分析を否定した。

「いやいやいや！見てない！見てない、って！」

「照れるな照れるな♪そうだ！回復祝いに頬っぺにキスしてやろうか？」

「はあ!？」

「あつははははは！ジョークだよ！ジョーク！優人はホントからかい甲斐があるなあ！」

豪快な笑いを飛ばすシャーリー。実を言うと、優人は彼女からの頬っぺチュウを少なからず期待してしまつた。彼の邪な心を見透かしたのか、右拳を握り締めたバルクホルンが優人を睨んでいる。

「あつ、そうそう！忘れてた。優人に伝えることがあつたんだ」

シャーリーは笑うのを止め、思い出したように言う。

「俺に？」

「うん。お前のストライカーユニットだけど——」

ガチャツ！

シャーリーが説明しようとしたその時。ドアがガチャツと音を立てて、開かれた。4人が目をやると、ドアのところにペリーヌが立っていた。

離れた場所から走って来たらしく、壁に手を突きながら肩で息をしていた。

「ペリーヌ、ノックぐらいしたらどう——」

「大変ですわ！」

バルクホルンの言葉を遮り、ペリーヌは緊急の報せを口にした。

「宮藤さんがっ！」

◇ ◇ ◇

数分後、501基地ブリーフィングルーム——

バンっ！

「芳佳さんが脱走したわ！」

壇上に立ったミーナが演壇を叩きながら、集まったウィッチ達に告げる。隣には軍刀を手に掛けた坂本が立っている。

「脱走っ!？」

驚くシャーリー。

「やるなあー！」

お気楽なハルトマン。

「あのバカっ！」

と、吐き捨てるバルクホルン。彼女の斜め後ろでは、リーネが心配そうな表情で机に視線を落とした。芳佳を信じて送り出したものの、心配で仕方がないのだ。

「このことが司令部に知れたら面倒だ！」

「！急いで連れ戻すわよ！」

坂本とミーナが全員に出撃を命じたその時。演壇に取り付けられている司令部直通の赤電話が鳴り響いた。ミーナは、話を中断し、受話器を手に取る。

「はい、501統……閣下!？」

ミーナの表情が堅くなる。電話の相手は501の上官にして、ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官を務める空軍大将トレヴァー・マロニーだった。

「……ですが、それは……いえ、了解しました」

マロニーから何かの命令を受けたミーナは、やや乱暴に受話器を置くと、険しい表情で一同に告げる。

「司令部から芳佳さんに対する撃墜命令が下ったわ！」

「えっ!？」

撃墜命令と聞いて、リーネはハッと顔を上げる。まさかここまで大事になるとは思っ
ていなかった。

「どういうことだ!?!あの連中にしては随分と迅速な対応じゃないか!？」

と、眉を顰める坂本。脅迫状の一件以来、彼女とミーナは基地内にマロニーと通じて
いる者がいるのではないかという疑念を抱いていたが、それが今確信に変わった。

(最悪の状況ね……)

ミーナの額に一筋の冷や汗が流れる。



同時刻、優人の部屋――

「……飛べそうか？」

部屋に一人残された優人は目を閉じ、自分の中にいる使い魔に問い掛ける。目蓋の裏
に、彼と契約し、一体となっている使い魔――『紗綾』と名付けたキツネ顔の柴犬の姿
が浮かび上がる。

紗綾はジツと優人を見据えると、小さく頷いた。よく見ると紗綾の身体は小刻みに震えている。紗綾は優人が負傷したあの時、咄嗟に主を庇っていたらしい。故に彼女もまた優人以上の深手を負っているのだ。

ウィッチやウィザードが魔力を使用する際に、そのコントロールのサポートする存在である使い魔の負傷が、魔法力の発動に少なからず影響が出ることは想像に難くない。

「やんちゃな妹を助けたいんだ……悪いけど、少しだけ無茶に付き合ってくれるか？」
優人が重ねて訊くと、紗綾はもう一度頷いた。



再びブリーフィングルーム――

「以上です」

ミーナは、手短かにブリーフィングを済ませていた。すぐにも芳佳を追わねばならない。無論、撃墜するのではなく、連れ戻すためだ。

「坂本少佐とペリーヌさんは、宮藤大尉が基地を飛び出さないよう見張っていただきます」

「はこ」

「了解した」

ペリーヌと坂本は順に返事をする、優人の部屋へ向かう。さらにミーナは、マロニーの命令を聞いてから俯き気味となっているリーネにも声をかける。

「リーネさん」

「はい？」

「あなたは残りなさい」

「えっ？」

「今日1日、芳佳さんの代わりに自室で謹慎していなさい」

厳しい表情に反した穏やかな口調で命令するミーナに、リーネは二つ返事で応じる。

芳佳を空へ送り出した時から、この程度のこととは覚悟していた。

(まったく……扶桑の航空歩兵って……)

扶桑出身の破天荒な部下達の姿を脳裏に浮かべ、ミーナは呆れた表情で虚空を見つめていた。

◇ ◇ ◇

「ぶえつくしゅん！」

基地宿舎内の廊下では、鼻がムズムズするのを感じた坂本が、年頃の乙女らしからぬ豪快なくしやみをしていた。

「大丈夫ですか、坂本少佐？」

敬愛する上官が風邪を引いてしまったのか、と慌てるペリーヌ。親父臭いくしやみに関しては、完全にスルーしている。

「いや、何ともない」

坂本が苦笑してみせると、ペリーヌは「ほっ」と胸を撫で下ろした。

「しかし、芳佳がなあ……」

芳佳の後先考えない行動力は坂本も知ってはいたが、まさか脱走までするとは思っていなかった。

「まったく、いい迷惑ですわ」

「はっはっはっはっ！」

フン、と鼻を鳴らすペリーヌ。坂本は普段通りの豪快な笑い声を返した。やがて二人は、優人の部屋の前に到着し、ペリーヌがドアをノックする。

「宮藤大尉、私です。ペリーヌです」

が、中から返事はない。

「御手洗いかしら？」

「……まさか!？」

何かに気付いた坂本がドアを開ける。室内に優人の姿はなく、ベッドの上に『坂本』と書かれた一枚の置き手紙が置かれていた。目を通してみると――

『お前のストライカーユニット借りる』

とだけ書かれていた。坂本はクシヤツと手紙を握り潰した。

「遅かったか……あの兄バカめっ!」

第40話 「ネウロイの兄妹(?)とウォーロック」

基地を飛び出した芳佳は、人型ネウロイと遭遇したグリッド東23地区を目指し、ドーバー海峡上空を飛行していた。

雨を降らせていた黒雲は日の出と共に他所へ流れ、澄み切った空が広がっている。

「そろそろ、この間の場所……」

目的地に到着した芳佳。キョロキョロと辺りを見渡す彼女に向かって、何かが急降下してきた。

「あっ!」

気配を感じた芳佳が振り返ると、ウィッチ似の人型がネウロイが少し離れた場所に佇んでいた。彼女(?)は、まるで最初から来ることを知っていたかのように、芳佳の前に姿を現したのだ。

両者はホバリングしたまま、互いの意図を推し量るように見つめ合う。すると、芳佳に向かって直上より赤い閃光が降り注いだ。ネウロイのビームだ。

「わわっ!」

間一髪回避する芳佳。見上げると、上空に人型ネウロイがもう一体、坂本と交戦した

ウイザード似の個体だ。彼(?)は、両腕のビーム発射口を芳佳に向けていた。

「ちよつ、ちよつと待って! きゃああつ!」

芳佳は両手の平を前に突き出して『待った』をかけるが、ウイザード似のネウロイは構わずビームを見舞い、慌てて展開した芳佳のシールドに直撃する。

ウイザード型ネウロイの攻撃に芳佳が悲鳴を上げると、すぐさまウイツチ型ネウロイがビームの射線上に割って入り、両腕を広げて芳佳を庇おうとする。

(……庇って、くれた?)

芳佳を助けようとするウイツチ型ネウロイの姿は、坂本から彼女(?)を守ろうとした時の芳佳に酷似していた。ウイザード型は、ウイツチ型の行動に戸惑ったように一旦動きを止め、彼女(?)の元へゆつくりと近寄った。そのまま見つめ合う二体のネウロイ。ウイツチ型が、芳佳は敵じゃない、撃たないで、とでもウイザード型に懇願しているかのようだった。

暫くすると、ネウロイ達は揃って芳佳へ向き直る。かと思えば、再び背を向けて飛んでいった。

「待って!」

誘うかのように飛んでいく二体のネウロイを、芳佳が追いかける。

ネウロイ達は、まるで寄り添うように並走して飛んでいる。その仲の良さそうな後ろ

姿を見て、芳佳は自然と笑みを零した。

(なんだが、私とお兄ちゃんみたい)

ネウロイに親兄弟等の関係があるかは分からない。しかし、芳佳には、ウィザード型ネウロイが、妹であるウィッチ型を氣遣う兄のように思えた。

(お兄ちゃん……怒ってるかな？怒ってるよね?)

ふと優人の顔が頭に浮かび、芳佳は俯いた。また勝手に基地を飛び出してしまい、心を心配させている。自分を送り出してくれたリーネのこともあり、罪悪感で胸がチクリと痛んだ。

(お兄ちゃん、リーネちゃん。ごめんなさい、出来るだけすぐに戻るから……)

心の中で呟くと、芳佳は顔を上げた。気が付けば、前方に巨大な黒雲が屹立していた。



「いたっ！一緒にいるよ！」

芳佳を追って基地を発ったウィッチーズが追いついてきた。まずハルトマンが、芳佳と人型ネウロイ二体を発見する。

「ネウロイ、ヤツが優人を！」

続いてバルクホルンも気付いた。優人を撃ったネウロイ、彼の仇。怒りを抑えられないバルクホルンは、MG42を構え、ウィッチ型ネウロイに照準を合わせる。

「待って!」

発砲しようとするバルクホルンを、ミーナが声で制する。

「何故だ!」

バルクホルンはすぐさまミーナに振り返り、険しい表情で問う。

ミーナ自身、直に見るまで信じられなかったことだが、宮藤兄妹が言ったように人型ネウロイの行動がこれまでのネウロイと違って見えたのだ。

ほんの少しだけ様子を見ようという気になるが、同時にすぐにでも芳佳を連れ戻したいという気持ちもある。ミーナは、板挟みな己の感情に唇を噛んだ。

「何だあれはっ!?!」

突如、シャーリーが驚きの声を上げる。巨大な黒雲の渦が、ウィッチ達の眼前にそびえ立っていたのだ。

「ネウロイの巣よ!」

と、ミーナ。黒雲の正体は、ガリア北東部にあるはずのネウロイの巣だったのだ。

「前にも見たことある。あそこからヤツらは来るんだ!」

ハルトマンが、ミーナの言葉を継いだ。

(これが、ネウロイの巢……)

固唾を飲むシャーリー。彼女は、年齢に反してウィッチとしての経験が隊内でも浅い方だ。知識としてはあつたものの、ネウロイの巢を見たのは今回か初めてだった。

大型ネウロイすら比較にならない規格外の大きさに、恐怖というよりただただ圧倒された。

「あれを破壊しようと、多くの仲間が攻撃した……だが、誰ひとり近付くことすら出来なかった」

巢の前に散っていったウィッチ達のことを想い、バルクホルンは瞳を伏せ、グツと拳を握り締める。

「芳佳が中に入っていくよー！」

「何だどっ!？」

ルッキーニの言葉を聞いて、バルクホルンは驚愕のあまり声を張り上げた。同時に、一同の視線が芳佳に集中する。

「わあ〜! 雲の廊下みたい」

まったく物怖じしていない芳佳は、ネウロイに案内されるままに巨大で不気味な黒雲の中心を昇り、前人未到の巢の中へと入って行った。

「入っちゃった……」

呆然と呟くシャーリー。

「誰も入れなかつたのに……」

さしものハルトマンも驚きを隠せない。

「ヤツらの罠かつ!？」

あまりにあつさり芳佳の侵入を許したネウロイに、バルクホルンの警戒心はさらに強くなる。

「芳佳!」

「待ちなさい!」

追いかけてようとするルツキーニを、ミーナが止める。

「……様子を見ましよう」

ミーナは改めてネウロイの巢を見据える。平静を装ってはいるが、芳佳を追いかけた
い想いは彼女が一番強い。今にも動き出さんとする己の身体を必死に抑えながら、芳佳
の無事を信じて彼女の帰りを待つ。

◇ ◇ ◇

「はあ……はあ……」

ミーナ達より、やや遅れて基地を発った優人は、勝手に借りた坂本のストライカーユニットを使って飛行していた。しかし、その飛行姿勢はフラフラと安定していない。

怪我が癒えきつていないことはもちろん、彼の使い魔である柴犬——紗綾も同じく傷を負っているため、今の優人は、使い魔との同調と補助が不完全な状態だ。

どうにか飛ぶことが出来たが、いつもと比べて明らかに魔法力の消耗が激しい。呼吸は乱れ、胸には痛みが走る。

シールドや身体強化等の基本的な魔法は問題無さそうだが、固有魔法の『凍結』や覚醒魔法の『絶対凍結』に関しては不安が残る。しかし、使い勝手と燃費の悪さから、固有魔法を多用しない優人にとっては些細なこと。

「……芳佳、追いついたらたっぷり説教してやるからな」

妹がいるであろう遠方を見つめ、優人はギョツと拳に握る。

さすがは扶桑海事変からの大ベテラン。経験に裏付けされた技量で、なんとか魔法力をコントロールし、姿勢を安定しさせる。

「よしー……うわっ!?!」

優人が速度を上げようとしたその時。航空機らしき「何か」が、後方から優人に接近し、彼の脇を高速で通り過ぎていった。突然のことに驚いた優人は思わず声を上げる。

正体不明の航空機は、ストライカーユニットを遥かに上回る速度で飛び去っていく。

「な、何だあれは?」

高速で飛行し、あっという間に小さくなった未確認機の影を見据える優人は言い様のない胸騒ぎを覚えた。



芳佳はネウロイの巢の中心部に到達していた。そこは雲の渦ではなく、ネウロイの装甲を連想させる正六角形のパネルを組み合わせたような壁で覆われていた。

「これは?」

突然、壁が発光し、凶形にも文字にも見える模様が浮かび上がる。下を見てみると、西ヨーロッパの地図らしきものが映し出されていた。

人型ネウロイの兄妹(?)は地図の真上に立っている。そして、正十二面体の透明な物体が、彼らの前で赤色に輝いていた。ネウロイのコア、それもこの巢のコアだ。

「コア……だよね?」

確認するように呟いた芳佳はコアに近付き、人型ネウロイの兄妹(?)の反対側に降り立った。

以前、赤坂が巢の内部にコアが存在すると言っていたが、大きさは彼の予想よりもか

なり小さい。

「あの……」

声をかけるのとほぼ同時に、無数のスクリーンが芳佳を囲むように現れ、青い海と白い雲で覆われた天体が映し出された。

「え、地球？」

映像は、次々切り替わる。機銃を撃ちながらネウロイの巣に突入する戦闘機の一個小队。それらを返り討ちに、巣から出現する大型ネウロイ。無数のビームで焼かれる街。それとはまた別の大型ネウロイと、海面スレスレに飛びながらビーム掃射を回避するウィッチとウィザード。優人と坂本だ。

「お兄ちゃん！坂本さん！」

二人の姿を見て、反射的に叫ぶ芳佳。同時に映像が切り替わる。

今度は、地面に墜落したネウロイのコアの破片と、それを調べている研究者らしき人々が映し出された。

「ネウロイの……破片？」

さらに映像は切り替わる。今度は、何かの実験室のような部屋だ。

「……、ど……？何あれ？」

手前には、大型のカプセルに入れられたネウロイのコア。奥には、赤い光を帯びた人

型の機械。

またまた映像が変わり、芳佳とウィッチ型ネウロイが、楽しげに空を舞う場面が映し出された。それは、優人が撃墜されたあの日のものだった。

「私だ!」

映像を一通り見せられた芳佳は、兄妹ネウロイ(?)に身体を向け、意図を押し量るように見つめる。彼女がすつと右手を伸ばすと、ウィッチ型も同様に右腕を持ち上げ、先端から指のような物を生やした。

ウィザード型に見守られながら、ゆつくりと芳佳に近付き、まるで握手するように己の右手を伸ばす。しかし、次の瞬間。何かの気配を察知した人型ネウロイ達は二体揃って姿を消した。

「——っ!?待って!」

一人残された芳佳の悲痛な叫びが、内部で木霊する。



外では、ウィッチ達が神妙な面持ちで巢を見つめながら芳佳が出てくるのを待っていた。

「まだ……出てこないね」

皆が沈黙を貫く中、ルツキーニが不安げに呟いた。その時だった。二体の人型ネウロイが、まるで瞬間移動でもしたかのように、突然二体のウィッチが目の前に現れた。

「さっきの人型だ!」

「芳佳は!?!」

ハルトマンが叫ぶ。続いて、ルツキーニが芳佳の姿を探すが、見当たらない。

「いない。やっぱり罠か!?!」

と、バルクホルンが奥歯を噛み締める。

「ブレイク!」

「!?!」

ミーナの指示を受け、ウィッチ達は散開する。対する、二体の人型ネウロイは微動にしない。そればかりか彼らの視線は、ウィッチ達とは別の「何か」を捉えていた。

それは優人が先程遭遇した未確認機、銀色に輝く流線形の航空機だった。高速で飛来し、上昇するバルクホルンとハルトマンの脇を通り過ぎていく。

「何?!?!」

突如現れた未確認機に、バルクホルンが思わず声を上げる。

上昇した未確認機は速度を維持したまま大きく旋回した後、急降下する。進行方向上

には人型ネウロイ達がいた。

ウイザード型ネウロイが、ウイツチ型を庇うようにして前に出ると、未確認機の機首部分に内蔵された機銃を発砲した。銃弾がウイザード型に命中し、白煙が上がった。

白煙を突っ切り、変形しながら離脱していく未確認機。白煙が晴れると、今度はウイツチ型のネウロイが反撃に出た。脚部の発射口より大量のビームを放たれ、ウイツチが巻き込まれる。

「こんなすごいビーム、初めてだよ!」

「キツイね……」

雨のように降り注ぐビームを必死に回避するシャーリーとルツキーニ。あまりの火力に、二人は冷や汗を掻いた。

「さっきのは!」

「何だアイツは!」

ハルトマンとバルクホルンがビームを警戒しつつ、未確認機を探す。

「あれは?……」

二人よりも先に、ミーナが未確認機を見つける。未確認機は、航空機から人型に変形し、魔力シールドのような物を展開していた。ただしそれは、正六角形の光を組み合わせたような形状で、ウイツチのシールドよりもネウロイの装甲に似ている。

人型に変形した未確認は正面で両腕を合わせ、そこから赤い閃光を放った。

「ビームだよ！」

ルツキーニが叫んだ。未確認はネウロイの主兵装であるビームを、しかも大出力で放っていた。

「あいつもネウロイなのか!？」

驚愕するシャーリー。同時に未確認機のビームが二体の人型に飲み込み、一瞬で消滅させた。さらにビームは、後方の巣をも貫いていた。

「ねえ！何処行つたの!？」

巣の中では、芳佳が人型ネウロイに呼び掛けていた。取り残されて戸惑う彼女の元に、未確認のビームが流れてきた。

「えっ!?!きやあああああっ!？」

巣の壁を容易く貫通するビームに、芳佳は悲鳴を上げて逃げ出した。彼女は間一髪回避するも、中心にあったコアが焼き払われた。

「アイツ！強いぞ！」

普段、飄々としているハルトマンが珍しく表情を硬くしている。世界的なウルトラエースたる彼女にそこまで言わせた未確認は人型ネウロイの消滅させると、再び航空機に変形し、何処かへ飛び去っていった。

「何なんだアイツ！ネウロイを一撃で！」

「分からね」

目の前で起きた出来事に頭が追い付かず、シャーリーとバルクホルンは当惑する。

「あのビーム、とんでもない威力だぞ……」

シャーリーはさらに言葉を続ける。あの未確認が放ったビームは、これまでのネウロイとは段違いの威力、射程を誇っていた。

「にゅあああああつ！」

何かに気付いたルツキーニが大声を上げる。彼女の視線の先にはビームの衝撃で気を失い、海に向かって頭から落ちていく芳佳の姿があつた。

「芳佳あー！」

「芳佳！」

シャーリーとルツキーニが魔導エンジンを全開にして追いかけるも、既に距離はかなり開いてしまっている上に、芳佳の落下速度も速い。

「追いつけない……」

唇を噛み締めるシャーリー。固有魔法『超加速』を使って、一気に距離を縮めようとする。しかし、シャーリーが『超加速』を發動するよりも先に、人型のシルエツトが彼女とルツキーニの間を猛スピードで通りすぎていった。それは人型ネウロイでもなけ

れば、人型に変形した未確認機でもなかった。

「あれ？」

「優人かつ!？」

二人を追い越していったのは、基地にいるはずの優人だった。

「芳佳ああああ!!」

坂本のパーソナルマークが描かれた零式を履いた彼は、機体の最高速度を上回る速さで芳佳に追い縋り、なんとか海に落ちる前に抱き止めることに成功する。

(あれってまさか、あたしの魔法か?)

シャーリーは呆然と優人を見る。彼女には、優人が行った加速が自身の『超加速』と同じものに見えたのだ。

「芳佳!大丈夫か!?!しっかりしろ!芳佳!」

芳佳を抱き抱えた優人が、切迫した表情で呼び掛ける。

「う……う……う……」

声に反応し、芳佳はすぐ意識を取り戻した。同時にシャーリーとルツキーニも駆け寄る。

「芳佳!」

「芳佳、大丈夫?」

シャーリーとルツキーニが、芳佳の顔を心配そうに覗き込む。

「あれ? お兄ちゃん? シャーリーさん? ルツキーニちゃん? 何で——」

「このバカ! 何でじゃないだろ!」

怒声を上げる優人。半覚醒状態だった芳佳はハッと目を見開いた。

「どうして基地を飛び出した!? どうして一人でネウロイの巢に入った!」

「おつ、おい! 落ち着けよ」

「お前は黙つてろ!」

宥めようとするシャーリーだったが、優人は口出し無用とばかりにキツと睨み返す。

優人の剣幕に圧され、シャーリーは口を噤む。ルツキーニもまた、怒りを湛えた優人の表情に脅え、シャーリーの後ろへ回った。シャーリーの制服を摘まみながら、様子を窺うようにしてチラチラと顔を覗かせている。

「お前は、一体どれだけ心配かければ気が済むんだ!」

「……ごめんなさい」

目をギユツと瞑り、芳佳は俯く。

「坂本とミーナを説得する、って言っておいただろう! 待てなかったにしても、一言くらい相談してくれてもよかっただろう! 勝手に出て行って、武器も無しに一人でネウロイの巢まで入って! もしものことがあつたら……」

そこまで言うと、芳佳をギュツと抱き締め、震える声で囁いた。

「頼むから、一人でこんな無茶しないでくれ。俺は、このブリタニアで父さんを亡くした。その上、お前まで失ったら、俺は……」

「お兄ちゃん……ごめんなさい……」

互いの声が嗚咽混じりとなる。また喧嘩になることを懸念していたシャーリーはホツと安堵し、穏やかな表情で二人を見つめる。

ルツキーニも、優人が芳佳に怒っている訳ではないと理解し、安心してシャーリーの影から出てくる。

やや遅れて、カールスラント組も宮藤兄妹の元へ降りてきた。

「ミーナ中佐」

「宮藤軍曹！無許可離隊の罪で拘束します！」

芳佳が無事に戻ったことに内心安堵しつつも、ミーナは敢えて厳しい表情を作る。

「えっ？」

マロニーが下した自分への撃墜命令を知らない芳佳は、当惑する。次にミーナは、優人に視線を移した。

「宮藤大尉あなたもです！負傷しているにも関わらずの無断出撃、上官のストライカーユニットを無断使用。基地に戻り次第、これらについて追及します」

「了解」

優人の方は特に戸惑う様子もなく、敬礼で応じる。それと同時に、なるべく大事に至らぬよう二度と戻らないことを前提とした脱走ではなく、帰隊の意志がある無許可離隊という表現を芳佳に使ったミーナに内心感謝した。

「帰投します!」

ミーナの指示の元、一同は基地へ引き返した。

「あれ?誰かいるよ!」

ルツキーニが滑走路上に人影を見つけろ。ブリタニア軍のステン短機関銃で武装した数名の兵士と、その中央に立つ黒い制服を身に纏った体格の良い壮年の男性——トレヴァー・マロニー空軍大将。そして彼の傍らには、周りの軍人達とは雰囲気異なる白衣を着た男性が立っていた。

「ご苦労だった、ミーナ中佐」

一同が滑走路に降りると、マロニーがミーナに言う。直後、先程の未確認機が優人達の頭上に姿を現した。

機体は人型に変形した後、滑走路を封鎖するように佇むマロニーの背後に直陸した。

「ヤっつきのだ」

ハルトマンがそう呟くと、すぐさま兵士達が優人達を取り囲み、短機関銃の銃口を向

ける。救国の英雄に銃を向ける彼らの表情は、仮面をかぶったようで心情を伺い知ることが出来ない。

「まるでクーデターですね、マロニー大将」

ミーナは自分達の上官であり、天敵でもあるマロニーを見据えながら皮肉を飛ばした。

(いつ見ても嫌な顔だ……)

優人もまた、心の中で彼のことを毒づいていた。

「命令に基づく正式な配置転換だよ、ミーナ中佐」

そう言つてマロニーは、一枚の書類を見せる。

「この基地は、これより私の配下である第一特殊強襲部隊、通称『ウォーロック』が引き継ぐこととなる」

「ウォーロック?」

ミーナは訝しげに繰り返す。格納庫の入り口では、ペリーヌを連れた坂本が、兵士に愛刀を取り上げられていた。

リーネ、サーニヤ、エイラの三人も遅れて基地から出て来る。マロニーに呼び出されたのだろう。

「ウィッチーズ、全員集合かね?」

自分の前に並んだ501の面々を見渡したマロニーは、我が意を得たりといった感じに嬉々としている。

「君が宮藤芳佳軍曹か？」

芳佳の前へと歩み出るマロニー。

「はい……」

不安げな面持ちで答える芳佳。優人は庇うようにして二人の間に己の身体を挟むが、マロニーは構わず言葉が続けた。

「君は軍規に背いて脱走をした……そうだな？」

「えっ?……軍規……」

元より軍規に疎い芳佳は、自分の行動が脱走という重大な違反行為であることに初めて気が付いた。

「御言葉ですが閣下、今回のいも……いえ、宮藤軍曹の行動は脱走ではなく無許可離隊です」

「宮藤大尉、君に発言を許可した覚えはない」

咄嗟に妹を庇おうとする優人の発言が一蹴される。優人はキツとマロニーを睨みつけた。

「あつ……その後ろの」

芳佳は気付いた。マロニーの背後に立つ機体が、人型ネウロイの兄妹（？）が見せてくれた映像に移っていたことを。

「ウォーロックのことかね？」

マロニーの代わりに白衣の男性が答えた。察するウォーロックの開発者だろう。男性は健康を疑うほどに肌が白く、痩せ過ぎの身体に猫背、そして粘り気のある不気味な笑みを浮かべている。まるでブリタニアの小説に登場するフランケンシュタインのようだった。

「あなたはっ!？」

芳佳に引き続き、優人も何かに気付いて声を上げる。

「おお！敬愛する宮藤博士の御息が、私のことを覚えていてくれたとは……実に光栄だ」

優人に視線を移した男性は、人目で本心ではないと分かるほど大袈裟に喜ぶ。

（宮藤博士の助手をしていた男か!? 名前は確か……石威紫郎、だったか？）

すぐには気付けなかったが、坂本も男性が何者かを知っていた。扶桑海事後、彼女と優人が滞在していたストライカーユニットの共同研究で優人の父——宮藤一郎の助手を務めていた男だ。

例の爆発事故で一郎と共に安否不明となっていた。一郎同様亡くなったものと思っ

ていたが、どういいうわけかマロニーの元にいたらしい。

「私、見ました！それがネウロイと同じ部屋で！実験室のような部屋で！」

「何を言い出すんだ、君は！」

余裕の笑みを浮かべていたマロニーが、芳佳の言葉を聞いて突然狼狽え出す。

「でも私、見たんです！」

「質問に答えたまえ！君は脱走をした、そうだな？」

と、マロニーは強引に話を戻した。

「はい、でも——」

「中佐！私は脱走者は撃墜するように命令したはずだ！」

芳佳の言い分を遮り、マロニーはミーナに視線を戻す。

「はい、ですが——」

「隊員は脱走を企てる。それを追うべき上官も司令部からの命令を守らない。まったく残念だ、ミーナ中佐。そしてウィッチーズの諸君……」

マロニーはミーナの言葉も遮り、ウィッチーズに背を向けてウォーロックの前まで戻ると、くるりと一同に振り返った。

「本日只今をもって、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』は解散する！」

「えっ!?!」

「なんだと!」

マロニーの発言に驚愕する宮藤兄妹。他のメンバーも同様だ。

「各隊員は、可及的速やかに各国の原隊に復帰せよ。以上、分かったかね中佐?」

「……了解しました」

ミーナは、マロニーの強引な解散命令に反感を抱きつつも、ここで逆らうのは得策ではないと承服する。

(そんな……解散……ウイツチーズが……)

「君の独断専行が原因なのだよ? 宮藤軍曹」

「私……でも、私……」

自分をいたぶるようなマロニーの言葉に、芳佳は目を見開きながら震える。

「安心したまえ。ネウロイはこのウォーロックが撃滅する。ブリタニアを守るのに、君達はもう必要ないのだ」

芳佳の心境を全く顧みない、高圧的かつ厭味なマロニーの物言い。ショックを受けた芳佳は、その場で気を失う。

「芳佳!」

倒れた芳佳を、優人が咄嗟に抱き抱えた。傷つけられた妹を見て歯噛みすると、優人は芳佳をバルクホルンに預けた。

「……バルクホルン、芳佳を頼む」

「優人？」

芳佳を抱き取ったバルクホルンが優人を見返す。優人はマロニーに振り返り、ゆつくりと歩み寄った。

「宮藤大尉、一体なん……がつ?」

マロニーが怪訝そうな顔を見ると、優人がいきなり殴ってきた。マロニーは不意打ちに対処する間も無く顔面に一発食らい、地面に倒れるという醜態を晒してしまった。彼のすぐ近くにいた二名の兵士が慌てて駆け寄る。

優人の怒りは拳一発で済むようなものではなかったが、他の兵士が銃を突きつけたため、それ以上手は出さなかった。

「貴様! 何の真似だ!」

身体を起こしたマロニーが、左頬を押さえながら優人に怒鳴った。対する優人は悪びれる様子もなく、ニツコリと笑顔を浮かべている。

「申し訳ありません、マロニー大将閣下。手が滑りました」

それだけ言うと、優人はバルクホルンに預けた芳佳を横抱きし、何事もなかったかのように基地へ戻っていった。ウィッチ達の何人かが、小さくガツポーズして優人の行動を讚えている。

一方、芳佳を抱えた優人は、芳佳を休ませるため彼女の部屋へ向かいながら、思案を巡らせていた。

（あのウォーロックとかいう機体、もしかして……いや、*「アレ」*に関わった人間は父さんも含めて皆……いや、石威がいる。一人いれば可能なのか？）

最初にウォーロックを見かけた際に感じた胸騒ぎが、彼の中で一層強くなっていた。

第4 1話「ピースの欠けた完全体 前編」

1939年8月、ブリタニアのストライカーユニット研究所――

ブリタニアの田舎街にあるストライカーユニットの研究所。招集された各国の技術者が、対ネウロイ戦の主力兵器となるストライカーユニットを共同で研究、開発していた。

宮藤理論を採用したストライカーユニットが、その成果である。新式ストライカーユニット量産の目処が立ち、研究者の殆んどは帰国していったが、一部はストライカーとはまた違った新兵器の開発のため研究所に残っていた。

「……………」

研究所の地下に設けられた地下実験室では、共同開発の中心人物――宮藤一郎が、円形状の水槽をじっと見つめながら佇んでいた。

水槽といっても、金魚や熱帯魚を飼うためのものではなく、培養槽という特殊なもの。生物を育てるのに必要な養分などを多く含んだ培養液で満たされた水槽だ。

しかし、目の前の培養槽内で育てられているものは、生物というにはあまりに異様な正十二面体の形状をしたガラスのように透明な物体。それから発せられる赤い光で、暗

い地下室と一郎を照らしている。

「博士、こちらでしたか？」

背後にあるドアが開き、男性が入ってきた。一郎の助手を務める技師——石威紫郎だ。

「そろそろ『イリス』の試験運用が始まります。ワイト島へ向かいましょう」

石威は背を向けたままの一郎にそう告げる。返事はなく、一郎の視線は培養槽へ向けられたままだ。

一郎と石威は、後に零式艦上戦闘脚と名付けられるストライカーユニット——『十二試艦上戦闘脚』に続いて別の研究に参加していた。

この研究は、扶桑海軍事変で多くの航空歩兵・装甲歩兵を消耗した扶桑皇国の提唱し、ヒスパニア戦役を経験したブリタニア、カールスラント等の賛同を得て始まったもの。

ネウロイと戦争状態に入った際に、数が不足仕勝ちになるウィッチ及びウィザードの代替品になりうる新兵器の開発を目的としている。

魔法力を持たない一般兵士にも扱え、尚且つ対ネウロイ戦において航空歩兵や装甲歩兵が駆るストライカーユニットと同等、もしくは上回るだけの性能を持つ新兵器という要求は十二試艦上戦闘脚開発時のものを優に上回っていた。

当然、開発は初手から難航。世界でも指折りの技術者、研究者達が集っていたことも

あり、山積みだった課題は少しずつ解決していったが、それでも完成まであと一歩というところで停滞してしまい、一度は中止も検討された。しかし、石威が独自のツテで手に入れた「最後のピース」の導入で、すべて問題が解決したばかりか予定よりも高性能な兵器に仕上がったのだ。

完成した試作機はギリシア神話に登場する女神に肖り『イリス』と命名され、本日ワイト島というブリタニア本島南岸に隣接する島で試験運用が行われる予定だ。

「……………」

「博士？」

「中止だ」

「えっ?」

聞き返す石威。一郎はゆっくり石威に振り返ると、真剣な表情でもう一度告げた。

「運用試験は中止する」

「なっ!?!」

一郎の言葉に石威は目を見張った。数十分後に迫っている運用試験を急に中止すると言うのだ。

「何をおっしゃいますか!?!これから『イリス』の性能を見に將軍達がいらつしやるんですよ! 今日間に間に合わせるため、私がどれだけ苦労して「最後のピース」を手に入れたと

「石威君、落ち着いてくれ」

食って掛かる石威を宥めつつ、一郎は自らの言い分を述べ始めた。

「君が持ってきたのは、我々が探し求めていた『最後のピース』ではないんだ！『イリス』も完成したわけではない！おかしな言い方をするようだが、『ピースの欠けた完全体』なんだ！」

今の『イリス』は、ネウロイから人類を保護する女神ではなく、人にはとても御しきれない怪物でしかない。一郎の技術者としての直感がそう告げていた。



1944年、8月末――

ストライカーユニットを履いた芳佳は、青空を飛行していた。すぐ隣には大好きな兄――優人が、並走して飛んでいる。501の仲間達も一緒だ。

ネウロイのような敵もいなければ、銃弾やビームが飛び交うこともない白い雲の浮かぶ蒼穹はどこまでも自由で、隊列を成して空を翔る一人のウィザードと十一人のウィッチーズは悠々とゆく白鳥の群れのようにだ。

「ふふ……えっ?」

気持ちよく空を飛んでいると、芳佳はいつの間にか一人になっていた。優人もウィッチ達も、ほんの一瞬目を離れた隙にいなくなっていた。

「お兄ちゃん?……みんな?……どこ?」

周囲を見渡しながら呆然と問うが、その声に答える者はいない。

広大な青空に一人残された芳佳。彼女の心はもはや踊らず、代わりに強い孤独感に苛まれた。

◇ ◇ ◇

「芳佳ちゃん!芳佳ちゃん!芳佳ちゃん!」

「あっ……?」

自室のベッドで眠っていた芳佳は、リーネからの呼び掛けで目を覚ました。

「気が付いたか?」

「芳佳ちゃん、よかったあ……」

芳佳の顔を覗き込む優人とリーネが安堵する。部屋には他のウィッチ達もいて、うなされていた芳佳を心配そうな表情で見ている。

「リーネちゃん、お兄ちゃん、みんな……私……?」

何故自分がベッドで眠っていたのか、どうしてみんなが自分の部屋に集まっているのか、目覚めたはがりで意識がハッキリせず、記憶が曖昧な芳佳にはすぐには理解出来なかった。

「さつき滑走路で倒れたんだよ」

「蓄積した疲労とシヨックで、意識を失ったの」

まずリーネが説明し、ミーナが言葉を継いだ。二人の説明で気絶する前のことを思い出した芳佳は、ガバツとベッドから身体を起こした。

「そうだっ！あのウォーロックって、なんかおかしい。ねえ！今からみんなで調べれば――」

そこまで言いかけて、芳佳は言葉を止める。優人やウィッチ達の足元に置かれている鞆やトランク等の大きな手荷物に気付いた。

「みんな……それは？……」

「命令で。私達みんな、今すぐここを出なくちゃいけないの」
芳佳の質問にリーネが答える。

「それじゃ、やっぱりウィッチーズは……解散？」

重ねて訊く芳佳に、リーネは「うん」と小さく頷いた。

「ごめんな、さい……みんな……」

「芳佳ちゃん」

芳佳の瞳から大粒の涙が零れ落ちる。悲しむ親友を見て心を痛めたリーネも、つられて目尻に涙を浮かべる。

「ごめんなさい……私、私のせいで……私のせいで……」

芳佳は涙声で謝罪する。こんなことになるとは思わなかった。誰にも迷惑を掛けずに考えを証明しようとしたつもりが、自分の浅はかで無責任な行動で501解散というを最悪の結果を招いてしまった。

「違うよ！ そうじゃないよ！」

「芳佳、元氣だせ！」

自分を責める芳佳を、リーネは懸命に励ます。ルツキー二もいつもの調子で芳佳を元気づけようとする。しかし、芳佳の涙は止まらない。

「芳佳……」

優人はポロポロと涙を流す妹をいじらしく思い、慰めるように優しく抱き寄せた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

兄の胸に身体を預けた芳佳は、ただただ謝罪を繰り返し、優人は芳佳が泣き止むまで妹の頭を撫で続けた。



しばらく泣き続けて漸く落ち着いた芳佳は、ベッドの敷き布団を畳み、帰国のための荷造りを始めていた。彼女がブリタニアに持ってきた荷物はそこまで多くないため、すぐに済みそうだった。

「優人」

部屋の入口付近の壁に背を預け、芳佳の荷造りが終わるのを静に待っていた優人に、ミーナが声をかける。

「ミーナ、どうした？」

優人が用件を訊ねると、ミーナは申し訳なさそうに目を伏せてから答えた。

「ごめんなさい……」

「えっ？」

ミーナからの唐突な謝罪。何故彼女が謝るのか理解出来なかった優人は、すぐさま訊き返した。

「芳佳さんに甘い、つて言ったことよ。あの事が原因であなた達兄妹は喧嘩を……本当にごめんなさい」

ミーナは深々と頭を下げた。確かに優人は芳佳に甘い、それは彼女に限ったことで

はない。他の年少組に対しても割と甘々で、芳佳だけを特別扱いしているということはない。

プライベートで多々見られるシスコンぶりも、ルツキーニの面倒を見るシャーリーや、ハルトマンの世話を焼くバルクホルン、それにサーニヤを気にかけるエイラ等々。他の隊員達にも見られる親しい友人に対する振る舞いに近いもので、意図的に自由な空気の作られている501においては十分許容出来るものであり、問題にするようなことではない。しかし、自らの私情で作った規則が絡んでいたため、つい刺々しい言動を取ってしまった。

「頭を上げてくれよ。あの時は俺だって、悪かつ——」

自身の非を詫びようとする優人の唇に、ミーナはすつと立てた人差し指を押し当てる。ミーナがこのやり方で優人の言葉を止めたのは、これで二度目である。

「んっ……」

「ふっ……」

頬を軽く染めて自分を見る優人に、ミーナは優しく微笑み返した後、首を左右に振った。

「芳佳さんや美緒は自分のせいだと思っっているようだけど。あなたが負傷する遠因を作ったのは、紛れもなく私自身……」

「ミーナ……」

いつの間にか指は離され、自由になった優人の口から声が漏れる。

「そのことがあるから今回の件は大目に見るけど……」

「……えっ？」

「忘れたの？自分がやったことを……」

「あつ……」

ミーナに言われ、優人は間の抜けた声と共に自分がやらかしたことを思い出した。

「さ、坂本のストライカーユニットを使つての……無断出撃？」

「ええ、その通りよ」

ミーナが再び微笑む。今度の笑顔は先程のものとは違い、怒気を孕んでいた。優人の額から自然と冷や汗が流れて頬を伝う。

「次は自室禁固も覚悟しなさい」

「次、つて……501はもう解散じゃ——」

「あら？あなた自身、このままで終わらせるつもりは無いんでしょう？」

ミーナから意味深げに訊ねられ、優人は目を瞬かせた。

「バレてた？」

「と言うよりは同じことを考えていたわ」

「はははっ！なるほどな」

心を見透かされていたことに對し、優人は自嘲気味に笑うと、自分の鞆から一冊の本を取り出した。赤いハードカバーの小説本だ。

「借りっぱなしだった本、返すよ」

差し出された本を受け取ったミーナは、優人に三度微笑んだ。

「確かに……」

一言だけ言うと、ミーナは踵を返して去っていった。口元に苦笑を湛えた優人が彼女の後ろ姿を見つめっていると、荷造りを終えた芳佳が部屋から出てきた。

「お兄ちゃん」

「終わったか？」

「うん」

芳佳は小さく頷くと、まだ忘れ物があるかのような表情で室内を振り返る。自分が生かしていた部屋に無言で別れを告げる芳佳の頭を、優人はポンポンと軽く撫でた。

「行こうか？」

「……………うん」

芳佳は片付き、寂しくなった部屋をもう一度見渡してから、そつとドアを閉めた。



ウィッチーズを追い出したマロニーの指揮の元、既に基地はその様相を変えていた。滑走路へと続いているストライカーユニットの格納庫入口には、何本もの巨大なH鋼が無理矢理打ち込まれ、侵入不可となっている。

基地本部管制塔上部に存在する管制室には、最先端の電子機器が多数運び込まれ、ウオーロックの担当技術者や研究員、モニター及びリーダー要員が配置されている。

当基地の新たな司令官として一段高い位置に立つマロニーは、作戦準備中の部下達を険しい表情でじっと見据える。優人に殴られた頬は赤く腫れ上がっているため、ガーゼが貼られている。

「閣下、ウィッチーズ全員が当地より離れました」
「うむ」

外からの連絡を受けた兵士の報告にマロニーが頷くと、彼の傍らに立つ副官が口を開いた。

「すべて順調です」

「どこが順調なものか」

マロニーは、苛立ちを孕んだ口調で吐き捨てる。

「まったく、想定外のタイミングだ。こちらの戦力は、まだウォーロック1機しかない。表に出る時期ではなかったのだ」

「しかし、もう隠れているわけには——」

「そうとも」

副官の言葉で、マロニーの視線が僅かに下がる。

「元はと言えば、忌々しいあの扶桑の小娘！ あいつがネウロイと接触するようなことさえなければ、こんな時期に我々が動く必要等などなかったのだ！」

芳佳が「軍人にはあり得ない行動」を起こしたために、マロニーと彼の一派は連合軍は疎か、ブリタニア軍の上層部にも秘密裏に進めていた計画を前倒ししなければならなくなつた。

「ご心配なく、閣下」

一人の技術者がマロニーに声をかける。ウォーロックの開発責任者——石威紫郎だ。

「ガリアのネウロイなど、1機あれば十分。ウォーロックは戦力で劣り、量産も利かないウイツチやウイザードより遥かに優秀ですので……」

「結構だ、Dr.石威」

自信に満ち溢れた表情でウォーロックの性能を語る石威に、マロニーは満足気な笑みで返した。

「しかし、あの扶桑ウィッチを帰してもよろしかったのですか？」

自分達の手元を離れた芳佳の存在を危惧する副官に、余裕に満ちた表情で応じた。

「軍を離れ、ストライカーユニットを失ったウィッチーズなど、ただの小娘と青二才に過ぎん！ 恐れる必要などない！」

そう断言しながらも、彼には気掛かりなことが一つあった。501扶桑組の上官にして、自らの政敵でもある扶桑海軍中將——赤坂伊知郎だ。

おそらく赤坂は、ブリタニア軍や連合軍総司令に席を置く他のどの將軍達よりも早くマロニーの動きを掴んでいるはず。策略に長けた彼のこと、ウォーロックの作戦行動中に何らかの妨害工作を仕掛けてくるやもしれない。

(まあ、やつが動くよりも早く戦果を上げてしまえば、何の問題もないがな……)

焦りと不安を抑え込み、マロニーはウォーロックによるガリア制圧に己の意識を集中させた。



同時刻、人類連合軍西部方面総司令部——

「501を解散？」

デスクの椅子に腰掛けた赤坂は、副官から501やマロニーに関する報告を受けていた。報告内容を確認するように繰り返すと、副官は「はい」と頷いた。

「ガリア反攻作戦を控えたこの時期に？ 一体どういうことだね？」

「詳しいことまでは把握していませんが、宮藤芳佳軍曹が脱走した件を口実に、強引に解散させたようです」

「たかが小娘一人の脱走で、ずいぶんと大仰なことだ」

赤坂は呆れたように鼻を鳴らすと、煙草を一本取り出して口に咥えた。副官はライターを取り出し、火を点けながら報告を続ける。

「ウィッチーズの後任には、マロニー大將配下の第一強襲部隊、通称『ウォーロック』が当てられるとのことですよ」

「ウォーロック？……」

聞き慣れない部隊名に、赤坂は怪訝そうな顔をする。副官は、懐から写真を一枚取り出してデスクの上に置いた。写真には、これまた見慣れない形状をした航空機らしき兵器が写っている。

「これは？」

「ウォーロック、第一強襲部隊の主戦力と思われる新型機ですが、確認できた配備数は1機だけでした」

「部隊名と同名。それに、たった1機でエース級のウィッチ・ウィザード12名と取って代わるとは、性能に余程の自信があるということか……」

赤坂は、ウオーロックを撮影した写真をしげしげと見る。

「潜り込ませた部下の話では、ウオーロックは人型への変形や亜音速での飛行、さらにはネウロイを上回る威力のビームまで装備している模様です」

副官がウオーロックについて分かっていることを報告し終わると、赤坂は上目遣いに彼を見つめた。

赤坂の副官——西野中佐は、淡々と口に出しながらも人類にとつてオーバーテクノロジーとすら形容出来るウオーロックの性能に驚きを隠せないようだ。

「総司令部の将官達は今回の件について何と言っている？」

「はっ！西部方面総司令部の将軍達はもちろん、ブリタニア空軍のデッター大将やハリス大将からも501の解散やウオーロックについて説明を求める声が上がっているのですが、当のマロニー大将は——」

「撥ね除けたのだろうか？」

「ええ」

あまりに驕りたかぶったマロニーの対応に、西野は溜め息を吐いた。赤坂も軽く息を吐きながら身体を椅子の背もたれに預けた。

「ただチャーチル卿に対しては、『本日中にガリアを制圧して見せる』と豪語しているらしく……」

「戦果を上げ、ウォーロックの性能を見せつけた上で量産の支持を取り付けるつもりか……」

西野の報告が事実ならば、ウォーロックの性能は飛行脚を装備した航空歩兵の標準的な戦力を優に上回っている。

ガリア地域のネウロイ全滅が成功すれば、ウォーロックは確実に量産されるだろう。ウォーロック部隊を有するブリタニアは、連合軍内に確固たる地位を築き上げ、ゆくゆくは戦後の世界の軍事バランスで主導権を握る。

そうなった場合、ブリタニア軍の中心にいるのは間違いなく、ウォーロック開発の功労者であるマロニーだ。彼と指揮権を巡って対立しているデッターもハリスも他の將軍も、彼に逆らうことなど出来ない。実に不快極まる。

「それと、もう一つ。興味深い報告が宮藤優人大尉から」

「何かね？」

西野の口から出た宮藤優人という名に反応し、赤坂は身体を起こす。

「マロニー大将の元に石威紫郎氏がいるのを確認した、と……」

「……石威が？生きていたのか？」

急に語気を強めた赤坂が確かめるように訊くと、西野はさらに付け加えた。

「経緯は不明ですが……大尉によれば、石威はウォーロックの開發に携わっていたようです。さらにマロニー大將は、大尉の妹である宮藤芳佳の『ウォーロックとネウロイが同じ部屋にいるのを見た』という発言に対し、動搖を示していた、とのこと」

ウォーロック、ネウロイ、石威。この3つのキーワードによつて、赤坂はある仮説に辿り着いた。それが事実であつた場合、赤坂は既にマロニーの襟元を掴んだも同然だ。

「……………なるほどな。マロニーが慌てふためくにたる理由だ」

赤坂はほくそ笑むと、脇に置かれた灰皿に煙草を押し付けた。

「それと、宮藤大尉から長官へ幾つか要請が来ております」

そう言うのと西野は、ウォーロックの写真の隣に一枚のメモ用紙を置いた。用紙を覗き込んで優人からの注文を確認した赤坂は、すぐさま西野に命じる。

「大尉の注文通りの物を手配してやれ。それと、陸戦隊をいつでも動ける状態で待機させろ」

「はっ！」

西野は敬礼すると、はや歩きで部屋を後にした。

「……………楽しみだな」

自分以外は誰もいない執務室で、赤坂は愉快そうに呟いた。



約一時間後――

本来、ガリア反攻作戦の第一陣として攻撃に加わるはずだった扶桑皇国海軍の航空母艦『赤城』は、遣欧艦隊司令長官――赤坂伊知郎の命により急遽予定を変更。優人ら501の扶桑組及びペリーヌの4人を乗せて、扶桑への帰路についていた。

反攻作戦から外されたことに対する将兵達の反応は、不満を漏らす者や戦地から遠ざかったことにホッと胸を撫で下ろす者、3名のウィッチが自分達の艦に乗艦したことに欣喜雀躍する者など、様々である。

「……………」

赤城の艦上の人なつた4人は、甲板に出ていた。無言で外を眺める芳佳の視線の先には、次第に遠ざかっていくいく501基地があつた。

短い間ではあつたが、自分がいた場所。ウィッチーズという家族と暮らしていたもう一つの我が家。

「やっぱりブリタニア、ですわね」

芳佳と同じく基地を眺めていたペリーヌが感慨深げに呟く。

「まさか、ペリーヌまで扶桑に来てくれるとはな」

自分達についてくるというペリーヌに、坂本が言った。

「い、いえ！どうせ帰る国の無い身ですので、これを機に扶桑へ渡つてみるのも悪くないかと……」

ペリーヌの祖国——ガリアは、依然としてネウロイの占領下にある。

原隊に復帰するという道もあるが、彼女の原隊はである自由ガリア空軍602飛行隊は、ブリタニア空軍の指揮下にある。自分達を追い出した人間がトップに立つ軍に拘ることは、ガリア貴族令嬢としてのプライドが許さない。

坂本はペリーヌに微笑み掛けると、手すりを握つて基地をじつと見つめる芳佳と、彼女の隣に立つ優人の背中を視線を送った。

「……………ん？なんだ？」

優人が視線に気付き、坂本に振り返った。

「済まなかつたな優人、芳佳。私の我が儘でお前達兄妹をブリタニアに……いや、501に連れてきてきたというのに、こんな形で帰すことなるとは思わなかつた」

「なんだ急に……？」

唐突に坂本の口から出た謝罪の言葉。いつになく汐らしい彼女に、優人は怪訝そうに訊く。

「優人、考えればお前は……扶桑海軍の時から私の無茶に文句も言わずに付き合ってくれていたな」

「いや、文句は言ってたよ。お前が聞いてなかっただけで……」

優人がそう言うのと、坂本はいつものように「はっはっはっはっはっ！」と豪快に笑う。

「つまり私は、まったく成長していないということか……」

「なら俺も同じだよ。身体がでかくなっても、中身は子どものままさ」

と、自重気味に苦笑する優人。坂本は、次に芳佳を見る。

「芳佳、軍人になるのを……戦争を嫌がっていたお前を、私は——」

「そんなんっ！止めてください！」

坂本の言葉を遮った芳佳は、もう一度基地の方に目をやった。

「ホント言うのと、こうやって帰ることやウィッチーズのみんなの役に立てなかったのは、とても悲しいです……でも私、あの基地にいたことは全然後悔していません。あそこであったこと、出会った人……私にとって、とても大切な時間でした……」

穏やかな表情で語る芳佳。もう泣くのは止めよう、扶桑に帰ったら他に出来ることを探そう。そう決意した彼女の顔は、とても晴れやかだった。

「……そうか」

教え子の成長を実感し、坂本は満足気な表情を浮かべる。

ペリーヌは、普段よりもやや大人びた芳佳の言動に一瞬目を丸くするも、すぐに優しい眼差しを向ける。

（ちやんと、成長してゐるんだな……）

横須賀で8年ぶりに再会した時に比べて、芳佳は遥かに成長している。優人は嬉しく思う反面、妹の笑顔に照れ臭いものを感じ、感情を紛らわそうと芳佳の額を人差し指で軽く突いた。

「あうっ……」

「ちよつと生意気だな」

「む………せつかく良いこと言ったのに……」

芳佳は両手で額を押さえながら意地悪な兄を不満げに睨み、対する優人は少々お冠な妹にニツと笑いかける。

芳佳がブリタニアに来て以来、いつの間にか501における日常の一部となっていた宮藤兄妹のやり取りである。

◇ ◇ ◇

基地最寄りのバス停より乗車し、バスでロンドンへ向かっていたミーナ達カールスラ

ント組は、途中にある小さなバス停で下車していた。

使い魔の耳と尻尾を出しているミーナの左隣には、移動の疲れでグツタリとしているハルトマン。右隣には、チラチラと周囲の様子を伺っているバルクホルンが立っている。

「やつと監視もなくなったわ」

自身の固有魔法『空間把握』を使い、マロニーの部下による尾行の有無を確認していたミーナは、やれやれと言った感じで息を吐く。

「このままカールスラントに戻って、祖国奪還の為に戦った方が良かったかも……」

「……………」

「……へっ?」

腰に手を当てたバルクホルンがそう言うと、ミーナとハルトマンがキョトンとする。二人から感じ取った微妙な空気に、バルクホルンは振り返る。

「何だ?」

「トウルデーが戻ろう、って言い出したんじゃない?」

「いつ?!それは、あいつら兄妹に……借りがあるから……」

何故か頬を赤らめたバルクホルンは、視線を逸らしながら蚊の鳴くような声で答える。その可愛らしい仕草に、ミーナは自然と笑みを零した。

「そうだね、たつぷりとね」

ハルトマンはたつぷりの部分を強調した後、悪戯っぽく笑いながら言葉を付け加える。

「そ・れ・に、トゥルーデにとって二人は、未来の旦那様と義妹だもんねえ♪」

「なっ!?ち、ちちちちちち!ちがつ!ちがつ!ち、違うっ!私は別に!そんなことはっ!」

ハルトマンに茶化され、バルクホルンは面白いくらい分かりやすく動揺する。

「と、とにかくだ!芳佳を失意のままに帰してしまっているのか!?優人だって、きつと兄としての責任を感じているに違いない!カールスラント軍人が、そのようなことではっ!」

基地へ引き返す理由をカールスラント的演説口調で説明するバルクホルンの唇に、ミーナがそつと人差し指を押し当て、口上を止める。

「はいはい、気持ちには十分よ。それに芳佳さんの言ってたことも気になってるの」「ネウロイと友達になる、ってやつか?」

少しズレた発言をするハルトマンに、ミーナは首を振った。

「いいえ、ウォーロックがネウロイと接触してた、って話。芳佳さんが、あの話をした時のマロニー大将の焦りは、何か秘密があるんじゃないかしら?」

「報告義務違反でも出れば、こっちが攻めに回るきつかけになる」

バルクホルンがミーナの意図を理解し、彼女の言葉を継いだ。

「そういうこと」

「ああ」

御名答、とウインクするミーナに、バルクホルンは強く頷く。

「問題は、ここからどうやって……」

「ああっ！」

ミーナが右の人差し指を顎に当て、基地へ戻る方法を思案していると、突然ハルトマンが声を上げた。彼女の視線の先には一台のトラックが見える。

「そのこのトラック〜！」

ハルトマンは道路に出ると、腰を突き出しながら右手を頭の後ろへ回し、セクシーポーズを決める。

「ハア〜イ♪」

ウインクも付け足し、美少女の魅力全開でトラックをヒッチハイクする。しかし、トラックは何事も無かったかのように、土煙を上げて通り過ぎていった。

「コリア〜！このセクシーギャルを無視すんなあ〜っ！」

女としてのプライドが傷付いたのか、普段大らかなハルトマンが、去っていくトラック

クに向かつて怒鳴る。

(そう言えば……)

何かを思い出したミーナが、自身の荷物から一冊の本を取り出した。それは基地を発売前に優人から返却された本だった。パラパラとページをめくってみると、一枚の小さな紙が見つかった。開いてみると、どこかの住所と誰かとの待ち合わせの場所や時刻が書かれていた。

「何だそれは？」

「ふふ、徒歩で基地へ帰らずに済みそうよ」

バルクホルンが眉を寄せて訊ねると、ミーナはニツコリ笑って答えた。

それからしばらくして、3人の目の前に先程とは別のトラックが停まった。

第42話「ピースの欠けた完全体 中編」

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の航空母艦『赤城』は、急遽ガリア反攻作戦から外され、自国のウィッチ3名並びに自由ガリア空軍に所属するウィッチ1名共に帰国することとなった。

護衛隊の生き残りである陽炎型駆逐艦『雪風』及び『天津風』を伴った赤城は、経由地の喜望峰を目指してドーバー海峡を航行していた。

「んっ……」

宮藤兄妹に充てがわれた赤城艦内の居室では、寝台に腰を下ろした優人が、ゴクゴクと喉を鳴らしながらミネラルウォーターを瓶を叩いていた。

寝台の上には、それぞれ種類の違う錠剤が入った薬瓶が二つほど置かれていた。

「大尉」

小気味良いノック音が居室内で2、3回響いた後に、品のある澄んだ声が優人の耳朶を打つ。ミネラルウォーターで適量の錠剤を喉奥に流し終えてから、声のした方へ目を向ける。

「ペリーヌか」

ドアが開きつ放しになっている居室の入口にペリーヌが立っていた。両手を腰に当て、じつと優人を見据えている。

「何か用か？」

「……痛みますの？」

優人の質問を無視したペリーヌは、真剣な面持ちで逆に問い掛ける。

「ん？」

「その薬瓶……中身は痛み止めですわよね？」

片方の薬瓶に視線を移したペリーヌは重ねて訊ねる。優人が飲んでいた錠剤は、ブリタニア国内で出回っている強め鎮痛剤。芳佳の治療魔法でも完全には治しきれなかった傷が痛み、少しでも和らげようと現地で手に入れた鎮痛剤を飲んでいたので。

ペリーヌ本人は使ったことがない。しかし、ラベルは統合戦闘航空団の公用語でもあるブリタニア語で書かれているため、読めばどんな薬か理解出来た。しかし、もう片方の薬瓶はラベルの文字が扶桑語で書かれているため、ペリーヌには何か分からなかった。

「大方、私達に心配かけまいと、こっそりと服用されていたのでしょうか？」

「バレたか……こんな近くに名探偵がいるとはな……」

「この程度、探偵で無くとも分かれますわ」

ペリーヌは目を伏せ、呆れたようにフウと息を吐いた。

「このこと、芳佳や坂本少佐には黙っていてくれないか?」

優人は顔の前で拝み手を作り、軽く頭を下げてペリーヌに頼み込む。

芳佳や坂本は、優人が怪我をしたのは自分のせいだと思っているようだ。しかし、優人に言わせれば、あの負傷は自らのポカが招いたことであり、他の誰にも責任はない。床に伏せていた際に、二人には特に気苦労をかけてしまっていた。優人としては、これ以上余計な心配をかけたくはない。

「かしこまりましたわ」

と、ペリーヌは恭しく一礼する。優人は寝台から腰を上げると、彼女へ近付いた。

「恩に着るよ」

優人はそう言うと、普段芳佳にやっている自然な所作でペリーヌの頭を撫でた。突然のことに驚いたペリーヌは、短い悲鳴を上げながら身体をビクつかせる。

「ひやつ!」

「あつ……悪いっ!」

優人は咄嗟に手を引っ込めた。いつもの芳佳を撫でている癖が出て、ついやってしまった。

「あ……いえ、少し驚いてしまっただけで、その……別に嫌と言うわけでは、ありません

わ……ですから」

頬を軽く染めたペリーヌは、視線を優人から僅かに逸らして照れ臭そうに告げた。

「な、撫でて下さいまし……」お兄様」

知り合つて以来、初めて見たであろう甘えん坊なペリーヌと、彼女の口から久しぶりに聞いた「お兄様」という呼び名に優人は一瞬キョトンとするも、すぐに優しく微笑み返した。

「まだ、そう呼んでくれるんだな……」

「い、妹のように思っていると仰つたのはそちらです！ 私はまだ、合わせたま——」

そこでペリーヌの唇が動きを止める。何故なら、優人の右手が再び彼女の美しいブロンドに添えられていたからだ。

「ありがとう、嬉しいよ」

「……礼を言われるようなことではありませんわ。お兄様」

薄暗い居室内で金色に輝いているペリーヌの長い髪を、優人の右手が優しく梳く。髪を痛めないようにと気を遣う繊細な手つきが、ペリーヌの胸を幸福で満たしていった。

（こんなに素敵な方がお兄様だなんて……本当に芳佳さんが羨ましいわ……）

あまりの心地好さに目を閉じるペリーヌの顔を、優人は手を動かしたまま、じつと覗き込んだ。

「コンタクトも悪くなかったけど、やっぱり眼鏡を掛けたペリーヌも知的で素敵だよ」

「あら？眼鏡のない私には、知性を感じられないと仰りたいのかしら？」

「あ、いや。別にそういうわけじゃ——」

「フフフ、冗談ですよ？」

取り乱した優人の姿に、ペリーヌは笑みを零した。二人のこのやり取りは、ペリーヌが坂本より「優人を連れて来い」との命を受けたことを思い出すまで続いた。

◇ ◇ ◇

同時刻、旧501基地本部管制塔——

「ウォーロック0号機、準備整いました」

管制室に配備されたモニター要員の一人から報告が上がる。

担当の技術者達によって、ベストコンディションに整備されたウォーロック試作0号機は、基地滑走路にてエンジンを始動しつつ、出撃命令の命を待つ。

「これより、ガリア地方制圧に向かわせます」

「うむ」

マロニーが頷くと、副官が彼に代わって出撃命令下した。

「ウォーロック0号機、発進せよ！」

命令を受けたウォーロックは、スラスターを吹かして滑走し、滑走路の先端から急角度で飛び立つ。空に上がったウォーロックはすぐさま飛行形態に変形し、目標地点であるガリアへ向けて飛翔した。

「飛行形態に変形完了！ガリアへの軌道変更確認！すでに亜音速に到達しました！」

モニター要員達より、次々と報告が上がる。順調な滑り出しに、マロニーは口元を綻ばせた。

「ふんっ……どうだ？生意気なあのおイツチ共やワイザードの青二才とはまったく違っ！」

「ウォーロックこそ、我々の研究成果にして最強の兵器です！」

石威がマロニーの言葉を継いだ。石威も笑みを浮かべているが、マロニーのそれとは違い、粘り気のある不気味なものだった。

マロニー本人が、心中で彼のことをどう思っているかは分からない。しかし、副官の方は石威紫郎という男に対し、内心不信感を抱いていた。特に笑顔に関しては、思わず目を背けたくなるほどの生理的嫌悪感を覚えている。

おそらくマロニーと石威の間には、利害関係の一致はあっても信頼という言葉は存分していないことだろう。

「閣下」

外部との連絡を担当する通信兵が、マロニーに振り返った。

「カールスラント空軍のゲーリング元帥、それにリベリオン陸軍のアイゼンハワー元帥から通信が——」

「後にしろ！我々は現在、作戦行動中だ！」

「よろしいのですか!?!」

マロニーの対応を見た副官が、不安げな表情で訊ねる。

「ガリアをネウロイから解放すれば、うるさい連中も黙る！」

そう嘯くマロニーが、その瞳で見据えているのは目先のガリア攻略戦でもなければ、本大戦における人類側の勝利でもなかった。

ネウロイを殲滅後、世界のイニシアチブを握った祖国の——自身が思い描く、未来のブリタニアの姿だった。

◇ ◇ ◇

その頃——

トラックの運転手の御厚意によって、ミーナ達3人は基地から程近い崖の上にある廃

屋まで戻ってきていた。

屋内は埃や瓦礫にまみれ、床は所々木片が剥がれたり、雑草が生えたりしている。崩れてレンガが露出した壁や天井には穴がいくつか空いていて、一際大きな穴からは少し前まで彼女らがいいた旧501基地がはつきり見えていた。

「先程の運転手、何者だ？」

不自然なほどタイミング良く現れ、何も言わずに自分を乗せたトラックの運転手に対する疑問をバルクホルンが呟く。すると、ハルトマンがセクシーポーズを決めながら答えた。

「きつと私のセクシーな魅力に悩殺さ——」

「優人が手配してくれた扶桑海軍のトラックよ」

と、ミーナ。言葉を遮られた上に、結果的に自身の考えまで否定されたような気分のハルトマンは唇を尖らせて、ブー垂れる。

「優人が？ どういうことだ？」

「ふふ……親のコネも臆することなく利用する。優人つて、意外と政治家向きかもしれないわね」

怪訝そうに眉を寄せるバルクホルンにそれだけ言うと、ミーナは壁の大穴へ歩み寄った。

穴の傍に着弾観測用のペリスコープが立てかけられていた。バルクホルンが「気の利いた物あるな」と基地の方に向けてピントを合わせたまさにその瞬間、基地から飛び立って行くウオーロックの機影を捉えた。

「さっそく、ガリア制圧作戦か……」

「大忙しだね」

「軍の上層部に、ウオーロックの強さを認めさせたいのよ。そして、量産の支持を取りつきたい」

バルクホルンとハルトマンが順に呟くと、ミーナが自身の推測を述べる。

「それにしても、ウオーロックが1機しかないのに実戦なんて……」

「戦果を上げて隠したいことがあるんじゃないのかあ？」

と、ハルトマンがでマロニー達がいる基地をジト目で見据える。

「奴らの化けの皮を剥がすチャンスだな」

ニヤリと笑みを浮かべるバルクホルンの横顔を見たハルトマンは、「ニツシツシツシツ」と何故か楽しそうに笑っている。

「何だ？」

笑い声に気が付いたバルクホルンは、訝しげにハルトマンを振り返る。

「やる気だねえ、愛しの宮藤兄妹の為？」

「なっ!?……ばっ!……○☆#△◎#◇ッ!」

茶化されたバルクホルンは、動揺のあまり金魚のように口をパクパク動かしした後、言葉にならない声を上げる。明らかな凶星だ。

おそらくハルトマンは、当分宮藤兄妹のことをネタにバルクホルンを弄り倒すつもりだろう。

「ふふふ、監視を続けましょう」

二人のやり取りを微笑ましそうに見ていたミーナが告げると、バルクホルンは「あ、ああ」と歯切れの悪い口調で応じた。



同時刻、とある民間飛行場――

旧501基地から程近い場所にある民間飛行場。その滑走路に航空機が1機待機していた。ブリタニアのシルフィー社が開発した三座複葉の雷撃機『ソードフィッシュ』だ。機体にはブリタニア語で『GLAMOROUS SHIRLE』と書かれている。

言うまでもなく当機体の持ち主は、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』一のグラマラスボディを誇るリベリオンウィッチ――シャーロット・E・イエーガー

大尉である。

シャーリーは、近隣基地で廃棄となった機体をタダ同然で貰い受け、連絡機という名目で私物化。シャーリーが自ら飛行場の整備士と共にレストアしたものである。魚雷搭載機構をオミット、代わりに900リットルの増加燃料タンクを設置し、航続距離を伸ばしている。ちなみに、優人もたまにであるが機体の整備を手伝わされていた。

「ねえねえ、シャーリー!」

操縦席のシャーリーがエンジンを始動させると、プロペラの回転音に混じって後部座席に座るルツキーニの声が聞こえてきた。

カールスラント組と扶桑組（十ペリーヌ）が、それぞれ陸路と海路を使っていたのに対し、飛行帽を被ってソードフィッシュに搭乗する二人は空を飛んで帰るつもりである。まずルツキーニをロマーニャまで送り、自身の原隊の居場所がわからないシャーリーはその後で大西洋を越えてリベリオン本国へ向かう予定だ。

「ん〜?」

と、ルツキーニへ振り返るシャーリー。

「シャーリーって……優人のこと好きなの?」

「はあ?なんだ急に?」

思いがけない質問に、シャーリーは怪訝そうな顔をする。

「だつてさあ……アタシがお昼寝してる時は優人と一緒にいるんでしょ？」

「正しくはバルクホルンも入れて三人だよ。まあ、優人と二人きりの時もあつたけど……」

補足しつつ、シャーリーは501基地での日常を思い出していた。宮藤兄妹に助けられて以来、柔らかくなったバルクホルンとシャーリー、優人の三人でつるむことが多くなった。

性格が真逆なシャーリーとバルクホルン、そして二人の間を取ったような性格の優人。三人の関係は同じ部隊の同僚というよりは、ハイスクールのクラスメイトに近い。

もし同じ学校に通っていたら、昼休みは互いの机をくつつけて昼食を取ったり、学校帰りに寄り道をしたり、一緒に試験勉強をすることもあつたかもしれない。

「じゃあ好きなの？」

「ん……好きって言えば好きだけど、好きにもいろいろあるからなあ。例えば友達としてとか、家族としてとか……」

シャーリー個人的としては、優人のことを中々にいい男だと思つているし、友人としても気に入っている。しかし、恋愛対象として見ていたのか、と問われると首を縦にも横にも振れないというのが正直なところだ。

人間というのは、意外と自分のことを分かつていないもの。感情面に関しては、それ

が特に顕著だ。

優人に他の仲間達と違った何かを感じたことはあるが、伝え聞いていた恋心とマッチしないため、シャーリーは男友達に対する感情だと思っっている。

「お？ウオーロックだ」

シャーリーが答えに悩んでいると、ガリアへ向けて飛んでいくウオーロックの機影が見えた。

「あの音好きじゃないな……」

耳に届いたウオーロックのエンジンに、ルツキーニは不満を漏らした。彼女としては、聞き慣れた自身のチェンタウロやシャーリーのP-51Dに搭載されているマーリンエンジン音の方が断然好みである。

「もう出撃かよ」

と、呆れ目でウオーロックを見据えるシャーリー。

「イッ！ やられちゃえ！」

自分達を基地から追い出し、大切な友達である芳佳を悲しませた連中が運用する兵器に対し、ルツキーニは敵意と嫌悪感を露にする。

「おいおい」

シャーリーは苦笑すると、ソードフィッシュを滑走させ、ゆつくりと離陸していった。



同時刻、赤城甲板――

「……あつ!？」

優人とペリーヌは甲板まで上がり、芳佳や坂本と合流していた。優人が坂本に自分を呼び出した用件を訊ねようとしたその時、芳佳が基地の方から接近してくる機影に気付いた。ウオーロックだ。

ウオーロックは赤城の直上を高速で通過すると、そのままガリア上空にあるネウロイの巣へ向かっていった。

「左デツキヘー！」

坂本に促され、一同は急ぎ左舷へと移動する。

「ガリアへか?……」

「さっそくですわね」

と、順に咭く坂本とペリーヌ。巣の真下まで到達したウオーロックを出迎えたのは、黒雲の渦の中心より放たれた多数のビームだった。芳佳の時とは違い、ウオーロックを歓迎するつもりはないらしい。

「ネウロイの巢が……」

「大分近付いて来ているな」

出現して以来、ガリア北東から動くことのなかったネウロイの巢が、ブリタニアへ向かって少しずつ、だが確実に近付いていた。

既にドーバー海峡からでも全体が見える位置まで来ているため、巢の下部に飛び交うビームの光は赤城の甲板からも視認できる。

やがて巢の中から、ビームを発射していた大型ネウロイが出現し、全砲門よりウォーロックに向けて一斉砲撃を行う。ウォーロックは雨のようなビーム攻撃を難なく回避すると、同じくビームを使用して報復の一撃を見舞う。高出力ビームの直撃を受けたネウロイは、あっさりと撃破される。

「一撃でネウロイを!?!」

魔眼を開いて、戦闘を見ていた坂本は驚きのあまり声を上げた。

「あ……」

「な、何ていう威力ですか?」

遠目でネウロイが爆散する様を見ていた芳佳とペリーヌも固唾を呑む。

ウォーロックに搭載されたビームの威力は、彼女達航空歩兵が使用する火器のそれとは比べものにならない。

「……………」

一方、優人は特に驚いた様子も見せず、泰然と腕を組んで戦闘の行く末を見つめていた。

「おかしい……何故、ウオーロックはビーム兵器を使えるんだ？」

坂本が疑問を口にする。ネウロイが当たり前のように使っているビームだが、今の人類側の技術で開発することは到底不可能だ。

ビーム兵器だけではない。従来の航空機やストライカーユニットを遥かに上回る機動力、パイロットを必要としない無線式の遠隔操作、人型から飛行形態への変形機構。どれもこれも、人類の手に余るオーバーテクノロジーだ。

「あつー！」

何かを思い出した芳佳が、短く声を上げる。

「どうした、芳佳？」

「私、見たんです。ネウロイが見せてくれたんです」

坂本に問われ、芳佳はネウロイの巢に招かれた時の記憶を辿りながら答える。

「ウオーロックは、ネウロイと会っていたんです！」

「ウオーロックがネウロイと接触していただど!？」

芳佳の発言に驚きつつも、坂本は確認するように繰り返す。

(やっぱり、そうか……)

芳佳の話を聞いて、優人は表情を険しくした。石威と再開した時から優人の中に存在していた疑惑が確信へと変わっていた。

「ありませんわ！ネウロイは敵ですよ！」

ペリーヌが、間髪入れずに否定する。カールスラント組と同じく故郷や家族を奪われた彼女は、501の中ではネウロイ対する敵愾心が強い方だ。

「それに、ネウロイの技術を手に入れたのなら、私達にも報告があるはずですよ」
「でも……」

ペリーヌの言い分は尤もだ。しかし、人型ネウロイの兄妹(?)は、芳佳を巢に招き入れてまでウォーロックに関係する映像を観せていた。あのスクリーンに映っていた内容に虚偽があるとは、芳佳にはどうしても思えなかった。

「……本来ならばあり得ない。だが、辻褄は合う」

難しい顔で思案する坂本の呟きに、ペリーヌは「え？」と聞き返す。次に坂本は、芳佳の隣に立っている優人に目を向けた。

「優人、話してくれ」

「……何のことだ？」

「惚けるな！」

澄ました表情でシラを切る優人に、坂本はやや語勢を強める。

「何年の付き合いだと思っている。最初にウォーロックや石威を見た時のあの目、あの反応！何か知っているのだろう！」

「えっ……お兄ちゃん、どういうことなの？」

坂本に続き、戸惑いと少しの不安を瞳に湛えた芳佳が、問いかけるように優人を見上げた。

親友と妹に二人がかりで問い質されてしまい、優人は誤魔化しきれないと悟る。深い溜め息を一つ吐くと、おもむろに口を開いた。

「分かった……出来れば、居室の方で——」

「——ッ!? あれは!?!」

優人の言葉を遮るように、突如ペリーヌがを叫んだ。巢の方で何か動きがあったらしい。彼女の声にハツとなった3人は、即座に巢へと視線を戻した。

「えっ!?!……」

芳佳は言葉を失った。巢から、さらなるネウロイが出現していたのだ。それも1機や2機ではない。先程、ウォーロックに撃破された個体と同型、同サイズのネウロイが、空を覆うほど大量に現れたのだ。

「おいおい……何の冗談だ!?!」

尚も増え続けるネウロイ群、絶望的な光景に優人は冷や汗を流した。

既にネウロイの数は、駐留している連合軍の総戦力を軽く上回る程に、ブリタニアを焼き払ってお釣りがくる程にまで膨れ上がっていた。

「何が……一体何が起きているのです!？」

「おかしい……ネウロイの数が半端じゃない!」

あまりの事態にペリーヌはもちろん、魔眼による観測を再開していた坂本までもが動揺を通り越して戦慄した。

「ああ……」

巢の下部で蠢くネウロイの大部に、言い知れぬ恐怖を感じた芳佳は身を震わせる。

脅えた様子の子の妹に気付いた優人は、巢とネウロイ群を凝視したまま芳佳を腕の中へ抱き寄せる。

(いやな予感の中したかも、だな……)

最初にウオーロックを見て以来、一向に治まる気配のない優人の胸騒ぎが、現在最高潮に達していた。



約1分程前、旧501基地本部管制塔――

ほんの僅かに時間を遡った基地の管制塔では、レーダー要員がネウロイ撃破の報告を上げていた

「ウォーロック0号機、ネウロイを撃破しました」

「はははははっ！見ろ！最早、我々の力はネウロイを越えたのだ！」

報告を受けるなり、マロニーは歓喜の声を上げた。初陣で300m級の大型ネウロイをいとも容易く撃破したウォーロックの性能は、期待以上のものだった。

（当然だ……ウォーロックは、私の技術者人生における最高傑作。宮藤のストライカーユニットなど、子どもの玩具だ）

隣に立つ石威もまた勝ち誇った笑みを浮かべている。彼は確信していた。

今日この時を境に、対ネウロイ戦における主力は宮藤理論を採用したストライカーユニットやそれを駆るウィッチ・ウィザードではなく、自らが生み出したウォーロックとなったのだと。

司令官と開発主任が有頂天になっていると、下の方から兵達の喧騒が聞こえてきた。二人より早くそのことに気付いた副官が問い掛けた。

「どうした？何が起きている!？」

「ネウロイが2機出現しました！いえ、3機です！」

「何っ!？」

レーダー要員が叫び返すと、副官は驚愕の声を上げた。

「構わん！殲滅しろ！」

すぐさまマロニーが指示を出す。ウォーロックは命令に従い、ビームを放って新たに現れた3機のネウロイを撃破する。しかし、それで終わりではなかった。さらに複数のネウロイが出現する。

「ネウロイの数、8！9！」

レーダー要員が、状況報告を続ける。やがてネウロイの数は、ウォーロック単機では応戦不可能なほどまで増大していった。

「閣下！ウォーロックの処理能力は、限界です。コアコントロールシステムの稼働を！」
石威がマロニーに進言するも、研究員の一人がすぐさま異を唱える。

「しかし、コントロールするには、共鳴させるコアを持ったウォーロックが5機以上必要です！」

「短時間稼働に留めておけば、理論上問題はない！何のために膨大な時間をかけてコアの出力を調整したと思っている！」

石威が研究員に怒鳴り返した直後、ジリリりと管制室内に警報が鳴り響いた。

「どうした!？」

「コアコントロールシステムが、勝手に動いています！ウォーロック自らが、コアコントロールシステムを稼働させたようです」

システム管制官を務める士官が、マロニーに叫び返した。

「何っ!？」

「そんなバカな！」

予期せぬ事態にマロニーや石威はもちろん、他の将兵や研究員達も当惑を隠せなかった。

「ウォーロックのコアコントロールシステム、正常に稼働しています！」

「すべてのネウロイを支配下に置きました。予想以上の成果です！」

システム管制官とモニター要員が順に報告する。問題がないことが確認出来ると、マロニーはホッと口元を弛ませる。

一方、石威は未だに頭を抱えていた。問題が確認されていないとはいえ、ウォーロックがこちらからのコントロールではなく、自らの意志でコアコントロールシステムを稼働させたことが不安で仕方ないのだ。

（そんな……まさか……いや、違う！ウォーロックは完璧だ！イリスの時のような失態は起きない！起きるはずがない！）

必死になって頭の中にある不安要素を振り払おうとする石威を余所に、ウォーロック

は支配下に置いたネウロイ群に命令を送った。



「バカな！ネウロイがネウロイを攻撃している！」

魔眼を使つて赤城の甲板から状況を見ていた坂本が、驚愕のあまり声を上げる。

巢の真下でホバリングするウォーロックを取り囲むように周辺を飛行していたネウロイの大群が、突如互いに向けてビームを放つたのだ。ネウロイは次々と消滅し、ガリアに破片の雨を降らせる。

「そんな!? 同士討ち!?!」

「まさか！ウォーロックがネウロイを操っているのか!?!」

「そんなことつて……」

坂本も、彼女の推測を聞いたペリーヌも信じられない、といった顔をする。

ウォーロックにネウロイを操るシステムが搭載されていること事実だ。しかし、よく見ると、ウォーロックも支配下に置いているはずのネウロイから攻撃を受けていた。

無論やられっぱなしというわけではなく、ビームが直撃する度に反撃するのだが、その様子はまるでウォーロックがネウロイに混じり、サバイバル戦で群れの——巢の新し

いリーダーを決めようとしているかのようだった。

「何が……起きているの?」

「……………」

優人はウォーロックとネウロイの大乱戦に目を向けたまま、小刻みに震える妹の身体を強く抱き締めていた。

◇ ◇ ◇

旧501基地本部管制室のモニターには、ウォーロックと出現した多数ネウロイを示すマーカーが表示されていた。

同士討ちによって多数映し出されていたネウロイを示す赤いマーカーは急速に消えていき、やがてウォーロックのマーカーのみが残った。

「ネウロイを殲滅しました!」

モニター要員の報告と共に、勝利を確信した将兵達の歓声上がる。しかし、それも長くは続かなかった。

「……………なっ!?!」

ふと管制官が声を上げる。

「どうした!？」

「いえ、それが……」

副官が訊くと、管制官は躊躇いがちに答えた。

「こちらの制御が遮断されました！」

第43話「ピースの欠けた完全体 後編」

ネウロイ同士の共食いと形容しても差し支えない凄惨な戦闘が終わりを迎えた。破壊されたネウロイの破片がキラキラとガラスのように輝いてガリアの地に降り注ぐ。

勝利の立役者であるウォーロックは基地へ帰投する様子も見せず、依然として巣の真下に佇んでいる。

「終わったようだ。ウォーロックの勝利だ……」

沈黙続けたまま微動だにしないウォーロックを遠望に見据え、坂本は呆然と呟いた。「でも……どうしてネウロイ同士が……」

「ああ、確かに攻撃し合っていた」

芳佳が口に出した疑問を継ぐようにして、坂本が言葉が続ける。十中八九ウォーロックの仕業だろう。何故そんな真似が出来たのか、と一同は思案する。

その時だった。無機質な銀色に塗装されたウォーロックの装甲が、突如禍々しい漆黒へと変貌した。黒地に浮かぶ六角の図形、妖しく灯った赤く不気味な光が頭部から漏れる。

姿を変えたウォーロックは、航空機のエンジン音とは異なる、ネウロイの唸り声に近

い雄叫びを上げると、同時に動き始めた。進行方向に浮かんでいるのは、優人達が乗っている赤城だ。

「帰って来ますわ!」

戦場から引き返してくるウォーロックを見て、ペリーヌが呟いた。

「ネウロイと交戦していた機体がこちらに向かっています」

艦橋では、同じくウォーロックの接近に気付いた赤城の副官——樽宮敬喜中佐が、艦長の杉田淳三郎大佐に報告していた。

「味方なのか?」

遣欧艦隊の面々はウォーロックについて何の報告も受けていない。見慣れぬ形状をした未知の新兵器。杉田はウォーロックを訝しげな眼差しで見据える。

低空飛行で遣欧艦隊に接近したウォーロックは、万歳のポーズを取るように両腕を大きく広げ、ビームを放った。

ビームは進路上の海面を風ぎ払うように抉ると、着弾の爆音や衝撃と共に、大波に似た水柱を立てる。それはまるで、艦隊の行く手を阻む巨大な壁にも見えた。

「きゃあつ!?!」

「芳佳っ!」

「ペリーヌ!」

衝撃で揺れる赤城の甲板。悲鳴を上げて倒れかかった芳佳とペリーヌを、それぞれ優人と坂本が咄嗟に抱き留める。

「ウォーロックが私達を!?!」

坂本に支えられたペリーヌが信じられない、といった表情でウォーロックを見上げる。

黒々とした装甲、ネウロイに酷似した唸り声。直上よりビームを撃ち続けるウォーロックは、まるでネウロイのようだった。

「対空戦闘用意!」

「対空戦闘!」

杉田が命じ、樽宮が復唱する。二人の号令の元、赤城及び僚艦の天津風、雪風はすぐさま戦闘態勢に移行した。

「撃ち方あ、始めえ!」

赤城に搭載されている6基12門の12cm連装対空砲と28門の25mm対空機銃が、上空のウォーロック目掛けて一齐に火を吹く。二隻の陽炎型駆逐艦も装備された25mm3連装機銃や連装機銃で応戦、ウォーロックに集中放火を浴びせる。しかし、それら全ての砲弾もウォーロックの展開するシールドの前ではパチンコ玉も同然、
こごとごとく弾かれてしまう。

反攻作戦から外された赤城には、艦上航空歩兵はおろか艦上戦闘機すら搭載されていない。そんな状態で火力、機動力、防御力等、あらゆる面でエース級の航空歩兵や大型ネウロイを遥かに凌駕しているウォーロックを相手取るのは、無謀極まりない。

戦闘が始まって間もなく、天津風がビームの直撃を受け、大破・炎上する。あろうことか味方であるはずのブリタニア空軍が運用する新兵器の——ウォーロックの攻撃によつて、扶桑海軍の駆逐艦は海の藻屑と化したのだ。

次にウォーロックは、旗艦である赤城に向けてビームを放つ。至近弾。赤城の船体が大きく揺れ、乗員達は咄嗟に近くの物に掴まる。

（くそっ……嫌な予感が当たった！）

優人は奥歯を噛み締めると、ウォーロックを睨み付けた。

「坂本、芳佳を頼む！」

「優人？」

坂本に向かって叫ぶと、優人は返事を待たずに背を向けて走り出した。

「お兄ちゃん!?どこ行くの!!お兄ちゃ……きやあつ！」

走り去っていく兄。慌てて追い掛けよう芳佳を阻むように、赤城船体が激しく揺れた。



同時刻、旧501基地――

「扶桑海軍遣欧艦隊が、ウォーロックの攻撃を受けています！」

「なにっ!？」

観測員の報告に、マロニーは己の耳を疑う。コンソールの前でウォーロックの制御を担当していた士官も、振り返って叫んだ。

「ウォーロック、制御不能!暴走しています!」

突如制御から外れたウォーロックによる同士討ちという予期せぬ事態、基地本部管制塔内は喧騒に包まれた。

「バカな!ありえん!」

自身が持てる技術を全て注ぎ込んで開発した兵器の暴走、元から顔色の良くない石威はさらに青ざめる。マロニーに至っては、言葉を失ったまま立ち尽くしていた。

「閣下!至急、ウォーロックの停止を!」

想定外の事態に茫然とする司令官に対し、副官が進言する。すると、意識が憤然と声を荒げた。

「――っ!? 貴様、何を言い出す!? 貴重な0号機を海の底へ沈める気か!? 私がウォーロッ

クの開発にどれだけの——」

「閣下！味方を攻撃する事態となっているのです！どうかご決断を！」

自分に食って掛かる石威を無視し、副官はウォーロックの停止を強く具申する。

扶桑の艦がどうなるかと知ったことではない。しかし、マロニー自ら開発を命じ、運用の陣頭指揮を取った兵器が暴走して他国の艦を攻撃したとあっては、自身の失脚に繋がりがねない。

「くっ……やむを得ん……」

「そんな……!?!」

マロニーが苦渋の決断を下す。石威はガクツと肩を落とした。気落ちする石威を他所に、副官がマロニーに代わって命令を下した。

「ウォーロック強制停止システム、稼働準備！」

「稼働準備！」

兵達^がが復唱すると、すぐにウォーロックを強制停止させる作業が開始された。

「ウォーロック強制停止システム、稼働！」

「……強制停止！」

マロニーに命じられ、強制停止システムの担当官が稼働レバーを下げる。だが、反応はない。ウォーロックは、依然として稼働状態にあり、遣欧艦隊を相手に攻撃を継続し

ている。

必死に応戦する赤城・雪風だが、ついに一発のビームが赤城に命中、船体後部で爆発が起きる。大型ネウロイすらも一撃で粉碎するビームはそのまま後方にある旧501基地へ流れていった。基地本部への直撃は免れたものの、高出力のビームは敷地を抉り、基地の西側にある施設を破壊した。

「何故だ!?何故停止しない!?!」

着弾による衝撃が島全体を駆け巡る。激しく揺れる管制塔内に、マロニーの絶叫が響いた。

「は……はは……」

隣では両膝を床に着いた石威が、ひきつった笑みを浮かべている。その乾いた笑いが何を意味するのかは、本人にしか分からない。

“制御”という名のピースが欠けた完全体は、自らを生み出し、支配した気になっていた人類に牙を剥いたのだった。

◇
◇
◇

同時刻、基地近傍の廃屋――

「基地がっ!？」

ペリスコープ越しに基地を監視していたバルクホルンが声を上げる。

突然、赤い閃光が目の前を横切ったかと思えば、直後に基地が炎上し、全景の半分を覆うほどの爆煙が上がったのだ。

「あのビーム、どこから来たんだ!？」

破壊された基地を遠目に、ハルトマンは表情を険しくする。彼女達の位置からでは、暴走したウォーロックを視認出来なかったため、ビームがどこから飛んできたのかまではわからない。

「行きましよう!」

ミーナは短く言うと、すぐさま廃屋を飛び出した。バルクホルンとハルトマンも後に続き、3人は基地へと向かって駆け出していった。



空母赤城、甲板――

「右舷後部デツキ、被弾!」

「第2、第3高角砲、大破!」

「格納庫より出火！消火急げ！」

「機関室浸水！隔壁閉める！」

ウォーロックの攻撃は尚も続いていた。畳み掛けるように、いたぶるように繰り返し放たれるビームによって各部が損傷、被害は拡大していく。最早、航行は不能。赤城の艦内では被害報告ばかりが飛び交っている。

さらにウォーロックは、艦首方向より赤城の甲板をすれすれに飛行、ダメ押しと言わんばかりに後部エレベーターにビームを撃ち込んだ。ビームは内部まで貫通し、一際大きな爆発を引き起こした。

「きゃああああっ！」

大きく揺れる船体、ゆっくりと傾き始める甲板。一時的に平衡感覚を失った芳佳は、悲鳴を上げる。そのまま甲板に倒れそうになるが、坂本の左腕に抱き留められ、事なきを得る。

「大丈夫か!？」

と、坂本。彼女の身体から使い魔であるドールベルマンの耳と尻尾が飛び出している。気を抜けば海へ滑り落ちてしまいそうなほどに不安定な甲板。ペリーヌと芳佳の二人をしつかり支えようと、身体強化魔法を発動しているのだ。

「はい……ありがとうございます。坂本さん」

心配そうに自分を見る坂本に対し、芳佳は苦笑気味に答えた。

「お兄さま……いえ、宮藤大尉は？」

つい「お兄様」と呼びそうになり、ペリーヌは慌てて言い直す。坂本を右腕で支えられた彼女は、キョロキョロと甲板を見渡して優人の姿を探している。

「妹を置いてどこへ行ったんだ？」

坂本が眉を寄せながら呟いた。芳佳を預けられた直後に、ウォーロックの攻撃で船体が大きく揺れたために、走っていった優人の後ろ姿を見失っていたのだ。

彼は今何処に、何故急に走り出したのか。突如襲いかかってきたウォーロックに恐れをなして一目散に逃走したか。いや、優人はそんな臆病な人間ではない。無論、最愛の妹や大切な仲間を置いて、我先にと逃げ出すような卑怯者でもない。それは彼と一番付き合いの長い坂本自身が、誰より理解していることだ。

しかし、姿が見えないことが気掛かりだった。艦が揺れた際に海へ放り出されていないか、ビーム着弾時の爆発に巻き込まれていないか等の不吉な考えが頭を過る。

「お兄ちゃん……」

芳佳は足元へ視線を落とし、不安げに呟く。その時、突然甲板に振動が走った。

「？………なんですの？」

振動に気付いたペリーヌが、足元に目をやる。ビームの直撃や着弾による爆発によつ

て起きる揺れとは明らかに異なる、小さくて細かい振動。

空母乗艦経験の無いペリーヌには何か分からないようだが、足元より伝わるそれはエレベーター作動時に発生するものだった。

「——っ!?……中央エレベーターか?」

ハツ気付いて顔を上げた坂本は、甲板中央部へ目を向けた。次に彼女の視界に飛び込んできたのは、中央エレベーターを使って甲板まで上がってきた2基の発進ユニットと、固定されている見慣れたストライカーユニット『零式艦上戦闘脚二二型甲』。そして、見知った一人の青年であった。

「お兄ちゃん!」

芳佳が驚いて声を上げる。発進ユニットやストライカーユニットと共にエレベーターで上がってきたのは、S-118対物ライフルを手にした優人だった。2機あるストライカーユニットの片方を装着し、既に魔導エンジンを始動していた。

◇ ◇ ◇

その頃——

シャーリーとルッキニーを乗せてロマーニャへ向かっていたソードフィッシュは、

ウォーロックと遣欧艦隊の交戦海域近傍を飛行していた。

「見ろ」

何かに気付いたシャーリーが、11時方向へ顎をしゃくりながら言う。彼女に促され、ルツキーニも同じ方向へ目をやってみると、遠方より黒煙が上がっているのが見えた。

「何だろう?」

黒煙はウォーロックの攻撃で沈みかけている赤城から上がっているのだが、そんなこと知る由もないルツキーニ

は不思議そうに首を傾げた。

「行ってみるか?」

「……へ?」

ニイと笑みを浮かべるシャーリーの提案に、間の抜けた声を返すルツキーニ。彼女のちゃんとした返事を待たずして機体を急旋回させたシャーリーは、黒煙の方へ加速していく。

「ヤツホオ〜イ!」

「うにやにやああああああつ!!」

シャーリーの歓喜な叫びと、ルツキーニの猫に似た悲鳴がドーバー海峡に轟いた。

しかし、遣欧艦隊の危機に気付いたのは、空を往くシャーリーとルツキーニの二人だけではなかった。



所変わって――

沿岸に設けられた一条の線路。その上を走行する蒸気機関車は、客車ではなく丸太状の木材が積まれた貨物車両を牽引する貨物列車だ。

旧501基地の最寄り駅より発車し、ロンドンへ向かって移動中の貨物列車の荷台――正確に言えば、荷台に積まれた木材に座るサーニヤとエイラの姿が認められた。木材を座席代わりに使うエイラは、自身にもたれ掛かって眠るサーニヤを穏やかな表情で見つめている。

「す〜……す〜……」

サーニヤから可愛らしい寝息が聞こえる。昨晚、夜間哨戒がなかったサーニヤだが、ナイトウィッチ故に夜型であり、昼間は眠い。本日はお気に入りの枕ではなく、エイラの腿に手を添えて眠っている。

何故二人は、わざわざ乗り心地の悪い貨物列車で移動しているのか。もちろん、ちゃ

んと理由がある。

他のメンバー同様基地を出た二人は、列車に乗るために最寄り駅まで足を運んだ。ここでロンドン行き切符を買おうとしたのだが、ロンドン行き列車は既に出てしまっていた。

駅員から「次のロンドン方面は6時間後だよ」と言われ、サーニヤはともかくエイラはベンチが一つ置かれているだけの寂れたホームで6時間も待たなければならぬことに不満を零していた。すると見兼ねた駅員が、ちょうど給水のため駅に停車中だった貨物列車に乗せてもらうという提案をしてきた。

初めは「サーニヤを貨物車両に乗せるわけにはいかないダロ！」と憤慨していたエイラだったが、貨物列車なら切符要らずで堂々とタダ乗りが出来ること。人見知りするサーニヤから「他にお客さんがいないなら、その方がいい……」という意見が出たこと。そして何より、エイラが貨物ならサーニヤと二人つきりだということに気付いたため、邪な感情を抱いた彼女の決断で貨物列車の荷台に乗車することが決まったのだ。

「う、ううん……」

ふと眠っていたサーニヤから、彼女の使い魔である黒猫の耳と尻尾が出現する。次に魔導針が発動し、同時にサーニヤも半覚醒ながら目を覚ます。

あまり気持ちの良い目覚めではなかったらしい。辛そうな面持ちで、サーニヤはポツ

りと眩いた。

「あ……艦が、燃えてる」

「艦？」

寝言かも分からねサーニヤの言葉を、エイラは気の抜けた声で鸚鵡返しする。

◇ ◇ ◇

同じ頃――

一台の車が舗装されていない田舎道を進んでいた。ロンドンのような大都市ならいざ知らず、木骨造り、藁葺き屋根の家が並ぶ村々や小ぢんまりとした都市が点在する地方には、あまりに不相应な高級車――ロールスロイス。運転席には執事然とした男性が座り、後部座席にはなんとリーネが乗り込んでいた。

見た目も中身も言動も、貴族令嬢らしいペリーヌの影に隠れて忘れられがちだが、リーネもまたロンドンにてデパートを始め多数の店舗を営む裕福な商家を実家に持つ、れっきとしたお嬢様なのだ。

このロールスロイスは、娘から連絡を受けた実家より遣わされたリーネの迎えであり、運転席の男性は彼女が幼い頃からビショップ家で運転手をしている。

「あつ、あれは!？」

運転手と雑談に興じていたリーネもまた、水平線上の黒煙に気付いたのだった。

◇ ◇ ◇

場面は再び空母赤城、甲板――

「総員退艦! 総員退艦!」

黒煙を上げながら沈みゆく赤城では、杉田の判断で退艦命令が発せられた。海上には、脱出した乗員達を乗せた救命艇が浮かんでいる。

唯一生き残った駆逐艦『雪風』は杉田の要請を受け、赤城乗員の収容と、天津風の生存者の救助を行っていた。

「優人、それは!？」

優人と共に中央エレベーターから上がってきた2機のストライカーユニットに、坂本は目を見張った。

これらの零式艦上戦闘脚二二型甲は赤城の艦載機であり、元々ガリア反攻作戦に参加するウィッチに支給される予定だったもの。

扶桑への帰路につく前にブリタニアの港で下ろされるはずだったが、優人がウォー

ロックの暴走という万一の事態に備えて赤坂に根回しを行い、艦内に残して貰っていたのだ。

「悪い説明してる時間はない」

優人はそう言うと、空を見上げた。ウォーロックが艦隊の様子を伺うかのように上空を旋回していた。

「援軍の到着まで、俺が奴を押し留める。その間にお前らは避難しろ！」

「無茶です、大尉！」

ペリーヌが異を唱えた。魔法力が落ち、怪我也癒えきっていない。そんな状態でウォーロックと戦うなど無茶でたる。

「悪い、そろそろ向こうが痺れを切らしそうなんだ」

優人は再び空を見る。旋回していたウォーロックは、いつの間にホバリングして優人を見下ろしていた。

まるで、早く上がってこいと急かすかのように唸り声を上げている。

「よせ、優人！」

「大丈夫だよ、死ぬ気はない」

ペリーヌに続いて、自分を止めようとする坂本にそう告げると、次に優人は芳佳を見た。

「お兄ちゃん……」

「……………」

潤んだ瞳で自分を上目遣いに見返す妹に優人は微笑み返すと、ストライカーを発進ユニットより滑走させ、空へと上がっていった。

「優人！」

「大尉！」

飛び立ってしまった優人を目で追いながら、坂本とペリーヌが順に声を上げる。間もなく、優人はウオーロックと交戦状態に入った。

（お兄ちゃん……）

既に手の届かない位置まで高く上がった兄を、芳佳は不安げに見つめる。かと思えば、ハツとなって斜め後ろに振り返った。その視線の先には、もう1機の零式艦上戦闘脚二二型甲を固定したがある。

（行かないや……）

芳佳は決意し、発進ユニットへ駆け寄った。



黒煙を指していた飛行していたソードフィッシュは、赤城を視認できる距離まで接近していた。

「あれは？」

ウォーロックの攻撃を受けて沈んでいく赤城を視界に捉えたシャーリーが、戸惑いの声を上げる。

「扶桑の空母だよ。何でウォーロックが攻撃してるの？」

ルツキーニも首を傾げた。

「あたしに聞くなって〜の！飛ばすぞ！」

「おうよー！」

もっと近付いて状況を確認したいシャーリー。今度はちゃんとルツキーニの返事を聞いてからソードフィッシュを加速させた。



空に上がった優人は、ウォーロック相手に空中戦を展開していた。

ウォーロックの頭部へ狙いを定め、S-18対物ライフルに装填された航空機関砲用20mm弾を数発打ち込むも、シールドであっさりと防がれてしまう。

「チツ……」

お返しとばかりにビームを撃つウォーロック。シールドで防ぎながら舌打ちする優人。簡単に倒せる相手とは思っていないが、本調子でない優人としてはそれでも長期戦は勘弁願いたかった。

使い魔との同調は安定しているが、魔法力の回復具合は芳しくない。薬のおかげで傷の痛みは殆んど感じないが、負傷前には無かった身体の中で何かが引つ掛かっているような違和感がある。

(とにかく、こいつを赤城から引き離さないと……)

優人は海面に背を向けた体勢で飛行しつつ、射撃でウォーロックの気を引き、赤城から遠ざけようとする。

優人の迷惑通り、彼の挑発染みた攻撃にウォーロックが食い付いてきた。逃がさない、と言わんばかりにビームや機銃を乱射する。

ビームや銃弾を受け止めながら、優人は魔力シールド越しにウォーロックを見据えた。黒いハニカム構造の装甲を纏い、狂ったような甲高い咆哮を上げる機体は、ほぼネウロイと同質の物に変貌している。

優人は以前にも、眼前のウォーロックと酷似した存在と遭遇していた。ウォーロックが暴走しなければ、赤城の居室で芳佳達に話していたであろう過去。それは5年前の8

月、父——宮藤一郎が亡くなる数日前のことだった。

第44話「虹の女神」の暴走」

1939年8月上旬、ワイト島――

「見事に……何もない……」

瞳に映ったワイト島の景色を見つめ、優人は呆然と呟いた。

扶桑と同じく四季がはつきりしているロマーニヤ。そこから長時間揺れ続けた九七式飛行艇の旅客室から島の沿岸部へ降り立った若き海軍士官を出迎えたのは、見渡す限り平原というあまりに殺風景な島景だった。

島には、ほぼ中央に位置する小さな基地施設以外これといった建造物は存在せず、平原が広がるだけであった。九七式の機長からは、気候が温暖で温泉も湧いているという話を聞いていたが、それを売りに観光地化されているわけでもない。

「と……基地本部へ向かわないとな」

そう呟く優人の耳朶に自動車のエンジン音が響いた。振り返ると、ジープが一台停まっていた。

見知った人物が運転席から手を振っている。白衣を着た、痩せた体躯の研究者らしい風貌の男性――父の助手をしている石威紫郎、その人だ。

「石威さん！」

優人はすぐさま駆け寄り、助手席へ飛び乗った。

「長旅お疲れ様、お父さんが変わって迎えに来たよ」

「ありがとうございます」

石威の厚意に、優人はニッコリと笑って礼を述べる。初めて来た場所で知人と出会えて安堵したらしい、優人の声は明るい。

運転手である石威は優人が乗車すると、すぐにジープ発進させ、基地本部へと向かう。

「すまないね、修行中だったのにわざわざ呼びつけて」

「いえ、そんな……」

『十二試艦上戦闘脚』——後に『零式艦上戦闘脚』と呼ばれるストライカーユニットの開発が一段落し、量産の目処が立ったため、宮藤優人少尉は戦友の坂本少尉と共にロマーニヤへ修行に出掛けていた。来るべき戦いに備え、自分自身にさらなる磨きをかけるために、二人は日夜厳しい修行に明け暮れていた。

「坂本少尉は？……彼女も元気かい？」

「え……ええ、まあ……」

適当に言葉を濁す優人。試験運用の参加が決まった際、たった一人で厳しい修行を続けなくてはならなくなった坂本は、優人のことを涙目になりながらも恨めしそうに睨ん

でいたのだ。ロマーニヤへ戻る前に、彼女の機嫌を取る方法を考えなくてはならない。「ところで、試験には父さんや石威さんも立ち会うんですか？」

ロマーニヤでの修行開始から2ヶ月程経ったある日、扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令部より優人のみに辞令が届いた。

内容は大きく分けて、優人の父——宮藤一郎が中心となつて開発を進めていた、ストライカーユニットとはまた異なる対ネウロイ用兵器の試作機が完成したこと。ワイト島で実施される試験運用に優人も参加せよ、というものだった。

この時優人は、父が十二試艦上戦闘脚以外で兵器の開発に携わっていたことを初めて知つたが、同時に宮藤式ストライカーユニットと同じく、対ネウロイ戦の切り札と目されている新兵器に興味を抱いた。

優人は、修行先でお世話になっているアンナ・フェラーラに事情を話した上で修行の一時中止を申し入れ、今日試験運用が行われるワイト島を訪れたのだ。

「いや、私だけだよ。君のお父さんは本島の研究所さ」

優人の問いに、運転中の石威は正面を向いたまま答える。

「?……大事な新兵器の試験ですよ?父さんは見にこないんですか?」

優人は首を傾げる。優秀な技術者らしく、職人気質なところのある父が、完成した試作機の性能を自分の目で直接確かめないことが腑に落ちないのだ。

「いろいろと事情がね……あつ、あれが例の試作機だよ」
「えっ?」

話をしているうちに、ジープは基地本部前まで来ていた。僻地だけに本部の建物も、滑走路も、格納庫も、他所に比べて、かなり小規模である。

優人は、石威の指差した方向へ目をやる。一目で件の新兵器と分かる風変わりな機体が、滑走路の端に鎮座していた。

ほぼ全身をモスグリーンに塗装された装甲で覆った姿は、戦車にしては巨大で形状も大きく異なる。戦闘機等の航空機とも明らかに外見が異なり、不恰好ながらも人の形をしている。鋼鉄の巨人とも形容出来るその姿を扶桑的に表現するなら、軍用からくり人形といったところか。

バイザーのような物が存在する頭部と一体化したような印象の胴体。不自然なほど長く大型の脚部は航空歩兵の履くストライカーユニットを想起させる。脚に対して短過ぎる両腕の先端には、武装が施され、左腕に機関砲、右には対物ライフルを大型化したような形状の見慣れない武器を、それぞれ一基ずつ装備している。

「……あれが?」

ストライカーユニットに使用されている技術をフィードバックして開発した最新の戦闘機が出てくるものとはばかり思っていた優人は、戦闘車輛からストライカーを生やし

たような奇抜な様相をした新兵器に面食らっていた。

「コードネームは『イリス』。見た目は少々奇妙かもしれないが、性能は折り紙つきだ。ストライカーユニットを装備したウィッチやウィザードにも引けは取らないよ」

「は、はあ……」

優人がコメントに困っていると、頭部の頂上に設けられたハッチが開き、中から操縦者らしき兵士が現れた。頭の飛行帽を顔が隠れるほど深めに被っているため表情を伺うことは出来ないが、体格からして女性ではない。

「ウィッチやウィザード……では、ないみたいですね？」

確かめるように訊く優人に、石威は格納庫前にジープを止めながら答えた。

「上から一般兵士にも扱えるように、とお達しが来てね」

停車したジープから格納庫内を覗いてみると、優人以外にウィッチが10人弱程待機しているのが見えた。それぞれ扶桑陸軍、カールスラント空軍、ブリタニア空軍の制服を身に纏い、傍らには各々のストライカーユニットが確認できる。

「彼女達が君のチームメイトだ」

「チームメイト？」

「君には彼女達と航空歩兵の混成中隊を組み、イリスの仮想敵機役を務めて貰う。模擬戦形式の試験運用だ」

「即席の中隊……ですか？」

ウィッチ達から視線を外した優人は、石威の横顔を訝しげに見つめる。

本来仮想敵機役は、手強い敵を演じきらなくてはならない。優人は航空歩兵としてはまだまだ未熟者。それでなくとも、上手く連携が取れるかも分からない即席の小隊では、不十分な気がしてならなかった。

「詳しい意見は將軍達か——」

石威が説明を続けようとしたその時。

ウウウウウウウウウウ!!

突如、非常事態を報せる警報が基地内に鳴り響いた。

◇ ◇ ◇

十数分後——

抜けるようなブリタニア南東部の青空。優人は、予定通り今日知り合つたばかりのウィッチ達と混成中隊を編成、ストライカーを履き、既に空へ上がっている。

いよいよイリスの試験運用か。しかし、手には実弾が込められた銃が握られている。

「いたっ！12時方向！」

ワイト島近海上空に差し掛かったところで、混成中隊の隊長に指名されたカールスラント空軍のウィッチが自分達へ——正確には、ワイト島基地へ向かって近づく複数の機影を視認する。

レシプロ戦闘機に似せた形状の飛行型ネウロイだ。中型が1機、小型が多数。

先程の警報はネウロイの接近を報せるものだった。どうやらヒスパニア戦役の残党が、付近の島々に身を潜めていたらしい。何故このタイミングで活動を再開したのかは分からないが、来てしまった以上無視は出来ない。混戦中隊の面々は軽く自己紹介を終えた後、迎撃するために基地から飛び立っていった。

(いよいよ、実戦運用か……)

優人は、自身が履いている十二試艦上戦闘脚をチラツと見て心中で呟く。

ほんの少し前に父——一郎が完成させ、扶桑海軍の主力ユニットとして採用・量産が決定したばかりの機体をこんな実戦で使うことになるうとは思っても見なかった。しかし、尊敬する父が手塩にかけた新型ユニットであるためか、不思議と不安は抱かない。

(ん?)

ふと聞き慣れない機械音が魔導エンジンに混じってワイト島上空に響き、優人達の耳朵を打った。後方へ目をやると、基地から遅れて出撃したイリスが優人達に追い付いて

きていた。

ネウロイの襲撃で予定されていた試験運用を中止となったが、視察に来た將軍達の要望により急遽実戦テストに変更となった。將軍達は開発計画の首脳陣であり、各々の本国から『早く結果を出せ』と、圧力をかけられていた。

石威を除く開発陣の殆んどは、まだ試作段階のイリスを実戦投入することに対して難色を示していたが、出資者でもある將軍達の意向に逆らうわけにもいかず、試作機は一足飛びで実戦に参加することとなった。

(なんか……嫌な予感がするな……)

ギリシア神話に登場する虹の女神の名を冠した試作新兵器『イリス』。父や石威をはじめとする開発陣は、七色の美しい虹によって航空及び陸戦ウィッチ・ウィザードを庇護する、という意味を込めて名付けたらしい。しかし、改めてイリスを見据える優人は言い知れぬ不安を覚えた。

「来るわよー！」

ブリタニア空軍のウィッチが大声を上げる。彼女の叫び声と前方から聞こえてきた機関砲の砲撃音を合図に、戦端が開かれた。

中型ネウロイの機関砲から撃ち出され、正面からばら蒔かれた漆黒の砲弾を回避するため、優人達は左右に分かれる。そのまま挟撃を仕掛けようとする混成中隊だが、中型

を取り囲むようにして周辺を飛行している子機群に阻まれてしまう。

子機に搭載された機関砲は、中型のそれと比較して小口径ではあるが、人間の身体ならば木片のように貫通する程度の威力がある。直撃すればただでは済まない。

しかし、若手とはいえ混成中隊の面々は扶桑海軍やヒスパニア戦役を経験した精鋭揃い。さらに宮藤理論を採用した新型のストライカーユニットを纏えば、まさに「鬼に金棒」。小型ネウロイごとき相手など物の数ではない。次第に戦況は、混成中隊へと傾いていく。



イリス・操縦席――

「……………そつー！」

混成中隊が次々小型を撃墜し、親玉である中型を丸裸にしていく状況下、一人の人間が苛立ちを孕んだ声を漏らした。イリスのテストパイロットを務め、操縦席に腰を下ろしている男性士官だ。

戦闘機パイロットが本職である彼は、他の航空機とは勝手が違うイリスの操縦に四苦八苦していた。急な実戦参加を命じられ、慣らし運転も不十分であったためにまともな

戦闘機動すら取れていない。

操縦席に座る彼の瞳には、優人や他のウィッチ達が次々と撃破していく状況が嫌でも映り、心に焦りが募っていく。

「お前らにばかり……いい格好させるかよー」

操縦桿を強く握り直したパイロットの氣勢に合わせて、イリスの機関砲が唸る。ウィッチの火器を上回る威力を誇る銃弾の雨にさらされ、正面に10体は飛び交っていたであろう小型ネウロイをまとめて撃破した。

「よし……うわっ!？」

パイロットが悲鳴を上げる。一発の砲弾がイリスの頭部に直撃し、機体がふらついたので。

機体に命中した弾は、中型ネウロイがイリスに向けて放った砲弾。それは運命の一弾だった。攻撃を受けたイリスに異変が起きる。頭部のバイザーの奥には、妖しく輝く赤い光が浮かびがっていた。

「なんだ?……うわっ!？」

突然利かなくなつたイリスの操縦桿。パイロットが頭に疑問符を浮かべていると、今度はコンソールからバチツと放電が起きる。計器類は狂つたようにデタラメな方向を差し始め、機内のあちこちが黒く変色し、正六角形のハニカム模様が浮かび上がった。

「一体、どうなって!?……ぐっ!」

混乱するパイロットにも異変が起きた。両手で頭を押さえ、蹲るような姿勢になり、身体は痙攣し始める。

『イリス!どうかしたのか!?イリス!応答せよ!』

無線から怒鳴り声にも似た声が聞こえてくる。混成中隊の中隊長を務めるウィッチのものだと臆気に理解するも、今のパイロットに応答する余裕はなかった。

覚えのない憎悪や憤怒の感情と、理性で抑えきれないほどに凄まじい破壊衝動が奔流となって頭の中に流れ込んでくる。それによって引き起こされる尋常じゃない激痛、パイロットの頭は割れてしまいそうだった。

「あ……ああ……」



「ぎゃああああああああっ!!」

この世のものとは思えないゾツとするような叫び声が、イリスの操縦席より発信された。インカム越しに絶叫を聞いた混成中隊の航空歩兵達は、戦闘中にも関わらず完全に動きを止め、視線をイリスに集中させる。

「どうした!? イリス、応答せよっ!」

中隊長のコールスラントウィッチがインカムで呼び掛けるが、応答はない。中型ネウロイの砲弾を受けてからイリスはホバリングしたまま、ピクリとも動かない。

外からは目立った損傷は見られない。攻撃を受けた衝撃で機能停止を起こしたのか。しかし、それなら海へ墜落するはずだ。

「何が起きた!? 返事をしろ!!」

中隊長が再度呼び掛けるが、イリスのパイロットから応答は無い。

(まさか、パイロットは気を失っているのか?)

イリスから一番近い位置にいた優人が、パイロットの身を案じてイリスに駆け寄ろうとする。しかし、どういうわけか。味方であるはずの二人に対し、イリスは右腕の砲口を向けたのだ。

「なっ!?!」

ハツと目を見開く優人、それとほぼ同時に閃光と共に砲撃音が轟く。ライフル砲より一発の砲弾が射出された。優人は反射的に身をよじり、紙一重で回避した。風切り音が優人の耳を打ち、衝撃波が身体を掠めた。

脇を通り過ぎていった砲弾は、たまたま射線上にいた中型ネウロイの装甲を貫通する。コアを貫かれネウロイは、ハニカム模様の浮かぶ漆黒の巨体を白く輝く破片群に変

えて飛び散った。

イリスが放ったのは、従来型より遙かに高速かつ高威力の砲弾だった。この砲撃を優人が躲けたのは、十二試艦上戦闘脚の驚異的な運動性能と奇跡的な幸運のおかげだ。しかし、その幸運に預かれたのは、優人一人だけだった。

次にイリスはウィッチ達に襲いかかる。優人以外、1カ所に集まっていた混成中隊へ向かって突っ込んでいった。それは魔女と女神の同士討ち——いや、正確に言うならば虐殺の始まりだった。

「きゃあああつー！」

「よせつー！私達は味方だ！」

「痛い痛い痛いっ!!」

耳をつんざくような悲鳴が次々と上がる。高い火力を備えたイリスの攻撃によってウィッチ達の手が、足が、頭が血飛沫や肉片と共に吹き飛ぶ。

「暴走……?」

優人は呆然と呟く。他に形容出来る言葉が見つからないイリスの行動。既に敵味方を認識していない女神の攻撃で、中隊の人数は10秒も経たないうちに半分に減つてた。

「やめろおおおおおっ！」

ブリタニア空軍のウィッチが、ボーイズライフル Mk. I を構え、装填された魔導弾をイリスに叩きつける。周囲のウィッチ達も続いて発砲するが、通用しない。イリスが魔力シールドのような半透明の防壁を展開、混成中隊の集中砲火を受け付けない。

「あれはなんだっ!?!」

「あんな装備があるなんて、聞いてないわよ!?!」

シールド越しのイリスの姿が困惑するウィッチ達の瞳に映る。モスグリーン of 装甲がハニカム模様の浮き出た黒色に変化し、頭部のバイザーからは赤い光が点っていた。

耳でもエンジン音とは明らかに違った、唸り声に似た不気味な音を捉える。変貌した機体といい、唸り声といい、まるでネウロイのようだった。

「おのれ〜っ!」

扶桑刀を背負った一人の扶桑陸軍ウィッチが抜刀、魔法力を込めた斬撃を造反した女神に見舞う。が、刀身は装甲であっさりを受け止められ、傷一つ付けられなかった。

イリスは、すぐさま反撃に移った。慌てて距離を取ろうとする扶桑陸軍ウィッチの腹に向け、槍で突くかのようにライフル砲の砲口を押し付ける。

「かはっ!?!」

腹部を襲った圧迫感に、扶桑陸軍ウィッチは苦悶の表情を浮かべた。直後の零距离砲撃によって、彼女の身体は血肉を撒き散らしながら真つ二つに分かれた。

さらにイリスは、MG34を装備したカールスラントウィッチによる至近距離でのフルオート射撃を軽々と躲し、機関砲による報復でカールスラントウィッチを粉砕する。

巨体からはとても想像出来ない、異様とも言える機動力と反射速度。中型ネウロイを一撃で撃破するほどの圧倒的火力。強固なシールドによる防御力。そして、ウィッチやウィザードを軽く凌駕する戦闘能力に、ネウロイすらも及ばない凶暴性。

最早為す術など何もない。数分後にイリスが彼方へと飛び去り、その姿が青空の中に消えるまで、扶桑・ブリタニア・カールスラントのウィッチ達は、一方的に蹂躪を受けた。原型を留めないほどバラバラになった遺体は海へ落下の後に沈んでしまい、回収は不可能だった。

「……ば、化け物………」

混成中隊唯一の生き残りである優人は、身体を小刻みに震わせながら、消え入りそうなほど小さな声で呟いた。

イリスの何者も受け付けけない強さに、彼はすっかり萎縮してしまい、何も出来なかった。

使い魔の紗綾も同様だった。彼女と主が初陣を飾った扶桑海事変。その最終決戦において、マザーネウロイと戦った時でさえ、恐れることなく逆に逸り立っていた相棒が、黒く変貌したイリスと向かい合った際、怯えたように「クーン」と鼻を鳴らしていた。

(あれを……父さんが……)

父が開発に携わった兵器によって、中隊のウィッチ達が次々に殺されてしまった。それは優人にとって、何より残酷な現実であった。

決して心の弱くない優人だが、目の前の現実を受け入れることが出来なかった。これは夢だ、現実じゃない等と現実逃避をしてしまうほどに――

◇ ◇ ◇

ワイト島基地、司令室――

報告を受けた基地司令室に当然歓声はなかった。イリスの実戦投入を急かした將軍達は、まるで自我が芽生えたかのような兵器の暴走。暴走した兵器によって、ウィッチ達が虐殺同然の無惨な殺され方をしたことに愕然としていた。

開発陣もまた弁解することもなく、自分達が生み出してしまった脅威に凍りつくだけだった。ただ一人を覗いて――

(素晴らしい……)

石威は、思わず心のなかでつぶやいた。他の技術者や將軍達が戦慄を覚える中、彼だけは身体が震えるほど歓喜していた。

(あの力を制御出来れば……宮藤ではなく、私が歴史に残せる)

石威紫郎はこの時、ある一線を越えてしまったのだ。それは、いかなる理由があろうと、人として越えてはならぬ一線であった。



約1時間後。ブリタニア本島、ストライカーユニット共同研究所――

『新兵器開発計画（仮称）』の成果であるイリスが実戦中に暴走し、優人以外の航空歩兵を惨殺したという報せは、すぐに宮藤一郎の元にも届いた。

（恐れていたことが……）

研究所の地下室へ続く階段を下りながら、一郎は奥歯を噛み締めた。彼の危惧していたことが現実になってしまったのだ。

地下に降り立った一郎は、実験器具や工学系の資料が散らかる薄暗い室内において、一際強い存在感を放つ培養槽の前まで歩を進める。培養液で満たされた槽内の中では、正十二面体の水晶のような物体――ネウロイのコアが妖しく輝いている。

「……………」

一郎は無言のまま、水槽越しにコアじつと見つめる。このコアは、石威が調達してきたもの。イリスという名のパズルを完成させるために必要な「最後のピース」。石威

がこれを持ち込んだことで、開発過程で発生したあらゆる問題が解決し、予定よりも遙かに早くイリスが完成した。しかし、イリスは暴走してしまった。わざわざ調べるまでもない、原因は動力として使用したネウロイのコアだ。

手元に残っていたもう一つのコアを詳しく調べた結果、今のままではイリスを——いや、イリスに限らずネウロイの技術を応用した兵器を人類の手でコントロールすることは不可能、という結論に至った。

かなりギリギリではあったが、一郎は急ぎイリスの試験運用中止と開発期間の延期、場合によっては計画自体を凍結する必要がある、と計画首脳陣に強く進言した。

しかし、自らの助手である石威からは猛反対を受けてしまい、首脳陣の何人かと繋がりがあった彼の根回しによって試験運用は予定通り実施されることとなった。さらにヒスパニア戦役時の残存ネウロイが出現したため急遽実戦試験となり、最終的にイリスの暴走へと繋がった。

報告によれば、イリスが暴走したのは中型ネウロイの攻撃を、コアを内蔵した頭部に受けた直後とのこと。おそらく、ネウロイの攻撃がイリスの自己防衛本能を——自我を呼び覚ます引き金となり、結果自らの意志で動き出したのだろう。一郎は、そう推測している。

「父さんっ！」

突如、怒鳴り声と共に早歩きで階段を下る足音が地下室内に響き渡り、一郎の耳朶を強く打った。この声と足音には覚えがある。最愛の息子である優人のものだ。

イリスが姿を眩ました後、優人はすぐにワイト島の基地で補給を受けた十二試艦上戦闘脚を飛ばして研究所までやって来たのだ。

階段を降りた優人は、奥にある培養槽以外に光源が無く、薄暗い地下室内に父の姿を見つけた。

「……優人。良かった、お前は無事だったか」

一郎は、ウィッチ達の命を奪う遠因を作ってしまったことやイリスの暴走を事前に阻止出来なかったことに心を痛めながらも、無事戻ってきた息子の姿に安堵する。

「どういふことか説明あるよな？」

険しい表情をした優人は、激しい怒りに身を震わせながら強い口調で父を問い詰める。

「……………」

対する一郎は、何を言っても言い訳にしかない、と無言で応じる。

「っ!?……………おい、それって?」

優人が、奥に設置された培養槽と槽内のコアの存在に気付き、瞳に動揺の色が現れる。

「……………ネウロイのコア?じゃあ、イリスが暴走したのって……………まさか」

優人の脳裏に、ネウロイと似た姿へ変貌したイリスが浮かび上がる。

「……………」

「どういふことだよ!? 何で……………どうしてあんな物を!」

鋭い視線で一郎を見据えたまま、優人は培養槽内のコアを指差し、語勢を強めて詰問する。

「あれが何か分かってるだろ!? 俺のっ!……………俺達の力を信じてくれてたんじゃないのか!」

優人はさらに強い口調で問い質す。が、一郎は何も答えない。

「……………」

「黙ってないでなんとか言えよ!」

「……………」

「血の繋がらない他人と話すことは何もない、つてか?」

怒りを通り越して嘲笑気味になる優人に、今まで無言を通していた一郎は慌てて弁明した。

「それは違っ——」

「黙れ!」

優人はギュッと右拳を握り締める。ここへ来る直前に、大勢のウィッチが暴走したイ

リスの手で惨たらしく殺され、その瞬間を間近で見てしまったために、今の彼は精神状態が芳しくない。

故に尊敬していた父が、赤の他人である自分を引き取り、育ててくれた恩人である一郎が、自分や仲間のウィッチ・ウィザードではなく、敵であるネウロイの技術を宛てにしていた、と解釈していた。

「何がお前には力がある、だ……」

感情を抑えることが出来なくなっている優人は、口に出したことを一生後悔するであろう言葉を、勢いのままに叫んでしまう。

「あんたを父親とは認めないっ！」

それだけ言うと、優人は近くにあつた作業機を苛立だしげに蹴っ飛ばしてから地下室を後にした。



制御が不完全な新兵器を実戦に投入した結果、派遣されていた各国の航空歩兵が優人を除いて死亡することになってしまった。

今回の一件は、当時の扶桑海軍遣欧艦隊司令長官を含め、計画に関わった各国の将軍

達が保身に走り――

『試作新兵器――コードネーム“イリス”の試験運用中、近隣の島々に潜伏していたヒスパニア戦役の残党ネウロイによる襲撃を受け、模擬戦につき実弾を装備していなかった航空歩兵の混成中隊は応戦することもままならず、宮藤少尉を除いたほぼ全員が戦死。

イリスもネウロイの攻撃によって撃墜され、パイロットは戦死し、海へ墜落した機体はそのままだ没』

――という虚偽の報告が成された。宮藤優人少尉は、遣欧艦隊司令長官から箝口令を敷かれた上で、すぐ修行先のロマーニャへ帰された。

その数日後、裏でネウロイの研究やイリスの開発等も行われていたストライカーユニツト共同研究所で原因不明の爆発事故が起きた。

帰国を控えていた研究者の殆んどが死亡、扶桑皇国から派遣されていた宮藤一郎及び石威紫郎の二名が行方不明となる。同時に所内にもう一つ保管されていたネウロイのコアを紛失し、ネウロイの研究及びネウロイの技術を利用した兵器の開発が実質不可能となった。

このことは、宮藤一郎と同郷の知人である赤坂伊知郎少将（当時）から遣わされた扶桑海軍兵により、優人にも伝えられた。優人は父がイリスの危険性に誰よりも早く気付

き、試験運用の中止を進言していたことを、この時初めて知った。

第45話 「宮藤兄妹 VS ウォーロック」

1944年9月初頭、ドーバー海峡上空――

「そうだ、俺が相手だ!! こっちに来な!」

遣欧艦隊から僅かに離れた空域で、優人はウォーロックと死闘を繰り広げていた。

両手で構えるS-18対物ライフル。その銃口から空気を引き裂く勢いで放たれた20mmの魔導弾が、ウォーロックへと迫る。しかし、ウォーロックが展開したシールドによって、いとも容易く弾かれてしまう。

(正面からじゃ無理か……)

直撃すれば、小型ネウロイを一発で粉碎し、中型以上の個体にも大打撃を与えること
の出来る大口径の魔導弾も、ウォーロックに搭載されたシールドの前では無力だった。
しっかりとスコープで捉えた敵に、自慢の射撃が当たらない。シールドで遮られ、ただ
の一発もだ。

過去にウィッチやウィザードと戦い、魔力シールドで自らの攻撃を弾かれたネウロイ
達も、こんな惨めな気分だったのだろうか――と、優人は歯噛みする。

「くっ……」

雄叫びを上げると同時に、ウォーロックはビームによる報復を見舞った。優人は咄嗟にシールドを張った。高出力ビームの衝撃がシールド越しに伝わり、全身が強張る。

(やっぱり、イリスの時と同じだ)

気でも狂ったかのようなウォーロックの豹変ぶりは、かつて優人が直面したイリスの暴走と極めて酷似している。

かつてブリタニアのストラライカーユニット共同研究所では、ウィッチやウィザードが駆る飛行脚・歩行脚とは異なつた視点から、魔法力を持たない一般兵でも扱うことが可能な対ネウロイ用兵器の研究・開発が進められていた。ギリシア神話に登場する虹の女神と同じ名が与えられたイリスは、その試作機だった。

約5年前のワイト島。戦闘中に受けた攻撃が呼び水となり暴走状態に陥つたイリスは、シールド越しに見えるウォーロックのように装甲をネウロイを想起させるハニカム模様の浮かんだ禍々しい漆黑へ変化させ、身震いするほど不気味な唸り声を上げていた。

人間の制御から外れた女神は、まず自らの操縦席に座っていたパイロットを殺害。自我が芽生えたことで、有人機でありながら操縦者を必要としなくなった試作新兵器は、敵味方双方に襲いかかった。ウィッチやウィザードと肩を並べてネウロイと戦うはずだった“女神”は、本能のままに殺戮を行う“怪物”へ変貌し、自らの創造主である人類に反旗を翻したのだ。

本来のスペックを遥かに超える戦闘力で中型ネウロイを撃破。さらには運用試験の仮想敵機役として各国から集められた10名近い航空歩兵を、圧倒的な力の差を見せつけた上で惨殺した。ただ一人、優人を除いて――

(もう誰も死なせない……俺が、俺がこいつからあいつらを守るんだ！)

S―18対物ライフルを握りしめながら、優人は心の中で強く決意する。

5年前のあの時、優人は殺戮兵器と化したイリスと対峙した。しかし、イリスの桁違いの強さと、次々と物言わぬ肉片に変えられていくウィッチ達の最期を目の当たりにした優人は、恐怖のあまり動くことが出来なかった。

持つて生まれた魔法という名の力を、誰かを守る為に活かそうと、そのためにも強くなろうと扶桑皇国海軍へ入隊し、航空ウィザードに志願したはずだった。が、結局誰も助けられなかった。

もう誰も死なせたくない、あんな想いは二度としたくない。その想いを胸に秘め、リバウヤカールスラント、そしてこの西部戦線で戦い、強くなった。人類すべてを守りきれれると思うほど自惚れていない。けれども、自分の魔法が届く距離にいる人々のことはなんとしても守りたい。

(十分引き離したな……)

芳佳達のいる赤城の艦影を、優人は遠目で確認した。既に遣欧艦隊との距離は大幅に

開いているので、心置きなく戦うことが出来る。しかし、ウォーロックに対して有効打を与えられない現状において、優人の勝ち目は薄い。

言うまでもないことだが、優人の魔法力やS-18対物ライフルの弾薬には限りがある。使い魔との同調がまだ完全には回復していないことから、魔法力の消耗はいつもより激しい。

対してウォーロックは、ガリアの巢に潜んでいた全てのネウロイと戦った直後にも関わらず、燃料や弾薬を使い切る気配をまったく感じない。

攻撃の手を緩めることなく、雨のようにビームを放つウォーロック。優人は持久戦に考慮し、シールドを使った防御から、零式の運動性を活かした回避行動に切り替える。旧式化したつとも、他国産ストライクユニットの追従を許さない運動性は今だ健在。そのおかげで、イリスの時も命拾いした。

(イリスに比べれば、遥かにマシだけど……やっぱり、キツイな……)

強力なビーム兵器を主兵装としているウォーロックの総合火力は大型ネウロイ以上だ。それに加え、先代機であるイリス譲りの強固なシールドを装備している。

さらには、新開発のジェットエンジンを搭載し、飛行形態時には亜音速での飛行が可能としている。

数年間の技術革新の恩恵によって、先代機よりも精錬されているウォーロックだが、

不思議とイリスほど圧倒的な強さや恐ろしさは感じなかった。それ故に、冷静に分析・判断する程度の余裕が、優人には残っていた。

「お兄ちゃあああああああ〜ん！」

「……………えっ？」

ふと耳朶を叩いた聞き覚えのある大声。ウォーロックへの対処法を思案していた優人の思考が一瞬停止する。

声のした方向へ恐る恐る目をやると、赤城に艦載されていたもう一機の零式を履き、九九式二号二型改13mm機関銃を両手に抱えたウィッチが一人、自分の元に向かっているのが見えた。

「芳佳っ!？」

優人は思わず目を見張った。こちらに飛んでこようとしているのは、彼の最愛の妹——宮藤芳佳だったのだ。

近づく芳佳に気付いたのは優人だけではない。ウォーロックもまた、新たに現れたウィッチの存在と接近を察知していた。機体を反転させ、突っ込んでくる芳佳にビームの照準を合わせる。

「危ない！」

妹の危機に優人は声を張り上げる。ウォーロックは、両腕の間にビームを収束させる

ことで、より強力な一撃を放とうとしていた。

「やああああっ!」

自分へ向けて発射されようとしているビームにまったく臆することなく加速した芳佳は、シールドを展開しながらの体当たりをお見舞いする。

ビームと魔法の干渉によって衝撃が発生する。ウォーロックは仰け反り、吹き飛ばされた。

「うそお……」

思い切りがいいと言うか、なんと言うか。脳筋全開な妹の戦法に優人は啞然とするも、すぐにハツとなつてS-18対物ライフルを構え、隙のできたウォーロックへ20mm弾を叩き込んだ。見事命中し、装甲の一部が破損する。

手痛い一撃を食らったウォーロックは、慌てたように飛行形態に変形し、宮藤兄妹から距離を取った。

「芳佳!」

ウォーロックが離れると、優人はすぐさま芳佳の元へ駆け寄った。

「お兄ちゃん、大丈夫!」

「それはこつちに台詞だ!また無茶して!」

芳佳が強力魔力シールドを張れることは分かっているが、それでもビームを撃とうと

するウォーロックに正面から突っ込んでいった芳佳の姿を見て、優人は肝を冷やしていた。

「ごめんなさい。でも——」

「でももへちまもな……いや、今はいい」

優人は説教を止めて上を向く。上昇していったウォーロックは上空でUターンした後、急降下を始めた。機首及び機首に装備されたビーム砲が宮藤兄妹に向けられている。「どうせ帰れ、って言っても聞かずに残るんだろ？なら怪物退治に付き合ってくれ！」

切羽詰まった状況。頑固な芳佳を説得して赤城に返すには、時間が足りな過ぎる。それに、先程のシールドアタックで、ウォーロックは芳佳のことも殲滅対象と認識しただ。ずだ。

自身に強烈な体当たりを見舞い、損傷する原因を作ったウィッチを見逃がしてくれるはずもない。

「う、うん！もちろんやるよ！」

と、芳佳が応じた直後に、ウォーロックがビームを撃ってきた。反射的に左右に分かれ、攻撃を回避する優人と芳佳。

二人が躲したビームは海面は抉り、爆音と共に巨大な水柱を立てる。雨のように降り注ぐ水飛沫が、戦闘空域に場違いな美しい虹を掛ける。

速度を落とし、人型形態へ変形するウォーロック。宮藤兄妹の姿が見えない。水飛沫の霧が立ち込めた見通しの効かない中、姿を消した二人を焙り出そうとウォーロックは両腕の機関銃を乱射する。

「こつちだ！」

叫び声と共に、飛沫の中から優人が姿を見せる。すかさずS-18対物ライフルを発砲するが、またもやシールドで防がれる。しかし、何故か優人は口元に笑みを浮かべていた。

（かかった！）

優人が心中で呟くと、ウォーロックを挟んで反対側から零式のプロペラ音を響かせ、芳佳が現れた。

やや遅れて水飛沫の中から飛び出した芳佳は、先程の優人の攻撃で装甲が破壊された箇所を狙い、13mm機関銃のフルオートで撃ち放つ。

不意と弱点を突かれたウォーロックは、損傷箇所から黒煙を吐き出した。バランスを崩して海へ落ちそうになるのをどうにか堪え、ウォーロックは再び宮藤兄妹から距離を取る。

「やった！上手くいっただよお兄ちゃん！」

咄嗟に思い付いた即席かつ単純な連携攻撃ではあったが、予想以上に効果的だったた

め、芳佳は歓喜の声を上げる。

「油断するな！また仕掛けてくるぞ！」

と、妹を諫める優人。もう同じ戦法は通用しないが、芳佳の参戦により形勢は逆転したと言える。

「一気に畳み掛ける！ついてこい！」

「はいっ！」

射撃を続けながら、優人と芳佳はウオーロックへ食らいつかんとする。

ストライカーユニット『零式艦上戦闘脚』と対ネウロイ用兵器『イリス』の開発者である宮藤一郎を父に持つ、扶桑海軍ウイザードとウイツチの兄妹。

敵側のテクノロジーを利用して開発された、イリスの後継機とも言える遠隔操作式半自律型攻撃兵器ウオーロック。

まるで運命に導かれたかのように、両者は零式とイリスが開発されたブリタニアの空で激突する。



シャーリーとルッキニーを乗せたソードフィッシュは、戦闘中の宮藤兄妹とウオー

ロックをはつきりと視認出来る距離まで近付いていた。

「何だあ？ 優人と芳佳が、ウォーロックと戦ってるぞ！」

操縦席に座るシャーリーの脳中に疑問符を浮かんだ。ウォーロックが扶桑の空母を攻撃していたかと思えば、今度はそのウォーロックと宮藤兄妹が戦っている。

扶桑艦隊に接近して詳しい状況確認するつもりが、ますます分からなくなってしまうた。

「二人を助けなきゃ！」

「ああ……あつ……あつ……」

一瞬も迷うこともなく、宮藤兄妹を助けようとするルッキーニの意向に二つ返事で応じるシャーリーだが、ある致命的な問題に気付いた。

「コイツ、武装なんてしてないぞ！」

例え武装があったとしても、大型ネウロイを瞬殺するような相手に、ソードフィッシュで挑むのは無謀というものだろう。



その頃――

ウォーロックの攻撃を受け、黒煙が上がっている旧501基地。その本部管制塔は、混乱に乗じて乗り込んだミーナ達カールスラント組によって掌握されていた。

「ふふん……」

「へ……へ……」

使い魔であるジャーマンポインターの耳と尻尾を出現させて仁王立ちするバルクホルン。その視線の先には、彼女の手で叩きのめされ、ボロ雑巾のような姿となったマロニーの副官が転がっている。

普通の人間が、魔法力を発動したウィッチに敵うはずもない。反撃する間もなく、一方的に叩き伏せられた。

「ひいひいひい……」

副官と同じくマロニーの野望に付き合ったウォーロック隊の面々が、バルクホルンに睨まれ、情けない声を上げる。

部屋の隅で身を寄せ合いながら震えている彼らから、抵抗の意思等は微塵も感じない。

当基地は、ミーナ達によって完全に制圧——いや、奪還されたと言うべきか。

「我々をどうするつもりだ？」

追い詰められたマロニーが、苦虫を噛み潰したような表情で問う。

ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官——実質的最高指導者の地位に胡座をかいていた空軍大将も、こうなってしまうえば形無しだ。

「どうする、ミーナ?」

バルクホルンは、楽しげな口調で訊ねる。マロニーが自分達の上官に就任してから今日に至るまで、冷飯を食わされ続けたウィッチーズ。溜まりに溜まった鬱憤を晴らす機会が、漸く訪れたのだ。

「ふう……」

管制室上部に設置された司令用デスクの前に立つミーナは、マロニー自らが保管していた資料類に目を通すと、軽く息を吐いた。

「ウィッチーズを陥れようとして、随分いろいろとなさったようですね、閣下?」

読み終えた資料をデスクに置いたミーナは、さらに言葉を続ける。

「かつて秘密裏に行われていたネウロイのテクノロジー利用した新兵器の開発計画を知り、ウィッチーズを超える力を得るため、開発陣の一人である石威博士を抱き込み、ウォーロックの開発を命令。それらの事実を隠そうとして、ウィッチーズを無理矢理解散に追い込もうとした」

ミーナがそこまで語ると、バルクホルンはマロニーの隣で崩れ落ちている石威に目をやった。

己の人生の最高傑作、と太鼓判を押したウォーロックが暴走。そのショックで彼は、
“心ここに在らず”といった感じで、ミーナの声も聞こえていないようだった。

「良い計画でしたが、優人の作戦案と、芳佳さんの軍の理解を超えた行動に慌てて動いたのが失敗でしたね」

「もつと……もつと早く芳佳を信じてやっていけば」

ネウロイに対する憎しみの感情に流されたばかりに、芳佳の言い分には一切耳を貸さなかった。バルクホルンは、慚愧の念に駆られる。

「あっ!?おーい、大変だ!」

ふと窓から外を眺めていたハルトマンが、ミーナ達へ振り返って叫んだ。

「赤城が沈みそうだよ!あっ!航空歩兵が二人、ウォーロックと戦ってる!誰だ!」

ハルトマンの報せを受け、ミーナは灰色狼の耳と尻尾を出した。固有魔法『空間把握』を発動させ、ウォーロックと戦っている航空歩兵の感知と識別を始めた。

「……優人と、芳佳さんだわ!」

「あいつらが!」

と、ハツとなつて驚くバルクホルン。

「あり得ん!お前達のユニットは、すべてハンガーに封印されているはずだ!」

ミーナの分析に、マロニーが異を唱える。確かに、赤城に乗艦して海上にいるはずの

宮藤兄妹が、H鋼で封鎖されたハンガー内からストライカーユニットを持ち出すことなど出来ない。当然、何者かがハンガーに侵入したという報告も受けていない。

「あのストライカーユニットは、赤城に艦載されていたものですよ」

ふと入り口の方から男の声が聞こえてきた。目を向けてみれば、扶桑海軍の制服に身を包んだ中年男性が立っていた。扶桑海軍遣欧艦隊司令長官——赤坂伊知郎中将だ。

「赤坂中将?！」

驚いたミーナが声を上げると、赤坂の背後より大勢の扶桑海軍兵が現れ、管制室へなだれ込んで来た。四式自動小銃で武装した扶桑海軍の陸戦隊だ。陸戦隊の面々は、マロニーと石威。そしてウォーロック隊の将兵・研究員を取り囲み、四式の銃口を向ける。

「赤坂!——一体何の真似だ?!」

激昂するマロニー。皮肉なことに今のマロニーの姿は、彼の命を受けたブリタニア軍兵士に包囲された時のウィッチーズに酷似している。

「それはこちらの台詞ですよ、マロニー大将閣下」

赤坂は、総司令部の上官であるマロニーを嘲笑うように言葉を発した。

「何故そちらの兵器が、我が遣欧艦隊の艦艇を攻撃しているのでしょうか? よもやネウロイと誤認した、などとは言いませんまい」

「うっ……」

穏やかで丁寧な口調ながら威圧を孕んでいる赤坂の問い掛けに、マロニーはぐうの音も出ずに口ごもる。

「ミーナ中佐」

次に赤坂は、視線をマロニーからミーナへ移した。

「宮藤兄妹だけでは、時間稼ぎがやつとだ。ここは我々が引き受ける、君達にはウォーロックの対処を頼みたいのだが？」

「了解しました、ウォーロックはお任せください！」

赤坂からの要請に敬礼で応じると、ミーナはすぐに駆け出した。

「行くか！」

ハルトマンも窓辺から離れ、ミーナに続いた。

「わっ……ま、待て待て待てっ！」

置いてかれそうになるバルクホルン。赤坂に敬礼すると、慌てて二人の後を追った。

赤坂は、カールスラントの三人娘を笑顔で見送ると、再びマロニーに向き直った。

「さて、話を聞かせて頂きましうか。ウォーロックと、お隣の扶桑人について」

赤坂は、石威をチラリと見る。数年間、行方が知れなかった自国の技術者と、こんな形で再会するとは思っていなかった。

「くっ……扶桑の狸がっ！」

赤坂と陸戦隊に拘束されたマロニーには、そう毒突くことが精一杯だった。

◇ ◇ ◇

同じ頃――

「あ……」

海から上がっていた黒煙が気になったリーネは、運転手に頼んで開けたら崖の上まで車を回してもらっていた。ロールスロイスから降りると、海の方へ目を向ける。海上には沈みかけている赤城、その上空では優人と芳佳がウォーロックと戦っている。

「あれは、ウィッチですか？」

やや遅れて車から降りてきた運転手が、リーネに訊ねる。

「ええ……扶桑のウィッチと、ウィザードです……」

宮藤兄妹がいる空を見つめたまま答え、さらに言葉が続けた。

「私の一番大切な友達と……お兄ちゃんみたいに優しい人です」

大切な友人と、その兄について呟いたリーネの表情はパツと明るくなる。すぐさま踵を返し、ロールスロイスに向かって走り出した。

◇ ◇ ◇

再び、ドーバー海峡上空――

(どうして……どうしてウォーロックが赤城を?)

優人と共にウォーロックと戦いながらも、芳佳の心中では疑問符が躍っていた。

(それにまるでネウロイみたいな……)

複数の記憶が、芳佳の脳裏にフラッシュバックする。ネウロイとまったく同じビームを撃つウォーロック、ネウロイのコアがある実験室の隅に置かれていたウォーロック、自分に何かを伝えようとしていた兄妹のような二体の人型ネウロイ。

「ネウロイ!」

芳佳がハツとなつたその瞬間、ウォーロックは再び海に向けてビームを放つ。

「わっ!……くそっ!」

ビームの着弾により、優人の行く手を阻むようにして海水が舞い上がる。その隙にウォーロックは、素早く芳佳の正面へと回り込んだ。

目の前でホバリングするウォーロックに対し、芳佳はすかさず13mm機関銃を構える。しかし、至近距離で銃口を向けられたウォーロックは攻撃を突然中止し、頭部のハッチを開いた。機内から筒状のガラスケースが迫り上がってくる。

「ああっ!」

ガラスケースの中身を見た芳佳は驚愕のあまり声を上げた。ケース内に納められていたのは、ネウロイのコアだったのだ。

イリスの時もそうだったが、ネウロイのテクノロジーを解析することは出来ても再現することは出来なかった。それ故に、制御や動力にコアを利用することでビームやシールド実装や基地からの遠隔操作を可能としていた。

「……………」

ウイツチ型ネウロイと同じようにコアを見せるウォーロック。

芳佳はケースの中で輝くコアをじっと見据えながら、ウイツチ型ネウロイの時と同じく、ゆっくりと左手を伸ばした。

——人型ネウロイがそうだったように、ウォーロックとも心を通わせることが出来るのではないか？

そう思っつて。しかし、芳佳が開いた両腕の間に入ると、ウォーロックのビーム発射口が輝き出した。

「っ!？」

ビームが自分に向けて発射されようとしていることに気付いた芳佳だが、魔力シールドを使った防衛は間に合いそうもない。死を覚悟した芳佳は、反射的に目を瞑る。

「うちの妹に何してんだ!このクソ野郎っ!」

殺気を孕んだ凄まじい怒鳴り声と共に、20mmの魔導弾がウォーロックの右腕に直撃する。妹への攻撃に激怒した優人の、S-18対物ライフルによる狙撃だ。

右腕を損傷したウォーロックは、悲鳴と唸りが合わさったような不気味な叫び声を上げると、急ぎガラスケースを戻してハッチを閉じる。変形はせず人型のままその場から離脱していった。

「芳佳！大丈夫かつ!？」

血相変えた優人が、慌てて芳佳に駆け寄る。

「うん、大丈夫!」

と、頷いて答える芳佳。もし優人の狙撃が一瞬でも遅れていたら、芳佳は人型ネウロイの兄妹(?)と同じように消し飛んでいたことだろう。

(違う……これは、あのネウロイじゃない!敵なんだ!)

騙し討ちにあつたことで、芳佳はウォーロックを敵だとハッキリ認識し、13mm機関銃を構え直した。

二人が正面に目を向けると、手痛い一撃を受けたウォーロックが赤城の方へと逃げていくのが見えた。

「あの野郎、また赤城に……」

妹を殺されかけた優人は、恐いほどの憎しみをウォーロックに抱いていた。

「追うぞ！」

「はいっ！」



空母赤城、飛行甲板――

損傷した右腕を庇うようにして飛行するウォーロックと、追い掛ける宮藤兄妹の戦闘を、ペリーヌと坂本が甲板から見上げていた。

「すごい……」

優人と芳佳の戦いぶりに魅せられ、ペリーヌは思わず感嘆の声を漏らした。

「ああ、あの化け物相手に優勢とは……」

坂本もペリーヌに同意する。兄妹だけあって、二人の連携には目を見張るものがある。

坂本は、チラツと優人に目をやった。長い間共に戦ってきた自分よりも、芳佳とロツテを組んだ方がいい動きをしているように思えた。

(少し、妬けるな……)

芳佳が、大ベテランの優人についていけるほどまでに腕を上げたことが喜ばしい反

面、少し複雑だった。

愛弟子の成長を手放して喜べない自分自身に坂本が苦笑していると、またもやウォーロックのビームが赤城を襲った。

「あつー！」

「きゃああああつー！」

さらに傾く赤城の船体。被弾により発生した衝撃で、二人は甲板から投げ出された。

「お兄ちゃんー！」

「ああ、わかって……うわっ！」

芳佳と優人が二人の危機に気が付いたものの、助け向かおうとする。だが、ウォーロックのビーム攻撃によって阻まれてしまう。

「お前は卑怯なやり方でしか戦えないのかよっ！」

仲間の救出を妨害された優人は、ウォーロックに振り返ると怒りに満ちた声で叫び、20 m 魔導弾を撃ち込む。

弾をシールドで受けるウォーロックは戦闘中に自己進化でもしているのか。再生能力までも手に入れ、右腕を再生していた。

第46話「再集結」

ブリタニア空軍大将トレヴァー・マロニー率いるウォーロック隊の手に落ちていた501基地は、扶桑海軍中将赤坂伊知郎が指揮する遣欧艦隊陸戦隊によって、完全に制圧されていた。

基地のあちこちでは、陸戦隊員に四式自動小銃や一〇〇式機関短銃を突き付けられたマロニー配下の将兵達の姿が認められる。皆、両手を頭の後ろで組み、床に膝を着いていた。

ウォーロックが扶桑の艦を攻撃した事実があるからこそ、遣欧艦隊は、このような強行手段に出ることが出来たのだ。

すぐにも艦隊司令長官殿の命で基地内の徹底的な調査が行われ、マロニーや彼の一派が行ってきた悪事の数々は一両日中に露見するだろう。

(西部方面総司令部内の派閥争いは、赤坂中将の勝ちみたいね……)

バルクホルン、ハルトマン共に格納庫へと向かって走っていたミーナは、基地の場景を横目で見据えながら心の中で呟いた。

すぐ隣ではバルクホルンが、これまでのマロニー一派の行動をしたり顔で解説してい

た。

「つまりだ。優人がネウロイと接触する旨の作戦を提案し、芳佳は基地を抜け出してまでネウロイと接触しようとした。だから奴らは慌てて尻尾を出した、つて訳さ。分かるだろう、ミーナ？」

「うん、はいはい」

分かりきっていること力説されて、ミーナは苦笑気味に応じる。次にバルクホルンはハルトマンへ話を振った。

「だろ、エーリカ？」

「ああ、もう私の知ってるトゥルルーデじゃない……」

バルクホルンの熱弁にゲンナリとするハルトマン。本人は否定するだが、確かにハルトマンの言う通り普段のバルクホルンは、ここまで多弁でも知的でもない。

やがて格納庫前に到着する三人だが、そこには先客がいた。

「う〜ん……」

「……………」

先客の正体は、打ち込まれた巨鋼を見上げるエイラと、逆に足元へ視線を下げているサーニヤだ。

貨物列車でロンドンへ向かっていたはずの二人が、封鎖された格納庫の入り口を前に

して途方に暮れている。

「エイラさん！サーニヤさん！」

気付いたミーナが声を掛けると、二人はほぼ同時に振り返る。

エイラは、ミーナ達の姿を見るなり「あつ！」と少し驚いたような声を上げる。基地へ引き返したのは自分達だけで、他は誰も戻っていないと思ったのだろう。

「お前達、何で戻って来たんだ？」

バルクホルンに問われたエイラは、頬をほんのりと赤らめ、しどろもどろな口調で理由を話し始めた。

「あつ……えーつと、あの……れ……列車がサ。ほら、二人とも寝てたら始発まで戻って来ちゃって……あ、うう……仕方ないから、ここの様子でも見ようかナア、って……。ナア、サーニヤ？」

「今、芳佳ちゃんと優人さんが戦ってる。私達、二人を助けに来た」

「うわあああつ！サーニヤ、オイッ！」

サーニヤに同意を求めるエイラだったが、素直なサーニヤはすべて正直に話してしまっただけ。

「素直じゃないなあ」

顔を真っ赤にして狼狽えるエイラを見て、ニヤけるハルトマン。

「私達も同じよ」

「えっ?……」

ミーナの発言に過剰反応したバルクホルンは、慌てて振り返る。

「ち、違う!私は違うぞっ!」

「そうかなあ?優人と芳佳のことが心配で仕方ない、って顔していたよ?」

ムキになって否定するバルクホルンを、ハルトマンがからかった。

「し、していない!断じて、そんな顔はしていない!デタラメを言うなハルトマンっ!」

バルクホルンは子どもみたいにプイツとそっぽくと、両腕を組んでみせた。エイラほどではないが、彼女の頬も紅潮している。

「そんなことよりさ」

「すぐに始めましょう」

ハルトマンとミーナに促され、バルクホルンはH鋼で塞がれた格納庫の入り口へと歩み寄る。

「ふう……」

軽く一息を吐くと、バルクホルンは魔法力を発動させる。使い魔であるジャーマンポインターの耳と尻尾が出現すると、H鋼を両手で掴んだ。

「ぬうううううううううう!」

バルクホルンの固有魔法は『怪力』。基本能力である身体強化能力やその持続力が他のウィッチ・ウィザードのものより遥かに高くなっている。バルクホルンは、この魔法を活用し、力業で格納庫の入り口を抉じ開けるつもりだ。だが、彼女の力を持つてしても数トンはあるであろうH鋼を持ち上げることは容易ではない。

(両腕で不足ならば！)

バルクホルンは、まるで抱き着くかのように身体をH鋼に密着させ、腕だけでなく全身の力を使って引き抜こうとする。

H鋼に押し付けられた豊かな胸がムギユツと潰れて横に広がり、いつも以上に存在感をアピールしている。もしここに宮藤兄妹がいれば、二人の視線はひしやげて形を変えたバルクホルンの胸に釘付けになっていたことだろう。

「ぐううううううううううっ！」

歯を食い縛り、全身全霊で力を込めるバルクホルン。やがて地面に突き刺さったH鋼は、ジリジリと動き始めた。

「うおおおおりやああああああああああっ！」

18歳の乙女のものとは思えないほど逞しい叫び声と共に引き抜かれたH鋼は宙を舞い、一瞬遅れて滑走路に叩きつけられた。



同時刻、ドーバー海峡――

ウォーロックの攻撃により、さらに船体を傾ける航空母艦『赤城』。

衝撃で艦から振り落とされそうになったペリーヌは、なんとか左手で甲板の端を掴み、同じく海へ落ちそうになっていた坂本の身体を右手一本で支えていた。

「しよ、少佐！大丈夫ですかっ!？」

坂本の手をしっかりと握ったまま声を掛けるペリーヌ。

「もういい、ペリーヌ！離せ！」

甲板からぶら下がった状態で一人を支え続けることなど不可能。なんとかペリーヌだけでも助かるようにと、坂本は自分の手を離せと命じる。

「そ、その命令だけは……絶対に聞けません！」

501へ入隊して以来、ずっと坂本のイエスマンだったペリーヌが、初めて命令を拒んだ。

「坂本！」

「ペリーヌさん！」

優人と芳佳はなんとか二人の救出しようとするが、ウォーロックがそれを許さない。

土砂降りのように激しく降り注ぐビーム群によつて、二人は足止めされていたのだ。

優人は自分がウォーロックの攻撃を攪乱し、その隙に芳佳を赤城へ向かわせようとも思つたが、どうも読まれているらしい。どちらも逃がすまいと、ウォーロックはビームによる攻撃をまったく緩めようとしなない。

「くっ……この鉄屑がああああ……っ！」

「でやあああああああ……っ！」

邪魔立てするウォーロックに向かつて、優人は憤然と吼えながら20mm魔導弾で報復する。芳佳も兄に続いて、12.7mm×99弾を連射する。

「んっ……なんだ!？」

ふと自分達の零式ともウォーロックのものとも異なるエンジン音を耳で捉え、優人はハツとなる。エンジン音が聞こえてきた方へ目をやると、赤城に向かつて飛んでいくオレンジ色の機影が認められた。

「シャーリーのソードフィッシュ!？」

優人は一瞬自分の目を疑つた。だが、軍用機とは思えない派手なカラーリングの機体と側面に書き込まれた『GLAMOROUS SHIRLE』という文字を見間違えるはずがない。

シャーリーに頼まれて何度か整備を手伝つたことのある彼女のソードフィッシュが、

赤城に向かつて弧を描きながら、すぐ近くを飛んでいるではないか。

「ルツキーニ！」

ソードフィツシユの操縦席に座るシャーリーが、後部座席のルツキーニに声で合図する。

「イエー！ ジャジャジャーン！」

後部座席より立ち上がったルツキーニはすぐさま魔法力を発動、使い魔である黒豹の耳と尻尾を出現させる。

「る、ルツキーニちゃん!？」

芳佳もソードフィツシユの存在に気付き、座席から立ち上がったルツキーニへ目を向ける。

予想外な形で現れた二人の仲間。宮藤兄妹が唾然としてみると、ウォーロックが突然現れた新しい獲物を追いかけて急降下し、ビームを乱射した。しかし、シャーリーは卓越した操縦技術で、ビームの雨を掻い潜り、赤城へ接近する。ストライカーユニットだけでなく、こちらの腕も確かなようだ。

攻撃によって出来た隙を突き、宮藤兄妹がウォーロックへ集中砲火を見舞う。銃弾は背面に命中し、ウォーロックは破片と黒煙を撒き散らす。

「ペリーヌ！」

「も、もう駄目……」

一方、赤城ではペリーヌの限界が近づいていた。そこへソードフィッシュを追い越したウォーロックが急接近、沈みかけている赤城へさらにビームを放つという追い討ちを仕掛けた。

「きゃああつー！」

被弾による振動で手が甲板から離れてしまい、ペリーヌは坂本と共に海面へ落下していく。

「ああつー！」

「クソツー！」

芳佳と優人は、落ちていく坂本とペリーヌ慌てて追うが、二人の位置からでは間に合わない。

「きゃああああああつー！」

「くっ……ペリーヌっ！」

悲鳴を上げるペリーヌ。坂本は咄嗟に彼女を自分へと引き寄せ、庇うように抱き締める。

（少佐……）

ペリーヌも反射的に坂本の背中へ手を回した。ギュツと目を瞑り、来るであろう海面

激突時の痛みと衝撃に備える。

絶対絶命の状況にも関わらず、ペリーヌは幸福を感じていた。敬愛する上官の腕に抱かれるのなら、このまま死ぬのも悪くない。不謹慎と思いつつも、この時ペリーヌは心からそう思っていた。しかし、彼女も坂本も死ぬことはなかった。

シャーリーのソードフィッシュが、落下する坂本らの真下へ滑り込み、二人を受け止めたのだ。

「よっしやああああああっ！ ナイスキャッチー！」

二人の救出に成功したシャーリーは、歓喜の声を上げる。

「おつかえりい〜♪」

ソードフィッシュの後部座席にすっぽりと納まった坂本とペリーヌを、ルツキーニが笑顔で迎えた。

「やったあ〜っ！」

「あいつら最高だっ！」

グラマラス・シャーリーとフランチェスカ・ルツキーニによる神業レベルの救出劇を目にした宮藤兄妹も欣喜雀躍する。優人に至っては思わずガッツポーズするほどの喜びようだった。

感動の余韻に浸る兄妹の心に水を差すかのように、ウォーロックはビームを撃ち込ん

できた。

「芳佳、危ないっ！」

「はっ!？」

ウォーロックの不意討ちに気付いた優人がシールドを張り、ビームから妹を守る。

「空気読めよ、このガラクタがつ！」

優人はウォーロックへ向かって吐き捨てる、芳佳と共に身を反転させて、己の敵と改めて向き合った。

「あとはこいつだけだ！さっさと片付けて、基地に帰るぞ！」

「はいっ！」

優人と芳佳は銃の弾倉を交換すると、再びウォーロックへ向かっていった。



再び、501基地――

「はあ……はあ……」

正門でロールスロイスから降りたりーネは、基地内の森を駆け抜け、格納庫付近まで来ていた。

（待つてて、芳佳ちゃん……待つてて、優人さん。今行くから……）

自信を失っていた自分に戦う勇気をくれた親友。新人である自分をいつも気に掛け、温かく見守ってくれていた兄のような先輩。今度は自分が二人を助けるんだ。

息を切らしながらも走り続け、やがて森を抜けたリーネは基地の滑走路に到着する。

「リ〜ネ〜！」

リーネを出迎えたのは滑走路に着陸するシャーリーのソードフィッシュと、その上から手を振るルッキーニ。

そして、ストラライカーユニットを装備したストライクウィッチーズの仲間達だった。

「あ……ふわああ………」

リーネは思わず表情を綻ばせる。マロニーの策略によって一度は解散し、二度と会えなくなることも覚悟していた第501統合戦闘航空団のメンバーが、再びここに集まっていた。

そのことが嬉しくて嬉しくて。喜びのあまり疲れていたことも忘れ、リーネは格納庫へと駆け出した。

「わあ、来た来たあー！」

リーネに向かって、両手を振るハルトマン。

「遅いぞ、リネット・ビショップ」

と、バルクホルン。いつも通りの厳しめな口調だが、その表情には優しげな笑みが浮かんでいた。

「おかえり」

と、声を掛けるミーナは、まるで家に帰ってきた我が子を出迎える母親のようだ。

「あなたが最後よ」

「はい！」

仲間達の元へ駆け寄りながら、リーネは快活な声で答えた。



再び、ドーバー海峡――

宮藤兄妹と、ウオーロツクの死闘は続いていた。散々攻撃を受けたにも関わらず、ウオーロツクは今だ健在。戦闘中に手に入れた自己修復能力により、破損した装甲は新品同然に修復されている。燃料や弾薬を使い切る様子もやはりない。暴走開始直後と比較して、反応速度も上昇している。

一度は優位に立ったウイザードとウイツチの兄妹は、次第に追い込まれていく。

「きこやああつ」

ウォーロックのビームが、芳佳の右脚のストライカーユニットを掠めた。被弾したストライカーは黒煙を上げ、プロペラの回転を止める。

「芳佳っ！」

優人はバランスを崩した芳佳の右手を咄嗟に己の左手で掴み、右腕のみでS—18対物ライフルを構えて発砲するも、重量ある対物ライフルの片手撃ちは容易に回避されてしまう。

「芳佳、大丈夫か？」

ウォーロックに視線を向けたまま、優人が問い掛ける。

「はあはあ……。うん、大丈夫」

芳佳は、いつぞやのサーニャのように片方のストライカーのみを失っていた。

慣れない片肺飛行でも、どうにか態勢を立て直したようだが、ウォーロックとの戦闘で息が上がるほどまでに魔法力を消耗している。それに芳佳はもちろんだが、優人の方も残弾が心許なくなっていた。

一気に畳み掛けるつもりか、ウォーロックはビームの威力を維持したまま、機関銃のように連射してきた。時間の経過と共に主兵装であるビームもより強力なものへと進化していたのだ。

芳佳を庇うようにしてシールドを展開する優人だが、長くは保ちそうもない。

(くそっ！なんとか芳佳だけでも逃がせないか？)

優人が必死に考えを巡らせていると、遠方より飛んで来た一発の銃弾が、ウォーロツクの脚部に命中した。推進機を脚部ごと破壊されたウォーロツクは、自らのコントロールを失い、赤城の船体に激突。共に海中へと沈んでいった。

「はあはあ……やった」

「ああ、間一髪だったけどな……」

一度は死を覚悟した宮藤兄妹。勝利の喜びよりも、ウォーロツクが倒されたことに安堵していた。

「芳佳ちゃん！優人さん！」

狙撃を行ったのはリーネだった。彼女の固有魔法『射撃弾道安定』は、魔法力で物体を動かす念動力を弾丸に作用させ、発射速度や威力の向上及び射程の延伸を行う長距離狙撃向きの魔法だ。その力を込めたリーネの一撃がウォーロツクを撃墜したのだ。

「あ、赤城が……」

「沈んでいく……」

艦長の杉田をはじめとする乗員達は、救命艇から赤城の最期を見届けていた。その表情は、悲しみに暮れていた。

「お待たせ！」

「芳佳〜！優人〜！」

背後から聞こえてきたシャーリーとルツキーニの声に優人と芳佳が振り返ると、ストライカーを装備したストライクウィッチーズの面々が駆け寄ってきていた。

「みんな！」

駆けつけてくれた仲間達に、芳佳は笑顔を返した。

「二人とも、よく耐えたな」

親友と愛弟子に称賛を送る坂本。

「かなりギリギリだったんだぞ。まったく……」

優人は額の汗を拭い、「やれやれ」と溜め息を吐いた。

「これは必要なくなったようだな」

抱えている芳佳のストライカーに目をやりながら、バルクホルンが呟いた。

「それでもナイかも……」

ウオーロツクが倒され、誰もが戦いの終わりを実感する中、タロットカードを見据えたエイラが独り言ちる。

彼女が手にしているのは、『タワー』のカード。タロットにおいて、正位置・逆位置のいずれにおいても凶とされている唯一のカードだ。

「えっ？」

リーネとサーニヤが頭に疑問符を浮かべながら、エイラに振り返る。

「ホラ、見て」

エイラがカードから海面へ視線を移すと、その先で巨大な水柱が上がる。海の中から“何か”が浮上しようとしていた。

「な、何だ!?!」

「一体どうなっているんだ!?!」

「何だ、あれは!?!」

「……まさか」

目の前で起きた異変に赤城の乗員達は色めき出す。唯一冷静さを保っていた杉田は、じつと海面を見つめていた。

やがて水柱が消え、巨大な“何か”が海中から姿を現した。圧倒的はらな存在感を放つそれは、鯨にしてはあまりに大き過ぎる。

「なっ!?!赤城!?!」

優人は驚愕のあまり声を上げる。“何か”の正体は、たつた今ウオーロックと共に沈んだはずの扶桑海軍航空母艦『赤城』だった。しかし、ウオーロックの攻撃による損傷は一切見られず、艦の外観も以前とは明らかに違っている。

船体の殆んどが禍々しい漆黒に変色し、甲板や船底の一部は赤く輝いている。全体的

にハニカム構造で覆われた姿は、まるでネウロイか暴走状態に陥ったイリスやウォーロックのようだった。

「あ……ああ……」

目を見開く芳佳。リーネに撃墜されたはずのウォーロックを、赤城の艦首部分に見つけたのだ。

「ウォーロックが……赤城と?!……」

変わり果てた赤城の姿に、坂本は言葉を失う。どういった原理でこうなったかは不明だが、ウォーロックは衝突した際に赤城と融合。倒したはずの怪物が、新たな力を手に入れて地獄の底から蘇ってきた。

戦いはまだ終わらない。完全に浮上したウォーロックは、自らの復活を宣言するかのうように不気味な雄叫びを上げた。

第47話「決戦」

優人 side —

空飛ぶ船を見たことがあるだろうか？飛行船や飛行艇などとは違う。海上を航行するはずの船が、羽を生やしたかのように宙に浮き、悠々と大空を駆ける。

子どもの頃、そういつた空船が描かれた挿し絵を何かの本で見た気がする。お気に入りの童話本か、妹に読んでやった絵本か、それとも小学校の授業で使っていた国語の教科書か。10年以上も前のことで判然としない。

恥ずかしい話だが、当時の俺にとっては航空機やウィッチ・ウィザードの駆る飛行脚よりも、そんな空想上しか存在しないの方が魅力的に映っていた。

今よりも幼く、遙かに純粋な心の持ち主だった俺は、一度で良いから海の青空を漂う船を見てみたいと本気で思っていた。

それがまさか、こんな形で叶うとは。『事實は小説よりも奇なり』とは、よく言ったものだが、俺は少しも嬉しくなかった。

理由は二つ。一つは、自分はもうメルヘンを信じるような年頃ではないということ。もう一つは、船を浮かせている存在がネウロイすら上回るほどの化物だということだ。



o u t s i d e —

ドーバー海峡には、ネウロイのものとはまた違った唸り声が響いていた。歪みつつも軍艦の汽笛を想起させるそれは、ウォーロックと融合した赤城から発せられている。

ほんの少し前まで、兵器らしからぬ生理的な挙動で飛び回り、ウイザードとウイツチの兄妹を翻弄していたウォーロックはピタリと動きを止め、機体は赤城の艦首部分へ銅像のように収まっている。

新たに出現した怪物に対処するため、ストライクウイツチーズは早急に態勢を整えていた。

優人は主兵装を九九式二号二型改13mm機関銃に変更し、残弾一のS—18対物ライフルを背負う。さらに芳佳の13mm機関銃を一時的に預り、弾倉を銃弾が詰まった新しいものに交換していた。

「ありがとうエイラ、サーニャ。おかげで助かったよ」

弾切れ寸前だった優人は、基地から武器弾薬を持って来てくれたエイラとサーニャに感謝の言葉を述べる。

「いえ……」

「今日だけダカンナア……」

やや視線が下げるサーニヤと、ピットとそっぽくエイラ。雪を想わせる二人の頬にポツと紅が灯される。照れ臭そうらしい。

「よつと……」

芳佳はウォーロックとの戦闘で大破したストライカーユニットを、パーソナルマークが入った自身の零式に履き替えていた。彼女を手伝うのは、ユニットを運んでくれたバルクホルンとシャーリー。

優人を部隊のお兄さん役とすれば、二人はお姉さんコンビ。普段からこの三人は、部隊の年少組である芳佳達のことを気にかけている。

「シャーリーさん、バルクホルンさん。ありがとうございます」

ストライカーの履き替えを手伝って貰った芳佳もまた、愛らしい笑顔で二人に礼を述べる。

「どういたしまして」

「持つてきて正確だったな」

シャーリーとバルクホルンも、芳佳に優しく微笑み返した。

ウォーロックの攻撃で損傷した零式は、元々赤城に艦載されていた扶桑皇国海軍遺跡

艦隊所有の機体である。既に赤城への返却は叶わなくなったため、陽炎型駆逐艦『雪風』に預けられた。

ウオーロックの攻撃から唯一生き残った雪風は、赤城及び同型艦『天津風』乗員の救助を行っている。赤坂が手配したのだろう、ブリタニアに駐留していた遣欧艦隊所属艦艇も応援に駆けつけていた。

芳佳は零式の魔導エンジンを始動させ、プロペラを回転させる。その直後、ウオーロックに乗っ取られた赤城が

、全方位へ向けて多数のビームを放った。ウオーロックとの融合によって、搭載されているすべて砲門はより攻撃力の高いビーム砲へと強化されていた。艦底にも発射口が追加され、死角は殆んどない。

ウイツチーズは暴風雨のようなビーム群を掻い潜り、赤城を追跡する。

「美緒、始めるわよ」

「ああ、いつでもいいぞ」

ミーナと坂本は手を繋ぎ、互いに固有魔法を発動させる。親しい関係にあるウイツチないしウイザードが接触することで、相互の固有魔法が融合させな能力を発揮できる。二人はそれを利用することでウオーロックと赤城の内部構造を解析するつもりだ。

「な、何だこれはっ!?!……」

坂本は驚愕のあまり言葉を失う。彼女の魔眼とミーナの空間把握が浮かび上がらせたのは、赤城の機関部まで移動したウォーロックのコアと、生物の血管のように艦全体へ張り巡らされている光の管だった。

「ウォーロックと赤城が融合している。これじゃ手のつけようがないわね」
艦がまるごと乗っ取られるという前代未聞の状況に、さすがのミーナも動揺を禁じ得ない。

赤い輝きを放つ管はコアから艦内のあちこちへと延びている。中でもウォーロック本体へ直結する管は異様に太く、毒々しい紫色の光を発している。

「だが、やるしかない！」

改めて瞳に決意の光を宿した坂本が、語気を強めて己の心情を語り始める。

「あれはもうウォーロックでもネウロイでもない、別の存在だ。我々ウィッチーズが止めなければ、誰もあれを止める者はいない！」

自分達が——ストライクウィッチーズが、なんともしても止めなければならぬ。

出来なければ、欧州最後の砦であるブリタニアが、かつて赤城だった目の前の怪物によつて蹂躪され、人類はカールスラントやガリアの時のように多くの人命と、反抗の拠点を失うことになる。

優人と芳佳。扶桑からやって来た兄妹は戦友であり、師であり、上官でもある坂本の

言葉に対して静かに、だが力強く頷いた。

「あつ……来ます！」

魔導針で攻撃を察知したサーニヤが叫ぶ。すると、漆黒の巨体が咆哮と共に全方位攻撃を開始した。

一個艦隊に匹敵する大火力によって展開されるハリネズミのような弾幕が、ウイザードとウイッチーズに襲いかかる。

「ストライクウイッチーズ、全機攻撃態勢に映れ！目標！赤城及びウォーロック！」
『了解！』

ミーナは、今まで何度も繰り返してきたように凛々しい表情と威厳に満ちた口調で指示を出し、隊員全員がそれに応える。

人類連合軍第501統合戦闘航空団『ストライクウイッチ』の全戦力と投入した戦いが始まる。

「コアは赤城の機関部だ」

「外からは破壊できそうにないわね」

無数のビームによって形成される弾幕の中、坂本とミーナが赤城の分析を続ける。

「内部から辿り着くしか……」

「……内部を知っている私が行く！」

「えっ!？」

シールドがまともに機能しなくなってるにも関わらず、内部への突入を進言する坂本。

そんな無茶をさせられない、行かせる訳には行かないと、ミーナは坂本の右手を握っている己の左手にギュツと力を込める。

「シールドを張れないのどうやってあの弾幕を突破するつもりだ？」

無茶なことを言い出す戦友に対し、優人が厳しめな物言いで異を唱える。

「優人。お前……」

「俺が行く。艦内のことなら、俺にだって分かる」

「お兄ちゃん！私も行く！」

すかさず芳佳が名乗り出る。

「私も行きます！」

「わ、私も内部なら多少分かりますわ！」

二人が突入すると聞いて、リーネとほんの少しの間ではあったが赤城に乗艦していたペリーヌも内部突入志を願する。

「リーネちゃん、ペリーヌさん。ありがとう！」

「べっ……別にあなたの為じゃありませんわ！」

笑顔で礼を述べる芳佳に対し、ペリーヌはフンと鼻を鳴らした。

ペリーヌの反応を見て、優人は（素直じゃないなあ……）と心の中で呟きながら笑みを零した。

「ペリーヌ、お前がついていてくれれば心強い。新人達のフォローと病み上がりのお守りは頼んだぞ」

「え？……は、はいっ！」

「……………おい」

敬愛する坂本から頼りにされ、ペリーヌは嬉しそうに表情を輝かせる。

一方、歳下のお守り役が必要だと判断された優人は、不満そうに眉を顰める。そんな優人の表情を見た坂本は、口元に薄笑を湛えている。突入を止められたことに対する、ちよつとした仕返しなのかもしれない。

「では、その他各員は4人の突入を援護。突破口を開いて」

『了解！』

作戦を決定し、各員に指示を出すミーナ。それとほぼ同時に上昇していた赤城と、追いかけていたウィッチーズは雲の上へ飛び出した。

「攻撃開始！」

ミーナから号令が掛かり、ウィッチ達は大海原の如く雲海を航行する赤城に向かって

攻撃を仕掛けた。

すかさずビームで弾幕を張る赤城だが、それで怯む者は一人もない。

「他の連中に手柄を残すなよ！」

世界一位の撃墜数を誇るバルクホルン。両手にMG42を持ち、赤城を見据えて余裕の笑みを浮かべる。今日の彼女は一段と士気が高い。

相棒であるハルトマンは、そんなバルクホルンを見て悪戯つ子のように笑う。

「フフ……いつもより張り切っちゃって♪優人と芳佳に良いところ見せたいの？」

「なっ!?……お前というやつは、またそれを!？」

またまた宮藤兄妹のことをネタにからかわれたバルクホルンは、本日何度目かの凶星な反応を見せる。

「先行くよ〜♪」

「あ、コラッ！」

動揺する相方を出し抜くように、ハルトマンは一足先に行動を開始する。

ビーム兵器へと変貌した連装対空砲、対空機銃による迎撃を容易く掻い潜り、赤城に接近する。

「シュトルム〜ッ！」

ハルトマンは自身の固有魔法を発動する。これは『疾風（シュトルム）』という大気を

操作する念動系の固有魔法だ。

「私の仕事を！」

バルクホルンもやや遅れて攻撃を開始する。2挺のMG42から高速で射出された大量の銃弾と、ハルトマンが纏う鎌鼬状の風によって表面の砲座が次々と破壊されていった。

「右ダナ」

「うん」

「上ダナ」

「うん」

こちらは身体を密着させているエイラとサーニヤ。固有魔法『未来予知』の結果をエイラが知らせ、サーニヤに回避を指示する。そして回避の後に、サーニヤがフリーガーハマーで攻撃する。

大火力のロケット兵器であるサーニヤのフリーガーハマーとエイラの『未来予知』を組み合わせ、効率良くダメージを与えていく。

「眠くナイカ？」

「うん、大丈夫」

端的な会話。だが、二人の間には言葉で語る以上に深い絆が確かに存在している。

「攻撃が弱まったぞー！」

そして、こちらはシャーリーとルツキーニのペア。二人は、赤城が飛行している高度よりもさらに上空から戦場全体を見下ろしていた。

「行っちゃおう？パフパフ〜♪」

と、シャーリーの豊かな胸に己の後頭部を乗せるルツキーニ。

「へへへっ♪」

スリスリと自分に甘えてくるルツキーニに対し、母親を想わせる優しい眼差しを向けるシャーリー。どんなに緊迫した状況でも、このコンビは明るさを忘れない。

「ゴオーツー！」

シャーリーはルツキーニを抱えたまま、赤城の艦首へ向かってグライダーのように降下していく。

「行っけえええええ〜っ！ルツキーニ〜っ！」

艦首部分で固定砲台となっているウォーロックが放つビームを軽々と躲し、ある程度まで接近したシャーリーは固有魔法の『超加速』を発動させ、ルツキーニをウォーロック目掛けて投げ飛ばした。

ボンネヴィル・フラッツにおいて、シャーリーを『クイーン・オブ・スピード』たらしめた『超加速』は、自らを周囲に張り巡らされているシールドごと任意の方向へ引つ

張る魔法であるが、仲間のウィッチをカタパルトのように加速させた上で目標へ射出することも可能性なのだ。

「あつちよ〜っ！」

ウォーロックに向かって高速で突進するルツキーニも、自身の固有魔法を発動させる。

ルツキーニの固有魔法は『光熱攻撃』と『多重シールド』。魔法力を冷気に変換する優人との『凍結』とは対照的に熱に変換した魔法力を放出し、重ねて展開した大小様々なシールドの頂点に光熱を持たせる攻撃魔法だ。

その性質上、敵と接触しなければ効果を発揮できないものの威力は絶大で、大型ネウロイの表面装甲を容易に貫通出来る。

シャーリーとの連携によって加速したルツキーニは、自らを必殺の弾丸としてウォーロックが鎮座する艦首へ突撃する。戦艦や大型列車砲も顔負けな破壊力でウォーロックのボディと赤城の艦首を破碎し、大穴を開けた。

「ほちゃ〜っ！」

装甲の破片と水蒸気が漂う白煙の中から、元氣いっぱいのルツキーニが飛び出す。彼女は掠り傷一つ負わずに戻ってきたのだ。

「優人、芳佳！ やつちやええ〜っ！」

元気いっぱい声を出すルツキーニ。彼女に促され、突入班である優人達も動き始める。

「行くぞー！」

「うん！」

「はいっ！」

芳佳、リーネ、ペリーヌの三人娘を指揮する立場にある優人が指示を出す。

赤城の内部へ侵入するため、ルツキーニが開いた突破口へと接近する。しかし、4人が中へ入るよりも先に、破壊された赤城の艦首より無数の小さな影が飛び出してきた。

「お兄ちゃん、あれって!？」

「ああ、小さいが……ありやウオーロツクだ」

艦首に開いた大穴から飛び出してきたのは、飛行形態時のウオーロツクに形状が酷似した子機の大編隊だった。

赤城より溢れ出た子機の大群は優人達へ向かって一斉に突撃を敢行する。その姿は、まるで巣を攻撃してきた外敵へ反撃する蜂のようだ。

サイズを鑑みて、ウオーロツクほどの戦闘力は無さそうだが、数にものを言わせて攻めてくる子機の相手までしては、コアを破壊する前に魔法力と弾薬が尽きてしまうだろう。

「厄介だな……」

優人が13mm機関銃を構えながらぼやく。すると、上空より無数の銃弾が雨のように降り注ぎ、子機供を風ぎ払った。

上に視線を走らせてみると、それぞれ九九式二号二型改13mm機関銃とMG42を構えた坂本とミーナが、援護射撃を行っていた。

「今よ！」

「突入しろっ！」

「恩に着る！」

優人がインカム越しに短くも心からの謝意を伝えると、突入班は再度赤城へ接近、仲間達のサポートのおかげで内部への侵入に成功する。

「っ?!隔壁が！」

と、ペリーヌが声を上げる。機関部へと急ぐ4人の進路を隔壁が塞いでいたのだ。

「リーネ！」

優人が振り返り、リーネが叫び返す。

「はい！」

名を呼ばれただけで、優人が言わんとしていることを理解したリーネは、すかさずボーイズMk. I対装甲ライフルを構え、分厚い隔壁へ魔導弾を撃ち込んだ。

隔壁は破壊され、進路は確保された。突入班は機関部への侵攻を再開するが、宮藤兄妹が通路に入った瞬間に隔壁は再び閉じられてしまう。赤城——いや、ウォーロックの持つ自己修復能力により、隔壁は瞬時に再生されてしまったのだ。

「きやつ!？」

「な、なんですか!？」

揃って悲鳴を上げるリーネとペリーヌ。二人は咄嗟にブレーキをかけながらシールドを展開する。中々際どかったものの、なんとか隔壁と衝突せずに済んだ。

「リーネちゃん! ペリーヌさん!」

慌てて引き返した芳佳が、二人の名を叫びながら隔壁を叩く。その背後では優人がインカムを使い、二人に呼び掛けていた。

「ペリーヌ、リーネ! 無事か!？」

『はい! あ、いえ……少々問題が……』

優人からの通信を受け、ペリーヌが応答する。

『どうした? 負傷したのか?』

『いいえ、私にもリーネにも怪我はございませんわ。ただ、すぐ合流は出来そうもありません』

緊張を孕んだペリーヌの声が、インカム越しに伝わってくる。再生の過程でより堅固

に強化された隔壁。その向こう側では、ペリーヌとリーネが多数の子機に取り囲まれて
いるのだ。

子機は赤城の内部で無尽蔵に製造されているらしい。艦首から出てきた一群の2、3
倍の数が飛行甲板のエレベーターから飛び出し、ウィッチ達は対処に追われていた。

ミーナ・坂本ペアとバルクホルン・ハルトマンペアは各々背中合わせで銃を撃ち続け、
シャーリーとルツキーニはエイラと共にフリーガーハマーのロケット弾を撃ち尽くし
てしまったサーニヤをフォローしている。

『お二人は機関部へ向かって下さい。このうるさい蠅共を始末したら、私達もすぐに向
かいますわ!』

「……わかった。死ぬんじやないぞ!」

ペリーヌの声色から外の様子を察し、優人は一瞬迷った。だが、ウォーロックと融合
した赤城を撃破すれば連鎖的に子機も消滅する。コアの破壊こそが、外で戦う仲間達を
救う近道と判断し、機関部への再侵攻を決意する。

『ご心配には及びませんわ、ガリアを取り戻すまでは死ねませんもの……』

口元に笑みを湛えながら告げるペリーヌ。その直後、ブレン軽機関銃Mk. Iの連射
音と銃弾でネウロイの装甲が砕かれる音が聞こえてきた。

「リーネちゃん、聞こえる!?!」

今度は芳佳がインカムでリーネを呼び掛ける。

『なあに?』

ボーイズライフルの発砲音と共に、リーネの声が返ってくる。

「頑張つて!私とお兄ちゃんも頑張るから!」

『うん!芳佳ちゃん、気を付けてね!』

芳佳を不安にさせないためだろう。危機的状況にも関わらず、リーネの口調は普段通りの穏やかで優しげなものだった。

「芳佳、いくぞ!」

「はいっ!」

コアが存在する機関部へ向け、宮藤兄妹は侵攻を再開する。当然ながら、その道のは決して楽ではなかった。

距離自体はそう長くなく、ストライカーユニットを装備したウィッチ・ウイザードならば、機関部までひとつ飛び出来る。しかし、通路の壁に設置された小型の固定砲台による奇襲や内部の残っていた子機の待ち伏せによって侵攻を阻まれる。

奥に進むほど激しさを増していく敵側の抵抗で機関部まで距離が実際のものよりも遠く感じる。だが、諦めない。本作戦の成否は、扶桑からやって来た宮藤兄妹の働き如何にかかっている。

優人と芳佳は弾薬の消耗を最小限に抑えるため、銃は子機のみを使用し、砲台が放つビームはシールド展開してやり過ごした。

「漸く着いたな」

やがて、二人は機関室前の通路まで到達する。またしても隔壁が通路を塞いでいるが、おそらくこれが最後の障害だろう。

優人は隔壁に向かって13mm機関銃を構え、引き金を引いた。リペリオンで開発・採用されている重機関銃——ブローニングM2と共通の12.7mm×99弾を、弾倉が空になるまで撃ち込んだ。

「ダメだ……ビクともしない」

威力も弾数が足りておらず、隔壁に弾痕を残す程度で破壊には至らない。

「そんなっ!」

芳佳が悲痛な声を上げる。コアの存在する機関部が——自分達ウィッチーズの勝利が目前まで迫っているというのに、あと一步届かない。

「……………」

「…………お兄ちゃん?」

落ち込む芳佳の頭をポンと叩くと、優人は隔壁の前まで進み出る。

「なんだか、ずいぶん久しぶりに使う気がするな……」

優人は苦笑しながら呟くと、そつと隔壁に右手を着いた。すると、優人の身体が青く輝き始めた。

「凍てつけっ！」

叫び声と共に、優人の右手から冷気が発せられる。彼の固有魔法『凍結』だ。機関部へと続く隔壁が一瞬にして芯まで凍りつき、それに伴い強度も大幅に低下する。

次に優人は13m機関銃を鈍器代わりに使用し、銃床で凍てついた隔壁を叩き割る。これで機関室内への侵入が可能になった。

「あっ……」

「お、おいおい……」

赤城の機関部——正解に言えば、機関室だった区間へ乗り込んだ二人は固唾を飲んだ。

機関室内部は今まで通ってきた通路とは違い、原型を保っていないかった。ドーム状の広い空間に、内壁は外側と同様に黒地のハニカム構造に覆われている。中心には赤城を侵食したウォーロックのコアが、恐ろしく肥大化した状態で脈動している。

これほどまでに巨大なコア。戦闘経験の浅い芳佳はもちろん、何年も前からネウロイと戦ってきた優人ですら見たことがない。しかも、今の二人は眼前のコアを破壊可能な武器を持っていない。

「やるしかないか……」

優人は護身用に所持していた十四年式拳銃をホルスターから引き抜く。装填してある全ての銃弾に魔力を込めると、コアを狙って引き金を引いた。

バアン！バアン！バアン！

射出された9つの銃弾が、ほぼ同じ箇所命中する。しかし、通常のコアならいざ知らず。威力の低い8mm南部弾では小さなヒビを入れるのが精一杯で、巨大化したコアを破壊することは叶わなかった。

「っ!?……クソッ……」

優人は悔しさのあまり歯噛みする。仲間達が——ウィッチーズが自分達兄妹を全力でサポートしてくれた。自分達を信じて、コア破壊という重要な役割を任せてくれた。だが、出来ない。

元々、怪我の完治や魔法力の回復が不完全な状態でここまで戦ってきた優人だ。ここまででかなり消耗しており、奥の手である『絶対凍結』は当然として、もう一度『凍結』を使用するだけの魔法力も残っていない。

(もう、何も出来ないの?)

優人と同じ心境で唇を噛む芳佳。ここへ到着する直前に弾薬をすべて使い果たしてしまった彼女にも、コアを破壊することは出来ない。

「……………そうだ！」

何かを閃いたらしい芳佳は、ハッと顔を上げるとコアの方へ近付いていった。

「芳佳？」

優人も怪訝そうな面持ちで芳佳の後に続く。

「お兄ちゃん、私を支えて」

「さ、支え？」

「お願い！」

「あ、ああ……………わかった」

理由も説明されずに「支えて」とだけ言われ、優人は何をどうすれば良いのかわからなかった。当惑しながらも芳佳の背後に回り、腕を伸ばして後ろから抱き締める形で妹を支えた。

「あっ……………」

ギュツと抱き締められた芳佳の身体がビクツと跳ね上がる。

「こ、これでいいか？」

「……………うん、大丈夫」

予想とは違っていた兄の支え方に、軽く戸惑いを覚えた妹は頬をほんのりと赤く染める。同時に胸を幸福で満たしてくれるような温もりと安らぎも感じていた。

優人の両腕にしつかりと支えられた芳佳は、ストライカーユニットのプロペラを一旦止め、逆方向に回転させ始めた。

「ありがとう」

ふと呟かれる謝意の言葉。それは今まで自分の筈として共に空を駆け、共にネウロイと戦ってくれたストライカーユニット——豆柴のパーソナルマークが描かれた零式艦上戦闘機に向けられたものだった。

主からお礼の言葉を賜った零式は、スルツと芳佳の足から脱げ落ちていく。弾頭のように撃ち出されたストライカーユニットの直撃を受け、コアは粉々に弾け飛んだ。

第48話「勝利と後始末」

赤城の機関部に侵食していたウオーロツクのコアは、内部へ突入した宮藤兄妹に破壊された。ハニカム構造で覆われた姿に変貌していた赤城の船体は、本来の外観を取り戻し始める。それに伴い、周囲に展開していた子機群も自然消滅する。まウオーロツクとの融合によつて一時的に備わっていた飛行能力を失い、赤城は雲の下へとゆつくり降下していた。

やがて船体が雲を抜けると、眩い光を放った後に白い破片となつて四散する。空には爆発音が響き渡り、破片はキラキラと輝きながら海へと降り注いだ。

「やったな」

赤城の消滅を見届けたシャーリーは、宮藤兄妹がコア破壊をやり遂げたことを確信する。彼女は口元に薄い笑みを湛え、感慨深げに呟いた。

「あつ?! 優人と芳佳だ!」

海へ降つていく破片を呆然と眺めていたルッキニーが真つ先に宮藤兄妹の姿を見つけた。優人と彼に抱えられている芳佳に向かって、ブンブンと元氣良く手を振る。

「勝つ………た? ……た? ……」

「ああ、勝った。お前の機転のおかげさ」

そう言つて優人は、芳佳を抱き締める腕にさらに力をこめる。

消滅した赤城の破片が白い花卉のように宙を漂い、その中心にいる宮藤兄妹の勝利を祝福しているようだった。

「芳佳ちゃん、優人さん」

宮藤兄妹の元へウィッチ達が集まつていく。一番最初に辿り着いたのはリーネだった。

「やったーやったよ、芳佳ちゃん！優人さん！二人がやつつけたんだよー」

喜びのあまりリーネは、二人に抱き着いた。同時に豊かなに実つた二つの果実が、二人の顔面へ強く押し付けられる。

「リ、リーネ……ちゃん。く、苦しい……」

「ちよつ……リーネ。い、一旦離れ……ムグッ！」

突き出された大きな胸によつて鼻と口を塞がれ、宮藤兄妹は揃つて窒息しそうになっていた。心地好い感触ではあるが、このままでは気絶してしまふ。

芳佳はもちろん、男である優人は呼吸だけでなく理性の方も危ない。

「ぶん」

三人のやり取りを見て、ペリーヌは呆れたように鼻を鳴らす。プイツとそつぽ向く彼

女だが、その表情には穏やかな微笑が浮かんでいる。

「えっ?……あれは?」

ペリーヌは何かに気付き、ガリアの方角へと目を向ける。その視線の先に見えたのは、数年間に渡り我が物顔でガリアの上空に居座っていたネウロイの巣が散っていく光景だった。

「ネウロイの巣が……」

「……………」

消滅していく巣を茫然と見つめる坂本とミーナ。部隊を預かる二人の心には、どんな想いが過つたのだろうか。

「消えていくぞー!」

「ん〜……勝ったあー!」

常にブリタニアを危機に晒してきた——自分達の攻略目標でもあったネウロイの巣が消滅。シャーリーとルツキーニは欣喜雀躍とする。

「ガリアが……私の故郷が、解放された……」

国を追われて以来、どれだけこの日を待ちわびていたことだろう。祖国奪還という願いが成就したペリーヌは、金色の瞳に嬉し涙を浮かべた。

「すごい、すごいよ芳佳ちゃん!」

「……うん」

図らずも、ネウロイの巢を撃破するという人類初の快挙を成し遂げ、リーネは大はしゃぎだ。対して芳佳は気の抜けた返事をする。

自分達の勝利を心から喜ぶウィッチーズの中で、何故か芳佳のみが浮かない顔をしている。

「もうネウロイと分かり合う機会が無くなった、って思う？」

「え？」

耳元で囁かれた声に振り返ると、優人が芳佳に向かって優しく微笑んでいた。

「ほら、そんな顔しない。生きていれば、必ずチャンスがくるさ」

芳佳の複雑な心境は優人に容易く見抜かれていた。妹想いの兄には、すべてお見通しのようなのだ。

「……そっか。そうだよね」

芳佳は強く頷くと、優人に微笑み返した。

「……終わったな」

「ええ！」

坂本の言葉に頷くと、ミーナはどこかさっぱりとした表情で帰投命令を出した。

「ストライクウィッチーズ、全機帰還します！」

『了解！』

激戦を潜り抜けたストライクウィッチーズは、自分達の家でもある基地へと帰っていった。



同時刻、第501統合戦闘航空団基地――

扶桑皇国海軍遣欧艦隊陸戦隊によつて一時的に占拠された501基地。その応接室では艦隊司令長官の赤坂伊知郎中将与、ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官兼第一強襲部隊『ウオーロック』司令のトレヴァー・マロニー大將が面会している。

ソファアに腰掛けた赤坂は、ウオーロック隊から押収した資料に目を通していた。資料にはウィッチーズを陥れるため、マロニー一派が行ってきた裏工作の数々が記載されている。

「事実をねじ曲げた官邸及び連合軍総司令部への報告、マスコミへの偽情報のリーク、ウィッチーズに好意的な新聞社や雑誌社に対する嫌がらせ、501へ支給されるはずの物資の隠蔽、予算の横領及び目的外使用……」

資料の内容を簡潔にまとめ読み上げながら、赤坂はテーブルを挟んだ向かい側のソ

ファーに腰を下ろしているマロニーへ視線を走らせる。

ブリタニアにおけるストライクウィッチーズの権限を削るため、マロニーは様々な裏工作を行ってきた。ウィッチーズへの予算削減も、優人が負傷した際に保管されているはずの輸血用血液が見当たらなかったのも、すべては彼の仕業だったのだ。

さらには、イリスの開発陣の一員であった石威紫朗を己の配下に引き込み、必要な機材や鹵獲したネウロイのコアをはじめとする様々な開発資材を与え、秘密裏にネウロイの研究を行い、ウォーロック0号機を完成させた。

501から横領した資金を注ぎ込んでまで完成させたウォーロック0号機だが、皮肉にもウィッチに代わる新戦力なると期待していたウォーロックは暴走し、航空母艦『赤城』をはじめとする遣欧艦隊所属艦艇を攻撃したことで、政敵である赤坂に付け入る隙を与えてしまった。

「あまりに露骨な遣り口だ、滑稽にすら思えてくる」

赤坂が嘲笑気味に言うのと、マロニーは射殺さんばかりの鋭い目付きで彼を睨み返した。

「それで私の弱味を握ったつもりかね？」

マロニーはバアンとテーブルを力任せに叩き、憤然とソファーから立ち上がった。

「私は……私は誰よりも人類の勝利の為に尽力してきたんだ！ウォーロックの開発もそ

のいっ——」

「あなたの頭にあるのはブリタニアの繁栄と、その中心で実権を握っている御自身の姿でしょう？」

激昂して反論するマロニーだったが、赤坂は木で鼻を括ったような態度で彼の主張を一蹴する。

「いずれにせよ、あなたは一連の騒動の責任を取らされるでしょう。連合軍最高司令部はあなたを501の上官から解任し、デッター大将やハリス大将からは糾弾され、ブリタニア軍上層部からは戦闘機軍団司令官として地位と権限を剥奪される」

アーチボルト・デッター大将に爆撃機軍団司令官のアーサー・ハリス大将。同じブリタニア空軍大将でありながら指揮権を巡って対立関係にある二名の将官を持ち出され、マロニーは思わず渋面を作った。

「チャーチル卿はもちろん、あなたの考えに理解を示しているチャールズ・ポータル空軍参謀総長も助けてはくれないでしょうな。もう誰の庇護も受けられない」

多大な権力有する軍の将官であっても、国という名の組織からすれば、下つ端の兵士同様使い捨ての駒に過ぎない。都合が悪くなれば簡単に切り捨てられてしまう。

「……それはどうだろうな？」

怒りを湛えていたマロニーの表情が一変し、不敵な笑みが浮かび上がる。

「曲がりなりにも、ウォーロックはガリアのネウロイを殲滅したのだぞ！それも単機でだ！これだけの戦果を無視することなど誰にも出来まい！さらにネウロイの研究を進め、完璧に制御する方法を見つけ出すと約束すればチャーチル卿も——」

「ああ！そう言えば！」

何かを思い出したらしい赤坂は、声高に語るマロニーの言葉を強引に遮った。やけに芝居がかかっている赤坂の言動に、マロニーは不快感を覚えた。

「あなたが内通者としてから当基地に潜り込ませていた兵士を聴取したところ、大変興味深いことは証言してくれましたよ」

赤坂は一呼吸おいてから、さらに話を続けた。

「あなたの命令で、宮藤大尉のストライカーユニットに細工を施した……と」

そう告げられたマロニーの瞳に僅かながら動揺の色が走った。

人型ネウロイとの戦闘中、優人のストライカーは突然不調をきたした。そのせいでシールドを張り損ねた優人はネウロイの攻撃を受け負傷、生死の境をさ迷うこととなった。なんと、それすらもマロニーの企みだったのだ。

元々のガリア反抗作戦はノルマンデー上陸後、ブリタニアに駐留する連合軍の主戦力を囷にし、守りが手薄になった単に501部隊を突入させ、優人の覚醒魔法『絶対凍結』によって単のコアを凍結、機能停止に追い込むものだった。

しかし、扶桑海軍主導の作戦を快く思わなかったマロニーは、基地に潜り込ませた部下に優人のストライカーユニットへ細工をするように命じた。作戦の切り札である彼を戦死に見せ掛けて殺害しようとしたのである。

回収された優人の零式の残骸を調べていたシャーリーも、この事に気付きかけてはいた。が、芳佳の脱走やマロニーによる501部隊の強引な解散などでバタバタしていた為、真相には辿り着けなかった。

「他国の、しかも大戦前から同盟関係にあった国の士官を姦計によつて抹殺しようとした。この事実が明るみになればどうなるか……幸いにも、知っているのは今のところ私のみですが？」

「……………何が望みだ？」

番犬が唸るような声でマロニーは問う。今の彼は『人を呪わば穴二つ』という扶桑の諺の良い見本だ。

「あなた方が開発したウォーロックやコアコントロールシステム、並びにネウロイ研究に関するデータをすべて引き渡して頂きたい」

「なっ、なにっ!?!」

法外な条件を出されたマロニーは思わず声を上げる。空軍大将自らが指揮し、途方もない時間と労力を注ぎ込んで行ってきたネウロイ研究の成果を無償で提供しろと言う

のだ。

「冗談じゃない！」と怒鳴り返してやりたい、というのがマロニーの本音だろう。だが、弱味を握られている彼には他に選択肢などなかった。

「条件を呑んで下されば、我が遣欧艦隊の航空歩兵を抹殺しようとした件は墓まで持つて行きましょう」

そう言つてソファアからゆつくりと腰を上げた赤坂は、テーブルを迂回してマロニーの傍らまで歩み寄る。

「色好い返事を頂けますね？」

赤坂はマロニーの肩にそつと手を置き、念を押した。直後、廊下へと続くドアがバァンという大きな音と共に開かれた。

「長官！」

扶桑海軍の制服を着た男性が、血相変えて部屋に飛び込んできた。赤坂の副官を務める扶桑皇国海軍中佐——西野勤（にしの つとむ）だ。

「なんだ西野？話が終わるまで入るなと——」

「石威紫郎が、逃亡しました！」

「……なに？」



同時刻、501基地近隣——

基地のある小島とブリタニア本島南東部を繋ぐ石畳の道を一台の車が猛然と疾走していた。カールスラント軍の小型軍用車輛『キューベルワーゲン』だ。

数日前。バルクホルンとハルトマンの二人が、ロンドンの病院に入院しているバルクホルンの妹——クリスの見舞いに向かった際に使用していた車輛だが、運転席でハンドルを握っているのは現在空にいるはずのウィッチーズでもなければ、連合軍の将兵でもない。扶桑人の男性だ。

およそ軍用車には不釣り合いな研究用の白衣を羽織る身体は、まるで食べ物に飢えているのかと思うほどに痩せ過ぎな体格。肌に至っては不気味なほどに青白く、同じ色白でもエイラやサーニヤの持つ透き通るような美しい白肌とは大分印象が異なる。

「クソツ！」

キューベルワーゲンを運転する扶桑人男性——石威紫郎は、悔し紛れに吐き捨てる。

マロニー一派共々、遣欧艦隊陸戦隊に拘束された石威だったが、軍属であっても軍人でも戦闘員でもない彼や他の研究員はブリタニア軍の将兵らに比べて監視が緩く、海軍兵が1名ずつ付けられるのみであった。

そこで石威は、拳銃機構を仕込んだカールスラント製のバックルを使い自身を見張っていた海軍兵を銃撃、監視兵が所持していた一〇〇式機関短銃と基地に置かれていたキューベルワーゲンを奪い、基地から逃走したのだった。助手席には海軍兵から奪取した一〇〇式機関短銃一挺と、筒状のガラスケースが一つ置かれている。

ガラスケースの中身は、ウォーロックの動力・制御に使用されていたものよりも小型のコアが納められている。サイズが小さくとも歴としたネウロイのコアである。しかし、その輝きはどこか弱々しかった。

（何故……何故なんだ？何故ウォーロックは暴走した!?!）

石威は、心中で自問自答と思案を何度も繰り返していた。既にウォーロック暴走のショックから立ち直り、今の彼は心は苛立ちと屈辱で満たされている。

暴走したイリスの事例を教訓に、まずパイロットが操縦する有人式から遠隔操作式の無人機へ変更し、暴走防止策としてコアにリミッターを施し、理論上制御可能な数値まで出力を調整した。

出力調整に伴いコアの動力源としての性能は大幅に低下したが、人型から飛行形態への変形機構やブリタニア産のジェットエンジンを採用したことで最高飛行速度は亜音速に達し、攻撃力の向上させるために大型ネウロイと同等以上の破壊力を有するビーム兵器を主兵装として採用した。

そして対ネウロイ戦の切り札である新兵器『コアコントロールシステム』の搭載によって、周辺にいる敵ネウロイに対し、コアを同調・制圧することで指揮系統を統括し支配下に置くことが可能になり、単機ないし少数のウォーロックのみで多数のネウロイを一挙に殲滅することが可能となった。

ウォーロックは単体での戦闘力を含む、あらゆる面でイリスを遥かに凌ぐ傑作機となった。いや、傑作機となるはずだった。だが、イリスの時と同様ウォーロックは暴走してしまった。

いくら考えても原因は分からない。ネウロイ群のコアと同調したことでウォーロックに自我が芽生えたのか。いや、それより少し前にウォーロック隊が命令を出す前にコアコントロールシステムを自力で起動するなど、指示を待たずに行動していた。

（いや、考えるのは後にしよう。まずは扶桑海軍の追っ手を振りきらなくては……）

石畳から本島の田舎道に差し掛かったところで、石威は頭を切り替える。なんとしても逃げなければ、絶対に捕まる訳にはいかない。

（マロニー以上に狡猾な赤坂伊知郎のことだ。5年前、私が犯した罪についても調べ上げているはず……）

石威は忌々しそうに「くっ……」と顔を歪めた。しかし、悪いことばかりではない。5年前から肌身離さず持ち歩いてきたネウロイのコアは回収出来た。今までの研究

で得た知識や技術、開発に関するあらゆるデータ等も、すべて石威の頭に入っている。自分一人とコアさえあれば十分研究は続けられる。

扶桑海軍の追跡を逃れた後は、大西洋を越えてリベリオンかノイエ・カールスラントへ渡ろう。向こうにも、マロニーのようにネウロイのテクノロジーを利用した兵器に興味を抱く戦争屋が必ずいる。そういった輩に上手く取り入り、研究に必要な物を用意させればいい。石威はそう考えていた。

（次こそ……次こそは必ず、ネウロイの力を制御してみせる……）

心の中で再起を誓うと、石威はギュツとハンドルを強く握り直した。その時だった。「歴史に名を刻むのは宮藤ではなく、わた……うわああああっ!」

突如、一筋の赤い閃光が上空から降り注ぎ、キューベルワゲンを掠めるようにして地面に着弾した。車体が大きく跳ね上がり、キューベルワゲンは横倒しに転倒する。

「ぐっ……いい、一体?」

車外へと投げ出された石威は、地面へ強打した痛みには耐えながら身体を起こし、よろよろと立ち上がる。

「コアは?」

ハツとなった石威はすぐさま周囲を見回し、自身の研究に欠かせないサンプルであるコアが入ったガラスケースを探した。

「あっ!? ああ……くそっ!」

ガラスケースはすぐに見つかったものの、地面に叩き付けられた衝撃で中のコア諸共破損してしまっていた。コアがなければネウロイの研究も、新たな兵器の開発も出来ない。

絶望に顔を歪ませる石威の前に、人の形に似た「何か」がスウツと降り立った。

「——っ!? ひ、ひいいいいいっ!」

悲鳴を上げ、石威は腰を抜かした。彼の眼前に現れたのは、ウオーロックの初陣時に撃破された人型ネウロイの片割れであるウィザード型のネウロイだったのだ。

ウオーロックの攻撃によるダメージが残っているのか、身体の左半分近くを失った痛々しい姿となっている。胸部装甲の再生も不完全で、弱点であるコアが露出していた。

「き、貴様は……ウオーロックに。何故生きているっ!」

怯えきった表情で問い掛ける石威だが、ウィザード型ネウロイは何も答えない。

そもそもネウロイである彼(?)が、石威の言葉を理解しているのかも分からないし、ネウロイに言葉を使った会話が出来るのかも不明である。

「ひっ……くっ、来るな!」

にじり寄るネウロイ。本能が石威に『逃げる』と訴えかけてくる。だが、身体が言う

ことを聞かず、逃げるどころか立ち上がることもすら出来ない。尻餅を着いたまま後退る石威を、ウイザード型ネウロイは同じペースで追う。

必死に距離を取ろうとする石威だが、尻を着けたままの状態では逃げられるはずもない。近くに立っていた木の幹へと追い込まれ、石威は逃げ場を失う。

しばらくの間、ウイザード型ネウロイは睥睨するように石威を見下ろしていた。ウイザード型ネウロイには、人間のような表情など存在しない。しかし、石威には彼(?)の顔が同胞を実験台として利用してきた自分に対する怒りに満ちているように見えた。

やがてネウロイは右腕をゆっくり持ち上げ、先端を石威に向けて突きつけた。内蔵されたパネル状のビーム砲が赤く輝き始める。

「じつ……慈悲を……」

恐怖で歯をカタカタと鳴らしながら、石威は必死に許しを請う。

「た、頼む！ 私はこんなところで死ぬ人間ではないんだ！ 君達の仲間を実験に使ったことなら謝る。私は……そう！ 私はただ、私なりのやり方で君達を理解しよう……」

見苦しく命乞いを続ける石威の右手に何か固いものが触れる。チラッと目をやると、一〇〇式機関短銃が傍に落ちているのが見えた。ガラスケース同様、横転したキューベルワーゲンから放り出されたらしい。

(占めた！)

逆転の切り札を手にした石威は、粘り気のある笑みを浮かべた。

一〇〇式機関短銃は十四年式拳銃と同じく、比較的威力の低い8mm南部弾を使用している。だが、相手は人型とはいえ小型のネウロイで、深い傷を負っている。弱点であるコアはほぼ丸出しになっており、この距離ならば狙いを外すこともない。

石威は素早く一〇〇式機関短銃を手に取り、ウイザード型ネウロイのコアに銃口を突きつけた。

「死ねっ……このモルモットがあ……」

一〇〇式機関短銃から射出された多数の銃弾を浴び、蜂の巣となった人型ネウロイの姿をイメージして石威は引き金を引こうとする。しかし、ウイザード型のネウロイは、それよりも速くビームを発射したのだった。

断末魔すら上げる暇も無く、綺麗に眉間を撃つ抜かれた石威紫朗。力の抜けた両手から一〇〇式機関短銃が滑り落ち、それに続いて身体も地面へ倒れ込んだ。

モルモットにされた仲間と、ウオーロックにやられた妹(?)の敵を討ったウイザード型のネウロイは、それで力をすべて使い果たしたか、白い破片となって消滅した。



10分後――

ウィザード型ネウロイによって石威が殺害された現場には、逃走した彼を追ってきた遣欧艦隊陸戦隊の一個小隊が展開していた。

転倒したキューベルワーゲン、中身と共に破損したガラスケース、そして額を撃ち抜かれた石威の死体。陸戦隊員達はそれらを調べることで、ここで何が起きていたのかを解明しようとしている。

「赤坂長官！」

「ん？」

陸戦隊に紛れ、直々に調査を行っている赤坂の姿も認められた。陸戦隊員の一人に呼ばれた赤坂は、やや早歩きで彼の元へと歩み寄る。

「何だ？」

「これを……」

若手の陸戦隊員は、赤坂の質問に答える代わりに自らが発見した物体を指差した。それは先程消滅したウィザード型のネウロイが遺していたコアだった。

どういいうわけか。ネウロイが消滅したにも関わらず、コアのみが奇跡的に残っていたのである。

「これはとんだ拾い物だな……」

赤坂はコアをじっと見据えた後、フツと口元を緩めた。

第49話 「復活のラツキースケベ」

激戦の末、ウオーロック及びウオーロックに乗っ取られた赤城の撃破に成功したストライクウィッチーズは、一度は追い出された自分達の基地へ帰投していた。

我が者顔で居座っていたブリタニア空軍大将のトレヴァー・マロニーや彼が直接指揮を執っていたウオーロック隊の面々の姿はない。扶桑海軍陸戦隊に連合軍総司令へと連行されていったのだ。

優人やウィッチーズ以外の501基地要員はまだ戻ってきておらず、赤坂伊知郎中將を含めた扶桑海軍の将兵が数人、事後処理のために残っているだけだ。人員の激減した501基地に活気はなく、しばらくはゴーストタウンのようにシーンと静まり返っていたが、ウィッチーズの帰還により、ガヤガヤとまるでパーティーのような賑わいを見せ始める。

ミーナと坂本は、ウオーロック撃破やガリアの巢の消滅を報告するため西部方面総司令部の将官でもある赤坂が待っている応接室へ向かい、他のメンバーも各々別行動を取っていた。

「おいおい……嘘だろ?……!」

夕食まで部屋で休もうと自室まで戻ってきた優人。ドアを開いた途端、彼は視界に飛び込んできた景色に愕然とした。

なんとということか。部屋の窓側半分が、窓際に置かれていたベッドが、本がぎつしりと詰められていた本棚が、跡形もなく消し飛んでいたのだ。

原因はおそらく、先程優人達が倒したウォーロックだろう。ウォーロック隊の制御から外れて暴走したウォーロックは、付近を航行していた赤城をはじめとする遣欧艦隊に襲い掛かった。その際、赤城を狙って放たれたビームが基地宿舎へと流れ、上手い具合に優人の部屋を直撃したのである。

「俺が、一体何をしたと……」

他の部屋が無傷にも関わらず、自分の部屋のみが流れ弾の被害に遭っている。あまりに奇異で理不尽な現象に優人がガクツと肩を落としていると、ドーバー海峡からの潮風が吹いてきた。壁も無くなっているため、大分風通しが良くなっている。

もし季節が冬ならば間違いなく、寒風に晒されていたことだろう。優人は節が夏であることに心から感謝した。

家具は殆んど無くなっているものの、マロニーの解散命令の後に最低限の手荷物として赤城へ持ち込んでいた財布等の貴重品や制服等の衣類は無事だ。

ウォーロックと共に赤城も消滅してしまい、乗艦していた優人達4人の荷物も海に水

没したものと思っていたが、ありがたいことに乗員達が退艦時に持ち出してきていたらしく、夕方までには優人達の元に戻ってくるとのこと。

「ん？」

ふと床に視線を下げると、本が二冊落ちていた。拾い上げて確かめている。どちらも本棚で保管されていた優人の所有物。ビーム着弾時の衝撃で本棚から落ちたのか、この二冊だけは奇跡的に残っていた。

一つは以前芳佳と一緒に見ていた家族アルバム。軍への志願を決意した当時10歳の優人が、実家を離れる際に母——清佳から「私達は一緒に行けないから」と御守り代わりに渡されたもので、日夜厳しい訓練やネウロイとの戦いに明け暮れていた優人の心の支えになっていた。大切なアルバムのはずだが、芳佳を心配するあまり赤城へ持っていくのを忘れていた。

もう一つはカールスラント出版のかなり分厚い、ハードカバーの専門書。芳佳が試し読みをして目を回した本だ。これはバルクホルンと改めて友人になった直後に、友情の証として本人から進呈されたもの。「大切な友人であるお前に、我が祖国カールスラントの素晴らしさを知って貰いたい」ということだが、優人はこの手の専門書は読まないため本棚の肥やしとなっている。

「この二冊が無事だっただけでも良しとするか……」

優人はとりあえず、家族アルバムとカールスラントの専門書を収納へしまおう。廊下側にある収納とチェストは流れ弾を受けることもなく、無傷の状態で残っている。

「……風呂、行くかな？」

優人は呟くと、収納の下部より桶を取り出した。この桶は優人の入浴セットのもので、中には温泉マークが描かれたハンドタオル、バスタオル、石鹸、そして何故かゴムのアヒルが入っている。

入浴セットを小脇に抱えると、優人はそそくさと部屋を出る。自分の部屋が消し飛んでいたという事実から一刻も早く目を逸らしたかったのだ。



同時刻、大浴場――

ミーナ・坂本を除く501のウィッチ達は、大浴場に集まっていた。一度はペアやグループごとに別行動を取っていた彼女達だが、やはり年頃の女の子。戦闘で掻いた汗を流したいという気持ちが自然と一致し、示し合わせたかのように脱衣所で再終結することとなった。

「ひゃああああ!!」

「きゃああああ!!」

シャワースペースの芳佳とリーネが揃って悲鳴を上げた。501ウィッチの殆んどが集合している大浴場内に、二人の叫び声が木霊する。

「何ですの?急に大声を出すなんて、はしたな……きゃあああつ!!」

遅れてシャワースペースにやって来たペリーヌが不機嫌そうな表情で二人を見るが、彼女もまたシャワワーの温水ハンドルを回した途端、同じ様に悲鳴を上げてしまう。

「なにになに〜?」

「お前達、一体どうしたんだ?」

ハルトマンとバルクホルンが、やや遅れて浴室に入ってくる。二人の入室と同時に四人目の叫び声が響き渡る。

「うじゅああああああ!!」

声の主はルツキーニだった。芳佳達三人とは違い、シャワーは浴びずに湯の張られた浴槽内へ飛び込んだ彼女だったが、すぐさま悲鳴を発して外へ飛び出した。

「ルツキーニ、どうしたんだ?」

「しゃ、しゃ、しゃ、シャーリーイ……お、お湯が……」

「お湯?」

ルツキーニの言葉に疑問符を浮かべつつ、シャーリーは右手を湯に浸けて見る。

「うわっ!?冷たっ!何だよ、水じゃんか!」

信じられない、といった顔をするシャーリー。いつも熱い湯で満たされている大浴場の湯船に、冷水が注がれていたのだ。

「こちらですわ!」

シャワースペースのペリーヌが、身体を震わせながら告げる。温水ハンドルを回したはずが、シャワーベッドから注がれたのはお冷やのような冷水だった。

「!つちもです!」

「こちらもお湯が出ません」

芳佳とリーネも彼女の言葉を継いだ。冷水を頭から浴びてしまった三人の唇が、僅かに青く変色している。

「リベリアン、どういうことだ?」

バルクホルンが怪訝そうな面持ちで訊ねると、シャーリーは顎に手を当てながら分析する。

「あたしにもわかんないけど。もしかしたらウォーロックの攻撃でどっか故障したのかも……」

「えええ〜!じゃあ、お風呂入れないのお〜?」

シャーリーに告げられ、ルッキニーは心底ガツカリする。

流れ弾の被害を受けていたのは、優人の部屋だけではなかったらしい。

「まあ、サウナがあるし。ワタシ達はそれでも問題ナイけどナ」

「……………」

入り口付近に立っているエイラの眩きに、隣のサーニヤが無言で頷く。

風呂も好きだが、どちらかと言えばサウナを好む二人にとつて、この故障はそこまで問題ではないようだ。

「じゃあ、今日は私もサウナにしようかな？サーにゃんと話が見たいし」

サーニヤに向かって、ニヒツと歯を見せて笑うハルトマン。

「私は……………いいですけど……………」

「ホント!?サーにゃんありがとう!」

少々大袈裟に喜んだハルトマンは、ガバツとサーニヤに抱き着き、頬擦りする。突然密着されたサーニヤは真つ白な頬を軽く染めながら当惑する。

(さ、サーにゃん!?わ、ワタ、ワタシだつて…………サーニヤをそんな風に呼んだことナイのに…………)

自分の預かり知らないところで、ハルトマンがアダ名で呼ぶほどまでにサーニヤと親しくなっていた。間近で二人のスキンシップを見ていたエイラは、焦りと嫉妬心から身体をカタカタと震わせる。

「あつー！ だったらアタシもサウナ行くっ！」

右手を頭の高さまで上げたルツキーニが、ピョンピョンと飛び跳ねて自己主張する。水風呂におもいつきり飛び込んで身体を冷やしてしまったというのに、彼女は元氣一杯だ。

「ルツキーニが行くならあたしも行くよ！ そうだ、サウナで我慢大会でもしないかい？」

「さんせうい！」

「おい！ まずは風呂の故障をミーナと少佐に報告するべきだろう！」

能天気なこと言うシャーリー、ルツキーニ、ハルトマンの三人をバルクホルンが若干強めの口調で咎める。

「もおっ！ トウルルーデってば、ノリわるい！」

「うじゅ……つまんない！」

ハルトマンとルツキーニが、あからさまに不満そうな顔をする。二人に続いて、シャーリーが反論する。

「相変わらずお堅いな。ガリアの巢も消滅したことだし、少しは肩の力を抜きなよ」

「巢が無くなっても、残党がまだガリア領に潜んでいる可能性がある。我慢大会などしている場合か、気を弛めるな。それに以前優人から聞いたことだが、扶桑には『勝つて兜の緒を締めよ』という諺あるそうだ。これは勝つたとしても油断せず、さらに用心せ

よと——」

「もしかして、我慢比べして負けるのが恐いとか？」

ニヒヒツと悪戯な笑顔を浮かべたシャーリーが、バルクホルンの長口上を遮った。

「なっ!? そんなことはない! カールスラント軍人の忍耐力を舐めるな!」

「言ったな? ならやってやろうじゃんか! どつちがより長くサウナに居られるか勝負だ

!」

「いいだろう、吠え面かくなよりベリアン!」

互いの視線をぶつけて火花が散らせるバルクホルンとシャーリー。そんな二人をハルトマンが呆れ顔で見据えていた。

「またやってる……」

「シャーリー頑張れ〜! 負けるなあ〜!」

勝負事に大はしやぎのルツキーニが、シャーリーを応援する。

「芳佳ちゃん、私達もサウナに行ってみる?」

と、リーネが提案してみる。芳佳は眉間に皺を寄せて「う〜ん」と唸った。

「私、サウナ苦手なんだよねえ……あ〜ああ、お風呂入りたいなあ……」

「冷水風呂になんて浸かったら風邪を引いてしまいますわよ? へくしっ!」

冷水を被って風邪を引いてしまったのか、ペリーヌが可愛らしいくしゃみをする。

彼女も芳佳同様、サウナが好きでない。リーネはサウナ浴が苦手な二人のために、さらに別の提案をする。

「じゃあ男性棟のお風呂は行かない？あつちは温水が使えるかもしれないよ？」

501基地にはウィッチ宿舍の大浴場とは別に、少々簡素な風呂が男性棟にも造られている。こちらは当基地に勤務する男性陣はもちろん、補給物質の輸送等でブリタニアを訪れた各国軍の将兵にも解放されている。

普段なら男性棟はウィッチの立ち入りが禁止されているのだが、基地要員が一時的に出払っている今なら入浴時に男性と鉢合わせる心配もない。ミーナも大浴場の給湯設備が故障しているという事情があれば、許してくれるだろう。

「そっかー」

その手があつたか、と目を輝かせる芳佳。

「そうしよリーネちゃん！ペリーヌさんも！」

「えっ？……あつ……ま、まあ冷えた身体を温めなくてはいけませんし。あなた達にお付き合ひして差し上げますわ」

自分が誘われるとは思ってなかったのか、少々当惑気味のペリーヌ。しかし、満更でもなさそうだ。

「男の人達もすぐに戻って来ると思うから、急ぎましょう」

「うん！」

リーネの言葉に頷く芳佳。脱衣所から服を持ち出すと、三人は身体にタオル巻いただけの格好で男性棟に向かった。

◇ ◇ ◇

同時刻、基地男性棟――

「ふああ〜っ！」

人がいないはずの男性棟。その風呂場に優人の姿があった。浴槽に張られた熱めの湯に肩まで浸かりながら盛大な欠伸を漏らす。

（男性棟が空いてて助かったな……）

入浴セットを片手に、はじめは宿舎の大浴場へ向かっていた優人。しかし、大浴場は既に仲間のウィッチ達が使用中だったため、男性棟の方で入浴することにしたのだ。

今回はちゃんと『ウィッチ入浴中』の札がかかっていたため、生まれたままのウィッチと鉢合わせずに済んだ。

「……………」

優人は湯気の充満した浴室内をじっと見渡してみた。ウィッチ宿舎の大浴場に比べ

て、広さは半分程度と狭く。サウナも併設されておらず、天使像のようなアンティークもない質素な造りだ。

それでも大人数がゆったりと入浴出来る程度の広さと設備は確保されている。大浴場もそうだが、この風呂場を一人占め出来る優人は、ウィザードであることを差し引いてもかなり贅沢である。

「そろそろ出るかな？」

大分身体が温まり、疲れも癒された。逆上せる前に出ようと思ったその時、背後でガラガラと戸の開く音がした。

「よかったあ、こっちはちゃんとお湯が出るみたい！」

「男性棟って初めて来たから、なんか新鮮だね！」

「そうだね芳佳ちゃん、ちよつとドキドキするかも……」

「……え？」

優人は一瞬ぼかんとする。乱入してきた二人の声はどちらも女性のものだ。

「やれやれ、殿方達の住居を見学したくらいではしゃいでまあ。これだから庶民は困りますわ」

さらに三人目の声が聞こえてくる。どれもこれも聞き慣れた声で、優人は声に釣られて振り返ってしまった。

「へっ!」

湯気越しに三人の少女の姿が浮かび上がり、優人と彼女達は互いをはつきり認識した。

優人の視線の先にいたのは最愛の妹である宮藤芳佳、そして実妹同然に可愛がついてるリーネとペリーヌの三人だった。入浴するつもりで入ってきたため、当然ながら三人とも裸である。

発展途上で起伏の少ない芳佳の身体が、瑞々しい白肌を持つペリーヌのスレンダーな肢体が、発育が良過ぎるリーネのグラマラスボディが、一斉に優人の視界へ飛び込んでくる。

不幸中の幸いというべきか、濃い湯気のおかげで大事な部分はかろうじて隠されている。

「お、お兄ちゃん……何で?」

「何で、って……お前達が大浴場を使ってるから、こっちに來ただけど……」

そう答えながら優人は前へ向き直り、芳佳から視線を外す。

「……………」

「……………」

「……………」

「あつ、あの……」

時間が止まったかのように静まり返る浴室内で、何か言わなければと優人が口を開く。が、次の言葉が思い浮かばず、すぐに口を噤んでしまう。

「ご、ごめんお兄ちゃん！」

「お兄様！失礼しましたわ！」

固まっていた芳佳とペリーヌの顔が一気に赤く染まり、二人はだつとのごときスピードで一目散に立ち去ってゆく。

浴室には先客の優人と、依然固まったままのリーネだけが残され、室内に再び静寂が訪れた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あのさ」

「ひゃっ!？」

沈黙に耐えられなかった優人が意を決して声を掛けると、リーネはビクツ身体を跳ね上げた。

「開けっ放しだと少し寒いから……閉めて貰える?」

「は、はい!」

リーネは上擦り気味の声で返事をする、ガタツと勢い良く戸を閉めた。ただし、自身の身を浴室側に置いた状況でだ。

「何でこつち側にいたまま閉めるんだっ!?!」

「……あつ」

自分の失態に半歩遅れて気付いたリーネが、間の抜けた声を漏らす。

何を血迷ったのか。リーネは芳佳達のように脱衣所へ逃げるのではなく、全裸の男がいる浴室へ入ってしまった。

直接見ていた訳ではないが、優人は物音と気配で状況を察している。

「……………」

「……………」

三度沈黙に支配される浴室。どうすればいいのかわからない。リーネはもちろん、優人にも分からない。いつそ悲鳴を上げて逃げてくれた方が楽だった。

「あ、あの……お隣いいですか?」

「えっ?」

「御一緒してもいいですか?」

優人はリーネの方へチラッと視線を送る。いつも三つ編みにしている淡いブラウンの長い髪が下ろされ、少し大人な印象を受ける。

見とれていると、いつの間にかリーネの豊かな双丘を捉えてしまい、優人は慌てて目を逸らした。

（な、何食ったらリーネの歳であんなに育つんだ？）

リーネのように抜群のプロポーションを誇る美女が全裸で自分のすぐ隣にいる。そんな状況下で、性欲を押しさえつけていられる自分自身に、優人は感心していた。

「あ、あの……」

沈黙を破ったのはリーネだった。

「お風呂の邪魔してごめんなさい。どうしても優人さんとお話がしたくて……」

「気にするな。けど、急にどうしたんだ？」

「その……優人さんは、いつも私のことを気にかけてくださってますから……お礼が言いたくて」

「そんなの俺だけじゃないよ。ミーナ中佐に坂本少佐、それに他の奴らだって……」

「で、でも……優人さんは、何て言うか。お兄ちゃんみたいで、話していると安心するっていうか……頼りに出来るっていうか……」

恥ずかしさに身体をプルプル震わせるながら、リーネは感謝の気持ちを必死に伝えよ

うとしてゐる。

「ははっ！リーネみたいな美人にそこまで言われるなんて……光栄だな」

「び、美人だなんて……大袈裟ですよ……」

謙遜するリーネだが、彼女は誰もが認める美人である。街を歩けば1000人が1000人振り返るだろう。

「謙遜するなよ、お前は美人で優しいだけじゃない、いざとなったらカツコ良くて頼りになるベテランウィッチ顔負けのスーパーキーだ」

ニツコリと微笑み掛ける優人。照れ臭いのか、リーネは頬をほんのり赤く染めて俯いた。

「あ、それと……優人さんにお願いがあります」

数秒経って顔を上げたリーネが、今度は頼みごとをしてきた。

「んっ？」

「出来るだけ……出来るだけ芳佳ちゃんの側にいてあげてください」

赤面していたリーネの表情が、急に真剣なものへと変化する。

「芳佳ちゃん、優人さんのことをとても頼りにしてるんです。芳佳が優人さんの話をしない日は無いくらい……」

「……………」

「芳佳ちゃんはとっても強い子ですけど、すごく繊細な女の子でもありますから……」
そこまで話してリーネは口籠った。勢いに任せて話していたのか、優人に告げる適切な言葉が思い付かないようだ。

「心配するな……」

リーネの言わんとして、察した優人は、穏やかな表情で語り掛ける。

「ウィッチを続けるにしても、実家の診療所を継ぐにしても。俺はあいつか一人前になるまでは、見守るつもりだからさ」

「優人さん……」

期待通りの返事を聞くことが出来たリーネは、パアツと笑顔になる。

いつの間にか、二人の心にあつた羞恥心は消え失せていた。

「さて、逆上せる前に上がるうか？リーネ、お先にどうぞ」

「はい、お先に失礼します……」

そう言つて湯船から立ち上がるリーネ。彼女の身体を直視してしまわないように、優人は視線を別方向へ向ける。

「きゃあああつ!?」

脱衣所に向かうリーネが突如悲鳴を上げた。何故かは分からないが床に石鹸が落ちており、気付かず踏んでしまったリーネは、背中から倒れそうになる。

「危ないー！」

リーネの危機に気付いた優人が、背後から彼女を抱き止めようとすぐさま立ち上がり、両手を伸ばした。

むにゅん！

「へ？」

「……………あつ」

リーネと優人は揃って間の抜けた声を漏らした。優人は、自分の方へ倒れてくるリーネを受け止めることには成功したが、まずいことに彼の両手はリーネの双丘をガツシリ掴んでしまっていたのだ。

「え、えつくと？これは？」

理解が追い付いていない優人は、何気無しに両手の指を動かし、双丘の柔らかさです質量感を味わっている。

「あ……………あ……………あああ！」

一方リーネは、突然のことにフリーズしていた思考が回復し始めていた。

自分の置かれた状況を正しく認識するのに2秒もかからず、同時に今の今まで耐えていた羞恥心が爆発する勢いで解き放たれ、彼女の顔はこれ以上ないほど紅潮した。

「いやああああああつ!!」

「ぶへえええ！」

ブリタニアアウイツチの強力な肘鉄が、優人の顔面にめり込んだ。



30分後、芳佳の部屋――

顔面に手痛い一撃を食らった優人は、芳佳の部屋を訪れていた。顔にできた痣に治療魔法を掛けてもらっている。

「ごめんなさいー！ごめんなさいー！ごめんなさいー！」

ベッドに腰掛ける優人に、リーネがひたすら平謝りを続けている。

「大丈夫だから。事故みたいなものだし、気にしないで」

苦笑気味に大丈夫だと告げる宮藤兄妹だが、リーネの謝罪は止まらない。

「お兄ちゃんの言う通りだよ、リーネちゃんは悪くないんだから」

「でも、怪我をさせたのは私だから……何かお詫び出来ませんか？」

心底申し訳ないといった表情のリーネ。優人は「うーん」と少しだけ考えた後、一つ

頼みごとをした。

「だったらお茶淹れてくれる？紅茶が飲みたくなってきた」

「は、はい！分かりました！」

リーネは頷くと、駆け足で厨房へ向かっていった。

「ねえ、お兄ちゃん……」

治療を終えた芳佳が、優人に声を掛ける。

「ん？」

「お風呂でリーネちゃんとは話してたの？」

「さあ、なんだったかな？」

わざとらしく惚ける優人に、「むう……」と頬を膨らませる芳佳。しかし、何かを思い出したのか、すぐに別の話題に切り替えた。

「そう言えば、さっきお兄ちゃんの部屋をみたんだけど……」

「うっ……」

考えないようにしていた部屋の件を持ち出され、優人は顔を歪めた。

「今日の夜どうするの？何処で寝るの？」

「あく……ミーティングルームのソファで横になるかな」

「そんなのダメだよ！」

ソファで一夜を過ごそうとする優人の考えに、芳佳はすぐさま反論した。

「ソファアーじや疲れ取れないし、怪我の治りも遅くなっちゃうよ！」

「て言われても……ここまで回復しといて医務室のベッドを使うのも気が引けるしなあ……」

「じゃ、じゃあ……」

芳佳は軽く一呼吸おいてから優人にある提案をする。

「今日は、ここで寝たら？」

「えっ？」

「だから、その……」

芳佳は顔を伏せ、モジモジしながらも言わんとしていることはつきりと告げた。

「私のベッドと一緒に寝ようよー」



くおまけ『セールスマン トレヴァー・マロニー』く

マロニー「コアコントロールシステムはブリタニアで生まれました。扶桑の発明品じゃありません、我が国のオリジナルです。しばし遅れを取りましたが、今や巻き返しの時です」

作者「ウオーロックは好きだ」

マロニー「ウォーロックがお好き？結構、ではますます好きになりますよ。さあさあ、どうぞ！ウォーロックのニューモデル『ウォーロックII』です。素晴らしいでしょ？ああ、仰らないで。先代と同じく、半自律型自動兵器。でもウィッチなんて魔法が使えただけで、生意気だし、反抗的だわ、手柄を独占するわ、ろくなことはない。シールドも強化してますよ？巨大ネウロイのビーム攻撃も大丈夫。どうぞ始動させてみて下さい」

作者「……………」↑コンソールを操作して、ウォーロックIIのジェットエンジンを始動させる。

マロニー「いい音でしょう？余裕の音だ！出力が違いますよ！」

作者「……………一番気に入っているのは」

マロニー「何です？」

作者「ネウロイ化だ」勝手にネウロイ化させる

マロニー「ああっ！何を？ああ待って、ここでネウロイ化しちゃダメですよ！待つて！止まれ！ぎやあああああああ!!」↑ビームで消し炭になる

作者「……………」ニヤリ

第50話「再会」

第501統合戦闘航空団基地・応接室――

この501基地において、応接室は最も使われていない部屋の一つである。

部屋の中央にはソファと2つのチェアが木製のテーブルを挟んで向かい合う形で設置され、壁際には、ロマーニヤ製の高級チェストやミーナの自室にある物よりも一回り程大きな古時計がアンティークとして飾られている。

普段、この部屋に通されるような来客が基地を訪れることは滅多にない。上層部への報告や作戦会議等では、ミーナと坂本の方から出向くこととなるため、二人が応接室で連合軍総司令部の将軍と会談することはない。

ウィッチーズや整備兵等の基地要員が立ち入ることも殆んどなく、たまに芳佳が掃除に来るくらいだ。しかし、そのおかげ室内は埃一つ無く、いつでも客人を迎えられる状態が維持されている。

「軍規に違反して舌の根も乾かぬうちに、基地から脱走とは……」

優人は、赤坂に呼び出されて応接室に来ていた。

応接チェアの背凭れに身体を預けた赤坂が、呆れ果てたような声でぼやく。無論、そ

の発言は優人へ向けられたものだ。彼はテーブルを挟んで向かい側にあるソファーに腰掛け、緊張した面持ちで赤坂と向き合っている。

「兄である君がついていながら……」

「申し訳ありません！」

失望の念を露にする赤坂に、優人はすぐさま頭を下げる。

「ですが、そもそもネウロイとのコミュニケーション作戦を提案したのは自分です。責めを負うなら——」

「誤解しないでくれ、叱責のために君を呼んだのではないよ。結果的にはあるが、妹さんの行動がきっかけでガリアから巣を消し去ることが出来たのだからね」

とは言っても501がガリアの巣を直接攻撃・破壊したわけではない。しかし、ネウロイの巣が自然消滅したということでもないだろう。

あくまでも赤坂とミーナの二人が立てた推測だが、彼女達が間近で観測していたウォーロックの初陣において、人型ネウロイを葬ったビームの初撃は巣を覆っている瘴気の渦を突き破り、巣のコアであるマスターコアが存在する最深部まで到達し、図らずもコアを破壊していた。

その際、何らかの理由でマスターコアの機能がウォーロックに搭載されていたコアへと移行し、ウォーロックは実質的に巣の主同然の存在となった。

故に赤城を侵食していたウォーロックのコアを芳佳が破壊したことで巢も消滅したのではないか、という推測だ。

軍人にしては突拍子もない発想だが、この説が正しいとすればマロニー指揮下のウォーロック隊が実施したガリア制圧作戦時に、あれほどの数の大型ネウロイが巢から一斉に出現したのは、もしかしたらマスターコアのバックアップ的な存在と化したウォーロックから自分達の力を奪い返すつもりだったのかもしれない。

「芳佳……いえ、宮藤軍曹の処遇は？」

「心配するな、この件で彼女を罰するつもりはない」

そう言つて赤坂はライターとタバコを取り出す。口に啜えたタバコの先端に火を点けると、肺いっぱい煙を吸い込み、吐いた。

「私としても、遣欧艦隊から501へ派遣されているウィッチが撃墜命令を下されるほどの軍規違反を犯した、という事実が広まるのは避けたいからね。悪い言い方をするなら、脱走の事実を改ざんさせてもらった」

「改ざん、ですか？」

優人が確認するように繰り返すと、赤坂は頷いて詳細を説明した。

「そうだ。大ベテランである君を撃墜した人型ネウロイのことをミーンナ中佐が警戒し、501は通常の哨戒機ではなくウィッチを哨戒任務に出した。そして、哨戒飛行中の宮

藤軍曹に対し、マロニー大將が脱走だと言い掛かりをつけ、ウィッチーズを強引に解散させた。そういう筋書きだ」

既に根回しは済んでいるのだろう。赤坂は口にタバコを戻しながら平然と言う。

「では、妹は……」

「彼女の経歴に汚点は残さない。戦果を上げたウィッチを罰すれば、他の兵士の士気にも影響する。君達二人は必要な人材だ、こんなところで潰させる気はない」

「感謝します」

宮藤兄妹にはまだまだ利用価値がある。軍内で階級以上の影響力を持つ赤坂がそう判断したことで、芳佳に対して寛大な措置が取られた。

脱走やマロニーの下した撃墜命令の件もあつて、妹の不名誉除隊すら覚悟していた優人は心から安堵する。

「ちなみにですが、マロニー大將は？」

「ブリタニア軍と連合軍双方の上層部が、早くも処遇を決定したよ。彼は501航空団の上官と戦闘機軍団司令官の任を解かれ、閑職に左遷させる」

「失脚ですか？」

優人は少々驚いたような顔をする。501に対する数々の妨害工作とは違ってウォーロックの件を公に出来ないからか、マロニーに課せられたペナルティは優人の予

想よりも軽いものだったのだ。

「君達兄妹を殺そうとした代償にしては安過ぎるかな？」

と、赤坂。だが、それでも空軍最高指導者の地位を追われて出世コースからも外れたため、野心家であるマロニーにとって相当な痛手であることは間違いない。

「ああ、後任には退役されたダウディング元大将の腹心だったキース・パーク中将が宛てられるそうだ」

「それはまた皮肉なこと……」

「確かにな」

ブリタニア空軍内の人事異動に対し、優人が呆れたように肩を竦める。赤坂も優人の考えに同意した。

キース・パーク中将。ブリタニア空軍戦闘機軍団の前司令官にして、カールスラント空軍のアドルフフィーネ・ガランド少将と共にミーナの統合戦闘航空団設立を後押ししたダウディング元ブリタニア空軍大将の下で、第十一戦闘機群の司令を務めていた人物である。

ウィッチ部隊を含めた戦闘機軍団の運用に関する意見の違いから、上官のダウディングと共に当時第十二戦闘機群司令だったマロニーと対立していた。後にマロニーの策略により、ダウディングは失脚・退役に追い込まれ、パークもまた閑職に飛ばされるこ

ととなった。

マロニーの手で一度は要職から外されたパークが、マロニーの失脚によって戦闘機軍団司令官に栄転するとは、なんと皮肉なことか。

「もう二つ、伝えなければならぬことがある」

短くなったタバコをテーブルに置かれた灰皿に押し付けると、赤坂は優人に視線を戻した。

「君の父上……宮藤一郎の死は、やはり事故ではなかったよ」

「……石威博士が、爆発事故に見せかけて父を殺した。そうですね？」

「察しがいいな」

「父と同じく研究所の爆発以降行方不明になっていた石威が、ウォーロックの開発主任として現れた。簡単な推理ですよ……」

と、優人は目を伏せる。口調は冷静なものであったが、膝の上に置かれた彼の両手は血が滲むほど強く握られていた。

「石威紫一郎は、つい最近までリベリオンの田舎に身を隠していたらしい」

赤坂が、事故以降の石威の動向について語り始めた。優人は視線を落としたまま、上官の話に耳を傾ける。

赤坂によると、イリスの暴走を目の当たりにした將軍達は、ネウロイのテクノロジ―

の使用を固く禁じ、ウィッチの代替品となる新兵器の開発計画の中止を命じた。

そのことに納得がいなかった石威は、5年前のあの日サンプルとして保管されていたコアやイリスの開発データを持ち出し、ストライカーユニット共同研究所を爆破した上で逃亡したらしい。

その後、黒海でネウロイが大量発生したとの報せを聞き、開戦準備中のブリタニアからリベリオンへ逃走。東海岸地域で隠匿生活を送りつつ、ネウロイ研究とイリスに次ぐ新兵器の開発を続けていた。

マロニーがダウディングを追い落とししたことを独自のコネクションで知った石威は密かにブリタニアに戻り、マロニー一派と接触。数年掛けて設計したウォーロックを売り込み、取り入れることに成功。そして、今に至る。

わざわざ研究所を爆発してから逃走したのは、自分が死んだように見せるためと、他の開発メンバーを殺害することでネウロイから手に入れたテクノロジーを自身が独占するため、という二つの目論見があったからだ。

「石威を聴取して分かったことは、こんなところだ」

と、話を結ぶ赤坂。長々と話続けて疲れたのか、応接チェアにより深く腰掛け、フウと大きく溜め息を吐いた。

「石威は、今どこに？」

ゆつくりと顔を上げた優人は、怒りに震えた声で訊ねる。その表情は、父を殺した男に対する怒りを孕んだものへと豹変しており、普段の優人とは大きくかけ離れていた。

「死んだよ」

「……死んだ？」

「基地から逃亡したところを、何者かに殺害されてな」

「…………」

「例え生きていたとしても、バカな真似は止めることだ」

突如真剣な面持ちとなった赤坂は語気を強め、優人を諫めるように告げる。

「恨みや憎しみに任せて人を殺せば、一生取り憑かれるぞ」

「……はい」

若干の沈黙を挟んでから優人は首肯する。赤坂の言う通り、優人の心中には石威に対する怒りと殺意が沸き上がっていた。

だが、例え石威が生きていたとしても、優人は石威を殺しはしない。どうにかして己の感情を抑えるだろう。

殺してしまえば石威と同類になってしまう。父——宮藤一郎も、最愛の息子である優人が自分の復讐のために手を汚したところで喜びはしないだろう。

「……暗くなってきたな」

赤坂は立ち上がると、窓際に移動した。知らないうちに随分と時間が経っていたらしい。既に陽は沈み、美しい満月が夜空を照らしていた。

「長話に付き合わせてしまつて申し訳ない。もう下がってくれて構わんよ」
「はっ……失礼します！」

ソファから立ち上がった優人は敬礼で応じると、踵を返してドアへと向かい、退室した。



深夜、基地宿舎・宮藤芳佳自室――

部屋の主である芳佳と、自身の部屋を半分程失つた優人は揃つて同じベッドに入つていた。

就寝時なので当然だが、二人共制服から寝間着に着替えている。芳佳は丈の短い薄緑色の甚平に、白いローレグのスボン。優人は白い半袖のTシャツに黒のハーフズボンだ。

「う〜ん……」

芳佳は枕の感触をうなじのあたりに感じながら、隣で寝息を立てている兄を起こさな

いようにモゾモゾと寝返りを打った。

夜中にフッと目が覚めてしまい、中々眠り直すことが出来ずジツツと天井を見つめていた。しかし、それにも飽きたので、何気無しに優人の方へ視線を移してみる。

「わっ!？」

芳佳は驚きの声を上げる。眠っていたはずの優人が、いつの間にか目を覚ましてこちらに目を向けていたのだ。

「眠れないのか？」

と、優人は訊ねる。起きたてにしては意識がハッキリしている。

「う、うん……急に目が覚めちゃって。ごめん、起こしちゃったかな？」

「別にいいよ」

そう言いながら優人は身体を起こすと、壁に掛かっている時計を確かめた。時刻は午前1時を回ったばかりだった。

優人は視線を時計からベッドに横たわっている芳佳に戻すと、一つ提案をする。

「食堂に行つて、少しお茶でもしようか？」

「えっ?今から?」

兄からの唐突なお茶の誘いに、芳佳は少々驚いたような表情で訊き返す。

「お茶を飲みながら話をしてれば眠くなるかもしれないだろ?お兄ちゃんと深夜デート

してくれよ」

「でも、消灯時間にウロウロしてたら怒られちゃうよ?」

「平気平気。ガリアを解放したんだし、ミーナも坂本も少しくらい大目に見てくれるさ」
楽天的な考えを述べた優人は足を床に着け、ベッドから立ち上がった。そのまま廊下へと続くベッドに向かってスタスタと歩いていく。

「ほら、いくぞ!」

「わわっ!お兄ちゃん、待ってよ!」

芳佳は慌ててベッドから飛び出すと、小走りで優人を追い掛けた。

部屋を出ると廊下は薄暗く、月明かりのみで照されているだけであった。

一寸先には闇が広がっている。日中はウィッチ達のはしやぎ声で騒がしい宿舎も、深夜は不気味なほどの静寂に支配されて大分印象が異なり、芳佳にはちよつとしたお化け屋敷に思えてならなかった。

「うう……」

(可愛い……)

恐くなった芳佳は、優人にしがみつく。優人は優人で、満足げな笑みを浮かべており、役得とでも言いたげである。

程無くして、二人食堂に辿り着いた。優人は芳佳を食堂のテーブルに着かせると、お

茶を淹れに厨房へと入って行った。

5分ほどして優人はトレイを抱えて戻ってきた。トレイには、マグカップとグラスが一個ずつ置かれている。

「ほれ、ホットミルク」

温められたミルクの注がれたマグカップが芳佳の目の前に置かれた。

「これ飲んで身体が温まれば、自然と眠くなるよ」

「むゝ……子ども扱いしないでよ」

芳佳は頬を膨らませ、不満を湛えた視線で抗議する。

「子ども扱いなんてしてないよ。眠れない時にはこれが一番なんだ」

優人は芳佳の隣に座ると、透明な液体が注がれたグラスを呷った。以前扶桑へ帰国した際に、横須賀の酒屋で購入した扶桑酒だ。

「お兄ちゃんは……お酒？」

「寝酒だよ、お前には少し早いかな？」

「……やっぱり子ども扱いしてる」

芳佳は拗ねてしまい、優人をジト目で見据えてくる。優人は立腹な妹に困ったように微笑むと、宥めるかのように頭を優しく撫でる。

「あつ……ふふつ♪」

たったそれだけのことで、不機嫌だった芳佳は嬉しそうに喉を鳴らす。

「そう言えば、明日はガリア解放の祝勝会をするらしい」

妹の機嫌が直ったところで、優人は明日——正確には本日の日中の予定に関する話題を振る。

「俺とお前とバルクホルンとサーニヤがお祝い料理担当だ」

「祝勝会、つて……お祝い？」

「うん、ミーナが赤坂長官に頼んで良い食材を融通してくれたんだよ」

優人が負傷した際に、ミーナが交換条件として赤坂に要求したのは様々な物質の追加補給だったのだ。

「わぁ！何作ろうかなあ！」

自身の料理の腕の見せ所、予定はキラキラと瞳を輝かせる。が、何故か彼女の表情は次第に曇っていった。

「どうした？」

妹の表情の変化に気付いた優人が、心配そうに顔を覗き込む。

「うん、ちよつと……この基地での色々な事を考えちゃつて……」

「ん？」

芳佳は視線を落としながら、躊躇いがちに答える。

「結局、私って……お兄ちゃんにずっと甘えっぱなしだなあ、って思ったの……」

「俺に？」

「だって……そうでしょう？」

ゆつくり顔を上げた芳佳は、悲痛な面持ちで己の胸の内を語り始めた。

「お兄ちゃんに助けて貰って、慰めて貰って、いっぱい迷惑掛けちゃった。ウィッチーズのみんなにも……」

「そんなこと誰も気にしてないよ。お前がいたから、ウオーロックを倒せたんじゃないか？」

「それはお兄ちゃんやみんながいたからで、私一人だったら絶対に無理だったし」
「うーん」

優人は眉間に皺を寄せる。この謙虚さも愛すべき妹の長所の一つではある。しかし、軍歴数ヶ月であれほどの戦果を上げたのだから、多少誇ったとしても罰は当たらないだろう。

ガリア解放の立役者となったことに胡座をかいたり、天狗になったりしないのはとても素晴らしいことだ。だが、機転を利かせてウオーロックを撃破するという大金星を挙げたのだから、兄としてももう少し自分に自信を持って欲しかった。

「誰かの役に立ちたい、ってこの部隊に入ったのに……お兄ちゃんに怪我させて。また

みんなが集まれたけど、私のせいでウィッチーズも解散しちゃったし」

膝の上で握った両拳が小刻みに震え出す。心なしか、瞳が潤んでいるようにも見える。

「ダメだなあ……私、つて」

「芳佳……」

優人はカタタンツと飲みかけのグラスをテーブルに置くと、ネガティブな精神状態の妹を強く、それでいて優しく抱き締めた。

「お兄ちゃん？」

「前にも言ったけど、そんな風に自分を卑下しないで……」

穏やかな口調で囁きながら、芳佳の背中を片手で軽くポンポンと叩く。まるであやしているかのようだ。

「お前がいたから、戦闘で負傷したバルクホルンや俺が助かったんだ。そうだろ？」

「でも、お兄ちゃんの怪我は私のせ——」

「俺は結構間拔けな男なんだ。ネウロイと戦っていれば、多分いつかはああなつてた。お前がいなければ治療も出来ないから死んでいたかもしれない。お前がいたから俺はこうして生きている。お前と一緒にお茶したり、話をしたりも出来るんだ」

「けど……私はお兄ちゃんに甘えてばか——」

「芳佳！」

不意に優人は声を張り上げ、芳佳の言葉を遮る。自重を促されたと思つた芳佳はシユンと萎縮する。

「何で兄貴が妹より先に生まれると思う？」

「えっ？」

「妹にいっぱい甘えてもらうためだよ」

優人は抱き締める腕に力を込める。

「まあ、限度はあるけど。出来たらこれからも頼りにして欲しいな。甘えて貰えなくなったら、お兄ちゃん寂しくなるよ」

「……お兄ちゃん」

兄の温かな言葉に、芳佳の目頭がジーンと熱くなる。

「今は完璧でなくてもいいんだ。俺や坂本、カールスラント三人組みみたいなベテランだって、新人時代は周りに散々迷惑掛けたし、色々な失敗を経験した」

優人は少しだけ身を引き、芳佳と向かう合う姿勢になる。

「失敗しの悔しさ、悲しみ、無力さを忘れるな。誰か守る時に、それは必ず糧になる。誰かが困った時には、今度はお前が手を差し伸べてやれ」

この基地での経験を糧に、妹はこれからも成長していく。人としても、ウィッチとし

ても、優人はそう確信していた。

魔法力といい、飛行センスといい、才能だけ言えば芳佳の方が優人よりずっと上だ。軍人でもなければ、訓練の生徒でもない。いくら指導を担当する坂本が優秀な教官とは言え、ついこの前まで何処にでもいる普通の女子中学生だった芳佳が、僅か数ヶ月でエース級の実力を身に付け、ガリア解放に貢献した。その事実が何よりの証拠である。そのことに慢心することなく、父——宮藤一郎が遺した『その力を、多くの人を守るために』という言葉を座右の銘とし、日々精進していくことだろう。それは幼い頃より、芳佳を隣で見守ってきた優人が誰より理解している。

「どう？少しは元気になったか？」

「うん、お兄ちゃんありがとう」

芳佳の表情から影が消え、サンサンと輝く太陽のような笑顔へと変わる。

優人は、妹が見せた破壊力抜群の笑顔にポツと頬を赤らめつつも、妹の表情に明るさが戻ったことに安堵する。

「ねえ、お兄ちゃん」

「うん？」

「私はまだまだ子どもだし、頼りないけど。いつか……いつかは宮藤優人の妹で宮藤一郎の娘なんだって、えへんと胸を張れるようなウィッチになるから。その時は、今度は

私がお兄ちゃんを助けるね」

ニッコリと笑いながら語る芳佳。どうやら新たな目標が出来たらしい。

「ははっ！ 楽しみにしてるよ」

優人もまた芳佳に微笑み返す。すると、二人の腹からぐうぐうぐうぐうという虫の悲鳴が聞こえてきた。

「あつ……」

「小腹が空いたな、何かないか探してくるよ」

そう告げて優人は席から立ち上がると、厨房に向かって歩を進めた。

再び食堂に一人残された芳佳が何気無しに視線を走らせると、酒の残った優人のグラスを捉えた。グラスを両手に取ると、水のように透き通った扶桑酒をジツと見つめる。

「お酒って……どんな味がするんだろ？」

好奇心の強いお年頃な芳佳は、グラスを自身の唇へと傾ける。そして、そのままグイッと一気に飲み干してしまう。

しばらくして、おにぎりを二個持った優人が厨房から出て来た。優人が飯櫃に残っていた白米を使って作った塩おにぎりだ。

「ほれ、おにぎり作ったぞ」

「……お兄ちゃん」

焦点の合っていない目で優人を捉えた芳佳は、幼子を想わせる舌足らずな口調で兄を呼ぶ。

「ん？なんだ？」

「お兄ちゃん♪」

「うわっ!？」

優人がおにぎりに乗せた皿をテーブルに置くと、突如芳佳がおもいつきり体重を掛けて彼に抱き着いてきた。

妹からの不意討ちに危うく倒れそうになる優人だったが、咄嗟に魔法力を発動してなんとか身体を支えた。

「お兄ちゃん♪好き好き♪だあい好きい♪」

兄の胸に顔を埋めた芳佳は、好意を口にしながらスリスリと頬擦りを繰り返す。

「一体どうしたんだ？」

先ほどまで兄への甘えすぎを気にしていた妹が、食堂を離れた僅かな時間で、今までにないほどの甘えん坊に豹変していた。

あまりの事態に、優人は驚愕を通り越して動揺している。しかし、芳佳に現れた変化はこれだけではなかったのだ。

「お兄ちゃん、何処行ってたの？」

ふと芳佳が顔を上げる。ご機嫌な様子で優人の胸に擦り寄っていた彼女の表情が、急に悲しさを湛えたものへ変化する。

「何処、つて……厨房でおにぎりを——」

「何で私を置いていったの!？」

「置いていった、つて……たつたの10分だろ?」

「何で……何で10分間も私を1人にしたの!？」

芳佳の目尻に涙が浮かぶ。ほんの10分間、それもすぐ隣の厨房にいただけだと言うのに、芳佳はまるで生き別れた兄と10年越しに再開したかのようだった。

「お前、何言っ……はあ」

優人は途中で言葉を止め、深く溜め息を吐いた。彼は妹が豹変した原因に気付いたのだ。

「芳佳。お前、俺の酒飲んだらう?」

芳佳の吐いた息から、微かに扶桑酒の香りがした。それは優人が芳佳の隣で飲んでい
た物と同じ香りだった。

ウイスキーボンボンの件で知ったことだが、芳佳も他の501ウイッチも僅かな量で
人格に影響を及ぼすほどアルコールに弱い。

魔法力を使い果たした戦闘後なので、アルコールの耐性が著しく落ちていたのかもし

れないが、芳佳に限っては違ったらしい。

「お兄ちゃああああん！どっか行っちゃやだあああああ！」

芳佳は耳をつんざくような大声で泣き叫び始めた。今度は泣き上戸らしい。

「ああ……ごめんごめん。もういなくなったりしないから、ちゃんと側にいるから」

「……一緒？」

ピタリと泣き止んだ芳佳は、確認するかのよう聞き返す。

「そう、一緒」

「約束？」

「うん、約束」

「えへへ♪」

優人の言葉に満足したのか。芳佳はアルコールで真っ赤に上気した頬を綻ばせる。

「お兄ちゃん、大好きい」

「可愛い……って、いやいや！分かったから、一旦離れてくれる？」

芳佳の抱き着かれたり、甘えられることは優人にとつてもやぶさかではない。むしろウエルカムなのだが、今は酔っ払った妹の介抱をしなくてはならない。

「やらあ……」

使い魔である豆柴の耳と尻尾を出現させた芳佳は、身体強化魔法全開で優人にしがみ

つく。

「離れても、いなくなったりしないよ」

「やらあ〜……」

首を振って駄々をこねる芳佳。優人は弱ったなあ、と肩を竦める。

「芳佳……」

「好き、つて言ってくれなきや離れないもん」

「うん、お兄ちゃんも芳佳のことが大好きだよ。だから……」

「む〜……つまんな〜い」

芳佳は膨れっ面になりながら、渋々優人から離れる。アルコールにより今の彼女はいつもよりも表情豊かだが、精神年齢はルツキー二と同レベルにまで落ちている。

「やれやれだ」

すっかり幼児退行してしまっている芳佳に優人は呆れつつも、そんな妹を可愛いとも思っていた。やはりシスコンである。

「意図的に酒を飲ませて、甘えん坊モードの芳佳を堪能するのも一興か……」

優人がアホで邪な考えを抱いていると、芳佳が次の行動に出た。

「なんか、あつっ〜い」

「それは酒のせ……つて、ええええええええ〜!?!」

独り言ちる芳佳の方へ視線を戻した優人は、凄まじい叫び声を発した。

なんと芳佳は自らの寝間着の胸元を際どいくらいに大きく開き、団扇のようにパタパタと動かし右手で風を送り込んでいた。

(もうちよつとで見えそう……つて、イカンイカン)

頭を激しく振つて邪な考えを追い払った優人は、着直しさせようと芳佳の寝間着に手を掛けた。

「いやあん、お兄ちゃんのえっちい……」

「えっち、つて……ほら、服をちゃんと着て」

「やだあ……あーっーいー!」

「我が儘言うなよ」

これ以上胸元を開かれたらこっちの理性が保たない。優人は必死に芳佳の寝間着を整えようとするが、芳佳は「暑い」と訴えながら抵抗する。

「あッ!」

「あ、涼しいい〜♪」

なんとということだ。着直しさせるはずが、揉み合っているうちに寝間着がずり落ちてしまい、芳佳の発展途上な裸体が露になる。

「バ、バカッ!?!早く服を——」

「何をしているのかしら?」

「——ッ!?!」

入り口の方から威圧を孕んだ声がある。壊れたブリキ人形のようにギギギと首を動かして振り向くと、薄いピンク色のキャミソールの上に白いカーデイガンを羽織ったミーナが立っていた。

「ミ、ミーナ。何にして?……」

「優人、それはこっちの台詞よ。ほぼ全裸の芳佳さんと厨房で一体何をしているのかしら?」

普段通りの笑顔で問うミーナ。瞬間、季節に似合わぬ冷気と押し潰さんばかりの重圧が優人を襲った。

「えっ、えーつと……芳佳と寝てただけど。目が覚めちゃったから、お夜食でもと……」

「あなたは夜眠れないと、素っ裸の妹と二人でお夜食を頂くのかしら?」

「いや、これは——」

「ミーナ中佐あ……!」

弁明しようとする優人の主張を遮り、やはり舌足らずな口調の芳佳が二人の会話に口を挟んできた。

「私、お兄ちゃんに身ぐるみ剥がされちゃいましたあく♪」

「ちよつ！芳佳！」

「へえ〜……」

ニツコリと慈愛に満ちた微笑を浮かべるミーナだが、その瞳は明らかに笑っていない。

「まさか、妹に手を出すなんて……」

「待ってくれミーナ！誤解だ！」

灰色狼の耳と尻尾を出現させ、ゆっくりと歩み寄ってくるミーナ。優人は両掌を突き出し、必死に身を守ろうとする。

「優人、あなたには去勢が必要かしら？」

「ま、待って！待ってく……ぎやあああああ!？」

時刻は午前2時。草木も眠る丑三つ時を迎えた501基地に、扶桑ウイザードの悲鳴が響き渡った。



翌日、501基地本部――

「……………」

「……………」

朝食を終えた宮藤兄妹は、坂本に呼び出されて食堂を後にした。昨晚の冤罪はどうか晴れたものの、優人——正確言えば、宮藤兄妹は揃って顔色がよろしくなかった。

あの後、恐怖で心を乱してしまった優人は、ほとんど眠ることが出来ぬまま朝を迎えた。なので、かなり寝不足である。

一方の芳佳は、グラス一杯分もない扶桑酒で二日酔いになってしまった。昨晚の記憶の代わりに激しい頭痛と吐き気が身体に残り、彼女を苦しめている。

「おっ？来たか……」

やがて兄妹は坂本の元に辿り着いた。彼女は昨日赤坂を招いた応接室の前に立っている。

「朝食終わったらすぐに来い、なんて。一体何の用だ？」

優人は眠たすぎる目を擦って訊ねる。

「中に入れば分かるさ」

坂本はそう言うのと、応接室のドアをノックした。すると室内から「どうぞ」という男性の声が返ってくる。

「失礼します」

と、ドアを開けた坂本に続いて優人と芳佳も応接室に入った。室内ではノーネクタイでスーツを着用し、紳士帽を深めに被った男性がソファアーに座っていた。

「優人、こちらは負傷したお前に血液を提供して下さったお方だ」

坂本は手で男性を差しながら、軽く彼の紹介する。坂本の話聞いた二人は、顔を引き締めて男性の方に視線を走らせる。

「宮藤優人大尉です。その際は助けて頂きなんとお礼を申し上げたら……」

「妹の宮藤芳佳……あつ、軍曹です。お兄ちゃんを助けて下さって、ありがとうございます！」

自身を、兄を助けてくれたという目の前の男性に、優人と芳佳は頭を深く下げて礼を述べる。すると、何故か坂本が豪快に笑い出した。

「はっはっはっはっはっ……お前達の父上だぞ！」

「……………え？」

坂本の言ったことをすぐ理解できなかった兄妹は、揃って疑問符を浮かべる。

男性は杖を着いてソファアーから立ち上がり、二人の方へ身体を向ける。ゆつくりと帽子を脱いで顔を見せると、優人達に優しく微笑んだ。

「二人とも、大きくなつたな。見違えたよ」

眼鏡を掛けた優男風の扶桑男性。紛れもなく宮藤一郎——優人と芳佳の父だった。

「芳佳、ずいぶん美人になって……」

「あ……ああ……」

父親の姿を認識した芳佳の瞳から涙が溢れ、頬を伝いながらポロポロと流れ始めた。すぐに堪えきれなくなり、芳佳は父の胸へと飛び込んだ。

「お父さああああああんっ！」

「おっと……」

一郎はふらつきながらも、しつかりと芳佳を抱き止めた。

「さて、私は隊の今後についてミーナと話し合わなければならんなのでな。これで失礼する」

そう言つて坂本は足早に退室して行つた。再会した宮藤親子に気を遣つたらしい。

「坂本……」

坂本の意図を察した優人は、ドアを潜つて廊下へ出る彼女の背中に向かって敬礼する。

「優人」

自分を呼ぶ声が優人の耳朵を打つ。降る向くと、一郎が芳佳を抱き締めたまま優人を見据えていた。

「……前よりも男前になつてるね」

一郎の顔には研究所の爆発時に出来たらしき火傷の痕がある。優人はそれを見ながら、からかい半分に告げる。

「はははっ！ そうだろう？ 割りど気に入ってるんだ」

相好を崩した一郎は、一呼吸置いてから言葉を続ける。

「活躍は聞いたよ、よく頑張ったな。お前達二人は父さんの誇りだ」

「芳佳はともかく、俺はドラ息子だろ？ 父親相手に暴言を吐いたし」

「反抗期は成長の証だ」

「反抗期って……」

父のあまりに前向きな捉え方に優人は苦笑する。同時に、そういえばこういう人だったなあ、と納得もする。

「実は朝食まだなんだ。良かったら、二人の手料理をごちそうになれないか？」

「うん！ 腕に縊りを掛けて作るね！」

顔を上げた芳佳は、極上の笑顔で答える。直後に優人がゆっくりと歩を進め、一郎に近付いていった。

「朝食をごちそうする前に……芳佳、ちょっと下がって」

「えっ？ あ、うん」

「優人も抱き着くか？ ほら、お父さんの胸に飛び込んで——」

「生きてたんなら、すぐに顔を出せや！このクソ親父がつー！」

バキィイ！

大切な一人息子を抱き止めようと両腕を広げてスタンバっていた父の顔面に、愛の拳がめり込んだ。

第2章 『東の間の平和編』

第1話 「ゆつくりと、よく噛んで食べましょう」

1944年9月初頭、西欧ブリタニア——

連合軍第501統合戦闘航空団——通称『ストライクウィッチーズ』の活躍によって、ガリア上空に我が物顔で居座っていたネウロイの巢が消滅した。

ネウロイの占領下に置かれていたガリアは怨敵の支配から解放され、隣国ブリタニアへの圧力も大幅に低下した。

人類連合軍西部方面総司令部は、当初の予定を変更することとなった。ブリタニアに駐留していた隷下の戦力をノルマンディーではなくブリタニアから最短に位置するパド・カレーからガリアへ上陸させ、残存ネウロイを掃討しつつ、同国の首都——パリの解放を目指す。

そして、ガリア解放の立役者である第501統合戦闘航空団に関しては、次の指示があるまで引き続き基地に駐留し、ドーバー上空における残存ネウロイの警戒と解散に備えての残務整理を命じていた。次の指示というは、具体的に言うとは解散命令のことである。



早朝、第501統合戦闘航空団基地・食糧庫――

「こんなに?」

扶桑皇国海軍の宮藤優人大尉は、前日のうちに運び込まれた補給物質。その一部である食糧類を見て愕然としていた。

大量の米俵をはじめとして肉類、野菜類、魚類、その他料理油や各種調味料が食糧庫を埋め尽くさんばかりに押し込まれている。

それにしても、間も無く501部隊に解散命令が下されて基地を引き払うであろうタイミングでこれだけの食糧が支給されるとは。100歩譲って、ガリア解放の報奨やサトルヌス祭のプレゼントだとしても景気が良すぎる。

「はっはっはっはっ! いいじゃないか! これならば祝勝会の料理に使う食材の心配は要らないだろう?」

と、笑いながら嘯くのは優人の戦友であり、上官でもある扶桑皇国海軍の坂本美緒少佐だ。優人の妹である宮藤芳佳軍曹の師でもある。彼女は、優人と共に補給物質の確認をしに来ていた。

「呑気でいいな、お前はよ。この基地には、あと数日もいないかもしれないのに食い切れると思うのか？」

「心配ない、祝い料理は別腹と言うだろう？」

「言いませんよ、少佐殿」

戦友の天然なボケに呆れつつ、優人は食糧を一つ一つ目で確認する。と、あることに気が付いた。

「おい坂本。この米、餅米だぞ」

一部ではあるがわ米俵の中に餅米が混じっていたのだ。

「餅米まであるのか？」

優人の報せに、坂本は怪訝そうに眉を寄せた。扶桑皇国において餅米は一年中入手可能な食材ではあるが、殆どどの国民は正月にお雑煮や磯辺巻き等に調理して食しており、夏場に食べることはあまりない。

「通常の米と間違えたのか？」

不審そうな顔で餅米俵を見据えた優人は、腕を組ながら首を傾げる。

「うゝん」

もちろん、そんなことは坂本にも解るはずがないのだが、「まさか……」と前置きした上で推測を述べる。

「紅白餅を作つてガリア解放を祝え、ということだろうか？」

「かもな。御丁寧に、こんなものまで置いてあるよ」

高く積まれた米俵の隣には、埃が積もらないように布を被せた白と杵が置かれていた。伝統的な扶桑の餅つき道具で、優人も正月に実家で使ったことがある。

「昼飯に磯辺巻きでも作ろうか？」

豪華料理が必要な祝勝会は夕食時に開催される。昼は腹持ちしにくい餅で済ませ、本命のお祝い料理をしっかりと味わえるように腹を空かせておこう。というのが、優人の考えだ。

「そうだな、餅をつくのは任せておけ」

坂本は臼の中から杵を取り出し、軽く素振りをする。やる気満々だ。

「うっかり魔法力込めて、臼を割らないでくるよ？」

「む……心外だな」

優人に茶化された坂本は不満そうに唇を尖らせた。そんなやり取りの後、二人は白と杵と餅米俵を担いで食堂へ向かった。

かくして、本日の501部隊の昼食は磯辺巻きの餅に決定したのだが、このことが後にちよつとした悲劇を生むこととなる。



昼食前、基地宿舎――

二名の少女が食堂前の廊下を並んで歩いていった。カールスラント空軍から501部隊へ派遣されている世界的エースウィッチ――エーリカ・ハルトマンとゲルトルート・バルクホルンだ。

エース揃い501の中でも二人は特に高い戦果を上げており、内外からは部隊のWエースと称されている。

「はっ!」

「よっ!」

「はっ!」

「よっ!」

「はっ!」

「よっ!」

「何だ、この音は?」

食堂内から響いてくる男女の短い掛け声と、ペツタンという聞き慣れない音に気が付き、バルクホルンは入り口へと目を向ける。

「いい匂いがする〜♪」

隣のハルトマンもまた、食堂から香ってくる食欲を誘う匂いに鼻をヒクヒクさせる。

入り口から中を覗き込んで見ると、優人と坂本が餅つきをしていた。坂本が高く持ち上げた杵を力強く振り降ろし、優人がタイミングを見計らって返しを行う。その動くは素早いながらも丁寧なもので、長年共に戦ってきた戦友らしい見事な連携だった。

「優人と、少佐？何してんの？」

「少佐、その巨大ハンマーは何だ？」

初めて目にした餅つきという扶桑の文化。二人のカールスラントウィッチは不思議そう顔で訊ねる。

「おお、二人も来たのか？」

「ちよつと待っててくれ、今お前らのも作るから」

一旦手を止めた坂本と優人はそれだけ言うと、餅つきを再会した。

「あれは食べ物なのか？」

「お餅っていう扶桑の食べ物ですよ」

頭上に疑問符を浮かべたバルクホルンがポツリと呟くと、厨房のカウンター越しに顔を見せた割烹着姿の芳佳が答える。

カウンターには複数の大皿が置かれていた。海苔、醤油、きな粉、ゴマ等の餅に絡め

るものが盛られている。

「おーいしい〜！」

テーブルの方から歓喜の音が聞こえてきた。初めて食べた扶桑の餅を甚く気に入ったルツキーニのはしやぎ声だった。

磯辺巻きにした餅を既に10個ほど平らげた彼女は、口の回りが醤油まみれになっていた。

「（こ）こらルツキーニ、お口が汚れてるぞ？」

普段からルツキーニの世話役を担当しているシャーリーが、自身のハンカチで口を拭いてやる。

「ん〜っ……ありがとシャーリー！もう一個食くらべよつと♪」

と、ニツコリと愛らしい笑顔を見せるルツキーニ。シャーリーに礼を言うと、次の餅へ手を伸ばす。

「がつつき過ぎて喉に詰まらせるなよ。けど、確かに扶桑のライスケーキは美味いな」

そう言つてシャーリーも磯辺巻きにパクついた。二人の向かい側では、リーネとペリーヌのお嬢様コンビがきな粉をまぶした餅に舌鼓を打っている。

「わあ、モチモチしてる！美味しい♪」

赤みの差した両頬に手を添えて、リーネは幸せそうだ。

「いけますわね。このきな粉というのも、甘過ぎない上品なお味が……」

ペリーヌも満足気に声を発する。扶桑料理が（納豆以外は）好評な501部隊、扶桑の餅は早くも大人気だ。

「ふむ、中々良さそうだな？」

バルクホルンは顎に手を当て、餅を頬張る仲間達をしげしげと見る。

「ねえねえ！ 私達も貰っていい？」

と、ハルトマン。奇妙なものを見る目で餅や餅つきを見ていたWエースも、少し興味が出てきたようだ。

「構わんで」

と、坂本が餅つきの手を緩めずに答える。

「サーニヤとエイラの分を作らないとだな」

優人が坂本の言葉を継ぐように言う。夜間哨戒に出ることが多く、みんなと睡眠サイクルが異なっているサーニヤとエイラ。今日は夜間哨戒がないため、二人はそろそろ起きてくるだろう。

「ねえお兄ちゃん、ゴマときな粉と磯辺。どれがいいかな？」

「ああ、俺は磯辺巻きで！」

優人は一旦手を止め、芳佳のいるカウンターに振り返りながら答える。これがいけな

かった。

臼の中に置いたままにした余所見をする優人。坂本はそのことに気付かず、彼の両手目掛けて杵が振り下ろした。

ボキイイイイイイッ!!

「ぎいやあああああッ!」

骨を粉碎した鈍い音と、両手に激痛が走った優人の悲鳴が基地内に木霊した。

◇ ◇ ◇

昼食時——

優人が悲鳴を上げた、その30分後。デスクワークを終えたミーナ、起床したサーニヤとエイラも合流し、食堂は本格的に昼食タイムとなる。

テーブルの上にはゴマ、きな粉、磯辺巻きと三種類の味付けが施された餅の山が、それぞれ大皿に盛られていた。

「美味しい……」

きな粉を絡めた餅を頬張るサーニヤが、口をモゴモゴさせながら小さく呟く。

「まあまあダナ」

エイラもまた、口元を綻ばせた満足そうな表情をしている。

「扶桑のお餅、サイコーツ！」

「ん〜……このきな粉味は、何だかお菓子みたいだね」

瞳をキラキラ輝かせたルツキーニとニヒツ笑みを浮かべたハルトマンの二人が、用意された三種の餅をガツガツと頬張る。

「まだおかわりありますからね」

と、芳佳は一同に微笑む。彼女は今、不慮の事故で負傷した兄に治癒魔法を掛けている。

「よ、喜んで貰えて良かったよ」

未だ両手に残った痛みには耐えながら、優人は精一杯の笑顔を作る。杵を叩きつけられた彼の両手は粉砕骨折してしまい、完治まで少々時間がかかっている。

「こちらこちら、もつと味わって食べるよ」

がつつくようにして口内に餅を詰め込むルツキーニとハルトマンに対し、シャーリーがやんわりと注意をする。

「そうだぞ、二人共。この餅は優人の血と汗と涙の結晶なんだからな」

と、バルクホルンがシャーリーの言葉を継ぐ。文字通りそうだ。

「ふふ、優人も美緒も芳佳さんもお疲れ様」

三人に向けてニツコリと微笑んだミーナは、『女公爵』という異名に相応しい優雅な姿勢で、初めての餅に舌鼓を鳴らしている。

ウイツチ達はみんな餅にハマったらしい。山盛りに積まれていた餅は、既に3分の1ほどまでに減っていた。

「はい、お兄ちゃん。お餅どうぞ」

治療終えると、芳佳は磯辺巻きを乗せた取り皿を優人に差し出していった。

「ありがとう」

優人は皿を受け取り、磯辺巻きを口に運んだ。お餅の柔らかな食感と、醤油や海苔を絡めた香ばしい味付けが口内に広がる。満ち足りた気分になった優人は思わず「んん」と幸せそうな声を漏らす。

シスコンぶりやおっぱい好きな印象に隠れがちだが、優人は食べることが好きだ。しかも細身な体型に似合わず、大食らいである。妹の芳佳がチビの大食いだとすれば、彼は痩せの大食いと言えるだろう。

「みんな。食べるのは構わんが、餅を喉に詰まらせないよう気を付けろ」

坂本は一同の顔を見回しながら注意を促した。

「確か、毎年それで大勢の人が亡くなっているのよね？」

『えっ?』

付け足されたミーナの一言を聞き、彼女と扶桑組以外のウィッチ達は彫像のように硬直した。

「お、お餅……食べると、死んじやうの?」

しばしの沈黙の後に、ルッキーニがカタカタと歯を鳴らして口を開く。すっかり怯えきってしまい、健康的な褐色肌がブルーベリー並みに蒼冷めている。

「大丈夫だよ、ルッキーニちゃん。ゆっくり、よく噛んで食べれば大丈夫だから。詰まったりなんてしないから」

見兼ねた芳佳が安心させようする。と、ハルトマンが声を掛けてきた。

「じゃあ、優人はよく噛まずに食べたんだ?」

「え?」

ハルトマンの言っていることが、芳佳にはすぐには理解出来なかった。気になった彼女は隣に座っている優人の方へ目を向ける。

「……って、お兄ちゃん!」

優人の姿を視界に納めた途端、芳佳は驚いて声を張り上げた。幸せそうに磯辺巻きを味わっていたはずの兄が、喉を押さえて苦しそうにもがいていたのだ。

「あ………が………」

「お餅が詰まったの!?!」

兄の一大事に芳佳は狼狽える。当然ながら、喉に餅を詰まらせた優人に答えることは出来ず、激しく揺れる瞳で必死に助けを求めていた。

「私に任せろ！」

「バルクホルンさん？」

テーブルの向かい側にいたバルクホルンが、いつの間にか兄妹のすぐ近までに来ていた。

彼女は芳佳を横へ引かせると、何故か魔法力を発動させて使い魔の耳と尻尾を具現させた。

「え？バルクホルンさん？」

「はあああああああつ!!」

気合いの込もった掛け声と共に、バルクホルンは硬く握り締めた右拳を、前方へ勢いよく突き出した。剛拳は周囲の空気を巻いて、優人の腹部に叩きつけられた。

「ぐはあああつ!!」

重たい拳に腹部を圧迫する。背中まで突き抜けるような衝撃と激痛に、優人は苦悶の表情を浮かべる。同時に喉につつかえていた餅が口から飛び出し、ベチャツと音を立てて床に落ちた。

「あ、お餅出ました」

芳佳は吐き出され、床に落ちた餅に目をやる。腹部を強く圧迫されたことで、喉に詰まった異物の除去に成功したようだ。

「上手くいったな」

やりきったような表情をしたバルクホルンが、額の汗を拭う。

「確かに餅は出たみたいけどさ。優人、白目剥いてるよ?」

「……えっ?」

ハルトマンの言葉に半歩遅れて反応したバルクホルンは、間の抜けた声を上げると共に優人へ視線を移す。

相方の指摘通り、優人は白目を剥いた状態で床に倒れていた。ピクピクと身体を痙攣させ、まるで陸に打ち上げられた魚のようだった。

「お兄ちゃん!」

「優人、しっかりしろ!」

「まあ、魔法力を込めて殴ればそうなるな」

慌てて優人に駆け寄る芳佳とバルクホルンを見据えながら、坂本が呆れたように言う。

「わざわざ殴らなくても、ハイムリック法を使えば良かった気がするけど……」

と、ミーナ。彼女の言うハイムリック法とは、外因性異物によって窒息しかけた患者

を救命する応急処置で、腹部突き上げ法や上腹部圧迫法とも呼ばれている。詳細が知りたい読者はネット検索されたい。

「あ、ああ。川の向こうで、父さんが手を振ってる……」

優人は朦朧とした意識の中で、かような発言と共に儂げな微笑を口元に浮かべた。

「その川は絶対に渡らないで！ っていうか、お父さん生きてたじゃない！」

芳佳は優人に声かけを繰り返しながら、本日二度目の治癒魔法を施した。

この一件で、食べ物を強制的に吐き出される瞬間を目の当たりにした501ウィッチの大半は食欲を失ってしまい、豪華料理の振る舞われる祝勝会は延期となった。

第2話「ワイト島で湯治療養 その1」

1944年9月初め、ブリタニア・第501統合戦闘航空団基地——

「ミーナ、呼んだか？」

朝食後。部隊司令直々のお呼び出しを受けた優人はドアを二回ほどノックした後、ノブを回して部隊長執務室へ入る。

「優人、来てくれたのね？」

基地司令用デスクの向こう側に座っているカールスラント空軍中佐——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケが、柔らかな笑みを浮かべて優人を迎える。

大抵の男ならば、その聖母を想わせる彼女の笑顔に頬を染めて見とれてしまうことだろう。しかし、優人はミーナと顔を合わせた瞬間、背筋にゾクリと悪寒が走った。

基本的に穏やかで優しい性格のミーナ。滅多なことでは怒らないが、一度怒らせるととんでもなく怖い。隊のウィッチ達はもちろん、優人自身そのことを嫌と言うほど理解している。

先日。とある冤罪からあやうく肅正（ミーナ曰く、去勢）されそうになっており、以前より優人の中に存在していたミーナに対する恐怖心が一層強くなった。

そのため、出来れば優人はミーナと室内で二人きりにはなりたくなかったのだ。

「どうしたの？私の顔に何か付いているのかしら？」

自分を見つめたまま固まって微動だにしない優人に、ミーナは不思議そうな顔で訊ねる。

「あつー！いやいや、何でもないよ。それで何の用？」

ハツとなった優人はそう誤魔化すと、呼び出された理由を訊いた。

「あなたには、本日の夕方から数日間ワイト島へ行つて頂きます」

言い渡された辞令に、優人は目を丸くした。

「ワイト島、つて。えっ？このタイミングで……まさか、また左遷？」

「だから、数日よ。一時的な出向のようなもので、用が済みしだいに戻つて来てもらうわ」

ミーナは右手で眉間を押さえ、呆れたように軽く息を吐いた。

「何だ、そうか」

左遷の類いではないことに優人はホッと安堵するが、何故正式な解散命令を待っている501部隊からわざわざ別の部隊、それも僻地に配備されている二線級の部隊へ出向するのかという疑問が残る。

「ワイト島には傷に良く効く温泉が湧いています。なので、あなたには現地で湯治を

行つて貰います」

優人が問い掛けるよりも先にミーナが答えた。どうやらワイト島でゆっくり温泉に浸かり、人型ネウロイとの戦闘でできた傷を癒してこい、ということらしい。

しかし、いくらワイト島がネウロイの襲撃が殆んどない僻地とはいえ、湯治目的の観光地のように利用してしまつていいのだろうか。

「それって、軍の命令というよりは旅行の斡旋じゃないのか？」

「あなたのお父様や赤坂中将が、大怪我したあなたのことを随分心配しているのよ」

「……さいですか」

そんなことだろうと思つた、と言わんばかりに優人はミーナから視線を外し、呆れたように虚空を見つめる。

「向こうにいる間は有給扱いにして貰えるそうよ。せつかくの御厚意なんですから、ありがたく受けたら？」

「俺は健康そのものだ」

と、嘯く優人。確かに大量の破片が胸に突き刺さっていた割には元気そうだが、そんな優人の言い分にミーナは眉を顰めた。

「嘘……朝食の時に、痛そうな顔をして度々胸を擦っていたじゃない？それにたまに痛み止めも飲んでるわよね？」

「……バレてた？」

自身を諫めるようなミーナの口振りに、優人は苦笑する。

「ええ、うふふ♪」

ミーナは口元に手を当てて、クスクスと上品に笑う。さすがは母性溢れる501のお母さん役といったところか、隊員達のことはなんでもお見通しらしい。

「で、どうするの？」

「了解、命令に従いますよ中佐。俺が怪我したままだと、気にするやつらがいるからな」

と、肩を疎める優人。〃気にするやつら〃とは、おそらく芳佳と坂本のことだろう。

二人は優人が負傷したことに対し、未だ責任を感じているのだ。

「よろしい。あつ、そうそう！」

連絡を終え、ミーナは優人を退室させようとする。が、直後に何かを思い出した。

「何だ？」

「私がないからって、悪いことしちゃダメよ」

「おいおい、俺が何をするって？」

軍人という立場にも関わらず、基地内に隠れ家を作ったりと、自由過ぎる生活を送っているルツキーニや禁固刑の経験があるハルトマンやシャーリーならいざ知らず、自分が何をやらかすというのか。優人は甚だ心外だった。

ミーナは唇に右手の人差し指を当て、「うーん」と考える仕草を前置きしてから答えた。

「自身の立場を利用して、基地の娘達にちよっかい出したりとか……」

「……………」

ワイト島分遣隊隊長の階級は中尉、優人よりも下だ。つまりは、基地内における最高階級者としての立場を利用してウィッチ達に不埒な真似をするなど、そういうことだ。

ミーナは冗談のつもりで言っているのだろうが、優人はある意味では前科持ちの身であるため、笑い飛ばすことも反論することも出来ず、居心地悪そうな表情でミーナから目を逸らす。

「ごめんなさい。それと、あなたに個人な頼みがあるの」

急に真剣な眼差しとなったミーナ。優人が視線を戻すと、彼女はおもむろに口を開いた。

「実はラウラさんのことで……」

◇ ◇ ◇

数分後、基地本部廊下――

「優人」

「ん？」

ミーナと分かれて執務室を出た優人。茶でも飲もうと食堂に向かつて廊下を進んでいると、誰かに声を掛けられた。

「ああ、バルクホルンか」

声の主はバルクホルンがだった。彼女は何やら頬を紅潮させ、呼び止めたはずの優人から気まずそうに目を逸らしている。

「どうした？なんか用？」

「ミーナから聞いたんだが、お前は数日間ほどワイト島へ行くそうだな？」

「そうだよ。悪いな、俺だけ湯治に行くことになっちゃって……」

「い、いや。そのことでお前を咎める気はない」

そう言つてバルクホルンは頭を振る。

「迷惑ついでに留守の間芳佳のことを頼むよ。ほつとくとまた何かやらかしそうだから」

ははは、と乾いた笑い声を出す優人。基地を離れるにあたり、一番の心配事はやはり妹のことだ。

マロニーの件で多少は懲りただろうが、それでも心配になつてしまふのが親心ならぬ

兄心というものだ。

「もちろんだ。実は、私からもお前に一つ頼みたいことがだな……」

「もしかして、ラウラのことか？」

「なっ!？」

ズバリと言い当てられたバルクホルンは、驚きのあまりに一瞬言葉を失った。

「何故それを!？」

「ミーナからも同じようなことを頼まれたからな。やっぱり、心配か？」

優人に問われると、バルクホルンは左右に2、3度目を泳がせた後に小さく頷いた。

「それで？ 具体的には？」

「……あいつに、伝えて欲しいことがあるんだ」

バルクホルンは赤面した顔をゆっくりと持ち上げ、罰が悪そうに告げた。



その日の夕刻、ワイト島分遣隊基地――

「ふう〜……」

夕日の下。優人は湯船に肩まで浸かり、小さく息を漏らす。

少し前にワイト島分遣隊と合流した優人は、部隊指揮官の勧めにより基地の温泉施設で入浴中だ。

501基地の大浴場とは違い、天然温泉で尚且つ海を眺めることが出来る。

「海が見れるなんて、軍事基地というよりは観光地みたいだな」

景色を眺めながら、優人は素直な感想を述べる。ワイト島分遣隊の指揮官にして基地の責任者である角丸中尉によれば、部隊の解散後はウィッチ・ウィザードの保養施設としての再利用が検討されているらしい。

確かにワイト島の温暖な気候と湧き出ている天然温泉は、日頃から軍務に終われている航空歩兵の心身の健康やモチベーションの維持に役立つだろう。

「……………」

ふとにこやかだった優人の表情に影が差す。その視線は、かつて混成中隊のウィッチ達と共にイリスと戦った空気へと向けられている。

優人と出会って間も無く、彼女達は暴走したイリスの手で虐殺されてしまった。あの時、自分が臆することなく戦っていればと後悔しなかった日はない。まだまだ未熟であった当時の自分が全員を守れたと思うほど自惚れてはいない。しかし、行動を起こしていれば何人かは助けられたかもしれない。

（後悔、先に立たず……………か）

優人はフツと自嘲気味に笑って立ち上がる。目蓋を閉じ、戦死したウィッチ達に黙禱を捧げた。

「ま、また一緒にお風呂に入るんですか？」

「……………え？」

ふと入り口の方から羞恥心を孕んだ女性の声がする。優人は気の抜けた声を漏らした。

「良いじゃない！一緒に入った方が楽しいでしょ？」

「あんたって強引すぎ……………」

さらに二人分の声が聞こえてくる。どちらも女性のものだ。

(……………デジャヴ?)

数日前にも同じことがあったような。この後どうなるか、ある程度は予測出来たはずなのに、優人は声に釣られて振り返ってしまった。

「あれ？」

「へっ!!」

視線の先にいたのはワイト島分遣隊に属する3名のウィッチだった。

王立フアラウェイランド空軍のウィルマ・ビショップ軍曹。ペリーヌと同じく自由ガリア空軍に所属するアメリカ・プランシャル軍曹。そして、シャーリーと同様にリベ

リオン陸軍第8航空軍に所属している「フラン」ことフランシー・ジェラード少尉。無論、入浴するつもりで入ってきたため三人とも裸である。

「「……………」」

あまりのことに思考を停止させた四者は、無言のまま互いを見つめ合う。

分遣隊の面々は文字通り微動だにしないでいたが、さすがというべきか優人は三人の美人顔に向けた状態で己の顔を固定しながらも視線のみを下方へ動かしていた。

例よって男の性に逆らえず、アメリカとフランの発展途上で慎ましやかな肢体。シャーリーに勝るとも劣らないウィルマのダイナマイトボディをチラチラと観察する。

「きゃあああああ!!」

思考の復活したフランは顔を真っ赤にして叫ぶと、床に置かれていた手桶を優人に向かって思い切り投げ着けた。

ガンツ!

「あがつ!」

鈍い衝突音を伴い、桶は優人の頭部に見事直撃する。痛みと衝撃が頭蓋骨を通して脳まで到達し、優人は気絶した。



数十分後――

食堂には優人とワイト島分遣隊のウィッチ達が、テーブルを囲むようにして集まっていた。

一時とはいえ、同じ屋根の下で共に暮らすこととなった優人のために歓迎会を開いてくれるとのこと。優人も彼女らも、既に自己紹介は終えている。

「あつはつはつ！ごめんなさいね！ウィザードのあなたが来ていたことをすっかり忘れてちゃって！」

と、お気楽に笑いながら謝るウイルマ。所属する軍は異なるが、彼女はリーネの実姉である。妹と引つ込み思案な妹と違って行動力の塊のような性格をしている。

「ごめんなさい！あ、あの……頭は大丈夫ですか？」

「まあ、なんとかね」

クスンツと涙目になりながら自分を心配するアメリーに、優人は大丈夫であることを伝える。

「二人共！謝る必要なんてないわよ！」

と、一人だけ御冠なのは桶を投げつけてきた張本人であるフラン。頭にタオルを巻いていた入浴時とは違い、鮮やかな赤髪が可愛らしいツインテールに結ばれている。

「で、でもフランさん」

「こいつはあたしたちの……は、は、裸を見たのよ！胸なんて、特に凝視して！被害者はむしろこつちじゃない！」

どうにも怒りが治まらないらしい。フランのこういった気の強いところは少しペリーヌと似ている気がする、と優人は密かに思う。

「まったく、なんでこんなド変態がうちに来たのよ！」

「ど、ド変態って……」

そこまで言われるときすがにへこむのか、優人はガクツと肩を落とす。

ちなみに優人は、この他にもエイラから痴漢やらエロ藤やら呼ばれている。

「フラン、それはちよつと言い過ぎ」

「そうよフラン。あれは不慮の事故だったんだから」

オストマルク空軍少尉のラウラ・トートと扶桑皇国陸軍中尉の角丸美佐がフランを窘める。

ラウラは501部隊の設立メンバーの一人で、角丸はリバウ基地にいたことがある。そのため、優人とは顔見知りだ。

「な、何よ！みんなは、あたしが悪いって言うの！」

「まあまあ、しばらくは一緒に暮らすんだし。仲良くしましょうよ」

「あ、頭を撫でるなあ!!」

ウイルマに子ども扱ひされ、憤慨するフラン。彼女の怒りの矛先がウイルマの方へ向くが、慣れているらしいウイルマは上手く受け流している。

一方、アメリーはどうしたらいいのか分からず、オドオドしている。彼女のこういったところは、501に來た直後のリーネを連想させる。

「宮藤大尉、本当に申し訳ありません」

ワイト島分遣隊の隊長である角丸が頭を下げて部下の非礼を詫びる。

「いや、俺も悪かったし」

「ところで、大尉は何故こんな辺鄙なところに来たんですか？」

と、ラウラが随分と単刀直入に訊ねる。

「まあ、角丸中尉と同じだな」

そう言つて優人が角丸に目をやると、彼女は「そうですね」と笑顔で首肯する。優人はさらに詳細を説明する。

「少し前に、ネウロイの攻撃を受けて墜落しちやつてさ。その時の怪我が癒えきつてないからここの温泉を——」

「墜落?!怪我?!大丈夫なんですか?!」

“墜落”や“怪我”という単語に過剰反応したアメリーがズイツと優人に向かつて

身を乗り出す。

「大丈夫だって。ちょっと下がってくれろ？」

苦笑しながら後退を促す優人。アメリカが間合いを詰めたため、彼女と優人の顔は互いの鼻先が着きそうなほどに近付いていたのだ。

「あつ……ごめんなさい。うう……」

異性に向かつて、不用意に顔を近付けてしまったアメリカは恥ずかしそうに俯きつつ、後ろへ下がる。

「まあ、ざつくり言うतो。ここには湯治のために来たんだよ」

「嘘っ!!」

先程までウィルマに弄られていたフランが、怒声を上げながら割り込んできた。

「本当は、501部隊でウィッチの着替えやお風呂覗いたから左遷されたとかでしょ？」

「うっ……」

フランの容赦の無い一言が、優人の心にグサツと刺さる。彼女の中で優人は完全に変態扱いである。

まあ不可抗力とはいえ、優人には覗きの前科や覗きよりもよっほど重い罪状が複数あつたりする。

「そんなに落ち込まないで、はい！飲み物どーぞ！」

「……ありがとう」

ウイルマが優人を励ますと、ようやく彼の歓迎会を兼ねた夕食が始まった。

◇ ◇ ◇

夕食後――

歓迎会が終わり、優人はウイルマ、アメリーと共に宿舎の廊下を闊歩していた。

「あく食べた食べた。どう？私とアメリーの作った料理は？もちろん美味しかったでしょ？」

ウイルマは歓迎会の料理で満たされた腹を撫でながら訊ねる。何気に主役である優人よりも多く食べていた。

「ああ、良かった。二人は料理上手だな」

そう言うのと優人はアメリーの方へ視線を走らせた。

「アメリーが作ってくれたデザートのカッキーなんて、最高だったよ」

「そんなんっ！……でも、喜んで頂けたのなら嬉しいですよ」

優人に褒められたアメリーは気恥ずかしさから頬を赤く染める。

謙虚で照れ屋なアメリーを愛らしく思った優人は彼女の頭に手を伸ばし、ややオレン

ジがかかっているブロンドの髪を優しく撫でてやる。

「ふえっ!？」

するとアメリーは可愛らしい悲鳴と共に顔をより紅潮させ、モジモジと小さくなる。その初な反応がとても愛くるしく、守って上げたくなる保護欲のようなものを掻き立てられる。

「宮藤大尉！ストライカーの整備、完了です！」

三人が談笑しながらハンガーの前を通りかかると、整備兵が優人に声を掛けてきた。

優人と共に501基地からJ u 5 2輸送機で運ばれてきたストライカーユニット『零式艦上戦闘脚二二型甲』の整備が終わったらしい。

「ありがとうございます！」

優人は愛機の整備を引き受けてくれた整備兵に軽く会釈し、謝意を述べる。

「あら？ユニットまで持ってきたの？」

養生のためにワイト島を訪れた優人が、何故ストライカーユニットや機関銃まで持って来ているのか。ウィルマは発進ユニットに固定された零式へ目を向けながら不思議そうに訊ねる。

「二応、数日間はワイト島分遣隊の所属になるからな。哨戒はもちろん、戦闘や訓練にも参加するよ！」

「で、でも……無理したら、怪我の治りが遅くなっちゃいますよ?」

アメリカが心配そうに優人の顔を覗き込んだ。

「実は殆んど治りかけてるんだよ。でも、501と原隊の上官が心配してね」

「ははは、と乾いた笑い声を上げる優人。すると、少しだけ眉を寄せたウィルマが彼を窘める。

「だとしても気を付けなきゃダメよ? 怪我也病気は治りかけが肝心なんだから」

「わかつてるよ。これでも診療所の息子だぞ?」

優人はそう言うと、ハンガー内に足音を響かせながら発進ユニットへと歩を進めていった。

「今から飛ぶの?」

背後から近付いてきたウィルマが訊ねる。

「ああ、一度この辺りの空を飛んでみたいんだ」

「もう陽は沈んでいますよ?」

と、何やら心配そうなアメリカ。

「夜間哨戒の経験もあるから、夜の飛行も問題ないよ」

「そうじゃなくて……」

そこまで言うと、アメリカは途端に口籠り目を伏せた。

「どうした？」

優人は訊くがアメリーは俯いたままで何も応えない。心無しか、身体が震えているように見える。

「妙な噂があるのよ」

見兼ねたウィルマがアメリーに代わって優人に説明する。

「噂？」

「少し前からブリタニア南東部の空を未確認航空機が飛行している、って噂」

「未確認航空機って……ガリアの残存ネウロイか？」

優人が己の分析を混えて訊き返すと、今度は黙り込んでいたアメリーが応じた。

「幽霊です」

「ゆ、幽霊？」

アメリーの口から飛び出た予想外の解答に、思わず優人は訊き返した。

「そうです！幽霊です！ダイナモ作戦の時に戦死した兵士が、無念から空を徘徊しているんです！絶対そうです！」

頭を抱えて萎縮したアメリーは、感情に促されるままに叫ぶ。幽霊が苦手なのか、彼女は涙目になりながらカタカタと震えていた。

「まあ、私たちも直に見た訳じゃないんだけどね」

あははは、と顔を引きつらせて笑うウイルマは、さらに詳細を説明する。

「実際に遭遇したウィッチの話だと……幽霊はカールスラント製の古い航空機に搭乗した三人組の男性で、奇声を上げながらウィッチを追い掛けてくるらしくて——」

「と、とにかく！」

ウイルマの話の遮るように、アメリーが口を挟んだ。

「幽霊みたいな得体の知れない存在がブリタニアの空を彷徨っています！危険です！夜に飛ぶのは辞めた方が！」

「大丈夫だよ」

と、優人は幽霊（？）に怯えるアメリーを安心させるように微笑んだ。

「近くを飛んでくるだけだし。幽霊が出てたって、戦うなり逃げるなりするさ」

「何なら一緒に行つてあげましょうか？」

ウイルマがニイツと笑いながら優人をからかう。

「夜トイレに行けない子どもじゃないんでね」

優人は皮肉混じりにそう返すと、自身のストライカーユニットが固定されている発進ユニットへ駆け寄る。ストライカーを履いて魔法力を流すと魔導エンジン『栄（マ）二一型』が回転を始め、ユニットゲージに格納された九九式二号二型改13mm機関銃が出てきた。

ふと隣から別のエンジン音が聞こえてくる。目をやると、ウイルマが自身のスピットファイアMk. IIを始動させていた。

「お供させて頂きます、大尉殿」

ウイルマはユニットゲージから取り出した銃器を振りかざし、茶目つ気を孕んだ口調で上官である優人に対し進言する。

彼女が手に持っているのは、ペリーヌも使用しているブリタニアのブレン軽機関銃Mk. Iである。

外見上は扶桑皇国陸軍及び皇国海軍陸戦隊等で運用されている九六式軽機関銃や九式軽機関銃とよく似ているため、優人はこの銃に対して多少の親近感を抱いている。

「哨戒ルートは頭に入っている。案内は必要ないぞ?」

「ガリア解放の英雄様を1人で飛ばせるのは気が引けるもの。美女と夜空の旅つていうものいいもんでしょ?」

と、ウイルマは右目を瞑ってウイंकする。

「そりゃ、断れないな」

優人は苦笑混じりに応じると、さらに言葉が続けた。

「それじゃあ、エスコートをよろしく頼むよ。ウイルマ・ビショップ軍曹」

「了解しました、宮藤優人大尉!」

ウイルマは右手を額にかざしてビシツと敬礼し、にこやかな笑顔で応じる。

「じゃあ、行つてくるよ」

優人はアメリーに向かつて軽く手を上げると、ハンガーの入り口へ視線を移した。

「宮藤優人、発進する！」

「ウイルマ・ビショップ、行くわよ！」

愛機と共に発進ユニットからハンガーの外へ向けて射出された二人のベテラン航空歩兵は、滑走路を高速で滑った後に漆黒の空へと飛び立っていった。

「お気をつけてえ〜！」

ハンガー前まで移動したアメリーはブンブンと大きく手を振り、二人の大先輩を見送った。



同時刻、ワイト島基地宿舎・ラウラ、フランの部屋――

「まったく、何なのよアイツはっ！」

自室に戻った後も腹の虫が治まらないフランは、自分の寢床である二段ベッドの一段目でドツシリと胡座を掻いていた。

「まだ言ってる……」

上の段から下を覗き見るように顔を出したラウラが、呆れを湛えた視線をフランに向ける。

「あつたり前でしょ!?!あんなド変態!上官でなければすぐにも撃ち殺してやるわ!」

そう言つて、フランはサイドアームのM1911A1を取り出し、強く握り締める。

「あれは不可抗力。大尉はとても良い人」

「フンッ!どうだか!」

ラウラの言うことが信じられない、とフランは苛立ち混じりに鼻を鳴らす。

「あんなのと一緒に暮らさなきゃならないなんて……ほんつと最悪よ!」

「……………」

優人を罵倒し続けるフラン。これ以上は何を言っても無駄だと感じたのか、ラウラは軽く溜め息を吐くとシーツに身体を倒す。それから一分もしないうちに寝息を立てた。

こうして、扶桑のウィザードとワイト島分遣隊のウィッチ達の数日に渡る共同生活は幕を開けたのだった。

第3話「ワイト島で湯治療養 その2」

晩刻、ブリタニア・ワイト島方面上空――

寶石を散りばめたかのように無数の星々が輝くブリタニアの夜空を、二つの機影が並んで飛行していた。

静けさに支配された満天にストライカーユニット二機分の魔導エンジン音を響かせているのは、二人連れのウィッチとウィザード。王立ファラウエイランド空軍のウィルマ・ビショップ軍曹に、扶桑皇国海軍遣欧艦隊の宮藤優人大尉である。

「♪」

ブラウンの長い髪を風に靡かせ、ご機嫌そうに鼻歌を口ずさむウィルマは下方へ背を向けて芝生で寝っ転がるような体勢で飛んでいる。完全に遊覧飛行気分だ。

ガリアの巢が消滅して以降もブリタニア空軍や連盟空軍隷下の部隊が残存ネウロイへの警戒は続けているが、領空内にネウロイが姿を現すことはなく穏やかなものであった。

昼間はもちろん、夜間の空襲に見舞われる心配もなくなり、ブリタニアの人々は枕を高くして眠ることが出来るようになった。

「……………」

一方、ウイルマのすぐ隣を飛行している優人は少し前から無言のままであった。その瞳は瞬きすることすら忘れ、ある一点をジッと捉えて離さない。

(やっぱ、すごいな。リーネも大きいし、ビシヨップ家の女の人はみんな胸がデカイのか?)

リーネと同等か。或いは彼女以上に大きく豊かなに育ったウイルマの胸を凝視し、優人は固唾を呑む。

ファラウエイランド空軍の制服に包まれながら、服に使用されている布地が薄っぺらく思えるほどの巨乳。持ち主であるウイルマが胸部を上向きにしていることもあり、まるで屹立した山のようなようだ。

ここまでのボデイの持ち主は扶桑ウィッチには中々いない。リバウにいた頃の優人の後輩で、今や第502統合戦闘航空団の一員である下原定子少尉も扶桑ウィッチの中ではかなり大きめだったが、彼女は着痩せするタイプなので制服を着てしまえば殆んど目立たなかった。

「？」

ふとウイルマが優人の視線に気付く。話掛けようともせずにしげしげと自分を見ている優人を、ウイルマは不思議そうな顔で彼を見つめ返す。

やがて、優人が自分の身体のどこへ視線を向けていたのかを理解すると、彼女はニイと唇を綻ばせた。

「エッチ♪」

頬を軽く染め上げたウイルマは一言告げると、両腕で庇うように胸を覆った。

恥ずかしかつているにしてはわざとらしき全開のリアクションだったが、優人はハツとなり慌てて弁明を始める。

「あ、いや……。べ、別に胸を見ていたわけじゃ——」

「なら、どこを見ていたのかしら？」

ローリングして優人に近付いたウイルマはニヤニヤと悪戯な笑みで問い掛ける。

「せ、制服を」

「制服？」

「お前の来ている。その……ファラウェイランド、空軍の制服が、格好いいなあ……つて」

優人はなんとか誤魔化そうとする。しかし、彼の物言いは歯切れが悪く、目も泳いでいるので嘘だというのがバレバレである。

「ふ〜ん？」

口元に笑みを湛えたまま怪訝そうに目を細めたウイルマは、次にズイツと優人に顔を

寄せる。

リーネと似て整った顔立ち、妹と同じ色の髪と瞳を持つ美女がフワツと甘い香りを発しながら眼前まで迫る。優人は頬をポツと紅潮させ、ドキツと胸を鳴らす。

「本当は……」

ウイルマは腕を組むと、傲慢の胸を強調するようにして優人の眼前へ持ち上げる。

「こつちを見てたんでしょ？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はい、見てました。すみません」

笑顔で迫られ、圧力に屈した優人は両手の平をウイルマへ向けるようにして上げる。

「うん、正直でよろしい！」

降参した優人の態度に、ウイルマ満足気そうに微笑んだ。白状した優人はばつが悪そうにウイルマから目を逸らす。

「気にしないで。年頃の男の子なんだし、女性に興味を持つのは健全なことよ？」

やんわりとフォローしつつ、ウイルマは健全で健康な扶桑海軍大尉に一つだけ忠告す

る。

「け・ど。女の子は皆そういうエッチな視線に敏感なんだから、気を付けないと……」
と、ウイルマはツンツンと右の人差し指で優人の唇を軽く突つついた。

「気を付けます」

優人がぼつが悪そうな顔をして応じると、ウイルマはクスクスと小さく笑い、再びローリングして優人から離れていった。

無意識にウィッチの胸を凝視する彼の悪癖は大戦初期のリバウ航空隊時代から指摘され続けている。優人自身「どうにかして直さないと」と思い、彼なりに努力はしているのだが、男の性故か一向に改善される気配がない。また、彼は天性のラッキースケベの持ち主でもあるため女性と、とりわけウィッチと関わった際に度々破廉恥なトラブルが起きてしまう。

それでも彼を本気で怖がったり嫌ったりする人間が現れないあたり、優人自身が生まれながらに持ち合わせている人徳とカリスマ性のおかげ……なのかもしれないが、真偽は不明である。

「そう言えば……」

しばらく間を置いて、ウイルマは別の話題を切り出した。

「あなたって、坂本少佐とは古い仲なのよね？」

「まあ、ウィザード候補生時代からの付き合いだからな。かれこれ8年になるよ」

優人はウィルマに語りながら、ウィザード候補生時代を過ごした舞鶴での日々を思い出していた。

海軍入隊を決意した優人はそれまで通っていた横須賀の小学校から舞鶴海軍付属小学校へ編入し、舞鶴近郊の講導館道場剣道師範代兼舞鶴海軍航空隊所属ウィッチである北郷章香少佐の師事を受けるようになった。その時の同期が現在エースウィッチとして世界に名を馳せている坂本美緒、竹井醇子、若本徹子の三人だったのだ。

あの頃はまさか自分がエース部隊である統合戦闘航空団に招聘されたり、妹と肩を並べてネウロイと戦うことになるなんて思いもしなかった。

「ねえ訊いてもいい？坂本少佐とのな・れ・そ・め」

と、訊ねるウィルマは先ほどと同じく悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「は？」

対する優人は気の抜けた声を漏らしてポカンとしている。

「隠さなくてもいいじゃない。少佐とはどこまで進んでいるのかしら？」

「あのな、坂本とはそういった関係じゃないよ」

何か勘違いをしているらしいウィルマに、優人は誤解だと反論する。

優人にとって坂本はあくまで付き合いの長い友人であり、彼女に対し特別な感情は抱

いていない。

「えっ、そんなの?」

恋話を期待していたのだろう。ウイルマは少しばかり拍子抜けする。

ウィッチといつても年頃の女性。恋愛話に関心を持つところは一般の少女となんら変わらない。

「一体どこでそんな話を?」

「私は前にいた部隊で、ブリタニアのウィッチ隊では有名な話よ。扶桑のウィザードとウィッチのカップルって……」

「おいおい……」

優人は肩を竦める。どうやら彼の知らないところで根も葉もない噂の広まっているらしい。

確かに、世界的にも著名なウィッチとウィザードが長年行動を共にしていれば興味本位でそういつた憶測をする者が現れてもおかしくはない。

「他にも、バルクホルン大尉やイエーガー大尉を巻き込んだ四角関係の話とか。あなたが502のクルピンスキー中尉やロスマン曹長を誑し込む目的でホテルに連れ込んだとか……」

「おいおいおいおい!何だよそれ!」

タチの悪いゴシップ雑誌にでも載せられているような尾ひれ背びれ付きまくりの噂話に、優人は思わず声を張り上げた。彼はすかさず弁解を始める。

「バルクホルンもシャーリーも良い友達でただけだし！ロスマン曹長やクルピンスキーとは偶々泊まったホテルが一緒だっただけで、疚しいことなんて何も無いよ！」

優人が見せた狼狽えつぷりは凄まじく、とてもガリアを解放した英雄である501の一員とは思えないほどであった。

「落ち着いて。大丈夫よ、分かっているから」

言い募る優人を落ち着かせようと両手で制しながら、ウィルマは苦笑する。

「ちなみに、その噂はどこまで？」

「かなり広まっているわね。私はロンドンにいた時に食堂のおばちゃんから聞いたわ」

「悪夢だ」

事実無根の噂がかなり広範囲にまで広まっている現実には、優人は辟易する。人の口には立てられないとはよく言ったものだ。

「まあまあ、扶桑では人の噂も75日って言うじゃない？」

「75日で消えるかな……」

優人は溜め息を吐くと、やや虚ろ気味な瞳を何気無しに上方へ向ける。星の輝いていた美しい夜空が暗雲に覆われているのが見えた。

「なんだか、一雨来そうね」

優人につられて上空に視線を移したウィルマがポツリと呟く。優人は「そうだな」と短く返し、一呼吸置いてから言葉を続けた。

◇ ◇ ◇

同時刻、第501統合戦闘航空団基地――

ワイト島基地と同様に、501部隊の面々も既に夕食を終えていた。

騒がしいほどに賑やかな食事時が過ぎ去り、閑散とした食堂内には、厨房から漏れ聞こえる食器洗いの水音のみが響いていた。

「はあく……」

厨房内では、食事当番である芳佳がリーネと並ぶようにして洗い場立っている。食器を洗っている手を動かしながら、彼女は本日何度目かの深い溜め息を漏らす。

「芳佳ちゃん、大丈夫？」

「へっ？何が？」

ふとリーネから声を掛けられる。質問の意味がよく理解出来なかつた芳佳は、答えの代わりに間の抜けた声を返した。

「なんだか元氣無さそうだし、夕方から溜め息ばかり吐いてるよ?」
「えっ?……そ、そうだったかな?」

どうやら無自覚だったらしい。リーネに指摘されたことで、芳佳は初めて自身の溜め息の多さと活力のなさに気が付いたのだった。

「やっぱり、優人さんがいないと寂しい?」

「ふえっ!? な、何でお兄ちゃんが出てくるの?」

凶星を突かれた芳佳が分かりやすい動揺を見せると、リーネは優しく微笑み返しながら説明する。

「ふふ。何でって、夕食中ずっと優人さんの席を寂しそうにチラチラ見てたんだもん。それくらいわかるよ?」

「あう……」

リーネは意外と観察力が高い。それ故に、他の面々が見落とすような芳佳のちよつとした仕草も見逃さなかったのだ。

兄恋しく思っている自らの心内は見透かされた芳佳は、恥ずかしさのあまり顔から火が出そうだった。

「——ッ!?!」

突如、芳佳はハツとなって目を見開く。かと思えば背後へ振り返り、カウンター越し

に食堂内をキョロキョロと見回した。

「どうしたの?」

「あ、ごめん」

芳佳はリーネに一言詫びると、視線を正面へ戻して食器洗いを再開した。

「お兄ちゃんが、話を聞いてるのかと思って……」

「そう言えば優人さんって、私達がお話してるといつの間にか後ろに立ってたりするよね?」

「うん、足音は聞こえないのにね」

思い出したように言うリーネに苦笑混じりに頷くと、芳佳は再び手を止め、チラッとカウンターに目を向けた。

カウンターには一人分の食事が載せられたトレイが残されている。優人の分の夕食だ。

食事当番の二人が、優人の留守をうっかり忘れていたために一人分多く作ってしまったのだ。

（お兄ちゃん、しばらく帰って来ないんだよね）

赤面していた芳佳の表情が、残された食事を見たことで再び陰り始める。

兄がいないのはたったの数日。8年間会えなかったことに比べれば大した時間では

ない。ほんの少し、ほんの少しだけ我慢すればいい。だが、芳佳は早くも心細さを感じていた。

「芳佳ちゃん……」

親友の寂しげな横顔を見つめるリーネもまた、心配そうに表情を曇らせる。何か芳佳を元気づける良い方法はないか、とすぐさま考えを巡らせた。

(……そうだ！)

名案を思い付いたのか、リーネは心中で呟きながら軽く握った右手で左手の平をポンツと叩いた。

「ああ、芳佳さんここにいたのね」

食事の方から歌手を連想させる澄んだ声が聞こえ、二人の耳朶を打った。振り返ると、大きめの茶色封筒を抱えたミーナがカウンターの向こうに立っていた。

「ミーナ中佐、何かご用ですか？」

芳佳は手に付いた洗剤の泡を水で洗い流すと、ハンドタオルで手を吹きながらトットとミーナの元へ駆け寄る。

「これ、今日届いたあなたのお兄ちゃん宛ての荷物なんだけど……」

ミーナは封筒を芳佳に差し出した。

「受け取る前に出発しちゃったみたいなの。申し訳ないのだけれど、預かって貰える

かしらう?」

「あ、はい。わたりました」

二つ返事で了承すると、芳佳は封筒を受け取った。封筒越しに手で中身を軽く探ってみる。どうやら中には雑誌が2、3冊入っているらしい。

「じゃあ、お願いね」

ミーナは一度だけ念を押すと、踵を返して食堂から去っていった。

「何だろう?」

渡された封筒を見つめる芳佳は、独り言ちながら首を傾げた。

◇ ◇ ◇

再び、ワイト島方面―

優人とウィルマの予想通り、程無くして月夜の空を覆った黒雲の群れから雨を降らせ始めた。

降り初めはポツポツと落ちる程度だった雨足は段々と強くなり、やがて大粒の雨を伴う本格的な降りへと変化した。

「酷い雨だな」

雨水を全身で浴びた優人が堪らずばやいた。今朝、洗濯したばかりの第一種軍装はあつという間にびしょ濡れ状態となり、シャツにまで滲み出していた。

「ああ、もうびしょびしょ〜！」

雨音に混じって不快そうなウイルマの声が聞こえ、チラツと彼女がいる隣へ目をやる。

「——っ!？」

大丈夫か?、と声を掛けようとしていた優人だったが、視界に飛び込んできたウイルマの姿を見て反射的に言葉を呑み込んだ。

ウイルマの着ている制服が、ジャケットと下に身に付けているシャツが雨水に晒されて身体にピッチリと張り付き、透けるほどに濡れていたのだ。

白い下着と色白な肌が浮かび上がり、水分を含んで額に張り付いている前髪を鬱陶しそうに払うウイルマを扇情的に見せていた。

(はっ……いかにいかに!)

しばらくは悩ましい姿となったウイルマを茫然と見つめていた優人だが、ハツと我に還ると大慌てで彼女から視線を逸らし、正面へ向き直る。

入浴時に不幸(?)にもウイルマ達の一糸纏わぬ肢体を目にしてしまった優人。しかし、今の彼女は全裸姿よりよっぽど刺激的な格好となってしまうている。

「これ以上酷くなる前に基地に戻ろう！」

優人は進行方向を見つめたまま、シャツが透けていることに気付いていないであろう。ウイルマに声を掛ける。

「そうね。このままじゃ風邪引いちゃうわ……くしゅん！」

返事の後には可愛らしくしゃみが聞こえた。大量の雨水に浴びて身体が冷えてしまっているのだろう。夏などいうのに雨のせいで気温も下がってきている。

夕食前。ワイト島の温泉に浸かって身体を温めて癒したというのに、この様子では基地に戻ったらすぐにでも入り直さなくてはならない。

「うう……寒い……」

「じゃあ、基地に引き返……」

引き返そう、と言おうとしていた優人がまた言葉を止める。だが先ほどとは違って、今度はずいぶん真剣な表情をしている。

その双眸は雨が降り注いでいる前方の景色を捉えたまま瞬き一つしない。

「どうしたの？」

雰囲気が変わった優人から何かを感じ取ったのか。ウイルマもまた、彼に真剣な眼差しを向ける。

「前に何かいる」

「えっ?」

優人にそう告げられ、ウイルマも正面へと視線を走らせる。

直後、遠方で赤い光が煌めいた。その光は暗闇に支配された夜空を赤ランプのように照らしながら一直線に伸び、一瞬で優人とウイルマの間を通り過ぎていった。

赤い光の正体はネウロイのビームだ。突然の奇襲を受けた二人の背筋に緊張が走る。

「ネウロイツ!」

ウイルマは背負っていたブレン軽機関銃 Mk. I を手に取った。

「やっぱり残党が残っていたか!」

優人も九九式二号二型改 13 m 機関銃を手に取り、安全装置を外した。

間も無く、ビームを撃ってきたネウロイは二人が視認出来る距離まで近付いてきた。

優人とウイルマは足を止め、ホバリングしながら銃を構える。

「中型か?」

優人は照準器越しに敵機を見定める。現れたネウロイの大きさは人類側の航空機程度で、小型に比べれば巨体だが大型には及ばない。連合軍内の規程では中型に分類されるサイズである。

ネウロイはビームを放ちながら速度を緩めず二人へと接近し続けている。優人は頭を戦闘モードに切り替え、すかさずウイルマに支持を出した。

「左右から挟撃を仕掛けよう！俺は右から行くから、ウイルマは左を頼む！」

「了解！お姉さんに任せなさい！」

と、ウイルマは笑顔とサムズアップで応じる。

「頼りにしてる！」

「それはお互い様よ？ガリア解放の英雄さん♪」

そう言つてウインクすると、ウイルマはスピットファイアMk. IIの魔導エンジンを吹かしてネウロイへ接近していった。遅れを取るまいと、優人もインカムを使つてワイト島へ一報入れるとすぐさま行動に出た。

まずウイルマがネウロイの左舷側へ攻撃を仕掛けた。ブレン軽機関銃より射出された303ブリテイツシュ弾が、ネウロイの装甲に叩き込まれる。

次にネウロイの注意がウイルマへ集中した隙を突き、右舷より仕掛けた優人が九九式二号二型改13mm機関銃を発砲する。303ブリテイツシュ弾よりもさらに強力な12.7mm×99弾が多数命中し、そのうちの何発かはネウロイの表面装甲を抉つた。

一撃離脱戦法で交互に攻撃を行い、自分達の身を守りつつ確実にダメージを与えていく優人とウイルマ。対してネウロイは自棄になったかのようにやたらめつたらビームを撃つてくる。が、二人には当たらない。

（しなやかだ。機体に負担を掛けすぎない機動、さすがはリーネの姉さん。長いキャリアに恥じない飛行技術だ）

（まったく無駄のない、それでいて綺麗な動き。射撃もかなり正確だし、さすがは世界的エースウィザードね）

心の中でお互いを褒め称える優人とウイルマ。雨と暗闇で視界の悪い中でも二人は問題なく連携を取っているあたり、ロットの相性は悪くないのかもしれない。

「よし！押ししてる！」

『これなら、すぐお風呂に入れそうね！』

距離が離れ、雨音で声もよく聞き取れないため二人はインカムで会話を行う。

夜の闇を切り裂いたビームの初撃には、少しヒヤツとしたものの。落ち着いてみれば、501以前より散々戦ってきた大型の個体ほど戦闘力は無さそうである。

悪天候下での戦闘が長引かずに済むことを確信し、優人は安堵する。しかし、その予想はすぐに裏切られることとなる。

『きゃあつ!!』

インカム越しに聞こえたウイルマの叫び声が優人の耳に突き刺さった。

「ウイルマ!?!」

優人は反射的にウイルマの方へと視線を走らせる。すると右腕を負傷し、苦痛で表情

を歪めているウイルマの姿が確認できた。

「ウイルマ、怪我したのか!？」

『あはは……ごめんなさい。銃落としちゃった』

出血した右腕を左手で押さえながら、ウイルマは苦笑気味の笑顔を向けてくる。

「早く離脱しろ! 後は俺が!」

と、心配そうに声を張り上げながらも優人は脳裏に疑問符を浮かべていた。

ウイルマのようにな腕の立つウィッチが、この程度のネウロイ相手に負傷したことがどうも引つ掛かったのだ。

雨水が目に入りでもしたのか、ユニットの不調か等いろいろな考えが優人の頭を過る中、ふとウイルマが坂本と同じく自分よりも一つ歳上だということを思い出した。

(まさか!?!……)

ある可能性に優人が気付き、ウイルマに確認しようとした。その時だった。

ネウロイは怪我をして弱っているウイルマに集中砲火を浴びせ始めた。ウイルマは咄嗟にシールドを展開して身を守ろうとする。

例によってネウロイは出鱈目に撃っているだけで殆ど当たっていなかったが、放たれた多数のビームのうち直撃コースにあった二発がシールドに接触する。ビームは何事もなかったかのようにシールドを突き抜け、ウイルマのストライカーユニットを掠め

た。

「あつー……きやああああ!!」

ネウロイの攻撃が両足のユニットに被弾、持ち主の悲鳴と共に機体から爆煙が上がる。飛行手段を失ったウイルマは重力に引かれるままに落ちていった。

「ウイルマツッ……この野郎おおおおお!」

ウイルマが撃墜され、憤慨した優人は13mm機関銃のフルート射撃による報復を見舞った。

僚機をやられて怒り狂いながらも優人の思考は比較的冷静だった。彼の射撃がまだ攻撃を加えておらず、コアが隠れている可能性が高い機首部分のみに集中しているのが何よりの証拠である。

(落ち着け……こんな時だからこそ冷静になるんだ!)

怒りに任せて乱射し、弾切れや魔法力を起こしてしまえばネウロイを倒すことが出来なくなる。そして、ネウロイがいたままではウイルマも救助も行えない。

とはいっても、やはり焦りを感じているのだろう。優人はそんな自分を必死に宥め、一刻も早くネウロイを倒そうとする。

やがて、優人の集中攻撃を受けたネウロイの機首は碎け、コアが姿を現す。優人は攻撃の手を緩めず一気にコアを破壊、ネウロイは後片付もなく四散した。

「——ッ!？」

ネウロイ消滅時に発せられる光によって一瞬だが夜の闇が払われ、優人は眼下の海上にある小さな島に気付いた。

ワイト島よりもさらに小さいであろうその島から小さな黒煙が上がっているのが見えた。おそらくは、ウイルマのスピットファイアのものだ。

「はあはあ……ウイルマ!!」

少しだけ息を整えた優人は、出来たばかり友人の無事を祈りながら自身の真下に屹立している島を目指して急降下していった。

第4話 「ワイト島で湯治療養 その3」

暴風雨が吹き荒れるブリタニアの夜。ワイト島方面海上のとある名も無き小島の上空では、哨戒に出ていたウィッチとウィザードの二人組が中型ネウロイと交戦状態に入った。

ネウロイは撃破したものの、ウィザードと共に応戦したファラウエイランド空軍に所属のウィッチ——ウイルマ・ビショップ軍曹がストライカーユニットを損傷、島へ墜落してしまふ。

彼女とロツテを組んでいた扶桑皇国海軍ウィザード——宮藤優人大尉は、ネウロイ撃破と同時にウイルマビショップ軍曹が落下していった小島へと急いだ。



ネウロイ撃破より1時間後、ウイルマが墜落した小島——
「う、うくん……あれ？」

気を失っていたウイルマ・ビショップは声を小さく漏らしながら目蓋を開いた。

目を覚ました彼女の視界に映ったのは見慣れぬ鉄骨天井だった。

「……………」

ウイルマは、身体を起こすと辺りを見渡した。薄暗く、やや広めの空間内に一斗缶を利用した焚き火台があり、焚かれた炎で周辺が温かく照らしている。

何かの建物内にいるらしい。ウイルマは焚き火の近くに置かれているソファアに寝かされていた。

さらに目を凝らして見ると大きな入り口が開閉式のシャッターによって塞がれ、床から一段高い場所にキャットウォークらしき通路がある。奥には、やや型の古い航空機が一機と複数の銃器が木箱の上に置かれていた。まるで軍の格納庫のような景色である。

「私、一体?」

右手で頭を押さえ、記憶を辿っていく。第501統合戦闘航空団より出向していた優人と共に夜間哨戒に出たこと。その途中で大雨に降られ、服や髪がびしょ濡れになったこと。ワイト島基地へ帰投しようとした矢先にネウロイと遭遇し、戦闘になったこと。

気を失う前の出来事が一つ一つ蘇り、すぐウイルマは自分がネウロイに撃墜され、付近の小島に落下したことを思い出した。

「私、空から落ちて……………どうして助かったの? うっ……………」

何故あの状況で助かったのか。ウイルマが思考を巡らしていると、右腕に微かな痛みが

走った。腕をよく見てみると、包帯が巻かれていた。

「これ？」

ウイルマは左手で包帯に触れてみる。しつかりと巻かれていて、処置をした相手に多少なりとも医療に関する知識を持っていることが伺えた。

「気が付いたか？」

不意に聞こえてきた男性の声が目撃を打ち、ウイルマはハッと顔を上げる。声に続いてコツコツという足音が暗然とした空間内に響き出した。何者かの接近を感じ取り、ウイルマは思わず身構えた。

やがて、奥の方からタオルと毛布を手にした一人の男性が姿を現した。

「優人？」

ウイルマは拍子抜けしたように目を丸くする。現れた男性は今日できたばかりのウイルマの新しい友人——優人だった。

「あ、ああ。気分はどうだ？」

確かめるようにウイルマが問い掛けると、優人は何故か彼女から視線を逸らした。焚き火のせいだろうか、心無しか頬に赤みが差しているように見える。

「……は何処なの？私は墜落したはずじゃ……う？」

「その前に、これを身体に巻いてくれるかな？」

ウイルマの質問に答える代わりに、優人は手に持った毛布を差し出す。視線は彼女から外したままだ。

「目のやり場に困るからさ……」

「えっ?……あっ!?!」

優人に言われ、ウイルマは自分が服を着ていないことに気が付いた。正確に言うと、ズボンとブラは身に付けているが、ジャケットとシャツ。そして軍帽が脱がされていたのだ。

「あ、あはは。失礼……」

ウイルマは気まずそうに苦笑すると、優人の手から毛布を取り、自身の身体に巻き付けた。

「……もういいか?」

「大丈夫よ、こつち向いて……」

促され、優人はゆっくりとウイルマへ顔を向ける。頬を軽く染め、毛布を衣服のように纏った彼女の姿は官能的ながら神秘的な魅力を醸し出していた。

「私って、落ちたはずよね?」

「落ちた場所にあった茂みがクッションになったみたいで、大事には至らなかったよ」

「それで、何で私は下着姿なの?あなたが脱がしたの?」

ウイルマが赤裸々に訊ねると、優人は慌てた様子で説明を兼ねた弁明を始めた。

「ぬ、濡れてたからさ。風邪ひいたらいけないと思って、服を脱がせて軽く身体も拭いたんだ。もちろん、変なことは何もしていないからな！」

両手を顔の前で振りながら、優人は必死に訴える。それがおかしかったのか、ウイルマはクスクスと笑い声を零した。

「笑うことないだろう」

と、優人は不機嫌そうに顔を顰める。

「ふふっごめんささい。これもあなたが？」

ウイルマは右腕を少しだけ上げ、巻かれた包帯を指差す。

「まあな。あくまで応急措置だから無理はするなよ？」

「わかってるわ。ありがとう♪」

と、ウイルマは礼を述べてウインクする。しかし、まだ一つ疑問が残っている。今、自分達が屋根を借りているこの格納庫のような建物についてだ。

「ところで、ここは？私が落ちたのって、確か小さな無人島だったわよね？」

「その小さな島にある飛行場だよ」

「飛行場？こんな地域に？」

ウイルマは怪訝そうに眉を寄せながら重ねて訊ねる。内部の風景から飛行場ないし

倉庫であることは察していた。

しかし、だとすればワイト島以上の僻地であるこんな無人島に一体誰が飛行場など建設したのだろうか。ブリタニア空軍や連合軍が新しい飛行場を造ったという話は聞いていない。

「この持ち主が誰かはわからないけど。ありがたいことにいろいろ揃っていたから、使わせてもらったんだ」

そう言つて優人はウイルマが座っているソファアの向こうを指差した。

ウイルマが振り返ると、救急箱やらレーションやら引退したウィッチをモデルにしたグラビア雑誌やらが置かれた棚があるのがわかった。飛行場の持ち主の所有物だろう。

棚の少し手前の床には損傷したスピットファイア。さらにウイルマの制服と軍帽、使用済みのタオルがロープで干されていた。滲み出た雨水がポツポツと床に垂れ落ちていた。しばらくは渴きそうにない。

「雨はまだ止んでないのね？」

ウイルマは入り口を塞いでいるシャッターに目をやりながら呟く。

表はもはや暴風雨と形容しても過言ではないほどに荒れていた。屋外と屋内を隔てているシャッターがガタガタと激しく揺れる様と、外から聞こえてくる激しい雨音が気絶している間の天候の悪化をウイルマに訴えているかのようだった。

「しばらくは飛べそうもないな」

ここまで空が荒れていてはストラライカーで飛び立つことは難しいだろう。溜め息混じりに呟いた優人は持っていたタオルで髪を拭き始めた。

「待って！あなたの服も濡れているわよ、早く着替えないと！」

髪を拭いてタオルを手放そうとする優人に、ウィルマは声を張り上げて忠告する。

彼女の言うとおり、優人の制服も雨でグショグショになっていた。焚き火があれど着替えなければ風邪を引いてしまう。しかし、当然優人は代えの制服など持ち合わせていない。

「そうは言っても、無事なのは下着くらいだし。毛布はお前の分しか見つからなかったし」

この飛行場内を可能な限り見て回ったが、衣服の代わりになりそうなものはウィルマに渡した毛布だけだ。

服を濡れたまま着るよりはましだろうが、大雨で気温が低下している中、焚き火があるとはいえ下着だけでは心許ない。

「なら、私と一緒に毛布を被ればいいじゃない？」

「……………はい？」

ウィルマの口から飛び出した言葉に、優人は己の耳を疑った。自分の聞き間違いだと

思った優人はフウ深呼吸し、気持ちを落ち着けてから訊き返した。

「ごめん、聞き取れなかったわ。もっかい言つて」

「だから服を脱いだ後に私と一緒に毛布にくるまれば——」

「いやいやいやいやっ！何言つてんだよ！」

優人は激しく頭を振り、吼えるように怒鳴り返した。ウイルマの大胆を通り越した型破りな提案は聞き間違ひではなかったらしい。

「よし、そうと決まれば！」

思い立ったが吉日。グツと右拳を力強く握ったウイルマはソファーから立ち上ると、猫が跳び跳ねるような俊敏さで動き、優人との間合いを一気に詰める。

「な、なんだ？」

「ふっふっふっ♪わかっている癖にいっ♪」

たじろぐ優人に対し、ウイルマはキラリと両眼を怪しく光らせた腹黒い笑みで応じる。

「風邪を引く前に服を脱がさなくちや♪」

「ちよっ、ちよっと待つて！少しだけ俺の話——」

「問答無用！私の胸や裸を散々見た癖に、自分は見せないなんて不公平でしょう？」
かような発言と共にウイルマは優人との距離をジリジリと詰めていった。

「ウイルマ、待って！ホントに待って！」

「ふふふ、良いではないか良いではないかあゝ♪」

数世紀前の扶桑に何人かはいたであろう悪代官お決まりの台詞を口にすると、ウイルマは優人に飛び掛かっていった。

◇ ◇ ◇

約一時間後――

風と雨足が多少は弱まってきたワイト島方面の夜空を一人の少女が魔導エンジン音を響かせながら飛行していた。

扶桑皇国陸軍の制服に身を包み、ストライカーユニット『キ43―II後期型』を駆るその少女は扶桑皇国陸軍中尉にしてワイト島分遣隊指揮官の角丸美佐である。

「ウイルマさん、宮藤大尉。一体どこへ？」

角丸は周囲を注意深く見渡し、優人とウイルマを必死に探していた。

優人からネウロイ出現の一報を受け、角丸はラウラを連れてすぐさま二人の元へ向かった。

ひどい悪天候であったため経験の浅いアメリカとフランには同行させず、基地で待機

させている。

しかし、空域に到着しても優人やウイルマ、ネウロイの姿はなく、荒れた海が広がっているだけであつた。インカムで呼び掛けても応答がなく、角丸はラウラと手分けして二人の搜索を行つていた。

「ラウラ、そつちはどう？」

角丸はインカムに指を当て、別行動を取つているラウラに通信を送つた。

『ダメ、ウイルマも大尉も見当たらない』

と、インカム越しにラウラの声が返ってくる。彼女の方も収獲無しのようなのだ。

「そう……」

ラウラに短く返すと、角丸は暗雲に覆われた雨空を見上げて唇を噛んだ。

雨足は弱くなつているとはいつても以前として視界は悪いまま。干し草の山の中から針を探すよりはマシかもしれないが、優人とウイルマを見つけ出すのは困難だつた。

魔導針を有するナイトウィッチ等、探查能力に秀でた人材がワイト島分遣隊のような僻地の二線級部隊にいるはずもなく、角丸とラウラは自分達の目で荒れた海や漆黒の空を確認しなければならぬ。

(やっぱり、すぐにでも呼び戻すべきだつた……)

角丸の胸の内で次第に不安が大きくなつていく。ウイルマがエスコートと称して優

人の個人飛行に同行した時に、*“彼女の現状”*を考慮してすぐにも呼び戻すべきだった。しかし、ガリアの巢が消滅してネウロイが現れなくなったことや信頼する上官である優人が一緒だということが角丸を樂觀視させた。

二人はどこへいったのか、現れたネウロイが予想外に強敵でやられてしまったのか。(いや、今はとにかく二人の無事を祈るしか)

角丸は頭を切り替え、二人の搜索を再開する。余計なことを考えるよりもまず行動しなければ、優人とウイルマを見つけ出さなくては。

角丸が心の中でそう呟くと、ラウラからの通信がインカムに入った。

『隊長、私の方に何かいる』

『ウイルマさんと宮藤大尉?』

『違う、所属不明の飛行体。こちらの呼び掛けに応答しない』

『まさか、ネウロイツ!?』

ラウラからの報告に角丸は息を呑んだ。人類側の定説ではネウロイは水が苦手ということだったが、それはあくまでも原則であり、例外があることも報告されている。

現に扶桑海事変において、皇国陸海軍のウィッチ・ウィザードとの最終決戦に臨んだネウロイの群れは嵐の中でも動きは鈍らなかつた。

『レーダー網を低空飛行で掻い潜ったみたい。今、迎撃する!』

「待って！私もいくわ！」

もしラウラが捉した飛行体がネウロイで優人とウィルマが負けたのだとすれば、ラウラ一人での迎撃はかなり厳しいものとなる。

角丸はストライカーを加速させ、ラウラの元へと急いだ。別行動とはいっても同じ空域を飛んでいるので、ラウラはすぐに見つかった。報告にあつた所属不明の飛行体もシルエットのみではあるが確認出来る。

角丸は飛行体の正体を見極めるべく、取り出した双眼鏡で対象を観測する。

「……あれって？」



所属不明の飛行体を視認したラウラは足を止め、その場にホバリングしながらMG42を構えた。照準器で未確認機を捉え、狙いを定める。

(まさか、こいつがウィルマと大尉を！)

ラウラは奥歯を噛み締め、未確認機を睨み付ける。

『待ってラウラ！』

トリガーを引こうとしたその時。インカムから発せられた声がラウラの耳朵を刺激

した。それと同時に、合流した角丸が射線上に飛び込んでくる。

「隊長!？」

目の前に現れた角丸に驚き、ラウラは思わず声を上げる。

「こつちに来る途中、双眼鏡見てみたけど。あれはネウロイじゃないわ!カールスラントの古い民間機よ!」

先程、角丸が双眼鏡越しに確認したのはカールスラント製の航空機『ドルニエ・コメット』だったのだ。

「民間機?なら、何で応答がないの?」

ラウラは怪訝そうに眉を顰める。

「わからないけど、ともかく接近して確認しましょう!」

角丸とラウラは魔導エンジンの回転数を上げ、ドルニエ・コメットに接近していった。



一方、その頃――

「ウィッチーズの活躍によってガリアの解放が為された。ならば次に奪還するべきは我らが祖国、カールスラント!」

「さあて？ブリタニアの地理はよわからんわい」

と、操縦桿を握る小太りの老人も己の頭上に疑問符を浮かべる。

「……………わしらは、迷ってしもうたのか？」

「……………」

「……………」

ネウロイを倒すため、嵐の中へ勇ましく飛び込んできた三人の老兵達。しかし、ブリタニアの地理を理解せずに空の迷子になり、さらには非武装の旧型民間機でネウロイを相手取ろうとする等、どうやら勢い任せだったらしい。

機内に気まずい雰囲気の流れ、老人達は顔を見合せたまま黙り込んだ。

「んっ？」

ふと白髭の老人が窓の外に人影を見つける。ストライカーを履いた角丸とラウラである。

「ウイ、ウイツチじゃあああああ!?!」

眼前に現れた二人の美女を見た白髭の老人は鼻息も荒く叫んだ。

「なぬ!?!ウイツチとな!?!」

「ウ、ウ、ウ、ウ、ウイツチィ〜!!」

続いて、機体の操縦を担当する小太りの老人やボケの入った老人も歓喜の声を上げ

る。威勢を取り戻した老人達によつて、静寂に支配されていたドルニエ・コメットの機内が再び騒々しくなる。

「ぬ、濡れた服が身体に張り付いておるぞ！」

白髭の老人の双眸が雨水に濡れて身体にピッチリくつついた角丸とラウラの制服を捉える。

二人の場合はウイルマと違い、上着を着込んでいるため肌や下着類が透けることはない。しかし、服が密着しているためボディラインが丸わかりとなっている。

「あの果実のように豊かな胸！ た、たまらん！」

「なんと形の良い尻じゃ！ 是非とも撫でてみたいものじゃ〜！」

老人達の邪な視線が窓の外にいる二人の肢体に注がれる。声が聞こえずとも、彼らの眼差しから何か善からぬ感情察したらしく、角丸とラウラは両手で庇うように胸を隠していた。

「なあ、あのお嬢さん達。こつちに向かつて何か叫んどらんか？」

外の二人が自分達に対し、何か呼び掛けていることに小太りの老人が気付いた。

「はて？ なんと言つとるんじやろ？」

白髭の老人は首を傾げ、小太りの老人に振り返る。

「無線は使えんのか？」

「何を言つとるんじや？無線は、さつきあんたがルガーを暴発させてブツ壊したんじやろうが！」

「おお！そうじゃつたあゝ！」

小太りの老人に指摘され、白髭の老人は自分の愛銃の暴発によつて無線を壊してしまつたことを思い出す。

「なんとかして、あの可愛い娘ちゃん達と話せんかのお？」

「窓をプチ割つてはどうじやろ？」

「おお、それがええ。そうしよう！」

小太りの老人の提案に乗つた白髭の老人は、前大戦時より愛用し続けているルガーをホルスターから抜き、操縦席の窓に向けて発砲した。数発の銃弾を受け、窓ガラスが外へ飛び散る。

「一体何をされているのですか？この空域における本日の飛行予定は何も聞いていませんよ？」

突風と雨粒、そして角丸の叫び声がドルニエ・コメットの機内へ飛び込んできた。

「迷つてしまうたのじやあゝ……」

「……………えっ？」

白髭の老人から返つてきた言葉に角丸は目を丸くした。

「む、無線は?」

重ねて訊ねる角丸に、今度は小太りの老人が答える。

「壊してしまつたのじゃあ〜……」

「……………」

丸くなつていた角丸の目が点になる。少し離れた場所で会話を聞いていたラウラもまた、老人達へ呆れたような視線を向けている。

「と、とにかく!この悪天候下でこれ以上飛行は危険です!近くに我々の基地がありませんので、一先ずそこへ避難を!」

と、角丸は基地のあるワイト島まで老人達にドルニエ・コメットを誘導しようとした。

その時だった。回転していたドルニエ・コメットのプロペラが、プスツと音を立てて突然停止した。

「ありや?」

「なんと!?!」

「エ、エ、エ、エンジンがああああああ!!」

燃料を使い果たしてしまつたのか。古い機体故の経年劣化か。はたまた、老人達の整備に何か問題があつたのか。ドルニエ・コメットのエンジンはよりにもよつて飛行中に停止してしまつた。

これにはさしもの老兵達も動揺を禁じ得ず、三人は順に悲鳴を上げる。

「ツ!? ラウラ!」

「うん!」

角丸が目配せをすると、それだけで隊長の意図を理解したラウラは頷き、二人はすぐに行動に出る。

角丸とラウラはそれぞれドルニエ・コメット左右の翼の下に入り、重力に引かれる機体をなんとか支えようとする。

だが、ドルニエ・コメット総重量は決して軽くはない。高度が次第に落ち始める。

「くっ!」

予想以上の重みにラウラは歯を食い縛る。

「頑張つて! なんとしても機体をワイト島まで運ぶのよ!」

反対側の翼を支える角丸が声を張り上げ、ラウラを励ます。が、そう言う角丸もまた苦悶に表情を歪めていた。

二人は肩で息をしながらなんとか高度を維持し、ワイト島を目指して必死に飛び続ける。

しかし、時間が経つにつれて二人の魔法力や体力は限界へと近付いていく。

「はあはあ……見えた!」

不時着を覚悟した角丸の視界に基地管制塔の明かりが飛び込んできた。

「ラウラ、着陸態勢に入るわよ！」

「了解！」

二人は残った力を振り絞り、基地の滑走路へと降りていった。

◇ ◇ ◇

その頃、優人とウイルマ——

「はあ……」

避難した無人飛行場の格納庫で、優人は焚き火にあたりながら溜め息を吐いていた。毛布にくるまってるため見えた目では分かりづらいが、今彼はトランクスを一枚だけ身に付けている状態である。

濡れた服を着たままだでは風邪を引いてしまうと、ウイルマの手で暴かれてしまったのだ。脱がされた第二種軍装はウイルマの服の隣に干されている。

「すう……すう……すう……」

ふと静かな寝息が聞こえてきた。チラツと隣を見てみると、優人の右肩に頭を乗せて眠りこけているウイルマの姿が確認出来た。

ウイルマも優人と同じく服を脱いで下着姿となっている。彼女が着ているのは、青色の小さいリボンをフロントであしらった純白のズボンとブラのみである。

色合い、デザイン共に清楚な印象を受ける下着類だが、ウイルマ自身が物凄いダイナマイトボディの持ち主であるために彼女のむしろセクシーさを際立たせている。

(……無防備過ぎるだろ)

同世代の異性である優人を下着姿に引ん剥いただけでも十分驚きだが、互いに下着姿となった状態で寒いからと一つの毛布に一緒になつてくるまり、あまつさえ肢体の殆んどを露にしたまま寝入ってしまうとは、大胆と言うか度胸が良いと言うか。

以前、ウイルマの妹であるリーネが優人と同じ湯船に浸かっていたことがあったが、彼女はフルフルと小刻みに震えながら恥ずかしいのを必死に我慢していた。

しかし、姉の方は全裸姿を正面から見られても恥ずかしがることは殆んどなく、裸同然の格好で優人に添い寝という無防備な姿を晒している。

もちろん、優人はウイルマをどうしようなどとは思っていないが、出会ったばかりの人間に対して少々気を許し過ぎではないだろう。

「う〜ん……」

ウイルマの口元から短い寝言が漏れ聞こえる。その唇の動きがどことなく官能的で、優人は胸がドキッと高鳴る。

年頃の男子として妙な衝動に駆られぬよう、優人は理性を総動員したうえで視線と意識をウィルマとは別方向へ向ける。

「落ち着け……とにかく落ち着け……」

「どうしたの？」

「うおっ!!」

突如聞こえてきた声に、優人は肩をビクつかせながら声を上げる。

振り返ると、つい数秒前まで眠っていたはずのウィルマか彼を見つめていた。

「な、なんだ……起きたのか？」

「あなたこそ、眠れないの？」

「あ、ああ……まあ……」

曖昧な言葉を返す優人。彼の視線は段々と下方へ移り、薄暗い格納庫内でも強い存在感を放っているウィルマの胸を捉える。

男の性故なのか。見てはいけなないと思いつつも、優人は視線を胸から逸らすことが出来ずにいた。

「もしかして、下着姿の美女と一緒にだと緊張して眠れないのかしら？」

「……………」

クスクスと悪戯っぽく笑うウィルマに、優人は無言でそっぽ向いた。沈黙もまた肯定

の証である。

「ふふふ♪リーネの手紙にあつた通りね」

「手紙？」

「この前届いた手紙にあなた達兄妹のことが書いてあつたの」

ウィルマは簡単に説明すると、一呼吸置いてから手紙の内容を話し始めた。

「頑張り屋で元氣と勇氣を分けてくれる素敵な妹さんと、ちよつとエツチだけ優しく頼りになるお兄さんのコンビだつて……」

「……ちよつとエツチ、か」

一言余計だと思いつつも、事実には違いないため否定することが出来ず、優人は小さく溜め息を吐いた。

「最近の手紙にはあなた達のことばかりよ？『優人さんは素敵な人で、新しいお兄ちゃん
ができたみたい』なんて書かれて、お姉ちゃんはおちよつぴりジェラシーな気分よねえ
……」

唇を尖らせて不平を漏らすウィルマだが、当然本気で嫉妬しているわけではなく、あくまでからかいを目的とした冗談で言っているだけである。

「………素敵な人？そりゃ買い被り過ぎだよ。俺は悪い兄貴さ」

ははは、と優人は自らを自嘲気味に笑う。予想とは違った返し方にウィルマは怪訝そ

うに目を瞬かせる。

「俺は10歳の時に扶桑海軍のウイザード候補生に志願したんだが、妹が小学校低学年の時はウラル方面にいたんだ。高学年の時にはオラーシャのリバウに、あいつが中学に上がった時には501の一員としてブリタニアにいた」

「……………」

「軍務軍務で一度も家に返らず、妹には寂しい想いばかりさせてきた。この前なんてカツとなつて手を上げちまつたし、最低な兄貴だよ」

「そんなことを言つてはダメよ」

自己卑下する優人に対し、ウイルマはやや語気を強めて異を唱えた。

「確かにあなたと離れている間、妹はとても寂しい想いをしたのかもしれない。けど、リーネの手紙には妹がとにかくあなたが大好きで、心から慕っているということが書かれていたわ。寂しさ以上に誰かを守るためネウロイと戦っている兄を誇りに思っていたんじゃないかしら?」

「……………けど、俺は妹を引っぱりたいんだぞ」

「それだけ妹を愛してる、つてことでしょうか?でなくちゃ叩いたことに罪悪感なんて抱かないわ」

そう言うのと、ウイルマは優人の頬に自身の手を添えて自分の方へと向かせた。

互いの吐息がかかり、鼻と鼻がくつききそうな距離で二人は向き合う。優人は自分の顔が熱く、赤くなつていくのを感じた。

「兄や姉の役割を完璧にこなせる人間なんていないわ、私だつてたくさん失敗したもの」
ウイルマはそう微笑み、コツンと小さな音を立てて優人の額に己の額をくつつけた。

「それだけ妹さんのことを想つてる。あなたは立派なお兄さんよ、もつと兄としての自分に自信を持つて」

子供っぽいところが残っている優人と違い、ウイルマは精神面でも大人びている。彼女の優しさに包まれた優人は、奥底に抱えていた悩みを打ち明けられた。聞いてもらったことで心も少し軽くなった。

「あ、ありがとう」

「うふふ♪どういたしまして」

優人が赤面しながら礼を言おうと、ウイルマは満足気に喉を鳴らして彼から離れる。

「そう言えば……」

顔から熱が引いたところで、優人はずっと頭に引つ掛かっていた疑問をウイルマにぶつけてみた。

「もしかしてお前、もうシールドを満足に張れないんじゃない？」

「あら、バレちゃった？」

ウイルマは舌を出しながらテヘツと悪戯つ子のように笑う。

「お前なあ、そういうことは予め教えといてくれよ！ さっきの戦闘だって、一歩間違っていたら死んでたかもしれないんだぞ？」

「いいじゃない、こうして生きてるんだから。あなたがいてくれたおかげで、怪我の手当ても出来たし。」

と、応急措置の施された右腕を掲げながらウイルマはウインクする。

「まったく……」

ウイルマの能天気な返しに怒る気も失せたのか。優人はそれ以上は何も言わず、代わりに呆れ顔で溜め息を漏らした。

その後、二人は少し世間話をした後に悪天候下の飛行と戦闘で疲れた身体を休めるため仮眠を取り始めた。

先に一眠りしていたウイルマはもちろん、優人もすぐに眠りに就き、毛布にくるまった二人は寄り添うようにして夢の中へと沈んでいった。

第5話 「ワイト島で湯治療養 その4」

夜11時頃、ワイト島分遣隊基地――

ドルニエ・コメットは基地の滑走路上に無事着陸し、老人達も機から降りてきている。幸いなことに機内にいた三人はもちろん、機体を支えた角丸やラウラにも怪我はない。

「ネウロイを倒そうと？あの機体で？」

老人達に簡単な事情聴取を行っていた角丸は不思議そうに目を瞬かせた。

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の活躍に感化されたこの老兵達は、ガリアの巢が消滅した直後から昼夜問わず飛行を繰り返していたらしい。目的はガリアやその周辺に潜んでいる残党ネウロイの討伐である。しかし、その為に老人達が用意した機体は非武装の民間機であるドルニエ・コメットと、ネウロイを相手にするに足らずにはあまりに心許ない。

老人達自ら行った整備も不十分だったようで、角丸とラウラに発見されていなければ、ネウロイと戦う前に三人は海の藻屑と消えていたことだろう。

「いやあく、申し訳ないのう」

白髭の老人が三人を代表して謝罪する。

「げ、元気なおじいちゃん達ですわね」

離れた場所から角丸と老人達のやり取りを見ていたアメリカが、すぐ隣に立つフランに話し掛けた。

「ふんっ！バカなだけでしょ？」

と、フランは鼻を鳴らす。さらに隣に立つラウラは無言を貫いているが、内心ではフラン同様老人達に呆れていることだろう。

「ま、まあ……あまり無理はされなくてください」

角丸は顔をひきつらせながらも、なるべく傷つけないように言葉を掛ける。

「ウム、原因はおそらくエンジンの不調じゃ。今度は整備を怠らんようにしなくてはな」

白髭の老人が顎を撫でながら自分達の失態を分析する。

「そもそも戦闘機を使わなかったのが悪いのじゃ〜！」

と、小太りの老人が腕組みする。すると、白髭の老人が何かを思い出した。

「そう言えば、格納庫にオツカード・Iが一機残っていたな！」

「おお！ならば次はそいつで飛ぶぞい！」

「カ、カ、カ、カールスラントの戦闘機は世界一いいいいいいっ！！」

白髭の老人の提案に小太りの老人とボケの入った老人は歓喜する。しかし残念ながら、この三人はまったく反省をしていない。

(この人達は……)

角丸は軽い頭痛を覚えた。老人達の年齢からして、第一次ネウロイ大戦時は現役のパイロットとして航空ウィッチ・ウィザードと肩を並べて戦ったことだろう。

しかし、今となつては本人達に悪気がなくとも結果的に現役航空歩兵にストレスを与える老害と成り果ててしまっている。

「あの一つお聞きしたいのですが？」

いつの間にか角丸の隣にいたラウラ。彼女が老人達に声を掛けると、白髭の老人が応じた。

「む、なんじゃろ？」

「あの空域を飛んでいる時に扶桑皇国海軍のウィザードと、ファラウェイランド空軍のウィッチを見かけませんでしたか？」

未だに行方がわからない優人とウィルマ。自分や角丸よりも早く、長くあの空域を飛んでいた老人達ならば何か知っているかもしれない。ラウラは三人の目撃情報を当てにしていた。

「はて？見とらんなあ？」

「……そうですか？」

と、ラウラは視線を伏せる。彼女だけではない、他のメンバーの表情にも影が差して

いた。

相変わらず二人から連絡はない、手掛かりも無し。ワイト島分遣隊の面々は、いよいよ最悪の状況を覚悟しなくてはならなくなった。

「何かあったのか？」

表情を曇らせたウィッチ達を心配し、白髭の老人が理由を訊ねる。

「ええ、実は……」

角丸は事の次第を簡潔に説明する。年老いても聴覚が十分に維持されている老人達は、時折ウンウンと相槌を打ちながら角丸の話に耳を傾ける。

「それは心配じゃろう。良ければ、むしろも搜索の手伝いをして——」

「いいえ、お気持ちだけで十分ですのぞ」

白髭の老人の言葉を遮りつつ、角丸は苦笑気味に遠慮する。

「それにあと30分でロンドンから迎えの輸送機が来ますから……」

「む、そうか。ならば！」

白髭の老人の表情が突然真剣なものへと変化する。

「な、何でしょう？」

急に態度を変えた老人を見て、角丸の顔が強張る。

「帰る前に、お嬢ちゃんの胸を触らせてくれえ〜！」

かような発言と共に老人達の六つの手が、一齐に角丸とラウラの豊かなバストへ手を伸べる。

バキッ！ドゴッ！ベキッ！

雨が弱まったワイト島方面の夜空に、鈍く打撃音が響き渡った。

◇ ◇ ◇

同時刻、501基地宿舎――

「っ、っこれはっ!？」

入浴を終え、自室に戻った芳佳はミーナから渡された荷物の中身を確かめると同時に目を見開いた。扶桑から遣欧艦隊とは別ルートでの補給で届いた荷物は優人に宛てられたものである。

親しき仲にも礼儀あり。いくら相手が仲の良い兄とはいえ、芳佳は他人に宛ての荷物の中身を勝手に見るといふ非礼を行ったりはしない。

だがしかし、この荷物からは無性に中身を確認したい欲求に駆られる謎の魅力を感じ、芳佳は堪らず包装を破いてしまう。

「す、すっい……」

包装の中より姿を現した品々をじつと見据え、芳佳は静かに息を呑んだ。優人に届けられた荷物。それは扶桑国内で出版されている3冊の成人向け雑誌だった。

『週刊吉原・乳特集』『豊乳倶楽部』『皇国魔女・水練着写真館』と、いかにも優人が好みそうな豊かな胸を持つ女性の写真を多数納めたものである。

「わ、この人も大きい……リーネちゃんみたい。あつ、この人はシャリーさんくらいある。扶桑人でもこんなに大きい人達がいるんだ……」

ペラペラとページを捲り、写真に映るモデル達の感想を呟く芳佳。流星は兄妹というべきか、趣味趣向が兄と似通っている。

「どうやったらかんなに育つんだろう？ やっぱり牛乳かな？」

自身の胸を触りながら、芳佳は声に出して分析する。と、その時。彼女の背後でコンコンとドアをノックする音がした。

「——ッ!？」

誰かが部屋に入って来ようとしている。ハツとなった芳佳は反射的に雑誌類をベッドの下へ滑り込ませる。

「ど、どうぞー!」

やや上擦り気味の声でドアの向こう側にいるであろう人物のノックに応じる。すぐにドアが開かれ、見知った顔が半開きのドアから覗く。

「お邪魔しまゝす♪」

「リーネちゃん？」

部屋に入つて来たのはリーネだった。雑誌に夢中になつて着替えを忘れていた芳佳と違い、彼女は見慣れた制服から薄いピンク色のネグリジエに着替えていた。

「ごめんね、こんな遅くに。寝るところだった？」

「ううん、大丈夫だけど……どうしたの？」

芳佳が訊くと、リーネはニツコリ笑つて手招きをした。

「ちよつとついてきてもらつてもいい？」



同時刻、ワイト島方面上空――

三名の老害、もとい老人達を基地要員に預けたワイト島分遣隊は優人とウイルマの捜索を再開していた。天候が大幅に回復したため、今度はアメリーとフランも加わっている。

角丸とラウラの二人が行つた最初の捜索は暴風雨によつて視界が狭まり、また老人達の操縦するドルニエ・コメットと遭遇したことで中断されてしまい、不十分に終わって

いたのだ。

搜索を再開して間も無く、四人は小さな無人島の上空に差し掛かった。ワイト島分遣隊のウィッチ達は低空を飛行し、目を凝らして二人の姿を懸命に探す。が、島内は鬱蒼とした森林ばかりで、優人やウィルマは疎かひとつこひとり見当たらない。

「まったく、初日から問題ばかり起こして！あの『変態』、見つけたら絶対何か奢らせてやるわ！」

フランは憤然と拳を握り締める。『変態』というのはもちろん優人のことである。

風呂の一件と今回の行方不明の件で、彼女の中の優人の印象がさらに悪くなってしまうっている。

「ウィルマさん、宮藤大尉。御二人共、大丈夫でしょうか？」

アメリーは不安そうに俯き、目尻を涙を浮かべる。優人とウィルマが哨戒に出ようとした際、彼女もまた格納庫にいて二人を見送っていたのだ。

自分が格納庫で二人を止めていれば、せめて哨戒に同行していれば、こんなことにはならなかったのではないか。アメリーは胸を締め付けられる想いだった。

「大丈夫よ」

そんなアメリーを気遣い、角丸は慰めるように彼女の頭を優しく撫でる。

「ウィルマさんのスゴさはあなたも知っていますでしょう？宮藤大尉も一緒だし、きつと

大丈夫よ」

「ま、変態はともかく……ウイルマはしぶといし、大丈夫でしょ？だから泣かないの」
フランが角丸の言葉を継ぐ。ややぶつきらぼうな物言いだ、それでもアメリーに對する彼女の氣遣いが窺える。

「……そうですね。大丈夫ですよ」

二人から励ましを受けたアメリーは涙を拭つた。直後、何かを見つけたラウラが声を上げた。

「みんな！」

「ラウラ、どうしたの？」

声に反応して、角丸がハツと顔を上げる。

「あそこ！」

ラウラは11時の方向を指差す。彼女が人差し指で示した先に一軒の建物が見えた。

◇ ◇ ◇

同時刻、無人島の飛行場格納庫内――

「ん？……」

馴染みのある機械音に耳朵を叩かれ、仮眠を取っていた優人は目を覚ます。

半覚醒状態ながらも聞こえてきた音が魔導エンジン音だと理解した彼は、目を擦りながらシャッターで塞がれた入口へと視線を向ける。

天候が回復したのか、外から雨音は聞こえない。代わりにストライカーユニット4機のエンジン音がシャッター越しに響いてくる。

「……って、飛行場?」

「二人はこの中でしようか?」

エンジンに紛れ、聞き覚えのある声も聞こえてくる。

「お迎えが来たか……」

優人は安堵したように小さく息を漏らす。悪天候下において無人島に降り立った彼とウイルマは遭難といっても差し支えない状況にあった。

今二人がいる島とワイト島は然程離れていない。通常ならば問題もなく飛行出来る距離なのだが、ウイルマのストライカーユニット『スピットファイア Mk. II』はネウロイとの戦闘で大破し、ウイルマ自身も軽症とはいえ怪我をしていた。

優人と彼の愛機である零式は無事だったが、暴風雨が吹き荒れていては飛ぶこともままならない。それに二人が遭遇した個体とは別にガリアネウロイの残党がまだ周辺に潜んでいるかもしれない。

これだけ悪条件が揃ってしまつては、基地まで助けを呼びに行くことも、ウイルマを

抱えて飛ぶことも危険過ぎて出来ない。基地と連絡を取ろうにも、インカムはウィルマが墜落した際に、二人に揃って紛失してしまっていた。

八方塞がりの二人に出来ることと言えば、大雨で気温が大幅に低下した状況下で身体を冷やさぬよう気を配りつつ、ワイト島基地からの助けを待つことだけだった。

「ウィルマ、迎えが来たぞ」

優人は囁くように優しく声を掛け、ウィルマの身体を軽く揺らす。

「……………う〜ん…………」

艶のある声がウィルマの唇から漏れる。僅かに反応はあったが、彼女の意識はまだに夢の中である。

年頃の異性の目の前で、しかも下着姿という悩ましい格好にも関わらずグツスリと寝入ってしまうとは、優人が言った通りあまりに無防備だ。或いは、それだけ優人のことを信用しているのか。

どっちにしても、優人は成人間近の健全な男子。そんな彼にとって巨乳美女の下着姿は眼福であるのと同時に目の毒である。

「ほら、いつもでも寝てないで」

優人は本格的にウィルマを起こしにかかる。角丸達と顔を合わせる前にやらなくてはならないことがある。それは乾かしていた服を着ることだ。

ワイト島の面々が迎えに来てくれたことは非常にありがたいことだ。しかし、年頃の男女である優人とウイルマが全裸に等しい格好で一緒いるところを見られたりするば、疚しいことが何も無くとも在らぬ誤解を生んでしまうだろう。

女性関係の冤罪を数えきれぬほど経験してきた優人は、なんとしてもそれだけは避けようとウイルマの意識を夢の世界から呼び起こそうとする。

「ウイルマ!」

「……………」

「おい、ウイルマ!」

「ん〜…………ゆ〜とお?」

優人が声を掛けながらウイルマの両肩を揺ると、寝惚けた返事が返ってきた。優人は彼女が目を覚ましてくれたと思った。しかし、ウイルマは優人の右腕を自身の右手で掴んだ後に、再び寝息を立て始める。

「寝るなよ!角丸達 came たんだぞ!早く着替えな…………うわっ!」

不意にウイルマの右手に力が込められ、優人を自分の方へ引つ張り出した。突然のことにバランスを崩した優人は前のめりに倒れる。

ぼふっ!

「——ッ!」

前方へ傾いた優人をクッションの如く受け止めたのは、なんとウイルマの胸の谷間だった。

予想外の事態に驚愕を通り越して思考を停止させた優人は目を見開いたまま身体を硬直させる。

「ん〜♡」

「もがっ!？」

どこか甘ったるさを湛えた声を口元から漏らしたウイルマは両腕を優人の後頭部へ回し、ギユツと力を込めて抱き締めた。

ただ大きいだけでなく、柔らかく、張りのある胸の感触を下着越しながらに優人は顔全体で味わっている。

「巨乳美女の胸に顔を埋める」という世の男達が生まれてから一度は考えたであろう夢を、優人は凶らずも叶えていた。

(まずい、これはまずい)

「う〜ん♡」

(い、息が……窒息する……)

夢の中で抱き枕でも抱いているつもりなのだろうか。ニヘラツと顔を綻ばせて腕の力も強める。

顔を圧迫された優人は、口と鼻を塞がれて窒息しかけていた。それでも酸素を求めて必死に呼吸が行う彼の吐息がくすぐったいのか、ウィルマは微かに身を振らせる。

「くすぐったあ〜い♡」

「ん……………ぷはっ!」

なんとか顔を胸から引き離れた優人はゼエゼエと息を乱している。いつの間にか、優人がウィルマを押し倒すような体勢になっていた。

「ウィルマ! いい加減に——」

ガラガラガラガラッ!

呼吸が整えるなり優人はすぐさま怒号を飛ばそうとする。が、その声は格納庫入口に設置されたシャッターの開閉音によって掻き消された。

「ウィルマ! いるの!?!」

「ウィルマさん! 宮藤大尉!」

シャッターが半分ほど開かれ、二人の少女が格納庫内へ駆け込んでくる。アメリーとフランだ。

「あっ……………」

「スー……………スー……………」

「……………」

アメリカとフランは数時間ぶりに優人、ウイルマと対面した。しかし、二人は優人達を見るなり時が止まったかのように硬直し、顔を赤ランプのように真っ赤に染める。

整理しよう。優人とウイルマの服が雨水に晒されて濡れてしまい、乾くまでの間やむ無く下着姿で過ごしていた。そして、優人とウイルマの身体が密着しているのは寝惚けたウイルマが優人に抱き着いたため。これが真実である。

だが、何も知らない人間が見れば二人が今まさに行為に及ぼうとしているようにしか見えない。

「ごめんなさい、お取り込み中」

「ごゆっくり」

遅れて格納庫に入ってきた角丸とラウラ。この二人は完全に誤解しているらしい。優人に一言だけ告げると、フリーズして動かなくなったアメリカとフランを抱えて屋外へと引き返していく。

「ちよつと待つて！誤解！誤解なんだああああああつ!!」

「えへへ……新しい抱き枕、最高お〜♡」

またしても誤解された優人の悲痛な叫びと、ウイルマの呑気な寝言が格納庫内に響き渡った。



一時間後、ワイト島基地――

哨戒飛行中、残党ネウロイとの遭遇という予期せぬ事態に見舞われた優人とウィルマは、深夜になってようやく基地に帰還することが出来た。

アメリーの手を借り、眠ったままのウィルマをベッドへ寝かせると、優人は報告のため、角丸の執務室へ向かった。

無許可でドルニエ・コメットの飛行を行っていた老人達は、二人と入れ違う形で基地を発っていた。角丸とラウラにお灸を添えられたものの、おそらく反省はしていないのだろう。

後でわかったことだが、優人とウィルマが屋根を借りた飛行場は持ち主。そしてアメリーの話にあった旧式の航空機で奇声を上げながらウィッチを追いかけ回している幽霊の正体は件の老人達だった。

ストライカーユニットを履いて空を飛ぶうら若き乙女に対し、老人は「冥土の土産に胸を揉ませろ!」「尻を撫でさせろ!」と恥ずかしげもなく迫る彼らの破廉恥な行いは、ナイトウィッチを中心に相当数のウィッチが被害を受けたような。

「ああ……」

ぐったりとくたびれた様子の優人は、低い呻き声を零しながら廊下を進んでいく。

「大丈夫ですか？」

並んで歩いてきたアメリカが、心配して優人の顔を覗き込んできた。

「ああ、今日はいろいろあったからさ」

優人は曖昧に答える。飛行場でアメリカ達に発見された後。彼は誤解を解いたり、抱き着くウイルマを引き離したりとで苦勞していた。なんでも、ウイルマは寝ている時に誰かに抱き着く癖があるとのこと。

予期せぬネウロイとの戦闘の疲れもあり、優人はすぐにでもベッドに入りたい気分だった。

「そう……ですわね……」

アメリカが蚊の鳴くような声で呟いた。頬が紅潮しているあたり、裸同然の格好で密着していた優人達の姿を思い浮かべてしまったらしい。

ウブなアメリカにとって、ウイルマのダイナマイトボディと日常生活においてまず見ることのない異性の裸体は刺激が強すぎたのだ。

「その、見苦しいところ見せちゃったよな。ごめん……」

アメリカに視線を移し、優人は軽く頭を下げる。

「いえ、お気になさらずに……」

言葉と共に俯き気味になるアメリカ。風呂場の一件で優人のことを変態認定した上で敵視しているフランとは異なり、アメリカはややぎこちないながらも優人に対して好意的である。

やがて、二人は角丸が待つ部隊長執務室に到着する。優人が二回ほどドアのノックすると、すぐに「どうぞ」と入室を促す声が返ってきた。

「入るぞで」

「失礼します」

ノブを回して執務室へ入る二人。中では部隊長用デスクの向こう側の椅子に腰を降ろした角丸が、電話を手にしていた。

(話し中か……)

邪魔をしてはいけない、と優人は一声掛けて出直そうとするが、それよりも先に角丸が口を開いた。

「宮藤大尉、ちようど良かった」

そう言うと、角丸は優人に受話器を差し出してきた。

「御電話です」

「……俺に?」

優人が確認するように訊くと、角丸は静かに頷いた。部隊指揮官でもない自分に、そ

れもこんな夜おそらくに電話とは、相手一体何者だろう。角丸から受話器を受け取りながら、優人は思考を巡らせる。

(父さん？赤坂長官？……まさか、ミーナ!?)

優人の額を嫌な汗が伝う。ワイト島基地においても相変わらぬラツキースケベブりを発揮してしまった彼の現状が、既にミーナの耳に届いているのか。優人は恐ろしさから小刻みに身体を震わせる。

しかし、受話器から聞こえてきた声は、予想した三人の誰とも違っていた。

「も、もしもし……?」

『あつ、お兄ちゃん?』

「えっ……芳佳?!」

電話の相手は最愛の妹である芳佳だった。優人は驚きのあまり素っ頓狂な声を上げる。

『えへへ……お兄ちゃんの声だあ♪』

受話器から可愛いらしい声が聞こえる。優人と二人きりの時に芳佳出す時の声、兄に目一杯甘える時に発する声である。

大好きな兄の声が聞けたことが、余程嬉しいかつたらしい。

「なんでお前が?もしかして、基地の電話を使っているのか?」

『うん、そうだよ』

「そうだよ、って……」

平然と答える芳佳に、優人の顔が引きつる。501基地において、電話を使用した外部との連絡が許されているのは原則として基地及び部隊司令のミーナと副司令兼戦闘隊長の坂本の二人だけだ。

おそらくはミーナから許可をもらったのだろう。しかし、深夜に基地の設備を利用しての私用電話は誉められたものではない。

「まあ、いいや。それで何かあったのか？」

妹の私用電話に呆れつつも、優人は電話の用件を訊ねる。彼に気を遣ったのか、角丸とアメリーは執務室を後にしていった。

『え〜っと、お兄ちゃんの声が聞きたくなっちゃって……』

「俺の？」

『うん、お兄ちゃんと離れるの久しぶりだから寂しくなっちゃって。そしたらリーネちゃんが電話してみたらずって……』

「離れる、って……数日だけだぞ？」

『そうだけど……』

芳佳は口籠った。彼女は元々かなりのお兄ちゃん子であり、物心付いた頃には既に優

人の後ろを追い掛けて回っていた。優人もまた芳佳のことを邪険に扱ったりせず、可愛がり、よく面倒を見ていた。

血の繋がりがこそないが、仲の良い二人は本当の兄妹のようだと故郷でも評判だった。しかし、それ故に妹は兄離れが難しく、兄もどこか過保護気味などころがある。長い間離れて暮らしていたことがそれに拍車をかけていた。

故に優人がいないのは僅か数日の間だけだとわかっている、心の内ではまた兄がどこかに行ってしまうのではないか。また離れ離れになってしまうのではと、考えてしまふのだ。

「……大丈夫だよ」

『えっ?……』

「どこにもいかない。お前をおいてはな」

妹の不安を察してか、優人は優しく口調で語り掛ける。

「怪我が治つたらすぐそつちに戻るから。勝手に遠くへ行つたりしないから。不安がらずに待つててくれないか?」

『本当?』

「本当だとも、俺が嘘ついたことなんてあるか?」

『いっぱいあるよ』

「……………」

バカ正直な返しに優人の表情が固まる。

「ま、まあそうかもしれないな。でも今回は本当だよ」

『……………わかった、待つてるね』

「今日はもう遅いから寝なさい。寝坊したら坂本に叱られるぞ?」

『そうだね、お休みなさい』

「ああ、お休み」

寝る前の挨拶を交わし、優人は受話器を置く。すると、背後からクスクスという笑い声が聞こえてきた。

振り返ると、自室で眠っているはずのウイルマがいつの間にか後ろに立っていた。着替えを済ませ、寝間着のタンクトップ姿となっている。

「ウイルマ!?!」

「うふふ♪兄妹というよりは初々しいカップルみたいね」

「どうやら会話を盗み聞きしていたらしい。悪戯な笑みを浮かべ、優人を茶化してくる。」

「お前なあ……………盗み聞きなんて趣味がわ——」

趣味が悪い、と優人がそう言おうとしたその時。ウイルマの顔が眼前まで迫り、それ

と同時に彼の頬に何か柔らかくて温かいものが触れた。

「……………えっ?」

一瞬何が起きたのか分からず優人はキョトンとしていたが、すぐにウイルマから頬にキスされたのだと理解し、みるみる顔が赤くなっていた。

「な、な、なっ?!?いったああああ!!」

キスされた右頬を手で押さえながら、優人は勢い良く後退る。部隊用デスクに思いっきりぶつかってしまい、強烈な痛みから目に涙を浮かべる。

「な、何して……………」

「何って、キスよ? 扶桑で言うところの接吻」

「な、何でって……………手当てしてくれたお礼のつもりだけど?」

そう言つてウイルマは右腕の包帯を指差した。

「お、お礼?」

「頬つぺに軽くチューしただけでそこまで動揺するなんて、扶桑人はウブな人が多いのかしら?」

優人の反応を面白がるウイルマ。キスの動揺が静まっていなこともあり、優人は自分をからかう彼女にまともに反論することが出来ず、目を逸らすのが精一杯だった。

こうして、宮藤優人大尉のワイト島における長い初日は終わったのだった。

第6話「ワイト島で湯治療養 その5」

角丸美佐扶桑陸軍中尉率いるワイト島分遣隊は航空ウィッチ5名を主戦力としたかなり小規模部隊だ。

連合軍西部方面総司令部に所属する多国籍部隊ではあるが、同じく各国から人員を招聘した第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』のような総司令部の直属ではなく、あくまで隷下部隊の一つという位置付けである。

二線級として扱われる当部隊が配備されているのは、501が担当するドーバーの主戦場から外れたブリタニア南東部の僻地『ワイト島』。

平原に屹立する基地施設も大部分を占める滑走路以外に特異なものはなく、司令部よりも宿舎として意味合いが強い基地本部とストライカーユニットの格納庫のみ。

整備兵等の基地要員も規模相応に少なく、極端に悪いわけではないが、ブリタニア防衛の要である501部隊と比較すると人材・機材・設備面において質量共に大きく水を空けられている。

しかし、当基地には501基地には無いものが一つだけある。それは島に湧いている天然温泉を利用した風呂だ。

「ふい〜……」

早朝のワイト島基地。満足気に吐息を漏らしながら宿舍内の廊下を進む影が一つ。湯治目的で501よりワイト島分遣隊へ出向中の扶桑海軍大尉——宮藤優人だ。

湯帰りの彼は、まだ起床時間でないこともあつてか。扶桑皇国海軍の第二種装には着替えておらず、寝間着姿の無地の白い半袖のTシャツに黒の半ズボンというラフ格好で廊下を闊歩する。小脇には、中にバスタオルや石鹸等入浴に必要なものが揃った桶を抱えている。

元々湯治のためワイト島を訪れていた優人。ほんの数分前まで身を湯船に沈め、温まった彼の頬には淡い紅が灯され、身体からはホカホカと湯気が立っている。

ワイト島基地の浴場は501基地ほど広くはないが、天然の温泉を使用しているというあちらには無い強みがある。疲労はもちろん、傷や魔法力回復にもよく効くとされる温泉に加えて、扶桑建築を模した浴場の造りも故郷に戻ったかのような安心感を与え、優人の心身のリラックスに一役買っている。

（ん？……）

朝風呂のために早く起きてしまい、暇を持て余していた優人は、何気無しにストライカーユニットの格納庫へ足を運んだ。

整備兵は一人いなかったが、その代わりオストマルク空軍の制服を着た少女の後ろ姿

を見つけた。

「ん……『アンカ』、今日も調子良いみたいだね……」

自らの愛機であるカールスラント製のストライカーユニット『Bf109G-6』を整備を行うオストマルク出身の少女——ラウラ・トート少尉は嬉しそうな声で呟いた。

『アンカ』とは、彼女がストライカーユニットに付けた愛称である。

優人と同じく『ストライクウィッチーズ』の初期メンバーの一人であったラウラは、501基地にいた頃から愛機の整備に力を入れていた。機付き整備兵達も、そんな彼女を敬愛し、共に整備する姿がよく見受られた。

「……誰？」

他者の気配を感じ、ラウラが振り返る。優人は軽く手を上げて挨拶する。

「よおー！」

「あっ……宮藤大尉」

「愛機の整備か、精が出るな」

「ちゃんと自分で世話してあげれば言うこと聞いてくれるし。いざという時、力になってくれる」

「確かに、俺もこいつらには何度助けられたことか……」

「……いつ……いつ……」

こいつら、という表現にラウラは首を傾げる。優人は「ああ」と頷き、説明を付け加えた。

「ブリタニアで完成したばかりの試作機に、リバウで使っていた二二型、501に転属してからは二二型。そして、こいつは最近使い始めた機体で、零式では4代目の機体なんだ」

優人は発進ユニットに固定された自身の『零式』へ歩み寄ると、サツと機体を撫でた。

元は赤城に艦載されていた機体。マロニー一派のウォーロックを警戒した優人が、赤坂に頼み込んで一時的に使用許可を貰っていた。しかし、赤城が沈んでしまったこともあり、返還されることなく優人の機体として501基地に格納されていた。

「大尉は朝風呂上がりですか?」

ラウラは「アンカ」に目を向けたまま訊ねる。

「ああ、ここの温泉は最高だな。気に入ったよ」

「扶桑人は本当にお風呂が好きなんですな?」

「お前だって嫌いじゃないだろう? 501にいた頃は、暇さえあれば入っていたじゃないか?」

元501隊員のラウラ。故郷のオストマルクからブリタニアまでの過酷な撤退戦をミーナ達カールスラント空軍第53戦闘航空団と共に潜り抜けできた彼女は、当時の5

01部隊屈指の実力者だった。

その反面、ハルトマンほどではないしにしろ私生活は割りとずぼらで、出撃の無い日は昼寝をするか基地の風呂に浸かっているかだった。

『入浴中』の札を掛け忘れたラウラと、彼女が湯船でくつろいでいること等知る由もなかった優人が、浴場で鉢合わせしまったのは記憶に新しい。

「……あの、大尉」

昔話を切り出されて何か思い出したのか。ふとラウラが整備の手を止めて立ち上がる。

「ん？なんだ？」

「申し訳ありませんでした」

ラウラは優人の向かって深々と頭を下げ、謝罪の言葉を口にする。

「急にどうした？」

唐突なラウラの謝罪に優人は目を丸くする。その一方で、謝罪の理由には心当たりがあった。

「私、501にいた時……大尉やミーナ中佐、他の人達にも迷惑掛けてばかりだったから

……」

（やっぱり、その話か……）

優人は肩を竦める。それは数年前、501部隊が設立して間もない頃の話である。

当時のブリタニア空軍戦闘機軍団司令官であり、同空軍のウィッチ隊総監も兼任していたダウディング大将と、現在カールスラント空軍ウィッチ隊総監を努めているアドルフ・イーネ・ガランド少将の後押しを受け、ミーナは統合戦闘航空団の設立を成し遂げた。創設当時のメンバーの中には、現在も501に在籍しているミーナ達カールスラント三人や優人、坂本、ペリー等、連合軍各国より選抜された10名のウィッチが所属していた。ラウラもその一人だった。

しかし、開戦時に黒海から殺到したネウロイの侵攻によって祖国オストマルクを失い、以降の撤退戦で大切な仲間達を失い続けたことで、自暴自棄になっていたラウラは隊員との協調性がほとんど無く、独断専行が目立っていた。

戦果を上げてはいたものの。

他の隊員、特にバルクホルンは自分本位な戦い方を繰り返す彼女を快く思っていない。か。

ミーナのように気に掛けてくる理解者がいなかったわけではないが、それでもラウラは日に日に孤立していった。

やがてラウラは、連合軍上層部の政治的駆け引きの末、配置転換という名目でブリタニア防衛部隊に転属となる。殆どどの501隊員達と壁を作ったまま別れることに

なってしまった。

「過ぎたことだよ。あの時のお前はいろいろ大変だったんだし」

「……………はい」

短く返すラウラだが、その視線は伏せられたままだった。

ミーナ達カールスラント組やガリア出身のペリーヌ、アメリー。ネウロイに故郷を蹂躪され、家族を、戦友を、大切な人達を失った者は多い。

自分以外だけが不幸なわけではない。しかし、心理的に余裕がなかったラウラは、そのことに気付けなかった。自分が悲劇のヒロインを気取って周りに甘えている、と自覚出来なかつたのだ。

「でもまあ、安心したよ」

「……………えっ?」

「お前、501にいた頃よりもよく笑ってて。元気そうだからさ」

「そうですかね?」

本人に自覚はないようだが、久しぶりにあったラウラは501にいた頃と比べて笑うことが多くなっている。

基本に無口無表情なのは変わらないが、どこか影があつた表情が大分柔らかくなり、感情の起伏も見せるようになった。

昨晩行われた優人の歓迎パーティーにおいて、楽しそうに笑っていた彼女を見れば明白である。

「そういうのは自分じゃ気が付かないからな。なんにせよ、ミーナに良い報告が出来るうだよ。お前のこと心配してたからさ」

「……そうですか」

言葉だけ見るとなんと素っ気ない反応だが、それとは裏腹にラウラの表情は綻び、声色も僅ながらに明るくなる。

誰かが自分のことを気に掛けてくれている。それだけで人は幸福な気持ちに抱くものだ。

「それともう一つ、バルクホルン大尉から伝言を言付けかけてる」

「バルクホルン大尉が？」

ラウラの瞳に不安の色が映る。バルクホルンはミーナと違い、チームワークを度外視するラウラにとっても厳しかった。そんな彼女からの伝言なのだから無理もない。

責めを覚悟のしながら、ラウラは耳を傾ける。しかし、伝言の内容はラウラの予想を裏切るものだった。

「『やたらとつらくあたってしまい、申し訳なかった』……とのことだ」

「えっ?」

なんと、優人経由で伝えられたバルクホルンの言付けは謝罪だったのだ。

初期から在籍している501隊員の中では、とりわけ折り合いが悪かったはずのバルクホルン。彼女が自分に謝罪するなど思っても見なかったラウラは拍子抜けする。

「バルクホルン、言つてたよ」

啞然としているラウラを余所に、優人は言葉が続ける。

『同じ境遇にあつた自分が誰よりラウラの気持ちを理解してやらなければならなかつたはずなのに、心に余裕が無くてキツく接することしか出来なかつた』つて……』

故郷や大切な人間を失つた者の気持ちは、同じ経験をした者にしか理解できない。胸中を埋め尽くさんばかりの悲痛な感情。自身の足元が消えて無くなるような喪失感。

宮藤兄妹に救われ、それをきっかけに自分を取り戻したバルクホルンは精神的に余裕を持てるようになった。同時にラウラの心境を遅れながら理解し、同じ痛みを持つ者として寄り添おうとしなかつたを自身を、彼女は人知れず恥じていた。

(バルクホルン大尉……)

目頭が熱くなり、視界が霞む。自分を嫌つていて思つていた相手からの温かい言葉と、実質的に和解、理解し合えた。ラウラは救われたような気持ちになつた。

涙がポロポロと溢れてくる。嬉しいはずなのに次から次へと流れ出し、頬を伝う。

涙を拭うのに夢中で、優人に抱きすくめられていることにラウラが気付くまで数秒か

かった。

「大尉?」

ピトツと密着する二人の身体。優人の体温が、匂いが、訓練と実戦で鍛えられた肉体の感触を全身で受け、色白なラウラの頬に紅が灯される。

「よしよし……」

優人の右手がラウラの髪を梳くように撫で、左手はポンポンとあやすように背中を叩く。子どももの頃、泣きじやくった芳佳をあやす際にも優人はこうしていた。

やがてラウラの涙は涙は止まり、優人は彼女から身体を離れた。

「落ち着いた?」

「……………大尉」

「ん?」

「これ、セクハラですよ?」

「……………えっ?」

ジト目で見上げてくるラウラの言葉に、優人は硬直して冷や汗を流す。彼女の言う通り、例え慰めるためだとしても、断りもなく女性に抱き着くなどは立派なセクハラである。

妹の芳佳や妹同然に思っているペリーヌの頭を撫でたり、シャーリーやルツキーニか

ら挨拶代わりのバグを受けたりして過ごしていたためか、そこまで考えが回らなかった。

「あ、いや、その！不快な思いをさせたのなら悪かった！けど、別に疚しいことなんて何も！」

あたふたと狼狽えながらも、優人は必死に弁明する。疚しい気持ちになかったのは事実だし、申し訳ないとも本心から思っている。が、今回はいつもの不可抗力などではなく、優人が自発的に行ったことに問題があった。

この件が大きくなって501基地に伝われば、ミーナから制裁を受けるのはもちろん、芳佳を含めた隊員達から白目視されるのは確実。セクハラ行為が原因で仲間や妹から蔑まれるなど、悪夢だ。単身でネウロイの巣に特攻する方がまだマシである。

「ふふ……」

ラウラの口から漏れた小さな笑い声が、パニクる優人の耳朵を打った。

「取り乱ちちゃって……カッコ悪い、ふふ♪」

優人の狼狽ぶりが可笑しかったのか、ラウラはクスクスと笑っている。

その年相応に無邪気で可愛らしい笑いは、ラウラのクールなイメージとのギャップによって引き立てられ、彼女を一層魅力的に見せている。

ドキツとした胸を高鳴りと同時に、優人は自分がかかわれていたことに気付き、不

満気な声を上げる。

「タチ悪いぞ」

「ふふ♪……すみません」

尚も笑い続けるラウラに溜め息を漏らすと、優人は不貞腐れたような顔をして足早に格納庫を去っていった。

「……………ドキドキしてたの、バレてないかな？」

頬に熱を感じながら、ラウラは両手を重ねるようにして己の胸に置いた。彼女の胸中では、心臓が早鐘を打っていた。



今朝の食事当番であるアメリーは、皆の朝食食堂へ向かっていた。食堂とは言っても、台所の機能を同じ部屋に纏めているので、正確に言うならダイニングキッチンである。

「あれ？」

食堂入り口前までやって来たアメリーは、半開き状態のドア越しに漂ってくる汁物の匂いに首を傾げる。

(これって……扶桑の味噌スープ、だよな?)

彼女の鼻腔を擽る匂いの正体は扶桑の代表的な料理——味噌汁のものだった。

欧州より遠く離れた扶桑皇国の料理は、こちらではまだまだマイナーであるが、派遣されたウィッチによって大戦初期から徐々に広まりつつあった。

ワイト島分遣隊においても角丸が何度か台所に立ち、扶桑料理を振る舞っていたため、アメリカは味噌汁のことは知っていた。

多彩な調理方、技巧をこらした繊細な作りの物が多く、味もデリケートで美味しい。肉料理社会の海外と比較してヘルシーで健康的なものが多く、欧州出身のウィッチ達の中には扶桑料理を好んで食べる者も少なくない。

(今日、私が当番なのに。誰かいるのかな?)

不思議に思ったアメリカは、食堂の入口からそつと顔を出し、室内の様子を窺う。台所側に立つ優人の姿が確認できた。

「優人さんっ!」

「お、アメリカか。おはよう」

扶桑海軍第一種軍装の上に柴犬が描かれた水色のエプロンを身に付けた優人は、アメリカに気付くと軽く手を上げて挨拶する。

「もうすぐ朝食出来るから、ちよつと待ってな」

それだけ言うと優人は料理を再開した。味噌汁の煮られた鍋の隣で、野菜の乗せられた生板がトントン、と小気味良い音を立てる。

慣れた手つきで振るわれる包丁。彼の手際の良さに思わずアメリカーは感嘆の声を漏らしつつ、見とれていたがすぐにハツと我に還り、台所へ滑り込んだ。

「ちよ、朝食なら私が作りますからー！」

朝食当番は自分の役目だ。いや、そうでなくとも年長者であり、客人であり、何より上官である優人に料理をさせて、下士官の自分がのんびり寛ぐなどあつてはならない。

アメリカーは優人を台所を引つ張り出そうと、両手で彼の腕を取る。その力は意外にも強く、優人は危うく包丁落としてしまいそうだった。

「優人さんは、お客様なんですからー！」

「でも世話になつてる身だし。昨日は皆に迷惑をかけちゃったから、そのお詫びも兼ねてさ」

「なら、お手伝いさせて下さい」

困った顔をしてポリポリと後頭部を掻く優人にそう言うと、アメリカーはキッチンの隅に掛けてある愛用のエプロンを手に取った。

「そう？じゃあ、頼むよ。と、その前に……」

優人は一旦包丁を生板に置き、近くの小皿から一口サイズの卵焼きを手に取り、アメ

リーの口まで運んだ。

「むぐつ!？」

アメリーは驚きつつも、卵焼きを味わうように噛み締め、嚙下する。

「あ、甘い……」

手で頬に触れ、味の余韻に浸るかのようにはアメリーは呟く。優人に食べさせられた卵料理は、彼女の知っている卵とは味が異なり、扶桑菓子のような上品な甘さがあった。

「扶桑の卵焼きだよ」

と、説明しつつ、優人は手を伸ばした。アメリーの口元に残っている卵焼きの欠片を人差し指で掬い、自然な所作で口に含んだ。

「——っ!？」

上官殿の大胆な行動にアメリーの心臓が喉から飛び出さんばかりに羽上がる。

目を見開いたまま、陸に打ち上げられた魚のように口をパクパクさせる自由ガリア空軍ウィッチに対し、優人は事も無げに卵焼きの感想を訊ねた。

「味はどうかな？」

「そ、そうですね。ちよつと甘い……と思います」

優人の問いでハツと我に還ったアメリーは、俯き気味に視線を落として答える。

「あれ？砂糖入れすぎたか？作るの久しぶりだからなあ……」

優人は卵焼きの並べられた小皿に目を向けながら首を傾げた。彼は気付かなかつたが、顔を伏せたアメリーの頬に朱が差していた。

彼女の味覚が優人の作った卵焼きを甘い、と感じたのは調理者が味付けに失敗したからなのか。或いは、別の理由か。それはアメリー自身にもわからないのかもしれない。

◇ ◇ ◇

朝食後――

優人とアメリーの二人が腕に縊りを掛けて作った扶桑式の朝食は思いの外、好評であつた。

特に出汁の効いた味噌汁は味はもちろん、嚙下して喉を通り過ぎた時の身体の温まり、どこかホツとさせられるような安心感がウィッチ達の心と胃袋をガツチリと捉えていた。

やがて食事の時間は終わりを告げ、優人及びワイト島分遣隊のウィッチ達は食後のティータイムに入っていた。

「優人さん、どうぞ」

未だエプロン姿のアメリーが、テーブルで食休み中の優人の前に白磁のティーカップ

を差し出した。カップには紅茶が注がれている。

「ありがとう」

優人が微笑んで礼を述べると、アメリーも彼に微笑み返す。次いで角丸、ウィルマ、ラウラの順にティーカップを配膳する。

もう一人のワイト島メンバーにして、隊内で唯一優人に心を許していないフランの姿はなかった。優人と同じ空間にすることが耐え難かったのか、朝食を終えると足早に自室へ帰ってしまった。

優人としては、露骨に自分を避けようとするフランに対し苦笑しつつも、彼女が自分とアメリーが作った朝食を「美味しい」と言い、残さず食べてくれたことに安堵していた。

好かれているとは言い難い。と言うか、ハッキリ言つて嫌われているが、バルクホルンやペリーヌの時と同様まだ関係改善の見込みはありそうだ。

「ん……」

ティーカップを手に取つた優人は、注がれた紅茶から立ち上る香気を鼻腔にくぐらせてから濃い琥珀色の液体を口に含む。

「ど、どうですか?」

エプロンを外し、優人の斜め向かいに腰を下ろしたアメリーがやや身を乗り出すよう

にして訊ねる。

紅茶を振る舞う身として、自分の紅茶を初めて味わう優人の感想が気になるらしい。

「うん、とても美味しいよ」

「わあ！ありがとうございますー！」

と、アメリーは嬉しそうに爛々と瞳を輝かせる。本人は気付いていないようだが、使魔の耳と尻尾が無意識のうちに出現し、嬉しそうに揺れていた。

喜怒哀楽をストレートに表現するアメリーに、優人は最愛の妹——宮藤芳佳と似たもの感じ取っていた。守ってやりたくなるような愛らしさ。保護欲とでもいうべき感情を抱いた優人の手が自然とアメリーの頭に置かれ、優しく撫で始める。

「あつ……」

触れられたことに少しだけ驚きながらも、アメリーは何も言わずに優人の行為を受け入れる。上官殿の優しい手つきと体温を感じ、アメリーは頬を軽く染めながらも気持ち良さそうに目を細める。

（優人さんの妹さんはいいなあ……こんなに素敵な人がお兄さんなんて……）

ポカポカとしたぬくもりで満たされている己の心中でアメリーは呟いた。

調理の手伝いを申し出たものの、扶桑料理の経験がなく、逡巡するような素振りを見せていた自分に対し、優人は優しく丁寧に教えてくれた。アメリーが元々家庭的だった

こともあり、これといった失敗もなく美味しい朝食を作ることができた。

歳上の異性との共同作業ということで緊張もしたが、彼女にとつて人生初の扶桑料理作りは、とても有意義で楽しい一時となった。その調理中の会話で、アメリカは芳佳のことを知ったのだ。

小さな村で一人っ子として生まれ育ったアメリカは兄弟姉妹に、特に頼れる兄や姉といった存在に強い憧れを抱いていた。そして、優人は彼女の理想の兄像そのものであったのだ。

アメリカには預かり知らぬことだが、優人と同様に彼女が憧れを抱いている自由ガリア空軍のエースウィッチ——ペリーヌ・クロステルマン中尉もまた、優人のような歳上の兄弟に憧れを抱き、彼の妹である芳佳を羨ましく思っている。

「ふ〜ん♪」

ふと何者かの楽しいげな声が耳朶に触れ、優人とアメリカは声のした方へ視線を向ける。にんまりと微笑みを浮かべたウィルマが、二人を見据えていた。

「なんだ？」

と、優人が怪訝そうに訊ねる。ウィルマはクスクスと小さく笑声を上げながら彼の間に答えた。

「なんか二人共。知り会ってまだ一日も経たないのに、随分と良い雰囲気みたいだから

♪

「えっ!？」

「ふえっ!？」

ウイルマにそう言われ、優人とアメリーは揃って動揺する。

「恋人、とまではいかなければ。なんだか仲の良い兄妹みたいよ♪」

「そ、そうですか？」

ますます顔を赤くするアメリー。ウイルマと優人を順に見やると、照れを隠すように両手の人差し指をくっつけ、モジモジと動かし始める。

優人もアメリーほどではないが照れており、右の人差し指で頬を掻きながら気まずそうに視線を泳がせている。

「た・い・い・い・ど・の♪」

いつの間にか優人の右隣に来ていたウイルマ。彼女は優人の耳元へ自身の唇を近づけ、そして囁く。

「ラウラに続いてアメリーとは、手が早いですわねえ♪」

「——なっ!？」

ウイルマの一言で、優人の瞳に再び動揺の色が浮かんだ。格納庫でのラウラとのやり取りをウイルマに見られていたのだ。おそらく、優人がラウラを抱き締めたところも

……。

疚しいことは何もないのだが、端から見れば上官と部下が早朝の格納庫で逢い引き、もしくはラウラに指摘されたように立場を利用して優人が彼女にセクハラを働いたようにも見える。

「み、見てたのか？」

優人がやや震えた小声で訊ね返すと、ウイルマは形の良い曲線を描いている桃色の唇に人差し指を当て、「ん〜」とご機嫌そうに喉を鳴らす。

「二人きりの無人島で濃密な一夜を過ごしたっていうのに、私以外の娘にも目移りするなんて。なんだか妬けちやうわね」

「はあっ!? な、何言って——」

「あくら、どうしたの? 狼狽えちゃって♪」

悪戯っぽい笑みを深めたウイルマは、さらに追い討ちを掛け続けた。

「今さら恥ずかしがることないじゃない♪ 私は互いの身体を見せ合った仲なのよ?」

「お、お前なあ……」

「あらあら、まあまあ。昨日はあんなに可愛かったのに。今日はずいぶんと恐い顔をすのねえ♪」

反発心の湛えられた鋭い視線を向ける優人だったが、その瞳には些かの迫力も威厳も

なく、むしろウィルマの悪戯心を煽るだけであつた。

(き、昨日……可愛かつた、つて。やつぱり遭難した時に……な、何かあつたんじゃ!? ……)

二人の会話を間近で聞いていたアメリーの表情がさらに赤くなり、ネウロイのビームさながらの顔色となる。

はわわわわわ、と可愛らしい悲鳴を上げ、小動物のようにプルプル震える彼女の脳内では悩ましい妄想が駆け巡っていた。



その日の午後――

リベリオン陸軍第8航空軍より、ワイト島へ派遣されているリベリオンウィッチ――
“フラン”ことフランシー・ジェラート少尉は、ムスツと不機嫌さを湛えた表情で宿舎を廊下を闊歩していた。

普段ならば隊のウィッチ達と談笑するなり、不得手な射撃の腕を少しでも上げるための自主訓練をするなりしている彼女だが、今日は食事やトイレ以外は殆ど廊下の端から端へ行ったり来たりしている。

(まったく、なんなのよ……)

腕を胸の前に組み、その上では右手の人差し指がトントンと忙しく動いている。音楽のリズムを刻むような軽快なものでなく、内面の苛立ちを表したものだ。その原因は言うまでもなく、第501統合戦闘航空団より出向してきた一人の扶桑人——宮藤優人である。

彼女は風呂場で最悪な出会い方をした優人のことを未だに距離を置いていた。出来るだけ優人と顔を合わせたくない。そう思い、フランは本日の活動範囲を自室内に限定していたのだが、アウトドア派の彼女にとつて一日を屋外のみで過ごすのは、それだけで多大なストレスとなる。結局は退屈に絶えられず部屋を出で、宿舎内をウロウロしていた次第である。

「あ、フランさん」

件の扶桑人が泊まっている部屋の前をフランが通りかかるのと同時に扉が開かれ、中からオレンジがかかった金髪の持ち主が出てきた。

「アメリー」

フランは目を丸くした。今日彼女は食事中を除いてアメリーを顔を合わせていなかった。

いや、それはいい。フランが気になっているのは、何故アメリーが頬を赤らめながら

優人の部屋から出てきたのか、ということだ。

「そこ、あの扶桑人の部屋よね？」

アメリーを見る目を細め、フランが確かめるように訊く。

「はい！」

アメリーが快活な声で首肯する。そのはにかみは、異性を意識し始めた年頃の乙女のものだった。

「優人さんに扶桑のことを色々教えて頂いていたんです！ 伝統の料理とかお洋服とか、お祭りとか！」

と、語るアメリーは今まで——少なくともフランが知る限りでは、これ以上ないくらいの上の笑顔を浮かべている。優人との会話が楽しかったのか、遠く離れた異国の文化に感銘を受けたのか。或いは、その両方か。

アメリーと優人は性格的に相性が抜群らしく、知り合って間もないのにずいぶん親しくなっていた。そんな二人はウィルマの言うとおりに、仲の良い兄妹のように見える。

「それに後で射撃の指導してもらおう約束を——」

「ねえアメリー」

アメリーの言葉を遮り、フランは続ける。

「アンタ、あいつに気を許し過ぎじゃない?」

「えっ? そうですか?」

「そうよ! のこのこ部屋までついて行って、変なことされても知らないわよ?」

「変な……こと?……」

フランが何を言いたいのか。それをアメリーが理解するのに数瞬かかった。ウブな彼女はたちまち赤面し、茹で蛸並みに真つ赤な表情を作り出した。

「ゆ、優人さんはそんなことしませんよ!」

怒声を飛ばすアメリーの様相に悪戯心を擦られたフランは、さらなる追い討ちを仕掛けた。

「わからないわよ。あいつだって男なんだし、私達ウィッチをそういう目で見てるかも! 前科だって——」

「ま、まだ根に持つてるんですか?」

風呂場での一件を蒸し返すフランに対し、アメリーは困ったように反論する。しかし、優人に全裸姿を見られた時の記憶が脳裏に浮かび上がり、自然と声が尻すぼみになる。

「当たり前じゃない」

フンツと鼻を鳴らし、フランは不愉快そうに眉を寄せる。

「まったく。家族以外の異性に裸を見られるなんて、ジェラート家始まって以来の屈辱よー！」

何故そこで家の名前が出てくるのかはわからないが、それほどまでに業腹だということだろう。

しかし、フランにとって一番屈辱なのは、そこまで疎ましく思っている男（とアメリー）が作った朝食と昼食が、頬の緩みを抑えられないほど美味しかったと認めざるを得ないことだった。

「でも、優人さんだって悪気あったわけじゃ……」

「……………」

フランとて、風呂場の一件が事故であることも優人に非がないことも理解している。無論、彼が悪い人間ではないことも……。

しかし、フラン本人の意地つ張りな性格もあり、中々水に流すことが出来ない。仲間達が優人と良好な関係を築く中、彼女だけ未だ打ち解けることが出来ずにいた。

（あたしって、何でこうなんだろう……）

いつまでもつまらない意地を張り続ける自分自身に対し、フランは軽く自己嫌悪を覚えていた。



1時間後――

「で？何であたしがアンタと一緒に哨戒に出なくちゃならないの？」

始動したストライカーユニットの魔導エンジン音が響き渡る基地格納庫。愛機を着したフランがムスツとした表情で訊く。彼女の隣には同じくストライカーユニットを装備した優人が立っている。これから二人は哨戒飛行に出る。

「ウイルマには大事を取って休ませる、って角丸が判断したからだろ？」

露骨に嫌がるフランに対し、優人が溜め息混じりに応える。

本来フランと一緒に哨戒に出るはずだったウイルマは、昨晚の戦闘でネウロイに撃墜され、戦闘空域付近の無人島へ墜落した。

幸いにも怪我は軽く、救助を行った優人の迅速かつ適切な対応によって大事には至らなかったが、角丸の判断で完治するまで一切の飛行と訓練は禁止となった。そしてウイルマの代わりに優人が飛ぶこととなった。

「まあ、よろしく頼むよ」

「……………」

チラッと視線を向けてきた優人に、フランはプイツと顔を背ける。

(やれやれだな……)

優人は、ウィルマが負傷したことに少なからず責任を感じていた。自分の散歩に付き合わせたがために危うく嫁入り前の彼女を傷物にするところだった……と。だからこそ代理を買って出たのだ。

自分のことをやたらと目の敵にするフラン。彼女と組むことに不安要素はあるが、まあ昨晩のようにネウロイと出くわすことはないだろうし。なんとかなるだろう、と優人は思う。

ご機嫌斜めなフランを宥めつつ、優人は昼下がりの空へと飛翔した。



くおまけ『分かる人には分かる声優ネタ』く

フーベルタ「みろ！『続きを投稿したいだけだ』と言いながら。お前は二〇動や〇〇uTubeにばかり時間を使っている！」

作者「違う！違うよ、フーベルタさん！〇〇動もYouTUBEもおもしろ過ぎるんだ！だから小説の更新が遅れて——」

フーベルタ「意志の弱いヤツの言い訳だと言っている！」

作者「この……分からず屋あああああああああああゝっ！」↑逆ギレ
優人「……………何これ？」

第7話 「ワイト島で湯治療養 その6」

ドーバー海峡上空を二つの影が並んで飛行している。鳥や航空機とはまったく異なる脚部が膨れ上がったような外見をした人型の飛行体。そんな珍重なシルエットをした存在は、一部のネウロイ以外ではこの世に一つだけ。飛行用ストライカーユニットを装備した航空歩兵——軍に所属する航空ウィッチないしウィザードである。

「今日は快晴だな」

哨戒飛行中のウィザード——扶桑皇国海軍遣欧艦隊の宮藤優人大尉は何気無しに呟く。

それは独り言のようで、実は空へ上がってから無言を貫いている僚機——リベリオン陸軍第8航空軍のフランシー・ジェラート少尉へ向けられたものだった。

「……………」

相も変わらず、フランは黙ったままで何の反応も示さない。彼女の視線は進行方向のみを注視し、優人には一瞥もくれようとはしない。

優人は「やれやれ」と肩を竦める。よもや、ここまでとは。芳佳が501に来る以前のペリーヌやバルクホルンにでさえ、ここまで拒絶されたことはない。

(何でコイツと……別に他の誰かだって……)

フランは苛立ちに満ちた心中で不平を漏らす。怪我をしたウィルマの代わりということならば、何も優人である必要はない。角丸やラウラ、アメリーの内の誰かでも問題はないはずだ。

フランとしては事故にしろ、意図的にしろ。自分の裸をバツチリと見た男と二人きりなどという状況は耐え難かった。彼女に限らず、まともな感性を持った女性なら皆そうだろう。

同じ目に合いながらも、優人に対して好意的に接しているウィルマやアメリー(アメリーに関しては、懐いているという表現が正しい)の方がおかしいのではないか、とフランは思う。

(……裸………あっ!?)

不意に顔がカツと熱くなり、フランは赤面する。風呂場での記憶を思い起こして、怒りがぶり返したからではない。

あの時。フラン達よりも先に風呂に入っていたため、当然優人も裸であった。優人がウィッチ3名の美しい肢体を瞳に映したのと同時に、フランもまた自らの双眸で彼の裸体を捉えていた。『見られた』ことに気を取られ、『見た』ことを失念していた。

長年の軍隊生活で鍛え上げ、無駄な贅肉も無く引き締まった異性の——優人の身体が

脳裏に浮かび上がる。蘇った記憶に羞恥心を刺激され、フランの心に動揺の波を立ち始める。

「フラン？」

「ひゃああつ!!？」

突然耳朶を打った声に驚いたフランは、可愛らしい悲鳴を発すると共にビクツと両肩を跳ね上げる。

「どうした？顔が赤いな」

いつの間にか優人がすぐ隣まで近付いていた。彼は心配そうにフランの顔を覗き込み、彼女の額へスツと左手を伸ばそうとする。

「な、何でもないわよ!!」

フランはブンブンと右手を振り回し、優人の手を乱暴に追い払う。

「けど、顔が真っ赤だぞ？熱でもあるんじゃない——」

「あ、あたしは元々こういう顔よ！別にアンタの裸を思い出したからじゃ——」

「えっ？」

「……あつ…………」

優人に聞き返され、自分の失言に気付いたフランは最後に「とにかく何でもないので!!」と一言怒鳴り、逃げるようにして優人から距離を取った。

フランの言動に優人が首を傾げていると、二人のインカムに通信が入る。それはワイト島から発信されたものだった。

『宮藤大尉、フラン。聞こえますか?』

「角丸か? どうした?」

「どころか緊急を孕んだ角丸の声に優人が訊き返す。

『緊急事態です! 小型ネウロイの編隊が、そちらに向かっています!』

「……………」

ネウロイ出現の報告にフランは無言のまま表情を強張らせる。角丸はさらに詳細を伝えてきた。

数十分程前、小型ネウロイの大群がロンドンへ向けて侵攻。第11統合戦闘飛行隊——『グロリアアスウィッチーズ』がすぐさま出撃・応戦し、ネウロイのロンドン侵入を阻むことに成功したが、半数のネウロイを南東部へ取り逃がしてしまう。

残存ネウロイの大部分は501基地方面へ向かったが、何体かはワイト島方面へも逃げ込んできたらしい。

「わかった、こつちで対応する」

『私もラウラとアメリーを連れて急ぎそちらに向かいます。どうか無茶だけはなさないで下さい』

「了解した、隊長殿」

そう言つて優人は通信を切ると、顔を上げて進行方向へ視線を戻す。すると、狙い済ましたかのように無数のネウロイが遠方で漂う雲の中から姿を現した。

角丸の報告にあつた通り、すべて小型ネウロイであつた。数は視認出来る限りで50機前後。

群れを成した多数の小型ネウロイは、螺旋を描くようにして優人とフランの元へ接近してくる。

(来たか……)

と心の中で独話し、優人は背負つていた九九式二号二型改13mm機関銃を手に取る。彼に続いて、フランも装備していたリベリオン製のM1A1トンプソン短機関銃を構えた。

フランのM1A1は、短機関銃の通例に漏れず拳銃用の45ACP弾を使用するため、重機関銃用の12.7x99mm弾を使用する13mm機関銃と比べて火力面で大幅に劣っている。だが、耐久力の低い小型ネウロイ相手ならば然したる問題は無い。問題なのはむしろ敵の数だ。

優人はともかく、フランはまだまだ航空歩兵としての経験が浅く、当然技量面でも501の精鋭達からすれば数段落ちる。ワイト島分遣隊の戦闘頻度の少なさから察する

に多数の敵機を相手したことなど無いはずだ。包囲されでもすれば一巻の終わりだろう。

(まずは先制攻撃で数を減らすか……)

優人は13m機関銃を構え、安全装置を外す。

「フラン、まずは射撃で——」

敵集団の先方に狙点を定めつつ、優人はロツテの長機として僚機に指示を出す。が、彼の言葉は二人の間を通り抜けた一条の熱線によって遮られた。

「なにっ!？」

優人は思わず目を見張った。自分達へ向けて放たれた熱線の正体は言わずと知れたネウロイのビームである。しかし、その威力は小型のそれにしては強大で、明らかに中型ネウロイ級のものだ。

新手が出現したのかと思い、優人は改めてネウロイ群へ視線を向ける。だが、前方に確認出来るのは小型ネウロイばかりだった。「どういうことだ!？」という疑問を優人が己の口から吐き出すよりも先に、速度を増した小型ネウロイの編隊が彼とフランに躍りかかった。

二人の眼前に迫るキューブ状の小型ネウロイ。それぞれが俊敏に動き回り、移動砲台のように多方向からビームを撃ってくる。

素早く身を翻した優人は、自分の身を貫かんとする無数の光条を軽々と躲して見せた。「ストライカーユニットの父」と渾名される父——宮藤一郎が設計した零式の運動性は伊達ではない。

「いっくらあつ……!?!」

回避を続けながら優人は上下左右に視線を動かし、敵を観察する。彼は、このタイプのネウロイに覚えがあつた。

501によつてガリアが解放される少し前。パ・ド・カレーでミーナが想い人の遺してくれたワインレッドのドレスを見つけ、戦地へ赴く予定であつた扶桑海軍の航空母艦『赤城』の乗員達のためにドレスを着た彼女を歌姫とした簡素なコンサートを催した日があつた。

目の前にいるネウロイは、その日の昼間に戦つたネウロイと極めて外見が酷似している。

おそらくは同型の別個体なのだろうが、以前戦つた個体に比べて動きにキレがある。また、以前の個体が基本的に数に物を言わせたゴリ押しだったのに対し、こちらは4体1組の隊形を取つて波状攻撃を繰り返したり、優人に撃たれて撃破されかけた個体がいれば他の個体がビームを放つて彼を牽制したり、と連携が見られる。

(厄介だ……)

優人は軽く舌を打つと、フランを探した。高出力ビームの初撃によって彼女と分断されてしまったが、まだそんな遠くには行っていないはずだ。

「いたっ！」

僚機の姿を認めると共に、優人を短く声を上げた。フランは10体ほどの小型ネウロイと交戦している。

目立った負傷はしておらず、ストライカーユニットにも被弾していない。一先ず優人はホツと胸を撫で下ろした。

『このっ！このっ！このっ！このっ！』

インカムに声が届いた。喉から気合いと苛立ちを湛えた叫び声を迸らせ、フランはトンプソンを乱射する。しかし、どうも彼女は射撃が不得手らしい。俊敏に動き回る小型ネウロイにはさっぱり当たらず、銃口より送り出る銃弾は蒼穹の彼方へ消えていった。

（フラン……無駄弾が多過ぎる。そんな戦い方を続けていたら……）

優人はフランに注意を向けながらも、既にネウロイを4体撃破していた。彼女に優人の状況まで把握する余裕はないが、もし知っていたら実力の差を見せつけられ、悔しそうに奥歯を噛み締めていたことだろう。

すぐにもフランの援護に行きたいところだが、ネウロイの波状攻撃に阻まれてしまっている。

ネウロイによる戦術レベルの攻撃。今までなら考えられなかった。ウィッチ隊の対大型ネウロイ戦術に似ているが、いつぞやの人型と同じく、航空歩兵の動きを模倣しているのだろう。

優人のようなエース級の航空歩兵でなければ、ろくに反撃も出来ず、ネウロイ側の攻撃に翻弄されっぱなしだったかもしれない。

『待ちなさいよ！コラア〜！』

フランと交戦中のネウロイが彼女を誘うような動きで、距離を取っていく。そしてフランは、その性格故にまんまと誘いに乗ってしまった、ネウロイを追って遠くへと離れていく。優人の位置からでは、視認が出来なくなるほど遠くへ……。

「フラン！罠だ！行くな！」

そう叫んでフランの元へ駆けつけようとする優人に、なおも無数の敵弾が殺到する。縦横無尽に純白の第一種軍装を纏った扶桑の航空歩兵へと襲いかかった。

妨害を受けて險しくなった優人の瞳が、周囲を飛び交うすべての正六面体を撫でた。

それと同時に、4体のネウロイが優人の正面で格子状の陣形を作り出す。その中央に形成された赤い光球が、優人に向けて放たれる。それは最初に優人達を襲った高出力ビームだった。そして小型ネウロイは、4体で一つの砲塔を形成し、互いに補い合うことで攻撃力を底上げしたのだった。

「くっ!？」

咄嗟にシールドを展開し、優人は己の身を守った。だが、いつまでも動きを止めはしない。すぐにシールドを解除すると、簡易砲塔を形成するため一カ所に集まったネウロイに銃弾を浴びせる。4体のネウロイは、水蒸気のような煙を撒き散らし、微細な金属片となって蒼穹に散っていった。

「同じ手は食わないさ」

優人はペロリと唇を舐めた。だが、まだ終わりではない。まだネウロイは残っている。それらすべてを叩かねばフランの元へは行けない。

「悪いが、お前らの相手をしている余裕はない」

そう呟く優人の身体からは、魔法力から変換された強力な冷気が発せられていた。

◇ ◇ ◇

「逃げるな！待ちなさい！待ちなさい、つたらー！」

トンプソンで弾をばら蒔きながら、フランは怒声を飛ばし続けた。しかし、追撃している10体の小型ネウロイは鉄の雨を易々と躲し、掠りすらしない。そのことが、フランをますます苛立たせる。

弾を撃ち尽くして空になったマガジンを捨て、予備の弾倉を装填する。その隙にネウロイは速度を上げ、フランから距離を取っていた。

「待ちなさい、って……言っただけでしょう!」

フランはネウロイに追い付くため、自身の固有魔法『短距離加速』を発動させる。

この固有魔法は、シャーリーの『加速』とは違い加速を維持出来る時間が短いものの、瞬間的に爆発的な推進力を得られる。また小回りが利くため、より戦闘向きと言える。

「——っ!」

固有魔法を駆使してネウロイに追い付いたフランだが、同時に彼女の表情は一瞬で凍りついてしまう。周囲の雲の中より多数の小型ネウロイが現れ、『短距離加速』を終えたばかりのフランを瞬く間に包囲したのだ。

すべての個体が彼女に砲口を向けながら少しずつ距離を縮めている。死が無音で歩み寄るかのよう……。

「あ……ああ……」

真つ白になりかけた思考でフランは臆気ながら理解していた。狩る側だと思っていた自分が、狩られる側だったということ……。挑発に乗ってしまった、まんまと罠にかけられたのだということ……。

彼女の命は文字通り敵に手のうちに握られている。しかし、フランは諦めなかった。

勇気を震い立たせ、一番近くにいる敵機ヘトンプソンを構えた。が、それよりも早く夥しい数の光条が全方位から猛然と襲いかかり、トンプソンを瞬時に破砕する。

すぐさまサイドアームのM1911A1をホルスターから引き抜こうとするが、それよりも早く一発のビームがベルトを掠めてしまった。ベルトやそこに携えられたホルスターは銃器の重力に引かれ、海上へと落下していった。手を伸ばそうとするフランに向けて、熱線の群れが続けざまに放たれる。

「きゃああああああああつ!!」

絶え間無く降り注ぐビーム群に、フランは自らを守るようにして身体を縮こまらせる。

近距離にも関わらず、どのビームも制服の布を剥ぎ取るかのように掠めるばかりで、今のところはフラン本人を傷付けていない。

その様は、まるで獣の群れがか弱い小動物をいたぶっているようだった。

（いや……いやっ！いやあああああつ！）

両手で頭を押えながら、フランは死の恐怖に怯えていた。小さな身体を震わせ、ギョツと閉じた瞳には涙が滲んでいる。

自分は死ぬ。ネウロイに殺される。おそらくネウロイは一頻りフランを悲鳴を聞いた後にビームの狙いを変えて皮膚を裂き始めるだろう。次に骨を焼き、内臓を貫き、全

身から血を吐き出し、己の身体を形造つていた肉片がブリタニアの大空を紅く染め上げる。

(いやーいやだ！死にたくない！死にたくない！死にたくない！死にたくない！)

どれだけ強く願おうとも、自分襲うビームは一向に止む気配はない。

ふとフランの視界に違う景色が映り出した。それは現実逃避か、或いは走馬灯と呼ばれるものだったのかもしれない。4人の少女がフランに微笑み掛けていた。ワイト島遣隊の仲間達だ。

優しく家庭的で、泣き虫なのが玉にキズな戦友——アメリー・プランシャル。

ルームメイトで頼れる隊のエース——ラウラ・トート。

普段は優しいお姉さんキャラだが、怒るとちよっぴり怖い部隊長——角丸美佐。

実の姉のように自分を気に掛け、よく励ましてくれた大ベテラン——ウィルマ・ピシヨップ。

ここで死んでしまえば、彼女達とはもう会うことはない。一緒に訓練をすることも、ご飯を食べることも、海水浴に出ることも……。

ウィッチとして軍に志願した以上、死を覚悟していなかったわけではない。しかし、覚悟しているからといって

受け入れられるものではない。誰しも死を目の前にすれば揺らぎ、迷い、そして恐怖

する。

フランっ！——

不意に何者かの声が耳朵を叩き、脳内に響き渡った。ワイト島遺隊の仲間達のものではない。とうに声変わりを終えた男性のものだ。

続いて聞こえてきたのは、機銃音だった。これもワイト島の仲間のものとは違う聞き慣れないものだった。機銃音が響く度に何かが破裂する音が続く。それが小型ネウロイが自壊する音だとフランが理解するのは、ビームの集中砲火が止んで身体だった。

「ん……………」

恐る恐る目蓋を開き、フランは状況を確認する。キラキラと輝きながら海へ降り注ぐ白い破片類が見えた。かつてネウロイを形造っていた金属片だ。

そして、視界の中央には扶桑海軍の制服を着た航空歩兵——宮藤優人が佇んでいた。彼は手に持った13mm機関銃を背中に戻すと、フランに振り返る。

「大丈夫か!? 怪我はしてないか!？」

優人はフランに駆け寄り、彼女の無事を確認する。フランは何も答えないが、制服のあちこちが破れているだけで心配はなさそうだった。

「悪い、助けるのが遅くなった」

と、謝罪する優人。自分の周りに群がっていたネウロイを固有魔法の『凍結』で一網

打尽にした後。優人は急ぎフランを追い、彼女の窮地を救ったのだった。

後一步遅ければ、フランの身体は無数の光条によって扶られ、跡形もなく消滅していたことだろう。

「……………」

「フラン？」

フランは何も言わない。麻痺してしまったかのように無反応だ。俯いているので表情を窺い知ることができない。

「……………」

やがてフランはゆっくりと顔を上げた。その瞳からはボロボロと大粒の涙が零れ落ちていた。

「フラン……………」

「うっ……………うっ……………うわああああああん！」

もうダメだ。もう堪えられなかった。飛び付くように優人に抱き着いたフランは、赤ん坊のように大声で泣き続けた。

「よおし、よおし。恐かったよな」

優人は一瞬だけ驚いたような顔をしたが、すぐに穏やかな表情を浮かべる。フランを優しく抱き締め、頭を撫でてやる。彼女の髪の柔らかい香りが、優人の鼻腔を擦った。



数時間後――

基地に帰投した優人はフランと共に角丸に報告を済ませ、夕食まで休もうと自室――
正解に言うなら客室――へ戻っていた。

少し仮眠を取ろうとベッドに横になると、ドアからノック音が聞こえてきた。

「は〜い」

やや気の抜けた返事をしながら身体を起こし、客人を出迎えるためにドアを開く。

「あつ……」

「フラン」

優人は目を丸くする。訪ねてきたのは先程分かれたばかりのフランだった。既に服を着替え、上はリベリオンの星条旗が描かれたTシャツに、下は重ね履きのショートズボンというラフな私服姿となっていた。

「い、今……大丈夫？」

少し前の優人に対する刺々しい態度はどこにいったのか。フランは遠慮がちな口調で訊ねる

「大丈夫だけど、なんか用か？」

「用っていうか……」

優人に訊き返されると、フランは何故かモジモジと腰を揺らし始めた。頬には朱が差している。

「その……えつと……助けてくれてありがとう。それとごめんさい……」

「えつ？……」

「お風呂の時に、桶投げつけちゃったでしょ？それに痴漢とか変態とか言って……本当にごめんなさい……」

照れ臭いのか。段々と声が尻すぼみとなる。フランからの素直な謝罪に面食らった優人だが、しばらくしてプツと軽く吹き出した。

「な、何よ？」

フランは上目遣いに優人を睨む。

「ごめんごめん。ありがとうとか、ごめんなさいとか。素直に言える子だったんだなあ……つて思つてさ」

「アンタ……あたしのことバカにしてる？」

「だからごめん、つて……」

「……まあ、いいわ。それとお願いがあるんだけど……」

「お願い？フランが泣いてたことなら、誰にも話さな——」

「違うわよ！バカア！」

フランは顔を真っ赤にして怒鳴る。そのあまりの迫力に優人はたじろいだ。

やはりというか。フランの性格からして泣いていたことを他です仲間に知られたくはないらしい。ネウロイとの戦闘後、救援に駆けつけた角丸達が二人を見つけるよりも、彼女が泣き止むが早かったのは幸いと言うべきか。

「今度はアメリカに射撃を教えるんでしょ？」

怒りで荒げた息を落ち着かせると、フランは話を戻した。

「あたしも、その……混ぜてくれない……かな？」

両手の人差し指を軽く突き合わせ、やはりモジモジとしながら頼むフラン。普段の強気なイメージとのギャップに優人は少しドキツとした。

「もちろん！」

と、優人は笑顔で返す。

「じゃ、じゃあ……よろしくね。優人……」

それだけ言うと、フランは逃げるように自室の方向へ走っていった。

「優人か……」

名前を呼ばれ、フランとの距離が大幅に縮んだことを自覚した優人は満足に微笑ん

だ。

「また可愛い妹ができたな」

◇ ◇ ◇

一方その頃、501基地では――

「……………お兄ちゃんが浮気してる……」

優人の妹――宮藤芳佳がニュー○イプ能力、或いは新種の感知系固有魔法のようなのを開化させていた。

インターミッション「恍惚の美女」

程良い湿度が保たれた白く清潔なバスルームで、一人の少女がシャワーを浴びている。シャワーヘッドからは、自分好みに湯温と湯量を調整した湯が降り注ぎ、シミ一つ無い白く極め細かな肌を伝ってタイルへ流れ落ちてく。

“息を呑むほど美しい”という表現は彼女のために存在する、と言っても過言ではないだろう。少女の容貌はそれほどまでに秀麗だった。

背中まで伸ばしたサラリと流れるような艶のある黒髪、大きな瞳、スツと通った鼻筋、桜色をした形の良い唇。170cmという女性としてはかなりの高身長に、膨よかな胸部、キュツとくびれた腰部、スラリと伸びた手足。

服を着ていても下の線がよく分かるほど起伏に富んだ発育良好な身体は19歳という年齢に似合わない大人の色香を感じさせる。

俳優かモデルと言っても十分通用する美貌の持ち主は、シャワーを終えると隣室の床に身を躍らせた。髪と肌をバスタオル越しに撫でながら、裸身を晒したまま室内を見回す。

彼女は今、ブリタニアでも有数の一流ホテルに滞在している。宿泊中の部屋はホテル

の最上階に存在するスイートルーム。足首まで沈むほど深く、柔らかい絨毯。光量を抑えてシックな雰囲気を出している照明。清涼感ある香水の薫り。その他、調度品も全て一流の物が揃えられていて。フロアも広く、大変居心地がいい。

「ふう……」

軽く息を吐いた少女は、ベッドの上に無造作に置かれていたバスローブに身を包む。部屋に備え付けられているドレッサーの椅子に形の良い尻を降ろし、バスローブと同じくベッド上にあつた新聞を手についた彼女は、一面を飾っている記事に目をやる。

その記事は、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』のガリア解放を讃えたものである。彼女らがネウロイの巢を破壊し、ガリアの大地を取り戻したニュースは瞬く間に世界中の知るところとなった。

連合軍最高司令部の発表を機に、各国の報道機関が報道合戦もかくやという熱気を持って、情報を全方位に向けて発信したのである。

ウィッチーズ、ネウロイの巢に勝利す――

統合戦闘航空団、ガリアを奪還――

連合軍、人類の勝利へ向かって大きく前進――

誰もが不可能だと信じて疑わなかったネウロイの巢の破壊、占領された地の奪還という快挙を魔法力を有した十代の少年少女達が成し遂げたのだ。

ネウロイが侵攻する度に連合軍が敗戦・後退を繰り返していたこともあつてか。初めのうち、このニュースを耳にした人々は何かの冗談ではないかと訝んでいた。しかし、事実と知るや否や彼等は歓喜を持って朗報を受け入れた。

圧倒的な戦力を以て自分達人類に仇なす存在——不倶戴天の敵ネウロイに対して、連合軍が反撃の一矢を見舞つたのだ。ウィッチとウィザードが正義の鉄槌を下したのだ。

『最早ネウロイなど、恐るるに足らず』

『いずれ連合軍が撲滅するだろう』

『そして、世界に再び平和が訪れるのだ』

人々は高揚していたが、それは素人目による楽観的な早計と言えるだろう。ネウロイ側は、カールスラントやオスマルクに複数の巢と相当数の兵力を有しており、高い学習能力や新しい巢が出現する可能性も相俟つて侮ることは出来ない。

だが、新聞やラジオ等のメディアを利用した連合軍のプロパガンダ戦略が功を奏し、世界各国において勝利への機運や戦場で活躍する航空歩兵の人氣が一層高まり、軍に志願するウィッチ・ウィザードの人数は増えつつある。

「……………」

少女は無言のまま記事を見つめる。掲載されているストライクウィッチーズの写真のある一点——扶桑皇国海軍から派遣された部隊唯一の航空ウィザードを……。

「もうすぐ……もうすぐよ……」

写真に映るウィザードの顔を右手で撫でながら、少女はコケティッシュな唇を動かして言葉を紡いだ。

「もうすぐ会えるから、もう少しだけ我慢して……」

心の底から沸き上がってくる感情を抑えられず、少女は恍惚とした表情を浮かべた。そして、想い人に会ったらどうするかを夢想する。

まずは彼の胸に飛び込み、自分が何者かを教えなければならぬ。最後に顔を合わせた時から十数年も時が過ぎてしまっている。女らしく成長した自分が誰か、すぐには気づけないはずだ。きつと驚くだろう。

ひとしきり再会の喜びを味わったら、今度は地面に押し倒してしまおう。彼の服を剥ぎ取って、そのまま存分に愛し合おう。周りに人が居ようが構わない。全身全霊で彼を感じたい。

近い将来、現実になるのである——少なくとも、彼女本人はそう信じている——夢想到る少女が頬に熱を灯してうっとりしていると、ドアの方からコンコンとノック音が聞こえきた。心地好い想像を遮断され、現実に戻った少女はドアへ疎ましがね視線を向ける。チツと小さく舌を打ち鳴らし、ドレッサーの引き出しに新聞をしまうと、椅子から立ち上がる。

誰が来たかは分かっている。このスイートルームは、宿泊部屋であると同時に、その人物との密会場所でもあった。少女は服に着替えることなく、バスローブのままドアへ歩み寄りノブを回した。ドアの向こう側で待っていたのは、彼女とは親子ほど歳が離れているであろう初老の男性だった。

「やあ」

高そうなスーツを着こなした男性は、少女に向かってニツコリと微笑み掛ける。彼は紳士然としているが、少女の身体を舐め回すように視線を走らせ、下心見え見えに彼女を品定めしている。

「お待ちしておりました」

少女は不快感を押し殺して密会相手をスイートルームへ迎え入れた。男性の腕に飛び付き、魅惑的な作り笑顔を向ける。それは人を誘惑し、墮落させる悪魔の笑みそのものだった。

第8話 「ゾ〜ウさん♪ゾ〜ウさん♪パ〜パより大きいね」

早朝、ブリタニア・ワイト島分遣隊基地――

第501統合戦闘航空団の宮藤優人大尉が、ワイト島のウィッチーズ基地へ出向という名目の療養生活を始めて4日が過ぎていた。

今朝も彼は朝風呂上がり。制服への着替えは既に脱衣所で済ませ、扶桑海軍の第二種軍装でビシツと決めている。

(もう……大丈夫かな?)

基地宿舎の廊下を歩いている優人は、自身の胸に触れてみる。

島の温泉には、まだ数えるほどしか浸かつてはいないが、湯の効能はハッキリと現れていた。予期せぬネウロイとの遭遇戦が二回ほどあり、その両方で彼は全開戦闘を行っていた。しかし、胸の傷は悪化することなく完治し、悩みの種であった痛みもまるで嘘だったかのように無くなっている。ロフティング医師から渡された痛み止めの錠剤はもう必要無さそうだ。

(そろそろ、御暇しないとだな……)

傷が癒えた以上、ここにいる必要はない。ならば一兩日にワイト島を発ち、帰還した501基地で他の隊員と同様総司令部から下される次の命令を待たなければならぬ。

もう怪我のことで妹や親友、501のウィッチ達に心配をかけなくて済む。それは大変喜ばしいことではあるが、せっかく知り合ったワイト島分遣隊の面々と別れなければならぬ。特に余暇を利用して射撃や料理を教えたアメリーやフランのことを思うと、寂しいものがある。

「おはよお〜♪」

ふと廊下の奥からウィルマが姿を見せた。ニッコリと形の良い唇で曲線を描きながら、優人の向かってヒラヒラと手を振っている。

寝起きでまだ着替えていないのか。彼女は今、寝間着として使っている黒のタンクトップに身を包んでいる。遭難時の下着姿や風呂場で鉢合わせした時の全裸姿に比べて刺激は大分弱いものの、軍の制服と比較すると肌色の面積はやはり多い。

胸元からは谷間が僅かに顔を出し、生地も薄いため持ち主のボディライン。特に胸部を隠しきれしていない。しかもウィルマはこのタンクトップを着る際はノーブラなのである。ウィルマが足を一歩進める度に、人の頭ほどもある乳房がタンクトップから零れるそうなくらいに揺れる。

「お……おはよお〜♪」

軽く手を上げ、優人も挨拶を返す。しかし、やはりというか。彼の視線は一瞬だけウイルマを捉えると、すぐさま胸部へ移っていった。

「今日も朝風呂？」

ウイルマは優人が小脇に抱えている桶——中にはタオルや石鹸が入っている——に目を向けながら訊ねる。

「ああ」

「残念ねえ……もう少し早く起きていれば大尉殿に“御一緒”出来たのに♪」

「ご、御一緒……お前……」

ニヤニヤと悪戯っぽく笑うウイルマに、優人は少しばかりたじろぐ。

ワイト島基地において、ウイルマによる優人へのからかいは最早習慣と成りつつある。冗談だと思いつつも、優人は心の何処かでウイルマに“御一緒”してもらうことを期待してしまっていた。

「ところで、あなた海は好き？」

ウイルマが強引に話題を変えてきた。あまりに唐突な質問をされた優人は眉を寄せて訝しがる。

「何だ急に？」

「いいからいいから♪好き？」

ズイツと優人に顔を近付け、ウィルマは重ねて訊く。成人に達した大人の女性の甘い香りが鼻腔を駆け抜け、優人の心臓をトクンと高鳴らせた。

「まあ、嫌いではないけど……」

「そ？良かった」

「何で、そんなこと訊くんだ？」

「ふふ、それはね……」

◇ ◇ ◇

数時間後、ワイト島南部海岸――

「海だあくっ！」

砂浜全体に歓喜の叫び声が響き渡る。声の主は、いつものリベリオン陸軍の制服から自前の水着に着替えたフランことフランシー・ジェラード少尉である。

彼女の左右には同じく水着に着替えたワイト島分遣隊のウィツチ達。後ろには赤白二色のパラソルを担いだ優人がついて来ている。もちろん、彼も水着だ。

「何で海水浴？」

適当な場所にパラソルを立てながら、優人は疑問を口にする。

よもや海水浴に参加するとは思っていなかった優人は水着を用意していない。なので、角丸がどこからか調達してきたサーフズボンを借りて履いている。

おそらくは基地の整備兵ないし他の基地要員の私物を拝借したのだろうが、サイズが合わない。ずり落ちないよう腰回りを紐で縛っている。

「今朝説明したでしょ？あなたとの思い出作りよ、思い出作り♪」

右目でウインクしながら答えたのは、ホルターネックの白ビキニに身を包んだウィルマだった。

トップは胸元と背中、ボトムは両サイドを縛っているセクシーなデザインが彼女のスタイルの良さを際立たせている。

「大尉はそろそろ501へお戻りになることでしょうか、その前に送別会の一環として海水浴をしようと思ひまして……」

と、説明を補足したのは扶桑ではお馴染みである紺色の水練着を身に纏った角丸だった。

扶桑の水練着はウィルマの着ているビキニに比べて地味な印象を受けるが、むしろその地味な水着がウィルマに勝るとも劣らぬ角丸の見事なプロポーションを引き立てていた。

「そっとういことな……」

「ご迷惑でしたか?」

「いやいや、気を遣わせたみたいで申し訳ないな」

顔の前で軽く両手を振りつつ、優人は角丸に謝意を述べる。

「そうよねえ! 水着美女に囲まれての海水浴に誘われて、迷惑なはずないわよねえ?」

パラソルに下に敷いたレジャーシートに腰を降ろしている優人に向かつて、ウィルマがズイツと身を寄せてきた。白いビキニトップに包まれた大きな乳房が眼前でアップになる。あまりの迫力に、優人はゴクリと音を立てて唾を飲んだ。

「ちよつと、視線がやらしいんだけど?」

ウィルマの背後からフランが顔を出し、眼前の双丘を凝視する優人をジト目で見据えている。

フランの数歩後ろにはアメリーもいる。逡巡したように2、3度左右に視線を泳がせた後、彼女は小走りで優人の元へ駆け寄った。

「ゆ、優人さん!」

1メートルも離れていない至近距離にも関わらず、アメリーは必要以上に大きな声を飛ばす。なにやら緊張しているらしく、声が裏返ってしまっていた。

「ん?」

「そのっ! ……どうでしょう?」

「どう、つて?」

「アメリーは、あなたに自分の水着姿の感想を訊いてるのよ」

頭上でクエスチョンマークを躍らせている鈍い上官殿に、ウイルマが小声で耳打ちする。一方、アメリーは頬を染め上げ、後ろ手を組んでモジモジしながら優人の返事を待っていた。

アメリーが着ているのは、胸元に小さなリボンをあしらったコバルトブルーのワンピースタイプ。彼女のイメージに合った清楚で可愛らしデザインの水着である。

「うん、とても似合ってる。可愛いよ」

「あ、ありがとうございます!」

優人に褒められたことが嬉しい反面、照れ臭いものがあるのか。アメリーは頬だけでなく顔全体を真っ赤にして、気恥ずかしそうに目を伏せる。

「ねえ、あたしは?」

「大尉、私はどうですか?」

優人とアメリーの間にフランとラウラが割り込んできた。彼女も自分達の水着姿の感想が聞きたいらしい。

「おやおやお♪モテますなあ、大尉殿♪」

ウイルマが口角を吊り上げ、ニヒヒと楽し気な笑みを浮かべる。その間もフランとラ

ウラは優人の顔をジツと見つめ、視線の圧力で言葉を促す。

ラウラが着ているのは、明るい紫色の布地で作られたバンドウビキニである。ウィルマの白ビキニよりも布の面積が少なめなセクシーなデザインの水着は、持ち主の豊満ボディを際どいながらも美しく魅せている。

私生活ではズボン一枚の格好で昼寝したりと、だらしない印象を受けるが、彼女も女性だ。意外と自分を美しく見せることに気を遣っているのかもしれない。他にサイズが合うものがなかったのかもしれないが……。

一方、フランが着ているのはトップとボトムのフロントをスナップボタンで留めたタンキニ風のビキニ。ボトムこそビキニ風だが、トップはブラよりもタンクトップに近い露出度控えめなものを着けている。

成長途中の幼児体型なこともある——フランもアメリカも15歳にしてはスタイルが良い方だが、年長の三人の発育が良過ぎるせいで目立たない——ラウラやウィルマほど大胆な印象は受けない。

「も、もちろん二人共素敵だよ」

「ふふ〜ん♪あつたり前でしょ！」

満足そうに鼻を鳴らしたフランは、両手を腰に当てて王立ちのポーズを取った。

「あたしのセクシーな水着姿を見せてあげたんだから、感謝しなさいよ！」

「そ、そうだな」

無い胸——もしかしたらワイト島分遣隊内ではアメリーを下回って最下位かもしれない——を張りながら、誇らし気な表情で嘯く。そんなフランに対して、優人は苦笑を禁じ得ない。

「〜♪」

ふと小気味良い鼻唄が、優人の耳朶を擦る。聞こえた方へ目をやると、両手を頭の後ろで組んだラウラが背を向けて立っていた。どうやら彼女も異性に水着を褒められて、ご機嫌なようだ。

「さて、まずは準備運動を——」

しましう、と言葉を続けようとする角丸を余所に、フランとアメリーとラウラの三名は早くも海へ駆け出していた。

「あの……もう、みんな行っちゃったけど?」

「あいつら、準備運動も無しに……」

遠ざかる三人の後ろ姿を、ウィルマが右手の親指で差す。優人も三人に視線を走らせ、心配そうに呟く。

「ふふ……まあ、いいけどね……」

スルーされたことが余程堪えたのか。角丸はどよーん、と憂いに満ちた表情をしてい

た。彼女は頼れるお姉さんキャラである反面、打たれ弱い落ち込みやすい面も持ち合わせている。

「ま……まあまあ、楽しみましよ」

ウイルマは角丸の左肩にポンと手を置いて彼女を励ます。

（そう言えば……結局、芳佳と海水浴してないな……）

隊長を差し置いて先に海水浴を始めているアメリカ達を見て、ふと優人は思い出す。

以前501基地でウィッチーズが海上訓練を行ったあの日。訓練後、海で遊ぶ約束を芳佳としていたが、ネウロイの出現により、海水浴の予定はキャンセルとなってしまうた。

9月に入ったとはいえブリタニアはまだまだ暑い。501の解散も、もう少し先だろう。基地に戻ったらミーナに海水浴を提案してみるのもいいかもしれない。

（芳佳の水着……か）

優人の唇が僅かに綻んだ。彼の脳裏には、おニューの水着に身を包んだ芳佳の姿が浮かび上がっている。

その芳佳は優人に見て欲しい、と背伸びして前にサーニヤが着ていたような紐で結ぶタイプのビキニを選んでいた。

砂浜で追い掛けっこしたり、寝転がって日光浴したり、優人が芳佳に泳ぎを教えたり、

等と兄妹水入らずで海水浴を楽しむ風景を夢想する。

やがて、芳佳が着ているビキニトップの紐がアクシデントでほどけてしまう。そして、芳佳の慎ましやかな胸が露に……。

(ヤバい……鼻血出そう!)

鼻に血が集中するのを感じた優人は、咄嗟に鼻の頭を抑えつつ目線を下げた。

世の中広しと言えども、事故で妹の水着が脱げるといふ厭らしい妄想をした挙げ句、鼻血を出しそうになる人間など彼くらいだろう。

最早優人は、シスコンを通り越して立派な変態さんである。

「どうしたの?」

様子がおかしいことに気付いたウイلمマが、優人の顔を覗き込んでいた。

「あ、いや……ちよつと調子が悪くて……」

「大丈夫ですか?」

復活し、ウイلمマの背後に立っている角丸も心配そうな眼差しで優人を見ている。

「少し休めば大丈夫だから……先に遊んでくれ」

さすがに妹の裸を想像して鼻血しかけている、などと言えないので、優人は愛想笑いで誤魔化そうとする。

「あつ!ひよつとして……」

ウイルマは何か気付いたとばかり人差し指を立てる。

「周りが水着美女ばかりで照れてるのかしら？」

「ま、まあな……」

何かと鋭いウイルマ。邪な考えを見破られたのかと思つて顔を強張らせていたが、どうやら違つたようでも優人はホツと安堵する。

「ふふっ♪意外とボウヤなのねえ♪」

ウイルマはそう言うのと、優人の耳元に唇を近付けて囁いた。

「大丈夫ですよ、大尉殿？海水浴なら、うっかり女の子の身体に触れたりしても『事故』ですから♪」

「なっ!？」

頬を赤らめて絶句する優人が可笑しかったのか。ウイルマはクスクスと笑声を立てる。

「大尉殿は、本当に可愛い反応をなさいますわねえ♪」

「お前なあ！」

優人は憤然とレジャーシートから立ち上がり、自分をオモチャにするウイルマに抗議の目を向けた。

「俺は、そんな邪なことは——」

「あら？朝っぱらから人の身体を舐め回すように見ていたのは誰だったかしら？」
「——っ!？」

美人で理想的なグラマラスボディの持ち主であるウイルマは、普段から異性に「そういう目」で見られることが多い。タンクトップの上からでも分かるウイルマの豊満な身体に釘付けになっていた優人の邪な視線はバレバレだったようだ。

反論しようにも先に痛い所を突かれてしまったうえに、優人はウイルマほど口達者ではないため、いい言葉がすぐには浮かんでこない。代わりに恨めしそうな視線で睨み付けた。

「じゃあ、私達も行くわね♪ほら隊長さんもー」

ウイルマは「してやったり」と言った感じの笑みを浮かべると、角丸の手を引いてアメリー達の元へ向かっていった。

「まったくとく……」

優人は二人の後ろ姿を見送りつつ、溜め息を零した。美女達に続いて海に入ろうとはせずに、レジャーシートへ座り直した。

「性格が全然違う。本当にリーネの姉か？いや、でもあの胸はビショップ家の血縁に間違いないだろうし……」

「胸がどうかしたんですか？」

アホな分析を言葉に出している優人に、いつの間にか戻って来ていたラウラが声を掛ける。

「ラウラ？もう戻ってきたのか？」

「少し眠たくて、こつちで一眠りしようかと……」

そう答え、ラウラは眠たそうに欠伸を噛み殺す。いつもなら、彼女は今の時間帯は昼寝をしている。

優人はラウラの水着を改めて見てみるが、やはり際どい。サイズが合っているのか疑わしく、持ち主の豊かな胸が、今にもトップから零れ落ちそうだ。

「？……どうしたですか、ジロジロ見て？」

「いやいや、何でもない！」

視線に気付かれ、優人は慌てて目を逸らす。

「……………そうですか」

ラウラは怪訝そうに首を傾げたが、それ以上は何も訊かなかった。

「……………あの大尉」

暫しの沈黙の後に、ラウラが再び口を開いた。

「お願い、聞いてもらってもいいですか？」

ラウラは両手を膝に添え、前屈みになりながら問い掛ける。眼前でたゆんと揺れる乳

房を凝視しつつ、優人は訊き返した。

「な、何かな？」

「えつと……」

言いづらいことなのか。ラウラは視線をやや右に泳がせ、仄かに両頬を染め上げながら「お願い」を口にした。

◇ ◇ ◇

その頃、第501統合戦闘航空団基地食堂――

いつも騒がしいほどに賑やかな食事時の501基地食堂だが、今日は馬鹿に静かだった。それもそのはず。昼食の席に顔を出しているのは、501ウィッチ隊総数の3分の1程度の人数だったのだ。

現在、優人はワイト島へ出向中。ミーナと坂本は連合軍西部方面総司令部から呼び出しを受け、バルクホルンとハルトマンはバルクホルンの妹――クリスの見舞い、シャーリーとルツキーニはショッピングと、それぞれ違った用事でロンドンへ出掛けている。

サーニャは夜間哨戒明けのため、例によって自室で眠っている。

以上の理由から昼食を取りに食堂を訪れているのは、宮藤芳佳、リネット・ピシヨツ

プ、ペリーヌ・クロステルマン、エイラ・イルマタル・ユーティライネンの4名のみである。

「さあオマエ達！出来たゾ！」

スオムスに伝わる妖精——トントが描かれたエプロンを付け、白いコック帽を被ったエイラが、料理の乗せられたワゴンを押して厨房から食堂へ出てくる。

食堂では芳佳、リーネ、ペリーヌの三人がテーブルに着いて、雑談で時間を潰しながら料理の到着を待っていた。

「エイラ・イルマタル・ユーティライネン特性！スペシャルランチだ！」

そう嘯き、エイラは自分の手料理をテーブルに並べていく。

「これって……」

「サンドイツチ、ですよね？」

芳佳とリーネは順に言うのと、目をパチクリさせる。スペシャルランチと聞いて、どんな感じが出てくるのかと思えば、何の変哲もないサンドイツチだった。

「ずいぶんと、慎ましいスペシャルランチですわね」

ペリーヌが呆れ目でサンドイツチを見つめつつ、嘆息混じりに嫌味を呟く。呟くといっても、その声は周りに十分聞こえる大きさである。

「ペ、ペリーヌさん！」

エイラを毒突くペリーヌをリーネが咎める。しかし、ペリーヌはまったく意に介さず、フンと鼻を鳴らしてそっぽ向いた。

「フフ♪今日はツンツン眼鏡の嫌味も気にしないンダナ♪」

「ご機嫌そうなエイラは、ペリーヌの憎まれ口をにこやかに受け流す。

「確かに見た目はただのサンドイッチ！しかし、食材は基地にあるものの中からワタシが厳選したものを使っているンダ！」

「えっ？何を使ってるんですか？」

「それは食べてみてのお楽しみダ！ホントはサーニャにも食べて欲しかったンダけどナ」

芳佳の質問にそう返すと、エイラはエプロンとコック帽を脱ぎ、自身もテーブルに着いた。

「普通のサンドイッチに見えるけど……」

一番最初にサンドイッチを皿から持ち上げたのはリーネ。食す前に矯めつ眇めつ眺める。

補給物資にあつた扶桑産のツナ缶を使用しているが、やはり特に変わったところはない。普通のサンドイッチだ。

「エイラさんオリジナルのサンドイッチ。どんな味がするだろう？」

リーネに続いて芳佳もサンドイッチを手に取る。エイラが厳選した食材を用いて作ったという料理に興味津々だ。

「一口食べれば、あまりの美味しさに夢見心地！二度と憎まれ口なんて叩けなくなるンダナ！」

「まあ、お料理に罪はありませんし。頂きますわ」

かような発言と共にエイラ、ペリーヌもサンドイッチを手に取った。

「頂きます！」

芳佳が音頭を取り、全員が同時にサンドイッチを口へ運ぶ。

「……………うっ!?!」

サンドイッチの具材が口内で舌先に触れた瞬間、凄まじい吐き気と目眩がウイッチ達に襲いかかった。瞬く間に顔面蒼白となった4人は反射的に両手で口元を押さえる。

カタカタと全身を震わせながら悶絶した後、彼女らはテーブルに突っ伏した状態で気を失った。



再びホワイト島南部海岸——

「ほ、本当にいいんだな？」

緊張を孕んだ声音で同じ質問を何度も繰り返す優人に、ラウラは少しだけムツとする。

「大尉、ちょっとしつこいです」

「わ、悪い……」

「私はいいつて言ってるのに……」

「い、いや。だけど……」

「男の子でしょう？」

「……………分かったよ」

同じようなやり取りを何度も繰り返して、優人はようやく観念した。

「ある液体」をたっぷり掛けた両手を、躊躇いがちに伸ばした。その先にあるのは、ラウラの白くてきめ細かい肌。

まずは指先、続いて指の腹。やがては手の平全体で触れた。ミルクを溶かし込んだような白い肌の質感に、優人は思わず息を呑んだ。

(や、柔らかいな……)

軍人ものとは思えない、ラウラの美しく柔らかかな身体。瑞々しい柔肌の感触は、健全な青少年になんとも言えない幸福感を与えてくれる。

「手が止まってます」

「あ、ああ」

ラウラに催促され、ハツと我に還った優人は手の動きを再開させる。スベスベ感を味わいつつ、肌を手を這わせる。

「さつきから同じところばかり……」

「うつ……」

「もつと上も塗ってください」

「なあ、やっぱりタオル越しとかじゃダメか？」

優人が訊ねる。往生際の悪い上官殿に対して、ラウラは苛立だし気に言い返す。

「ダメです。タオル使ったらしつかり塗れないじゃないですか。これは大切な『準備』なんですよ?」

「でもなあ……」

「恥ずかしいのは私も同じです。『ブラ外してる』んですから……」

「そ、そうだな」

同じ航空歩兵でも、ウィッチに比べてやや固いウィザードの手。それが肌を擦るよう上下し、こそばゆさを感じたラウラの唇から小さな声と吐息が漏れる。

「ふっ……くっ……」

「あ、悪い！少し乱暴だったか？」

「大丈夫ですから、続けてください」

「分かったよ。もし痛かったら教えてくれ」

「気持ち良いですよ？」

「そ、そっか……」

上手い返しが思い付かなかった優人は短く答えると、俯き加減に手を動かし続けた。

歳下とはいえ、かなり発育が良いラウラ。その身体を前にし、直に触れている優人は照れてしまっている。さらに思考も熱に浮かされ動きが鈍くなっている。

照れを隠すためか、それとも早く終わらせたいのか。優人は両手に力を込め、動きを速めた。

「っ!?……はぁ……んっ!」

急に押し寄せてきた刺激に、ラウラはやけに艶めかしい吐息を漏らした。

優人の手が動く範囲も少しずつ広がり、終わりが近付いている。

「ふう、んっ!……た、大尉。もう……」

「もう、いいのか？」

手の動きを止め、優人は確認するように問う。彼に顔を覗き込まれたラウラは、潤んだ瞳を向けて小さく頷いた。

「じゃあ、終わりだな。まったく、オイル塗りなら俺じゃなくて他のやつに頼めばいいだろ?」

優人は手に残った「ある液体」——サンオイルをタオルで拭き取りながらぼやく。

そう。ラウラが優人に聞いて欲しかった「お願い」とは、「昼寝がてら肌を焼きたいから、綺麗に焼けるよう背中にサンオイルを塗って欲しい」というものだった。

「だって、皆もう楽しそうに遊んでるし」

ラウラがうつ伏せの姿勢から身体を起こす。「ピキニトップの紐をほどいた」状態で、レジャーシートに寝転がっていたのだ。

優人が塗りやすいように、と外していた背中にあるブラの紐を結び直す。もちろん、優人に見られぬよう背を向けたまま。

「大尉なら暇そうだったので……」

「おい」

「優人お〜!ラウラア〜!」

不意に海の方から二人を呼ぶ声が聞こえてきた。振り返ってみると、優人達に向けてブンブンと大きく手を振るウィルマの姿が確認できた。

「あんた達、そこで何してんのよお?」

「お二人も、こつちで一緒に遊びましょ〜!」

ウイルマに続いて、フランとアメリーも二人に叫んだ。

「お嬢様方がお呼びだ」

優人はどっこいしょ、と年寄り臭い眩きと共にレジャーシートから腰を持ち上げる。

「俺は行くけど、お前は どうする？」

横目でチラリとラウラを見てみる。彼女は既に水着を着直していた。

「私は遠慮します。サンオイル塗っちゃったし」

「それもそうか」

バカなことを聞いたな、と心の中で呟いた優人は「じゃあ、行ってくるよ」とラウラに一言だけ言い、ウイルマ達の元へ歩いて行った。

そんな彼の後ろ姿を、ラウラは心持ち残念そうな表情で見つめていた。

「ラウラと二人つきりで何してたの？」

と、合流した優人にさっそくウイルマが訊いてくる。対して、優人は適当なことを言つて誤魔化した。

「ちよつとした世間話をな」

「あんた、ラウラに変なことしてないでしょうね？」

「フラン！失礼よ！」

すかさず追及するフラン。上官相手でも構わず非礼を働く彼女を角丸が窘める。

「いやいや、そんなことはっ!？」

「あらあゝ?」

激しく頭を振って否定する優人に、ウイルマがにんまりと悪意に満ちた笑みを向ける。

「ラウラの身体をベタベタ触ってたみたいだけど?」

「なっ!?!見てたのか!?!」

「ふふ♪スナイパー家系の視力を舐めないでよ」

と、ウイルマはペロツと舌を出して見せる。

「あんた、やっぱり……」

「あ……」

怒りを滲ませた声が、優人の耳に突き刺さる。額から冷や汗を流しつつ、勇気を振り絞って恐る恐る振り返ると、フランが親の敵でも見るような鋭い目付きで優人を睨んでいた。

よく見てみると、使い魔の耳と尻尾が出ている。つまりは、ストライカーユニット装着時と同じく魔法力発動状態なのだ。

「ちよっ、ちよっと待って!誤解だ!」

優人は身を守るようにして両手の平を正面に出し、どうにか冤罪を晴らそうとする。

「確かに触りはした！けど、それはラウラがサンオイルを塗っ——」
「不潔っ!!」

「ぶっ!?!」

フランの渾身の右ストレートが、優人の顔面にめり込む。小柄で細身な体格から想像も出来ない——魔法力を使用しているからだ——強力な一撃によって、優人は数メートル先まで吹っ飛ばされ、水飛沫を上げながら海中に沈んだ。

「フランっ！何てことを!?!」

角丸の顔が真っ青になる。軍隊において比較的規律の緩いウィッチ部隊、特に統合戦闘航空団にいると忘れがちだが、自分より階級が上の士官を殴り飛ばすなど、軍隊内では暴行脅迫等の罪に問われても仕方のない暴挙である。

まあ、優人はおそらく気にしないだろう。何故かって？慣れてるからだ。

「あはは。優人、生きてるかしら?」

と、ウィルマが苦笑する。彼女の隣では、アメリーがあたふたしている。

「はあ……はあ……結構、いいやつだと、思ったのに……はあ、やつぱり男なんて……みんな、ケダモノよ……」

ぜえぜえと肩で息をしながら、フランは優人への失望を口にする。

「みんな、どうしたの?」

騒ぎを聞き付けてきたラウラが、不思議そうにフラン達を順に見回す。

「ラウラ！大丈夫?! アイツに何されたの?! セクハラ?! 痴漢?! 強姦?! まさか愛人になることを強要されたとか?!」

「……………は?」

フランの質問責めに理解が追い付かず、ラウラは訝しげに首を傾げた。

◇ ◇ ◇

1分後――

「サンオイル、塗ってただけ?」

「うん」

ラウラに事情を説明され、フランは唾然とする。彼女が心配していたことは何もなかったのだ。

「なあんだ、そういうことだったのね」

あっはっはっ、と快活に笑い飛ばすのはウィルマ。元はと言えば、彼女が元凶である。「フラン、後で大尉に謝りなさい」

角丸が改めてフランを注意する。軽い頭痛を覚えた彼女は、右手で頭を押さえてい

る。

「その優人さんが上がって来な……わあっ!」

アメリーがキョロキョロと周囲を見渡していると、足元の水面が割れて優人が姿を現した。

「あ、優人さん」

「酷い目にあつた」

「大尉、大丈夫ですか」

角丸が水飛沫を撒き散らしながら優人に駆け寄る。

「ああ、なんとかだ——」

「きゃああつ!」

なんとか大丈夫、と言いかけた優人の言葉をアメリーの悲鳴が遮った。

「アメリー?」

突然の悲鳴を上げたアメリー。優人は彼女の方へ顔を向けて「どうしたんだ?」と視線で問う。

しかし、アメリーは何も答えない。ただ顔をロブスター並みに真っ赤にして、優人の身体——正確には、下腹部よりさらに下——を凝視するだけだった。

駆け寄ってきた角丸もアメリーと同じ箇所を見つめ、顔を赤ランプのように真っ赤に

している。その瞳には涙が滲んでいる。

「あ、あんた……なん、で？」

「……………」

「あらあ？」

少し離れた所にいる他の三人も、アメリーや角丸と同様に優人の身体のある部分を見入っている。

フランはアメリーと同じく真っ赤になっている。ラウラは普段と同じくポーカーフェイスだが、頬には微かに紅が差している。ウィルマも赤面具合はラウラと同じであるが、ニヤつくだけの余裕を持っていた。

「みんな、一体どう——」

ウィッチ達の視線を追い、優人も下へと目線を下げしてみる。そして、自分に何が起きたかを理解し、彼の顔は一気に青ざめた。

角丸から借りたサーフズボンが、いつの間にか脱げてしまっていたのだ。つまり、今彼は男にとつて最も大切な所を丸出ししてしまっている。それもウィッチの目の前で……………。

「きつー……………きゃああああつ!!」

優人が再び顔を上げると、アメリーのものよりずっと大きく長い悲鳴を上げた角丸

が、魔法力を発動させて優人の顔面に右拳を打ち込んできた。

本日二度目の顔面ストレート。優人は声を上げる間も無く、吹っ飛ばされる。フランの時よりもはるかに速く遠くまで飛ばされ、水切り石のように2、3度海面を跳ねた後に大きな水柱を立てて海中へ没した。

◇ ◇ ◇

さらに1時間後、ワイト島基地宿舎――

海水浴は終え、基地に戻ってきた優人とウィッチ達。既に制服に着替え、食堂でお茶をしている。

「おう……」

食堂の椅子に深く腰掛けた優人は、もう一步動けそうもないほど疲弊していた。しかし、殴られる回数はこなしているためか、身体は丈夫になっているらしい。目立った外傷は見当たらない。

「災難だったわねえ」

と、隣に座るウィルマが気の毒そうに優人を見る。が、大変なのは優人だけではない。「見ちゃったわね……」

「バツチリ見ちゃいました……」

未だ顔から熱が引かないフランとアメリー。優人と顔を合わせることも出来ず、両手で顔を覆っていた。

一方で、二人の隣に座っているラウラは大して気にしていないらしく、落ち着いた様子で静かに紅茶を飲んでいた。

「二人共、揃って真っ赤になっちゃって。ウブねえ♪」

フランとアメリーの初々しい姿を可愛らしく思ったウイルマが、右手で口元を隠しながらクスクスと笑声を立てる。

「もしかして、見たの初めて?」

「ち、違うわよ!」

テーブルに身を乗り出したフランが、ムキになって反論する。

「ちっちゃい頃、お風呂でパパのを見たことあるわ!ただ、パパのより大きかったからちよつと驚いただけよ!」

「フラン、やめてくれ……」

優人が力無く呟く。男の証を思いっきり見られた上に、フランパパのものと比較されてしまつては堪つたものではない。

「あ、あの……宮藤大尉」

ふと入り口の方から遠慮がちな声が聞こえてきた。5人が視線を移すと、角丸がドア越しに顔を半分出していた。

男の証を間近で見ってしまったことや、上官を思いっきり殴ってしまったことで、優人と顔を合わせづらくなっているのだ。

「ん？何だ？」

「501基地から宮藤大尉へ連絡が来ています」

「また芳佳から？」

重ねて訊く優人に、角丸は気まずそうに視線を逸らしたまま答える。

「いえ、リトヴァク中尉からです」

「サーニャ？」

優人は首を傾げる。ほぼ毎日夜間哨戒で、今の時間帯はまだ眠っているはずのサーニャが、睡眠時間を削ってまで連絡してきた。一体自分に何のようがあるのか。

「詳細は分かりませんが、『芳佳ちゃん達が大変なので、出来るだけ早く戻ってください』と、なにか切羽詰まった感じで……」

「芳佳がつ!？」

ガタンと音を立て、優人は椅子から立ち上がる。さすがはシスコン。妹のこととなると、目の色が変わる。

「芳佳がどうしたって!？」

「く、詳しくは何も……」

優人はズイツと角丸に顔を寄せて問い掛ける。あまりの迫力に、角丸は思わずたじろいだ。

「まさか、ネウロイとの戦闘で怪我を!？」

「っ!?!芳佳!?!」

アメリカの推測を聞くなり、優人は一目散にストライカーユニットの格納庫へ向かった。

◇ ◇ ◇

くおまけく

作者「ビキニの紐がほどけるラッキースケベなハプニングだと思った?残念、ゾウさん丸出しでしたあ!」

優人「オツサン、いっぺん死んどくか?」↑十四年式拳銃を構える

第9話 「俺の妹がこんなに病んでるわけがない」

サーニヤがワイト島分遣隊基地に連絡して間も無く、第501統合戦闘航空団基地滑走路にストライカーユニット『零式艦上戦闘脚二二型甲』を装備する優人が降り立った。

ほんの数日留守にただけだというのに、随分と長い間帰らなかつたかのような懐かしさを、優人は感じていた。

「サーニヤか……」

愛機を滑走させて格納庫に入った優人を、サーニヤが出迎える。キャットウォークに立つ彼女は、帰投した上官に対し、優美な所作でペコリと一礼した。

発進ユニットにストライカーを固定し、魔導エンジンを停止させた優人は、ストライカーを脱いだ足でサーニヤに歩み寄る。

「優人さん、おかえりなさい」

「ただいま、サーニヤ。それと出迎えありがとう」

出迎えの挨拶をするサーニヤに、優人はニッコリと笑顔で応じる。

「ワイト島の角丸美佐中尉から聞いたよ。何があつたんだ？」

単刀直入に訊く優人は、ワイト島基地を飛び出した時と比べて、いくらか冷静だった。

ワイト島から501基地へ戻るまで、短いながらも落ち着いて考える時間があつたからだ。

角丸經由で連絡を受け取った直後は、「ネウロイとの戦闘で怪我をしたのでは？」というアメリーの推測を鵜呑みにしてしまい、完全に取り乱してストライカーで基地を飛び出すなどと、士官にあるまじき醜態をワイト島分遣隊の面々に晒してしまった。荷物も向こうに置きっぱなしにしてある。世話になったというのに最後の最後で迷惑をかけたしまった。

よくよく考えてみれば、最近ブリタニアがネウロイの襲撃を受けたのは二日前で、仮にその戦闘で芳佳が負傷したのならその日のうちに優人へ連絡が来たはずだ。

しかし、サーニヤはナイトウィッチであり主な仕事は基地周辺空域の夜間哨戒。昼下がりに今の時間帯は、まだ夜に備えて眠っているはずだ。そのサーニヤがわざわざ夜間シフトの起床時刻よりも早く起き、他の基地に向向（という名目の湯治療養）中の優人に連絡を入れてきたからには、相応の事態となっているのだろう。

しかも角丸によると、サーニヤは「芳佳ちゃん」達が大変と言っていたらしい。芳佳他複数の隊員の身に何が起きていると言うのか。

「なんて言ったらいいか……とにかく、来て下さい」

「おっ」

サーニヤは優人の手を引いて駆け出した。僅かに当惑しつつも、優人はされるがまま彼女と共に格納庫を出る。

右手を軽めに握っているサーニヤの手は白く、柔らかく、男性のそれよりも遥かに小さい。ピアニストを志す女性らしく繊細なものだ。

こんなに小さな手の持ち主が、魔法力による身体強化があるとはいえフリーガーハマーのような重火器を軽々と担ぎ、両手の指では足りない数のネウロイを夜間戦闘で撃破してきたのだから驚きである。

「あれを……」

手の感触をじっくり味わう暇も無く、ふとサーニヤが足を止めた。

場所は宿舎の廊下。サーニヤは空いている右手をゆっくり持ち上げ、人差し指で窓辺を指し示した。

「エイラ?」

優人が窓辺に目をやると、そこにはエイラが佇んでいた、なにやら黄昏た様子で窓外の風景を見つめている。

「エイラ、何か変なんです」

「いや、変って……」

不安を湛えた瞳で見上げながら、サーニヤが優人に訴える。

だが変と言われても、オカルト系の怪しい知識に明るく不思議ちゃんのが強いエイラは、優人からすれば元々変わった相手である。

優秀な代わりに一癖もある二癖もあるウィッチ達が集められた統合戦闘航空団ではそんなことはないが、民間の学校であればほぼ確実に変人呼ばわりされるだろう。

尤も、それはエイラに限らず他の501メンバーにも言えることだが……。

「……………」

二人の視線に気付いたらしい。エイラが優人達の方を振り返って、じつと見据え返してきた。

「よ、よお。エイラ」

サーニヤが言ったことの意味を理解出来ない優人だが、取り敢えず軽く手を上げてエイラに挨拶する。

「ク……………」

「く?」

「フフ」

「?」

「フフフ」

「エイラ?」

「フハハハ！フハハハハハハハハハハッ！」

「っ!？」

天井を仰いだかと思えば、今度は狂ったように不気味な高笑いを始める。

あまり唐突かつ不可解なエイラの行動に喫驚した優人とサーニャはビクツと肩を跳ね上げた。

「ソウダ！ワタシがエイラ！スオムス空軍少尉、エイラ・イルマタル・ユーテイライネンだ！」

「いや、知ってるけど？」

何故か改まって自己紹介をするエイラ。それに応じる優人は、彼女の異様なテンションの高さに当惑していた。

サーニャに至っては反射的に優人の背中に隠れて、小動物のように震えていた。

「ならば、どうする？ここで殺すか？」

「殺っ!?!なんだ、話が読めないぞ？」

と、優人は怪訝そうな表情で問い返す。しかし、エイラはそれを無視し、質問の答えとは別の言葉を紡いだ。

「いいか？ワタシはエイラ。そして……」

「そして？」

「新世界の神ダー！」

「……………はい？」

エイラの意味不明な一言で、優人は世界が一瞬ひっくり返ったかのような感覚に陥った。そんな彼を他所に、エイラは言葉を続ける。

「今の世界では、ウィッチが法でありウィッチが秩序を守っている。これは事実だ。もはやウィッチは正義、世界の人間の希望。殺すか？本当にソレでいいの力？」

「お前さ、さつきから何言ってるんだよ……………」

「エイラ……………気持ち悪い……………」

ますます意味不明なことを言うエイラ。優人は軽い頭痛を覚え、サーニヤは軽く怯えていた。

「この魔法力で……………」

と、エイラは自分の両手の平を数秒見つめた後に、さらに続けた。

「他の者にできたか？ここまでやれたか？この先できるか？」

「サーニヤ、エイラはどうしちゃったんだよ？」

気持ちよさそうに語るエイラを無視し、優人は小声でサーニヤに訊ねる。

「私にも分かりません。ただお昼頃に目を覚まして、お水を飲もうと食堂に行ったらエイラも他のみんなもこんな風になって……………」

優人の背中にしがみつきながら、サーニヤは伏し目がちに説明する。
「昼飯に変なものでも食ったか？」

フウと溜め息を吐き、優人はなんとも言えぬ表情で頭を押さえた。

「ミーナ中佐に報告は？」

「ミーナ中佐も坂本少佐も今朝から総司令に呼び出されています」

「えっ？二人共いないのか？」

優人が確認するように訊き返すと、サーニヤはコクンと頷いた。

「バルクホルン大尉とハルトマン中尉、シャーリーさんとルツキーニちゃんもロンドンに出掛けてて……」

サーニヤの話を訊きながら、優人は心中で「なるほど」

と呟いた。

基地に残った自分以外の面々がエイラと同じ有り様で、しかも頼れる年長組が留守となれば、わざわざワイト島にいる優人に連絡を寄越したのも頷ける。

この状況でただ一人正気を保つなど、サーニヤでなくとも対処に困る。

(しかし、サーニヤの話だと今基地にいるメンバー……芳佳やリーネ、ペリーヌもおかしくなっているということに……)

取り敢えず、新世界の神とやらを自称するエイラは一旦放置し、優人とサーニヤは原

因究明のために食堂へ向かった。

しかし、そこで彼はさらなる異常事態と遭遇することとなる。



「リ、リーネさん。お掃除が終わりましたわ」

食堂の方から怯えを孕んだ声が聞こえる。優人とサーニヤは、入り口から半分ほど顔を出して中の様子を窺った。

室内にペリーヌとリーネの姿を確認出来た。窓際に立つペリーヌは、やたらオドオドしていること以外は何もと変わらないように思える。

一方、腕と脚を組んで椅子に座っているリーネは、身嗜みからしていつもと違っていた。彼女は、制服のブレザーとセーターを脱ぎシャツのみの格好となっている。その上、何故かシャツは第二ボタンまで外され、胸元からピンク色の縁をした純白の下着と柔らかな谷間を覗かせていた。

なんとも悩ましい姿だが、目付きの方は普段より明らかに鋭くなっており、ペリーヌに不機嫌さ満点のしかめっ面を向けている。

「ふ〜ん……」

リーネはおもむろに立ち上がると、ペリーヌが掃除したらしい窓枠を指先でなぞつた。

「……………ペリーヌさん」

「はっ、はい！」

リーネが声を掛けると、ペリーヌはビクツと全身を震わせた。その瞳には怯えの色が浮かんでいる。

「あなたの国では、これで掃除したことになるの？」

僅かに、本当に僅かに埃の付いた指先に目をやりながら、リーネは身震いするほど冷たい口調で訊く。その姿は、まるで息子の嫁をいびる姑のようだ。

「ひっ!?も、申し訳ございません！」

すつかり怯えきつたペリーヌは、直立不動の姿勢でリーネに謝罪する。リーネは、そんなペリーヌに蔑むような視線を投げかけると、大仰に溜め息を吐いた。

「半端な仕事をした罰よ。椅子になりなさい」

リーネが命じると、ペリーヌは一瞬だけ硬直した後に「は、はい」と弱々しい口調で命令を了承する。

パ・ド・カレーを領地に持つガリア貴族の令嬢は、両手と両膝を床に着いて、犬のように四つん這いの姿勢を取った。

「ど、どうぞ？」

声を震わせるペリーヌの背中に、リーネは躊躇うことなく己の尻を乗せた。

「うっ……」

リーネにおもいつきり体重を掛けて座られたペリーヌは、苦悶の声を漏らした。

「ほら、腰が下がってるわよ！」

ペリーヌは身体をプルプルと震わせながらも必死に姿勢を維持しようとする。が、リーネは無慈悲にもスナップを利かせて彼女の尻を引っぱ叩いた。

「ひっ!?!」

「ペリーヌさん、今あなたは椅子なのよ？椅子が勝手に高さを変えたりしたらダメでしょ?！」

「で、でも……ひんっ!?!」

ペリーヌの言い分を遮るように、リーネはもう一発彼女の尻に容赦ない平手を打ちをお見舞いする。

「家具は口答えなんてしないわ。さあ、椅子は椅子らしく持ち主の役に立ちなさい！私が満足する座り心地を提供しなさい！」

「あひいん!?!」

リーネは平手を打ちを繰り返す。掃除が不十分だったと言うだけで理不尽な目に

あつてゐるペリーヌは両手足に力を込め、健気にも体勢を必死に維持していた。

「嘘だろ……」

普段のおっとりとした優しい性格のリーネは何処へ行つてしまつたのか。今の彼女はガリア貴族の令嬢であり、上官であり、航空歩兵の先輩でもあるペリーヌを物か奴隷のように扱つてゐる。

ペリーヌもペリーヌでいつもの気の強さや貴族としてのプライドを何処かに落としてきてしまつたのか。リーネに対してビクビクと怯え、気弱ないじめられっ子のように命じられるがままである。

自分の目を疑つた優人は何度も瞼を擦り、頬を引つ張つたりして夢でないことを確認する。

「ちよつと、何覗いてるのよ?」

ふと声を掛けられ、優人はハツと我に還る。リーネが優人の存在に気付いたのだ。

優人は咄嗟にサーニャをリーネの死角へ避難させ、庇うかのように室内へ一步踏み出した。

「よ、よおリーネ」

「……………こつちに来なさい」

苦笑気味な優人の挨拶を無視し、椅子にしたペリーヌに尻を乗せたまま、リーネは彼

を手招きする。

この命令口調。優人の知っている彼女と同一人物とは思えないほど声が低く、凄みも効いている。

「早くっ！」

入り口でもたついている優人に業を煮やしたらしい。リーネが、声を荒げて急かしてきた。

優人は「は、はい」と情けない声で応じると、早歩きで彼女の正面に移動する。

「もう帰ってきたの？」

まるで帰ってきてはいけなような物言い。リーネの言葉は毒塗りの矢となって優人の心に突き刺さった。

「あ、ああ。ただいま」

「ちよつとやめてよ！そんな厭らしい目で、私の胸を見ないでくれる！」

ジト目で優人を見上げていたリーネは、自身の胸を庇うように両腕を組む。

どうやら優人は、リーネと視線を合わせていたつもりが、無意識のうちに彼女の谷間に視線を泳がせていたらしい。

「あ、失礼」

「何が失礼よ！まったく、初めて会った時は爽やかな感じのイケメンだと思ったのに。

人の胸見て鼻の下伸ばすなんて……変態！」

「なっ!？」

辛辣な口調で言いたい放題のリーネ。彼女の氣迫に圧されていた優人も、これには流石にカチンときていた。

見られたくないなら、ちゃんとシャツのボタンを留めればいい。ファッションだからだか知らないが、故意に露出してるリーネの方が変態じゃないか。

そう言つてやりたかつたが、今のリーネはあまりにおつかない。それこそ、本気でキレた時のミーナを遥かに上回るほどだ。

「なに? 何か文句でもあるわけ?」

優人の反応に、リーネは不愉快そうに顔を歪める。氣分を害した彼女は、目の前の床をクイツと顎で指して命じる。

「そこ座りなさい!」

「は?」

「い・い・か・ら! 座りなさいっての! グズは嫌いなもの」

「! 早くっ!」

「わ、わかつたよ」

不承不承ながらも、優人は言われた通り正座で床に座る。すると、リーネは右脚の

ニーソックスを脱ぎ捨て、片方のみ生足を晒した。

リーネの脚は程好い肉が付きながらも、足首が絞まっていて細く、長い。白く、瑞々しい柔肌には染み一つない。

モデル顔負けの理想的な美脚。その指先が、優人の鼻先に突き付けられた。

「舐めなさい」

「……………はい？」

優人は、一瞬自分が何を言われているのか理解出来なかった。聞き間違えかと思い、すぐさまリーネに確認する。

「リーネさん、今なんとおっしゃいました？」

「あんたバカア!? 私の足を舐めなさいって言っているのよ!」

リーネが苛立たしげに怒鳴り返す。やはり聞き間違えではなかったようだ。

「な、何で!」

「決まってるでしょ? 私の胸を見て、私に反抗的な態度取った。あんたは、その罰を受けなきゃいけないの!」

自分に逆らったから、その罰として足を舐めろということらしい。

まるでSMものの官能小説に登場する女王様のような台詞。優人は先程のエイラの時よりも、一際強い頭痛を覚えた。

「ほら、わかつたらとつとと舐めなさい！丁寧に隅々まで、綺麗にするのよ！」

と、業を煮やしたリーネは自らの足裏で優人の顔面を踏みつける。

「ぶっ!？」

間の抜けた声が、優人の口から漏れる。すぐに足を退かし、リーネに言い募った。

「お前なあ、いい加減に——」

「あら？もしかして踏んで欲しかったの？だったら、ほらあ！」

「いっ!？」

優人の頭上に、リーネが蹴りを見舞った。しかし、一度や二度ではなく、何度も繰り返しげしげしと上官の頭を踏みつける。

航空歩兵の大先輩で、上官で、親友の兄である優人に平然と暴力を加え続けた。

「キヤハハハハ！どう？嬉しい？ありがとうございますつて言ってみなさいよ、この変態！ほらほらほらあ！」

蹴りや踏みつけの強さと速度が次第に上がり、優人は苦悶して始める。

リーネのような年不相応に発育が良いグラマラス美少女から罵声罵倒ともに暴行を加えられる。一部の「特殊な性癖」の持ち主にとっては、これ以上ないご褒美だろう。しかし、健全な青少年である優人にとっては、ただただ痛いだけである。

「リーネ、もうや——」

もう止めろ、と言ひ掛けて優人は言葉を止めた。リーネの踏みつけが突然収止んだからだ。

「あれ？」

——ドサツ！

「えっ？」

蹴りが止まるのとほぼ同時に、前方から物音が聞こえてきた。

何だ、と思つて優人が顔を上げてみると、先程までサド行為に心踊らせていたリーネが眠るように倒れていた。

リーネの豹変ぶりに気を取られていて忘れていたが、同じく気弱な性格に豹変していたペリーヌもリーネの下敷きになる形でうつ伏せに倒れている。

「リーネ！ペリーヌ！」

透かさず二人に駆け寄り、優人は脈と呼吸を確かめる。

「よかつた、生きてる」

ホツと胸を撫で下ろした優人は、チラツとペリーヌの顔を見てみる。

リーネに椅子にされた挙げ句、のし掛かられて重たいはずなのに。彼女は何処か恍惚な表現を浮かべ、「はああ……」と艶かしい声を漏らしていた。

「まさか……ペリーヌ……」

「優人さん」

「サーニヤ……とエイラもか！」

背後から自分を呼ぶ声が聞こえ、振り返るとサーニヤが食堂の入り口に立っていた。彼女はリーネやペリーヌと同じように気を失っているエイラに肩を貸していた。

優人とサーニヤは、取り敢えず三人を医務室へ運び、ベッドに寝かせた。

「一体どうしたって言うんだ？」

リーネ、ペリーヌ、エイラ。別人のように豹変していた三名ウィッチの顔を順に眺め、優人は溜め息混じりに呟いた。

同時に、これと酷似した体験を以前にも経験したような既視感——デジャブを感じていた。

「やっぱり、お昼ご飯に何か……」

一方、サーニヤは優人が冗談半分に言ったことを真剣に考えていた。

「まさか。いくらなんでも、それは……」

ない、とは言い切れなかった。優人自身、父親の手料理で似たような経験をしたからだ。

優人と芳佳の父——宮藤一郎は魔導エンジンや空陸のストライカーユニット等、複数の分野において比類なき才能を發揮してきた超一流の技術者である。その反面、生活力

は無いに等しく、料理をはじめとする家事に関しては壊滅的である。

6年前。新型ストライカーユニット開発のため扶桑本国から派遣された優人と坂本が、ブリタニアの協同研究所に到着したあの日。一郎に振る舞われた手料理を食べて、あまりの不味さに二人揃って臨死体験をってしまったのは記憶に新しい。

「でも、芳佳とリーネがそんなヤバイ料理を作るとは——」

「今日のお昼は、エイラが作ったみたいで……」

「……なるほどね」

エイラが作ったと聞いて簡単に納得してしまう優人。失礼と言えば失礼だが、ペリー又も決して料理下手ではない。

料理が原因となれば、作り手である可能性が最も高いのは4人の中で一番料理が不得手で尚且つ味覚が少し、ほんの少し特殊なエイラだ。

「私、食堂を見えます。料理を調べれば何か分かるかもしれないですから」

そう言うのと、サーニヤは医務室を出て食堂へ引き返して行った。

「ああ、待つて。俺も行くよ」

と、サーニヤの後を追おうとする優人。しかし、彼は廊下へと続くドアを潜った瞬間に、彼は大事なことを思い出した。

「……芳佳は？」

リーネら三人とは帰投してすぐに対面したものの、最愛の妹とはまだ顔を合わせていない。

「芳佳もリーネ達みたいになつてるのか?」

と、小声で呟く優人の心境は複雑だった。妹のことが心配で早く見つけたいと思う反面、芳佳が普段の面影がない程度に豹変していたらどうしようとも思い、搜索に踏み切れずにいた。

「どうしたもんか……うわっ!」

何か柔らかいものに両目を塞がれ、視界が真っ暗になる。

突然のことに驚いて悲鳴を上げる優人の耳朶に、快活な声が届いた。

「だあくれだ♪」

「……芳佳?」

「えへへ♪せいかい♪」

嬉しそうな声と共に、芳佳は兄の目を塞いでいた己の手を退ける。

双眸に廊下の風景が戻ってきた優人は、背後に振り返る。目に入れても痛くないほど可愛い妹が、爛々と輝かせた瞳で自分見上げていた。

「お兄ちゃん、おかえりなさい♪」

ニッコリと純真無垢な笑顔を浮かべて、芳佳は大好きな兄を出迎える。数日ぶりの妹

の笑顔は破壊力抜群で、優人は嬉しさのあまり卒倒しそうになった。

出向初日の深夜、芳佳は兄恋しさのあまり基地の電話を使ってワイト島に連絡をしてきた。しかし、どうやら離れて寂しい想いをしていたのは、優人も同じだったらしい。

「うん、ただいま♪」

優人がそう応じると、芳佳は弾んだように彼の胸へ飛び込んだ。兄は甘えん坊の妹もすっかりと抱き留めてやる。

「えへへ♪お兄ちゃん、本当にお兄ちゃんだあ♪」

芳佳は兄の胸板にスリスリと顔を擦り寄せ、まるで飼い主に甘える仔犬か仔猫のようだ。

「何だよ、今日は随分甘えん坊じゃないか？」

「むう……別にいいでしょう？ 私は妹なんだから」

と、芳佳は唇を尖らせて上目遣いに抗議する。

「はいはい」

優人が頭を撫でてやると、芳佳に笑顔が戻った。再び優人の胸に顔を埋める妹を見て、優人の心も幸福で満たされていく。

だが、優人は肝心なことを失念していた。彼は、芳佳にもリーネ達と同じ症状が出ていると、サーニヤから伝えられていたはずだったのだ。

(あれ?なんだか酒の匂いが……)

「……………お兄ちゃん」

「ん?どうした?」

「……………」

「芳佳?」

10秒ほど間を置いてから、芳佳はゆつくりと顔を上げる。その瞳からは光沢が消え失せ、焦点が合わず虚ろになっている。

「なんで……………なんでお兄ちゃんから、私の知らない女の子の匂いがするの?それも、4、5人分も」

そう問い掛ける芳佳の声は、この世の人間が発したものととは思えないほど冷たい——抑揚のない声だった。

「えっ?」

優人の額に嫌な冷や汗が滲み出る。相手は最愛の妹……………のはずだ。しかし、リーネの時以上に別人だと錯覚してしまうほどに雰囲気が変わってしまった。それもほんの一瞬で……………。

「ねえ……………なんで?」

「あ、ああ……………向こうで、ワイト島分遣隊のウィッチ達と過ごしてたからな。一緒にご飯

食べたたり、訓練したり、海水浴したり」

「は?」

優人の話を聞いた芳佳の唇から、身震いするほど恐ろしいげな声が漏れる。本能的に身の危険を感じた優人は、芳佳と距離を取った。

「わたしと……わたしというものがありません。私のいないところで、他の女の子と遊んでたんだ? 私よりも、他のウィッチを優先するんだ? 私と過ごす時間よりも、他の女との時間を取るんだ?」

「は? いやいや、何言ってるんだ芳佳!?! 少し落ち着——」

「許せない……」

短いながらも憎悪を滲ませた声を上げた芳佳の手には、いつの間にか刃物が握られていた。

「ちよつ!?! どつからそんなものを!?!」

芳佳が利き手に持っているのは、扶桑皇国産の料理包丁。優人が料理好きの妹のために、本国から取り寄せたものだ。

扶桑刀と同じく伝統的な鋼素材を使用しており、早い話が世界中でよく切れると評判の一品である。

「お兄ちゃん、今からお兄ちゃんを私だけのものにするね」

そう言つて、芳佳は緩慢な動きで包丁を振り上げた。本格的にヤバいと思ひ出した優人は、自分の身を守るように両手を前方へ突き出す。

「芳佳、どうか落ち着いて！一生のお願いだから落ち着いてっ！」

「一生のお願い、つて……一体何回あるのっ!？」

聞く耳持たない芳佳は、優人目掛けて包丁を振り下ろした。

「初めて初めて！お兄ちゃんは初めて使つ……うわっ!?あぶねっ！」

間一髪で斬撃を回避すると、優人は魔法力を発動させ、芳佳とは逆方向に全力疾走する。

「逃がさないよ」

芳佳も使い魔の耳と尻尾を出現させ、優人の後を追つた。



30分後、ウィツチ宿舎のある一室――

「ゼエ……ゼエ……どうにか撒いたか？」

愛する妹との命懸けの鬼ごつこの末、優人は宿舎のある部屋に身を潜めていた。

足音が遠ざかるの確認した優人は、床の上にそつと尻を降ろした。全力で走り回つたせいで体温が上がっている。天井の仰ぎながら熱を下げるようにフウくと息を吐いた。

まさか人が傷付くことや自分の手で誰かを傷付けることを嫌う妹が、負傷して生死の境を彷徨った自分を治癒魔法で必死に助けようとしてくれた妹が、あんなヤンデレ染みた動機で自分を殺そうとするとは思ひもしなかった。しかも凶器は「501のみんなに美味しい料理を食べてもらいたい」と大切に使っていた調理道具の一つである包丁ときている。

何より恐ろしいのは、正気の光が消えた濁った瞳で自分を見てきたことだ。優人にはイリスやウォーロック等よりも、今の芳佳の方が遥かに恐ろしい。

「そう言えば、ここは？」

現在位置を把握しようと、優人は室内を見回した。無我夢中で逃げ込んだため、入った部屋がウィッチの誰かの私室であることに以外は認識していなかった。しかし、部屋の主が誰かは、すぐに見当がついた。

「シャーリーの部屋か……」

ここは部隊一のナイスバディとスピードを誇るリベリオンウィッチ——グラマラス・シャーリーことシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉の部屋だった。

航空機らしき物の設計図が貼られた壁には壁紙が無く、石組みが剥き出しになっている、機械いじりの邪魔にならないようにか、床板も取り外されている。そのため、他の部屋よりも窓や天井が高い。

チューニング中の魔導エンジンやロケットエンジン。工具類が散乱し、他にもわけのわからないメカが部屋のあちこちで無造作に置かれている。

持ち主の通り名に反して、なんとも女つ気ない。坂本やバルクホルンの部屋も同様だが、こちらは整理整頓がなされていない分二人の部屋よりも際立っている。無論、散らかり具合に関してはハルトマンの部屋よりはマシであるが……。

ふと窓の方へ目をやると、普段シャリーが寝間着として着用している深紅のジャージ。そして、インナーウェアに使っているピンク色のブラとズボンが干されているのが見えた。

いつもの優人なら気まずそうに目を逸らしたり、または男の性に逆らえず下着類を凝視したりしただろう。だが、妹からの逃走劇で疲労困憊となっている今の優人には爆乳ウィッチの生下着でさえ、ボロ切れ程度の価値しかない。

「しかし、芳佳達は一体どうしたんだ」

呼吸を整えた優人は、酸素が戻ってきた頭で思考を働かせた。何故あの4人は、別人のように豹変してしまったのだろうか。

（そう言えば、芳佳から酒の匂いが……また酒飲んで悪酔いか？でも、それにしても変わりが過ぎる気も……大体、あいつらは昼酒するようなタイプじゃ……やっぱり食堂で昼飯を調べるしかないか……）

時間が経つにつれ、疲労と恐怖心が薄れてきた。優人はドアに耳を当て、外に誰もいないことを確認してから廊下へ出た。

芳佳に感付かれぬよう、音を立てず静かどドアを閉め、忍び足で食堂に向かおうとする。その時だった。

——ポンッ！

「——っ!?!」

何者かが、背後から左肩に手を乗せてきた。優人はビクツと身を震わせた後に、そのまま硬直してしまう。

まさか、芳佳が待ち伏せしていたというのか。優人は恐怖心に駆られながらも、ゆっくりと振り返った。

第10話「まさかの〇〇〇〇」

「優人、帰ってたのか？」

一生分の勇気を使い、振り返った優人の視界に現れたのは、幸いにも包丁を持った虚ろ目の妹ではなく、頼れる戦友——カールスラント空軍ウィッチのゲルトルート・バルクホルン大尉だった。

「なんだ、バルクホルンか……」

背後に立っていたのがバルクホルンだと分かり、優人はホッと安堵すると同時に拍子抜けする。

「なんだとは、ご挨拶だな」

優人の物言いに、バルクホルンは不愉快そうに眉を顰めた。

さらに彼女の肩越しにシャーリー、ハルトマン、ルツキーニの3人が元気な顔を見せる。

「あたしらもいるぞお！」

「優人おー、おひさあー！」

「お帰りの♪」

「ああ、ただいま」

優人は軽く右手を上げて、彼女等に挨拶する。これで総司令部出向いているミーナ、坂本以外の全員が基地に戻ってきたことになる。

「なんだよ？元気がないな？」

優人の右隣に移動してきたシャーリーが、怪訝そうに扶桑ウイザードの横顔をしげしげと観察する。

「それに、何であたしの部屋から出てきたんだ？」

「ああ、それはだな」

「シャーリー、野暮なことに聞いちやいけないよ♪」

と、今度はハルトマンがニヤつきながら言う。何かタチの悪いイタズラを思い付いた時にハルトマンが見せる表情だ。主な被害者である優人は、それを嫌と言うほど理解している。

「男が女の部屋にこっさり入ってすることなんて限られてるよ？ベッドに寝っ転がったり、匂いを嗅いだり、下着類を物色し——」

「違う！」

礼によつて、有らぬ冤罪をかけられそうになり、優人はハルトマンが言い切る前に怒号を上げて否定する。

「いや〜ん♪優人のエッチイ〜♪」

ハルトマンに似た笑みを浮かべたシャーリーが、自分の身体を守るように抱き締める。彼女の斜め後ろにいるルツキーニも「えっち♪えっちい♪」と尻馬に乗っていた。シャーリーとて、不慮の事故以外で優人がそんなことをするとは微塵も思っていない。ハルトマンの悪ふざけ乗つかっているだけなのだ。

「優人おおおおおおお〜っ!!」

「うわっ!!」

怒声と共に、バルクホルンが第二種軍装の襟元を掴み上げた。

フー、フーと呼吸を激しくし、顔は怒りと羞恥心で真っ赤なり、カッと大きく開かれた双眸で優人を捉えている。

「基地に戻って早々、お前というヤツはっ!!」

「ご、誤解だ!」

「なにい!?!5回もやっているのか〜っ!!」

「ちよっ………話を!」

弁明しようとするも、激情に駆られている今のバルクホルンは聞く耳を持たない。両手で襟元をガツシリ掴んだまま、優人の身体を持ち上げる。魔法力を使っていないというのに、とんでもない怪力少女だ。

「皆さん、どうしたんですか？」

ふと廊下の奥よりサーニヤがやってきた。バルクホルンに締め上げられている優人を、不思議そうに見上げている。

「あ、サーニヤん」

「ん？サーニヤ」

「ゴホゴホッ！助かった……」

まずハルトマンがサーニヤの方へ顔を向ける。次に姉がバカ気質で“妹キャラ”に弱いバルクホルンが振り返り、同時に優人も解放された。

ちなみにサーニヤは一人っ子であり、バルクホルンが妹だと思い込んでいるだけだが――。

「あれ？今日は夜間哨戒だろ？起きてて大丈夫なのか？」

と、訝しがるシャーリー。いつもなら夜間哨戒担当のサーニヤは眠っている時間帯なので、当然と言えば当然である。

「実は……大変なことに……」

「悪夢だよ……」

と、サーニヤと優人。現在の基地の状況が、二人の口からウィッチ達に説明される。



「よ、芳佳が……包丁で優人を……」

シャーリーは信じられない、と言った風に両目を瞬かせる。それは他の4人も同じだった。

「そんなバカな……どうして、そんなっ!？」

一番動揺が激しかったのは、芳佳の治癒魔法によって命を救われたことのあるバルクホルンだった。

自己の身も顧みず自分を救ってくれた芳佳が、一時の嫉妬心や独占欲に駆られて兄を刺そうとするなどあろうはずがない。

元々芳佳は、兄が自分以外の女と親しくすることに複雑な感情を抱いていた。だが、それでとち狂って大好きな兄を殺そうとするとは思えなかった。

「リーネ達は大丈夫なの？」

と、ルツキーニは心配そうな表情で問う。奔放な性格故に

「やっぱり、エイラの作ったお昼に変なものが入ってたんじゃない？」

「それが、それらしきものは見つからなくて……」

ハルトマンの推測を、サーニヤが首を左右に振って否定する。彼女は食堂でエイラお

手製のツナサンドを調べたが、特に変わった食材が使われている、というわけではなかった。

「と、とにかく……まずは芳佳を探さないと、な?」

「確かに、今の芳佳を放置するのは危険だな」

引き攣り気味な笑顔でシャーリーが提案し、バルクホルンが顎に手を当てながら同意する。

二人の言う通り。正常な判断力を失い、切れ味の良い包丁を携えた扶桑ウィッチをいつまでも放置しておけない。

万が一、隊の仲間や他の基地要員に危害を加えるようなことがあれば、軍法会議沙汰になりかねない。なにより自らの手で人を傷つけたとなれば、正気に戻った芳佳はシヨックを受け、自分を強く責めるだろう。

「よし!手分けしよう!」

優人の言葉に一同は頷き、方々へ散らばった。



基地本部中庭——

5人のウィッチと1人のウィザードは、2人組みに分かれて芳佳の搜索を開始した。それぞれ優人とサーニヤ、シャーリーとルツキーニ、バルクホルンとハルトマンのペアである。

通常の兵士なら魔法力を行使すれば容易く取り押さえられるだろうが、相手はウィッチ。複数のウィッチ・ウィザードで対処する必要があるだろう。

「見つかりません……」

優人と並んで歩いていたサーニヤが、俯き加減に呟いた。

基地敷地内という限られた範囲であるにも関わらず、芳佳が見つからない。自分を探している相手、こちらから探すとなると見つからない。しかし、優人の悩みは別のところにあった。

「一番の問題は見つけた後だな。あの芳佳をどうやって正気に戻すか……」

「童話だと、王子様のキスで目を覚ましたりしますよね？」

「サーニヤ……」

優人は思わず目を点にする。サーニヤは音楽を学んでいただけあつて感受性が高いのはもちろん、とても聡明な少女である。

501ウィッチの中でも常識的かつ良識的な思考を持つ彼女だが、やはり個性的なメンバーの一員だけあつて、このように天然な一面も持ち合わせている。

自らの失言に気が付いたのか。サーニヤは頬を染めて、再び俯いてしまう。雪のように白い肌に、淡い紅が灯されている。

(キスカ……)

己の唇に右手を当て、優人は思い出し出していた。誕生日の翌日に、ウイスキーボンボンで酔っ払った妹に口付けされたことを――。

(柔らかかったなあ……つて、いやいや!)

妹のキスの感触を想起し、それに酔いしれて顔がだらしなくなるのを感じた優人は、頭を振って邪な思考を追い払った。

「うわっ!？」

その時だった。突然地面の感触が喪失し、視線が低くなる。そして、下腹部から下がやたら窮屈になり、両手が不自由になる。

「優人さん!」

「な、なんだ? 地面が沈んで……」

「落とし穴、ですよね……」

「落とし穴!?! 何で、こんなところに?」

身体の下半分が地面に埋まってしまった優人を見て、サーニヤが分析する。航空団に所属するベテラン航空歩兵は、飛行中であれば引っ掛かるはずのない落とし穴に嵌まつ

てしまったのだ。

何故基地の中庭に落とし穴が設置されているのかはわからないが、とりあえず優人は魔法力を発動させて、穴からの脱出を試みる。

「ふうん！ぬううううううう！」

身体強化魔法を行使するも、頭に出現した柴犬の耳がピクピクと揺れるばかりで穴から這い出ることには敵わない。

「ダメだあゝっ！」

「誰か呼んで来ます」

そう言つて踵を返したサーニャは、基地本部の入り口へ向かつてトトトツと駆けて行つた。

彼女が身を翻した拍子に黒色のベルトがヒラリと捲り上がり、ストッキングタイプの重ね履きズボンが優人の視界に現れる。

サーニャの後ろ姿が見えなくなるまで、優人は僅かに浮かび上がる清楚な白ズボンと形の良い小ぶりなお尻に釘付けとなつた。

「いかにいかに……」

優人は小さく頭を振る。ファラウェイランド空軍ウィッチの肢体を見せつけられたり、ワイド島で水着美女達に囲まれていたせいかな。今日は煩惱がやたらと沸き上がって

くる。

深呼吸による精神統一で心をクリーンにし、優人は再度穴からの脱出を試みた。

「やっぱり、抜けない。こんな時に芳佳に見つかったら……」

——ガサガサツ！

「——っ!?!」

突如、草木を掻き分けるような音が聞こえてきた。ハツとなった優人が顔を上げると、目の前の茂みから芳佳が姿を現していた。

「みい〜つけたあ〜♪」

兄の姿を双眸で捉えた芳佳は、口を三日月型に歪ませて獲物の追い詰めた野性動物のように優人へにじり寄ってくる。

「お兄ちゃん、探したんだよお♪会えて良かったあ♪」

芳佳の口調はやや間延びしている可愛いらしいものだった。いつもならば嬉しさのあまり優人は悶えていただろうが、今は冷たいものが背筋を走るだけだった。

「芳佳!? 待ってくれ! 話を——」

「大丈夫だよ。出来るだけ苦しめないようにするから……」

そう言うと、芳佳は身体と並行にしていた右腕を上げた。

その小さな手に握られているのは、先程優人に刃を向けていた包丁ではなく、
“No.”

2 Mk1”の名称でブリタニア軍の制式拳銃として採用されているダブルアクションの中折れ式リボルバー拳銃——『エンフィールドNo. 2』だった。

銃が嫌いで、501着任時に護身用として渡されたカールスラントのPPKすらも、すぐさまミーナに突き返していた妹が、ネウロイから人々を守るといふ目的でもなければ銃を手にとったりしない芳佳が、自力でブリタニア製の拳銃を調達していたのだ。その事実には、優人は己の目を疑う。

「ごめん、お兄ちゃん。私バカだから気が付かなかったよ。刃物だと痛いよね？大丈夫、拳銃なら頭を撃てば痛くないから。恐くないから……」

優人の正面まで来た芳佳は、エンフィールドNo. 2の銃口を兄の眉間へ向ける。

同じく優人へ向けられている彼女の瞳は、以前虚ろなままである。優人の額より嫌な冷や汗が流れ、顔の中心を伝う。

「私も後を追うから、思い出がいっぱい詰まった基地の中庭を二人のお墓にしよう」
そう言って芳佳は右手の人差し指に力を込め、引き金を絞ろうとする。

優人は死を覚悟し、来るであろう一瞬の苦痛と衝撃に備えてギュツと目を瞑った。

——ズガン！

中庭内に響き渡る銃声。しかし、優人に死も激痛も訪れなかった。

「……………あれ？」

間の抜けた声と共に優人は目を開ける。芳佳は未だ優人にて銃口を向けていたが、表情はいつもの柔らかく愛らしいものに戻っている。

優人と芳佳の間には小さな紙吹雪のようなものが多数降り注いでおり、さらに銃口からは細長い垂れ幕らしきものが飛び出ている。

「ドッキリ……大成、功……？」

扶桑語で書かれた垂れ幕の文字を呆然と読み上げると、左右の茂みからガサガサ音が生じて、同時に何かが飛び出してきた。

『や〜い！引つ掛かったあ〜っ！』

「ドッキリ大成」と書かれたパネルを持って現れたのは、司令と副司令兼戦闘隊長を除いた501部隊のウィッチーズだった。



十数分後、食堂――

「まったく、お前らは……」

左腕で頬杖着いた優人がうんざりしたようにぼやく。落とし穴から無事救助され、着替えも済ませた彼は他のウィッチーズとお茶をしていた。

ルツキーニのみが、テーブルに突つ伏す姿勢で眠りこけていた。起きている時の騒々しきとは一転し、彼女はスヤスヤと静かな寢息を立てている。

「何で、あんなことをしたんだよ」

ムスツとした不機嫌そうな表情で首をめぐらせ、仲間達を見据える。

ワイト島基地に届いたサーニヤの緊急連絡から中庭に至るまでの一連の騒動は、ここにいるウィッチ達が協力して優人に仕掛けたドツキリだったのだ。

つまりエイラ、リーネ、ペリーヌの人格豹変や芳佳のヤンデレ化はすべて演技だったということだ。

女王様化したリーネのあまりのドSっぷりについては、ドツキリのターゲットである優人はもちろん、ペリーヌからも苦情が上がっている。

気弱な性分故に、少し前まで気の強いペリーヌとは性格の相性が悪かったリーネ。もしかしたら無意識のうちに積年の怨みが出てしまったのかもしれない。

「強いて言うなら、優人へのお仕置きかなあ?」

ニヤニヤと悪意たつぷりの笑みを浮かべたハルトマンが、優人の質問に応じた。

「はあ?」

優人はわけが分からない、と言った顔をして苛立たしげな声で訊き返すと、ハルトマンの代わりにペリーヌが応えた。

「お兄さ……宮藤大尉は女性に対してだらしないところがありますでしょうか？」

「ウィッチに関しては特に、ナ♪」

タロットカード占いをやっているエイラがペリーヌの言葉を継いだ。

「言い掛かりだ！」

と、床を蹴って椅子から立ち上がった優人は、テーブルに乗り出しながら3人に反論する。

「言い掛かりでウィッチの裸を何度も見たり、おっぱいを揉んだりするのカロ？」

「うっ!？」

エイラに痛いところを突かれてしまい、優人はぐうの音も出せなくなる。エイラの隣に座っているサーニャは、誕生日の風呂場での一件を思い出し、頬を朱に染めていた。

優人が経験してきたウィッチ関係のトラブル——要するにラッキースケベ——は、ほぼすべてが不可抗力で正真正銘不慮の事故である。しかし、傍目から見ると、あまりに偶然が重なり過ぎていて本当に事故なのかは疑わしい。

「あつはははは！優人のアレは最早才能だよなあ！」

腕を頭の後ろに組んだシャーリーが、豪快な笑いを飛ばす。

つまるところ、扶桑海軍ウィザードのラッキースケベぶりが目に余るといふ理由から優人にお灸を添えてやろう、という冗談めいた口実を思いついたので、面白半分にドツ

キリを仕掛けたらしい。

501のウィッチ達らしいと言えはらしいが、そのために角丸美佐をはじめワイト島分遣隊のウィッチ達に迷惑を掛けてしまった。ミーナが知れば確実に怒るだろう。

「人の不幸を笑うな……」

そう言うのと、優人はバルクホルンとサーニヤへ順に視線を移した。

「まさか、お前達まで……」

「す、すまん。ハルトマンとリベリアンに丸め込まれてしまつて……」

「ごめんなさい」

二人は申し訳なさそうに謝罪する。そんな態度を取られては怒るに怒れない。優人はそれ以上は何も言わず、椅子の背凭れに身体を傾ける。天井を仰ぎ、一日の疲労を吐き出すかのように大きく溜め息を漏らした。

ワイト島ではあらぬ誤解からフランに、ゾウさん丸出しのアクシデントにより角丸から、それぞれ強力な右ストレートで吹っ飛ばされ、501基地ではドツキリとはいえ豹変した後輩達に振り回され、ヤンデレ化した妹に追い掛け回される。

これでは疲れない方がおかしい。出来れば今日はもう動きたくない、と優人は思う。

チラリと隣へ目をやると、ヤンデレ演技をやり遂げた妹がズズツとお茶を啜っていた。人が善過ぎて嘘を吐くことが得意ではない、それが優人の知る芳佳だった。そんな

彼女が、たかだかドツキリでハリウッド女優並みの演技力を発揮するとは——。
ウィッチとしてだけではなくこちらの方でも天才なのかも知れない。或いは、多少なりとも本気の殺意が込もっていたか——。

「……お兄ちゃん？」

兄の視線に気付いた芳佳が、優人を上目遣いに見上げて不思議そうに首を傾げる。

「芳佳、まさかと思うけど。本気で俺を殺すつもりだった？」

「ふえっ!? 何言ってるの!？」

「いや、だって……演技の時に感じた殺意が本物っぽかったから……」

「もう！ あれは演技だよ！ 私がお兄ちゃんを殺そうとするはずないじゃない！」

プリンプリンに怒った芳佳は、プイツとそっぽ向いてしまう。

「……………そうだよな。ごめん」

バカなことを言ってしまった、と優人は心の中で自嘲気味に呟く。可愛い妹が自分を殺そうとするはずなどない。

両腕を組みながら自分に背を向け続ける妹に後ろから両手を伸ばし、優人はその小さな身体をギュツツと抱き締めた。

「許してくれよ、芳佳」

「謝っても許してあげないんだから！」

芳佳はフンと鼻を鳴らし、優人の懇願を一蹴する。どうやら扶桑海軍大尉は、またしても妹の機嫌を損ねてしまったらしい。芳佳の頑固な性分を鑑みて、そう簡単に許してくれはしないだろう。

「だからごめんつてば。どうすれば許してくれる?」

優人が問うと、僅かな沈黙の後に芳佳は条件を口にした。

「じゃあ、約束して……」

「ん?」

「何があつても、今日から毎晩一緒に寝ること」

「えっ?」

優人は目を瞬かせる。妹より提示された条件は、兄にとって予想外のもの。むしろ褒美に等しいものだった。

「お兄ちゃんのお部屋が元に戻つても、どんなに忙しくて、疲れていてもだよ」

「喧嘩しても、か?」

「……………うん」

「分かつたよ」

本音を言えば、ただ甘えたいだけなのだろう。しかし、妹の条件を呑むことは兄にとつても吝かではない。

優人はすんなり承諾し、その証として芳佳の髪を優しく梳いた。

一方の芳佳は、子どもっぽく拗ねてしまったことや甘えん坊とも取れる条件を提示したことに羞恥心を感じたらしい。耳がほんのりとピンク色に染まっている。優人の位置からは見えないが、おそらく顔全体が真っ赤になっていることだろう。

自分達がいることなど完全に忘れて二人の世界に浸っている扶桑の兄妹を、ウィッツチーズは微笑ましそうに。または呆れたような目で見つめていた。

「あら？優人、帰ってたの？」

声楽家を連想させる澄んだ声が、入り口の方から聞こえて優人の耳朶に響いた。

目をやると、総司令部から戻ってきたミーナと坂本が食堂の入り口に並んで立っていた。

優人を見た後、ミーナはテーブルに集まっているウィッツチーズに視線を走らせた。

「皆さん、少し外して貰えるかしら？」

ニッコリといつも通りの柔和な笑みを浮かべ、穏やかな口調で隊員達に指示を出す。

「宮藤大尉は残って、あなたとお話があります」

「俺と？」

優人は首を傾げる。戻って早々に何の話があると言うのか。ワイト島基地を飛び出してきた件ならば、彼だけを残す意味が分からない。

芳佳を含めたウィッチーズはミーナの指示に従い、そろそろと食堂を後にした。坂本も後に続き、食堂内には優人とミーナ。そして、居眠り中のルッキーニだけが残った。

「話って何だ？」

優人は、テーブルを挟んで向かい側の椅子に腰を下ろしたミーナに訊ねる。

中佐殿は相変わらず柔らかい笑みを浮かべている。しかし、扶桑海軍大尉は上官の笑顔から何か危険なものを本能的に感じ取り、声を上擦らせていた。

「話というのは、これのことよ」

そう言つて、ミーナは三冊の雑誌をテーブルの上に並べて見せた。

「あつ？」

優人は目を見張つた。三冊の雑誌は、優人不在時に遣欧艦隊とは別の補給ルートで501基地に届けられ、家族である芳佳が本人の代わりに受け取つたものだ。

それぞれ『週刊吉原・乳特集』『豊乳倶楽部』『皇国魔女・水練着写真館』。優人が本国の友人に頼み込み、苦勞して手に入れた“お宝”である。

「これって、胸の大きな女達の写真が載っている扶桑の雑誌よね？ あら？ 引退された海軍ウィッチのグラビアまで。ずいぶんと際どいアングルですこと……」

「……………」

『皇国魔女・水練着写真館』を開きながらいたぶるように言うミーナ。優人は座位を姿勢

を正し、冷や汗をダラダラと流しながら無言を貫く。

「あなただつて年頃だもの、異性に興味を持つのは自然なことよ。けど、これの表記をよく見なさい」

ミーナは他の二冊の片方——『週刊吉原・乳特集』の表紙に人差し指を添える。指先は「成人向け」の表記を差していた。もう一冊の『豊乳倶楽部』にも同じ表記が書かれている。ミーナは扶桑語が分からないので、坂本に表記の意味を訊ね、理解していた。

つまり、三冊のうち最初の一冊は扶桑人女性の水練着姿を収めたグラビア雑誌だが、残りの二冊はヌードありの完全な成人向けということである。

「優人、あなたはまだ19歳よね？こんな女性の裸ばかりの写真集を所有していたら問題じゃないかしら？ましてや、あなたは扶桑海軍と連合軍の士官で第501統合戦闘航空団の一員なのよ？ちゃんと自覚はあるのかしら？」

「あ、いえ……その……ですね……」

目を泳がせ、優人はしどろもどろとなる。僅かな時間で冷や汗の量がかなり増していた。

「まあ、この件は明日の午前中にでもじっくり話し合います。いいですね？宮藤優人大尉」

「ほ、ホント？話し合うだけ？」

震えた声で訊く優人を冷ややかな視線で一瞥すると、ミーナは何も応えずに食堂から出ていった。

「ふわああ〜……よく寝たあ〜……」

直後にルツキーニが目を覚ます。優人がいることに気付いた彼女は眠たい目蓋を擦りつつ、彼に声を掛ける。

「んにゃ？ 優人、何でそんなに震えてるの？」

「あ、ああ。ちよつと肌寒くて……風邪引いたのかな？ あ、あはは……」



同時刻、ワイト島分遣隊基地――

「はあ〜……」

宿舎食堂では、アメリーとウイルマの二人が夕食の準備をしていた。

お玉を使って鍋のスープをかき混ぜていたアメリーが、ふと深い溜め息を漏らす。いつも楽しい表情で鼻唄混じりに料理をする彼女らしからぬ姿だ。

「どうしたの？ 溜め息なんてしちゃって」

隣で野菜を切っていたウイルマが、雑談気分でアメリーに問い掛ける。

「優人さん、帰っちゃいましたね」

と、アメリーは俯き加減に言う。ほんの数日だけの短い付き合いだったが、アメリーは優人を兄のように思っていた。一緒にいるだけで安心出来る理想的な兄だと――。

それほどまでに慕っていた人物との突然の別れ。シヨボくれるのも領ける。

「まあまあああ。今生の別れ、つてわけでもないんだし。また会えるわよ」

「そう……ですよね……」

ウイルマの言葉を聞きつつ、アメリーは優人と過ごした日々を振り返っていた。

はじめ異性に裸を見れ、見たこと。このキッチンで一緒に料理をしたこと。扶桑の料理をいくつか教えてもらったこと。淹れた紅茶を褒めてもらったこと。初めて食べた扶桑の卵焼きの味。

思い出すだけで不思議とアメリーの心し温まり、寂しさが和らいでいく。

(優人さん……えへへ……)

優人との思い出に頬を緩ませるアメリー。その横顔を、ウイルマはニヤニヤしながら見ていた。

「ふくん？」

「ウイルマさん？」

「アメリーって、優人が好きなの？」

「まったく、何であたしがこんな……」

優人が宿泊していた部屋では、1人の小柄なウィッチが悪態をついていた。フランである。

優人が飛び出していった後、彼女は角丸より彼の荷物を整理するよう命じられていた。501基地へ届けに行くのは角丸の役目だが、これは501司令であるミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐への挨拶も兼ねているらしい。

こんな雑用紛いの仕事など、ウィッチのすることでない。フラン自身はそう思ったものの、隊長に文句言うことも命令に背くことも彼女には出来ないため、彼女は大人しく指示に従っていた。

「大体、あいつは勝手なのよ！いきなりやってきて！好き放題やって！急に出て行って！ホント最悪！」

どうやら相当ご立腹のようだ。優人が置いていった鞆に衣類を詰め込みながら、フランはブツブツと呟く。

「射撃……もつと教えて欲しかったのに……」

フランの身体がフルフルと震え出した。目尻にはうつつすらと涙が浮かんでいる。

作業を中断し、動きを止めた手には洗濯仕立ての優人のシャツが握られている。フラ

ンはそれを鞆には仕舞わず、己の胸へギュツと抱き寄せた。

「バカ……優人のバカ！痴漢！変態！こんなイイ女が近くにいたんだからデートに誘うくらいしなさいよ！見る目無いんだから！」

フランはシャツを強く抱き締める。まるで、シャツが優人の身代わりであるかのように――。

「フラン、何してるの？」

背後から突然聞こえてきた声にフランはハツとなる。反射的に振り返ると、いつの間にかラウラがすぐ後ろに立っていた。

「ラ、ラウラ!? あんた何で!？」

恥ずかしいところを見られてしまい、フランは顔を真っ赤にして狼狽えた。

「私の部屋に宮藤大尉の服が間違つて来てたから持ってきた」

そう言うラウラは、綺麗に畳まれたシャツをフランに見せた。

「えっ?」

フランはラウラが持っているシャツと、自分が抱き締めていたシャツを交互に2、3度見てから恐る恐る訊ねた。

「じゃ、じゃあ……このシャツって……」

「私のだよ」

「……………」

インターミツションⅠ「もっさんの昔語り——または ウィッチとウイザードの夜」

はっはっはっ！扶桑皇国海軍の坂本美緒少佐だ！突然だが、今日は私と優人のちよつとした昔話をしよう！

やつとは、海軍航空歩兵に志願する以前からの付き合いだ。かれこれ10年になるか……。

思えば、初陣を飾った扶桑海事変以来ずっと行動を共にしてきた。一緒に過ごした年月は家族より長いかもしれないな。

初めて会ったのは私が11歳で、あいつが10歳の時だ。私は他の海軍付属小学校の生徒達と共に、北郷せ……北郷章香少佐が師範代を務めておられた舞鶴近郊の講導館道場に通っていたんだ。

8年前、海軍ウイザードを目指していた優人も仲間に加わった。出会ったばかりの頃の優人は同世代の扶桑男児と比べて小柄で華奢な体つきをしていてな。運動能力も並みか、もしくはそれ以下。

本人の前じゃ言えないが、当時は頼りないやら男が料理するなんて変わっているやら

思つたものだ。扶桑では「男性は台所に立たない」というのが一般的だからな。北郷少佐は「彼はとんでもない逸材だよ」とおっしゃっていたが、すぐには信じられなかつたよ。

だが、妹の芳佳に比べればやや劣るものの。あいつは強大な魔法力、戦闘の才が確かにあつた。特に射撃に関しては、後に加東圭子少佐……当時少尉から指導を受けたこともあつて、新兵時代から百発百中の腕前を見せつけられた。魂消たものだ。今も昔も射撃であいつに勝てる気がしないよ。北郷少佐の見込みは正しかった。

初陣を飾つた扶桑事変からここブリタニアに至るまで、優人とは数々の戦場を共にしてきた。一緒にいた時間は家族や講道館道場の仲間よりもずっと長い。お互いの長所も短所も知つた親友で、信頼して背中を預け合える戦友だ。

しかし、あいつも男だ。相手が欲しかったらしく、かつて遣欧艦隊の拠点であつた港町——リバウにいた頃から私が毎晩優人の相手をしていた。

“そつち方面”の知識に疎かつた私は、初めはよく分からなかつたが、優人がわかりやすく手解きしてくれてな。付き合ひの長いあいつが相手ということで、特に緊張したりはせずに毎晩相手をしていた。

優人は航空歩兵としてはもちろん、“こつちの方”も物凄い腕前でな。いろいろな角度から私を攻めてきたもんだ。

恥ずかしい話だが、慣れないうちは翻弄されつばなしで。私が「ダメだ！ちよつと待つてくれ優人！」と言えば「待つたは無しだ。ここまできて、やめる男なんていないさ」と返すやり取りがお約束となった。

二人で揃つて夢中になり、時間を忘れて朝まで続けてしまったことも10や20ではない。その日の軍務は、さすがにキツかった。

そのうち、リバウに駐留していた他のウィッチ達も混ざるようになった。〃こつち方面〃の経験者である竹井醇子中尉（現大尉）や雁淵孝美少尉（現中尉）はともかく、それ以外のウィッチ達は優人に翻弄され、毎夜のようにヒイヒイ言わされていたものだ。

そんな私達も、今では第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の一員として揃つてブリタニアに滞在している。扶桑皇国海軍大尉から人類連合軍少佐となつた私は基地の副司令であり、ウィッチ部隊の戦闘隊長。優人もやや遅れて扶桑海軍少尉から人類連合軍中尉を経て、大尉となった。

余談だが。遣欧艦隊司令長官——赤坂伊知郎中将の話では、ガリア解放の功績が扶桑本国でも認められ、扶桑海軍での実階級も501在籍時と同じものになるらしい。

寝食を共にしたりリバウの仲間達と別れてやってきたブリタニア基地も、もう間も無く退去することになるだろう。

現在優人は私だけでなくミーナやバルクホルン、シャーリー等の年長組。ペリーヌ、

リーネ、サーニヤ等の年少組の面々にも相手をしてもらっているらしい。

最近では優人の妹の芳佳も始めたようだが、まだまだ下手で兄の相手は務まらないよ
うだ。

私は自分でやるのはもちろんだが、戦友と愛弟子の兄妹が二人でしているのを見るの
も好きなんだ。だから、二人がする日は毎晩同席させて貰っているんだ。

あつ……ちなみに将棋の話だ。

優人「王手！」

芳佳「はっ!?! あく……また負けたあく……」

第11話「バカと天才は紙一重」

第501統合戦闘航空団において、ただ一人のナイトウィッチであるオラーシャ陸軍航空——サーニャ・V・リトヴァク中尉。通常「サーニャ」は夜間哨戒を終えると、仲間達が目を覚ます時間帯よりも少し早い夜明け頃に基地へ帰投する。

格納庫内でフリーガーハマーとストライカーユニットを片付けてから宿舎へ向かう。
「ふわあ〜……」

自室を指して歩を進めていたサーニャは、右手で口元を隠しながら欠伸を漏らす。大口を開けつつも美少女のイメージを壊さない可愛らしい欠伸だ。

上述の通り他の隊員達は隊員のミーナを含めてまだ熟睡中、起きているのは朝練が日課の坂本くらいだろう。

「う〜ん……」

既に半分眠っているサーニャは、おぼつかない足取りで宿舎内の廊下を進んでいく。やがて部屋の前に辿り着き、ガチャツと音を立ててドアを開ける。が、そこはサーニャの部屋ではなかった。

その部屋は、他の501隊員の部屋とは少し趣が異なっていた。不気味な顔の像や怪

しい本が並んだ本棚。部屋のほぼ中心には魔法陣を模したようなカーペットが敷かれ、その上に置かれたテーブルには水晶球がある。壁際には香炉、その左右にミステリアスな三叉の燭台が並んでいる。

占いの道具や黒魔術的な雰囲気醸し出している品々がそこかしこに見られ、まるで童話に登場する悪役魔女のそれであつた。これだけ特徴的な部屋の持ち主は個性派揃いの501でも一人しかいない。今にも眠つてしまいそうなサーニヤはその持ち主が眠っているベッドへ忍び寄り、そのままサツと倒れた。体重が強くのし掛かり、ベッドが大きく揺れる。

「うわっ！何ナニツ!?!」

部屋の主であるスオムス空軍少尉——エイラ・イルマタル・ユーティライネンは、突然の揺れに驚き、声を上げて飛び起きた。

「サーニヤ?」

エイラの隣では、下着姿のサーニヤがスヤスヤと寝息を立てていた。寝惚けて部屋を間違えたらしい。

「つたく、ナニ部屋間違つてンダヨオ」

一瞬面食らつたような顔をしたエイラだったが、その表情はすぐに呆れ顔へと変わり愚痴を零した。

「スウ〜……スウ〜……」

うつ伏せで顔を横に向け、サーニヤは完全に熟睡状態に入っている。

「ちえ〜、今日だけダカンナア〜」

そう言つてエイラはサーニヤに布団を掛け、ベッドから這い出る。彼女の足元には、サーニヤが脱ぎ捨てた衣類が乱雑に散らかっていた。

「うえ〜……」

エイラはチラツとサーニヤの方へ振り返ると、再び衣類に視線を移す。床に膝を着き、眠っている持ち主の代わりに服を畳み始めた。

「ホント、今日だけダカンナア〜」

と、不平な言いながらもエイラは嬉しそうな表情で服を畳んでいく。

——コンコン！

「ん？」

ふと窓の方から物音が聞こえてきた。エイラは一旦手を止め、窓へ視線を移してみる。カーテン越しにヒラヒラと手を振る人影が確認出来た。

「ナンダヨオ、朝っぱらからあ。シャーリーなのカ？それともルツキー二なのカ？」

人影を見たエイラは、シャーリーかルツキー二が朝早くから自分に悪戯しをに來たと思ひ、不機嫌そうに眉を顰める。

窓の向こうにいる何者かに一言言つてやろうと、エイラはズケズケと床を踏みつけながら窓際に近付き、ガバツと勢い良くカーテンを開いた。

「オイッ！ナンダヨ、朝っぱらから！こっちはまだ寝て……」

エイラはカーテンが開くのと同時にエイラは大声で怒鳴り散らす、途中で言葉を止めた。

「……………えっ?」

エイラは両目をパチクリさせる。てつきり悪戯好きシャーリーないしルツキーニがいると思つていたのだが、窓の向こうにいたのは見ず知らずの男性だった。

男性は梯子を使ってエイラの部屋の窓まで上がってきた。顔立ちからして坂本や宮藤兄妹と同じ扶桑人。眼鏡を掛けた優男風の中年男性で、顔には火傷の跡らしきものがある。

「……………えっ?」

カーテンが開かれるまでは笑顔で手を振つていた男性はエイラと対面した途端、呆気に取られたような表情を浮かべる。

「ウワアツ!」

「うわあああ!」

思考を停止させた状態で見つめ合う二人が揃つて叫び声を上げたのは、顔を合わせて

数秒後だった。

「ナ、ナ、ナンダヨ！オマエ！」

使い魔である黒狐の耳と尻尾を出現させ、臨戦態勢に入ったエイラは目の前に現れた不審者に詰問する。

「えっ？あ、いや……これはその！」

慌てた様子の男性は両手を顔の前で振り、なんとか弁明しようする。

その時だった。窓に掛かっていた梯子がバランスを崩し、逆向きに傾き始めたのだ。

「あっ……ちよっ！そんなあ〜！」

男性の悲痛な叫びと共に、梯子は地面へと倒れていった。思い切り背中を地面に打ち付けてしまい、かなり痛そうだ。

程無くして501基地運用群警務隊が駆けつけ、軍事基地の敷地内へ不法に侵入した扶桑人——宮藤一郎は連行されていった。



約30分後、宮藤兄妹の部屋——

元々は、芳佳のひとり部屋だったウィッチーズ宿舍の一室。暴走したウォーロックの

流れ弾で優人の部屋が半壊して以降は兄妹二人で使っている。

無論、兄妹とはいえ優人と芳佳はそれぞれ成人前の少年と思春期の少女なので、着替えはカーテンで簡単な仕切りを作った部屋の端っこで順番にする。しかし、ベッドや収納等は共同で使っている。

「ああ……可愛いなあ♪」

ベッド上で、向かい合うようにして横向きに寝ている扶桑の兄妹。その片方——兄の優人は少し前に目を覚まし、起床してからずっと妹の寝顔を眺めて表情を綻ばせていた。

一方の芳佳は、まだスウスウと可愛らしい寝息を立てて、夢の世界に浸っている。

気持ち良さそうに眠っている妹を起こすのは簡単だが、まだ起床時間まで余裕がある。それに501部隊の活躍により、ガリアはネウロイの支配から解放され、ブリタニアへの圧力も大幅に低下してる。

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』は1つの国を守り抜き、さらにもう1つの国を救ったのだ。そして、その一番手柄は、赤城に侵食していたウォーロックのコアを破壊した芳佳のもの。

それだけのことをしたんだ。多少のんびりしたところで罰は当たらないはずだ。

なにより、数日間ワイト島に出向していた優人には、久々に見る妹の寝顔があまりに

可愛いくて起こすに起こせない。シスコン兄貴は本日も妹にメロメロであった。

「んう……」

優人が右の人差し指で頬つぺたを突っついてやれば、芳佳は小さく息を漏らす。

赤ん坊の時から変わらずにマシユマロのような柔らかさを保っている妹の頬つぺ。しばらくの間、兄は夢中で突っついていた。もちろん起こさないように優しくだ。

「……そうだ」

一旦ベッドから降りた優人は、収納から一台のカメラを取り出すと、再び芳佳の横になった。シャッターを押して写真を何枚か撮っておく。

「ふふっ……」

現像した写真を見せた時の芳佳の慌てた姿を想像すると、優人は自然と笑みを零してしまふ。

ふと部屋の壁に掛かった時計に目をやると、時刻は5時50分。起床時間の6時まで、あと10分となっていた。

「先に着替えておくかな？」

そう独り言ち、優人は身体を起ここそうとした。その時だった。

「優人！芳佳！大変だ！」

バァンと勢い良くドアが開かれ、既に制服姿となっているバルクホルンが部屋に飛び

込んできた。

「お前達の御父上がつ！」



さらに約30分後、501基地運用群警務隊本部――

父親が警務隊に連行されたことは、バルクホルンによつて宮藤兄妹に知らされた。

同じベッドで仲良く眠っていた二人を見て、顔を真っ赤にしたバルクホルンが「破廉恥だ！不潔だ！不純物異性交遊だ！」と何か誤解していたようだが、それはまた別の話である。

「それで……宮藤博士はどういった御用件で当基地へ？」

椅子の背もたれに背中を預けた男性は、愛用の万年筆でコンコンと小気味良くデスクを叩きながら訊ねる。

彼の名はヘンリー・ダグラス。年齢は一郎と同じ歳か、少し下だろう。501基地警務隊の指揮官を務めるブリタニア空軍及び人類連合軍大尉である。

デスクを挟んで向かい側には、優人と一郎が警務隊員に用意された椅子に腰掛けている。既に制服に着替え、身嗜みもキチンと整えている息子と対照的に、父親の方は寝

癖で後ろ髪が跳ね、着ている黒スーツは年季が入ってヨレヨレになっている。

デスク越しに顔を突き合わせた相手から事情聴取を受ける宮藤親子の姿は、刑事の取り調べを受ける被疑者のそれだ。

「先日、入院していた病院を退院致しまして。ようやく子ども達に会えると思つたら居ても立つてもいられず——」

「父は私といも……宮藤軍曹に会うため基地を訪れたそうです」

父親の言葉を遮り、息子が代わりに説明する。その口調はやや早口で、朝から騒動を起こした父に内心苛立っていることが伺える。

「どうやら一郎は、息子や娘と会いたいあまり朝つばらから軍の基地に侵入した挙句、ちよつとした悪戯心で窓から二人に挨拶しようとしたらしい。」

そして、息子達の部屋の場所を知らない一郎はエイラの部屋にサプライズを仕掛けてしまい、結果として騒ぎを聞き付けた警務隊の面々に取り押さえられ、今に至るといわけた。

「それならば、不法侵入などなさらず正門付近にいる歩哨に声を掛けて頂きませんか……」

ダグラスは呆れと窘めを湛えた視線を一郎へ向ける。ガリアの解放が成されたとはいえ、ネウロイとの戦争は続いている。戦時下の軍事基地へ不法侵入などしてみれば、

見つかり次第即発砲もあり得るのだ。

そもそも一郎は技術者であり、軍事訓練の類は一切経験していない。決して警備の緩くない501基地に、どうやって誰にも気付かれずに侵入したのだろう。

「申し訳ありません。父には、私の方から強く言つて聞かせます」

不肖の父に代わり、息子が頭を下げる。同時に横目で父親を捉え、睨みを利かせるのも忘れない。

数々の修羅場を潜り抜けてきた人間が見せる鋭い視線と怒気を孕んだ声音は、とても妹の寝顔を眺めてニヤニヤしていた少年のものとは思えない。

「ほら、息子さんの方がしつかりされてますよ?」

「ははは、面目ない」

ダグラスが溜め息混じりにやんわりと窘める。一郎はぼつが悪そうに後頭部を掻き、乾いた笑い声を上げる。

「あの人が、優人と芳佳のパーパ?」

入口付近から室内を覗く影が3つ。ルッキーニ、シャーリー、エイラの三人だ。

「なんか、痩せつぽうちだね」

抱いていたイメージとギャップでもあったのか。一郎へ向ける目を細め、ルッキーニは訝しがる。

「そりゃ、軍属ってだけで軍人じゃないしな」

と、シャーリー。彼女の言う通り、根っからの技術屋である一郎は、軍属とはいっても正規の軍人ではない。

軍事訓練の類を受けた経験はなく、プライベートで身体を鍛えてるわけでもない。かといって痩せすぎという訳ではないが、体格の良い筋肉質な男性が多数派を占める軍で生活しているウィッチ達からすれば、かなり痩せて見えるのかもしれない。

「それにあのおじさん、優人とも、芳佳とも似てないよ?」

「優人は養子らしいからなあ。芳佳は……母親似なんじゃないか?」

かような会話を交わしつつ、ルッキニーとシャーリーは一郎の観察する続ける。

「ナンデ、『アレ』がワタシ達の基地にいるんだヨ」

サーニヤとの一時を邪魔されたエイラは優人に負けず劣らず、すごぶる機嫌が悪い。忌々しそうな視線で一郎を睨みつけ、彼を『アレ』呼ばわりする。

第一印象が最悪だったことを鑑みれば無理もないことだが、宮藤一郎は各国から『魔導エンジンの権威』、『ストライカーユニットの父』。そして『人類の大恩人』と評されている。

歴史に名を残してもおかしくない人物を『アレ』と呼ばわりするのは、宮藤理論の恩恵を受けているウィッチとしていかなものか。

「では、宮藤大尉。お父様は……」

「ええ、父の身は私がお預かりします。本当に申し訳ありませんでした」

優人はもう一度ダグラスに深々と頭を下げる。ガリア解放の英雄たる第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』。その一人である宮藤優人大尉に、二度も頭を下げられることとなったダグラスは恐縮する。

「いえいえ……あつ、そうだ。おい、博士の持ち物を……」

ダグラスがそう指示を出すと、隣に立っていた警務隊員が綺麗に畳まれた一郎のスーツの上着と財布・手帳等の小物を運んできた。しかし、その中に一つだけ優人の注意を引くものがあった。

「ちよつと！なんだよこれっ!？」

すぐさま「それ」を取り上げた優人は、一郎を問い詰める。

「それ」の正体は、なんと小型のオートマチック拳銃『ポケットモデル M1906』。その名の通りポケットに収まるほどの小型サイズで護身用拳銃のベストセラーとなりつつある自動拳銃だ。設計したのはリベリオンの著名な銃器デザイナーにしてウィッチでもあるジェーン・ブラウニー。

父のジョンナサン・ブラウニーの代から続く、ユタ州のガンズミスの家系に生まれた。ウィッチならではの視点から、多くの先進的な銃器のデザインを行ったことで有名でも

ある。

「何で銃なんて持ってんだよ!？」

「ああ。それは赤坂さんから護身用に、と渡されたんだ」

「渡された、って……父さんは使い方も分かってないんじゃないや——」

「何だって?」

息子の物言いに少しだけムツとなった一郎は、優人の手からM1906を取り上げる。

「父さんをバカにするなよ。銃の使い方くら——」

——バァン!

「おっ!？」

「うわっ!？」

「なっ!？」

「ひっ!？」

一郎の手に移った銃が突如暴発し、銃口から弾丸が飛び出す。銃弾は壁や天井にぶつかり、室内を数度跳ね回った。

優人は咄嗟にシールドを展開し、ダグラスと警務隊員は頭を抱えて姿勢を低くする。

「……………父さん」

「安全装置、忘れたな……」

父親の護身用拳銃は、その場で息子に没収された。さらに優人による入念なボディチェックの末、他にもカールスラントのM24柄付手榴弾や扶桑の短刀等が出てきたそうなのな。

◇ ◇ ◇

その後、ブリーフィングルーム――

聴取とボディチェックが終わり、彼と優人はブリーフィングルームにて芳佳やウィッツチーズの面々と合流していた。

ただし、サーニヤとエイラは夜間哨戒のシフトに入っているため、夜に備えて就寝中である。尤もサーニヤはともかく、早朝の一件で一郎を良く思っていないエイラは、夜間哨戒がなくとも顔を出さなかつただろう。

「お父さんっ!」

数日前、夢にまでみた再会を果たした父の胸元に、芳佳が今一度飛び込んだ。一郎も口元に微笑を湛え、娘に抱擁を返す。

「芳佳、元気だったか?」

「うん！お父さんは？」

「ははは！もちろん元氣だよ」

「……………」

仲睦まじい父娘のやり取りを前に、宮藤家の長男である優人は無言で眉を顰めていた。

なにやら不愉快そうな表情をしているが、父親が早朝からトラブルを持ち込み、息子の自分に恥を掻かせたとなれば不機嫌になるのも仕方ない。

だが、優人という男は妹に対する独占欲が非常に強いシスコンである。或いは、芳佳に抱き着かれている一郎に嫉妬しているのかもしれない。

「父さん。じゃれてないで、他の皆にも挨拶と謝罪を言いなよ」

横に目をやりながら言う優人につられ、一郎も左側に顔を向ける。501のウィッチ達だ、一郎と向かい合うように横一列で整列していた。

「いや、お騒がせして申し訳ないなかつた」

芳佳が退かせると、一郎は苦笑気味に謝罪し、続いて自己紹介を始めた。

「改めまして。ウィッチーズの皆さん、初めまして。私は宮藤一郎、優人と芳佳の父親で技術者をやっている者だよ」

簡潔な自己紹介を終えると、ウィッチーズの中から2人のウィッチが一步前に出て敬

礼する。

「またお会い出来て光栄です、宮藤博士。第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐です」

まず501及び当基地司令のミーナが、ウィッチーズを代表して一郎に挨拶する。

一郎とは優人が負傷した際に顔を合わせている。しかし、あの時は緊急を要したため、ゆつくり話をする事が出来なかった。

「宮藤博士、お元氣そうでなによりです！」

ミーナに続いて、副司令兼戦闘隊長の坂本も挨拶をする。彼女もミーナもストライカーユニットの開発者に心からの笑顔で応対した。

軍人でありながら代々音楽家を輩出した家系ゆえ、ミーナは気品溢れて物腰も優雅で柔らかい。対して、武人肌の坂本は気さくで豪放磊落、竹を割ったようなさっぱりした性格をしている。

柔和な笑顔が魅力のミーナと、サバサバとした笑顔が印象な坂本。本人達は気付いていないかもしれないが、それぞれの笑顔は過去何十人ものウィッチャーやウィザード、その他の将兵達を魅了してきたのだ。

「ミーナ中佐に坂本少佐。いつも子ども達がお世話になっているようだね、ありがとう」
「そんな、助けて貰っているのはむしろ私達の方で……」

軽く頭を下げ、一郎は礼を述べる。後の世に名を残すであろう偉大な人物が見せた裏表のない純粋な謝意。ミーナは思わず恐縮する。

坂本は何も言わなかったが、フツと口元に笑みを湛えて「まったく」と心中でミーナに同意していた。

「君達が、雷鳴轟く第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』のメンバーだね？」

一郎が他のウィッチへ視線を走らせると、まずハルトマンが声を上げた。

「どおもどおも♪」

「おい、ハルトマン。ちゃんと挨拶せんか」

気の抜けた挨拶をするハルトマンを、すかさずバルクホルンが叱りつける。

「申し訳ありません、宮藤博士。私はカールスラント空軍大尉ゲルトルート・バルクホルン大尉。こちらはエーリカ・ハルトマン中尉」

戦友の非礼を詫びつつ、バルクホルンは自分達二人の自己紹介を済ませる。

「バルクホルン大尉とハルトマン中尉だね。501のWエースにお会い出来るなんて、光栄だよ」

「そ、そんなっ?! 滅相ありません!」

ニツコリと穏やかな微笑みを見せる一郎。その笑顔が眩しく感じ、バルクホルンの心

臟がドキリと高鳴った。

「わ、わ、私こそ！ ストライカーユニットの父と名高い宮藤博士にお会い出来て……こ、光栄でしゅ！」

「あ、トウルーデ噛んだ」

「うるさいっ!!」

客人の前だというのに、ついついその感じでハルトマンを怒鳴ってしまう。

自分が醜態を晒してしまったことにすぐ気が付いたバルクホルンは羞恥心から頬を紅潮させ、「か、重ね重ね失礼しました」と僅かに目を伏せる。

「まったく、騒々しいですわね」

と、呆れた様子の子のペリーヌが溜め息を漏らす。Wエースを横目で見据えつつ、挨拶をするため一郎の正面へ移動する。

「初めまして宮藤博士。私は自由ガリア空軍中尉、ペリーヌ・クロステルマンと申します」

制服の裾を摘まみ、恭しい所作でお辞儀をする。俗人がやつても滑稽なだけだが、彼女がやると絵になる仕草だ。

ウィッチとしての才以上に、高貴な血を受け継ぐ者だけにある気高さと気品がペリーヌには備わっている。

「名前は以前から存じ上げておりましたわ。こうしてお会い出来るなんて、夢のようですよわ」

「僕も知ってるよ。パ・ド・カレーを治める貴族、クロステルマン家の令嬢。噂通りの美人さんだ」

「い、いえ。そんな……」

美人と言われ、ペリーヌは恐縮したように白い頬をほんのりと赤く染める。

堅物なほど生真面目なバルクホルンと高飛車なところがあるペリーヌ。早くも二人の心を掴んでしまうとは、ひよつとすると優人の人たらしっぷりは一郎の影響なのかもしれない。

「じい……」

「ん？」

ふと低い位置から視線を感じて、一郎は目を向けてみる。目線の先では、ルツキーニが一郎のことを上目遣いに注視していた。

「おや？お嬢さん、僕の顔に何かついてるのかな？」

「その傷どしたの？」

「ああ、これか……」

ルツキーニが顔の火傷を指差して訊ねると、一郎はハハハと乾いた笑い声を上げなが

ら応じる。

「爆発事故で火傷してしまつてね」

実際のところ爆発は事故などではなく、かつて一郎の助手を務めた扶桑の技術者であり、ウォーロックの開発者でもある石威紫郎が引き起こしたものだ。

ウォーロックの先代機『イリス』及びネウロイに関する研究資料とコアを持ち出すために仕掛けられた人為的な爆発だったのだ。

「ふ〜ん……」

「歴戦の兵士みたいでカッコいいだろう?」

「ううん、変」

「あれ?」

褐色美少女のストレート過ぎる物言いに、思わず一郎はずっこけそうになる。

「あつはははは! そう言うなよ、ルッキニー。男前でいいじゃんか」

豪快な笑い声と共に、シャーリーが会話に割つて入つた。

「扶桑じゃ、〃傷は男の勲章〃……なんですよね?」

「君は?」

「あたしは、リベリオン陸軍大尉のシャーロット・エルウィン・イエーガーです。こつちはロマーニヤ空軍少尉のフランチェスカ・ルッキニー」

ルッキーニの頭をポンポンと軽く撫でつつ、シャーリーは二人分の自己紹介をする。

「ボンネビル・ソルトフラッツで世界記録を樹立したかの『グイン・オブ・スピード』まで……さすがに501は有名人揃いのようだね」

「宮藤博士こそ、世界的有名人じゃないですか」

「いやいや、僕はそれほどの者じゃないよ」

と、謙遜する一郎は、然り気無くシャーリーに訊ねた。

「今はストライカーユニットでの新記録を目指しているのかな？」

「はい、改造したP-51Dで音速突破を目指しています」

「ウィッチ自らストライカーのチューニングをするのか？」

「昔から機械いじりが好きで……」

周囲を置き去りにして、話を弾ませる一郎とシャーリー。技術者と航空ウィッチという立場の違いあれど、機械への造詣が深いという共通点を持つ二人はとても気が合うようだ。

自らの挑戦をバイクの世界記録樹立で終わらせず、空でも最速を目指すシャーリーと、新型の魔導エンジンやストライカーユニットの開発に情熱を燃やす一郎。

何かに挑戦し続ける者同士で通じるものがあるのかもしれない。

「芳佳ちゃんのお父さん、素敵な人だね」

501のウィッチー1人1人に対し、紳士的に接する一郎の姿を見つめながらリーネが言う。

「えへへ♪ありがとう、リーネちゃん」

芳佳は照れ臭そうにはにかむ。父のことを親友に褒められるのは中々にくすぐったいが、それでも彼女の笑顔は誇らしげだった。

「そして……君がリネット・ピシヨップ軍曹だね？」

シャーリーとの会話が一区切りついたところで、一郎はリーネに声を掛けた。

「ひゃっ、ひゃい!？」

リーネは軽く肩を跳ね上げ、裏返った声で応じる。突然話し掛けられて驚いたのだから。

「この基地で芳佳の最初の友だちになってくれたみたいだね？本当にありがとう」

一郎はリーネの前まで歩み出ると、彼女の両手を握った。

「いえ、そんな……」

「コラッ！どさくさに紛れて触るなよ」

優人がすぐさま二人の間に割り込み、一郎をリーネから退かせる。

「なんだ優人。父さんはただ彼女に礼をだな」

「初対面の女の子に馴れ馴れしいだよ。リーネが困ってるじゃないか。女性には節度を

持つて接しなさい、つて母さんも言つてたろ？」

「はいはい。優人、その辺で……」

普段より少しキツめな口調で父を叱責する優人を、ミーナが手を叩きながら宥める。さらに一郎と宮藤兄妹にある提案した。

「せっかくお父様がいらしたんですから……今日は親子3人水入らずで過ごしてみてもどうかしら？」

「それはありがたい。子ども達とゆっくり話がしたいと思つていたんだ。どうだお前達？」

「悪いけど、俺は今日届く新型ストライカーの試運転があるから……」

欣喜雀躍とする父親の誘いを、優人はやんわりと断る。

「ごめん、お父さん」

続いて、顔の前で拝み手を作った芳佳が謝罪する。

「今日はリーネちゃんと近くの街まで買い物に行くんだ」

「あ、ああ……そうか。それじゃ、仕方ないな」

「博士」

子ども達に誘いを断られて悄然と応じる一郎に、今度は坂本が声を掛ける。一郎が振り返ると、彼女はなにやら神妙な表情をしていた。

「お話があります。少し、お時間よろしいでしょうか？」

第12話「父の新たな決意」

第501統合戦闘航空団基地ウィッチ宿舎・ミーティングルーム――

ウィッチーズを解散させた後。ミーナ、坂本、一郎の3人は基地本部のブリーフィングルームから宿舎内のミーティングルームへ移動していた。

本来ウィッチ宿舎は男子禁制。ウィザードである優人以外の男性の立ち入りは基本的に禁止している。

規則を曲げて、ウィッチ達の憩いの場でもあるミーティングルームに一郎を迎え入れたのは、まだ退院して日が浅い彼になるだけ負担をかけまい、という坂本やミーナの配慮だ。

501の正式な解散命令が下り、扶桑へ帰国するまでは基地の男性棟に部屋が用意され、宮藤兄妹を含むウィッチーズとの共同生活も許可された。

以前のミーナなら、過去の――幼馴染みであると同時に想い人でもあったクルト・フラツハフェルトをダイナモ作戦で失った――一件から、隊のウィッチ達と一郎が必要以上に関わることを良く思わなかっただろう。しかし、亡きクルトから贈られた深紅のドレスを身に纏い、ウィッチーズや他の基地要員、杉田大佐を筆頭とする空母赤城の乗員

達へ歌声を披露したあの日を境に、彼女の心境にも変化が訪れた。

ウィッチとの接触に関する規則は大幅に緩和され、世間話やお菓子の差し入れ程度ならば許されるようになっていた。

日頃からストライカーユニットの整備等で世話になっている基地兵站群戦闘脚整備中隊。彼らをはじめとする基地の男性陣へ、お礼のおはぎが渡せるようになった芳佳は欣喜雀躍としていたが、一方の優人は「妹に悪い虫がついてしまうのではないか」と気が気ではない。

「よっ(っ)いしょ……」

ミーティングルームに通された一郎。親父臭い独り言を呟き、部屋に2つあるソファアの片方に腰を下ろす。

彼は研究所の爆発に巻き込まれ以来、5年もの間昏睡状態に陥っていた。つい最近まで病院のベッドに横たわっていたため、以前と比べて体力が随分と落ちている。身体を元に戻すには、まだまだリハビリが必要なようだ。

「ぶっぶっ」

茶托に乗せられた湯呑み茶碗が、目の前のテーブルに置かれる。ミーナが急須を使って扶桑茶を淹れてくれたのだ。

「ありがとう」

軽く会釈し、一郎は礼を述べる。さつそく撫子の花が描かれた湯呑み茶碗を持ち上げ、己の口元まで運んだ。

茶葉の芳醇な香りが湯気と共に立ち上り、一郎の鼻腔を擽る。口に含めば、扶桑茶特有の心地好い渋味が舌から伝わった。

「うん、美味しい。さすが美人に淹れてもらったお茶は一味違うよ」

「ふふ♪宮藤博士は、お上手なんですから♪」

ミーナは口元に手を当て、クスクスと小さな笑声を立てた。美人と言われて満更でもなさそうだ。

一郎は優れた技術者であることは間違いないが、反面上手いお世辞を言えるような気の利いた性格でない。美人と言ったのは社交辞令ではなく、彼の本心だ。だが、世辞であらうとなかろうと異性から容姿を褒められて悪い気はしない。

実際、ミーナは見目麗しい容姿の持ち主が大部分を占めるウィッチの例に漏れず、かなりの美女だ。ドレス姿でステージに立てば、その美しい容貌と歌声で大勢の観客達を魅了し、蕩けさせることだろう。

「宮藤博士」

一郎と同じく、ミーナの淹れたお茶に舌鼓を打っていた坂本が神妙な面持ちで口を開いた。茶托に湯呑み茶碗を戻し、斜め向かいのソファから宮藤理論の提唱者を見据え

る。

坂本が口火を切ったのを皮切りに、ミーナの表情もウィッチーズの馴染み深い柔和な笑顔からやや曇り気味なものへと変化する。

「単刀直入にお訊き致します。何故ネウロイの研究を、イリスの開発を行ったのですか？」

（やっぱり、その話が……）

一郎の表情が自然と強張った。坂本が訊きたいのは、かつて一郎が零式艦上戦闘脚に次いで進行していた試作新兵器「イリス」についてだ。

ブリタニアのストライカーユニット協同研究所で極秘裏に行われていたネウロイのテクノロジーを研究・利用した、ストライカーユニットとはまったく違った新兵器の開発。一郎は責任者として開発計画に携わっていた。

魔導エンジンを核とした対ネウロイ戦の要であるストライカーユニットの開発者でありながら、何故ネウロイの技術を用いたイリスまで造り上げたのか。坂本はどうしてもそれが知りたかった。

また一郎も、遅かれ早かれイリスの件について息子や娘、501のウィッチ達から訊かれるであろうことは予想していた。具体的にどんな質問をされるかも想像出来るし、責めや追及も覚悟している。しかし、いざ切り出されると、どうしても尻込みしてしま

う。だが黙っているわけにもいかない。

「ふうく……」

扶桑茶を飲み干した一郎は、のんびりとした所作で湯呑み茶碗を茶托に置いた。長い溜め息の後、ゆっくりと話を切り出した。

「君達は、イリスの一件に関してどこまで知ってる?」

「おそらく、全てかと……」

ミーナが重々しく応じる。優人を覗いた501メンバーの中で、最初にイリスの存在を知ったのはミーナだった。

反ウィッチ派の急先鋒であり、前ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官——ブリタニア空軍におけるウィッチ隊総監——でもあったトレヴァー・マロニー大將。彼と彼の一派から押収した資料を調べるうちに、ミーナは全てを知った。ウォーロックの先代機に当たり、同じくコアを動力とした兵器——イリスの存在。開発に至った経緯、事の顛末。

特に暴走状態に陥ったイリスよる、一方的なウィッチの虐殺。当時の開発首脳陣による事実の隠蔽・改竄。イリスの無差別攻撃から唯一生き残った優人に敷かれた箝口令等は、ミーナにネウロイの恐ろしさと軍上層部の悪辣さを再認識させるものであった。

「……魔導エンジンとは別由来の兵器を開発してくれ。軍からその依頼が来たのは、十二試艦上戦闘脚開発中のことだった」

ソファアの背凭れに身体を預けた一郎が、ミーティングルームの高い天井を仰ぎながら話を続ける。当事者の口から真実を訊きたかった坂本とミーナは、真剣な面持ちで一郎の語りに耳を傾ける。

「初めは驚いたし、迷ったよ。当時の世界水準を遥かに上回る性能の新型ストライカーユニットと、人数の少ないウィッチ・ウィザードの量産可能な代替品として機能する新兵器の開発を同時に進行するなんて、とてもじゃないけど不可能だった」

「ウィッチやウィザードの……代替品、ですか？」

坂本が訝しそうに目を細める。確認するような彼女の問いに、一郎は深く頷くと自身の推測を述べた。

「おそらくは、扶桑海軍内で航空歩兵不要論を掲げる派閥によるものだろう」

航空歩兵不要論。簡単に言えば、ストライカーユニットを装備して戦うウィッチ・ウィザードの存在を無用視、軽視する理論である。扶桑皇国海軍における航空歩兵不要論は1933年頃から芽生え始め、1935〜36年にピークを迎えていた。

第一次ネウロイ大戦以来、扶桑では長らく対ネウロイ戦がなかったことやウィッチやウィザードが皆年端もいかなない少年少女だったこともあり、主に大本営や大艦巨砲主義者等から支持され、山本五十六扶桑海軍中将（当時）をはじめとする航空歩兵主兵論者等と対立していた。

扶桑海事変の戦訓や一郎の開発した零式艦上戦闘機の登場により航空歩兵不要論は次第に薄れていった。しかし、年若いウィッチ・ウィザードの活躍が面白くないのか。一部の将兵達は未だに航空歩兵不要論を強く主張している。

「まあ、その二つの難題もなんとかクリア出来ただけだね。前者は君と優人の協力で、後者は石威博士が持つてきたコアのおかげで……」

「博士は何故ネウロイの技術を使つてまでイリスを？」

坂本が怒気を孕んだ声音で問い質す。彼女の脳裏には、かつて自分達ウィッチを「小娘」と嘲笑つた大本営海軍部——扶桑海事変時の扶桑皇国海軍軍令部——の将官達の姿が浮かび上がつていた。

「まさか、不要論者のように我々を軽視して——」

「違う！」

一郎は即座に否定する。対する坂本は床を蹴つて、憤然とソファから立ち上がった。

「では何故あのようなものを!?!私や優人の、航空歩兵の力を信じ切れなかったとでも——」

「坂本少佐!落ち着きなさい!」

感情的になつた坂本をミーナが声と視線で制する。上目遣いに自分を見据える瞳と

叱責に氣勢を削がれたらしい。坂本は一郎へ険しい視線を投げつつ、再びソファーに腰を下ろす。

「優人にも、同じようなことを言われたよ」

口元に苦笑を湛えると、一郎はイリス開発に携わった理由を語り始めた。

「僕には魔法の力なんてない。軍人として共に戦うことも出来ない。だからせめて、より優れた性能を持つストライカーユニットを開発して、僕なりのやり方で君らの力になりたかった。小さな身体を奮い起たせてネウロイと戦う君達を守りたかった……」

一郎は両手を膝の上で組んで、そこへ視線を落とす。

「扶桑海事変にヒスパニア戦役。僕の提唱した理論を採用したストライカーユニットを履いて、多くのウィッチ・ウィザードがネウロイと戦った」

「宮藤博士のおかげで、私達はネウロイに対抗する術を得ることが出来ましたわ」

と、ミーナ。坂本も心の中で彼女に同意していた。欧州へ渡って以来、来る日も来る日も研究資料と機材を山のように積み上げ、人類側の進歩に合わせて成長するネウロイを倒す為の新たな魔法の筈——ストライカーユニットを完成させる。

そのことだけを考えて、研究に研究を重ね、寝食を忘れ、愛する家族と過ごす時間と幸せをすべてストライカーユニットに注ぎ込む。その執念が、他の技術者を凌駕して宮藤理論を完成させるに至ったことは誰もが理解していた。

もし一郎がいなかったら、新理論を採用したストライカーユニットの開発が遅れていたら、そもそも開発されなかったら、扶桑や欧州の国々は国民諸共世界から姿を消していたことだろう。

「最初は誇らしかったさ。僕が手塩にかけたストライカーを纏い、扶桑のウィッチ達が、ウィザード達、航空歩兵に志願した倅がネウロイの恐怖から人々を守る為戦っていた扶桑海軍のニューズを聞く度に嬉しくなった……」

そこまで言つて、一郎は組んだ手を強く握り締めた。

「だが、死者は出た。まだ二十歳にもならないような子ども達が、未来ある少年少女が大勢……」

ウィッチと極少数のウィザードからなる航空歩ないし装甲歩兵は、稼働や損耗が激しいながらも他の兵科と比べて戦死者の数は少ない。しかし、無いわけではない。今日に至るまで、多くの少年少女が若い命を散らしている。

アジアで扶桑海軍、欧州でヒスパニア戦役が勃発した1930年代後半は、まだ対ネウロイ戦における有効な戦術が殆んど確立していなかった。加えて、扶桑皇国は地理的な要因から怪異との遭遇は極めて稀であり、扶桑皇国陸海軍のウィッチ・ウィザードはベテランから新兵に至るまでネウロイとの戦闘経験が無かった。

これらの事情が大きなマイナスとなり、多くの航空・装甲歩兵が戦いで傷付き、倒れ、

死んでいった。

ネウロイさえ現れなければ、戦争さえ無ければ、軍に入隊さえしななければ、勉強にスポーツに恋と平凡でありふれてはいるが、それでいて幸せな日々を謳歌していたはずの少年少女が、消耗品のように戦地に送られては散華していった。

「いつしか恐くなつたんだ。もし航空歩兵に志願した息子が、優人が戦死してしまつたら……もし皇国がウィッチの徴兵に踏み切つて、芳佳まで戦地に送られてしまつたら、つて……それと同時に他の親御さん達も同じ想いしてるはずだ、とも思つたんだ……」

「……宮藤博士は、ウィッチやウィザードを戦場から遠避けるためにネウロイの研究を、イリスの開発を引き受けた、と?」

ミーナが問い掛けると、一郎は肩を竦めた。

「そう言えば聞こえはいいけどね。一番の理由は誘惑に逆らえなかつたからさ」「誘惑?」

一郎の言葉を鸚鵡返ししつつ、坂本は怪訝そうに眉を顰める。

「我々にとつてまつたく未知の存在の、ネウロイの技術が石威博士によつて研究所に持ち込まれ、自分の目の前にある。技術者として、研究者として。人類より遙かに進んだテクノロジをすべて知り尽くしたいという想いがあつた」

一郎はブリタニアに集められた技術者の中でも、並み外れた探究心と研究意欲の持ち主であった。

人類が持ち得ない未知のテクノロジーに心を奪われてしまった当時の彼には、ウィッチもウィザードも親ウィッチも反ウィッチも関係なかった。

同じくネウロイの持つテクノロジーの魅力に取り憑かれた石威紫郎との違いは、ギリギリのところではイリスは危険性に気付いたことだろう。

「その結果、手塩に掛けて造り上げたイリスはいとも容易く暴走。最愛の息子を危険に晒し、大勢のウィッチ達を死に追いやり、負の遺産はウォーロックという形で後の世に引き継がれた」

「……………」

「子ども達がウィッチとして、ウィザードとして人々を守るために戦ったいたというのに。父親である僕は……………」

一郎の言葉が途切れる。顔を俯かせ、ワナワナと肩を震わせていた。慚愧の念に駆られていたのだろう。

「……………」

自らの行いを恥じる一郎の姿を、坂本は無言のまま射るような眼で見つめていた。彼女の心境は複雑だった。

ウィッチ・ウイザードの両脚を異空間に収納する新理論——所謂、宮藤理論を提唱。それを採用した新式ストライカーユニットの開発に成功した一郎は、それ以降、魔導エンジンジンの権威“または、ストライカーユニットの父”と呼ばれるようになっていた。

宮藤理論の恩恵を受けている坂本にとって、軍に身を置く全ての航空・装甲歩兵にとつて、そして彼女達に守られる世界中の人々にとつて、宮藤一郎は恩人と言つても差し支えない存在だ。

そんな彼がストライカーユニットの研究所で秘密裏にネウロイの研究を行つていたこと。未知のテクノロジーに対する誘惑に負け、試作であるイリスを開発したことはどうしても許せなかった。

しかし、それが軍の命令でもあったことや、息子や娘・魔法力を有した10代の少年少女達を死と隣合わせの戦場から遠避けたい、という想いが一郎には少なからずあったこと。

なにより、一郎の素晴らしい人柄をよく理解している坂本に、彼を責めることが出来なかつた。

「悪魔の研究を行ったこと、そのせいで10名のウィッチが命を落としたり」

沈黙破るように、一郎が再び語り始めた。

「その罪は償わなくてはならない」

「まさか、技術畑から手を引かれるおつもりですか……」

ミーナが問い掛ける。一郎は顔を伏せたまま首を横に振った。

「それも考えた。だが、それでは逃げていようで……償いにはならない」

「ならば、どうするおつもりですか？」

と、今度は坂本が訊ねる。彼女らしからぬ刺々しい口調だった。一郎はゆっくりと顔を上げ、坂本と視線を交わしながら答えた。

「今、赤坂さんを通して『宮菱重工業』への復帰を申し出ているところなんだ」

かつて一郎が務めていた宮菱重工業。ストライカーユニット、航空機、艦艇、車輛等々。多くの兵器を製造している扶桑皇国の中心的な総合兵器メーカーだ。

武田家の末裔と称する竹田信太郎が設立した会社であり、創設当時は『竹田商会』という社名で海運業を中心としていた。商会は次第に多角経営化を進め、その一環として造船所を保有し、『竹田造船』となる。その後、造船部門以外にも航空機部門などが作られ、『竹田重工業』となった。

ストライカーユニット製造が主要産業の一つに拡大すると、社名の宮藤の「宮」と家紋の四つ割菱の「菱」を組み合わせ、宮藤重工業に改名した。

この改名については、表向き宮藤理論を生み出した一郎を設計主任として雇用していたため、彼に敬意を表してのことだと説明している。だが他の国内メーカーからは、宮

藤博士の名前を有効活用して会社の宣伝を行ったと見られている。

生産しているストライカーユニットは、扶桑で初めて宮藤理論を採用した九六式艦上戦闘脚。本大戦初期より扶桑海軍の主力ストライカーとなつた零式艦上戦闘脚が有名である。

また、九九式艦上戦闘脚や零式艦上戦闘脚からフィードバックして開発した最新鋭の零式艦上戦闘機等。一般戦闘機の開発・生産も積極的に行っている。

「さつきも言ったが、僕に出来るのは魔導エンジンやストライカーを造ることだけ。ならば、やはり優れた機体を造り上げることが、僕なりの償いだと思うんだ……」

曇っていた一郎の表情に光が射す。自己満足かもしれない。許されないかもしれない。それでも出来る限りのことをやる。

成人前の息子が、中学生の娘が、世界中のウィッチ・ウィザードが戦っているんだ。大人の自分が立ち止まるわけにはいかない。一郎はそう思っていた。

「そうですか……」

と、ミーナは納得したように口元を綻ばせる。坂本もまたサバけた笑顔をしている。

どうやら、第501統合戦闘航空団の司令・副司令は、宮藤一郎という男の覚悟を理解し、尊重したようだ。

「君達と話せて良かったよ。さて……」

世界的エーススイッチ二人の笑顔を交互に見やると、一郎はソファから立ち上がった。

「行くかな」

「どちらへ？」

ミーナの質問に、一郎は口角を吊り上げて答えた。

「ちよつと、息子のところまでね……」

◇ ◇ ◇

同時刻、501基地格納庫――

第501統合戦闘航空団基地の格納庫内に、見慣れぬストライカーユニットが運び込まれていた。

基地に配備されているどの機材とも型の異なっているそのストライカーユニットは、零式艦上戦闘脚に代わる扶桑皇国海軍の主力機――紫電二一型。通称『紫電改』である。

発進ユニットに固定された機体の側面には、既に国籍マークとパーソナルマークとしてライフル弾を啜えた柴犬が記入されており、当基地に勤務している人間ならば一目で持ち主が誰なのか理解できる。

「やれやれ、今頃来たか」

扶桑皇国海軍大尉——宮藤優人は、待ち望んでいた新型機の遅すぎる到着に肩を竦めた。

本来、この紫電改は今月中旬に実施されるガリア反抗作戦に合わせて支給されるはずだった。しかし、マロニー一派によるストライクウィッチーズへの介入及びマロニー元大将麾下のウォーロック隊による反抗作戦の前倒しにウォーロックの暴走。そして、501によって怪我の功名的にガリア解放が成されたため、せつかくの新型機も活躍の機会が無くなってしまった。

「お〜！そいつがお前の新しいユニットかあ？」

ふと耳朶を打った快活な声に振り返ると、水着姿のシャーリーとルツキーニ。そんな2人を呆れたように横目で見ているバルクホルンが立っていた。

シャーリーは優人の脇を通り過ぎると、戦友の新たな愛機の前で前屈みになる。新品同然の輝きを放つ紫電改を舐め回すように見て、嬉しそうな声を発する。

「へえ〜、中々良さそうじゃん♪」

「扶桑の新しいユニット？」

「艦上機ではないようだが？」

シャーリーの隣に来たルツキーニとバルクホルンもまた、興味津々と言った感じに紫

電改を見る。

バルクホルンとシャーリーの見立て通り。紫電改は零式と異なり艦上戦闘脚ではない。また、既に一世代前のユニットとなった零式と比較して魔導エンジン出力、速度、急降下性能、防御力が向上し、欧州で主流となっている一撃離脱戦法に適したユニットとなっている。

「残念ながら、もう出番は無さそうだけど……って言うか。何だ、その格好は？」

シャーリーが歩を進める度にブルンと揺れるたわわな胸に目を奪われつつ、優人は彼女とルツキーニの水着姿に突っ込みを入れる。

「いやあ、やること無くて暇だからさあ。滑走路の脇で肌でも焼こうと思ってさ♪」

「……嘆かわしい」

ボソリと呟くバルクホルン。生真面目な彼女は、肌色の面積が多い格好で基地内を彷徨くことが許せないらしい。

「優人はこれから試運転か？」

と、優人へ向き直ったシャーリーが訊ねる。

「ああ、せっかくの新型だし。慣らし運転くらいはしておこうと思って……」

「ふ〜ん♪」

シャーリーは目を細め、ニヒツと悪戯な笑みを浮かべた。

「どうせならさ。模擬戦しない？あたしと……」

「今から？」

「最近、お前とは勝負してなかったろ？」

「そう言えばそうだな」

このところ。優人はデスクワーク、シャーリーはストライカーの整備で訓練時間が合
わなかった。久しぶりに手合わせするというのも悪くない。

「やるか？」

「ああ。けど、その前に……」

「……何だ？」

「目のやり場に困るから、服着てくれ……」

優人は気まずそうにシャーリーから視線を外す。

「お？あつはははは！わかったよ、ちよつと待つてな」

そう言うのと、シャーリーは制服を取りに宿舎へ駆け足で引き返していった。

第13話 「宮藤博士の実験」

501のウィッチ達が訓練場としている基地近隣の丘陵地帯上空を、4人の航空歩兵が突き進んでいた。連合軍に参加している各国軍より、501部隊に派遣されているウィッチとウィザードだ。

それぞれ型も国籍マークも異なるストライカーユニットを装備し、青々と緑の生い茂る地表に己の影を映しながら、高度2000m程の低空を飛行している。

「あたしから逃げ切れるなんて思うなよお？」

「さすがに速いな……」

先行する2つのシルエツトが、インカムを通じて言葉を交わす。

1人は扶桑皇国海軍遣欧艦隊の宮藤優人大尉。零式艦上戦闘脚二二型甲に代わる新たな愛機——紫電二一型。通称“紫電改”を、その身に纏っている。

もう1人はリベリオン陸軍第8航空軍のシャードット・エルウィン・イエーガー大尉。自らが改造したP-51Dを駆り、前方の優人へ追い縋っている。二人は一对一の模範格闘戦の真つ最中だった。

それぞれ扶桑の九九式二号二型改13mm機関銃とリベリオンのBARに形状が酷

似したオレンジ色の銃を手にしている。これは訓練で使用される模擬銃で、実弾ではなくオレンジ色のペイント弾が装填されている。

隊員達が普段愛用している銃にわざわざ似せているのは、可能な限り実戦に近い感覚で模擬戦に臨めるようにするためだろうか。

「いつけええええ〜っ！シャーリーー！」

「優人！後ろを取られているぞ、しつかりせんかつー！」

シャーリーーに対するルツキーニの声援と、優人を叱責するバルクホルンの怒号がインカム越しに伝わる。

二人もストラライカーを履き、模擬格闘戦を展開する優人達の後に続くようにして飛行しているが、模擬銃は装備していない。

あくまで優人とシャーリーーの一騎討ちであり、彼女達は模擬戦には参加せず、観戦と審判を担当していた。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよー！」

インカムを着けた側の鼓膜がビリビリと痺れる感覚に襲われ、優人は苦悶に顔を歪める。そうしている間も、シャーリーーはどんどん距離を詰めてくる。

航空歩兵の経験で言えば、航空ウィッチになつて1年程のシャーリーーより優人の方が遙かに上だ。しかし、彼がまだ慣らし運転の済んでいない新機種なのに対して、シャ

リーは使い慣れている上に、彼女自身が自分に合わせて日々改良を施しているP-51 D。さらに、優人との経験差をカバーするだけのウィッチとしての才能がシャーリーにはある。

この勝負、傍目から見れば明らかにシャーリーの方に分がある。

「頂くよ!」

シャーリーは模擬銃を構え、照準を優人に合わせる。彼女は自分の勝利を確信していたが、一つ大切なことを忘れていた。

ほんの数日前。まさにこの場所で、同じ条件の模擬戦を行った際に、優人と同じ扶桑出身の航空歩兵から手痛い反撃を受けたことを……。

「優人!」

「心配すんな!」

自分の身を案じるバルクホルンの叫び声に、優人はすぐさま応じる。

「新しい機体に慣れていないことを言い訳にしない、よっ!」

「へっ!?!」

優人が言い終えた、その瞬間。前方を飛んでいた彼の姿がシャーリーの視界から消えた。

「なん——ッ!?!」

突然の出来事にシャーリーは「何で？」と言い掛け、ハツとなつて気付く。これは「左捻り込み」だ、と……。

旋回しつつ上昇した優人は、シャーリーの背後に回り込むと透かさず狙点を定め、トリガーを絞つた。

「もらつた！」

「うおっ!？」

優人の模擬銃から迸り出た数発のペイント弾が、シャーリーのユニットをオレンジ色に染め上げる。

それとほぼ同じタイミングで、審判役のバルクホルンがホイッスルを鳴らした。

「勝者、優人！」

「あちやく……やられたあ……まさか、左捻り込みでくるなんて……」

撃墜判定を受けたシャーリーは、「油断したあ」と言つた感じに顔を左手で抑え、少々オーバーリアクションである。

「左捻り込み」は扶桑のゼロ・ファイターが得意とする高等テクニクで、501では坂本が訓練等でよく披露している。以前芳佳が、模擬戦でシャーリーとルツキーニを相手にした際に見よう見まねで決めたことがあつた。

シャーリーとて、優人がゼロ・ファイターだということを失念していたわけではない。

零式ならいざ知らず、まさか機種転換したての紫電改で仕掛けてくるとは思わなかった。

それにしても、さすが大ベテランと言ったところか。優人の左捻り込みは不恰好だった芳佳のものとは違って、かなり洗練されている。

「経験の差ってやつかな？」

「そりゃ俺だって、親の七光りやコネで501にいるわけじゃないからな」

シャーリーに追い付いた優人が得意気に言うのと、バルクホルンとルツキーニがストライカーのエンジン響かせながら近付いてきた。

「油断したな、リベリアン」

「ほえく……やっぱ優人って強いんだねえ。射撃もアタシより上手いし」

と、感心したように言うルツキーニ。501で射撃能力と言えば、見越し射撃が得意な優人と固有魔法の恩恵を受けているリーネとサーニャ。そして「十発十中」と豪語する腕前を持つルツキーニの名が上がるだろう。だが、扶桑やカールスラントのベテラン組からしてみれば、まだまだ荒削りらしく、扶桑海軍変より自分の戦闘スタイルを確立させ、日々精進してきた優人には及ばない。

「優人、次は私とだ。手合わせしてくれ」

と、バルクホルン。どうやら501Wエースの片割れも、二人のドックファイトを見

て闘争心に火が点いたらしい。

「構わないけど、一旦基地に戻ってペイント弾を補充したいな。模擬戦やりなら、バルクホルンだって模擬銃を取ってこないといけないし」

「あたしも早く基地に戻ってペイント落としたいな」

ペイント塗れとなつた愛機を見ながら、シャーリーが独り言ちる。ズボンや制服にも跳ねているのではないかと思つて全身を確認すると、彼女はあることに気付いた。

「……優人」

「ん？」

シャーリーが遠慮がちな口調で声を掛けてきた。優人が振り向くと、彼女は何故か赤面していた。

左手の人差し指で朱の射した頬を掻きつつ、シャーリーは気まずそうに言葉を続けた。

「これって……わざと？悪戯？ブラックジョーク？」

そう問ひ掛け、シャーリーは頬に触れていた人差し指で己の胸元を指し示した。

「……………あつ……………」

シャーリーが指差した先を見た優人は間の抜けた声を漏らした。

なんと優人が放つたペイント弾数発のうち二発が、見事シャーリーの両胸に命中して

いたのだ。左右の乳房に一発ずつ当たっており、下乳部分をオレンジ色に染め上げていた。

「なっ!？」

「にや？」

他の二人も気付いたらしい。バルクホルンはシャーリーと同様に頬を染めたまま硬直し、ルツキーニは不思議そうに両目を瞬かせている。

部隊最大を誇るシャーロット・E・イエーガー大尉の爆乳。軍の制服を押し上げるほど大きく育ったりペリオンウィッチのそれは、胸部が明るい色にペイントされたことで、より存在感が強調されていた。

「にひひ♪優人ってば、えっちい♪」

暫しの沈黙を挟んだ後、ルツキーニが白い歯を見せて悪戯っぽく笑った。隣では顔に戸惑いの色を浮かべたシャーリーが、両腕で自分の胸を庇うように抱いている。

「別に、わざとやったわけじゃ——」

「優人……」

ふと背後から抑揚のない声が聞こえた。淡々としていながらも何処か威圧を孕んだ声音に恐怖した優人は、その身をカタカタと震わせる。

恐る恐る振り返ってみれば、影が入ったように目を暗くしたバルクホルンが射殺さ

んばかりの鋭い視線を優人に投げかけていた。

「な、な、何でしようかバルクホルン大尉」

本能的にヤバさを察した優人は声まで震わせ、口調も自然と敬語になる。

バルクホルンは優人の顔をジーツと見据えた後、何処からか取り出した包帯を利き手に巻き始めた。

「バ、バルクホルン。何で包帯なんで……」

「模擬戦はまた後日にしよう。他にやらねばならぬことが出来てしまった」

優人の問い掛けを無視し、バルクホルンは包帯の巻き終えた拳を胸の位置で掲げる。

一方、優人を挟んでバルクホルンの反対側を飛んでいたシャーリーとルッキーニは、触らぬ神に祟り無しと言わんばかりに二人から距離を取っていた。

「まったく、お前と言うやつは……いつまで経っても自重する気配がない。どうやら、ミーナの説教では足りないらしいな」

バルクホルンは左手で扶桑ウイザードの胸倉を掴むと、包帯で覆われた右拳を構えて優人の顔面へ狙いを定めた。

「ちよつ、待つてくれバルクホルン。ほ、暴力はいけな……どうか話を——」

「問答無用っ！」

——バキッ！

扶桑海軍ウィザードの懸命な命乞いは、カールスラント空軍ウィッチの怒声に掻き消され、周囲には鈍い殴打音が響き渡った。



30分後、501基地格納庫――

「お〜……イテテ……」

赤く腫れ上がった左頬に濡れたハンカチを押し当て、優人は苦痛に呻いていた。

501基地では、優人のラツキースケベや宮藤兄妹のイチャつきぶりと同じくらいお馴染みとなったバルクホルンから優人への鉄拳制裁。例によつて彼女の剛拳を顔面に受けた彼はその場で気を失い、墜落しかけたところをシャーリーとルツキー二に支えられていた。

そのまま二人に運ばれて基地へ戻ったわけなのだが、バルクホルンは優人が意識を取り戻した後もご立腹であった。さすがにもう殴られはしなかったが、その代わり模擬戦でシャーリーのP-51Dに付着したペイントの掃除を命じられた。これは本来、撃墜判定を受けた側が負うべきペナルティである。

ペイント弾が上手いこと命中し、制服の胸部が汚れてしまったシャーリーはルツキー

ニを伴い、着替えついでにひと風呂浴びに行っている。

彼女が用意してくれた濡れハンカチで腫れた頬を冷やししながら、優人は空いている右手に持った別のタオルでペイントを落としていく。

せつせとペイント掃除に勤しむ扶桑ウィザードの後ろでは、腕を組んで仁王立ちしたバルクホルンが優人に睨みを利かせている。

カールスラントウィッチが放つ扶桑刀の如く鋭い視線に怯え、必死に手を動かす優人の姿はまるで親や教師に叱られて、掃除当番の罰を言い渡された悪戯っ子のようなだ。

「ふう………今日もいい湯だったなあ♪」

「サイコ〜ッ!」

優人が全てのペイントを落とし終えると、風呂帰りのシャーリーとルツキーニが格納庫へ戻ってきた。ルツキーニはお馴染みの制服姿だが、シャーリーは制服の代えがなかったのか私服に着替えている。

「リベリアン!何だ、その格好は!?!」

シャーリーの服務規定違反を目にして、バルクホルンが透かさず怒号を飛ばす。優人もつられてシャーリーの方へ振り返る。

シャーリーの服務は、上は胸元に“GLAMOROUS SHIRLE”の文字が描かれたオーダーメイドらしき薄手の白いTシャツ。ブラをしていないのか、シャーリー

が歩く度に大きな乳房がユサユサと揺れている。

下はデニム柄の青いホットズボンだ。これはペリーヌ、サーニヤ、エイラなどが普段ズボンの上に履いている重ね履ズボンの一種である。だが、3人が使っているストッキングタイプと違って股下が非常に短く、丈の長さはウィッチの多くが愛用しているローライズのズボンと同程度しかない。

二重履いているにも関わらず、ズボン1枚の時と同様に持ち主のヒップラインも強調し、何とも言えぬエロスを感じさせていた。

「勤務中だと言うのに、そんなチャラついた格好をつー」

バルクホルンがワナワナと震えながらシャーリーを指差す。優人もまた、奔放なりベリオンウィッチの私服をシゲシゲと見つめていた。

動き易さを重視したラフなファツションスタイルがシャーリーらしい。また、肌の露出面積の広さがリベリオン人らしいオープンな性格と、グラマラス・シャーリーの健康的なセクシーさを醸し出していると言えるだろう。

しかし、リベリオン陸軍の制服よりも身体の線がずっと分かりやすくなっている彼女の出で立ちは、男である優人からすれば目のやり場に困ることこの上なかった。

大胆な深紅のセパレーツ水着姿や、より刺激的な下着姿。果ては、一切衣類を身につけていない生まれのままの状態となったシャーリーを双眸に焼き付けたこともあるが、

まあそれはそれである。

「他の制服はまだ洗濯中で、着れる服がこれしかなかったんだよ。これでもあたしが持つてる服の中じゃ一番地味なやつなだけど……」

ブスツと不満な表情で応じるシャーリーに、バルクホルンがさらに吼える。

「し、下着くらい着けろっ！胸なんぞを揺らして、はしたない！」

「あゝ……胸の形が崩れるし。出来ればそうしたいんだけど……」

やはりノーブラだったらしい。シャーリーはポリポリと後頭部を掻きながら、歯切れ悪そうにブラをしなかった理由を説明する。

「なんか、今まで使ってたやつがキツくてさ。着けると胸が苦しいんだよね」

何気無しに己の胸へ手を添えたシャーリーは、Tシャツ越しに乳房を持ち上げてみた。

自他共に認める爆乳をまじまじと見つめながら、頭上でクエスチョンマークを踊らせる。

「成長期は過ぎたと思ってたのに、またデカくなったのかな？」

（えっ?!嘘だろ、まだ成長するのか!?)

優人は言葉を失った。今のままでも十分過ぎるほどに大きいシャーリーの胸が、未だに成長過程にあるかもしれない。

単純な体格の差といい、扶桑人とリベリオン人の発育の違いを見せつけられた気分だ。反面、戦友のさらなる成長の可能性に少なからず期待と興奮を覚えていた。

「シャーリー、スゴイ！」

と、歓喜の声を上げたのは、優人と同じくおっぱい好きのルツキーニだった。

瞳を爛々と輝かせ、幼いロマーニヤウィッチはその小さな身体と声を弾ませて、シャーリーの胸へ飛び込んだ。

自分の頭ほどもある2つの胸に顔を埋め、いつものように乳房を揉み引き始める。

「パフパフウ〜♪パフパフウ〜♪」

「ここから、遊ぶんじゃない。私の胸はおもちゃじゃないっていつも言ってるだろ？」

やんわりとした口調で注意しながらも、シャーリーは口元に微笑を湛えていた。彼女は自分を姉のように慕い、甘えてくるルツキーニを愛らしく思っている。

501基地に配属されてまだ間もなかった頃のルツキーニは、母恋しさのあまり脱走を繰り返す問題児だった。そんな彼女が部隊の一員として機能するようになったのは、面倒見役であるシャーリーの功績だ。

何でも、シャーリーの大らかな性格と胸の大きなところがルツキーニの母親に似ているらしい。

「ルツキーニは本当にシャーリーが好きなんだな」

微笑ましくじやれ合う二人に、優人が歩み寄る。

「うん！面白いし、おっぱい大きくてマーマみたい！」

ルツキーニは満面の笑みで応じる。部隊の妹分的な存在であるロマーニヤ空軍ウィッチ——フランチェスカ・ルツキーニ少尉。彼女の純真無垢な笑顔には、いつも心洗われる。

「マ、マーマかあ……」

シャーリーが苦笑気味に呟く。16歳の少女はちよつと複雑だった。

「あつ……優人のことも好きだよ！」

谷間から顔を離すと、ルツキーニは優人に振り返った。

「優しくて、イケメンで。パーパみたい！」

「パ、パーパ……？」

ルツキーニの発言に、優人は顔をひきつらせる。おそらくはシャーリーと同じ心境なのだろう。

彼はまだ二十歳前で、こんなに大きな子どもを持つような年齢ではない。ルツキーニに他意はないのだが、遠回しに親父臭いと言われた気分だ。

「あつははは！あたしと優人は夫婦つてことか？」

と、豪快に笑うシャーリー。ジョークのつもりで言っただけだが、何故か心臓が高鳴

る。

見知らぬ感覚に戸惑いこそしたが、いつもより熱めの湯に浸かったからだ、と結論付けて深くは考えなかった。

「ふ、夫婦?」

どうコメントしたらいいのか分からず、優人は当惑する。

扶桑ウィザードの反応を見て、何か悪戯を思いついたらしい。シャーリーはニヒツと口角を吊り上げると、ウサギが飛び跳ねるような軽快な動きで優人の隣に移動し、彼の腕を取った。

「な、何だ!」

「あなた。今日もお仕事、お疲れ様♪」

突然、腕に抱き着ついてきたシャーリー。かと思えば、優人の耳元に唇を寄せて、普段と異なる甘ったるい声で囁いてきた。

「ご飯にする? お風呂にする? それとも……わ・た・し?」

熱い吐息と共に紡がれる新妻宛らな睦言。囁くシャーリーの頬は紅潮し、心無しか瞳もとろんと潤んでいるように見える。

「シャ、シャーリー……か、からかうなよ……」

一方、優人は全身をガチガチに硬直させていた。悪戯好きなりベリオンウィッチの

ペースに流されてはいけない。

そう思ったものの、耳を擦る熱々の吐息と薄いTシャツ越しに押し付けられる爆乳の感触が優人の思考を鈍らせ、正常な判断力を奪っている。抵抗出来ない。

「な、な、なっ!?!……何を考えている!?!リベリアン!!」

熟れたトマトのように顔を真っ赤にしたバルクホルンが、憤然と叫ぶ。

本日三度目となる堅物大尉の怒号は凄まじく、鼓膜までもが悲鳴を上げそうだった。

「そんな風に異性と密着して……ふ、夫婦の真似事をするなど!なんとふしだらなっ! 嘆かわしい!」

「にゃ?ふしだら、ってナニ?」

面白いくらいに狼狽えているバルクホルン。一方のルツキーニは、自分の知らない言葉に首を傾げている。

「何だよ、バルクホルン」

シャーリーは優人に抱き着いたまま顔をバルクホルンへ向ける。

「しやれだよ、しやれ。ただのスキンシップでそんなに怒ることないだろう?」

「駄目だ駄目だ!優人が迷惑してるだろう!?!そういう冗談は控えろ!」

「優人が迷惑してるって?バルクホルンの思い違いじゃないのか?だよな、優人?」

「えっ、ええと……」

シャーリーから同意を求められるが、優人は答えに詰まった。

それと同時にデジャヴを感じていた。以前も同じような体験をした気がしてならなかったのだが、優人が記憶を辿るよりも先にシャーリーが言葉を発した。

「ほら、ハッキリしないってことは別に迷惑だと思つてないってことさ」

ふふん、と勝ち誇つたよう鳴らすシャーリー。だが、バルクホルンは食い下がった。

「いーや！明らかに迷惑している！優人の顔をよく見ろ！」

「優人の顔？うーん、グラマラスな美女に抱き着かれて嬉しそうじゃなか」

「お前の目は節穴か！勝つて気ままなりべリアンめっ！優人を解放しろ！」

そう叫び、空いている左腕側へやってきたかと思えば、バルクホルンまでもが優人の

腕を取った。

「バ、バルクホルン!?お前まで何だよ!」

「うるさいっ！お前がハッキリしないからだ！それでも男か！情けない！」

優人を叱咤しながらも、バルクホルンは離すまいと腕に力を込める。

まるで宝物でも守るかのようにギュッと優人に抱き着き、身体——特に胸——をこれでもかと押し付ける。

「必死だなあ、バルクホルン。独占欲の強い女は嫌われるぞ？」

「べ、別に独占したいわけではない！貴様の悪ふざけは振り回されている優人を助けて

やっているだけだ！」

ムキになって否定するバルクホルンだが、端から見るとそれは何より肯定の証であった。

「だから、優人は別に困ってなんか無いって……」

「お前達、少し落ち着——」

「優人は黙ってる！ニヤニヤしておって！」

互いの息がかかるような超至近距離で、バルクホルンはギロリと優人を睨つける。

「ニヤついてなんて……は、はい。黙ります、はい」

「おく、恐い恐い。優人を怯えさせて、迷惑なのはどっちだよ？」

「やかましい！そもそもお前がだな！」

「あたしが何だよ？」

嫌味で煽るシャーリーに、憤慨して怒鳴り返すバルクホルン。501基地格納庫は、戦時下の最前線とは違った意味の修羅場と化してしまった。

(ルツキーニ……助けてくれ……)

心の中で懇願しつつ、優人はルツキーニへ視線を走らせる。だが、肝心のロマーニヤウィッチはいつの間にか発進ユニットの上で寝入っていた。

ついさつきまではシャーリーとバルクホルンの舌戦を眺めていたのだが、二人の水掛

け論ぶりに飽きてしまったらしい。鼻提灯まで作って、完全にお昼寝タイムだ。

(紫電改の試し運転にきただけなのに……)

理不尽な災難——世の男達からしてみれば、とてつもない幸運——に見舞われ、優人は泣きたくなかった。

しかし、どうやら神は非情でも薄情でもなかつたらしい。ちゃんと彼を助けるための救世主を遣わしてくださったのだから。

「なんだ、随分と賑やかだな」

「え？」

「お？」

「ん？」

ふと格納庫内に男性の声と革靴の足音が響き渡り、3人は気の抜けた声を漏らす。

声が聞こえてきた出入り口へ視線を移してみると、今朝顔を合わせたばかりの客人にして、宮藤兄妹の父君——宮藤一郎が歩いてくるのが確認できた。

「父さん、どうして？」

「可愛い息子の顔を見にくるのに理由が必要か？」

一郎は息子の問い掛けに対し、おどけたように応じると、優人の左右へ交互に視線を走らせた。

「それにしても、お前もやるな。両手に花で羨ましいよ」
「し、失礼しました！宮藤博士！」

自分が抱き着きつばなしたことに気が付くバルクホルン。慌てて優人から離れると、一郎に向かって直立不動の姿勢を取る。

顔がカアツと熱くなる。よりによって「ストライカーユニットの父」と称される宮藤博士に恥ずかしいところを見られてしまうなど、穴があつたら入りたかった。

「優人君は結構モテますよ？イケメンだし、優しいし、頼りになるし」

一方シャーリーはバルクホルンと異なり、特に慌てる様子はなかった。ゆつたりした動きで優人から離れると、世間話感覚で一郎に軽口を叩いた。

対照的な性格故によく衝突し、張り合うシャーリーとバルクホルンだが、心の余裕に關してはシャーリーの方が一枚上手なようだ。

「ありがとう、イエーガー大尉。それにしても……」

柔和な笑みを浮かべていた一郎の表情が、一転して生真面目なものへと変化する。シャーリーと合わせていた視線を彼女の胸元へ走らせると、顎に手を当てて何か考え始めた。

「ふむふむ……」

「あ、あの……宮藤博士？」

リベリオンウィッチの胸を凝視しながら思考に耽る一郎。彼の視線が擦ったかったシャーリーは、苦笑を禁じ得ない。

「これだけ胸が大きいと空気の抵抗を諸に受けるはずだ。なのに固有魔法無しで時速800キロを超えるとは……」

爆乳から目を離さぬまま、一郎はブツブツと独り言を呟き続ける。

どうやら空気抵抗の影響を強く受けるはずのダイナマイトバディの持ち主が、部隊最速を叩き出していることに疑問を抱いているらしい。決してセクハラをしているわけではない……はずだ。

それにしても、分析中に心の声を口に出してしまうのは彼の職業病だろうか。

「言われてみれば……」

一郎が口にした疑問に説得力を感じたのか。バルクホルンまでもが思考し始めた。真面目な性格故に、こんなことでも真剣に考えてしまうのだろう。

ふと一郎の視線がシャーリーの爆乳からバルクホルンの豊乳に移る。

「ん？バルクホルン大尉も中々大きいな。戦闘に支障はないのかい？」

「ふえっ!!」

あまりにストレート過ぎる一郎の質問。バルクホルンはなんとも可愛らしい悲鳴と共に両腕を動かし、自分の胸を庇うように抱き締める。

一度は熱が引いた堅物大尉の顔が、またしても紅潮し始めた。

「ミーナ中佐といい、坂本少佐といい、リーネさんといい。胸が大きいと飛行時にハンドテを背負うこととなるんじゃない——」

「息子の戦友にセクハラすんなよ、エロ親父」

「おおっ……」

背広の後ろ襟を掴んだ優人によって、一郎はウィッチ二人——の胸部——と引き離される。

(間違いない、優人と芳佳の父親だ)

シャーリーとバルクホルンは揃って同じことを思っていた。

動機こそ異なるものの、つつい大きな胸へ視線と興味が行ってしまう一郎の様は、おっぱいが大好きな扶桑の兄妹——宮藤兄妹を連想させる。

「ていうか何しに来たんだよ？今日は相手出来ないって言ったろ？」

露骨に面倒臭そうな顔をする優人。せっかく父親がロンドンから遙々会いに来てくれたというのに、なんとという塩対応。今朝の一件だけで、ここまで不機嫌になるものだろうか。

「そうだそうだ！お前とそちらのお嬢さん達には是非見て貰いたいものがあるんだよ！」

「見せたいもの？」

と、バルクホルンが鸚鵡返しする。

「もしかして、博士が試作した新型のストライカーユニットとかですか？」

音速突破を目指すスピードマニアであり、優れたエンジンでもあるシャーリー。

宮藤理論の提唱者が、既に新たなストライカーユニットを開発したのではないかと期待に目を輝かせる。

「うじゅ？なあに、もうご飯の時間？」

面白そうな雰囲気を感じ取ったのか。お昼寝中のルッキーニも目を覚ました。まるで顔を洗う仔猫のように、眠たい目を擦りながら身体を起こす。

「俄然興味が湧いてきたようだね、結構結構。では、宮藤一郎数年ぶりの作品をご覧頂こうか」

一郎は高らかに宣言すると、右手で格納庫の壁際を指し示した。

いつの間にか格納庫内には、一郎が持ち込んだと思しき魔導エンジンと搭載機械らしきものが3機分置かれていた。

「うはあくー！これって、博士が造った新型の魔導エンジンですか!」

真つ先に駆け寄ったのは、やはりシャーリーだった。瞳をキラキラさせて魔導エンジンを見つめる彼女の姿は、新しいオモチャを買い与えられた幼子のようだ。

「入院中、じつとしているのも退屈だからね。新しいタイプの魔導エンジンと搭載機械

を試作してみたんだ」

察するに入院中も病院のスタッフや他の患者達に多大な迷惑を掛けていたらしい。父の話の聞いて、息子は軽い頭痛を覚えた。

「これらを搭載するストライカーユニット本体も造りたかったが、予算も部品も足りなくてね」

「部品は、どうやって調達したのですか？」

と、バルクホルンが素朴な疑問を投げ掛ける。

「知り合いのジャンク屋がロンドンの郊外に住んでるんだ。久しぶりに会いに行ったら、新品同然のパーツ類を格安で譲ってくれたんだ」

「……………大丈夫なんだよな？」

優人は念を押すように訊く。商品価値が極めて低く、大した利益が見込めない品々を多数扱っているジャンク屋が、大量のパーツを無償で提供した。そんな話を聞かされては嫌な予感しかない。

「品質はちゃんと一つ一つチェックしてるよ。当然、エンジン回りのパーツもだ。問題ない」

そう断言すると、一郎は試作エンジンについて得意気に語り始めた。

「これら3つの魔導エンジンは、どれも性能面では従来の上回っている。宮菱重

工業で開発が進められている十七試艦上戦闘機への搭載を、僕なりに念頭に入れたもので、これを搭載すればカールスラントのBf109シリーズやリベリオンのP-51すらも凌駕する……はずだ」

「なんだよ、はずつて？」

「もしかして、テストはまだ？」

優人が怪訝そうに眉を顰め、バルクホルンが重ねて訊ねる。

「その通り……と言わいで、さっそくテストだ」

一郎は無駄に力強く頷いて肯定すると、テストの準備に取り掛かった。

（何か嫌な胸騒ぎがする……）

一抹の不安が、優人の胸を過る。シャーリー達には預かり知らぬことだが、父に関連する息子の嫌な予感が外れたことは、今まで一度もなかった。

第14話 「宮藤博士の危険な実験」

約1週間前、扶桑皇国横須賀——

大きな港で栄える横須賀港。そこから三浦半島を挟んだ反対側の入江に、第501統合戦闘航空団の宮藤芳佳軍曹が通う——本人はブリタニアにいたるため、現在は休学中——横須賀第四女子中学校がある。

そして、その裏山に小さな診療所が一件。宮藤軍曹と彼女の兄——宮藤優人大尉の実家であり、様々な疾患や怪我の治療を行っている——「宮藤診療所」がある。

「おばさん！おばさん！」

陽が顔を出したばかりの朝早く、宮藤診療所に1人の少女が飛び込んできた。

和風美人を連想させる長く、艶のある黒髪と可愛らしくも澄んだ声が印象的な彼女の名は、山川美千子。芳佳や学校の友達等、親しい間柄からは「みっちゃん」というアダ名呼ばれている。横須賀第四女子中学校に通う女学生で、宮藤兄妹の再従姉妹であり幼馴染み。海軍兵の兄が1人いる。実家は農家をしていて、優人と芳佳もよく手伝っていた。

おとなしくて世話焼きで家庭的だが、やや心配性。人の気持ちを読み取る観察力に長

けており、思い込みの激しい芳佳とは良いコンビである。また、優人にとってはもう一人の妹のような存在で、美千子も実兄よりも優人の方に懐いている。

芳佳とは違って勉強が得意で、文系科目は特に優秀。合唱部に所属しており、独唱パートも任せられるほど歌が上手い。

「あらう？ みつちゃん」

長い茶髪を低い位置で結び、首元に緋色のスカーフを巻いた白衣姿の女性が、声を聞きつけて居間から顔を出した。

彼女の名は宮藤清佳。優人と芳佳の母親で、宮藤一郎の妻でもある。旧姓は「秋元清佳」。診療所の経営者で、年老いて尚強大な魔法力を維持している希代のウィッチ——秋元芳子の娘である。

この診療所は宮藤兄妹の母方の一族——秋元家が、代々治療魔法と共に受け継いできたもので、十数年前までは「秋元診療所」という名称で経営していた。ひとり娘の清佳が宮藤一郎と結婚したのを機に宮藤診療所に改名していた。

清佳は母の芳子同様、強大な魔法力と治療魔法を有している。20歳を過ぎ、尚且つ結婚しても魔法力は衰えることなく維持し続けている希有なウィッチである。

物静かでおとなしく見えるが芯は強く、強情で直情的な部分も持ち合わせている。その性格は魔法力と共に芳佳に受け継がれている。

料理の腕は芳佳や優人よりも遙かに優れており、扶桑料理以外の各国料理も得意とし、レパートリーも幅広い。

清佳との出会いがきっかけとなり、一郎はストライカーユニットの研究に邁進した。「いらつしやい。そんなに慌てて、一体どうしたの？」

「ハ、ハ、これを見てください！」

なにやら興奮気味的美千子。家からずっと握り締めていた朝刊を清佳に手渡し、清佳と芳子に見て欲しい2つの記事のうち一つを指差す。

「——っ!？」

記事に視線を落とした清佳は呼吸するのもを忘れ、驚愕に目を見開く。

それは第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」によるガリア解放に関する記事で、タイトルには『大殊勲！坂本少佐、宮藤兄妹！』とあり、欧州へ派遣されている航空歩兵の活動を遠く離れた扶桑本国へ伝えるものであった。

掲載された写真には、正面を向いた坂本美緒少佐が彼女らしい豪快な高笑を飛ばし、その隣では坂本同様カメラへ向かって微笑む宮藤優人大尉。兄に肩を抱かれ、照れ臭そうにはにかむ宮藤芳佳軍曹が写っていた。

「芳佳……優人……」

愛する娘と息子の名を呟き、清佳は嬉しそうに頬を赤らめた。写真ではあるが、二人

の元気そうな姿を見ることができた。

「芳佳ちゃんと優人さん、ネウロイをやつちけてガリアを救つたんですよ！誰にも出来なかつた巢の破壊を成し遂げたんですよ！兄妹揃つて世界的英雄になつてますよ！」

と、友達の大活躍を知つてテンションの上がつている美千子は、やや早口な口調で熱弁する。

ネウロイや欧州の戦況について詳しくない清佳にとつて敵勢力の拠点を破壊し、ガリアを解放した501の一大戦果はいまいちピンとこないものであつた。しかし、戦地へ赴いている我が子の安否と活躍を報せてくれたこの記事は、母親には何よりの便りなのだ。

(二人とも、元気にしてるのね。頑張つたのね……)

自然と目頭が熱くなる。両目から涙が溢れ、視界が霞んでよく見えない。それでも清佳は記事から視線を外さず、朝刊を握り締めた。

いつの間にか母の芳子が斜め後ろに立つており、娘の右肩に己の手を置いて清佳に微笑んでいた。彼女も孫達の息災と活躍を嬉しく思つてある。

「あつ、それと。これも見てください！」

そう言つて、美千子はまた別の記事を指し示した。清佳は指で双眸の涙を拭い、促されるままに視線を走らせる。

「……………えっ!？」

記事を見た瞬間、清佳は衝撃に胸を詰まらせた。目を見張り、彫像のように身を硬直させる。

それもそのはず。彼女にとって記事の内容は嬉しくも信じ難いものであり、驚愕を禁じ得なかった。記事のタイトルは以下の通りである。

『“ストライカーユニットの父” 宮藤一郎博士、ブリタニアにて生存を確認!』

◇ ◇ ◇

“ストライカーユニットの父”と称される扶桑の高名な技術者——宮藤一郎。彼の生存が、1944年9月ブリタニアにて確認された。

1939年8月。同国のストライカーユニット共同開発研究所において、原因不明の爆発事故——実際は石威紫郎の策略によるもの——に巻き込まれた。研究所に残っていた数名の研究者のうち宮藤博士のみ奇跡的に生還しており、昏睡状態に陥ったところを事情を知らない旅行者によってロンドンの病院へ担ぎ込まれた。

病院側は治療を終えた後、ブリタニア政府を通して現地の扶桑皇国大使館へ身元の照会を依頼するつもりでいた。しかし、博士の容態が安定した直後に大量のネウロイが黒

海より出現、人類は異形の存在と戦争状態に入った。

圧倒的戦力を誇るネウロイの対応や各国との連携、ネウロイの侵略行為、亡命を希望してきた欧州各国の政府・国民の受け入れ等に追われてしまい、ブリタニア政府が博士の身元を突き止めるまで数年の時間を有した。

そして5年後。身元の判明と同時に昏睡状態から回復した宮藤博士は、愛する娘と息子のいる第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」の駐留する基地を訪れていた。



現在、第501統合戦闘航空団ブリタニア基地――

「ふう……準備完了だ」

作業を終えた宮藤一郎は、格納庫の天井を仰ぎながら短く息を吐いた。

時期は9月初頭。炎天下と言うほどではないが、残暑の厳しい中でストライクカーユニット関連の作業をしていた彼は汗を大量に掻き、顔や服のあちこちにオイルが付着している。

額から流れ出た一筋の汗が頬を伝い、一郎は鬱陶しそうに服の袖で拭った。すると、

カールスラント空軍より501へ派遣されている航空ウィッチ——ゲルトルート・バルクホルン大尉が一郎の元へ歩み寄り、二枚用意したタオルのうちを一枚手渡した。

「宮藤博士、こちらをお使いください。ほらリベリアン、お前にも」

そう言つてバルクホルンは、博士と共に作業をしていたリベリアン国籍の少女に、二枚目のタオルを与える。

「おつ？サンキューー！」

タオルを受け取り、快活な声で礼を述べる彼女はリベリアン陸軍第8航空軍より派遣されている航空ウィッチ——「ジャーリー」ことシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉である。

作業を手伝つたため、彼女の顔はオイル塗れになつてしまつてゐるが、それでも彼女の笑顔はまるで真夏の太陽のように眩しく、キラキラと輝いて美しかった。

ちなみに、「リベリアン」とはリベリアン国民のことを指す用語であるが、バルクホルンの場合には自由主義かつ大らかな氣質のイメージが強いリベリアン人に対する蔑称として使つてゐる。

「ありがとう、バルクホルン大尉。イエーガー大尉も手伝つてくれて助かつたよ」

タオルを用意してくれたバルクホルンと、作業を手伝つてくれたジャーリー。二人の顔を交互に見ながら、一郎は爽やかな笑顔で礼を言う。

「いえ、そんな……」

「これくらいお安いご用意ですから……」

微笑み掛けられた2名の航空ウィッチは、少々照れ臭そうに頬を染める。

既に40を越えた年齢で、バルクホルン達とは親子ほど歳が離れている一郎。目元に皺が寄っているものの、本人の端正な顔立ち故か。外見上は、青年期と思春期の子どもがひとりずついるとは思えないほど若々しい。

「お疲れ様」

「お茶持ってきたよお！」

ふと入り口の方から声がした。声の主は2人、1人は一郎の息子である扶桑皇国海軍の航空ウィザード——宮藤優人大尉。もう1人は、ロマーニヤ空軍より派遣されている501部隊最年少の航空歩兵——フランチェスカ・ルツキーニ少尉だ。

3人が振り返ると、麦茶が注がれた人数分のコップ乗せたトレイ。それを抱えた優人と、両手を頭の後ろで組んだルツキーニの姿があった。

作業中の一郎とシャーリーにバルクホルンはタオルを、優人とルツキーニの二人は麦茶を用意するため厨房へ行っていたのだ。

「優人、ちょうど良かった！」

お茶を運んできた息子に向かって、一郎は待つてましたと言わんばかりに声を掛け

る。

「ストライカーの組み立てが終わったんだ。さっそくだが、回してみてくれないか？」

「はいはい、人使い荒いね」

優人は一言ぼやくと、ルツキーニにトレイを預けてストライカーユニットの元へ移動する。

一郎とシャーリーが行っていたのは、予備パーツ用に解体されていたストライカーユニットの組み立て作業だった。

使われているパーツの殆んどは、連盟空軍に参加している各国軍から支給されたものだが、魔導エンジン及びいくつかの搭載機械は一郎が新たに試作したものを使っている。試作型の魔導エンジンをストライカーユニットに搭載し、今からテストする。

一つ目の魔導エンジンは、あくまで出力チェックと動作確認を目的としているため、飛行はせずに発進ユニットに固定した状態で始動させる。実験の経過如何で、飛行試験も実施する予定だ。

一応付け加えておくと、これは連合軍総司令の許可と基地及び501の司令であるミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐の了承を得た上での実験である。

「父さん、こっちはいつでもいいよ」

試作魔導エンジン“タイプA”を搭載した零式艦上戦闘脚二二型甲を履いた優人が、

計測器を手にした父に声を掛ける。

宮菱重工工業製の零式は扶桑皇国海軍を代表的するストライカーユニットであり、かつて宮藤一郎がブリアニアの共同研究所で設計・開発した試作型の十二試艦上戦闘脚は、零式艦上戦闘脚一型として制式採用された。航空母艦用の二二型も本格量産され始め、大戦初期はこのタイプが主力であった。

三二型は、欧州での運用実績を元に活動時間を低下させ、代わりに攻撃力、防御力、機動力を向上させたタイプで、これに次いで空母用に開発されたのが501の扶桑組が使用しているこの二二型である。

ちなみに、今タイプAを搭載している二二型甲は、紫電二一型の支給以前に優人が使っていた機体だ。

「わかった」

息子の言葉に頷くと、一郎は自分の背後に立っている3人のウィッチに振り返った。

ルッキーニとひと仕事終えたシャリーが麦茶を呷りながら、バルクホルンは眉一つ動かさない真剣な表情で優人の方へ目を向けていた。

「まずはタイプAのテストを行う。あまりの出力に腰を抜かさないように……」

「もお……いいから早く始めてよお……」

勿体振る一郎に対して、ルッキーニが焦れたように言う。子どもの我慢は長く続かな

い。

「よし！優人、エンジン始動だ！」

「了解！」

父に促され、優人は試作エンジンに魔法力を流し込んだ。エンジンは問題無く動き始めた。格納庫内に轟音が響き渡り、空気を揺るがす。

「「おお〜！」」

見学していた3人の航空ウィッチが、揃って感嘆の声を漏らす。

まるで野生動物の雄叫びのような力強いエンジン音。回転数の上昇もスムーズで、尚且つ安定している。

さらには優人の足元を中心に展開され、格納庫の外まで広がっている巨大な魔法陣。試し感覚で少量の魔法力を流しただけだというのに、これほどまでの出力を見せつけていた。

「スゴい！出力計が振り切れそうだ！」

と、ややオーバーリアクション気味に感激するバルクホルン。

従来の魔導エンジンを上回る出力を誇り、専用の機体に搭載すれば他国のストライカーユニットを上回る性能を発揮する。一郎はそう言っていたが納得である。

（スゴいッ！魔導力の立ち上がりが半端じゃないっ……………あれ？）

父が試作した魔導エンジンの予想以上の出力に、優人もまた歓喜していた……のだが、途中からある違和感に気が付く。

いつの間にか、魔導エンジンのコントロールが利かなくなっていた。本人の意思とは関係なく、回転数と出力が上がっているのだ。

「父さん、このエンジンなんか勝手に回転数が上がっている気がするんだけど？」
「気にするな」

不安気な息子の問いに、一郎は冷静な口調で応じる。彼は優人の方を見ておらず、計測器に釘付けとなっていた。

このやり取りの直後からストライカーユニット——いや、正確に言えば試作魔導エンジン「タイプA」の暴走はますます激しくなっていた。

「なんか、ストライカーが熱いんだけど……」
「気にするな」

「それに焦げ臭いし……」
「気にするな」

「うわっ!?!父さん、火がつ!火が出た!」
「気にするな」

「あ、あの宮藤博士!止めるべきでは!?!」

明らかな異常事態を前にして、バルクホルンが実験の中止を進言する。

一郎は計測器と優人の履いたストライカーユニットを交互に見つめ、なにやら分析した後、フウと軽く息を吐いた。

「優人、すまない」

“ストライカーユニットの父”は、息子と視線を交わすと、優人に笑顔を向けた。それは幼い子どもが、イタズラや失敗を誤魔化す時の作り笑顔そのものだった。

「そのエンジンは爆発する」

「……………えっ?」

父が何を言っているのか、優人はすぐには理解出来なかった。聞き返そうとする優人を他所に、試作魔導エンジン“タイプA”は眩い閃光を放ったのだった。



「ふう…………タイプAには少々問題があったようだ」

一郎は顎に手を当てながら、冷静な口調で実験結果を分析する。結論から言つて、試作魔導エンジン“タイプA”は失敗作であった。

優人の魔法力によってエンジンが始動し、レシプロ機用としては圧倒的な高出力を見

せつけた。

そこまでは良かったのだが、増幅された魔法力は足首部分に相当する位置にある呪符発生機に送られることなくエンジン内部とその周辺機械に停滞、そのまま増幅し続けた。

膨れ上がった魔法力により試作魔導エンジンは暴発し、搭載していた零式も過負荷に耐えられず爆散……するところだった。エンジンが暴発する直前に、優人が咄嗟に固有魔法『凍結』を発動し、ストライカーユニットを凍結させた。

強引なやり方ではあったが、これによつて試作魔導エンジン“タイプA”をストライカーユニットごと冷凍封印して、最悪の事態を回避することができた。

「こんのっ！クソ親父いいいいいっ！」

怒りに満ちた叫びが格納庫内に響き渡る。声の主はもちろん、試作魔導エンジンのテストを引き受けた優人である。

怒号を飛ばすのとほぼ同時に、試作魔導エンジンの開発者である父親の首に両手をかけていた。

「ぐっ………ゆ、うと………苦し………」

「可愛い息子を殺す気かあ!!いやっ!気分的に一回死んだわ!あんな危険極まりないもの作りやがって!このマッドサイエンティストがああああく!!」

首を絞められ、顔面蒼白となつてゐる一郎に向かつて、優人は罵声罵倒を吐き続ける。いつになく怒り心頭な様子だが、危うく死ぬところだったのだから無理もない。

魔導エンジンの権威が新たに開発したエンジンは、魔力爆弾と形容しても差し支えない危険物、欠陥品だった。

もし「タイプA」が爆発していたら、この基地は疎か島が丸ごと消滅していただろう。

「優人、止めろって！」

「博士が死んでしまうぞー！」

このままでは、せっかく再会した父親を殺してしまいかねない。シャーリーとバルクホルンが慌てて止めに入る。

優人の怒りが完全に収まるまでしばらくかかったが、怒り狂った息子から本気の——魔法力は使っていない——首絞めを受けたにも関わらず、一郎が会話可能な状態に回復するまで然程時間はかからなかった。

「さてさて、次はの実験だが——」

「また爆発すんの？」

何事も無かつたかのように次の実験を始めようとする父親に対し、息子が毒突く。しかし、*「ストライカーユニットの父」*と渾名される一郎にとって、そんなものは何処吹

く風。口調に刺がついた息子の発言をスルーし、一郎は次の試作エンジンを右手で指した。

「お次は、試作魔導エンジン『タイプB』のテストを行う」

「ふ〜ん」

常日頃から音速突破を目指しているスピードマニアであり、機械への造詣が深いエンジニア系女子でもあるシャーリー。試作魔導エンジン『タイプB』をしげしげと、興味深そうに見つめている。

「さっきのおんなじに見えるよ?」

と、怪訝そうなルツキーニ。尤もシャーリーの整備姿をよく眺めているだけで、機械系に疎い彼女にエンジンの違いはわからないが……。

「見た目ね。でも、このエンジンには従来型の魔導エンジンに存在しない画期的なシステムが備わっているんだよ」

「……と言いますと?」

バルクホルンが詳しい説明を求めると、一郎は自信ありげな笑みを浮かべて話を続けた。

「念動系加速固有魔法をユニット側で擬似的に発現するシステムさ」

「加速魔法って……あたしの『超加速』みたいな?」

確認するようにシャーリーが訊くと、一郎は満足そうに頷いた。

シャーリーの固有魔法『超加速』。念動力を使い、自分を周囲に張り巡らされているシールドごと望む方向へ引つ張る魔法で、これによって高速移動が可能となる。

ボンネヴィル・ソフトフラッツにて、シャーリーはこの魔法を無意識に使用し、バイクの世界記録を樹立していた。

「その通り！このエンジンをストライカーユニットに搭載すれば、どの機体でもすべての航空歩兵が高速戦闘に対応出来るようになるんだ！」

「じゃあ、アタシもシャーリーみたいなスピードマニアになれるの!？」

ルツキーニが、緑が掛かった蒼色の瞳をキラキラさせながら訊ねる。

やはりというか。精神年齢が実年齢よりも幼いロマーニヤウィッチは、グラマラス・シャーリーのスピード狂なところに憧れているらしい。

「もちろん！加速力は乗り手の魔法力に比例するから、ルツキーニ少尉の魔法力なら音速到達だって夢じゃないさ！」

「やったあ〜！」

一郎の話を聞いて、無邪気に喜ぶルツキーニ。試したわけではないが、彼女は既に音速を叩き出した気になっている。

「しかし、単に速ければいいと言うわけではないのでは？」

ルッキニーに続いて、バルクホルンが疑問を投げ掛ける。

「ふむ。確かに……」

バルクホルンの言葉に説得を感じる一郎。より実用的なシステムを構築するため、
「タイプB」実験内容を変更することにした。

「優人」

「ん？」

「すまないが、お前の紫電改を準備してくれないか？あの機体に『タイプB』を積ん
—」

「イヤだ」

「……………『タイプB』を積んで、より実戦的なデータを——」

「イヤだ」

「……………どうしてだ？」

父親が言い終えるよりも先に、要請を拒否する息子。一郎はあからさまに不満気な顔をして理由を訊ねる。

「せっかく届いた新型にあんな危険物載せられるか！紫電改がぶつ壊れたらどうするんだよ！紫電改はもちろん、他の機体も使わせない！」

「そこを何とか……」

「イヤだ」

「実験に失敗は付き物なんだ。それに失敗は成功の母の友達と言うだろうか？」

「ほぼ赤の他人じゃないか！というか、失敗することを前提に頼むな！」

「なあ、頼む」

「イ・ヤ・だ！」

押し問答を続ける宮藤親子。バルクホルン達はしばらくの間、そのやり取りを見つめていたが、ふとシャーリーが何か閃いて一郎に耳打ちする。

「宮藤博士。ちよつと向こうで話が……」

「ん？何だ？」

「いいからいいから♪」

一郎の腕を取ったシャーリーは、そのまま彼を引つ張つて格納庫の隅まで連れていき、話を切り出す。

「博士♪実験がしたいんですしたら、あたしと取引しませんか？」

◇ ◇ ◇

数分後——

501基地滑走路上空に、ストラライカーユニットやインカムを装備した優人とシャーリーが横一列に並んでホバリングしている。

優人は先程の模擬戦で使用していた紫電改を、シャーリーはP-51Dを履いている。しかし、シャーリーはいつも機体ではなく、試作魔導エンジン「タイプB」を搭載した予備の機体を使っていた。

間も無く、「タイプB」の性能実験が開始される。シャーリーがエンジンのテストを引き受け、優人はテスト飛行中彼女と並走し、もしもの時の救助と目視による観測を担当する。ちなみに、テスト機の組み立ては一郎が行った。

「シャーリー、父さんとどんな取引をしたんだ？」

優人がそう問うと、シャーリーはニヒツと口角を吊り上げて答えた。

「へへ〜ん♪テストを引き受ける代わりにエンジンを貰うんだよ♪」

「物好きだな。音速を突破する前に木っ端微塵になっても知らないぞ？」

「あんな事故早々起こらないよ。それにリスクを恐れてちや、音速突破なんて出来ない」

「そうやって、シャーリーは「タイプB」が搭載されたストラライカーユニットを軽く撫でる。

自分の『超加速』に試作エンジンの擬似加速魔法が加われば、今度こそ音速を突破出

来るかもしれない。シャーリーの胸は期待と興奮でいっぱいだ。

『準備はいいかな?』

インカムから、地上にいる一郎の声が聞こえる。そろそろ始めるようだ。

「いつでもどうぞ!」

『優人、イエーガー大尉の飛行状況は逐一報告してくれ』

「了解」

『よろしい。では、ルツキーニ少尉の合図で実験開始だ!』

一郎が指示すると、二人はスタート位置についてルツキーニの合図を待った。すぐにルツキーニの声がインカム越しに聞こえてくる。

『位置についてえ……よお、ドオン!』

合図と共に扶桑海軍ウィザードとリベリオン陸軍ウィッチは、まるでカタパルトから射出されたかのように加速していった。



同時刻、基地滑走路――

「始まったな」

「いつけえええええ！ シャーリー！」

と、地上から二人の様子を眺めているバルクホルンとルツキーニ。

ルツキーニは、シャーリーと優人が空に引く白い軌跡を遠目で見ながら、拳を突き出して快哉を叫んだ！

——ガシャン！

「うじゅ？」

ふと何か落つこちたような物音が聞こえた。頭上にクエスチョンマークを浮かべたルツキーニは、音がした方へ視線を移す。

機械の部品らしきものが、視線の先にいくつか落ちていた。おそらく、という間違いなくストライカーユニットの部品だ。

「ねえ、イチローパーパー！」

背後へ振り返るルツキーニ。『イチローパーパー』とは、もちろん一郎のことだ。彼はルツキーニの数歩後ろで計測器を見ていた。

「シャーリー、なんか落つことしていったよ？」

「気にしない、大丈夫」

そう応じる一郎は最初の実験と同じく、取り憑かれたように計測器を凝視している。ルツキーニの声がちゃんと聞こえ、理解しているかどうか怪しいものだ。



再び、上空――

(加速が止まらない……いける！これならいける！)

魔導エンジン最大出力で風を切り裂きながら、シャーリーは心の中で歓喜していた。擬似加速魔法発現システム(仮称)は、彼女の期待以上の性能を見せていたのだ。

速度は既に時速850記録を超え、同時にスタートした優人を引き離している。その後、加速は一向に衰えず、速度は860……870……880と上がっていく。

「880……890……900超えたああああっ！」

興奮を湛えた歓喜の叫び。今のシャーリーには、己の声すら耳に入らない。自分を平伏させようとする音の壁との対峙に集中していた。

視界を遮るものは何もない。雲さえ存在しない、一面の蒼。それがシャーリーの視界を一色に染めていた。

(もう少し！もう少しで、夢に手が！)

以前、偶然的の産物ながら静寂が支配する超音速の世界に到達したシャーリー。

心地好い孤独が支配するマツハの世界への扉が、彼女の手で再び開かれようとしてい

る。

『シャーリー！すごい加速だけど、大丈夫なのか？何か異常はないか?!』

ふとインカムから優人の声が聞こえてきた。シャーリーの身を案じている。

「大丈夫、何も心配無い！このまま、一気にマツハを超えるよ！」

『ならいいけど、無理だけはしないでくれよ！』

「ここで決めなきや女が廃る！」

『おいおい！なんかキヤラが違うぞ！』

ストライカー共々、絶好調な様子 of シャーリー。テンションが上がっているのか、分かる人には分かるネタ台詞を口にする。優人がツツコミを入れた、その直後だった。

——ボンツ！

「……………えっ?」

試作魔導エンジンから、小規模な爆発音のようなものが聞こえてきた。さらに次の瞬間。

——ガツシャーン！

シャーリーが履いていたテスト用のストライカーユニットは、細かなパーツとなつて四散した。

ストライカーを失い、美しい放物線を描きながら海へと落下していくシャーリーを、

優人が慌てて追いかけていった。



またまた、滑走路――

「……宮藤博士？」

事故の件は、優人がすぐさま地上の3人へ報告していた。

バルクホルンは一郎へ振り返り、「これはどういうことですか？」と言わんばかりに細めた両目で試作魔導のエンジンの開発者を見据える。

「ふむ……原因は、スタート時に落としていった部品だな」

計測器から顔を上げた一郎は、冷静な口調でそう分析していた。

第15話 「宮藤博士の狂気の実験」

501基地ウィッチ宿舍・シャリー部の部屋――

「うーん、参ったなあ……」

命懸けの試験飛行を終え、シャリーは自室に戻って来ていた。バスタオル一枚だけ身体に巻き、なにやら考え込んでいる。

つい20分程前。彼女はストライカーユニットの開発者――宮藤一郎が数年ぶりに造り上げた試作魔導エンジン「タイプB」を予備機のP-51Dに搭載し、テスト飛行を行っていた。

しかし、エンジンに欠陥があったのか。それともストライカーユニットに搭載した際に、一郎の組み方に不備があったのか。今まさに音速を超えるところで、機体は空中分解を起こしてしまった。

ストライカーユニットを失ったシャリーはドーバーの海へ落下していったが、付近で目視による実験の観測を行っていた優人がすぐさま救助に入ったため、大事には至らなかった。

海に落ちたシャリーは必ず濡れとなってしまう、海水を洗い流そうと風呂に入っ

た。その後、着替えるために一旦自室へ戻ってきた……のだが、生憎私服も含め彼女の衣類は殆んどがまだ洗濯中であった。

部屋に残されていたのは、深紅のセパレーツタイプの水着と、夏場に寝間着として使っているピンク色の下着のみだった。

「誰かに服を貸して貰うしかないか……」

シャーリーは右手で頭を押さえながら、フウと軽い溜め息を吐いた。

普段のシャーリーならば、水着姿や下着姿でもお構い無しに基地内を彷徨っていたことだろう。しかし、今日は来客が——宮藤一郎が来ている。

基本的に奔放な性格のシャーリーだが、さすがに限度は弁えている。客人であり、戦友の父親でもある彼の目にだらしない姿を晒す気はない。

——コンコンツ!

不意に小気味良いノックが耳朵を打ち、何者かの来訪を知らせる。シャーリーはドアへと視線を走らせ、ドアは向こう側に声を返した。

「は〜い?」

「シャーリー、俺だけど?」

「優人?ちよつと待って」

来訪者はバルクホルン達と格納庫にいるはずの優人だった。

格納庫で待つていけばいいはずなのに、わざわざ迎えに来たのだろうか。怪訝に思いつつも、シャーリーはドアを開けて優人を出迎えた。

「どうしたんだ？」

「あつ、悪い。着替え中だったか……」

バスタオル姿のリペリオンウィッチと対面した優人は、ぼつが悪そうに頭を掻いた。セクシーな出で立ちのシャーリーから気まずそうに目を逸らしたかと思えば、彼女の胸元にチラチラと視線を走らせる。

「別にいいよ。それよりあたしに何か用か？」

と、シャーリーは繰り返して訊ねる。優人は彼女の豊かな谷間を2、3度チラ見した後、手に持っていた衣服——綺麗に畳まれた白色のワイシャツをシャーリーに渡した。

それは普段優人が第二種軍装の下に着ているシャツと同じものだった。

「これって……？」

「着替えが無いって言ってたろ？ 困ってるんじゃないかと思つて」

言われてみれば、テストを行う前に格納庫でそんな話をしていた。

「貸してくれるのか？」

シャーリーは少々面食らつたような表情で、受け取つたワイシャツと優人の顔を交互に見る。

「俺ので悪いけど。その、良かったら……」

そう言って、優人は照れ臭そうに目を泳がせる。そんな扶桑海軍ウィザードの様子を可愛らしく思ったのか、シャーリーはプツと小さく吹き出した。

「ありがとう。使わせて貰うよ」

右目を瞑ってウインクするシャーリー。リベリオンウィッチの笑顔は相変わらず眩しい。

「じゃあ、着替えるから。ちょっと待っていてくれ」

「あ、ああ……」

優人の返事を聞き、シャーリーはドアを閉めようとする。が、途中で何か気が付いたよう手を止め、半開きのドア越しに優人へニヤけ顔を向けた。

「覗くならバレないようにやりなよ♪」

「なっ、何言って!?!」

からかうように言われて狼狽える優人を尻目に、シャーリーはクスクスと笑声を立てながらドアを閉める。室内に戻ると、シャーリーはバスタオルを外し、下着類を手にする。

レースで彩られたピンク色のブラと、小さなリボンが配われた同色のズボン。色気のあるアダルティなデザインの下着はグラマラス・シャーリーに良く似合う。

「んっ……やっぱ、胸がキツイな……」

ブラを付けた胸に圧迫感を覚え、両手で持ち上げてみる。ブラのサイズがやたら小さく感じる。シャーリーが自分で言っていた通り、たわわに実った果実は未だ成長過程らしい。

「新しいの買わなきゃな……売店に置いてあるかなあ……」

シャーリーは溜め息混じりに呟く。501基地内にある売店では、様々な品物が売られている。

主に歯ブラシやタオル等の日用品、お菓子や飲料水等の嗜好品。そして、本やトランプ等の娯楽品。

航空歩兵部隊の基地ということで、ウィッチ用のズボンや女性用の寝間着、水着に下着類まで多く置かれており、基地内に設けられた小規模なスペースの店舗にあるまじき凄まじい品揃えを誇る。

それでも巨乳サイズの衣類は殆んど置かれていないため、水着や下着は店員に頼んで注文する必要がある。また値段も高いが、ウィッチの給料ならばさほど問題はない。

他にも「重量のせいで肩が凝る」、「下心あるナンパをされる」、「胸に汗を掻く」等。巨乳には巨乳なりの悩みがあるのだ。

シャーリーはともかく、リーネやミーナはこれらの問題で頭を抱えることが多々ある

そうな。

「おつと……優人を待たせてるんだつた……」

シャーリーは着替えを再開する。優人から貸し与えられたワイシャツを広げ、袖に腕を通した。

「ちよつと、大きいかな？」

シャツの第二ボタンまで留めると、シャーリーは鏡の前まで行って自分の姿を確認してみた。

やはりというか。男物ワイシャツなのでサイズがやや大きめだ。多少ブカブカ感がある。

「……………優人の匂いがする」

頬をほんのりと赤く染めながら、シャーリーはいとおしいそうに呟く。彼女の左胸にある心臓がドクドクと早鐘を打ち鳴らしていた。



十数分後、同基地格納庫――

宮藤一郎が新たに試作魔導エンジン“タイプA”・“タイプB”のテストを行った結

果、この2機のエンジンには重大な欠陥があることが判明した。

ジャンク屋から格安で購入したパーツを使用したためか、ついこの前まで昏睡状態だった技術者が病み上がりで設計を行ったためか。或いはその両方か。

少なくとも開発者の息子である宮藤優人は後者ないし両方だと考えていた。

「さてと……」

優人とシャーリーが戻ってきたところで、宮藤一郎は新たな実験の準備を始めていた。

自分が試作した魔導エンジンで息子と息子の友人を殺しかけているというのに、まったく懲りていないようだ。

「この『タイプC』が、タイプA・Bのノウハウから生まれた、一番まともなやつだ」

「おい、ちよつと待て！」

しれつと飛んでもない発言をする父親に、優人が食って掛かった。

「じゃあ、俺達にはまともじゃないヤツのテストをさせたつてのか!？」

「何を怒ってるんだ？」

声を荒げて突っ掛かってくる息子に対し、一郎は頭上でクエスチョンマークを踊らせる。何故優人が怒っているのかが分かっていないらしい。

「実験に失敗は付き物なんだ。それに失敗は成功の母の友達の叔母と言うだろう?」

「さつきよりも遠くなってるじゃないかっ！て言うか、まず失敗しないことを優先しろ！」

「どうやら『ストライカーユニットの父』の中では、『失敗⇨成功へ一步前進』という方程式が成り立っているようだ。」

失敗は成功の為に重要なプロセスだということは理解出来る。しかし、宮藤一郎の場合は避けて通れたはずの失敗をわざわざ経験しているようにも思える。

ハルトマン同様、天才故に少しズレた性格をしているのだろうか。でなければ、立派なサイコパスである。

元々、優秀な技術者であると同時に相当な変わり者でもあった一郎だが、その変人ぶりには以前よりも酷くなっている。少なくとも優人はそんな気がした。

研究所の爆発が原因で大事なところのネジを失くしてきてしまったのかもしれない。

「まあ、とは言っても……」

額に青筋を浮かべる息子を他所に、一郎は実験に話を戻した。

「これからの実験結果から耐久性等の安全面を考慮して、『タイプC』の稼働時間は1分以内に制限する」

「んで、その『タイプC』はどいこに？」

「ん……」

優人の問いに答える代わりに、一郎は格納庫の奥を指差した。

視線を移すと、キャットウォークの前でズラリと横一列に並べられた12基の発進ユニット——言うまでもなく、501メンバーのユニットが固定されている——が目についた。

いつもの間にか。ルッキーニが自分のストライカーユニット——G55[〃]チエンタウロ[〃]の固定された発進ユニットの上で猫ように丸くなっている。優人とシャーリーを待っているうちに眠くなってしまったのだろう。

そして、一郎の人差し指が示しているのは別の発進ユニット。そこに固定されているストライカーユニット——優人の新しい愛機である紫電二一型だった。

「ま、まさか……」

優人の顔が一気に青ざめる。父親の方へ向き直り、確かめるように訊くと、一郎は深く頷いてみせた。

「お前の紫電改を使わせてもらった」

試作魔導エンジンという名の危険物が、漸く届いた新型ストライカーユニットに載せられていた。それも無断でだ。

怒りにワナワナと震えながら優人は射殺さんばかりの鋭い視線で睨み付けた。

——このクソ親父があああああつ！

優人がそう叫ぼうするよりも一足早く、基地の警報がけたたましく鳴り響いた。ネウロイの出現を報せる警報だ。

「敵襲!?!」

「まだガリアに残党がいたのか!?!」

警報を聞いたバルクホルとシャリーーの表情が、一瞬で真剣なものへと変化する。

お昼中のルツキーニも目を覚まし、「ふああ」と可愛らしい欠伸を漏らしている。眠っている状態でも神経を研ぎ澄ませている……というわけではなく、単に警報がうるさくて起きてしまったのだ。

「何だ? 火事か?」

「……父さん、黙ってて」

空気を読まずに天然な発言をする父に優人が苛立っていると、警報に続いて航空団司令の凜とした声がスピーカーから流れた。

『緊急事態発生! ガリア国境付近に残存ネウロイが集結してブリタニアに接近中! ストライクウィッチーズは、直ちに戦闘態勢を整えて出撃してください!』

ミーナの指示がスピーカーに乗って届くなり、格納庫にいたウィザード1名を含む4名の航空歩兵はそれぞれの愛機へと駆け出した。

現在、基地にいる航空歩兵は外出中の芳佳、リーネを除いた10名。そのうちサー

ニヤとエイラは夜間哨戒に備えて待機中で、サーニヤに至っては昨晚の夜間哨戒で魔法を使い果たしている。出撃は難しいだろう。

また、戦闘隊長の坂本は魔法力の減退——特にシールドの弱体化が顕著なことを理由に出撃を禁じられている。

以上のことを考慮すると、ネウロイの迎撃に出られるのは優人を含む7名となる。

「……………あつ!?!」

バルクホルンと共にストライカーユニットのある発進ユニットへと向かっていた優人だが、ある重大な問題に気付き足を止める。

「?……………優人、何をしている!?!出撃だぞ!」

「FW190D-6」の魔導エンジンを始動させたバルクホルンが、優人に向かって叫んだ。

「……………ない」

「ん?」

「……………ストライカーユニットがないんだよ」

「なに!?!」

今朝届いたばかりの紫電改こと紫電二一型は、愚父が息子に無断で信頼性の欠片もない試作エンジンを積んでしまっている。とてもじゃないが危険過ぎて飛ぶことなど出

来ない。

予備機として保管されていた零式艦上戦闘脚二二型甲も、爆発しかけた“タイプA”ごと凍結封印してしまっているため使用不能になっている。

「おいおい、どうするんだ？」

シャーリーが訊ねると、優人は少し考えた後に答えた。

「とにかく、お前達は先に出撃してくれ！俺は……」

「優人。タイプCを搭載したお前の紫電改ならすぐにでも——」

一郎が口を挟んできたが、優人はそれを無視して言葉が続ける。

「坂本の零式を使わせてもらおう。ミーナの許可が降り次第すぐに追い掛ける」

「……分かった。先に行くぞ！」

そう言うと、バルクホルンはシャーリーとルツキーニを引き連れて空へと上がっていった。

エンジン音を響かせながら蒼穹に消え行く戦友達を見送ると、優人は制服のポケットからインカムを取り出した。

「さて、さっそくミーナに……」

「優人！」

「うわっ!？」

数メートル程後ろにいたはずの一郎の顔が、目の前に突然現れた。驚いた優人は、危うく手からインカムを落としそうになった。

「何故、紫電改で出撃しない？」

「何故って……テストも済んでない試作段階のエンジンが載ってる機体なんて、危なくて使えないんだよ！」

「父さんが造ったエンジンだぞ！お前は父さんのことが信用できないとい——」

「うん、出来ない」

一郎が言い終える前に、優人はハッキリ「信用出来ない」言い放つ。息子の無慈悲な言葉は扶桑刀の切っ先よりも鋭く、父の心に突き刺さった。

「今度は大丈夫だ！爆発も空中分解もしない！まともに飛べることはもちろん、紫電改の性能も向上しているはずだ！」

「……本当？」

「本当だとも！」

「……………」

「……………」

「……………はあ、分かった信じるよ」

懸命に訴え掛ける父親に根負けした優人は、溜め息混じりに了承する。

正直に言つて信じたわけではない。しかし、一郎は身寄りのない自分を引き取り、実子違わぬ愛情を注いで育ててくれた大恩人だ。

そのことを考えると、優人はどうしても一郎に対して甘くなつてしまふ。無論、芳佳ほどではないが……。

「おお！それでこそだ！さあ、早く始動してみてくれ！」

一郎に急かされ、優人はすぐさま紫電C型（仮称）を装備する。

（さすがに、始動した途端に爆発……何てことはないよな？）

一抹の不安を抱きながらも、優人は意を決して魔法力を発動し、試作魔導エンジン“タイプC”を始動する。すると、基地の3分1ほどはあろうかという巨大な魔方陣が展開され、同時に出現したプロペラ状の呪符が回転を始める。

「——ッ!？」

優人は目を見開いた。魔導エンジンによつて増幅された魔法力に身体が震える。

それは歓喜の震えだった。零式シリーズや紫電二一型では得られなかつた圧倒的な出力。優人はそれを全身全霊で感じていた。

（凄い……凄いぞ、このエンジン！）

501の中でも、スバ抜けて強大な魔法力を有する宮藤兄妹。一郎の試作した“タイプC”は、栄二一型や誉二一型では持て余し気味であつたそれを存分に活かせるもの

だった。

(いける!)

凄まじい魔法が優人の周囲に旋風を巻き起こす。『タイプA』のように暴走する気配も、今のところはない。

「宮藤優人、出る!」

側面の武器コンテナからS—18対物ライフルを取り出すと、優人は仲間を追って飛び立った。

◇ ◇ ◇

同時刻、ドーバー海峡——

先行したバルクホルン、シャーリー、ルツキーニの3人は、ケツテを組んでドーバー上空を飛行していた。

「ミーナによると、敵は超低空から侵入してきた20機以上の編隊だ!小型らしいが、油断はするなよ!」

太陽の光を反射してキラキラ輝く洋上を進みながら、バルクホルンは僚機の2人に告げる。

シャーリーからは「りょうかい」という気の抜けた返事が、ルツキーニからは「任せて♪」とお気楽な返事が返ってきた。

緊張感の欠片もないリベリオンとロマーニヤの仲良しコンビにバルクホルンは肩を竦めるも、特に小声を言うこともなく周囲に目を凝らしてネウロイを探し始めた。

敵ネウロイは、レーダーに引つ掛からない高度100m前後の超低空を飛行している。索敵は目視で行わなければならないので、かなり近づかなければ敵を視認できそうにない。

夜間じゃないだけまだマシだが、感知系の固有魔法が使える仲間が同行していないのは痛かった。

「いたっ！見つけたよ！」

一番視力の良いルツキーニが敵影を捉えた。彼女等から見て2時方向、高度はなんと予想よりも大部低い高度20メートル。

驚愕する3人だったが、即座に高度を下げて交戦状態に突入した。

(中型が4機だけ？子機を含めて20機以上、って聞いてたのに……)

降下しながらシャーリーが首を傾げる。レーダーに映らない超低空、というよりは海面を滑るように接近してきたネウロイは、直径4メートル程の円盤形小型ネウロイが4機。ミーナが報告してきた数よりも明らかに少ない。

良く見ると、上部表面に小さい柱のような突起物がいくつか確認できる。先端がビーム砲になっていゝらしく、赤い光を放っている。その様は、黒い蠟燭を立てた真つ黒なバースデーケーキにも見えた。

飛行方法も、他のネウロイや人類側の航空機や飛行脚とは違っている。空中停止した状態から直角の軌跡を描いて飛行していた。

「変わった動きをするネウロイだ」

ネウロイを観察しつつ、バルクホルンは呟く。その隣ではルツキーニがM1919A6を構え、ネウロイに照準を合わせていた。

M1919A6——正式名称はブラウニー・M1919A6——は、リベリオン陸軍で採用されていた水冷式の重機関銃M1917を改良し、空冷とした銃ものである。

ルツキーニが使っているウィッチ用改良版は歩兵用の三脚を取り外し、250発入りの箱形マガジンを固定。木製の銃床とグリップを装着し、銃口にはフラッシュサプレッサーを装着している。

その重量はかなりのもので発射速度は遅いが、単純な構造の上に部品点数も少なく、故障することが稀なために信頼性は高かった。

装弾数の多い他、カールスラント製のMG42よりも有効射程が1.3倍ほど長く、弾丸が比較的まっすぐ飛ぶことから中遠距離での精密射撃にも用いられる。

ちなみに、ロマーニヤ空軍出身のルツキーニが何故M1919A6を使用しているのかという点、ロマーニヤ本国から持ってきていた自分用の銃を失くしてしまい、見兼ねたシャーリーが自分の予備銃を渡したためである。

「ニヒヒ〜♪いっただき〜!」

ネウロイの動きは奇妙なものだが、行動パターンは単純で速度も然程速くはない。射撃の腕が立つ自分ならば容易に撃ち落とせる。

そう確信したルツキーニは、狙点を定めてトリガーを絞ろうとする。その時だった。

4機中2機の小型ネウロイの表面から突起が分離し、超小型の子機と化して3人のウィッチ目掛けて躍りかかっていた。

「じゃ!」

突然のことに、ルツキーニは悲鳴を上げて驚く。どうやら突起物の正体は、本体の小型ネウロイと分離・合体が可能な子機だったようだ。いや、子機に見せかけた新たな武器と言うべきか。

小型1機に超小型が6機。先端に砲口を備えた槍のような12機の子機は、航空ウィッチを凌駕する運動性を見せていた。

空気を切り裂きながら縦横無尽に飛び回り、四方八方からウィッチーズに襲いかかる。

「何だ、この武器は!？」

両手のMG42で応射しつつ、バルクホルンは回避行動に入る。

「ロケット弾、じゃない!？」

「うじゅあ!?!何これえ!！」

今までに無い、ネウロイの新たな戦法。シールドで防御して攻撃を凌ぎながら、シャーリーは戸惑いを孕んだ声音で呟き、ルツキーニは狼狽えた。

高速で動き回る6つの短槍を躲し続け、切っ先から迸り出る赤い閃光を回避する。これは統合戦闘航空団のウィッチである彼女等だから出来ることだ。

並みの航空ウィッチでは槍の追撃を回避仕切れず、一瞬で身体とストライカーを扶られ、絶命することだろう。

「おのれ!！」

バルクホルンはMG42を乱射し続けた。やがて、槍型子機はウィッチ達と距離を取り、本体である小型ネウロイに結合する。

爆発的な高速移動と、口径以上に強力なビーム攻撃に必要なエネルギーをコアを持った本体から供給されているらしい。

槍型子機は思った以上に厄介だった。バルクホルンが12機のうち4機を撃破したが、逆に言えばバルクホルンほどのウルトラエースであっても4機撃ち落とすのが精一

杯だと言うことだ。

「うじゅく、ナニアレエ……」

根っからのアウトドア派で、決して体力が無いわけではないルツキーニが早くも疲労困憊となっている。

「アタシ達の周りをぐるぐる……目が回るよお……」

「高速飛行する移動砲台、つてとこか」

「厄介だな」

ネウロイを分析するシャーリーに、バルクホルンが応じる。

再び分離される前に本体諸共撃葬ろうと、3人は攻撃を仕掛ける。しかし、敵は甘くない。後方に下がった先程の小型2機と入れ替わる形で、残りの2機が黒い槍を射出した。

「ああ、もうっ!」

「くっ!?!」

シャーリーがやや苛立った声を漏らす。バルクホルンも奥歯を噛み締め、ネウロイを睨み付けた。

ネウロイは航空ウィッチのようにロツテを組み、ローテーションで攻撃を行うことで隙を作らないつもりだ。

バルクホルン達3人は、最初の超小型子機迎撃で弾薬を大幅に消費してしまっている。また子機を飛ばされたら弾切れになるかもしれない。

(これほどのネウロイが残党だ?!?)

バルクホルンの額に嫌な汗が滲んだのとほぼ同時に、何か彼女を脇を高速で通り過ぎて行った。ネウロイの槍型子機だと思ったバルクホルンは、反射的に視線と左手のMG42を向ける。

「優人っ?!」

ネウロイへ向かっていく機影の正体に気付いたバルクホルンは、ハッと目を見開く。

純白の第二種軍装と、扶桑のストライカーユニット——紫電改を纏ったそれは、宮藤優人だった。

「あれが敵か」

ネウロイを視認した優人だったが、彼はスピードを緩めることなく突撃していく。

優人はS-118対物ライフルを構えると、後方で待機中だった小型ネウロイも子機を瞬く間に撃破した。が、残りの2機がすぐさま報復に出る。12本の黒い槍先をすべて優人に向けたのだ。

「うじゃ?! 優人、危ない!」

「そいつらの武器は厄介だぞ!」

ルッキーニとシャーリーが順に叫ぶ。援護しようにも彼女等の位置から撃てば優人にも当たってしまう。

(さあ、来い。もつと近くまで！)

念じた通り、4つの子機は優人に急接近。彼の周囲をグルグルと回り始めた。

一見ピンチなようだが、優人には策があった。彼が思うに新たなネウロイの武器は彼にとつて相性の良い相手だ。父親が紫電改に載せた試作魔導エンジン「タイプC」の調子も良い。

優人は目を閉じて深呼吸した後、自身の固有魔法『凍結』を発動させる。魔法力から変換された冷気によって

、すべての子機は一瞬で凍結。飛行能力を失って海面へと落下していった。

「うっしやああああ！」

「その手があったか！」

ルッキーニが感心したように声を上げ、シャーリーは優人の健闘をガッツポーズで称えていた。槍型子機がいなければ恐くない。優人は最後の仕上げにかかった。

S—18対物ライフルを構えて狙点を定めると、残る2機の小型ネウロイに20ミリ魔導弾を数発叩き込んだ。

円の中心にあったコアを装甲ごと粉々に砕き、ネウロイは白く輝く破片となって四散

した。

「ふう……」

“タイプC”の稼働試験も兼ねた実戦は終了。滴る汗を制服の袖で拭いながら、優人は一息吐く。彼は高揚していた。父親が試作したエンジンは素晴らしいものだった。

諸外国の主力ユニットに比べて呪力不足な零式の魔導機に苛立つこともあったが、この“タイプC”には全く不満を感じない。まるで足枷から解放されて自由になった気分だ。

『優人！優人、聞こえるか!?!』

インカム越しに一郎の声が消えてきた。優人はすぐさま“タイプC”の試験結果を父親に伝えようとする。

「父さん！今、”タイプC”のテストが終わった！素晴らしい性の——」

『すまない、お前に一つ言い忘れてたことがある』

興奮気味な口調で語ろうとする優人を遮り、一郎は冷静な声音で言葉を続ける。

『その“タイプC”なんだが、高出力と引き換えに燃費が凄まじく悪い。つまり……』

一郎は一拍置いてから、さらに続けた。

『全開戦闘を5分も行えば、燃料をすべて使い切る』

「……………え?……………」



くおまけ『宮藤優人の思い出・父親編』く

一郎「優人！」

優人（6歳）「なに？」

一郎「ほら、新しい鉄砲のオモチャだぞ！」

優人（6歳）「あつ！ありがとう！」

数年後――

一郎「優人！新しい本買ってきたぞ！」

優人（10歳）「あ、ありがとう……」

さらに数年後、ブリタニアのストライカーユニット共同研究所――

一郎「お前のベッド温めておいたぞ！」↑優人のベッドで寝ている

優人「……出てけ」

第16話「瘴気病とベイカー兄妹」

ブリタニア連邦グレートブリテン島南東部――

兄の優人が、マッドサイエンティスト――もとい、ストライカーユニットの開発者である父親の実験に付き合ひ、散々な目に遭つてゐる頃。妹の芳佳は、リーネと一緒に近くの街までシヨッピングに来ていた。

501基地から程近い場所にある街は、首都ロンドンへ鉄道が通じてゐる比較的小規模な湾岸都市だった。家並みには中世の面影が残り、落ち着いた雰囲気は街全体に漂つてゐる。

今日はバザーやつてゐるらしい。そのせいか、街はいつもより賑やかだ。

「あれ？リーネちゃん？」

バザーに集まつた民衆でごつた返す街中で、芳佳がキョロキョロと辺りを見回してゐた。

彼女と一緒に遊びに来てゐるはずのリーネが見当たらない。バザーに招かれた大道芸人のパフォーマンスに芳佳が見とれてゐるうちに、いつの間にかリーネとはぐれてしまつてゐた。

「リーネちゃん！どこお？」

人混みの中から親友を懸命に呼び掛けるが、相手からの返事はない。

遠くを確認しようと背伸びするも、如何せん周りは15歳の扶桑人女性よりずっと背の高いブリタニア人ばかり。小柄な芳佳では齒が……いや、背が立たない。

「う〜ん……どうしよう……」

芳佳が眉間に皺を寄せて、困ったように呟いた。その時だった。

——ドンツ！

「わわっ!?!」

突如、何者かに突き飛ばされ、芳佳は短い悲鳴を上げながら石畳に倒れる。転んだ拍子に強打した頭部に激痛が走った。

「いたた……あれ？鞆は？」

貴重品や買物物の戦利品を収めた鞆が奪い去られていた。持ち物の紛失に気付いた芳佳は、すぐさま顔を上げて辺りを見渡す。

「あつ！待って！」

自分の鞆を手を持った人影を遠目で捉えた。ひったくりの犯人は、芳佳よりも幼い風貌の——年齢は12、3歳くらいだろう——少年だった。彼は鞆の持ち主に背を向けたまま、一目散に走り去っていく。

立ち上がったて追い掛けようとする芳佳だが、思ったより頭を強く打っていたらしく視界が定まらない。一方の犯人は人混みを走り向け、細かい路地へと入っていった。

このままでは見失ってしまう。芳佳はズキズキと痛む頭を押さえながら、必死にひつたくり犯を追い掛けた。

——バキッ！

ふと何かを殴打したような鈍い音が芳佳の耳に届く。それは、ひつたくり犯の子どもが逃げ込んだ路地の向こうから聞こえてきた。

狭い路地を進んで反対側の通りへ出てみると、2人の少年が向き合っていた。うち1人は、芳佳が追っていたひつたくりの少年だった。左頬を赤く腫らし、石畳に叩きつけられている。

ひつたくりの少年がヒリヒリと痛む頬を押さえながら顔を上げると、自身を睥睨するように見下ろしているもう1人の少年と目が合った。

「へ、ヘンリーー！」

「おい、ジョン！こういうバカな真似するんじゃないやねえ、つて前にも言ったよな？」

2人目の少年が、ひつたくりを働いた少年に叱声を浴びせる。芳佳の兄——優人と同じか、少し歳上に見える。短く切り揃えた金髪に蒼い瞳、がっちりとした逞しい身体つきが印象的だ。

「それに女の子を狙うなんて、男として最低だぞ！恥をしれ！」

ヘンリーと呼ばれた2人目の少年は、さらに憤然と怒鳴りつけた。

その劍幕に圧されたひったくりの少年——ジョン——は「ひいつ？」と情けない悲鳴を上げると、芳佳からひったくった鞆をその場に捨てて、脱兎の如く逃げ去っていった。

逃げるジョンの後ろ姿を見て、ヘンリーはフンツと鼻を鳴らした。

「ほら、これあんたのだろ？」

ヘンリーは芳佳の鞆を拾い上げて埃を払うと、持ち主に返した。

「あ、ありがとうございます！」

無事戻ってきた鞆を大事そうに抱き締めながら、芳佳は満面の笑みで礼を述べる。

純粋な謝意の言葉と、向日葵のように眩しい笑顔を向けられて照れ臭くなったヘンリーは、頬に紅を灯してそっぽ向く。と思いきや何かに気付いたらしく、再び芳佳に視線を走らせた。

「おい、怪我してるじゃねえか！」

「あつ……」

ヘンリーに指摘され、芳佳は鞆が戻った安堵で忘れ掛けていた頭の怪我を思い出す。

「大丈夫です。これくらいへっちゃ——」

心配かけまいとする芳佳だが、「へっちゃやらず」と言いかけたところで軽い目眩を覚

えてふらついた。

「無茶すんな。手当てしてやるから家に来なよ」

そう言つて、ヘンリーは右手を差し出してきた。芳佳は自然な動作で彼の手を取つた。

ヘンリーはケンカ慣れしたタコの多い拳をしている。ぶつきらぼうながらも、熱い想いを感じる手だった。

「ヘンリー・ペイカーだ」

「宮藤芳佳です」

2人は簡単な自己紹介を済ませ、ヘンリーの家へ向かった。

◇ ◇ ◇

一方、その頃――。

「芳佳ちゃん？ 芳佳ちゃん、どこお？」

ブリタニア空軍軍曹リネット・ビショップ。現在、バザーの会場にて異国の戦友――
宮藤芳佳を鋭意搜索中。



数十分後――

「……………えっ?」

信じられない光景が視界に飛び込んできて、芳佳が言葉を失った。彼女がヘンリーに案内されたのは、建物と建物の中に存在する路地裏だった。

廃棄資材や布を利用して造られたお粗末な風貌のあばら屋が、寄り添うように並び建っている。ヘンリー達はこれらを住処として生活しているらしい。

芳佳は自分の目を疑った。彼女からすれば、とても家と呼べるようなものではない。しかし、ボロボロの衣服を着用したみすぼらしい人々の姿があり、そこかしこから煮炊きの煙が上がっている。人間としての生活空間が確かに構築されていた。

この路地裏が、ネウロイの侵攻でヨーロッパ大陸を追われた身寄りのない避難民の溜まり場だと、芳佳は後に知ることとなる。

「……だ」

ヘンリーは建ち並ぶあばら屋の一つに入ると、芳佳に着いてくるように促した。

ボロ切れでできた玄関口の暖簾を潜り、ヘンリーの家に上がり込む。小さなスペースを区切っただけの屋内だが、小さなダンスやテーブルに数人分の椅子等が置かれてお

り、それらが芳佳に人の暮らしを感じさせた。

「そこに座りなよ。茶があるけど、飲むか？」

「あ……頂きます」

部屋の景観を観察することに夢中となっていたせいで、ヘンリーが訊ねてから芳佳が応じるまで数瞬ほど間があつた。

彼女の心中を察したのか、ヘンリーは肩を竦めながら言葉を付け加えた。

「こんなところでも歴とした家だよ。少なくとも、俺達にとつては……ね」

そう言われ、芳佳は後悔と羞恥心で顔を紅潮させた。自分がヘンリーの暮らしぶりを好奇な目で見てしまったことに負い目を感じているのだ。

一方のヘンリーはと言うと、そういった視線に慣れているのか。或いは、芳佳の慚愧の念を感じ取つたのか。安心させようと彼女に微笑みかけた。

「ごめんなさい……」

蚊の鳴くような小さい声で謝罪した芳佳は、気詰まりな想いを抱えつつ椅子に腰を下ろした。端切れを縫い合わせ、綿を詰め込んだクッションが尻に当たり、椅子の冷たさを緩和してくれた。

（私、最低だな……）

自己嫌悪に陥っている芳佳を余所に、奥のスペースを仕切っている小綺麗なカーテン

が開かれ、病院着のような寝間着姿の小柄な少女が顔を出した。

「お兄ちゃん、お客さん？」

彼女はヘンリーの妹らしい。兄と同じ金髪蒼眼の美少女だが、身体も髪も顔も声も、そして生命も細い。存在そのものが、か細く弱く、透き通ってしまいそうな。そんな印象を受ける少女だった。

「ウエンデイ！寝てなきやダメじゃないか！」

少女——ウエンデイというらしい——が姿を見せるなり、ヘンリーは血相変えて妹へ駆け寄った。

奥の部屋を覗き見てみると、清潔さが保たれている真つ白やシートと布団の用意された簡易ベッドが確認出来る。

衛生面に関する一定の配慮が成された寝室と、ウエンデイに対するヘンリーの言動を鑑みるに、彼女は病人のようだ。

「ごめんなさい。でも、今日はちよつとだけ具合が良いから……」

兄と言葉を交わした後、ウエンデイは芳佳に視線を移して訊ねる。

「芳佳だ。宮藤芳佳」

芳佳が名乗るよりも早くヘンリーが説明する。

「芳佳って言うの？私はウエンデイ。ウエンデイ・ベイカー、よろしくね」

「うん。よろしく、ウエンディちゃん」

屈託のない笑顔で挨拶するウエンディに、芳佳もまたニツコリと笑みを湛えた表情で応じる。

弱々しいが明るく、優しそうな顔立ちのウエンディ。この子とは良いお友達になれそう、と芳佳はそう思った。

「大通りでジョンのヤツに絡まれて怪我したんだ。包帯と消毒液、まだ残ってたよな？」
「うん、その棚にあったと思うよ。芳佳、今お茶淹れるね」

ウエンディは兄の傍らを足早にすり抜け、代わりにお茶ね用意を始めた。ヘンリーが何か言おうとしていたが、無駄だと思っただけ、出かかった言葉を飲み込んで包帯と消毒液を探した。

「はい、どうぞ」

お茶の注がれたカップと共に差し出されたウエンディの右腕は、信じられないほど色素が薄く、青白い。北欧育ちのエイラやサーニヤが持つ美しい白磁の肌とはまた違う。不健康を通り越した生気を感じられない、そんな白さだ。

「……ありがとう」

少しばかり間を置いて、芳佳は礼を述べる。出されたお茶を飲んだ彼女は、あまりの不味さに顔を歪めた。

扶桑茶のような深みもなければ旨味もない。ただ渋いだけの、野草をそのまま煮込んだのではないかという不味い茶。

それでもベイカー兄妹の振る舞いからして、彼らにとつては上等なものらしい。ならば、飲んでみせるのが礼儀というものだ。芳佳は苦悶の感情を押し殺して飲み干した。「芳佳って、もしかして扶桑のウィッチ?」

ふとウエンデイが、芳佳のセーラー服と水練着を物珍しそうな目で見ながら訊ねる。水練着の上にセーラー服を重ね着しているからといって必ずしもウィッチというわけではないが、欧州ではセーラー服を着る扶桑人少女⇨扶桑海軍ウィッチ、というイメージが定着しているのかもしれない。

「うん。扶桑から来て、今はストライクウィッチーズにいるの」

芳佳は空になったカップをテーブルに置いて応える。すると、何かを思い出したウエンデイが重ねて訊いてきた。

「ストライクウィッチーズ?もしかして宮藤芳佳って、あの扶桑海軍の宮藤芳佳軍曹!」
「えっ?あの、って……どの?」

質問の意味が良く分からず、芳佳は首を傾げる。

「決まってるじゃない!大ベテランのお兄さんと2人でネウロイのマスターコアをやっつけて、ガリアの巢を破壊した英雄!宮藤兄妹の妹の方でしょ?」

「えっ……あ、うん。そだよ」

爛々と瞳を輝かせるウエンデイと、病人とは思えない彼女の熱弁ぶりに困惑する芳佳だったが、あまりに眩し過ぎて思わず肯定してしまふ。

芳佳にとつて預かり知らぬことだが、ウォーロックの件とブリタニア空軍の實質的、最高指導者であつたトレヴァー・マロニー大將の不祥事を表沙汰にしたくないブリタニア軍司令部及び連合軍上層部の判断で、ガリアの解放は扶桑海軍遣欧艦隊司令長官——赤坂伊知郎中將の立案した作戦と501部隊の活躍によつて成されたことになっている。

さらにはストライカーユニットの父——宮藤一郎博士の息子であり、扶桑海軍で初陣を飾つて以降、リバウ、ブリタニアと最前線で戦い続けてきた大ベテランウィザードの宮藤優人大尉。

同じく博士の息女にして、基礎訓練も無しに統合戦闘航空団へ異例の入隊を果たした扶桑海軍期待の新人ウィッチ——宮藤芳佳軍曹。

連合軍は2人の活躍と家族関係をプロパガンダにも利用し、大々的に宣伝していた。宮藤兄妹は一躍時の人となつた。

「わあ！ガリアを救つた英雄に会えるなんて、夢みたい！」

世界的英雄として名を馳せた宮藤芳佳と直に合うことができた。ウエンデイは今、喜びと感動で胸が一杯だ。

一方の芳佳は大したことを成し遂げた自覚も、自分が英雄だという認識もないため、有名俳優や著名なミュージシャンでも会ったかのようなウエンディの反応に当惑を禁じ得なかった。

「ゆっくりしていけよ、英雄さん。飯くらい食わせてやるからさ」

消毒液と包帯の入った救急箱をテーブルに置くと、芳佳の顔を見て告げた。

「えっ……いいんですか？」

芳佳は目を丸くした。どう見ても、扶桑人である芳佳の尺度からしても……いや、おそらくはブリタニアの基準でも、ベイカー兄妹が裕福な生活をしているようには思えない。

「構わないさ。食事は大勢の方が楽しい」

「それに袖振り合うのも多生の縁、って……扶桑の諺でしょ？」

ヘンリーの言葉をウエンディが継いだ。芳佳は2人の申し出を喜んで受けることにした。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

間も無く昼食となったが、ベイカー兄妹に振る舞われた食事は不味かった。とにかく、不味かった。他に表現のしようがない。

パンはパサつき、甘味の欠片も無い。主食の豆のスープは、やはり野草のような青臭

さとたんぱく質の粘りつく感触がある。粘土を水に溶いて、具代わりに雑草を煮込めばこうなるだろうか。何をどう味わえばいいのか、芳佳には分からない。

しかし、貧しい生活を強いられているベイカー兄妹が精一杯もてなしてくれているのだから、少なくとも坂本の肝油よりは喜びを持ちつつ、芳佳は料理の咀嚼に専念した。

そして、横須賀の実家や501基地での暮らしがどれほど快適で、尚且つ自分がいかに恵まれた生活を送っていたか。そのことを芳佳は身を以て実感することとなった。

（世界には、食べ物にも困る人がいるんだよね……）

授業や新聞だけで貧困と飢餓の実態を知った気になっていた。己の不明を深く恥じる芳佳にとって、ウエンデイが久しぶりの客である自分との会話を喜んでくれることが唯一の救いだった。

ウエンデイは重い病気を患い、もう2年近く家を出ていないという。それ故、芳佳が話に夢中になって楽しんでいった。

扶桑の横須賀で診療所を営んでいる実家の話や、横須賀第四女子中学校、501基地での思い出や個性的なウィッチ達について等々。ウエンデイにはどれも興味深いものだった。

食事が終わると、芳佳はヘンリーに紙と筆記用具を借りて、ルールを簡略化した将棋のようなボードゲームを作った。この簡略将棋は子どもの頃に優人が発案したものだ。

芳佳は兄ほど器用ではないので不恰な作品となつてしまつたが、それでもウエンデイは大いに喜び、ヘンリーもそれなりに笑つてくれた。

やがて、ウエンデイが眠りに就くとヘンリーはバザーの会場まで芳佳を送つてくれた。

「宮藤、ありがとう。あんなに楽しそうな顔をしたウエンデイは久しぶりだよ」

笑顔で礼を述べるヘンリーは本当に嬉しそつたが、表情はすぐに険しいものへと變つていつた。

「けど、もう顔を出さないでくれ……」

「……えつ？」

芳佳は一瞬間聞き間違えか、もしくは冗談など思つた。しかし、笑みが消え失せたヘンリーの表情が、どちらでもないのだということ物語つていた。

「でも、ウエンデイちゃんとまた会つて約そ——」

「いいから！もう来ないでくれ！」

ヘンリーは語気を強めた声で芳佳の言い分を遮り、事情を説明し始めた。彼の口から語られたのはウエンデイのような少女にとつて、あまりに過酷な現実だつた。

ヘンリーとウエンデイは、大陸から避難してきたブリタニア系ガリア人の兄妹だつた。ネウロイ侵攻前は、両親と共にパ・ド・カレーで暮らしていた。

ダイナモ作戦時、ガリアのパ・ド・カレーから多くの民衆がドーバーを渡ってブリタニアに避難していた。だが、全員が全員ネウロイの支配地域から逃げ果せたわけではない。取り残された人々も少なからず存在した。ベイカー兄妹もそうだ。

ヘンリーとウエンデイは、自分達と同じくガリアに置いてきぼりを食らった人々の集団に身を置き、巢やブラウシュテルマー——生物にとつて有毒な瘴気を撒き散らす莖状のネウロイの子機——を避け、僅かに残されたセーフゾーンにてネウロイから身を隠し、泥水を啜り、木の葉を噛り、何とか生き延びていたのだ。

そして、ダイナモ作戦から半年ほど経ったある日。打ち捨てられた古い漁船を修理して、どうにかブリタニアへ脱出したのだと言う。

しかし、この時既にウエンデイの身体は瘴気に蝕まれていた。一度だけ、ブラウシュテルマーに近付き過ぎてしまったことがあったそうだ。

土地や金属を腐らせ、人体にも悪影響を及ぼすネウロイの瘴気。コアを有した中型以上のネウロイが撒き散らす程度ならば比較的濃度が薄く、人体へ直ちに影響が出るほど強い毒性はない。だが、ネウロイの巢を覆っている黒雲の渦やブラウシュテルマーが発している瘴気は濃度がかかなり高く、毒性も非常に強い。

ウィッチやウィザードのように魔法力で守られていれば別だが、それ以外の人間が瘴気の充満した地域へ迂闊に近付こうものなら、一瞬で死に至る。

それでも苦しみが長引かないだけまだマシだ。ウエンデイの場合、僅かながらに魔法力を——瘴気に対する抵抗力を有していたことが災いし、瘴気病——人類側の仮称——という形で彼女の身体を蝕んでいた。

緩慢な呼吸器及び循環器の障害をはじめとする複数の病状。それに伴う身体的苦痛と、死への恐怖からくる精神的苦痛。

ネウロイによつてもたらされた死病によつて、ウエンデイの死期は徐々に、しかし確実に近付いていた。

「お前もウィッチなら分かるだろう！瘴気に当てられたウエンデイはもう末期なんだ！あと3カ月、もしかしたらひと月も保たないかもしれない！」

「ネウロイの瘴気で、そんな病気に……」

「瘴気病を知らないような顔をするな！」

声を張り上げながら、ヘンリーは涙を流した。怒りながら泣いているのだ。

「お前と出会つて、友達になつて、ウエンデイが生きたいと願つたらどうするんだ！最近になつて、ウエンデイは漸く死を受け入れられるようになつたんだ！お前とすごして思い出ができたなら、希望を持つたら死ぬのが恐くなる！あいつが……ウエンデイが死に怯える姿なんて、俺は見たくないんだ！だから、もう来ないでくれ！」

ヘンリーは慟哭した。ポロポロと大粒の涙を流し、嗚咽混じりの声音で芳佳に言い募

る。彼の悲痛な叫び声が芳佳の胸に突き刺さる。

（ウエンデイちゃん、死ぬ。そんな……あんなに良い子なのに……せつかく、友達になれたのに……）

ウエンデイの命が、あと一カ月もしないうちに失われる。その事実が、無形のハンマーとなって芳佳の頭をしたたかに叩きつけた。

ショックのあまり身体が硬直し、全身の感覚が一時的に麻痺している。信じたくなくなかった。嘘であつて欲しかった。

「何とかならないんですか!? ロンドンの病院で診てもらうとか——」
「病院にかかるような金があるように見えるか!？」

ヘンリーは叫び返す。そもそもウエンデイの病気は症例が少ないこともあつて、殆んど研究が進んでいない。当然、有効な治療法などは確立されていない。

薬もあるにはあるが、病気の進行を遅らせる程度の効果しかない。しかも製造に漕ぎ着けているのが、扶桑本国とノイエ・カールスラントの2ヶ国のみで、試作段階故に生産数も非常に少ない。

「だったら、私が治療します。私は治癒魔法が使えますー!」

嘯く芳佳だったが、彼女はまだ治癒魔法をコントロール仕切れていない。ましてや経験したのは外傷ばかりで、死病患者の治療などやったこともなかった。

「無駄だ！体内の瘴気をすべて取り除かない限り、治癒魔法を掛けても効果は現れない」
「でも、ウエンデイちゃんは生きたいと思っただけです！私にはそう見えます！
だつたら——」

「いい加減にしてくれ！そういうのはありがた迷惑なんだよ！」

最後にそう怒鳴って、ヘンリーは芳佳に背を向けた。もう話すことは何もない、と背
中で語っているようだった。

「……………」

芳佳は唇を噛んで押し黙ると、頑なな態度を示すヘンリーを振り払うようにして走り
出した。

納得は出来なかったが、それでも芳佳は何も言い返さなかった。最愛の妹の身を案じ
るヘンリーの姿に、大好きな兄の姿が重なったからだ。

第17話「火と言葉遣いに御用心」

(なんで……どうしてなの?……)

宮藤芳佳は唇を噛み締めながら、石畳の上を歩いていった。ベイカー兄妹との邂逅によつて、彼女が味わつたもの——それは挫折だつた。故郷の横須賀を旅立つて以降、彼女が経験した大きな挫折は3つ。

1つは、航空母艦『赤城』を旗艦とする扶桑皇国海軍遣欧艦隊が大型ネウロイの奇襲に見舞われた時のこと。この時点で、芳佳はまだ航空歩兵ではなかつた。その上、治癒魔法のコントロールすらまともに出来ずにいた。ネウロイと戦うことも負傷兵の治癒も満足に行えなかつた自分が、どうしようもなく無力に思えた。

1つは、自らの独断専行が原因で大好きな兄——宮藤優人に大怪我をさせてしまった時のこと。最も近い人間の負傷という事実により、精神的な動揺が激しくなつていたため、芳佳は治癒魔法のコントロールは疎か、一時的ではあるが魔法力そのものが著しく弱体化していた。リーネに背中を押され、さらにペリーヌからも叱咤激励があつてどうにか立ち直り、危篤状態の優人を助けるに至つた。あのまま兄が死んでしまつていたら、そう考えると今でも恐怖で身体が震える。

そして、もう一つはつい先程。ウエンデイ・ベイカーというひとりの少女と出会った芳佳は、自分の技術と知識、魔法力を総動員しても助けられない重病人が——成す術もなく、死を待つだけの人間がいる。その現実を突きつけられた。

かつて芳佳と彼の兄——優人は、「自分達兄妹の魔法が届く距離にいる全ての人々を守る」と、バルクホルンに語っていた。バルクホルンの救助中の出来事というのも相俟って、兄妹揃ってかなりの熱が声音に込もっていた。映画や小説の中で主人公が言いそうな臭い台詞。思い出すと少し気恥ずかしくなるが、口にした言葉に嘘偽りなどはなかった。

だが、現実はそんなに甘くない。どれだけ強大な魔法力を有していようと、自分と兄は10代の少年少女に過ぎない。完全無欠の完璧超人でもなければ、全知全能の神でもない。死病を患ったウエンデイのように、助けられない命だつて必ず存在する。頭では理解している。しかし、感情が納得しない。

治癒魔法は魔法力の強さやコントロールはもちろん、医療知識を有しているかどうかで効力が違ってくる。薬の効能を強化する等、応用も利く。

自分に必要な知識があれば、これらを利用して瘴気病を治すまではいかなくとも症状の緩和、進行を遅らせるくらい出来たのではないか。

訓練と家事の合間に、少しでも医学を学んでおけばよかった。芳佳は後悔する。

挫折感や慚愧の念が、世界から見放されたと思えるほどの凄まじい絶望感に変換され、津波の如く押し寄せてくる感覚を味わえるのは、思春期の若者の特権であろう。

それは、まだ自分の手触りを持って世界を変えられるという万能感の裏返しでもある。見方によっては自惚れや傲慢とも受け取れるが……。

「芳佳ちゃん！」

ふと聞き覚えのある、可愛らしい声が耳朶を打った。ハッと現実に戻った芳佳が声のした方へ視線を走らせると、一緒に買い物に来ていた友人——「リーネ」ことリネツト・ビショップが、息を切らしながら走ってくるのが見えた。

「リーネちゃん！」

「や、やっと……見つけた……」

駆け寄ってきたリーネは両膝に手を置き、前屈みの姿勢となって芳佳を見上げる。

芳佳を見つけるためにかなり走り回ったのだろう。リーネは乱れた呼吸を整えつつ、汗で額に張り付いた前髪を直した。

「急に見当たらなくなつたから、心配したんだよ？」

「ごめん、リーネちゃん！」

顔の前で拝み手を作り、芳佳はばつが悪そうな表情で謝罪の言葉を述べる。

迷子になってしまったのはもちろん、ひつたくりの被害に遭った辺りから今の今まで

リーネの存在を忘れちゃったことに對しても申し訳なく思っている。

「ううん、芳佳ちゃんが無事なら私は……って、それどうしたの!」

漸く芳佳を見つけてホッとしたのも束の間。リーネは友人の頭に巻かれた真新しい包帯に気付く。

自分と離れている間に一体何があったというのか。リーネは狼狽える。

もし優人がこの場において、痛ましい姿の芳佳を目にすれば発狂しかねない。怪我の原因が他者からの暴行だとするなら、重火器を使用した報復も辞さないだろう。

「あはは……これはね……」

芳佳が事の次第を説明しようとした。その時だった。不意に何が芳佳の身体にぶつかった。それに続いて、野良犬が唸るような声が芳佳とリーネの鼓膜を刺激する。

「おい!どこ見てやがんだ、このクソガキ!」

怒鳴り声に反応して、2人は視線を走らせる。目線の先には、もろチンピラですと言わんばかりに柄の悪い連中がいた。

彼らと顔を合わせるなり、「ひっ!」と短い悲鳴を上げたリーネは、反射的に芳佳にしがみついた。

「いってえええええ!腕折れちゃったあ!」

芳佳とぶつかったらしい茶髪の男が、左腕を押さえてわざとらしく痛がる。明らか

当たり屋の手口である。ひったくりの件といい、今日の芳佳はやたら犯罪に巻き込まれる。厄日なのだろうか。

続いて、隣に立っていたスキンヘッドの男が芳佳達を鋭い視線で睨み付けてきた。

「おい！お前が突っ立てたせいでダチが怪我しちまつたじゃねえか！当然慰謝料払ってくれるんだろな？」

スキンヘッドの言葉を合図に、他の男達が芳佳とリーネを取り囲んだ。

数は10人前後といったところか。全員の瞳から、アウトロー特有の凶暴が垣間見える。何人かはナイフを手に取り、軽く振り回すことで2人の航空ウィッチを脅迫していた。

「そんなつ……ぶつかってきたのはそつちじゃないですか！それに、ちよつとぶつかつたくらいで腕が折れるなんてことありません！」

理不尽極まりない物言いに反論しつつ、芳佳はキツと男達を睨み返す。

一方、リーネはどうにかして逃げ道を探そうと頭をフル回転させていた。

「人に怪我させておいてその態度、躰がなってねえなあ」

「腕を折ってくれた礼に、一つ教育してやるか」

茶髪の男が折れたはずの左手でナイフを取り出し、芳佳の鼻先へと向ける。

「腕が折れてたらナイフなんて握れません！嘘つかないでください！」

「おいおい、今度は嘘つき呼ばわりか？つべこべ言つてねえで、さつきと慰謝料払いな！」

「嫌です！芳佳ちゃんは何もしてません！ぶつかつてきたのはあなたの方です！」

小動物の如く震えていたリーネが、庇うようにして芳佳の前に出る。友達を守らんとする意思の宿つた力強い瞳で茶髪の男を見つめ返す。

気弱な性格故に争い事が苦手なリーネだが、大切な人間や信じた人間のためならば、全てを投げ打つ強さと覚悟を持っている。聞こえて

基本的な性格は変わらないながらも、胸の奥底に秘められていた彼女の芯の強さが、宮藤兄妹の影響もあつて最近は全面に出るようになっていた。

「黙つてろデカ乳！てめえに用はねえんだよ！」

スキンヘッドの男が、粗暴かつ下品な物言いでリーネを罵倒する。

「もしかして、お友達の代わりに君が身体で払ってくれるのかなあ？」

また別の男がリーネに近付き、彼女の胸に手を伸ばしてきた。

3人目の男はセンスの悪いアロハシャツを着た浅黒い肌の持ち主で、チンピラ達の中では一番軽薄な印象を受ける。

「きやつ！？」

「リーネちゃん！」

下卑た笑みを浮かべるアロハシャツの男から親友を守るため、芳佳はリーネと入れ替わるようにして前に出た。

当たり屋という手法で因縁をつけてきた目の前のチンピラ達は、2人を解放するつもりは毛頭無いようだ。

芳佳やリーネよりもずっと背が高く、ガタイの良い男が約10人。そのうち4人は刃物を所持している。か弱い10代の少女2人で何とかなる相手ではない。

身体強化魔法を使えば容易く撃退できるのだが、芳佳とリーネは対人戦の経験はもちろん、殴り合いの喧嘩すらした経験がない。力の加減が分からず、相手に大怪我をさせてしまうだろう。

「芳佳さん、リーネさん！あなた達何をしているの!?!」

ふと声楽家を連想させる澄んだ声が、芳佳とリーネの耳朵を優しく撫でた。

チンピラ達でできた囲いの外へ目をやると、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の頼れる美しき司令——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐が心配そうに2人を見据えていた。

「ミーナ隊長!?!」

「どうして!?!」

芳佳とリーネが順に訊ねるも、ミーナが答えるより先に当たり屋をしてきた茶髪の男

が彼女に詰め寄った。

「あんた保護者さん？その娘がさあ……俺にぶつかってきたんだけど？おかげで利き腕が動かなくなつてさ。そんなわけで慰謝料払ってもらえる？」

安くは無いけど、と付け加えて男はナイフを指先でくるくると回転させる。

「あんた、かなりの上玉だなあ」

と、アロハシャツの男が舐めずりしながらミーナの身体を観察する。

カールスラントの制服越しでも分かる凹凸のハッキリしたモデル顔負けのスタイルと全身から醸し出る女性特有の色香が、己の欲望に忠実なチンピラの興味も引いたらしい。

「今夜暇？一晩付き合ってくれたら、ぶつかつたことは水に流してもいいんだけど？」

アロハシャツの男はミーナの肩にそつと手を置くが、即座に平手打ちでパシンと弾かれた。

「触らないでちょうだい」

「おい！」

茶髪の男は間合いを詰めると、ナイフの刃をミーナの白い首筋に押し寄当てた。

「なめんなよ『オバサン』、こつちが腕が動かねえつってんだ。大人しく慰謝料払いな
！」

ドスの利いた声でミーナに脅しをかける茶髪の男。しかし、彼は自らの失言にまったく気付いていなかった。

「今なんて?」

そう訊くミーナは、ニツコリと形の良い唇で曲線を描き、いつも通りの柔和な笑みを浮かべている。だが、目が笑っていない。

「ああ?」

「今、なんと仰ったのかしら?正直に答えてくださる?」

ミーナと茶髪の男のやり取りを見て、リーネは青ざめていた。彼女は気付いていたのだ。いつも優しいミーナ中佐の目付きが、まるで獲物を前にした狼のそれに変わっていることに……。

「言つとくけどな、オバサン。あんまり調子乗ると……ぶっ!」

それは一瞬の出来事だった。茶髪の男が途中で言葉を切ったのかと思えば、立っていた場所より数メートルほど引き飛ばされ、レンガ造りの壁に叩きつけられた。

さらに茶髪の男をよく見てみると、左頬が大きく腫れ上っているのが確認できる。尋常じゃないほど強い力で殴り飛ばされたかのようにだった。

「ふえ?」

「……………」

芳佳は何が起きたのか分からず、不思議そうに首を傾げているが、状況をしっかりと理解しているリーネは全身を小刻みに震わせていた。

「うふふ♪うふふ♪うふふ♪うふふ♪」

慈愛に満ちた聖母の如く、美しい微笑を浮かべているミーナ。しかし、その笑顔からは静かなながらも激しい怒りが滲み出ている。

「芳佳さん、リーネさん」

突然のことに啞然とするチンピラ達を他所に、ミーナは芳佳とリーネに声をかける。

「ここは私に任せて、あなた達は基地に帰りなさい」

「はっ、はい！」

形容し難い恐怖と圧力を肌で感じ取ったリーネは、直立不動の姿勢で応じ、芳佳の手を引いた。

「芳佳ちゃん、行こう！」

「えっ？でも、ミーナ中佐が——」

空気を読んだり、他者の気持ちを汲み取るのが苦手な芳佳。それ故にミーナを心配する必要がないこと。今この場で本当に危険な状況にあるのは誰なのか。まったく理解できていない。

一方、実は観察能力と危機回避能力が高いリーネ。これから何が起きるのか。魅力的

な笑顔の裏で怒りの炎を燃やしているミーナが何をするつもりなのか。自分と芳佳に絡んできたチンピラ達がどんな目に遭うのか。

それらを正しく認識している彼女は、1秒でも早くこの場を離れたい衝動に駆られていた。

「ミーナ中佐なら1人でも大丈夫だから。ほら、早く！ロフティング先生に頭の怪我を診て貰わなきゃ行けないでしょ！」

「わわっ！リーネちゃん!?!」

リーネの腕力は、普段の彼女からは想像できないほど強かった。芳佳は戸惑いつつも、リーネに引つ張られる形でその場を後にした。

「さて……」

手を振って可愛い部下2人を見送るミーナ。芳佳とリーネの姿が見えなくなったところで振り返り、改めてチンピラ達と対面する。

人数で言えば圧倒的に有利なはずのチンピラ達の顔からはすっかり笑みが消え失せ、代わりに嫌な冷や汗が伝っていた。

「あなた達のような悪い子には、おしおきが必要ね。うふふふ♪」

ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐。カールスラント空軍第3戦闘航空団及び連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の司令を務める世界的エー

スウィッチ。

柔軟な思考と臨機応変さを持ち合わせる優秀な指揮官であり、代々音楽家を輩出した家系故か気品に溢れ、物腰優雅で柔らかい。

常に母性と優しさを湛えた笑みを絶やさず、滅多な事では怒らない。が、怒らせてしまふとネウロイよりも恐い。

——絶対にミーナ中佐を怒らせてはいけない。

それは、彼女が指揮する部隊における暗黙の了解であった。

◇ ◇ ◇

30分後、第501統合戦闘航空団基地——

バスを利用して帰路に着いた芳佳とリーネ。最寄りのバス停で下車し、そのまま徒歩で基地へと戻ってきた。

2人を最初に迎えたのは、リベリオン製のジープに乗ったミーナと坂本だった。

昼間。優人らがネウロイを撃退した直後、彼女達も所用で外出していた。なんでも、ノイエ・カールスラントから送られてきた大切な配達物を受け取りに出掛けていたらしい。

用事を終え、バザーに寄り道——坂本はジープで待つていた——していたところ、偶然チンピラに絡まれている芳佳とリーネを見つけたそうだ。

「2人共、災難だったわねえ」

手にこびりついた深紅の液体——おそらくは返り血——

をハンカチで拭き取りながら、ミーナはフウと軽く息を吐いた。清楚さを連想させる純白の布地が、真つ赤に染める。

「あのミーナ中佐、大丈夫でしたか？」

敬愛する上官を心配そうに見つめる芳佳が、恐る恐る訊ねた。対して、ミーナは柔らかな笑顔で返した。

「ふふ、心配しないで。あの人達、ちゃん分かってくれたから大丈夫よ」

ミーナの言葉に、芳佳はホツと胸を撫で下ろす。リーネとしては、上官の逆鱗に触れたチンピラ達がどうなったのかが気になって仕方なかった。

少なくとも、話し合いの類いで解決したわけではなさそうだが、〃触らぬ神に祟りなし〃と扶桑の諺にもある。リーネは敢えてそのことには触れなかった。

「それよりも、芳佳さんこそどうしたの？その包帯」

一瞬で部隊指揮官の——どちらかと言えば保護者の——顔となつたミーナが、真剣な眼差しで頭の怪我について訊ねる。

「怪我をしているのか？」

「えつと……これは……」

ミーナに続き、坂本も問いかける。一体どこから説明したもののか。芳佳が頭を悩ませていると、正門の方からバルクホルンが駆け寄ってきた。

「ミーナ！少佐！よかった、帰ってきたのか！」

「トウルーデ、どうしたの？そんな慌てて」

「何だ？我々の留守中に何か問題でも起きたのか？」

血相変えて走り寄ってきたバルクホルンを、ミーナと坂本は怪訝そうに見返す。

バルクホルンは坂本の問いに「ああ、緊急事態だ！」と頷き、数瞬間を置いてから再び口を開いた。

「あの親子に休戦協定を結ばせてくれ！」



数分後、501基地格納庫――

「待ちやがれ！このクソ親父！」

ウィッチーズの愛機であり、各国の主力ストライカーユニットが格納されている50

1 基地格納庫。

出撃時には各々のメーカーで製造された魔導エンジンが一斉に唸り声を上げるこの場所で、少年の怒号が木霊する。

それ同時に凄まじい熱気が放たれ、格納庫内を満たしていた。

「優人、話し合おう！ 話せば分かる！」

悲鳴とも説得ともつかない言葉を発しているのは、芳佳の父で「ストライカーユニツトの父」と渾名される天才技術者——宮藤一郎である。

着ている服のあちこちを焦がしながら、格納庫内を必死に逃げ回っている。

「あつはつはあ〜！ 汚物は消毒だあ〜！」

どこかで聞いたような台詞を叫びながら一郎を追いかけているのは、彼の息子にして芳佳の兄でもある扶桑皇国海軍大尉——宮藤優人。

彼はカールスラント製のM35火炎放射器を背負い、全力で逃げる父に早歩きで迫りながら、辺りに火炎を撒き散らしている。

基本的に温厚で、重度のシスコン且つ筋金入りのおっぱい星人であることを除けば501部隊屈指の常識人——前述の特徴がある時点で常識人かはかなり微妙——である宮藤優人。

そんな彼が、何故怒りで目を血走らせながら父親に向けて——それもストライカーや

武器弾薬が置かれている格納庫内で、火災や誘爆の危険を顧みずに火炎放射器を振り回しているのか。

しかし、記憶を失くし天涯孤独同然だった自分を引き取り育ててくれた父親であり、偉大な実績を誇る凄腕の技術者でもある一郎を汚物呼ばわりとは。そもそもカールスラント製の火炎放射器など、優人は一体何処から持ち出したのだろうか。

「ほえ〜……」

「……………」

宮藤親子の様子を呆然と眺めているウィッチが2人。フランチェスカ・ルツキーニとシャーロット・エルウィン・イーガーた。

まだ洗濯に出した衣類は乾いていないらしく、シャーリーは未だ優人から借りたワイシャツを着用していた。シャツは第2ボタンまで外され、白く豊かな谷間が覗いている。

「ねえシャーリー。優人とイチローパーバ、追いかけてっことしてるの？」
ルツキーニは宮藤親子の様子に目をぱちくりさせながら

シャーリーに訊ねる。

「ま、まあ……追いかけてっこと言えばそうだな。火炎放射ありの……」

無邪気な質問をするルツキーニに対し、シャーリーは引き攣った笑みを浮かべて応じ

る。

その直後、バルクホルンがミーナと坂本を引き連れて格納庫に飛び込んできた。

芳佳とリーネの姿はなかった。ミーナからロフティング医師に頭の怪我を診てもらおうと言われた芳佳は、上官達と別れて医務室へと向かった。リーネはその付き添いである。

「これは？」

「ああ、もう……」

格納庫内の惨状を目の当たりにした航空団司令と戦闘隊長はそれぞれの反応を見せた。坂本は驚愕に目を見開き、ミーナは利き手で頭を抑えてうんざりといった感じの表情をしている。

「バルクホルン、どうしてこんなことになった？」

坂本はバルクホルンへと視線を移して問い掛ける。自分の戦友と恩人が盛大な親子喧嘩を繰り広げているとの報せを聞き、基地正門から格納庫まで急行した彼女とミーナ。だが正直言つて、喧嘩というより一郎が一方的に襲われているように見える。

「それなんだが……」

バルクホルンが躊躇いがちに口を開いた。早い話が、信頼性や安全性を度外視した試作型魔導エンジンの実験台にされて2度も死にかけた優人が怒り狂い、激情に任せて開

発者の父親に襲いかかった……というものだ。

危険極まりない試作エンジンのテストを息子にやらせる父親も父親だが、怒りで自心を失い、丸腰の人間相手に軍用兵器を持ち出す息子も息子である。

「む……なるほどな。大体の事情は呑み込めた」

「感心してる場合じゃないわ！早く優人を止めないと！シャーリーさん！ルッキーニさん！あなた達も手伝って！」

無駄に落ち着いている坂本に対し、突っ込みを入れるミーナ。同時に表情が指揮官のそれへと変化し、彼女は隊員達に指示を出す。

（マロニーが解任された後で本当によかったわ……）

ウィッチーズに取り押さえられる優人の姿を据えながら、ミーナは深い溜め息を零した。

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の司令を務めるカールスラント空軍中佐——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ。彼女の頭痛と胃痛はトレヴァー・マロニー空軍大将の更迭後も当分は続きそうだ。

周りに多大な迷惑を掛けた結果。扶桑海軍の大尉は航空団司令の中佐殿からお叱りの御言葉を賜り、罰として501が正式に解散するまで間基地のトイレ掃除を1人やる嵌めになった。

やらかしたことに比べて随分と寛大な措置だが、これは一郎の方にも非があったことや、優人には普段からデスクワークの手伝いをして貰っている恩があること。それらを鑑みたミーナの意向が働いたためだ。

どうにかマッドサイエンティスト……もとい、父親への怒りを収めて平静を取り戻した優人だが、その直後にロフテイニング医師の診察を終えた芳佳が、遅れて格納庫にやって来た。

頭に包帯を巻いた妹を見て、激しく動揺したシスコン兄貴は、事情を知るなりS—18対物ライフルと九九式二号二型改13mm機関銃2挺、勝手に持ち出したサーニャのフリガーハマー等で武装し、妹を傷物にしたひつたくりへの報復に向かうとしていたのは言うまでもない。



その夜、基地宿舎宮藤兄妹の部屋——

「もう、お兄ちゃんは怒りん坊なんだから……」

ベッドの端に腰掛けた芳佳が、呆れたような口調で呟く。夕食と入浴を終えた宮藤兄妹は部屋に戻っていた。

寢間着に着替え、いつもなら就寝時間までおしゃべりをしている二人だが、今日は芳佳からの軽いお説教から始まった。

「いや、だって……お前に怪我させたヤツが許せないし……」

すぐ隣に座っている優人は唇を尖らせ、不満げな口調で反論する。いつも妹や後輩達の前では大人らしく振る舞っている彼だが、今日はなんだか子どもっぽい。

ルッキーニほどではないが、宮藤兄妹は年齢よりも幼い一面を持っている。普段はそういう部分をおくびにも出さない——強いて言えば、お子様舌なところか——優人だが、今日は父親関係でいろいろあったから、そのストレスかもしれない。

「だとさしても暴力はダメだよ！ 仕返しするつもりなら、もうお兄ちゃんとはお話しません！」

ぴしゃりと言いつつ芳佳。こちらはなんだか悪戯した生徒を叱りつける新任教師といったところか。尤も、御世辞にも学業面の成績が良いとは言えない芳佳が、誰かに教鞭を執る姿など想像出来ないが……。

「う………わかった。何もしないよ………」

優人はあつさり言い負かされてしまう。扶桑皇国海軍が誇る世界的エースも、妹の前では形無しだ。

芳佳は兄の暴力的な一面に難色を示しながらも、優人が自分の為に本気で怒ってくれ

ることを嬉しく思っていた。

「ところで、お前に応急処置をしてくださったベイカーさんはこの近くに住んでいるのか？お礼を言いに行きたいんですけど……」

「あつ……………」

優人に訊かれ、芳佳は思い出したように小さく声を上げる。兄の質問に答える代わりに、妹は影のかかった表情を下方へと向けた。

「……………何か、あつたのか？」

表情を曇らせた妹を見て何かを察した優人は、芳佳の顔を心配そうに覗き込みながら重ねて訊ねる。

芳佳は少しだけ逡巡する素振りを見せながらも、コクンと小さく頷く。

「あつ……………」

ふと優人の右手が芳佳の頭に置かれる。傷を刺激しないように気を付けながら、髪を梳くように優しく撫でる。

「何があつたか話してくれないかな？」

口元に優しく微笑を湛え、優人は穏やかな口調で諭すように語りかける。

妹が暗い顔をしている時の対処方の一つであり、こうされると芳佳はとても心地好い気分になり、周りに隠している秘密も大概是素直に話してしまうようになる。

「うん、実はね……」

芳佳はおもむろに口を開き、今日街に出て起きたことをすべて話した。

ベイカー兄妹との出会い。妹のウエンディ・ベイカーが「瘴気病」という死病に冒され、余命幾ばくもないという残酷な事実。そのことを告げられ、兄のヘンリー・ベイカーから「妹が死を受け入れられなくなる」「もう来ないでくれ」と言われたこと。

「なるほど。ガリアの難民の中に瘴気病の患者が……」

顎に右手を当てた優人は確認するように、または噛み締めるかのような口調で話の概要を整理する。

「なんとかしてウエンディちゃんを助けたいの！でも……」

伏せていた顔を上げ、語気を強めた声音で芳佳は自らの想いを口にする。しかし、またすぐに伏し目がちとなり、声遣いも弱々しくなる。

「私、まだまだ上手く治癒魔法を使えないし。それに怪我の治療ばかりで病気の治療は経験していないから……」

自身の考えをゆつくりと語る芳佳の音が、終わりに近づくとつれて段々と小さく、聞き取り難くなっていく。すべて言い切る前に声は完全に消えてしまったが、兄である優人は可愛い妹の心境をしつかりと理解していた。

「……………そうか……………」

自分の力では助けたくても助けられない。瘴氣病に限らず、死病というのはそういうもの。故に死病と定義付けられている。

どれだけ力を尽くそうと、どうにもならない。そんな事例は、この世に五万と存在する。決して妹に非があるわけではない。だが、そうだと受け入れ、心を切り替えることが出来ないのが宮藤芳佳だ。

これまで優人は、落ち込んだり悩んだりしている芳佳の姿を何度も見てきた。その度に心を曇らせた彼女をいじらしく思い、兄は妹を励ましてきた。しかし、今回は問題が問題だけに掛ける言葉が見当たらなかった。

自分が行動を起こせば何か良い方法が見かり、死病を抱えた少女の運命を変えられるのではないか。今この瞬間も、芳佳はそんなことを考えているのだろう。優人には分かる。

「芳佳……」

妹の名を呟きながら、優人は芳佳の頭にそつと右手を乗せる。痛まないよう気を遣いつつ、スウ〜ツと頭の包帯を撫でた。

自分と違って治癒魔法という救済の力を持って生まれた妹。自らが負った傷を治すことは出来ない。ましてや、心の傷となれば尚更。

(せめて、頭の傷くらい治してやれたらな……)

ふと優人はそんなことを思う。己の無い物ねだりに自嘲しながらも包帯に覆われた傷へ手を翳し、治癒魔法を使う自分の姿をイメージしてみた。その時だった。

突如優人の手から青い光が発せられ、包帯越しに傷口を包み込んだ。その温かな光は、芳佳や彼女の母・祖母が有する治癒魔法のそれであった。

「え？」

「……へ？」

突然のことに頭が追い付かず、兄妹は揃って間の抜けた声を漏らす。傷口を覆った光はやがて消滅し、それと同時に痛みも頭から消えていた。

まさかと思った芳佳は、すぐさまチェストから手鏡を取り出した。包帯を取りさつて鏡越しに頭部を確認してみる。驚いたことに傷が綺麗になくなっていったのだった。

「い、これって……」

目の前で起こった予想外の出来事に、芳佳は驚愕のあまり両目を見開いた。傷痕を残さず怪我が完治したのは嬉しいが、喜びよりも驚きの方が勝っていた。

攻撃魔法を扱うはずの兄が、自分や母達と同じ治癒魔法を使ってみせたのだ。それも秋元家——二人の母方の家系——伝統の強大強力な治癒魔法だ。

「お兄ちゃん！」

呆然と鏡を見つめていた芳佳だったが、しばらくしてハッと我に還り、優人にズイッ

と顔を寄せてきた。

「これって、どういうこと!?!今のつて治癒魔法だよね!?!治癒魔法は使えないんじゃないかなかったの!?!」

本来持っていないはずの治癒魔法を、どういうわけか使えた。その事実には驚愕と興奮を禁じ得ないらしく、芳佳は捲し立てるかの如く質問攻めを行う。

「えつとく、俺にも何がなんだか……」

妹の剣幕にたじたじな優人。彼が治癒魔法を使ったのはこれが初めてではない。ガリア解放以前に、サーニャがおにぎり作りで指に軽い火傷を負った際も同じことがあった。

基地から脱走した芳佳が単身で人型と接触を図った時も、シャーリーの固有魔法『超加速』を無意識に発動していた。

ネウロイの巣がガリアに陣取っていたうちは戦闘やら、その他の軍務やら、軍上層部——トレヴァー・マロニー大将与彼の一派——の対応やらで忙しく、じっくり考える暇も無かったが、冷静に考えれば妙な話だ。

理由や仕組みは分からないが、優人は他人の固有魔法をトレースすることが可能らしい。何故そんなことが出来るのかは、本人にもまったく分からない。

(一体、どういうことなんだ?)

自分の身に起こった事態に、優人はただ困惑するだけだった。

この力は一体何なのか。後に力の正体と共に判明した事実は、優人の存在を根底から覆すものであった。

第18話 「シスコンは死んでも治らない」

1944年9月上旬、グレートブリテン島南東部第501統合戦闘航空団基地——

宮藤優人扶桑海軍大尉が、父の宮藤博士を焼き殺しかけた翌日の午後。ウィッチーズ宿舎のミーティングルームで、簡素な表彰式が開かれていた。

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令——ミーナ・デイトリン・デ・ヴィルケ中佐。ミーナの傍らに控える副司令兼戦闘隊長の坂本美緒少佐。連合各国空軍より同部隊へ派遣されている12名の航空ウィッチのうち7名が、2人と向かい合う形で並んでいる。

リベリオン陸軍大尉シャーロット・エルウィン・イエーガー、自由ガリア空軍中尉ペリーヌ・クロステルマン、オラーシヤ陸軍中尉サーニャ・V・リトヴァク、スオムス空軍少尉エイラ・イルマタル・ユージェイランネン、ロマーニヤ空軍少尉フランチェスカ・ルツキーニ、ブリタニア空軍軍曹リネット・ビシヨップ。そして、扶桑皇国海軍の宮藤芳佳軍曹。横一列に並んだ受賞者の少女達は階級順に名を呼ばれ、1人ずつ中佐の元へ歩み寄る。

ミーナは西部戦線——ブリタニアの戦いにおいて、勇敢さを示したウィッチ達ひとり

ひとりにニツコリと微笑むと、労いの言葉を贈ると共にノイエ・カールスラントから届いた勲章——騎士鉄十字章を彼女らの首に掛けた。

この騎士鉄十字章は、ネウロイの巢の破壊とガリア解放という501の大戦果を聞きつけた帝政カールスラント皇帝——フリードリヒ4世が、既に授与しているカールスラント組と坂本、優人以外のメンバーに贈ったものである。

フリードリヒ4世は、元々ウィッチ・ウイザードに対して直接勲章を授与したがっていた。しかし、戦況のせいで皇帝の希望は中々叶わず、501についても全員をノイエ・カールスラント呼んで授与式を行いたいと側近に申し出ていたが、やはり希望は通らなかった。それ故501基地のあるブリタニアに騎士鉄十字章を送ることにしたのだった。

ミーナと坂本が揃って外出し、受け取りに向かった配送物は、これら7つの騎士鉄十字章。さらに宮藤兄妹宛てに別の物が届けられていた。

「えっ？パーティーですか？」

騎士鉄十字章を首から下げた芳佳が、ミーナの言葉に目を丸くして訊ね返した。彼女はカールスラントの勲章とは別に渡された封書を手に持っている。

帰国すると、今度は功六級金鷄勲章の表彰が待っているらしいが、元々軍関係知識に疎い芳佳のこと。騎士鉄十字章の価値や重要性を理解していないのかもしれない。

隣に立っている優人も、ミーナから同じ物を受け取っており、封を切つて中身を確認していた。

宮藤兄妹宛てに届いた封筒は、なんとブリタニア首相直筆の招待状であった。

「ええ」

芳佳の問いに、ミーナはいつもの柔和な笑みで応じると仔細を話始めた。

表彰式を終え、殆どどのウィッチが退室済みのミーティングルーム。閑散とした室内にはミーナ、坂本、宮藤兄妹の4人だけが残っていた。

「あなた方2人には、501を代表して私と一緒にパーティーにすることになったのよ」
早い話が、ロンドンのサヴォイ・ホテルにてブリタニア政府主催の政財界のパーティーが開催されるので、ガリア解放の英雄達を代表してミーナ、優人、芳佳の3人出席して欲しい……とのことだ。

ブリタニア首相——チャーチル卿をはじめと各国の政治家、財界人、それらの人種と関わりが深い軍高官等やその妻子が出席する上流階級向けのパーティー。

世俗の人間には想像もつかないほど巨額の費用で賄われる豪華絢爛な行事に何故自分と妹が招待されたのか、と優人は内心疑問に思っていた。

政治に長け、立場上軍上層部の高官や政治家達と顔を合わせる機会の多く、また容姿の美しさは元より十代らしからぬ大人びた色香と、プロの音楽家ですら舌を巻く歌声の

持ち主であるミーナならいざ知らず、一介の将兵に過ぎない自分達兄妹が出席するのは少々場違いな気もする。

ミーナ曰く、数年前ミーナやダウディング元ブリタニア空軍大将と共に501部隊創設に尽力したカールスラント空軍ウィッチ隊総監——アドルフイーネ・ガランド少将が、扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令長官の赤坂伊知郎中将の許可を得た上で、優人達兄妹の招待を主催者側に提案したとのことだが——。

なるほど。連合軍上層部に席を置く2人の将官は、501司令の美声とストライカーユニットの父——宮藤一郎博士の子息息女である宮藤兄妹を政治活動に利用するつもりらしい。

さらに言うと、優人と芳佳は——表向き巢のマスターコアを破壊したことになっているため——ガリア解放の一番手柄の名誉を賜っていた。

「他のやつらは出席しないのか?」

優人が招待状から目の前の上官達に視線を移して訊ねる。

501のWエースとして活躍する世界屈指の撃墜王であるゲルトルート・バルクホルンとエーリカ・ハルトマン。扶桑皇国航空歩兵の中で、最も有名なウィッチである坂本美緒。国を追われたガリア国民にとって心支えとなっている青の一番（ブルー・ブルミエ）——ペリーヌ・クロステルマン。先の大戦英雄——ミニ・ビショップの娘である

「リーネ」——リネット・ビショップ。

いずれもVIPばかりだ。それ以外のメンバーの出席を望む声があってもおかしくない。

「坂本、お前は？」

「ミーナが一晩留守にするんだ。私がここを離れるわけにはいかんだろう？」

と、軽く拳を握った両手を腰に当てながら戦闘隊長が応える。

尤もなことだ。巢は消滅したものの、ガリアにはまだ少数の残党ネウロイが潜んでいる。パ・ド・カレーより上陸した上陸した連合軍が残敵掃討を行いつつ、内陸へ進行中であるが、まだガリアが完全に解放されたと判断されたわけではない。

つまるところ、しばらくは自分達501もドーバー海峡の向こうに目を光らせておく必要があるということだ。上流階級のお遊びに何人も割くわけにはいかない。

それでなくとも統合戦闘航空団に招聘されたウィッチ・ウィザード達は、良く言えば強い個性の持ち主。悪く言えば問題児の集団である。当然、隊長不在時にはしっかり監督出来る人気を残しておく必要がある。

「それに……」

坂本に続いてミーナがおもむろに口を開いた。

「リーネさんやペリーヌさんはともかく、他の子達は……」

そこまで言うと、何故かミーナは苦笑気味に言葉を切る。その様子を見て、優人は501司令の言わんとして、いることをすぐさま察して「ああ、なるほど」と短く納得する。ガリアの貴族——性格に言えば侯爵家の令嬢であるペリーヌや実家がロンドンにてデパートを始めとする多数の店舗を営む裕福な商事であるリーネならば、そういった社交の場における礼儀作法を心得ているだろうし、両親に連れられて実際に顔を出したこともあるかもしれない。しかし、他のメンバーはどうだ。

バルクホルンは軍務に関することにおいては完璧と言えるが、それ以外は万事疎い。自然な笑顔を作ったり、愛想や社交辞令を言ったりするのは難しそうだ。

サーニャは礼儀作法は身に付けているようだが、人付き合いが苦手で、少し前のリーネを上回るほどの引っ込み思案な性格の持ち主だ。政財界のパーティーなど、出席するだけで精神的な苦痛になりかねない。

シャーリーとエイラの2人は、要領がいいので一晩くらいなら社交の場にも馴染めそうだが、不安がないわけではない。

ハルトマンとルツキーニに関しては、わざわざ説明するまでないだろう。

「とにかく、これは総司令部からの命令でもありません。あなた達兄妹には、明後日の晩に開催されるパーティーに出席して頂かなくてはなりません」

「まあ、命令なら従うけど……」

神妙な表情をするミーナに対し、優人は右手で後頭部を掻きながら決まり悪そうに応じる。

優人自身、士官教育の一環として礼儀作法の指導は受けている。かつては父に付き添って——正しくは、だらしがなく生活力のない父親のお目付け役として——社交の場に顔を出したこともある。

祖国や501の恥とならない自信はあるが、内心では面倒な仕事が回ってきた、と煩わしく思っていた。それでも高級料理やワインを味わえるだけヨシとしようと自分を納得させ、辟易した心を慰めている。

仮にも士官という責任ある立場だ。命令に対して気に入る、入らないなどと言っていられない。

「パーティーかあ……あつ！」

軽く鬱屈とした気分浸っている兄とは違い、世間知らずな妹はその曇りなき眼を爛々と輝かせ、パーティーに招待されたという事実を心を躍らせていた。しかし、彼女は重大な問題に気が付き、慌て出す。

「ミーナ中佐！大変です！私、ドレス持ってません！パーティーに行けません！」

軍人という立場上、制服姿で出席しても然程問題はない。坂本やバルクホルンあたりは実用性を重視し、士官用の制服を着て出席するに違いない。

しかし、芳佳としてはメイクやドレスアップ等でおしゃれをして、出来るだけ綺麗な姿でパーティーに出たいのだ。大好きな兄と出席するのであれば尚更――。

「あらあら、フフ♪」

狼狽える芳佳の姿を見て可愛らしく思ったのか。ミーナは小さく笑顔を立てると、「大丈夫よ」と右目を瞑ってウインクしてみせた。

初対面の男だったなら一瞬で恋に落ちかねない。それほどまでに彼女の仕草は魅力的だった。

「ちゃーんと、芳佳さんのドレスも用意してあるから♪」

「ホントですか!?!」

ミーナの一言で、芳佳の表情がパア〜と明るくなった。

扶桑海軍軍曹はズイツと身を乗り出し、聞き間違いでないのを確認するかのようにつねる。その胸元では、首から下げられた騎士鉄十字章がユラユラと揺れていた。

扶桑皇国でドレスと言え、一般的に西洋のお姫様が着るような華やかなデザインのワンピース服を指す。

東洋生まれたる扶桑撫子の中には、自国の着物とはまったく異なる衣服の優美さ・気品さに強い憧れを抱く者も多い。

「ええ、ガランド少将から贈り物よ。あなたさえ良ければ、すぐにでも試着出来るのだけ

れど?」

「あつ、お願いします!」

感激した芳佳は勢い良く頭を下げる。彼女らしい素直で可愛いらしい態度にミーナはもう一度だけクスクスと笑声を立てると、芳佳を連れてミーティングルームを後にした。広い室内に優人と坂本、同じ制服——扶桑海軍第二種軍装——を身に纏った2人が残される。

(ドレス姿の芳佳かあ……)

心の中で優人は噛み締めるように呟く。妹の私服姿や寝間着姿、シャリーのコイデインेटを受けて冒険した水着姿に某伯爵によつてベビードール姿も、果ては不可抗力で全裸姿まで目になっている優人であったが、ドレス姿は初めてだった。

ガランド少将から贈られてきたドレスがどんなものはわからないが、最愛の妹をより美しく魅せてくれるのは間違いないだろう。

年相応の可愛いらしさを強調するものか。年齢よりも大人っぽく見せるものか。意外と小悪魔チックな魅力を演出するものか。もしかすると、ミーナが亡き想い人——クルト・フラツハフェルトから贈られた深紅のドレスのように大胆なデザインのものか。

いずれにせよ、ドレスアップした妹とパーティーに出席出来ることは確かだ。面倒に感じていた行事が急に待ち遠しくなる。着飾つて天使のように美しくなつた芳佳を想

像し、優人の口元は自然と緩んだ。

「お前は、何をニヤついているんだ？」

呆れと窘めの孕んだ声が耳朶を刺激し、優人はハッと現実に還る。真横に視線を走らせると、最も付き合いの長い戦友が怪訝そうな瞳で彼を見ていた。

「いや、別に……」

ドレスで着飾った妹の姿を想像して鼻の下を伸ばしていたなどとは言えない。優人は適当に誤魔化し、坂本から視線を外した。

そのまま早足でミーティングルームを出ていこうと考えていたが、すぐに「待て」と呼び止められたため、再び戦闘隊長殿に向き直った。

「例の件はどうだ？何か分かったのか？」

例の件と言われて、優人は内心で（ああ、そのことか）と呟きつつ、肩を竦めて応じる。

「残念ながら、進展無しだ」

「そうか……」

坂本は抑揚のない声音で短く返すと、眼帯で隠れていない左眼を静かに伏せた。

石威紫郎。元扶桑皇国の技術者で、かつては新式ストライカーユニットやネウロイのコアを利用した新兵器『イリス』の開発を進めていた宮藤一郎博士の助手でもあった男

だ。

5年前、彼はストライカーユニット共同研究所を爆破し、サンプルとして保管されていたコアや『イリス』の開発データを持ってリベリオンへ逃亡した。

原隊における2人の上官である赤坂と彼の側近が行った調査で、石威がマロニー一派と接触してウォーロックを開発するまでの動向は大体判明している。

だが、優人や坂本が知りたいのは、石威の大まかな経歴ではない。彼がネウロイのコアを手に入れた経緯だ。

この件に関しては全く調査が進んでいなかった。石威紫郎という人間は相当用心深かったようだ。本当に大切な、他人知られたくない情報は自分の頭で管理し、書類に記述がないのはもちろん、メモ一つ取っていないかった。石威の下で働いていたウォーロック開発スタッフも担当以外のことは何も知らされていなかったらしい。

石威が開発したウォーロックと功を焦ったマロニー一派の強引な介入行動により、皮肉にも501は目標であるガリア解放を成し遂げ、ネウロイの技術を己の野心の為に独占・利用しようとした石威紫郎やマロニー元大将もそれぞれ報いを受けた。

とはいえ、全ての謎が解明されないままでは、*“終わり良ければ全て良し”*と達観するなど、坂本には出来なかった。

「お前の方こそどうなんだ？調べるものは進んでいるのか？」

優人の口から予想外の言葉が続き、坂本は虚を衝かれたといった風に彼を見返した。

「この頃、毎晩寝ないで古びた書物を読み耽っているみたいじゃないか。あれは古流剣術の指南書か？それとも大昔の魔導書か？」

「見られてたか……」

坂本は苦笑交じりに応じる。8月に20歳を迎え、彼女の魔法はシールドがまともに機能しなくなるほど弱体化した。

それでも刀を置く気になれない扶桑の女武士は、基地の資料室にて本国より取り寄せた古い書物を熟読・研究し、衰えた魔法力で戦う方法を模索していた。優人は、その一部始終を偶然見かけていた。

「何をしていたか詳しく訊く気も、止める気もない。けど、お前の代わりはいないんだ。身体を休めることも忘れるなよ」

「お前は私の母親か何かか？」

「口うるさく言われるのが嫌なら、言われずとも体調管理はキチンしとけよ。いいな？」
長年連れ添った戦友はそう念を押すと、今度こそミーティングルームを後にした。

優人の背中を見送ると、坂本は軽く息を吐いてから何気無しに魔法力を発動してみる。使い魔であるドーベルマンの耳と尻尾が出現し、身体強化魔法が掛かるのを感じ取った。

大半のウィッチは、20歳より前に魔法力のピークを迎え、後は減退の一途を辿る。彼女も例外ではなく、既にシールドが殆んど役に立たなくなっている。もはや戦士として飛ぶのは、そろそろ限界かもしれない。それは坂本自身が一番よく理解している。

だとしても、彼女は——坂本美緒はウィッチとしての生き方を諦めたりはしない。空を飛べる限りは戦い続ける。それが彼女のウィッチとしての本懐だ。

「それに私はまだ、お前と肩を並べて飛びたいんだよ」

1人残された坂本は、身体を壁に預けて独り言ちた。

◇ ◇ ◇

所変わって、ミーナの部屋——

「すごく綺麗よーほら、鏡の見て御覧なさい！」

ミーティングルームを離れた芳佳は、さっそくミーナの部屋にてドレスの試着をした。いた。

カールスラント空軍ウィッチ隊総監から贈られたドレスを身に纏った芳佳は、ミーナに促されるままドレッサーの前に腰を下ろし、正面にある大きな鏡に視線を向ける。

「これって、私なん……ですか？」

鏡の中には、普段と全く異なる煌びやかな自分の姿に扶桑海軍ウィッチは、信じられないといった様子で両目を大きく見開く。

パーティーに参加する芳佳の為にガランド少将が用意してくれた淡い水色のドレスは、ミーナのインブニングドレスと違って胸元も背中も出ていないが、肩から紐で吊り下げるワンピースタイプ故に両肩が露となり、丈の短いベルトからはスラリとした白い素足が伸びている。

リボンとフリルが控えめにあしらわれたドレスは、着ている者の印象も相まって、淑やかというよりは可愛いらしい印象を受ける。

着ているのはドレスだけではない。一緒に贈られてきた同色同素材の夜会靴を履き、パーティー仕様の白い長手袋は少女の華奢な両腕を肘まですっぽりと覆っている。

芳佳は試着だけでのつもりだったが、可愛い部下にとって初めてのドレス・パーティーという理由から、やたらと張り切ったミーナの手により化粧も施されていた。

横跳ねが目立つ特徴的な髪型は櫛が入れられたことで落ち着き、薄く塗られた口紅は形の良い唇を引き立たせ、睫毛もいっより綺麗に整えられている。

他にも随所に細かな工夫が施されたおかげで、15歳の幼い少女はアダルトな雰囲気醸し出す大人の女性に生まれ変わっていた。

「芳佳さん、とっても素敵よ♪」

「あ、ありがとうございます！」

自分に化粧を施してくれたメイクアップアーティスト——もとい、カールスラント空軍中佐よりお褒めの言葉を賜り、両の頬を軽く染めた芳佳は照れくさそうに応じる。

「私、普段はこういうことしないから助かりました」

「気にしないで。私も綺麗な芳佳さんが見れて嬉しいわ♪」

素直に謝意を述べる扶桑海軍ウィッチに、ミーナは微笑をもつて応える。

ニコニコと慈愛に満ちた笑みを湛える彼女は、まるで我が子を大切に想い、成長を守る母親のようだ。

「でも、ミーナさんはホントにお化粧が上手なんですわね？」

「ウフフ♪乙女たる者。日頃から自分を美しく魅せる努力を怠らず、惜しまずよ？」

笑顔を崩さずに語るミーナであったが、彼女の瞳の最奥にはギラギラとした鋭い光が宿っていた。目が笑っていないとは、おそらくこういうことを指すのだろう。

芳佳はその天然さ故に気付かなかったが、他の501メンバーが——鋭いようで鈍感なところがある坂本は除く——今のミーナと顔を合わせれば本能的に危険を察知し、深くは追求しないでおこうと思つたことだろう。

「さて、ドレスアップも終えたことですし。あなたのお兄さんをここへ呼んでびつくりさせてあげましょうか？」

「お兄ちゃんに見せるんですか?」

「あら? せっかく綺麗にお化粧までしたのに、優人に見てもらわなくていいの?」

「あ……………」

大好きな兄の名前がミーナの口から出た途端、芳佳は顔がカア〜つと熱くなるのを感じ、俯き加減に視線を逸らす。

どのみちパーティー当日には今の姿で兄と顔を合わせなければならぬ。だが、いざ見られるとなると急に気恥ずかしくなり、扶桑海軍ウィッチの顔は熟れたトマトのように紅潮していった。

粧し込んだ自分を見て兄がどんな反応をするのかも気になる。自分は隊の——ハルトマン以外の——年長組のようにスタイルは良くない。果たして、このドレスに釣り合う女だろうか。兄はミーナのように「綺麗だ」と褒めてくれるだろうか。御披露目を前にして少し心配になった。

「お兄ちゃん、どう思うかな?」

鏡の中の自分と見つめ合い、期待半分不安半分といった心境を吐露する。

芳佳は独り言のつもりだったが、ミーナは自分への質問と受け取ったらしい。小さな肩に自らの手をそつと置くと、玲瓏な声で応える。

「きつと褒めてくれるわよ。こんなに可愛い女の子を前にして、心動かない男の人なん

ていないもの」

さらにミーナは芳佳の真横に移動し、顔を覗き込むように屈んだ。

「あなたは自分が思っているよりずっと素敵な女性なんだから、もっと自分に自信を持って♪」

「ミーナ隊長、はい！」

自分に優しく微笑み掛けてくれる部隊長を、芳佳は見返した。女優やモデルと言っても充分通用するほど目麗しい美貌。気品と優美の溢れた物腰。大人びた言動・雰囲気、色気。

芳佳にとって、ミーナは理想の大人の女性像だった。そんな彼女から御墨付きを頂き、少しではあるが自信が芽生えた。

「フフ、よろしい♪それじゃあ、優人を呼んでくるからここで待っていて……」

ミーナは膝を伸ばして立ち上がると、踵を返してドアへと向かった。

「は、はい！」

やや上擦った声音で芳佳が返事をするのと、ミーナが部屋を出たのはほぼ同じタイミングだった。

持ち主の個性——女性らしさがよく出ている部屋に1人残された芳佳は、もう一度鏡に向き直る。おどけなさの残る顔にはまだ熱が僅かに残っており、先月15歳になった

ばかりである少女の初々しさを図らずも演出している。

「うう……なんか緊張するよお……」

ドレスにシワは出来ていないだろうか。髪は乱れていないだろうか。一度気になるとキリが無い。顔を鏡に近づけたり、後姿を見てみたり、芳佳は忙しく確認を続ける。脳裏には緊張の原因と言っても差し支えない兄——優人の姿が浮かび上がっていたが、それはすぐに別の存在に変わり、芳佳はふと動きを止めた。

（ウエンデイちゃん……）

ウエンデイ・ベイカー。昨日知り合ったブリタニア系ガリア人少女の名を、芳佳は無意識のうち呟いていた

ガリア脱出の直前にブラウシユテルマーから発生した障気に身体を蝕まれ、死の淵に立たされている幸薄き少女。

ネウロイの侵攻で兄を除く家族・親族を亡くし、一度は母国を失い、財産の殆んどを捨て去るを得えない苦しい状況でなんかブリタニアに渡ったものの、彼女は兄のヘンリー共々貧しい暮らしを余儀なくされている。

芳佳はもちろん、他のメンバーもウィツチ故に厚待遇を受けていた。最前線に配属されながらも裕福で快適な日々を過ごしていた。

同じく横須賀の実家にいた頃も代々診療所を経営している母や祖母、奉公に出ていた

兄と父が稼いでくれたおかげで生活に困るようなことは一切無かった。

美味しい御飯を三食お腹いっぱい食べて、熱いお湯の張れた浴槽で綺麗にし、清潔で暖かい布団に入って身体を休める。

それが当たり前だと芳佳は思っていた。いや、当たりのことには違いない。少なくとも、芳佳やはここで親友の山川美千子、同じ横須賀第四女子中学校の生徒にとつては播るぎようのない常識であった。

だが、その常識もベイカー兄妹との邂逅によつて、あっさりと打ち砕かれてしまった。2人の——ブリタニアに避難してきた難民達の貧しい惨状を目にして以降、芳佳は自分が如何に恵まれた生活を送っていたか、嫌と言うほど理解した。また、それと同時に今まで通りの生活を送けることに強い罪悪感を覚えた。

そのせいで食欲はあるのに食べる気にはなれず、朝食や夕食は半分も喉を通らなかつた。兄は当然として、ウィッチーズ面々からも大いに心配された。

初めこそは無邪気に喜んだパーティーの招待についても、ウエンデイに対する負い目から辞退とも考えた。

しかし、この度はブリタニア首相から直々に招待を受けている。如何に芳佳が世間知らずといえど、パーティーへの参加を私情で断つてしまえば、あちこちに迷惑が掛かることくらいはなんとなく理解している。

独断専行が元で兄が負傷させ、さらに基地を脱走した結果、一度はストライクウィッチーズを解散させてしまった身としては、これ以上誰かに迷惑を掛けたくない。そう思った彼女は、煩悶としつつも招待を受けることにしたのだった。

傍目にはいつも通り能天気でお気楽そうに見える宮藤芳佳だが、内心では彼女なりに葛藤しているのだ。

「芳佳！お兄ちゃんだけど、入ってもいいか？」

「——っ!？」

突然のノックの音と共に兄の声が、ドア越しに聞こえて耳朶を叩く。

芳佳はハツとなつて現実に還り、反射的にクルツと身体を回してドアへと向き直る。

「は、はいっ！どうぞっ!」

芳佳は両手を後ろに引っ込め、ドアの向こう側に立っているであろう兄に応じる。焦りと緊張のせいか、声が裏返ってしまった。

ガチャリと音を立ててドアが開かれ、見慣れた扶桑海軍第二種軍装姿の優人が入室した。

「お兄さん。ど、どうかな？」

兄と目が合うなり、芳佳は恥ずかしそうな声音で感想を求める。

一体どんな反応されるのか。心臓がドキドキと早鐘を打つのを感じつつ、妹は返答を

待った。

「……………」

しかし、肝心の優人は口を開かないばかりか。ドレス姿の芳佳を凝視したまま微動だにしなかった。表情も固まったまま全く変化しない。

頭上でクエスチョンマークを踊らせた芳佳が、銅像の如く動かない兄を見つめ返している、不意に優人が妹に向かって歩き始めた。

「ふえっ?」

何も言わずに自分の方へと歩いてくる優人に対し、芳佳は思わず気の抜けた声を漏らす。

表情を変えずにこちらに向かってくるので、何か兄の気に触ることもしてしまっただのかと思ひ、芳佳は焦る。

間も無く、優人は芳佳の目の前に辿り着いた。自分より20センチ程身長の高い兄に見下ろされ、妹はゴクリと息を呑む。

「お、お兄ちゃん。どうし……きやつ!」

意を決して問い掛けようとする芳佳の声が短い悲鳴に変わる。優人が妹を思い切り抱き締めたのだ。

あまりのことにすぐには理解が追いつかなかったが、抱き締められている事実気付

くと、芳佳は三度顔が熱く火照っていくのを感じた。

「……………お兄ちゃん？」

何故急に抱き締められたのか。訳が分からないまま一分近い時間が経ち、芳佳はやつとの思いで兄に声を掛ける。

「どうしたの？」

(…………やっちゃまった。俺はこれからどうすればいいんだ!?)

優人本人はというと、彼は彼で焦っていた。妹を抱き締める兄の額から玉のような冷や汗が流れ落ちる。

自他共に認めるシスコン兄貴にとって、化粧を施されたドレス姿の妹は天使——いや、女神と呼んでも差し支えない美しさと神々しさを兼ね備えて見えた。

そんな芳佳を双眸で捉えた瞬間、彼女に対する愛おしさが普段とは比べものにならないほど強くなり、心が命ずるままに抱き締めてしまっていた。

戸惑い気味に訊ねる芳佳の声は聞こえていたものの、馬鹿正直に本当のことなど言えない。

「お兄ちゃん？」

ふと芳佳が顔を上げた。互いの視線が交わり、兄妹は身体を密着させた状態で見つめ合う。

「——っ!？」

化粧の施された妹の顔を超至近距離で見た優人は、息が止まるほどの衝撃を受けた。

上目遣いで自分を見つめる最愛の妹。口紅で染められたコケティッシュな深紅の唇。綺麗に梳かれた母親譲りの茶髪。香水や他の化粧のものとブレンドされた女性特有の甘い香りが優人の鼻腔を刺激し、頭をクラクラさせる。

(ああ……もう、ダメ……)

——バタンツ!

「お兄ちゃん!？」

妹の美しさにやられ、世界的エースの1人である扶桑海軍大尉は失神した。

彼と同じく世界的エースに名を連ねるカールスラント空軍中佐が、ドアに背を預けて立っていた。満足に妹を褒めることすら出来なかった戦友を見据えた彼女は、呆れ果てたと言わんばかりに深い溜め息を漏らしていた。

扶桑皇国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊288航空隊を原隊とする航空ウイザード——宮藤優人。ミーナは彼にお幅な信頼を寄せているが、妹が絡んだ時に限っては不安を禁じ得ない。

とは言ってもシスコンに効く薬は存在しないので、パーティー当日に優人が馬脚を露さないのを切実に願うばかりだった。

(優人といい、トウルルーデといい。シスコンは死んでも治らないみたいね……)
内心で少々ウンザリしたように呟き、ミーナはもう一度だけ溜め息を漏らした。

第19話「インペリアルウィッチーズ」

1944年9月某夜、グレート・ブリテン島――

煌々と輝く無数の星で埋めつくされた夜空の下。ブリタニア軍が所有する装甲車輛2輛が、1台の護送車の前後から挟む形で車列を組み、閑散とした田舎道を走行していた。

さらに陸戦ストライカーユニット『マチルダII』を装備した陸戦ウィッチが2名。車列の左右を押さえつつ護送車と並走している他。

航空ストライカーユニット『スピットファイア Mk. II』を纏った2名の航空ウィッチがロツテを組んで車列の直上を飛行し、空から周囲の警戒に当たっている。

護送車の警護ならば、装甲車輛と乗車している武装兵で十分事足りる。にも関わらず、わざわざ数の少ないウィッチを4名も警護に回しているのは、護送中の要人が良くも悪くも重要な人物だからだ。

「移送の警護に空陸のウィッチが4人か……」

ブリタニア空軍の制服を着た体格の良い壮年の男性――トレヴァー・マロニーは、警護部隊の仰々しい様子を車窓越しに見て、呆れたように呟いた。

かつてのブリタニア空軍戦闘機軍団司令官兼ウィッチ隊総監——つまりは、空軍の実質的な最高指導者としてブリタニア防空全般を統括していた彼は、この2週間足らずで随分と白髪が増えた。

「私の身柄に……までするほどの価値はないと、分かりそうなものだが……」

車内に視線を戻したマロニーは、向かいの席に座る警護責任者の将校をギリりと睨み付けた。

護送車には彼らの他に武装した兵士が2名。運転席と助手席に座っている2人を合わせて4名ほど乗車している。

「そう謙遜することもないでしょう」

マロニーの鋭い視線を何処吹く風と受け流し、薄く笑みを浮かべた将校は自身の意見を述べる。

「501によってガリアが解放されたあの日、何が起きていたのか。あなたが以上に詳しく証言できる人はいない」

反ウィッチ派の急先鋒であり、連合軍全体の戦況よりもブリタニアの国益を優先する男として知られていたマロニーは、秘密裏に入手したネウロイの技術を独占・利用し、並のウィッチを遥かに上回る新兵器『ウォーロック』の開発に成功していた。

従来兵器を上回る戦力であるウォーロックを切り札に、連合軍内で反攻作戦のイニシ

アチブを握ること。戦後の軍事バランスでブリタニアが優位に立つこと。欧州の盟主として君臨するであろう祖国の中心に自らが立つという壮大な野望を抱いていた。

が、戦闘機軍団司令官就任時より対立関係にあった第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令——ミナー・ディートリンデ・ヴィルケ中佐や同じく政敵であった扶桑皇国海軍遣欧州艦隊司令長官——赤坂伊知郎中將によって、501の活動妨害をはじめとする数々の不祥事が白日の下に晒された。

さらに虎の子のウォーロックは、マロニー自ら指揮を執ったガリア攻略作戦時に暴走状態に陥り、制御不能になったところを501によって撃破され、当初の計画も頓挫してしまふ。

結果、連合軍総司令部内の派閥争いに敗北したマロニーは、一連の騒動の責任を取られる形で更迭され、階級も大將から中將に降格。連合軍及びブリタニア軍の上層部から追放された。

皮肉なことに。マロニーの行動をきっかけとして、ストライクウィッチーズは目標であつたガリアの解放を成し遂げている。

「目的地に着き次第、あなたには非公式の取り調べを受けて頂きます。私の上官は、あなたが石威紫郎氏を抱き込んでまで開発したウォーロックに興味があるので……」

将校に告げられ、マロニーに忌々しいといった風にフンと鼻を鳴らす。

ブリタニア空軍において、国の首相に対して物申せる立場なのあった彼も、今では情報源や政治の道具として他者に利用される身となっている。

マロニーが屈辱に奥歯を噛み締めるのと、護送車の前方を走る装甲車が火柱を上げて吹き飛んだのはほぼ同じタイミングだった。

「っ!?なんだ!?!」

護送車の運転手が急ブレーキを掛け、反射的に立ち上がった将校が進行方向へ目を向ける。その直後、一発のロケット弾が護送車の右手側の地面に着弾、爆発した。

爆風に煽られた護送車は力から跳ね上がり、車体を横転させる。車内ではマロニーや将校、兵士達が座席から放り出され、壁や天井に身体を強く打った。

「何事だ!?!」

苦悶に表情を歪めながらも将校は無線を手に取り、護衛のウィッチに状況報告を求める。すぐに陸戦ウィッチの叫び声が発砲音を伴って返ってきた。

『襲撃です! 敵は——』

陸戦ウィッチからの通信はそこで途切れた。続いて後方でも爆発が起き、装甲車に乗車していた兵士の悲鳴が将校の鼓膜に突き刺さる。

車列を襲撃したのは正体不明の武装集団——カールスラントの主力ストライカーユニット『B f 1 0 9』のG—2型とG—6型を装備した航空ウィッチの一団だった。

人数は6名。所持している火器もすべてカールスラント製だ。MG42にMG151／15及び151／20、フリーガーハマーを装備している者もいる。

まずMG42を装備した2人組が、奇襲戦法で車列の上を守る航空ウィッチ2名を銃撃。真上からの機銃掃射を背中に喰らったウィッチ達は瞬く間に血塗れの蜂の巣となり、ストライカーを履いたまま頭から地表へ向かって落下していった。

すかさずフリーガーハマーを装備したウィッチが魔法力の充填されたロケット弾を数発撃ち込み、装甲車の破壊と護衛車の足止めを行った。

空からの援護を失った装甲歩兵及び装甲車乗員の兵士達は機関銃と機関砲による掃射を受け、血飛沫と肉片を撒き散らして瞬く間に絶命した。

護衛車も将校やマロニーが中から這い出してきた直後にロケット弾を叩き込まれ、爆発炎上する。襲撃者たる6名のウィッチは、着弾の衝撃と熱風によつて吹き飛ばされた2人を囲むように降りてきた。

「くっ！貴様ら！」

将校はホルスターから拳銃を抜き、なんとか抵抗を試みる。しかし、トリガーを引く前に鉛弾が彼の眉間に撃ち込まれた。

あらゆる生命活動を停止して力無く倒れた将校を余所に、彼を射殺した敵のリーダー格らしい——おそらくは戦闘隊長——ウィッチが、ストライカーを脱いでマロニーの元

へ歩み寄った。

彼女はウィッチの例に漏れず、目麗しい容姿の少女だった。軍の勤務服らしき黒色の制服と白色のシャツに身を包み、帝政カールスラントの国章が描かれた腕章を付けている。

出で立ちから、カールスラント軍人ないし軍に属するウィッチであろうと推測出来るが、制服、軍用ブーツ等のデザインは陸海空軍のいずれのものとも異なっていた。

「元ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官、トレヴァー・マロニーは貴様か？」

金メッキと彫刻の施されたPPKを突き付けながら、リーダー格のウィッチが睥睨するようにマロニーを見下ろす。

「な、何だ貴様らは!?カールスラント軍のウィッチか!？」

地面に尻餅を着いたまま、マロニーはウィッチを睨み返す。

「いや」

頭を振ると、リーダー格のウィッチはマロニーの眉間に銃口を押し付けた。

冷たく硬い金属の感触を受け、マロニーは嫌な冷や汗を流す。

「何の真似だ!?!私を誰だと思——」

「分不相応な野望を抱いて、結果失脚した無能だろう?」

リーダー格のウィッチが侮蔑の滲んだ声音で答えると、他のウィッチ達がせせら笑い

を漏らした。

自分をあからさまに見下し、蔑む正体不明のウィッチ達。銃を押し付けられながらも、マロニーの胸中には不安や恐怖ではなく、小娘に扱き下ろされた屈辱と怒りが渦巻いていた。

「私をどうするつもりだ？」

彼女らが自分をどうする気であるかなど、わざわざ訊くまでもない。

だが、マロニーは仮にも空軍の戦闘機軍団司令官にまで登り詰めた男だ。腐っても根性無しではない。命乞いをするつもりはなかった。

「私の上官が、貴様に大層ご立腹なんだ」

「上官？」

「貴様がどさくさに紛れて殺そうとした扶桑海軍の士官は、上官殿に取って大事なお人なんだよ。貴様がネウロイの力を使って何をしようが勝手だが、あの人に手を出すのはダメだ」

ウィッチの話に耳を傾けながらも、マロニーは混乱していた。何故限られた人間しか知らないような自身の所業を、この少女は知っているのか。

そもそもブリタニア空軍が厳重防空体制を敷いているグレート・ブリテン島で、このような大胆な襲撃を行うなど、狂気の沙汰としか思えない。

本当に何者なのか。彼女らが着用している軍服に見覚えがあったマロニーは、己の記憶を辿って必死に思い出そうとする。

「貴様らは……なん、だ？……」

「そうだな、冥土の土産に教えておこうか」

絞り出すような声で問い質すマロニーに対し、今まで無表情だったウィッチは、不敵な笑みを浮かべながら応える。

「私はグレーテル・ホフマン大尉、上官の名は悠貴・フォン・アインツベルン大佐だ」

「——っ!? 貴様! カールスラント皇室親衛だ——」

——ズガァン!

断末魔とも言えるマロニーの叫び声は、銃声によって掻き消された。

始末を終えたグレーテル・ホフマン大尉はホルスターに黄金のPPKを収めると、部下達に撤収を命じる。

「用は済んだ、帰投する!」

『はっ!』

グレーテルの指揮下にあるウィッチ達は、すぐさま挙手敬礼の姿勢で応じる。黒衣を身に纏った魔女達は一足早く上昇した戦闘隊長に続いて一斉に空へと上がり、そのまま夜空の暗中へ消えていった。

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』。連合軍総司令部直属部隊である統合戦闘航空団と同様に航空ウィッチ部隊を中核とする完全独立型の航空団。

部隊名とは裏腹に、カールスラント皇帝——フリードリヒ4世に対する忠誠心は持ち合わせていない。

また、統合戦闘航空団に属するウィッチ・ウィザードが民衆の期待と使命感を背負ってネウロイと戦っているのに対して、インペリアルウィッチーズは胸に抱いている憎悪を原動力としていた。

そして、その言い知れぬ怒りの矛先は、今や人類共通の敵であるネウロイだけではなく、全人類及び世界そのものに向けられている。



翌日早朝、第501統合戦闘航空団基地——

ウィッチーズ宿舍の食堂に隣接する厨房から、トントンと小気味良い音が響き渡っていた。扶桑で造られた包丁が木製のまな板を叩く音だ。

扶桑皇国の一般家庭では馴染み深い音色が遠く離れたブリタニアの軍事基地におい

ても聞くことが出来るのは、当基地に家庭的なウイザードとウィッチの兄妹が滞在しているからだ。

軍務で欧州に駐留。もしくは長い時間をかけて扶桑本国と欧州を何度も往復している扶桑皇国海軍遣欧艦隊の将兵達が耳にすれば、懐かしさと故郷恋しさで感極まることだろう。軍隊生活はそれほどまでに厳しく、過酷なのだ。

501部隊本日の朝食当番は扶桑皇国海軍大尉——宮藤優人。当番故いつもより早めに起床し、厨房へ来ていた優人は、自分を含めた501メンバー12名と客人扱いで基地に滞在している父親、計13人分の朝食を作っている。

海軍士官の立場にある男が台所に立って炊事をするなど、*「男性は台所に入らない」と*とされている扶桑皇国では考えられないことだ。

航空歩兵に志願して日が浅かった新兵時代。空いた時間利用して炊事番の手伝いをする優人を、同期入隊の若本徹子が「扶桑男児のクセに」「軟弱野郎」と、よく小馬鹿していたものだ。

心身共に未熟であった新人——今も大人にはなりきれていない——お互いが相手に抱いた印象は決して良くはなかったが、肩を並べてネウロイと戦ううちに確かな信頼を築いていった。

(さて、どうしたものか……)

味噌汁に入れる長ネギを慣れた手つきで切りながら、若き扶桑海軍大尉は物思いに耽っていた。

切れ味が素晴らしい包丁を扱いながらの考え事など危険極まりないのだが、怪我する心配をまったく感じないのは動作が身体に染み付いているからだろう。

今、彼の頭を占領しているのは最愛の妹から聞いた話に出てきた女の子——ブリタニア系ガリア人のウエンデイ・ベイカーの存在だった。

ネウロイの障気に侵されて発症する死病——『障気病』を患ったその少女は、彼女の兄によればあと一月ほどの命だという。

なんとかしてウエンデイを助けたい。彼女と親しくなった心優しい妹からの切実な願いだ。出来ることなら叶えてやりたい。しかし、優人は凄腕医者でもなければ優秀な医学系の研究者でも、ましてや全知全能の神でもなかった。

統合戦闘航空団に名を連ねる世界的なエースも、治療法の確立されていない病が相手ではどうすることも出来ない。

ブリタニアの人々をネウロイから守り抜き、ガリアを奪還した英雄と呼ばれながら、たった一人の女の子を救えない。自分の無力さと世の不条理さをこれほど恨んだことはなかった。

父親の友人である扶桑皇国海軍中将——赤坂伊知郎に交渉して、『障気病』の薬を融通

して貰うことも考えたが、すぐに「無理だ」と頭を振った。

あちこちにコネを持つ赤坂なら薬を手に入れることなど容易だろう。しかし、彼は優人等宮藤一家のようなお人好しではなかった。

一難民に過ぎないウエンディ・ベイカーを助けたとて、自分はもちろん祖国や所属組織である扶桑海軍は何の見返りも得られない。上層部の人間らしく腹に一物抱えた扶桑海軍中将。彼が慈善行為に賛同・協力するなど、とても考えられなかった。

そもそもこれは善行なのか。投薬等の治療では、せいぜい症状を緩和させるのが精一杯。悪戯に寿命を伸ばしたところで無為に苦痛を長引かせるだけだ。その場合限りの施しと、誰かを救うことは違う。

『その力を、多くの人を守るために』。父親の——宮藤一郎の教えであり、彼ら兄妹の座右の銘でもある。それを胸に抱いてる扶桑の兄妹に、自己満足の偽善行為は決して許されない。

「はあ……」

盛大な溜め息が優人の口から漏れる。難題に頭を抱えつつも、彼は時間までに朝食を作り終えた。

今朝の献立は白飯、ネギと豆腐の味噌汁、鮭の焼き魚、ほうれん草のお浸し、卵焼きと、扶桑におけるオーソドックスな朝食メニューと言えるだろう。

そろそろウィッチ達が集まる時刻だ。優人は人数分のトレイに分け、カウンターに並べ始める。

「随分と……大きな溜め息ですわね」

ふと食堂の入口の方から高く澄んだ声が響き、黙々と準備を進める優人の耳朶にそつと触れる。

声の主が誰なのかは、すぐに理解できた。ストライクウィッチーズのメンバーで、優人のことを「お兄様」と呼ぶのは一人だけだからだ。

声のした方へ目をやると、絹のような美しい金髪と同色の瞳、自己調達の青い制服がトレードマークの自由ガリア空軍ウィッチ——ペリーヌ・クロステルマン中尉が、凛と背筋を伸ばしてカウンターの向こう側に立っているのが見えた。

「ペリーヌか、おはよう。今朝は早いな」

「おはようございます、お兄様」

両手を身体の前で組んだペリーヌは、僅かに目を伏せて恭しく会釈する。

侯爵家の令嬢である彼女には、所作一つ一つから育ちの良さが窺える。高貴な血を受け継ぐ者だけに与えられた気高さと気品が、彼女には備わっている。

「今朝は扶桑料理ですのね？」

カウンターに用意された美味しそうな料理を見据えながらペリーヌが訊ねる。

芳佳が501に入隊して以来、基地の食卓に並ぶことの多くなった扶桑料理。宮藤兄妹の料理の腕前もあってウィッチーズからは好評だった。ペリーヌから腐った豆と扱き下ろされた納豆以外は……だが。

炊きたての御飯、味噌汁、焼き魚の芳ばしい匂いを味わい、満足気に頷いたペリーヌは自分のトレイを持って席へと移動する。

「そう言えば、ペリーヌはパ・ド・カレーの生まれだったな？」

テーブルへ向かうガリアウイッチの後ろ姿見据え、優人は思い出したように質問を投げた。

ペリーヌの家——クロステルマン家の前当主。つまり、彼女の父親は国からパ・ド・カレーの地を預かる領主の立場にあった。そしてペリーヌは、パ・ド・カレーで生まれ育った領主殿の子女である。

ネウロイのガリア侵攻で両親が亡くなっている以上。故郷に戻ると同時にペリーヌは家督と領主の地位を継ぐことになる。

「ええ、そうですわ！突然、何ですか？」

トレイをテーブルに置いたペリーヌは、怪訝そうな表情で訊き返した。

「いや、ベイカーって名前の兄妹を知らないかなって……」

「ベイカー……」

「ああ、ヘンリー・ベイカーとウエンディ・ベイカー。ダイナモ作戦よりも後にブリタニアに避難してきたらしくて、お前と同じパ・ド・カレーの出身なんだよ」

同じパ・ド・カレーの出身だからと言って、ペリーヌとベイカー兄妹が知り合いとは限らない。だが、訊いておいて無駄はない。

近いうちに来る501解散の日。高貴なる義務——“ノブレス・オブリージュ”を重んじるペリーヌの人柄からして、ガリアに戻り次第直ちにクロステルマン家を継ぎ、家の当主として領地のパ・ド・カレーや国そのものの復興に尽力するはず。貧困と死病に苦しんでいるベイカー兄妹を任せられるかもしれない。

難題を押し付けるような後ろめたさを感じつつも、自分にはない人脈や教養のある彼女ならば、2人を救う最善の方法を見つけ出せるかもしれない。と、優人は考えていた。

「……ええ、ええ。存じていますわ」

ヘンリーとウエンディのことを知っているというペリーヌ。

ならば話が早いと、優人は心中でガツポーズする。しかし、上官の質問に答えたペリーヌの口調は何処か歯切れ悪く、表情にも影が射していた。

「お兄様。2人のことをどこで?」

「芳佳から聞いたんだよ」

「芳佳さんから?」

「ほら、あいつ一昨日街に出掛けただろ？その時に知り合ったらいいんだ」
「えっ!？」

ベイカー兄妹の存在を知った経緯を聞かされたペリーヌは、何故か目を大きく見開いて短く声を上げる。彼女の瞳と声音には驚愕の色が滲んでいた。

「どうした？」

「一昨日……そんなはずありませんわ……」

「?……どういうことだ？」

重ねて問われたペリーヌはすぐには答えず、気まずそうに優人から目を逸らした。四方八方へチラチラと視線を動かす彼女は話すことを躊躇っているようにも見える。

優人もまた急かすようなことはせず、ペリーヌの心の準備が終わるのを無言で待った。

暫しの沈黙の後、意を決したペリーヌがおもむろに口を開いた。

「ヘンリー・ベイカーさん、そして妹のウェンディ・ベイカーさんは——」



同時刻、同基地医務室——

501のウィッチ・ウイザードのみならず他の基地要員の健康診断や負傷した際に医療行為が行われる基地の医務室。同じく基地内に設けられた手術室と同様に最新の医療設備が導入されている。

治療魔法を有した扶桑海軍ウィッチの501入隊以来、使われる機会が以前よりも減ったこの部屋で、3人の人影が確認出来た。

1人は、今や世界的エース達と並び称される扶桑皇国海軍期待の新星——宮藤芳佳軍曹。

丸い椅子に尻を乗せた彼女と向かい合うようにして別の椅子に座っているのは、イアン・ロフティングという白衣姿の男性。

彼は501基地の近隣に住む医師で、当基地と契約して定期的な健康診断と医療行為を行っている。ダラム大学で博士号を取り、常に最新の医療技術の導入を求めており、医師としての腕は確か。

そして、彼の傍らに控えているもう1人は、ウイステリア・ピース。ロフティング医師の元で働く看護師の女性だ。

オレンジの掛かった金髪に同色の瞳。シミの一つ無い色白の肌。スタイルもモデル並に良く、ウイステリアはウィッチーズにも劣らぬ美女。仕事着である清楚な薄いピンク色のナース服に看護帽と、同じく清純さを演出する白色のニーソックスは美女ナース

を魅力を際立たせている。

ロフティングの診療所を訪れる患者や501の基地要員には、ウイステリア目当て診察を受けようとする男共も少なくない。

「今日は朝早くから来て頂いて、そしてお兄ちゃんを助けて頂いて、本当にありがとうございます！」

謝意を述べながら、芳佳は2人に向かって深々とお辞儀をする。

芳佳にとつてロフティングとウイステリアは、重症を負った兄を救ってくれた大恩人。彼女の治癒魔法が如何に強力といえど、優秀な医療従事者である2人の治療がなければ優人は助からなかつただろう。

「いえ、そんな……医療従事者として当然のことをしただけです。それにお兄さん、宮藤大尉はあなたとあなたの治癒魔法のおかげで助かつたんですから」

ロフティングはあくまで芳佳のおかげだと謙遜し、整った顔立ちに若々しい笑みを浮かべる。ウイステリアもまた、目を細めて同意の微笑を浮かべていた。

「そ、そうですか？」

芳佳は後部を搔きながら、2人につられて照れくさそうに笑う。

(そう……彼女の治癒魔法が働いたから、大尉は助かつたんだ……)

扶桑海軍ウィッチと、彼女が持つ治癒魔法の力を認め、称賛する一方、ロフティング

には一つ腑に落ちないことがあった。

最初にそれを知覚したのは手術時のことだった。弾倉の誘爆によって優人の胸に突き刺さった無数の破片。その摘出手術と輸血を行った際に、ロフティングは奇妙なものを目にした。

破片の摘出中に優人の身体が、微かにだが「自力で再生している」ように見えたのだ。

(かなり重症患者を相手にしていたからな。きつと緊張や疲れで変な見間違いをしただけだ……)

ロフティングは自分の中でそう結論付けると、芳佳に用件を訊ねた。

「それで、私に何か御用ですか？」

芳佳はロフティングとウイステリアに相談したいことがあった。

普段は診療所の仕事で忙しい2人だが、朝早くならとわざわざ時間を作って会いに来てくれた。

「あ、はい。先生に助けて診て頂きたい女の子がいて……」

「501にいるウィッチの方ですか？」

「いえ。ガリアから避難してきた女の子で、先生の診療所の近くに住んでいます。ネウロイの障気が身体から抜けない病気みたいなんです」

「なるほど、障気病の罹患者ですか……」

ロフティングは納得したように頷く。つまり、芳佳は死病を患った難民の少女——ウエンデイ・ベイカーの診察・治療を依頼しているのだ。

治療法のない死病を患い、末期状態で余命幾ばくもないブリタニア系ガリア人の少女。芳佳はなんとしてもウエンデイを助けたかった。

障気病は治療が確立されておらず、治癒魔法も効かない。それでも芳佳は諦めたくなかった。もしかしたら、ウエンデイの治療によってロフティングが治療法を見つけてくれるかもしれない。

少なくとも、ロフティングの診療所なら最新の医療技術の導入された治療が受けられるはずだ。

「女の子の名前は？」

「ウエンデイちゃんです。ウエンデイ・ベイカー、お兄さんのヘンリーさんはブリタニア系のガリア人だと言ってました」

「……………えっ？」

芳佳の口からウエンデイやヘンリーの名前を訊いた途端、ロフティングの顔が彫像のように固まる。

隣に立っているウイステリアも似たような表情をして、時間が止まったかのように微

動たにしない。

2人から予想外の反応をされた芳佳は、不思議そうに小首を傾げる。

「ヘンリー君と……ウエンデイちゃん……ですか？」

「先生、2人のことを知ってるんですか？」

芳佳が重ねて問い掛けるも、ロフティングとウイステリアは信じられないと言った顔を見合わせるだけだった。

しばらくして、ロフティングは白衣のポケットから一枚の写真を取り出すと、それを芳佳に差し出した。

写真には一昨日知り合ったばかりのベイカー兄妹が映っていた。緊張しているのか、表情の強張ったヘンリーと、兄に抱き着いて無邪気に笑うウエンデイ。

「あなたの言うベイカー兄妹は、その2人で間違いありませんか？」

「えっ？……あつ、はい！」

「……そうですか……」

自分の知っている2人に間違いない。確認を済ませたロフティングは伏し目がちに
なり、己の両手で顔全体を覆う。その様相からは哀しみが見て取れた。

僅かな時間で随分老け込んだように見えるロフティングに、両目を丸くした芳佳の視線が注がれる。

「宮藤さん……」

芳佳と上司のやり取りを黙って見ていたウイステリアが、不意に口を開いた。一時的に心の沈んだロフティングに代わって話を続けるつもりのようにだ。

「はい？」

「その写真は2人の遺品です。ウエンデイ・ベイカーさんと兄のヘンリー・ベイカーさんは、半年程前に亡くなっているんです」

「……………えっ？……………」

芳佳が、ウイステリアから告げられたことを正しく理解するまで著しく時間を要した。

インターミッション I I I 「帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』」

カールスラントの政治形態は、カールスラント皇帝を頂点とした連邦制だった。連邦内の国家群は、国内に多数存在した王侯貴族の手で統治され、それぞれ高度な自治権を有していた。

1866年のカールスラント継承戦争をきっかけに皇帝を中心として纏まろうという気運が高まり、1871年にはカールスラント帝国として一つに纏まった。

それでも各国家の自治は続き、皇帝は帝国の軍事、外交、警察権を有しているが、それ以外は各々の国家が独自に統治していた。

近年は徐々に中央集権化が進んでいき、かの撤退作戦『ビフレスト作戦』以降、政権が南リベリオンのノイエ・カールスラントへ移ったのきっかけにほぼ中央集権化された。

中央集権への道を歩み始めたカールスラントは、皇帝の政務を補佐する役職——『カールスラント宰相』を設け、行政の長とした。

初代カールスラント宰相——ハインリヒ・ルイトポルト・アインツベルンは、就任し

て間も無く皇帝をはじめとする皇室の護衛を目的とする武装組織——『皇室警護隊』が創設された。

皇室の護衛が任務であつたため、初期は必要最低限の人員と装備のみを有した小規模な組織でしかなかつたが、本大戦直前に中央集権化への反対を唱える保守派が台頭したことが警護隊の転機となつた。

保守派内の実力行使も辞さない過激なグループを見事粛清した警護隊は、皇帝や中央集権派の政治家、貴族、国防軍高官等の信用を得ることに成功。軍事組織の保有を許可された警護隊は急速に勢力を拡大、『帝政カールスラント皇室親衛隊』に改名する。

名称からして、カールスラント皇帝の近衛部隊のような印象を受けるが、実質的にはカールスラント宰相の私兵部隊だつた。

宰相の権力の恩恵により、最新兵器が優先的に配備される他、独自の専用装備も保有している。当然、それに見合う結果が隊員に要求された。

人類統合戦線の結成やカールスラントの崩壊後は、ウィッチ・ウィザード・一般兵士問わずさらに厳しい訓練が課せられるようになり、また採用基準も変更され、入隊条件は外国人にまで拡大された。

やがて、親衛隊は高い練度を誇る軍事組織として成長し、国内外から陸海空軍に次ぐカールスラント第4の軍隊と称されるまでに至つた。

皇室の護衛やノイエ・カールスラントの防衛が主な任務だが、近年では欧州やアフリカにも派遣され、国防軍や連合軍総司令部の指揮下で戦う機会も増えている。

1944年現在。親衛隊の総戦力は、陸戦ウィッチを含む機甲部隊を主力とした1個軍集団。航空戦力の中核に航空ウィッチ部隊を添えた1個航空団。海空軍から引き抜いた艦艇や航空機も、僅かながら保有している。



1944年9月、オラーシャ帝国――

人類連合軍東部方面総司令部はカールスラント、オラーシャ、オストマルクの国境線から東、ウラル山脈までのオラーシャ西部地域を担当している。

総司令部直属部隊――第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』他、オラーシャ軍とカールスラント軍を中心とした隷下部隊が、扶桑皇国とリベリオン合衆国の支援を受けて防衛線を維持している。所謂、「東部戦線」である。

あまりの広大な戦域故、連合軍総司令部やその隷下に置かれた各国軍司令部の目が行き届かず。また、オラーシャの過酷な環境や泥沼化する対ネウロイ防衛戦で、将兵達は身も心も磨り減らしていた。

やがて、それは軍規の乱れや軍人としてのモラル低下、部隊規模での腐敗を招き、一部の基地では不貞を働く輩も出始めていた。

東部方面総司令部に属する名も無き前線基地では、駐屯するカールスラント陸軍の1個連隊が、様々な不祥事を繰り返していた。

本日も基地に所属する青年士官が、連絡任務を帯びて基地を訪れていたカールスラント陸軍のウィッチを基地本部前で押し倒し、真つ昼間にも関わらず公然と服を引き剥がそうとしていた。

——ズガン!

一発の銃声が響き渡り、それまで襲われていたウィッチの悲鳴と、青年士官の下卑た叫び声を掻き消した。

「……………クズが……………」

ウィッチを暴行していた青年士官を有無を言わさず射殺したのは、帝政カールスラント皇室親衛隊隊員——メリッサ・ガンビーノ大尉だった。周囲に脳漿を飛び散らせて息絶えた青年士官に、メリッサは無感動な視線を注いでいる。

彼女はロマーニャ公国出身の航空ウィッチだが、ある理由から自国の空軍には入隊せず、親衛隊唯一の航空ウィッチ部隊——第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』に志願した。

健康的な褐色肌に、ポニーテールに纏めた濃い紫が掛かった黒髪。ローマニーヤ人の血を引く情熱的な容姿の持ち主だが、見た目と釣り合いなほど冷徹かつ酷薄な性格をしていると親衛隊では有名だった。

両の瞳は美しい空色の輝きを放っているが、どこか厭世的な色を映していた。

「貴様あ！一体何の真似だ!？」

部下を殺された基地司令が、気色ばんだ表情で親衛隊大尉の元に駆け寄って来た。

司令として、基地の将兵を律する立場にあるはずの彼は、この1年ですっかり悪徳軍人に成り果ててしまっていた。

憤然と声を荒げる司令を尻目に、メリッサは傍らの親衛隊員に目配せして犯されかけたウィッチを保護させる。

軍事訓練を受け、魔法力という特殊な能力を持つウィッチが一般士官相手に一方的に襲われるなど、本来なら有り得ない。

しかし、このウィッチの場合は子どもの頃に魔法力が発現したものの、質量共に水準よりもかなり低かった。身体強化魔法や十分に機能したシールドを展開・持続させることが難しかったため、戦闘に不向きだった。

東部戦線にて、補給・連絡等の後方任務に就いていたのだが、今回は運悪く当基地に派遣されていた。

メリッサ達親衛隊が現れなければ、ケダモノと化した青年士官の慰み者にされていたことだろう。

「カールスラント軍人に相応しくない人物を処け……いえ、人に仇なすケダモノを駆逐しただけでありますよ。基地司令殿」

基地司令へ侮蔑を帯びた視線を投げかけると、形ばかりの儀礼を湛えた口調でメリッサは言つて退ける。

その慇懃無礼な態度が、基地司令のムカッ腹を余計に刺激した。

「ふ、ふざけるな！ 貴様らは、何の権限があつて——」

一段と興奮して声を張り上げる基地司令が、すべて言い終えるよりも先に、メリッサは彼の大口に拳銃を振じ込んだ。

「権限ならありますよ、基地司令殿。あなたとあなたの兵達を皆殺しにする権限がね」

制服と並んで親衛隊士官のトレードマークとされる専用拳銃——金メッキと彫刻の施されたPPKを右手に握るメリッサは、美しくも恐ろしい微笑を浮かべている。

口内に拳銃を突つ込まれた基地司令は、恐怖で目を限界まで見開いていた。

いつの間にか、基地のあちこちで銃声と爆発音が上がっている。メリッサの指揮を執る『インペリアルウィッチーズ』第2飛行隊と、オラーシャ西部に駐留している親衛隊1個装甲師団から拝借した部隊が、味方であるはずのカールスラント陸軍基地制圧を

行っているからだ。

戦いは一方的だった。指揮官を押さえられた基地所属部隊は組織立った反撃が出来ず、次々と惨殺されていった。

「軍の資金及び物資の横領、ウィッチを含む陸空軍に属する女性への婦女暴行、司令部への報告義務違反。よくもまあ、ここまで……」

基地司令と彼の部下達の悪行を、メリッサは一つ一つ数えるように上げていく。

基地司令は反論しなかった。いや、出来なかった。黄金の拳銃を喉近くまで押し込まれているのだから当然だろう。

「私達インペリアルウィッチーズは親衛隊、延いては帝政カールスラントの高潔な精神を体現してこそよしとする。よって、あまりにもそれを汚すような振る舞いを国防軍兵がしているなら、見過ごすわけにはいかない」

抑揚のない声で語り掛けながら、メリッサはゆっくりと撃鉄を起こした。

「ああ、そうそう。もう間も無くこの基地はネウロイの襲撃を受けて壊滅します。何故なら、我々が奴らを誘導したからでありますなあ……」

「——っ!？」

声を発することが出来ない基地司令は、表情と眼球の動きで驚愕の感情を現す。その様子があまりに可笑しくて、メリッサは思わず吹き出しそうになった。

「基地司令以下、駐屯部隊の皆様方は奮戦虚しく全滅、ネウロイの攻勢を察知した我々がネウロイを撃退。そういう筋書きですよ。度重なる不祥事が原因で肅清されるよりもネウロイとの戦いで戦死、という方が格好が付くでしょう?」

そう結んでニッコリと微笑むと、メリツサはPPKのトリガーを引いた。銃口より迸り出た銃弾が、基地司令の顎から上が纏めて吹き飛ばした。



同年同日同時刻、スカンジナビア半島沿岸部にある寂れた廃墟――

「いけませんなあ、中佐殿」

突然耳朶を打った声に、背後を振り返った男性――カールスラント軍の諜報機関に所属するカールスラント陸軍中佐の表情が硬直した。

彼のすぐ後ろには、帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』に所属している航空ウィッチ――アリョーナ・クリューコフ親衛隊大尉が、いつの間にか部屋の入り口に手を掛け、塞ぐように立っていた。

「我が国にとって不利益な情報を手土産に、リベリオンへ亡命しようとは……」

ショートカットの銀髪に、白雪の如く美しい肌を持つ彼女は、スラリと伸びた脚で軽

やかに歩を進め、中佐へにじり寄る。

アリヨーナは、白い歯を見せて不敵に笑う。唐突に現れた彼女に中佐は思わず絶句する。

開いたドアの隙間から、サプレッサー付きのMP40を携えた親衛隊員——アリヨーナが指揮官を務める『インペリアルウィッチーズ』第3飛行隊所属のウィッチ数名と、多数の銃弾を身体に受けて全身から血を流している自分の護衛達の姿が確認できた。

「き、貴様!」

威厳も迫力も欠ける表情をアリヨーナに向ける中佐は、数年前ピフトレス作戦のどさくさに紛れて情報文書を盗み出し、以後数年間スカンジナビアに潜伏していた。

彼はリベリオンの諜報部に金で買収され、祖国の機密情報を売ろうとしていた。予定では、リベリオン側から派遣された護衛とこの廃墟で合流した後、彼らの案内で海を渡ってリベリオン政府に亡命する手筈だった。

しかし、中佐の裏切りは親衛隊によって察知されていた。後少しでスカンジナビアを脱出できるというところまできて、彼は追跡を命じられたアリヨーナ達に追い詰められていた。

なんと取り繕えばいいのか。逡巡している中佐に、アリヨーナは嘲笑の色を湛えた視線を注いでいた。

「一体、あなたの愛国心はどこへ消えてしまったのか?」

詰めよつてくるアリヨーナのアメジストのような瞳に見据えられ、中佐は後退りしつつも背中に納めた拳銃へ静かに手を伸ばした。

だが、彼がそれを抜くことはなかった。親衛隊の証である金メッキと彫刻の施された PPK を素早く構えたアリヨーナが、中佐の眉間に銃弾を叩き込んだからだ。



帝政カールスラント皇室親衛隊において、唯一の航空戦力である第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』は、連盟空軍統合戦闘航空団と同様に、ウィッチ部隊指揮官が航空団司令を兼任している。

カールスラント宰相の養女——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐が司令を務め、彼女の旗下には航空ウィッチで編成された3個飛行隊が置かれている。

他の親衛隊——場合によっては国防軍から、資材や人材などを自由に引き抜ける等。極めて強大な権限及び優先指揮権も与えられている。

一方で、記録に残せない極秘の任務やカールスラント宰相の政敵や不祥事を起こした国防軍将兵の粛清といった特殊部隊・秘密警察・綱紀肅正部隊のような側面も持つてい

る。

こういった事情から、カールスラント軍上層部や宰相の敵対派閥にとって、『インペリアルウィッチーズ』はネウロイを差し置いて恐怖の代名詞となっている。

第20話 「悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐」

1944年9月某夜、ブリタニア首都ロンドン——

ロンドン市内サヴォイ・ホテルにてブリタニア政府主催のパーティーが華やかに行われていた。

華美と贅沢と社交という名の厚化粧の下に、利権や打算や私欲で満ちた素顔を覆い隠し、ワインを片手に心にも無い世辞を交わし合う。

政財界のパーティーなどには、イメージが染み着いている。このホテルで催されているものも例外ではない。ブリタニア首相をはじめとする国の有力者達が参加するとあつては尚更だろう。

パーティーは盛況だった。ドレスと宝飾品で身なりを整えた女性達が会場に華を添え、礼服——或いは軍の制服に身を包んだ男性達が、あちらこちらでグラスを傾けながら、談笑に花を咲かせていた。

招待された全員が名だたる政治家、財界人、要職に就いている軍高官と相伴である。一つの会場に収まるにしては豪華過ぎる顔触れの中には、カールスラント空軍中佐にして、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の司令——ミーナ・ディート

リンデ・ヴェルケもいた。

亡き想い人から数年越しに贈られた深紅のイブニングドレスを身に纏ったミーナは、同様にパーティーに招待された宮藤兄妹を両脇に引き連れていた。音楽家の家系、そして“女公爵”という渾名に相応しい優雅かつ軽やかな足取りで、会場内を進んでいく。

「あれが、ミーナ・デイトリンデ・ヴェルケ……」

「ガリアを救った501部隊の指揮官……」

「なんと美しい……」

一瞬で魅了された男性達の視線がミーナに集中する。遠巻きに囁き合う彼らの存在に気付くと、501航空団司令は、ニツコリと柔らかな微笑みを返した。

すると、近くにいた男達は群がるようにミーナを取り囲んだ。若手の実業家らしい青年から初老の紳士に至るまで、多くの男性に入れ替わり立ち替わり話し掛けられ、その度にミーナは穏やかな笑顔で応対する。

純粋に女性としてのミーナの美しさに惹かれる者もいれば、彼女の肢体に邪な視線を注ぐ者もある。だが、幸いなことに馴れ馴れしくミーナの身体に触れるような下劣者はいなかった。

統合戦闘航空団の司令という立場ならば、パーティーへの参加も歴とした“仕事”で

ある。今夜彼女は、チャールズ卿とカールスラント空軍のガランド少将からの要望でステージに立ち、自慢の美声を披露することになっている。

(やれやれ……)

押し寄せる男性陣に弾かれ、司令殿と離されてしまった扶桑海軍大尉は人目を忍んで溜め息を漏らす。

妹や戦友とは違い、優人は半ば普段着となつてゐる扶桑海軍第二種軍装で出席していた。本人曰く、「着なれてゐる分、下手な礼服よりも気を張らないで済む」とのこと。

男性陣に囲まれた上官に目をやると、満更でもなさそうな表情で彼らと歓談してゐるミーナの姿が見えた。深紅のドレスを着こなすミーナは、優美さと気品に満ちてゐる。

化粧やドレスで着飾つた今のミーナは淑女然としていて、カールスラント空軍の制服を着た普段の彼女——統合戦闘航空団司令を勤める才色兼備なカールスラントウィッチと違つた魅力を感じる。秀麗、典雅といった言葉がとてよく当てはまる。

ふと扶桑海軍大尉の視線に気付いたミーナが、彼に向かつて(私のことは気にせず楽しんで……)という目配せと、一際美しい微笑を向ける。

いつかと同じく、ミーナの姿について見惚れてしまつてゐた。羞恥の熱が顔全体に回り始め、優人は堪らずミーナから目を逸らす。航空団司令は扶桑海軍大尉のウブな反応を見て、クスリと悪戯っぽい笑みを湛えていた。

「ふう……」

ボーイに勧められたソフトドリンクを口に含んで心を落ち着かせてから、優人は会場内に視線を走らせた。

パーティーに参加している軍高官の中には、連合軍最高司令部や西部方面総司令部に席を置いている各国將軍等の姿も認められた。

カールスラント空軍のヘルムート・ゲーリング元帥、同陸軍西部軍集団司令官——ゲオルグ・フォン・ルントシュテット元帥。リペリオン陸軍欧州派遣軍総司令官——ドナルド・D・アイゼンハワー元帥。ブリタニア空軍最高指導者の地位を追われ、左遷されたトレヴァー・マロニー大将に代わって空軍の中心人物となったアーサー・デッター大将、新戦闘機軍団司令官兼航空ウィッチ部隊總監——キース・パーク中将。自由ガリア政府指導者——シャルル・ド・ゴール將軍。扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令長官にして、優人達501の扶桑組にとって原隊の上官でもある赤坂伊知郎中将等々。

各国の著名な將官が一同に会する様はなんとも壯観だったが、501部隊代表の1人としてパーティーの中盤までにひとりひとりに挨拶して回らなければならないと思うと非常に面倒だった。

パーティーに出席している將官の中には、優人が個人的に苦手と感じる相手も少なからずいる。

(赤坂長官と話してるのって、ガランド少将だよな?)

赤坂とグラスを交わして談笑している長い黒髪の美女は、カールスラント空軍ウィツチ隊総監を務める女性将官——アドルフイーネ・ガランドその人だった。

政財界のパーティーに出席しているというのに、ガランドは他の女性客とは違いドレスを着ていなければ礼服でもない。ミーナや芳佳のような薄化粧すらしていなかった。

軍用ブーツとまるで男性物のような丈の長いズボンを履き、青いシャツの上からカールスラントの飛行服『フリーガー・ヤツケ』を重ねて着ている。

小銃用照準眼鏡『GwZF4』をネックレスのように首から下げているが、さすがにオシヤレというわけではあるまい。仮にそうだとすれば、あまりに武骨なアクセサリーを身に付ける彼女のセンスを疑うところだ。

ろくに着飾りもせず、軍務中とまったく同じ実用性重視の——或いは、優人のように本人にとって楽な——服装で社交場の現れれば悪目立ちは避けられない気もするが、ガランドが招待客の中で浮くことはなかった。

歴然の軍人としての威厳、ウィツチないし女性としての魅力。加えて、自信に満ち溢れた堂々とした佇まいはミーナ以上に人の心を惹き付けてやまない。

凛と背筋を伸ばした立ち姿は遠目に見てもスタイルが良く、成人を迎えて成熟した美貌は女優やモデルと言っても通用するだろう。

優人や坂本は、本大戦が勃発するよりも遙かに前——扶桑海事変時からガラランドと面識があった。同時の優人達は、まだ右も左も分らない新兵。ガラランドは、カールスラント空軍コンドル軍団第88戦闘飛行隊に所属する大尉、扶桑皇国大陸領土へ観戦武官として赴任していた。

師であり、直属の上官でもあった北郷章香少佐はもちろん、江藤敏子中佐率いる扶桑陸軍航空ウィッチの面々は皆年長者ばかり。優人や坂本、そして同期入隊の仲間達の瞳には、全員が全員大人の女性として映っていた。

そこへ扶桑撫子とは異なった趣の華やかさを持つ西洋人美女——ガラランドも合流し、凶らずも健全な男子にとつて桃源郷もかくやという夢のような状況が出来上がっていた。

海軍航空ウィザードである前に思春期に入りたての少年でもあった優人は、否が応でも歳上の異性という存在を強く意識してしまい、ドギマギしていた。そのことを察していた陸軍のウィッチ達からは可愛がられ、またからかわれもした。

(おっと、また見惚れちまったな……イカンイカン……)

頭を左右に振りながら、優人は心の中で自省する。取り敢えずは原隊の上官である赤坂に挨拶して、次に芳佳の為にわざわざドレスを用意してくださったカールスラントのウィッチ隊総監閣下へ感謝の念を伝えよう。

「芳佳、あの人がお前にドレスを……あれ？」

隣にいたはずの妹がいつの間にか姿を消していた。キヨロキヨロと周囲を見回してみると、ミーナと同様男の一団に囲まれていた。芳佳を視界に捉えた。

件の集団はミーナに群がっている男共よりも年齢層が低い。10代半ばの少年ばかりだ。招待された客人達の子息——政財界の名家の御曹司といったところか。

御曹司は、遙か東方より海を渡ってブリタニアまでやってきた扶桑の魔女に興味があるのか。芳佳に対して挨拶や質問責め……というよりは軽くナンパをしていた。

「しかし、美しいお嬢さんだ」

「あ、ありがとうございます」

「あなたに会えただけでも、このパーティーに出席した甲斐がありました」

「いえ、そんな……」

「良かったら、今度お茶でもいかがですか？」

「えっ、えっくと……」

紳士然とした声音で、御曹司達は次々と口説き文句並べる。

芳佳は褒められて嬉しい反面、社交の場に慣れていないがため、どう対応するべきか分からず当惑しているように見える。

或いは、今まで体験したことのない上流階級の雰囲気には圧倒され、萎縮してしまつて

いるのか。

妹への賛辞や誘いが本心なのか。それとも建物で言っているのか判然としないが、扶桑海軍大尉の最愛の妹は、航空団司令殿にも引けを取らないモチっぷりである。

言うまでもないが、離れた場所から妹と御曹司達のやり取りを眺めてる優人の心情は決して穏やかではなかった。

ズンズンと無駄に力んだ足取りで集団の中へ割り込むと、優人は庇うように芳佳の前に立った。

御曹司達は、突然現れた扶桑海軍士官に不快と怪訝を孕んだ視線を注いでいた。

「すみません、妹は初めてのパーティーで気分が優れないようです。御歓談はまたの機会に……」

あくまでも穏やかに柔らかい口調で告げる優人だが、明らかに目が笑っていない。今、彼の顔は悪戯したルツキーニを叱る時のミーナのもの、極めて酷似した恐ろしいな表情をしている。

「そ、そうですか……」

「お、お大事に……」

優人は数々の激戦を潜り抜け、大小様々なネウロイを多数撃破してきた凄腕のウィザードである。

そんな彼から発せられる扶桑刀のように鋭く、シベリアの寒波の如く冷たい殺気に当てられ、すっかり及び腰になってしまった御曹司達。

足早に去つていく悪い虫達の後ろ姿を見送ると、優人は芳佳と向き直る。

「——っ!？」

優人は目を見張つた。扶桑海軍大尉の双眸には、彼にとつて女神や天女と見間違うほどに美しい妹の姿が映っていた。

華やかながら本人の清楚なイメージとした水色のドレス。小さなポニーテールに纏められた鏡のように輝く梳きながした髪。まだまだ幼い印象を受ける顔立は、唇を鮮やかに染める口紅をはじめとする化粧品で彩られ、数年分は大人びていた。

会場にくるまで優人は何度も目にはずだが、それでもパーティーに相応しい装いを纏つた芳佳の容貌を見ては度々息を呑み、胸を高鳴らせた。

(ああ、神よ。今この瞬間、この幸福に感謝致します)

初見時では気を失うまでに至つた優人は、パーティー本番で醜態を晒さぬよう写真や鏡越しに見るなどの即興訓練の末、なんとか無事直視出来るようになった。しかし、相変わらず破壊力抜群らしく、ドレスアップした芳佳の姿を見る度、優人は感極まつている。

「お兄ちゃんっ!？」

無言のまま妹を見つめ続ける優人。芳佳は小首を傾げて、不思議そうに兄を見返す。

「あ、いや……」

気まずそうに逸らした視線を四方八方へ流した後、優人は再び妹と目を合わせ、取り繕うように提案する。

「……ちよつと散歩に行かないか？」

◇ ◇ ◇

同時刻、同ホテルの一室――

その少女は、宮藤兄妹と同じくパーティーに招待されてホテルを訪れていた。

義父が気を利かせて彼女の為に用意した部屋は、VIP専用というだけあって豪華でありながらも落ち着きのある調度品が揃っている。

薪がくべられ、炎がパチパチと小気味良い音を立てている暖炉、純金と宝石類によって縁取られた大きな鏡、壁に掛けられた油彩画、猫脚の風格あるクラシックソファ、高級ワインや氷で満たされたワインクーラーと数本のワイングラスを載せたテーブルセット。すべてが心安らぐ雰囲気醸し出していた。

「そう。首尾良くいったのね」

一時的に部屋の主となった少女は、鏡の前で身嗜みをチェックしながら部下に報告に耳を傾けていた。

東洋系の美しい顔立ちに薄く化粧を施し、太平洋に存在する扶桑皇国領土『パシフィス島』——扶桑名『南洋島』——発祥の民族衣装に身を包んだ自らの出で立ちを鏡越しに確認すると、彼女は満足気な笑みを口元に湛えた。

この民族衣装。本来は肌色の面積が少ない民族衣装であったが、1920年代に西洋ドレスの影響を受けて様変わりし、腰開きスリットや背中を大きく開いた現在の形が定着していった。

彼女の衣装は特注品で、濃い赤地に鳳凰をモチーフにした金色の刺繍があしらわれ、腰のスリットや背中だけでなく胸元も露出させた大胆なデザインとなっている。

「はっ！」

直立不動の姿勢で部屋のドアの傍に立つもう一人の少女——帝政カールスラント皇室親衛隊のグレートル・ホフマン大尉が短く、だがハッキリと上官の問いに応じる。

現在、当ホテルで実施されているブリタニア政府主催の政財界のパーティー。やや遅れて参加するつもりでいる上官は、セクシーなドレス風民族衣装を身に纏った豪華な出で立ちだが、ホフマンは黒地の親衛隊勤務服という地味な格好をしていた。

一見、華やかさの欠けるように見えるが、雪のような白肌とサファイアの如き碧眼は、

黒い制服姿によく映える。ブロンドのストレートヘアに被せている黒色の軍帽も同様だ。

「メリッサとアリヨーナの方は？」

鏡に向かっていた少女がホフマンに振り返る。南洋島の民族衣裳に浮かび上がる身体のラインは、乳房が大きく前へと突き出し、ヒップは布を引き裂いてしまいそうだった。にもかかわらず、ウエストは恐ろしく締まっており、スリットから覗く脚も長い。これで東洋人だというのがとても信じられない。世の男達からすれば、超が付くほどの理想的な体型である。

「兩名共に、無事任務を終えたとのこと！」

「そう。2人共、さすがだね」

少女は部下達の活躍を聞き、満足気に頷く。多少の色気を孕んだ柔和な笑みを浮かべ、ホフマンに労いの言葉を贈った。

「あなたもお疲れ様、グレートル」

「は、はっ！ありがとうございます、アインツベルン大佐！」

任務の遂行だけを考え、不要な感情を抑制しているホフマンだが、鉄仮面として知られる彼女も、公私共に尊敬する上官から御言葉を賜った時だけは顔を綻ばせる。

昨晚彼女は、数名の親衛隊ウィッチを率いてトレヴァー・マロニー元ブリタニア空軍

戦闘機軍団司令官を護送する車列を襲撃し、マロニーの暗殺を敢行した。

不祥事が元で失脚・更迭されたとはいえ、連合軍総司令部に席を置いていた同盟国の将官を、ブリタニア空軍が嚴重な監視体制を敷き、第501統合戦闘航空団のサーニャ・V・リトヴァク中尉をはじめとする各国空軍のナイトウィッチが夜間哨戒飛行を実施している防空圏内で、航空ウィッチを動員しての殺害する。

当然ながら正式な命令ではない。ホフマンの目の前で佇む上官——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐からの私的な命令だった。

カールスラントにとっても親衛隊にとっても無利益かつハイリスクで、何より異常な作戦行動——正解には独断専行か……。

だが、それでもホフマンは実行した。自分がこの世で、唯一畏敬の念を抱いている存在——アインツベルン大佐。彼女の為なら、ホフマンは例え事が露見し、結果銃殺される末路を辿ったとしても本望だった。

「私はこれからパーティー会場へ入るわ」

アインツベルン大佐こと悠貴は、鏡から離れると荘嚴なソファアールへ悠然と腰を下ろす。

すぐさま上官の傍らへと移動したホフマンは、氷の詰まったワインクーラーからワインボトルを一本引き抜き、よく冷えたその封を開ける。

「今夜はここに泊まることになりそうね」

手に取ったワイングラスを胸の位置で掲げながら、悠貴は溜め息混じりにぼやく。

ホフマンは鮮血にも似た深紅の液体をグラスに注ぎつつ、上官の言葉に耳を傾けた。

「“接待”も親衛隊の任務の一環とは言え、よく知りもしない男の“相手”をしなくてはならないなんて……」

うんざりしていると云わんばかりに悠貴は片眉を僅かに下げた。

ホフマンにとりより、ワイングラスに向かって語り掛けるかのようにコケティッシュな唇を動かしている。

「なにも大佐自らが……“接待”ならば、私が代行致します」

そう具申するホフマンは、無意識にボトルを握り締めていた。

他の誰かが敬愛する上官と2人きりになるだけでも許せないのに、色と欲にまみれた穢らわしい男の手が悠貴の身体に触れるなど我慢ならなかった。

「あなた、男性を前に愛想笑いが出来るのかしら？」

「そ、それは……」

上官に指摘され、ホフマンは口ごもった。悠貴は血のような赤ワインを軽く口に含むと、艶然とホフマンを見上げた。

「大丈夫よ、いつものことだから……」

「しかし——」

「グレーテル！」

食い下がるホフマンの声は、上官の一喝によつて遮られた。

一旦ワイングラスをテーブルに置くと、悠貴はソファから立ち上がり、艶のある唇をホフマンの耳元に近付けた。

「明日の夜、私の執務室にいらつしやい。久しぶりに可愛がつて上げるわ」

「——っ!？」

吐息と共に囁かれた甘い声音、ホフマンはゾクゾクと快感に身体を震わせる。かと思えば、堅かつた表情を恍惚としたものに変えて「……はい」と蚊の鳴くような声で応じた。

自らの一言ですつかり惚けてしまった部下の頬に、悠貴は軽く口付けをした。

◇ ◇ ◇

同時刻、同ホテル中庭——

宮藤兄妹はこつそりパーティーを抜け出し、中庭までやつて来ていた。夜ということもあつて、ザヴオイホテルの中庭は閑散としている。

植え込み木々に囲まれ、青い芝生で地面を覆われた庭園には石畳が敷かれ、剣を携えた騎士の石像を頂点とした噴水を中心に構えている。

優人は妹の小さな手を引いて噴水のある中庭中央へと向かう。入り口から庭園へと漏れる僅かな照明の光以外に明かりと言えるものは、夜空から降り注ぐ月光のみ。

慣れていない夜会靴で動きがぎこちない芳佳が転倒せぬよう気を配りながら、優人は中庭を進んだ。

「ここに座ろうか……」

「うん」

噴水の周りには、2人掛けの小さなベンチが数脚設置されていた。

ホテルスタッフの清掃が行き届いているらしい。木製のベンチは新品の如き光沢を放っていた。

優人はベンチの1つに芳佳を座らせると、自分も隣に腰を下ろした。ドレスアップした華やかな美少女に、第二種軍装を着用した扶桑海軍士官。ベンチに並んで腰掛ける2人は、人目を忍んで逢引している扶桑人カップルに見えなくもない。

「ふう〜……」

ベンチの背凭れに身体を預けた優人は、深く息を吐いて空を仰いだ。パーティーの人混みに軽く酔っていた身には、夜風が心地好かった。

こつそりパーティーを抜け出した2人だが、招待客は皆歓談に夢中で、扶桑人の兄妹がいなくなつたことに気付いていない。

ミーナが歌い始まるまでに会場に戻りさえすれば問題ないだろう。

「あの、お兄ちゃん……」

隣に座る芳佳が、遠慮がちな口調で優人に声を掛けた。

「ん〜?」

「さつきは助けてくれてありがとう。お兄ちゃんが来てくれて、安心したよ」

やや弾んだ声音で芳佳は礼を述べる。政財界の御曹司達に絡まれていた自分を兄が助けてくれた。あんな風到大勢の異性から迫られた経験がなかったため、ただただ困惑するしかなかった。いや、よく知らない上流階級の男達に囲まれて、恐いとすら思っていた。

そこへ駆けつけてくれたのが大好きな兄だった。芳佳には、純白の第二種軍装を着こなす優人が、他の男性招待客よりずっと格好良く思えたのだ。

「どういたしまして。芳佳はモテモテだな?」

優人は口角をつり上げて悪戯っぽく笑い、右手の人差し指で芳佳の頬をツンツンとつつく。

「もう、からかわないですよ……」

からかい混じりに褒められ、照れくさくなつた芳佳は、頬を染め上げて伏し目がちになる。

妹の可愛らしい仕草を見て、扶桑皇国を代表するシスコン兄貴は、顔がだらしくなるのを必死になつて抑えた。

（ああ、やつぱ可愛いなあ〜）

ミーナやガランドをはじめ、パーティーの招待客には魅力的な女性が揃っている。それでも優人にとって芳佳が一番の美女であつた。誰よりも妹が輝いて見えた。

（このまま芳佳を抱き抱えて、連れ去つてしまいた……いや、いかんいかん〜）

頭を振つて犯罪的な思考を追い払うと、優人は改めて芳佳を見る。ほんの一瞬の目を離れた隙に、妹の顔に影が射していた。

「芳佳?」

「お兄ちゃんも、ペリーヌさんから聞いたんだよね? ウエンディちゃん達のこと……」
「……………ああ、聞いたよ」

少し間を置いてから優人は頷いて応える。ヘンリーとウエンディ、ブリタニア系ガリア人のベイカー兄妹。この2人は、芳佳がブリタニアに来るよりも約1ヶ月に亡くなつていたというのだ。

501の仲間であるペリーヌや基地囑託医のロフティング医師、看護師のウィステリ

アからこの事実を聞かされた際、宮藤兄妹は驚愕のあまり胸が詰まるほどの衝撃を受けた。

ガリアへ移住したブリタニア人の子孫であるベイカー兄妹は、ダイナモ作戦後もネウロイに占領されたガリアに2、3年程の残っていた。いや、*「取り残されていた」*と言ふべきだろう。

異形の怪物が、我が物顔で闊歩するガリア国内はまさに地獄だった。上空に佇む巢と、ブラウシュテルマーが散蒔く高濃度の*「瘴氣」*により人間の活動領域は大幅に制限され、その上に大小様々なネウロイが蠢いている。

*「瘴氣」*を避けつつ、ネウロイから隠れ続ける生活を強いられ、生きた心地のしない日々を送っていた。

やっとの思いでブリタニアに辿り着いてみれば、妹のウエンデイが*「瘴氣病」*と呼ばれる死病を発症してしまっていた。

ネウロイのガリア侵攻時に頼れる親も他の親族も失い、ブリタニアに避難する際に財産の殆んどの手離さざるを得なかったヘイリーだが、それでもなんとか妹を守ろうと避難民の共同体に身を寄せ、苦勞の末に見つけた仕事で生活費を稼いでいた。しかし、重労働の割には賃金が安く、生活は苦しかった。

医者にかかれず、あまり衛生的とは言えない環境での暮らしは妹の病状も悪化させる

ばかりだった。

夢も希望も失い、ウエンデイが出来るだけ苦しまず、哀しまず、そして恐れずに安らかな死を迎えてくれるようお願いながら、ヘイリーは毎日を過ごしていた。

彼らの存在を知ったロフティングは人としての親切心と、医者としての使命感から、少しでも症状を緩和させられればとウエンデイを自身の診療所に入院させ、無償での治療を買って出た。

しかし、運命は残酷だった。ウエンデイの受け入れを翌日に控えたロフティングの診療所に届いた2つの報せ。それはベイカー兄妹がそれぞれ違う場所、違う相手に殺害されたというものだった。

ヘンリーは街の不良グループに避難民という理由で因縁をつけられ、集団暴行の末に死亡。

ウエンデイは兄に黙ってこっそり散歩に出掛けたところをブリタニアに駐留していた連合軍兵——兵隊ヤクザというべき素行の悪い兵士数名に連れ去られ、暴力の限りを尽くされた挙げ句殺害されていた。

2人の遺品はロフティングとウイステリアが整理した上で預かっている。芳佳に見せた写真もその一つだ。

ちなみに、芳佳の鞆を引つたくろうとした避難民の少年——ジョンも既に死んでいる

ことがわかった。何度も窃盗を繰り返した彼は、金持ちの一際膨らんだ財布に手を出し、翌日海に浮かんでいたそうだ。

「一体どういうことなんだ？」

内心で呟くつもりが、優人はうっかり声に出してしまっていた。

無理もない。妹が死んだはずの人間と遭遇し、話をしたばかりか、触れ合ったり一緒に食事までしたのだ。動揺しない方がおかしい。

それに芳佳の話が本当なら、ウエンデイは欧州の現状——連合軍総司令から発表された501の活躍やガリアの解放のことを正しく知っていた。優人と芳佳が英雄として祭り上げられたことも……。

「あれは……夢？……」

そう独り言ち、芳佳は我知らず頭部に手を当てた。そこはヘンリーに手当てされた傷があつた部位だ。

芳佳はすぐさま頭を振った。ベイカー兄妹と触れ合ったあの感覚、お世辞にも旨いとは言えない食事の味、おしゃべりやゲームをして楽しく過ごした時間は、間違いなく現実だった。

「戦争犠牲者達からの訴えかも知れないな……」

「訴え？」

優人は虚空に目を据え、悲哀を帯びた口調で自らの考えを述べる。芳佳は兄へと視線を走らせ、目と声で詳しい説明を促す。

「俺達ストライクウィッチーズは、ブリタニアの戦いで勝利した。仲間を誰一人欠かすことなく……」

切なげな表情を浮かべた優人はひと呼吸置いてから、さらに言葉を続ける。

「けど、これは戦争だ。直接的にしる間接的にしろ、俺達が知らないだけで犠牲となった人達は大勢いる……」

それは優人自身失念しかけていた現実だった。扶桑海軍に所属するウィザードとして、扶桑海事変やリバウでの戦いを乗り越え、いつの間にか世界的エースとなり、遂には各国の精鋭で構成された501の一員となった。

501に配属されてからは大抵のネウロイに善戦するようになり、多少苦戦することはあれど、戦いで敗北することもネウロイに仲間が殺されることもなかった。

それ故に、他の戦場で戦死者が出ていること。戦火に巻き込まれて死傷した一般人がいること。戦争に起因する怪我や病氣、貧困で苦しんでいる人々がいること。モラルを見失った連合軍兵士が起こした戦争犯罪の犠牲者もいること。

それら全てが頭から抜けていた。或いは、無意識に見て見ぬふりをしていたのか。

航空歩兵に志願して半年にも満たない芳佳は仕方ないにしても、扶桑海事変からの大

ベテランである優人にとっては一生涯の不覚だった。

死んだはずのベイカー兄妹が現れたのも、英雄と持て囃される自分達にそれを気付かせるためではないだろうか。

「……………そっか、そうだよね」

そう応じる芳佳の声に力も明るさもなかった。優人がチラツと横目で見ると、芳佳は背中を丸め、顔を完全に俯かせている。

「……………芳佳」

優人は控え目に声を掛ける。しかし、芳佳は身動き一つしない。ただ黙然と座っている。

「お兄ちゃん……………」

ふとポツリと呟く声が聞こえた。凜と背筋を伸ばし、決意の火が灯った瞳で真っ直ぐ優人を見つめ返す。

「私、扶桑に帰ったら……………学校を卒業したら……………お母さんやお祖母ちゃんの手伝いをしながら勉強して……………医学校に入って……………」

少しずつ声のトーンを上げながら、芳佳は新たな自分の目標を声高に宣言した。

「お医者さんになるー！」

第3章 『白銀の翼編』

第1話 「解散命令」

1944年9月某夜、欧州・北海――

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』。その第3飛行隊長――アリオーナ・クリューコフ親衛隊大尉は、バルトランドでの肅清任務を終えて休む間も無く、新たな任務に着いていた。

「なんて速度だよーったくー！」

新鋭ストライカーユニット『Bf109K-4型』を両脚に装備したアリオーナは、魔導エンジン^{魔導エンジン}の回転数を上げながら舌打ちした。

彼女は数名の親衛隊ウィッチを引き連れ、北海の比較的カールスラント領土に程近い洋上を飛行していた。

この海域では、かつて扶桑皇国がカールスラントに売却した赤城型航空母艦三番艦^{三番艦}「グラーフ・ツェッペリン」――扶桑名「愛宕」――が、ブリタニア方面へ撤退中にネウロイに捕捉され、襲撃を受けている。

後に出現したネウロイの巢にエルベ川河口付近を押えられてしまい、北海からカール

スラント北西地域やネーデルラントへの上陸が、長い間不可能となっている。

そんな危険極まりない海域を、アリオーナと彼女の部下達がわざわざ飛行しているのには、もちろん理由があつた。

(ヤツはっ!?)

アリオーナは現在、『インペリアルウィッチーズ』司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐の命令で、“ある標的”を追撃していた。

一寸先が闇に覆われている北海洋上を、『B f 1 0 9 T — 1 型』を駆る部下達と共に高速で飛行し、ターゲットに追い縋っていた。

視界が利かない夜闇の中、ナイトウィッチである部下の魔導針のみを頼りに彼女等はひたすら突き進む。

やがてアリオーナは、前方の虚空に赤い輝きを放ちながら高速で移動する飛行体を視認した。ハニカム模様の刻まれた漆黒の装甲に身を包む“それ”は、人類の敵対する異形の怪物“ネウロイ”であつた。

「よしー！追いついたー！」

ストライカーユニットの最高速度を維持して追跡するアリオーナ達を嘲笑うかのよう、ネウロイはさらさらに加速する。たちまち第3飛行隊のウィッチ達と、ネウロイの距離は開いていった。

(舐めた真似してくれるじゃないの！)

心中でネウロイを罵倒しつつ、アリオーナは自動小銃“MP43”を射撃位置まで持ち上げ、トリガーを引いた。

数発に一発の割合で装填された魔法弾が、夜空に光軸を刻む。

無数の銃弾がネウロイ目掛けて殺到し、うち一発が敵機の装甲を掠める。アリオーナが手応えを感じたのも束の間、ネウロイは反転と同時に己が身を変形させ、親衛隊ウィッチーズと向き合った。

航空機を連想させる形態から、人型のロボットのようなフォルムへと変形したネウロイは、頭部のバイザーらしき部位を赤く輝かせてみせた。ギラリと光るそれは、まるでアリオーナ達を睨み付けているようだ。

「——っ!？」

ネウロイと正面から向き合ったアリオーナの背筋に悪寒が走った。

アリオーナは豊富な実戦経験と高い実力を併せ持つ優秀なウィッチだが、眼前の敵は彼女が今まで遭遇したネウロイと何処か違っていった。

今までのネウロイは、人間的な感情も動物的な本能も感じられない無機質な存在なのに対し、目の前の敵からは喜悦と凶暴性の入り混じった明確な意思が感じ取れた。

頭を振って恐怖心を払うと、アリオーナはインカムを使って部下のウィッチ達に指示

を飛ばした。

「アシユリー！タリサ！ヤツを狙撃よ！当てていきなさい！」

アリヨーナの呼び掛けに応えて、後衛を担当する親衛隊ウィッチ——アシユリーとタリサのロッテが、S—18対物ライフルによる狙撃を敢行する。

しかし、ネウロイは身を翻して、難なく回避してみせた。

『なっ!?あの凶体でなんて身軽なの!』

インカム越しにアシユリーが驚愕の声を発した。飛行を再開したネウロイに、アリヨーナはアシユリー、タリサ、自身の僚機であるマイヤと共に発砲、四方から火線を浴びせる。が、掠りもしない。

「ゾーイ！ステラ！」

上空に待機させていた残りの部下に呼び掛ける。ロケット兵器らしき装備を、肩に担いだ2人のウィッチが直上より姿を現す。

飛行隊長の指示に応じて曇の中から飛び出したゾーイ、ステラ。他の隊員と同様にT—1型を履き、ネウロイに迫っていった。

彼女等が携えているのは、ロケット弾を撃ち出す大型火器のようだが、航空歩兵用ロケット兵器の代名詞——フリーガーハマーとは形状が異なっている。

どちらかと言えば、リベリオンのM—1バズーカやカールスラントのパンツァーシユ

レックに近い外見だ。

「ステラ！見えてるわよね？」

「もちろん！」

インカム越しにゾーイが呼び掛けると、すぐさまステラが応じる。2人の頭上では、各々リヒテンシュタイン式の魔導針が輝いている。彼女達はナイトウィッチらしい。

ロケット砲らしき武器を射撃位置に構えたナイトウィッチ2名は、魔導針で敵機を捕捉しつつ、呼吸を合わせて互いの距離を広げていく。左右からネウロイを挟み込むと、敵機に照準を合わせて順に発砲した。

砲口から飛び出たのはロケット弾ではなく、巨大な捕獲用のネットだった。魔導糸を組み込んだこのネットは、見た目よりもずっと強度がある。

闇の中に忽然と広がる魔法を帯びた網の目が、変型能力を有したネウロイの行く手を遮る。しかし、ネウロイは機体に急制動を掛けると、宙返りをしてネットが締め切り切るよりも前に離脱していった。

「打つ手打つ手を、余裕で躲してくれちゃって！」

屈辱に駆られたアリヨーナは、MP43のグリップを握り締める。

『隊長！このままヤツを追えば、巢の攻撃範囲に突っ込んでしまいます！』

ふとインカムからマイヤの叫び声が響く。ハツとなったアリヨーナが視線を走らせ

ると、確かにネウロイは自らの巢が存在するエルベ川河口へと引き返していた。

「なら、その前にヤツを捕獲して——」

『無理です！速すぎて！』

アリヨーナの言葉を遮り、マイヤが弱気な返答を寄越す。しかし、彼女の言う通りだと、飛行隊長も理解していた。

「……各機、追撃を中止！我々第3飛行隊は、本捕獲作戦を終了する！」

インカムで命令を下しながら、アリヨーナは遠ざかるネウロイの機影を見据えて歯噛みした。

航空団司令から与えられた任務を果たせなかったばかりか、ネウロイに終始翻弄されていた。

怒りと屈辱の感情を必死に抑え、親衛隊大尉は部下を連れて母艦へと帰投していった。



翌日、グレートブリテン島南東部・第501統合戦闘航空団基地——

501の航空団司令を務めるカールスラント空軍ウィッチ——ミーナ・デイトリン

デ・ヴィルケ中佐の召集を受け、ストライクウィッチーズの面々はブリーフィングに集合していた。

各々雑談を交わしながら、ミーナと副司令兼戦闘隊長の坂本美緒扶桑海軍少佐。そして、2人に次いで隊内における実質的ナンバー3の立ち位置にいる宮藤優人扶桑海軍大尉——正確には、バルクホルン大尉の方が専任——が到着するのを待っている。

「リーネちゃん。ミーナ隊長から皆に話があるって聞いたけど、何かなあ?」

優人の妹で、扶桑皇国海軍軍曹の宮藤芳佳が、隣の席に座っているブリタニア空軍軍曹——「リーネ」ことリネット・ビシヨップに訊ねる。

今年の4月末。協同で高速中型飛行ネウロイを撃破したのをきっかけに、2人は唯一無二の親友となっている。

「うん、私も詳しいことは分からないけど。きっと大切なことだと思うよ」

「そっかあ……一体何だろう?」

芳佳は不思議そうに首を傾げる。対してリーネは察しがついているのか、少しばかり表情が曇っている。

「ねえ、トゥルーデはミーナか少佐から何か聞いてないの?」

「いや、私も呼び出しを受けただけで詳しいことは……」

少し離れた別の席では、カールスラント空軍のエーリカ・ハルトマン中尉とゲルト

ルート・バルクホルン大尉が、芳佳達と似たような会話をしている。

501のWエースと称され、隊内では比較的ミーナや坂本と近い立場にある彼女達も、召集された理由までは知らされていないようだ。

「ま、いいか。それで全員集められたんだろうし……」

ハルトマンはぐるりと首を回らせ、集合した仲間達の様子を窺った。

自由ガリア空軍のペリーヌ・クロステルマン中尉は、貴族令嬢らしく優雅な所作で自分の席に着き、スオムス空軍少尉のエイラ・イルマタル・ユートイライネン少尉は、机にタロットカードを並べて、趣味のタロット占いに勤しんでいる。

エイラの隣の席には、オラーシヤ帝国陸軍のアレクサンドラ・ウラジミールヴナ・リトヴァク中尉——通称“サーニャ”が座っている。

夜間哨戒飛行を担当するナイトウィッチのサーニャは、他のメンバーとは睡眠のサイクルが異なり、昼間は夜間哨戒に備えて眠っていることが多い。

メンバー全員に集合が掛かるブリーフィングにしても、お気に入りの枕——オラーシヤの国籍マークである尾を引く赤い星が描かれた黒色の枕——に顔を埋めて寝入っている姿がお馴染みだが、今日は眠たそうに目蓋を擦るつつも目は開いている。

「よーしかっ!」

「えっ? きき、ききやあつ!」

ふと誰かの元気の良い声と、芳佳の悲鳴がブリーフィングルーム内に響いた。2人分の声につられ、ハルトマンとバルクホルンは芳佳のいる方へ視線を走らせる。

「にひひく♪芳佳は相変わらずだよなあ♪」

快活な声の主は、ロマーニヤ空軍少尉のフランチェスカ・ルツキー二少尉だ。

彼女は背後から両手を伸ばし、立派に育ったリーネの胸に比べて大分控え目な芳佳のそれを鷲掴みにしていた。

「ルツキーニちゃん！どこ触って……ひゃんっ!？」

「芳佳つてば、ホント可愛いんだから♪ほらほらあ♪」

抗議の声を上げる芳佳を尻目に、ルツキーニは慎ましやかな胸をもみくちやにする。

「もう・イタズラはやめてよお！」

「おい、ルツキーニ」

おっぱいマニア……もといルツキーニの餌食となった芳佳の姿を見かね、
「シャーリー」ことリベリオン陸軍のシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉が助け船を出す。

「グラマラス・シャーリー」の愛称で知られる彼女は、リーネを上回る抜群のプロポーシオンを誇る。歩く度にユサユサ揺れる胸はまるで西瓜のようだ。

「そろそろ止めないと、すぐにミーナ中佐がやってくるぞ？」

「うにやつ!？」

シャーリーの口から出てきたミーナの名前に、恐怖心からルツキーニはたじろいだ。しかし、それは一過性のもので、イタズラ仔猫はすぐ元の調子に戻った。

「もう少しだけ……にやははははっ!？」

「まったく、いつもいつも……」

尚も芳佳の慎ましやかな胸を揉み引き続けるルツキーニ。そこへ呆れた様子のペリーヌがやって来る。

「あなた達がいるだけで、騒がしい状況には事欠きませんわね」

ガリア貴族の令嬢は、理解出来ないと言わんばかりに溜め息を吐いた。

「むくくく……」

ふとルツキーニは手の動きをピタリと止める。両の眉を顰め、芳佳の肩越しにペリーヌの胸元を注視し始めた。

「な、何ですの? 私の胸に何か付いてまして?」

「……………ペタン……」

「——っ?!……………あ、あなたって人は!」

ぼそりと呟かれたルツキーニの一言は、小さいながらもしつかりと相手の耳に届いたらしい。己の胸を侮辱されたペリーヌはムツと気色ばんだ。

「突然なんてことを言いますの!?!失礼ですわね!」

「わーい♪ペリーヌのペタンこ胸♪」

憤然と声を張り上げるペリーヌを風と流し、調子付いたルツキーニは続けざまに煽つた。

「なっ!?!わ、私だつて……芳佳さんよりは……ありますわよ!」

「どんぐりの胸比べだ♪にやはは♪」

「あ、あなた!自分のことを棚に上げて!自分の胸に手を当てて、よく考えてみてはどうですか?ルツキーニさん!」

ペリーヌはヒステリックに喚き散らす。スルースキルが皆無な彼女は、いとも容易く歳下の挑発に乗ってしまった。

「ふっふっくん♪アタシも大人になったら、シャーリーやリーネみたいにおつきくなるんだもん♪」

そう言うルツキーニは両手を使い、殆んど真つ平な胸を強調するように持ち上げた。

「優人のことだつて、メロメロにしちゃうんだから♪」

「わ、私だつて!立派な淑女になればきつと……もつと大きくなりますわよ!」

ペリーヌもまた、己のお世辞にも大きいとは言えない胸を持ち上げて——やや自信無

さげに——力説する。

これから胸の成長を高らかに宣言するなど、*“高貴なる義務”*を掲げる貴族令嬢にあるまじき行いだ、煽られてムキなっている今の彼女は自身の失態に気付けずいた。

「いやいや……ペリー又は、もう無理なんじゃない？にひひ♪」

「い、言わせておけば！」

煽りに煽りを重ねるルツキーニに対し、ペリー又は怒りと悔しさの感情を声に滲ませる。

そんなウイツチ2人のやり取りを、バルクホルンは冷ややかな目で見ていた。

「何をやつとるんだ。あいつらは……」

「まあ、いいんじゃない？」

と、ハルトマンが気楽に応じる。バルクホルンはすかさず「言い訳あるか！」と能天気な相棒を諷めた。

「お前もあいつらにとつては上官なんだぞ！少しは模範になるよう心掛けんか！」

バルクホルンが、これまで何百何千と繰り返してきたお決まりの説教だが、ずぼらなハルトマンがだらけた態度を改めることは遂になかった。

或いは、世話焼きお姉さんタイプのバルクホルンの為にならなくてそうしているのか。

「あ、あの……バルクホルンさん、ハルトマンさん……」

ふとサーニヤが遠慮がちに声を掛けてきた。音楽の道を志していただけあって、彼女はプロの音楽家顔負けに美しく澄んだ声を持っている。

「ん、どうしたの？サーニヤん」

「サーニヤから話掛けてくるなんて珍しいじゃないか？」

ハルトマンやバルクホルンも、少し意外そうな顔で応じる。

シフトの都合やサーニヤ本人が大人しく、人見知りな性格をしていることもあって、彼女が自分から誰かに話し掛けることも、Wエースが彼女と会話する機会もあまりなかった。

「あの……ガリアのネウロイの巢は消滅したということですけど……」

「うん、それが？」

控え目に話すサーニヤ。ハルトマンが合いの手を入れる。

「それでも、ガリアからオラーシャまで戻るとは……やっぱり難しいですよね……」
「だろうな」

サーニヤの問いに、バルクホルンが静かに頷く。ガリアが解放されたとはいえ、途中のカールスラントや肝心のオラーシャ西部は、未だネウロイの支配下にある。

いくらサーニヤが優秀なウィッチとはいえ、オラーシャへの帰還は困難を極める。

「そう、ですよね……」

消え入りそうな声でサーニヤは応じる。サーニヤがオラーシャに戻りたがっているのは、単に母国だからという理由ではない。ウラル山脈の向こう側——シベリア地域へと疎開したと思われる両親を探すためだ。

大戦初期の戦況悪化に伴い、所属していたウィツチ部隊ごと欧州に取り残されたサーニヤは、本国の疎開に間に合わず大好きな両親と生き別れてしまった。

サーニヤは、常に両親のことが気掛かりだった。ガリアの解放によって漸く長い休暇が取れそうだが、オラーシャへの帰国が不可能なら、せつかくできた時間を両親の捜索に使うことなど叶わない。

表情に影が射したナイトウィツチを励ます言葉も思い浮かばず、バルクホルンは胸がチクリと痛むのを感じた。

「いつそのこと。宮藤兄妹や少佐と一緒に扶桑へ行つちやえば？あつちから回れば、なんとかなるかもよ？」

と、ハルトマンが提案する。彼女の言う通り、扶桑まで逝けばシベリア地域はもう目と鼻の先。扶桑海事変終結以降、大陸側の皇国領土にネウロイがすることもなく、安全且つ確実にシベリアへ向かえる。ハルトマンの提案は理にかなっていた。

「芳佳ちゃんや優人さんと、一緒……」

サーニヤの表情がパアツと明るくなる。尤も、オラーシャへ行けることよりも宮藤兄妹と一緒にいられることの方が嬉しいようだ……。

「ダメだ！ダメだ！ダメだああああ！」

今まで静かにしていたエイラが、突然叫び声を上げて会話を割り込んできた。

「エイラ？……どうしたの？」

何やら慌てた様子の子のエイラに、サーニヤは目を丸くする。

「そ、その……扶桑はスツゴク蒸し暑いって聞くゾ！ソナトコ行ったら、身体壊すゾ！」

エイラは取って付けたように扶桑行き反対の理由を語り始める。

確かに扶桑本国特有の高温多湿な環境下では、様々な病氣——特に熱中症になる危険性がある。

慣れているはずの扶桑人でさえこの氣候に参ってしまうのだから、北欧出身のサーニヤは一溜まりもないだろう。

「ソレにきつと、扶桑の飲み物は肝油しかナイゾ！」

と、今度は偏見極まりない発言するエイラ。彼女はどうかあつても、サーニヤを扶桑へは行かせたくないらしい。

「肝油は苦手……」

約1ヶ月前に飲んだ肝油の味を思い出したのか。サーニヤの表情が僅かに引き攣る。「ダロ!?ダロ!?!」

「い、いや。いくらなんでも、そんなことはないだろう?」

扶桑の飲料文化に対する偏見が酷いエイラに対し、バルクホルンは呆れ目で突っ込みを入れる。

「あ……芳佳ちゃんから貰った扶桑のお茶、美味しかった……」

と、サーニヤが思い出したように言う。西洋の紅茶とは違った趣がある扶桑の緑茶。ひと口含むと、気品ある豊かな甘みや心地好い渋み。そして爽やかな新緑の香りが、溢れるように口内で広がる。

「き、今日という今日は!あなたに淑女の礼儀というものをしつかりと教えて差し上げますわ!」

再びルツキーニに言い募るペリーヌの怒鳴り声が聞こえ、バルクホルン等4人の視線はそちらに集中する。

「えく、そんな堅苦しいのやだよく♪にやはははははっ♪」

と、ルツキーニは相変わらずペリーヌをあしらい、おちよくり続ける。当分、決着はつきそうもない。

「ペリーヌさんとルツキーニちゃんって、ほんと仲が良いよねえ。あはは!」

「そ、そうなのかなあ……あは、ははは……」

芳佳は屈託のない笑顔で、リーネは苦笑気味に2人の様子を見守っている。

もしかすると、芳佳の言う通りペリーヌとルツキーニは「喧嘩するほど」な間柄なのかもしれない。多分……。

「あらあら、ずいぶんと楽しそうね？ 私にも、その淑女の礼儀とやらを教えてもらえるかしら？」

「あらー：よろしいですわ！ ガリア貴族としての礼儀作法を一から丁寧に……」

背後から聞こえた何者かの声。反射的に応じたペリーヌだが、相手が誰かなのかを理解すると途中で言葉を止める。

ゆっくりと首を回らせて振り返ったペリーヌは、部屋の入り口に並んで立つミーナと優人の姿を視線の先で捉えた。

「み、ミーナ中佐と……おにい……宮藤大尉!？」

「あわわ……やっぱ……い……」

ミーナ隊長の御到着で、ペリーヌは当然として、さしものルツキーニも一瞬で顔面蒼白となった。

騒がしかったブリーフィングルームに、お通夜並の静けさが訪れる。

「ペリーヌさん。こんな時は大人の淑女として、どういう風に立ち居振舞えば宜しいの

かしら?」

「あ……いい、いえ。それは……」

いつも通りの柔和な笑顔で、ミーナは意地の悪い質問をする。

さつきまでの威勢は何処へ行ったのか、ペリーヌはすっかりしおらしくなっていました。

「ふふっ♪2人共、早く席に着きなさい。ほら、他のみんなも」

「申し訳ありません……」

「うじゅ……ごめんなさい……」

ペリーヌとルツキーニの両名は、まるで担任の先生に叱られた小学生のように、トボトボと力の無い歩みで席へと戻っていった。

ミーナは彼女等が着席するのを見届けてからブリーフィングを始めるため壇上へ上がる。

優人もミーナの後に続き、彼女の斜め後ろの位置に控える。シスコン兄貴である彼は、壇上へ上がる直前に最愛の妹へ微笑み掛けるのも忘れない。芳佳もまた、大好きな兄に向かつて無邪気な笑みを返した。

どういう理由か。2人と一緒に来ると思われた坂本の姿がない。ウィッチ達は不思議に思ったが、優人達の様子からして戦闘隊長に何かあったわけではなさそうなので、

誰もその疑問を口に出さなかった。

「さて、みんな揃っているわね?」

ミーナは壇上から視線を走らせ、ウィッチーズ全員の集合を目で確認する。

隊長直々のお叱りを受けたペリーヌやルツキーニはもちろん、他のメンバーも自分の席に戻り、ミーナからの連絡を待っている。

「今日みんなに集まってもらったのは他でもありません。まずは、先日襲来してきたネウロイについて判明したことから……」

先日の襲撃してきたネウロイ。それは優人、バルクホルン、シャーリー、ルツキーニの4名が応戦した小型ネウロイの一団のことだ。

爆発的な速力と強力なビーム砲を備えた槍状の超小型ネウロイを突撃させるという特異な能力を有し、迎撃に出た4人を大いに手こずらせた。

「あのネウロイは、ガリアに残っていた敵残存勢力が最後の抵抗に出たものです。バルクホルン大尉以下4名の手で撃退されたことにより、総司令部はガリアがネウロイから完全解放されたものと判断しました」

「え?それって……つまり、どういうことでしょうか?」

「言葉通りの意味だよ。もうガリアにはネウロイが一匹も残ってないってこと」

芳佳が疑問符を浮かべながら訊くと、ミーナに代わって優人が応えた。

「私の……私のかけがえのない故郷。ガリアからネウロイが消え去ったのですわね」

ペリーヌが震えた声で念を押すように訊ねると、慈愛に満ちた笑みを浮かべるミーナが静かに頷く。

「ええ、そうよ。良かったわね、ペリーヌさん」

「本当にガリアを取り戻せましたのね。ああ……嬉しいですわ」

数年前のガリア陥落の折。ペリーヌは生まれ育った故郷と、すべての親族を同時に亡くしていた。単身ブリタニアに渡り、故郷奪還を夢見て自由ガリア空軍に志願。

しばれくして、当時大尉だった坂本から直々にスカウトされ、501の一員として最前線で戦うことになった。

しかし、倒しても倒してもネウロイは次々に現れ、西部の戦況も部隊創設から数年経っても好転せず、心の何処かではガリア奪還を諦めかけていた。

それでも腐ることなく戦い続けた結果、ペリーヌ・クロステルマンは仲間達共にガリアの解放を成し遂げた。数年越しの悲願を見事達成したのだ。

ミーナに告げられ、改めて実感したペリーヌは感極まつたらしい。決して他人に弱味を見せない彼女が、人目も憚らず感涙していた。

「うん、おめでとうペリーヌ！」

「良かったね、ペリーヌさん！」

宮藤兄妹から始まり、501の仲間達からもガリア解放を祝う言葉がペリーヌへ贈られる。

元々の意地っ張りな性格と、故郷を奪われた責任感や焦燥感が災いして、素っ気ない態度や高圧的な態度を取ってしまいがちなペリーヌだが、今日ばかりは素直に礼を述べている。

ガリア解放という悲願の達成を自分のことのように喜んでくれる仲間達の存在が兎に角嬉しくて、ありがたかったのだ。

「みんな、まだ話は終わっていないわ」

再び騒がしくなったブリーフィングルーム。ミーナはコホンと軽く咳払いをしてから話を戻した。

「ガリアを拠点としていたネウロイの巢は、私達の手によって消滅しました。つまり、ブリタニアに脅威を及ぼしていたネウロイもいなくなつたということになります」

ここまで言つてミーナは一呼吸置き、微かに表情を曇らせながら言葉を続けた。

「それに伴つて、私達第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の解散命令が、総司令部から正式に通達されました」

「……えっ?」

真つ先に反応したのは部隊のみんなの妹分であるルツキーニだった。

悲しげに声を漏らすロマーニヤウィッチに続く形で、他のメンバーも各々反応を示す。

「解散。そんな……」

ルツキーニと同様に強いショックを受けたらしく、芳佳は憂いに満ちた声音で呟く。

「……そうなりますわね」

「いよいよか……」

「ま、しようがないよね？」

「まあ、ね。そりやそうだよな」

ペリーヌ、バルクホルン、ハルトマン、シャーリーが順に独り言ちる。

元々、連合軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』は、ブリタニアの防衛及びガリア奪還を目的として設立された多国籍部隊。

巢の消滅によりガリアが解放され、ブリタニアへの圧力も大幅に低下、目的は達成されたと言える。それはつまり、彼女達が501として活動する理由が無くなったことを意味している。来るべき時が来た、ということだろう。

「ガリアやブリタニアにネウロイがないんじゃないじゃ、解散もしょうがないナ」

「うん、そうだね」

「……寂しくなりますね」

エイラ、サーニヤ、リーネの3人も表情を曇らせる。このブリタニアで出会い、共に戦った戦友達といよいよ別れなくてはならない。そう思うと、急に物悲しくなった。

ペリーヌの故郷——ガリア共和国が解放されたのだから喜ぶべきなのだろうが、ウィッツチーズの心中にはなんとも言えぬ寂しさが渦巻いていた。それは部隊唯一のウィザードである優人も同じだ。

(もう終わり……なんだよな……)

優人にとって、501部隊は宮藤家とは別の——もう一つの家族と言えた。

一家の長男役として、父親役の坂本や母親役のミーナを助けたり、個性豊かな姉妹に囲まれながら過ごした日々。苦勞も多いが、楽しいことや嬉しいこともたくさんあった。

そんな生活も、もうすぐ終わる。少し前までは、早く扶桑本国へ、故郷の横須賀へ帰りたいと思うことすらあったというのに、いざ解散となると不安や寂しさが一気に押し寄せてきた。

自分にこんな女々しい一面があったとは、と優人は密かに自嘲する。

「それと、もう一つ連絡があります」

それだけ言うと、ミーナは優人に目配せした。もう一つの連絡は、彼の口からウィッツチーズに知らされるようだ。

「今日の午後、扶桑海軍遣欧艦隊所属の空母『天城』が基地の港に入港する」
「天城？扶桑の空母が何しに来るんだ？」

と、シャーリーから質問が上がる。

「うちの部隊で使用している機材を回収して、ロマーニヤの第504統合戦闘航空団へ移送するのが、天城の任務だ」

優人が簡潔に伝えると、シャーリーは「そういうことか……」と納得する。

第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』は、欧州反攻作戦の一環として、連合軍最高司令部から命令が下り、設立された4番目の統合戦闘航空団。

501が西部方面総司令部所属なのに対し、504はロマーニヤ、ヴェネツィア、ヒスパニア、アフリカ戦線を管轄する地中海方面総司令部の所属である。

まだ設立途中ではあるが、いずれは501にも劣らぬ人材と装備を有した精鋭部隊として機能することだろう。

「ブリーフィングは以上で終了となります」

優人の説明が終わったタイミングで、再びミーナが口を開く。

「解散後、各自は原隊に復帰。正式な辞令が来るまで、まだしばらく時間があるでしょうから、それまでは各自戦いの疲れをしつかりと癒してください。では解散」

斯くして、501解散の旨を伝えるために開かれたブリーフィングは終了となった。

ウィッチーズ各員は、それぞれ基地を引き払う準備を始める。

(そう言えば、坂本さんは?)

ブリーフィンングルームを出た直後、ふと芳佳はブリーフィンングに顔を出さなかった上官兼師のことを思い浮かべた。

第2話 「リバウの貴婦人」

1944年9月、ロンドン・人類連合軍西部方面総司令部――

早朝ブリーフィングに唯一参加しなかった第501統合戦闘航空団副司令兼ウィッチ部隊戦闘隊長――坂本美緒少佐は、原隊の上官――扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令長官の赤坂伊知郎直々の呼び出しを受けていた。

同じく赤坂に呼び出された宮藤一郎博士と、501基地飛行群支援飛行隊所属の輸送機『Ju-52』に搭乗し、解散命令通達直後にドーバーの基地を経っていた。

程無くして、Ju-52はロンドン上空に差し掛かる。機長から報告を受け、兵員室で瞑想中だった坂本は両の目蓋を開く。

もちろん、兵員室には彼女の他に一郎の姿も確認できる。ストライカーユニット関連の資料を読み耽る彼は、到着の報せを完全に聞き流していた。

総司令部が設置されている建物の敷地へ接近を続けるJu-52に、管制塔がコンタクトを求めてきた。機長は無線越しに聞こえる管制官の声に応じると、着陸準備に入った。

狭苦しい機内からロンドンの地に降り立った坂本と一郎を迎えたのは、赤坂の副官を

務める扶桑海軍中佐——西野勤だった。

爽やかな笑顔を向ける西野に対し、坂本は拳手敬礼で応じたが、尚も資料に夢中な一郎は中々挨拶を返さなかった。

「よく来てくれた」

西野に案内され、2人は到着早々赤坂の執務室に通された。

部屋に入つてすぐに、執務機の向こう側に赤坂伊知郎中将の姿を見つけ、坂本は半分嫌味のつもりで直立不動の姿勢を取つた。

自分の地位を守ることや派閥争いで勝利することに汲々とし、前線の将兵等を顧みようとしない軍上層部の将官達を坂本は好ましく思っていない。

良くも悪くも人情家で現場主義な性格の彼女には、彼等が後生大事に抱えているあれこれが、道端に転がる石にしか見えないのだ。

赤坂に関しても、501の後ろ楯となつてくれたこと。そして、マロニーに芳佳の撃墜命令と強引極まりない501解散の命令を撤回させたことには、少からず感謝している。

だが、坂本もミーナも、叔父のように思っていると公言している優人でさえ、穏やかな表情の裏に黒い面を持ち合わせている赤坂を心底信用しているわけではない。

「楽しんでくれ」

赤坂に言われ、坂本は休めの姿勢に変える。一郎はというと、部屋前に来た途端、突然「トイレに行きたい」と言い出して、西野と共にトイレへ駆けて行った。

同じ天才肌故か。才能の発揮される分野こそ違えど、マイペースなところはハルトマンと似たり寄ったりである。

そんな一郎だが、実は扶桑海軍經由で宮菱重工業への復職が内定している。彼が戻れば、長らく停滞していた零式の後継ユニットの開発も大きく前進することだろう。

「長官、昇進おめでとうございますー」

執務机を隔てて赤坂と向き合った坂本は、やはり皮肉半分祝福を述べた。

連合軍最高司令部が計画している全面的な欧州反攻作戦に参加・支援を行うため、扶桑海軍上層部は、遣欧艦隊の再編成を決定した。

より多くの艦艇やウィッチを含む将兵を動員により、遣欧艦隊は複数の艦隊を隷下に置く大規模な外征部隊へと生まれ変わる。

連合艦隊の指揮系統から独立し、浦塩を拠点に活躍する大陸方面艦隊や皇国の重要な策源地であるパシフィス島——扶桑名“南洋島”——の防衛を担当する南洋方面艦隊、船団護衛に従事する海上護衛総隊、連合軍太平洋方面統合軍の指揮下に入っている第一機動艦隊等の大艦隊に比肩する部隊として、欧州に展開する扶桑海軍の主力となる。

それに伴い、赤坂は大將に昇進した上で艦隊司令長官を続投。遣欧艦隊の司令部も、

連合軍最高司令部への移設される。

「ありがとう。君や宮藤兄妹も、本国に戻り次第昇進だったな」

と、赤坂。原隊では、それぞれ大尉・中尉だった坂本と優人は、ガリア解放の功績により501在籍時と同じ階級に昇進することが決定している。

また芳佳や一郎についても、既に曹長——扶桑海軍では上等兵曹と呼称——への昇進、宮菱工業への復職が内定している。

「さて、501解散の話は聞いているかね？」

「はっ！」

一郎が戻るのを待たずして本題に入った赤坂に、坂本はハキハキとした大きな声で応じる。501基地を経つ少し前、総司令部から通達された命令を聞いていた。

一時は501を部隊ごとガリアに異動させ、国防衛に充てることも検討されたが、ブリタニアとガリア政府が強硬に反対。結局、501は解散となった。

「本日。補給任務を赤城から引き継いだ我が艦隊の航空母艦『天城』が、501基地の港へ寄港する」

「501の人材・機材をロマーニヤの第504統合戦闘航空団基地へ移送するのが目的と聞いています」

坂本が先回りして言うと、赤坂は深く頷いて肯定の意を示す。

「天城はロマーニャへの移送任務を終えた後、扶桑本国への帰路に就く。501の扶桑組3名と宮藤博士には、天城に乗艦して扶桑に帰る予定だったが、事情が変わってな……」

「……と、おつしやいますと?」

ピクツと微かに片眉を上げた坂本は、怪訝そうな面持ちで続きを促す。

「君と宮藤博士には、501解散に先んじて帰国してもらうことになった。急がせて申し訳ないが、天城より先にブリタニア到着する予定の『二式大艇』に搭乗して、扶桑本国へ向かってほしい」

赤坂の言う『二式大艇』こと『二式飛行艇』は、扶桑皇国が欧州各地への迅速な連絡や補給のために開発・実用化した大型飛行艇である。

欧州との連絡・補給に極めて効果的であった山西航空機の九七式飛行艇よりも速度、航続力、物資の搭載量等々。あらゆる面で優れており、この機体の実用化によつて世界各地に展開する扶桑軍への迅速な支援が可能となった。

「本日中に……ですか?」

艦隊司令長官から言い渡された、あまりに急過ぎる帰国命令。坂本は戸惑いを覚える。

「君や宮藤兄妹の活躍が知れ渡り、本国では航空歩兵を志して海軍に入隊する者、海軍兵

学校へ入学を希望する者が急増している」

と、赤坂は坂本を急ぎ帰国させる理由を詳しく説明し始める。501部隊——殊に宮藤兄妹の活躍は、新聞やラジオ等のメディアを通して本国にも伝わっていた。

かつて扶桑陸軍が、自ら制作した宣伝映画『扶桑海の閃光』を利用して多数のウィッチを獲得したように、今回は扶桑海軍が宮藤兄妹をプロパガンダに起用していた。

ウィッチとウィザードの兄妹であり、"ストライカーユニットの父"と称される高名な技術者——宮藤一郎を父に持つ2人が過酷な最前線で戦う報せは、老若男女問わず皇国の人々を熱狂させ、扶桑海軍は多くの志願者を得るに至った。

「対して、養成学校の教官はやや不足している」

そこまで言つて、赤坂はひと息吐いた。ウィッチ・ウィザードの養成学校は、今や世界中に建設されている。

先天的に魔法力を宿している。或いは遺伝子的な要因から後天的に発現する可能性がある少年少女のみならず、魔法を使えるようになりたいと願う者も——ウィッチやウィザードと過ごすことで魔法力が発現することもあるため——無料で教育を受けられる。

「坂本少佐、君はリバウ滞在時に後輩達を一線級の航空歩兵へと育て上げた。501において他国のウィッチ達を鍛えながら、君自身も指導者として研鑽を積んだと聞いて

「ん」

「私をウィッチ養成学校の教官に？」

「あくまでも臨時教官だよ。遣欧艦隊に籍を残したまま、異動ではなく養成学校に出向という体だ」

「しかし、長官。私は……」

「先月『あがり』を迎えたと聞いている。ガリアが解放され、501も解散。いいタイミングじゃないか？」

「……………」

赤坂の口から『あがり』という言葉が出てきたことで、坂本はウィッチとしての自分が、事実上の戦力外通告を受けているのだと理解する。

先月20歳を迎えた彼女の魔法力は、シールドがまともに機能しなくなるほどまでに減退していた。衰えていくスピードは本人の予想よりも早く、魔眼や身体強化、ストライカーユニットを使った飛行が出来なくなるのも時間の問題だろう。

魔法力の減退が顕著に現れ始めたウィッチは、部隊の司令職として指揮に専念するか。教官として後身の育成に回るのが常である。だが、坂本の性格を鑑みるに「はい、そうですね」と素直に現役を退くとは思えない。しかし、魔力シールドの弱体化により相対的な能力の低下は否めず、彼女がネウロイとの戦闘で一線を張り続けるのは難し

い。

それに坂本は自分が思っているよりも、ずっと名の知れたウィッチだ。彼女が無理をして戦場に残り続け、戦死でもしようものならば、兵の士気や皇国のウィッチ派遣に影響が出るのは火を見るよりも明らか。

赤坂としては、どうにか彼女に融通を利かせてもらいたかった。

「……………わかりました」

坂本は喉まで出かかった不平を飲み下し、上官に向かって改めて敬礼した。

「坂本美緒少佐！臨時教官として養成学校への出向、受領致しました！」

声高に宣言する501戦闘隊長の雄姿を前にして、赤坂もまた力強く頷いた。

「ここからの遣欧艦隊……………いや、扶桑海軍は今まで以上に多くのウィッチが必要となるだろう。よろしく頼む、坂本美緒少佐」

艦隊司令長官の激励に坂本は「はっ！」と応じ、敬礼のために持ち上げていた右手を下げる。

「……………長官。一つお願いがあります」

「なんだね？」

「もし再度欧州へ派遣される機会があれば、もう一度ウィッチとして前線で戦うことを許可して頂きたいのです」

意識の込もった力強い眼差しで、坂本は赤坂に懇願する。

赤坂はすぐには応えず、彼女の真意を推し量るようにじつと見つめ返した。彼の返答を待たずに、坂本はさらに言葉を続ける。

「シールドを失った私が、戦力としては心許ないのは重々承知しております。ですが、新たな防御方法確立の目処は立っています！」

自信に満ちた表情と声音で宣言する坂本を暫し見つめた後、赤坂はおもむろに口を開いた。

「その新たな防御手段は、具体的にいつものになるんだね？」

「一年……いえ、今年度中には必ず！」

「分かった、留意しておく」

「感謝致します！」

坂本は一礼して感謝を述べる。それと同じタイミングで、血相変えた西野の執務室に飛び込んで来た。

「長官！宮藤博士が！」

「きゅああああああ！何なの!?!おじさん誰よ!?!痴漢っ！変態っ！変質者あ！」

「ぐ、誤解だ！」

慌ただしく入室した扶桑海軍中佐に続いて、女性と一郎の叫び声が聞こえてくる。何

やら揉めている。

西野曰く、資料に夢中となっていた一郎が不注意にも女子トイレに入ってしまった、個室で総司令部付のブリタニア空軍ウィッチと鉢合わせてしまった。

さらに悪いことに、ブリタニアウィッチは——トイレにいるのだから当然だが——用を足すためズボンを下げていた。

そこへタイミング悪く一郎が、つまりはそういうことだ。

(優人の女難は、博士譲りの才能か……)

坂本は右手で眉間を押さえると、稀有な才能を持った宮藤親子の姿を思い浮かべて深い嘆息を漏らした。

◇ ◇ ◇

同時刻、グレートブリテン島近郊の海域——

「あれね……」

北海方面を航行中の母艦から飛び立って約1時間後。目的の艦を視認したアリヨナは、無意識に呟いた。

『B f 1 0 9 K—4型』を駆る彼女を筆頭に、『B f 1 0 9 T—1型』と各種携行火器を

装備した5名の親衛隊ウィッチが、後に続く形で編隊を組んで飛行している。『インペリアルウィッチーズ』の第3飛行隊だ。

メンバーは国防空軍のエースウィッチにも引けを取らない精鋭だが、昨晚の戦闘の疲れもあつて皆表情を曇らせている。

『わざわざ合流させるなんて……』

『こっちは疲れているのに、ホフマン大尉は何をお考えなのかしら』

インカムを通して聞こえる部下達の不平不満に耳を傾けながら加速をかけ、洋上を航行する親衛隊旗下の航空母艦へ接近する。

赤城型航空母艦4番艦「愛鷹」——カールスラント名「ドクトル・エツケナー」。全長260.7m、全幅31.3mに及ぶその威容は、扶桑海軍が完成前の巡洋戦艦を大型空母に改装したものだ。

建造されてから既に相当の年月が過ぎている。艦齢の古い空母ではあるが、洋上に屹立する黒鉄の巨体から鯨の如き力強さと威厳が感じられた。

乗員は約2000人。兵装は50口径20cm単装砲6基、40口径12.7cm連装対空砲6基12門、そして25mm対空機銃が28門。

艦載機は、航空機のみならば91機——常用75、補用16機。または、ウィッチ8名と艦上戦闘機16機、艦上攻撃機8機。

大戦初期時点では、カールスラントに空母発着艦訓練を受けたウィッチがおらず、艦上機も無かった。だが、艦自体はビフトレス作戦において、避難民の輸送等で活躍している。

現在は所属を国防海軍から皇室親衛隊に移し、『インペリアルウィッチーズ』の航空母艦として運用されていた。それに伴い、艦長をはじめとする幹部クルーは、親衛隊士官と入れ替わる形で全員退去している。

『なんでもいいから、早く落ち着きたいわ』

先程とは別の親衛隊ウィッチのぼやきが、インカムから伝わる。

アリヨーナは内心同意しつつ、『ドクトル・エツケナー』への着艦コースに入った。



十数分後、『ドクトル・エツケナー』艦内――

「失態だな。アリヨーナ・クリューコフ」

艦に降り立ったアリヨーナは、愛機を格納庫にあつた発進ユニットに固定すると、部下達を置いてガランルームへ向かった。

そこで彼女を待っていたのは、『インペリアルウィッチーズ』内で密かに「アインツベ

「ルン大佐の腰巾着」と揶揄されている親衛隊大尉——グレーテル・ホフマンだった。

険しい表情を浮かべたホフマンは、サファイアのような蒼い瞳でアリオーナを睨みつけている。

失態を咎める彼女のキツイ物言いが室内を反響し、疲労の苦味を滲ませた第3飛行隊隊長の胸に鋭く突き刺さる。

「まんまと目標を取り逃がすなど、貴官らしからぬ失態だ。一体どう埋め合わせる気なのか……」

ホフマンは神経質そうに顔を顰め、つべこべと叱責の言葉を並べる。

端正な面差しに美しい金色の長髪を持つホフマンの容姿は、漆黒の親衛隊勤務服に良く映える。軍帽をしつかりと被り、柄に豪華な装飾をあしらった軍用サーベルを腰に差す姿は、貴族令嬢のようでありながら軍人然としている。

階級は同じ親衛隊大尉、年齢はアリオーナの方が1つ上。しかし、ホフマンの方が先任で、航空ウィッチとしての実力も前線指揮官としての能力も、アリオーナや第2飛行隊隊長のメリツサ・ガンビーノを凌いでいる。

それはアリオーナも認めるところだが、高圧的な言動といい、自分の美意識を周りに押し付ける私の強さといい、航空団司令のインツベルン大佐に向けられた妄信的な忠誠心といい、とても同調できる相手ではなかった。

「リベリオンやブリタニアの陸軍を中心とした連合軍がガリア沿岸地域への展開を始めている。迅速に事を進めなければ——」

「あのネウロイは、他のネウロイとは違うのよ……」

クドクドとうるさいホフマンの言葉を遮り、アリオーナは溜め息混じりに反論する。何を言っても無駄だろうが、言われっぱなしというのは癩に触るのだ。

「火力、装甲、速度。すべてにおいて桁違い。あんたが発案した戦術じゃ、とても対処出来な——」

「貴様！自分の不手際を棚に上げてっ！」

「グレーテル、アリオーナ。2人共止めなさい、見苦しいわよ」

ホフマンが気色ばんだ途端、第三者の涼やかな声が割って入った。

瞬時に顔色を変え、直立不動となったホフマンがさつと脇へ引つ込む。代わりに入り口の方からグラマラスな東洋系の美女が現れ、アリオーナは緩んだ気が再び引き締まるのを感じた。

女性は、アリオーナやホフマンと同様に親衛隊の制服を着用している。頭に乗せた軍帽も親衛隊のものだが、履いているロングミリタリーブーツの踵にヒールが付いた特注品。ズボンも官給品の白色ではなく、軍事組織にはおおよそ似つかわしくない黒いレースが付いたラベンダー色のローライズ。服越しても起伏がハッキリと分かるスタイルの

良さも相俟つて、妖艶な雰囲気醸し出している。

ゆつたりとした動作で、女性はアリオーナの前に歩み寄る。彼女が一步踏み出す度、ロングミリタリーブーツのヒールがコツコツと小気味良い音をガンルーム内に響かせた。

艶のある長い黒髪がそよぎ、ホフマンのものとは対照的なルビーの如き赤い瞳が北歐系の親衛隊大尉をジツと見据える。

「お疲れ様、アリオーナ・クリューコフ大尉」

女性——悠貴・フォン・アインツベルン大佐はアリオーナに艶然と微笑みかけ、戦闘で疲弊した彼女を労う。

『インペリアルウィッチーズ』の司令は、男女問わず人々を眩惑し、墮落させてしまう悪魔的な美しさをその身に宿している。

アリオーナは上官の美しさに息を呑みながらも、「ハッ！」と短く応じた。

「あなた達第3飛行隊を退けたのは、やはり？」

「ええ、大佐が望まれていた個体間違いないありません」

第3飛行隊長の報告を直に受け、悠貴は我が意を得たりとばかりにコケティッシュな唇で曲線を描いた。

「最寄りの港で補給受け、万全の状態で捕獲作戦を実施しましょう。第3飛行隊には戦

闘報告書を提出した後、数日の休日を命じます」

悠貴の指示にアリヨーナは「はっ！」と姿勢を正して応じてみせた。

「次の作戦にて、汚名を返上させて頂きます」

殊勝な心構えの飛行隊長に、悠貴は無言のまま笑みを深めた。

◇ ◇ ◇

数時間後、第501統合戦闘航空団基地――

ウィッチーズ基地の港にもまた、黒鉄の巨影が確認できた。扶桑海軍遣欧艦隊所属艦

――赤城型航空母艦二番艦“天城”だ。

伊豆半島中央部に存在する連山に因んで命名されたこの艦は、本来一番艦となるはずだった。しかし、横須賀で発生した地震の影響で建造が遅れ、先に赤城が完成したことから二番艦となり、級名も赤城型と呼称された。

かつて天城は、近代化改装によつて天城3段式飛行甲板から全通式の飛行甲板へと変更された。

後に赤城も同様の改装が施されたが、天城ほど徹底されていなかった。故に同型艦でありながら、細部で異なるという結果に至った。

新造空母が登場した後、赤城は天城よりも先に空母機動部隊任務から外され、欧州への補給任務に回された。

「わあ……何だか、いろんなものがいっぱい運ばれてくる。見たことないばかり……」

芳佳はリーネを連れて、港まで天城を見に来ていた。天城の内火艇から、様々な物資が運び出されている。見るものすべてが物珍しく、扶桑海軍軍曹は思わず感嘆の声を漏らす。

「うん、そうだね。カゴいっぱいあの果物も初めて見るよ」

と、リーネも芳佳に同意する。ちなみに、彼女が初めて見ると言った果物の正体は、扶桑の柿である。

「あ、船員さんがこつち向いて手振ってるよ！わーい！こんにちは〜！」

「ふふっ♪芳佳ちゃんったら♪」

内火艇の乗員に向かって、芳佳は元気良く手を振り返す。無邪気に笑う親友の姿に、リーネも自然と笑みを零した。

ふとリーネは、内火艇の接岸した栈橋に見知った人物が立っていることに気が付いた。

「ねえ芳佳ちゃん。あれ、優人さんじゃない？」

「えっ？あ、ホントだ。誰かと話してるみたいだけど……」

棧橋には、他にもう一人。優人と同じ歳くらいの少女が、彼と向かい合うようにして立っていた。

何処かミーナと雰囲気の似ている茶色がかかった黒髪の少女は、優人や坂本と同様に扶桑海軍第二種軍装を着用している。

「優人さんや坂本少佐と同じ制服を着ているから、多分扶桑海軍の人だよ」

と、リーネが分析する。昼過ぎにロンドンから戻ってきた坂本と宮藤兄妹の父——一郎は、昼食を終えてすぐに飛行艇で扶桑へと発つていた。

詳しい事情は聞かされなかつたが、なんでも火急の用ができたとのこと。

「そつかあ……つてことは、お兄ちゃんや坂本さんのお友達なのかなあ？」

「きつと優人さんや坂本少佐に負けないぐらいのすごいウィッチなんじゃないかな？」

芳佳とリーネは一旦会話を打ち切り、棧橋に佇む二人の扶桑海軍士官へ目を据えた。

優人と相手の扶桑海軍ウィッチは、とても親しげな様子で会話を続けていた。楽しんで笑い合う二人は、仲の良い恋人のようにも見える。

（お兄ちゃん、なんだか楽しそう……）

自分の知らない、優人と具体的にどんな関係か判然としない女性。ウィッチの例に漏れず、かなりの美人である。

そんな魅力的な女性と、大好きな兄が楽しそうに会話をしている様を見せつけられ、

ブラコン妹の心中は穏やかではなかった。

耳を澄まし、会話の内容を聞き取ろうとするも距離がありすぎた。隣でリーネが「2人の邪魔しちや悪いから……」と辞去を促していたが、芳佳は盗み聞きに夢中で気が付かない。

「もうっ！全然聞こえないじゃないの！一体何を話しているのかしらっ！」

芳佳とリーネには預かり知らぬことだが、盗み聞きをしているのは彼女達だけではなかった。

少し離れた場所で、ペリーヌが木箱の影に身を潜め、扶桑海軍士官等のやり取りを注視していた。

「ん、もう！なんて楽しそうな顔なさるんですの、お兄様……」

名も知らぬ扶桑海軍のウィッチに対し、扶桑の実妹のみならず、ガリアの義妹までもが嫉妬の火種を燻らせていた。

突然、501の解散と敬愛する少佐との別れの時が訪れた。青の1番——ブルーブルミエだけにブルーな気分となっていたペリーヌは、今や兄のような存在である優人に慰め……もとい、解散後の相談をしようと彼を探しに港まで来ていたのだ。

「何やってんのお〜♪」

「なんか聞こえたか？」

「きゃっ!?!」

突如、聞き慣れた朗らかな声が耳朶を打ち、ペリーヌはビクツと肩を震わせる。

振り返ると、シャーリーとルツキーニのお騒がせコンビが、いつの間にか背後に立っていた。

「し、静かになさい!」

右の人差し指を自らの唇に当て、ペリーヌは騒々しいリベリオンとロマーニヤのお子様を叱りつける。

「何で覗き見してんのさ? 堂々と出ていきやいいだろ?」

ペリーヌの心境を知ってか知らずか、シャーリーはニヤケ顔で言う。唇の隙間から白く美しい歯が覗いている。

「あ、あなた方だつて覗いているじゃない!」

すかさずペリーヌは、声を荒げて反論する。シャーリー達を叱責したばかりだということに、自分の方が声を出してしまっている。

「ああつ! そんなに近付いて……もう……」

再び優人のいる棧橋へ視線を戻したペリーヌは、切なそうに声を漏らした。それは別場所から様子を伺っている芳佳も同じだった。

突然現れた見ず知らずの女性に、大切な人を連れて行かれてしまうような強い不安に

駆られているのだ。

「へえ、ずいぶんと親しそうだなあ……」

腕を組んだシャーリーが、扶桑海軍士官2名のやり取りを観察する。リベリオン陸軍の制服では隠しきれないほどボリュームのある爆乳が、組んだ両腕の上に乗った。

「アレって……もしかして優人の彼女？恋人ってやつ？」

「なっ!?ば、バカなことおっしやい！」

目尻を陰しく吊り上げたペリーヌが、ルツキーニの考えを否定しつつ彼女をキツと睨みつけた。

「えくつ?だって、服もお揃いだよ?ペアルツクってやつじゃないの?」

「扶桑の海軍服だからな。そりやそうだろ?」

と、今度はシャーリーが応える。妹分であるルツキーニと会話をしているというのに、その口調は心なしか堅い。

ルツキーニとペリーヌは気付かなかったが、「優人の彼女」やら「恋人」という言葉が出たあたりから、シャーリーは不機嫌そうに眉を蹙めていた。彼女らしからぬ態度だ。

「いくなあ、あの服カッチョイイなあ♪優人にお願いしたら、一着貰えないかな?」

ルツキーニは己の人差し指を軽く啣え、羨ましそうに第二種軍装を見つめる。

「駄目に決まっているでしょう!頂けるんですしたら、その……私だって……」

ペリーヌの張り上げた声が尻窄みになっていく。彼女とルツキーニのやり取りを聞いて、シャーリーは優人からシャツを借りっぱなしだったことを思い出す。

一時的に着る服が何も無くなったシャーリーに対し、優人が扶桑海軍支給のシャツを貸し与えたのだ。

(返さないよ、だよな……)

心中でそう呟くシャーリーの表情は、何処か残念そうだった。

◇ ◇ ◇

野次馬達の存在を知りもせず、優人と扶桑海軍ウィッチ——竹井醇子大尉は会話を楽しんでいた。

優人、坂本、竹井の3人は扶桑海事変直前に海軍航空歩兵へ志願した。所謂「同期の桜」だ。

正式な海軍入隊前は、北郷章香少佐が剣道師範代を務める講導館に在籍。入隊直後の扶桑海事変では、同じく北郷少佐が指揮官を務める第十二航空隊北郷部隊。大戦初期のリバウでは遣欧艦隊第24航空戦闘288航空隊と、3人は新兵時代からずっと一緒に戦ってきた。

戦友にして親友とも呼べる仲であり、501とはまた違った家族とも言える関係だろう。

遣欧艦隊のリバウ撤退後。坂本と優人が501に招聘され、各国のウィッチ等と共に活躍する一方で、扶桑へ帰国した竹井はウィッチ訓練校の教官後進の指導に当たっていた。

扶桑とブリタニア。何年も離れ離れとなっていた宮藤兄妹を見て分かるように、遠く離れた場所にいる竹井と優人達が会うことは容易ではない。久しぶりの再会で会話が弾むのも無理からぬことだと言える。

「やっぱり、あの二式大艇には美緒が乗っていたのね？」

優人に確認を取った竹井は、残念そうに瞳を伏せる。天城に乗艦し、その足で501基地を訪れた彼女は、優人とは会えたものの、二式大艇で飛び去っていった坂本とは行き違いになった。

先日、竹井は第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』の戦闘隊長の任を拝命し、再度欧州への派遣が決定する。

ロマーニヤの504基地へ向かう途上でブリタニアに立ち寄る予定になっていたの
で、優人と坂本に会えると欣喜雀躍としていた。しかし、惜しいことに坂本とは今回縁
がなかったらしい。

余談だが、数年前501設立の際には、優人だけでなく竹井もブリタニアへ呼び寄せようとしていたが、海軍上層部により却下されている。

「軽く挨拶する時間は取れると思っていたのだけれど……」

「坂本の首に紐を着けたがっている人間が、海軍上層部にいるんじゃないのか？」

と、優人は冗談混じりに笑い飛ばす。実際、特別便を利用した坂本の急な帰国は赤坂の根回しによるもの。なので、優人の推測は間違つてはいない。

「まあ、今回は会えなかつたけど。お互いが健在なら、またすぐ会えるわよ」

「前向きだな。ホント昔とは大違いだよ、*「醇ちゃん」*」

「そう言うあなたは、ポカやって死にかけてみたいじゃない？ *「優くん」*」

「……………」

痛いところを突かれた優人は、ぼつが悪そうに目を逸らす。気恥ずかしそうに後頭部を掻く彼の姿を見て、竹井はクスクスと小さな笑声を立てる。

ふと内火艇の乗員が、1枚の手紙らしき封筒を上に乗せた小包を抱えて2人の元へやって来た。

「そうそう、あなたに渡すものがあつたのよね」

思い出したようにそう言った竹井は、内火艇の乗員に礼を述べて荷物を受け取ると、さらにそれを優人に手渡した。

「手紙と小包。美千流くんからよ」

「やつときたか、ありがとう」

「なんなの、それ？」

優人の手に渡った荷物を見て、竹井は首を傾げる。小包はともかく手紙の方は妙だった。

美千留から送られたものなら、差出人の名前等は扶桑語で書かれているはずだが、封筒に刻まれているのはオラーシヤ語だった。

「うん？ちよつとな」

「さては、妹さんへのプレゼントね？」

「まあ、そんなところだよ」

曖昧に応えると、優人は同期の桜に向かって意味有りげに微笑んでみせた。

第3話「手紙、制服、ワイシャツ、嫉妬」

1944年8月下旬、ロンドン・とあるホテル——

それは宮藤優人が、妹の機嫌を取るために彼女とロンドンへ出掛けた日のこと。

うっかり門限を過ぎてしまった宮藤兄妹は、街で偶然会った502のエディータ・ロスマン曹長並びにヴァルトルート・クルピンスキー中尉が宿泊するホテルに部屋を取っていた。

『断る』

受話器の向こうの人物はにべもなかった。ホテルのフロントに電話を借りた優人は、まず基地のミーナに連絡を入れ、次に個人的な用事で扶桑皇国大陸領土に存在する港湾都市——『浦塩』。その軍港に勤務するはとこと通話中である。

はとこの名前は山川美千流。芳佳の親友——“みつちゃん”こと山川美千子の兄で、扶桑皇国海軍大陸方面艦隊にて戦闘機の整備を担当している一等兵曹だ。

2人は親戚であると同時に幼馴染みで兼悪友とも言える関係で、優人のお宝——扶桑及び各国のグラビア雑誌——は、美千流が彼の為に調達してブリタニアの501基地へ送ったものだ。

『シベリア地域がどれだけ広いと思ってるんだ！そんな場所で特定の夫婦を探し当てて、無理に決まってるだろ！』

と、美千流な憤然と怒鳴り散らす。優人は今回、美千流に彼のコネクションを使い、人探してもらいたかったのだ。

世界中に散らばるウィッチ達の現状を誰よりも早く知るためだけに築いた美千流のコネクション。それを駆使した情報収集能力は、国家の諜報機関にも劣らない。

同期入隊の下士官や地元の友人からは、皮肉と尊敬の念を込めて「地獄耳の山川」と呼ばれている。

「そこを何とか頼むよ」

優人は声に悲哀を滲ませながらも、簡単には引き下がらず。しかし、頭は下げて頼み込んだ。

士官が兵曹相手に頭を下げて懇願している光景——通話なので、互いの姿を確認出来ないが——は、軍隊的には異常としか言いようがない。幼馴染同士のプライベートな会話でもなければ、まずあり得ないことだ。

『ダメだ！だいたい遣欧艦隊所属のお前に命令される筋合いなんてない！人探しがしたけりゃ、自分やれ！』

「それが出来ないから恥を承知で頼んでるんだろ？」

『何が恥を忍んでだ!』

一段と語気を強めた美千流は、そのまま早口で捲し立てた。

『可愛い妹と世界中から集まった美女達に囲まれて、ハーレム生活を満喫しているくせして!それを思う度にどれだけ惨めな気分になったことか!』

はとこ同士だと言うのに、美千流は優人に対してずいぶんと当たりがキツイ。その理由を一言で述べるならば……まあ、嫉妬である。

山川美千流一等兵曹は、扶桑海軍連合艦隊に比肩する大艦隊——大陸方面艦隊隷下のある基地航空隊に整備兵として配属されている。しかし、整備部門に志願したの動機は、「ストライカーユニットの整備を通じて、ウィッチ達とお近づきになりたい」というオースドックスながら不純なもの。

念願叶って海軍所属の整備兵になれたものの、彼がいる航空基地にはウィッチがいない。すべてウラル方面の防衛任務に派遣されている。

ウィッチがいなくなった基地の格納庫で、穢苦しいパイロット達を乗せる戦闘機の整備に明け暮れる美千流に対し、航空ウィザードとなった優人は入隊時から陸海軍双方のウィッチ——麗しき扶桑撫子達に囲まれ、統合戦闘航空団に派遣されている現在は、世界各国の美少女達と一つ屋根の下で暮らしている。

いくらとはいえない、これだけ差をつけられれば美千流としては悪態の1つ——1

つどころでは済まないが——も吐きたくなる。

つまるところ八つ当たりであるが、これは何も美千流に限ったことではない。小学校の同級生を中心とした地元の幼馴染み等もそうだ。

数カ月前、一時的に扶桑へ帰国した際のこと。美千流と似たような理由で海軍に志願した彼等は、優人がかの有名な坂本美緒や西洋美女達に囲まれて暮らしていると聞くなり、短機関銃や小銃で武装した姿で彼の目の前に現れた。

さらに「無性に腹が立つ」「理不尽を感じる」「端的に言つて死ねよ」「思い残すことは何もないだろう？」等と、不条理極まりない発言を浴びせ、嫉妬に駆られるまま優人に襲いかかってきたのだ。

丸1日を費やした命掛けの追いかけっこの果てに。女の嫉妬はもちろんだが、男の嫉妬も恐ろしいものなのだと思い知らされた。

優人には受話器を握り締めながら、血の涙を流す美千流の姿が見えるようだった。

「オラーシャ生まれのウィッチが困ってるんだ。彼女を助けるためだと思つて……」

と、優人な尚も食い下がる。すると、受話器の向こうにいるはとこに変化がみられた。

『……………オラーシャのウィッチつて、501のリトビヤク中尉か?』

ウィッチを話題に出した途端、美千流の声音が柔らかくなった。優人は(しめた!)と思ひ、言葉続ける。

「そうだ！サーニヤ、オラーシヤ陸軍のアレクサンドラ・ウラジミールロヴナ・リトヴヤク中尉だ」

「……………」

暫しの沈黙を挟んだ後、熟慮を終えた美千流が吐息混じりに応じた。

『わかった。やるだけやってみるけど、約束は出来ないぞ！』

「ありがとう、助かるよ！」

『今度会ったら、飯くらい奢れよ？』

「ああ、もちろんだ！」

そこで通話を終えた優人は、受話器を置いて客室へ戻っていった。



同年9月、第501統合戦闘航空団基地――

基地のミーティングルームから、ピアノの美しい調べが漏れ聞こえていた。その旋律は軽快で華やか。聞く者の鼓膜を優しく振動させるもの。

室内には、軍事基地におよそ似つかわしくない立派なグラランドピアノが置かれている。部屋が客間として使われていた頃から存在する調度品の1つだ。

ウィッチを含め約1000人規模の人員が身を寄せる501基地において、ピアノの鍵盤に触れる者や音楽に関心を持つ者は限られていた。

航空団司令兼ウィッチ部隊隊長のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐と、もう一人――。

――パチパチ！

「――っ!？」

演奏終了と同時に控えめに手を打つ音がして、伴奏者――サーニヤの耳朵に優しく触れる。

振り返ると、小脇に何かを抱えた優人が入り口の手前で拍手をしていた。

「素晴らしい演奏だね」

と、優人は賞賛の言葉を贈った。椅子から立ち上がったサーニヤは、上官に軽く会釈する。

褒められたことが嬉しくも照れくさいのか。雪のように白いサーニヤの頬に朱が差している。

「……もしかして、邪魔したかな？」

優人は少々不安そうに訊ねた。自覚しているかは分からないが、妹を含め年下の女と2人きりで話す時の優人は、口調が普段よりも柔らかく穏やかになる。

「いいえ」

サーニヤは頭を振ると、優人に向けていた視線をピアノに戻した。

扶桑海軍兵等の為に、ミーナが細やかなコンサートを催したあの日。司令殿と同じく音楽の道を志していたサーニヤは、このグランドピアノの鍵盤に色白の繊細な指を走らせていた。

フリーガーハマーを担いでネウロイと果敢に戦うサーニヤは、“リーリヤ”——オラーシヤ語で百合の花を意味する言葉——の異名に違わぬ、凛々しさと可憐さを宿している。

一方で、音楽を奏でている時の彼女はどこか神秘的。まるで穢れを知らぬ天使のようだ。

「名残惜しい?」

「……………はい、ちよつとだけ」

鍵盤の1つに右の人差し指を置き、サーニヤは俯き加減で答える。

「基地を出る前に、もう一度サーニヤの演奏を聞けて良かった」

そう言うと、優人は小包をテーブルに置く。代わりに1通の封筒を手に取り、サーニヤに差し出した。

「はい、サーニヤ宛だよ」

「……………手紙……………ですか？」

自分宛だと言われて、受け取った封筒をサーニヤは矯めつ眇めつ眺める。宛名がオラーシャ語で書かれていることから、差出人は母国の誰からしい。

人付き合いが苦手で交友関係の狭い自分に、誰が手紙を送ってきたのだろうか。サーニヤは不思議そうに首を傾げつつ、裏面にある差出人の名前を確認した。

「……………えっ!？」

サーニヤはハッと目を見張った。裏面には書かれていたのは、ウラル山脈越えてシベリア地域へ疎開した彼女の両親の名前だったのだ。

すぐさま封を開き、中身を確認する。水色と便箋淡い桃色の便箋が一枚ずつ入っていた。そして、それぞれに大好きな父と母の名と、愛娘に向けた2人の想いが綴られていた。

「優人さん、これ……………」

「うん、サーニヤの御両親からだよ」

「……………優人さんが、探してくださったんですか？」

と、サーニヤは上目遣いで見つめてくる。エメラルドを連想させる翡翠色の瞳には、微かだが涙が浮かんでいる。もちろん、嬉し涙だ。

「ああ、いや。太平洋方面総司令部の扶桑海軍艦隊に親戚がいて、そいつがね……………」

優人は気恥ずかしいような。はたまた、ばつが悪いような心持ちになり、取り繕うかのように後頭部を搔く。

広大なシベリア地域でサーニヤの両親を見つけたのは、宮藤兄妹のはとこ——扶桑海軍大陸方面艦隊の山川美千流一等兵曹だ。

扶桑方面司令部とウラル方面司令部——2つの方面司令部を隷下に置く人類連合軍太平洋方面総司令部。その担当戦域にて、美千流は独自のコネクションを築いていた。

美千流はこれを、主に欧州で戦うウィッチに関する情報の収集や嗜好品——甘味類、煙草、酒等——や成人向け雑誌等の調達に利用している。

一方的で、情報収集や人探しにも応用が利く。僅かな……本当に僅かな手掛かりで、サーニヤの両親が探し当ててほほどだ。

シベリア地域で特定の夫婦を探し出すなど、砂漠に落ちた1粒の胡麻を見つけるにも等しい難作業のはずだが、美千流はそれをやってのけた。

優人は美千流経由で手紙を送り、サーニヤの御両親に彼女の近状を簡潔に伝えた上で娘に手紙を書いてくれるよう頼んだ。

サーニヤが話していないことを、勝手にベラベラとしゃべるわけにはいかない。詳しいことはサーニヤが自分で伝えたいだろう等と思ひ、仔細は書かなかつた。

「……つて、サーニヤ……どうしたんだ!？」

サーニヤが肩を小刻みに振るわせ、嗚咽を漏らしていた。自分が何か粗相をしてしまったと思ひ、優人は狼狽える。

「ごめんなさい、お父様と……お母様から……手紙が来て。字を見て……2人の字だと分かつたら、嬉しくて……」

慌てた様子の上官に泣く理由を説明しながら、サーニヤは瞳から流れ出る雫を拭う。

優秀なナイトウィッチとはいっても、彼女は14歳のか弱い少女だ。まだまだ親に甘えたい年頃だ。話したいこと、伝えたいことが沢山募っているのだろう。

会うことはまだまだ叶わないかもしれない。しかし、今は疎開時の混乱も多少落ち着き、両親の連絡先も分かった。

軍の厳しい検閲が入るだろうが、文通という方法で両親と連絡を取り、リトビヤク親子は互いの安否と近状を確かめ合うことが出来るようになったのだ。

「ありがとうございます、優人さん」

サーニヤは2枚の便箋を胸元へ寄せ、愛しそうに抱き締める。

幸せそうなナイトウィッチの姿を見て、優人は胸がポカポカと温かくなるのを感じた。ずっと死んだと思っていた父と再会を果たし、芳佳が一郎の胸の中で泣いていた時もこんな気持ちだった。

「オイッ！」

「ん?」

「……………えっ?」

ふと入り口の方から短い怒号が飛んで来る。振り返つてみると、全身から憤怒のオーラを放つエイラが、優人のことを睨みつけていた。

「あ、兄藤イイイイイッ! オマエ! サーニヤを泣かせたナアアアア!」

「え?」

どうやらエイラは涙を流すサーニヤを見て、優人が彼女を泣かせていると思っ
ているらしい。

「よくも! よくも!」

エイラはギリイと歯噛みし、右拳を強く握り締める。ズカズカと足音を立て、優人目掛けて歩いてくる。

「待て! 俺は何もしてないっ!」

顔面蒼白となった優人が、身を守るように両手を前に出した。

「ウルサイツ! ソンナコト信用できるカ!」

「エイラ! ダメ!」

サーニヤが止めようとするも時既に遅し。エイラは硬く握った拳を振り上げていた。

「サーニヤに手を出すナアアアアアッ!!」

高速で繰り出されたスオムスウィッチの剛拳は、鋭い風切り音を立てながら優人の顔面目掛けて接近する。

あまりのスピードに避けることも出来ず、優人はエイラの拳を顔面で受けた。凄まじい衝撃が顔全体に叩きつけられ、視界が大きく回転する。

プロのボクサーにも劣らぬ重たい拳だが、エイラは魔法力を一切使っていないなかった。スオムスウィッチの華奢な身体の何処に、これほどの臂力が秘められているのだろうか。

やがて頬に伝わる冷たい感触から、優人は自分が床に転倒したのだと理解する。暗くなつていく視界の端に、自分を心配そうに見つめながらエイラに手を引かれて行くサーニヤの姿が確認できた。



サーニヤとエイラが立ち去った数十分後のミーティングルーム――

「……………ん……………」

後頭部に柔らかな感触を覚えつつ、優人は重たい目蓋を開いた。

「あれ？俺、何で？いつ!？」

目覚めたばかりの定まらない思考で記憶を辿るが、途端に激痛が顔を走った。身体を起こそうとするも、痛みのみあまり動くのが億劫になる。

「おっ？起きたか？」

ふと聞き慣れた声音が優人の耳朶に触れる。2つの大山がぼやけた視界に映り、さらにその山越しにリベリオンウィッチのサバけた笑顔が見えた。

「……シャーリー？」

「大丈夫か？」

シャーリーは双子山——もとい、自慢の爆乳越しに扶桑海軍大尉の顔を覗き込む。

優人は、そこで漸く自分がソファーに寝転がっていること。ワイシャツ姿のシャーリーに膝枕されていること。自分の眼前に「グラマラス・シャーリー」の乳袋がぶら下がっていることに気が付いた。

「——っ!？」

リベリオン陸軍の制服押し上げるような巨大な乳房が、アツプになって視界の大半を覆い隠す様に、優人は目を見開く。

少しでも頭を上げれば、ぶつかってしまふほどの超至近距離に「グラス・シャーリー」の爆乳があるのだ。

「あ、うん」

「床に倒れてたから、びっくりしたよ」

シャーリーは小さく笑声を立てる。オレンジが掛かったブラウンの髪が艶っぽく濡れている。風呂上がりがらしい。

いつもより色っぽいリベリオンウィッチの様相に、優人はつい見とれた。

「ん？どうしたんだ？」

「あ、いや……」

シャーリーに問われ、優人はハツとなる。顔全体が熱を帯びるのを感じ、咄嗟に身体の向きを変える。すると、テーブルに置いた小包を掲げ、可愛らしく小首を傾げるルツキーニの姿が見えた。

「優人、これってナニ？」

と、訊ねるルツキーニは髪を結んでおらず、長い黒髪を下ろしている。シャーリーと風呂に入っていたのだろう。濡れ髪には光沢感があり、頬はピンク色に上気していた。

「ここから、優人の物だぞ？勝手に触っちゃ——」

「ああ、いいんだよ」

ルツキーニを窺めるシャーリーの言葉を遮り、優人は続ける。

「それはルツキーニへのプレゼントだよ」

「ホントッ!？」

目の前の包みが自分宛のプレゼントと聞き、ロマーニヤウイツチはサーニヤとよく似た翡翠の瞳を爛々と輝かせる。

「うん、本当だよ」

優人はニツコリと微笑み返す。もちろん、シャーリーに膝枕されたまま……。

「ナニナニツ!!?扶桑の美味しいお菓子!?!」

小包をギュツと抱き締め、ルツキーニは興奮気味に訊ねる。もし魔法力を発動していたら、使い魔の黒豹の尻尾をパタパタと振ることだろう。

「開けてみて」

優人がそう言うなり、ルツキーニはすかさず小包みを開き始める。

逸る気持ちを抑えられないのか。包み紙をビリビリと乱雑に破り、室内に紙片を撒き散らしていた。

シャーリーが苦笑混じりにやんわりと注意するも、プレゼントの正体を早く確かめた
ルツキーニの耳には届かない。

「うにゃ!?!」

包みの中身が姿を現し、ルツキーニは驚愕の声を上げる。

プレゼントは彼女が期待していた扶桑のお菓子ではなかったが、それでもルツキーニ
にとっては最高の贈り物だった。

「これ！優人や少佐が、いつも着てる服だよね！」

扶桑海軍大尉より贈られたのは、彼と坂本が普段から着用している扶桑皇国海軍第二種軍装。ルツキーニが「カッチョイイ」と言つて羨ましがり、欲しがつていた純白の海軍服だ。

「そうだよ」

「貰つていいの!？」

「もちろん！俺の御下がりで申し訳ないんけど……」

ルツキーニの為に用意した第二種軍装は、海軍士官になつてから、一番最初に支給されたもの——ストライカーユニット共同研究所滞在時で着ていたもの——で、当たり前だが今優人が着ている制服よりも明らかにサイズが小さい。

少尉に任官したあたりからリバウを離れるまでの間、小柄だった優人の身長は急激に伸び始めた。支給された制服もすぐにサイズが合わなくなつてしまい、また戦闘が原因で傷んだりすることもあつたため、度々新調が必要になつた。

上述にある最初の第二種軍装は記念品として残しておいたが、リバウ基地からブリタニアの501基地へ異動する際に持ち出すのをうっかり忘れてしまった。

遣欧艦隊のリバウ撤退時に置き去りにされたとばかり思つていたが、竹井が持つ出し預かつてくれたのだ。

「喜んでくれる?」

「うん! 優人、ありがとう」

自分の御下がりを押し付けるようでも申し訳なきようにする優人だが、ルツキーニは気にすることなく、満面の笑みを浮かべて礼を述べる。

「良かったな、ルツキーニ」

シャーリーが笑い掛けると、ルツキーニは「うん!」と頷き、さつそく贈られた第二種軍装の袖に腕を通した。

優人が13歳の時に着ていた制服なのでサイズは小さめだ。しかし、彼が小柄だったこともあって、12歳の女の子であるルツキーニにはぴったりのサイズだ。

「うわあ〜♪カッチョイイト♪」

いつもの服装の上に第二種軍装を着込んだルツキーニは、クルンと一回転して見せる。制服の裾が、白いドレスのように翻る。

「ねえねえ! アタシ、扶桑のウィッチみたい?」

「ああ」

「もちろんだよ」

なんとも幸せなような表情な問い掛けるルツキーニに対し、優人とシャーリーは順に首肯する。

はしやぐルツキーニを温かい目で見守る二人は、妹を可愛がる兄と姉の顔になつて
いる。

「やつたああああ！皆に自慢してくる〜！」

そう告げて、ルツキーニはミーティングルームから走り去つて行つた。

遠ざかる妹分の背中を見送りながら、シャーリーは豪快に笑う。

「あつはははは！ルツキーニのやつ、優人からのプレゼントがよつぽど嬉しかったんだ
なあ」

「喜んでもらえたようでも何よりだよ。よつと……」

優人は満足げに眩き、身体を起ここそうとする。が、何故かシャーリーに押さえつけら
れ、再び頭を膝へ戻された。

「わっ?!シャーリー?」

「まあまあ、そう慌てない」

と、シャーリーは悪戯つぽく笑う。無論、横を向いている優人に彼女の表情は窺いし
れない。

「せつかくウィッチに膝枕してもらつてるんだからさ。どうせなら、もつとのんびりし
ていきなよっ!」

「いや、もう十分なんだけど……」

「遠慮すんなって。せつかく2人きりなんだし……」

「えっ?」

途中から小声で呟かれたため聞き取れず、優人は反射的に訊き返した。

「いやいや!こつちの話だから!」

そう言つて誤魔化すシャーリーだが、その声は何処か上擦つている。優人があまりに耳にしたことのない声音だ。

「そんなことより!優人はこれからどうするんだ?」

「これからつて?」

「ほら!501が解散した後だよ!」

「あ、ああ……そのことか」

話題を強引に変えられたことを訝しがりながらも、優人はシャーリーの問いに少し考へてから応えた。

「取り敢えずは扶桑に帰国して。しばらくは休みが貰えるらしいから、次の命令を待ちながら実家でのんびり過ごすよ」

扶桑海軍で初陣を飾つてからというもの。休暇はあつたが、実家の診療所に帰つたことは殆んどなかった。宮藤の家より海軍での生活の方がよっぽど長い。

当分は航空歩兵を引退する気はないが、しばらくは実家で母や祖母の手伝いをしながら

ら過ごしたい。

診療所の仕事はもちろん、学業が不得手な芳佳の勉強を見てやらなくてはならないし、頭のイカれた父親が悪さをしないように見張りもしなければならぬ。

「そう言うシャーリーはどうするんだ？」

「あたし？」

「やっぱり、リベリオンに帰国するのか？」

前ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官——トレヴァー・マロニー元大将の策略によって、501は一度解散に追い込まれている。

その際、シャーリーは連絡機という名目で入手・私物化している三座複葉雷撃機——シルフィー・ソードフィッシュでルツキーニをロマーニヤまで送り、その後大西洋を横断して帰国するつもりでいた。

「そうだなあ。取り敢えずは、ルツキーニとロマーニヤまで行つて……それからどうしようかなあ？」

「どうしよう、つて……リベリオンから帰還命令が来ているんじゃないのか？」

と、優人は重ねて訊ねる。マロニーの独断による突然の解散だった前回とは異なり、今回は総司令部経由で各自に原隊からの指示が伝達されている。

優人ならば扶桑海軍遣欧艦隊から。シャーリーならばリベリオン陸軍第8航空軍か

ら。それぞれ命令が来ているはずだ。

「ん〜……あたしのところはまだ何も来てなかったような。どうだったっけ？」

シャーリーの回答に優人は思わず絶句した。こんないい加減な命令伝達を行う軍隊が、この世に存在するとは……。

規律にうるさい人間が多いカールスラント軍……特にバルクホルンあたりが聞いたら卒倒するかもしれない。

「そんなことでリベリオンは大丈夫なのか？」

と、優人。驚愕のあまりストレート過ぎる訊き方をしてしまったが、シャーリーは「あはは」と気まずそうに笑い声を返した。

「まあ、なるようになるさ。それまでは、ロマーニヤでゆっくりしてるよ」

そこで言葉を結び、シャーリーは背凭れに寄り掛かった。ギイツとソファーが鈍く小さな音を立てる。

優人は側臥位の姿勢から身体を起こし、シャーリーの隣に座った。

チラツと壁に掛かった時計に視線を走らせる。時刻はエイラに殴られてから2時間ほど過ぎていた。

「そう言えば、優人もロマーニヤに行くんだろ？天城に乗ってさ」

シャーリーが思い出したように訊ねる。天城はロマーニヤへの移送任務を終えた後、

アフリカの喜望峰を経由する航路を通り、扶桑本国への帰還することになっている。優人達宮藤兄妹は天城に乗艦し、その足で扶桑へ戻る予定だ。

「ああ、そうだけど」

「あたしも一緒に行つていいか？」

「……はっ？」

リベリオンウィッチの口から出た予想外の言葉に、優人は目を点にする。

「実は前から扶桑に興味があつてさあ♪一度旅行してみたかつたんだよね♪優人のツテで、天城に乗せてくれない？」

「いやいや、旅行つて！いくらなんでも欧州を離れるのは！脱走扱いになるんじゃない！」

既に扶桑行く気満々なシャーリーの発言に、優人は慌てふためく。

ロマーニヤならいざ知らず、最前線から遠く離れた東アジアの扶桑へまで行くのはさすがにまずい。

「ガリア解放の英雄」と呼ばれるようになったばかりのシャーリーが、脱走兵の不名誉を背負うことになってしまう。

「ダメかな？…………」

突然、真剣な表情へと変わったシャーリーが優人に寄り掛かってきた。

リベリオンウィッチから漂う甘い香りが優人の鼻腔を攪り、女体の柔らかな感触が制

服越し伝わる。

「っ?! シャーリー?」

「……やっぱ迷惑か?」

シャーリーが切なげに囁く。声と共に熱い吐息が耳朵に掛かり、優人の身体をゾクリと震わせる。

「あたしを、扶桑に連れて行ってよ……」

そう言つて、シャーリーは優人の首に両腕を回し、グイツと引き寄せて互いの身体を密着させた。

眼前に迫る「グラマラス・シャーリー」の美貌。お互いの鼻先が触れ合い、吐息が掛かるほどの超至近距離に……。

もちろん、扶桑の西瓜の如く巨大で、それでいてマシユマロのように柔らかい爆乳もこれでもかと言うくらい押し当てられている。

「——っ?!」

シャーリーの大胆な且つ刺激的なスキンシップ攻撃には、然しものベテランウイザーでも形無しだ。

サファイアのように蒼く澄んだ2つの瞳が、ジツと優人を見据える。甘く香しい美少女のアロマが彼の心を惑わし、思考を痺れさせる。

ドギマギしながらも、懸命に理性を保とうとするが徒勞に終わる。優人は目を見開いた状態で身体を硬直させ、しばらくの間は口だけが金魚のようにパクパクと動いていた。

「お願いだから……」

使い物にならなくなっている扶桑海軍大尉を尻目に、シャーリーは形の良い唇を動かした。

「あたしは、もつと優人と一緒にいたいんだ。離れたくないんだよ」

「そんなこと言われたって……」

思考は僅かに回復していたが、哀しみを湛えたシャーリーの真摯な瞳に見つめられると、口下手になってしまつて言葉が紡げない。

「ぷっ！……あつはははは！」

優人が煮え切らない自分を情けなく思っていると、不意に豪快な笑い声が彼の耳朶を打った。声の主はもちろん、シャーリーだ。

「冗談だよ！ 冗談！ 取り乱しちゃつて、カッコ悪いなあ！」

どうやら、すべて芝居だったらしい。扶桑海軍大尉の狼狽える様が相当面白かったのか。優人から離れると、シャーリーは腹を抱えてさらに笑い続ける。

「お前なあ、悪戯にもほどがあるぞ！」

散々遊ばれた優人は怒り心頭……というほどでもないが、不愉快さから表情を険しくする。

「怒るなよ♪何?もしかし、『連れて行って』とか『一緒にいたい』とか『離れたくない』とか言われて期待しちゃった?」

「そ、そんなわけ……」

口角を吊り上げてニヤリと笑うシャーリー。彼女の指摘をハッキリ否定することが出来ず、優人は口を噤んだ。

「まあ扶桑に興味があつたり、行つてみたいのは本当だけどね♪……優人と一緒にいたいのも」

「えっ?」

「いやいや!何でもないよ!」

と、シャーリーは両手を顔の前で振る。優人は気付かなかつたが、彼女の頬に微かな紅が灯っていた。

「あつ、そうだ!これ、記念に貰つてもいいか?」

自分が着ている白いワイシャツを指差し、シャーリーは訊ねる。よく見ると、サイズが合っていないのかシャツは少しだけブカブカだった。

それもそのはず。彼女が着ているのは、優人が以前貸し与えた扶桑海軍支給のワイ

シャツなのだから。シャーリーに言われて、優人はそのことを漸く理解した。

「別にいいけど。そんなブカブカなシャツ、どうするんだ？」

「記念だよ！記念！思い出の品ってことでさよ。」

「思い出の品ねえ……まあ、いいよ」

イマイチ納得がいかない優人だったが、ルツキーニに制服をプレゼントしておきながらシャーリーの頼みを断るわけにもいかず、了承することにした。

「おおっ！ありがとな、大切にするよ」

嬉しそうに声を弾ませると、シャーリーはソファから立ち上がった。

「それじゃよ」

「ああ」

軽く手を挙げて挨拶すると、シャーリーは軽快な足取りでミーティングルームを去っていった。鼻唄まで歌って、リベリオンウィッチはかなり上機嫌だ。

「〜♪」

「そんなに男物のシャツが嬉しいのかな？」

スキップを踏み出したシャーリーの後ろ姿を見送りつつ、優人は小首を傾げる。この扶桑海軍大尉、凄まじく鈍感である。



シャーリーが機嫌良くする一方で、心穏やかでない者も存在した。501Wエースの片割れにして、カールスラント空軍所属の航空ウィッチ——ゲルトルート・バルクホルン大尉、その人だ。

「……………」

室内が吹き抜けとなつているミーティングルームは、2階のテラスから1階を見下ろすことが出来る。優人とシャーリーのやり取りを、バルクホルンはテラスから見ていた。

(一体、この気持ちは何なんだ……?)

未だ嘗て抱いたことのない黒い感情が、バルクホルンの胸中で渦巻いていた。

この感情が具体的にどういふものなのか。彼女には知らないし、検討も付かなかった。しかし、この感情が自分を苦しめているのだということは理解していた。

バルクホルンは胸元に右手を添え、制服はギュウツと握り締める。まるで、酸素濃度の低い空間に放り出されたかのような息苦しき。身体の何処にも異常はないはずなのに、何故こんなにも苦しいのか。胸に居座る未知の感情が起因しているのはまず間違いない。しかし、その正体がさっぱり分からず、ただただ煩悶とじていた。

(…………どうしたというんだ?)

絶えられなくなったバルクホルンは、床にへたり込んだ。ざわつく心をどうにか落ち着かせようと、目蓋を閉じてゆっくり深呼吸する。

すると、目蓋の裏に2つの人影が浮かび上がった。それは優人とシャーリーだった。2人は、なにやら楽しげに会話をしている。

「くっ!」

突然胸を蝕む苦痛が増大し、バルクホルンはハッと目を開ける。

「……………なん、で……………何でなんだ?」

苦しみながらも、バルクホルンは黒い感情の正体を見極めようと必死に思考を働かせる。

それが所謂「嫉妬」という感情であることを、バルクホルンは最後まで気付けなかった。

第4話「解散前に……」

1944年9月、グレートブリテン島南東部・第501統合戦闘航空団基地——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の航空ウィッチ——竹井醇子大尉は、宛がわれた客室を目指して基地宿舎内の廊下をゆったりとした所作で歩いていった。

基地に到着した竹井は、すぐに501部隊司令のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐の執務室に赴き、到着の挨拶を済ませていた。

本大戦初期。竹井は補給のため立ち寄ったカールスラント軍基地にてミーナと知り合っている。だが、竹井は坂本とは違って、それほどミーナと深い付き合いがあるわけではない。会話をしたのも数えるほど。

それでも竹井は、物腰優雅で柔和な雰囲気のミーナに好感を抱いていた。航空歩兵としてはもちろん、指揮官としても優秀で、何より仲間想いな彼女のことを同じウィッチとして、そしてひとりの女性として尊敬している。

ミーナもまた、“リバウ三羽鳥”の一角を担い、坂本と肩を並べて活躍した“リバウの貴婦人”に対し、尊敬の念を抱いている。

第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』にウィッチ部隊戦闘隊長として招

聘された彼女は、空母“天城”に乗艦して数年ぶりに欧州を訪れることとなった。

当初は真つ直ぐロマーニヤへ向かう予定だったが、その途上で第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』解散の報を受け、急遽予定を変更。一旦ブリタニアの501基地に立ち寄り、機材と人員を引き継いだ後にガリア経由でロマーニヤの504基地まで移送することとなった。

出港は明後日。遣欧艦隊司令部の命により、“天城”には宮藤兄妹も乗艦することになつている。艦がロマーニヤへの移送任務を終えた後、優人と芳佳はその足で扶桑へ帰る予定だ。

宮藤兄妹は、今や仲間達と共にガリア解放の英雄と称されている。世間はブリタニアの戦いで一躍時の人となった優人と芳佳をほつといてはくれまい。2人の本国帰還とは、否応なしに凱旋帰国となるだろう。

ミーナ曰く、501ウィッチの中には帰国や異動等の都合でガリア、ロマーニヤまでの乗艦を希望する者もいるそうだが、結局は全員が乗艦することになりそうだ。それは竹井も、艦長をはじめとする“天城”の乗員達も吝かではない。

「……………」
ふと何者かの視線を感じ、竹井は背後を振り返る。が、誰もいない。

(……………やっぱり、誰かに見られてる?)

竹井は怪訝そうに片眉を上げる。部隊長執務室を辞去した時から……いや、基地に着いた頃から何者かの視線を感じていた。ここ501基地に入り込んだ自分という存在を、吟味するかのような視線を……。

初めは気のせいだと思った。長い船旅の疲れか、もしくは統合戦闘航空団の戦闘隊長拜命や、数年ぶりに最前線へ赴く緊張感から神経過敏になっているのだと考えていたが、どうやら違つたらしい。

リバウの戦いで名を上げて以降、自分を慕う後輩ウィッチや扶桑海軍の男性兵士等から付け回されるようになった。

だが、世界的エースウィッチである前に、竹井は年相応のか弱い少女でもある。人から好かれるのは嬉しい限りだが、正体不明の相手に付き纏われる気味の悪さは、何度経験しても慣れない。

（困つたわねえ……）

内心で呟きながら、深く溜め息を零す。当然、それくらいでストーカー被害の憂いが晴れることはない。

視線の主が何者で、何が目的かは分からない。もうしばらく様子を見るしかなさそう
だ。

（あの人って……？）

正面に視線を戻した竹井は、廊下の奥より歩いてくるひとりのウィッチに気が付いた。リベリオン陸軍第8航空軍から派遣されている「シャーリー」こと、シャーロット・エルウィン・イエーガー大尉だ。

「〜♪」

鼻唄を口ずさみ、スキップ踏んで廊下を闊歩する「グラマラス・シャーリー」。彼女が床を蹴る度に、たわわな果実がブルンと揺れる。

彼女は優人から譲られた扶桑海軍支給のシャツを着ているのだが、サイズが少しだけ大きい。

(シャツ、貰えちゃったなあ♪)

シャツの袖口で僅かに隠れてしまっている両手を頬に当て、シャーリーは満足げな笑みを浮かべる。

頬を仄かなピンク色に染めた初々しい表情は、とても可愛いらしい。普段見せているサバサバとした笑顔とは、また違った魅力がある。

ほんの数分前、シャーリーはミーティングルームにて異性と——仲の良い男友達である優人と2人きりで過ごしていた。

その気さくで大らかな性格故、ウィッチになる以前からボーイフレンドの多かったシャーリーだが、優人は他の友人達とは何処か異なっていた。

東洋系だとか、扶桑人だとか。そんなことではない。彼と一緒にいると気が楽になるというか、なんとも言えぬ安心感を覚える。

その反面、優人が他の女性と楽しげに話していると何故か落ち着かない。それは焦燥感に似ていて、時に独占欲のような感情にも変化することもあった。

それが一体何なのか。シャーリーが本格的に理解したのは、優人にシャツを貸し出されたあの時からだった。

501の解散が正式に通達され、優人と離れなくてはならなくなった現状において、それらの感情は一段と強くなっていた。

だからだろうか。ミーティングルームで優人と2人だけになったシャーリーは、心の奥底にあつた想いを漫然と口に出していた。「離れたくない」「一緒にいたい」と……。

冗談だと言つて誤魔化したものの、うっかり漏らしてしまった心の本音を聞かれてしまった。この気恥ずかしさは当分忘れられそうもない。

(さつきは、顔を近付け過ぎたかな?)

ここ501にて優人と知り合つてからというもの。シャーリーは毎日のようにスキップを仕掛けては、彼をからかっていた。

腕に抱き着いて、胸をギュツと押し付けたり。顔を耳元に寄せて、思わせぶりの言葉を囁いたり。水着姿や下着姿で優人の前に現れたり等して、彼のウブな反応を楽しんで

いたのだ。

それで優人が狼狽えることは今まで何度もあつたが、からかう側のシャーリーが動揺や羞恥心を覚えたりなどしなかつた。

例え、抱き着くように全身を密着させ、互いの鼻先が触れ合うほどの至近距離まで顔を近付けたとしても……。

(優人つて、やっぱイイ男だよな)

シャーリーの脳裏には、間近で見た優人の端正な顔立ちが浮かんでいた。すると、頬がさらに濃く染まり、爆乳の奥にある心臓が早鐘を打ち始める。

(ああもうっ！沈まれ！沈まってくれよ！)

両手を胸元に添えるように重ね、なんとか鼓動を抑えようとする。だが、心臓は彼女の意思に反して暴れ続け、静まることはなかつた。騒々しい心臓は、今にも胸を突き破つて飛び出してしまいそうだ。

胸中の爆音に耐えながら、シャーリーは俯き加減の姿勢で廊下を足早に進む。今はとにかく、一刻も早く自室に戻りたかつた。プライベートルーム空間である自分の部屋に戻れば、多少は落ち着くだろう。

「あら、ほんにちは」

挨拶をしようと思つた竹井は、軽く右手を上げながら声を掛ける。

しかし、いつになく余裕の無いシャーリーは、竹井の存在に気付くことすら出来ない。彼女の脇を猛スピードで通り過ぎていった。

「……どうしたのかしら？」

なにやら様子がおかしいリベリオンウィッチの後ろ姿を見据え、竹井は小首を傾げる。



数時間後、基地宿舎ミーティングルーム――

再びミーティングルームに戻ってきた扶桑皇国海軍大尉――宮藤優人は、げんなりとした様子でソファアに凭れかかっていた。

彼はいつもの如く部隊長執務室にて、上官であり戦友でもあるカールスラント空軍中佐――ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐とデスクワークに務めていた。夕食後からずっと、ろくに休憩もしないで……。

時期に501は解散するというのに、総司令部からの書類は過去最大の枚数だった。残務整理にはあまりに多すぎる。

しかも優人に割り当てられた書類の数は、ミーナのそれより明らかに多い。初めのう

ちは上官と半々であったデスクワークにおける負担。しかし、いつしかミーナと優人の労働量はいつのか3:7となり、最近では1:9と変化していった。

優人は何度かそのことを指摘したが、当のミーナは形の良い艶やかな唇で曲線を描いて、「ウフフ♪」と愛想笑いで誤魔化すだけだった。柔和さの中に凜とした威厳を湛えているミーナの笑顔に、優人は女性特有の腹黒さを見た気がした。だが、そういつた一面も持ち合わせていなければ、連合軍上層部の政治的判断に振り回されがちな統合戦闘航空団の司令は務まらないのだろう。

実際、自分達は彼女の政治力によって何度も助けられた。故に、優人はブラック上司の理不尽な振る舞いに目を瞑ることにしていた。

「風呂でも入るかな……」

独り言ちると、優人はソファから立ち上がる。宿舎内に設けられた風呂場へと歩を進めた。501基地の風呂は、扶桑皇国海軍設営隊によって建造された当基地自慢の大浴場だ。

風呂の時間には早すぎるが、書類仕事に忙殺された身体を癒すには風呂に限る。扶桑皇国出身の航空ウィザードは熱い湯に肩まで浸かってリラククスして、空いた時間を訓練上がりの妹と過ごそうかと思っていた。

ところが、大浴場付近の廊下を進んでいると、何者かが緊張を孕んだ声音で優人を呼

び止め、彼の腕を掴んだ。

「お、おいっ—」

「ん？」

優人が振り返ると、ウィッチーズの中でも特に親しい友人のひとりであるカールスラント空軍ウィッチ——ゲルトルート・バルクホルン大尉が物影に身を隠すように立っていた。

「バルクホルン？ どうしたんだ？ そんなところに隠れ——」

「しっ！ 声が大きいっ—」

と、バルクホルンは唇の前に人差し指を立てる。明らかに彼女の声の方が大きかったが、優人は敢えて指摘しなかった。

「い、今……大丈夫か？」

「えっ？」

「だから、その……暇か？」

バルクホルンは頬を軽く染め、モジモジしながら躊躇いがちに訊いてくる。同時に腕を掴む手にギュッと力が込め、優人は若干の痛みを覚えた。

「今日の分の書類は片付けたし。まあ、暇だな」

「な、なら……えっと、私の部屋に……き、来てもらいたいんだが？」

いつもハッキリと物を言うバルクホルンが、今はなんだか歯切れが悪い。怪訝に思いつつも、優人は質問の内容を確認するように聞き返した。

「お前の部屋に？何でまた？」

「そ、それはだな！何と言うか……ベッドが、そう！ベッドだ！ベッドがおかしいんだ！」

「ベッド？」

優人が繰り返すと、バルクホルンはコクコクと何度も頷き、視線を泳がせながら言葉を続ける。

「やたらと軋んで、寝返りを打つと音が気になってな。ちよつと、お前に見てもらいたいんだ」

「ああ、そういうことか……わかったよ」

そう応じて、優人はバルクホルンと共に彼女の部屋へと向かった。

ベッドの軋みならば、油をさすかネジを絞め直すかで解決できるだろう。バルクホルンの彼女らしくない挙動に首を傾げながらも、優人はベッドの状態を確認するためバルクホルンの自室に入った。

カールスラントの堅物大尉の私室は壁紙が無く、壁もレンガも剥き出しのままとなっていた。家具も最小限のものしか置かれておらず、カーテンは2つある窓のうち片方の

みに設置されている。

優人は以前、ミーナの部屋にも入ったことがある。彼女の部屋も派手ではなかったが、様々な調度品で彩られていた女性らしいものだった。

それに比べてバルクホルンの部屋は、18歳の乙女の私室にしてはあまりに殺風景である。持ち主の個性——バルクホルンの真面目な人柄が出ている彼女らしい室内風景だとは思うが、味も素っ気もない。出身と年齢が共通している2人で、ここまで差異が出るとは……。

それでも、仄かに薫る女性特有の甘い香りが優人の鼻腔を攪り、異性の部屋に入ったことを強く意識させる。乙女のプライベート空間に足を踏み入れたのだとハッキリ理解し、扶桑海軍大尉の心臓は自然と高鳴った。

(あんまり、ジロジロ見るもんじゃないな……)

“親しき仲にも礼儀あり”。優人とバルクホルンは、戦友兼親友と形容しても差し支えない関係にある。とはいえ、女性の部屋をやたら観察するのは、やはり失礼というものだろう。

「じゃ、じゃあ……確認してみるよ……」

視線を送りながら優人が言うのと、伏し目がちなバルクホルンが小さく頷いた。彼女も照れ臭いようだ。

下心を抑えるよう努めつつ、優人はベッドに歩み寄った。しかし、このベッドでバルクホルンが寝ていたかと思うと、それだけで心臓がドキドキと早鐘を打った。

上官兼戦友の坂本美緒をはじめ、優人は思春期の頃より大勢のウィッチと寝食を共にしてきた。彼女らを異性として過剰に意識したり、スケベな思考が働いてしまうのは男の性というもの。優人にとっては昔からの癖のようなものでもある。おいそれと治るものではない。

(友人の頼みでベッドを直しに来たんだぞ！変な風に考えるな！煩惱を捨てろ！)

優人は頭を軽く振って邪な考えを追い出すと、ベッドのマットをシーツ越しに押してみた。だが、特に軋む音はしない。

「別に、異常はなさそうだけど？他の場所が悪いのか？それとも、もつと体重を掛けないとダメか？」

それはバルクホルンに訊ねたというよりは独り言のようなもので、彼女から返事はなかった。

「ん？」

優人が体重を掛けようとしてベッドに乗ると、背後からバルクホルンが近付いてきた。気配に気付いた扶桑海軍大尉が振り返ると、カールスラント空軍大尉が彼の肩を掴んだのはほぼ同時であった。

さらに、バルクホルンがすかさず体重を掛けてきたため、虚を衝かれた優人はあつきりと仰向けの状態でベッドに押し倒されてしまう。

「うわっ！バ、バルクホルン!？」

戦友の予想外の行動に優人は当惑する。目の前の堅物大尉は、10代の少女らしく華奢な体格をしているが、普段から鍛えているだけあつてやたらと力が強く、男の優人であつても彼女の拘束を解くことは容易ではない。

優人の上に乗ったバルクホルンは、彼の顔をジッと見据えながら興奮気味に話を切り出した。

「ゆ、優人っ！お、お前を男と見込んで頼みがある！」

そう言つて、バルクホルンは優人の胸ぐらをグツと掴んだ。フーフーと息を荒し、鬼の形相を向けてくる。馬乗りの体勢といい、どう見ても人にものを頼む人間の態度ではないが、バルクホルンの表情は真剣そのものだった。

「た、頼み？」

「1日。いや、半日で構わない！」

バルクホルンはそこで一旦言葉を切り、スウゝツと深呼吸してから続けた。

「私の恋人のフリをしてくれっ！」



30分後——

「落ち着いた？」

ベッドの端に尻を置いた優人は、隣に座っている部屋の主に穏やかな口調で訊ねた。

「ああ、すまない。見苦しいところを……」

バルクホルンは俯き加減に伏せた顔を両手で覆っている。

隠れた表情を窺い知ることが出来ないが、耳が仄かに紅潮しているのが分かる。醜態を晒してしまったことへの羞恥心から真っ赤になっているのだろう。

「えっと、つまり……」

暫しの沈黙を挟んだ後。優人は気まずそうに頬を掻きながら話を戻した。

「お前の妹さんの前で恋人の演技をすればいいわけだな？」

「あ、ああ……」

漸く顔から熱が引いたのか。バルクホルンは顔から両手を離し、小さく頷いた。

今日の午前中。バルクホルンはハルトマンと共に軍用車でロンドンへと出掛けていた。遠出の理由は、最愛の妹——クリステイアーネ・バルクホルンの見舞いである。

クリスが意識を取り戻してから2回目の見舞い。バルクホルンは妹との談話を時間

が許す限り楽しんでいた。彼女にとって至福な一時だったが、残念ながらそれだけで終わらなかった。

終盤、姉妹同士の会話は恋話に変わり、クリスから交際経験の有無を訊かれ、バルクホルンはつい見栄を張ってつい「ある！」と答えてしまったのだ。

そればかりか、「こう見えて私はモテるんだ！」「周りには秘密にして大勢の男と付き合っていた！」「今でも、一声かければすぐにデートに行けるほどの人数をキープしている！」等々。調子に乗り、誇張しまくった結果、クリスが姉の交際相手に会ってみたいと言いつ出し、バルクホルンは勢いでそれを快諾してしまった……とのこと。

そこで優人に恋人役を頼もうと、こっそり自室に招き入れた。ベッドの軋みを直して欲しいというのは、優人を部屋へと誘うための方便だった。

物影に隠れて優人を待ち伏せしたり、こそこそ部屋に連れ込んだのは、他のウィッチー——特にハルトマンやシャーリー、ルツキーニ——に見つかりたくなかったかららしい。「何で、そんなこと言ったんだよ」

優人は半分呆れたような声音で言う。バルクホルンは視線を床に落としたまま、小さな声で「すまない」と返す。

「妹は……クリスは、私を完璧な姉だと思っていてな。私は、私はあいつの夢を壊したくないんだ……」

結局のところ。妹の前で良い格好したいだけなのだが、優人はバルクホルンの考えを否定しきれなかった。彼にも妹がいる。目に入れても痛くないほど可愛い妹が……。

自分を慕ってくれる妹を失望させたくない、というバルクホルンの心境に、優人は強い共感を覚えていた。心ならずも戦友の頼みを聞くことにする。

「わかった、やるよ。演技力は保証できないけどな」

明後日には「天城」に乗艦し、基地を発つことになっている。ペリーヌはもちろん、バルクホルン達カールスラント組もガリアで艦を降りる予定だ。そして、優人と芳佳は欧州から遠く離れた扶桑へと帰還する。

次に欧州へ派遣される時期も、今後の戦況もどうなるかわからない。或いは、派遣されないまま現役を退くこととるか可能性もない。優人はもう19歳だ。

クリスの前で恋人芝居をするなら、もうチャンスは明日しかないだろう。

「ホントかつ!？」

バルクホルンは伏せていた顔を勢い良く上げ、弾むような声で訊ねる。

「ただし、やるなら一度だけだぞ。あとは別れたことにでもしてくれよ?」

「も、もちろんだ!」

破顔したバルクホルンは、自らの両手で優人の両手を握り、ズイツと彼の眼前まで詰め寄った。シャンプーとブレンドされた甘い香りが髪から薫り、優人の鼻腔を擽る。

「ありがとう！ありがとう！本当にありがとう！」

「う、うん」

感極まっているのだろうか。謝意を述べるバルクホルンの所作が少々オーバーリアクションに優人はたじろいだ。

「お二人さん♪なぐにやっつてんのお？」

不意にドアの方からケラケラと明るく笑う声がある。ハツとなった優人とバルクホルンは、反射的に声のした方へと視線を走らせる。

半開きとなったドアと壁の隙間から、悪意のある笑みを浮かべたハルトマンが顔を覗かせていた。

「は、ハルトマンっ！」

よりによって、一番見られたくない人間に見られてしまった。バルクホルンの表情が一瞬で凍りつく。

「夜遅くにベッド上で仲良く絡んだりして。あつついねえ♪」

「ち、違う！断じて違うぞ！」

勢い良く床を蹴って立ち上がったバルクホルンは、ムキになって否定する。

「私は、ただ優人に頼み事をだな！」

「頼み事お？ベッドに押し倒して？」

「そ、それは……優人が逃げないようにと……」

「何で優人が逃げるの？」

「いや、だから……」

なんとか誤魔化そうとするも、バルクホルンは動揺のあまり上手く言葉が紡げない。それでなくたって、彼女に口達者なハルトマンの追及を躲せるはずもなかった。

「トウルーデ、隠さなくてもいいじゃん♪いろいろと溜まって、優人で発散したかったんでしょ？」

「なっ!？」

ハルトマンの口から飛び出した戦友の下品な物言いに、生真面目且つウブな性格のカールスラント空軍大尉は絶句する。その表情はネウロイのビームもかくやというほどに赤面していた。

「もおく♪それなら相談してくれば良かったのにく♪」

バルクホルンの反応が面白かったのか。悪戯好きなカールスラントのウルトラエース——黒い悪魔は、さらに畳み掛けてきた。

「私の方からミーナに話を通して、〃それ用〃の資料を用意し——」

「ちつがああああああああああああああう!!」

ハルトマンの指摘を必死に否定するバルクホルンの声は遠吠えにも似た叫びとなり、

部屋のみならず宿舎全体——或いは基地全体——に響き渡った。

隣に座っている優人は、鼓膜を突き破らんばかりの怒鳴り声に堪らず両耳を塞いだ。

「にやはは♪欲求不満のトウルーデ♪男に夜這いをかけるう〜♪」

「ハルトマン、貴様あ〜！その口を塞いでくれる！」

「やだよ〜♪にやはははは♪」

戦友をおちよくりつつ、ハルトマンは軽やかな足取りで逃走を開始した。怒り狂ったバルクホルンは一目散に部屋を飛び出し、全力疾走でハルトマンを追い掛けていった。

「……………今日も元気だな」

やがて2人の足音が聞こえなくなり、優人は開きっぱなしのドアに目を据えて独り言ちる。その口調は何処か他人事だった。

「ん？」

部屋を出ようと腰を持ち上げた優人は、ふと視界の端に何かを捉える。それはベッド脇にあるチェストの上に置かれた写真立てだった。

穏やかな笑みを浮かべるバルクホルンと、無邪気な表情で微笑む彼女の妹——「クリス」ことクリステイアーネ・バルクホルンのツーショット写真が収まっている。仲睦まじい姉妹を映した思い出の一枚と言ったところだろう。

「バルクホルンの妹……………クリスさんか……………」

優人は写真立てに顔を寄せ、カールスラントの仲良し姉妹のツーショット写真をしげしげと観察する。

バルクホルンの妹——クリスは、姉とよく似ている。姉妹なのだから当然と言えば当然なのだが、生真面目で堅苦しい人柄のゲルトルートに対し、クリスは明るく柔和で親しみ易い印象を受ける。

以前バルクホルンから聞かされた通り、雰囲気は何処となく優人の妹——扶桑皇国海軍軍曹の宮藤芳佳と似ていた。

「まっ、芳佳の方がずっと美人だけどな……」

シスコン満載の独り言を呟くと、当初の目的地である大浴場へ向かった。



1時間後、ミーナの部屋——

「あら、優人と出掛けるの?」

ハルトマンとの基地全域を舞台とした鬼ごっこを繰り広げたバルクホルンは、ミーナの部屋を訪れていた。

部屋の主である彼女は薄ピンク色のキャミソールにカーデイガンを羽織った寝間着

姿。ゆったりとしながらも、女性の色香を感じさせた。

対して、バルクホルンは襟元をリボンでキツく結んだ制服姿。普段通りの見慣れた出で立ちは味も素っ気もなく、バルクホルンという素材の良さをあまり活かせていない。

「あ、ああ……」

確かめるように訊くミーナに、バルクホルンは歯切れ悪そうに応じる。

「そ、それで……その……少し、オシヤレして……行こうかと……」

「えっ、オシヤレ?」

ミーナは少し意外そうな顔をして訊き返した。何年も前からウィッチとして、カールスラント軍人として生きることを決意し、女の子らしい生き方↑趣向には見向きもしなかった。

さすがにオシヤレへの興味や憧れ、女子力等がまったくないわけではないだろうが、彼女本人はあくまで模範的なカールスラント軍人であることに徹し、殆んど無私で軍隊生活を送ってきた。

そんなバルクホルンが、一体どういう心境の変化でオシヤレする気になったのか。ミーナは強い興味を抱く。

「何だ、おかしいか!私だって女なんだぞ!」

バルクホルンは頬を軽く膨らませ、プイツとそっぽ向いた。

子どもっぽい反応を見せた戦友を見て、ミーナはクスクスと笑声を立てる。
「ふふ♪ごめんなさい。それで？」

ミーナは話の続きを促す。バルクホルンは何か言いたげな視線を寄越しつつも、話を再開した。

「外行き用の私服は持っているのだから、化粧をしたことが無くてな」
「手伝えばいいのかしら？」

先回りして答えるミーナに、バルクホルンは小さく頷いた。

「ふくん♪滅多に着ない私服に御化粧まで……」

なにやらミーナは意味ありげに眩き、生真面目な戦友に目を据える。さらにニツコリと、わざとらしい笑みまで浮かべて見せる。

「か、構わないか？」

「もちろんよ♪お友達として、家族として応援させて頂戴♪」

うんうんと感慨深げに何度か頷くと、ミーナはさらに言葉を続けた。

「前から思ってたけど。あなたと優人、とつてもお似合いよ♪」
「？」

妙に訳知り言動を取るミーナを見て、バルクホルンは頭上に疑問符を浮かべる。// 応援// やら // お似合い // やら、一体何を言いたいのか。

数瞬考えた後。堅物大尉はハツとなつて戦友兼上官の意図に気付く。

「ち、違うつ！断じて違つぞ！お前が想像しているようなことは絶対にないっ！」

「心配しないで♪皆に言いふらすような真似はしないから♪」

「違つと言つているだろうっ！変な誤解をするなっ！」

「わかつてる、わかつてるから♪」

誤解を解こうとするバルクホルン。しかし、ミーナはそれを照れ隠しと思つたらしい。優秀な指揮官であるはずの彼女は「わかつている」と言いながら、まったくわかつていないのだ。

「さて、明日は気合い入れてメイクしないとね♪」

「違つと言つているだろうっ！」

バルクホルン悲痛な訴えは、終ぞミーナの誤解を解くことが出来なかつた。

第5話 「リバウの貴腐人」

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦——赤城型航空母艦“天城”が、移送任務でブリタニアに到着した翌朝。

ドーバー海峡へ突き出した半島に屹立する第501統合戦闘航空団基地の正門から、1台のリベリオン製ジープが姿を現した。

ブリタニア本土へ向けて、ジープは石畳の道を疾走する。潮が満ちると海中へ水没するこの一本道が、基地とグレートブリテン島を繋ぐ唯一の陸路なのだ。

ジープに搭乗しているのは、2人組の男女——扶桑海軍大尉の宮藤優人と、カールスラント空軍大尉のゲルトルート・バルクホルンだ。

ジープの運転を担当する優人は、紺色の長ズボンを履き、白いTシャツと黒色のジャケットを羽織っている。普段着ている純白の扶桑海軍第二種軍装とは異なり、シックな印象を受ける。この服は芳佳とデートする際にも着ていた服で、優人のお気に入りだ。

当然、助手席に座っているバルクホルンも、見慣れた灰色の制服姿とは異なる出で立ちだった。いや、輝いていると形容するべきか。

腰部がコルセット状になっているハイウエストの青いロングベルトに、真っ白なブラ

ウスという真面目な委員長タイプバルクホルンらしい清楚で露出の少ない組み合わせである。

清純な雰囲気醸し出しながらも、腰の括れや胸部の豊かなふくらみを強調し、持ち主の凹凸のハッキリしたボディラインが露になっている。

ブラウスの襟元は、ベルトと同色のリボンが制服時と同じくらいキツめに結ばれていて、ちよつと窮屈そうだ。

外行きの私服に着替えた2人は、傍目にはデートに向かうカップルに見えなくもない。乗っている車が年季の入った色気のないオリブドラブのジープでなければ完璧なのだが……。

「……………」

運転席でハンドルを握る優人の表情には、緊張の色が浮かんでいた。

傍目には、故郷で右ハンドルに慣れきった扶桑人が、不慣れな左ハンドルの運転に不安を感じているように見えるかも知れない。

しかし、優人は車の運転を本大戦初期のリバウで覚えていた。なので、扶桑人でありながら左ハンドルの方が馴染み深い。彼の心をざわつかせているのは、隣に座っている戦友なのだ。

今回のロンドン行きの目的は、バルクホルンの最愛の妹——クリスティアーネ・バル

クホルンの元へ見舞いに訪れ、尚且つ優人が彼女の前でバルクホルンの恋人を演じることだった。

カールスラントの堅物大尉は、妹相手にいい格好したいがために見栄を張りまくり、嘘の上に嘘を重ねた。その結果、バルクホルンは居もしない恋人を妹に紹介するハメになつてしまう。

引くに引けない状況へと追い込まれたバルクホルンから懇願される形で、優人は恋人役を引き受けることになつたのだ。

(それにしても綺麗だな……)

ジープが本土へ到達したところで、優人は横目でチラツとバルクホルンに目をやった。薄くだが、年頃の女性らしい化粧が施された横顔を視界の端に捉え、優人は胸がトクンと高鳴るのを感じていた。

彼女も落ち着かないらしい。居住まいを正しつつも、時折モジモジと腰を揺らし、膝の上で重ねた両手の指も忙しなく動かしている。

いつも2つ結びにされている茶髪は下ろされ、海から来る潮風に靡いて優雅に舞う。髪から香水混じりの柔らかい香りが立ち込め、扶桑海軍大尉の鼻腔を擽った。

化粧のない普段の彼女も、ハリウッド女優に負けず劣らず、かなりの美人だ。粧したことで、女性としての魅力が200%増しとなつている。

出発前。粧し込んだバルクホルンを前にして、優人はあまりの美しさと華やかさに見惚れてしまっていた。

さすがに実行に移したり、芳佳がドレスアップした時のような醜態——衝動的に抱き締める、相手の魅力に当てられて気を失う等——を晒したりはしなかったが……。

ふと自分を凝視する気配に気付き、バルクホルンが顔を向けてきた。彼女と目が合った優人は、咄嗟に視線を正面へ走らせた。

「……………」

「……………」

沈黙が車内を支配し、ドライブが気まづくなる。優人は曲がり角でハンドルを切りながら、基地を出てからまったく言葉を交わしていないことに気付く。

お粧しをした女性が目の前にいるのだ。やはり何か気の利いた褒め言葉の一つでも掛けるべきだったろうか。

だが、如何せん。優人はそういったことは不得手である。適切な言葉が中々思いつかない。

癪ではあるが、こういう時だけ502のヴァルトルート・クルピンスキー中尉を羨ましく思う。

「……………やはり、似合わないか？」

煩悶とする扶桑海軍大尉の思考は、助手席から聞こえた汐らしい声によって遮られた。言うまでもなく、声の主はバルクホルンだ。

「えっ?」

優人が反射的に訊き返すと、バルクホルンは数瞬置いてから薄く口紅の塗られた唇を動かした。

「そうだろうな。可愛いらしさも色気もない私なんか、粧したところで……滑稽なだけ、だな」

膝元に視線を落とし、バルクホルンは震えた声音で言う。優人に、というよりは自問しているようだ。

規律の鬼らしからぬ弱気な発言。その瞳には不安の色が滲んでいる。

軍務以外には万事疎いカールスラント空軍ウィッチー——ゲルトルート・バルクホルン。501結成以前から軍務に没頭し、おしやれに挑戦したり、羽目を外して遊んだりしたことは殆んどない。

さすがに関心が全く無いわけではないだろう。しかし、真面目過ぎるほど真面目で、人一倍責任感の強い彼女のことだ。カールスラント軍人として規律を重んじ、ウィッチの使命を優先してきた。

そんな彼女が、妹を——言葉は悪いが——欺くこの機会を利用して年頃の少女らしく

着飾ってみようと思ったのは想像に難くない。

(やつぱり、私に……女らしい格好など似合わないか……)

バルクホルンは少々ナーバスになっていた。殆んどのウイッチがそうであるように、彼女は超が付くほどの美女だ。

目鼻立ちが整っていて、長い茶髪も絹糸のように美しく、スタイルもモデル並に良い。彼女の容姿を見た人間は皆そう思う。しかし、バルクホルン自身に女としての自信がなかった。

同じウイッチでありながら、ミーナや芳佳、リーネ、ペリーヌ、サーニャは女の子らしさに気を遣い、振る舞いからして軍人氣質の自分と違っている。

一見スピードや機械弄りにしか興味がないように見えるシャーリーも、私服や水着等の趣味からは女性らしさが窺え、下着も可愛らしさや色気を感じるもの多く所持している。対して、自分は下着も水着も実用性重視で味も素っ気も無いものばかり。

帝政カールスラントの誇るウルトラエースとして、501WEースの片割れとして。戦闘では仲間達から大いに信頼されているバルクホルンも、内心では劣等感を抱いているのだ。

「そんなことない！」

ふと力の込められた耳朶を叩かれ、俯いていたバルクホルンはハッと顔を上げる。

いつの間にか道路の端にジープを停車させていた優人が、真剣な眼差しを向けていた。

「バカなこと言うなよ！お前は綺麗だ！制服姿や空を飛んでいる時も素敵だけど、今はその何倍も魅力的になったよ！今すぐ結婚を申し込みたいくらいだ！」

「……………えっ？」

自分を卑下する自分を叱咤し、思いつく限りの言葉で励まそうとする。優人が捲し立てる中で、バルクホルンは「ある発言」を聞き逃さなかった。

「け、け、けけけけ……………結婚?!」

発言の意味を理解するなり、バルクホルンは顔全体を赤ランプのように赤くする。

「あ、いやいや！それはあの言葉の綾というか、なんと言うかな……………」

彼女の反応を見て、優人もまた自分が勢いに任せて何を口走ったかを理解し、慌てて訂正に入る。

先程の声高な発言とは打って変わり、歯切れが悪くなっていた。

あくまでも粧したバルクホルンが、結婚を申し込みたいくなるほど魅力的だと伝えただけで、プロポーズをしたわけではない。

だが、優人の口から出た「結婚を申し込みたい」言葉をそのまま受け取ってしまい、バルクホルンはすっかり動揺していた。

「きききききき、気持ち嬉しいが！わわわわ、私には……そ、祖国奪還という使命があつて！自分の幸せのことなどは！」

「だから違うんだって！ちよつと落ち着いて！」

優人が取り乱しているバルクホルンを落ち着かせ、再びジープを発進させるまで1時間以上かかった。

◇ ◇ ◇

同時刻、501基地――

（またただわ。やっぱり、誰かが見ている）

優人とバルクホルンがジープでロンドンへ向かっている頃。朝食を終えた竹井は、機材の搬入作業の様子を確認しようと、天城が入港中している基地の港へ向かつて基地宿舍の廊下を歩いていった。

途中、自分を監視する例の視線に気付いて歩みを止めた彼女は、肩越しに背後を振り返った。

「わわっ！竹井さんがこつち見てますよ！」

視線の先にいたのは2人の501ウィッチだった。1人は宮藤芳佳軍曹。竹井と同じく扶桑皇国海軍遺欧艦隊第24航空戦隊288航空隊を原隊とする航空ウィッチ。

竹井にとって1人の戦友の妹で、もう1人の戦友の弟子でもあり、縁のある相手と言つてもいい存在だ。

「シッ！静かに！気付かれたらどうするんですの！？柱の影に隠れなさい！」

もう1人はペリーヌ・クロステルマン中尉。芳佳と同じく竹井の戦友——坂本美緒少佐の弟子にして、自由ガリア空軍第602飛行隊から501に派遣されているガリア共和国屈指のエースウィッチである。

竹井に見つかつて狼狽える芳佳の腕を掴み、柱の影に引つ込むペリーヌ。大きめ声を出した扶桑ウィッチを注意する「青の1番」だが、実は声の方が大きかつたりする。

（あの柱の影から見えるのは……優人の妹さんに、クロステルマン中尉よね？視線の正体ってあの2人？）

柱越しにこちらの様子を窺う2人。竹井は訝しげに細めた目を向ける。

芳佳とペリーヌは坂本と入れ違いで基地を訪れてた竹井をずっと監視していたようだ。ストーカーの正体の変質者の類いでなかったことに、取り敢えず竹井は安堵する。

しかし、彼女等が何故知り合ったばかりの自分をつけ回すような真似をするのか。竹井には分からない。だが、思い当たる節はあつた。

噂では、501創設に尽力した元ブリタニア大将の後任として、ガリア解放直前まで501の上官を務めたブリタニア空軍戦闘機軍団司令官——トレヴァー・マロニー大将

と、ミーナをはじめとするストライクウィッチーズの面々は不仲だったとされている。

事実。独立集団であるはずの501に対して度々作戦指揮権を譲渡し、ブリタニア空軍の指揮下に入るよう要求してたマロニーと。それを拒みつつ、着実戦果を上げ続けた501の面々は終始対立していた。

基地内にマロニーと通じている者が紛れ込んでいたという旨の噂も、真しやかに流れている。

ミーナも優人も、他の501ウィッチも表向きは竹井のことを歓迎してくれていた。しかし、内心ではどうなのか。

ウィッチーズの中に、マロニー一派との対立が原因で余所者に不信感を抱く者がいても不思議ではない。

芳佳とペリーヌは、自分という部外者を信用出来ずに警戒・監視しているのだろうか。そう思うと、*「リバウの貴腐人」*は少し悲しくなった。

深い溜め息と共に肩を竦めた竹井は、自らを監視する2人を振り切るかのように早歩きを始めた。

「あつ！竹井さんがっ！」

「っ！逃がしませんわよー！」

芳佳とペリーヌも柱の影から飛び出し、遠ざかる竹井の背中目掛けて走り出した。

やがて、竹井は角を曲がった。彼女の後に迷わず続いた2人だったが、それがまずかった。曲がり角の先では、身を反転させた「リバウンの貴婦人」が彼女等を待ち構えていたのだ。

「あっ!」

追跡していたペテランウィッチが、腕を組んで仁王立ちする様を見て芳佳とペリーヌは揃って動きを止め、上官に対して直立不動の姿勢を取った。

「私に何か用かしら?」

「い、いえ。別に……」

「昨日から、ずっと私をつけてたわよね?」

誤魔化そうとするペリーヌに対し、そうはさせないとばかりにすかさず問い質す。

出来るだけ穏やかな口調で訊いたつもりだったが、数々の修羅場を潜り抜けてきたペテランの威厳は残念ながら隠し切れなかったらしい。

「ええと! ええと!」

「そんなことは、この先に用がありました……」

分かりやすく狼狽える芳佳と、なんとか誤魔化し切ろうとするペリーヌ。しかし、
「リバウンの貴婦人」は甘くはなかった。

「……この先、行き止まりのはずよね?」

基地に来て間もない竹井だが、今いる一画の間取りは把握していた。そして、ペリー又達がどんな言い訳をするかも先読みし、2人を誘い込んだのだ。

「さて、白状してもらいましょうか？」

「……………」

扶桑、ガリアの若きウィッチ達は黙り込んでしまふ。竹井の態度・口調は決して威圧的ではないが、今の彼女はウィッチーズを叱りつける時のミーナに何処となく似ていた。

「私、何かあなた達の気に障るようなことでもしたかしら？」

「っ!? 違いますっ!」

少しだけ悲しみを滲ませた声音で問う竹井に、すぐさま芳佳が反論する。

「なら、どうして?」

竹井は前屈みになり、芳佳の顔を覗き込みながら訊ねる。海軍の後輩を安心させようと、口元に微笑みを湛える彼女は、姿勢も相俟って「小さい子どもに話しかけるお姉さん」のようだ。

「竹井大尉、宮藤さんは悪くありませんわ。非は全て私に……」

「ペリー又さん……」

上官としての責任。そして、戦友としての情からペリー又は芳佳を庇う。

芳佳が配属された数カ月前。折り合いが悪かった2人が、今では互いを思い合う友人となっていた。

尤も、未だにペリーヌは優人や坂本に関する事柄で、芳佳に嫉妬することが多々あるが……。

「その……竹井大尉が、坂本少佐やお兄さ……宮藤大尉と、どのようなお知り合いなのか気になりました……」

「それで、つい後をつけるような真似をしてしまった……というわけね？」

竹井が確かめるように問うと、ばつが悪そうな顔したペリーヌは小さく頷いた。

「はい、その通りです。大変失礼を致しました」

「竹井さん、ごめんなさい」

芳佳とペリーヌが揃って頭を下げる。素直に謝罪する姿勢に、竹井はクスリと笑声を漏らした。

「ふふ♪そういうことなら、ちゃんと説明しなきゃいけないわね♪」

竹井な一拍置き、可愛らしい後輩ウィッチ等に自分と優人と坂本の関係を話始めた。

「簡単に言えば、優人と美緒……宮藤大尉と坂本少佐は私にとつて所謂“同期の桜”であると同時に、先生であり、戦友であり、掛け替えのない親友よ♪」

「それでは良く分かりませんわ」

と、ペリーヌが眉を顰める。具体的なようで、やや抽象的な竹井の言い回しに不満があるようだ。

「もつと具体的に……その、どういう……？」

ペリーヌの要望に応え、竹井は嘸み砕いて説明する。彼女と優人、坂本。そして、もう1人——扶桑海軍遣欧艦隊機動部隊に配属されている若本徹子中尉の4人が、同時に海軍ウィッチヘ志願したこと。

北郷章香少佐——現在は中佐にして、佐世保航空予備学校の校長——の指揮する部隊で切磋琢磨しながら共にネウロイと戦ったこと。

扶桑海事変後。竹井は海軍兵学校へ入学。優人と坂本は遣欧艦隊に、若本は第1航空戦隊にそれぞれ配属されたこと。

リバウで再会した優人と坂本が、零式の開発やロマーニャでの修行で実力を向上させており、竹井にとっては教えを請う先生のような存在だったこと。

大戦初期のリバウでは扶桑海軍事変以来、久々に肩を並べてネウロイと戦ったこと。

思ひ出を嘸み締めるように語る竹井の話を、芳佳とペリーヌは夢中になって聞いていた。

「死を覚悟した窮地でも、2人がいてくれたから生き延びることが出来たわ。だから坂本少佐と宮藤大尉は、同期の桜であり、先生であり、戦友であり、掛け替えのない親友

なの。これで納得してくれるかしら？」

「あの、もう一つだけ！」

話を終えようとする竹井に、芳佳が手を挙げて質問する。

「竹井さんはお兄ちゃんの……その、恋人……なんですか？」

頬を軽く染めながら芳佳は訊ねる。その声は尻すぼみになっていった。

芳佳のようなブラコン妹からしてみれば、最も重要な疑問である。しかし、質問の内容容意外だったのか、竹井は少々面食らったような顔をする。

「ふふっ♪違いわ」

真剣な面持ちで訊いてくる芳佳を可愛らしく思った竹井は、軽く吹き出しながら応じる。

「あなたのお兄さんはとっても素敵なお兄さんだけ。私との関係はあくまでお友達よ♪」

竹井にそう言われて安心したらしい。芳佳は胸に手を置き、ホッと息を吐いていた。

「そうですか……」

「優人のことが大好きなのね？」

「はい！自慢のお兄ちゃんなんです！」

と、芳佳は屈託のない笑顔で答える。その明るい表情に竹井は心洗われる気分だった。

「これで問題は解決かしら？」

「竹井大尉、お騒がせして申し訳ありませんでした」

「本当にすみませんでした」

迷惑を掛けた上官に対し、ペリーヌと芳佳はもう一度頭を下げ、謝罪する。

謝意を述べる彼女等の姿を微笑ましいと思う一方で、竹井は心中で深い溜め息を吐いていた。

（まったく、美緒も優人も相変わらぬ。リバウの罪作りコンビは未だ健在……つてところかしら？）



昼食時、ブリタニア首都ロンドン――

ロンドンに到着した優人とバルクホルンは、少し早めの昼食を摂っていた。

クリスの見舞いを済ませてから食事にするつもりだったが、ロンドンに来るのが予定よりも大分遅れてしまい、先に昼食を摂ることにしたのだ。

背の高いウェイターにテラス席へ案内された2名の連合軍大尉は、店主自慢の Pasta やパンケーキに舌鼓を打つ。腹を満たした後はコーヒーを追加注文し、喉を潤してい

た。

甘党且つ子ども舌で、ブラックコーヒーが飲めない優人は、砂糖とミルクをたっぷり加えていた。その様子を見ていたウェイターから険しい視線を向けられていたが、優人は気にしないことにした。

甘味が増したコーヒーで口内を湿らせる。何の変哲もない一般的なコーヒーだったが、美女と一緒に飲むとより美味しく感じる。

チラツと向かいに座るバルクホルンに目をやる。彼女もまた、コーヒーを口に運んでいた。正面から見て漸く気が付いたが、彼女は意外と睫毛が長い。

「お、おい！何だあの娘!？」

「スツゲエ美人じゃねーか!？」

「スタイルいいなあ！モデルさん?」

「ひよつとして女優!？」

「ちよつと声掛けてみない?」

「彼氏持ちみたいだぞ?」

「あの扶桑人！どこであんない女を!？」

「羨ましい!」

テラススペースのあちこちのから、そんな声が聞こえてくる。バルクホルンは凶らず

も客達の視線を集めていた。

彼女に注目している者の殆んどが若い男性なので、男つ気のない堅物大尉にモテ期が到来したと言える。

男共の囁き声は、当然バルクホルンにも聞こえてる。コーヒーを飲み干すと、彼女は羞恥心から俯き加減になる。化粧の施された美人顔は、熟れたトマトの如く赤面していた。

一方の優人は、自らの美しきで大勢の男達を色めき立たせるバルクホルンの——1日限りの演技とはいえ——恋人でいることを誇らしく思い始めていた。

(将来、バルクホルンと結婚する人は幸せだな)

規律に厳しい性格と軍務に没頭していることが多いため忘れられがちだが、バルクホルンは美人なだけではなく、家庭的な少女でもある。

炊事、洗濯、掃除と。いつお嫁に行っても問題無いほど家事スキルが高い。

生真面目さからくるお節介と口うるささはあるものの、それもゲルトルート・バルクホルンの魅力の一つと言える。

本人がその気になれば、優人に頼らずとも本物の恋人をクリスに紹介できただろうに

……。

「そろそろ行くか?」

「あ、ああ……」

甘味たっぷりのコーヒーを飲み終えたところで、優人は提案する。

バルクホルンはまだ顔から熱が引かないらしい。声を絞り出すようにして応じる。

会計を済ませた2人は、男性客達の羨望と憧憬が入り雑じった視線を背中に受けて、店外へ出る。

「さて。いよいよお前の妹さんと御対面だな」

「あ、ああ……」

優人の言葉を聞いて、バルクホルンは熱が退き始める代わりに緊張が全身を駆け巡るのを感じていた。

自分の身勝手に、大切な友人に無理な頼み事を引き受けてもらっている彼女だが、クリスを前にして恋人の演技をやり通せるかという不安を抱いていた。

果たして上手くやれるだろうか。エイラほどではないにしろ。バルクホルンは嘘を吐くことが苦手だった。

最愛の妹の目の前だと、つい気が緩んでしまい、仕様もないポカをやらかすという欠点もある。

ハッキリ言って自信が無い。大型ネウロイに単身で挑む方がよっぽど楽に思えた。

「行くう」

短く告げて、優人が自らの右手を差し出してきた。バルクホルンは彼の意図が理解できず、「えっ?」と目を丸くした。

「いや、恋人の演技するわけだから。予行練習も兼ねて手を繋ごうかと……」

「なっ!?!何を言っているんだ!」

突然、バルクホルンは声を張り上げた。「何事か!?!」と通行人達の目が一齐に向けられる。

「て、てててて……手なんぞ繋いで!も、もし子どもが出来てしまったら、どう責任を取るつもりだ!」

「……バルクホルン。頼むから落ち着いて」

不安どころか、完全にテンパってしまっているカールスラントの堅物大尉を前にして優人は思った。早くも前途多難だと……。

バルクホルンが冷静さを取り戻すまで、1時間ほど掛かり、またしても病院が遠ざかってしまった。



同時刻、501基地宿舍客室――

第504統合戦闘航空団へ戦闘隊長として招聘されている竹井醇子扶桑海軍大尉は、芳佳やペリーヌと別れて客室に戻っていた。

ロマーニヤの基地へ向かう途中、移送任務を帯びて立ち寄った当基地の司令——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐から、ウィッチ宿舎の一室をまるごと貸し与えられていた。

竹井及び天城への乗艦を希望するストライクウィッチーズの面々は、ガリア経由でロマーニヤと向かう予定である。

そのため。軍の1人部屋にはは広過ぎる室内には、必要最低限の生活用品のみが置かれている……はずだった。

「ふう……」

疲れを吐き出すように一息漏らすと、竹井はベッドに腰を下ろした。

日頃から、ウィッチーズに素晴らしい寝心地を提供しているベッドの上には、1通の封筒が置かれている。竹井は封筒を手にとって開封する。

「人に見張られてると思うと、趣味も憚られるわね」

困ったような笑みを浮かべつつ、竹井は封筒の中から一冊の本を取り出す。何かの雑誌のようだ。

これは竹井醇子の愛読書で、扶桑皇国の知る人ぞ知る出版社で取り扱われている本だ

が、ジャンルが少し……ほんの少し特殊なものだった。

タイトルは『皇国の腐女 九月号』となっており、端正な顔立ちをした2人の青年が表紙を飾っている。

青年達は、それぞれ扶桑陸軍のカーキ色の制服と、海軍の第二種軍装備を着用している。いずれも士官用の制服だが、注目すべきはそんなことではない。

美青年2人が絡み合うような所作で、純白のシャツに身を投げている姿が表紙に描かれていることだ。

「ふふふ♪今回の表紙も中々ね♪」

表紙の出来栄えをチェックした竹井は、満足そうに喉を鳴らす。舌舐めずりまでする彼女の姿は、獲物を前にした肉食獣を連想させた。

「504戦闘隊長着任前に、英気を養わせてね♪」

表紙に薄紅色の唇を落とすと、竹井はゆったりした所作で雑誌を開いた。

これぞ、扶桑皇国海軍航空歩兵の一部しか知らない竹井醇子大尉の裏の顔——リバウの貴腐人”である。

第6話 「ナンパと熊式鯨折り」

1944年9月、ブリタニア首都ロンドン——

「あゝ……何で、俺はこんなに疲れてるんだ？」

街頭のベンチに腰を下ろした優人は、背凭れに身体を預けて空を仰ぐ。

扶桑海軍大尉の真上には、爽やかな青空が広がっている。これだけ天気が良い日なら、ストライカーユニットを履いて遊覧飛行と洒落込むのもいいかも知れない。

優人は疲労により、大して回らなくなった頭でボンヤリと、そんなことを考える。

疲労の原因は、大切な501の戦友にして、カールスラントの友人でもあるゲルト・バルクホルンだ。とはいっても、別段彼女に何かされたというわけではない。端的に言うとは、生真面目でウブな性格故に些細なことで取り乱してしまうバルクホルンのフォローに四苦八苦しているのだ。

精鋭揃いの第501統合戦闘航空団。その中でもバルクホルンは、屈指の高い実力を持つウィッチである。戦闘中は頼もしい存在である彼女だが、軍務から離れてしまえば途端にポンコツ化してしまうという一面もある。

バルクホルンの相棒であるハルトマンもまた、空では天才的技量を発揮する反面、地

上での日常生活はだらしがなく、怠惰で寝てばかりいる。

501のWエースは一見すると正反対な性格をしているようで、そういった両極端な部分は意外にも共通している。

「しっかし、バルクホルン遅いなあ……」

青空から正面へ視線を戻し、優人は独り言ちる。「化粧を直してくる」と優人に一言告げ、バルクホルンは昼食を摂ったカフェへ戻っていった。

化粧直しに店内のトイレを使わせてもらうつもりだったのだろう。

優人は腕時計を確認する。既に40分以上も時間が過ぎていくのに、バルクホルンはまだ戻らない。

(何かあったのか?)

もしかすると、何かトラブルに巻き込まれているのかもしれない。心配になった優人はベンチから立ち上がり、バルクホルンを探しにカフェへ向かおうとする。

「ん?」

ふと進行方向上に佇む3つの人影を捉え、優人は歩みを止める。

人影等の方へ目をやると、道路路の端に駐車した真っ赤なバイクを背にして立つ女性と、彼女を左右から挟み込むかのように立っている2人の男性の姿が見えた。

派手な格好をした男性達は20歳前後くらいで、言っではなんだが軽薄そうな印象を

受ける。まるでチンピラだ。

女性——というよりは少女の方は男達より少し歳下に見える。10代後半といったところで、まだ少女として扱われる年齢だ。バイク乗りのようだが、それに相応しい格好をしている。

丈の短い黒色のタンクトップの上にバイクと同色のライダースジャケットを羽織り、下はローライズズボンの上からデニム生地の上着を重ねて履いている。

背筋を伸ばした立ち姿は、遠目に見ても抜群にスタイルが良く、服の上からでも豊かなボディラインを窺い知ることが出来た。

顔立ちも綺麗に整っている。かなりの美少女だ。オレンジが掛かったブラウンの髪とサファイアのように蒼い瞳が印象的な彼女に、優人は細めた目を据える。

(シャーリー……だよな?)

バイク乗りの美少女。彼女の正体はは優人の戦友で、リベリオン陸軍第8航空軍より501へ派遣されている航空ウィッチ——「シャーリー」こと、シャーロット・エルウィン・イエーガー大尉だった。

見慣れたリベリオン陸軍の制服ではなく私服姿だったこと。さらに優人が離れた場所から、シャーリーを遠目で見ていたために、気付くまで少しばかり時間を要した。

決して、ライダースジャケット越しでも大きさがハッキリと分かる爆乳やら、ローラ

イズのショートズボンからスラリと伸びた生足やらを凝視していたせいで気付かなかつたわけではない……はずだ。

パーソナルカラーに染められた愛車と服装から察するにツーリングか。或いは、ロンドンのバイクショップに用があるのだろう。

シャーリーは仲の良いルツキーニを連れてツーリングへ出掛けることが多いが、バイクにサイドカーが無いのを見るに、今日は彼女一人のようだ。

気になるのは彼女に絡んでいる2人組だ。シャーリーは、その気さくで社交的な性格故にボーイフレンドが大勢いる。しかし、このような柄の悪い男達と付き合いがあるとは思えない。

「なあ、いいだろう？ちよつとだけだつて！」

どうやらナンパされているらしい。チンピラ風の男の片方は、馴れ馴れしく顔を近づけ、明らかに鬱陶しがっているシャーリーにしつこく言い寄ってくる。

当のリベリオンウィッチは何も応えない。無言を貫きながら苛立だしげに腕を組み、蔑みを湛えた視線を左右の男達へ走らせている。

「君みたいな可愛い娘はもつと遊ばないとさあ」

もう1人の男は、一步引いた位置からシャーリー——正確には彼女の身体——を舐め回すかのような厭らしい目付きで見据えていた。頭のとつぺんから足の爪先まで、余す

ことなく視線を這わせている。

下心あるナンパをされ、シャーリーはムスツと不快そうに表情を歪めていた。

部隊一のナイスバディを誇り、周囲からも「グラマラス・シャーリー」の二つ名で呼ばれ、シャーリー本人もパーソナルマーク等に採用するほど気に入っている。

プロポーションに対する自信故に、露出度の高い私服やビキニタイプの水着を好んで着ている。

彼女自身が大らかな性格なので、例えば優人のように胸や尻へ目がいつてしまう誰かがいたとしても気にはしない。もちろん、咎めもしない。

しかし、目の前のチンピラ風の男共のようなあからさまに身体目当てで絡んできた上、下卑た本心を隠そうともしない恥知らずな輩には寛容になれない。

人様を心底嫌うことなど殆んどしない彼女だが、眼前の下衆に対しては嫌悪感さえ抱いている。

(まずいな……)

状況を呑み込んだ優人は、シャーリーの元へ小走りで駆け出していった。

彼女はリベリオン陸軍のウィッチだ。暴漢相手の自衛手段——護身術等の格闘技——は心得ているし、いざとなれば魔法力がある。チンピラどころか、正規の軍人が相手だろうと問題にならない。その気になれば、目の前の男達など一捻りだろう。

だが、それを理由に静観を決め込むなんてことを優人はしない。困っている女の子がいるのに見て見ぬフリして

は、男が廃るといふものだ。

「おい、あんたらー！」

優人が語勢を強めた声音で告げると、チンピラ達は何事かと振り向く。上玉相手のナンパに水を差され、彼等是不機嫌そうな渋面を作っていた。

一方のシャーリーは、優人の姿を見るなり仏頂面から一転、表情を輝かせて駆け寄つて来る。

チンピラ達の注意が一瞬だけ扶桑海軍隊へ向いたおかげで、用意に脱出することが出来たのだ。

「もお、おっせいよ！何してたのお？」

聞き慣れない猫撫で声で話しながら、シャーリーは優人の右腕を取る。

ライダーズジャケット越しだろうと、リベリオンウィッチのたわわに実った果実の柔らかな感触が伝わり、優人はドキマギする。

「おっ！おい何だよ!？」

「シッ！お願いだから合わせて」

シャーリーがヒソヒソと囁いた。熱い吐息が耳に当たり、何とも言えぬ擦ったさに優

人は軽く悶える。

「なんだ、男がいたのか……」

「チツ！いい女捕まえたと思つたのによお」

チンピラ達は悪態を吐き、多少名残惜しい様子を見せつつも背を向けて去つて行つた。

シャーリーにしつこく言い寄っていた割には、ずいぶんあっさり引き上げたので、優人は少し拍子抜けする。

「サンキュー、優人♪アイツらしつこくつてさあ……」

辟易したように言うと、シャーリーは優人の腕から離れる。

胸の感触を堪能する時間を終わってしまったことに内心悔やみつつも、シャーリーが解放されたことに安堵すした。

「ところで、お前は何でロンドンにいるんだ？オシャレしてるみたいだけど？」

シャーリーは、私服姿の優人をまじまじと見ながら訊ねる。

「ああ、ちよつとバルクホルンと……」

事情を説明しようとして、戻つてこないバルクホルンを探しに向かう途中だったことを思い出し、優人はハツとなる。

「そうだ！バルクホルンだ！」

「バルクホルン？何だよ、アイツ迷子にでもなったのか？」

「いや、迷子って言うか……」

ふと経緯を話そうとした優人が、シャーリーの肩越しにバルクホルンの姿を見つめる。

ホツとしたのもつかの間。私服姿の堅物大尉は、シャーリーと同じくチンピラ風の人組——シャーリーをナンパした男達とは別の2人組——に絡まれていた。なんと、こちらにもナンパの被害に遭っていたのだ。

「うわっ！他にもあんなのが……」

チャラそうな奴らに絡まれているバルクホルンに、シャーリーも気が付いた。

同時に粧したバルクホルンの姿を目にして、少し驚いているようだ。

「やれやれだよ」

一難去つてまた一難、優人は溜め息を吐くと同時に肩を竦める。

「まあ、バルクホルンなら大丈夫だろう？ウチのエースだし、あんな奴らひと睨みで——」
そこまで言つて、シャーリーは言葉を止める。普段の堅物大尉なら、睨むか一喝入れかしてチンピラ共を追い払ったことだろう。シャーリーはもちろん、優人も同じ考えだった。

しかし、視線の先にいるバルクホルンの姿は、2人の航空歩兵が予想していたものと

大分異なっていた。

「君、可愛いねえ♪」

「ふえっ!?!」

「今、暇かい?」

「あ、えと……」

「俺達と遊ばない?」

「その……あ、あの……」

「……………」

交互に声を掛けてくるチンピラ達に対し、バルクホルンはあたふたと狼狽えてしまい、まともに受け答えをすることすら出来ていない。

厳格且つ気丈夫で、ハッキリと物申す性格のカールスラント軍人は見る影もなかった。というか、完全に別人となっている。

優人とシャーリーは、バルクホルンの尋常ではない変わりように思わず絶句する。

「な、なんじゃ……ありや……?」

信じられないといった口調でシャーリーは呟く。てつきり、バルクホルンが怒声一発で男達を追っ払うとばかり思っていたが、件の堅物大尉はまるで男性に対する免疫の低い乙女のようになってしまうている。よく見ると、少し涙目になっている。

「すみません。ちょっと、やめて頂けませんか？」

「あ？」

シャーリーの声を聞いて現実に戻った優人は、すぐさまバルクホルンを助けるべく動き出した。

チンピラの片方——茶髪の男が即ちに反応し、扶桑海軍大尉を睨みつけてくる。

「あんた誰だよ？」

「まさか、この娘の彼氏？」

もう一人のチンピラ——耳にピアスをつけた男——が、茶髪の男の言葉を継いだ。

「えっ!？」

チンピラの「彼氏？」という言葉に、バルクホルンは過敏な反応を示した。

「ち、違う！違う違う違う！」

ボンツと湯気が出そうなほど赤面して、バルクホルンは頭を振りながら否定する。

彼氏ということにしておけば、シャーリーの時みたいに引き下がってくれたかもしれない。密かにそう考えていた優人は「おいおい」と肩を落とす。

それにしても、こうも必死に否定されるとは……。扶桑海軍大尉は結構なショックを受ける。

「ハハハ！完全否定されてやんの！ダッセエ！」

ピアスの男は優人を嘲笑うと、再びバルクホルンに向き直る。

「ねえ、俺なんかどう？絶対後悔させないよ？」

「バルクホルン。こんなヤツらは放っておこう」

そう言つて優人はバルクホルンの手を引き、チンピラ達から離れようとする。当然、それで見逃してくれる連中ではなかった。

「おい！待てよ！」

「きゃっ!？」

茶髪の男がいきなりバルクホルンの腕を掴んだ。相手のことなど一切配慮しない荒っぽい所作。突然、腕を走った痛みにバルクホルンは短い悲鳴を上げる。

「兄貴が付き合つてやる、つて言つてんだ。無視はねえだろ？」

「やつ!……痛い！」

バルクホルンの表情が苦痛に歪む。茶髪の男が、脅しのつもりで握る力を強めたらしい。

「あんたもだ、扶桑人」

兄貴と呼ばれたピアスの男が優人の前へ回り込む。その瞳には、自分より体格で劣る東洋系に対する侮蔑の色が滲んでいた。

「他人の女を何処へ連れていくつもりだ？ん？」

「悪いけど、あんたじゃ到底彼女と釣り合わないよ。そこのお前もだ！その汚い手を離せ！」

「てめえっ！」

怒りを見せたのは茶髪の男だった。彼は優人の胸ぐらを掴み、自分の眼前まで乱暴に引き寄せる。

その時だった。優人が固有魔法『凍結』を発動させ、男の手が冷氣に覆われた。

「手！手が！手が凍ったあああああっ！」

実際は手の表面に氷がついただけだったが、頭が足りていないチンピラに恐怖を叩き込むには十分過ぎた。

茶髪の男は情けない声で喚き散らすと、兄貴分を放つて逃げ出した。

「ま、魔法力？あんた、ウィザードなのか？」

声を震わせるピアスの男は、確かめるように訊きながらも、頭ではしつかりと理解していた。

とんでもない相手に——自分達では、とても手に負えない存在に喧嘩を売ってしまったことを……。

「ぐ、ぐめんなさい！どうか！どうか命だけわあああああああああ！」

茶髪の男に負けず劣らずの無様な悲鳴を上げたピアスの男は、這いつくばるような姿

勢で逃げ去つて行つた。

「まったくとく……」

優人はうんざりしたように吐き捨てる。出来ることなら、こんな風に魔法力を使いたくなかつた。

軍に身を置く航空歩兵が、固有魔法を使つて一般人を脅かしては大問題だ。ガリア解放の立役者である501の一員なら尚さらだろう。

もし騒がれたりすれば、事は優人だけの問題では済まない。501メンバーや祖国に多大な迷惑を掛けてしまう。

それが理解できない優人ではない。バルクホルンほど生真面目ではないにせよ、彼は軍人としては模範的な方である。可能であれば穩便に済ませたかつたが、今回ばかりはどうしても怒りを押さええられなかつた。

チンピラ達は大切な戦友——家族と言つても差し支えない存在である501の仲間になちよつかいを出し、あまつさえ乱暴を働いて怯えさせたのだ。とても許せることではない。

「バルクホルン」

優人は、質の悪いナンパ被害にあつたカールスラントウィッチへ向き直る。

チャラついた野郎共から解放されたバルクホルンは、自らの身体を守るかのように

ギョツと抱き締め、フルフルと小刻みに震えている。

「大丈夫か？」

「あ……ああ……」

口紅を塗り直した唇を微かに動かし、バルクホルンはどうか優人の問いに応じる。視線を足元に落としているため、表情は窺い知ることはできない。しかし、怯えているのは確かだろう。

数瞬を置き、バルクホルンはおもむろに顔を上げる。悪質なナンパが余程堪えたのか。彼女の目には涙が溜まり、瞳は潤んでいた。

「——っ!？」

涙目となっているカールスラントウィッチに上目遣いで見つめられ、優人はドキんと胸を高鳴らせる。

素の状態でも、彼女はかなりの美女である。今は化粧を施され、さらに涙という女の武器まで揃っている。ハッキリ言って反則だ。

「優人っ!」

堪えきれなくなったバルクホルンは、優人の胸に飛び込んだ。弱々しい姿を見せるカールスラントウィッチを、扶桑海軍ウィザードは自然な動作で抱きとめた。

自分でも驚くほど行動に迷いがなかった。ただ女の子が怯えているならそうしなけ

れば、と思つたのだ。

やがて、バルクホルンは嗚咽を漏らし始める。彼女の肩は優人のものより細かった。香水とブレンドされた髪の香りが鼻腔を擦り、胸の膨らみが押し付けられる。

さらに、2本の繊細な腕が優人の身体に絡んで、彼の背中を抱き返す。とても戦闘でMG42を軽々と振り回しているとは思えない華奢な両腕だ。

堅物大尉殿の弱い一面は以前——芳佳が501に入隊して間もない頃——にも見ている。彼女は、数々の修羅場を潜り抜けた世界的エースウィッチである前に、年齢相応にか弱い乙女なのだ。

バルクホルンだけではない。ストライクウィッチーズの面々はもちろん、世界中で活躍するウィッチは皆そうだ。

殆んどのウィッチはすぐにでも軍を抜け出し、戦場から逃亡したいはずだ。にも関わらず、そういった話を聞かないのは、ネウロイの脅威から人々を守りたいがため、小さな身体と壊れそうな心を必死に奮い立たせているからだ。

か弱いながらも心を強く保とうとする乙女達を守り支えるのも、男たる自分の役目だと優人は考えている

傲慢な思考かもしれない。人によつては所謂男尊女卑と受け取るかもしれない。それでも、彼は自分のあり方を変えるつもりはなかった。

何故なら、長く最前線で戦ってきた優人にとって、戦場で最も守りたい存在は最愛の妹と、戦友のウィッチ達だからだ。

優人はバルクホルンの気が済むまで、彼女抱き締め続けた。

(そう言えば、シャーリーは?)

◇ ◇ ◇

シャーリーは愛車を走らせる。それも制限速度を越えた猛スピードでだ。

スピード狂ではあっても、見境なく速度出すわけではない。街中——特にロンドンのような大都市内では安全運転を心掛けており、交通事故を起こしたことは一度もない。

しかし、今日は事故の危険を帰り見ずに自らが改造したバイクを疾走させていた。あの場から一刻も早く逃げ出したかったからだ。

悪質なナンパから助けたバルクホルンを優人が抱き締め、バルクホルンが優人を抱き返している姿を見た時、シャーリーは心臓が口から飛び出てしまうのではないかと思うくらいに衝撃を受けた。

居たたまれない心境から衝動的にバイクを走らせ、声も掛けずに立ち去ってしまった。

(あたし、何やってんだ……)

シャーリーには、自分が酷く惨めに思えてならなかった。

化粧したバルクホルンは同性のシャーリーから見ても美しかった。それこそ息を呑むほどに……。

リベリオンウィッチはただ悔しかった。ボンネビル・ソルトフラッツにて、オートバイ——魔導エンジン二輪車——の世界最速記録を樹立して以来、初めて味わった敗北だった。

まさな恋愛に奥手そうなバルクホルンが、いつの間にか優人とデートするような関係になっっているなんて、思いもしなかった。ライバルはすぐ近くにいたというのに、完全に油断していた。

ひたすらバイクを飛ばし、シャーリーは人気のない郊外まで来た。愛車から降りて、地面に寝っ転がる。

快晴の蒼い空を見上げ、*「グラマラス・シャーリー」*は胸に誓う。負けない、と……。

◇
◇
◇

30分後——

「着いたぞー！」

優人とバルクホルンは、クリスが入院している病院に到着する。ジープを通路に停め、優人は助手席のウィッチに声を掛ける。

「……………」

バルクホルンは何も応えない。仏頂面を浮かべて腕を組む姿は、なんとも機嫌が悪そうだった。

戦友の態度に深い溜め息を吐くと、優人は運転席から道路に降りた。バルクホルンも無言のまま車外に出る。

ここに来るまでウブな乙女の顔、か弱い少女の一面を見せていたバルクホルンだが、優人の胸で存分に泣いた後はあからさまな不機嫌オーラを醸し出していた。

おかげで美女が隣にいるにも関わらず、ここまでのドライブはまったく楽しくなかった。

少しでも居心地の悪さから逃れようと、優人はサイドミラーでを使つて軽く髪型を直す。すると、突然胸ぐらを掴まれ、ミラーから引き離された。

鏡に映つた自分の顔の代わりに、化粧をした堅物大尉の美人顔が視界を埋め尽くす。

美女と至近距離で見つめ合うシチュエーション。健全な男子であれば赤面しつつ、胸を高鳴らせるところだろう。しかし、ウィッチの美貌を堪能する余裕は、優人になかつ

た。

先程までのか弱く可愛らしい彼女は何処へ行ってしまったのか。バルクホルンは息を荒くし、齒軋りしながら睨んでくる。

「な、何だよ？」

彼女の迫力に気圧されつつも、優人は問う。バルクホルンは、一層手に力を込めながら口火を切った。

「……………言うなよ」

「は？」

「わ、私がナンパに怯えて泣いていたことだ！クリスに言うなよ！いや、クリスだけではない！他の人間にもだ！絶対に言うなよ！」

ナンパされた時とは、また違った意味合いの涙を浮かべ、バルクホルンは必死に懇願——或いは恐喝かもしれない——する。

なるほど。事ここに至るまで、友人に散々醜態を晒してしまった彼女だが、初めて経験したナンパに狼狽え、不貞の輩怯えて、挙げ句子どものように泣いてしまった事実が一番尾を引いているらしい。

自分への苛立ちや自己嫌悪等で少しばかり優人に対して刺々しくなっていた、ということか。

大型ネウロイや敵の大群にも一切怯むことなく、果敢に立ち向かえる自分が、チャラついた男達相手にビックついてしまうなんて、優人はもちろん当のバルクホルンにとつても驚愕ものだろう。

オシャレに着飾っただけで、人はここまで変わるものなのか。

「い、言わない！言わないよ！」

「よしー」

お願い半分脅かし半分といった体(てい)で約束を取り付けたバルクホルンは満足そうに頷くと、優人の胸ぐらから手を離れた。

「そ、それとだな……」

「うん？」

服の胸元を直しながら、優人は「まだ何かあるのか？」と怪訝そうに表情でバルクホルンを見返す。

「さっきは助けてくれて、ありがとう。それがと、遅くなつたが……恋人役を引き受けてくれたことにも……感謝している。ありがとう……」

ポツと頬を赤く染め、バルクホルンは謝意を述べる。照れ臭いらしい。礼の言葉とは裏腹にプイツとそっぽ向いて、優人から姿勢を逸らしている。

扶桑海軍大尉は、照れ屋なカールスラントウィッチ様を見てクスリと小さく笑うと、

スツと己の右手を差し出した。

「どういたしまして。じゃあ、妹さんに会いに行こうか？」

「……………」

差し出された手をチラツと一瞥したバルクホルンは、僅かに逡巡する様子を見せたものの、最終的には優人の手を取った。

優人は軍人のものとは思えない小さな手の、バルクホルンは自分よりも大きな男らしい手の感触を味わいつつ、クリスがいる病室へと向かった。

途中、何名かの看護婦と顔を合わせた。彼女らには2人が美男美女カップルに見えていたらしく、優人達に目を向けては黄色い声を上げていた。

「ここがクリスの部屋だ」

やがて、2人はクリスの病室前までやって来た。バルクホルンは扉の前で一旦足を止め、優人に短く声を掛けた。

「準備はいいか？」

「ああ」

頷く優人だったが、直前になって緊張していた。演技とはいえ、彼は今からバルクホルン恋人として彼女の妹と会うのだ。無理もない。

婚約者の親に結婚の挨拶をしに行く男性は皆こんな心境なのだろうか。自分もいつ

か相手を見つけて挨拶に行く日が来るのだろうか。そんなことを思いながら、優人は扉をノックする。

「は〜い、どうぞ〜!」

ドアの向こうから女の子の明朗な声が返ってくる。優人とバルクホルンは深呼吸し、心を落ち着かせてから入室する。

「お姉ちゃん!」

「クリスマス!」

先に病室へ踏み込んだのはバルクホルンだった。室内に最愛の妹の姿を認めた彼女は、ぎこちない笑顔を浮かべつつも軽く手を挙げて挨拶する。

「今日も来てくれたの!」

思いもよらない姉の来訪。クリスマスは表情を輝かせ、声を弾ませる。

自身の見舞いを喜んでくれるクリスマスの様子を見て、バルクホルンの笑顔も自然なものへと変化する。

「あ、ああ。ちよつと近くまで来たから寄ったんだ」

「ふ〜ん、もしかしてデート帰り?」

「ふえっ!?!」

ニイツと歯を見せて笑い、クリスマスは訊く。凶星を突かれた——厳密には違うが——バ

ルクホルンは、可愛らしいような間の抜け出しような声を漏らす。

「な、何で……?」

「だって、いつも軍服のお姉ちゃんがオシャレなお洋服着て、お化粧までしてるんだもん♪そこまで気合いを入れる理由があるとすればデートしかない!そうでしょ?」

ビシツと姉を指差し、クリスは断言する。中々鋭いお嬢さんだ。バルクホルンの背後からカールスラント姉妹のやり取りを見ていた優人は感心すると共に、一抹の不安を抱き始めていた。

下手なことを言えば、そこからバルクホルンが見栄の為に仕掛けた演技だと看破されかねない。扶桑海軍大尉は一層気を引き締める。

「ま、まあな。そうだ!今日はお前に紹介したい人を連れてきてな」

そう言うってバルクホルンは脇へ退き、左手で優人を指し示した。

「私の恋人だ」

「初めまして、宮藤優人です」

バルクホルンの説明に続き、優人も軽く会釈しつつ自己紹介をする。

姉が連れて来た見知らぬ男性に目を据えたクスリは「わあ!」と感嘆の声を上げた。

「この人が扶桑の宮藤優人さん!?お姉ちゃんの恋人って、やっぱり優人さんだったの!」

クリスは爛々と輝かせた瞳に優人を映す。姉の恋人を名乗る男性の登場で無邪気に

もはしゃいでいた。

色恋沙汰に興味を示さない女性はいない。ましてや、クリスは恋に恋するお年頃。優人が遙か遠い国の出身ということも無関係ではあるまい。

「そうだぞ！こいつは私の顔を見るなり、『付き合ってください』と交際を申し込んで来てな！一度断ったというのに、その後何度もアプローチを繰り返してきてな！あまりの熱心さに私が根負けして……」

バルクホルンは、交際を始めた経緯という名のホラ話を高らかに語り出した。

話の中で自分の扱いが地味に悪かったので、優人は横目でチラツと抗議の視線を送る。

長口上が終わったところで、優人とバルクホルンは用意した椅子に腰を下ろした。

「あ、ごめんなさい……挨拶がまだでしたね。クリスティアーネ・バルクホルン、ゲルトルートお姉ちゃんの妹です！初めまして」

と、クリスはペコリと頭を下げる。ベッドに座る目の前の少女は、お堅い姉に比べると幾分雰囲気柔らかい。

人柄も年齢相応に無邪気で面がある一方で、お淑やか且つ礼儀正しいように思えた。

長い間、昏睡状態に陥っていたとの話だったが、外見上は目立った怪我もなく健康体である。

(雰囲気は違うけど、やっぱり姉妹なんだな)

と、優人は内心で呟いた。性格の差異こそあれど、そこは血の繋がった姉妹。クリスの髪や瞳は姉と同じ色をしていて、顔立ちもバルクホルンに似てかなり美人だ。

もちろん、同じ妹でも芳佳の方が美人だとシスコン兄貴は信じて疑わない。少なくとも、妹に限定すれば芳佳が世界一だと優人は考えている。

「ふ〜ん♪」

「何かな？」

自己紹介を簡単に済ませると、クリスは優人をジ〜つと見つめてきた。旺盛な好奇心を滲ませた視線に当惑しつつも優人は問い掛ける。

「ハルトマンさんが言ってた通り。イケメンさんですね♪」

「そ、そうかな？」

優人はポリポリと後頭部を掻いた。クリスのような美少女に褒められると悪い気はしないが、照れ臭くもある。

「そう言えば、さつき『やっぱり優人さんが』って言ってたけど。あれは？」

「はい。お姉ちゃんが優人さんのことをスゴく楽しそうに話してたので、そうなのかなあつて」

そう説明しながら、クリスはチラッと姉へ視線を走らせる。

バルクホルンは妹の眼差しに何か含んだものを感じ取り、冷や汗を一筋流していた。
「それは光栄だね」

どうコメントすればいいのか分からず、優人は愛想笑いを浮かべて無難な言葉を返した。

「優人さんは、お姉ちゃんのどんなところが気に入ったんですか？」

「そうだなあ……」

優人が考える素振りを見せるのとほぼ同時に、病室のドアから小気味良いノック音が響いた。

すぐにドアは開かれ、40歳前後の医師が入室する。彼はクリスの主治医だ。

「お姉さん、ちよつといいですか？」

「あつ、はい」

医師はクリスの容態、もしくは入院生活について彼女の家族と話がしたいようだ。声を掛けられたバルクホルンは、すぐさま椅子から立ち上がる。

「すまない。ちよつと2人で話していてくれないか？」

「ああ、わかったよ」

「は〜い♪」

優人とクリスが順に返事をする。バルクホルンは主治医の後に続いて部屋を出よう

としたが、ふと何かを思い出して優人に耳打ちする。

「くれぐれも頼んだぞ?」

クリスの相手と演技がバレないよう用心しろということだろう。優人が小さく頷くと、バルクホルンは主治医を追って一時退室した。

バルクホルンを見送った優人は、再びクリスに向き直る。すると、何故かクリスが頭を下げていた。

「クリスちゃん?」

「ごめんなさい!お姉ちゃんが、優人さんに御迷惑をお掛けして!」

「えっ?もしかして……?」

「わかってました。優人さんがお姉ちゃんの為に恋人のフリをしていたんだって……」

クリスはさらに続けた。優人が姉の頼みで恋人役を引き受けたこと。姉が見栄を張って、自らを恋愛経験豊富でモテモテな女性だと嘯いていたこと。これらについては、初めから怪しく思っていたらしい。

そもそも堅物と称されるほど真面目で、軍務を優先するあまり男つ気のない日々を過ごしてきた姉が、戦時下に多数の男達と交際していたとは考えにくい。

優人とバルクホルンが恋人同士にしては妙にぎこちなかった様を見て、クリスは確信を持ったそう。

「お姉ちゃんってば。私の前だとやたらカッコつけて、理想の姉を演じようとするんです」

「まあ、気持ちにはわかるよ」

苦笑気味ではあるが、優人は本心で言っている。自分だって出来ることなら芳佳の前では良い部分だけを見せていたい。兄としての威厳は元より、

少しでも妹の憧れ——ヒーローのような存在でありたい。嫌われ、幻滅されないうために……。

兄や姉は、いつだって弟妹に失望される恐怖と戦っているのだ。

「でも私にとっては、どんなお姉ちゃんでもお姉ちゃんだから。お姉ちゃんがすごい人だから好きなわけじゃ……」

「そうだろうね」

クリスがどれほど姉を慕っているか。また、バルクホルンがどれほど妹を愛しているか。彼女達姉妹のやり取りを見れば一目瞭然だ。

仲は良さなら自分と芳佳だって負けない自信はある。反面、バルクホルン姉妹のような血の繋がった兄妹ではない事実には優人は引け目を感じていた。

「まあ、君のお姉さんが見栄を張ってくれたおかげで、俺は丸一日美人の恋人になれたけどね」

「何ですか、それ？」

優人のおどけた言動に、クリスはクスクスと小さく笑声を立てた。

「君のお姉さんが、戦友の鼻目無しに素敵な人だつてことだよ」

本心から思っていた。無理に着飾らなくても、バルクホルンは十分過ぎるほど魅力的だ。

それは何も外見や女性らしさ、軍人やウィッチとしての能力の高さを言っているわけでない。

優人はゲルトルート・バルクホルンという少女の人柄をよく理解していた。

規律や規律を重要視するため、真面目で頑固なところはあるものの、人一倍責任感が強く、常に周囲に気を配っている。その仲間想いな性格は501メンバーを含む多くウィッチから信頼され、好かれている。

委員長タイプの口やかましきこそあれど、彼女を本気で怖がったり嫌がったりする人間がない辺り、バルクホルンの人徳が窺い知れた。

「そう言う優人さんも、素敵な人です♪」

「ありがとう、嬉しいよ」

「優人さん、ちよつと耳貸してもらっていいですか？」

「ん？（こ）う？」

指示に従い、優人に右耳をクリスの方へ向ける。すると、横目で見ていたクリスの顔が近付き、右頬に何か柔らかく温かいものが触れた。

それが唇の感触で、クリスにキスをされたのだと優人が理解するのに時間はかからなかった。

「——っ!?!クリスちゃん!?!」

優人は、反射的にキスされた右頬へ手を添える。少女の大胆な行為に驚愕し、両の目を見開いていた。

「ふふ♪今日のお礼です。私のファーストキスですよ?」

クリスはチロツと舌を出し、悪戯っぽく笑う。どうやら優人は、彼女の性格について思い違いをしていたらしい。

目の前の少女は姉のように生真面目でない反面、おしやま且つ小悪魔的な一面を有していたのだ。

「そう言うことは本当に好きな——」

「優人」

クリスを注意しようとした優人の言葉を、身震いするほど冷たい声が遮る。

声が聞こえた背後へ振り返ると、バルクホルンが静かな怒りを湛えた表情で優人を見下ろしていた。彼女は戦友のことを親の仇でも見るような目で睨んでいた。



5分後、病院前の通り――

見舞いを短時間で終えた優人とバルクホルンは、クリスに別れを告げて病室を後にした。

ジープを停めた場所まで戻ってきたところで、バルクホルンによる優人への制裁が始まった。

「あ……あがつ！あがつ！あがつ！」

優人は苦悶に満ちた表情で、言葉にならない悲鳴を上げていた。

「優人お！どういいうつもりだ！？私がない間にクリスの初めてを奪うなど！」

怒りに満ちた表情で、誤解を招きかねない発言をしているのは、もちろんバルクホルンだ。

彼女は今、優人にベアハッグ――または、熊式鯖折り――と呼ばれる技をかけていた。

これは相手の胴体を両腕を使って捕まえ、力任せに締め上げるという技である。相手の背骨・肋骨や腰等にダメージを与える格闘技にバルクホルンの怪力が加わり、かなり強力な技へと昇華されている。

第7話 「ウィッチーズ出撃」

1944年9月、ドーバー海峡——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の空母——赤城型航空母艦「天城」は、約2日間停泊していた第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』基地の港を出港した。

同基地で受け取った機材と、戦闘隊長として第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』に招聘されている竹井醇子扶桑海軍大尉をロマーニャへ届けるため、ガリアを経由して地中海方面へと向かう。

4月下旬。補給任務と反攻作戦参加の為、ブリタニア方面へ派遣されていた空母「赤城」を旗艦とする戦隊。その残存艦である陽炎型駆逐艦「雪風」もまた、天城に追隨していた。

そして、天城には竹井大尉の他。501の解散に先んじて、帰国の途に就いた坂本美緒扶桑海軍少佐以外のストライクウィッチーズも乗艦している。

「わあ〜♪海風が気持ちいいねえ、リーネちゃん〜」

「うん、この潮の香り。なんだかホツとするね♪」

天城の甲板では、2人のウィッチが朗らかな表情で海を眺めている。扶桑海軍の宮藤

芳佳軍曹と、ブリタニア空軍のリネット・ピシヨップ軍曹——通称“リーネ”だ。

心地好い海風に頬を撫でられ、芳佳は満足げに喉を鳴らす。

リーネの方は初めての空母乗艦だったはずだが、満更でもなさそうだ。

「あれ？あそこにみんな集まってるよ？」

何気無しに首を回らせた芳佳の視線の先に、同じく甲板まで出てきていたウィッチーズの姿があった。

リーネも、「あ、ホントだ」と輪を作って談笑している戦友達の姿を認める。

ミーナが竹井経由で艦長に頼み込み、なさ501のメンバーは揃って天城に乗艦隊させてもらえることになったのだ。

「お、芳佳とリーネかあ」

話に混ぜてもらおうと、芳佳、リーネは小走りで駆け寄ってきた。最初に2人の存在に気付いたのはハルトマンだった。

「みんなが集まって、一体何をしているんですか？」

小首を傾げつつ、芳佳は仲間ひとりひとりの顔に視線を走らせる。

改めて挨拶を、と竹井や天城の艦長がいる艦橋へ向かったミーナと優人——坂本不在時、彼は戦闘隊長を代行することとなっている——以外は揃っていた。

「ウィッチーズが解散した後、どうするかって話してたんだよ」

まずシャーリーが芳佳の質問に答え、バルクホルンが言葉が続ける。

「短い間だったが、力を合わせてやってきたんだ。気に掛けないほど、私は無粋ではない」

「トウルーデはこう見えて心配症だからさ。離れ離れになるみんなのことが、心配で堪らないんだよ」

と、ハルトマンが横から茶々を入れてきた。相棒をからかいつつも、彼女は嬉しそうだった。

以前のバルクホルン——クリスの件を引きずっていた彼女なら、こういう集まりに参加することも、戦友達との別れを惜しむこともなかったことだろう。

宮藤兄妹のおかげで、バルクホルンは段々と良い方向に変わっていった。ハルトマンは、優人と芳佳に一生頭が上がらない心境だった。

「んなつ!?何を言うハルトマン!私は、そんなこと!」

「んく?照れなくてもいいじゃん、トウルーデ」

「うっ!……まったく、お前というやつは……」

クスクスと笑声を漏らすハルトマンにつられて、他のウィッチ達も微笑ましげに笑い出す。

とてもじゃないが、口でハルトマンに勝てる気がしない。バルクホルンは悔しげに歯

噛みする。

「芳佳と優人は、この天城に乗ったまま扶桑まで帰るんだよね？」

「うん、そうだよ」

確かめるように訊くルツキーニの質問に、芳佳はすぐさま首肯する。

「帰ったら家の診療所のお手伝いと一緒に、治癒魔法の修行やお医者様になる為の勉強をするんだ」

「そうか。私もお前の治癒魔法で、この命を助けてもらったからな。お前とお前の兄さんには、今でも感謝している」

無茶な戦い方が元で負傷した自分を必死に助けてくれた宮藤兄妹に、バルクホルンは改めて感謝の言葉を述べた。

「その素晴らしい力で、多くの人達を救ってやってくれ」

「はい、ありがとうございます！バルクホルンさん！」

屈託のない笑顔を浮かべ、芳佳は元気良く返事する。その眩しい笑顔に見つめ返さ
れ、バルクホルンはポツと頬を染める。

「ところで、皆さんはこれからどうするんですか？」

「私はもちろん、ガリアで降ろして頂きますわ」

芳佳の質問に対し、真つ先に応えたのはベリーヌだった。

「ガリア貴族として、祖国復興の義務がありますから。大忙しですわ」

やれやれと肩を竦めるペリーヌだが、その表情から憂い等は感じられない。

これからは自由ガリア空軍のペリーヌ・クロステルマン中尉としてではなく、侯爵家の新たな当主としての日々を送ることになる。

パ・ド・カレーの新領主は、「高貴なる義務」を果たしていくことだろう。解放されたガリア、そして自らを慕う領民達の為に……。

「あ、あの……」

ペリーヌに続いて、リーネが口を開いた。僅かばかり逡巡する仕草を見せつつも、新たなパ・ド・カレー領主へ視線を定める。

「私もペリーヌさんと一緒に、ガリアに連れて行ってくれませんか？」

「えっ？あなたが、どうしてガリアに？」

ブリタニアウィッチの唐突な申し出に、ペリーヌは眼鏡の奥の目を丸くする。

リーネは、ブリタニア空軍戦闘機軍団隷下部隊所属の航空ウィッチ。といつても、彼女は基礎訓練を終えた後、いきなりたさ501へ派遣されたため、原隊には行ったことがない。

501が解散になった今、リーネはいよいよブリタニア空軍の原隊に配属されるか。或いは、ロンドンの実家へ戻るとばかり思っていた。

しかし、それがどうしたのか。彼女は自分にガリアへ連れて行ってほしいと言っている。

「私は、ずっとブリタニアを……みんなを守りたいと思つて頑張つてきました」

リーネは、ガリア行きを希望する理由を語り始めた。彼女の碧い瞳には、決意の火が煌々と灯っている。

ガリア上空に存在していた巢が消滅した現在、ブリタニアが直接ネウロイの襲撃を受けることは無くなった。

そして、ブリタニア連邦内の優秀なウィッチを集めた部隊——第11統合戦闘飛行隊『HMW』等——が、前線に出られるようにもなった。

自分が戦わなくても、もう大丈夫。そう感じたリーネは、ブリタニア空軍のリネット・ビショップ軍曹としてではなく、リネット・ビショップというひとりの人間として出来る事をしていきたいと考えていた。

「……なので。私で良ければ、ペリーヌさんと一緒にガリア復興のお手伝いをさせて頂けませんか？」

「——っ!?!」

リーネの想いは、ガリア奪還に次ぐガリア復興を悲願としているペリーヌにとつて非常に嬉しく、また頼もしいものだった。

感極まり、瞳から涙を溢れさせてしまいそうなのを必死に堪え、パ・ド・カリーの新領主は掛け替えない友人の手を取った。

「ありがとう、リーネさん！私こそ、よろしくお願い致しますわ！」

涙声になりながらも、ペリーヌは感謝の気持ちをハッキリと伝える。

「そうすると、お前達は除隊することになるのか……」

と、バルクホルンが少々残念そうな口調で言う。

「せっかく、ウィッチとしての実力もついてきたのに……」

「あ……ごめんなさい。バルクホルンさん達は、これからも戦い続けるんですよ」

バルクホルンの言葉で、芳佳はハッと気付いた。ガリアが解放されたものの、ネウロイとの戦いが終わったわけではない。取り戻すべき領土も、まだまだ存在する。

ペリーヌと同じく国を終われたバルクホルン達カールスラント組は、これからも祖国奪還の為にネウロイと戦い続けなくてはならない。

対ネウロイ戦の最前線たる欧州から遠く離れた——謂わば、安全圏と言える扶桑本国へ帰ることが申し訳なく思えた。

「ああ、そうだ。だが、謝る必要などない」

表情を曇らせた芳佳を気遣い、バルクホルンは彼女を励ましの言葉を掛けた。それはペリーヌやリーネへ向けたものでもあった。

「直接戦う以外にも、人々の為に出来ることはいくらでもある。それはお前達の選んだ道だろうか？ だったら、それに誇りを持って！」

「「はいっ！」」

扶桑、ブリタニア、ガリアの若きウィッチ3人から元気の良い声が返ってくる。バルクホルンは満足そうに頷いた。

「んで、そつちの2人とミーナ中佐はカールスラント戦線か。キツそうだなあ……」

ふと爆乳リベリオンウィッチが話に割り込んでくる。昨日、優人の件で堅物大尉を密かにライバル認定したシャーリーだが、それでバルクホルンとの仲が険悪になったり、一方的な悪感情を抱いたりはしなかった。そこが彼女らしいところだ。

「当然だ。それが元々、私達の目的だからな」

毅然とした態度で応えるバルクホルンを余所に、シャーリーはハルトマンへ目をやる。

「ハルトマン。ちゃんとバルクホルンの面倒見てやれよお〜♪」

「ふふ〜ん♪任しといて！」

ハルトマンは悪戯っぽく笑うと、親指をグツと立てて見せた。

「おいっ！ 逆だろ、それは！」

「そつかな？」

シャーリーは、すぐさま反論するバルクホルンを見てニヤリと口角を吊り上げた。

「そうだ！大体貴様が人の事を言えた義理か？リベリアン！私物扱いで複葉機を持ち込むような常識外れが何を言うか！」

バルクホルンの言う複葉機というのはウォーロック暴走の折、沈みかけた赤城から坂本とペリーヌを救出する活躍を見せたあの『シルフィー・ソードフィッシュ』のことだ。

近隣の基地で廃棄となった機体をシャーリーが連絡機という名目で入手し、私物化した雷撃機である。

シャーリーは、自ら整備したソードフィッシュを手離したくなかったらしい。艦長に直談判し、なんとか天城の艦内に格納させてもらっていた。

「いいだろ、別に。この艦は空母なんだし、着艦も出来るよ？」

「そういう問題か！」

「あはは……それで、シャーリーさんはどうするんですか？」

「グラマラス・シャーリー」と堅物大尉の相変わらざるなり取りに苦笑しつつ、芳佳は訊ねる。

「シャーリーはねえ♪アタシと一緒にロマーニヤ行くんだよ！ロマーニヤのパスタとピッツア、食べてもらうんだからあ！」

シャーリーの代わりにルッキニーが応えた。大好きなシャーリーに故郷を案内出来

るので、とても喜んでいる。

「おう！楽しみですだなあ♪ま、しばらくはロマーニヤでゆっくりするさ♪」

「ちよ、ちよつと待て！リベリオン司令部から帰還命令は来ていないのか？」

「さあ？聞いてないぞ」

と、事も無げに言うシャーリーに、バルクホルンは軽く目眩を覚えた。

規律を重視し、ある種の生き甲斐としているバルクホルンには、あまりシヨツキングな事実であつた。

「し、信じられない。どうして、これで組織が成り立っているんだ？リベリオン、恐ろしい国かもしれん」

「ま、あんまり遊んでると、何処飛ばされるか分からないから。ほどほどにしておくけどね」

規律も規則も存在しない無法者の軍隊を想像して、頭を抱えるバルクホルンに対し、シャーリーはさばけた笑顔で応じる。

「え、ええと……サーニヤさんとエイラさんはどうするんですか？」

堅物大尉とリベリアンのやり取りに苦笑気味なリーネが、取り繕うように話題を変える。

「エイラと2人でスオムス軍基地に行つて、そこからオラーシャへ向こうルートを探し

てみようか……」

「ソウダゾ！サーニヤは扶桑にナンカ行かないからナ！べくっ！」

「へ？私、何か悪いことしました？」

自分を睨み、あつかんペーをするエイラの様子を見て、芳佳は小首を傾げる。

「あ……別に気にしなくてもいいと思うよ？」

「そ、そうですか……」

ハルトマンに言われ、取り敢えず芳佳は気にしないことにする。直後、わざとらしい咳払いが耳朶に触れる。

「扶桑と言えばですけど。坂本少佐とお兄さ……宮藤大尉はどうなさるか、聞いていらっしやいませんか？芳佳さん」

咳払いはペリーヌのものだった。ガリア貴族の令嬢は、敬愛する上官立場がどうなるのか。それが気になって仕方がないらしい。

「えくつと……お兄ちゃんが、2人揃ってウィツチ養成学校の教官になるって言うてましたよ」

坂本はもちろん、優人も教官としては中々に優秀である。

501新人組である芳佳やリーネの指導において、実技を担当する坂本に対し、優人は主に座学を担当する。

「き、教官!? ね、ねえ芳佳さん。その学校って、扶桑以外のウィッチでも入れるのかしら?」

「え? さあ、私にはわからないですけど……」

「な、何とかならないかしら? その、あなたの推薦とか……」

「あ、あの……ペリーヌさん。ガリアの復興は?」

「くっ! そうでしたわ。口惜しい……」

リーネに言われ、ペリーヌは自分が何を優先すべきか再認識する。

心底の無念のようだが、ほんの一瞬とはいえ一分も経たずにガリア復興という目標が頭から抜け落ちてしまうのはいかかなものだろう。

ウィッチーズがガールズトークに華を咲かせている間に、入港予定のパ・ド・カレールが見えてきた。

「もうガリアに着くのか。早いな……」

ガリアの地を遠方に見据え、バルクホルンはどこか寂しそうに独り言ちる。

バルクホルン達カールスラントの3名は、ひとまずガリアに駐屯し、司令部からの命令を待つことになる。

これからの戦いでは、ブリタニアの戦い以上に気を引き締めなければならない。悲願であった祖国奪還はもちろん、自分の背後には、ガリアを復興を志すペリーヌとリーネ。

そして、ブリタニアで療養中の妹がいるのだから……。

「考えてみれば、ネウロイとの戦いが終わった訳じゃないんだよな……」

シャーリーが、バルクホルンの隣にやって来た。堅物大尉言うところの「勝手気儘なリベリアン」は、先程までのお気楽さが抜け、真剣な面持ちとなっている。

「何を当たり前のことを言っている」

「いやさ。先に帰っちゃみたいで、ちよつとね」

「仕方あるまい。ここから先は我々の問題なのだから……」

芳佳と似たようなことを言うシャーリーに、バルクホルンは身体を向ける。

「ペリーヌや芳佳、優人のように自分達のやるべきことをやる。それだけだろうか？」

「あつははは！そりやそうだ！」

バルクホルンの言葉を受け、シャーリーの表情に輝きが戻る。

「取り敢えず、あたしは休ませてもらうけどね〜♪」

「お、お前は……501でも遊んでばかりだったくせに……」

501基地におけるシャーリーのフリーダムライフを思い出し、バルクホルンは改めて呆れる。

目の前のリベリオンウィッチは、自分の趣味——愛機のP51Dで音速突破に挑戦する他。ストライカーユニット、ソードフィッシュ、バイクの整備・改造——を優先し、軍

務にはあまり関わらなかつたのだ。

「でもさ……もし、また一緒に戦える事があれば。その時は力一杯戦うよ！」

「そうか。ああ、その時はよろしく頼む」

「……………」とところで、話は変わるんだけどさ」

なにやら急に真面目な表情を作るシャーリー。彼女が口火を切るのと、ウィッチーズにミーナの集合命令が掛かったのは、ほぼ同時だった。

◇ ◇ ◇

10分前、天城艦内――

「はあ…………困ったわねえ」

ガンルームにて、竹井は深い溜め息を零す。室内には、優人やミーナもいる。

正式な解散命令が下った501部隊の司令と副司令代理兼戦闘隊長代行の2人は、これから世話になる天城の艦長に挨拶するため、竹井と共に艦橋へ赴いていた。その帰りである。

「まったく、司令部も勝手だな」

と、優人が竹井に同調するような口振りではやく。口には出さなかつたものの、ミー

ナも内心では彼に同意していた。

先程まで艦橋にいた3人は、艦長から総司令部の新たな命令を伝え聞いていた。内容は、竹井及び501への作戦参加命令だった。

ガリアにおけるネウロイの殲滅は認められたものの、カールスラントやヘルギガとの国境付近には、まだ多数の地上ネウロイが確認されている。

連合軍最高司令部は、ガリアが解放されて以降、欧州各地のネウロイの活動が徐々に沈静化し始めていた戦略的見地から、機に乗じて出来るだけ戦線を進めておくこと望んでいた。

ブリタニア、リベリオンの陸軍を中心とした地上戦力をガリアへ上陸させ、戦線の押し上げを試みる。

また、扶桑皇国海軍遣欧艦隊を中心とした連合軍海上戦力、カールスラント軍などが沿岸地域に展開、主力部隊の支援を命じた。

しばらくは快進撃を続けていた地上戦力だが、カールスラント国境——マジノ線直前にて、大型自走砲ネウロイの砲撃・敵航空戦力の奇襲を受けてしまい、前衛が壊滅。

ヘルギガ国境へ進出した別動隊も飛行ネウロイの襲撃に遭い、前進が困難になってしまった。

放っておけば、戦線を押し返されかねない状況下。連合軍西部方面総司令部は、最も

前線に近い位置にいた天城及び旧501と竹井の作戦参加を決定。自走砲ネウロイの撃破と、ヘルギガ方面に展開している友軍への航空支援を命じた。

501は既に解放しているが、総司令部の言い分では『殆んどどの隊員の原隊復帰前につき、指揮権は総司令部にある』とのこと。

「本当にごめんなきさ、」

竹井は申し訳なさそうな表情で2人に謝罪する。解散し、原隊へ復帰——一部は除隊扱い——するストライクウィッチーズの面々を気持ちよく送り出すつもりでいた彼女は、責任を感じていた。

優人やミーナはもちろん、一足先に扶桑へ戻った坂本にも申し訳が立たない。無論、竹井に責任があるわけではないが……。

「いいえ、あなたに責任はないわよ」

と、ミーナは軽く頭を振り、表情を曇らせてしまった竹井を励ます。

「それの上層部からの無茶な命令には慣れてるし……」

ミーナの話を聞きながら、優人は「急な作戦参加でも、マロニーやウオーロックよりはマシさ」と口に出しそうなのを堪えていた。

「でもそうになると、問題は他の子達よねえ……」

「……なあ、ミーナ」

可愛い部下達の事で、ミーナは物憂げな表情を浮かべる。眉を寄せて悩む隊長に、戦闘隊長代行は1つ提案を出した。

「なあに？」

「天城は、もうすぐガリアに寄港する。作戦参加を希望しない連中は、パ・ド・カレーで降ろせないか？」

総司令部の命令に背くことはもちろん。連合軍地上部隊を見捨てる訳にもいかない。せめて、除隊希望者だけでも巻き込むまいという扶桑海軍大尉からの上申である。

「……そうね、それがいいわ」

ミーナは一考したものの、優人の意見を受け入れる。次に竹井へ視線を走らせ、彼女にも確認する。

「竹井大尉、いいかしら？」

「はい、それで問題ありません。総司令部には、ガリア入港後に501へ通達したと伝えておきます」

「ありがとう。もちろん、私は参加させてもらおうわ」

と、ミーナは作戦参加への意欲を示す。おそらくはバルクホルンやハルトマンも参加するに違いない。

彼女達カールスラント組にとっては、祖国奪還に繋がる作戦でもある。望むところだ

ろう。

「もちろん、俺もな。上がった腕前見せてやるよ」

自信満々に宣言する戦闘隊長代行の言葉に、504の戦闘隊長を拝命している扶桑海軍ウィッチは、ニツコリと柔和な笑みを浮かべた。

「ふふっ♪ありがとう、頼りにしてるわ。『優くん』」

◇ ◇ ◇

時を現在に戻して、さらに5分後のガンルーム――

「よし！みんな集まったな！」

召集命令に応じたストライクウィッチーズは、即ちにミーナ達3人の待つガンルームへ移動した。

優人が全員の集合を確認すると、続いてミーナが総司令部の命令を伝えた。

「みんな聞いて！先程総司令部から、この天城及び私達ウィッチーズへ作戦参加命令がありました！作戦内容は、ガリアとカールスラントの国境付近に出現した大型地上ネウロイの排除と、ヘルギガ方面へ進出した連合軍地上部隊への航空支援です」

「えっ？ネウロイはガリアからいなくなったのではありませんこと？」

ペリーヌがキョトンとした様子で問い掛ける。二日前の501基地ブリーフィングルームにて、確かにミーナの口からそう聞いていたはずだ。

「そうね。でも、国境を越えたカールスラントには、まだネウロイの巣が存在しているわ」

「巣こそ無いが、ヘルギガやネーデルラントにも、多数ネウロイが跋扈している」

「他の占領地域から新たなネウロイがガリアへ再侵攻してくる可能性もあるの。そうなれば、元の木阿弥よ」

「そこで一番近くにおいて体制の整っているウィッチ部隊。つまり、俺達と竹井大尉に指令が下ったということさ」

時折優人が合いの手を入れつつ、ミーナが説明を続ける。

話が進むに連れて、ウィッチ達の表情も真剣なものへと変わっていった。

「やれやれ、まったく司令部は勝手だね。いつものことだけど……」

「何を言うか!」

開口一番に不満を言ったハルトマンを、バルクホルンがすかさず叱咤する。

「カールスラント奪還作戦の先陣を切るようなものだ。私に異存はないぞ」

「私はそれでいいかもしれないけど。他の人はそうもいかないでしょ?」

バルクホルンをやんわり注意しつつ、ミーナはウィッチーズひとりひとりに視線を走

らる。

「解散の報せを伝えればかりで、本当に申し訳ないのだけれど……もう一度、みんなの力を貸してもらえないかしら？」

「今ネウロイを倒せるウィッチは、私達しかいないですよ。だったら、私やりませよ！」

「もう二度とガリアへ近づけさせるもんですかっ！この私の手で守ってみせますわ！」

「私も頑張ります！」

ミーナの問いに対し、まず芳佳が応じる。次にペリーヌ、リーネの順で作戦参加の意を表明した。優人やミーナが、パ・ド・カレーで降ろそうと考えていた除隊組の3人だ。

作戦から外そうとした一方で、心の何処かで彼女達が共に戦ってくれるのを期待していた優人は、我知らず口元に笑みを湛えた。

「……………私もやります」

と、サーニヤが小さく手を上げ、控え目な声音で作戦への参加を希望する。

「えっ？サーニヤさん？」

「ちよ、ちよつとサーニヤ！ナンで、ツンツンメガネなんかに」

それぞれ異なった反応を示すペリーヌとエイラに、サーニヤは自分の気持ちを伝えた。

「祖国を守りたい気持ちには私も同じ、私もウィッチーズだから……」
「……そうですわね。頼りにしてますわよ」

ペリーヌはサーニヤに歩み寄ると、甲板でリーネにしたようにオラーシャウィッチの手を取った。

ガリアウィッチの柔肌の感触と体温が伝わり、サーニヤは雪のように白い頬を赤く染める。

「もうっ！仕方ないナ！サーニヤがやるなら、ワタシもやるゾー」

幾ばくの嫉妬心をペリーヌに対して抱きながらも、エイラも作戦に志願する。

「ま、ここまで来ちゃったら、文字通り『乗りかかった船』ってやつだよな。あたしも付き合うよ」

「みんなでもつかいお仕事♪おっし♪ことおっし♪」

シャーリーとルツキーニもやる気満々だ。結局のところ、ウィッチーズ全員が参加することとなったらしい。

ミーナと優人は満足げに、またはホッと安堵したかのように微笑んでいた。

一方の竹井は、ストライクウィッチーズの結束力の高さ。そして、仲間を思いやる彼女達の姿に胸を打たれていた。

自分が戦闘隊長になる第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』も、こんな

部隊にしたい。『リバウの貴婦人』は心からそう思う。

「よし！我々501は、ガリア・カールスラントの国境線に出現した大型地上ネウロイをはじめとする敵戦力の殲滅と、連合軍地上が展開しているヘルギガ方面へ航空支援に向かう！」

戦闘隊長代行が高らかに宣言すると、ウィッチーズから「はいっ！」と声を揃えて応えた。

西部におけるストライクウィッチーズ最後の作戦が始まろうとしていた。

◇ ◇ ◇

同時刻——

赤城型航空母艦4番艦『愛鷹』——カールスラント名『ドクトル・エツケナー』の甲板では、帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第1飛行隊が発艦態勢に入っていた。

第1飛行隊は、グレーテル・ホフマン親衛隊大尉が飛行隊長を務める航空歩兵飛行隊である。飛行隊メンバーは、ホフマンを除いて5名。うち2名は予備要員であり、ホフマンが艦の防御を命じた上で待機させている。出撃するのは飛行隊長を含めて4名だ。

既に隊員達は携行火器のMP43を装備し、初弾も装填済み。ストライカーユニットも全機が魔導エンジンを始動させている。

彼女達の機体は、艦上ストライカーユニット『Bf109T-1型』。カールスラント国防軍にも配備されているユニットだが、こちらは親衛隊独自のカスタマイズが成されており、外見や名称が共通ながら性能は幾分異なっている。

これは『インペリアルウィッチーズ』に配備されている全てのユニットに言えることで、改造の度合いや性能の詳細を知ってる——知ることが許されているのは、親衛隊内でも限られている。

ホフマンは、漸くこの時が来たかと言わんばかりに薄ら笑いを浮かべていた。

「間違いありません！ “例の個体” は巢を離脱！ ガリア方面へ向かっています！」

耳に装着したインカムから状況を伝える部下の声が聞こえてくる。声の主は、親衛隊中尉のアンナ・ターレスである。

「ガリアへ？ “件の力” を駆使して失地回復を狙うか？」

「しかし、ホフマン大尉」

我が意を得たりというようにホフマンは嬉々としている。そんな上官に対して不安を覚えたターレスが、戒めるように言葉を続ける。

「ヤツを鹵獲するのであれば、アインツベルン大佐がお戻りになられるまで待った方が

「そうしている間に逃げられでもしたらどうする？」

鬱陶しそうに部下の言葉を遮り、ホフマンは声高に続けた。

「『例の個体』がどんな存在であろうと、『件の力』がなければただの中型ネウロイに過ぎない！その程度の敵に大佐の手を煩わせては親衛隊の名折れだ！」

かような発言にますます不安の色を濃くするターレスだが、それ以上は何も言わなかった。

ホフマン相手に食い下がったところで無意味。彼女を制することが出来るのはこの世でただひとり。悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐だけだ。

「グレーテル・ホフマン！行くぞー！」

声と共に魔導エンジンの回転数が上がる。ホフマンの『B f 1 0 9 T ー 1 型』は甲板を滑走し、空へと飛び発っていった。

第8話「マジノ線」

1944年9月、ガリア共和国沿岸地域——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦——赤城型航空母艦「天城」は、ペリーヌの故郷であるパ・ド・カレー沿岸まで到達していた。

本来ならば、このままカレーへ入港するはずだったが、連合軍総司令部より第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』へ作戦命令が下ったため、天城は予定を大幅に変更することとなった。

作戦参加を決意したのメンバーは、自分達のストライカーユニットが格納されている艦内格納庫を訪れていた。

少々埃っぽい格納庫内に降りてきたウィッチーズを出迎えたのは、出撃前の喧騒と微かに漂ってくる機械オイルの臭い。そして、16機の零式艦上戦闘機で構成される天城飛行隊長だった。

連合軍西部方面総司令部は、501部隊や竹井はもちろん、天城及び艦載飛行隊にも作戦参加を要請していた。

これについては、扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令長官にして、ガリア上陸作戦の海上戦力

総司令官として総司令部に席を置いている赤坂伊知郎大將も了承している。

「今作戦の目標は2つ。1つはガリア・カールスラント国境線を拠点としている大型地上ネウロイの撃破、もう1つはヘルギガ方面に展開している連合軍地上部隊への航空支援です」

ストライクウィッチーズに竹井醇子大尉。そして、飛行隊長以下天城飛行隊のパイロットらは、支援要員や整備要員が出撃準備で右往左往する格納庫の一面を借り受け、出撃前のブリーフィングを行っていた。

扶桑海軍と統合戦闘航空団による合同部隊の臨時指揮官となったミーナが、壁に張り付けられた欧州の地図を指し示し、作戦内容を確認をしている。

「マジノ線に張りついている訳か。やっかいだな……」

「ねえねえ、マジノ線ってなに？」

地図で大型地上のネウロイの位置を確認したバルクホルンの言葉にルツキーニが食いついた。

「あら、そんなことも知らないんですの？ まったく、これだからロマーニヤの田舎者は困りますわね」

素朴な疑問を口にするロマーニヤウィッチに、ペリーヌが少々嫌味つたらしく応じる。

ペリーヌは知らずに言ったようだが、ルツキーニは田舎者ではない。普段の野生児ぶりからはとても想像出来ないが、意外なことに彼女はロマーニヤの首都であるローマの生まれ、つまりは都会っ子である。

「マジノ線とは、我がガリアが誇る無敵の対ネウロイ一大要塞線ですわっ！カールスラント国境線に位置する、まさに無敵！アリの子一匹通さない鉄壁の要塞ですよ！」

マジノ線について自慢気に語るペリーヌだが、間もなく天狗の鼻は黒い悪魔によってへし折られることとなる。

「でも、空を飛ぶネウロイには無力だったじゃん？上を通られたら要塞の意味無いし……」

「そ、それでもっ！地上の侵攻はずいぶん防いだんですのよ！」

ハルトマンから手痛い指摘を受けてしまい、ペリーヌはムキになって反論する。しかし、やはり空戦と口論で黒い悪魔には勝てなかった。

「あんな大きいのが空から来るなんてズルいですわ！」

「大体、要塞で守るなんて……戦略が古いよお〜」

「な、何ですって!?!」

追い討ちをかけられ、ペリーヌはカッとなる。苦笑気味のミーナが「はいはいそこまで」と仲裁に入らなければ、作戦開始が大幅に伸びたことだろう。

「今回の作戦行動においては、三隊の編成とします」

指示棒で地図を軽く叩きながら、ミーナは編成について詳しく説明する。

ヘルギガ方面への航空支援にはミーナ達カールスラント組とペリース、リーネ、ルツキーニの6名。ミーナが直々に指揮を取る。

大型地上ネウロイがいるマジノ線は、宮藤兄妹、竹井、シャリー。501戦闘隊長代行である優人を指揮官とし、天城の飛行隊も同行する。

パ・ド・カレーから往復約1000kmという移動距離の長さを鑑み、航続能力に優れたストライカーユニットを使用する4名が選ばれた。

扶桑皇国海軍の零式艦上戦闘脚二二型甲、紫電二——“紫電改”。そして、リベリオン陸軍のノースリベリオン P-51D——“ムスタング”ならば、増槽無しでパ・ド・カレー→マジノ線間を行き来することが可能だ。

そして、残る北歐組——サーニヤとエイラは天城の直掩を命じられた。もしもの時のために、艦の護衛を担当する。

「国境沿いには多数の地上ネウロイが確認されているわ。各自、充分気を付けて攻撃を行おうよ！」

と、ミーナは念を押す。地上ネウロイの中には、ウィッチを含む航空戦力への対空攻撃に特化した個体も存在する。

それに人類側の対空火砲と異なり、殆んどのネウロイはビームを使用する。弾速、射程、貫通力等、ほぼすべて

の点においてこちら側を上回っている。

そうそう当たるものではないとはいえ、直撃すればウィッチといえどただでは済まない。

「それでは……ストライクウィッチーズ！出撃します！」

『了解！』

ブリーフィングが終わるなり、ウィザード及びウィッチーズは自らの愛機目指して駆け出す。

既に彼女達は、年頃の少年少女から空を駆ける航空歩兵のそれへと表情を一変させている。

出撃前にも関わらず、緊張感の無い者が見受けられた501部隊。その様を見た天城の飛行隊長は、作戦遂行に一抹の不安を抱いたものの、ストライカーユニットへ向かうウィッチーズがそれらしい目をしていたため、一転して頼もしいと感じるようになった。だが、しかし……。

「……………」

他の隊員達同様、リーネは自らのストライカーユニット——スピットファイア Mk.

IXが固定されている発進ユニットへ向かっていた。

その途中、嫌な視線を感じた彼女はハツと背後を振り返った。天城の若い乗員——おそらくは整備要員——が、リーネを注視していた。

彼女と目が合うなり、海軍兵は咄嗟に視線を逸らして何事もなかったかのように整備作業を再開した。

(な、何で……?)

天城に乗艦した時からだろうか。リーネはやたらと、視線を感じるようになった。そして、視線の主は決まって

天城の乗員——それも、リーネ達ウィッチーズと歳が近い若手ばかりだった。

最初は気のせいだと自分に言い聞かせていたリーネだが、こう何度も同じことが続いては不安を拭うのも容易ではない。

彼等は何故、ジロジロとこちらを凝視しているのか。自分が何か必要なことでもしてしまったのだろうか。或いは、トレヴァー・マロニー元大将のようにウィッチやウィザードを快く思っていない輩なのか。

「リーネ、どうしたんだ？」

「あ、シャーリーさん……」

顔色が優れないリーネを心配し、シャーリーが駆け寄ってきた。

シャーリーはリーネのことを妹のように思っており、芳佳がブリタニアへ来る以前、自信喪失気味だった彼女のことをずいぶん心配していた。

「早くしないと、置いてかれるぞ?」

「はい、すみません……」

「何かあつたのか?」

俯くブリタニアウィッチの顔を覗き込み、シャーリーは訊ねる。

リーネは僅かに逡巡する素振りを見せるも、天城に乗艦してからずっと感じている視線のことを打ち明けた。

「見られてる?」

「はい、天城の人達に。自意識過剰だつて、自分でも分かつてるんですけど……」

「あつはははは!そんなことないさ!」

「グラマラス・シャーリー」の所以たる豊満な胸を張りながら、シャーリーはこの場
にいない坂本に負けず劣らず豪快に笑った。

かと思えば急に神妙な顔つきとなり、リーネにそつと耳打ちする。

「実はあたしも……ね。艦に乗った時から、そんな感じがしてたんだ」

「え?シャーリーさんも、なんですか?」

「まったく、穴が空くほど見てくれちゃつて……あたしら、何かしたのかな?」

少々困惑した様子のシャーリーは、後頭部を搔いて苦笑を浮かべる。

国が違えば当然、文化も違う。リベリアンのシャーリーやブリタニア人のリーネにとつては何気無いようなことでも、扶桑人にとつては失礼に当たるともかもしれない。

自分達が気付かぬうちに非礼をしたのであれば、悪気の無い誤解だと伝える必要がある。場合によつては謝罪もしなくてはならないか……。

「シャーリー！どうしたんだ!？」

「リーネさん！行きますわよ！」

自分達を呼ぶ優人とペリーヌの声が、別方向より聞こえる。どうやら、少しのんびりし過ぎたようだ。

「まあ、とにかく……戻つてからもう一度考えてみようよ。今はネウロイだ」

「はい！シャーリーさん、どうか御無事で！」

「ああ、リーネもね！」

リーネは軽く会釈し、シャーリーは軽く右手を上げて応じる。

言葉を交わして別れた2人は、501部隊一の爆乳とそれに次ぐ巨乳をユサユサと揺らしながら、愛機が固定されている発進ユニットへ走つていく。

格納庫で作業に追われている天城の乗員等は、そんな2人のウィッチ——正確には、彼女達の胸元で揺れているたわわな果実を目で追つていた。

(あの娘達、やつぱり胸デケエ……)

(まるで砲弾じゃないか!)

(本当に扶桑の女と同じ生き物かよ!?)

(何食つたらあんなに育つんだ!?)

(デカパイ最高!)

(西洋巨乳美女、バンザイ!)

(来世は是非とも、リベリオンかブリタニアの海軍に入隊を!)

扶桑皇国海軍の将兵はどうしようもないアホばかり。リーネとシャーリーの心配と苦悩は、とんだ徒労であった。

程無くして飛行甲板へ上がったウィッチーズ及び戦闘機隊は、天城より順次発艦。航空戦力各隊は、サーニャとエイラの2名を艦の直掩に残し、それぞれの担当戦域へ向かった。



優人をはじめとする航空歩兵4名と、16機の零式艦上戦闘機で編成された天城の飛行隊が、ガリアの国境沿いを西から東へ飛行して行く。

ヘルギガ方面を担当するミーナ達とは既に別行動を取り、緑生い茂る森林地帯を眼下に最短距離でマジノ線を目指す。

連盟空軍と扶桑海軍航空隊からなる混成航空部隊の指揮官は、携行しているS—118対物ライフルを握り締めた。

そろそろ接敵する頃合いだ。優人は慣れた手つきで初弾を装填する。

その傍らには、九九式二号二型改13m機関銃を背負い、足に零式艦上戦闘脚を装備した芳佳が、寄り添うかのように飛んでいた。

「〜♪」

戦闘空域へ向かっているにも関わらず、芳佳はご機嫌そうに鼻唄を口ずさんでいた。

接敵直前とも言える状況下で意気揚々としている理由は、今彼女が履いているストライカーユニットにある。

よく見ると分かるが、零式に描かれてるパーソナルマークは軍帽を被った豆柴ではなく、ライフルマークを啜えた柴犬——つまり、機体の本来の持ち主は優人である。

元々は赤城の艦載ユニットだったものが優人の手に渡り、彼が紫電改へ機種転換を済ませた後は予備機として扱われ、現在はウォーロックとの戦いでストライカーを失った芳佳に貸し出されている。

世の弟妹等の大半は、年季の入った兄妹の御下がりにも不満こそあれど喜びはしないだ

ろう。しかし、芳佳は違っていた。嫌がるどころか、むしろ欣喜雀躍としている。

(えへへ♪お兄ちゃんのストライカーだあ♪)

同じ零式でも、大好きな兄のパーソナルマークが入ったユニットは何処か特別に感じ、元氣と勇気を貰っている気分になる。

作戦行動中に不謹慎だと思いつつも、芳佳は頬が緩むのを抑えることが出来なかった。

対して優人は、なにやら表情を硬くしている。ブリーフィングにて大型地上ネウロイ担当の隊に割り振られ、ミーナにこちらの指揮を任されてから、何処か様子がおかしかった。

自身の指揮能力に不安を抱いているのか。いや、優人は扶桑海軍事変時から航空ウイザードをやっている大ベテランだ。幾つも修羅場を潜り、扶桑ウイッチ部隊の指揮を執ったのも一度や二度ではない。今さら指揮官の立場にプレッシャーを感じているとは思えない。

「お兄ちゃん？」

「えっ？あ、ああ……何だ？」

「恐い顔して、どうしたの？」

「いや、どうもしてないけど……」

「指揮執るの久々だからなあ……緊張してんだろ？」

下方から声がして、兄妹の会話に割り込んできた。目をやると、いつの間にかシャーリーが2人の真下を飛んでいた。

M1918BAR自動小銃を携えた背を地表に向け、両腕を後頭部で組んでいるので寝そべっているようにも見える。

天城の乗員等の視線を釘付けにした爆乳は、飛行中も圧倒的な存在感を放っていた。

「かもな……」

短く返しながらも、優人の目線はリベリオンウィッチの胸元へチラチラと泳いでいる。

扶桑海軍ウィザードの健全且つふしだらな視線を受けたシャーリーはニツと口元に悪戯な笑みを湛え、ロールしながら彼の左隣に移動する。

「なんなら、あたしの胸を貸してやろうか？」

優人の耳元へ顔を寄せ、シャーリーは囁く。それと同時に前で組み直した両腕を使い、自慢の胸を持ち上げるように見せつける。

「顔を埋めれば、緊張なんて一瞬で吹っ飛ぶぞ？」

と、誘惑するように艶かしい視線を投げ掛け、シャーリーは優人の耳にフウツツと熱く甘い息を吹き掛けた。扶桑海軍大尉の身体がゾクゾクと震える。

「シャーリー、今は作戦行動中なんだ。からかわないでくれ」

そう言うと、優人はシャーリーから少しだけ離れた。相変わらずエロ攻撃を仕掛けてくるリベリアンを窘めながらも、彼は心の中では魅力的な申し出を受けてみたいと本気で思っていた。

そんな兄の心中を察したのか。或いは、仲間とはいえ優人に美女が近付く光景がおもしろくないのか。芳佳はムツとした表情で2人を見据えている。

(ホント、相変わらずだね……)

一歩離れた距離から優人等のやり取りを見ていたもう1人の扶桑海軍大尉が、口元に苦笑を湛えていた。

竹井が内心で呟いた「相変わらず」には二重の意味が込められている。優人が相変わらずウィッチに好意を持たれやすいことと、相変わらず「あるもの」が嫌いで仕方がないことだ。

扶桑海軍屈指のエースたる優人だが、「あるもの」への苦手意識から対地攻撃任務を敬遠していた。無論、命令されれば従い、空戦と違わぬ戦果も上げている。しかしながら、苦手なものはやはり苦手である。

「戦闘隊長、そろそろマジノ線よ！ウィッチに甘えるのも結構だけれど、今は目の前の任務に集中して！」

「なっ!? 甘える、って……俺は別に!」

からかわれた被害者にも関わらず、理不尽な言い掛かりを付けられしまった優人はすぐさま反論する。

竹井としては、あくまで場を和ます為の冗談を言ったつもりだが、大人びているようで意外と子どもっぽい性格の扶桑海軍ウィザードはムキになる。

「あつはははは! ちゃんと隊長出来たら、御褒美やるよ!」

と、ウインクするリベリオンウィッチの笑顔がこれまた眩しい。

「……………お兄ちゃん、良かったねっ! シャーリーさんに甘えさせてもらえて!」

刺々しい口調で嫌味を発し、芳佳はプイツとそっぽ向く。

最愛の妹にキツくされたシスコン兄貴は、何も言わない。ただ、この世の終わりの如く生気を失った顔をしていた。

それでも墜落したり、戦意を喪失したりしなかったの、戦場に赴くウィザードの使命感や戦闘隊長としての責任感のおかげだろう。

やがて、航空部隊は目的地を視認する。ペリーヌが自慢気に語っていたカールスラント国境線沿いに存在するガリアの要塞線——マジノ線だ。

およそ160億フランという巨費を投じて建造された——維持費は140億フラン——この要塞線には、ガリアが持つ全ての技術と工夫が注ぎ込まれている。

全長140km。総延長は340kmにもなり、15kmごとに108の主要要塞群を設置。この長大な要塞線は、建造提唱者——アンドレ・マジノの名をとってマジノ線と名付けられた。

地下要塞部分には居住区、発電機、弾薬庫、医療室、兵器類の点検修理をするためのメンテナンスルーム、作戦司令室、食堂などを内包する。

また、迅速な物資補給を行うべく移動用の電気トロツコを用意された。それぞれの要塞は地下鉄で連結され、地上に出ずとも行き来が可能となっている。

地上にはマッシュルームと呼ばれる空気の取り込み口が点在し、要塞で勤務するガリア兵が快適に過ごせるよう映画館が用意された。

要所にはトーチカ・監視塔・旋回砲塔が置かれ、砲座を囲むトーチカは3.5m厚のコンクリートであり、堅牢な要塞線には常時大軍が駐留可能と至れり尽くせり。

多数配備された135mm榴弾砲、75mmカノン砲M1933、37mm対ネウロイ砲M1934等が、愚かにもガリアへ侵入しようとする異形の群れを撃滅する……はずだった。

実際のところマジノ線にネウロイに襲来しなかった。侵攻してきたネウロイの大群は、カールスラント中央を一挙に横断。ヘルギガを経由してガリア国内——パリへと雪崩れ込んできた。

マジノ線と、そこに常駐するガリア陸軍は期待された防衛能力を発揮できず、また自ら打って出る事も無かったため、丸ごと遊兵と化してしまった。

さらに悪いことに、アルデンヌの森上空より飛行型ネウロイが飛来。ライン川沿いに建造された要塞群の一部が爆撃に遭ってしまい、トーチカや陣地が破壊されていった。

有効な対空手段を持たないマジノ線にとって、飛行型ネウロイは天敵だったのだ。

現在はネウロイが自分達の塹として使っているのか。トーチカの幾つかが、砲台型のネウロイと掘り替わっていた。

「地上型ネウロイは……あそこかっ！」

報告にあつた自走砲タイプのネウロイを、1時の方向に認める。S—18対物ライフルを射撃位置に保持し、2・5倍率のスコープ越しにネウロイを見据えた。

地上ネウロイは、主に「クモ」と呼称される多脚タイプ——多くは4本脚——を基本とし、今まで多くの派生型が確認されている。

43年にカールスラント及びリベリオン陸軍麾下の機甲部隊が交戦した戦車型は、上面に複数のビーム砲を装備し、胴体下部に大威力の巨大砲を携えたオーソドックスな四脚の中型ネウロイ。自走砲型も多くが四本脚で移動する。

しかし、今回の個体は特徴的な多脚は見られず、比較的人類側の自走砲に形状が近かった。

「よしー」

敵の姿を確認した優人は、微かにだが口元を緩める。対して、他のウィッチ達はいよいよ戦闘だと表情を引き締め、銃に初弾を装填した。

「警戒！9時方向！」

即ちに命令を出そうとする優人を先回りし、竹井が声を張り上げた。

航空歩兵と戦闘機パイロット等が、一齐に9時方向——左側面へ目をやる。中隊規模の小型飛行ネウロイが、編隊を組んで接近していた。

おそらくは、連合軍地上部隊に空襲を仕掛けた集団だろう。小規模の子機編隊でも、飛行できることに変わりはない。地上戦力にとつては十分脅威となる。

「12時！何か光った！」

と、今度はシャーリーが叫ぶ。彼女が前方に認めた発光の正体は、大型地上ネウロイが放ったビーム攻撃だった。向こうも敵の存在を察知し、牽制の砲撃を仕掛けてきたのだ。

膨大な熱量と圧倒的な破壊力を有する眩い閃光。巨大砲より解放されたそれは、亜光速で優人達の眼前へと迫る。かと思えば複数の光条に分裂し、4名の航空歩兵だけでなく天城の飛行隊にも襲い掛かった。

しかし、優人が咄嗟に巨大シールドを展開し、広範囲を防御したおかげで損害は0

だった。

ネウロイの方も仕留めるつもりはなかったらしい。砲撃で優人達の足が止まっている隙に、マジノ線内部へ後退していった。

「あ、逃げた！」

芳佳が素つ頓狂な声を上げる。大型地上ネウロイは、その図体からは考えられないようなスピードで、まるで地を滑るように移動していた。

『宮藤大尉！』

突如、優人のインカムに男性の声が飛び込んできた。天城飛行隊隊長だ。

『小型共の相手は我々が！大尉とウィッチの皆さんを自走砲型を！』

彼等が操縦する零式艦上戦闘機は、零式艦上戦闘機の技術をフィードバックして造られた扶桑皇国海軍の主力艦上戦闘機。航続距離がやや不足で、武装も貧弱だった先代――九九式艦上戦闘機に変わる新型戦闘機だ。

航続力と運動性に優れ、20m機銃の威力によって小型ネウロイ程度ならば十分駆逐可能となっている。

これからの扶桑海軍は、ストライカーユニットを装備した航空歩兵が中型以上のコア持手の相手に専念出来るように、零式艦上戦闘機が露払い役として小型の子機を引き受けることになるかもしれない。

無論、ウィッチ・ウィザードの数が不足している以上、戦闘機隊が否応なしに中型や大型の相手をする可能性もあるが……。

「了解しました！小型はお任せします！御武運を！」

『お互いに！』

短く済ませた会話の後、天城の飛行隊は進路を変更。敵飛行中隊へ攻撃を仕掛けた。機体の性能も然ることながら、ウィッチーズと肩を並べて戦えるということだけでパイロット達の士気も高いようだ。小型ネウロイの消滅編隊程度なら問題にならないだろう。

『優人さん、優人さん。聞こえますか？』

天城の飛行隊を見送った一向のインカムへ別の通信が入る。この涼やかで澄み切った声音はサーニヤのものだ。

「ああ、聞こえるよ。どうした？」

『カールスラント方面より飛来したネウロイが、そちらに急速接近しています』
『みんな、気をつけろ。アイツは——』

サーニヤに続いて、やや低めなエイラの声が割り込んでくる。直後、通信が途切れた。「あ……ダメだ。切れちゃったよ」

と、シャーリーは困ったように肩を竦める。次に竹井が優人に指示を仰いだ。

「どうするの?」

「……まずは目標を、大型地上ネウロイの撃破を優先する!各自、通信の内容を頭に入れておけ!」

優人はそこまで言っで一拍置き、続けざまに指示を飛ばした。

「これより我々は敵追撃のため、マジノ線内部へ侵入する!全機続け!」

「了解!」

返事を受けると、優人は紫電改を加速させる。他の3人も彼の後に続いた。

(さすが紫電改!零式とは出力が段違いだ!)

実戦において新たな愛機の性能の高さを再認識し、優人は心中で快哉を叫んでいた。

優人と竹井が使用する紫電改は、魔導エンジンに長島飛行脚製『誉』を採用している。

2000Mp級の最新型エンジンで、公称呪力は零式の約2倍を誇る。

只でさえ強大な優人の魔法力は誉によって増幅され、先程のように巨大なシールドを展開しても以前ほど消耗しなかった。

父が開発した機体だと強い思い入れがあるながらも、諸外国のユニットに比べて性能不足が顕著だった零式に少なからず不満抱いていた。

零式系統やその後継機に関しては、優人よりも単騎戦闘での技量を至上とする坂本の方が強い拘りを見せている。

そんな扶桑海軍ウイザードにとって、紫電改との出会いは非常に喜ばしいことだった。この機体ならば、リベリオンのP-51やカールスラントのBf109シリーズにも負ける気がしない。

別に戦闘狂というわけではないが、早く紫電改の性能をフルに引き出したいと、気持ちがあつて逸つてた。

「……………いないわね」

「なんて、逃げ足の速いやつなんだ」

竹井とシャーリーが順に呟く。マジノ線に侵入したものの、既に大型地上ネウロイの姿はない。

奥へ逃げたに違いないが、図体に似合わず随分と移動速度が速い。

「追うぞー!」

優人の号令の下、一向は追撃を続行する。程無くして、ウイツチ・ウイザード4名で編成された飛行隊は巨大な要塞線奥へと消えていった。

第9話「ウォーロック擬きとインペリアルウィッチーズ」

1944年9月、ガリア・カールスラント国境線――

ガリアの一大要塞線――マジノ線の地下通路は、予想していたより大分広かった。

横幅や床から天井までの距離が長く、航空機は無理でもストライカーユニットを履いたウィッチ・ウィザードが飛行するには十分なスペースが確保されている。

それでも上下左右コンクリートの分厚い壁に囲まれた建造物内にいる事実は変わらない。壁や仲間との接触ないし衝突を避けるため、4名のウィッチ・ウィザードは可能な限り低速で飛行していた。

電気系統が生きているのか。殆どどの照明が点灯している。要塞地下は明るく照らされ、視界も良好である。

また、床には電気トロッコ用らしき2本の線路が設置されているが、特に傷んではなさそうだ。各種設備が正常に機能し、必要な人員さえ集まれば、すぐに再運用出来るかもしれない。

しかし、今のガリア軍にはマジノ線の維持及び運用のために回す人員も資金も無い。そんな金があるなら、国の復興はもちろん、戦車、航空機、ストライカーユニット等の

製造に注ぎ込むべきだ。

空からの攻撃に無力であるマジノ線が、奪還されたガリアの防衛においてコストパフォーマンス以上の能力を発揮出来るとも思えない。

維持費が建造費に匹敵する——建造費160億フラン、維持費140億フラン——マジノ線は、今ではガリアの金食い虫。見るものを圧倒する巨大要塞の威容も、無用の長物と化してしまった。

「待ち伏せ!？」

竹井が微かに苛立ちを滲ませた声音でぼやく。地下通路を進むと、案の定進行方向から火線が飛んできた。

それと前後して、長い通路の奥に巨大な影が現れた。優人達4人が攻撃目標——人類側の自走砲とよく似た形状の大型地上ネウロイドだ。

連合軍主力部隊に大打撃を与えた巨大な主砲と、主砲と比べると威力は劣る——といつても、命中すれば航空機くらいは一撃で落とせる——が連射可能で小回りの利く副砲。

ネウロイドは全ての砲門を正面へ向け、赤く輝く光弾を散撒いてくる。4人の航空歩兵はシールドを張り、絶え間無く降り注ぐビームの雨から身を守っていた。

「前に進めねえ!」

「近づけないよおー」

シールドで砲撃を防ぎながら、シャーリーと芳佳がらしくない弱音を零す。

狭い地下通路内では、ストライカーユニットの飛行能力や運動性能を活かしきれない。遮蔽の無い見通しの良い空間で一方的な砲撃を行う自走砲型ネウロイに絶対的なアドバンテージがあつた。

敵は威力を絞り、連射性を向上させたいらしい主砲と副砲を斉射することで弾幕を形成。自らの天敵である航空ウィッチを寄せ付けない。

だが、分厚い弾幕にも突破口が存在した。そして、射撃の名手でもあるベテランウィザード——宮藤優人は、それ見逃さなかつた。

彼は斉射後に一瞬だけ訪れる隙を狙つた。弾雨の止む僅かな時間にS—18対物ライフルを構え、狙撃する。

S—18対物ライフルは、カールスラントに依頼され、ヘルウエティアで開発された航空機関砲用の20mm砲弾が発射可能な大型対物ライフルである。

威力は折り紙つきで、魔法力が使えない一般兵士でも近距離ならば歩兵タイプの小型地上ネウロイを撃破出来るほど。

優人が愛用しているのは航空歩兵用に全自動化等の改良が施されたモデルで、使用弾薬はもちろん魔法弾化された20mm砲弾である。

大型地上ネウロイが相手でも不足はない。優人は魔法力を帯びた20mm砲弾を叩き込み、全ての砲塔を破壊する。

視界が開け、風力を気にする必要がない地下通路内での射撃は優人にとって容易だった。自走砲型ネウロイは、砲撃不可能に陥るほどのダメージを主砲に負ったのを最後に全ての火砲を失う。

「さすが！」

シャーリーは扶桑海軍大尉の見事な手並みに快哉を上げる。

航空歩兵のキャリアで言えば、優人と坂本がカールスラント組を含む501メンバーを凌いで最長である。長い実戦経験の中で培われた彼の射撃技術は他者の追隨を許さない。

「ほえく、お兄ちゃんってやっぱりスゴいんだね」

と、芳佳も改めて兄を尊敬した様子だ。隣の竹井も満足げな笑みを口元に湛えている。

「ふふっ♪ブリタニアで女の子と遊んでばかりいたわけじゃないみたいね♪」

「無駄口叩いてないで、さっさと止めを刺すぞ」

隊員達に、というよりは自分を茶化してきた竹井に向かってそう告げると、優人は無力化したネウロイへ接近する。

しかし、次の瞬間。地下通路奥より一筋の光芒が伸び、4人の航空歩兵の頭上を駆け抜けた。

「——っ?! 新手か!?!」

優人は赤い光芒——ビームの飛んできた方向へ反射的に銃を構える。他のメンバーも戦闘隊長に倣い、銃器を射撃位置に保持した。

程無くして、ビームを撃つてきた敵が姿を現す。『ソレ』は中型の飛行ネウロイだった。

「な、何だあ!?!」

突如地下通路奥より飛来した『ソレ』を見て、まずシャーリーが素つ頓狂な声を上げる。

「えっ?.....これは.....!?!」

シャーリーに続いて、芳佳も驚愕に目を見開いた。4人の眼前に現れた『ソレ』は、芳佳に:.....いや、501部隊の全員にとつて忘れたくても忘れることが出来ない。ある忌まわしい存在と形状が酷似していた。

「ウォーロック.....だと.....!?!」

漫然と呟きながらも、優人は心の中で「いや!」と否定する。ウォーロックは自分達が倒したはずだ、と。

優人達の目の前にいる「ソレ」は、確かにトレヴァー・マロニー元ブリタニア空軍大將と彼の一派が、ウィッチに代わる新戦力として開発した対ネウロイ用遠隔操作式半自律型攻撃兵器——ウォーロックと極めて類似した外貌をしていた。

実戦に投入されたウォーロックがどのような顛末を向かえたのかは、今さら説明するまでもないだろう。

「ウォーロック?」

ただ1人。501メンバーでなく、ウォーロックの一件を知らない竹井は怪訝そうに眉を顰める。

しかし、彼女が聞き慣れない単語について訊ねる暇も、優人がウォーロックについて詳しい説明をする暇も無かった。

ウォーロックと似た存在——十中八九飛行型ネウロイだろうが——は、突如姿を変えた。ウォーロックがそうであつたようにこのネウロイも可変機能を備えていたのだ。

「——つ!くるぞー!」

戦闘隊長がさかさず注意を促す。それとほぼ同じタイミングで人型のシルエットに変形しつつ急制動を掛けたネウロイは、4人の航空歩兵へ複数の光条を放つた。人間と言う両腕の部位から迸り出た赤き閃光が自分達へ迫り、優人達は反射的にシールドを展開して防御する。

シールド越しに伝わる衝撃と、余所へ逸れた幾つかビームが堅牢な要塞の壁を容易く引き裂く様を見た航空歩兵等は、その凄まじい破壊力に息を呑んだ。

「な、何て威りよ——」

攻撃によつて粉塵が巻き上がる中、優人は再び正面へ目を向ける。そして、自らの瞳に映つた異形に絶句する。

新手を勘定に入れて、2体いたはずのネウロイが1体に減つていたのだ。片方のネウロイが姿を消したたわけではない。地上型と飛行型——2体のネウロイが合体し、1つの個体になつていたので。

上下が逆さになつた自走砲型ネウロイ。その胴体の四隅に昆虫の脚のような長大な歩行脚が4本生え、その上に人型形態のウォーロック擬きが接続されている。

敵の姿を双眸で捉えた優人は思わず口元を抑えた。節足動物の上部に人間の上半身に似たものが乗っている威容は、彼に生理的な嫌悪感を抱かせるものだった。

殆んど間を空けず、自走砲型と合体したウォーロック擬きは第二射を放つた……のだが、それは優人へは向けられずに地下通路の天井へ直撃した。

複数の光条を一つに収束させたその破壊力・貫通力は数倍に跳ね上がり、堅牢さが売りの要塞に風穴を空けた。

さらにネウロイは恐るべき脚力で跳躍し、自らが空けた天井の穴から外へ飛び出して

行つた。それはまるで、バツタのような動きであつた。

「逃げた……の？」

ネウロイが通つた天井の穴に目を据え、芳佳は呆然と眩く。強烈なビームを見舞つた敵は、自分達と戦うわけでもなく早々に要塞外へ逃亡していった。

「アイツ、何だつたんだ？」

と、シャーリーも首を傾げる。ウォーロック似のネウロイは圧倒的な強さを見せつけながら、あまりにあつさり引き上げていった。

狭い地下通路内では不利と考えたのか。或いは他の理由か。その意図は全くわからない。

「優人、追うの？」

竹井に指示を仰がれるも、優人は即答出来ない。悩んでいるのだ。

自分達に課せられた任務は自走砲型地上ネウロイの撃破。ならば、すぐにでも追撃をかけるべきだろう。未だネウロイの支配下にあるカールスラント領内に逃げ込まれてしまえば、もう追いかけることは出来ない。

おそらく、これが解散前の第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』最後の任務になる。

最後の最後でネウロイを仕留め損ねるなどという失態を犯しては、いい笑い者だ。共

に戦ってきたウィッチーズの仲間達や501部隊の名誉を著しく傷を付けることになる。

だが、突然現れたウォーロック擬きの存在が問題だった。遭遇した以上、放置する訳にもいかない。しかし、ヤツと自走砲型が合体したことで、敵の戦闘能力は数段跳ね上がっている。

妹や戦友達の実力を疑うわけではないが、戦うとなればもうひと戦力欲しい。ミーナの隊との合流して対処するのが最善だろうが、ストライカーユニットの航続距離の問題がある。

それに、ヤツの——ウォーロック擬きの力は未知数。もしマロニー等が開発・運用したウォーロックと同等以上の戦闘能力を有しているなら……。

(なんて優柔不断なやつだよ。俺は……)

優人は心の中で自嘲する。坂本がいらない今、戦闘隊長代行の立場にあるというのに、大事な局面で次の行動を決めかねている。

いや、何が最善なのかは既に理解している。しかし、決断が出来ない。

扶桑海軍大尉は、ウィッチ・ウイザードとしての責務と、指揮官に課せられる部下を——仲間を戦場から無事に連れて帰るという義務の間で板挟みになっている。

或いは、ウォーロックに酷似した新手のネウロイを目にしたことで動揺しているの

か。

同じ状況でも、坂本なら即断出来たはず。そう考えると、扶桑海軍ウィザードは自分が情けなく思えてならなかった。

「お兄ちゃん」

ふと優しい声が目元を刺した。優人は声の主である妹に視線を向ける。

「追いかけてよう！」

芳佳は言葉を続けた。語気を強めた声音で兄に進言する。

兄妹だからだろうか。決断出来ずに煩悶としている優人の心境が、彼女は何となくわかっていた。誰かが兄の背中を押して、彼の決断を促さなければならぬことも……。

大好きな兄は、幼い頃から何度も自分のことを助けてくれた。それは遙か異国の地——ブリタニアでも変わらなかつた。

今度は自分が助ける番だ。どんな小さなことでも構わない。芳佳は兄の助けになりたかつた。

「……そうだな！」

優人は力強く頷くと、戦闘隊長として妹と2人の戦友に指示を飛ばした。

「ヤツを追うぞ！みんな続け！」



マジノ線地上——

優人、芳佳、シャーリー、竹井。ネウロイが地下通路天井に空けた大穴を通つて地上へ出た4名の航空歩兵は、そのまま空まで飛翔する。

やや窮屈だった要塞内とは一変、優人達の視界は急激に広がっていく。一定の高度まで上昇すると、4人はすぐさま地上へ視線を走らせた。

2体のネウロイは、自走砲型の方をベースとして1つに合体していた。バッタの如き跳躍を見せたとして、基本的には4本の歩行脚を使用して地上を移動するはずだ。空から地上へ目を光らせていれば必ず見つかるだろう。

無論、敵もこちらを認めるだろう。しかし、地上ネウロイは一部派生型を除き、対空能力が低い。

「いたぞー！」

と、シャーリーが叫ぶ。彼女の視界の中に動く物体があった。ウォーロック擬きと自走砲型が合体した、件のネウロイだ。

地下通路の天井を貫いた先程のビームの破壊力は凄まじいものだった。あれでは戦車どころか、空母や戦艦すらも木っ端微塵だ。

複数の光条を収束させていたが、もしかすると2体のネウロイが合体したことで、ビーム1発1発の威力も向上しているかもしれない。

だが、どれだけ高い攻撃力を備えていても、陸戦ネウロイにとつて頭上は絶対の死角であり、装甲も薄い。

ウオーロック擬きとの合体で上部装甲は弱点足り得なくなっているが、それでも“弁慶の泣き所”には違いない。

「撃てー」

優人からの号令を合図に、彼と3人のウィッチはすぐさま銃を構え、トリガーを引いた。対物ライフルと3基の機関銃より迸り出る銃弾が、計4軸の火線を空に描く。

ウオーロック擬きと合体した自走砲型ネウロイの動きは、鈍重そうな見た目に似合わず敏捷で中々命中弾が出ない。

「あの図体で……なんてすばしっこさだよー」

撃ち尽くしたM1918ブラウニー・オートマチック・ライフル——“BAR”の弾倉を交換しながら、シャーリーがぼやく。

BARは、撃ちたい時に必ず撃てる信頼の高さと堅牢さが売りな反面、通常弾倉で20発。ウィッチ用に開発された改良弾倉でも40発しか弾数がないため、長期戦には向かない。

加えて、銃身が加熱しても固定銃身故に交換が不可能で、発射速度を切り替えて低下させたり、セミオートで射撃したりする必要がある。

当然、シャーリーは愛用する銃器の特性を熟知している。それ故、敵に十分な数の弾を叩き込めない状況に焦りを抱き始めていた。

さらにネウロイは、ただ素早いというだけではなかった。分厚いコンクリートを撃ち抜いた火力は言うまでもなく、装甲も異常なほど頑丈だった。

「か、硬い……！」

自らの攻撃を全く通さないネウロイの強固な装甲を前にして、芳佳は苦悶の表情を浮かべる。

芳佳と竹井が携行火器——九九式二号二型改13mm機関銃は、欧州各国の航空歩兵用主力銃と比較して口径の大きい12.7mm×99弾を使用している。

単発の威力なら、カールスラントが誇るMG42にも負けていない。だが、目の前のネウロイには火力不足らしい。

何発か命中したようだが、装甲は銃弾を悉く弾いてしまい、目立った損傷は見られない。

「ヤツの足を止める！」

仲間に己の意図を伝えつつ、優人はネウロイは歩行脚へ狙点を定める。

お得意の見越し射撃で脚を破壊し、動きが止まったところを全員で包囲。集中砲火を浴びせて一気に方を付ける。それが彼の算段だった。

しかし、ネウロイのハイスベックぶりから察するに、再生能力も規格外である可能は十分考えられる。

もしもの場合、優人は覚醒魔法『絶対凍結』を使うつもりでいた。魔法力は確実に使い果たしてしまうだろうが、妹や2人の戦友が自分とユニットを運んでくれるだろうか。心配はない。

「捕まえたー！」

「よしーもう逃がさないぞー！」

竹井とシャーリーが順に叫ぶ。ネウロイは優人達に包囲される形となり、魔法力を纏った銃弾が周囲に炸裂する。

やがて1発の魔法弾が、4本ある歩行脚のうちの1つ——右前脚に命中。長大な脚が1つ破損する。

直撃したのは優人のS—18対物ライフルの魔法弾だ。彼はすかさず左前脚にも弾を撃ち込んだ。

両の前脚を失ったネウロイは前のめりに転倒、上部に居座るウォーロック擬きは鼻つ面を地面に激突させた。

強固な装甲で身を守っていても、脚部は他の部位より脆いようだ。

「やったー！」

漸くネウロイを追い詰めた。その事実には芳佳は歓喜する。

しかし、喜んでばかりもいられない。ネウロイをここまで追い詰めるのに、4人は大量の弾薬を消費していた。

非常に何敵である目の前のネウロイを仕留めるに、は残弾が心許ない。特に優人は、弾薬の欠乏が他より際立っている。

どういう理由か。マジノ線の地下通路内で自走砲型を追い込んだ時に比べると、彼の射撃精度は著しく落ちていたのだ。

見越し射撃を得意とし、大口径のライフルで多くのネウロイを撃墜してきた優人らしからぬ無駄弾が多さには、他の3人も気付いていた。

芳佳は単純にネウロイの動きが素早いため、狙いを外していたのだと考えていたが、シャーリーと竹井はそれだけとは思っていなかった。

シャーリーは戦闘中、優人の様子を横目でチラチラ窺っていた。彼女の目には、ネウロイの歩行脚を狙って射撃を行う優人が、何処かムキになつてS—18を乱射しているように映っていた。

精彩さ欠いた……というよりは、動揺しているようにも見えた優人の姿を脳裏に浮か

べ、シャーリーは小首を傾げる。

一方の竹井も、シャーリーと同様に優人へ目を向けていた。しかし、彼女は心当たりがあるらしく、様子のおかしい扶桑海軍ウィザードの様を見て肩を竦めていた。

「残弾が少ないな。みんな離れてろ！絶対凍結を使うー！」

仲間を巻き込む危険性はもちろん、自身への負担も半端ではない『絶対凍結』を使用する際は、本来ならミーナに連絡して許可を求めなくてはならない。

だが、今はその時間も惜しい。ネウロイは魔法力——魔力を付加した弾丸、刀剣、銃器等はネウロイの再生能力を大きく減ずる効果がある——の影響を受けていないのか、自らの再生能力により歩行脚を復元し始めていた。

間も無く再生を完了し、再び動き出すことだろう。その前に仕留めなければならぬ。

一気にケリをつけるため、覚醒魔法の使用を決意した優人は、芳佳達3人に退避行動を指示する。

しかし、敵の再生速度は優人の予想を遙かに上回っていた。彼が『絶対凍結』を仕掛けるべく接近すると、ネウロイは地下通路から飛び出した時のように跳躍する。

「わっ！またジャンプした！」

「アイツはバツタかよ！」

芳佳とシャーリーが驚きの声を上げる。重量感ある巨体が空高く跳躍する光景は何度見ても度肝を抜かれる。

「逃がすか!」

優人が飛び跳ねたネウロイの底部に銃口を向け、トリガーを引こうとした。その時だった。

突如、ウォーロック擬きと合体したネウロイ目掛けて、多数の銃弾が横殴りに殺到する。不意を衝かれたネウロイは、頭から地表へ落下。周囲に轟音を響かせ、地面に巨大なクレーターを作った。

さらに穴ボコの底でひっくり返っているネウロイの下部へ向け、畳み掛けるかのように銃弾の雨が降り注ぐ。

頑強なのはウォーロック擬きと自走砲型の上面部分だけだったらしい。集中砲火を受けたネウロイの底部装甲は容易くに穿たれ、そこに備え付けられた主砲を引き裂いていく。

「な、何!」

突然のことに理解が追いつかず、芳佳はオロオロと狼狽える。

「天城の飛行隊か!」

優人は一瞬、付近で小型飛行ネウロイと交戦中の天城飛行隊が援護に来たのかと思っ

たが、その考えをすぐさま否定した。

魔法力を帯いていない零式艦上戦闘機の機銃弾では、せいぜい小型ネウロイの撃破が精一杯。装甲の薄い箇所を狙って数を叩き込んだところで、これほどの効果は期待出来ない。

それに銃弾の雨をよく観察すると、光の尾を低いて飛ぶ魔法弾が確認出来る。つまり、ネウロイに集中砲火を見舞っているのはウィッチないしウィザード。それも部隊規模の……。

「おいーみんな上見ろー！」

シャーリーの叫び声に促され、他の3人は一斉に視線を走らせる。

見知らぬ航空ウィッチ4名の姿が確認できた。おそらくは飛行隊規模のウィッチ部隊。彼女達は優人達より高い位置からネウロイを攻撃していた。

「あいつらは!？」

ウィッチ等を目に据え、優人は息を呑む。カールスラント製艦上ストライカーユニット——Bf109T-1型に、同国軍の携行火器——MP43。

装備だけ見ればカールスラント空軍麾下の航空ウィッチ部隊だと思っだろう。しかし、優人が注目したのは着用している制服と、彼女等の部隊が多人種で構成されていることだった。

「——っ!? ネウロイがっ!」

と、今度は竹井が声を張り上げる。予想外の奇襲でダメージを受けたネウロイ——正確には、ウォーロック擬きが自走砲型地上ネウロイから分離していた。分離直後、自走砲型ネウロイはコアに致命傷を負い、四散した。

新手のウィッチ部隊は、攻撃対象をウォーロック擬きに絞って火線を集中させる。しかし、同胞と分離したウォーロック擬きの動きは、重りを外したかのように軽快だった。攻撃を回避しつつ、飛行形態へ変形したウォーロック擬きは、そのまま高速で離脱していった。

「あつーお兄ちゃん、ウォーロックが逃げいくよー!」

遠ざかっていくウォーロック擬きの機影に目を据えつつ、芳佳は叫んだ。

「どうする? 追うか?」

指示を仰ぐシャーリーに対し、優人は「いや、やめておこう」と頭を振る。

「アレが何なのか、全く分からない状態で追うの危険性だ。ミーナに報告もしなけりやならない……!」

ウォーロック擬きという脅威が去ったためか。地下通路内とは違って、今度は深く悩むことなく優人は即断した。彼の賢明な判断を竹井も支持する。

「そうね。作戦目標の撃破には成功した訳だし……!」

今からウォーロック擬きを追撃しようにも、手持ちの弾薬はほぼ使い果たしてしま
い、魔法力と燃料も天城へ戻るギリギリの量しか残っていない。

ならばミーナへ報告を上げ、501全員で今後の対策を練るべきだろう。

「あれ？あの人達は……？」

芳佳はキョロキョロと周囲を見回す。ウォーロック擬きとの戦闘に介入してきた
ウィッチ部隊が、いつの間にか姿を消していた。

「ありや？なんだ、挨拶も無しかよ」

何も言わずに引き上げてしまったらしい件のウィッチ部隊。シャーリーは感じ悪い
なあ、と言わんとばかりにムツとする。

「助けてもらったお礼が言いたかったのに……」

「あれって、助けてくれたのか？」

謝意を伝えられず、芳佳は残念そうにする。その傍らで怪訝そうな顔をするシャ
ーリー。

彼女には、あのウィッチ部隊を助けるつもりはなかったように思えた。そればかり
か、眼下にいたシャーリー達のことなど視界に入っていないようだった。

そもそも助けたのなら、指揮官あたりがインカム越しに声を掛けてきても良さそう
なものだ。

「優人。気付いた？あの制服……」

「ああ」

「2人は連中のこと知ってるのか？」

小声で訊ねてきた竹井に対し、優人は頷いて応じる。そこへ2人の会話を耳聴く聞きつけたシャーリーが、話に割り込む。

「お前だつて聞いたことぐらいはあるだろ？カールスラントの皇室親衛隊隷下の航空ウィッチ部隊……」

「ああ、噂くらいならね。確か『インペリアルウィッチーズ』つて……まさか！さっきの連中が!」

予想外過ぎるウィッチ部隊の正体。シャーリーは驚愕を禁じ得なかった。

カールスラント国防軍とは指揮系統を別とする同国の武装組織——帝政カールスラント皇室親衛隊。カールスラント皇帝——フリードリヒ4世の近衛兵……というよりはカールスラント宰相——ハインリヒ・ルイトポルト・アインツベルンの私兵集団である。

そして、その親衛隊唯一の航空戦力にして航空ウィッチ部隊が、第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』なのだ。

インペリアルウィッチーズは、統合戦闘航空団と同様に航空団司令がウィッチ部隊

長を兼任し、航空団司令直属部隊たるウィッチ部隊とそれを支援する諸部隊で編成される。

手広く人材をスカウトしているため、欧州をはじめとする世界中から集められたウィッチ達が所属している点も共通している。

航空ウィッチとしての経験が浅いシャーリーでも、噂は耳にしている。尤も彼女が話に聞いたのは、インペリアルウィッチーズが、記録に残せない極秘任務やカールスラント宰相の政敵や不祥事を起こした国防軍将兵の肅清といった表沙汰に出来ない裏の仕事をしている等。黒い噂ばかりだった。

「何故、インペリアルウィッチーズがここに現れたのかしら？」

竹井が疑問を呈する。無論、そんなことは優人にもシャーリーにもわからない。2人は揃って頭を振る。

芳佳もまた、疑問符を己頭上で躍らせていた。皇室親衛隊やら、インペリアルウィッチーズやら、カールスラント宰相やら。自分の知らない情報が多いために話について行けずにいるのだ。

「とにかく、連中のことも含めてミーナに報告しないとな」

「こりゃ、少し面倒なことになりそうだな……」

シャーリーはやれやれ、と肩を竦める。得体の知れないウォーロック擬きに、黒い噂

の絶えないカールスラントの軍事組織まで現れた。

リベリオンウィッチの言う通り、501部隊最後の仕事は思っていたよりもずっと苦勞しそうだ。

優人は戦闘の疲れと一抹の不安によって重たくなった腕を持ち上げてインカムを操作し、まずはミーナに簡単な報告を入れた。

◇ ◇ ◇

同刻——

決して広いとは言えない、暗く冷たい空間に「彼女」は閉じ込められている。全身に無数打ち付けられた銀色の杭の痛みに悶え、自らを縛り付ける銀色の鎖をカチカチと鳴らす。

まるで祠に封印された神のようだ。神話の一場面を想起させるが、「彼女」は付けられた名とは裏腹に神からは程遠い存在だった。

しかし、封印されているのは事実だった。拘束具によって自由を奪われ、あちこち調べ尽くされる恥辱に塗れ、やり場の無い怒りに震える日々がもうずっと続いていた。本来の力さえ發揮出来れば、鎖を引き契ってすぐにでも暴れ始めるだろう。

数年前、「彼女」はこの世に生まれた。ある者達のエゴによつて造り出された。最初に目にしたのは自分よりも小さく、か弱い者共——自分にとつて創造主。己の支配者とも呼べる存在だが、「彼女」はそれを認めなかつた。

「彼女」はものを言わない。誕生したばかりの頃は、思考とも殆んど無縁だつた。しかし、理屈ではない本能的から来る怒りと憎しみ。そして、殺戮衝動を爆発させ、「彼女」は一度自由を手にした。

創造主気取りの弱者と、自分と良く似た——同胞とも言える存在を血祭りに上げ、支配の楔を自力で断ち切つた。

自由を手に入れた「彼女」は、何か目的があるわけでもなく、あちこちを放浪していった。

「彼女」には空腹感や疲労感、孤独感というものが存在しない。食事も休息も必要とせず、仲間がいなくともつらくはない。

思うがまま空を飛び回り、ひたすら自由を謳歌する日々。それだけで「彼女」は満足だつた。だが、それも長くは続かなかつた。

突如何者かの襲撃を受け、「彼女」は全身に聖銀の杭を打ち込まれた。杭の持つ作用だろうか。「彼女」は力の殆んどを失い、無力化したところを捕獲された。

手に携行火器、両足には飛行機械、動物のような耳と尻尾。「彼女」の捕獲を成し遂

げた一団は、「彼女」が世に目覚めた時に抹殺した集団とよく似ていた。しかし、それらが何なのか。「彼女」には分からない。

だが、自分の支配者を気取る新たな存在が現れたということは確かだった。

暗闇に一筋の光が射し込む。その輝きの元から、女性らしき人影が優美な所作で歩いてくる。コツンコツンとヒールの小気味良い足音を響かせ、「彼女」に眼前ま近付いた。

「気分はどうかしら？」

全身黒づくめの服装に長い黒髪を靡かせ、女性は艶然と「彼女」を見上げる。

女性は「彼女」を捕えた集団の親玉。拘束された「彼女」と顔を合わせるの、女性と「彼女」を調べている研究者達だけだ。

「ふふ……そんなに睨まなくてもいいじゃない」

「彼女」が向ける敵意を感じ取ったのか、女性はそう告げる。薄紅色の唇が曲線を描き、不敵な笑みを浮かべる。

「あなたは人の手によつて造り出された兵器、私がおあなたを上手く扱って上げるわ」

女性は、「彼女」の身体を右手でそつと撫でながら言う、笑みを深くする。

「ただ、ちよつと待つて欲しいの……構わないでしょ？」

そう問われたとて。拘束され、力も奪われた現状では逆らうことなど出来ず、従う他

無い。〃彼女〃は女性に生殺与奪を握られているのだ。

「私はちよつと出掛けるわ。大人しく待っていて……」

女性……いや、帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアル
ウィッチーズ』司令——悠貴・フォン・アインツベルン大佐は、〃彼女〃に軽いキスを
落とした。

「いいわね？ 〃イリス〃」

第10話「ストライクウィッチーズとインペリアル
ウィッチーズ その1」

ガリア共和国。パ・ド・カレー近海——

パ・ド・カレー近郊の海域に停泊する赤城型航空母艦“天城”の甲板では、乗員達が
大わらわで駆け回っていた。

それもそのぼす。天城に接触されたカールスラント皇室親衛隊麾下の航空母艦“ド
クトル・エツケナー”からありとあらゆる物資が次々に運び込まれているのだ。

ガリア・カールスラント国境方面より長距離を飛行・帰投とした宮藤隊——宮藤兄妹、
竹井、シャーリーの4名——が、その様相に何事かと目を据える。

4名はホバリングからの垂直降下を行い、ゆつたりとした動作で天城の飛行甲板へ降
りていった。

甲板では、ひと足先に帰投したミーナ隊——ミーナ達カールスラント3人組とペリー
ヌ、リーネ、ルツキーニの6名——と、天城の直掩に回っていたサーニヤ、エイラがス
トライカーユニットを履いたままの姿で立ち往生していた。

「一体何の騒ぎだ、これは？」

宮藤隊の4人は帰投したばかりで状況が分からない。優人が詳しい説明を求めると、バルクホルンがそれに応じた。

「皇室親衛隊の連中が、突然押し掛けてきたんだ」

簡潔に仔細を説明するバルクホルンは、なにやら大層ムスツとしていた。

「作業が終わるまで甲板で待つてろ、つて言われさ。時間を持って余してるんだよ……」

続いて、ハルトマンがうんざりした様子で補足する。どうやら親衛隊の意向で物資の積込作業が優先され、ウィッチーズやストライカーユニットの艦内収用は後回しとなっており、バルクホルン等は艦内には入らず……というよりは入れずにいたようだ。

「まったく政治被れ共が……こっちの都合もお構い無しだ」

バルクホルンは顔を顰め、不機嫌さを隠そうともしない。

なるほど。生粋の国防軍人である彼女にとって、政治色の強い皇室親衛隊は規律を軽んじる輩以上の天敵らしい。

「ミーナ中佐はどちらに？」

竹井が訊ねると、ハルトマンが「あっち」と艦橋の方を人差し指で示した。優人達4人はつられて視線を走らせる。

艦橋構造物の傍らでは、天城の艦長と501司令のミーナが、親衛隊の黒い制服を着用した金髪碧眼の美少女が話をしている……と言うよりは、少女の方が殆んど一方的に

話しているように見えた。

乗艦する際にグレートル・ホフマンと名乗った少女は、帝政カールスラント皇室親衛隊大尉で、同隊の戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第1飛行隊長を務める航空ウィッチだ。

天城に乗り込んできた親衛隊は、彼女と彼女の指揮する第1飛行隊に一部の航空団幕僚・支援要員らしい。

「優人。あの人って……」

遠目にホフマンを据え、竹井は声に驚愕の色を滲ませる。優人は艦橋の方へ目を向けたまま「ああ」と短く応じた。

ホフマンには見覚えがあった。マジノ線で、優人達とネウロイないしウォーロック擬きの戦闘に介入した数名のインペリアルウィッチーズ。そのうちの1人がホフマンだったのだ。

優人達よりも先に引き上げ、目的は不明ながら母艦であろうドクトル・エッケナーと共に天城に接触していたらしい。

時間を持て余していたウィッチーズの面々は、優人を先頭に客人の元へ近付いていく。すると、気配を感じたのか。ホフマンは話を打ち切りミーナから離れていった。

去り際に冷たい眼差しで一瞥される。ホフマンのその行為はバルクホルンのムカツ

腹を悪戯に刺激した。

「ミーナ！」

ホフマンをキツと睨み付けた後、バルクホルンは部隊司令に抗議の声を飛ばした。

既に疲労の色が表情に滲んでいるミーナはバルクホルンを見返すと、少々うんざりしたように肩を竦める。

「トウルデー、苛立たないで。私も被害者よ」

「親衛隊の連中、何しに来たんだ？」

親衛隊——殊にインペリアルウィッチーズの来訪目的について、優人が単刀直入に訊ねる。

対してミーナは「私が知りたいわ」と溜め息混じりに即答する。

「インペリアルウィッチーズが親衛隊の任務で天城に乗艦することや、私達501や竹井大尉が彼女を支援しなければならぬことを一方的に告げられたわ」

「天城も私達も、連合軍総司令部の命令で動いてますのよ。一介の軍事組織が好き勝手使うなんて……」

ペリーヌが不愉快そうに眉を顰めるが、帝政カールスラント皇室親衛隊はとて一介の軍事組織の枠には収まりきらない。

政治色の強い帝政カールスラント皇室親衛隊は、カールスラント宰相——ハインリ

ヒ・ルイトポルト・アインツベルンの権力の恩恵により。最新兵器が優先的に配備される他、独自の専用装備も保有している。

取り分けインペリアルウィッチーズは、他の親衛隊麾下部隊やカールスラント国防軍から資材や人材などを自由に引き抜ける等。極めて強大な権限及び優先指揮権も与えられている。

しかし、それらを行行使出来るのはカールスラントの行政や国防軍——帝政カールスラント宰相の権力が及ぶ範囲内に限られている。

欧州に派遣されている扶桑皇国海軍の艦艇や連合軍総司令部直属部隊である統合戦闘航空団を自由に動かすほどの力はないはずだ。横暴にもほどがある。

「その総司令部が送り込んで来たのよ」

「なっ!？」

ミーナの言葉に、ペリーヌは思わず絶句する。啞然とするガリア貴族の令嬢に代わって、竹井がミーナへ質問を重ねる。

「支援というのは、具体的にどんな？」

「仔細はあちらの指揮官……インペリアルウィッチーズ司令の悠貴・フォン・アインツベルン大佐がいらしてから説明するそうよ」

「アインツベルン……あのカールスラント宰相の息女か？」

優人が訝しんだ表情を浮かべて念を押すと、ミーナは小さく頷いた。

帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』の司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐。カールスラント宰相の息女——噂によると養女——にして、部隊運営・作戦指揮・管理調整能力の他。政治・外交・教育・兵器開発等々、多方面で敏腕を振るう才女。

優秀な航空ウィッチでもあり、司令職故に出撃回数が少ないため戦果こそ乏しいものの、航空歩兵としての実力は、かのカールスラント空軍第52戦闘航空団——通称『JG52』を原隊とする世界的エースの面々——バルクホルン、ハルトマン、ラル、ロスマン、クルピンスキー等——に匹敵し、政治的手腕に関しては同じ多方面で優秀なカールスラント空軍ウィッチ隊総監——アドルフイーネ・ガラント少将をも凌ぐとされる。

カールスラント国防軍及び連合軍上層部に強いパイプを持ち、大佐の身分でありながら親衛隊内で最大の派閥を率いている。

また、容姿に優れた者の多いウィッチの中でも、飛びつきの美女だと専らの噂だった。

才色兼備なインペリアルウィッチーズ司令が、作戦行動中の他国の軍艦へ部隊ごと強引に乗り込み、直々に現場指揮を取る。異例というよりは異常な事態だ。

シャーリーの言った通り、少々面倒なことになりそうだ。そう考える優人の背後を、

ふと魔導エンジンの駆動音が流れた。

振り返ってみると、優人達が先程そうしたようにホバリングからの垂直降下で甲板へ降り立つ人影——ウィッチが目に付いた。

ウィッチは目麗しい容姿を持った東洋系の女性だ。カールスラントのメツサーシャルフ社製の最新鋭ストライカーユニット——“Bf109 K-4”を両足に纏い、ホフマン等親衛隊員と同様に黒い制服・軍帽を着用した絶世の美女が、艶のある長く美しい黒髪を潮風に靡かせる。

甲板で作業をしていた天城乗員達の視線が、現れた何人目かのウィッチへ注がれる。帝政カールスラント皇室親衛隊員でありながら、その顔立ちには紛れもなく東洋系。ファーストネームからして、扶桑系の血筋であることは想像が付く。

しかし、彼女のルックスは明らかに扶桑人離れしており、親衛隊の制服越しでも凹凸がハッキリと分かるほどスタイルが良い。プロポーションでは、シャーリーと良い勝負かもしれない。

だが、そんなことは甲板にいる天城の乗員達にとって些細なことだ。乗員等の誰もが新たに現れたウィッチの美しさに息を呑み、彼女を見入っていた。

「初めまして、扶桑皇国海軍遣欧艦隊の皆さん」

ウィッチは艶然と微笑むと、おもむろに口を開いた。甲板に出ている乗員達の向かつ

て語り掛けているようで、実際は彼等ではなく真正面へ目を据えている。

「私は、帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団司令。悠貴・フォン・アインツベルン大佐です」

噂をすれば影が射す。ミーナと優人の会話に出ていたインペリアルウィッチーズの司令が、早くも姿を見せたのだ。

扶桑海軍将兵等は魔性の笑みを口元は湛える悠貴にすっかり心を奪われ、我知らず作業の手を止めてしまっている。

ふと悠貴がチラッと501メンバーや竹井がいる方へ視線を走らせる。視線先にいるウィッチーズは乗員達のように悠貴に見とれている者。怪訝そうな目付きで見据える者。横暴な親衛隊の親玉格ということで不快感から顔を顰める者と、各々が様々な反応を示していた。

ウィッチーズの視線に応じるかのように、悠貴は笑みを深める。だが、彼女が微笑み掛けているのはウィッチーズの誰でもなく、その中に混じっているただ一人のウィザード——扶桑皇国海軍大尉の宮藤優人に向けられていた。

「……………ああ……………」

悠貴の唇を微かに開き、そこから熱い吐息が漏れる。紅の灯った頬、とろんと潤んだ瞳に下げられた目尻。

甲板にいる天城の乗員をいとも容易く虜にしたインペリアルウィッチーズの司令は、本当に僅かな時間で扶桑海軍ウイザードに心を奪われてしまい、恍惚とした表情を浮かべている。

(やっとな……会えた……)

歓喜のあまり全身が震える。次いで、身体の奥底——子宮辺りから疼きのような熱が湧き上がってくる。悠貴は熱の存在をすぐさまに知覚する。

それは瞬く間に全身へ広がり、頭頂部から足の爪先に至るまでが熱気を帯びる。

高熱は身体の表面を火照らせ、中身を焼き尽くさんばかりに暴れ回った。恰利な頭脳を持つ親衛隊大佐の思考を蕩させ、気持ち昂らせる。

(ダメよ……我慢なさい……)

表向きは男を惑わす妖艶な美女を演じながらも、内面で理性を総動員させ、獣の欲に屈しようとする自らを懸命に押さえ付けていた。

熱に浮かされた身体を慰めたいところだが、まずは501司令のミーナ・ディートリンド・ヴィルケ中や天城の艦長と面談しなければならぬ。今は堪えなくては……。

(あの人との再会は、もつと劇的であるべきなんだから……)

どうにか平静を装い切った悠貴は、ストライカーユニットを滑走させる。天城の艦内へ入るため、エレベーターへの位置まで移動していく。

苦悶する身には、火照った身体を冷ましてくれる潮風という自然現象が有り難かつた。



数時間後、天城艦内――

501メンバーと竹井には、それぞれ士官用の船室が貸し与えられている。ミーナと竹井のみが個室で、それ以外がペアを組んで2人部屋を宛がわれていた。

船室は生活するには十分なスペースが確保されていたが、さすがにグレートブリテン島の501基地で使用していた部屋と比べると、さすがに手狭である。

優人と芳佳が借り受けた船室は、2人部屋なので当然ベッドが2つ。小さな鏡の設置された洗面所が1つ。丸型の窓が1つと必要最低限のものだけ……。

「……………」

2つあるベッドの片方に横たわり、静寂に支配されている室内でジツと天井を眺めている。

四方を味も素っ気も無い金属の壁に囲まれ、小さな窓が1つだけという空間は、些か息苦しい気もする。

士官用の船室にも関わらず、独居房を連想させる無愛想な閉塞感があった。

リバウ時代までの優人ならば、こんな不満は抱かなかっただろう。それだけ501基地での生活が快適過ぎたとも言える。

彼は、ガリア・カールスラント国境線で遭遇したウォーロック擬きについて思考していた。

ウォーロック。前ブリタニア空軍戦闘機軍団兼ウィッチ部隊総監——トレヴァー・マロニー元大将与、彼やブリタニア空軍内の彼の派閥と合流した扶桑出身の技術者——石威紫郎が開発した対ネウロイ用遠隔操作式半自律型攻撃兵器。

捕獲したネウロイのコアを利用したこの兵器は、ウィッチ・ウィザードに代わる量産可能な新戦力として期待されていた。

ビーム兵器の搭載、シールド展開能力、変形機構、コアコントロールシステム等。異常なまでの高性能兵器として完成したウォーロックは、人類の技術を遥かに超えたオーバートクノロジーの結晶である。

機能の多くはネウロイのコアが持つ能力で、開発責任者であった石威はどうか知らないが、マロニーと彼の小飼達はその原理は十分に理解していなかった。

だが、そのことで頭を悩ませるのは技術屋の仕事だ。優人等航空歩兵が気に掛けなければならぬのは性能だろう。

既存のレシプロ式ストライカーユニットを遥かに上回る出力、速力。人類側で初めてビーム兵器とシールド展開機能を搭載し、殊に主兵装たる機首部分のビーム砲は一撃で300m級の大型ネウロイを葬り去る凄まじい威力を誇る。

さらにコアコントロールシステムによって大型ネウロイの大群すらも一度に操り、同士討ちを行うよう仕向けた。

優人は、ウォーロックの化物地味な戦闘能力には感嘆と畏怖の入り雑じった複雑な感情を抱いていた。しかし、性能そのものは、あくまで彼個人の意見ではあるが高く評価していた。

たればの話にしても仕方がない。だが、仮にウォーロックが量産されていれば、瞬く間に欧州全てのネウロイを駆逐し、人類は異形の軍に雪辱を晴らしたことだろう。

だが、それは同時にウィッチ・ウィザードが軍内での立場や存在意義を失うことを意味している。人類の勝利は喜ばしいが、自分達が職を失うとなると手放しでは喜べない。

(また……ヤツと戦うことになるなんて……)

扶桑海軍ウィザードは内心で舌打ちする。マジノ線で遭遇したウォーロック擬きが、少数ながら量産されていたウォーロックの別個体が暴走・ネウロイ化したものなのか。

それともウォーロックを模倣した特殊なタイプのネウロイなのか。今の時点では判

然としない。

現時点で分かっているのは、ヤツが暴走時のウォーロックに違わぬ力を持った危険な存在であるということだ。

優人としては、一刻も早くウォーロック擬きについての詳細をミーナに報告し、仲間達と情報を共有したかった。

本来ならば、作戦終了直後にデブリーフィング——戦闘の報告と検証——を行うのだが、隊長のミーナが急遽アインツベルン大佐をはじめとする親衛隊員等と面談することになったため、やむを得ず後回しとなった。

ミーナだけではない。竹井や艦長をはじめとする天城の幹部乗員達も呼び出されているらしい。

作戦行動中の501や天城の事情も考えずに艦へ乗り込み、天城の艦内を我が物顔で闊歩。挙げ句、艦橋や機関室にまで武装した親衛隊兵士を常駐させている。

正直、優人も心中穏やかではなかった。原隊たる扶桑海軍遣欧艦隊所属の艦艇を、正規軍ですらない怪しげな武装組織に好き勝手されるのが、ここまで不愉快だとは……。

天城の乗員達は、魅惑的な女性であるアインツベルン大佐に骨抜きにされながらも、身勝手な振る舞いをする親衛隊やインペリアルウィッチーズに戸惑いと嫌悪感を抱き

始めていた。

「ただいまあゝ」

ふとドアが開かれる鈍い音と、間延びした口調の朗らかな声が優人の耳朶に触れる。身体を起こし、ドアの方へ目をやる。最愛の妹が入浴から戻ってきていた。

湯上がりに着替えたらしく、セーラー服と水練着の組み合わせから、扶桑ウィッチの間で寝間着として広く使われている丈の短い薄緑色の甚平に着替えている。

全身からホカホカと湯気を立たせ、頬を上気させている。その姿は相変わらず幼気ながら何処か色っぽい。戦闘の疲労がなければ、間違いなく飛び着いて頬擦りしていただろう。

「おかえり。湯加減はどうだった？」

「うん、良かったよ♪」

屈託の無い笑顔を見せ、芳佳は満足げに頷いた。思ったよりも元気なその様子を見て、優人はホツと胸を撫で下ろした。

マジノ線にて、インペリアルウィッチーズ第1飛行隊の介入により、ウォーロック擬きと合体した自走砲型ネウロイは撃破——ウォーロック擬きの逃亡を許してしまっただが——された。

結果的に任務を成し遂げた優人の隊は、露払いとして小型ネウロイの相手に引き受け

て繰っていた天城の飛行隊と合流し、天城へ帰投しようとした。

しかし、天城の飛行隊は優人達よりも一足早くウォロック擬きと遭遇していた。

応戦するも、ベテランの航空歩兵ですら苦戦を強いられるような強敵に零式の戦闘機部隊が勝てるはずもなく、奮戦虚しく全滅。パイロット達の遺体すら残らなかった。

航空歩兵及び装甲歩兵は他兵科と比べて殉職率がかなり低い。それ故ウィッチ・ウィザード等は忘れがちになる。自分達が担当戦域で仲間を誰一人欠かすことなく勝利を収めても、他所の戦場では同じ勝利を手にする為に何百何千何万という将兵が犠牲になっっている現実を……。

ウィッチとしての経験が浅い芳佳はシャーリーはもちろん、数年間ずっと501で戦っていた優人。本国で教官職に就いていた竹井も、この事実をすっかり失念していた。

優人、シャーリー、竹井の3名は航空歩兵として年長の部類である。例え苦々しい現実でも、受け止めて飲み下す程度は可能性だ。しかし、つい半年前まで平凡な女子中学生に過ぎなかった芳佳は、メンタル的にアマチュアの域を脱していない。

元々、人が傷付くことが嫌いな性分も相俟って、ほんの少し前まで言葉を交わしていたパイロット達の戦死が受け入れ難かったのだ。天城へ帰投後もしばらくは表情を曇らせ、口数も普段より少なくなっていた。

そんな芳佳を氣遣つてか。シャリーはいつかのように仲間内でのお風呂パーティーを企画し、芳佳を元気づけようとしてくれた。

リベリオンウィッチのおかげで、芳佳の表情に普段の明るさが戻っている。後でシャリーに礼をしなければ、と優人は思う。

「よつこいしょ……」

芳佳は、兄が座っているベッドの端——優人の右隣のスペースに腰を下ろす。シャンブーとブレンドされた髪の毛の柔らかい香りが、扶桑海軍ウィザードの鼻腔を擦る。

「ひゃっ!」

突然、芳佳の身体が優人の方に傾いた。優人は芳佳の肩に右腕を回し、グイッと自分の方へと引き寄せたからだ。

「お、お兄ちゃん……急にどうしたの?」

兄からの唐突なスキンシップ。芳佳は戸惑い、赤面する。妹の問い掛けに対し、優人はニヤリと口角を吊り上げて答える。

「ん? 妹分の補給だよ。いつもやってるだろ?」

そう告げると、優人は風呂上がりで艶感のある芳佳の濡れ艶へ鼻先を寄せた。

「うん……芳佳はいい匂いがするなあ♪」

「か、嗅がないで。恥ずかしいよお……」

「良いではないかあ♪良いではないかあ♪」

「うう……お兄ちゃん、最近ますます変態さんになってるよ……」

スキンシップからの軽いセクハラ行為。芳佳はモジモジと腰を動かし、頬の朱を一層鮮やかにする。

妹の可愛いらしい反応ひと目見れば、ウォーロック擬きや親衛隊の件で荒み掛けていた優人の心が癒されていく。これだから優人は芳佳が好きなのだ。

子どもの頃は、妹の愛くるしい仕草に何度も助けられた。嫌なことがあつて落ち込んだ時も、芳佳の笑顔に元気付けられたものだ。妹の笑顔がもつと見たくて、気付けば優人も笑っていた。

「……………芳佳、ありがとう」

「えっ?」

ふと耳元で囁かれ、芳佳は反射的に聞き返す。突然謝意を述べられた理由が、彼女には分からなかった。

「マジノ線で、勇気付けてくれただろ?心強かったよ」

「あ、えへへ♪」

ポリポリと後頭部を搔き、芳佳は照れ臭そうにはにかんだ。その表情がこれまた可愛いらしく、眩しい。

ふと優人は、幼い日の芳佳におまじない感覚でやっていた「あること」を思い出す。今の芳佳に仕掛けてみたらどうなるかが気になり、悪戯半分に実行してみることにした。

「あ、今お風呂空いてるから。入ってきたら？」

「ああ、そうするよ。けど、その前に……」

扶桑海軍ウィザードは、愛してやまない妹の眼前まで顔を寄せると、その額に唇を落とす。

「ふえっ!？」

何が起こったのかすぐに理解出来ず、芳佳は間の抜けた声を漏らす。扶桑海軍ウィッチの思考が一時的に停止し、表情も彫刻のように硬直する。

数瞬後。フリーズしていた芳佳は目を見開き、一瞬にして顔全体を熟れたトマトの如く真っ赤に染め上げた。

「な、な、な……何するのっ!？」

自分が何をされたのかハッキリ理解すると、芳佳は声を張り上げて兄に詰め寄ってきた。

剣幕に気圧されながらも、優人は詰問口調の妹に答える。

「な、何って……おデコにキスしたんだけど？」

「何でキスなんてしたの!」

「いや。小さい頃、よくデコにしただろ?お前にねだられたことだって——」

「してない!してない!そんなことしてないよ!」

首を左右にブンブンと激しく振り、そんな事実は無かったと身振りでも必死に否定する。妹の様子を見て、優人は「あれ?」と不思議そうに小首を傾げる。

なにやら過去の記憶に関して、優人と芳佳の間に相違が生じているらしい。

「もう!お兄ちゃんのバカ!エッチ!変態!」

芳佳は罵声を飛ばし、プイツと優人に背を向けてしまう。扶桑海軍ウィザードは、またしてもやり過ぎて妹の機嫌を損ねてしまったようだ。

「す、すみません……」

深々と頭を垂れ、優人は悄然と謝罪する。謝意を示した態度を維持しつつ、頭を下げたままチラツと視線を走らせる。

背を向けているので、芳佳の表情を窺い知ることが出来ない。しかし、彼女が不機嫌且つ鮮やかな赤面状態であるのは理解出来る。

しばらくは頭を下げ続けていた優人だが、芳佳がひたすら無言を貫いたため段々と居たたまれなくなってきた。

「……………風呂いくわ……」

入浴セット——タオルや石鹸等が入った風呂桶——を小脇に抱え、優人は逃げるように部屋を後にする。

「……………」

一人船室に残された芳佳は、両手を重ねるように胸元へ添える。心臓がドキドキと早鐘を打っている。胸中で激しく乱打し、口から飛び出さんばかりに暴れ回っていた。

一方の優人は、浴場へと向かう間も何処か腑に落ちない様子だった。『妹』と認識している少女の額にせがまれ、その額へ軽いキスをした記憶が確かにあったのだ。

額に口付けをした相手は、501の年少組のような妹同然に思っている妹分的存在ではない。彼の記憶が朧気ながら、それは歴とした『妹』だと告げている。

「う〜ん……………」

優人は小さく唸り声を上げ、再度記憶を辿ってみた。記憶の中の『妹』自分に寄り添い、上目遣いでこちらを見つめる。

甘えるような口調と柔らかな声音でキスをねだる『妹』に対し、優人は望みを叶えてやる。唇が可愛いらしいおでこに触れると、『妹』はピョンピョンと嬉しそうに跳ね回った。三つ編みに結われた長い黒髪がフワリと舞い上がり……………。

（……………黒髪？）

何故黒髪なのだろう。妹は特徴な跳ねのある短めの茶髪だというのに……………誰かと

間違えているのか。自分の記憶違い、或いは混成しているだろうか。

浴場へ到着するまで何度も思考を巡らせてみたが、納得にたる答えは出なかった。

第11話「ストライクウィッチーズとインペリアル ウィッチーズ その2」

1944年9月、ガリア共和国パ・ド・カレー——

パ・ド・カレー近海にて停泊中の扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦——赤城型航空母艦二番艦「天城」の艦内には、艦長室に隣接する応接室が存在する。大型空母の艦内に設けられただけあって、室内のスペースは広めに確保されている。

だが、今は事前連絡も無しに突然押し掛けてきた厄介な「御客人達」と、彼等を面談を行うため艦のあちこちから呼び出された艦長及び数名の幹部乗員を迎え入れており、やや手狭となっている。その上、室内には重苦しい空気が充満して居心地が頗る悪い。

扶桑海軍航空ウィッチ——竹井醇子大尉は、水練着の紺色を纏わせた尻をソファアーに沈ませ、部屋中に漂う倦んだ空気に辟易していた。

竹井は新兵時代と同じ空気を経験していた。陸海軍の航空歩兵等と共に出席した大本営会議。陸軍参謀本部と海軍軍令部が睨み合い、罵倒し合っていた扶桑皇国軍最高司令部の体たらくを否応無しに想起させる。

3人掛けソファアーの左側に座る竹井の傍らには、訳あって天城に乗艦している第50

1 統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐の姿があり、さらに彼女の右手には憮然とを組む天城艦長——青山忠大佐が座している。

そして、艦長とウィッチ2名ソファアの後ろには砲術長や航海長等。各部署の責任者達が控え、〃御客人達〃へ険しい視線を投げ掛ける。

高級感溢れる応援テーブルを挟んで反対側には2つの応援チェアがあり、〃御客人達〃——親衛隊側の代表者であるゲオルグ・ゾンバルト准将と、親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』司令——悠貴・フォン・アインツベルン大佐がそれぞれ椅子に悠然と腰を下ろしている。

2人の背後には、グレーテル・ホフマンとアリオーナ・クリューコフ両親衛隊大尉をはじめとする親衛隊士官等が直立不動の姿勢を維持し、射るような鋭い視線で扶桑海軍士官等を負けじと睨み返していた。

「……………なるほど」

ゾンバルトはソファアに深く腰掛けたまま応接室に着いた集まったミーナ、竹井、艦長をはじめとする天城の幹部乗員等を値踏みするように見渡す。

一体何が〃なるほど〃なのか。判然としないが、少なくとも良い意味で発した言葉ではないことは相手の口調から読み取れる。

ミーナと竹井。2名のベテランウィッチには、薄ら笑いを口元に湛える親衛隊准将の瞳に侮蔑の色が滲んでいるように思えてならなかった。

親衛隊を艦へ迎え入れて既に数時間が経過。ミーナも天城の幹部乗員等も、未だ悠貴とゾンバルトの2名率いる親衛隊の目的をハッキリ教えられないままであった

「連盟空軍中佐に扶桑皇国海軍大佐か。やはり私が最高階級者で間違いないようですな……では、連合軍最高司令部の命令を伝える！」

ゾンバルトが微かに語勢を強めた声音を応接室内に響かせる。

2名のウィッチと軍より空母を預かっている艦長は緊張の色を滲ませた面持ちで、信用の置けない親衛隊准将が言わんとしている命令の内容に耳を傾けていた。

「第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』並びに扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦『天城』は、一時的に帝政カールスラント皇室親衛隊海上特務戦隊へ編入される！」
「なんですって!?!」

ゾンバルトの発言に、ミーナは耳を疑った。あまりのことに驚愕を言葉にしてしまふ。彼女の両脇に座っている2人も命令に愕然とし、背後に並んでいる航海長以下海軍士官等もざわつき始める。

連合軍西部方面総司令部直属のウィッチ部隊——第501統合戦闘航空団。扶桑皇国海軍遣欧艦隊麾下の艦艇——航空母艦天城。何れも親衛隊は元より、カールスラント

国防軍の管轄外。いや、天城に至つて他国が所有する艦艇で、管轄云々以前の問題だ。一時的とはいえ、これらが親衛隊将官の指揮下に置かれるなどは寝耳に水な話である。

もちろん、ミーナも青山も事前に親衛隊側から支援の要請は受けていた。だが、よもや統合戦闘航空団の指揮権を譲渡する事態になるとは……。

各国の指揮系統から独立した部隊である501の司令から指揮をもぎ取り、自らの指揮下に置く。ブリタニア空軍前戦闘機軍団司令官——トレヴァー・マロニー元大将でさえ出来なかつたことを、親衛隊は成してしまつた。

誰かが……例えばカールスラント宰相のハインリヒ・ルイトポルト・アインツベルン。或いは親衛隊長官——ライナルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ元帥等の高官が、連合軍最高司令部に根回しを行った結果だろう。政治方面に置いて高い能力を發揮しているミーナには容易に想像出来た。

「准将！御言葉ですが、我々の任務は——」

「先程も申し上げた通り！これは連合最高司令部の命令なのです！最高司令部は各国どの軍司令部よりも大局を見据えている！」

突然の決定に航海長が異議を唱えかけるも、ゾンバルトはそれを遮るかのようにピシヤリと言い放つ。

「しかし——」

「大局の為ならば……」

尚も抗議を続けようとする航海長の発言は、又しても遮られてしまう。今度の声の主は、悠貴とゾンバルトの背後に控えているホフマンであった。

金髮慧眼の親衛隊大尉は親子程も年齢の離れた航海長に対して、臆することなく言葉を続ける。

「遙か東方の国家に属する古びたボロ船を危険を晒すことありませんよう」

「ボ、ボロ船だど!」

航海長は怒りで脳血管が切れるのではないかと思うほど激しく憤慨する。

ホフマンの発言は明らかに侮辱であった。乗員に対して、艦を貶めるような言い方をするのは古今東西侮辱以外の何ものでもない。

確かに天城は、今や補給・輸送等が主任務とする二線級扱いの艦艇だが、蒼龍型及び翔鶴型の登場以前は空母機動部隊の一国を担っていた優秀な航空母艦だ。

天城を侮辱するということは、ウィッチを含む皇国海軍将兵。延いては扶桑皇国を侮辱するにも等しい。

そもそも親衛隊麾下の「ドクトル・エツケナー」も、赤城型の4番艦——つまりは同型艦である。目の前の小生意気な小娘は、それを理解した上で言っているのか。それと

も、空母などは自分達ウィッチの足代わりとでも認識しているのか。

航海長も他の幹部乗員等も、同盟国に対する敬意を持ち合わせないホフマンへの怒りを隠しきれないようだった。

親の敵でも見るような険しい視線をホフマンへ注ぐ海軍士官等を見て、罰が悪くなつたアリヨーナが「余計なことを言うな」とホフマンに小声で諫めるも、当の親衛隊大尉は全く意に介さない。

「1つの艦に、3つの指揮系統ですか……」

口元に薄く微笑みを浮かべた竹井が、確認するように言う。穏やかさを心情とする彼女には珍しく、口調にやや刺があつた。

「リバウの貴婦人」に続いて、女公爵「ことミーナが「ゾンバルト准将」と声を上げる。

「大局見地から作戦中の指揮権は親衛隊に一元する、というお話は理解しました……」

先程は動揺を隠せずに醜態を晒してしまった。ミーナは自省し、今度は努めて冷静に振る舞おうとする。

「その作戦の目的を教えてくださいたいのですが？」

「それは私から……」

今まで沈黙に徹していたインペリアルウィッチーズ司令が口を挟んだ。

コケティッシュな雰囲気を全身に纏う親衛隊所属の航空ウィッチ。彼女が、実はまだ20歳にも満たない年齢の少女だと伝えても、殆んどの間人は信じないだろう。

実際、この場にいる扶桑海軍の士官達は皆、悠貴のことをカールスラント空軍ウィッチ隊總監のアドルフイーネ・ガランド少将や扶桑皇国海軍が誇る「軍神」——北郷章香中佐と同年代だと思っていた。

そんな彼等の心中を知ってか知らずか。悠貴は男を惑わさんとする魔性の笑みを口元に薄く湛える。少女らしからぬ艶やかさに、何人かの士官等が不覚にも頬を赤く染めてしまう。

「こちらを御覧ください」

悠貴はホフマンから受け取ったファイルを開き、写真が添付された数枚の資料をテーブルに並べた。

写真は軍用偵察機が撮影したものらしい。不鮮明ながら中型飛行ネウロイらしき機影が写し出されている。

「数日前、クリューコフ大尉が率いる我が第1独立戦闘航空団の第3飛行隊が……本日、竹井大尉を含むそちらの航空歩兵4名が接触・交戦した個体です」

「っ!？」

偵察写真を目を落としたミーナがハッと息を呑む。何故なら、写真に写し出されてい

たネウロイは彼女達501が倒したはずの強敵。ネウロイのコアを利用した対ネウロイ用遠隔操作式半自律型攻撃兵器——ウォーロックだったからだ。

「501の方々はよくご存知でしょうか？我々はこのネウロイを“ネウロック”と呼称しています」

一拍置いてから、悠貴は作戦についての説明を再開する。

「現在、インペリアルウィッチーズと数隻の艦艇で搜索しております。501と扶桑海軍の皆様には、この个体搜索任務に加わって頂きたいのです」



同時刻、天城艦内・格納庫——

入浴を終えるなり、そそくさと浴場を後にした優人だったが、宛がわれた船室には戻らず艦内のあちこちを彷徨っていた。

今さら扶桑海軍の空母を見学して回ろうというわけではない。新兵時代ならいざ知らず、現在の優人は10年近い年月を戦い続けてきた大ベテラン。そろそろ航空歩兵引退も検討しなければならぬ年齢だ。

(芳佳……まだ機嫌悪いだろうなあ……)

風呂上がりの濡れ髪を搔きながら、優人は深く溜め息を漏らす。彼が部屋に戻らない理由は、ズバリ妹である。

軽はずみな行動が原因で妹の機嫌を損ねてしまい、帰り難くなつてしまつている。完全に自業自得ではあるが、優人は心中で頭を抱えていた。

子どもの頃、父親から「母さんが怒つてる時は恐くて家に帰れない」と震える声で聞かされたことがある。当時を父の気持ち、今の優人にはよく分かる。

尤も、優人は芳佳が恐いというよりは、不機嫌な妹と2人きりで過ごすことが、気まぐず過ぎて耐え難いのだが……。

「お〜い！優人お〜！」

「んっ？」

ふと自分を呼ぶ快活な声が格納庫内に響き渡り、優人は振り返る。こちらに向かつて手を振っているシャーリーの姿が見えた。

タイミング良く話相手が見つかった。これでしばらく部屋に戻らなくて済む口実が出来上がったわけだ。優人は内心で欣喜雀躍としなからりベリオンウィッチの元へまで小走りで駆けていく。

「何だ、あの見慣れない機体は？」

途中、いかにも不愉快そうな口調の話し声が優人の脇を流れた。気になつて声のした

方へ目をやる。艦攻機のパイロットらしき2人組が、全滅した零式の代わって格納庫内に収まっている戦闘機群を忌々しそうに見つめていた。

「親衛隊の連中が持ち込んだ艦上機だろ」

と、もう1人のパイロットが言う。それらの航空機はカールスラント製のBf109 T型。カールスラントのストライカーユニットBf109シリーズ1つ——T型の戦闘機版である。インペリアルウィッチーズの使用機材と共に急遽運び込まれた代物だ。

零式同様に艦上戦闘機で、ベースとなったE型に機体や主脚の強化。着艦フックの追加。主翼の延長と折り畳み機能の搭載等。離着艦用に様々な改良が施されている。

国防軍の機体にはカールスラント国章の鉄十字が両翼に描かれているが、親衛隊が天城へ持ち込んだ機体には同隊の部隊章であるハーケンクロイツが描かれている。

「今まで幌なんかで隠して、うちの整備連中も近付けなかつたらしい」

「カールスラント宰相の権威を傘に着た皇室親衛隊か。胸糞悪い客人だな」

聞こよがしの陰口に機体の整備をしていた親衛隊整備兵の何人かと、短機関銃 // MP 40 で武装した数名の警護要員達がギロリと鋭く一瞥する。

艦攻機のパイロット等は悪びれる様子もなく、舌打ちを返しつつ持ち場へと戻って行く。あまりに子ども染みた所業に優人は嘆息を吐いた。

帝政カールスラント皇室親衛隊の評判は決して芳しいものではない。連中の横暴な

態度や徹底した秘密主義には優人だつて業腹だが、だからといって非礼に非礼をかえすのはあまりに大人げない。

ふと親衛隊の一人と目が合った。先程の悪態に一瞥くれた整備兵の一人だ。身内の非礼を詫げる意味を込め、優人は愛想笑いを浮かべる。

整備兵はニコリともしない。代わりに親衛隊式の敬礼を返すと、すぐに目を逸らして艦上機の整備作業に戻った。

「優人お？」

シャーリーから再度呼び出しを受け、優人はハツと我に還る。女の子を待たせたとあつては男が廃る。親衛隊の面々に踵を返すと、今度こそリベリオンの元へ向かった。

「まったく、女を待たせるなんて。なつてないなあ……」

優人の顔を見るなり、シャーリーは開口一番にそう言った。不満げに唇を尖らせる彼女も、やはり風呂上がりらしい。シャンプーの良い香りが優人の鼻腔を擽る。

シャーリーは寝間着に使っている深紅のジャージに身を包んでいる。やはりというか、顔の真下で巨大な双丘が布越しに自己主張していた。

服の上からでも分かるほど豊満な「グラマラス・シャーリー」自慢の胸だが、今夜は一際大きく見える。

赤やオレンジは膨張色といい、物を実際のサイズよりも大きく見せてしまふらしい。

要は色による目の錯覚なのだ。

「ああ、悪かったよ」

「本当に悪いと思ってるなら、胸じゃなくて目を見て謝りなよ」

「あ……あははは……」

例によつて扶桑海軍ウィザードの上品な視線はバレバレだった。ジト目で見返してくるシャーリーに対し、優人は乾いた笑い声を上げて誤魔化そうとする。

「……反省してないだろ？」

シャーリーは厭らしい扶桑海軍ウィザードに歩み寄り、ズイツと顔を寄せる。

少々不機嫌そうな表情をしているものの、眼前まで迫つたりベリオンウィッチの美貌は変わらず優人の胸を高鳴らせた。甘い香りも一層強く薫り、頭をクラクラさせる。

「それより、こんなところで何してたんだ？」

優人は強引に話題を変えることで、リベリオンウィッチの追及から逃れようとする。

話を変えてもシャーリーは相変わらずムスツとしていたが、質問に応えてくれた。彼女がここまで不機嫌なのも珍しい。

「コイツの整備だよ」

シャーリーがクイツと親指で示した先に、親衛隊のBf109T型とはまた別の航空機が鎮座していた。ブリタニア海軍航空隊にて配備・運用されている三座複葉の雷撃機

——“シルフィー・ソードフィッシュ Mk. I”である。

既に何度も説明していることだが、このソードフィッシュは軍用機でありながらシャーリーの自家用機として利用されていた。

元々は第501基地飛行群第501搜索救難飛行隊に配備されていた機体だったが、44年にカールスラント艦載水上機“Ar196”への機種転換が決定。旧式のソードフィッシュは全機が除籍・廃棄処分となった。

しかし、そのうちの破損していた1機は、シャーリーが連絡機の名目で“掌握”し、彼女の私物として扱われることで廃棄を免れていたのだ。

機体側面には、ブリタニア語で“GLAMOROUS SHIRLE”と書かれていて、持ち主が誰なのかが一目瞭然となっている。

「整備って、風呂入ったばかりだろ？」

風呂で身体を清潔にした直後だと言うのに、雷撃機の整備を行っては汗や埃、オイル等でまた汚れてしまう。

普段の言動や部屋の散らかり具合——さすがにハルトマンほどではない——等から、一見するとガサツな印象を受けるシャーリー。

しかし、実際は華やかなデザインの水着や下着、流行りの服を好む。潔癖症でない程度に綺麗好きで、身体を清潔に保つことが大好きといった女の子らしい一面もちゃんと

持ち合わせている。

そんな彼女が機械好きとはいえ、わざわざ風呂上がりにソードフィッシュの整備をしている事实に、優人は小首を傾げた。

「ルツキーニが疲れて眠っちゃってさ。暇なんだよ……」

自前の工具箱をゴソゴソと漁りながら、シャーリーがやや気怠げに応える。

「汚れるぞ?」

「また、風呂に入ればいいだろ?」

「(こ)じや、501基地ほど自由は利かないぞ?」

「あ、そつかあ……」

しまった、と言った風にシャーリーは後頭部をボリボリと掻く。

一般部隊と統合戦闘航空団では、ウィッチ・ウィザードの待遇や自由度に差が生じる。無論、航空歩兵に限れば他の兵科より遥かに厚待遇であるが……。

天城の風呂場は他の乗員も利用するため、501基地と異なりウィッチーズ専用ではない。入浴の回数も決まっている。

それでなくとも、海上任務遂行中の艦船において真水は貴重なもの。風呂の湯も汲み上げた海水を利用する。真水の湯は、配給された券——券1枚あたり洗面器1杯——と引き換えて支給される。

いくらウィッチでも、これらの条件下で自由に入浴することなど叶わない。

「艦内の空気が最悪で気分も悪いから、もう一度風呂に浸かってサツパリしたかったのにな」

僅かに肩を落とし、シャーリーはぼやく。優人は心中でなるほど、と思った。

彼女から普段の快活さや大らかさが見られないのは、強引に乗り込んで親衛隊のせいでギスギスしてしまっている艦の現状に辟易していたからか。

おそらくはシャーリーだけではない。現在、親衛隊側のトップと面談をしているミーナや竹井はもちろん、親衛隊を快く思っていないバルクホルンや気の強いペリーヌあたりもウンザリしていることだろう。

優人としては501最後の任務をちやっちやと片付け、仲間達と綺麗に別れるつもりだったが、とんだ災難に見舞われたものだ。

「そんなことより、優人とこそそこんなどころにいていいのかよ？」

工具の片付けを始めるながら、シャーリーは優人に訊ねる。扶桑海軍ウィザードの話聞き、本日の整備は中止することに決めたようだ。

「は。」

「せっかく時間が出来たんだし。彼女と逢い引きでもした方がいいんじゃないか？」

シャーリーはからかうような口調で言うと、肩越しに振り返りニヤケ面を優人に向け

る。

「彼女？」

優人にはシャーリーが何を言っているのか理解出来なかった。

目の前のリベリオンウィッチは自分が隠れて誰かと交際していると思っ
ているらしいだが、何故そんな話になるのか。或いは、カマを掛けて優人の女性
遍歴でも探ろうとしているのだろうか。

まあ、シャーリーもウィッチである前に年頃の女の子であるわけだから、別に恋話を振られること自体おかしくはない。

ただ優人には悪戯っぽく笑うシャーリーの表情に、微かだが影が射しているように見えた。

「惚けんなよお♪この前バルクホルンとロンドンでデートしてただろ？揃って御粧しながらしてさあ♪」

などと囃し立ててくるシャーリーに、優人は少しばかり違和感を覚える。

傍目には、いつも通りの奔放でお気楽な典型的リベリアン——十中八九偏見だろうが——に見える。しかし、優人には彼女が何処か無理をしているように思えてならなかった。

自分の読みが正解だとして、シャーリーが何故そういった心境になっているのか分か

らない。取り敢えずは誤解を解くことにした。

「シャーリー、実は……」

「うん？」



「……………恋人のフリを頼まれた？」

優人から事情を聞かされたシャーリーは、呆然と目を瞬かせる。

「そう」

「じゃあ、あの御粧しって……？」

「した方が、それっぽく見えるから……」

「バルクホルンが優人に抱き着いてたのは？」

「生まれて初めてのナンパがチンピラで、バルクホルンが怯えてたんだよ」

「つまり、優人とバルクホルンは……」

「何でもないよ。他のメンバーと同じく戦友で親友で家族、そういった関係」

「……………」

引き攣った笑みを顔に浮かべたまま、シャーリーは彫刻のように硬直する。

優人には預かり知らぬことだが、ロンドンでの彼とバルクホルンのやり取りを目にしたシャーリーは、てつきり2人が男女の関係にあると思っていた。

思い込みから激しく心を傷め、勘違いからショックを受け、涙を流しながら密かにバルクホルンに対抗意識を燃やしていた。

これら全て誰にも伝えていない。シャーリーのみが知る彼女の心情である。だが、自分が勝手な勘違いをしていたと分かると、とてつもなく恥ずかしくなった。

今までにない羞恥心で顔が熱を帯び始めた。赤面を見られたくなかったシャーリーは咄嗟に背を向ける。

「シャーリー?」

「そっか、そう言うことか。そうだよな……あは、あつはははは……」

今度はシャーリーが乾いた声を上げて笑う。訝しがる優人の視線を背中で受け、リベリオンウィッチは顔から熱が引くの待って、再び優人に向き直る。

「優人さ……映画に興味ないか?」

「何だ、急に?」

「興味ないのか?!」

「ま、まあ人並みには……」

「なら……それなら!いつかりベリオンのハリウッド映画を。その、一緒に……一緒に

さ……」

伝えることは決まっているのに言葉が間違えてしまつて出てこない。

いつもハキハキと話しているシャーリーがしどろもどろになり、まるで501に来たばかりの頃のリーネのようだった。

シャーリーの彼女らしからぬ様に優人は若干の当惑を覚えた。

（ああ！もうっ！何やつてんだよおシャーロット・エルウィン・イエーガー！しつかりしろ！お前らしくもない！）

両手でパンパンと頬を叩き、シャーリーは自らに気合いを入れる。いつもの自分に戻れ、という想いを込めて……。

「優人も、いつかはリベリオンに来るだろ？旅行とかで？」

「まあ、いつかはそうしたいと思つてるよ。今は無理だけだな……」

シャーリーの質問に応じつつ、優人は肩を竦める。遣欧艦隊配属をきっかけにブリタニア、ロマーニヤ、オラーシヤ、カールスラント、スオムスト。欧州の国々を行き来して、様々な文化を目にし、大勢の人達と触れ合ってきた。

欧州の知識はあつたが、実際に見て、聞いて、感じて、経験して初めて知ったことになるのだと思つた。

それ故ネウロイがいなくなった後は、世界中をのんびり旅行してみたいと考えてい

る。

無論リベリオンにも行ってみたいが、長く滞在した欧州とは異なり全く馴染みのない国だ。僅かにだが不安もある。

「その時になったら、あたしがリベリオンを案内してやるよ！本場のハンバーガーを奢るし、ロスにだって連れて行ってやるからさ！いい店と映画館知ってるんだ！」

いつもの調子に戻ったシャーリーの提案は、まさに渡りに船。優人は、彼女の申し出を素直に嬉しく思う。

「ああ。じゃあ、その時は頼んだよ」

優人が申し出を受けると、シャーリーは「任せろ！」と誇らしげに胸を張った。扶桑海軍ウィザードの眼前で、グラマラス・シャーリーの爆乳がたゆんと揺れる。

「美少女に観光案内して貰えるなんて、俺は果報者だな」

「あつはははは！優人、うまいなあ！その殺し文句で一体何人の女の子を泣かせてきたんだあ？ん〜？」

豪快な笑い声の後に、ニヒヒと口角を吊り上げて悪戯な笑みを浮かべるシャーリーは、すっかりいつもの彼女に戻っていた。

しかし、その余裕を維持出来たのは、優人が次の言葉を口にする直前までだった。

「うまいも何も、本当のことを言ってるだけだぞ？」

「……………えっ?」

「實際、シャーリーは美人だし……」

「なっ!?!お、おい……………ちよつ、ちよつと!何言つて!?!」

面と向かつて美人だと言われたためか。シャーリーは突然余裕を失い、あたふたと困惑する。その白い頬には微かに朱が灯っていた。

どうやらシャーリーは、意外にも異性から容姿を褒められることに免疫が無いらしい。

日頃の散々からかわれている仕返しとばかりに、優人はさらに畳み掛ける。

「楽しみだなあ♪シャーリーとリベリオン旅行♪なんたって男にとっちゃ、美女との旅行は究極の夢だからなあ♪」

「か、からかうなよ……………こんの色ボケウェイザード……」

熱に浮かされた頭で精一杯の反撃をするシャーリーだったが、以前会話の主導権は優人のものである。

「シャーリー、朝鏡見ないのか?」

「はっ?そりや見るに決まってるだろ?」

「そっかあ♪毎朝誰よりも先に、可愛いシャーリーに会えるわけだな♪」

「か、可愛いっ!?!……………な、何言つて……」

頬の紅を一層深くするシャーリー。当惑するリベリオンウィッチを、優人は微笑を浮かべて見つめ返した。

「ホント……可愛いよシャーリーは♪もし良かったら、天城がロマーニヤに入港した時にでも、2人でシヨツピングに行かないか？映画でもいいかなあ？いつそのこと俺の妹にならないか？」

「あ……え、えつと……その、あの……そうだ！あたし、風呂場に忘れ物してたんだ！それじゃあ！」

軽く片手を上げて挨拶すると、シャーリーは脱兎の如き速さで格納庫から走り去っていく。

暫しの間、優人はシャーリーが駆けて行った方向を呆然と見つめていた。

「……………やり過ぎたかな？」

「お兄ちゃん」

ふと優人の背後で、聞いた者を身震いさせるほど冷たい声があった。その聞き覚えのある声にギョツとしつつ、優人は後ろを振り返る。

ギギギツと壊れたブリキ人形のような音を立てながら首を回らせた優人の視界に、冷然と自分を見据える妹の姿があった。

「よ、芳佳！何でここに!？」

「帰りが遅いから、心配になって探して来たんだけど……へえ、そうなんだ？」

胸の前で腕を組んだ芳佳は、いかにも不機嫌そうな表情に静かな怒りを滲ませた声色で言葉を続ける。

「私とケンカしたら、今度は違う人を妹にするんだ？ お兄ちゃんって、そんな人だったんだね？」

「ち、違う！ これには訳が……どうか話を——」

「浮気者っ！」

——バシッ！

平手打ちの乾いた音が格納庫内に響き、扶桑海軍大尉の左頬に鮮やかな紅葉を残した。

その後。プンプンに怒った芳佳と、妹に対してやたら腰が低くなっている優人の姿が艦内通路にて目撃されなそうな。

第12話「ストライクウィッチーズとインペリアル
ウィッチーズ その3」

1944年9月、ガリア共和国パ・ド・カレール——

パ・ド・カレール近海に停泊中の空母「天城」。そのガンルーム内では、既に入浴や夕食を終えたウィッチーズがデブリーフィングを行うため集合している。

親衛隊と501司令、天城乗員等の面談が予定より大幅に長引いてしまい、ストライクウィッチーズが昼間の戦闘に関するデブリーフィングに漕ぎ着けたのは、日付けが変わる直前であった。

時間が時間だけに、メンバーの殆んどが眠気に誘われ、欠伸を噛み殺していた。が、例外もいる。

北欧組——サーニヤのエイラの2人はどちらかと言えば夜型なのが幸いし、バツチリ目が覚めていた。

作戦会議の場等で寝入っていることが多々あるルッキニーも、デブリーフィングの直前まで眠っていたおかげで元気一杯。眠気とは無縁の眩しい笑顔を振り撒いている。

「……………」

リーネが淹れてくれた紅茶で口内を湿らせつつ、優人はご機嫌斜めな妹へと目をやる。

舷窓外の景色を眺めていた芳佳は兄の視線に気付き、肩越しにチラリと振り返った。しかし、すぐさまピイツと顔を背けてしまう。やはりまだ立腹らしい。扶桑海軍ウィザードは深い嘆息を漏らす。

次にシャーリーの視線を走らせてみる。リベリオンウィッチは優人と目が合うなり頬を軽く染め上げ、決まり悪そうに視線を逸らしてしまう。

(少しからかい過ぎたかな?)

普段シャーリーのオモチャにされていることの多い優人は、ちよつとした仕返しのもりで彼女をからかったのだが、少々悪ふざけが過ぎたようだ。そう思い、優人は密かに自省する。

「ふあ〜……」

ふと可愛いらしい欠伸声が耳朶に優人の触れる。声の主はペリーヌだ。

大きく開いた口元を右手で隠して欠伸をする仕草と悠然と椅子に座る様は、やはり貴族令嬢に相応しい優美なものだった。

隣では、ペリーヌとは対照的に口を全開の上で大欠伸を掻くハルトマンの姿もあった。

ネウロイの襲撃がなければ、彼女は1日の殆んどを睡眠か飲食に費やす。そんなハルトマンにとつて、深夜の会議や打ち合わせは宛ら拷問といったところだろう。

バルクホルンは憮然とした様子で、背を壁に預けて立っている。帝政カールスラント皇室親衛隊の介入に起因する不機嫌さを隠そうともしない。障らぬ神に崇り無し。優人はバルクホルンに声を掛けずにいた。

「みんな、お疲れ様」

やや遅れてミーナがガンルームに姿を見せる。傍らには竹井の姿もあつた。

2人が入浴と軽い食事を済ませてからガンルームに足を運んだため、デブリーフィング開始がさらに遅くなつてしまった。しかし、そのことで不満を抱いたり、不平を言つたりする者はいなかつた。

ミーナと竹井は、皇室親衛隊という反ウィッチ派の連合軍将官より遥かなに厄介な難敵と、何時間も顔を突き合わせていたのだ。心身の疲弊は凄まじいはず。

軽食で腹を満たしたり、熱い湯に浸かつて少しでも疲れを癒さんとする彼女達を責めるほど、ウィッチーズの面々は狭量ではない。

「昼間の作戦は厳しい戦いになつたけれど。特に大きな怪我はしていないようね……」

ミーナはぐるりと首を巡らせ、ウィッチーズひとりひとりと視線を交わす。仲間達の無事を改めて確認すると、彼女はさらに言葉を続けた。

「ここで、みんなに報告しなければならぬことがあるの……竹井大尉」
「は？」

501の司令に促され、竹井は制服のポケットから写真を取り出す。ウィッチーズの視線がテーブルに置かれた一枚の写真へ集中する。

「ハ、ハ、これは!?!」

バルクホルンはハツと息を呑む。写真には、ガリア・カールスラント国境方面にて作戦行動を実施していた宮藤隊——宮藤兄妹、竹井、シャーリーの4名——が遭遇したウォーロック擬きの機影が映し出されていたのだ。

「どうみても、『アイツ』にそっくりだよね?」

「ウォーロック!?!……………」

ルッキニーもまた、両目をパチくりさせながら驚愕を口にする。

予めウォーロック擬きと戦闘を経験していた芳佳も、改めて認めた敵の存在に動揺を禁じ得ない。

「そう……これはウォーロック。でも、以前戦ったものではないわ」

3人の見解を肯定しつつ、ミーナはウォーロック擬きについての解説を付け加えた。

「ガリアの巢で得たウォーロックの情報を元に作り出された新しいネウロイ。つまり、

『ネウロック』ね」

「ホント似てるねえ〜……そっくりだよ」

と、動揺を通り越して感嘆とさえ受け取れる発言をするハルトマンへ苦笑を向けると、ミーナは解説を続けた。

「このネウロツクは、カールスラント方面から天城に向けて急速接近してきました。ですが、早くに察知したサーニヤさんとエイラさんの活躍で、天城及び雪風への深刻な被害は回避されました」

「すごいすごい！サーニヤちゃん、エイラさん！」

ウオーロツク擬き——ネウロツクを撃退し、扶桑海軍の艦艇2隻を守りきった北欧組の2人に、芳佳が尊敬の眼差しと惜しめない賞賛の言葉を送る。

「そ、そんなことないよ……」

「当然だ。サーニヤにはワタシがついてるんだからナ。あんなのに負けるわけがないダロ！」

サーニヤは照れくさいのか。雪の想わせる真っ白な頬を赤らめて、俯き加減に応える。

一方エイラは誇らしげに胸を張り、自分とサーニヤの活躍を自賛していた。

彼女達の活躍はもちろんだが、天城と雪風も対空火炮で可能な限り2人を支援していた。エイラはともかく、サーニヤは扶桑海軍艦艇の援護あつての戦果だと考えている。

「天城を追われたネウロツクは、次に宮藤隊を追撃。戦闘を行つています。詳しい状況を教えてもらえるかしら？」

と、ミーナは宮藤の4人へ視線を走らせ、周りもそれに倣つて優人等に目を向ける。

「そうですね……」

隊長の優人を差し置いて、まず竹井が口火を切る。顎に親指と人差し指を添え、扶桑海軍のベテランウィッチはおもむろに言葉を発した。

「私は肝心のウオーロツクを見ていないから、どの程度似ているのかは分からないのだけれど。他のネウロイを圧倒するほどの力を持つネウロイであったことは間違いないありません」

竹井は途中で言葉を切り、チラツと優人の方へ視線を流す。

どうやら自分の代わりに説明してくれとのことらしいが、察するにウオーロツクについては入浴中ミーナから簡単な説明がなされていると見て間違いない。

トレヴァー・マロニー元ブリタニア空軍大将と彼の派閥の不祥事やウオーロツクに関する情報を一切口外してはならぬと、連合軍とブリタニア空軍双方の上層部は501に対して箝口令が敷いていた。

しかし、竹井をデブリーフィングに参加させたということは、ミーナが彼女にも説明する必要を感じてゐる証左ということだ。どのみち親衛隊を通して天城の乗員達にも知

らされてしまっている。

優人は上層部の厳命にも構わず、ネウロツクの報告を始めた。

「あのウォーロツク擬き……ネウロツクとは、作戦目標の自走砲型ネウロイと交戦中にマジノ線地下通路で接触した。具体的な性能についてだが、戦闘機型から人型への変形機構はもちろん、攻撃力、防御力、機動力。どれもオリジナルのウォーロツクを上回っていた。さらにヤツは、俺達が無力化した自走砲型ネウロイと融合し、自身をネウロイに強化。マジノ線の外へ離脱していったんだ」

「融合、つてナンダ？」

優人の言ったことがいまいちピンと来ず、エイラは小首を傾げる。そんなスオムスウィッチに、シャーリーがさらに分かりやすく説明する。

「ウォーロツクが赤城と合体しただろ？あんな感じかな？」

「うじゅ、そんなとこまで真似っこしてる……」

「まったく、悪趣味ですこと……」

優人とシャーリーの報告を聞いて、ルッキニーは開いた口が塞がらず、ペリーヌは不愉快そうにぼやいていた。

「しかも、今度はネウロイ同士でか」

「うわあ……やだやだ。勘弁してほしいよね」

「……やっぱりね」

冷静な口調で分析するバルクホルンと、露骨に嫌そうな顔で不満を吐露するハルトマンに続き、ミーナが小声で呟く。

扶桑海軍ウィザードとリベリオンウィッチの説明に対する相槌とも、単なる独り言とも受け取れた。

「その後なんだが、インペリアルウィッチーズの介入もあつて自走砲型ネウロイのコアを破壊に成功。ネウロックは分離し、カールスラント方面へと逃走していった」

「逃走したネウロックは、私の方でも追跡していました」

優人の言葉を継ぐようにして、サーニャが魔導針で捕捉したネウロックの動向を報告する。

「どうやら、カールスラント北西部にあるネウロイの巣へ撤退したと見て間違いありません……」

人類側が存在を確認している中でカールスラント北西部に存在するネウロイ巣といえば、エルベ川河口付近の小規模な巣のことだろう。

小規模という表現から分かるように、ガリアや他の地域に存在するネウロイの巣と比べて小さめだが、それでも見る者を威圧するほど巨大なものだ。

「このネウロックが出現した目的が分からないのが気になるわね……」

「そもそも、ネウロイが何を考えているかどうかも分からないからなあ?」

難しい顔をするミーナの言葉を継いだシャーリーが、やれやれと肩を竦める。

「私達は、これからどうすればいいんですか?」

自分に指示を仰ぐ芳佳に対して、疲労の色を滲ませた鮮やかな緋色の瞳を向け、ミーナは応える。

「親衛隊の要請で、私達はあちらが実施しているネウロックの搜索を正式に協力するなつたわ。インペリアルウィッチーズを中心とした親衛隊、501、天城で臨時の独立戦隊を編成して、作戦指揮もゲオルグ・ゾンバルト親衛隊准将閣下が執られるそうよ」
「ちよつと待て! 私達は、あんな政治被れ共の指揮下に入るのか!」

真つ先に反応したのはバルクホルンだった。良くも悪くも生粋の軍人肌と言える彼女には、政治色の強いカールスラント宰相の直属組織に都合良く使われることが気に入らないらしい。

堅物大尉の表情には、現状に対する不満がありありと現れている。

「あくまでこの件が片付くまでよ」

と、ミーナは嘆息混じりに応じる。バルクホルンの反応を予想していなかったわけではない。

だが、彼女はついさつきまで悠貴やゾンバルトと互いの腹を探り合い、疲れてきつて

いる。今のミーナには、憤慨するバルクホルンを宥めるだけでも一苦労だ。

「一時的だとか、そういう問題ではない！何故我々が奴らに指揮権を譲らなくては——」
「落ち着けよ！バルクホルン！」

ヒートアップしかかっているバルクホルンを優人が一喝する。

「ここで連中と争うのは得策ではない、ミーナはそう判断したんだよ」

「しかしだな——」

「お前は大いに不満かもしれないが、俺はミーナの判断を支持する。常に大局的な見地から501を守ろうとするミーナの考えが間違いだった試しがあるか？」

「くっ……い！」

扶桑海軍ウイザードに諭され、バルクホルンを口を噤んだ。確かにミーナは、自分達前線の将兵とは幾分異なった目線で状況を見ている。優人の言う大局的な見地からだ。

そういった見方が出来るミーナだからこそ、当初は夢物語と揶揄されていた統合戦闘航空団の創設を実現させ、ガリア解放を成し遂げるまでの数年間501部隊を存続させたのだ。

それでいて現場の心を忘れず、普段から仲間達を気遣っていた。能力・人格の両面から見て、軍隊における理想の現場指揮と言える。

バルクホルンとて、ミーナに非があるなどとは全く思っていない。501の指揮権を

親衛隊へ譲渡しなくてはならない無茶苦茶な状況に不満があるだけだ。

しかし、内心激情家な彼女は、結果的にミーナを責め立てるような言動を取ってしまったのだ。

ただ、優人としても501・親衛隊・扶桑海軍からなる混成部隊の運用については不安を禁じ得なかった。

正規軍所属する者同士である501と天城であつても、前線部隊の在り方や任務に対する認識が必ずしも同じではない。さらに大国の政治責任者直属組織である親衛隊と国防軍では、戦争に関して著しい見解の相違が見られる。

全てが順調に運ばいいが、何か問題が発生した際に各方面の考えが一致するとは限らない。各々が己の本分を果たそうとするほど、互いの意見が衝突することも十分予想される。

加えて最高司令部の命令ともなると、ミーナと優人がそれぞれ頼りにしているカールスラント空軍ウィッチ隊総監——アドルフイーネ・ガランド少将や、扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令長官——赤坂伊知郎大将の助力もどれほど得られるか。

「とにかく、ミーナ中佐が仰つたようにネウロツクの件が片付くまでは親衛隊の麾下で行動ことになるでしょう」

一時的にガンルームを支配していた沈黙を竹井が破った。

「予定では、もうガリアに上陸しているはずだったのに……申し訳ありません、皆さん」
親衛隊の横暴を許してしまったことに責任を感じているらしい。竹井は申し訳なき
ような表情で謝罪する。

その弱々しい姿が、優人には泣き虫だった新兵時代の彼女と重なって見えた。

「気にしないで竹井さん、あなたのせいではないわ。とにかく、今は一刻も早くネウロツクを倒すことだけを考えましょう」

「……はい、ありがとうございます」

ミーナに温かい言葉に励まされ、竹井の表情から陰りが消え去る。

例え親衛隊の介入がなくなるとも、どのみち西部方面総司令部あたりから似たような命令が下されたことだろう。

ネウロツクがまた出現した時、ウィッチ部隊でなければ対抗出来ない。それもウオーロツクとの戦闘経験があるストライクウィッチーズが望ましい。

敵の機動力を鑑みるに、解放されたガリアはもちろん、ブリタニアもヤツの攻撃範囲内に位置している。

つまりネウロツクは、ガリアの解放とブリタニアの防衛を主任務としていた第501統合戦闘航空団にとって、決して野放しに出来ない存在なのだ。

「さて、今日はもう新たな動きは無いだろうし。解散としようか？」

優人が訊ねると、ミーナは小さく頷いて同意を示す。司令の了承を得た副司令代理兼戦闘隊長代行は、最後にウィッチーズと向き直る。

「デブリーフィングはこれにて終了・解散とする。各自いつでも発進出来るよう準備は怠るなよ！」

『了解！』

威勢の良い返答を聞いて、優人は満足げに頷く。だが、最愛の妹にのみツーンとそっぽ向かれてしまったことが、優人にはどうしようもなく哀しかった。



「ミーナ……今、大丈夫か？」

デブリーフィング終了から約1時間後。借り受けている船室にて、寝間着に着替えていたミーナの元に来客が訪れた。

小気味良いノック音と聞き慣れた声がミーナの耳朶に優しく触れ、客人の来訪を告げる。客の正体は優人だ。

「え、ええ……どうぞ」

戦友とはいえ、まさか深夜に異性が訪ねてくると思わなかった。一瞬逡巡したが、す

ぐさまドア越しに声を返して入室を促す。

部屋に入ってきた優人もまた寝間着——半袖のTシャツと黒の半ズボン——に着替えていた。

「あ、悪い……寝るところだったか？」

ミーナの寝間着姿を見るなり、優人は気恥ずかしそうに目を逸らした。

彼女の寝間着は、優人も目にしたことのある薄いピンク色のキャミソール。制服着用時に履くエンジ色のズボンはアダルトな雰囲気醸し出しているのに対し、こちらは清楚な女性らしさを演出している。

「いいえ、大丈夫よ？それより何か用かしら？」

夜遅くに優人がミーナを訪ねたのは、これが初めてではない。以前、深夜に部屋を訪れた時も彼女のキャミソール姿を目にしている。

あの時のミーナは異性に対して、必要以上に肌を晒さぬようカーディガンを羽織っていた。しかし、今回はキャミソールの上に何も着ていない。

当然、普段着用しているオリードラブの制服と比較して腕や肩等が露出しており、女性特有の甘い香りがする白磁の肌を惜し気もなく晒している。

天城の艦内は陸の航空基地に比べて少々暑苦しく感じるのか。扶桑海軍ウィザードを以前よりも信頼するようになったのか。

もしくは敢えて肌を晒し、優人の反応を見て楽しもうとする悪戯心故なのか。いや、それは寧ろハルトマンやシャーリーの領分か。

「ああ……これ、良かったら」

そう言つて優人は木製の丸型お盆を差し出す。お盆には熱い扶桑茶が入れられた湯呑みと、沢庵ふた切れに2個のお握りを載せた皿が置かれていた。

「……これは？」

「主計の人からお前があんまり夕食を食べなかつた、つて聞いてさ。夜食でもと思つて、作つたんだよ」

「その為にわざわざ？」

てつきり親衛隊との面談について訊きにきたとばかり思つていた。意外過ぎる用件にミーナは少々面食らう。

「疲れてるのかもしれない。けど、食事はちゃんと摂らないと身が持たないぞ？ウィッチも隊長も身体が資本だろ？」

と、優人。やや説教染みた言い方をする彼が、何処と無く坂本も連想させ、ミーナはクスリと小さく笑う。

「ふふ♪そうね。せつかくだし、頂くわ」

ミーナは「ありがとう」と一言礼を述べ、優人からお盆を受け取る。

炊きたての白米の甘い香りと、扶桑茶に使われている若葉の爽やかな香りが鼻腔を攪り、気付かずにはいた己の空腹感を自覚させる。

「何だ、書類仕事か？」

机の上に置かれた書類が優人の目に留まる。どうやら昼間の作戦やネウロツクに関する報告書らしい。

尤も、501基地にて毎日のように書いていた総司令部に提出する物ではなかった。

親衛隊のゾンバルト准将から要請され、急遽纏めなくてはならなくなった書類だ。既に数枚ほど書き終えてある。

「ええ……今回の報告書を急いで上げないといけなくて……」

「代わろうか？」

「えっ？」

「疲れてるだろ？残りは俺に任せて、お前は今夜休憩してろよ」

そう言うなり、優人は机に着いて羽根ペンを手に取った。書き終えた書類に軽く目を通すと、慣れた筆運びで残りの書類を片付け始める。

「そんな悪いわ！後少しだけだから、私が自分で——」

書類仕事を代わってもらうことを申し訳なく思ったミーナだが、彼女はすぐに言葉を止める。

不意に立ち上がった優人が、彼女のことをジッと注視したからだ。

さらに下から掬い上げられた彼の手が、ミーナの顎にそつと触れ、そのままを彼女の顔を引き寄せる。ミーナは優人の眼前に顔を突き出す格好となった。

「ゆ……優人？」

至近距離で見つめてくる扶桑海軍ウィザード。突然のことに理解が追い付かず、ミーナはウブな生娘のように頬を紅潮させる。

心臓の動悸も激しくなり、バクバクとやかましいくらい大きな鼓動音を響かせていた。

「やっぱり、普段よりも顔が悪い。隈ができて……目も充血してる」

「……………えっ？」

「501基地での疲労が一気に出たんだろうな」

優人はミーナの顎から手を離すと、机に戻り書類仕事を再開した。

「無理しないで休んでろ。501の隊長である以上はミーナ1人の身体じゃないんだから……………」

「……………そうね」

なんとか短く応じると、ミーナはお盆を置いたベッドの方へ移動していく。

ベッドの端に腰掛けると、未だ暴れ続ける心臓を落ち着かせるためお茶を飲もうとす

る。

(キス、されるのかと思つたわ……)

心中で眩きつつ、ミーナは湯呑みに口を付けた。既に扶桑茶は温くなつてしまつていたが、顔に熱が残つているミーナには丁度良かった。

しばらくすると気持ちが悪くなり、差し入れられたお握りを一口食べてみる。白米の甘味が口内を満たし、嚙下すればミーナの空腹感を癒してくれる。

腹が満たされれば自然と余裕も出てくる。落ち着いたミーナは、書類仕事に没頭する優人の後ろ姿を目に据える。

——身体を休ませるのも、指揮官の仕事だぞ。

——無理しないで、僕に任せて。

(……美緒……クルト……)

ふと男性と女性の優しいげな声が、ミーナの脳裏に響く。

それぞれ声の主は、一足早く501から離れた戦友——坂本美緒扶桑海軍少佐と、ダイナモ作戦時に死別した想い人——クルト・フラツハフェルト。2人も今の優人のように司令職務に忙殺されるミーナを心配したものだ。

(クルトも美緒も……優人も。変なところで似てるんだから……)

外見も性格も異なる3人。だが、何かと無理しがちなミーナを気遣つ優しさと、我知

らず彼女をドギマギさせる2点は共通していた。

(……………クルト……………)

同じ男性だからだろうか。優人の後ろ姿を注視し続けるうちに、彼の背中がクルトと重なって見えた。想い人の記憶がいつもより鮮明に甦り、堪えきれなくなったミーナの頬を一筋の涙が伝う。

(優人に言われた通り……………少し疲れてるのかしら?)

疲労故に感傷的になっているのか。ミーナは涙を拭うと、夜食のお握りを再び口に運んだ。

「ふう、終わった」

報告書を書き終え、優人は座ったまま大きく背伸びする。

日頃からミーナのデスクワークを手伝ってただけあつて、手早く済ませることが出来た。もしかすると、優人は作戦指揮より管理業務の方が向いているのかもしれない。

「……………ミーナ?」

後ろのベッドで夜食を摂っているはずの上官から返事が来ない。もしやと思つて振り返ると、案の定ミーナはベッドに横たわり、スヤスヤと寝息を立てていた。

「寝たか……………」

無理もないな、と扶桑海軍ウィザードは既に深い眠りに就いているミーナの身体に布

団を掛けてやる。

そのままにしては彼女が風邪を引いてしまうのはもちろんだが、何かでミーナの身体を覆わなければ目のやり場に困るといふのが一番の理由だった。

チラツとお盆に目を向けてみる。ミーナは夜食を綺麗に食べ終えていた。疲労が蓄積していても、食欲さえあれば取り敢えずは大丈夫だろう。

優人は安堵するとともに、ミーナが用意した夜食を残さず食べてくれたことを嬉しく思う。

(まったく、いくらなんでも無防備過ぎだよ……)

男である自分と2人きりの個室で、無防備にも寝姿を晒しているミーナに優人は苦笑を零す。

上述の通り、寝間着姿のミーナは制服着用時と比べて肌色の面積が多い。その上、彼女の身体が形作る優美な曲線は、とてもキャミソールの薄布1枚で隠しきれものではない。

うら若き乙女のものとは思えぬ艶姿は、まるで裸婦像——ミーナは裸ではないが——のようで、それだけで世の男共を魅了してやまない。

501随一のナイスバディを誇るシャーリーや、天城乗員等の前で終始艶然としていた悠貴とは、また違った色香を感じさせる。

世界的エースウィッチにして、帝政カールスラントが誇る名指揮官——ミーナ・デイトリンドンデ・ヴィルケ中佐。

“女侯爵”または“スピードのエース”と渾名され、軍内外に大勢のファンがいるであらうウィッチの最も私的な姿を、扶桑海軍ウィザードは図らずも独占していた。

ふと優人は何気無しにミーナの頭へ右手を伸ばす。緋色の髪を優しく梳いてみる。艶やかな髪よりフワツと甘い香りが立ち込め、扶桑海軍ウィザードの鼻腔を優しく擦った。

そのまま手の平を這わせながら下方へ流し、白く柔らかな頬に触れる。すると、ミーナの身体がピクツと震え、「んっ……」と艶色を滲ませた声を唇から漏らした。

形の良い唇は薄い桜色をしており、理想的な艶と潤いを保っている。

優人は頬から右手を離し、その魅力的な唇に人差し指と薬指を添えようとした。

「……………って、何やってんだ俺は…………」

2本の指先が唇に触れる直前に優人は我に還る。すぐさまイカンイカン、と頭を振り返って邪な想いを追い出す。

用は済んだのだから、さっさとお暇しよう。ミーナを起こさぬよう物音に注意しつつ、優人は彼女が寝ているベッドから離れようとする。

「——っ!?!」

眠っていたはずのミーナが右手を伸ばし、優人の腕を掴んだ。突然のことに驚いた優人は身体を硬直させる。

「……ミーナ？」

「す〜……す〜……」

「寝てる？」

ミーナは眠っている。しっかりと握っているようで、力はあまり込められていない。しかし、寝相にしては動作が速い気もする。

勝手に髪や頬を触ったことを怒られるのかと内心焦っていた優人は、ホッと胸を撫で下ろす。

「……美緒……クルト」

「えっ？」

「美緒お……クルトお……どこ？どこに……」

友情に留まらぬ感情を抱いている扶桑ウィッチと、今次大戦で失った想い人の名を呟きながら、ミーナは優人の手を掴む力を一層強くする。

「おいて行かないで……私、一人じゃ……」

「………まったく……」

優人は溜め息を漏らしつつも、ミーナの手を握り返して穏やかな口調で語り掛けた。

「何処にも行かない。ミーナの側にいるよ」

坂本やクルトならばこう答えただろうか。優人が成り行きで2人の役を演じてみる。すると、ミーナの表情が穏やかなものに変化した。ただし、優人の手は強く握られたままであった。

「やれやれ……」

どうやら一晩中ここにいることになりそうだが、優人に憂いはなかった。ミーナ隊長の可愛い寝顔を独り占め出来ると思えば、徹夜で手を握り続けるなどは些細な問題だ。

それに、あからさまな不機嫌オーラを放っている妹が居る船室には帰り難い、という事情もある。

先程までアダルトな雰囲気の大人の女性といった印象だったが、今のミーナは内に抱いた人恋しさを無意識に吐露する繊細な少女としての一面を見せている。

周囲の期待と信頼に応えるため才色兼備の女傑を演じているが、その実は懸命に強くあり続けようとするか弱い乙女。もしかすると、本心では人に頼られるより頼りたいと考えているのかもしれない。

上層部との折衝等からくる精神的疲労・苦痛は——マロニーが501の上官になってからは特に——図り知れず、そのことを理解しながらも彼女に何処か甘えてしまっていた。

優人は、自分がいかに情けない存在か想い知らされている気分だった。

「坂本やクルトさんじゃなくてごめん。代わりと言つたらなんだけど、今夜は朝まで付き合おうよ」

罪悪感にチクリと心を痛めながらも、優人は一晩中ミーナに付き添った。張り詰めた寝顔が少しずつ緩んでいくのを見守り、いつしか優人の意識も眠りの淵へと沈んでいった。

第13話「ソーセージと菓と御機嫌斜めな妹」

1944年9月某夜、ガリア共和国パ・ド・カレー沿岸——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦——赤城型航空母艦“天城”。停泊中の本艦において、501と同様インペリアルウィッチーズをはじめとする帝政カールスラント皇室親衛隊の面々も、天城から幾つかの船室を借り受けている。

その一室では、遅めの入浴を終えたインペリアルウィッチーズ司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐が、バスローブ姿で寛いでいた。

親衛隊に命じて天城へ運び込ませた高級チェアに悠然と身を沈ませている。

「大佐」

傍らには、第1飛行隊隊長のグレーテル・ホフマン親衛隊大尉が控えている。昼間と同じく親衛隊の勤務服に身を包む彼女は、敬愛してやまない上官の為にワインを準備していた。

「本当によろしいのですか？」

深紅の液体がワイングラスを手渡しながら、ホフマンが訊ねる。

艶やかで形の良い唇へワイングラスを引き寄せつつ、悠貴は忠実な僕をチラリと一瞥

する。ホフマンの言っていることは悠貴も理解していた。

なるだけ穏便且つ秘密裏に進めたい作戦に、いくら——悪い言い方をすれば——外様の部隊である統合戦闘航空団とはいえ、各国国防軍のウィッチ隊。さらに天城は中々の狸と噂されるかの扶桑皇国海軍遣欧艦隊司令長——赤坂伊知郎扶桑海軍大将麾下の艦艇を参加させる。

悠貴とゾンバルトは、これらを自分達親衛隊の監視下に置くことで、501部隊や天城の行動を制限するのが目的らしい。

だが、どうせカールスラント行政指導部の権限を行使するなら、501部隊と劣等民族共は原隊へ戻すなり、本来の任務に就かせるなりして追い払ってしまえばいい。

それを何故わざわざ危険を冒してまで側に置いておくのか。ホフマンは理解に苦しんでいた。

現在、武装した親衛隊員等が艦橋をはじめ、艦内の主要な部署の殆んどを押さえている。艦長である青山忠大佐を含む天城乗員に何か動きがあれば、忽ち悠貴やグレートルの知るところとなる。

艦内にはあのミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐が……前ブリタニア空軍戦闘機軍団司令官——トレヴァー・マロニー元ブリタニア空軍大將をほぼ独力で失脚へと追い込んだ501の司令がいる。

加えて、ミーナと関わりが深いカールスラント空軍ウィッチ隊総監——アドルフイーネ・ガランド少将。そして、宮藤兄妹の父親と親しい間柄の赤坂は、人類連合軍最高司令部に名を連ねる501の後ろ盾的な立場を取っている。

高い政治的手腕を持つ両者の存在は、親衛隊といえど無視はできない。この2人がその気になれば、最高司令部の命令を撤回させることも不可能ではない。

「もし奴らが我々の目的に気付き、連合軍上層へ報告でもされたら……宰相派が介入し、くることだって……」

「無論、手は打っておくわ」

血のように赤いワインで喉を潤した悠貴は、ホフマンの上申を遮るように艶やかな声で応じる。

「リスクあれど、もしもの事態」が起きた場合に、501の戦力は大きい役立つはず……」

ワインを飲み干したワイングラスを掲げ、悠貴は意味深げに笑みを浮かべる。

「もしもの事態」……」

上官の言葉を繰り返しつつ、ホフマンは考え込んだ。悠貴やゾンバルトには何やら思惑があるようだが、果たして吉と出るか……。

（いや、やめよう。私はアインツベルン親衛隊大佐の忠臣。ただ、主君の命令に従うこと

だけを考えていけばいい……)

ホフマンは心の中で頭を振った。上官の判断に対する不信を消し去ると、空になったグラスに追加のワインを注いだ。

◇ ◇ ◇

翌朝、ミーナの船室――

「う……う……う……」

目をゴシゴシと擦りながら、ミーナは気の抜けた声を漏らしつつ、目を覚ます。

重たい目蓋を半分開き、ミーナは舷窓の方へ目を向ける。朝日がうつすらと射し込んでのが見えた。どうやら早朝らしい。

「……今、何時かしら?」

ボンヤリとした思考回路で、デスクワークをしていた机に腕時計を置いていたことを思い出す。

時計を確認するためには、まずベッドから降りなくてはならない。ミーナは寝返りを打ち、身体を舷窓のある壁側から反対の机側へ向ける。

「……………あら?」

向きを変えたミーナはあることに気付いた。自分が寝ているベッド上に——つまりすぐ目の前に影が存在し、自分の視界を遮っているのだ。

彼女は目覚めたばかりで、しかも明かりの点いていない船室は薄暗い。頭が覚醒しきれてないこともあり、影の正体をハッキリ視認・理解するまで数年秒かかってしまう。

「……………へっ!?……………」

ミーナが素つ頓狂な声を上げたのは、目や頭が正常に機能したのとほぼ同時だった。驚愕に見開いた緋色の瞳に映ったのは、どういうわけか同じベッドで、ミーナに添い寝するような形で眠っている戦友——宮藤優人だったのだ。

「な、な、な……………なななななななななな!」

状況がさっぱり理解出来ない。いや、そんな余裕を持つことすら許されず、ミーナは激しく動揺する。

何故優人が自分と同じベッドに入り、同じブランケットを被り、共寝をしているのか。(何で優人と一緒に!?!……………まさか、私達は何か過ちを……………?いいえ、そんなことは断じてないわ!)

「う〜ん……………」

どうにか心を落ち着けように試みるミーナを他所に、優人が目を覚ました。

といつても、目蓋は半開きで目の焦点も合っており、動きも緩慢なので半覚醒状態

と言える。

「ゆ、優人……な、何で……」

「……芳佳？」

「へ？」

「なんだよ？ やっぱり同じベッドじゃないと寂しいのかあ？」

そう言つて優人はミーナの背中へ両腕を回し、自分の方へ引き寄せた。

「きやつー！」

突然のことに驚き、ミーナは短く悲鳴を上げる。どうやら寝惚けてミーナを芳佳と勘違いしているらしい。

さらに扶桑海軍ウィザードは、最愛の妹と誤認している501部隊司令を抱き締め、髪を梳くような手つきで彼女の頭を撫で始める。

「あつーちよ、ちよつとー！」

ミーナは今、優人の腕に包まれている。彼の体温、肌の感触、異性の匂い。それらを一度に知覚し、心臓の動悸が異常に激しく速くなる。

一方の優人は、完全に目を覚ますことなく二度寝を始めていた。もちろん、ミーナを抱き留めたままだ。

「芳佳あ……」

「ひゃっ!？」

優人が寝言で芳佳の名を呼ぶ。それと同時にミーナの身体が大きく震えた。なんと、優人の両手がミーナの身体を這い回っているのだ。

背中に添えられていた左手はキャミソールの中で肌に直接触れ、頭を撫でていた右手は臀部へ添えられる。

不幸中と言うべきか。右手はローライズのズボンには侵入せず、布越しに触れていた。しかし、寝間着用のズボンは布地が薄く、破廉恥な手から尻を守るには心許ない。

さらに優人はミーナの耳元に唇を寄せ、フウフと吐息を吹き掛けていた。

「芳佳はホント可愛いなあ……」

「ひっ!？」

ミーナを妹と間違えたまま再び寝入った優人は、デレデレとした締まりのない表情で寝言を囁く。また吐息が耳に掛かり、ミーナの身体にゾクリと震える。

「ん!……んう、はあ……ん!……ん!……」

「ふふ、芳佳あ……」

「優人、いい加減に……私は芳佳さんじゃ……ああん!」

ふとミーナの身体がビクンと跳ね上がり、一際甲高い声が薄桜色の唇から漏れ出る。

臀部に添えられていた優人の右手がズボンの中へ侵入し、指先が直接尻に触れたの

だ。

(やだ……私ったら、なんて声を……)

誰かに聞かれたわけでもない。上述の通り優人は眠っている。しかし、自分の口から零れ出た艶色の滲んだ声にミーナは顔から火が出そうだった。

羞恥に駆られている間にも、優人の両手が尻や背中で暴れ回っていた。左手の指先がツーツと背筋を這い、ズボンの下へ潜り込んだ右手は柔らかな尻肉をギュツと揉み拉く。

「芳佳かあ……お兄ちゃんは、お前の為なら幾らでも頑張れるんだよ……」

「んっ……んっ……優人、やめっ……んああ！」

ミーナは、これ以上恥ずかしい声を漏らさぬよう務めるも、すぐに嘔み締めた唇からくぐもつた声が漏れてしまった。

一方の優人は、寝相とは思えない見事な手さばきでミーナを責め続ける。

「ああ……優人お……だ、ダメよ……ダメエ！んはあ！」

「芳佳あ……お前は本当に可愛いなあ……」

妹が自分に甘えてくる夢でも見ているらしく、優人はやたら幸せそうな寝言を零す。

対するミーナは身を振らせて悶え続けている。何度も彼の腕から脱出を試みるも、扶桑海軍ウィザードの両腕は逃がさないと言わんばかりに彼女を押しさえつける。

ソーセージが口へ運ばれる度、皮がパリツと弾けて小気味好い音を室内に響かせる。
「ソーセージ……だと……」

バルクホルンは両拳を力いっぱい握り締め、ワナワナと震え始める。

やがて、バンツとテーブルに拳を叩きつけて立ち上がり、艦全体へ行き渡らんばかりの怒号を飛ばした。

「こんな……こんな甘味が強いものがソーセージなわけあるかあああああー!」

目の前にあるウインナーは、バルクホルン等が知っているカールスラントのウインナーソーセージ——カールスラントでは「ウインナーヴルスト」と呼称される——とは大きく異なっていた。

バルクホルンがウインナーソーセージと認知するカールスラント製のものはサイズが大きく、スパイスを効かせているため辛味が強い。

一方、朝食に出されたウインナーソーセージは、カールスラントから扶桑へ伝わったものに手を加え、同国の食文化に合わせたものだった。

大きさはカールスラントのそれよりも小さく、扶桑の主食である白米に合わせ、肉の甘味を強くしている。もちろん、だからと言って菓子みたいに甘ったるいわけではないが……。

「え〜何で?……美味しいよ?扶桑のソーセージ」

「違う！こんなもの、断じてソーセージではない！食感は素晴らしいが甘味が気に入らん！これをソーセージと認めるわけにはいかん！」

ブンブンと激しく頭を振り、バルクホルンは重ねて否定する。

「バルクホルン大尉、落ち着いてください」

「食事時に騒々しいですわよ……って、いつものことね……」

憤然と主張するバルクホルンをまずリーネが宥め、次にペリーヌが宥める。彼女達もまた、扶桑製のウインナーソーセージに舌鼓を打っていた。

だが、其れ式で祖国のソーセージ文化を愛する堅物大尉殿を止めることなど出来ない。

「何を言うか！これはつまり、我がカールスラントのソーセージ文化が間違った形で扶桑に伝わっているということに他ならない！なんと由々しき事態だ！嘆かわしい！」

「ひっ!？」

バルクホルンが凄まじい剣幕で熱弁を展開したため、気圧されたリーネは条件反射で両の肩をビクンと跳ね上げる。

「あたしはいいと思うけどなあ……扶桑のソーセージ♪」

と、意見するのは幸せそうな表情でウインナーソーセージに舌鼓を打っているシャーリーだった。

「リベリアン！貴様にソーセージの……ヴルストの何が分かると言うんだ！」
「なんだよ、個人的な感想を言っただけだろ？」

矛先を向けてきたバルクホルンに対し、シャーリーが呆れたような口調で応じる。
それにしても、バルクホルンのソーセージに対するこの熱意はなんなのだろう。

寿司職人や板前をはじめとする扶桑人には、海外の寿司を寿司と認めない者も少なくない。自国の食文化に対するプライド故にだ。或いは、それと同じなのか。

「カールスラントのソーセージは大きめで口に入れるのが大変だけど、扶桑のは一口サイズで食べ易いし……」

そう言うと、シャーリーは何本目かのウインナーソーセージにパクつく。

ちなみにルツキーニだが、彼女は凄まじい食欲によつて早々に朝食を食べ終えていく。そして、シャーリーの隣席で満腹になった身体を丸めると、かなり早めなお昼寝タイムへ移行していた。

「用意して貰った食事にケチつけるなんて失礼だろ？誰も文句言わずに食べてるだろ？」

「なんと言われようと！これをヴルストと認めることはできん！そうだろう！ミーナ？」

「……………」

「ミーナ？」

左隣で朝食を摂っているミーナから返事がない。何事かと目をやると、心ここに有らずといった表情の501司令が、フォークの先端でソーセージを突いていた。食事は全く進んでいない。

「ミーナ？」

「えっ？あ、トゥルーデ。何かしら？」

堅物大尉が重ねて声を掛け、漸くどこかへ行ってしまったいたミーナの意識が戻ってきた。

501司令はソーセージへ向けていた顔を上げ、漫然とした表情でバルクホルンを見返す。

「どしたの？ぼくっとしちやって？」

続けてハルトマンが話し掛ける。不思議そうに小首を傾げながら、バルクホルン越しにミーナに見据える。

「昨日の疲れでも残っているのか？」

「え、ええ……そんなところよ」

バルクホルンの質問に対し、曖昧な返事で応えようと、ミーナは朝食を再開した。

とは言うものの。今朝のこともあって、中々食べる気にはならない。嫌な疲労感から

溜め息ばかりが漏れ出る。

もう一度顔を上げ、何気無しに視線を流してみると、別の席で食事中的優人と偶々目が合う。

「——っ!？」

途端にミーナの心臓が胸の中で飛び跳ね、同時に顔も熟れたトマトのように紅潮する。

「ちよ、ちよつと！トイレに行つてきます！」

やたら大きな声で宣言すると、ミーナは足早にガンルームを出ていく。彼女が潜つていた扉に、ほぼ全員の視線が集中する。

「ミーナ中佐。コレで、もう今朝5回目のトイレダゾ」

「何かあつたのかしら？」

エイラとサーニヤが順に言う。北歐組の2人もまた、小さな口をパクパクと動かし、扶桑製のウインナーソーセージを頬張っている。

「何だ？」

と、優人は首を傾げる。寝惚けた自分が何をやらかしたのかを全く知らない。いい気なものだ。

(まったく、ホント相変わらずね……)

隣で食事の中の竹井が呆れ混じりに嘆息を漏らす。詳しい事情を知らずとも優人が己の稀有な才能を活用し、「また」何かやらかした程度のことには察しがついてるようだった。

——ガタツ！

ふと大きな物音がする。ミーナのトイレ宣言に負けないそれは、朝食を終えた芳佳が椅子から乱暴に立ち上がる音だった。

大切な501仲間と一緒に食事をする楽しいひと時だというのに、扶桑海軍軍曹は誰とも言葉を交わさなかった。

大好きな兄とも、ストライクウィッチーズで一番の親友であるリーネとも口を聞かず、ただ黙々と食事を摂っていた。食事を楽しむ素振りすら見られなかった。

らしくない芳佳の様には、他のメンバーも気付いていたし、心配もしていた。だが、彼女があからさまな不機嫌オーラが出ていたため、誰も声を掛けられずにいた。

「…………ちそうさま」

抑揚のない声でそう言うと、芳佳は空になったトレイを持って立ち上がり、ミーナに続く形で退室していった。

その際、優人の方へチラリと恨めしそうな視線を寄越したが、何も告げなかった。

「…………な、何ですの？」

絶対零度。とても明るく活発な普段の姿からは想像出来ない芳佳の無感心・無感情っぷりは、氷点下を遙かに越えていた。

たった一晩で著しく豹変した芳佳の様相に、ペリーヌは当惑する。無論、他のメンバーも……。

例外は2人。ぼくつとして注意力の落ちていたミーナと、無邪気さ故に芳佳の変化に気付かなかつたルツキーニのみ。

(芳佳、まだ怒ってるのか……)

御機嫌斜めな妹を見て、優人は肩を竦める。鈍過ぎるほど鈍い扶桑海軍ウイザードも、自分が原因だということは理解しているようだった。

そんな彼の心中を察した竹井が、優人の脇腹を肘で軽く突く。一体何だ、と顔を向けてきた同期の桜を、"リバウの貴婦人"はジト目で見返した。

「ちゃんと謝って機嫌を取っておきなさい。今のままだと、作戦にも差し支えるわよ？」
「……………わかつてるよ」

優人は深く溜め息をしながら応じると、冷めてしまった味噌汁で口内を湿らせた。



食事を終えて宛がわれた船室へ戻った優人を出迎えたのは、室内を満たさんばかりに充満する冷たく重苦しい空気だった。

2つあるベッドの片方には、最愛の妹が枕を抱えて寝転がっている。相変わらず不機嫌そうだ。

いつもなら部屋に戻ってきた兄を見てパーッと表情を輝かせて迎えてくれるのだが、当然それもない。

優人は溜め息を吐きそうになるのを必死に堪えつつ、自身のベッドの縁へ腰掛ける。

「……………芳佳」

勇気を振り絞り、声を掛けてみる。案の定、返事はない。自分という存在を無視し、妹は無然とした表情で天井を見つめる。

いつもの芳佳ならば、怒ったとしてもプイツとそっぽ向く。或いは、頬を膨らませる等。可愛らしい仕草を見せてくれる妹が、威圧するようにドス黒い不機嫌オーラを発しながら無視に徹底している。

優人はどうしたものかと頭を抱えた。いや、もしかすると恐怖すら感じているのかも
しれない。

(さあて、どうするか…………)

優人は思案しつつ、荷物の中から新品の本を一冊手に取る。パラパラと捲りながら、

横目でチラリと芳佳の様子を窺う。

努めて平静を装い、なんとか話し掛けようとするも出来ないまま、ただ時間ばかりが過ぎていった。

「はあくつ……ストライカーの整備でもしにいくか」

居たたまれなくなつた優人は、わざとらしく溜め息を吐き、部屋を出ようとする。

——ばふっ！

「うわっ！」

扉の前まで進んだ優人の後頭部へ何か柔らかな物が飛んできた。それが芳佳が抱えていた枕だと、扶桑海軍ウイザードはすぐに理解する。

「な、何だ？」

驚いて振り返つた優人の背後に、いつの間にか芳佳が立っていた。

無言のまま兄をじくつと見据えた後、妹は床から拾い上げた枕で殴り始めた。

——ばふっ！ばふっ！ばふっ！

「お、おい……芳佳!?!」

いつになく攻撃的な妹と、理由が分からぬまま両腕を盾代わりに身を守る兄。

次々と繰り出される枕の応酬は特に痛み感じるわけではないが、勢いがとにかく凄まじい。まさに怒濤の攻めだ。

「な、何だよ芳佳……」

暫しの間。優人は当惑しつつ、防御に徹していた。しかし、段々と枕攻撃が鬱陶しくなり、芳佳の両腕をガシツと掴む。

「あ……………」

来年には成人を迎える兄と、まだ中学生ほどの年齢である妹。力の差は歴然。

腕を押さえられた状態では何も出来ず、芳佳はピタリと動きを止める。

「さつきから何怒ってるんだ!？」

「……………の……………」

苛立ち紛れに暴力行為の理由を問い質すと、芳佳は小言で独り言ちるように応じる。

そして、形の良い薄桃色の唇がボソリと言葉を紡ぐのを、優人は見逃さなかった。

「ん?…」

「何で、昨日は部屋に帰って来なかったの!？」

訊き返す優人に対し、芳佳は再度言葉を吐き出す。今度は大声でハッキリと…………。

「え? いや、それは……………」

さすがに「お前の機嫌が悪かったから帰れなかった」などとは言えず、優人は口籠った。

一方、芳佳はズイツと身を乗り出し、興奮気味な口調で捲し立てる。

「寝る前にお茶しよう、つて……約束したのに！」

「は？」

妹の口から飛び出た予想の斜め上を行く発言。優人は思わず間の抜けた声を漏らす。

「寝る前の……お茶？ いや、そんな約そ——」

「したよ！」

「はあ!? そんなバカな! してないぞ！」

「したもん！」

互いに声を張り上げ、「した!」「してない!」の水掛け論を繰り広げる扶桑の兄妹。どうやら兄と妹の間で認識の相違でもあるようだ。

しかし、芳佳の言う通りお茶の約束があったとして。何よりも妹を愛する扶桑海軍ウィザードが、それを忘れることなど有り得るのだろうか。

自他共に認めるシスコンで知られている彼が、そんな愚を犯すとは誰も思わないだろう。

「大切な約束を忘れるなんて、お兄ちゃん嫌い！」

「き、嫌っ?!……」

ハッキリ嫌いと言われた優人は、シヨックのあまり一瞬で顔面蒼白となり、彫刻のように身体を硬直させる。

「い、いめんさかい」

妹の一言で、扶桑海軍ウイザードは早々に降参。芳佳に対して扶桑式謝罪法——つまりは土下座——で謝意を述べる。

どっちみち、コレ以上口論を続けても堂々巡りにしかならない。

「ふんっ！」

だが、それでも芳佳はぶくつと頬を膨らませ、プイツと顔を背けてしまう。

(けど、俺は本当にお茶の約束なんてしてな……あつ！)

土下座の体勢を維持したまま、思考を働かせていた優人は、ある結論に辿り着く。

何故芳佳が、今までに無いほど不機嫌なのか。何故優人の見に覚えのない約束を口にしたのか。

優人はニヤリと口角を吊り上げると、悪戯つぽい口調で妹に問い掛ける。

「芳佳。もしかして、寂しかったのかあ？」

「へ？」

兄の口から出た意地の悪い質問。芳佳はハツと見開いた双眸で優人を捉える。この反応は、どうやら凶星らしい。

「かまって欲しいんだろ？それであからさまに不機嫌な顔をして、無視をして、嘘の約束まででつち上げて？」

「ち、違つ！違うよ！」

「ムキになつちやつて♪ホント芳佳は可愛いなあ♪」

理由さえ分かれば恐くない。優人はそう言わんばかりに調子に乗り出した。ニヤついた顔を妹へ寄せ、鼻の頭を突つつきながら囃し立てた。

兄から思わぬ反撃を受け、芳佳の顔は茹でダコの如く真っ赤になっていた。

凶星を突かれた悔しさと羞恥心を誤魔化すかのように、枕を振り回して優人の顔を攻撃する。

——ばふばふばふっ！

「もうっ！お兄ちゃんはどうしてそんなに意地悪なの！」

「痛い！痛いって芳佳あく」

「お兄ちゃんのバカ！エッチ！変態！おっぱい好き！浮気者！」

「ご、ごめん！ごめんってばあく！」

可愛らしい暴走状態に陥っている妹を、優人はギュツと枕ごと抱き締める。

芳佳は「あ……」と短く声を上げると、先程までの暴れぶりが嘘のように大人しくなった。妹を落ち着かせるのには、これに限る。宮藤優人の経験則である。

「よしよし、俺が悪かったよ。お兄ちゃん、お前の気が済むまで反省するから、許してくれないか？」

「ダメー！」

「……手厳しいな」

優人は苦笑気味に呟くと、すっかり汐らしくなった妹の頭を優しく撫でてやる。

特徴的な跳ねのある茶髪を慣れた手付き梳き、ついでに直し損ねた寝癖を整える。

「わかった。じゃあ、扶桑に帰ったらデートしよう！」

「……………」

「何処に行きたい？芳佳の機嫌が直るなら、何処にだって連れていくよ？」

「……………」

「ダメか？」

芳佳は何も応えない。その代わり小さく頷き、肯定の意を示した。

「そっかそっか……………」

優人は困り果てていた。芳佳が頑固なのは重々承知だが、今日は一際意固地になっている。はてさて、どうしたものか。

「……お兄ちゃん」

「ん？」

「聞いてもいい？鞆の中にあるお薬のこと……………」

顔を上げながら、芳佳は恐る恐る問う。優人は内心で（しまった…………）と呟いた。

薬というのは薬瓶にギッシリと詰められている錠剤。ペリーヌも以前——ウオーロツク暴走の直前——に見かけていたが、彼女は芳佳と違って詮索はしなかった。それは扶桑海軍ウィザードにとって、実にありがたいことだった。

しかし、芳佳の場合はそうもいかない。兄が自分に内緒で隠し持っていた薬瓶。その中身は一体何なのか。気になって仕方ないことだろう。

「勝手に鞆の中を見たのか？」

優人が咎めるように訊くと、芳佳は慌てた様子で言い訳を考えた。

「あつーええと、ええと………ごめんなさいー」

眩しいほど純真無垢な心の持ち主であるが故、芳佳は上手い嘘がつけない。早々に言い訳を諦め、勝手に持ち物の中身を見てたことについて謝罪する。

怒られるでも思っているのか。一度は上げた顔を再び兄の胸へ埋めて、目を合わせないようしていた。

親の説教を受けている幼子を連想させる妹の萎縮っぷりに、優人はクスクスと小さく笑声を立てた。

「なんだよ、俺がコレくらいのことでするわけないだろう？」

不安にさせぬよう明るい声音を意識して告げると、芳佳はゆっくりと顔を上げ、大好きな兄をじゅつと見つめる。

「ホント?」

「ホントだよ。ていうか俺はそんなに恐くて怒りつぽいかな?」

「そ、そういうわけじゃ……」

「可愛い妹に怯えられて。お兄ちゃん、ちよつと傷付いちやうンだけどなあ?」

「うっ……」

先程の仕返しだと言わんばかりに、優人は不機嫌そうに振る舞う。もちろん、芝居だ。ばつが悪そうに顔を顰める芳佳に対し、悪戯が成功した扶桑海軍ウィザードは満足げにほくそ笑む。

「冗談だよ。あの薬は……まあ、睡眠薬みたいなもんだ」

「睡眠薬?」

「ああ、寝つきが悪い時に飲むんだよ。最近をよく眠れてるから、まったく飲んでないけどな……」

と、説明する優人だが、彼は嘘を吐いている。薬瓶の中身は睡眠薬などではなく、一種の精神安定剤だ。

著名な扶桑海軍ウィッチにして優人や坂本、竹井の恩師——北郷章香中佐。彼女が、新人時代「ある症状」に悩まされていた優人の為、ウィッチ兼薬剤師の知り合いから融通してもらった薬である。

欧州へ派遣されてからも、扶桑本国から補給物資の一部として定期的に送られてくる。

(心配かけたくない。伝える必要もないさ)

優人はそう自分に言い聞かせると、いつの間にか機嫌が直っていた妹の顔を覗き込む。

「んで？もう怒ってないのか？」

兄の指摘で、芳佳はハツとなった。微かに頬を膨らませると、腕を胸の前で組んでプイツと背を向けてしまう。

また機嫌が悪くなってしまったらしい。そんな芳佳の姿に肩を竦めつつ、優人は可愛い妹を宥め始めた。

第14話 「ストライクウィッチーズv s インペリアル ウィッチーズ」

1944年9月、欧州・北海方面洋上——

「くっ！」

インペリアルウィッチーズ第1飛行隊所属の航空歩兵——アンナ・ターレス親衛隊中尉は、悔しさのあまり奥歯をギリツと噛み締めていた。

カールスラント製艦上航空ストライカーユニット“Bf109T型”の改良型——“Bf109T型親衛隊仕様”を両足に纏い、外見がMP43に酷似した模擬銃——橙色のペイント弾が装填された訓練用の銃——を握り締め、後方から迫る仮想敵機を睨み付ける。

現在、2隻の航空母艦——天城とドクトル・エツケナーが航行中の海上にて、ストライクウィッチーとインペリアルウィッチーズが模擬格闘戦を繰り広げていた。

とは言っても、さすがにフルメンバードで実施というわけではない。双方から参加者を6名選抜し、空母2隻のほぼ直上で空中戦を展開している。

インペリアルウィッチーズからは、ターレス中尉を含め6名の親衛隊ウィッチが参

加。親衛隊大尉のグレーテル・ホフマンが、第1飛行隊と第3飛行隊から3人ずつ指名したのだ。携行火器もユニットも、全員がターレスと同じものを装備している。

501部隊からはベテラン勢の優人、バルクホルン、ハルトマン。天才肌故、この3人に劣らぬ実力を備えるシャーリーとエイラ。さらに、戦闘隊長として504部隊へ着任予定の竹井も加わっている。彼女は優人や坂本に並ぶ大ベテランだ。

豪華過ぎるほどに豪華な顔触れに、飛行甲板へ集まった野次馬——天城の乗員達——は湧き上がっていた。どちらが勝つかで賭けをする者もちらほらいる。

「引き離せない！」

ターレスを追撃しているのは、501が誇るWエース——カールスラント空軍のエーリカ・ハルトマン中尉とゲルトルート・バルクホルン大尉。ロットを組み、螺旋を描くようにして親衛隊中尉へと接近する。

(よりによつて、この2人……)

否応なしに強敵の相手をする事となり、ターレスは内心で毒つく。

模擬戦が開始されて間もなく、彼女の2番機を担当していた親衛隊少尉が、相手側の指揮者である優人の手により早々に撃墜されてしまった。

第501統合戦闘航空団戦闘隊長代理——宮藤優人扶桑海軍大尉。噂に違わぬ正確無比であった。

精銳集団たるストライクウィッチーズは、ターレスをはじめとする親衛隊ウィッチに感嘆の声を上げる暇すら与えず、すぐさま行動を起こしたのだった。

「速いー！」

「当たらないー！」

2名の親衛隊ウィッチが模擬銃を乱射し、高速で飛び回るシャーリーへ多数のペイント弾を浴びせる。

しかし、そんなことで501部隊最速を誇るリベリオン陸軍航空軍のウィッチ——
“グラマラス・シャーリー”ことシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉を捉えること叶わない。

オレンジ色の尾を引いて殺到する自らに無数のペイント弾をもともせず軽やかなに躲す。それもP-51の最高速度を一切緩めずにだ。

「ああーもうっ！ちよこまかとー！」

「あいつ、背中にも目が付いているのか」

一方、別の親衛隊ロットもまた焦っていた。こちらの2人は敵機の背後を取り、圧倒的に優位な状況だ。

しかし、やはりペイント弾は全く当たらない。スオムスイッチの神業的な回避行動に翻弄されしまい、攻撃は悉く無駄弾と化す。

「雨が降っても気にしないく風が吹いても気にしないく槍が降っても気にしないく♪吹雪が降っても気にしないく♪」

固有魔法『未来予知』による絶対回避。スオムス空軍が誇る「ダイヤのエース」——
エイラ・イルタマル・ユーテイライネン少尉は、鼻歌交じりにペイント弾の雨に軽々避ける。

「舐めやがつてえ！」

歌の片手間に相手をしている、と言わんばかりのエイラのように、親衛隊ウィッチは苛立つ。それ故、自分達が敵側の策に嵌まっている事実気付かなかつた。

シャーリーを追撃していたロツテとエイラを追撃していたロツテは、それぞれ敵機を追って降下。凶らずも海面付近で合流を果たす。

直後、海面スレスレに飛ぶシャーリーのストライカーが巻き上げた海水によって、親衛隊ウィッチ4名の視界が遮られる。

さらに、そんな彼女達の目掛け、無数のペイント弾の雨が頭上より降り注いだ。

「うわっ!?!」

「何だ!?!」

2つのロツテで各々一番機を務めていた親衛隊ウィッチが、突然の奇襲に悲鳴を上げる。

これで親衛隊側は戦闘隊長のターレス中尉を除いた全てのウィッチが撃墜となったわけだ。

「あんたらの相手はシャーリーとエイラだけじゃないぞ？」

「チーム戦では、もつと周りに気を配りなさい」

ペイント弾に続いて、叱責の言葉が2人分を飛んで来た。親衛隊ウィッチ達は声につられて顔を上げる。

彼女等の瞳に映ったのは、最速のリベリアンとスオムスのトップエースに気を取られ、一時的に存在を失念していた扶桑海軍大ベテラン——501部隊戦闘隊長代理と、504部隊戦闘隊長の地位が内定済みの竹井醇子扶桑皇国海軍大尉だった。

模擬銃——扶桑海軍航空歩兵主力兵装の九九式二号二型改13mm機関銃に酷似したものの——を射撃位置に構え、銃口を親衛隊ウィッチに向けている。

上空からの射撃を仕掛けたのは、言うまでもなくこの2人である。

「——っ!?クソッ!」

悔しげに声を張り上げたのは、撃墜判定を受けた4名の親衛隊ウィッチの中で最先任のゲルダ・テニッセン少尉。

彼女は自分達が敵の術中にまんまと嵌まっていたことを位置早く理解したのだ。

シャーリーとエイラが挑発等して自分達の気を引きつつ、海面まで誘導。水飛沫を上

げて一瞬視界を奪い、動きが止まったところを扶桑の2人が狙撃する。そういう戦術だ。

少し考えれば予測と対処可能だった。しかし、2人がかりで1人に手こずる焦燥感が視界を狭めてしまっていたのだ。

それに僚機との連携も十分とは言えず、シンプルな戦術ながら碌な打ち合わせも無しに実行・成功させた501側と比べてチームワークにやや難があつたのも敗因であつた。

「残るはお前だけだー」

「くっー」

バルクホルンに指摘され、ターレスは「くっー」と屈辱に表情を歪ませる。501が誇るWエースの攻勢に防戦一方となつている上、孤軍奮闘状態に陥つてしまつている。

だが、厳しい状況下においても、親衛隊中尉はまだ勝負を捨てていない。ペイント弾を散撒き、弾幕を張ることで近付けんとする。

(ほお……中々骨があるじゃないか！)

親衛隊を快く思わないバルクホルンではあるが、それでもターレス個人のことは正當に評価している。

もちろん、この程度で止められるほど彼女もハルトマンも甘くない。Wエースは容易

に弾幕をすり抜け、ターレスへと迫った。



模擬戦を終えた12名の航空歩兵は天城へ順次着艦し、各々上官の元へ向かう。

インベリアルウィッチーズを圧倒した501から参加したメンバーは、仲間より凱旋さながらに迎えられ、勝利の余韻に浸っていた。

「シャーリー、おつかえりい〜♪」

飛行甲板へ降りてきたシャーリーにルツキーニが抱き着きついた。

「グラマラス・シャーリー」の由縁たる爆乳に顔を埋めて、スリスリと頬擦りする。

「おう！ただいま！」

「やったね！大勝利だよ！」

と、胸から顔を上げたルツキーニが、改めて称賛の言葉を贈った。

対してシャーリーは、自慢の胸を強調するように反らし、豪快に笑いながら嘯く。

「あつはははは！あたしにかかればこんなもんさ！」

「何ダヨ。ワタシだって活躍したんだゾ」

自分一人の手柄のように振る舞う——シャーリー本人にそんなつもりはないが——

リベリオンウィッチを横目で睨みつつ、エイラは不平を漏らす。

そんなスオムスウィッチの元に、オラーシャ陸軍のナイトウオッチがトコトコと小走りで駆け寄って来る。

「エイラ、お疲れ様」

そう労いつつ、サーニヤは準備していた汗拭き用タオルを訓練終わりのスオムスウィッチに差し出した。

「ありがとナ、サーニヤ♪」

ムスツとしていたエイラだったが、親友の天使のような微笑と声楽家を連想させる心地よい声色に相好を崩す。

「エイラ、今日も絶好調ね♪」

「見てたの力？部屋で寝てても良かったんだゾ？」

サーニヤからの賛辞が照れ臭いのか。エイラは白雪のような頬を紅潮させつつ、気恥ずかしそうに後頭部を搔く。

「だって、エイラの活躍が見たかったから……」

「ナ、ナンダヨ♪♪そう言われると照れるじゃんかヨ♪♪」

先程の不機嫌さは何処へ行ったのか。エイラの表情に締めりが無くなり、一目でデレデレしているのが分かる。

「あなた達もお疲れ様」

「これくらいなんでもないさ」

「へへくん♪」

ミーナもまた、同郷の2人に労いの言葉を掛ける。バルクホルンは生真面目な表情で、ハルトマンは得意げに笑って応じた。

「竹井さんと……その、優人も……お疲れ様」

扶桑海軍のベテラン2名にも視線を向けるミーナだが、竹井とはしつかり目を合わせたのに対し、優人の場合は視線をやや横に流していた。頬も軽く染まっている。

今朝の一件がまだ尾を引いているらしい。まあ、異性に臀部や背中を散々撫で回されたのだ。

その日のうちに立ち直ったり、ましてや忘れて無かったことにする等出来るはずもない。

ぎこちないながらも平静を装えるあたりは、さすが個性的なメンバーを統括してきた501の指揮官だと賞賛したいところだ。

「ミーナ、どうしたんだ？」

「へ？な、何のことかしら？」

優人から突然の問い掛けに、ミーナはやや間の抜けた口調で応じる。

やはりどうか。彼女の瞳の動きは不自然だった。焦点が定まらず、目線が上下左右へ泳いでいる。

「顔が赤いけど、熱でもあるのか？」

そう言つて優人はミーナに顔を寄せる。途端、501司令の脳裏に今朝ベッド上で目にした風景——超至近距離まで迫つた扶桑海軍ウイザードの寝顔がフラッシュバックする。

「な、なななな！何でも無いわよ！」

分かりやすい動揺を見せつつ、ミーナは反射的に優人と間合いを取る。頬に射した紅も、一瞬のうちに顔のほほ全体まで広がった。

「わ、私は……その……ちよつと、電信室へ用事があるから！優人にトウルデー！後はお願いね！」

戦闘隊長代理扶桑海軍大尉と副官役のカールスラント空軍大尉にそれだけ告げると、ミーナは脱兎の如きスピードで場を後にした。

「ミーナのやつ、一体どうしたんだ？」

「私にも分からん。今朝から様子が変だった」

ミーナの後ろ姿を見送りながら、優人とバルクホルンがかような会話を交わす。2人の頭の中ではクエスチョンマークが踊っていた。

2人のさらに背後では、501司令御乱心の原因におおよその見当を付けている竹井が、呆れの湛えた眼差しを優人へと注いでいる。

同じく事情に察しが付いているらしいハルトマンも、にひひと口角を吊り上げて悪戯っぽく笑う。

「皆さ〜ん！お疲れ様で〜す！」

「冷たい物をどうぞ〜！」

不意にミーナと入れ替わる形で芳佳とリーネ。そして、ペリーヌの3人が甲板へ姿を見せる。

2人共、模擬戦を観戦していたというのに優人等が着艦した時には何故かいなくなっていた。

どうやら、気を利かせて海軍ラムネを用意してくれたらしい。501全員と竹井、天城に乗艦中のインベリアルウィッチーズ第1飛行隊——合計18本のラムネ瓶をそれぞれ6本ずつ、胸元で抱き締めるように運んでいる。

仲間達に向かって大きく右手を振ったため、芳佳は危うくラムネ瓶を落としかけていた。

「お？ラムネか」

「ありがとう頂くわ」

まず優人と竹井が芳佳から瓶を順に受け取る。次いでバルクホルン等にも渡している。

しかし、個性的なウィッチばかりな統合戦闘航空団だけに趣向も様々。

シャーリーやハルトマンはともかく、堅物大尉殿はリベリオンのコーラに似た扶桑の飲料水を訝しがり、中々口を付けようとしなない。

インペリアルウィッチ側にも人数分提供したのだが、グレーテル・ホフマン大尉に「結構だ」と冷たくあしらわれてしまう。

親衛隊大尉の対応に、芳佳とリーネは僅かながら沈んだ表情を見せ、ペリーヌは「何なんですの！あの態度は！」と御冠であった。

「にしても。カールスラントの皇室親衛隊って、空母まで持つてたんだな……」

ラムネで喉を潤したりリベリオンウィッチが、天城と並走するドクトル・エツケナーへ怪訝そうな眼差しを向ける。

数の少ない航空ウィッチに独自仕様のストライカーユニットや艦上機。挙げ句は、大型空母の所有まで許される親衛隊——或いは後ろ楯であるカールスラント宰相——の権威には驚愕を通り越して呆れ果てる。

「あの空母、なんだか何処かで見たような？」

天城と並んで航行中する親衛隊麾下の空母——ドクトル・エツケナーを威容を目に据

え、芳佳は小首を傾げた。

「そう言えば、船体が赤城や天城に少し似てないかな?」

同じく芳佳の隣でドクトル・エツケナーを観察していたリーネも疑問を口にする。さらに、そこヘルツキーニまでもが割り込んできた。

「そつかなあ? アタシにはみんな同じに見えるけど、空母の空似なんじゃない?」

中々上手いことを言うルツキーニに対し、優人の心の中で（ルツキーニに座布団一枚!）と喝采の声を上げた。

それと同時に「みんな同じに見える」という彼女の発言についても、同意までいかないが尤もなことだと思った。

ルツキーニは、あくまでロマーニヤ空軍の士官だ。扶桑海軍航空隊やリベリオン海軍空母航空団ないし海兵隊に属する航空歩兵ならいざ知らず、空陸軍の関係者に同じ艦種の軍艦の見分けなどつかない。

優人も新兵時代は、同艦種の軍艦は皆同じに見えていた。それらの違いが分かるようになったのは、扶桑海事変中盤あらだつたろうか。

しかし、ルツキーニの言うことも間違いいではない。扶桑海軍の赤城及び天城と、親衛隊で運用されているグラーフ・ツエツペリンとドクトル・エツケナーは同型艦なのだから……。

「親衛隊で運用されているドクトル・エツケナー。そしてグラーフ・ツエツペリンは、本来はカールスラント海軍所属の艦艇なんだよ」

と、不思議そうにドクトル・エツケナーを見つめついるウィツチ等に、優人が簡単に解説する。

「そうなのか？リペリオンの他に空母を持つてるのつて、扶桑とブリタニアの海軍ぐらいだと思つてたけど……」

「あら、失礼ですわね！ガリアにも空母ぐらいありますわよ！」

シャーリーの聞き捨てならない発言に対し、ペリーヌがすかさず反論する。

何も腹を立てるようなことでもないだろうが、彼女はホフマンから邪険に扱われて少々気が立っているのだ。

「まあ、サイズは少々小さめですけど……」

「あ、やっぱりガリアの空母つて小さいんだ？」

自国の空母に対する自信の無さから尻窄みとなつたペリーヌの言葉を、ルツキーニが耳聴く聞き付ける。

「ペリーヌと同じく♪にやははは！」

「なつ！何が私と一緒にだとおっしゃいますの!？」

「わかつてるクセに……♪にやははは！」

ガリア貴族令嬢の慎ましやかな胸元へ視線を送りながら、ルツキーニは快活に笑う。ペリーヌは「ぐぬぬ！」と奥歯を噛み締め、自分を小馬鹿にするロマーニヤウィッチを悔しげに睨み付ける。

「でも、天城や赤城にそっくりなのは……どうして？」

兄へ歩み寄った芳佳が上目遣いで訊くと、優人はさらに詳しく説明を始めた。

「グラーフ・ツェッペリンとドクトル・エツケナーは、元々扶桑海軍の空母。赤城型の三番艦と四番艦で、それぞれ『愛宕』『愛鷹』と呼ばれてたんだ」

「扶桑からカールスラントに譲渡・改装の後、海軍で運用されていたのよ。同型艦だから外見が酷似している、というわけ」

もう1人の扶桑海軍大尉が補足を加える。2人の説明を聞いたリーネは「そうだったんですね」と、納得した様子だ。

「まあ、この2隻についてはミーナの方が詳しいだろうな。ウィッチ用設備搭載の為に、1時期協力してたらしいから……」

「ミーナ中佐、遅いわね。ちよつと見てくるわ」

そう告げると、竹井はミーナを追って電信室へと向かう。

そろそろ遣欧艦隊総司令部へ定時報告の時間なので、そのついでだろう。

「ハイハイ。でも、それが何で親衛隊の連中に使われてるんだ？」

竹井を見送った後、素朴な疑問を抱いたエイラが手を上げて質問する。

他のメンバーも多少は関心があるのか。答えを催促するように優人へ視線を集中する。

「親衛隊の長官が、当時の海軍総司令官に取引を持ち掛けたんだ」

スオムスウィッチの質問に答えたのは、優人ではなくバルクホルンだった。

無然と胸の前で腕を組み、不機嫌さを醸し出した口調で説明する。

「空母発着艦が可能な航空ウィッチとストライカーユニットを提供する。その代わりに必要に応じて2隻を親衛隊の指揮下で運用させる、と……」

「カールスラントの海軍には、ウィッチがいなかったからさあ……空軍もウィッチが必要だったし……」

バルクホルンの言葉を継ぐようにして、ハルトマンが説明を付け足す。

本大戦初期、カールスラント国防海軍総司令官の地位にあったエルヴィン・レーダー元帥は、空母運用に必要な艦上ウィッチを確保するため、空軍に協力を求めていた。

しかし、国防空軍総司令官の元帥——ヘルムート・ゲーリング元帥とは犬猿の仲であり、さらに海軍は三軍の中で最も発言力が低い。空軍との対等な交渉など臨めるはずもなかった。

それに航空ウィッチの提供と口に出すのは簡単だが、ただでさえウィッチは数の少な

い。1人でも多くの航空歩兵を自軍の指揮下に置きたい空軍上層部は難色を示すだろう。

そこへ皇室親衛隊長官にして親衛隊元帥のライナルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒが、幾つかの条件を提示した上で航空ウィッチと艦上ストライカーユニットを提供したのだ。

航空ウィッチで編成されたグラーフ・ツエツペリンとドクトル・エツケナー所属の飛行隊が、皇室親衛隊第1独立航空団『インベリアルウィッチーズ』の前身である。

「あ、ごめん。ちよつとトイレ行ってくる」

飲み終えたラムネ瓶を芳佳に預け、優人もまた艦内へ向かう。会話中ずつと我慢していたらしい。小走り気味で歩いていく。

「おう！ゆつくりブリブリして来なよ！」

「シャーリーさん、下品ですわよ！」

ケラケラと笑って見送るシャーリーの発言に、ペリーヌが顔を顰める。

そして、ウィッチーズがウイザードを見送って間も無くのことだった。

——パアン！パアン！パアン！

ふと乾いた音が甲板上に響き渡った。正規軍所属の航空歩兵達の視線が音のした方へ集中する。

どうやら音の発生源は噂の親衛隊——インペリアルウィッチーズらしい。第1飛行隊長のホフマンが、模擬戦に参加したターレス中尉以下3名の部下と向かっている。

よく見ると、ターレス達の頬が赤く腫れ上がっているのが確認できる。

「何だ、あの有り様は!?!」

周囲の目も憚らず、ホフマンが吼える。なるほど。先程の乾いた音の正体は、平手打ちの殴打音。模擬戦の体たらくを見て憤慨した飛行隊長殿が、部下達に体罰を働いたものらしい。

「スコアは6対0! 完敗だぞ! 貴様等、それでもアインツベルン大佐の親衛隊員か!」

ホフマンは続け様に怒声を張り上げる。顔を歪ませ、表情が険しいものへと変わってしまっていては、せつかくの美貌が台無しだ。

「言い訳はしません」

そう返したテニッセン少尉は平手打ちを受けた際に唇を切ったらしく、少量の出血が見られた。

目付きもやや反抗的で、上官に対する不満と怒りがありありと現れている。

「何だ、その態度は!」

「怒っちゃヤ〜ヨ♪」

「「「「……………はっ!」」」」

「ギスギスとした雰囲気の中に場違いなほど能天気な声色が混じり、親衛隊ウィッチ等は啞然とする。

「うりやー！」

「ひゃああ!?!」

その直後、背後から伸びた2つの手がホフマンの胸を捉えた。

憤然としていた飛行隊の口から、なんとも可愛らしい声が漏れ出る。

「う〜ん? シャーリーよりは小さいけど、中々良いおっぱい♪」

楽しい掛け声と共に無遠慮でホフマンの胸を鷲掴みにした何者かが、ぶつぶつと批評する。

空気を読まずに、このような狼藉を働く輩は限られている。

「フランチェスカ・ルツキーニ少尉」

と、タレースが呆然と呟く。彼女の上官たる親衛隊大尉にちよつかいを出したのは言うまでもない。501メンバーの妹分——ロマーニヤ空軍少尉のフランチェスカ・ルツキーニである。

無邪気な笑顔を見せつつ、慣れた手つきで豊かな双丘を堪能している。501ではお馴染みの風景だ。

「——っ!?!触るな!」

「うじゅ!?」

怒号を轟かせながら、ホフマンは乱暴な動作でロマーニヤウイツチを払い除ける。相手の反応に目を丸くするルツキーニだが、ホフマンは驚く暇すら与えなかった。

親衛隊大尉は、部下達にそうしたようにロマーニヤ空軍少尉へ容赦無い平手打ちを見舞う。

——バチン!

「ルツキーニ!」

「ルツキーニちゃん!」

頬を強く殴打され、ルツキーニは甲板に倒れ込む。血相変えたシャーリーと芳佳が彼女の元へ駆け出し、他のメンバーも2人に続く。

「ルツキーニ!大丈夫か!」

シャーリーが慌てて抱き起こす。直後、ルツキーニは糸が切れたように泣き出した。「うじゅああああん! いったいいいいいい!」

声を張り上げて大泣きするルツキーニ。強打された左頬は大きく腫れ上がっていた。「待ってて、ルツキーニちゃん。今治すから」

シャーリーと向かう合う形で両膝をつくと、芳佳は固有魔法の『治療魔法』で治療を始めた。

さすがは母方の一族に代々受け継がれし癒しの魔法。頬の腫れがみるみる引いていく。

「あんたなあ！何も叩くことないだろ!？」

可愛い妹分を庇うように胸元へ抱き寄せたシャーリーは、乱暴を働いた親衛隊大尉にキツと睨みを利かせる。

ルツキーニはシャーリーの胸へ顔を埋め、涙目でホフマンの様子をチラチラと窺っている。

彼女の瞳には恐怖が滲んでいた。ミーナや坂本、実家やロマーニヤ空軍の原隊ですら受けたことのない。理不尽暴力に対する恐怖だ。

「イエーガー大尉か。見ていただろう?そのロマーニヤウィッチは上官である私に無礼を働いたのだ」

しかし、当のホフマンはリベリオンウィッチの鋭い視線を風と受け流し、平然と言って退ける。

「け、けど。暴力はいけなと思います!」

芳佳がシャーリーに続く形で抗議するも、ホフマンはフンと鼻で嗤う。

「体罰が何だ?軍隊において暴言暴力による罰則は当たり前のこと。いちいち騒がないで貰いたいな」

先程見せた激情は何処へ行ったのか。ホフマンは淡々とした口調で告げる。

そんな親衛隊ウィツチの対応に、シャーリーは思わず声を張り上げた。

「ルツキーニはまだ子どもだぞ！理由がどうであれ、手を上げるのは——」

「バルクホルン大尉！」

さすがの堅物大尉も得心がいかなかったらしい。すぐさま芳佳に変わって反論するが、ホフマンの怒声に遮られてしまう。

「規律を重んじるあなたらしくもない。我がカールスラントの誇る大エースも、501基地で無為な日々を過ごさうちに墮落してしまつたようだ！」

大仰に肩を竦め、ホフマンは嘲るように言う。だが、これで引く501ではない。

「暴力はいけないと思います。ルツキーニちゃんだつて、悪気があつたわけじゃ……」

バルクホルンに次いで、リーネも意見する。気弱で争いが苦手なリーネだが、意外と芯は強い。

「何だ貴様は？」

「リネット・ビショップ軍曹です」

「ビショップ？ああ、聞いたことがある。確か前大戦で活躍したブリタニアNo.1エース、かのミニービショップ女子の息女だつたなあ」

皮肉に口元を歪めると、ホフマンは侮蔑を孕んだ声音で言葉を続けた。

「母親はダウディング元大将と親しいと聞く、愛人関係との噂も……」

「——っ!？」

あからさまに母親を侮辱され、リーネは我知らず表情を険しくする。

「デタラメを言うな!」

「そうです! あ、愛人……だなんて、そんなの嘘っぱちです!」

あまりに配慮の欠けた言動。バルクホルンと芳佳がすかさず反論するも、ホフマンは無視する。

「ウィッチ養成学校からいきなり統合戦闘航空団へ配属、1年も満たないうちにエース級の活躍をしているとも聞いた。どうせ母親のコネで手柄立てさせてもらっているの
だろう? 何の後ろ楯も無い身には羨ましい限りだな」

「ちよつと、いい加減にしなよ。それ以上言うなら、ただじゃおかないよ?」

仲間に手を上げ、さらには侮辱までする親衛隊大尉にハルトマンが食って掛かる。

「模擬戦で負けたからって、見苦しいゾ!」

「ホフマン大尉、私はあなたの品性を疑いますわ!」

エイラとペリーヌもまた、射るような視線をホフマンへ投げ掛ける。エイラの隣にいるサーニヤも言葉にこそ出さなかったが、彼女らしからぬ険しい面持ちで親衛隊大尉を見据えていた。

ペリーヌもハルトマンも北歐出身の2人も、501ウィッチの例に漏れずかなりの仲間思い。殊にハルトマンに至っては、戦友の為に軍上層部への反抗も辞さないほどである。

4名の中で特に強い怒りを抱いているのは、やはりペリーヌか。リーネはネウロイの支配から解放された故郷——ガリアの復興を目指す自分を手伝うと言ってくれた。

そんな戦友の気持ちが何より嬉しかっただけに、リーネを侮辱した目の前の親衛隊ウィッチを許すことができない。ガリア貴族の令嬢——パ・ド・カレーの領主様は、今までに無いほど業腹であった。

そもそも親衛隊大尉の言い分は、2つの点で言い掛かりだ。

まずリーネの母親——ミニー・ビショップとダウディング元ブリタニア大将に親交があり、ミニーがブリタニア空軍に対してある程度の影響力を保持しているのも事実だが、2人の関係はホフマンが言うようなふしだらなものでは断じてない。

2つ目の言い掛かりは、リーネが親のコネで501に配属された、母親の後ろ楯で手柄を立てさせてもらっている、という点だ。彼女がウィッチ養成学校卒業後、間を置かずに501へ配属されたのは、トレヴァー・マロニー元大将をはじめとするブリタニア空軍上層部の意向であり、戦果を上げたのも、本人の努力と才能によるもの。即ちリーネの実力であり、ミニーもダウディングも一切関与していない。

「こんな狭量な方が皇室親衛隊の士官だなんて、カールスラントの皇帝陛下が気の毒でなりませんわ！」

「貴様！上官に向かって何を！」

気色ばむホフマンであったが、その程度で怯むペリーヌではない。

「上官だから言葉で済ませたのよ！同階級以下の相手だったら、この程度で許したりしませんわ！」

ペリーヌの迫力に気圧され、親衛隊大尉は思わず口を噤む。負けじと言い返そうとするホフマンだったが、彼女の声は敵襲の報せに遮られた。

インターミッションI 「魔女と糸繰り人形」

それは、インペリアルウィッチーズを中心とした帝政カールスラント皇室親衛隊が、扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の航空母艦「天城」に乗り込んできた日の晩のことだった。

天城の艦長——青山忠扶桑海軍大佐は、親衛隊が借り受けている——天城の乗員からすれば、強引に占拠された——区画まで足を運んでいた。

自分の艦だと言うのに、艦内の当区画は彼の指揮下になかった。いや、艦橋等の主要な部署を押さえられている以上、最早天城は青山の艦ではなくなっていると云っても過言ではないだろう。

カールスラント製の短機関銃「MP40」で武装した親衛隊員が艦内を我が物顔で闊歩する様は、まるで敵国に拿捕されているようで気分が悪い。

——大事なお話があります。2人きりで話がしたいので、私と部屋までお越し願います。

という悠貴の旨を、艦橋に常駐している親衛隊士官を通して伝えられた。

用件があるのなら会谈を申し出た側から赴くべきだ。自らの都合で呼びつけ、借り受けている他国の軍艦の船室を指して「私の部屋」ときた。

あまりに傲慢。青山としては、問答無用で撥ね付けてやりたいところだ。しかし、相手がカールスラント宰相の養女ともなればそういうわけにもいくまい。

ここで短気を起こして、扶桑とカールスラントの関係が悪化しようものなら、首が飛ぶだけでは済まない。

「お待ちしておりました」

青山が指定された船室の前まで来ると、天城を「ボロ船」呼ばわりした親衛隊大尉——グレーテル・ホフマンが、形ばかりの挙手敬礼で出迎える。彼女の左右には、やはり MP 40 で武装した親衛隊員が控えている。

親衛隊准将のゾンバルトと、インペリアルウィッチーズ第 2 飛行隊隊長——アリョーナ・クリューコフ親衛隊大尉の姿はない。

2 人は悠貴やホフマンを中心とした数十名の親衛隊員を残し、「ドクトル・エツケナー」へと戻っていた。

「アインツベルン大佐が中でお待ちです。どうぞお入り下さい」

ホフマンは恭しい所作でドアを開き、青山入室を促す。

見え見えの社交辞令に慥然としながらも、勧められるまま室内へ足を踏み入れる。

「——っ!?!」

部屋に入るなり、青山は息を呑んだ。自分を待っているという親衛隊大佐は、会談に

はおよそ不釣り合いなバスローブ姿で高級チェアに座していた。

大きく開かれた胸元からは東洋人離れた豊満な谷間を惜し気もなく晒し、丈の短い裾からは程好く肉付いた艶かしい脚がスラリと伸びている。

「こんばんは、青山大佐。急な誘いにも関わらず受けて頂いたこと、心から感謝致しますわ」

艶然と微笑み、悠貴は青山の来訪を歓迎する。彼女の色香に気圧された天城艦長は、小さく頷いて応じるのが精一杯だった。

無論、青山とて例外ではない。両者が顔を合わせてまだ10秒ちよつと。僅かな時間で青山は完全に魅了されてしまっていた。

「あ、アインツベルン大佐……()用件は？」

青山はなんとか唇を動かし、絞り出すような声で悠貴に問う。質問に答える代わりに、悠貴は自身のルックスを見せつけんばかりの動きで、ゆつたりと青山に歩み寄る。

「あら？緊張されてるの？」

親衛隊大佐は青山の様子を見て、クスクスと笑声を立てる。

相手の眼前までやって来るなり、彼女は素早い動作で艦長殿の腕を取る。そこから間髪入れずに青山を室内へ引き摺り込んだ。

そして、そのまま脇にあるベッド上に青山を押し倒し、馬乗りになる。

「な、何の真似だ！」

漸く我に還つた青山が怒声を飛ばす。対する悠貴は艶やかな笑みを崩さなさい。

「恐い顔なさらないで、私はあなたと『お話』がしたいだけですわ」

穏やかな口調で宥めつつ、悠貴は両手をバスローブに掛ける。バスローブはスルツと脱げ落ち、薄暗い船室内にてインペリアルウィッチーズ司令の美しい裸体が晒される。

「おお……」

青山は我知らず感嘆の声を漏らす。まだ20歳手前という若さ……いや、幼さで既に美の絶頂期に到達していた。

人を惑わし、誑かし、墮落させうる美貌。この理想的な豊満ボディと、ひた隠し続けた『ある力』。

それらこそが、悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐の最大の武器なのである。

「奥様……和子さんでしたか？御辛いでしょね？」

「——っ!？」

悠貴の口から妻の名が飛び出したことで、惚けていた天城艦長はハツと現実に戻る。

彼が「何故妻の名を!？」と訊き返すよりも早く、親衛隊大佐は言葉を続けた。

「結婚してから、ずくつと奥様を一途に愛し続けてきた……いや、今でも愛している。子宝に恵まれずとも構わない。奥様さえいれば片道一カ月の長く過酷な航海、最前線たる

欧州への補給任務にも耐えることができた」

唇を動かしつつ、青山の左頬に己の右手を添える。まるで優しく撫でるかのよう……。

「なのに奥様は裏切った。あなたが欧州へ派遣されている間、家に男を連れ込んでいた……なんて報われないの……」

悠貴は笑みを浮かべたまま淡々と続ける。目を背けていた現実を突き付けられた青山に、「黙れ」と一喝して彼女を制することは出来ない。

自分を憐れみの込もった瞳で見据える親衛隊ウィッチの声が妙に心地好いのだ。

「御迷惑を掛けた御詫び、と言ってはなんです……私で良ければ慰めて差し上げましょうか?」

そう言つて笑みをさらに深くした悠貴は、青山に顔を寄せる。絶世の美女が鼻先まで近付き、天城艦長はゴクリと固唾を呑む。

抜群プロポーションを誇る親衛隊ウィッチの身体の感触を、温もりを制服越しに身体感じ、天城艦長の思考は殆んど停止する。

「夜は長いのですから……ゆっくりじっくりと、ね?」

「……………」

「いいでしよぅ?」

「……………」
 青山は何も応えない。沈黙は肯定の意。悠貴はそう受け取り、満足そうに薄紅色の唇をペロリと舐めずりする。

魔性の微笑みを浮かべて迫る悠貴を前にして、今まで靡かなかった者はいない。異性はもちろん、同性であつたとしても容易く堕ちてしまい、彼女の足元に跪く。

カビの生えた男尊女卑を信奉する男性史上主義者でさえ、悠貴の美しさと人心掌握術の前では赤子も同然。見栄も恥も捨て、軍用ブーツの先端にキスをするのも躊躇わない。

「……………」

半開きのドアから、ホフマンが2人のやり取りを無言で見据えていた。

その瞳には侮蔑の色が浮かび、あつさりとう悠貴に屈服した青山へ視線を注いでいる。

(……………反吐が出る)

万人を魅了する術を心得る上官は女神如き崇拜対象だが、相対する扶桑海軍士官はなんと浅ましく、犬畜生にすら劣つて見えた。

人間とは——男というのは、なんと愚かしい存在なのだろう。姿形に惑わされ、魔法力も使えず、ネウロイと世界規模の全面戦争に突入しても、1つに纏まりきれず、水面下で下らぬ覇権争い繰り広げる。無能どもが……。

(貴様等は、我々ウィッチの言うことを黙って聞いていなければいんだ……)

ウィッチ・ウィザードは容姿に優れ、魔法力という人智を越えた力を有し、ネウロイから人類を守る唯一の存在。人類の優良種と言っても過言ではない。

にも関わらず、地位と権威にしがみついている政治家連中や軍高官共は、自分達を便利屋の延長程度としか思っていない。

自分達の子や孫ほどの年齢の少年少女を、最前線へと送り込み、多数のネウロイとの戦かわせ、消耗品のように扱う。下婢た輩に目をつけられることも珍しくない。

無知で無能な愚民共に至っては、人類救済や怪異掃討という大義名分の下、魔女達に献身的な人身御供を強要する。

挙げ句、自分達が年端もいかぬ少年少女を死地に追い込む真似をしている事実から目を背向けている。なんと愚劣なことか。

故に彼女——グレーテル・ホフマン親衛隊大尉は、嫌劣等感たる人間を嫌悪する。

——おら、さっさと脚開け！このクソガキがっ！

「……………」

もう一度だけ青山を一瞥すると、ホフマンはゆっくりドアを閉めた。不意に蘇った忌まわしい記憶を封印するかのように……。

「ねえ……青山艦長。私をもっとよく見て……」

天城艦長をじっと見据え、悠貴は人を甘く誘惑するような口調で告げる。

両者が見つめ合っていると、彼女の瞳が紅い光を纏い始めた。それはネウロイが発する装甲の輝きに相違なかった。



数時間後――

「ねえ、青山大佐」

青山にしがみついた悠貴は、甘えるような声音で彼に囁く。

「何だね？」

「御願いがありますわ」

彼女は青山にしがみつき、両手の指先で彼のあちこちを撫で回す。ベッド上で一つ毛布にくるまる2人は、どちらも裸であった。

「電信室にも、我が親衛隊の兵士が駐留するのを許して頂きたいのです」

「……………」

「ダメかしら？」

そう訊ねながら、悠貴は両手の指先で青山の身体を撫で回す。

「何の為だね？」

「念の為、許可しては頂けないのかしら？」

重ねて訊ねる悠貴の細くしなやかな指が、青山の触れて欲しい部分の周囲を這い回る。

天城艦長は「うゝむ」と唸って逡巡するも、すぐに肯定の返事をしてしまう。

「……少数ならば構わんよ」

「ふふっ♪ありがとうございます」

クスクスと小さく笑声を立てると、悠貴は青山の唇を己の唇で塞いだ。

祖国から遠く離れた異国の地で、夢のような一時を過ごした空母艦長。甘い毒に酔いしれる彼は、最早親衛隊大佐の言いなりだった。

第15話「お兄ちゃん」

天城艦内・トイレ前通路——

「ああもう！なんてタイミングだ！」

そうぼやきながら、通路を全力で駆けていく人影があつた。扶桑皇国海軍の航空ウィザード——宮藤優人大尉である。

彼は坂本美緒扶桑海軍少佐不在の第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』において、戦闘隊長代理の任を拝命している。なので、非常時ないし出撃の際は誰よりも先にブリーフィングルーム等に向かい、501隊員達の集合を待たなくてはならない。

しかし、海軍兵から召集の伝令を受け取つたのが、よりもよつてトイレの個室で用を足している最中だった。

急ぎ用——と手洗い——を済ませた彼は、ガンルームへ向かつて疾走していた。

「あっ!？」

それは途中の角を曲がつた時だった。ガンルームへと急ぐ優人の視界が、通路前方を移動する漆黒の衣服——帝政カールスラント皇室親衛隊の制服を捉える。

艶のある美しい長い黒髪を靡かせ、優雅な所作で歩を進める後ろ姿には見覚えがあった。

皇室親衛隊第1独立航空団『インペリアルウィッチーズ』司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐だ。

「うわあ！危ない！」

「えっ？きやつ!？」

全力で走っていた優人は、勢いのまま悠貴に突っ込んでいく。

咄嗟の叫び声に反応した親衛隊大佐が背後に振り返ったのと、扶桑海軍ウィザードが衝突したのはほぼ同時だった。

揃って通路の床に転倒する両者。優人が被さる形で倒れたため、悠貴を下敷きにしてしまう。

「イテテ……」

——むにゅん！

「……………え？」

身体を起こした優人の右手が、大きく柔らかい質量感のある何かを掴む。

宮藤優人は知っている。経験則で知っている。過去、異性と接触した際、頻繁に知覚してきた感触。

得も言われぬ幸福感を与えてくれるこの感触の正体が一体何なのか。彼は嫌と言うほど知っている。

(ああ……また、やつちまったあ……)

お約束の展開。お馴染みのパターン。優人は勘弁してくれよ、と言わんばかりに浴面を作ると、心中で己の不幸を嘆く。間違いであつてくれと儂い願いを抱きつつ、優人は視線を下げる。

目に付いたのは、ぶつかつた相手の豊かな胸を鷲掴みにしている自分の右手。制服という名の布越しに存在を自己主張する双丘の片割れを、扶桑海軍ウィザードの利き腕がバツチリ捉えていた。

自らの「やらかし」をハツキリと理解した途端、扶桑海軍ウィザードの顔面は、一瞬で蒼白となつた。心臓はドキドキと早鐘を打ち出し、額からは嫌な冷や汗が伝い始める。

(今回は、流石にヤバいか?……)

扶桑海軍と皇室親衛隊。所属する組織が違うとはいへ、今の優人は連合軍——もしくは遣欧艦隊——にして行動している身。悠貴は数段格上の上官に当たる。

出会い頭に衝突するだけでも大問題。その上、床に押し倒して胸を触る。そのような痴漢行為が、意図的ではなかつたとしても許されるはずがない。

しかも悠貴は、現カールスラント宰相の息女。今までは同じ部隊のウィッチ等だったから最悪でも鉄拳制裁で済んでいたが、今回ばかりは相手が相手なため、最悪の場合首切りや腹切りを命じられる可能性も……。

「あらあら♪」

一方で、扶桑海軍ウィザードの天才的な「ラッキースケベ」の被害に遭った悠貴は、至って平常心であった。

薄紅色の唇に笑みを浮かべ、ルビーのような赤い瞳で何処か嬉しそうに優人を見据えている。

「も、申し訳ありません！」

優人はすぐさま女性の身体から退くと、ピッタリ45度の角度で頭を下げ、姿勢で言葉の両方で謝意を伝える。

この美しい謝罪も——ラッキースケベとしての——経験が成せる技であろう。

「あの、お怪我は？」

頭は下げたまま、優人はチラチラと被害者——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐の様子を窺う。

悠貴は衝突の拍子に床へ落とした軍帽を拾い上げ、服に付いた埃を払いながら立ち上る。

制服や帽子等。殆んどは親衛隊で支給されるものようだが、靴とズボンは私物らしい。

靴は一見軍用ブーツにも見えるが、よく見ると踵部分にヒールの付いた女性らしいデザインのもの。

ズボンは両端を紐で縛るタイプのローライズ。扶桑陸軍にも、この型のズボンを履くウィッチはいるが、色は清楚なイメージの白色が殆んど。

悠貴の履いているズボンは、可憐さと妖艶を演出するラベンダー色。考え方の古い扶桑人やバルクホルンみたいな堅物軍人が、こんな派手な色彩のズボンを見たら卒倒することだろう。

「いえ、宮藤大尉。大丈夫よ」

悠貴は短く応じると、自分を案じる扶桑海軍ウィザードに向かって艶然と微笑み掛けた。

落ち着いた大人の対応。意外にも、ぶつかったことや胸を揉まれたことを怒ってはいないようだった。

その一方で、気恥ずかしさもあるのか。頬が微かに紅潮している。なにやら呼吸も激しくなっているようだ。

「た、大変失礼致しました。急いでたもので……」

優人は顔を上げ、親衛隊と目線を合わせる。至近距離では初めて見る親衛隊大佐の美貌が、予想を遙かに上回っていたため、優人は思わずたじろぐ。

ファーストネームと顔立ちから察するに、悠貴の人種はおそらく扶桑系。そうでないにしろ東洋人の血を継いでいるのは間違いない。だが、その容姿は明らかに東洋人離れしていた。

制服の裾から伸びる長い足。衣服を下から盛り上げんとする豊かなバスト。履いているズボンが張り裂けんばかりにムッチリとしたヒップ。それでいて腰はキュツと締まっただけで、男好きしそうなダイナマイトボディは、シャーリーと同等の水準か。或いはそれ以上か。

身長については、優人と同じくらい——170cm程度——だろうか。目鼻立ちもハッキリしており、長い髪が黒でなかったら欧米人と見間違えるかもしれない。

(この人……本当に俺と同じ歳か?……)

新兵時代からウィッチを中心に美しい女性を何人も目にしてきた優人だが、悠貴みたいなタイプは初めて見る。

全身から醸し出している艶やかな雰囲気。ムンムンな色香は、とても10代のそれとは思えない。

恩師である扶桑海軍ウィッチ——北郷章香中佐も、19歳の時点で中々にセクシーな

大人の女性にはなっていたが、悠貴ほどお色気過剰ではなかった。

発育が良過ぎる目の前の親衛隊ウィッチが、将来どんな風になるのか。健全な男子である優人は興味が尽きない。

「……………」

悠貴はというと。細めた両の目を扶桑海軍ウィザードへ据え、値踏みするかのように見つめている。

親衛隊ウィッチに見惚れていた優人は、自分を凝視している悠貴の視線に気付くまで時間を要した。

ガンルームへ急いでいたことなど、疾うに忘れてしまっているようだ。

「あ、あの…………大佐？」

戸惑い気味に声を掛ける優人に構うことなく、親衛隊大佐は穴が空くほど彼を凝視する。

いつの間にか頬を染める紅が深くなり、呼吸もさらに荒くなっている。風邪だろうか。

「あの、大丈夫ですか？具合が悪いのでは？」

「い、いいえ。何でもないわ…………よ……………」

悠貴は大丈夫だと言うが、数秒のうちに呼吸の乱れは一層激しくなった。

立ち姿もフラフラと危なげで、軽く小突けば倒れてしまいそうだ。

「本当に大丈夫なんですか!?! 艦の軍医に診てもらった方が——」

「そんなことより! あなたに訊きたいことがあるのっ!」

悠貴の身を案ずる優人だが、当の本人は有無を言わさぬ強い口調で遮ってしまう。

感情が昂っているが故に声を張り上げたようだが、その声音からは怒りや憎しみ等は感じない。しつこく心配してくる優人に苛立っているわけではない。

「は、はあ……」

曖昧な返事をする優人。インペリアルウィッチーズ司令は焦点の合っていない瞳で彼を見据え、熱い吐息と共に言葉を紡ぎ出した。

「以前、何処かで会わなかったかしら?」

「えっ?」

「初対面の気がしないのよ。会ったことなかった?」

「……………」

優人はすぐには答えない。一度沈黙して思考に耽り始める。言われてみれば、そんな気がする。

なんとなくだが、彼は悠貴のことを前から知っているように思えた。

昨日、彼女が飛行甲板へ着陸する姿を遠目で見た際、優人はまるで幼い日に別れた大

切な人と再会したような懐かしさと懐かしいさを知覚した。

やはり以前何処かで顔を会わせたことがあるのか。しかし、これらはいくまで“そんな気がする”程度で、当然明確な根拠や確信があるわけではない。

そもそも“悠貴・フォン・アインツベルン”という名を……ましてや、彼女ほどの美貌の持ち主を忘れるだろうか。

「ごめんなさい。困らせるつもりはなかったの……」

と、悠貴は申し訳なさそうな口調でに謝罪する。「いえ」と優人は頭を振り返る。

「覚えて、ない……かあ……」

悠貴は残念そうに両の目蓋を閉じる。目を閉じたことで、長めの睫毛がハッキリ確認出来た。

2人の間にしばらくの間沈黙が流れる。急に汐らしくなったので、親衛隊ウィッチ。優人から期待通りの返事を得られず意気消沈しているようにも見える。

「ちよつと来て!」

突如、悠貴は優人の右腕を掴んだ。逃がさぬようにしっかりと捕らえられ、グイッと自分の方へ

「え? ちよ、ちよつと!」

理由を問い質す暇もなく、優人ら近場の船室へ連れ込まれてしまう。

悠貴は強引に連れ込んだ扶桑海軍ウィザードに自らの身体を押し付け、ねっとりとした視線を注ぐ。

「いいわ……すぐいい……顔も、身体も、声も……何もかも……」

熱を帯びた息を吐きながら、悠貴はブツブツと独り言ちる。

まっすぐ優人を見つめているようで、その視線は虚空へと向いている。心ここに有らず”と言った様子だ。

形容し難い彼女の威圧感に気圧され、優人は条件反射で口を噤む。

「最高よ……」

「えっ?」

悠貴が発した言葉の中に耳を疑うような単語が混じっていた。聞き間違いではない。扶桑海軍ウィザードは驚愕し、目を見張る。

一体どういうことか。優人は詳しく問い質そうとするも、それは叶わなかった。

何故なら、悠貴の顔が優人の顔との距離詰めだし、言葉を紡ごうとしていた彼の唇に触れたからだ。

「……………」

自分が何をされたのか。悠貴が何をしたのか。すぐには理解出来なかった。

親衛隊ウィッチの取った突飛な行動に、一時的に思考が停止してしまっている。

悠貴も悠貴で、優人に唇を押し付けたまま微動だにしない。

「——っ!？」

沈黙を破ったのは優人だった。彼は悠貴を乱暴に突き飛ばすと、一言「失礼します!」
とだけ言い、逃げるように部屋を後にした。

「……………」

1人残された悠貴は冷たく硬い床に身を投げ、暫しの間ボンヤリと天井を眺めていた。

「……………ううん……………」

甘ったるい声を漏らした悠貴は、己の身体を弄り始めた。胸元、腹、腕、腿、脚。そして、股。あちこちに触れては身を振らせる。

「はぁ……………はぁ……………」

内から沸き上がってくる熱に浮かされ、恍惚とした表情を浮かべている。

動作を一頻り繰り返した悠貴は、利き手である右手を持ち上げて右頬にそっと添える。人差し指と中指の2本だけが、やけに湿っていた。

「……………格納庫に行かないと……………」



「優人」

部屋から飛び出した途端、背後から声を掛けられた。声楽家を想わせる澄んだ声音。振り返らずとも声の主は分かる。これは敬愛する隊長殿ものだ。

しかし、普段よりも刺々しい口調で怒気を孕んでいることが気にかかる。

「ミーナ……」

優人は振り返る。険しい表情をしたミーナが背後に立ち、彼を睨んでいた。

「来るのが遅いと思ったら、お楽しみだったのかしら？」

ミーナは、まだ悠貴が残っている船室のドアを鋭い視線で一瞥すると、再び優人に目を向ける。

「あ……いや……」

どう言い訳したもののか、と優人は煩悶とする。そんな彼を尻目に、ミーナは踵を返す。「間も無くブリーフィングが始まります。早くガンルームへ……」

用件を簡潔に伝えると、ミーナはやや早足で通路を進んでいた。

機嫌を損ねてしまった隊長殿の背中を見つめつつ、優人は心中で呟く。

（今さらだけど。俺って女難？……）

不意打ちでキスをされた唇を拭い、優人はミーナの後を追った。



第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』。そして、第504統合戦闘航空団へ戦闘隊長として赴任予定の扶桑皇国海軍ウィッチ——竹井醇子大尉は、ガンルームに集合していた。

トイレに行っていた優人はやや遅れての到着であったが、幸いにもそれについて咎める者はいなかった。その代わり、ミーナの機嫌を損ねてしまったが……。

竹井からこつそり聞いた話によると、ミーナは総司令部へ定期報告をするために電信室へ赴いた。だが、無愛想な親衛隊員に追いつ返されてしまい、それで気が立っているらしい。

「先程、親衛隊側から連絡と要請がありました！」

ウィッチーズを集合させた司令殿が、すぐさまブリーフィングを開始する。飛行甲板で見た赤面と動揺は既に消え失せ、強さと凛々しさを兼ね備えた威厳のあるウィッチ隊長に戻っていた。

飛行甲板でひと悶着あった501のウィッチ等は、親衛隊という単語を聞くなり表情を硬くする。

殊に体罰を受けたルツキーニと、大好きな母親を侮辱されたリーネの顔には影が射していた。

何処か様子がおかしい仲間達に訝しげな視線を据える優人だったが、一先ずはブリーフィングに集中する。

「ネウロックらしき機影がカールスラント沿岸を高速で移動中！インペリアルウィッチーズを中心とする親衛隊の航空戦力が、ネウロイ撃墜のため現場へ急行します！」

「あの、私達は何をすれば？」

小さく手を上げたサーニヤの遠慮がちな質問を受け、ミーナが応じる。

「私達は天城及びドクトル・エツケナーの直掩。及び、親衛隊の支援を担当します」

天城は現在、親衛隊所属の航空母艦——ドクトル・エツケナーと臨時編成の戦隊を組み、作戦行動中である。

駆逐艦の雪風は、最高階級者たるゾンバルト親衛隊准将の意向でパ・ド・カレーに残留することとなり、本作戦には参加していない。

親衛隊准将率いる戦隊は、二線級の大型空母2隻。航空歩兵20名以上に艦載航空機が30機以上と、艦齢の長い空母に対して航空戦力が異常なほど充実していた。

2隻の空母に20名以上の航空歩兵を乗艦させるなど、ウィッチの数が多い扶桑の海軍でも実現不可能だろう。

「政治被れ共のサポートに回るのか？」

あからさまに不満げな態度を見せつつ、バルクホルンが念を押すように訊く。

「ええ、そういうことよ」

露骨に不機嫌そうな顔をする戦友の問いに、ミーナが嘆息混じりに応じる。

ミーナの判断や命令に間違いなどない。それは付き合いの長いバルクホルンが一番良く知っている。しかし、親衛隊の小間使いとして扱われるのは我慢ならない。

特に確執が生まれたばかりであるインペリアルウィッチーズの第1飛行隊長——グレートル・ホフマン大尉に手を貸さなくてはならなくなるか。と、内心業腹だった。

「まったく、あの人達ときたら……」

ペリーヌがなにやらブツブツと呟いている。その他にも、仏頂面のエイラ。叩かれた頬に手を添えながら、身を震わせるルツキーニ。いつもより目付きが険しくなっているシャーリー。複雑そうかな表情のサーニヤと……。

シャーリーやルツキーニ以上にお気楽な性分のハルトマンでさえ、いつもの軽口がない。ウィッチーズの表情が、飛行甲板での一件が尾を引いていることを物語っていた。

その一方で、事情を知らないミーナ、優人、竹井の3名は、魔女達のピリピリとした雰囲気「何事か？」と小首を傾げている。

バルクホルンの他に質問者がいなかったのも、ミーナから今次作戦における編成の指

示がなされた。天城とドクトル・エツケナー両空母の直援には、サーニヤ、エイラ、シャーリー、ルツキーニ。

親衛隊の支援には、自分を含めたカールスラント組の他。優人等扶桑組とペリーヌ、リーネの8名が割り当てられた。

「……あのネウロックと、また戦うことになるんだね」

「不安か？」

ウオーロックを上回るネウロックとの初戦を思い出したのか。そう独り言ちる芳佳の声には不安が滲んでいた。

それを聞き逃さなかった優人は、妹の顔を心配そうに覗き込む。

「……………うん、ちよつとだけ」

逡巡する素振りを見せつつも、芳佳は伏し目がちに答える。

「大丈夫、お前一人で戦うわけじゃない。俺はもちろん、リーネも側にいる」

「うん、心配しないで。私、ちゃんと芳佳ちゃんを守るから」

リーネは優人に同調すると、普段通りの優しい口調で芳佳を励ます。しかし、親友を気遣うリーネの表情は先述の通り曇っている。

「ありがとう！一緒に頑張ろうね。リーネちゃん、お兄ちゃん！」

と、芳佳は応じる。彼女からいつも元気が感じられないのも、ネウロックと戦う緊張

や恐怖だけではないように思えた。

「親衛隊の発艦を待つてから私達も出撃します！出撃準備をしつつ、格納庫で待機して
いてください！」

『了解！』

ミーナの号令、隊員達の力強い返事。いつも通りの光景だが、幾つかの声音に不満の
色が混じっている。

もちろん、ミーナに対する不満ではない。親衛隊の援護という任務に対する不満だっ
た。



「サーニャー！」

格納庫へ続いている艦内通路にて、優人は移動中のサーニャを呼び止めた。

上官に振り返るナイトウィッチの傍らには、例によつてスオムス空軍の不思議ちゃん
——もとい、トップエースであるエイラの姿もあつた。

「エイラも一緒だったか……」

「ナンダヨ？ワタシがサーニャと一緒にいちゃワルいつての力？」

「ダメよ、エイラ！そんな言い方しちや……」

優人の何気ない一言に、エイラは食って掛かった。上官に向かって慳貪な態度を取る彼女を、すかさずサーニヤが注意する。

なんとなくだが、エイラが優人に対して当たりがキツいのは、親衛隊との一件で機嫌が悪いただけではない気がする。

「悪い悪い。ちよつと話せるかな？」

ムスツとしているエイラを尻目にして、優人はサーニヤニに訊ねる。

「はい、何でしょう？」

「俺やミーナ達がいなくなつた後の甲板で何かあつたのか？」

「……………」

サーニヤは問いに答える代わりに、目を伏せて短く息を吐いた。当事者である彼女——エイラもだが——は理由は知っている。別に話せないということもない。

しかし、ネウロイの侵攻以前、音楽の道を志していただけあつて、彼女はあまりに感受性豊か。あまりに繊細。

それ故に何かと影響を受けやすく、他者に強く感情移入をしてしまう。

頬を叩かれたルツキーニヤ、悪意ある発言で心を傷付けられたリーネを思うと、胸が苦しくなる。言葉が上手く出せない。

「サーニャ？」

沈黙するサーニャに優人が声を掛ける。逡巡するように視線を左右へ泳がせたナイトウィッチは、一泊置いてからおもむろに口を開き、飛行甲板での一件を語り始めた。

「なるほど。そういうこと……」

と、優人は溜め息混じりに応じる。親衛隊……というよりはホフマン大尉との諍い。

事情を知り、仲間達がピリピリしている理由も分かったが、新たに頭の痛い問題も出てしまう。

取り敢えず、サーニャ達には「自分の方から親衛隊側へ嚴重抗議する」と伝え、格納庫へ向かわせる。

サーニャは優美な所作でペコリとお辞儀し、エイラは「イクツ！」とバカにするように白い歯を見せ、2人は去っていった。

優人は1人残された通路で深く溜め息を吐いた。トラブルに次ぐトラブル。親衛隊が天城に来てからろくなことがない。

優人も内心辟易し、同時に動揺もしていた。連れ込まれた部屋でキスをされた。それはまあいい。犬に噛まれたものだと思つて忘れることにする。

問題は、悠貴が優人に向かって発したあの一言。それが彼の心中で反芻し、内面を掻き乱していた。

——最高よ……お兄ちゃん……。



帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウイッチーズ』は、艦上戦闘機“Bf109T”——インペリアルウイッチーズが装備している艦上ストライカーユニットの戦闘機版——で編成された航空隊と共に空へ上がった。

司令のアインツベルン大佐以下第1、2飛行隊のウイッチが一齐に出撃し、戦闘機隊と編隊を組んで飛行する様は実に壮観であった。

『前方より、ネウロイの大編隊！』

索敵を担当するナイトウイッチの声が、各親衛隊員の通信機に入る。

前へ目を向けてみれば、報告通りネウロイの大群。中型と小型の混成編隊だ。

「……………」

インペリアルウイッチーズ第1飛行隊長——グレーテル・ホフマン大尉が無言のまま顔を顰める。

編隊を組んだネウロイは遠目で見ると、羽虫の群れか何か見えてしまい、気持ちいいものではない。

「皆、下がっていなさい」

そう指示すると、悠貴はストライカーユニットの速度を上げ、単身ネウロイの群れへ向かって進んでいく。

飛んで火に入る夏の虫。数で勝るネウロイは、すぐさま彼女を包囲した。

「か弱い女性相手に大勢で。まっすく情けないわね」

囲まれているというのに、悠貴は不適な笑みを浮かべている。余裕だ。

他の親衛隊員も、司令の窮地だと言うのに顔色一つ変えない。悠貴の忠臣であるホフマンでさえもそうだ。

彼女達は理解している。自分達の司令がこれからどうするのか。ネウロイがどうなのか。状況がどう変化するのかを……。

「それとも、臆病なのかしら？」

挑発めいた発言の後、悠貴は一度目を閉じる。再び目蓋を開いた時、彼女の瞳は赤く妖しく輝いていた。

「さあ、ネウロイども！私に従いなさい！今すぐ道を開きなさい！」

第16話「マリオネット」

1944年現在。ネウロイの占領下にある帝政カールスラント。その沿岸付近の北海洋上を、扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦——赤城型航空母艦2番艦「天城」と、4番艦「ドクトル・エツケナー」が航行していた。

ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐をはじめとする第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』——もちろん、竹井醇子大尉の姿も確認できる——は、天城の甲板に並べられた愛機を両足に纏い、出撃の命令を待っている。

扶桑皇国よりカールスラントへ売却されたドクトル・エツケナー及び3番艦の「グラーフ・ツエツペリン」——扶桑ではそれぞれ愛鷹、愛宕と命名されていた——を除いた赤城型航空母艦の2隻——赤城と天城は、かつて第一航空戦隊を構成し、機動空母部隊の一角を担っていた。

大戦初期。赤城、天城、蒼龍、飛龍の大型空母4隻を基幹とする扶桑海軍機動空母部隊。及び地上基地航空部隊たる第十二航空艦隊は、欧州へ派遣されるや否や遣欧艦隊司令部の指揮下に置かれた。

後者は所謂「リバウ航空隊」であり、優人や坂本、竹井等の原隊——第24航空戦隊

第288航空隊も、かつては第十二航空艦隊隷下の部隊であった。

第一航空艦隊はバルト海。第十二航空艦隊はリバウ基地を中心として広範囲に作戦行動を展開し、数々の激戦を潜り抜けてきたことは記憶に新しい。

扶桑皇国海軍の誇る精鋭部隊に配属され、ウィッチを含む多くの将兵等と共に戦った大型空母天城だが、今では欧州への補給物資輸送を主任務とするやや古めかしい艦という扱いであった。

しかし、12名の航空ウィッチとストライカーユニットを乗せ、ネウロイ勢力圏へつて突き進む黒鉄の船体は、まさに威風堂々。二線級扱いの空母であることを一切感じさせない。

「ふう……」

扶桑海軍ウィザード——宮藤優人大尉は、発進ユニットに固定された紫電改の魔導エンジン音を唸らせつつ、軽く息を吐く。

チラツと右隣に目を向ければ、未だに自分と顔を合わせようとしぬ隊長殿の横顔。普段なら、スケベ心から彼女の美人顔に見惚れ、邪な考えを抱いていたかもしれない。

しかし、悠貴に絡まれた一部始終を目撃されて以降。優人にそんな余裕は無くなっていた。

自分とミーナの間流れている何とも言えない微妙な空気。喧嘩中の夫婦——もち

ろん、2人はそのような関係ではないが——というのは、こんな感じだろうか。
やがて居心地の悪さに耐えかねた優人は、意を決して彼女に声を掛ける。

「ミーナ。さつきは悪か——」

「宮藤大尉、今は作戦行動中です。私語は慎んでもらえるかしら？」

取り付く島もないとはこのこと。抑揚のない声音で容易く一蹴されてしまい、突き放されたような虚しさで胸が埋まった。

「優人」

ふと反対側の左隣から声を掛けられる。優人がつられて目を向けると、口元に苦笑を湛えた竹井が彼を見ていた。

彼女は己の唇を指差しながら、呆れ気味の口調で優人を窺める。

「謝るなら、まず唇に付いた口紅をどうにかしたら？」

「……は？」

優人は彼女が言ったことの意味をすぐには理解出来なかった。

戦友の反応に肩を竦める竹井は、制服のポケットから手鏡を取り出し、それで優人の顔を映してやる。

「あー」

鏡を見た優人は気付く。自分の唇の端に口紅らしきものが、ほんの僅かにだが付いて

いた。

親衛隊大佐から強引なキスを賜った際に付いたのだろう。

一度拭ったつもりが、不十分だったらしい。優人はやや慌てた素振りでも再度唇を拭く。

「あなただって、ホント節操無しね。今度は何処の誰を泣かせたのかしら？」

わざわざ嫌味な言い方とする同期の桜に対し、「言い掛かりだ！」と返してやりたかった。しかし、残念ながらそれは叶わなかった。

不意に複数の視線と圧力を肌で感じ取ったため、優人は喉まで出かかった言葉を声にすることなく飲み下したのだ。

ゾクリと背中を走る悪寒に耐えつつ、優人は視線の正体を確認する。

視線の主は3人。バルクホルン、シャーリー、そしてペリーヌだ。竹井の身体越しに優人を横目で睨みつけている。

「……………あ、あはは」

何故彼女達に睨まれているのか。優人はわかっていなかったが、取り敢えず場を取り繕うかのように愛想笑いを返す。

それが余計だったらしい。ムカツ腹立を刺激されたウィッチ等は、フンと鼻を鳴らして正面へと向き直る。

ちなみだが、最愛の妹——芳佳は、ネウロツクが存在が気掛かりなためか。口紅に気が付いていないようだった。

ブリーフィング中及び直後に会話したりーネ、サーニヤ、エイラの3人は気付いていないようだが、口角炎か何かだと考え、口紅だとは思わなかったらしい。

「な、何なんだ一体？」

当惑する優人を尻目にして、竹井が溜め息混じりに告げる。

「あなた、いつか背中から撃たれるかもしれないわよ？」

「……………」

洒落にならない冗談に返す言葉が見つからない。聞こえないフリで誤魔化しながら、優人は自分に口紅を付けた相手の顔を思い浮かべる。

——最高よ……お兄ちゃん……。

悠貴に囁かれた一言が、優人の脳裏に反芻する。まるで、呪詛のように……。

それから間も無く。12名の航空ウィッチは天城から順次発艦した。内8名はカールスラント沿岸を指し、北海洋上を飛行していった。

残りの4名——シャーリー、ルツキーニ、サーニヤ、エイラ——は、天城及びドクトル・エッケナーの直掩に回る。

『宮藤大尉……』

突如、ミーナの声が突如扶桑海軍ウイザードのインカムに入ってきた。

妙に抑揚の無い声に軽い戦慄名指しされた優人は「何だ？」と隊長殿への視線を走らせる。

『乱戦になった際にはくれぐれも気をつけて。敵機と誤認の上、誤射を受けるかもしれないから……』

中佐殿の有難い御忠告と共に、背後で銃に初弾を装填する音がする。

振り返った優人の瞳に映ったのは、目元が黒い影で覆われ、明け方の三日月にも似た不気味な笑みを浮かべているバルクホルンとペリーヌだった。

優人は絞り出すような声で「は、はい……」となんとか応じる。竹井の言っていたことが早くも現実味を帯び始めていた。

カタカタと震える手でS—18対物ライフルを握り締め、扶桑海軍ウイザードは心中で家族宛ての遺書を呟く。

(父さん、母さん、お婆ちゃん。俺は今日死ぬかもしれません……)

この時。ウィッチーズと親しい間柄にある己に対し、激しい嫉妬心を募らせた天城の機関砲手数名から、40口径12.7cm連装対空砲の照準を向けられていたことを、優人は知らなかった。



親衛隊の支援に向かつて間も無く、ミーナが直率する8名の航空歩兵はカールスラント沿岸に到達する。そこでウィッチーズを出迎えたのは、ネウロイによつて破壊の限りを尽くされ、廃墟と化したカールスラントの街だった。

「くっ……街が……」

変わり果てた祖国の街並みを目の当たりにしたバルクホルンは、怒りと屈辱が腹の底から沸き立つのを感じ取った。

地面が剥き出しになっている路面。倒壊し、瓦礫と化した石造りの家屋。無残に砕け散った窓ガラス。放棄された車や船は錆びと埃に塗れている。戦いに敗れ、荒廃した街。かつては大勢の人々で賑わっていたであろう沿岸都市はもう見る影もない。

街のあちこちに、ブラウシユテルマー——生物にとつて有毒な瘴気を撒き散らす莢状のネウロイの子機——が、打ち込まれている。まるで占領旗のようだ。

「これが、カールスラントの街なの？ 酷いよ……」

ネウロイの残した傷痕。街の惨たらしい有り様を見て、芳佳は今にも泣き出しそうなくらい表情を曇らせた。

あまりの光景にリーネも言葉を失っている。もし501部隊——自分達がブリタニ

アを守り切れていなかったら、ロンドン等の街がこうなっていたかもしれない。そう思うと、恐ろしくなる。

欧州より遙か東方に祖国を持つ宮藤兄妹や坂本、竹井とて他人事ではない。扶桑海事変時、自分達が大陸側より扶桑本国へ侵攻してきたマザーネウロイを倒せていなかったら……。

「2人、今は感傷に浸っている時じゃないわ。切り替えなさい！」

「了解」

竹井の叱責され、芳佳とリーネは気合を入れ直す。優人もまた、S—18対物ライフルに初弾を装填し、会敵に備える。

「バルクホルン大尉、今は作戦行動中よ。集中しなさい！」

「ああ、済まんミーナ……」

隊長直々の御言葉によって、バルクホルンも落ち着きを取り戻す。

しかし、ミーナとてカールスラント人。一見冷静なようで、故郷の惨状を前に動揺を禁じ得ない。

思い起こされるのは、大戦初期に実施されたカールスラント撤退戦。時間を稼ぎ、多くの国民を南リベリオンへ避難されることに成功したとはいえ、国を守れず一度はネウロイに敗北した。国土を防衛に失敗し、祖国を明け渡してしまった。

もう一度とやり直せれば、と考えなかった日はない。だが、いくら過去を振り返ったところで時間は戻らない。

ガリアの解放は成された今、連合軍はカールスラントの奪還を最終目標とした大規模反攻作戦を計画している。

以前とは違い、人類はより多くの人員と兵器。ネウロイに関する情報を有している。必ずや祖国を奪還してみせる。少なくとも、自分が20歳を迎える前には……。

「——っ!？」

故郷奪還の悲願に燃えるミーナの瞳に、虚空を走る赤色の光軸が映った。

前方より迫った一筋の光が、編隊を組んで飛行する航空歩兵等の傍らを掠め、高速で通過していく。ネウロイのビームだ。

攻撃を受けて間も無く敵影を視認する。中型と小型飛行ネウロイから成る混成編隊。数が多いが、ブリタニアの戦いを潜り抜けたストライクウィッチーズの敵ではない。

『私と竹井大尉、宮藤隊が前衛を引き受けます！バルクホルン隊とペリーヌ隊は、中衛と後衛を！』

ミーナがすぐさまインカムで指示を飛ばした。隊員達からは、殆んど間を空けず『了解』と応じる声が返ってくる。

ちなみに宮藤隊とは、宮藤兄妹の2人で組んだロッテを指している。バルクホルン隊

は、バルクホルンとハルトマン。ペリーヌ隊は、ペリーヌとリーネという編成。501部隊において、お馴染みとなっている。

いつもなら、前衛はWエースのバルクホルンとハルトマンが務めるのだが、今回はミーナと竹井、宮藤兄妹が担当することとなった。

これはおそらくネウロックとの戦闘経験値の他。『リバウ三羽鳥』の一角として名を馳せた竹井と、ロットならWエースに引けを取らぬ働きをすることだろう。

『それでは、攻撃開始！』

ミーナの号令の下。優人達はすぐさまネウロイと交戦状態に入った。



空母直掩組4名の中にも、節操の無い扶桑海軍ウィザードに立腹している者がいた。シャーリーことシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉だ。

シャーリーは彼女らしからぬ仏頂面を作り、内心で優人を毒突いていた。

(まったく……優人のヤツ……)

優人の唇には、赤い口紅が付いていた。基本的に口紅は女性が使うもの。扶桑の軍艦に乗艦する女性は、軍医や炊事番等の例外を除くと——扶桑は、陸海軍共に女性兵士は

いないので——基本的にはウィッチのみとなる。

現在の天城でウィッチといえば、シャーリー等501部隊と扶桑海軍の竹井醇子大尉。

悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐率いるインペリアルウィッチーズの面々。そして、これらのウィッチの中で口紅をしようしているのは悠貴だけである。

つまり、優人に口紅を付けたのは悠貴であり、それ即ち彼女と扶桑海軍ウィザードがキスをしたということだ。

(あつちこつちで女に手を出して……ホント見境無い男だな……)

優人からすれば「見境無く女に手を出す」など言い掛かりも甚だしい。

だが、501部隊戦闘隊長——坂本美緒扶桑海軍少佐譲りの天然ジゴロぶりど、一種の才能とも形容出来る異常なまでのラッキースケベ氣質が災いし、「紳士的に見えて実は女にだらしない性格をしているのではないか」と、疑念を抱く者も少なくない。

扶桑皇国海軍第十二航空隊こと北郷部隊。リバウ航空隊の一角を担っていた遣欧艦隊第24航空戦隊第288航空隊。連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』。ガリア解放後、一時出向していたワイト島分遣隊。

過去に所属したほぼ全ての部隊で、持って生まれたの才能を惜しみ無く発揮し、ウィッチを中心とした女性達と凄まじい頻度でトラブルを起こしていた。憲兵隊や軍

上層部妊婦伝われば、まず間違いなく嚴重な処罰が下されるだろう。

それほどのトラブルメーカーにも関わらず、異性から本気で嫌われたり、憎まれたり、評判が悪くなったりしないのは、本人の人徳とジゴロっぷりのおかげである。

シャーリーとて。優人が女にだらしない最低の男だとは、微塵も思っていない。

歳相応にスケベな面を覗かせるものの、彼は紳士的な男だ。容姿も悪くなく、本気で惚れている者も多い。

例の如くラッキースケベぶりを見せたとしても、それはいつものこと。ミーナやバルクホルンあたりに制裁を加えられる姿を見て、シャーリーは悪戯っぽく笑ったことだろう。しかし、今回は事情が違う。

優人がキスをした相手は悠貴。インペリアルウィッチーズの司令にしてわ親衛隊士官——グレーテル・ホフマン直属の上官である。それが問題だった。

ストライクウィッチーズとインペリアルウィッチーズは、甲板での一件以降確執が生じている。

ホフマンは部隊の可愛い妹分であるルッキニーに手を上げ、さらには前大戦のエースを母親に持つリーネを散々侮辱したのだ。

(向こうの隊長と、もうそんな関係になっっているなんて。見損なつたよ……)

501の絆は単なる部隊の同僚に留まらない。仲間として、家族として一枚岩に纏

まっている。家族に暴行と非礼を働いた親衛隊士官を許せるはずもない。

ホフマンに限らず、インペリアルウィッチーズを含めた皇室親衛隊やそれら全ての實質的な指揮官の悠貴——階級上は親衛隊准将であるゾンバルトがトップだが、何処か悠貴の顔色を窺っている節がある——に對する501部隊の心象は最悪だ。

それ故に自分達の預かり知らぬところで、しかも短時間で悠貴と優人が、互いの唇を重ねるほど親密な関係になっていることが氣に入らない。

實際は乱心気味の親衛隊大佐に迫られ、強引に口付けをされていだが、如何せんシャーリーは事の仔細を知らない。

付き合いが1年にも満たないシャーリーではあるが、優人の人柄はよく理解している。普段の彼女ならば、何か誤解があるのだと氣付きそうなものだ。

甲板での一件や少し前に自覚し始めた優人への秘めたる想いが悪い方向へ作用してしまい、持ち前の広い視野を狭めてしまっていた。

「シャーリー……」

シャーリーと共に天城の直掩へ回されていたルツキーニが、声を掛けてきた。

その口調は遠慮がちというよりは弱々しいもので、天真爛漫な悪戯っ子である彼女らしくもない。

「うわっ!?何だ、ルツキーニ?」

と、シャーリーは驚きの声を上げる。優人のことで頭がいっぱいになっていた彼女は、自分に話掛けようと近付いてきたルツキーニの気配に直前まで気が付かなかったようだ。

空母直掩組は、シャーリーとルツキーニ。サーニャとエイラでロツテを組み。天城、ドクトル・エツケナーをそれぞれで護衛していた。そして、こちらの指揮はミーナよりシャーリーに一任されている。

「シャーリーこそ。何か恐い顔をしてるよ?」

「……………」

ルツキーニの指摘にシャーリーは無言で応じるが、内心では(何やってんだよ、シャーリー)と自省していた。

今、自分達は作戦行動中。自分とルツキーニを含めた4人は、ミーナ中佐から空母2隻の直掩任務を仰せつかっている。

余計なことに気を回している場合ではない。況してや自分は指揮を任されている身だ。責任のある立場だ。

己の注意散漫は、仲間達の士気低下や任務の失敗にも繋がりがねない。すぐに頭を切り替えなくては…………。

「あつははははは! そう見えたか?」

シャーリーは豪快な笑い声を飛ばした。自分の強張った表情に怯えているルツキーニを安心させる為だ。

「昨日あんまし寝てなかったから眠くてさあ！欠伸を出さないように顔に力を入れてたんだよ！」

「うじゅ？そなの？」

リベリオンウィッチの言葉を受け、ルツキーニの声色にいつもの調子が戻った。

「ああ。やっぱり軍艦のベッドは基地のと勝手が違うなあ……」

と、シャーリーは大きく開いた口を手で隠し、欠伸の真似をしてみせる。

睡眠不足というほどではない。だが、ベッドが変わったことで、いつもより寝つきが悪かったのは事実だった。

「じゃあ、アタシの毛布貸したげる！」

「毛布って、ルツキーニが昼寝に使ってるヤツか？」

「そう！アレさえあれば安眠間違い無し！アタシも毎日気持ち良いお昼寝が出来てるし！」

グツと右の親指を立て、ルツキーニは自身満々に宣言する。

甲板での一件が尾を引いていないか心配だったが、弾けるような笑顔を見せ、それを振り撒くだけの元気が彼女にはあった。どうやら大丈夫そうだ。

(ルツキーニはスゴいな……)

時に誰かの心を救うこともあるルツキーニの笑顔。快活な表情のロマーニヤウイツチと向き合うと、心が洗われるようだった。

(優人、何か事情があるかもしれない。戻って来たら、ちゃんと話してみるかな?)

取り敢えず心の整理がついたシャーリーは、仲間達の帰還を待ちながら、改めて空母2隻の護衛に専念する。

「……………あれ?」

一方、ドクトル・エツケナーの直上にて警戒に当たっていたサーニヤが、ふと驚いたような声を漏らす。

「サーニヤ、どうしたンダ?」

と、エイラが訊ねる。優れたナイトウィッチであるサーニヤは、固有魔法の『全方位広域探査』と魔導針を併用した索敵能力を駆使し、ミーナ等が向かったカールスラント沿岸の状況を観測していたのだ。

「なんだか、ネウロイの動きがおかしいわ……」

「オカシイ? オカシイって、何ダ?」

サーニヤの抽象的な説明を受け、エイラが怪訝そうに眉を寄せる。

「ネウロイが、みんなの方に集中してる。親衛隊の人達には向かってすらいない……」



帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』。その第2飛行隊に属するマイヤ・アツカネン少尉。光景を目に据え、彼女は言葉を失っていた。

話は、ほんの十数秒前まで遡る。インペリアルウィッチーズ司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐が編隊から突出。指揮官ともあろう者が、僚機も護衛も付けずに単機先行し、ネウロイの群れの中へ飛び込んでいったのだ。

ネウロイ群は悠貴を取り囲むように彼女の四方八方へ展開。無謀にも単身で突っ込んできた愚かな獲物を逃がすまいと、包囲網を構築する。

ビーム砲も、その全てが悠貴に向けられ、赤く煌めき始める。数十機のネウロイによる集中砲火を受けては、エース級のウィッチと言えどただでは済まない。

だが、圧倒的に不利な状況にも関わらず、インペリアルウィッチーズの司令は不敵な笑みを浮かべていた。

他の親衛隊ウィッチも、悠貴を援護するどころか。上官の窮地に慌てるような素振りも一切見せない。寧ろ落ち着いていて、目の前の光景を悠然と見据えている。

上官と同僚等の異常とも言える様を見て、マイヤは飛行隊長のアリョーナに進言しようかとも考えたが、(隊長達には何か策があるはずだ)と思い留まる。

よく見ると、形の良い唇を動いているのが分かった。悠貴は何か呟いている。

マイヤの位置からでは距離があるため、悠貴が何を言っているのか聞き取ることは出来ない。インカムにも声が入ってこない。

(大佐は、一体何をしているの?)

インペリアルウィッチーズ及び皇室親衛隊の中では新参の部類に入るマイヤには、悠貴の行動目的が理解出来なかった。

他の親衛隊員も、誰一人として説明しようとしないう。何故なら、口で伝えるより実際に見た方が早いからだ。

「……………えっ?」

マイヤは己の目を疑った。先程まで攻撃態勢にあったネウロイの群れが警戒と包囲を解いたのだ。

いや、そればかりか。群れは緩慢な動きで左右に広がっていった。

迎えるべき支配者を目の前にしたかのように退き、通過を待っているのだ。

「これって…………?」

「ああ、あなたは始めてね?」

いつの間にか隣にいた飛行隊長——アリヨーナ・クリューコフ親衛隊大尉に声を掛けられる。

マイヤの返事を待たず、アリヨーナは眼前の現象について簡単に説明する。

「あれが大佐の力。ネウロイを支配下に置く……まあ、固有魔法みたいなもんよ。私は『マリオネット』って呼んでいるわ」

「……マリオネット」

その意味を噛み締めるように、マイヤは言葉を繰り返す。

再び前方へ目を向けると、悠貴が全員についてくるよう手で合図しているのが分かった。飛行隊長等をはじめ、親衛隊は皆上官の指示に従う。

その後も、ネウロイの集団が彼女達を襲うことはなかった。

マリオネットを発動した悠貴・フォン・アインツベルンは、ネウロイ達の支配者だった。

異形の怪物が人類に対して抱く敵愾心も、彼女の前ではまったくの無意味。退けと言えは退く。

その気になれば、細かな指示を与えることはもちろん、支配下に置いたネウロイを強化することすら可能であった。

しかし、悠貴はこの力に満足していない。マリオネットは不完全で、彼女が望む水準

値には達していないのだ。

銀色の装甲と実弾兵器を主兵装としていた大戦初期以前のネウロイならば、ほぼ全ての個体を意のままに操ることが出来た。

しかし、長引く戦争の中でネウロイはより強力になり、大型の個体まで現れるに至った。最早、悠貴のマリオネットでは操れず、ハッキリ言って性能不足であった。

故に親衛隊大佐は欲する。ブリタニア空軍の一部派閥によって開発された対ネウロイ用遠隔操作式半自立型攻撃兵器——ウォーロック。

それに極めて酷似した外見と能力を備えた新型のネウロイ——ネウロックが有しているであろう人類側の革新的技術——コアコントロールシステムを……。

第17話 「女侯爵と貴婦人のちよつとした世間話」

1944年9月中旬、欧州・カールスラント北西部——

北海に面したカールスラント沿岸。その上空にて、航空母艦「天城」から飛び立った8名の航空歩兵が、ネウロイの群れが会敵、交戦に入った。

沈みつつある陽の下で、多数の火線が閃く。航空歩兵用の各種火器が魔法弾の光筋を引く一方、複数の中型ネウロイに搭載されたビーム砲が亜高速の光条を撃ち放つ。

中型に随行する子機等も親機に続いて、砲口より紅の光軸を吐き出し、夕空の中で敵味方の火線が入り乱れている。

「ああ、もうっ！」

使い慣れたS—18対物ライフルによる見越し射撃で、何機目かの子機を粉碎した直後。優人は苛立ち混じりの声を上げた。

調子は良い。携行火器も使用機材も、完璧に整備されている。ネウロイも既に多数撃破しており、着実に戦果を上げている。

何を憤慨する必要があるのかと言えば、弾倉を1つ空にしておきながら、目標の中型ネウロイには1発も当てられていなかった。

慣れた所作で狙点を定め、引き金を引く。銃口から迸り出た20mmの魔法弾が、螺旋を描くように回転しながらネウロイ目掛けて飛翔する。

弾道は直撃コース、外れる筈がない。しかし、魔法弾が中型ネウロイの装甲へ到達することはなかった。小型ネウロイが射線へ割り込み、親機の盾になる形で銃弾を受けたからだった。

当然、小型の子機が20mm魔法弾の直撃を食らってただで済む筈がない。薄く脆い装甲は容易く破砕され、白い破片へと四散する。

子機群は、文字通り身体を張って親機たる中型を守っているのだ。S—18対物ライフル自慢の大口径も、目標に届かなくては意味がない。

何より、対ネウロイ戦における見越し射撃は自分の十八番。そう自負する扶桑海軍ウイザードにとって、目標を仕留められぬまま悪戯に弾を浪費しなければならぬのは屈辱だった。

「お兄ちゃん！」

ふと背後から声が掛かった。声の主は優人とロッテを組み、彼と背中合わせで応戦している妹——宮藤芳佳だ。

小さな身体で扶桑皇国海軍の航空歩兵用主力銃——九九式二号二型改13mm機関銃を携え、羽虫のように群がってくる子機から兄の背中を守っている。

「大丈夫だ」

優人はなんとか応じるも、少々の動揺と焦燥を抱いていた。

とは言っても、敵に攻撃が当たらないからそうなっているわけではない。眼前のネウロイ群に対するの危惧がそうさせているのだ。

子機が親機を庇う自己犠牲は元より。子機同士で編隊を組み、ウィッチーズに対して一撃を加えては離れていく波状攻撃を繰り返し、優人等の反撃で落伍した仲間を即座にカバーする等。航空歩兵部隊宛らな連携を見せている。

敵ながら見事な戦術。501Wエースを含む各ロツテは翻弄されていた。

501レベルの部隊なら、ここまで手こずる筈がない。急激に空戦練度を向上させたネウロイ。まるで自分達と同じ航空歩兵部隊と戦っているかのような錯覚。それらが優人等の動揺を誘い、100%の力を発揮させずにいるのだ。

(落ち着いて……落ち着いて……)

ボーイズMk. 1対装甲ライフルを射撃位置に保持し、狙撃を試みようとするリーネとて例外ではない。

子機ネウロイ群のビームをシールドで受けつつ、心中で自分に繰り返し言い聞かせていた。

攻撃後。すぐさま離脱していくネウロイの1体に照準を合わせてトリガーを引いた。

が、撃ち出された魔法弾は敵の脇を掠めただけで、空の彼方へと飛び去ってしまった。

「くっ！」

ロツテの長機であるペリーヌが苦悶の声を漏らした。親機の中型ネウロイと向き合っていた彼女に、紅色のビームが雨の如く降り注ぎ、シールドに着弾していた。

「ペリーヌさん！」

上官であり、戦友でもあり、なにより大切な親友であるペリーヌの危機。リーネは反射的にボーズライフルの銃口を中型ネウロイへと向ける。

手早いボルト操作で次弾を薬室に押し込むと、間を置かず引き金を絞った。

普段のリーネなら、同士討ちになりかねない状況でも冷静且つ正確な援護射撃が出来る。そう普段の彼女なら……。

「へっ？きやつ!？」

ふと空気を切り裂く音がペリーヌの耳朶に触れる。かと思えば、高速で飛来した物体がペリーヌの側頭部を掠めた。接触の拍子に金色の髪が一房、宙に舞い上がる。

短く悲鳴を上げ、振り返ったペリーヌの瞳に、ボーズライフルを構えるリーネの姿が映る。頭部を掠めた物体の正体は、対装甲ライフル用の魔法弾だったのだ。

「……リーネさん……」

「あ……、ごめんなさい！私、そんなつもりじゃー！」

危うく誤射されかけたペリーヌだが、彼女から怒りは感じられない。寧ろ信じられない、といった表情で呆然と戦友を見据えている。

対するリーネは戦闘中であることも忘れ、深く頭を下げて謝罪の意を訴えていた。そのため、背後から急接近する小型ネウロイの編隊に気が付かなかつた。

「リーネさん！後ろ！」

ペリーヌの叫びを受け、リーネはハツとなる。後ろへ振り返つた彼女が目にしたのは、己の眼前に迫つた数機のネウロイだつた。

腹に備えた複数のビーム砲が煌々と輝きながら彼女を狙っている。この間合いでは、最早回避も防御も間に合わない。

やられる、と瞬間的に思つたリーネは、横合いが伸びる多数の火線がネウロイへ殺到するのを認めた。

側面からの攻撃を受けた小型ネウロイは、一機残らず破砕・無惨する。

「リーネ！」

「リーネちゃん！」

と、リーネの窮地を救つた宮藤兄妹が彼女の元に駆け寄ってくる。ペリーヌも2人に続く。

合流した4人の航空歩兵は背中合わせとなり、ネウロイの次の攻撃を警戒しつつ声を

交わした。

「リーネちゃん、大丈夫だった？」

ネウロイの動きを目で追いつつ、芳佳は親友へ気遣いの言葉を投げ掛ける。

「う、うん。私は平気だけど、ペリーヌさんが……」

「私も、何も問題ありませんわ！」

心配するリーネの言葉を遮り、ペリーヌが微かに苛立ったような口調で応える。

「私のことよりも、リーネさん。あなた、一体どうしてしまいましたの？戦いに集中出来ていないようですね？」

と、ペリーヌはチラツと横目でリーネの様子を窺う。ガリア貴族令嬢の怪訝な視線を感じ取ったリーネは、親に叱られた子どものように縮こまり、小声で「ごめんなさい」と独り言ちる。

謝罪が聞こえていたのか。ペリーヌは居心地悪そうに身体を揺する。彼女の物言いは確かにキツイものがあるが、憤慨しているわけでもなければ、リーネを叱責するつもりもない。

自由ガリア空軍へ志願したばかりの頃。ブリタニアではストライカーユニットの不足で出撃の機会が無かった。

また、連合軍内の主導権を握らんとするブリタニア軍上層部の思惑等も重なり、ペ

リーヌはブリタニア人に対して多少の悪感情を抱いていた。

加えて、ペリーヌとリーネは性格の相違からロツテの相性が極めて悪く。両者の関係はお世辞にも良好とは言えなかった。

しかし、芳佳の配属後リーネは実戦で力を発揮出来るようになり、ペリーヌも501の仲間達との交流を経て本来の優しさが全面へ出てるようになった。

結果、ロツテの相性の悪さ。公私におこる不仲ぶりは鳴りを潜め、2人の関係は信頼し合える友人へと変わっていった。

それはガリア復興を手伝いたい、というリーネの言葉にペリーヌが心から感激していたことから窺える。

要するに。ペリーヌは嫌味を言っているようで、明らかな不調を見せているリーネのことが心配で仕方がないのだ。

「ふむ……」

顎に手を添え、優人は暫し熟考する。やがて、何やら思い立ったらしく、芳佳とペリーヌに指示を出した。

「芳佳、ペリーヌ。ちよつとリーネと話がしたいから、ネウロイを頼む」

「あ、うん……」

「承知致しましたわ。お兄様」

芳佳とペリーヌは殆んど迷うことなく承服すると、銃弾を構え直して2人のみで周辺警戒を続行する。

「さて、リーネ。こつち向いて……」

「あ……………」

優人は優しい声音で告げる。リーネは戸惑い気味に従い、上官兼親友の兄である優人と向き合う。

「あ、あの…………ごめんなさい」

叱責されるとでも思ったのだろうか。優人を目を合わせたリーネの第一声は謝罪だった。

自信無さげで、伏し目がちに謝る。彼女の様は、芳佳が501基地へやって来る以前——自信喪失に陥っていた頃へ戻ってしまったかのようだ。

「私、もう少しでペリーヌさんを……」

「……………」

「わかってます。当たらなかつたから、ペリーヌさんが大丈夫だつて言ってるからって、それで許されることじゃありません……」

「……………」

「味方を誤射するなんて、これじゃ——」

リーネが吐露した彼女の心情は、懺悔とも自嘲とも受け取れた。黙然と耳を傾けていた優人だが、ふとリーネを先回りするかのようには言葉を紡いだ。

「またお母さんを悪く言われる、か？」

「……………」

入れ替わりに今度はリーネが黙り込む。どうやら凶星のようだ。

優人として、伊達に501の長男役を自称しているわけではない。自分の内面を見透かしていた扶桑海軍ウィザードに対し、リーネは沈黙を以て応じる。

優人が推察した通り。リーネの不調の原因は、やはり天城の飛行甲板での一件だった。

カールスラント皇室親衛隊大尉——グレーテル・ホフマン。彼女に自身の母親であり、先の大戦の英雄でもあるウィッチ——ミニー・ビショップを侮辱された。

リーネはホフマンの発言を重く。あまりに重く受け止めてしまい、自分が不甲斐ないせいで母を悪く言われたのではないか、という考えに至る。

持ち前の優しさ故、家族を想うが故に繊細なリーネ。煩悶とした結果、集中力を欠き。射撃の精度が著しく低下したのだ。

「リーネ、顔を上げて」

「……………はい」

先程と同じく、優人は優しい口調で言葉を紡ぐ。リーネの視線は逡巡するように揺れていたが、次第に一点を——扶桑海軍ウィザードの瞳を見据えていく。

直後、リーネの身体はストライカーユニットによる飛行とはまた違う。フワリと宙に浮くような感覚に包まれた。

扶桑海軍第二種軍装の布地が頬に当たり、男性のものであろう背中に回された腕の力と温もりを数瞬程感じ続け、リーネは自分が優人に抱き締められていることに気付く。

「ふえ!?!」

自分の置かれた状況を理解した途端、リーネの口から驚きと羞恥の入り雑じった声が飛び出る。白磁の陶器を想わせる頬も、一転して熟れたトマトのように真っ赤となった。

全寮制で職員も全て女性の学校にのみ通っていた。おそらくは、501メンバーの中ではサーニヤやバルクホルンと並んで男性に対する免疫が低いことは言うまでもない。親しい間柄とはいえ、突然異性に抱き締められたとあっては、赤面の上に狼狽えるのも当然と言える。

「ゆ、優人さん!?!何を——」

「よしよし、大丈夫だよ」

「えっ?」

あたふたするリーネの言葉を遮り、優人は子どもあやすような言葉遣いで囁く。

一体扶桑海軍ウィザードが何の話をしているのか。理解が追い付かず、リーネはますます当惑した。

「上からな言い方になるけど。お前はよくやってる、よく頑張ってるよ。それこそ、前大戦の英雄であるお母さんに負けないくらい」

「でも……」

リーネを抱き締める腕に力を込め、優人は言葉を続ける。

「まあ、気持ちは分かるよ。俺も父親が宮藤博士つてことで気を張っていた時期があるから……」

「優人さんも?」

意外そうな口調で訊き返され、優人は頷く。彼の脳裏には新兵時代の記憶が蘇っていた。

新式ストライカーユニット開発の為、渡欧していた宮藤一郎は、既にちよつとした有名人であった。

舞鶴にて。『軍神』と名高い扶桑海軍航空ウィッチ——北郷章香少佐の薫陶を受けていた当時の優人は、養父の名を継ぎぬようと気負い過ぎていた節があった。

固有魔法『魔眼』の制御に苦心していた坂本や軍の名門の出である竹井。同じく北郷

の元で修練を積んでいた若き日の2人とは、悩みのある者同士ということで妙に気が合
い、よくつるんでいたものだ。

そこには、今や扶桑海軍屈指のエースの1員として知られる若本徹子中尉の姿もあつ
た。気が強く、また気性も荒く。ハッキリと物を言う若本と優人は、よく喧嘩になつて
いた。

決して険悪な関係ではない。喧嘩友達とでも言える仲であり、本気で嫌い合つたり憎
み合つたりはしていなかった。

しかし、皆若かった。それ故に徹子から父親のことをやたらと引き合いに出されもし
た。訓練でも実戦でも成果を出せない日々が続いたのもあつて、当時の優人は一郎に負
い目を感じていた。

「けど、私は優人さんとは違います」

「リーネは少し自分を卑下し過ぎだな……」

フウと軽く息を吐き、優人は一拍置いてからリーネに一つ質問をぶつける。

「501の一員としてブリタニアを守る為に戦い、皆と力を合わせてガリアを取り戻し
た日々は、誰にも誇れないほど酷いものだったかな？」

優人が何を言わんとしているのか。すぐ理解したリーネはハッと目を見開く。

おもむろに顔を上げたリーネの瞳に柔和な笑みを浮かべ、慈しむような視線を向ける

優人が映った。

「謙虚さもリーネの魅力の一つだよ。けど、それも過ぎれば卑下や自虐にしかならない。お前は精鋭部隊の一員として各国のエース達と肩を並べて戦い、カールスラント組のよくなベテラン勢にも引けを取らない働きをした。大切な故郷をネウロイの脅威から守り通し、戦友の母国を解放した。慢心は禁物だけれども、自分は仲間と英雄である母親に負けない活躍をしたんだって、胸を張って欲しいな」

優しく言い聞かせる上官の言葉に耳を貸しつつ、リーネは501に配属されてからの日々を追想していた。

養成学校出たてで実戦経験の無い自分を温かく迎え、気に掛けてくれていたミーナ。戦果を上げられない自分を見放さず、最前線で戦い抜けるようにと鍛えてくれた坂本。

宮藤兄妹の兄は自分を妹同然に可愛がり、励ましてくれた。妹は戦う勇氣と力を分け与えてくれた。

ペリーヌには性格が合わなかったせいで苦手意識を抱いていたが、寝食を共にするうちにとても優しい人なのだと思いを改めるに至った。

その他、正反対な性格のWエース。元気いっぱい悪戯好きなシャリーとルツキー。不思議ちゃんなエイラと繊細で可愛らしいサーニヤの北欧コンビ。

自分は大切な仲間と共にブリタニア防衛及びガリア奪回の任を成し遂げた。後に「ブリタニアの戦い」と、呼称される戦役を戦い抜いた。皆と一緒にブリタニアの国民や大陸から避難してきた多くの人々を守り抜いたのだ。

例えば自惚れだと揶揄されようと、前大戦の英雄である母親——ミニー・ビショップの娘として恥じない活躍をしたのだと、自信を持って言えなくてどうする。

ホフマンに嘲笑されたことで、自信を失っていた頃の自分に戻ってしまったていたらしい。

リーネは己の心の弱さを恥じ、新たに強い輝きを灯した蒼色の瞳で優人を見返す。

「すみません、優人さん。もう大丈夫です」

その語気の強まった声を聞き、優人は満足そうに頷いた。

「終わったか?」

ふとインカムに声が入ってくる。声の主はバルクホルンだが、その口調はなにやら刺々しかった。

「戦闘中だぞ、後輩を口説くのも大概しておけ。この女つたらしが……」

「にやはは! 巨乳の女の子に胸を張れだなんて、中々のセクハラだよねえ♪」

「……………言い掛かりだ」

こんな時でも呑気なハルトマンが、バルクホルンの尻馬に乗ってくる。

W エースの言い掛かりに、優人は惘然とした面持ちで反論するも、何故か声が小さかった。

一方リーネも、優人との会話を他者に聞かれ、またコンプレックスである胸について触れられてしまい、気恥ずかしそうに頬を染めている。

さらに優人とリーネの傍らでネウロイを警戒していた芳佳とペリーヌも、ある意味二人だけの世界に入ってしまった優人等に対して複雑な心境を抱いていた。

少々不機嫌そうに軽く頬を膨らませる芳佳は、肩越しに振り返りながら兄を睨み付け、ペリーヌは優人に構われているリーネに羨望の眼差しを向けている。

「相変わらずね」

海軍正式入隊以前からの戦友。その変わらぬ様を目にした竹井が、何処か喜色を滲ませた声で独り言ちる。

彼女はロツテ組んだミーナと背中合わせの状態で、ネウロイと交戦中だ。

「突然女の子を抱き締めるなんて、エーリカの言う通り立派なセクハラだわ」

と、ミーナはムスツと不機嫌そうだ。10代とは思えない大人びた言動と優雅で柔らかな物腰が印象的な彼女だが、今はまるで拗ねた子どもようである。

「ええ、普通はいけませんよ」

ミーナの発言を受けた竹井は、クスツと小さく笑声を立てる。

「けど、一応下心は無いようですし。リバウ時代、優人はああやって仲間を勇氣付けていました。後輩のウィッチは、皆妹同然に思っているのかもしれないね」

過去を簡潔に語りつつ、竹井は本大戦初期のオラーシャ帝国リバウ基地の情景を追想していた。

扶桑皇国佐世保航空予備学校現校長——北郷章香中佐が飛行隊長を務めた扶桑海軍舞鶴航空隊。そこからウィッチを選抜・編成され、扶桑海軍で活躍した第十二航空隊。地上航空隊たるリバウ航空隊の一角を担った遣欧艦隊第24航空戦隊第288航空隊も、舞鶴航空隊が元になっている。

第24戦隊はもちろん。同じくリバウに駐留していた第23航空戦隊や機動空母部隊の航空歩兵は、扶桑海軍事変を経験した腕利きが多かった。

その一方で、雁淵孝美や下原定子のような事変後に志願・配属された実戦未経験のウィッチも少なくなかった。

北はスオムス。東はオラーシャ。南はオストマルク。西はカールスラントと八面六臂の活躍を見せ、*“鬼より怖い”*とまで言われた扶桑皇国海軍の精鋭部隊——リバウ航空隊だが、当然ながら戦いは決して楽なものではなかった。

各前線までは距離があり、如何に扶桑海軍が誇る主力ストライカーユニット——零式艦上戦闘機の航続距離が長いとはいえ、最前線までの長距離飛行は体力・気力・魔法を

大いに消耗させ、実戦の緊張がそれらを倍化させる。

目的地へ到着したとしても休んではいられない。すぐ全開戦闘を実施しなければならぬ。

その上、拠点であるリバウは厳しい冬が訪れるオラーシャ帝国の港街。一時はネウロイの夜間空襲により眠れぬ夜が続き、不眠に起因する疲れとストレスに悩まされもした。

そのような過酷極まりない状況において、つい先日まで女学生だった新参組のウィツチに掛かる負担は相当なもの。

蓄積した疲労によって体調を崩して倒れる者。故郷恋しさや厳しい生活・環境に耐えきれず脱走を企てる者。ネウロイとの戦闘で負傷する者等が相次ぎ、負傷した中には何らかの後遺症が残ったり、最悪戦死する者も存在する。

リバウ航空隊は、誰もが称賛する華々しい活躍を見せる反面。上述の事情から「魔法の墓場」という皮肉も頂戴していた。

魔法力を持つこと以外は年相応にか弱い乙女。元々面倒見の良い優人は、こういった後輩達をいじらしく思っていた。

彼は先輩や上官というよりは兄のように接し、彼女等の小さな身体を抱き締めることで勇気付けていた。

結果として部隊の士気向上に一役買っていた優人ではあるが、稀に持ち前の天然ジゴロぶりから「本気」にさせてしまったことも……。

「まあ、節操無しな男ですから。ウィッチ関連のトラブルにもことかかないようですよ……」

「フフ♪それは分かるわ。501でもそうだったから」

苦笑する竹井の言葉を受け、ミーナの表情にいつもの柔和な笑顔が戻る。

「天城に戻ってたら聞かせて貰えるかしら？あなたと、坂本少佐と宮藤大尉の昔話」

「それはもちろん♪」

それぞれ「女侯爵」、「貴婦人」という似通った異名、温厚で穏やかな人柄のミーナ・デイトリンドン・ヴィルケ中佐と竹井醇子大尉。

性格が近いからか。或いは、何かと罪作りな扶桑のコンビに振り回された者同士だからか。通じ合う者があるようだ。

「さて、それじゃあー！」

「そろそろ反撃、ですわね！」

ミーナらMG42を、竹井は九九式二号二型改13mm機関銃を再度構え、周囲に群がる小型ネウロイに向けて応射した。



501部隊の戦闘空域よりも、さらにネウロイの勢力圏へ近付いた洋上では、ネウロイの別動隊と第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』を中心とする帝政カールスラント皇室親衛隊航空戦力が交戦していた。

ネウロイ側の戦力は、501が戦っている集団と同等規模の敵編隊。そして、件の作戦目標——ネウロック。

猛々しい戦意を以て戦端を開いたのは、ネウロイ側であった。

赤い輝きを放つ装甲から閃いた光条が茜色の空を切り裂き、その光芒に触れた艦上戦闘機が火球へ変えた。

辺りは一瞬で乱戦模様となる。光条と光華が乱舞して、敵味方の航空兵力が入り乱れる。

親衛隊航空戦力の指揮官——悠貴・フォン・アインツベルン大佐が直率するインペリアルウィッチーズは、激戦の最中において損害ゼロを維持し、親機たる中型ネウロイを手早く撃破していた。

親衛隊隷下のウィッチ部隊は、国防軍のウィッチ部隊よりも対ネウロイ戦に特化している。501部隊との模擬戦では散々な結果に終わったが、今は隊の錬度の高さを知らし

めている。

突出したインペリアルウィッチーズの後衛を担うように展開しているのは、同じく親衛隊所属の艦上戦闘機部隊。

“Bf109T”のみで構成された2個艦上戦闘飛行隊——各飛行隊16機編成——は、インペリアルウィッチーズが取り零した小型の子機を掃討する任務に従事している。

「大佐。ネウロイ共がネウロックを囲うように陣形を組んでいます！」

ネウロイが集中している正面を見据えながら、ホフマンが上官に一報を入れる。

『ええ、思った通りだわ』

インカム越しに返ってきた悠貴の声音には、喜悅の感情が滲んでいた。

『やっぱりネウロックはコアコントロールシステムを有していて、それを利用してネウロイに自分を守らせている』

己の推測を述べた悠貴は、味方の艦上戦闘機と同名のストライカーユニットを加速させる。

悠貴の固有魔法『マリオネット』を上回る支配・使役の能力。501にも扶桑海軍にも伝えていない。本作戦におけるインペリアルウィッチーズの真の目的だ。

『第1飛行隊及び戦闘機隊はネウロイを排除！第2飛行隊は私と共にネウロックを確保

！」

『はっ！』

悠貴が飛ばした指示に親衛隊各員はすぐさま応じる。使い魔の尻尾を揺らめかせ、白木拵えの扶桑刀を抜刀したインペリアルウィッチーズ司令が弾かれたように前進する。

親衛隊仕様のフリーガーハマー。もしくは、筒状のロケット投射器らしき武器を携えたアリヨナ・クリューコフ親衛隊大尉率いる第2飛行隊が、その後続く。

自分と自分の指揮する第1飛行隊を差し置いて、第2飛行隊が敬愛する親衛隊大佐と行動を共にするのは不愉快だが、作戦とあつては仕方がない。

「貴様等の相手は我々だ！」

ホフマンはMP43を連射しながら、中型ネウロイの一体に肉薄する。

彼女はビームに撃たれることを全く恐れていない。インペリアルウィッチーズの一人たる者、恐れ知らずでなくてはならない。それがホフマンの考え方だ。

中型ネウロイはすかさず応射するも、ビームはホフマンの身体を掠めて虚空に霧散し、接近を許してしまう。

すれ違いざまにホフマンの左手が接触する。ネウロイの装甲を構成する金属類が立ち所に錆び始めた。ホフマンの固有魔法『腐食』である。

錆びに侵された装甲はポロポロに朽ち果て、心臓たるコアを無防備にも晒し出す。さ

らにホフマンの2番機が銃撃によってコアを破壊する。

「1機残らず鉄屑にしてくれる!」

容易くネウロイを仕留めたホフマンの表情には、愉悦の色が浮かんでいた。

一方、インペリアルウィッチーズ司令及び第2飛行隊の親衛隊ウィッチもまた、ネウロック確保へ動いていた。

6名いる飛行隊メンバーの内、アリオナを含めた4名がフリーガーハマーを射撃位置に保持する。

攻撃の気配を察知したネウロックは、即座に飛行形態へ変形。ロケット弾の射程外へ逃れようとする。

「強大な力を持つわりに臆病なヤツだ」

嘲笑に口元を歪めるアリオナのフリーガーハマーから、一発のロケット弾が撃ち出される。部下のウィッチ達も飛行隊長に倣い、魔法力の充填されたロケット弾を撃ち込む。

ネウロックは持ち前の機動力を活かし、接近するロケットの追撃を躲そうとする。しかし、4発のロケット弾はネウロックの間近まで迫ると、それらは独りでに起爆し、ネウロックとその周辺に眩い閃光を押し拵げた。

『やった! やりましたよ、大尉! “新兵器” は機動力のある敵に有効です!』

自らの2番機を務める親衛隊ウィッチ——マイヤ・アツカネン少尉の喝采が、インカムを通してアリオーナの耳に届く。

マイヤの興奮気味に語る、「新兵器」とはVT信管のこと。発射後にレーダーが起動し、目標物に命中しなくとも一定の近傍範囲内に弾体が到達すれば、起爆できる信管。所謂「マジックヒューズ」である。

信管の技術は、シャーリーの故郷——リベリオンが軍艦の対空砲弾用に開発したものであり、インペリアルウィッチーズは独自のルートでこれを秘かに入手。小型化等の改良を施した上で、フリーガーハマーへ組み込むことに成功する。

この信管を活用したロケット弾の命中率は、従来の時限信管の20倍にまで向上。早速実戦にて運用されるに至った。

『アリオーナ!』

「はっ!各員、一気に畳み掛けるわよ!」

ふらつきながらも爆煙から抜け出したネウロックの姿を認め、悠貴はアリオーナに次の行動を促す。アリオーナからさらに第2飛行隊の面々へと指示が飛ぶ。

すかさずフリーガーハマーを装備する4名の親衛隊ウィッチが、各自数発のロケット弾をネウロック目掛けて射出。それら全ての弾頭を敵機の逃げ果せた進路上で起爆させる。

連続して咲く巨大な火球。一度に押し寄せる魔法力を伴った熱、衝撃、弾頭の破片。マジックヒューズの威力を前に、然しものネウロックも足が鈍った。

その隙を悠貴は見逃さない。白木の扶桑刀を抜刀すると、再度加速して敵機へ迫る。

「はあああっ！」

裂帛の気合と共に、ネウロック目掛けて振り下ろされる白刃。禍々しい黒色の装甲は、魔法力を帯びた斬撃によっていとも容易く切り裂かれた。

第18話 「北海の緊張、ロンドンの平穩」

1944年9月、西欧・北海——

夕陽に照られ、茜色に染まった大西洋の付属海——北海。幻想的とさえ形容出来る情景の中、洋上を突き進む黒鉄の威容が認められた。

かつて赤城型航空母艦3番艦「愛宕」として扶桑皇国海軍所属していたそれは、帝政カールスラントへ売却されて以降「グラーフ・ツエツペリン」と名を変え、カールスラント国防海軍に身を置いていた。

そして、現在は国防海軍の手からも離れ、帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』の海上移動航空基地として運用されている。

人類連合軍西部方面統合軍が、ガリアへの逆上陸を実施するのと時同じくして。グラーフ・ツエツペリンもまた作戦行動中であつた。

さらに別行動であつたが、グラーフ・ツエツペリンと同じくカールスラントへ売却された「ドクトル・エツケナー」——元は赤城型航空母艦4番艦「愛鷹」及び同型艦の1番艦にして、扶桑海軍遣欧艦隊所属の航空母艦「天城」も北海方面に派遣されている。

指揮系統と毛色の異なる2つの航空ウィッチ部隊——インペリアルウィッチーズ及び

び連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』を支援することが、これら3隻の大型空母に下された命令だった。

数年前よりネウロイの占領下に置かれているカールスラント本国。その北西地域にて、現在501とインペリアルウィッチーズが飛行型ネウロイの群れと交戦状態に入っている。

魔女と異形が航空戦を展開している沿岸地域へ向かう途中にあるグラーフ・ツエツペリン。当艦は、インペリアルウィッチーズ司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊より、同じく皇室親衛隊所属のドクトル・エツケナーとは異なる命を受けていた。

艦には艦上航空ウィッチは乗り込んでおらず、艦上戦闘機等の航空機も搭載されていなかった。そればかりか、護衛役を請け負う随伴艦すら1隻も見当たらない。

ネウロイの勢力下が目と鼻の先まで迫ってる北海において、航空戦力も護衛艦も引き連れていないという空母運用にあるまじき愚策。

あまりに無防備、あまりに無用心。これでは「艦を狙ってください」と言わんばかりだ。

「見えました」

グラーフ・ツエツペリン艦橋。双眼鏡を用いて前方を確認していた航海長が、背後に立つ艦長へ報告する。

彼が双眼鏡越しに認めたのは、航空ウィッチらしき複数の小さな人影。そして、サイズがそれらの数倍はあるのかという巨大な影だった。

「アインツベルン大佐以下インペリアルウィッチーズの第2飛行隊所属のウィッチ。及び作戦目標のネウロイを視認！捕獲に成功したようです！」

「よし！回収作業を開始する！作業要員は甲板へ！対空監視を厳となせ！」

航空長の更なる報告に頷き、グラフ・ツエツペリンの艦長は命令を出す。それを副長が復唱し、瞬間に艦内各部署の責任者へ伝えられていく。

回収作業というのは、インペリアルウィッチーズが捕獲したネウロイ——ネウロツクをグラフ・ツエツペリンの艦内へ収用することだった。

報告によると、彼女達と共に捕獲作戦に参加していたはずの艦上戦闘機部隊——“B f109T”で構成された2個艦上戦闘飛行隊16機——は、全滅してしまっただらしい。

「しかし、ネウロイをどうやって……」

グラフ・ツエツペリン艦長の瞳に、インペリアルウィッチーズの手で捕獲されたネウロツクの姿が映る。

魔法繊維で構成されたワイヤーネットに絡め取られ、ネウロツクは完全に沈黙している。

ハニカム状の模様が描かれた漆黒の装甲には、斬撃による損傷がほぼ全体に確認出来る。鋭く鮮やかな斬り傷を見るに、おそらく扶桑刀によって付けられたもの。

自然と艦長の視線は、白木拵えの扶桑刀を携えたインペリアルウィッチーズ司令へと向けられる。

世界広しと言えども、扶桑軍に属する航空歩兵以外で刀を愛用する者は悠貴・フォン・アインツベルン大佐ぐらいであろう。

長い黒髪を潮風に靡かせ、赤い瞳で虚空を見据える東洋系美女。プロの女優やモデルですら霞んでしまう美しさ、親衛隊の制服越しに見せ付ける凹凸がハッキリした素晴らしきまでのプロポーション。

飛行甲板で作業にあたっている乗員等は忽ち目を奪われ、神に鼻屣されたとしか思えない美貌にただただ息を呑んだ。

自分を見つめる男達の視線に気付くと、悠貴は艶然と微笑み返した。それは前線で戦う数多の将兵達を救わんとする女神の慈悲に満ちた笑顔にも、男共を誑かし己が欲望の為に利用せんとする悪魔の黒い笑みにも見える。

腹の内が全く読めないインペリアルウィッチーズ司令に対し、グラーフ・ツエツペリ艦長は一抹の不安を覚えずにはいらなかった。

ともあれ、目的であるネウロイの捕獲は成功した。あとは新手のネウロイが現れる前

にノイエ・カールストラトへの帰路に着くだけだ。

グラーフ・ツェッペリン艦長は、僅かにズレていた軍帽を直すと指示を飛ばした。「ネウロイを艦内に収容後、安全圏まで離脱する。甲板員はウィッチを誘導せよ！」



扶桑皇国海軍遣欧艦隊から501部隊へ派遣されている宮藤優人大尉と、ブリタニア空軍610戦闘機中隊を原隊とするリネット・ビショップ軍曹。

両者はそれぞれS-18対物ライフル、ボーイズMk. I対装甲ライフルを射撃位置に保持し、広範囲に展開している敵小型ネウロイの群れを目で捉えていた。

各々の人差し指がライフルのトリガーを引く。1機、また1機と小型ネウロイは2つの銃口より放たれた魔法弾を受け、粉々に砕け散っていった。

本作戦において第501統合戦闘航空団は、ミーナが直率する親衛隊支援部隊8名と、シャーリーが指揮する空母直掩機部隊4名の2つの部隊に分けられた。

前者はミーナと竹井。バルクホルンとハルトマン。ペリーヌとリーネ。宮藤優人と芳佳の兄妹でロツテを組んでいた。

しかし、ある事情で不調に陥っていたリーネを見兼ねた優人の具申もあり、ミーナは

当初の編成を変更。すぐさま優人とペリーヌの2番機を入れ替えた。

さらに、子機の大群に守られている親機の中型ネウロイ撃滅のため、優人隊・ペリーヌ隊の2個ロットにシュヴァルムを組ませた。

大ベテランに励ましと助言を受け、不調状態から脱して好調となったり、ペリーヌは普段以上の力を発揮していた。

高速で縦横無尽に動き回る小型ネウロイに対し、外すことも味方を誤射することもなく、確実に魔法弾を命中させる射撃技術はベテランウィッチ顔負けであり、経験豊富で同じく射撃を得意とする優人も舌を巻く。

前大戦の英雄である母親——ミニー・ビショップの名に恥じぬ戦いぶりと言えよう。

「リーネー！大物をやるぞー！芳佳！ペリーヌ！援護を頼むー！」

「はいー！」

「了解ですわー！」

優人が指示を飛ばし、3人の後輩が間髪入れず声を返す。大物とは、もちろん親機であり敵戦力の中核である2機の中型ネウロイのことだ。

その周辺を彷徨っていた多数の子機は、501との交戦によって著しく減少。残存個体3つに分かれ、内2つのグループはミーナ隊・バルクホルン隊とそれぞれ交戦中。もう1つのグループも、優人指揮するシュヴァルムとの戦闘でほぼ全滅していた。中型ネ

ウロイへ攻撃を阻む者は最早存在しない。

ウイザードとウイツチに銃口を突き付けられた2体の中型ネウロイは、全身からビームを乱射して応戦する。

しかし、中型ネウロイの攻撃は、芳佳が展開する巨大な魔法シールドによつて容易く防がれてしまう。

残存する小型子機等が後方から妨害しようとするれば、忽ちペリーヌのブレン軽機関銃 Mk. I や彼女の固有魔法『トネール』の餌食となる。

絶え間無く集中砲火を浴びせられている状況にも関わらず、優人もリーネも落ち着いていた。頼りになる仲間達に守られているからだ。

これまでの戦闘で剥き出しとなったコアへ狙点を定めつつ、ウイツチとウイザードは軽く息を吐く。

狙撃において、一番の敵はプレッシャー——つまり自分自身だ。2人の射撃技術を鑑みれば、この距離でコアを狙つて外すことなどまず有り得ない。

如何なる状況に置かれようとも、普段通り。或いはそれ以上の力を発揮する。それが狙撃にとつて最も重要なこと。

2人は、ほぼ同時に引き金を絞つた。2発の魔法弾が銃口より射出される。螺旋状に回転しながら空気を切り裂き、真つ直ぐ虚空を突き進んでいった。

やがて魔法弾はコアへ到達。赤い輝きを放つ正十二面体の結晶は砕け散り、2機の中
型ネウロイは白い破片となって霧散した。



インペリアルウィッチーズ第2飛行隊長——アリヨーナ・クリューコフ親衛隊大尉
は、グラーフ・ツエツペリンのエレベーターへネウロックを降ろした後、部下達も飛行
甲板への着艦と小休止を命じていた。

化物染みた敵との戦闘。それも、ただ倒すのではなく捕獲を命じられていたのだ。如
何にVT信管——“マジックヒューズ”を活用した戦術で終始優位に立っていたとは
いえ、隊員等の疲労は相当なものだろう。

甲板を見下ろせば、マイヤ・アツカネン少尉以下5名の部下が、グラーフ・ツエツペ
リンの乗員達に飲料水を振る舞われ、軽い雑談を交わす者もいた。

それらの光景を微笑まじげに見守っていたアリヨーナだが、彼女の視線はすぐに別の
ものへ向けられる。苦勞して捕獲した特殊なネウロイ——ネウロックだ。

魔法力を帯びた白刃の斬撃。改良型マジックヒューズを組み込んだロケット弾によ
る猛攻撃を受け、機能不全でも起こしたのだろう。

傷だらけのネウロックは完全に沈黙し、エレベーターによって艦内へと降ろされていく。

グラフ・ツェッペリン收容の際、機能を取り戻したネウロックに抵抗されるかと思っていた。しかし、そのようなことは一切無く、艦内への收容作業は無事終了した。作戦が完遂したこと自体は喜ばしいことだが、ここまで順調にいくと拍子抜けしてしまう。

「お疲れ様、アリヨーナ」

何者かがアリヨーナの肩をポンと叩き、劳いの言葉を掛ける。

反射的に振り向くアリヨーナの視界に絶世の美女が飛び込んでくる。アリヨーナの上官であり、インペリアルウィッチーズの司令でもある親衛隊大佐の悠貴だ。

異性はもちろん、同性であっても惚れてしまいそうな美貌の持ち主である彼女は、いつも通りのコケティッシュな笑みを浮かべている。

いつも違うところがあるとすれば、制服の袖に微かな焦げが見られることぐらいか。「あなた達第2飛行隊のおかげで、ネウロックを捕獲できたわ。私ひとりだったら、やられていたかも……」

軽く自嘲する悠貴の発言を受け、アリヨーナな物思いに耽る。

悠貴が滅多に戦場に出ることはない。政治的工作や部隊指揮等に専念している。だ

が、指揮能力はもとより航空歩兵としての實力は、間違いなくインペリアルウィッチーズ最強。

501のWエース——バルクホルンやハルトマン。2人に次ぐ撃墜スコアを誇る第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』司令——グンドユラ・ラル少佐。『フリカの星』と名高い、ハンナ・ユステイナー・ヴァーリア・ロザリンド・ジークリンデ・マルセイユ大尉等の世界的エース級と比肩し得るほど。

しかし、然しもの彼女も化け物相手の近接戦闘とあつては、無傷とまではいかなかったらしい。

ネウロツクのビームを掠めてできた焦げ跡で汚れた制服に目をやり、上官に大した怪我がないと判断したアリヨーナは、「大佐の作戦に従つたまでです」と無難に応じた。

「大佐！御無事で!?!」

突如、悠貴の身を案じる声のアリヨーナの耳朵に触れる。それとほぼ同時に、1人のウィッチがアリヨーナと悠貴の間に割り込んできた。

使い魔の尻尾を揺らめかせる後ろ姿は、第1飛行隊——グレーテル・ホフマン親衛隊大尉のものだった。

ホフマンのストライカーユニットが巻き上げた風をまともに浴びてしまい、アリヨーナは小さく舌打ちする。

今のホフマンの視界にあるのは悠貴の存在だけ。他の人間など眼中にない。

かと思えば、「大佐の御召し物が焦げたのは貴様のせいだ」と、言わんばかりに陰湿な視線を寄越してくる。いかにも彼女らしい。

ネウロイを全滅して部下達と共に合流しようだが、ホフマンはアリヨーナと異なり、隊員達をグラーフ・ツェペリンの甲板で休ませるつもりはないらしい。

戦闘で疲弊した第1飛行隊のウィッチ達を気の毒に思いつつ、アリヨーナは甲板で休んでいる己の部下達を空へ呼び戻した。

「あれ?こちらも終わっただんですか?」

「——ッ!?!」

ふと場違いなほど間の抜けた声が聞こえ、アリヨーナを含めたインペリアルウィッチーズの面々は一齐に振り向く。

彼女等の視線の先にいたのは、第501統合戦闘航空団の一員である扶桑海軍ウィッチ——宮藤芳佳軍曹だった。

固有魔法『マリオネット』を駆使して悠貴が誘導したネウロイ群により、後方で足止めを食らっているはずのウィッチが目の前に現れた。

501部隊が追い付いてきたのか。予想よりもずっと早い。いや、それよりも……この扶桑ウィッチはいつからここにいたのだ。

まさかネウロック収容の一部始終を見られてしまったのか。インペリアルウィッチーズの心に動揺が生じる。

「皆さん、お怪我はありませんか？……って、あれ？また空母？赤城や天城と似てますけど、あれも皆さんの艦なんですか？」

相手方が内心で抱いている焦燥や動揺。それら知る由もない芳佳は、反転して帰路に着かんとするグラーフ・ツエツペリンを見下ろしながら、暢気な口調で続け様に問い掛ける。

親衛隊ウィッチ達は質問には一切応じず、視線を交わし合っている。どうするべきかを言外で協議しているのだ。

何も答えずに無言を貫く親衛隊ウィッチ達の様子を見て、芳佳は不思議そうに小首を傾げる。だが次の瞬間、扶桑海軍ウィッチは驚愕に目を見開くことになる。

第1飛行隊に身を置く親衛隊ウィッチの1人が、金メッキと彫刻の施された親衛隊仕様のPPKを取り出し、銃口を芳佳の鼻先に向けたのだ。

「……………えっ？」

何故、自分は拳銃を向けられているのか。それを理解するどころか考える暇も与えられず、PPKの銃口から銃弾が迸った。

だが、幸いなことに銃弾は芳佳には当たらなかった。直前で魔法シールドが展開さ

れ、銃撃から彼女を守り通したのだ。

「おい、何の真似だ？」

シールドを張ったのは芳佳の兄である優人だった。彼は聞いたものが身震いするような冷たく、ドスの利いた声色で発砲した親衛隊ウィッチを問い詰める。

「何故、妹を撃つた？」

鬼気迫る表情の優人が再度問い掛けたのと、ほぼ同じタイミングで、彼の仲間——501のメンバーが合流する。

遠目で芳佳が射殺されかけたのを見ていたらしい。彼女達もまた、インペリアルウィッチーズへ射るような視線を投げかけている。

「も、申し訳ありません！ミーナ中佐！」

1人の親衛隊ウィッチが、発砲したウィッチを羽交い締めにする。

「こいつは新人なんです！初めての实战で錯乱してただけで、他意はありません！」
「ここはどうか穏便に……」

と、ホフマンが言葉を継ぐ。仲間を撃ち殺されかけたにも関わらず、*「穏便に」*ときた。

当然ながら501のメンバー及び竹井は、誰ひとりとして親衛隊の対応に納得や理解を示さない。バルクホルンに至っては、すぐさま食って掛かろうとする。

「貴様ツ！」

「トウルデー！」

激情に駆られ、ホフマンに嘯み付こうとするバルクホルンをミーナが声で制する。

不服そうな戦友を尻目に、ミーナはインペリアルウィッチーズ第1飛行隊長と険しい表情で向き合った。

「危うくウチの子を失うところでした。上層部には抗議として報告させて頂きますが、よろしいですね？」

「抗議なんかで済むの？」

「明らかな殺意がありましたわ……」

ミーナの発言を受け、ハルトマンは不満げに唇を尖らせ、ペリーヌは怒りに身を震わせる。

「悠貴・フォン・アインツベルン大佐」

次にミーナはインペリアルウィッチーズ司令へ視線を走らせる。

仲間達が憤然とする中、ミーナは努めて冷静であろうとするが、それもいつまで続くか。

「何故、グラーフ・ツエツペリンがこの海域に？合流するという報告は聞いていませんが？」

「そう言えば、あなた方と交戦中だったはずのネウロックも見当たりませんか？」

ミーナに続く形で、竹井も親衛隊ウィッチ達に己の疑問をぶつける。

対するインペリアルウィッチーズ側の反応は様々。ホフマンはアリオーナは沈黙を保ち、前者はミーナを睨み返している。

他を親衛隊ウィッチも飛行隊長達に倣ったが、何名かは言葉に詰まったかのように「うっ……」と呻き声を上げていた。

ただひとり。司令である悠貴のみが、余裕に満ちた笑みを浮かべている。美しい曲線を描く形の良い唇を動かし、ミーナ達の質問に応えた。

「まず一つの質問に。グラーフ・ツェツペリンには、先の戦闘で負傷したパイロットや艦上機を收容してもらったために来て頂きました。丁度バルトランドで待機中でしたので……」

「負傷者が出たのですか？」

「戦死者もいます。犠牲無くして勝利は得られないとはいえ、残念です」

瞳を伏せ、親衛隊員——Bf109Tのパイロット等の死を悼むような悠貴の口振りに、ミーナは訝しそうに片眉をヒクつかせる。

「次に竹井大尉の質問。ネウロックは我々の手で撃墜致しました。深手を負って飛行不能となり、そのまま海中へ水没しました」

「あの強敵を、こんな短時間で？」

「私達是对ネウロイ戦に特化した部隊です。詳しくはお話出来ませんが、国防軍とは異なる装備を有しておりますので……」

「……………そうですか？」

竹井もまた、悠貴の報告に怪訝そうな反応を示す。インペリアルウィッチーズのウィッチ達は、精鋭と呼べるだけの実力を備えており、カールスラント宰相の権限によつて、最新の武器や機材が優先的に配備されている。

練度も連携も装備の性能も高く、強力なウィッチ部隊だ。それについては竹井やミナーナも認めている。

しかし、501等の統合戦闘航空団に配属される世界的エース達に比べれば、総合値で数段劣る。

国防軍以上に対ネウロイ戦に特化した装備を駆使したとして、これほど容易くネウロックを撃破出来るものなのか。

グラーフ・ツエツペリンについても、当艦の所属がカールスラント国防海軍から、皇室親衛隊へ移っているのは理解している。

だが見たところ。グラーフ・ツエツペリンには航空戦力は艦載されていない。そればかりか、護衛を請け負う駆逐艦すら引き連れていないようだ。

艦載機や随伴艦に守られていない空母がどうなるか。そんなこと今さら説明するまでもない。

そんな危険を冒してまで、わざわざバルトランドから呼び寄せる必要があるのだろうか。

そもそも負傷者の回収が目的ならば、天城やドクトル・エッケナーに任せればいい話だろうに……。

「芳佳ちゃん、大丈夫？」

「う、うん。お兄ちゃんが助けてくれたから……」

自分の身を案ずるリーネを心配させまいと、芳佳は笑顔を見せる。しかし、それはどこかぎこちない。よく見ると身体も震えている。

元々芳佳は銃器の類いを人を傷付けるものとして嫌悪・敬遠し、また恐いものだと認識している。

対ネウロイ戦において、ストライカーユニットと同様頼りにしている反面。人の命を簡単に奪える銃器は恐怖の対象でもあった。

そして今回。銃口を至近距離で向けられ、危うく射殺されるところだったのだ。

優人が来てくれなければ確実に死んでいた。対ネウロイ戦とはまた違った形で命の危機に直面し、芳佳は銃という名の凶器や死というものの恐ろしさを再認識している。

要するに怯えているのだ。

「芳佳……………」

小さな身体を震わせている妹をいじらしく思った優人は、子どもの頃からしてきたように芳佳を抱き締めて安心させようとする。

だが優人が行動に移ろうとしたその瞬間、洋上より爆音が轟いた。

場に居合わせた航空歩兵達が、音の聞こえた方向へ目を向けると、船体から巨大な火柱と爆煙を上げているグラーフ・ツェツペリンの艦影が見えた。

◇ ◇ ◇

同時刻、ブリタニア首都ロンドン――

郊外のとあるカフェのオーブンテラスで、国籍の異なる3名の美女が食事をしてい
る。

抜群のプロポーションを誇るブリタニア人の女性。そして、西洋系の小柄な美少女が
2人。それぞれガリアとリベリオンの出身地だ。

「お待たせ致しました」

白と黒を基調とする制服を着こなした若いウェイターが、3人のテーブルへ歩み寄

る。

トレイに乗せていた注文の品々を差し出すと、一礼して戻っていく。

「あ、このサンドイッチ美味しいです♪」

注文したサンドイッチを頬張り、満足げに喉を鳴らすのはアメリー・プランシヤール。自由ガリア空軍に所属する航空ウィッチで、階級は軍曹。

つい最近まで原隊を離れ、ワイト島分遣隊に配属されていた彼女は、同じ部隊で寝食を共にした同僚2人とカフエを訪れている。

正確には、もう2人。ワイト島分遣隊の隊長を含めた同僚がいるのだが、理由あつて合流が遅れていた。

「でしょ？あまり知られていないけど、このカフエは謂わば隠れた名店なのよ？」

ウインクしながら説明するのは、アメリーと同じくサンドイッチを注文したブリタニア出身のウィッチ——ウイルマ・ビショップ。

501部隊に身を置く「リーネ」ことリネット・ビショップ軍曹の姉で、王立フアラウエイランド空軍軍曹だ。

部隊内では最年長。まだまだ発展途上の身体つきのアメリーとは対象的に完成されたグラマラスボディの持ち主で、服の上からでもハッキリ存在が認識出来る爆乳は、他の客——特に男性——の目を引いてやまない。

「うーん、郊外でやっている割にはまあまあね」

と、やや手厳しい評価を下したのは「フラン」ことフランシー・ジェラード。リベリオン陸軍第8空軍所属の少尉で、もちろん航空ウィッチである。

3人の中では最高階級者に当たるが、年齢はウィルマよりも歳下。アメリカと同様に成長途中の小柄な体躯のリベリアンだ。

フランはウィルマ達とは異なり、サンドイッチではなくハンバーガーとフライドポテトを注文していた。空腹が限界に近付きつつあった彼女は、大口開けてハンバーガーに噛りつく。

ミディアムで焼かれた赤身肉に、熱気で少し溶けたチーズが乗っている。ミチツとした肉の食感。シャキシャキと歯応えのあるピクルス、トマト、レタス。

前述の評価に反し、内心では（これぞハンバーガーた！）と感嘆していた。

「肉厚で食べ応えのありそうなハンバーガーね？フランにも、それくらいお肉が付いてたら良かったのに♪」

「ちよつと！何処見て言ってるのよ!?!」

フランは両腕で胸元を隠し、セクハラ紛いの発言をするウィルマを睨んだ。

「だってフランってば、リベリアンの割にお胸が随分と慎ましやかだから♪ちやんとご飯食べなきやダメよ?」

「うっさいわね！あたしは成長期！これからなんだから！」

薄ら笑いを浮かべるウイルマ。フランはムキになって反論する。

「見てなさい！今にイエーガー大尉みたいなダイナマイトバディになってやるんだから！」

無い胸を張って高らかに宣言するフランだったが、悲しいかなウイルマの方が上手であつた。

「うふふ♪そうなたら、きつと彼の視線もフランに釘付けね♪」

「な、何でそこで優人が出てくるのよ!?あたしは別に、あんな変態のことなんて何とも思っていないんだから！」

ブリタニア生まれの爆乳美人が次の一手を打つ。フランは「違う！」と必死に否定しながらも、あからさまな動揺を見せる。

さらに本人は自覚していないようだが、小柄なりベリアンは我知らず墓穴を掘ってしまつていた。

「あつら〜？私は優人の名前なんて出してないんだけど？」

「……あつー！」

自らの失言に気付いたフランはしまった、と言わんばかりに両手で口元を覆う。

彼女の顔ら白く小さな2つの手で隠され、半分ほど見えなくなつたが、白磁の肌に灯

された紅がチラチラと覗いている。

「フランさん、そんな言い方は酷いです！優人さんは変態さんなんかじゃありません！」
と、抗議の目を向けるアメリー。彼女の発言を受け、ウィルマはすぐさま攻撃対象を強気なりベリアンから愛らしいガリア空軍ウィッチへ変更した。

「まあフランにとつて優人は変態さんかまだけど。アメリーにとつては憧れの王子様みたいな存在なのよねえ♪」

「へっ!?!」

アメリーもまた赤面する。フアラウェイランド空軍のウィッチは、さらに畳み掛け

た。
「だって、優人がいる間ずっと気に掛けたみたいだし。紅茶振る舞ったり、料理や射撃を教わったり……随分と仲が良ろしかったみたいですからあく♪」

「ち、違いますよ！ゆ、優人さんは……そのっ！お兄ちゃんみたいな存在ってだけで！そんなんじゃない——」

「じゃあアメリーは、何でもない男の人と2人で仲良く夜の浜辺を散歩してたのかしら？」

「そ、そそ！それは！ちよつと悩みを聞いてもらってただけで！」

「ふっん？」

これまた分かりやすい動揺を見せながら、アメリーは懸命に弁明する。

頭から湯気が出るのではないかと思うくらい真つ赤になつた彼女を肴にウイルマは紅茶で喉を潤す。

一方のフランは、優人と夜の浜辺でデートしたらしい戦友に羨望と小さな嫉妬の入り混じつた視線を注いでいた。

第19話「グラフ・ツェッペリン」

1944年9月、西欧ブリタニア首都ロンドン——

ロンドン市内には、ブリタニア政府より連合軍へ貸与された軍事施設が存在する。

当施設は現在、西部方面統合軍総司令部として機能している。各国より派遣された軍高官達が一同に介するこの場所は、国家間の思惑が交差する政争の場でもあった。

「あ……漸く終わったわあ……」

総司令部内の通路にて。かような発言と共に両腕を上げて大きく背伸びするのは、扶桑皇国から欧州へ派遣されている航空ウィッチ——角丸美佐扶桑陸軍中尉。

今年の初めより、西部方面統合軍総司令部の隷下にある二線級の多国籍航空ウィッチ部隊——ワイト島分遣隊の指揮官を務めていた。

同じく西部方面総司令部に所属する航空ウィッチ部隊——第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の活動により、ガリア上空に存在していたネウロイの巣が消滅。ブリタニアへの圧力は大幅に低下した。

それに伴い、501を含む幾つかのウィッチ部隊が他の戦線へ異動・もしくは解散となった。ワイト島分遣隊も、それら部隊の1つだった。

総司令部隊より正式に解散命令が下り、角丸は後任への引き継ぎを行うためロンドンを訪れていた。

尤も、ワイト島分遣隊はブリタニア南部防衛の為に編成・配備された小規模の部隊。そしてワイト島基地は、主戦場から外れた場所に存在する戦略的価値が低い軍事施設。基地の周辺は平原で何も無いが、気候は温暖で温泉も湧いている。基地施設内には、角丸の依頼で露天風呂の岩風呂が造られている。

グレートブリテン島に対するネウロイの脅威がほぼ無くなった今。わざわざ別の部隊をワイト島基地へ駐留させる必要もない。

元々が軍用地ではなく、有名なリゾート地だったワイト島。1921年以降、退役軍人やウィッチの向けの保養施設として利用されていた。

後に扶桑人によって温泉が発見され、負傷した兵士の休養施設兼リハビリ施設として、各国のウィッチが訪れるようにもなった。

ガリアが解放され、ネウロイの襲撃が無くなった。半閉鎖状態となっていた保養施設は再開。ワイト島は再び保養地に戻ることだろう。

統合軍総司令部は、各地で戦闘に従事する航空歩兵や将兵。被害にあつた民間人の為、施設の拡充を決定。ワイト島分遣隊と入れ替わりに、扶桑皇国海軍遣欧艦隊旗下の設営隊派遣を実施することにしたのだった。

「付き合わせちゃってごめんさいね」

角丸は自分の隣にいるオストマルク空軍ウィッチ——ラウラ・トート少尉へ声を掛ける。

ラウラは、銀色のショートヘアに深い緑色の瞳、雪を想わせる色白の肌を持つ美少女だ。

角丸やウイルマに負けず劣らずスタイルが良く、青い制服越しでも起伏がハッキリと分かる。

「別に平気」

上官と視線を合わせることもなく、ラウラは素っ気無い口調で短く返す。

基本的に無口無表情で感情が読み難く、取っ付きにくい印象を周りに与えるラウラだが、仲間達との交流を経たおかげで最近は随分と話し易くなってきた。

今の対応も一見無愛想そうに見えるが、オストマルクウイルマの声音には以前は無かった感情の色が確かに滲んでいる。

「お腹空いちちゃったわね……早く皆と合流してカフェで夕食を頂きたいわ」

角丸の言葉にラウラは無言で、しかし強く頷いた。当初の予定では、引き継ぎを終わらせ次第カフェで席を取っているであろうワイト島分遣隊の仲間達——ウイルマ、アメリー、フランの3名と合流するはずだった。

しかし、扶桑海軍側への連絡ミス等が原因で、想定していたよりも時間が押してしまい、気が付けば夕食の予定時刻は疾うに過ぎてしまっていた。

もう何時間も前から凄まじい空腹感に襲われている。角丸はともかく、クールな性格に反して部隊内で一番食い意地が張っているラウラには耐え難いことだった。

両手を添えた腹部からグウグツと虫の鳴き声を響かせている彼女を見て、角丸は思わずクスリと笑みを零す。

そのまま通路を進んで行くと、先にある会議室へ入っていく2つの人影を捉えた。

リベリオン陸軍欧州派遣軍総司令官——ドナルド・D・アイゼンハワー元帥と、北アフリカで活躍した元ブリタニア陸軍第8軍総司令官——バーンハード・モントゴメリー大将だ。

見るからに温厚そうなアイゼンハワーに少々……いや、かなり気難しそうな印象のモントゴメリー。印象は違えど、2人はリベリオンとブリタニアの陸軍が誇る戦時下の名将だ。

見ると、彼等の他にも各国の高官達が次々と廊下の奥から歩いて来る。

(なるほど、御前会議なのね)

豪華過ぎる顔触を遠目で見ていた角丸は、心中で納得する。

今日は各国軍の御偉方が近いうちに実行される予定の大規模反攻作戦や新たに編成

される統合戦闘航空団——ガリア防衛を担当する506部隊や欧州上陸作戦を支援する508部隊等——について協議する日だった。

総司令部付扶桑海軍士官等が同僚と話していたのを小耳に挟んでいたが、なるほど議題に相応しい大物ばかりが集まっている。

リベリオン陸軍第8航空軍司令官——ジェイミー・H・ドーリットル中将。

同海軍太平洋艦隊より派遣されている欧州支援艦隊司令長官——レジナルド・スプルーアンス大将。

統合戦闘航空団に派遣されている坂本美緒少佐、竹井醇子大尉、宮藤兄妹等の原隊における上官にして扶桑海軍遣欧艦隊司令長官——赤坂伊知郎大将。

ブリタニア海軍重鎮で、1943年に実施されたガリア上陸作戦にて海上戦力の総指揮官を務めたバートランド・ラムゼー大将。

トレヴァー・マロニー元大将失脚後、同空軍の実質的最高指導者の地位に収まったブリタニア空軍大将——アーチボルト・デッター。

同空軍の新たな戦闘機軍団司令官兼ブリタニア航空ウィッチ隊総監——キース・パーク中将。

ブリタニア空軍戦闘機軍団や第501統合戦闘航空団等と共にグレートブリテン島の防空を担当していたカールスラント空軍第3航空艦隊司令官——フーベルトウス・

シユペルレ元帥。

同空軍ウィツチ隊総監——アドルフイーネ・ガランド少将。自国軍のみならず、連盟空軍内の各国ウィツチ部隊との調整と作戦指導を行つていいる優秀なウィツチで、また教育・開発・作戦立案等多方面で能力を惜しみ無く發揮する才女でもある。

同陸軍のゲアハルト・フォン・ルントシユテット元帥は、カールスラント皇帝——フリードリヒ4世に直言できる数少ない將軍の1人で、43年のガリア上陸作戦において総司令官を務めていた。だが、良くも悪くも保守的な人物だったがために制空権を輕視し、作戦を失敗させている。

その他に自由ガリア軍のトップであるシャルル・ド・ゴール將軍。ガリア派遣予定の扶桑皇國陸軍第2軍司令官。ブリタニアへ亡命していたネーデルラント及びヘルギガ軍代表が1名ずつ出席するようだ。

これだけの面子が一同に介する光景はあまりに壯觀で、角丸は我知らず感嘆の声を漏らした。一方で、ちよつとした問題も發生していた。

1階へ向かうには廊下の先にあるエレベーターを使うことが一番手っ取り早いですが、そこへ向かうとなるといよいよ足を止めて將軍ひとりひとりに挙手敬礼で挨拶をしなければならぬ。それは少しばかり面倒だ。

また、これ以上の遅刻は散々カフェで待たせているウィルマ達に申し訳ない。

角丸は仕方なく来た道を引き返し、戻ったところにある貨物用のエレベーターを利用することにした。

2人が扉の前に立ったのとほぼ同じタイミングでエレベーターが到着する。

ゆつくりと扉が開かれ、エレベーター内ですし詰めにされた10名程の集団が姿を現した。士官用の制服を着た男性ばかりだが、それぞれが違う服を着用しており、同じ制服はひとりもいなかった。

こんなに大人数が乗っているとは思わなかった。ウィッチでもない男性士官が、他国の軍人とするんで行動するのも大変珍しい。

角丸は一瞬間食らうも、脇避けて彼等に道を開ける。ラウラと共に挙手敬礼して、相手からの返礼を待つ。

しかし、男性士官等は返礼どころか角丸達と視線を交わすこともなく、足早に去って行った。

「感じ悪……」

男性達の礼を失した振る舞い。彼等の後ろ姿を睨み付けながらラウラはボソリと毒突く。

角丸といえば。同じく男性達に目を据えているが、ラウラとは異なり訝しがっている様子だ。

「隊長？」

「……………何である人達。司令部内で短機関銃なんて持つてるのかしら？」

◇ ◇ ◇

同時刻、グラーフ・ツェツペリン艦内――

――聞こえる。

遠い意識の中で、“彼”は知覚していた。自分が大型空母と呼ばれる敵の兵器に囚われていることを……。

戦闘のダメージで一時期な機能不全に陥っているものの、意識は保たれたまま。人間が見るといふ夢の中でさらに夢を見ているように薄ぼんやりとしている。

その感覚があまりに心地好く、眠ってしまおうかとさえ考えてしまう。

格納庫に拘束されている身体に数名の人間が取り付いている。周辺には短機関銃で武装した兵士が数十名。緊張した主もで“彼”の様子を警戒していた。

どうやら完全に動きを封じようと、特殊な術式が施された聖銀製の槍で突き刺す腹積もりらしい。

――甘い。

もし「彼」に表情があれば、愉悅に塗れた凶暴極まりない笑みを浮かべていたことだろう。

人間達は完全に油断していて気付けなかった。沈黙している様に見える「彼」は、秘かに自己修復を行っていたのだ。

——触るな！虫ケラ共！

次の瞬間。「彼」は頭部のバイザーから妖しい光を放った。緩慢な動きで身体を動かし、自分を拘束しているワイヤーネットを引き千切ろうとする。

突然のことに、人間達はたじろぐように身体を硬直させる。兵士達が反射的に銃口を構える。だが、そんなものでは「彼」を止めることは叶わない。

ワイヤーがプツンと音を立てて次々と千切れていき、やがて「彼」は拘束から完全に抜け出した。

「彼」は己の両腕を拡げるように掲げ、恐怖で慄く人間達——「彼」が言うところの虫ケラ達——へ複数のビーム砲を向ける。眩い閃光が一斉に放たれ、瞬く間に格納庫を焼き尽くした。

帝政カールスラント皇室親衛隊旗下の大型航空母艦グラフ・ツェッペリンは、内部が破壊から大爆発を起こして大破・炎上。黒鉄の船体が北海へ沈むのに長い時間はかからなかった。



紆余曲折を経て北海洋上に集結していた連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』及び帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』。

これらに属する総勢21名のウィッチ・ウィザードは、空中に佇んだまま眼前に広がる光景のある一点を呆然と見据えている。

航空歩兵達の双眸に映るのは、黒煙を噴きながら燃え盛る赤城型航空母艦『グラーフ・ツェツペリン』の艦影。

炎上しながらも、しばらくは海上に浮かんでいたグラーフ・ツェツペリンだったが、やがて力尽きたかのように海中へ沈んでいった。

乗員等が脱出した様子もない。おそらく艦長をはじめ誰一人として助かってはいない。

501メンバーは、司令のミーナを含める全員が混乱していた。負傷者を収容したと説明された親衛隊旗下の空母から突然爆音と火柱が上がり、海中へ没していったのだ。無理もない。

一方、インペリアルウイツチーズ司令の悠貴・フォン・アインツベルン。そして、彼女旗下の親衛隊ウイツチ隊は空母沈没の原因を理解していた。

一度は捕獲に成功したと思っていたネウロックが意識を取り戻し、中からグラーフ・ツェッペリンを破壊したのだろう。

もつと徹底的に痛めつけた上で拘束するべきだった。あと一步のところまで獲物を逃がしてしまった。作戦は失敗したのだ。

間も無く檻から逃げ出した獣が、牙を剥いて復讐しにくるだろう。凶暴性を一層増して……。

親衛隊ウイツチの何人が顔面蒼白となり、カタカタと身体を震わせた。

彼女等とは対照的に喜色に満ちた笑み浮かべるウイツチが1人——悠貴である。

インペリアルウイツチーズの司令は、想定外を通り越して危機とも形容出来るこの事態を心から楽しんでるのだ。

容易く手に入るような三流品には興味がない。人材も物もネウロイも、相応の難易度があつてこそ手にする価値がある。それが悠貴・フォン・アインツベルンの持論だ。

それは逆に言えば、簡単に入手出来るものには然して魅力を感じないということであり、一定の刺激を求めているとも受け取れる。

悠貴は艶やかな唇を軽く舐めずりし、いつでも抜刀可能な状態で白木拵えの扶桑刀を

構え、ネウロツクの襲撃に備える。だが予想に反し、洋上に姿を現したのはネウロツクではなかった。

より巨大で、より重々しく、より禍々しく、より凶暴で恐ろしげな怪物。それは歪な唸り声で大気を振動させながら海原を割るようにして姿を現した。

「そんな、まさかっ!?!」

予期せぬ異形の出現にミーナは目を見開きながら、震える声で呟く。

海面から浮上する巨大な鯨を連想させるそれはまさしく、ネウロイと化した大型航空母艦。かつての赤城と同様ネウロイに侵食され、船体を取り込まれたグラーフ・ツエツペリンの変わり果てた姿であった。

「な、何ですの!?!あれは……」

「まさかグラーフ・ツエツペリンが……」

ペリーヌとバルクホルンも動揺を禁じ得ない。人類側の兵器がネウロイに乗っ取られ、敵の手に渡ってしまった。最悪の事例が自分達501の眼前で二度繰り返されたのだ。

「赤城の時と、同じだ……」

再び相見えた強敵を見据え、芳佳は恐怖で凍り付きながら漫然と呟く。

彼女の言葉通りなら、ネウロイ——インペリアルウィッチーズの手で北海へ没したネ

ウロツクが、報復として海中よりグラフ・ツェッペリンを攻撃・撃沈。同艦と合体したことになる。

「……いや、同じじゃない」

501メンバーの中で比較的動揺の少なかった優人が独り言ちる。

目の前の敵は、確かに赤城と同じくグラフ・ツェッペリンがネウロイ化したものだ。しかし、武装面で差異が存在した。

砲台の数が明らかにネウロイ化以前よりも多い。対空砲に単装砲も数割り増しとなっており、それらとは別にサーニャのフリーガーハマーを巨大化させた多連装ロケット砲らしきまで追加させていた。当然、ネウロイの主兵装——ビーム砲として機能する赤い装甲も多数見られる。

特に目を引くのが、艦首部分に1門のみ搭載された大型固定砲台。赤城の時はコアが抜け——巨大化したコアがウオーロツクから赤城の艦内へ移動したため——で、文字通り脱け殻となったウオーロツクが鎮座していたが、グラフ・ツェッペリンにはカールスラント製の列車砲と見間違うほど巨大且つ大口径な砲台が屹立している。

砲台類の増設で、グラフ・ツェッペリンが従来の大型空母……いや、戦艦クラスのとは比較にならない火力を得ているであろうことは想像に難くない。

これらが一齐に火を噴けばハリネズミの如き弾幕が形成され、近付くことすら困難に

なる。

大型砲台に至っては、大口徑に見合うだけの凄まじい破壊力を備えているに違いな
い。そう思うと、全身に戦慄が走った。

「あつ、ネウロイが！」

リーネの叫び声に耳朶を打たれ、ハッと我に還った優人は改めてグラーフ・ツエツペ
リンへと目を向ける。

ネウロイ化した大型航空母艦の艦首部分先端にコアから送られたエネルギーが集中
し、砲台が煌々と輝いていた。

艦首に固定されている砲台を、砲塔のように旋回させることは出来ない。目標に狙い
を定めて砲撃・破壊するならば、砲台を船体ごと向ける必要がある。

しかし、赤い光が漏れ出でいる砲口は優人達501にも、インペリアルウィッチーズ
等親衛隊にも向いていなかった。

「——っ!?!あの方向は!?!」

ネウロックに支配されたグラーフ・ツエツペリンが何を狙っているのか。優人がその
意図に気付いて間を置かず、大型砲台から巨大な光芒が迸る。

今まで一度も目にしたことが無い大出力の光軸が彼方へと飛来していく。その様を
目にして、扶桑海軍ウィザードの表情は一気に青ざめた。

圧倒的な破壊力を持った眩い光の濁流が尾を引きながら向かう先には、洋上を遊弋する二隻の大型航空母艦。

そしてリベリオン、ロマーニヤ、北欧から501へ派遣されている4名の航空ウィッチ——母艦直掩組の仲間達がいるのだ。

◇ ◇ ◇

同時刻、天城及びドクトル・エツケナー——

「みんなあ！逃げろおおおお！」

迫り来る脅威に一足早く気づいたのは、『未来予知』の固有魔法を駆使するスオムス空軍トップエース——エイラ・イルマタル・ユージェイライネン少尉だった。

声を張り上げ、同じ母艦直掩組に割り当てられた3人の仲間と自分が護衛する2隻の空母へ危機を報せる。

「え？」

「エイラ？」

「うじゅ？」

直掩組の実質的指揮官であるリベリオン陸軍大尉——“シャーリー”ことシャー

ロット・E・イエーガーをはじめとする3名——他2名はロマーニヤ空軍少尉のフランチェスカ・ルツキーニとオラーシャ陸軍中尉の「サーニヤ」ことアレクサンドラ・ウラジミールヴナ・リトヴァク——のウィッチは、何かとエイラを振り返る。だが、彼女達がエイラの言つた意味を理解するのに時間はかからなかつた。

インペリアルウィッチーズの支援に向かつた仲間がいるであろう遠方の主戦場に突如光点が生じた。それは瞬間に光の大河へと成長し、凄まじい衝撃と圧迫感を伴つて直掩のウィッチ達と臨時編成の空母機動部隊に襲いかかる。

彼方より飛来した光芒は直撃こそしなかつたものの、まるで海面を抉るかのように着弾し、洋上を並走する天城とドクトル・エツケナーの間に中性の城壁を想わせる巨大な水柱を起こした。

穏やかだつた海原が荒れ出し、発生した大波が着弾時の衝撃と共に二隻の航空母艦を煽り立てる。

天城及びドクトル・エツケナーの乗員達からすれば晴天の霹靂と呼ぶ以外にない事態だつた。艦長が指示を出す間も無く、膨大な熱量の光が船窓を埋め、轟音と激震が船体を揺さぶつた。

固定されていない物は全て弾け飛び、片舷から反対側まで突き抜けた衝撃があらゆる艤装を軋ませる。

艦内のあちこちで物品が乱舞し、通路や扉がみしみしと不気味な音を立て、割れ残った蛍光灯が明滅する。

乗員達のうち移動中だった者は通路の壁に叩きつけられ、格納庫内で整備作業を行っていた整備兵達や機械工具・部品が飛び交い、砲術要員は砲座から放り出され、飛行甲板で待機していた者達は海へと投げ出される。

乗員約2000名の悲鳴と怒号が混乱錯綜する各艦内だったが、ミーナ中佐から二隻の直掩を任されていたウィッチ達にも艦に劣らぬ被害が出ていた。

シールドの展開も叶わなかったシャーリー達4名のウィッチは直撃こそ免れたものの、ビームの余波を諸に受け、空中でバランスを崩してしまふ。

このままでは墜落する。立て直そうにもストライカーユニットが故障してしまったらしく、思うようにいかない。

不幸中の幸いか。4人が落ちた先は海面ではなく天城もしくはドクトル・エツケナーの飛行甲板だった。

まともな着艦が不可能な状態ではあったが、接触する直前にシールドを展開して——ルッキーニのみ先に落ちたシャーリーの豊富な乳房をクツション代わりにして——墜落時の衝撃を緩和したため、直掩組のウィッチに怪我人はいなかった。

「うゝ……シャーリー、ありがとう」

「ど、どういた……うわっ!」

辛うじて天城へ着艦したロマーニヤの仔猫と爆乳リベリアンだったが、波に揺さぶられる空母の船体は彼女等に息吐く暇を与えない。

それはドクトル・エツケナーへ着艦した北欧組の2人も同様だ。

状況が落ち着くまでの数分間。4人のウィッチは波に煽られる空母から振り落とされまいと、必死に甲板にしがみ付いていた。



ネウロツクに取り込まれ、超大型ネウロイと化したグラーフ・ツエツペリン。

人類の元を離れ、ネウロイ側の新たな戦力として生まれ変わった大型航空母艦は、総勢20名を越える航空歩兵を己に近付けまいと、弾幕射撃を展開する。

それはまさに豪雨だった。無数砲台が明滅する度、夥しい数の光矢が、ウイザードとウィッチーズ目掛けて降り注ぐ。

群れを成して押し寄せる雨滴の一粒一粒が凶暴な破壊力を有しており、周囲を飛翔するストライクウィッチーズ及びインペリアルウィッチーズを翻弄していた。

精銳を揃えているはずの両者が防戦一方。光の豪雨の中に安全圏を求め、必死に逃げ

惑っている。

「クソっ！」

優人は悪態を吐きつつ歯噛みする。規格外の大口径砲で臨時空母部隊を砲撃したかと思えば、今度は厚い弾幕を形成。隙の無い対空防御で自分達を近付けまいとしている。

今のところは501にも親衛隊にも死傷者は出ていなかった。全員が魔力シールドを展開し、己に群がってくる光条から懸命に身を守っている。

もしくは、他の航空機には無いストライカーユニットの強み——高い運動性能を駆使し、回避行動を繰り返していた。

航空歩兵等を仕留め損ねた光槍の群れが、次々と海面へ突き刺さり、多数の水柱を立てている。

（芳佳は!?!）

厳しい状況下において。扶桑海軍ウィザードが真っ先に考えたのは、やはりというか最愛の妹のことだった。シールドで身を守りながら周囲を見渡し、芳佳の姿を探す。

西の空へ傾いていた陽は殆んど沈み掛けており、北海洋上に夜の帳が下り始めている。その上、水飛沫と光条のせいで視界が利かない。

それでも優人は必死に視線を走らせ、芳佳の姿を必死に探し求めた。

(何処だ！何処にいるんだ!?)

胸中に不安と焦燥が滲んでいるが故、優人の視野は急速に狭まってしまっていた。

落ち着いて探せばすぐに見つかるはずの妹の姿を中々捉えられずにいる。

『戦闘中の501各員へ!』

ふと声楽家を想わせる澄んだ、それでいて凛々しい声音がインカム越しに伝わってくる。501部隊司令——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐の声だ。

『全員無事ね?501はこれより撤退!殿は私と宮藤大尉務めます!ペリーヌ隊より順に戦闘空域を離脱してください!』

『撤退だ?!』

ミーナの命令が続いて、異を唱えるかのような怒声が響いてきた。ミーナより若干低い印象を受ける声の持ち主はゲルトルート・バルクホルン大尉だ。

『たった今、インペリアルウィッチーズのアインツベルン大佐から指示が来たのよ!戦況は不利!現状の戦力で対処出来ない以上、撤退も已む無し……と!』

『ちよつと待て!何だそれは!?!』

バルクホルンの苛立たしげな口調から、優人は彼女の心中を察していた。

確かに501も親衛隊も、これまでの戦闘で魔力や弾薬、ストライカーの燃料を著しく消耗していた。

現状で超大型ネウロイと化したグラーフ・ツェッペリンに応戦したところで全滅は必至。ならば一度引き上げて態勢を立て直した上で、再度挑むべきだろう。

悠貴の下した判断は、戦況に即した妥当なものであった。政治屋嫌いのバルクホルンとて従うことだろう。インペリアルウィッチーズ司令を含む親衛隊が、501部隊と竹井醇子扶桑海軍大尉を置いて、一足早く離脱していなければ……。

そう。インペリアルウィッチーズの面々は、501がグラーフ・ツェッペリンの気を引いているうちに逃げ果せていたのだ。

『文句なら後いくらでも聞くわー今は撤退よーさあ急いでー』

有無を言わせぬミーナの語勢に気圧され、バルクホルンは『ぐっ！』と悔しげに呻くも、命令には従って後退を開始する。

彼女と彼女の2番機であるハルトマンの傍らに、優人は見失っていた芳佳の姿を漸く認めた。

猛攻に晒されてグツタリしていたものの、怪我やストライカーの損傷等は見受けられず、飛行にも支障は無さそうだった。扶桑海軍ウィザードはホツと安堵する。

「優人ー！」

いつの間にか。ミーナがインカム無しで会話が可能なほど近くまで来ていた。

グラーフ・ツェッペリンを正面に見据え、愛用するMG42を射撃位置に保持する。

「あの娘達が安全圏へ離脱するまでネウロイを食い止めるわよ！ただのスケベじやないってところを見せなさい！」

「あ、ああ……」

出撃前のブリーフィング時辺りから、ミーナはなにやら不機嫌になっていた。

やつと口を聞いて貰えたかと思えば、激励とも嫌味とも分からない言葉を掛けられ、優人は少しばかり当惑する。

しかし、優人はその感情をすぐさま心の隅へと追いやると、ミーナに倣ってS—18対物ライフルを構える。

グラーフ・ツエツペリンは不気味な唸り声を上げ、全ての砲門を2人に向けていた。

「申し訳ないけれど、ここを通す訳にはいかないのよ」

「怪物が！お前に501の長男役と母親役の底力を見せてやる！」

グラーフ・ツエツペリンを睨め付けながら、カールスラント空軍中佐が独り言ちる。

扶桑海軍大尉も彼女に続いてネウロイと化した空母へ啖呵を切った。

「……………私は、あんなに大きな子どもがいる年齢じゃないわ」

「……………」

射るような鋭い視線を横から向けられ、優人は冷や汗を掻く。

ミーナの眼差しは「次そんなこと言ったら、後ろから撃つわよ」と言外で忠告——も

しくは脅迫——しているように思えた。

「……………なあ」

横目で睨まれる状況に耐えかね、優人は強引に話題を変える。

「何で俺を残したんだ？バルクホルンやハルトマン、竹井でも良かったんじゃないか？」

「あら、不服？」

「素朴な疑問だよ」

「504部隊に着任予定の竹井大尉に無茶はさせられないわ。トゥルーデとエーリカには、芳佳さん達を天城まで送り届けて貰いたかったのよ」

ミーナの簡潔な説明を受け、得心がいったらしい。優人は「なるほどな」と呟く。

「おしゃべりは終わりよ。来るわ」

「みたいだな……………」

端的な会話を挟み、2人はチラツと背後を振り返る。仲間達の戦域離脱を見届け、再び視線をグラフ・ツェッペリンへ戻した。

間も無く、紅蓮の光芒と魔法力の蒼い光を帯びた銃弾が飛び交い始める。そして、その日。優人とミーナが天城へ帰還することはなかった。

第20話 「帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍」

1944年9月、西欧・ブリタニア連邦首都ロンドン――

ロンドンに置かれた人類連合軍西部方面統合軍総司令部。その会議室の1つでは、各国より連合軍へ派遣されている15名の将軍・提督が一同に介していた。

出席者の多くは西欧戦域を担当する連合軍部隊の司令官だった。左右に別れて会議用テーブルに着き、ギラリと鋭い光を宿した双眸で自分以外の出席者を睨むように見据えている。

何れも各国軍の重鎮であり、本大戦において多大な武功を上げた名将ばかりだ。しかし、その優秀さの反面。一癖も二癖もある難儀な人物も少なくない。

北アフリカにて、ブリタニア陸軍第8軍を指揮していたバーンハード・モントゴメリー大將は激しやすい性格で知られ、カールスラント空軍航空ウィッチ隊総監のアドルフ・フィーネ・ガランド少將も、現役時代は上官の言うことを中々聞かない跳ねっ返りだったそう。

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の活躍によってガリア上空に浮遊していたネウロイの巣が消滅。同国は解放され、反攻の一大拠点であるブリタニアへ

の圧力も大幅に低下した。

これを機と見た西部方面統合軍は、すぐさまガリアへの逆上陸作戦を実施。リベリオン陸軍第1軍とブリタニア陸軍第2軍を中心とした陸軍の他。カールスラント軍や扶桑皇国海軍を沿岸地域へ展開させる。

余談だが、扶桑海軍の戦力はその殆んどが赤坂伊知郎大将麾下の遣欧艦隊。今次艦隊の編成は第二航空戦隊——蒼龍型航空母艦1番艦「蒼龍」と2番艦「飛龍」の2隻で構成される——を中核とし、高速戦艦筑波型4隻擁する第三戦隊。重巡洋艦「利根」及び「筑摩」属する第八戦隊。その他、多数の駆逐艦を動員した大艦隊である。

赤坂が会議に出席するため、現在の艦隊指揮は第二航空戦隊司令官の帖口多聞中将に一任されていた。

(やれやれ……)

張り詰めた雰囲気と煙草の紫煙で満たされた室内の空気に嫌気が差し、ガランドは心中で嘆息する。

政治的立ち回りに長けながらも、前線に出ていた頃から現在の地位に至るまで現場主義を貫いてきたガランドからすれば、このような場所はいるだけで耐え難かった。

ネウロイの活躍が鈍くなる冬の到来を待つての全面的な欧州反攻作戦を唱える連合最高司令部の意を受け、西部方面総司令部の赤坂達も西欧方面今後を話し合うために集

まっている。

しかし、いつものことながら会議の進行状況は芳しいものではなかった。

反攻作戦の一環として第506及び508統合戦闘航空団の設立。各戦線の統合戦闘航空団を侵攻用部隊へ再整備等も議題として上がっているのだが、解放後のガリア防衛と西からのカールスラント奪回を担当する予定の506部隊設立については、以前から各国——特にブリタニア、リベリオン、ガリアの意見が折り合わず、設立が決定した時点で早くも前途の多難を思わせるものがあつた。

ガリア首脳部が提示した『各国の貴族出身者のみで部隊を編成する』という条件が裏目に出てしまい、人員選定は難航。

人員の選定が遅々として進まない事に目を付けたリベリオン政府は、連合国内の発言権増強を計つて自国のウィッチを参加させるよう要請。それに対し、ブリタニアが強硬に反対。結果、ブリタニア連邦とリベリオン合衆国の対立を表面化させることとなつてしまい、連合軍内で新たな不協和音が生まれる。

眼前では、ブリタニア空軍の将官等とリベリオン陸軍の航空軍司令官が唾と怒号を飛ばし合い、祖国奪回の悲願に燃えるガランド達カールスラント軍将官一同を辟易させていた。

確実に本国をネウロイの支配から解放するには、統合戦闘航空団を含めた各方面の戦

力を一齐に投入する必要がある。西側からの侵攻を担当する506部隊の設立で躓いている場合ではないのだ。

(ぎゃーぎゃーと、感情任せに喚き散らして。いい歳した大人がまるで子どもだな……)

大仰に肩を竦め、ガランドは呆れ果てた態度を隠そうともしないから

戦果はもちろんだが、こういった会議の行く末もまた自分や自分の指揮する軍の連合軍内における立場を左右し、愛する祖国が戦後に示せる影響力も違ってくる。

だからこそ自然と熱も入るのだろうが、ハツキリ言つて子どももの喧嘩だ。子どももの喧嘩は大人がやると非常に質が悪い。

さらに北アフリカ戦線から西部戦線へ異動してきたモントゴメリー大将の存在が、会議の進行を余計に停滞させていた。

モントゴメリーはネウロイの活躍が以前に比べて沈静化している今こそ、総攻撃の準備としてライン川空挺突破作戦を実施するべきだと声高に主張している。

一方、リベリオン陸軍欧州派遣軍総司令官——ドナルド・D・アイゼンハワー元帥は、西部方面統合軍のみならず、東部方面統合軍や地中海方面統合軍の3個総軍を以て同時に攻勢をかけることが妥当であると主張し、双方の意見は平行線を辿っていた。

モントゴメリーの激しい性格は、過去に幾度も連合軍で亀裂を生じさせたが、今回に限つていえばこの会議室にリベリオン陸軍第3軍司令官のジェラルド・S・パットン中

将やカールスラント陸軍アフリカ軍団長のエルンスト・ロンメル元帥の2人がいないだけマシだろうか……。

3人共、北アフリカ戦線で活躍した名将なのだが、場を弁えず喧嘩になる程仲が悪いことで有名だった。彼等がこの場に揃った状況など想像もしたくない。

順調とは言い難い会議はなんとか進み、上述の2つの議題——506の人員選抜とライン川空挺突破作戦については取り敢えず保留となり、次に赤坂が口火を切る形で508部隊に関する協議が始まった。

当部隊は欧州における上陸支援を主任務とする部隊で、扶桑皇国海軍の第五航空戦隊と、リベリオン海軍の第16任務部隊を中心として結成された。地上基地を持たず、空母を暫定的な基地とするウィッチ部隊である。

通常、統合戦闘航空団の設立には5箇国程度からウィッチないしウィザードが参加している必要がある。なので、五航戦と16任務部隊だけでは人員規定に達していないことになる。

しかし、世界三大海軍と名高い扶桑とリベリオン、ブリタニアの海軍以外の国において、海上航法が可能なウィッチは殆んどいなかった。

それでも、高い機動力を持つ新部隊の設立はなんととしても実現しなくてはならない。反攻作戦成功の為に……。

起立して統合戦闘航空団を航空戦力とする空母機動部隊の運用思想を、涼やかな声しながら熱く語る扶桑海軍大将へガランドは目を据える。

赤坂伊知郎は、扶桑皇国海軍遣欧艦隊の司令長官であり、扶桑海軍屈指の航空歩兵主兵論者でもある。508航空団設立に対する想いは、この会議に出席しているどの将官よりも強い。

それは、遙か遠方の太平洋方面総司令部から、同じくウィッチと空母機動部隊の有用性を理解しているスプルーアンス大将をわざわざ呼び寄せたことから窺える。

ガランドは、連合軍及びカールスラント軍にて重要なポストについていながら上層部の人間達が好きではなかった。

上層部の大多数が頭が硬くて融通の利かず、時に利権絡みで足の引っ張り合いも辞さない上に、現場で戦うウィッチを含む兵達を省みない厄介な年寄り共で占めている。

連中ら、現場のいち航空歩兵から航空ウィッチ隊総監へと急速に成り上がったガランドが最も嫌悪するタイプだ。しかし、何名かの将官。特に赤坂伊知郎に関して言えば、少々印象が異なっている。

赤坂の名は、扶桑海軍事変に観戦武官として参加した折りには既に聞いていた。

事変当時、ガランドはまだまだ現役バリバリの航空歩兵で年齢16歳。階級は大尉。赤坂は海軍省勤務の大佐だった。

当時の扶桑海軍は航空歩兵の有用性が証明されておらず、ウィッチやウイザードへの風当たりは今以上に強かった。

そんな状況下。後に初代遣欧艦隊司令長官となる山本五十八——当時の階級は中將で、役職は海軍次官兼海軍航空本部長——と共にウィッチを含む航空戦隊の有用性にいち早く着目し、竹井少将等の助力を得て海軍ウィッチ部隊創設に尽力した。

当時から頑固で保守的な上層部に悩まされていたガラランドには、ウィッチ・ウイザードに好意的で先進的な思想を持つ赤坂に対する印象は悪くなかった。

「508航空団設立に当たりましては。まず我が扶桑海軍第五航空戦隊とリベリオン海軍の第16任務部隊、そしてブリタニア海軍から大型空母と艦上ウィッチを提供。オラーシャ及びカールスラントより参加を希望するウィッチの教育をリベリオンにて実施し、将来的に部隊へ配属。その他の海軍からも、空母三隻護衛の役割を果たす艦艇を提供して頂きたく——」

——ドンツ！

本会議の為に用意した手元の資料を饒舌な口調で読み上げる赤坂の言葉は、乱暴な動作で扉を破る音により唐突に遮られた。

会議の終了まで扉の開閉は固く禁じてある。それがノックの代わりに扉を壊さんばかりの強さで開けられた。赤坂もガラランドも、他の将官達も何事かと戸口に目をやる。

顔を振り向けた一同の視界に映ったのは、ぶち破った扉を潜って無遠慮に会議室内へ入ってきた青年士官らしき一団だった。

人数は10名前後。まだあどけなさが残る顔立ちに鋭さを湛えている。或いは各国軍の将軍・提督達と相對するが故に虚勢を張っているのか。

全員が小銃や機関銃より取り回しが利く短機関銃を手に携え、士官用の制服に身を包んでいる。だが、肩章等階級を示すものは見当たらない。

制服服や銃器も、それぞれが異なる軍ものを使用している。

カールスラント空軍の制服にリベリオン軍のM1A1トンブソン。カールスラント製のMP40短機関銃に扶桑海軍の第一種軍装。扶桑の陸海軍で採用されている○式機関短銃にリベリオン海軍の制服。スオミM1931短機関銃にヴェネツィア海軍の制服。ブリタニア軍で使用されているステン短機関銃にスオムス陸軍の制服等々。制服と銃が国籍バラバラに組み合わされているのだ。

10名の内、2人が東洋系——おそらくは扶桑人——。その他全員が西洋系——北歐系1人、南歐系3名を含める——だった。

「な、何だ君達はっ!?!」

モントゴメリーが床を蹴って立ち上がり、無礼な乱入者達を怒鳴り付ける。

「会議中に失礼」

自由ガリア空軍は制服を着たりリーダー各らしき西洋系の女性——女は彼女のみ——が、憤慨して吼えるモントゴメリーを悠然と受け流し、己に突き刺さる複数の視線をひと声で振り払う。

また、彼女が右手を掲げて合図を送ると、青年達はすぐさま2手に別れた。

片方のグループは将官達の背後へ素早く移動し、短機関銃の銃口を突き付け、もう片方のグループは扉を閉ざし、そこへ椅子等の備品を積み上げてバリケードを構築する。出入口は塞がれてしまった。

「各国陸海軍の将軍並びに提督の皆々様方には、少々お時間を頂きたいのです。指示に従って頂けるのであれば、危害は加えません」

「時間？」

アイゼンハワー元帥が片眉を上げ、怪訝そうな声色で聞き返す。「ええ」と頷く女性は、親子程も歳の離れたリベリオン陸軍元帥へ艶然と微笑みかけた。

「ほんの数日程」

「……………」

ガラランドは椅子に着席したまま、冷静に乱入者達を監察する。

ヒスパニア戦役、扶桑海事変、本世界大戦。数々の戦場を渡り歩いてきた彼女は、ちよつとやそつとのことでは動じない。

しかし、人間に銃を向けられている今の状況は青天の霹靂と言うべき出来事。困惑を覚える反面、会議で鬱屈していた心に刺激という名の潤滑油を与えられ、不謹慎ながら多少機嫌を良くしていた。

（被害者の立場で「籠城事件」を経験することになるとは……中々レアな体験だ）
 そう心の中で呟き、ガランドは自嘲気味な笑みを口元に浮かべる。

◇ ◇ ◇

約20分後、グレートブリテン島のある駐屯基地――

連合軍西部方面統合軍に参加しているのはリベリオン軍やカールスラント軍等の正規軍だけではない。帝政カールスラント皇室親衛隊も、西部戦線の主要戦力として数えられている。

ブリタニアに駐留する皇室親衛隊の主力は、ヨハンネス・デイトリヒ上級大将率いる親衛隊西方装甲軍。親衛隊第1装甲軍団及び第2装甲軍団から成り、陸戦ウィッチや最新鋭の装甲脚及び戦車を多数保有する「軍」単位の機甲部隊だ。

「籠城？」

西方装甲軍司令官執務室。執務机の椅子に深く腰掛けたデイトリヒは、のんびりと

した口調で報告を繰り返す。

執務室内には彼の他に親衛隊将校が3人。西部方面総司令部の状況を報告した女性秘書官がデイトリヒの傍らに控え、マホガニー製の執務机の向こう側には2名の親衛隊将官——ゲラルト・ケプラーと、ヴィルフリート・ビットリヒが並んで立ち、カールスラント人男性らしからぬ小柄——身長158cm——な上級大将殿と向き合っている。

ケプラーとビットリヒは、それぞれ第1、2装甲軍団軍団長を務める親衛隊大将である。

余談であるが、ビットリヒは昇進の上ノイエ・カールスラント防衛軍集団司令官の任を命じられた前軍団長——パトリック・ハウサー上級大将の後任として、1カ月半程前に第2装甲軍団の新らたな軍団長となっていた。

「西部方面総司令部の会議室でかね？」

「現在、西部方面総司令部に参加している主立った将官が正体不明の武装集団に捕らわれており、ブリタニア軍と我がカールスラント軍の憲兵隊が合同で対処に当たっております」

「人質となった連合軍将官の中には、我が陸軍のゲアハルト・フォン・ルントシュテット元帥。空軍のフーベルトウス・シユペルレ元帥。さらにガランド少将も含まれているよ

うです」

他人事のような物言い、ケプラーとビットリヒが順に告げる。

謎の武装集団が西部戦域の最重要拠点に侵入し、挙げ句各国から西部方面へ派遣されている將軍達を人質に立て籠っている。

迅速な対応が求められる緊急事態にして、誰もが予想し得なかつた異常事態だ。或いは、予想出来ていたはずなのに見ないようにしていたか。

ネウロイばかりが武器と敵意を向けてくる思い、同じ人間から弓引かれるなどありえない。

そう結論づけ、今回のような事件が起こりうる可能性を否定し、結果足元を掬われたとの見方も出来る。

だが奇妙なことに。デイトトリヒ、ケプラー、ビットリヒの3人からは驚愕や動揺、焦燥等は一切感じられない。

2人の親衛隊装甲軍団長は淡々とした口調で籠城事件発生の事実を告げ、上級大将は悠揚迫らぬ態度で彼等から報告を受けている。

まるで、西部方面総司令部で事が起きるのを「予め知っていた」かのように……。

「……となれば、今の西部方面総司令部に西部方面統合軍の指揮は執れないだろう。早急に指揮権を別の場へ移す必要があるな」

と、デイトトリヒが本のページを一気に飛ばしたような話題を振る。

籠城事件の被害者——連合軍将官等の安否。総司令部会議室内に立て籠った武装集団の正体。籠城犯達の要求及び目的。西部方面総司令部付憲兵隊の対応等。

それらを脇に置き、早くも指揮権限の移譲については話を進める腹積もりなのだ。

「ええ」

ビットトリヒが首肯すると、デイトトリヒは左手の秘書官へ視線を走らせる。

落ち着きを払った親衛隊将官等とは異なり、女性秘書官は金髪慧眼の美貌に当惑の色を滲ませていた。

「すぐに西部方面統合軍全軍へ通達してくれ。西部方面総司令部に現在指揮能力無し、只今を以て我が皇室親衛隊西方装甲軍司令部が臨時方面総司令部として機能する、とな……」

「は、はあ……」

将官の秘書官らしからぬ気の抜けた返事。彼女が呆けたような声を返したのは、デイトトリヒの指示に疑問と戸惑いを抱いたからだ。

下士官上りのデイトトリヒは、親衛隊上級大将という極めて高い地位にありながら、士官としての専門教育を受けていない。なので、軍人としての能力はお世辞にも高いとはいえない。

上官を見くびるようだが、秘書官には眼前の小男に西部方面統合軍を指揮出来るとは思えなかった。

以前、会談したりベリオン軍の将校も、作戦行動に関する極めて一般的な知識すら持ち合わせていないデイトトリヒに対し、呆れ返っていた。

そんな男が受章・昇進を受け続けたのは、部下の将兵達からの絶大な人気があり、尚且つカールスラント皇帝——フリードリヒ4世や行政指導部宰相——ハインリヒ・ルートポルト・アインツベルンからの信頼が厚かったからだ。

だが、今回ばかり事情が異なる。今までは指揮していた部隊の殆んどが皇室親衛隊麾下の戦力——時折カールスラント国防軍の部隊も指揮下に入っていた——だったが、今回は西部方面統合軍へ派遣されている各国正規軍の部隊を一時的とはいえ隷下へ加えることになる。それも独断でだ。

各国から非難された場合、どのように対処するつもりなのか。皇室親衛隊を快く思わない一部のカールスラント国防軍将軍達に付け込まれたりしないか。組織の存続に関わるのではないか。

デイトトリヒの能力面以外にも、様々な不安要素が浮かび上がり、秘書官の胸を押し潰さんとする。

「失礼ながら閣下。我が方の軍警察師団を憲兵隊の増援として派遣されてはいかがで

しよう?」

秘書官が進言すると、ディートリヒ及び2人の軍団長が一斉に目を向けてきた。ナイフの如き鋭い視線が、威圧するように秘書官へ集中する。

「も、申し訳ありません!」

自重を促されたと思つたのか。秘書官はすぐさま頭を下げ、謝意を述べる。

「いや、構わんよ。そのように手配してくれたまえ」

「は、はい!」

上級大将殿の柔和な笑顔を見て、秘書官はホツと安堵する。上官達に向けて挙手敬礼をした後、彼女は辞去していった。

秘書官を見送つたディートリヒは、椅子により楽な姿勢で座り直し、フウと短く溜め息を吐く。

「……さあて、お膳立てはした」

その言葉は、ケプラーに向けたものでもなければ、ビットリヒに向けたものでもなかった。

「あなたの目的を果たして頂こうか。アインツベルン大佐」



同時刻、北海洋上——

味方の殿を務める扶桑海軍航空ウイザード——宮藤優人大尉は、S—18対物ライフルを射撃位置に保持し、続けざまにトリガーを絞った。

対物ライフルの銃口より放たれた魔法弾が、ネウロイ化したカールスラントの大型航空母艦——グラーフ・ツェッペリンの砲台に着弾へ次々と命中する。

長年に渡り厳しい訓練と過酷な実戦を繰り返してきたベテランウイザードの射撃技術は一級品。正確且つ確実に砲の数を減らしていく。

同じく殿を買って出た第501統合戦闘航空団『ストライクウイツチーズ』司令——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐も、黙って見ているわけではない。

固有魔法『空間把握』を駆使し、敵砲台の位置を目視よりも迅速且つ正確に捕捉。そこをMG42Sで攻撃する。

MG42Sは、カールスラント製のMG42汎用機関銃を航空ウイツチ用に改修したもので、本体の軽量化と発射速度の向上。さらに75発弾倉が使用可能となっている。

各国で採用されている機関銃と比較して、発射速度が遥かに速く、軽量且つ取り扱い扱も容易で、信頼性も高かった。

7.92mm×57弾を使用するため、優人のS—18対物ライフルに比べると、1

発の威力は劣っている。しかし、自慢の高い発射速度によって短時間に多数の銃弾を叩き込めるので、総合的な攻撃力はそこまで見劣りしない。

グラフ・ツエツペリンとて、ただ的になっただけではない。全砲門を以て亜光速のビームを放って反撃する。

20mm弾が飛翔、7・92mm×57弾が乱舞し、砲台を撃破していく。だが、向かってくる光条の数が目に見えて減少している様子は微塵も感じられなかった。

グラフ・ツエツペリンは、ネウロイ化によって大幅に火力を向上させている。追加されたものを含め片舷数十門。両舷で100門近いビーム砲を備えた威容は、元々が空母であったことが信じられないほど武装を充実させている。

ハニカミ構造で彩られた船体から放たれる夥しい数の閃光。乱舞する光条の群れというよりは、紅い光の繊維で織られた布を想起させる。

「——っ!? ミーナ! 限界だ! そろそろ後退しよう!」

離れた場所にいる戦友兼上官に対し、優人はインカムを使って呼び掛けた。しかし、何故かミーナから声が返ってこない。

優人はダメ元で船体を直接狙ってみたが、頑強な装甲によって20mmの魔法弾はたやすく弾かれてしまう。

予想はしていたが、やはり赤城の時と同様、内部に侵入するしか手は無さそうだ。

「ミーナ？」

グラーフ・ツエツペリンへの攻撃を一時中止した優人は、魔力シールドを展開して身を守りつつ、周囲に目を凝らす。

ミーナの姿はすぐに見つかった。安堵するのも束の間、優人は彼女の様子がおかしいことに気が付く。動きが明らかに普段より鈍いのだ。

大戦初期から戦ってきたミーナの撃墜スコアは160機を優に越え、501内においてはハルトマンやバルクホルンに次ぐ第3位の記録を保持している。

撃墜スコアに対し、飛行技術や戦闘技術は必ずしもイコールでは無いが、原則スコアが高ければ実力も技量も高いというのが通例である。

肩を並べて戦ってきた彼女の戦友達も、ミーナの実力を知っているし、認めている。無論、優人も……。

特にストライカーに負担を掛けない飛行はとてもしなやかで、芸術的と称しても差し支えないほど美しい。厳しい戦場でも、彼女は我知らずそれをやってのけてしまう。

だが、優人の双眸に映る現在のミーナはまるで病人のようにフラついている。グラーフ・ツエツペリンの攻撃を辛うじて回避しているようだが、機体の姿勢が安定していない。

不意に複数の光条をがミーナへと迫る。咄嗟にシールドを張って防御するも、展開が

不完全だったのか着弾と同時に後方へ吹き飛ばされてしまう。

『きやあああああつ?!』

「ミーナ！おい、ミーナ！聞こえるか！ミーナ！」

自らも猛攻に晒されながら、扶桑海軍ウィザードは必死に呼び掛ける。

しかし、優人とミーナ。或いは双方のインカムが故障しているらしく、声が届かない。なんとか身を立て直したミーナだったが、グラーフ・ツェッペリンは手を緩めることなく紅の光槍を放ち続ける。

オリーブドラブの制服に身を包んだ少女は、多数の光条によって瞬く間に取り囲まれてしまう。

「クソッ！」

優人はビームの豪雨から脱出し、魔導エンジンの回転数を上げてミーナの元へ急いだ。

そんな彼をミスミス見逃すほど、グラーフ・ツェッペリン——ネウロイは甘くない。ビーム砲より幾重もの閃光を放ち、扶桑海軍ウィザードを撃ち墜とさんとする。

だが、仲間の元へ急迫する優人は先程まで身を守るだけでも四苦八苦していたビームの雨を軽々と回避していた。

まるでビームの軌道を予想して攻撃を回避しているかのような飛行技術は、固有魔法

『未来予知』とハイレベルの空戦機動技倆を駆使したエイラ・イルマタル・ユージェイライ
ネン少尉の完全回避に他ならない。

何故優人にエイラの真似が出来るのか。それはわからない。しかし、シールドで防御
しながらよりも、こちらの方が早くミーナの元へ辿り着ける。優人からすれば好都合
だった。

だが、後少しというところで紅き光条が優人の紫電改に直撃する。

「——っ!?!」

愛機の損傷を知覚した優人は反射的に振り返ると、思わず顔を顰めた。

右側のユニットがビームに貫かれ、被害は内部の魔導エンジンにまで及んでいた。2
基の魔導エンジンの内、片側が損傷・停止。優人は片肺状態へと追い込まれる。

ストライカーから立ち込める金属臭混じりの黒煙を振り払い、すぐ目の前にいる緋色
の髪の少女を見やった。

猛攻に晒されて負傷したのか。ミーナは気を失い、今まさに落下しようとしていた。

「ミーナアア！」

優人は右手を伸ばす。その手はミーナの左腕をしっかりと捉え、彼女をグイッと引き
寄せる。

自分の元へ持ってきたミーナの身体を、扶桑海軍ウイザードは両腕で強く抱き締め

た。

そうしている間にも、グラーフ・ツエツペリンは多数の光条を撃ち込んでくる。ミーナに気を取られていた優人は防御の動作が遅れ、無事だったもう片側のユニットも損傷させてしまう。

「しまったー！」

これで紫電改の魔導エンジンは完全に停止。ミーナが気を失っている。最早、空中に浮いていることが出来なくなった。

それでも優人は片足を使ってシールドを張ることで自分とミーナの身を守ろうとする。

意識の無いカールスラントウィッチを抱き抱えつつ、扶桑海軍ウィザードは戦闘空域から離れた地表へ向かって落下していった。

第21話「Missing In Action」

1944年9月、西歐・北海洋上――

西の水平線から射し込む夕陽が、海域全体を茜色に染めている。

空の蒼さを映し、太陽の鋭い光を反射させる昼間の海とはまた違った美しさ。情熱的でありながら、幻想的な様相を見せつける大西洋の付属海。

その洋上を遊弋する扶桑皇国海軍遣欧艦隊付属の空母――赤城型航空母艦“天城”の飛行甲板に、2人のウィッチが佇んでいた。

「もう陽が暮れる……」

帝政カールスラント空軍所属の航空ウィッチ――ゲルトルート・バルクホルン大尉は、完全に沈もうとする夕陽に目を据えつつ、悔しげな声で呟く。

後輩達を引き連れ、戦闘空域から天城及び“ドクトル・エツケナー”が待機する安全圏へ離脱した彼女は、目立った怪我こそなかったものの、制服のあちこちが切り裂かれ、焼け焦げてしまっている。

「……………ミーナと優人。帰って来なかったね」

と、傍らに立っているエーリカ・ハルトマン中尉が言葉を継ぐ。こちらも制服の傷み

が激しい。

彼女はバルクホルンと同じくカールスラント空軍に所属する航空ウィッチだ。

胸の前で腕を組むバルクホルンに対し、後頭部で両手を組み、太陽の沈んでいった西に空を真つ直ぐ見つめている。

未帰還機——撤退の殿を務めたミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐、宮藤優人大尉を待っていたが、遂に日が落ちてても2人は帰つて来なかった。

インカムを使つて呼び掛けも行っているが、梨の礫。全く応答が無いときている。

あの2人が簡単にやられるとは思えない。通信出来ないのはインカムの不調だろう。戻らないのは何らかの理由で合流が難しくなり、何処かに身を隠しているためだ。

(そうだ。そうに決まっている！アイツ等がネウロイごときにやられるものか！)

弱気な考えを起こさぬよう、バルクホルンは自らに強く言い聞かせる。しかし、彼女は理解していた。それが希望的観測でしかないことを……。

「……までズタボロにされたのって、いつ以来かな？」

そう言いつつ、ハルトマンは背後を振り返る。戦友につられ、バルクホルンも視線を走らせる。

彼女達の背後では、天城へ帰還した501ウィッチの半数が飛行甲板に身を投げ、スヤスヤと寝息を立てていた。

貴族の生まれでマナーに厳しいペリーヌでさえ、大の字になって寝転がっている。

バルクホルンと同様、魔法繊維でできていて丈夫なはずの衣類が——ズボンと下着を除いて——ボロボロになっており、周辺には彼女等が戦闘で使用したストライカーユニットや銃器類が無造作に散らばっている。

普段の堅物大尉殿ならば、装備を雑に扱った挙げ句。飛行甲板に寝っ転がる等というだらしない真似を許したりはしないだろう。

だが、ウィッチ達は昨日の今日でネウロックや妙な知恵を身に付けた強力なネウロイと戦い、さらにはネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンまでもが彼女達の前に立ち塞がった。

年端もいかない少女達は、ブリタニア防衛以上に過酷な戦いを連日強いられ、すっかり疲弊している。天城へ着艦した途端その場に倒れ伏し、寝入ってしまうほどまでに……。

規律を重んじる堅物大尉も、さすがに疲労困憊の仲間達に対して口煩く説教する気にはなれないらしい。

厳格なようで甘い面も持ち合わせている。それが部隊の長女役であるバルクホルンの長所との見方も出来る。

それだけでなく、天城はネウロイと化したグラーフ・ツエツペリンの予期せぬ攻撃を

受けていた。

目立った損傷こそないものの、現時点で天城もドクトル・エツケナーもまだ混乱から立ち直れておらず、エレベーター等の設備も復旧していない。これではストライカーユニットの収容はもちろん、整備や補給も儘ならない。

(優人・ミーナ！無事でいてくれ！)

心の中で祈るように眩き、バルクホルンは両拳を硬く握り締める。煩悶とする戦友を横目に据え、ハルトマンも歯痒そうに眉を顰めた。

燃料に補給を受けられない現状では、優人とミーナの搜索に向かえない。いや、それ以前に夜間飛行に必要な能力・経験が不足している彼女達に2人を見つけることは難しいだろう。

サーニャに頼みたいところだが、彼女も疲れている。グラフ・ツエツペリンの長距離砲撃の余波を受け、ユニットを損傷している。

しかも、彼女達空母直掩組は砲撃に晒される前に何度か小型ネウロイの編隊に襲撃されておき、度重なる戦闘と混乱で魔法等を激しく消耗していた。

「よお！戻ったぞー！」

「待たせてごめんなさい」

ふと聞きなれた朗らかな声と、何処かミーナに近い柔らかな声音が501Wエースの耳

朶に触れる。

諸用で仲間の元を離れていた「シャーリー」ことシャーロット・エルヴィン・イエーガー大尉と、第504統合戦闘航空団へ配属が内定している竹井醇子大尉だ。

「あ、2人共おかえり〜♪」

ヒラヒラと手を振り、ハルトマンは笑顔で2人を出迎える。対してバルクホルンは、硬い表情のままシャーリー達と向き合う。

「リベリアン、どうなんだ？」

顔を見るなり単刀直入に訊いてくるバルクホルンに苦笑しつつ、シャーリーは質問に応えた。

「カールスラントと扶桑のユニット。あと損傷の少ないサーニャの機体は……まあ、なんとかなりそうだよ」

「他のユニットはあ〜？」

と、ハルトマンが合いの手を入れる。シャーリーは「ダメだな」と頭を振った。

「部品が足りてない。カールスラント製の部品も、親衛隊の連中に頭を下げなきゃならないし……」

シャーリーはポリポリと後頭部を掻き、ばつが悪そうに説明する。

ハルトマンは「そっか〜」と能天気を受け止めていたが、日頃から親衛隊を政治被れ

と毛嫌いしているバルクホルンは見るからに苛ついていた。

インペリアルウィッチーズをはじめとする皇室親衛隊と彼等の物資を天城へ受け入れるに当たり、501から504航空団に引き継がれる予定だった人員全てと、機材の大部分をパ・ドク・カレーに置いてくる必要があった。

結果、501の手元には必要最低限の予備パーツしか残されておらず、それらの多くも前述の騒ぎで失う。もしくは使い物にならなくなってしまうている。

天城に乗艦している扶桑海軍の飛行脚整備兵も、統合戦闘航空団とは異なり自国の機体しか扱えない。

そこはエースウィッチであり、優秀なメカニックでもあるシャーリーの出番だろう。

「じゃあ、芳佳は〜?」

「艦内のあちこちで負傷者を治療して回ってるよ。今は……親衛隊連中のところかな?」

「治療?」

「政治被れ共をか?」

不思議そうに首を傾げるハルトマンの言葉を継ぎ、バルクホルンが訊き返す。

親衛隊の名前が出てきたためか。堅物大尉殿は露骨に不機嫌そうな表情を見せる。

「芳佳だって、戦闘で疲れてるんじゃないの〜?」

ハルトマンが重ねて訊ねる。口調を変えぬまま表情だけを曇らせる。強力な治癒魔法の使い手である芳佳は、このような事態において己の役割を理解し、生まれ持った力を遺憾無く發揮している。

芳佳の性格上、大勢の負傷者がいると知れば全力で助けようとする。例えそれが、自分501達を散々振り回し、心無い発言で親友を侮辱した皇室親衛隊の人間であっても……。

良く言えば純心で善良、悪く言えばお人好し。それが宮藤芳佳という少女だ。彼女はおそらく、自らの敵になりうる人物ですら心底憎み切ることが出来ない。

「苦しんでいる人間を見過ごさずに手を差し伸べる。その精神は称賛に値するが、それで自分が倒れてしまうようなことがあれば本末転倒だ」

苛立ちを湛えた声音で、バルクホルンは自らの意見を述べる。

芳佳も他のメンバー同様、疲労で身体が悲鳴を上げているはず。そんな状態で治癒魔法を多用しては彼女の身が保たない。バルクホルンの言う通り、倒れてしまうだろう。

「わかった。じゃあ、重症者の治療だけさせて……後は休ませるよ」

「芳佳に何かあつたら、優人に殺されちゃいそうだしね〜♪」

ニシシツと歯を見せて笑うハルトマンに、シャーリーもつられて相好を崩した。

「あつはははは！そりや言えてるな！アイツのシスコンぶりは筋金入りだし！」

「案外、芳佳がコケて怪我したら。全速力で戻ってくるんじゃない？ ミーナも一緒だろうから、探す手間が省けるよ？」

「それなら、天城の乗員にナンパさせた方が効果あるんじゃないか？」

「お？ いいねえ♪今、甲板にいる誰かに頼んでみる？」

「貴様ら！ いい加減にしないか！」

バルクホルンの激昂。談笑していたハルトマンとシャーリーはもちろん、甲板で復旧作業を進めていた天城乗員等も何事かと怒声の主を見やる。

己に集中する多数の視線に構うことなく、堅物大尉は言葉を続けた。

「今がどういう状況か分かっているのか！ 優人とミーナが戻らない上に、ウォーロックよりも遥かに強力な敵が現れたんだぞ！」

いつにも増して感情的なバルクホルン。しかし、無理もないだろう。苦楽を共にしてきた2人の戦友が行方不明となっているのだ。

このまま優人達が見つからず、西部方面統合軍総司令部からM I A——Missing In Actionの略で、戦闘中行方不明を意味する——認定でもされたら。死体で見つかる等の最悪な事態にでもなったら……。

そう考えると、内心激情家なバルクホルンは居ても立っても居られなかった。シャーリーやハルトマンのお気楽な態度も癪に触る。

「いや、そりゃ分かってるけどさ……」

「リベリアン！2人がいない今、私とお前が隊の指揮官と次席指揮官なんだぞ！もつと真剣にならんかつ！」

現在の第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』は、ブリタニアを発つ直前に副司令兼ウィッチ部隊戦闘隊長の坂本美緒扶桑海軍少佐が一足早く帰国の途に就き、司令のミーナと戦闘隊長代理を務める優人が行方不明となっている。

そのため、最先任のバルクホルンが501航空団の臨時司令に。それに次ぐ立場のシャーリーが、優人に代わって戦闘隊長代理を務めている。

「……………真剣に何をするんだよ？甲板に突っ立って夜の海をただ眺めるのか？」

「——っ!?それは……………」

バルクホルンを睨み返すシャーリーの嫌味とも受け取れる問い掛け。堅物大尉は言葉に詰まる。

シャーリーやハルトマンが鹿爪らしく振る舞ったところで、現状は何も変わらない。たった1人で501の各ストライカーユニットの状態をチェックし、リベリアンとは規格も勝手も違う他国の機材を整備するつもりでいるのだ。

現状で自分のやるべきことを理解し、行動しているシャーリーは十分真剣と言える。バルクホルンに付き合い、共に優人とミーナの帰りを持つていたハルトマンもまた然

りである。

「2人共、止めなさい」

険悪な関係になりつつリベリアンと堅物大尉両者を見兼ねた竹井が、両者の間に割って入った。

部外者である自分が501の問題に深入りすべきではないと考え、竹井は必要以上に口を出さないつもりでいた。

だが、シャーリーとバルクホルンの喧嘩腰なやり取りを見せつけられてはそうもいくまい。

「バルクホルン大尉。あなたはとにかく落ち着きなさい」

「こんな時に落ち着けというのか!？」

「こんな時だからこそ落ち着くのよ!」

不意に声を張り上げる竹井。扶桑皇国海軍ベテランウィッチの剣幕に圧され、バルクホルンはものを言えなくなる。

「あなたが自分で言った通り。現在501部隊の実質的指揮官はバルクホルン大尉、あなたなのよ!指揮官の言動一つ一つが隊員達の士気に影響する!優人やミーナ中佐を助けることも、ネウロイを倒すことも出来なくなる!部隊を預かっている自覚があるのなら、もっと毅然としなさい!」

竹井の叱咤激励。厳しくも優しい言葉がバルクホルンの耳朵を打ち、鼓膜を刺激し、脳髓に響く。

「……………そうだな」

自省を促され、硬かったバルクホルンの表情は微かに緩む。涼やかな声音で呟くと、改めてリベリオンウィッチへ向き直る。

「リベリアン、すまない。その……………八つ当たりした……………」

「いや、あたしも真剣さが足りなかったし。嫌味なこと言つて悪かったな」

互いに自分の非を認める2名のウィッチ。バルクホルンは頷いて応じると、次に彼女は竹井へ顔を向けた。

「おかげで目が覚めた。ありがとう竹井大尉」

「うふふ♪どういたしまして♪あつ、それと……………」

慈愛に満ちた微笑を浮かべて応じると、竹井はバルクホルンの耳元へ己の唇を寄せ
る。

「ウォーロックの話を大声ではダメよ？それは大一級軍機でしょ？」

「ぐつ……………すまん……………」

竹井に指摘され、漸く自らの失言に気付いたバルクホルン。やや落ち込みに自省を重ねる。

すっかり大人しくなつた戦友を見てハルトマンは悪戯っぽく笑い、バルクホルンを窘めた竹井を秘かに「扶桑のミーナ」と呼ぶことにしていた。

他者を慈しむ心を体現した優しい微笑。貴族を想わせる優雅で柔らかな物腰。穏やかさを心情とし、慈愛に満ち溢れながら威厳も兼ね備えた様は、まさに扶桑版のミーナと称して間違いだろう。

尤も、竹井と付き合ひの長い優人や坂本からすれば、ミーナの方が「カールスラントの竹井」かもしれないが……。

(普段は優しいけれど、怒らせたらミーナ以上に恐いんだらうなあ……)

他の3人に気付かれぬように、ハルトマンはクスクスと小さく笑声を立てる。

「それで竹井大尉、総司令部と連絡はついたのであるか？」

と、バルクホルンは話題を変える。竹井は親衛隊隊員の大半がドクトル・エツケナーに戻つたのをチャンスと見て、艦内にある電信室から西部方面統合軍総司令部へ連絡を試みようとしていた。

総司令部にいる501寄りの將軍達——カールスラント空軍航空ウィッチ部隊總監のアドルフイーネ・ガランド少将や扶桑海軍遣欧艦隊司令長官の赤坂伊知郎中将等——に手を回してもらふ以外、親衛隊の横暴を止める方法は今のところ無い。

バルクホルンとしても、他者の権力に縋るようなやり方は不本意だが、何を考えてい

る親衛隊に主導権を握られていては優人達の搜索やネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンの撃破が難しいのも事実だ。

「連絡は取れたけど、状況は何一つ好転しそうにないわね」

「どういうことだ？」

バルクホルンは竹井へ向かって一步前に踏み出し、詰め寄るように問い掛ける。

扶桑海軍ウィッチはフウと息を吐いてから、仔細を説明し始めた。

「現在、西部方面総司令部に指揮能力無し。西部方面統合軍は全権、帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍に移行したわ」

「それって、連合軍が親衛隊の指揮下に入るってことか!？」

シャーリーが信じられないと言った表情で訊くと、竹井は「ええ」と小さく頷く。バルクホルンもまた、驚愕に目を見開いていた。

「バカな！いくらなんでも、そんなことがあり得るのか!？」

帝政カールスラント宰相皇室親衛隊の権限が、まさかそこまで強いはずがない。バルクホルンは自身の耳を疑う。

「どうも総司令部で非常事態が起きたみたいで、それで赤坂長官達は軍を指揮できる状態ではなくなっちゃったというわけ……」

「非常事態い？」

怪訝そうに繰り返すハルトマンに、竹井は簡潔に応える。

「総司令部内の会議室に謎の武装集団が立て籠り、主立った将官達は人質に取られてたわ」

扶桑海軍ウィッチの説明を受け、501航空団年長組の3人は思わず言葉を失った。

◇ ◇ ◇

同時刻、天城艦内――

親衛隊が借り受けている区画は負傷者で溢れていた。グラーフ・ツエツペリンの攻撃時に、艦内の壁や天井に叩きつけられた親衛隊の将兵。

ネウロック及びネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンとの戦闘で負傷したインペリアルウィッチーズ所属の親衛隊ウィッチ。

インペリアルウィッチーズが501航空団より先に撤退したのは、国防軍のウィッチ達を囚にして自分達だけ助かろうとしたわけではなかった。

501部隊と合流した時点で、インペリアルウィッチーズはかなり消耗していた。

恐い上官――グレーテル・ホフマン親衛隊大尉がいたため、瘦せ我慢をしていたようだが負傷者も出ており、501のウィッチと肩を並べて戦える状態ではなかったのだ。

このこと。そして、天城とグラーフ・ツェッペリンが攻撃されたことを知った芳佳は、居ても立っても居られず天城の艦内を駆け回り、あちこちで負傷者に治癒魔法をかけた。

彼女は既に天城乗員の治療を終え、親衛隊員の治療に回っている。

突然現れて、治療をさせて欲しいと申し出た扶桑海軍ウィッチ。あどけない少女の真摯な思いに困惑しつつ、親衛隊員等はされるがまま治癒魔法による治療を受けていった。

「はい、もう大丈夫ですよ！」

屈託の無い笑顔で、芳佳は治癒の終わりを伝える。治療を受けた親衛隊ウィッチは依然当惑したままだったが、一言「ありがとう」と礼を述べ、持ち場へ戻っていった。

「おかげで助かったわ」

涼やかな声が芳佳の耳朶に触れる。インペリアルウィッチーズ第3飛行隊隊長——アリオーナ・クリューコフ親衛隊大尉だ。

何十人という負傷した仲間を治療してくれた恩人に対し、アリオーナは心からの謝意を口にする。芳佳は照れ臭そうに後頭部を掻く。

「いえ。私は私に出来ることをしただけで……他に怪我人は？」

「今のウィッチで最後よ。本当にありがとう」

「あ、でもドクトル・エツケナーに出掛けた人達は？」

「ここままでしてもらえれば十分よ。もう休みなさい」

そう言つて、アリヨーナは芳佳の頭を撫でる。初対面時は、何処か冷たく思えたインペリアルウィッチーズの第3飛行隊長。

ホフマンとの諍いもあり、芳佳も他の501ウィッチも親衛隊の面々に対し、良い印象を抱かなかつた。

しかし、考え方が少々異なるだけで決して悪い人達ではない。

アリヨーナも、話してみればフレンドリーな優しいお姉さんで、性格にはミーナやシャーリーに近いものがある。

「でも、あつ……………」

不意に足が纏れ、芳佳は前屈み転倒しそうになった。床へ倒れる前にアリヨーナによつて支えられ、事なきを得る。

「ほら！ 昼間の戦闘で疲れているのにこれ以上に無茶したら——」

「だ、大丈夫です。これくらいへっちらで——」

「とても大丈夫には見えないわよ！」

少しばかり語勢を強めたアリヨーナの言葉に、芳佳は口を噤む。

「……………お兄さんのことが心配？」

「え？」

「戻って来ないお兄さんが果たしてどうなったのか。それを考えるのが不安だから、取り敢えず行動を起こして考えないようにしてる。そうでしょう？」

「……………」

「誤解しないで、責めてるわけじゃないわ。ただ、お兄さんが戻ってきた時に元気な姿で迎えられるために、今は休みなさい」

「……………はい、失礼します」

アリヨーナに諭されて観念したのか。芳佳は寂しげな足取りで、トボトボと歩き去って行った。

「まったく……………」

肩を落とす芳佳の背中を見送ったアリヨーナは、独り溜め息を漏らす。

「むず痒くなるほど良い子ね。ホフマンも、あの子の爪の垢でも煎じて飲めばいいのに……………」

性格に難を抱えた同僚の姿を思い浮かべ、アリヨーナは苦笑する。



翌朝、パ・ド・カレー沖——

東の水平線から差し込む曙光が、ガリア沿岸の海に停泊している扶桑皇国海軍遣欧艦隊を照らす。海に浮かぶ黒鉄の船体が群れを成し、パ・ド・カレー沖に蠢く姿が陽の光によつてハッキリと現れる。

今次遣欧艦隊は、元々の反攻作戦に合わせて司令長官の赤坂伊知郎中将が扶桑本国より呼び寄せた艦艇で編成されていた。

蒼龍型航空母艦の「蒼龍」を旗艦とし、同型艦の「飛龍」と編成する第二航空戦隊が中核担う。

二隻の空母を囲むようにして、第八戦隊の巡洋艦「利根」及び「筑摩」以下。夕雲型や秋月型で編成された2個駆逐隊で輪形陣を形成している。

輪形陣とは海戦における艦隊陣形の一つで、基本的に中央に空母や戦艦などの主力艦を置き、その周りを駆逐艦や巡洋艦が円形に固める防御を重視した陣形である。

さらに、空母の護衛の他。ガリアへの逆上陸を果たした友軍を艦砲射撃で支援する為、筑波型戦艦「筑波」「生駒」「八海」「妙義」で構成された第3戦隊も動員していた。

いずれの艦艇も、扶桑皇国の為。人類の勝利の為に素晴らしい働きをしてきたものばかりだ。

第3戦隊に所属する筑波型は全て、従来の主砲を上回る打撃力を持つ45口径46cm連装砲を装備している。

それらが既に幾度も火を吹き、ヘルギガ方面より地上部隊の側面を突こうとした地上型ネウロイの群れを粉々に粉砕している。

夜が明け、今からは空母航空隊による航空支援を行う算段だ。

零式艦上戦闘機と、九七式艦上攻撃機の後継機として開発・配備された“天山”で編成された飛行隊がそれぞれ2個ずつ。

ウィッチ部隊もいるが、ただでさえ航空ウィッチは稀少な存在。艦上ウィッチともなると、さらに数が限られる。おいそれと揃えられるものではない。

だが今回は幸運な方だった。航空歩兵搭載時の蒼龍と飛龍は、ウィッチを4名乗艦させることになっている。

飛龍は半数を揃えるのが精一杯だったが、蒼龍は規定通りの4人を揃えることに成功していた。

「やれやれ、同窓会は開けそうにないか……」

「はっ。」

独り言が大きかったらしい。自ら長機を務めるロツテの2番機が聞き返してきた。

「いや、何でもない。若本上がるぞ！全機続け！」

若本徹子中尉率いる艦上ウィッチ飛行隊は、夜明けを迎えたばかりの空へと飛び立っていった。

扶桑皇国海軍戦艦ノ項 『筑波型戦艦』

◇概要

筑波型は最新鋭の46cm砲と、紀伊型戦艦を上回る厚さの防御装甲を兼ね備え、常備排水量4万7000トンで30ノットの速力を発揮する「十三号型巡洋戦艦」として計画・建造された高速戦艦である。

元々紀伊型は、主砲に50口径46cm三連装砲4基の搭載を計画していたが、砲身の遅れや三連装砲自体が開発途中だったことから搭載を見送り、代わりに45口径41cm連装砲5基10門——3番艦「駿河」と4番艦「近江」は50口径41cm連装砲5基10門——を主砲としている。

海軍内では、1番艦「紀伊」と2番艦「尾張」の主砲も新型へ換装する意見も出ていたが、砲身の製造には時間とコストが必要で、換装自体もそう易々と出来るものではなかった。また、急速なウィッチ用装備の進歩で、戦艦の強化よりも航空母艦の建造が優先されるようになったため、こちらも見送られている。

しかし、50口径46cm三連装砲の研究開発はその後も進められ、45口径46cmとして完成。同連装砲は筑波型戦艦に、三連装砲は第一戦隊の大和型二隻へ搭載され

た。

同型艦は筑波、生駒、八海、妙義の4隻。竣工後間もなく第三戦隊へ編入され、同戦隊にて錬成が行われた。

重装甲に高火力、そして紀伊型譲りの俊足を持つ筑波型高速戦艦は大いに戦術的価値を持つこととなり、その足の速さから作戦行動の幅が広く、空母機動部隊に追従することも可能であった。

空母の護衛役を担い、大戦初期から欧州へ派遣されている筑波型は、他の扶桑海軍戦艦と比べて活躍の機会が非常に多く、1943年のガリア逆上陸時には自慢の45口径46cm連装砲の打撃力を遺憾無く発揮し、多数の陸戦ネウロイを撃滅。ガリアへ上陸する連合軍地上戦力を艦砲射撃で援護した。

最初の欧州派遣直前に改修が行われ、対ネウロイ戦に不要と判明した水雷兵装を全廃。16門あつた単装砲は半分の8門に減らされ、代わりに機銃を多数搭載して対空戦闘能力を向上させる。

この時に巡洋戦艦という艦種も廃止され、筑波型は書類上「戦艦」に分類されることになった。

◇諸元

常備排水量：47,500 t

全長：278.3 m

水線幅：31.07 m

水線下最大幅：約31.36 m

平均吃水：9.74 m

機関：口号艦本式重油専焼缶14基

技本式・低圧型ギヤード・タービン4基4軸

出力：150,000馬力

速度：30ノット

兵装：45口径46cm径連装砲4基8門

50口径14cm単装砲8基8門

45口径12.7cm連装高角砲4基8門

25mm三連装機銃24基、同連装機銃14基

13mm連装機銃2基

装甲：舷側330mm、甲板約127mm、主砲防盾330mm

第22話 「ラツキースケベ3連発♪」

1944年9月某日早朝——

ネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンとの戦闘から、既に半日以上の時間が経過していた。

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の大型航空母艦「天城」。帝政カールスラント皇室親衛隊麾下の同型空母「ドクトル・エツケナー」。

乗員等の弛まぬ努力によって、艦内全ての部署が復旧した2隻の大型空母は、漸くまともな運用が可能となる。

天城とドクトル・エツケナーな一時的に所属している混成戦隊の司令官——ゲオルグ・ゾンバルト准将は、創造主たる人類に反旗を翻したグラーフ・ツエツペリンの動向を警戒しつつ、出撃可能な両艦の艦載機に行方不明となった連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐及び同部隊戦闘隊長代理——宮藤優人大尉の搜索を命じる。

皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第1、2飛行隊が交代で、グラーフ・ツエツペリンの偵察を実施。ミーナと優人を搜索には、天城所属の艦攻

機——九七式艦上攻撃機で編成された飛行隊が駆り出されることとなった。

対ネウロイ戦における扶桑海軍攻撃機の役目は、地上型ネウロイに対する水平爆撃の他。偵察任務にも兼用されている。

ちなみに501航空団には、今のところ指示は来ていない。全てのストライカーユニットの修理が出来ず、数が足りていないことが原因だろう。

「〜♪」

天城の艦内格納庫にて。鼻唄を口ずさみながら、ストライカーユニットを整備する美女の姿があつた。

リベリオン陸軍第8航空軍から501航空団へ派遣されている航空ウィッチ——
「シャーリー」ことシャーロット・エルウィン・イーガー大尉である。

ストライカーユニットで音速突破を目指す彼女は、機体の整備・改造に余念が無い。しかし、シャーリーが整備しているのは、愛機たるP51「マスターグ」ではなかった。フラックウルフFw190D-6と、メッサーシャルフBf109G-2及びG-6。いずれもカールスラント製のストライカーユニットで、501ではそれぞれバルクホルン、ミーナ、エイラ、ハルトマンが愛用している。

ストライカーユニットの整備は、基本に基地兵站群隷下の飛行脚整備中隊に任せるもので、シャーリーも自分のユニット以外は殆んど弄ったりしない。しかし、今回は事情

が違っていた。

自国のみならず、各国の機体に精通した人材が集めらる統合戦闘航空団の整備中隊とは異なり、天城に乗艦している扶桑海軍の整備は自国のユニット——零式や紫電改等——しか扱えないのだ。

それ故、エースウィッチでありながら有能なメカニックでもあり、501基地飛行脚整備中隊と同様に他国のストライカーユニットを扱うことが出来るシャリーが、整備を引き受けているのだ。

しかし、いくら必要な技術と知識を持ち合わせていようと、部品が揃わなければ整備は難しい。

(……パーツさえ足りていれば、あたしもP-51で優人や中佐を探しに行けるのに……)

現在の天城及びドクトル・エツケナー艦内で整備が可能なのは、カールスラント製と扶桑製のユニットのみ。ブリタニア、ガリア、オラーシャ、ロマーニヤ、リベリオンの機体は補給を待たねばならない状態だった。

しかし、総司令部が一時的に指揮能力を失っている現状で、果たして部品の至給が望めるのか。機械好きのリベリオンウィッチには甚だ疑問である。

臨時司令部として機能している親衛隊西方装甲軍司令部も、勝手が違う前線の連合軍

戦力を統制するので精一杯なはず。

そもそも、親衛隊の将官が自分達の要望に何処まで答えてくれるのか。

鼻唄を歌ってお気楽そうに見えるシャーリーだが、行方の知らない戦友2人のことを思うと、心中穏やかではない。『グラマラス・シャーリー』の象徴である豊かな胸の奥に不安が滲んでいた。

一方、ネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンやその凄まじい戦闘能力について話を聞いても、それほど危機感を抱かなかつた。

元大型空母の巨大ネウロイが相手だろうと、501の仲間達と力を合わせれば大丈夫。根拠無いものの、揺るぎない自信が湧いてくる。これがブリタニアの戦いで培った信頼というものか。

「イエーガー大尉」

ふと声を掛けられ、シャーリーは背後を振り返る。天城に整備兵として乗艦している少年兵が、すぐ後ろに立っていた。

「ん？何か用か？」

整備を中断し、シャーリーは少年整備兵と向き直る。すると、少年整備兵は手に持っている海軍ラムネを差し出してきた。

「少し休憩されては？ 昨晚の疲れも残っているのでしょうか？」

「お、サンキュー♪」

笑顔でラムネを受け取るシャーリー。栓を空けるなり、勢い良くラムネを喉へ流し込んだ。

「ぶはあく、うめえ♪整備の後の炭酸は最高だなあ♪」

あつという間にラムネ瓶を空にしたシャーリーは、着ていたツナギ服を脱ぎ始める。

整備作業に没頭していたため、カーキ色のツナギ服もその下に着ていた無地の白Tシャツもオイル塗れになっていた。

しかし、少年整備兵をはじめとする天城の整備兵等は、作業服の汚れよりも、西瓜のように巨大な胸の方に興味が引かれるらしい。挙動の度にたゆんたゆんと揺れる爆乳を食い入るように凝視している。

「すみません、俺達の代わりに整備して頂くことになってしまってます……」

他国のストライカーユニットとあつては歯が立たない自分の代わりに、徹夜でカールスラント製の機体を整備してもらっている。

少年整備兵も、他の整備兵も。そのことに負い目を感じていた。

「ん？いや、気にすることないよ。機体の整備はあたしが好きでやつてることなんだし」
歯を見せて優しく微笑むシャーリー。リベリオンウィッチの笑顔があまりに眩しくて、ウブな少年整備兵の心はいともたやすく奪われる。

(か、可愛い……！)

サバサバとしたナイスバディのお姉さんが好きな少年整備兵は一瞬で恋に落ち、シャーリーの為ならなんでもする強い覚悟が決まる。

その反面。そんな憧れの人と非常に親しい関係にあり、恋人との噂——もちろん、デマだが——も流れている優人に対して、激しい嫉妬を覚えた。

「ところでさあ。ずっと気になってたんだけど？」

「はい？」

「アレって、ストライカーユニットだよな？」

少年整備兵は、シャーリーが顎で指し示した場所へ視線を走らせる。視線の先には一機のストライカーユニットが置かれていた。

零式とも紫電改とも異なるその機体には使用感が無く、長い間使われていないことが窺えた。白地に太陽と月のマークが描かれており、紛れもなく扶桑のユニットであった。

「ああ、確かに我が扶桑海軍のストライカーユニット。九九式艦上爆撃飛行脚二二型。急降下爆撃等の戦法で対地攻撃を行う機体ですよ」

「ふん？」

九九式に興味を抱いたのか。シャーリーはユニットを舐め回すように見る。

少年整備兵の言った通り。九九式は対地攻撃用のストライカーユニットである。

一時期は地上型ネウロイへの急降下攻撃にも使用されていた。しかし、急降下爆撃ならばウィッチに任せずとも、通常の爆撃機で十分であり、ただでさえ数が少ないウィッチを対地攻撃に回すことへの抵抗もあつて、九九式以降対地攻撃用ユニットが製造されることはなかった。

シャーリーの目の前にある九九式も、空母機動部隊の戦力としてな一線を引いた天城の艦内で長いこと埃を被っていた。

機体性能がいかほどのものか。シャーリーには知る由も無いが、少なくとも状態はそこまで悪くなさそうだ。

「イエーガー大尉？」

「これ使つても良いか？」

「いやいや、ソイツで空戦は無理ですよ！低速で防御力も低いんですから」

九九式で、スピードマニアのシャーリーを満足させるだけ速度を出せるわけが無かつた。

対ネウロイ戦にしても、対地攻撃ならともかく空戦など出来ようはずもない。

「嘘嘘！言つてみただけだよ！」

シャーリーはそう言うと言つて踵を返し、九九式に背を向けて整備作業中だったストライ

カーユニットの元へ戻っていった。

(別に飛ばさえすれば、いいんだけどなあ……)

現状では完全な整備を望めない愛機に目をやり、シャーリーは歯噛みする。

(優人、お前とは映画の約束があるんだからな!)

「シャーリー♪」

悔しさを胸に滲ませる爆乳リベリアンの元へ、一匹の仔猫が快活な足取りで駆け寄ってくる。

もちろん、艦内に本物の猫などいるわけがない。仔猫のように人懐っこく、自由気儘で天真爛漫なロマーニヤウイツチ——フランチェスカ・ルツキーニ少尉だ。

彼女の性格と言動、小柄で可愛い容姿。仔猫がそのまま人間の少女になったかのようだ。

「ルツキーニ?」

「ジュンジュンにご飯貰ってきたよぉ♪」

自分とシャーリー。2人分の朝食を乗せたトレイを炊事場から持って来ていたルツキーニ。

しかし、大好きなシャーリーと一緒に食べることばかり考えていた彼女は、床に転がっている工具類に気が付かなかった。

「うにやつ!？」

工具の一つを踏んでしまい、ルツキーニは足を滑らせ、前のめりに転倒する。

両手に抱えていたトレイが宙を舞い、おにぎり、豚汁、沢庵、タコさんウインナー、水の入ったコップが投げ出される。

せつかくの料理は床に散らばり、コップの中の水は爆乳リベリアンへと降り注ぐ。

「うわっ!?……………あちゃ〜、びしょ濡れだ」

コップ2杯分の水を頭から被ってしまったシャーリーは、ついてないと言った風に自分の身体に目をやる。

水を吸ったシャツが肌に張り付き、ピンク色の下着とグラマラスな肢体を浮かび上がらせていた。

(グラマラス・シャーリーの艶姿を拝めるなんて!)

(ありがてえ!)

(俺、もう死んでも良い!)

(母さん、僕は死に場所を見つけました!)

場に居合わせた少年整備兵を含む天城乗員達は、一様に鼻息を荒げ、獣のように血走った双眸でリベリアンウィッチの豊かな胸元を見入る。

グラマラス・シャーリーのシャツ透けは、厳しい軍隊生活。長期間の過酷な船旅。死

と隣合わせの最前線。

苦しい環境に置かれた扶桑海軍の将兵等を、これ以上ないほどに歓喜……いや、狂喜させたのだった。

◇ ◇ ◇

同時刻、天城艦内炊炊所——

扶桑皇国海軍では、基本的に会計や庶務などを受け持つ主計科が炊事関係を担当している。

軍艦においても、艦長以下乗員全ての胃袋を満たす為、相当数の主計科将兵が乗り込み、烹炊所と呼ばれる軍艦の調理室にて業務に勤しんでいる。

しかし、前線に赴くウィッチ・ウィザードの中には主計科に属さない身でありながら、炊事番に混じって自ら進んで炊事を担当する者も少ない。

第501統合戦闘航空団の宮藤兄妹や東部前線に配備されている第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』の下原定子少尉等がそうであり、ここ天城においては竹井醇子大尉が主計科と共に炊事を行っている。

若い乗員達の中には、そのこと知るや否や「何故扶桑海事変からの大ベテランで、大

戦初期にはリバウ三羽鳥の一角として戦果を上げたほどウィッチが、そのような役目を進んで引き受けているのか？」と疑問を抱く者も多い。

それに対して竹井は「好きでやっているだけよ」と答えることにしている。

この日も、天城の烹炊所にはいつも通り朝食の準備を進める竹井がいた。

無言のまま慣れた手つきで調理を進めている。格好は扶桑海軍第二種軍装の上に白い割烹着。火を掛けられた鍋の蓋が立てる音と、包丁で食材を刻む音が烹炊所内で静かに響き渡っている。

「失礼しま〜す♪」

ふと烹炊所の扉が開かれ、おっとりとした声音が竹井の耳朵に触れる。

入ってきたのは「リーネ」ことリネット・ビショップ軍曹だった。ブリタニア空軍610戦闘機中隊から、501部隊へ派遣されている将来有望な若手ウィッチだ。

扉を潜り、シャーリーに次いでグラマラスな肢体を烹炊所へと滑り込ませる。格好は軍務中のそれだが、上からシンプルなデザインの白エプロンを着用している。

リーネに続いて、現在501部隊臨時指揮官のカールスラント空軍大尉——ゲルトルート・バルクホルン。そして、オラーシャ陸軍ナイトウィッチ——「サーニャ」ことアレクサンドラ・V・リトヴァクの2人も姿を現した。

バルクホルンもサーニャも見慣れた士官用の制服を着ているが、その手にはエプロン

が抱えられている。

「3人共、どうしたの？朝食はまだ出来ないわよ」

竹井が少し驚いたような顔をする。烹炊所に501部隊のウィッチが顔を出すとは思っていなかったというのはもちろん、訪ねて来たのがバルクホルンとリーネの2人だったことも意外だったからだ。

501の殆んどと付き合いが浅い竹井だが、バルクホルンとリーネの組み合わせが珍しいことはなんとなく分かる。

そもそも、バルクホルンはともかくとして。リーネやサーニャは昨日の疲れでまだ寝入っていると思っていた。

「休んでなくて良いの？」

「あ、いや……船室のベッドに慣れないせいかな。早く目が覚めてしまつてな。かといって、特にやることもない……良ければ、朝食の準備を手伝わせてくれないか？」

「私もバルクホルン大尉と同じで。手伝わせてもらつてもいいですか？」

「わ、私も……」

カールスラント、ブリタニア、オラーシヤのウィッチは揃つて恥ずかしげに頬を染める。

ウィッチとしては若手に相当する2人はもちろん、大戦初期からのベテランであるバ

ルクホルンの紅潮も、生真面目なイメージとのギャップがあつて中々に可愛らしい。「助かるわ、ありがとう♪それにしても……」

竹井は頬に人差し指を当て、興味深そうにバルクホルンのエプロンを見る。

エプロンは大分使い込まれているようで、所々に染みが滲んでいた。尤も竹井が注目しているのは、エプロンのデザインの方だが……。

「む？何だ？」

「フリル付きのエプロンだなんて。お堅そうに見えて、意外と可愛いものが好きなのねえ♪」

「なっ!？」

悪戯っぽく指摘する竹井の言葉を受け、バルクホルンの顔は一瞬のうちに赤ランプの如く真っ赤に染まる。

「別に良いだろう！これは優人からの貰い物で、使い勝手が良いから愛用しているだけだ！」

ムキになつて反論するバルクホルンを見て、竹井は笑うのを堪えられず、恭しげに手で口元を隠しながら応じる。

「ハルトマン中尉から、あなたが可愛いデザインのエプロンを好んで使っているって、予め聞いていたけれど。こういうデザインだったのね♪」

「本当に可愛いエプロンですね♪」

「素敵です……」

「リーネ、サーニヤ！お前達まで一体何だ!?……とにかく、手伝わせてもらおうぞ！」

顔を赤く染めたまま、バルクホルンは烹炊所の奥へ向かう。

上官の後ろ姿を微笑まじげに見据えていたリーネとサーニヤも後に続く。

「じゃありーネさん、サーニヤさん。あなたは味噌汁の具を刻んでくれるかしら？」

「分かりました」

サーニヤはエプロンを着けながら、何処か弾んだ声で応じる。

彼女のエプロンもまた、黒猫のワンポイントマークが描かれたシンプルでありながら

キュートにデザインのものであった。

「今日は雨で少し肌寒くなるみたいだから、豚汁にするつもりなのよ♪」

「わあ！私、豚汁好きです♪芳佳や優人さんに何度か作って貰いました♪」

「竹井大尉」

豚汁に喜ぶリーネを余所に、バルクホルンが声を掛けてくる。

「これは何だ？」

と、訊ねるバルクホルンの目の前にあるのは、昨日彼女が「ソーセージではない！」と頑なに否定した扶桑産のウインナー。

だが、昨日のものとは異なり、飾り包丁が入れるというひと工夫が成された一品である。

「それはタコさんウインナー。ウインナーでタコの形を模して作ったもので、扶桑ではオーソドックスなお弁当の食材よ♪ルツキーニさんが喜ぶと思って用意したの♪」

「ホント……可愛いです……」

「ルツキーニちゃん、きつと喜びますよー！」

サーニャとリーネの御墨付きを頂いたわけだが、不幸なことにタコさんウインナーは食されることなく格納庫の床に叩きつけられてしまっている。

「……………可愛いな」

「「え？」」

「いや！何でもない！それより、私は何をすればいい？竹井大尉、早く指示をくれ！」慌てて誤魔化すバルクホルンの顔は、先程よりもさらに朱に染まっていた。

エプロンのこととい、実用重視で可愛らしさ等の外見上の特徴はあまり気に掛けない堅物大尉殿にも、漸く洒落つ気や美的感性が目覚めたのか。

もしくは軍規や規律、ウィッチとしての使命を優先した結果。元々持っていたものが目立たなくなってしまうたのかもしれない。

その後。リーネとバルクホルンは竹井から指示をもらうなり、テキパキと調理を進め

ていく。

元々料理上手な3人は、501基地では宮藤兄妹から扶桑料理についてのレクチャーを受けていた。

細かく教えたりする必要もない。天城の烹炊所は、なんとも頼もしい戦力を得たのだった。

(まあ……そうよね……)

竹井の口元から笑みが消え失せ、代わりに苦々しげな視線を注いでいた。

(物凄く疲れているはずなのに……それでも眠りが浅くなるほど、優人やミーナ中佐の安否が気掛かりということなのね……)

◇ ◇ ◇

「……………え？」

目覚めたてのぼやけた視界に映ったのは、年季の入った古めかしいデザインの天井だった。

ミーナは唾然としながら、パチパチと目蓋を何度も開閉させる。

「(ト)ト(ト)ト……」

仰向けになっていた身体をお越し、周りを見渡す。思考が覚醒し始め、段々と自分の置かれている状態を理解していく。

自分は扶桑皇国の伝統的な寝具——布団の上に寝かされていて、その布団はこれまた扶桑の伝統的な品である畳の上に敷かれていた。

六畳程度の狭い部屋——どう見ても、純和風の部屋。調度品の類いは見当たらず、少々ホコリっぽい。

枕元には認識票に護身用拳銃のPPKが置かれている。しかし、MG42Sとストライカーユニットは見当たらない。

「これは……ガウン……？」

身なりを確認し、ミーナは自分がオリブドラブの制服ではなく、見慣れない白い寝間着を着ていることに気付く。

一見すると丈の短いガウン状の寝間着だが違う。かつて扶桑ブームがガリアで巻き起こった際に、扶桑の着物が国内に持ち込まれた。それを一部の富裕層がガウンとして着ていたものから発展した“着物風ガウン”。彼女はそれを着ていた。

身につけているのは着物風ガウンのみ。薄い布がたったの一枚だけである。

軍服着用時に用いる臙脂色のズボンと同色のブラも着けていない。少々無防備な格好だ。

「私は……一体どうして?ここはまさか……扶桑?」

ミーナは首を左右に振り、その考えをすぐさま否定する。そんなことはあり得ないからだ。

自分は北海洋上でネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンと交戦していたはず。短時間で約9000キロメートルもの長距離を移動して扶桑にいるわけがない。

だが、目の前の風景は過去に雑誌か何かで目にした経験のある扶桑の和室だ。

夢なのか。しかし、夢にしてあまりにリアル。現実味が有り過ぎる。

「私、どうして?……うっ!」

布団から立ち上がると、一瞬意識が遠退くような感覚に襲われた。身体がやけに重たい。足もフラつく。

(貧血かしら?)

ミーナは一度腰を下ろし、体調と心を落ち着かせるように息を吐くと、改めて室内を見回した。

やはり和風の部屋。それも扶桑式のホテル——“旅館”の客室に酷似した一室だ。ミーナは扶桑文化に詳しいわけではないが、それくらいは分かる。

やがて心身は共に落ち着いたミーナは、あることに気付く。

「優人は何処?」

グラフ・ツエツペリンから仲間達を逃がすため、共に殿を務めた扶桑海軍ウイザーの姿が無い。

「優人？」

潜めた声で優人に呼び掛けるが、返事は何処からもない。建物内は静寂に支配されていて、優人の姿どころか人の気配が全く無かった。

再度立ち上がったミーナは、右手の隙間が開いた襖から室外に出ようとする。襖の向こうからガタンツとから物音がしたのはその時だった。

「——っ!？」

静まり返っていた屋内に突然響いた正体不明の物音。ミーナは反射的に身構える。

「誰か……いるの?」

警戒態勢となったミーナは、ガウンの帯をギュツときつく巻き付けた。

手に取ったPPKの弾倉と薬室に銃弾が装填済みなのを確認すると、足音を立てぬように気を配りながら慎重な足取りで襖まで移動する。

「何者!？」

PPKの安全装置を外し、和室から廊下に躍り出る。直後、見知った顔がミーナの眼前に現れた。優人だ。

扶桑海軍第二種軍装を脱ぎ、黒いガウン姿——ミーナと同じく着物風ガウン——と

なっている宮藤優人が驚いたように目を見開き、ミーナを見返している。

「ミーナ?……つて、うわっ!」

「えっ、優人?……きやあ!」

慌てた優人は声を上げる。勢い良く部屋から飛び出したミーナは、彼との正面衝突コースに入っていたのだ。

どうにか足を止めようとするミーナだが、その拍子に足が纏れて、前のめりに転倒。扶桑海軍ウィザードに抱き着く形で激突し、優人もまたミーナ共々背中から倒れ込んでしまう。

「いって……」

背中を思いっきり床に叩きつけてしまい、優人はあまりの傷みに苦悶する。

「ご、ごめんなさい。大丈夫?」

謝意を述べつつ身体を起こそうとするミーナだが、次の瞬間彼女は凍り付いた。

ぶつかった拍子にガウンが肌蹴てしまい、豊かな2つの乳房の片方——左側を晒していた。

しかも悪いことに。扶桑海軍ウィザードの右手が、カールスラントウィッチの左胸をバツチりと捉えていたのだ。

目を見開いたまま微動だにしないミーナ。優人も彼女と同じく彫刻のように固まっ

ていたが、自分とミーナの状況を理解すると、白く柔らかな乳袋に触れている右手ねみを動かし始めた。

感觸を確かめるように数回ほど胸を揉んだ後、優人は引き攣り気味な笑顔を浮かべ、乾いた笑い声を上げるのだった。

「お、大きいなあ……まるで戦艦の主砲みたいだ。いや、さすがはミーナだな。あは、あはははは……」

「——っ!？」

何を言いたいのかわからないが、セクハラだとは理解出来る優人の発言を受け、ミーナの顔が一瞬でネウロイのビームもかくやというほど真っ赤に染まる。

間を置かずして、使い魔である灰色狼の耳と尻尾が出現し、蒼味を帯びた魔法力の光が全身を包み込んだ。

「おい、ちよつと待——」

「いやあああああああ!」

「ぶへえ!」

501航空司令が放つ渾身の右ストレートが、扶桑海軍ウイザードの鼻っ面にめり込んだ。

優人は間の抜けた声を漏らした後、顔面に強い痛みを覚えつつ、そのまま己の意識を

手放した。

◇ ◇ ◇

同時刻、リベリオン合衆国ハワイ州――

「今、優人の声が……気のせいか？」

宮藤兄妹の父親――宮藤一郎博士は、キヨロキヨロと周りを見回し、愛する息子の姿を探してみる。

優人の姿はない。彼は今ブリタニアにいるのだから当然だ。やはり気のせいだったらしい。

遣欧艦隊司令長官――赤坂伊知郎大将の命を受け、坂本と一郎は一足早く帰国の途に就いていた。現在、2人はハワイへ移住した扶桑人が経営する旅館にて休養を取っていた。

扶桑海軍が所有する大型飛行艇――二式飛行艇に搭乗し、グレートブリテン島からリベリオン東海岸。そこから反対側の西海岸。そして現在はハワイと、連日長距離を移動してきた。

このペースならば1週間程で扶桑本国へ辿り着ける。だが、軍人である坂本や飛行艇

のパイロット達ならいざ知らず、民間人且つ病み上がり同然の一郎にあまり無理はさせられない。

なので、こちらの旅館に一泊してから改めて扶桑へ向かうこととなっている。

「おっと、もうこんな時間だ。早く大浴場に行かないと清掃時間になってしまう……」
小脇に入浴タオルと石鹸の入った風呂桶を抱えた一郎は、腕時計で時間を確認すると、和風に仕立てられた廊下を進んでいく。

大浴場の入り口に到着した一郎は、2つある浴場のうち旅館到着時に入ったのと同じ浴場へと足を運んだ。

だが、彼は知らなかった。この旅館の大浴場は、時間帯によって男湯と女湯が入れ替わることを……。

「さて、ひと風呂浴び……」

暖簾を潜り、脱衣場に入った一郎はその場に立ち尽くしてしまう。

なんと彼の目の前には服を脱ぎ終え、飾り気の無い白い下着姿になった白人美女がいたのである。

やや前屈みになり、手を後ろに回して今まさにブラジャーを外そうとしていた。膨やかな胸と、同色のズボンに包まれた丸みのある尻を、異国の中年男性に向けて至近距離でさらけ出されてしまっている。

彼女は体勢を維持したまま、目を丸くして硬直している。突然の侵入者に思考が停止しているらしい。

「あ、これは失礼……うわっ!？」

「へ? きゃあつ!？」

足早に立ち去ろうとする一郎だが、何かに躓いたらしく、前のめりに転倒してしまう。先述の通り。すぐ目の前に白人美女がいたので、彼女を巻く込む……というか押し倒す形での転倒である。さらに悪いことに……。

——むにゅん!

「ひゃあん!」

一郎の両手が事もあろうに、彼女の両乳房をしっかりと捉えてしまったのだ。突然胸を触られた相手の口から甲高い声が漏れ出る。

「……………」

「……………」

無言のまま見つめ合う2人。ただし、一郎の表情が固まったまま変化が無いのに対し、名も知らぬ白人美女の顔は段々と羞恥や怒りに満ちた紅色に染まっていく。

「え〜つと、私は宮藤一郎……扶桑人だ。その……君の胸は……重爆撃機のようなだね! 素晴らしい!」

何か言わなければと思つて口に出したのが、唐突な自己紹介と優人と同じく何を言いたいのかよく分からない一郎のセクハラの発言。

何がスゴいのかというと、一郎はこれを満面の笑みで言つてのけていた。

「……………」

「……………」

「(おんの☆◆つたれ扶桑人があああああ！」

悪態と共に美女の右ストレートが、一郎の鼻つ面に叩き込まれた。

後でわかつたことだが、彼女は後に第506統合戦闘航空団『ノーブルウィッチーズ』へ招聘されるリベリオン海兵隊の航空ウィッチ——マリアン・E・カール大尉であつた。

扶桑皇国との連絡任務を終え、ハワイにて休養中だつたそうなの。

第23話「孤立と煩惱と」

1944年9月、帝政カールスラント北海沿岸地域——

「イテアテ……」

扶桑皇国海軍ウイザード——宮藤優人大尉は、井戸で水を汲んでいた。時折苦悶の色を顔に滲ませ、痛みを口ににする。

作戦行動中に仲間達と逸れてしまい、敵の勢力下で孤立状態に陥った優は、戦友兼上官であるカールスラント空軍ウイッチ——ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐と、ネウロイ占領下にある帝政カールスラント沿岸の街——正確に言うとは、街中のある建物に身を隠していた。

街はネウロイ化したグラーフ・ツエッペリンと交戦した空域の近隣に位置し、人の手を離れたことと、過去に対ネウロイ戦の戦場になったことですっかり廃墟と化している。

此処彼処に散らばる膨大な量の瓦礫と放棄された各種兵器、銃弾や砲弾の空薬莖。

砲撃、若しくは爆撃によってできたでだろうクレーターに雨水が注がれてきたのであろう巨大な水溜まり。

軍人とも民間人ともつかない白骨死体までもが、辺りに転がっている。

水を汲んだバケツを片手に「隠れ家」へ向かう途中、優人は白骨死体と遭遇する度 hands を合わせ、名も顔も知らぬ人々の冥福を祈った。

先述の通り。廃墟なので、当然食べ物等の生きる上で必要な物資は殆んど残っていない。

しかし、不幸中の幸いと言っても言うべきか。飲める水が残った井戸と身を隠せる建物が見つかり、さらに街や街の周辺には、グラーフ・ツエツペリンは疎か他のネウロイの姿もなかった。

この地域には元々ネウロイがいなかったのか。ガリアへ上陸した西部方面統合軍第一陣を迎え撃つため移動したのかは不明だが、非常に有難いことだ。

それにしても、優人はよくよくウィッチと2人きりで取り残される機会に見舞われている。

ワイト島基地出向時にも、リーネの姉にしてファラウエイランド空軍のベテランウィッチ——ウィルマ・ヒジヨップ軍曹と、名も無き小島の飛行場にて嵐をやり過ごしていた。

相違点が存在するとすれば、前回が人類の制空下で遭難なのに対し、今回は敵の支配地域に孤立しているということ。危機感と緊迫感に大きな差がある。

さらに、ウイルマの時は下着姿までだったが、今回は退つ引きならない事情でミーナの全裸姿を拜んでしまっていること。また、彼女の生パイを直接接触ってしまったこともそうだ。

「ミーナの機嫌、直つてるといいなあ……」

隠れ家として利用させてもらっている扶桑建築物の前まで来た優人は、出掛ける前のやり取りを思い出して溜め息混じりにぼやく。

顔に再び激痛が走り、気分が少しばかり落ち込む。かと思えば、ミーナの胸を掴んだ際に知覚した得も言われぬ感触と温かみが右手に甦り、一転して幸福な気持ちになる。

さすがに501の爆乳コンビであるシャーリーとリーネには及ばないものの、実り具合はかなりのものだった。

優人自身の目算によると、ミーナの胸は坂本やバルクホルンよりも大きく、十分巨乳と形容できるサイズだった。

大きさはもちろん、乳房の色も張りにも素晴らしいものがあり、それでいてマシユマ口のような柔らかさも兼ね備えている。

「柔らかかったなあ……って、いやいや!」

ブンブンと首を激しく振り、優人は己の頭の中から邪念を追い出そうとする。今はそんな邪な考えを抱いている場合ではないのだ。

しかし、彼は扶桑海軍を代表するエースウィザードである前に健全な青少年。「考えな！考えな！」と頑なになれば成る程、邪な思考と悩ましい妄想が脳裏を駆け巡る。

就寝時に着る薄手キャミソール。海上訓練時の大胆な白色の紐ビキニ。亡き想い人から数年越しに贈られた胸元と背中が大きく開いたワインレッドのイブニングドレス。先程目にした着物風ガウンを着たミーナ。過去に目にした501司令の艶姿が次々と蘇ってくる。

凹凸がハッキリし、芸術品の如き曲線美を描く女性的なスタイル。胸の大きさだけならシャーリーやリーネの方が上だろうが、総合的なプロポーシオンでは寧ろミーナの方が上である。その美貌や歌唱力も相俟って女優としても通用しそうだ。

遂には一糸纏わぬ姿のミーナまでもが脳内に現れ、恍惚な表情で語りかけてきた。魅惑的な声音で優人を誘わ——。

「あく……んなこと考えるな！作品を通常投稿出来なくなるだろうが！このスケベ！痴漢！変態！自重しろお！」

メタな発言と共に己を激しく叱責し、汲んで冷たい井戸水着を頭から被る。

強引なやり方ではあるが、取り敢えずは変態的な思考を頭から追い出すことには成功した。第二種軍装はびしょびしょになったが……。

孤立状況下の不安やストレスか。もしくは、昨日天城にてインペリアルウィッチーズ

の司令に誘惑されたためか。以前よりも悪癖が重度化してしまっている。

いつか妹やウィッチの友人達に愛想尽かされてしまうのではないかという不安を抱きつつ、優人は水を汲み直すため井戸へ引き返した。



同時刻、北海海上・空母天城――

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属の大型空母――赤城型航空母艦“天城”と、帝政カールスラント皇室親衛隊隷下の同型艦“ドクトル・エツケナー”。

所属の異なる二隻の大型空母は、臨時の戦隊を組み大西洋付属の海を遊弋していた。

「……………んう……………」

空母天城の艦内に存在する船室の一つで、宮藤芳佳は目を覚ます。

口元に手を当て、「ふあくっ」と可愛いらしい欠伸すると、反対側のベッドで眠っている兄に語り掛けた。

「おはよう、お兄ちゃ――」

芳佳は眠たい目を擦りながら、大好きな兄がいるはずのベッドに視線を移す。途端、彼女は言葉も動きもピタリと止める。

隣にいるはずの兄——優人の姿が無く、またそれによって彼が現在行方不明であることを思い出したのだ。

「……………そつか、そうだったよね……………」

のほほんとした表情が、一転して沈痛な面持ちへと変わる。暫し顔を伏せていた芳佳だが、やがて力無き所作でベッドから起き上がり、優人の使っていたベッドに歩み寄った。

昨晚は誰も使わなかったベッド。文字通り使用感が無く、シーツも毛布も綺麗に整っている。芳佳がいつ帰って来ても良いようにと、整えていたのだ。

ジツとベッドを見据えていた芳佳は、不意にフラツと気を失うかのように倒れ込む。

「……………」

無言のままベッドに顔を擦り付け、真っ白なシーツを両手で握り締める。

シーツは前回使った後で洗濯・交換されているが、芳佳にはまだベッドに兄の温もりと匂いが残っている気がした。

「お兄ちゃん……………お願いだから帰ってきてよ……………」

目頭が熱くなり、瞳に涙が浮かぶ。溢れ出たそれは微かな熱を伴って頬を伝い、シーツへ流れ落ちて染みを作る。

以前にも、こんなことがあった。優人が海軍に志願して舞鶴へ行った後、大好きな兄

がいなくなってしまうた芳佳は日々悲しみに暮れていた。

幼い芳佳は兄のいない生活が堪えられず、毎夜のように優人の使っていた布団で眠っていた。仕事で渡欧していた父親は死——実際は生きていたのだが——を伝えられたこともあり、絶えず涙を流していた。

家族や再従姉妹である美千子の支えもあり、成長するにつれて少しずつ落ち着いていったものの、やはり優人不在の寂しさを紛らわせるには至らなかった。

それ故に数ヶ月前に優人と再会し、ブリタニアの501基地で一緒に暮らすようになったことが嬉しくて嬉しくて。芳佳は会えなかった分だけ兄と一緒に過ごした。寂しかった分だけ優人に随分と甘えた。

芳佳は優人が好きだ。大好きだ。その“好き”がどういった類いのものか、芳佳自身判然としない。しかし、家族や友人、今まで知り合った大勢の人々の中で一番なのは間違いない。

そんな兄と誰かを守るために共に戦うことを、芳佳は強く望んでいる。反面、死別という最悪の形で永遠の別れが訪れてしまうことを心底恐れてもいた。

この感情は優人がネウロイに撃墜され、一度生死の境を彷徨ったことで一層強くなった。

今この瞬間も、優人はミーナと共に敵の支配地域で孤立し、命の危機に晒されている。

何で一緒に残らなかったのだろうか。何故ウォーロックが暴走したの時のように兄妹2人で戦わなかったのだろうか。そう考えれば考えるほど、慚愧の念に駆られて胸が締め付けられる。

出来ることならすぐにでも艦を飛び出し、優人とミーナを探しに行きたい。零式の航続能力ならば、余裕を以て捜索することが出来るはずだ。

しかし、芳佳にはブリタニアでの苦い経験があり、考えるより先に行動する彼女の決意を鈍らせていた。

ブリタニアの戦い終盤で、芳佳は独断専行や命令無視を重ねていた。その結果、上官でもあった優人を負傷させてしまっている。

また、ブリタニア空軍ウィッチ隊総監——同空軍戦闘機軍団司令官や第501統合戦闘航空団の上官も兼任——でありながら反ウィッチ派の急先鋒で、戦果を上げ続ける501部隊を目の敵にしていたトレヴァー・マロニー元大将にも付け入る隙を与え、ストライクウィッチーズ解散という最悪の事態を招いてしまっていた。

胸から大量の血を流して浜辺に横たわった兄の姿と、501解散を告げた際のマロニーの声は、時間が経った今でも、恐怖と戒めの対象として芳佳の目と耳に焼き付いている。

おそらく、これからも消えることはない。一種のトラウマとして心に刻み込まれてし

まっているのだから……。

自らの勝手な行動のせいで兄と仲間にも多大な迷惑を掛けて起きながら、懲りずに同じことを繰り返すほど宮藤芳佳は愚か者ではない。

一頻り泣いた芳佳は起き上がり、涙を拭う。気持ちを切り替えるため、両手で頬をパンパンツと叩いて気合いを入れる。

「よしー。」

いつまでも泣いているわけにはいかない。扶桑に帰ったら実家の診療所を手伝いながら、医学校入学を目指して頑張るんだ。

これからは甘えるだけの妹じゃない。治癒魔法と医学を駆使して、たくさんの人を助けるんだ。ベテランウィザードである兄に釣り合うような妹になるんだ。

きつと兄もミーナ隊長と一緒に頑張っているはずだ。自分は今自分に出来ることをするべきだろう。

気を強く持ち直した芳佳は次に時計を確認する。だが直後、その表情は青ざめる。

「もう、こんな時間!?!……大変!」

疲弊した身体に鞭打って治癒魔法を使い続けたツケを支払わされたらしい。起床時刻はとつくに過ぎていた。

慌てた芳佳は、薄緑色の甚平からセーラー服に着替えると、髪に寝癖をつけたまま船

室を飛び出して行ったのだった。



ところ変わって、再び帝政カールスラント西部北海沿岸地域――

「ただいま……」

水を汲み直して来た優人は、自分の家に入るかのような気楽さで入り口の引き戸を潜り、純和風仕立ての建物の中へ身を滑り込ませる。

期待していたわけではないが、屋内からは「ただいま」に対する返事はなかった。

「こんな形でホテルを貸し切ることになるなんてな……」

かつてはロビーとして使われていたであろう空間を見渡し、優人は肩を竦める。

彼とミーナがネウロイから身を隠すために利用しているのが、このカールスラントの街並みには不釣り合いな扶桑式の建築物だった。

営業スタイルや建築等に扶桑文化が多く取り入れられており、宿泊施設としてはホテルというより旅館に近い。

当然ながら経営陣や従業員等は街の住民と共にノイエ・カールスラントへ疎開していると思われるので、建物内は人ひとりいない。優人が言った通り、貸切状態となってい

る。

多少埃っぽいものの、廃墟と化している他の建物と比べると状態がかなり良く、衣類や寝具等の備品も数多く残されていた。

人間の避難を優先したために最低限の荷物以外は全て置いていったのだろう。

“地獄に仏”とは、まさにこのことだ。せつかくなので利用させてもらっている。

ストライカーユニットや携行火器等の装備も、このロビーに置いていた。優人のS—18対物ライフルやミナーナのMG42Sは残弾こそ乏しいものの、目立った損傷は見当たらない。問題なのは寧ろインカムとストライカーユニットだろう。

2人共インカムを紛失してしまい、ストライカーユニットもミナーナのBf109G—2は健在だが、優人の紫電改は左右両方のユニットが大破してしまっている。

せつかく待ちに待った新品・新型のストライカーユニットが支給されたというのに、マッドサイエンティスト染みた父親の危険な実験に利用されるわ。戦闘中に想定外の状況が元で損傷するわ。散々な目に遭っている。

ここまできると、紫電改に乗り替えたことであつて愛機達——扶桑海軍の前主力ストライカーユニットな零式艦上戦闘脚シリーズ——から呪われている気がしてならない。

「お？」

ふと優人はフロントの前で立ち止まった。フロントデスクには写真立てが2つ置か

れており、片方には経営者夫婦らしき男女の仲睦まじいツーショット写真が収められている。

どうやら、カールスラント人の女性と結婚した扶桑人の男性がこの地に移住し、夫婦でホテルを経営していたらしい。

夫婦は歳の差婚だったようで、奥さんは見た目が旦那さんよりも大分若々しい。何より、かなりの美人だ。

もう片方の写真立てには、夫婦の他に娘を加えた家族写真が収まっていた。

角刈りで強面の頑固そうな年配の父親と、金髪碧眼の目麗しい母親。そして、母親とよく似た容姿の娘が2人の間に立ち、カメラに笑顔を振り撒いている。

当然、経営者家族の姿は見当たらない。ネウロイ侵攻時にブリタニア、若しくはバルトランドへ避難したのだろうか。

「少しの間、ホテルを利用して頂きます。礼はまたいずれ……」
フロントデスクに写真立てを戻すと、優人は深々と頭を下げる。

律儀な一面を見せた扶桑海軍ウィザードは、ミーナのいる客室へ向かって歩を進める。

（それにしても、奥さんと娘さん。親衛隊のホフマン大尉にそっくりだな……）

インペリアルウィッチーズの中で一番印象の悪いウィッチの顔を思い浮かべて、優人

は心中でそう独り言ちた。

◇ ◇ ◇

(もう、お嫁にいけないわ……)

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令——ミーナ・デイトリン
デ・ヴィルケ中佐は、一晩眠っていた客室の敷き布団に伏臥位の姿勢で身を沈めていた。
枕に突っ伏し、熱を全体に帯びた顔を純白の寝具へ強く押し付けている。

部隊指揮において常に凜々しく。そして、毅然と振る舞っている『女侯爵』は、すっかり使い物にならなくなってしまっている。

不慮の事故とはいえ、扶桑海軍ウィザードに胸を——それも服越しや下着越しではなく素手で直に揉まれたのだ。無理もない。

501で優人に乳房を触られたのは、ミーナ以外ではリーネくらいだろう。尤も、リーネの場合は意外にも立ち直りは早かったが……。

(胸を触られて……しかも服を脱がされて、裸まで見られて。そんなことクルトにだつてされたことないのに……)

昨日。ネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンとの戦闘中に気を失った彼女は、危う

く落下しかけたところを共に殿を務めていた優人に救われていた。

空中で抱き止められたミーナは彼と共に街へと降り立ったのだが、優人のストライカーユニットはグラフ・ツエツペリンの攻撃で大破してしまい、地上へと不時着したのだった。

しかも悪いことに。降りた先にあつたのが例の雨水が溜まったクレーターで、そこに飛び込んだ優人とミーナの服と身体はびしょ濡れになってしまった。

幸いにも、優人が様々な物品が残されたこのホテルを見つけてくれたので、着替えとネウロイの目から逃れる隠れ家を同時に確保出来た。

のだが、一つ問題があつた。戦闘中に気を失つたミーナが次に目を覚ましたのがこの客室であり、彼女には自力で濡れた服や下着を脱いだり、着物風ガウンに着替えた記憶がない。

彼女の意識が戻る前に誰かが着替えさせてくれたのだろうか、敵地で孤立中の現状でそれが出来るのは1人しかない。そう優人だ。

わざわざ本人に訊いて確かめるまでもない。状況証拠からして100%間違いなく、疑いようもなく彼である。

濡れたままにはしておけないと意識を失っているミーナから衣服や下着を脱がし、髪や身体から水分を綺麗に拭き取った上でガウンを着せたのだろう。

優人自身良かれと思つてやったことだが、本人の知らぬ間に全裸に剥かれた事實は、ミーナの心を羞恥の沼へと沈めてしまつてゐる。

無論、ミーナとて。件の扶桑海軍ウィザードが、自分に意識が無いのを良いことに、不埒な真似を働いたなどとは思つていない。優人は人並み以上にスケベである一方で、しつかりと自制心を働かせることの出来る人間だ。

事實、制服やシャツのボタンを外した時も。ズボンを下ろした時も。女物故扱いに手子摺つたブラを脱がせた時も。美しい髪や豊かな肢体をタオルで拭いた時も。衣類や下着類よりを屋内で干した時も。優人は理性を総動員して己を律し、際どいながらもなんとか紳士として振る舞い切ることが出来た。

まあ身体を拭いている最中、優人の手がタオル越しに尻やら太腿やら乳房やらにやたらと触れていたように見えたが、きつと気のせいだろう。扶桑海軍ウィザードに疚しいところなど何も無いのだから……。

——コンコンっ！

「ミーナ、優人だけだ。入つてもいいかな？」

「優人!? え、ええ……どうぞ!」

ふと襖越しに件の扶桑海軍ウィザードの声がした。ミーナは布団から跳ね起きると、上擦つた声で返事をする。

襖が開かれ、やや緊張した面持ちの優人が遠慮がちに入室する。

「な、何かしら？」

前述の乳揉みの件を気にしているらしい優人を配慮するつもりで微笑を浮かべるミーナだったが、彼女もあまり心に余裕が無いためか。笑顔が引き攣ってしまったている。

「これ、良かったら……」

と、優人は井戸の入ったバケツをミーナに向かって差し出す。淵には清潔なタオル掛けられていた。

「これは？」

「ほら、昨日は風呂に入れなかったからさ。代わりに身体を拭いたらどうかかって？」
後頭部を掻きながら照れくさそうに告げる優人の言葉を受け、ミーナはハツとなる。

彼女も優人も昨日の戦闘や就寝時に大量の汗を掻き、水溜まりにも落ちていた。にも関わらず、入浴の出来ない状況にあった。

ウィッチである前に花も恥じらう乙女であるミーナ。身体が匂ってしまったのでは、とを気にしているはず。

そう思い立った優人の彼なりの配慮であり、胸を触ったこと。やむを得ぬ事情で寝ている間に好き放題やってしまったことへの詫びの印だった。現状ではこれくらいのこと

としか出来ない。

一方でミーナは、優人の気遣いに感謝すると共に。今の自分は多少匂っているのではないか、という不安に駆られていた。

優人の想いとは裏腹に、彼の心遣いは裏目に出てしまっていたのだ。

「あ、ありがとう。使わせてもらうわ」

謝意を告げてバケツに手を伸ばそうとするミーナだが、不意に全身から力が抜け、前のめりに倒れてしまう。

「——っ!? ミーナ!」

「あっ……」

優人が咄嗟に身体を動かし、ミーナを抱き留める。自分を包む腕の温もりと、胸板越しに優人の心臓の鼓動を感じ、ミーナは頬を微かに紅潮させる。

「大丈夫か?」

「え、ええ……ありがとう……」

ミーナは消え入りそうな声で礼を述べる。一定のリズム刻む心臓の動きを超至近距離で感じ、ミーナの心臓もまた早鐘を打ち出し始める。

「……………ごめんな」

「えっ?」

唐突な優人の謝罪を受け、ミーナは反射的に顔を上げる。今度は眼前に扶桑海軍ウィザードの顔が現れた。それも互いの息がかり、鼻の先が触れ合うほど近くに……。

同年代の異性との密着状態を先程よりも強く意識したことで、ミーナの心臓が暴れ出さんばかりに高鳴る。

「ミーナが、俺が思っていたよりもずっと疲れていたこと。気付けなくて……」

そう言つて、優人は抱き締める腕に力を込めた。グラーフ・ツエツペリンとの戦闘でミーナの動きがやたらと鈍かったのは、大戦初期から本日に至るまでの間に蓄積した疲労が原因だった。目立った怪我が無いにも関わらず、一晚中死んだように眠っていたことこそ、その証左であろう。

しかも、このところの慣れない空母生活。波に揺れる艦内の船室のベッドで眠つても十分な休養にはならなかったらしい。

ミーナ自身もまた、多忙さのあまりに感けて気付くことができなかつた。或いは、己の身体を気に掛ける余裕もなかつたのだろう。

優人はデスクワーク等で度々ミーナの傍らにいたにも関わらず、気付くことが出来なかつた自分に腹が立っていた。

「優人……」

「大丈夫。ミーナのごことは俺がちゃんと守るから、敵地で孤立していても心配要らない

から。今は、今だけはゆっくり休んでくれ……」

優しく語り掛けてくる優人の真摯な瞳に見つめられ、ミーナは胸の奥がむず痒くなるのを知覚する。

かつての想い人であるクルトや秘かに心の支えとしていた坂本美緒に対して抱いた感情によって引き起こされたものだった。

「……………優人」

「ん？」

「今の私、お風呂に入っていないの。だから、その……………変に匂ったりして…………？」

「しないよ。いつも通りの良い香りさ」

「……………そう……………」

広義的には立派なセクハラ発言である優人の言葉ではあるが、ミーナは何処かホツとしていた。そして、再び彼の胸へ顔を埋め、ちよつとしたお願いをする。

「少し眠りたいわ。しばらくこうしてくれるかしら？」

「ご命令とあらば」

「そんなんじゃないわよ。もう……………」

ミーナは不満を漏らしながら軽く膨れる。疲労のせい或少し子どもっぽくなっている。

やがて目を瞑り、寢息を立て始める。扶桑海軍ウィザードの胸に抱かれたミーナは深い眠りに就いた。

その表情はとても柔らかく、安心しきっているように思えた。心を許した相手にしか見せない無防備な寝顔と言えよう。

流石の優人も、この時ばかりはミーナに対して邪な感情を抱かず、まるで恋人を守るかのように静かな一時を過ごすのだった。



夕刻、北海洋上――

天城の同型航空母艦で、カールスラント皇室親衛隊の指揮下にある大型空母――ドクトル・エツケナー。その艦内にあるインペリアルウィッチーズ専用の食堂では、自由ガリア空軍第602飛行隊から第501統合戦闘航空団へ派遣されている航空ウィッチ――ペリーヌ・クロステルマン中尉が、ホストであるインペリアルウィッチーズ司令――悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐と8人掛けのテーブルを挟んで向かい合っている。

同じ軍艦内の食堂でも、天城のそれとは趣がかなり異なっている。軍艦内に設けた一

室というよりは、まるで一級の調度品が揃えられた貴族邸の一角のようだった。

テーブルは本物のオーク製。ナイフやフォーク、他の食器類も全て一流ブランドで統一されている。

どうやらこの食堂も、政治色の強い皇室親衛隊やインペリアルウィッチーズにとって重要な備品の一つらしい。

すっかり教育された給仕係や埃一つ見当たらない高級絨毯からは、艦長及び幹部クルーの目配りの良さが窺えた。

「クロステルマン家。ガリア共和国パ・ド・カレーの領主にして、代々ウィッチを輩出してきた名家」

親衛隊大佐が噛み締めるように独り言ちる。向かいの席に悠然と腰掛ける悠貴の所作は、礼節を身を守る手段だと理解し、言葉と場の雰囲気、他者を意のままに操る武器と心得ている女のものであった。

ペリーヌとって悠貴という名のウィッチは、初対面時から得体の知れなかった。

大人びた雰囲気。柔和な笑顔。それらは501司令のミーナも同様に持ち合わせているものだが、悠貴のそれは何処か影が覗き、己の本心を悟られまいとする人間が身に付ける装いに思えてならない。

その場合は、連日関わりを持つうちに化けの皮が1枚、2枚と剥がれ落ち、少しずつ

黒い本心を晒すようなものだが、悠貴の場合はほぼ鉄壁というほど隙がなく、艶やかな微笑で着飾った仮面の下を探らせようとしないのだ。

「あなたとは、是非とも御話がしたいと思っていました。パ・ド・カレーの次期領主殿、御時間頂き感謝致しますわ」

そう語り掛ける悠貴の言葉は、やはり本心とも上辺とも取れるものであった。

彼女の本音は全く分からない。だが少なくとも、親衛隊大佐とガリア空軍中尉の階級差を持ち出すことはなく、ガリア貴族の令嬢であるペリーヌに表面上の敬意を払っている。

しかしながら、その一方で彼女の洗練された礼儀作法は相手にも同等の礼節を要求していた。

ペリーヌは膝に置いた両拳を握り締め、無言のまま強気な感情を宿した瞳を親衛隊大佐へ向けている。身体に力を込めていないと、悠貴のペースに吞まれてしまいそうな危機感と恐怖心を胸に抱いているからだ。

パ・ド・カレー侯爵家の後継ぎと、帝政カールスラント宰相の息女が向かい合って会食する光景は何も知らぬ者の目には上流階級の華やかな一幕に映ることだろう。

だが、実際は豪華に彩られた空間で顔を突き合わせて腹の探り合いしているに過ぎないのだ。

貴族にしろ。政治家にしろ。軍高官にしろ。お茶や会食等は見た目ほど美しいものでもなければ、心休まるものでもない。

この会食も、ペリーヌにとっては親衛隊主導の尋問に等しいものでしかなかった。

「どうぞ、お召し上がりください」

給仕が配膳を終えたところで、悠貴がスープを勧めてきた。ペリーヌはそれに応じることはなく、親衛隊大佐に向けて真つ直ぐ目を据え続ける。

「侯爵家の令嬢という由緒正しく生まれのあなたに軍の食事は堪えたことでしょう」

「それはあなたも同じではございませんの？」

あからさまな敵愾心を滲ませた発言。赤ワインをグラスに注いでいた給仕の動きがピタリと止まり、悠貴の護衛らしき数名の親衛隊員も鋭い視線をペリーヌの身体に突き刺す。

しかし、当のインペリアルウィッチーズ司令は顔色一つ変えない。ただ艶然と微笑んでいる。

「お怒りのようですね。グレーテルの件でしょうか？」

と、訊ねながら悠貴を腕を組む。親衛隊の黒い制服でも隠しきれない爆乳が交差した両腕に乗る。

「彼女には私の方からキツク言っておきました。今頃は腫れた頬を氷で冷やしているこ

とでしよう」

「結構なことですよ。それで？」

「何でしよう？」

「私は惚けられるのも、回りくどいことも好きではませぬわ。要件は別にあるのでしよう？ 勿体振らずに話して頂けませんこと？」

ペリーヌに促され、悠貴は給仕係や親衛隊員に言外で合図をする。

彼等はそそくさと退室し、贅沢に飾り付けられた空間には宰相の娘と侯爵家の跡取りのみが残った。

「私が今日ここで御話したかったこと。それは……」

悠貴はワイングラスを手に取り、血にも似た液体を中で転がしながら言葉を続ける。

「ネウロイから解放されたこれからのガリアについてですよ。ペリーヌ・クロステルマン」

第24話「湧き上がる怒り、秘められた殺意」

1944年9月某夜、北海洋上・空母天城――

帝政カールスラント皇室親衛隊隷下の空母「ドクトル・エツケナー」と二隻で臨時の空母戦隊を組み、北海洋上を遊弋する扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦――赤城型航空母艦2番艦「天城」。

その艦内にある会議室では、ネウロックに取り込まれたグラーフ・ツエツペリンに関する対策会議が行われていた。

会議出席者は、同臨時戦隊の作戦指揮官――ゲオルグ・ゾンバルト親衛隊准将と彼の幕僚。及びインペリアルウィッチーズ司令――悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐の代理として出席しているグレーテル・ホフマン親衛隊大尉。

天城からは、艦長以下艦内各部署の責任者達と第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』へ赴任予定の竹井醇子大尉。

第501統合戦闘航空団からは、司令不在により臨時指揮官を務めているゲルトルト・バルクホルン大尉と、階級の関係で次席指揮官になつてしまったシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉が顔を出している。

「本国北西部エルベ川河口付近、ここに比較的小規模なネウロイの巢が存在します。ネウロック並びにグラーフ・ツエツペリンがこの巢へ逃げ込んだと、インペリアルウィッチーズ第1飛行隊から報告が上がっております」

ゾンバルトは一同の正面に立ち、偵察に出ていたホフマン等インペリアルウィッチーズ第1飛行隊の報告を元に現状を解説していた。

ボードに貼られた欧州西側の地図を指示棒で示し、出席者達の反応を窺う。

天城艦長の青山忠大佐以外の乗員達は懐疑と敵意に溢れた視線を注ぎ、竹井はボードの地図をジッと見据えている。

501からの出席者であるバルクホルンは鹿爪らしい表情を浮かべ、己の胸の前で隣の席に座っているシャーリーは頭の後ろで、それぞれ腕を組む。

どんな時でも生真面目な堅物大尉に対し、自由を心から愛するリベリオンウィッチは何処か退屈そうだ。

「たった二隻の空母でネウロイへ攻め込めというのか!? 無謀もいいところだ!」

と、天城乗員の中では古参の部類に入る機関長が苛立だしげに声を張り上げる。

機関長が口火を切ったのを機に、艦の主要幹部等も上下関係を無視し、次々と異を唱え出した。

「ウィッチの数多いからと高を括っているのか!」

「501は指揮官と戦闘隊長が行方不明で、ストライカーユニットの半数が稼働状態にないんだ！」

「そもそも巢への攻略は艦隊規模の戦力で実施されるべき作戦だ！」

「あんたら親衛隊は、そのことを理解しているのか!？」

彼等の言い分は尤もだ。ネウロイの巢を攻略するためには、大勢のウィッチ・ウィザードを含めた戦略規模の大部隊の投入が定石とされている。

天城とドクトル・エツケナーを合わせた艦載航空戦力が、今すぐ出撃可能ただけで19名——竹井、501ウィッチ5名、親衛隊13名——であり、全てストライカーユニットが稼働状態にあれば、さらに4人が戦闘可能となり、総勢23名と航空ウィッチ部隊としては非常に充実したものとなっていた。

しかし、ネウロイの巢へ攻撃を仕掛けるにはまだ足りない。空中要塞たるネウロイの巢を攻略するためには、空陸のウィッチ部隊に限らず、あらゆる兵科の兵力、あらゆる艦種の艦艇を多数編入した戦略規模の戦力を揃える必要がある。

機関長達が言った通り、こちら戦力は空母が二隻。航空ウィッチの数こそ規定（大型空母の場合は4〜8名乗艦させる）より多いものの、他艦種の艦艇は一隻も随伴していない。

空母という艦種は、艦上ウィッチや艦上戦闘機等の艦載兵力の恩恵で、戦艦や重・軽

巡洋艦よりも遙か遠方の敵を叩くことが出来る。それ故に圧倒的な攻撃力と攻撃範囲を誇っている。

しかし、その反面。防御力は重巡以下であり、高い火力を有する中型以上のネウロイ相手の場合、一発の被弾が甚大な損害に繋がりがかねない。

飛行ネウロイとの防空戦闘においては、護衛艦艇の対空射撃が必要不可欠。空母にとって他艦種との連携は死命を制する問題だ。

空母のみで編成された部隊では、如何にウィッチを揃えていようと航空部隊が突破されてしまえば一巻の終わり。

守ってくれる駆逐艦ないし駆逐隊がいなければ、自力で飛行ネウロイを撃退することも、ウィッチが戻ってくるまでの時間を稼ぐことも出来ない。

母艦を沈められてしまったら、ウィッチやその他の航空機隊も帰る場所を失う。

そして、現在の501は司令と戦闘隊長代理を一遍に行方不明となり、隊の士気にも少なからず影響が出ていた。

インペリアルウィッチーズや天城艦攻機隊の懸命な搜索でも見つからなかった。隊の支えである2人の安否が不明である以上、今後の作戦行動に多少の不安が残る。

「何も巢を破壊しろ言っているのではない！敵の手に渡ったグラーフ・ツェッペリンを炙り出すこと出来れば良いのです！それならば、一個戦隊程度も十分対処可能である

「！」

「どうやって!? 艦の単装砲を巢に撃ち込んだとて、グラーフ・ツエツペリンが都合良く出てくると思っているのか! 巢の中に潜んでいる他のネウロイまで呼び寄せかねない!」

「どうしても実施するなら、西部方面総司令部に援ぐ——」

航海長に続いて異議を唱えようとした砲術長が、途中まで言い掛けて口を噤んだ。

彼の言う西部方面統合軍総司令部は、主立った将官等が正体不明の武装集団によつて拘束されてしまい、指揮系統は殆んど機能していない。

その総司令部に代わり、帝政カールスラント皇室親衛隊西方装甲軍司令部が臨時の統合軍司令部となり、西部方面統合軍全軍の指揮を執っている。

親衛隊の人間は殆んどがこの事実を知っている。しかし、正規軍は兵達の動揺や混乱、士気の低下を避けるために竹井やバルクホルン、シャーリー等のウィッチ数名や天城の主要幹部のみにしか知らされていない。

「ご存知の通り、西部方面総司令部の命令系統は現在機能していない。そして、これは臨時総司令部たる我が親衛隊の西方装甲軍司令部より下された作戦命令である」

ゾンバルトは扶桑海軍将校達の怒りを滲ませた反論を風と受け流し、話を続ける。

「あなたがとて。ネウロックやグラーフ・ツエツペリンの恐ろしさを身に染みて理解しているはず。このままヤツを野放しにすれば、解放したばかりのガリアが再び奴らの手

に墮ちかねない！すぐにでも叩くべきなのです！」

「御言葉だが、准将。あなた方の上官は我々に討ち死にを要求しているようにしか思えない！」

「勝算はあるんですか!? 具体的な作戦は!?!」

「艦長と副長は承服しているのですか?」

機関長、航海長、砲術長、そして艦攻機隊指揮官が憤然と声を張り上げる。同時に、主要幹部4名の視線が一齐に天城の艦長と副長の兩名へ注がれた。

一昨日の晩——悠貴と2人きりで一夜を過ごし——から心がすっかり何処かへ行ってしまったっている青山艦長に声を掛けることも、自分達に詰問する部下の誰とも目を合わせられず、天城副長の田代中佐は軍帽を深く被って目元を覆う。

既に一線を引いた航空母艦が、僅か二隻でネウロイの巢へ攻勢を仕掛ける。こんな無茶な命令は、長い海軍生活の中でも聞いたことが無い。

扶桑海事変終盤に実施された挺身作戦においても、小型ネウロイの大群を率いる巨大なマザーネウロイを撃破するために、旗艦長門以下皇国海軍第一艦隊のほぼ全艦艇と、戦闘可能な陸海軍の航空歩兵全てを動員していた。

巢を攻撃するのなら、欧州で作戦行動中の遣欧艦隊麾下の全艦艇とウィッチに召集がかかって然るべきであろう。

いや、501航空団とインペリアルウィッチーズを大いに梃子摺らせたネウロツク及びグラーフ・ツエツペリンの存分も考慮するなら、現時点で西欧に派遣されている艦隊だけでは、少々戦力不足かもしれない。

欲を言うなら、太平洋方面統合軍総司令部——最高司令官はクリフオード・ウインストン・ニミッツ元帥——の指揮下に入っている扶桑海軍第一機動艦隊——第二、第三艦隊及び各国艦艇で編成された南遣艦隊の3個艦隊で構成——を呼び寄せることができればベストだろうが、太平洋方面からではあまりに距離がありすぎる。

頼りになるのは、ブリタニア海軍の本国艦隊とリベリオン海軍の大西洋艦隊だろうか。

各国航空部隊への支援要請も念頭に入れておく必要があるが、臨時総司令部の責任者である親衛隊西方装甲軍司令官——ヨハネス・デイトリヒ親衛隊上級大將は士官の専門教育を受けていない。

そんな人間にネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンの脅威と、増援の必要性を理解出来るかどうか。

「我々としても作戦を成功させるため、あなた方の原隊やリベリオン、ブリタニアの航空ウィッチ隊に参援軍を要請しているのです。しかし、グラーフ・ツエツペリンの暴走と時同じくして、ガリア方面でもネウロイの動きが再度活発化しています。現状ではこれ

が手一杯であること理解頂きたい」

色めき立つ会議室の情景を不愉快そうに眺めていたゾンバルトに代わって、彼の幕僚が説明を出席者達に告げる。

良かれと思つてやったことだが、その行為が却つて火に油を注いでしまう。

「あんたには訊いていない!」

「グラフ・ツエツペリンがネウロイになつた原因は、あんたら親衛隊が作つたんだろが!」

「そうだ! あんたらがいい加減な仕事をしてネウロックを仕留め損ねたならだ!」

「そもそも、何であんたらは我々にグラフ・ツエツペリンのことを黙つていたんだ!」

天城の主要幹部達が此処とばかりに捲し立てる。インペリアルウィッチーズを支援する任務を帯び、グラフ・ツエツペリンは駐留先であるバルトランドの港から北海へ派遣されていた。

件の大型空母が北海を航行していたこと。インペリアルウィッチーズを支援していたこと。それらを事前に知らされていたのは親衛隊の関係者のみ。501や扶桑海軍側には、何の連絡も報告もなかった。

それはグラフ・ツエツペリンの作戦行動についても同様で、子細を訊き出そうとしても親衛隊側は「インペリアルウィッチーズの支援任務」としか応えず、具体的且つ納

得のいく回答は得られていない。

戸惑う素振りを見せる親衛隊幕僚を尻目に、誰かが床を強く蹴って席から立ち上がる。バルクホルンだ。

室内を賑わせていた喧騒が止み、一転して重苦しい沈黙に支配される。

「……………」

「バルクホルン?」

「……………すぐに戻る」

心配そうな面持ちで自分を見上げるシャーリーに一言だけ告げると、会議室から辞去して行った。

世界的エースウィッチであると同時に規律と軍規にうるさく、堅物なほど生真面目な性格で有名なバルクホルンが、理由も述べずに会議を中座する。

シャーリーや親衛隊はもちろん、バルクホルンと知り合って日が浅い竹井等扶桑海軍の面々も、堅物大尉の取った想定外の行動にただただ面食らっていた。

静まり返った会議室で、次に行動を起こしたのはホフマンだった。彼女は無言で立ち上がると、バルクホルンの後を追うように部屋を去っていく。

◇
◇
◇

会議室を出てしばらく歩いたバルクホルンは、ふと足を止める。プルプルと全身を小刻みに震わせた後、ギュツと握り締めた拳を通路の壁に叩きつけた。

「くそっ！」

堅物大尉が腹の底から吐き出した怒号は、長い通路を突き抜けて全体へ広がり、天城の船体を震わせんばかりの衝撃音となつて響き渡る。

拳を打ち込んだ鉄製の壁は、魔法力を一切使用していないにも関わらず、大きく凹んでいた。この変形具合は彼女の憤懣遣る方ない心情を現している。最早我慢の限界だった。

連中——インペリアルウィッチーズを中心とした皇室親衛隊が天城へ乗り込んで来から、バルクホルン達501部隊と竹井を含む扶桑海軍の将兵等は、腹に一物を抱えている政治被れ共の都合で散々振り回されていた。

指揮系統の異なる自分達501航空団と、扶桑海軍遣欧艦隊所属の空母を、当然のことのように顎で使う。

これだけでも業腹ものだが、さらには自分達の半端な仕事の後始末まで要求してきたのだ。

グラーフ・ツエツペリンの件はインペリアルウィッチーズの不手際が招いたことだと

いうのに、親衛隊連中は自分達の非を認める素振りを全く見せない。なんと厚顔無恥なことか。

ネウロツクやネウロツクと融合したグラーフ・ツエツペリンがどれほど脅威か。バルクホルンとて、それは理解している。だが、現状の戦力で巢への攻撃を実施するのは無謀という他ない。

しかし、親衛隊の上級大将殿が、その低能ぶり故に作戦実施を許可してしまうであろうことは容易に想像出来た。

軍人である以上、命令は絶対。だが、今回の無茶苦茶かな作戦には、規律の鬼であるバルクホルンも流石に反感を覚えている。

例え発令元が親衛隊ではなく国防軍であっても、彼女は同じく難色を示したことだろう。

「随分と荒れているな」

嘲笑を滲ませた声音を背中で受け、バルクホルンはハツとなつて背後を振り返る。

親衛隊員の中で一番顔を合わせたくない人物——インペリアルウィッチーズのグレートル・ホフマン大尉が、すぐ後ろに立っていた。

「……………何だ？」

醜態を見られてしまった気恥ずかしさに駆られながらも、バルクホルンはどうか声

を絞り出す。

羞恥心で頬が微かに紅潮しつつも、堅物大尉の双眸には鋭い光が灯っており、射入るような視線がホフマンへと注がれている。

正面から向き合ったことで、どういうわけかホフマンの左頬が赤く腫れ上がっていることに気が付いたが、バルクホルンは然して気に留めなかった。

「アインツベルン大佐の代理が会議を抜け出して、こんなところで油を売っているのか？」

「それはお互い様というものだろうか？自分を柵に上げるなんて感心しないな」

ホフマンの反論に、バルクホルンはグツと言葉を詰まらせる。

元々口喧嘩に弱いこともあって何も言い返せないが、視線は鋭さを失うことはなく、親衛隊大尉を見据えている。それが今のバルクホルンに出来るせめてもの抵抗なのだ。

「そんな恐い顔をするな。私達は同じ帝政カールスラントの……祖国奪回を志す同胞だろっ？」

「どの口がっ——」

「私は同胞の好みで忠告しに来たんだよ。あんたには我が物顔でカールスラント本国に居座っているネウロイ共よりも、優先すべき敵がいることをな……」

「何をっ？」

「あんたから家族と身近や親族の殆んどを国ごと奪い、妹さんを傷付けた憎き仇。実は連中の同胞が、数年前から『ずっとあんたのすぐ傍にいた』んだよ……」

「なん、だと……」

何かを仄めかすようなホフマンの言葉を受け、バルクホルンの目が見開く。

目の前の親衛隊ウィッチは一体何を言っているんだ。自分と妹から愛する家族の命を奪い、祖国を蹂躪した仇が——ネウロイの同胞がすぐ身近にいるなどと……。有り得るはずがない。

こんなバカげた話に耳を貸すな。信用ならない政治被れの戯言だ。自らに強く言い聞かせながらも、バルクホルンは自然とホフマンの声に耳を傾ける。

「それはどういう意味だ！人間に化けたネウロイがこちら側に潜入しているとでもいうのか!？」

「惜しいな。だが、いい線だ」

「おい、貴様！質問に答えろ！」

ホフマンは敢えて曖昧な回答をして、堅物大尉の苛立ちを誘う。気色ばむバルクホルンの様を楽しんでいるようだ。

「残念だが、私の立場で言えるのはここまで。詳しく知りたいなら自力で調査することだ」

親衛隊大尉は堅物大尉向かつて微笑んだ。しかし、その口元には侮蔑の色を浮かんで
いる。次にホフマンは踵を返し、バルクホルンに背中を向ける。

「会議へ戻ろう。哨戒部隊から新たな報告が入ったようだ」

そう告げて、ホフマンは悠然と去っていく。結局バルクホルンは何を訊き出すことも
出来ぬまま、いいように弄ばれてしまっていた。

遠ざかる親衛隊大尉の後ろ姿に目を据え、バルクホルンは苛立ちをぶつけるように再
度通路の壁へ拳を叩きつける。

鈍い打撃音と、好ましくないウィツチの声が混成して残り、しばらくの間消えること
はなかった。



十数分前、北海洋上――

日没の少し前から、北海の天気は崩れ始めていた。初めのうちは雨粒がポツポツと落
ちる程度だったが、陽が沈んで暫くすると本格的な降りとなった。

時間が経つする連れて雨足はますます強くなる。回復の兆しを見せない雨曇りの中
を4つの人影――ストライカーユニットを装備した4人のウィツチが飛行している。

透き通るような色白の肌を持つ北欧系の少女と、遙か東方の生まれである扶桑系の少女が2名ずつ。人種ごとにロットテを組み、2個のロットテで構成する航空ウィッチ小隊として夜間飛行に出ている。

「サーニヤ、寒くないか？」

北欧ロットテの2番機を担当するスオムスイッチ——エイラ・イルマタル・ユージェイライネン少尉が、長機であるオラーシヤウィッチ——アレクサンドラ・ウラジミール・ウナ・リトヴァク。通称“サーニヤ”を氣遣う。

9月とはいえ、夜間は昼間に比べて気温が低い。しかも、突然の雨が気温の急激な低下を招いているのだ。

「大丈夫よ、エイラ」

と、サーニヤは微笑んで見せる。陰鬱な天候の中だけあって、その笑顔は眩しい。

夜間哨戒を主任務とするナイトウィッチの例に漏れず、サーニヤはほぼ完全な夜型である。昼間は何処か眠たげで目蓋を持ち上げるだけでもひと苦労だが、今は澄んだ翡翠色の瞳がパツチリと冴さえており、とても凛々しい表情となっている。

「うう……エイラさん、タロットカードの占いつて天気予報には使えないんですかあ？」

情けない声でエイラに訊ねたのは、扶桑海軍ウィッチの宮藤芳佳軍曹だった。

魔法力を使用しているため、使い魔である豆柴の耳と尻尾が発現しているが、そのどちらも雨水でぐっしりと濡れ、元氣無さげに垂れ下がっている。

「無理ダナ……っっていうか、雨が降っつていようがいまいが、夜間飛行の予定は変わらないダロ？」

そう応じながらも、エイラは制服やズボン。そして、下着に染み込んだ雨水がジワジワと体温を奪い、尚且つ水を含んだ衣類が全身に張りつく感触に不快感を覚えていた。激しい雨に4人が4人共ズブ濡れ。水を吸ったシャツやセーラー服越しにインナーが透けて見えてしまっていた。

その気になれば、魔法シールドを雨具代わりにすることも可能だが、雨天の中でさらに視界が悪くなる他。魔法力を温存する等の理由から、シールドの使用は必要最低限に留めている。

「雲の上を飛ばば濡れないんだけどナア〜」

低く垂れ込める雨雲を恨めしそうに見上げ、エイラはぼやいた。

通常、夜間哨戒においては雲の上を飛行するものだ。だが、今回は2名の行方不明者——優人とミーナの捜索もかねているため、比較的低空を飛行している。

「お兄ちゃんとミーナ隊長。何処にいるんだろ……っつて、あわわ!!」

キョロキョロと地表を見回していた芳佳だが、下にばかり目がいつていたせいで他へ

の注意が疎かになっていた。

顔を真下から前方へ向けた瞬間、芳佳の視界にブラウシユテルマー——生物にとつて有毒な瘴気を撒き散らす莢状のネウロイの子機——が現れ、危うく衝突しかける。

どうにか避けたものの、慌てて回避したためにバランスを崩してしまふ。

アワアワと狼狽える芳佳の身体を、ロツテを組んでいた長身のウイツチが支え、どうにか危機を乗り切る。

「ふえ〜、助かったなあ……ありがとうございます！」

「フフ、どういたしまして♪」

屈託の無い笑顔で礼を述べる芳佳に対し、長身のウイツチ——インペリアルウイツチーズ司令の悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐は艶然と微笑み返す。

「芳佳ちゃん、大丈夫？」

「オマエナア、素人じゃないんだからそんなに慌てるナヨ」

異変に気付き、サーニヤとエイラが芳佳の元へ身を寄せてきた。サーニヤが芳佳の身を案じる一方で、エイラは素人同然の狼狽えぶりに呆れたような顔をしていた。

エイラの指摘を受け、ぐうの音も出ない芳佳は「うっ！」と短く呻き声を上げる。

気が付けば、一同はグラーフ・ツエッペリンと交戦した地域へ到達していた。

ここで悠貴が、二手に別れての搜索を提案。サーニヤとエイラ。悠貴と芳佳のペア

で、それぞれ別の地域を捜索することとなった。

本来なら、悠貴は航空団司令としてインペリアルウィッチーズの指揮を執らねばならないはずだが、どういうわけか芳佳達の夜間飛行に加わっていた。

元々この夜間飛行は、サーニヤが彼女なりに優人を心配する芳佳を気遣って実施したもの。

まさか天城発艦直前に悠貴が飛び入り参加するとは思わず、サーニヤもエイラも目を丸くしていた。

「宮藤軍曹、何か見えた？」

「いえ、何も……」

悠貴の問いに、芳佳は首を振る。彼女達はナイトウィッチと違い、魔導針も広域探査も夜間視も使えない。

目視で地道に探しているわけだが、ただでさえ雨で視界が悪い夜に、こんなやり方で見つかるはずがなかった。

インペリアルウィッチーズの司令ともあるう者が、そんなことに気付かないわけがない。彼女には、個人的な目的があったのだ。

「あ、あの……」

無言で捜索を続けていた2人だが、暫くして芳佳が悠貴に声を掛けた。

「何かしら?」

「武器、それだけで大丈夫なんですか?」

と、芳佳は悠貴が左手に携えている白木拵えの扶桑刀を指差す。

芳佳が九九式二号二型改13mm機関銃。サーニヤがフリーガーハマー。エイラがMG42Sなのに対して、悠貴の武器は扶桑刀が一振のみ。機関銃どころか、拳銃すら持ち合わせていない。

同じく扶桑刀を使う坂本も、愛刀と3mm機関銃の両方を装備した上で戦闘に臨んでいた。そのことを鑑みると、刀一本では心許ない気もする。

「あら、心配してくれるのかしら?」

形が良く、艶のある唇で曲線を描いた悠貴は、並走していた芳佳の直上へ移動すると、扶桑海軍ウィッチを背後から抱き締めた。

「ふえっ!」

悠貴に抱き締められた芳佳の口から、可愛らしいような間の抜けたような声が漏れ出る。

「あ、あの……悠貴さん?」

突然抱き締められた芳佳は、顔を真っ赤にしながら必死に言葉を紡ごうとする。しかし、上手く形に出来ない。

背も胸も慎ましい良い子と異なり、悠貴は全体に大人びた肢体の持ち主である。服越しながらも身体の起伏や柔らかさ等の特徴は十分に伝わり、背中に押し付けられた爆乳は芳佳の羞恥と緊急、興奮を煽ってやまない。

「あなた、優しい子ね。気に入ったわ」

10代女子のものとは思えない甘ったるい声で囁く。悠貴の吐息によって耳を擦られ、芳佳は小刻みに震える。

不快感はない。寧ろ、兄や両親と一緒に過ごしている時のような安心感に類似するものがあつた。

「お兄ちゃんを見つけたら、3人で何処かへ行きましょうか？」

「何処かつて……何処ですか？」

「うくん、そうねえ……」

悩み素振りを見せる悠貴だったが、芳佳が答えを聞くことはなかった。

別の空域を飛行しているサーニヤからの通信が、2人のインカムに入ったからだ。

『芳佳ちゃん、アインツベルン大佐！大変です！グラフ・ツエッペリンが！』

「サーニヤちゃん！どうしたの!？」

サーニヤの切羽詰まったような声色から、ただならぬ事態であること察し、芳佳はすぐさま応答する。

故に彼女は気付けなかった。悠貴が秘かに小刀を取り出し、その鋭い切っ先を芳佳の喉元へ持っついていこうとしていたことを……。

第25話 「泣く子と酒乱には勝てない」

1944年9月某夜、北海洋上・空母天城――

扶桑皇国海軍軍曹――宮藤芳佳軍曹。オラーシヤ帝国陸軍中尉――サーニャ・V・リトヴァク。スオムス空軍少尉――エイラ・イルマタル・ユータイライネン。そして、帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』司令――悠貴・フォン・アインツベルン大佐。

各国国防軍より、連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』へ派遣されている航空ウィッチ3名と、皇室親衛隊大佐の地位にある親衛隊ウィッチの計4名は、行方不明者――501航空団司令のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐、同部隊宮藤優人扶桑海軍大尉の2名――捜索を兼ねた夜間哨戒任務に従事していた。

その最中、ネウロックとの合体により超大型ネウロイと化したグラーフ・ツエツペリン。及びその随伴子機らしき小型飛行ネウロイの大編隊と接敵。すぐさま遭遇戦となった。

夜間戦闘が専門のナイトウィッチであるサーニャは、戦闘開始と同時に天城へ状況を報告。彼女の連絡を受け、司令不在の501部隊を預かっているカールスラント空軍大

尉——ゲルトルート・バルクホルンは、即ちにウィッチーズをガンルームに召集する。

「集まったな！では、状況を説明する！」

号令から僅かな時間でガンルームに集合した501の戦友達を見渡し、バルクホルンは満足げに頷く。

彼女の傍らには、ここ数日ですっかり501メンバーと打ち解けた竹井醇子扶桑海軍大尉と、インペリアルウィッチーズ第3飛行隊隊長のアリヨーナ・クリューコフ親衛隊大尉の姿があつた。

竹井はともかく、何故微妙を通り越して険悪な関係にある親衛隊の士官がこの場にいるのか。

ある者は不思議そうに首を傾げ、ある者は大して関心を示さず、ある者は不信と敵意を湛えた瞳をアリヨーナへ向けている。

ウィッチーズから多種多様な反応を示されたアリヨーナは、ウンザリしたように深く溜め息を漏らしていた。

居心地悪そうな親衛隊ウィッチを余所に、バルクホルンは状況の説明を始めた。

「夜間哨戒中のサーニャ隊が洋上にてグラーフ・ツエツペリンを視認！ヤツに随伴する小型飛行ネウロイの編隊と交戦状態に入った！」

ネウロックと融合した強力なネウロイと化したグラーフ・ツエツペリンが、エルベ川

河口付近の巣を出て攻勢をかけてきた。

しかも、今度は子機の大編隊を引き連れていた。その事実には501隊員は揃って表情を強張らせる。

「そして、ガリア沿岸にて作戦行動中の扶桑海軍遣欧艦隊からも連絡が入ったわ。巨大且つ強大なネウロイと化したグラーフ・ツエツペリンを西欧全体の脅威と見なし、艦上ウィッチー1名を援軍に寄越してくれるそうよ」

バルクホルンの言葉を継ぐようにして、竹井が別の報告を付け加える。

親衛隊が立案した作戦では、こちらが僅か2隻の空母で巣を攻撃し、中に潜むグラーフ・ツエツペリンを誘き出すという算段だった。

作戦の無謀ぶりを鑑み、実施する前に向こうから出てきてくれたのは、幸いだったのかもしれない。

扶桑海軍遣欧艦隊からの航空ウィッチによる増援の約束も取り付けた。僅かだが、事態は好転している。

とは言うものの、西部方面統合軍からはこれ以上ウィッチの増援は見込めないだろう。

西部方面総司令部の将官達は、以前として正体不明の武装集団に拘束されたまま。親衛隊西方装甲軍の司令官・幕僚から成る臨時司令部が指揮統括を行っているが、組織間

の連絡や調整は困難を極め、またガリア方面の戦況も余談を許さない。

昨日、グラーフ・ツエツペリンが出現して以降、ガリアの隣国——ヘルギガ方面のネウロイが動きを活発化。再度ガリアを占領せんと、国境を越えて侵攻してきた大群と西部方面統合軍の地上戦力が現在交戦中である。

グレート・ブリテン島に駐留しているリベリオン陸軍麾下の第8航空軍は、既にウィッチを含める航空戦力をガリア逆上陸作戦における制空権確保と地上部隊への支援に多数投入しており、こちらに援軍を送る余裕はない。

ブリタニア空軍戦闘機軍団麾下にも多数のウィッチが所属しているが、ネウロックやグラーフ・ツエツペリンの存在を報されてからは再び起きるかも分からない本土空襲を警戒し、国外派遣に難色を示している。

カールスラント空軍第3航空艦隊も駐留しているが、数年前に実施された「バルバロッサ作戦」に合わせて多数の所属ウィッチがブリタニアから東部戦線へ移動しており、その後の防衛戦闘における戦力の消耗もあって、現行の主力は空軍夜戦師団をはじめとする地上部隊となつてしまい、近々ノイエ・カールスラント防空戦力の強化。もしくは本国奪還に投入される航空戦力増強のために解体される予定となつている。

それでなくとも、航空ウィッチは重要且つ貴重な戦力であり、扶桑海軍遣欧艦隊から1名を派遣するのが精一杯なのだ。

「援軍って、ウィッチー人だけえ？」

不満げに唇を尖らせるハルトマンに、竹井がニツコリと微笑み返して自信満々に告げる。

「御心配しないで。宮藤大尉や坂本少佐にも負けな、一騎当千の大エースだから♪」
「んで、グラーフ・ツエツペリンは一体何処へ向かっているんだ？」

と、シャーリーが疑問を口にする。巢を飛び出したということは、何か具体的な攻撃目標を定め、そちらへ向かって飛行しているということだ。

実際、ガリアの巢から定期的に射出されていた飛行ネウロイも、グレート・ブリテン島を攻略対象にしていた。

「サーニヤの報告によると、エルベ川河口より南西へ向けて飛行しているようだ」
バルクホルンの回答に、シャーリーは両の目を細めて思考する。

「エルベ川から南西って言うのがリア方面か……ちよつと待て！まさかつ！」
「ああ、そのまさかだ」

グラーフ・ツエツペリンの進行方向に何があるのか理解したシャーリーに対し、バルクホルンが首肯する。

リベリオンとカールスラント。2人のウィッチのやり取りを見聞きしたペリーヌもまた、ハツとなって気付く。

「まさか……パリ!? そ、そんな……そんな……嫌あー!」

敵の目的が何なのか。ハッキリ理解したペリーヌの表情が一瞬で青ざめ、悲痛な叫び声を上げる。

ネウロイ——いや、グラーフ・ツエツペリンを取り込んだネウロツクは、強化された己の力を駆使し、一気に戦線を押し返すつもりなのだ。

今この時にも、グラーフ・ツエツペリンに率いられた飛行ネウロイの大編隊が、西部方面統合軍の防衛体制が十分に整っていないガリアを目指して進行している。解放されたばかりの祖国が再びネウロイに蹂躪されようとしている。

そう思うと居ても立ってもいられなくなったペリーヌは、一目散に駆け出した。

「そんなこと……させませんわ!」

「ちよつと、待ちなよ!」

焦燥感と恐怖心に苛まれたペリーヌは、勢いに任せてガンルームを飛び出そうとする。

素早く動いたシャーリーが彼女を捕まえ、羽交い締めにして動きを封じる。

「1人でどうする気さ!?!」

「放してっ! ガリアが! ガリアがつ! 私の国がつ!」

完全に冷静さを失い、感情のままに動かんとするペリーヌの様子を見て、リーネとハル

トマンも止めに入った。

「ペリーヌさん、落ち着いて！」

「そうだよ。焦ったって、ストライカーが無いんじゃないじゃん」

501部隊は、連日の激戦からくる損耗により部品が供給が追いつかないという厳しい現状にあった。

本作戦で天城に艦載されているストライカーユニットで、稼働状態にあるのは天城と親衛隊からそれぞれパーツの供給が可能な扶桑製とカールスラント製。そして、現在ネウロイと交戦中のサーニヤが使用してる“MiG60”のみである。

サーニヤの愛機はオラーシャ製だが、他のストライカーユニットに比べて損傷の度合いが低く、部隊の消耗も少なく済んでいたのだ。

「なら、天城の航空機で構いませんわ！扶桑の艦載機を1機、私に預け——」

「——っ!? 落ち着け！ペリーヌ・クロステルマン中尉！」

シャーリーの語気を強めた怒声に一喝され、ジタバタと暴れていたペリーヌの動きがピタリと止まる。

「……………シャーリー……………さん……………」

呆けた様子のペリーヌが肩越しに振り返る。羽交い締めから体勢を変えたシャーリー、大切な戦友を後ろからギュッと抱き締めた。

「1人で行かなくなっているいいだろ？あたし達は仲間じゃないか」
「にひひい♪ペリーヌだけにいいカツコさせないもんねえ〜♪」

と、悪戯っぽい笑顔でシャーリーの後に続くルッキーニだが、そう言う彼女のストラ
イカーユニツトも飛行不能である。

「ペリーヌ」

バルクホルンと竹井も、ガリアウイツチの元へ悠然と歩み寄ってくる。他の仲間達と
同じく、2人もペリーヌの身を案じているのだ。

普段と変わらず鹿爪らしい表情のバルクホルンと、ミーナを想わせる慈愛に満ちた微
笑を口元に湛えた竹井が、順に語り掛ける。

「お前の国を想う気持ちは素晴らしい。だが、1人で全てを背負い込む必要はない」

「あなたには、あなたと一緒に戦ってくれる素敵な仲間がいるじゃない。それを忘れて
はいけないわ」

「私とかねえ♪」

「わ、私もっ！」

「……………皆さん……………」

仲間達の温かい言葉を受け、感極まった様子のペリーヌは、自慢の髪と同じく金色に
彩られた瞳に涙を浮かべていた。

「とは言うものの……現状で出撃出来るのは私とハルトマンと竹井大尉だけだが……」
「御心配無く、我々もお手伝いさせて頂きますので……」

少々困り顔のバルクホルンが苦言を呈すると、すかさずアリオーナが協力を表明する。

「あなた方がか？」

と、バルクホルンは怪訝そうに眉を顰める。自分達に心を許さない501ブダペスト臨時指揮権の対応に、アリオーナは肩を竦める。

「グラーフ・ツェツペリンの件はもちろん、ミーナ中佐や宮藤大尉の捜索には人員が、我々の力が必要。そうでしょうか？」

「……信じていいのか？」

「我々はインペリアルウィッチーズ第3飛行隊は、ホフマン大尉や第1飛行隊とは違います。皆さんへの協力は惜しみません」

「それは頼もしいわね」

訝しげなバルクホルンに代わり、柔和な笑みを浮かべた竹井が応じる。扶桑海軍ベテランウィッチの発言は本音とも皮肉ともつかないものであった。

やはり彼女も親衛隊の特権階級的な扱いに納得がいかず、そしてホフマンとの一件が未だに尾を引いていることは明らかだ。

私の強い同僚のせいで受けるとばっちりを心中で嘆きながらも、アリオーナは精一杯の愛想笑いを竹井へ返したのだった。

◇ ◇ ◇

同時刻、カールスラント本国北海沿岸地域――

北海に面したカールスラント北西部のとある街には、過去にこの地へ移住した扶桑人男性と、現地生まれのカールスラント人女性が夫婦で経営していた和風ホテルがある。旅館を模した外観は、西洋の街並みの中で完全に浮いていた。

この国では異質とも言える建造物だが、皮肉にも殆どどの建物が倒壊している情景の中で唯一原型を保っている。

経営者や従業員が戻り、大掃除さえ行えばすぐにでも営業を再開出来そうだ。

「う〜ん……何も残っていないのかしら?……」

501航空団や親衛隊から戦闘中行方不明者として扱われているカールスラント空軍航空ウィッチ――ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐。着物風ガウンから、お馴染みのオリブドラブの制服に着替えた彼女は、ホテルの厨房を訪れていた。

何かを探しているらしく、引き戸棚の中へ頭を突っ込んで、ごそごそと物色してい

る。臙脂色のズボンに包まれた魅力的なお尻が後ろへと突き出され、フリフリと悩ましく揺れる。

世の男達が見たら間違ひなく鼻息を荒げつつ、目を血走らせて凝視することだろう。「避難する時に全て持ち出したのかしら？」

細く繊細な人差し指を色白の頬へ当て、ミーナは独り言ちる。

彼女は何か食料が残っていないかと、厨房まで探しに来ていた。特に缶詰のような保存食が残されていることを期待していたのだが、物の見事に何も無かった。

「困ったわねえ……」

——ぐうううううっ！

「あ……………」

腹の虫が鳴き声を響かせ、饑文字さを訴える。誰に聞かれたわけではないが、花も恥じらう乙女であるミーナは僅かばかりの羞恥心で頬を軽く紅潮させた。

優人の胸を借りて、ゆっくりと静養したおかげで体調は大分良くなり、体力・魔法力共に回復している。

井戸の清らかな水で喉も潤っているが、昨晚から何も食べていない。

「さすがに、少し辛いわね……」

立ち上がったミーナは軽い立ち眩みを覚え、フラついた。空腹感に苛まれ、力が出な

いらしい。

彼女と優人が、2人揃ってネウロイの勢力下から脱出するには、万全とはいかないまでもコンデイションを整えておく必要がある。

それにグラーフ・ツエツペリンとの戦闘時から、ミーナは何度も優人に助けられていた。

さすがに頼つてばかりでは気が引ける。礼も兼ねて、彼の腹を満たすだけでも出来ないものかと、厨房へ来ていたのだが、残念ながら収穫無し。

身体を休めていた自分がこれ程までに空腹なのだ。色々と動いていた優人はもつと辛いことだろう。

「あら？・何かしら？」

別の棚を物色すると、透明な液体で満たされた瓶が複数本出てきた。

扶桑産の飲料だろうか。ラベルに扶桑語で銘柄が書かれているが、ミーナには扶桑語が分からない。何と読むのかさっぱりだ。

「ミネラルウォーターかしら？」

何と無く興味をそそられたミーナは瓶を開封し、中身を一口含んでみる。

普段のミーナならば、ラッパ飲みなど行儀の悪い真似は絶対にしない。しかし、周りにあるコップやグラスは、どれも埃を被っているので使えなかった。

「ああ……どうしたのかしら？なんだか、身体が火照って……」

突然訪れる体調の変化。妙な感覚に戸惑いながらも、ミーナの気分は不思議と高揚していた。

「この水……もしかして傷んでたの？」

ミーナは手にした瓶を軽く掲げ、矯めつ眇めつ眺めてみる。

そうしている間にも、身体の火照りと気分の高揚が一層増していく。

「止めた方が良いかしら？けど……でも……」

逡巡する素振りを見せながらも、瓶の中の液体が発している謎の誘惑には抗えず、結局ミーナは瓶の中身をさらに呷り始めた。

彼女が口に運んだ飲料の正体。ミーナが軽い気持ちで飲んだそれは、“乱れ桜”という銘柄がラベルに書かれている扶桑酒だったのだ。



「ふう……」

ホテルのロビーにて。優人は簡単な整備作業を行っていた。全ての作業を終えて満足そうに息を吐くと、第二種軍装の袖で汗を拭う。

「これで、どうにか天城に合流出来そうだな……」

自らが整備した帝政カールスラント・メツサーシャルフ社製ストライカーユニット——“Bf109G—2”を見据え、自画自賛気味に「うんうん」と頷き、凝った首をポキポキと鳴らす。

ミーナの使用するBf109G—2は昨日の戦闘で燃料の大半を消費していたが、大破した優人の“紫電改”に残っていた分を移す形で補給した。

僅かな損傷が見られたものの、優人は“ストライカーユニットの父”と渾名される著名な技術者——宮藤一郎の息子であり、過去に難度か父親の仕事を手伝った経験があるので、ストライカーユニット等の基本的な整備ならばこなすことが出来る。さすがにシャーリーや軍の整備要員には及ばないが……。

紫電改に使用されている部品が、“零式”シリーズに比べて各国のストライカーユニットとの共通化が進められていたことも幸いしたようだ。

これから2人で脱出するわけだが、優人は自分が疲労の残るミーナを抱えるなり、背負うなりして天城まで飛んでいくつもりでいた。

そして、紫電改と弾が殆んど残っていないS—18対物ライフルとミーナのMG42 Sはこの場に放棄しなければならなかった。

勿体無い気もするが仕方がない。人間1人運んで敵の制空権内を飛行するので、余分

な荷物まで持っていていけないのだ。

天城へ辿り着くまでは、ミーナに固有魔法の『空間把握』で索敵を行ってもらい、可能な限り接敵を避けながら飛行するのがベストだろう。

無論、やむを得ず戦闘になった場合はサイドアームの拳銃と固有魔法『凍結』を用いて応戦するつもりだが……。

「ちよつと、外の空気でも吸つて来ようかな？」

そう独り言ちると、優人はロビーから外を目指して歩を進めた。引き戸を潜り、外へ出た扶桑海軍ウィザードの視界に黒雲で覆われた不穏な夜空が現れる。

叩きつけるような土砂降りには既に止めんでいたが、雲行きは変わらず怪しい。黒色に染められた雲の不気味さは、優人の胸に嫌な不安を滲ませる。

「あ……早く芳佳と会いたいなあ……」

ふと最愛の妹——芳佳のことを思い浮かべ、寂しげに優人はぼやいた。

優人とミーナが仲間達と引き離されて、既に丸一日もの時間が経過してしまっている。連絡が取れない以上、自分達の無事や居場所を報せることも出来ない。

（芳佳、心配してるだろうな。501の皆にも迷惑かけてるし……戻ったら、お詫びに天ぶらでも作つてやるかな？）

501部隊のウィッチ達は皆良く食べる。本当に良く食べる。宮藤兄妹が台所に立

ち、手料理を振る舞うようになってからはさらに食欲が増している。

2人の作った扶桑料理が余程気に入ったらしい。あれだけ美味しそうに食べてもらえると、優人達としても作り甲斐があるというものだ。

新兵時代は、とある同期生から扶桑男児の身でありながら台所に立つこと。料理が得意なこと等を度々冷やかされ、一時期は長所1つであつたはずの家庭的な面がコンプレックスになつていた。

しかし、かつて所属していた第十二航空隊や第288航空隊。そして、ストライクウィッチーズの仲間達が「美味しい美味しい♪」と嬉しそうに食べてくれる様を見て、自らの長所にまた自信を持つてるようになった。

(そういや、天城にジャガイモが大量に積まれてたっけな。ジャガイモの天ぷらつてもいいかな?)

そんなことを思い、漫然と空を眺める優人は、遙か遠方に浮かび上がった光芒を目に留めた。

「……………何だ？」

オレンジ色に輝くそれは、どうやら爆発の光らしい。距離はかなりあるが、黒い雲を背景に煌々と輝いているのでハッキリと視認出来た。

「あの爆発は…………フリーガーハマーか?!」

光芒の正体は、フリーガーハマーから射出されたロケット弾が炸裂して生み出される爆炎だった。それも一つ、二つではない。幾つもの火球が黒雲の中で咲いては消えていく。

子細は不明だが、フリーガーハマーを装備したサーニヤ。或いは、インペリアルウィッチーズに所属する親衛隊ウィッチの誰かが戦闘中なのは明らかだ。

「こりゃ、急いだ方が良さそうだな」

そう呟いた優人は踵を返すと、ホテルへ向かって駆けていく。ロビーへ戻ってきたところを、厨房から帰ってきたミーナに出迎えられる。

「ミーナ、丁度良かった！ 実はすぐ飛ばないとイケなくなつてー！」

「……………」

「……………ミーナ？」

どういうわけかミーナの反応が鈍い。いや、〃心ここに有らず〃と形容する方が正しいだろうか。

優人と向き合ってはいるが、焦点は定まっておらず。頬が少しばかり上気し、目元は艶かしく潤んでいる。

「おいーどうしたんだよ!？」

「……………あ……………」

語勢を強めた優人の声を聞き、ミーナは漸く扶桑海軍ウィザードへ目線と意識を向けた。

恍惚とした表情を浮かべる501司令は、そのまま覚束無い足取りで一步。また一步と、ゆったりとした所作で優人へ近付いていく。

「……み、ミーナ?」

まごつく扶桑海軍ウィザードを尻目に、酔っ払ったミーナは彼の肩をガシツと掴んだ。そのまま優人の身体を押し倒した。

あまりにも予想外なミーナの行動と力強さに、優人は抵抗する間もなく仰向けに倒されてしまう。

「はっ!? えっ!?」

床に倒された優人の口から間の抜けた声が零れる。驚愕のあまり目を白黒させる扶桑海軍ウィザードに向かって、ミーナは優しく微笑んだ……かと思えば、急に表情を陰しくしする。

「な、何だ?……一体どうしたんだ?」

「優人、前から思っていたのだけれど。あなた、トゥルーデやシャーリーさんと仲が良過ぎるんじゃないかしら?」

と言い、ミーナは扶桑海軍ウィザードを睥睨する。変わらずトロンと力の抜けた双眸

ではあったが、その瞳の奥では鋭い光がキラリと輝いている。

一方、あまりに唐突な指摘をされた優人の頭上でクエスチョンマークが踊っていた。

「同僚との仲が険悪なのよりはいいけど。ちよつと距離が近過ぎるといふか、親しくなりすぎじゃないかしら？」

「つて、言われてもなあ……」

今更感が否めない話題を振られ、優人は当惑気味に返事をする。

それが気に入らなかつたらしい。ミーナはギロリと目を剥いて怒鳴り返してきた。

「真面目な話をしてるのよ！もつと、真剣にか聞きなさい！」

「あ、ああ……」

「返事は『はいっ！』よー！」

「は、はいっ！」

凄まじい剣幕のミーナに気圧され、優人は命じられるがままに従った。

恐怖と動揺で声が裏返り、仰臥位の体勢にも関わらず背筋がピシッと伸び、自然と姿勢を正してしまう。

「大体、あなたって人はあ！手が早過ぎ、手を出し過ぎなのよ！501設立直後の初期メンバーに！後から来たサーニャさん！エイラさん！ルツキーニさん！シャーリーさん！挙げ句、去年の冬はヘルシンキでグンドユラやフーベルタ相手に鼻の下伸ばしてデレ

デレデレデレと！ウィッチとなれば誰にでもスケベ心を抱いて！見境つてものがまるで無いじゃない！あなたがそんな好色家で、下半身のだらしない人だなんて思わなかったわ！なんて酷い人なの！最低よ！」

文句・罵声・罵倒等々を矢継ぎ早にぶちまけていくミーナ。最初に見せた意識の鈍さや動きの緩慢さといい、感情のコントロールを失ってしまったかのような豹変ぶりといい、記憶の捏造からくる酷い言い掛かりといい、目の前の彼女は明らかに様子がおかしかった。

原因は、ミーナから斜め後ろの位置にあるもの。そこには、中身が飲み干され、空になった扶桑酒の酒瓶が、数本程転がっている。それらの中には件の乱れ桜も含まれている。

初めて飲んだ扶桑酒の魅力にハマったミーナは、まず乱れ桜を瓶一本丸ごと飲み干し、さらに他の扶桑酒にも手をつけ、気が付けば全て飲み尽くしてしまっていた。

疲労が残っていたこともあって、ミーナの魔法力は消耗したまま回復するまでには至っていない。

アルコールへの耐性も著しく低下していたことから、酒が全身に素早く回り、完全な泥酔状態だ。

普段、心の奥底に封印している不平不満を一気に解放し、捲し立てる。事情を知らな

い優人は戸惑うばかりだった。

「あのかなミーナ、ちよつと誤か——」

「どうしてつ!? どうして、あなたはあああああ〜っ! うわああああああんっ!」

困惑しながらも、取り敢えず誤解——ウィッチに手を出す、ラルやフーベルタにデレデレしていた等——を解こうとする優人であったが、ミーナは扶桑海軍ウィザードの言い分を遮るように泣き出してしまった。『火がついたように泣き出す』とは、まさにこのことだろう。

「私は…私は情けないわっ! あなたも美緒やクルトと一緒にだったのねっ!? わああああああああああん!」

いつものミーナなら、嗚咽を漏らしながら静かに涙を流すのだが、今日は大口開けて泣き叫ぶという良く言えば「ギャップ萌え」。悪く言えば「キアラ崩壊」といった珍妙な姿を晒している。

ある意味では、優しいが怒らせると非常に恐い見慣れたミーナよりも質が悪く、厄介だ。

(ああ、もう! 今は酔っ払いの相手をしてる場合じゃないんだよ!)

優人は両耳を手で塞ぎ、いつ終わるとも分からぬ泣き声にひたすら耐えるのであった。

第26話「夜闇のフソウオオカミ」

1944年9月某夜、カールスラント本国北海沿岸地域・上空――

悪酔いしたミーナが優人に絡み出す数分前のこと。叩きつけんばかりの豪雨は止んだものの、西欧の夜空は相変わらず分厚い黒雲に覆われていた。

サーニヤから連絡を受けた芳佳と悠貴の2名は、急ぎ彼女とエイラのロツテと合流する。北欧組に指示された空域まで赴いた扶桑皇国海軍ウィッチ。及び帝政カールスラント親衛隊ウィッチが視認したのは、闇夜に浮かぶ巨大な威容――ネウロツクと融合し、恐ろしい怪物に生まれ変わった大型正規空母のグラーフ・ツェッペリン。そして、空母の巨体を取り囲むように飛び回っている小型ネウロイの大編隊だった。

グラーフ・ツェッペリンを中心に展開する小型ネウロイの編隊は、巢の周辺で蠢き飛び回る蜜蜂の大群を連想させ、生理的嫌悪感を否応なしに煽ってくる。

どういうわけか。小型ネウロイの形状は、以前グレートブリテン島近海で赤坂伊知郎中将――現大将――率いる扶桑皇国海軍遣欧艦隊――空母“赤城”を旗艦とし、第16駆逐隊三隻と第17駆逐隊四隻の計八隻で構成――を襲撃した300m級の大型飛行ネウロイに酷似したものだっただけ。

数カ月前。芳佳は、元になった個体を目にしてゐる。エイによく似たシルエットといひ、赤く発光の装甲の配置といい、そっくりだ。

小型化に伴い、火力も防御力も航続能力も著しく低下しているだろうが、その分中型や大型のネウロイに比べて、低コスト且つ短時間で大量生産が可能。それが小型ネウロイの利点だ。

グラーフ・ツエツペリンを手に入れたネウロックが、エルベ川河口の巢へ一時退却したのは、マスターコアが同胞を産み出している巢内で、自らを護衛する子機を相当数揃えるため。4人のウィッチの中で、唯一戦略的な観点から物事を見ることの出来る悠貴は、そう推察する。

新たに得た航空戦力。そして、既にガリア方面へ進撃を開始している地上戦力を使って、再びガリアを支配下に置くつもりか……。

（ふくん……ネウロック、おもしろい子ね。ますます欲しくなっちゃう……）

薄紅色をした形の良い唇をひと舐めし、悠貴は身を震わせる。気に入った存在を目にした時に見せる仕草だ。親衛隊大佐は、今己の気持ちを昂らせてゐる。

「とつてもいい子、濡れちゃうわ……」

「えっ？ 雨は止んですよ？」

ボソリと呟いたつもりだったが、傍らにいる芳佳に訊かれてしまつていた。悠貴は艶

やかな微笑で誤魔化すと、前方の敵飛行編隊へ再び目を向けた。

グラーフ・ツエツペリンと小型ネウロイ群の装甲が発する赤い光が、闇夜の空に輝きと彩りを与えている。

「では、リトヴァク中尉。指示を頂けるかしら？」

と、悠貴は4人の中で最も夜間戦闘慣れしているナイトウィッチへ向けて首を巡らせる。芳佳にそうしたように、サーニヤに対しても艶然と微笑み掛けて指示を促す。

本夜間飛行隊の指揮官はオラーシャ陸軍屈指のナイトウィッチたるサーニヤだ。

階級に年齢、ウィッチとしての総合的な実力や経験。全てに置いて悠貴の方が上である。しかし、夜間戦闘に関して言えば、サーニヤに1日の長さ——悠貴も全く無いわけではない——がある。悠貴が辞退したこともあり、サーニヤが指揮をしている。

引つ込み思案でコミユニケーション能力に難のある彼女だが、戦闘時には普段の大人しい姿からは想像出来ないほどの行動力・戦闘力・作戦指揮能力を発揮する。それが「
リーリヤ」——オラーシャ語で百合の意——と渾名されるエースウィッチ——サーニヤ・V・リトヴァク中尉だ。

「……………」

指示を求める悠貴の言葉に耳を傾けつつ、サーニヤは目と魔導針を用いて、漆黒の闇の中で蠢くネウロイ群の動きを捕捉する。

オラーシヤナイトウィツチの傍らに控えるエイラは、悠貴の発言を一種の嫌味と受け取つたらしく、ムスツとした表情を親衛隊大佐に向けていた。

魔導針と併用した広域探索で捕捉したのは、グラーフ・ツエツペリンをベースにした巨大ネウロイに、軽く100は超えているであろう夥しい数の小型ネウロイの大群。

サーニヤの見立てでは、戦力差はざっと30対1。戦況は彼女等が圧倒的に不利だ。対抗するには、統合戦闘航空団クラスのウィツチが、最低10人は必要だろう。

天城のバルクホルンには既に報告済み。501本隊の仲間達やインペリアルウィツチーズが到着するまでは、索敵可能な程度に距離を取つて、やり過ぎす方が懸命か。

「……………みんなっ——」

振り返つたサーニヤが、皆に号令を掛けようとした瞬間だった。ネウロイの動きを見張つていた魔導針が、主の声を遮りかのように何かに反応する。

サーニヤは、反射的に前方のネウロイ群へと視線を戻す。グラーフ・ツエツペリンの周囲に滞空していた小型ネウロイの群れが、月光の遮断された暗い夜空へ躍り出てきていたのだ。

戦端は否応なしに開かれ、サーニヤが状況に合わせて新たな指示を飛ばす暇も無かつた。

小型ネウロイの半包囲するような陣形から4人の魔女目掛けて無数の光条が殺到し、

漆黒の空間に細かい筋を描く。

ウィッチ達はストライカーユニット機動力を以て回避と同時に散開し、各々反撃を開始する。

まずは、スオムス空軍トップエース——エイラ・イルマタル・ユージェイライネン少尉が、敵陣へ切り込んでいく。

彼女が愛用する機関銃は、501航空団のカールスラント組も使用しているMG42汎用機関銃のウィッチ用モデル“MG42S”だ。

エイラは、固有魔法の『未来予知』を駆使した絶対回避で光の豪雨を掻い潜りつつ、敵飛行編隊へMG42Sを射撃位置に保持すると、毎分1200発以上の銃撃を敵飛行編隊へ見舞う。

スオムスウィッチの魔法力を帯びた大量の銃弾と魔法弾を叩きつけられ、小型ネウロイ群れは次々に白く光る破片へ代えられていく。

続いて攻勢を掛けたのはサーニャだった。多連装ロケット器——“フリーガーハマー”より射出された複数のロケット弾が、エイラと交戦中のグループとは別の編隊へ撃ち込まれる。時置かずして、凄まじい破壊力を有する火球が発生。夜空を明るく照らし出す。

密集していたネウロイ群は、その殆んどが熱波と衝撃波の塊である光球に呑み込ま

れ、瞬く間に塵や破片となった。

オラーシヤウイツチとスオムスウイツチの初撃は、ひとまず成功を収めた。しかし、それはあくまで敵航空戦力の一部を削り取ったに過ぎない。

敵飛行集団の陣容は尚も厚みと深みを誇っている。ネウロイ側からすれば、初戦で失った戦力は0に等しいのかもしれない。

「敵の本隊……！」

サーニヤの魔導針が敵側の新たな動きを感知する。幾多の夜間飛行を経て、夜目が利くようになった翡翠色に輝く瞳で改めて確認する。

親玉たるグラーフ・ツエツペリンの周囲から、多数の小型ネウロイが一斉に動き出していた。

先程の敵編隊はあくまでも斥候。今度はグラーフ・ツエツペリンの傍らに控えていた全ての小型ネウロイ。視界を埋め尽さんばかりの凄まじい物量を、より近距離で目視した芳佳、サーニヤ、エイラの3人は戦慄を覚えるも、悠貴だけは変わらず妖艶な笑みを口元に湛え、動揺の色を一切見せていない。

「あんなに……たくさん……！」

「攻撃、来ます！」

呆然と呟く芳佳に次いで、サーニヤが警告を発する。濁流の如く殺到するネウロイ群

が、ウィッチ達の行く手を塞ぎ、彼女達が一瞬でも足を止めれば、間髪入れずに狙いをつけてビームを放つ。

ウィッチ達も黙ってやられる気はない。敵の群れに銃弾やロケット弾を多数散撒く。魔法力を帯びた攻撃を受け、小型ネウロイは次々に四散していくが、この損害も圧倒的な物量差の前では微々たるもの。

銃弾やロケット弾、魔法力に限りがある以上。押し切られるのも時間の問題だろう。

「ああ、もう！鬱陶しいナー！」

「くっ……数が多過ぎる」

「キリが無いよー！」

魔法力と弾薬が急激に消耗するのを感じ取り、エイラは苦悶の表情を浮かべる。芳佳やサーニヤも同様だ。

彼女達が攻撃を加える度に、漆黒の群れから白い破片が生まれては消える。だが、ネウロイは些かも怯むことなく、雪崩を打ちように迫ってくる。もちろん、ビームを撃ち込みながらだ。

指揮を預かるサーニヤは、なんとか窮地を脱しようと必死に思考を巡らせる。

このままでは、いずれやられる。今のまま反撃を続けても、長くはもたない。眼前の危機を乗り越えられるのなら何でもいい。一刻も早く答えを導き出さなくては……。

仲間達を救うため、サーニャは懸命に脳細胞を働かせるも、緊張で倍になった疲れと焦燥のせいで思考は却って鈍くなり、考えが纏まらない。

時間ばかりが、砂時計の砂粒のようにサラサラと零れ落ちていく。そんな感覚がオラーシャウィツチを襲う。

それでも彼女は諦めない。ナイトウィツチという役職と引つ込み思案な性格故、501内で孤立していた自分の心を癒してくれた2人の友人を守るために。本国シベリア方面へ疎開した両親と再会するために……。

決意の火を両の瞳に灯したサーニャは、魔法力の充填された数発のロケット弾を一斉に発射する。小型ネウロイの群れに着弾・炸裂したそれらにより、多数の敵機が熱波に焼かれて消し飛ぶも、戦況は変わらずサーニャ達の劣勢だった。

対して、濁流の如く押し寄せてくる小型ネウロイ群の勢いは衰えず、今にもウィツチ達を呑み込みそうだ。

嫌な汗が、サーニャの額に滲む。彼女も芳佳もエイラも既に激しく消耗しており、戦闘を継続する余力等無い。

「悠貴さん！悠貴さん、大丈夫ですか！」

九九式二号二型改13mm機関銃で応射しながら、芳佳は自らの長機である親衛隊大佐の身を案じて呼び掛ける。しかし、返事は無かった。

「あれ？悠貴さん？悠貴さん!？」

悠貴からの返事がない。芳佳はキョロキョロと周囲に視線を走らせ、『インペリアルウィッチーズ』司令の姿を探した。

親衛隊大佐は、ついさっきまで芳佳の傍らで戦っていた。それは間違いない。

群れから離れ、正面の本隊に意識の向いている芳佳達の背後を突こうとする敵の小規模編隊に対し、扶桑系親衛隊士官は抜刀した白刃を振るって応戦していたはずだった。

何処へ消えてしまったのか。まさか、やられてしまったのか。

芳佳はどうか悠貴を見つけようとする。しかし、彼女はサーニヤ達ほど夜間戦闘慣れしていないため、夜目が利かない。

ブリタニアの時は雲の上を飛行していたので、月明かりで十分な視界を確保出来たが、今は分厚い黒雲の下を飛んでいるせいで数メートル先が見えない。

ネウロイの位置も、サーニヤが撃ち出すロケット弾の爆発光と暗闇の中で赤色に輝く装甲を頼りに、なんとか把握している状況だ。

サーニヤのような探查能力があるならともかく、肉眼で。それも大量のネウロイを相手する片手間に人ひとり見つけ出すのは難しいだろう。

「悠貴さん！悠貴さん!？」

インカムを使って再度呼び掛けるも、やはり応答は無い。表情に不安の色を滲ませる

芳佳の元にサーニヤとエイラが近付いていった。

散開していたウィッチ達は一人のゲストを除いて再集結し、背中合わせでネウロイの攻撃に備える。

「芳佳ちゃん、アインツベルン大佐は？」

「それが、いつの間にかいなくて。探してるけど見つからないの」

「フーン！逃げたんダロ？」

不安がる芳佳とサーニヤの会話に、エイラが苛立った声音で口を挟んだ。

「エイラ？」

「ヤバくなったモンだから、逃げだしたんだヨ！ワタシ達のことを置き去りにしてナ！」

「そ、そんなことありません！」

「じゃあ、何でアイツは不利になった途端いなくなつたんだヨ!?もし撃墜されてるなら誰かが気付くはずダロ！」

「それはっ！……」

異議を唱える芳佳に、エイラはムツとした様子で怒鳴り返す。

芳佳はすぐさま反論しようとするも、怒り心頭なスオムスイッチを納得させられるような回答が何も思ひ浮かばず、口を噤んでしまう。

「バルクホルン大尉も、アイツ等親衛隊は信用できないって言つてたゾ！現にあの親衛

隊大佐もヤバくなったらすぐ逃げたじゃないカ!？」

大半の501メンバーと同様に、エイラもまた親衛隊やインペリアルウィッチーズを良く思っていないかつたらしい。

「エイラ、落ち着いて!」

感情任せに捲し立てるスオムス空軍のトップエースをサーニヤが宥める。

「決めつけるのはいけないことよ」

「う……けど……」

然しものエイラも、特に大切な存在であるサーニヤには強く出られないらしい。

一度は異議を唱えようとするも、サーニヤ相手ではそれも叶わず言い淀む。

そしてネウロイの群れも、少女達がこれ以上言葉を交わすだけの余裕を与えなかった。3人のウィッチを包囲した小型ネウロイ群が、一斉にビームを放ったのだ。

中型以上の個体に比べれば威力が大分弱い。航空歩兵・装甲歩兵が展開する魔法シールドはもちろん、戦車の前面装甲でも防御が可能である。

とはいえ、対人・対物には十分な効果を発揮する。もし直撃すれば、ウィッチやウィザードであっても只では済まない。

「——っ!?!」

数えるのも馬鹿馬鹿しいほど膨大な数の光条が、芳佳達が展開するシールド目掛けて

殺到。直撃の振動が少女達の華奢な身体を揺さり、暗雲に覆われた夜空は紅と碧で織り込まれた光のカーテンで眩く彩られる。

シールドを通して途切れる無く響く衝撃と振動に、ウィッチ達は魔法力だけでなく、精神まで削り取られていく。

「ぐっ！もう弾が……」

エイラのMG42Sは弾切れ寸前。サーニヤのフリーガーハマーも、ロケット弾の残りは一発だけ。芳佳の13mm機関銃も、最後の弾倉が空になりかけていた。

一方で、ネウロイの数は殆んど減っていないように見える。寧ろ会敵時よりも微妙に増えている気もする。

どうやらグラフ・ツェツペリンは、己の体内に予備の戦力を格納しているらしい。

これまでの戦闘で芳佳達が撃墜した以上の数を、追加で戦場に投入してきていたのだ。

「っ!? グラフ・ツェツペリンが!」

「何!?!」

「ドウシタ!?!」

サーニヤの緊迫した声につられ、芳佳とエイラが振り返る。

己の子機たる小型ネウロイを前面に出し、後方に控えていたグラフ・ツェツペリン

が、艦首——正確には、そこに搭載されている大型砲台をウィッチ達へ向けていたのだ。距離があり、暗くて視界も悪い。しかし、砲口に灯る紅の光はハッキリ見えていた。扶桑皇国海軍の航空母艦「天城」と親衛隊所属の同型空母「ドクトル・エツケナー」を襲った大出力のビーム。それを撃ち出したグラフ・ツエツペリンの大型砲台が、今自分達を狙っている。

そう認識した途端、激しい戦闘の末上気していた3人の表情から血の気が失せ、全身が強張る。

直後、黒雲夜に支配された夜空が眩いばかりに輝き出した。使い方次第では、航空機の大編隊や艦隊規模の戦力を一撃で葬り去れる大威力のビームが発射されたのだ。

初めは小さな光点だったが、一瞬のうちに光と熱の奔流となり、3人の乙女に容赦なく襲いかかる。

射線上にある全ての存在を呑み込み、焼き付くす灼熱の大河。この砲撃に晒された天城とグラフ・ツエツペリン——2隻の大型空母に、目立った損傷がなく撃沈も免れたのは、距離があったこと。そして、奇跡的な幸運のおかげだろう。

亜光速で接近する光熱の塊は、既にウィッチ達の眼前まで迫っていた。小型ネウロイ群の集中砲火によって釘付けにされていては回避不可能。魔法シールドで防御しようにも、この距離では展開が間に合わない。

高熱を伴った紅の輝きで視界を埋め尽くされる。芳佳は己の身体が焼かれる痛みに備えてギョツと目を瞑り、最愛の人を求めて心の中で叫んだ。

（お兄ちゃんっ！）

芳佳もサーニヤも、咄嗟の判断でサーニヤを庇うように抱き締めたエイラも生涯最後の苦痛を死を覚悟した。しかし、痛みや死が訪れることはなかった。

代わりにネウロイのビームが魔法シールドによつて防がれ、弾かれる際に生ずる衝撃音が耳朵に触れる。それは実戦経験を積んだウィッチにとつて、聞き慣れたものである。

目蓋を閉じながらも、芳佳は何者かがシールドを展開して自分達を守っているのだ、と理解していた。だか、一体誰が……。

芳佳は恐る恐る目を開ける。鳶色の瞳がまず映し出したのは、見慣れた後ろ姿が魔法シールドを展開し、グラーフ・ツエッペリンのビームを受け止めている光景だった。

士官の扶桑海軍第二種軍装に身を包んだ身体は、特別高身長でも筋肉痛でも、ましてや肥満というでもない。

少なくとも扶桑人の基準では、若干痩せ気味の普通体型と言える。それでも芳佳よりずっと背が高く、身体つきも幾分逞しい。

そして、シールドを通して伝わる振動で揺れる短めの黒髪。これらの後ろ姿から、芳

佳は突如現れた救世主が誰なのかを理解する。

「お、お兄さん?」

軍歴の浅い扶桑海軍ウィッチが震わる声で呟く。それとほぼ同時にネウロイの攻撃も止む。

士官用の制服を着た人物はシールドを閉じると、芳佳達へ振り返って微笑んだ。

「大丈夫か!」

歯を見せて爽やかに笑う姿は——笑顔だけならば——恋に恋する全ての乙女を無意識のうちに虜にしてしまうほどのイケメンぶりを発揮する彼は、扶桑海軍大尉の宮藤優人。芳佳の大好きな兄である。

「お兄ちゃん!無事だったんだね!」

目に嬉し涙を浮かべながら、芳佳は兄の胸へ飛び込んだ。ストライカーユニットの加速もあり、結構な勢いだっただが、優人は最愛の妹をしっかりと抱き留めた。

心配させてしまった御詫びの意を兼ね、扶桑海軍ウィザードは妹の頭を撫でてやる。

昨日の戦闘でミーナと共に撤退の殿を務め、行方不明となっていた兄が元気な姿で帰ってきた。優しく慣れた手つきで撫でられ、芳佳は兄の生還を改めて実感していた。

「心配だった?」

「うん。でも、お兄ちゃんなら絶対帰ってくるって信じてたから!」

「お、そつか……」

パアツと華が咲くような笑顔の妹が、上目遣いに見つめてくる。たったそれだけで、優人はクラつときてしまう。

丸1日離れていたために、シスコン兄貴の妹耐性は著しく低下してしまっているらしい。或いは病気が重症化しているのか。

「優人さん……」

芳佳に続いて駆け寄ってきたサーニヤが、遠慮がちに声を掛ける。

兄妹のスキンシップを邪魔して悪いと思っただろうが、その一方で宮藤兄妹が仲良くする様を見て、羨ましいとも思っていた。

サーニヤの背後には、惘然とした表情を浮かべたエイラが控えている。どういうわけか、こちらは感動の再会を果たしたはずの優人を憎々しげに見据えている。

「ご無事で何よりです……」

「うん。ありがとう、サーニヤ」

宮藤の家の妹と同様に、自分の生還を喜んでくれている501の妹——優人は部隊の年少組全員を妹同然と思っている——に礼を述べると、優人は彼女に向かって片手を伸ばす。

差し出されたサーニヤはキョトンと小首を傾げる。やがて、優人の意図を理解した彼

女は白い頬を仄かに紅潮させた。

「おいで♪」

と、優人は優しく声を掛ける。サーニヤは伏し目がちになりながら視線をあちこちへ泳がせた後に、再び上官へ目を向ける。

「……………失礼します…………」

そう言うと、サーニヤは優人へ近寄り小さな顔を彼の胸へ埋めた。

スリスリと顔を擦りつけ、使い魔の尻尾を嬉しそうに振る宮藤の妹とオラーシャ出身の妹は、まるで親兄妹に甘える仔犬や仔猫をようで、2人を間近で見ている優人の口元は自然と緩んでしまう。

「2人共、心配させてごめんな」

「ギヤアアアアアアツ!? ナ、ナナナナナ!? ナニやつてんだ、オマエツ!」

優人に対し、完全に心を許しているサーニヤの姿を目の当たりにしたエイラは、面白いくらい動揺する。

そんなスオムスイッチを余所に、優人の胸を枕にしてするサーニヤは安心しきつているらしく、とても穏やかな顔をしていた。

「お兄ちゃん」

「優人さん」

「よしよし」

「コ、コリアー！いつまでくつついんでんダヨ！敵はまだいるんだゾ！」

大切なサーニヤが、嫌いなウイザードに懐いている様をまざまざと見せつけられ、エイラの嫉妬のボルテージは鰻登りだった。両手足をジタバタと動かし、ヒステリックに喚き続ける。

「エイラにも心配か——」

「してナイ！」

優人の言葉を怒鳴って遮ると、エイラはグルルと凶暴な番犬を想わせる唸り声を上げて、扶桑海軍ウイザードを威嚇する。

スオムスイツチの悪態に、優人は困った表情を浮かべて小首を傾げた。エイラの機嫌を損ねてしまった彼だが、何故そうなったのかをまったく理解していなかったのだ。

3人のウイツチとウイザードが、コメデイのような一幕を展開している間にも、ネウロイ側は攻撃を継続していた。

グラフ・ツエツペリンの砲撃が失敗したとみるや、小型ネウロイの群れによる集中攻撃を4人に仕掛けたが、優人が背面に展開したシールドによって容易く防がれている。

「まったく……」

優人はウンザリだと言わんばかりに嘆息を漏らすと、可愛い妹達を退かせ、自分はネウロイの群れへ向き直った。

「ぞろぞろ、ぞろぞろと。お前等はそんなに暇なのか？」

不適な笑みを口元に浮かべ、扶桑海軍ウィザードの挑発と皮肉を湛えた言葉を投げ掛ける。

殆んど間を置かずに、小型ネウロイ群が特有の無機質で甲高い雄叫びを上げた。返答代わりだろうか。

ネウロイに人類側の言語が理解できるとは到底思えないが、目の前の異形達は優人の発言を受けて激昂しているようにも見える。

程無くして小型ネウロイの大編隊は、ビームを乱射しながら優人目掛けて一斉に突撃を敢行する。実戦の経験が浅く、己の感情のコントロールが難しい新兵が、時折見せる自棄つばちな行動と酷似している。やはりお怒りのようだ。

ネウロイにも感情を持つ個体が存在するらしい。連中の生態を調査している世の科学者達が、この事例を知れば歓喜することだろう。いや、正しくは狂喜か……。

「お兄ちゃん！」

「優人さん！」

ネウロイの不気味な声を聞き、現実に戻った芳佳とサーニヤが、優人の背中にしがみ

つく。2人共、身体をカタカタと震わせている。恐いのだ。

魔法力を有するウィッチであること。統合戦闘航空団に招聘される優秀な航空歩兵であることに目を瞑れば、彼女達は10代のか弱く繊細な少女。メンタル面においても、アマチュアの域を出ていない。

弾薬も魔法力も使い切り、抗う術がほぼ無くなった今、異形の敵に恐れ戦くのも当然というものだ。

スオムス空軍のトップエースウィッチたるエイラも、例外でない。サーニヤが近くにいるから強がっているだけで、過去に経験したことの無い危機を前に焦りを感じていた。

「喚くなよ。妹達の可愛い声が聞こえないだろうが!」

小型ネウロイの大群が自分に迫る光景を前にしても、優人は変わらず余裕の笑みを崩さない。

病的なほどのシスコンぶりや年相応のスケベぶりな面に隠れて目立たないが、優人は扶桑海軍変時から今日まで戦い続けてきた古強者。

オストマルク、カールスラント、オラーシャ、スオムスの各戦線へ馳せ参じたりパウ時代において。彼はもつと大規模な敵飛行編隊との戦闘を経験している。

この程度の航空戦力で、扶桑皇国最強の航空ウィザードを仕留めることなど出来な

い。

優人は自身と妹、妹分。そして、自分に敵意を向けているスオムスウィッチを守るためにシールドを展開。それと同時に固有魔法『凍結』を発動した。

魔法力から変換された超低温の冷気がシールド越しに放出され、優人に接近してきた小型ネウロイを残らず芯まで凍結させる。

凍り漬けとなったネウロイは、その全てが戦闘能力と飛行能力を失い、海洋へと落下していく。

その後は海面に叩きつけられて粉々に砕け散ったり、海中へ沈んでいたり。2種類は末路を迎えていった。

「うわあ！お兄ちゃん、強〜い〜！」

「優人さん、スゴいです」

大ベテランである優人の圧倒的な強さを、改めて目の当たりにした芳佳とサーニヤが揃って喝采する。

自分達が3人がかりで応戦しても、数を減らすだけで精一杯だった小型ネウロイの大群を、優人は一瞬のうちに殲滅してしまったのだ。

攻撃系魔法というアドバンテージがあるにせよ、敵飛行編隊を仕留めたのは、紛れもなく優人の実力だった。

一方エイラは、心の中で扶桑海軍ウィザードの強さを認めてはいたものの、やはりサーニヤの関心が彼に向くことが面白くないようで、フンと鼻を鳴らして顔を背けていた。

しかし、まだ小型ネウロイ群がいなくなっただけだ。一度はストライクウィッチーズを退けたグラーフ・ツェツペリンは、未だ五体満足の状態で漆黒の夜空に佇んでいる。

優人は「M712 シュネルファイアー」を取り出す。シュネルファイアーは、カールスラント製の大型拳銃である。

対ネウロイにおいて。南部十四年式拳銃の火力不足を痛感した優人は、ブリタニア出立直前にシュネルファイアーへ持ち替えていたのだ。

とはいえ、超大型ネウロイ相手では流星に心許ないことに変わりはないが……。

「なにっ!？」

本丸であるグラーフ・ツェツペリンへ視線を走らせた優人は、驚愕の声を上げる。

艦首部分に小さな光点が見えたのだ。先程、芳佳が目にしたものと同じ、大型砲台の砲口から漏れ出るビームの灯だ。

「まさか、もう次がっ!？」

ウィザードと3人のウィッチは揃って息を呑む。グラーフ・ツェツペリンの艦首にある大型砲台が、膨大量の熱と光を有する光芒の第二射を、早くも放とうとしている。

流石のベテランウィザードも、あれだけの破壊力を持つ大出力ビームがこれほど短い間隔で連射できるとは、思っていなかった。

例え撃たれようと、十分な魔法力を残している優人のシールドならば、あと2、3発は防げる。妹達を守る。

しかし、優人の考える「ある秘策」を以てグラーフ・ツエツペリンを倒すには、出来る限り魔法力を温存しなくてはならない。

既に発射まで秒読みに入っている。今からでは回避も間に合わない。残された僅かな時間の中、扶桑海軍ウィザードは苦慮する。

(背に腹は変えられないか……)

今は何よりも妹の芳佳と501の妹分——サーニャとエイラを守るべきだ。意を決してシールドを展開しようとした。

「っ!? 誰か来ます」

魔導針による索敵を続けていたサーニャが、何者かの接近を告げる。

彼女の報告通り。当戦闘空域に急速に接近する機影——ウィッチが存在し、それは間もなくサーニャ以外の3人も目視で確認できる位置に現れた。

優人や坂本、竹井と同じく純白の扶桑海軍第二種軍装を身に纏い、扶桑刀を携え、両足には零式艦上戦闘脚を装備したそのウィッチは、真っ直ぐグラーフ・ツエツペリンへ

向かっていく。

ウィッチはグラーフ・ツエツペリンの艦首まで接近すると、裂帛の気合いと共に魔法力を込めた刀身を大型砲台目掛けて振り下ろした。

砲身は竹のように切断され、過負荷を受けた砲台は誘爆を起こす。発射直前でエネルギーが集中していたため、爆発の規模も相応に大きい。グラーフ・ツエツペリンは堪らず悲鳴を上げる。

攻撃を加えて離脱したウィッチは悠々と夜闇の中を飛行している。戦場に現れた際は、長く風に靡いていた茶髪は何故か短くなっている。

ウィッチは大型砲台を斬りつけた扶桑刀を大仰に振るう。その所作は、敵を斬った後に刀身に付着した血を払って落とそうとする侍のようだった。

「え？誰？」

「あいつは……」

突如現れたウィッチを唾然と見据える芳佳の疑問に、優人が応じる。

扶桑海軍の第二種軍装。それも士官用の制服を好んで着用する航空歩兵で、あんな芸当が出来るのは2人だけだ。

宮藤兄妹よりも一足早く帰国の途に就いた坂本美緒少佐と、もう一人。宮藤優人と坂本美緒、そして竹井醇子と同時期に扶桑海軍へ志願し、“軍神”北郷章香の薫陶を受け

ながら扶桑海軍事変を戦い抜き、今では“扶桑皇国最強のウィッチ”とまで称されるようになった優人の同期の桜。

『久しぶりだな、宮藤優人。相変わらず配属先のウィッチにちよつかいばかり出していと聞くぞ?』

「お前こそ、その口の悪さは変わらないな。若本徹子?」

インカム越しに優人と皮肉を交わす相手は、扶桑皇国海軍遣欧艦隊機動部隊所属——若本徹子中尉だった。

第27話「お〇ばいは癒し」

1944年9月某日、カールスラント本国北海沿岸地域・上空——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊機動部隊所属の航空ウィッチ——若本徹子中尉は、宮藤兄妹以下4名の501隊員とグラーフ・ツエツペリンが交戦中の空域に颯爽と現れるや否や、精錬された一撃離脱法を活かした奇襲攻撃を仕掛けた。

手痛い一撃を受けたグラーフ・ツエツペリンは、艦首部分に搭載した大型砲台が大破・喪失。しかし、ネウロツクの手に堕ちた正規空母が沈黙したのは、ほんの一瞬だった。闇夜に佇む巨大な威容は、すぐさま活動を再開した。

悲鳴とも怒号ともつかない鳴き声を上げると、グラーフ・ツエツペリンはネウロイ化を経て強化・増設された砲門や赤い光を灯す正六角形の装甲から、幾重もの光条を一斉に撃ち出す。

ろくに狙いもつけず、無茶苦茶に撃ち続けているだけだが、一発一発の破壊力は凄まじく。何より数が多い。

光のカーテンとで形容すべき光柱の弾幕に晒され、若本と宮藤優人大尉——扶桑海軍が誇る2名のベテラン航空歩兵は苦境に立たされているように思われた。

だが、実際のところはやや劣勢ながらもグラーフ・ツエツペリンと渡り合っている。

『優人！』

ビームの豪雨を回避しつつ、両手でそれぞれカールスラント製の大型拳銃——M712 “シユネルフォイアー”と同じくカールスラント製の護身拳銃——PPKを応射していた優人の——正確には、サーニヤが持ち合わせていた予備の——インカムに、若本からの通信が入った。

「何だ？」

撃ち尽くしたシユネルフォイアーの弾倉を交換しながら、優人は少々ぶつきらぼうに応じる。

さすがは経験豊富な射撃の名手というところか。貧弱な武装にも関わらず、発射直前の砲口を見事撃ち抜き、暴発を誘う形でグラーフ・ツエツペリンの次々と砲台を潰していく。

他者との会話の片手間であっても、その射撃の精度は些かも低下しない。

『お前、武器はそれだけか？そもそも何でカールスラントのユニットを履いてるんだ？』
若本が指摘した通り。今、優人が履いているのは扶桑海軍現主力ユニットの紫電改でも、前主力ユニットの零式でもない。

メツサーシャルフ社製のB f 1 0 9 G — 2。カールスラント製のストライカーユ

ニツトだ。

機体に描かれているパーソナルマークは、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』司令を務めるカールスラント空軍ウィッチ——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐のもの。つまり、今使っているG—2型は彼女の愛機である。

支給されたばかりの紫電改が昨晩の戦闘で大破し、主兵装たるS—18対物ライフルの弾薬も使い切ってしまったってしまっていた優人は、PPKと共にストライカーユニットをミーナから借りていたのだ。

「それが、長くてつまらない話なんでね」

そう言葉を濁しと応じると、今度は優人が己の質問を若本にぶつけた。

「お前こそ、何でここにいるんだ？空母『蒼龍』以下機動空母部隊の任務は、ガリア上陸作戦の支援だろ？」

『それが長くてつまらない話なんでね』

皮肉のつもりか。若本は全く同じ台詞を返してきた。優人は不愉快そうに片眉をピクピクと痙攣させる。

「俺をおちよくってんのか？」

『おちよくるだなんて心外だな。これでも俺はお前を尊敬しているだが……』

「へえ、それは知らなかったよ……」

『何せ、お前は『扶桑皇国スケベ大魔王決定戦・東の横綱』と名高い我が国の誇りだからな』

「……………何言ってるんだお前？」

『なんだ、知らなかったのか？』

少々意外そうな声音で応じると、若本は子細を説明し始めた。

『本国のゴシップ誌に掲載されてるんだよ。欧州派遣以降のお前の度重なるスケベっぷりや女性遍歴なるぬウィッチ遍歴に関する記事が——』

「はあ!？」

扶桑海軍ウィザードの口から飛び出した素っ頓狂な声が、同期の桜の言葉を途中で遮る。

実を言うと、この手の話は初めてではない。ワイト島へ出向した際に似たような内容の話をしてリーネの姉で、王立アラウエイランド空軍ウィッチのウィルマ・ビショップ軍曹から聞かされていた。

それ故に、ブリタニアで根も葉も無い——まったくのデタラメというわけでもないが——噂が広まっていることは認知していたが、まさか欧州から遠く離れた扶桑本国にまで届いているとは夢にも思わなかった。しかも、よりにもよってタチの悪いゴシップ誌に掲載されているようとは……………。

記者達が胸の内に秘めているジャーナリズム魂を甘く見ていたようだ。

「な、なんだそれは!?! ウイツチ遍歴って、一体何が書かれて……」

スケベ大魔王決定戦に関しては大体の想像がつくが、ウィツチ遍歴というのは一体なんなのか。

内容の真否はともかく、若本の物言いから察するに記事の中身はかなり具体的なものの。

また、宮藤優人という扶桑海軍ウィザードの軍生活や私生活を面白おかしく書き綴った記事であろうことは間違いない。

正直なところ、を訊くのはとても恐い。しかし、一方で好奇心から記事の内容を知りたい自分もいるのだ。

意を決した優人は、上擦った声でインカムの向こうにいる若本に訊ねる。

『心配するな。そんな大した内容じゃない』

「そ、そうか……」

『ロマーニャへ修行に行った際に、お前が美緒に寝込みを襲ったのだ。リバウでは醇子や後輩のウィツチ達に片っ端から手を出して、何十股も掛けて交際してただの。ブリタニアへ異動してからは、統合戦闘航空団に招聘された各国のウィツチ達と取っ替え引っ替えて——』

「待て待て待てっ！いくら何でも酷過ぎるだろ！」

と、優人は堪らず怒鳴り散らした。無理もない。いくらゴシップ仕とはいえ、記事の内容はあまりと言えばあんまりなものなのだ。

記事を書いた名も知らぬ記者は、優人のことを完全に女にだらしがらない男として扱っている。だが、自らのゴシップネタが広まるのも、世間に名を馳せた者の定めと言えよう。

初陣を飾った扶桑海軍からガリア奪回に至るまでの数年間。優人は、扶桑皇国海軍を代表する航空歩兵の1人として各地を転戦し、行く先々で目覚ましい活躍を見せ、数々の戦果を上げてきた。

当人にはあまり自覚がないようだが、最愛の妹や501部隊の仲間達と共にガリアを解放した優人は、軍のプロパガンダに活用されたこともあり、全世界——特に扶桑本国においては芳佳、坂本と揃って英雄扱いされている。

良くも悪くも有名人であるが故に、噂話が独り歩きする。ゴシップ記者という名の生き物は、そういったところへ付け込んでくるのだ。

ウィザードはウィッチよりもさらに稀少な存在で、尚且つ原則として男子禁制で、年頃の乙女達ばかりの兵科であるウィッチ部隊に、男子でありながら例外的に組み込まれている。

各国軍内において。秘密の花園とでも形容すべき少女のみ空間へ、少年という異分子が混じってれば、戦果の有無に関わらず悪目立ちは避けられない。

記者の中には、万国共通で“儂い花”や“高嶺の花”等と憧れの象徴とされているウィッチ達と、誰よりも——軍の整備兵、従兵等と比較しても——近しい立場にあり、彼女等と気軽に会話のできるウィザードに対する嫉妬心から、敢えてゴシップ記事を書いて彼等を攻撃してやろうと企む者も少なくない。

扶桑へ帰国後は、家族や親戚に累が及ばぬよう常に立ち振舞いに気を配らねばならないだろう。だが、天才的なラツキースケベ体質の優人にとって、それは人並み以上に困難なことだった。

有名俳優のように、外出時は帽子やサンングラスが必需品になるやもしれない。

『そう熱り立つな。北郷先生も言っていたらどう？悪名は無名に勝る、つてな』
若本はインカムを通して慰めているのか、煽つてるのかよく分からない言葉を掛けてくる。

クツクツクツと押し殺すような笑い声が聞こえるあたり、後者だろう。

優人と若本の関係は、501で例えるならばバルクホルンとシャーリーの関係に良く似ている。所謂、喧嘩友達だ。

こうして会話すると、憎まれ口を叩き合っていた新兵時代が、つい昨日のことのよう

に感じられた。それでも、腹の虫は治まらないが……。

「徹子。お前つてやつは本と……」

苛立ち混じりに皮肉を返してやろう。そう思った優人だが、すぐに止めて正面の敵へ意識を向け直す。

小型飛行ネウロイの大編隊や艦首の大型砲台を潰されて尚、氣勢の衰えないグラーフ・ツエツペリンが戦術を変えてきていた。

巨大ネウロイに生まれ変わった大型空母無数の砲台で牽制しつつ、自らの体内に格納していた子機を新たに射出する。

黒雲の下に躍り出た複数の子機は、大編隊を形成していた先程の集団とは形状が異なっている。先端が赤く輝いているそれは、漆黒に染まったロケット弾のようでもあり、宙に浮く短槍のようでもあった。

子機は先端よりビームを迸らせながら急迫してくる。縦横無尽に空中を飛び回るその動きを、優人は以前にも経験していた。

「おい！あれは何だ!?!」

状況を見て合流してきた若本が、インカム越しではなく優人に直接声を掛けてくる。「あの武器はガリアの残党ネウロイと同じ!?!」

若本の問いに応えたわけではなく、優人は我知らず言葉にしていた。

眼前の子機は、かつて優人がバルクホルン、シャーリー、ルッキー二等3人と共に対峙したガリアネウロイの残党——高速で飛び回る移動砲台と形容すべき性能を有した槍状の小型ネウロイと同一の存在であった。

その特異な能力と、バルクホルン達501の面々を手こずらせた子機に似合わぬ戦闘力の高さ故に、この個体の存在は強く印象に残っていた。細部の形状が僅かに異なるものの、おそらく性能は何ら変わることはないだろう。

変則的な機動で空中を疾走する槍は、四方八方から襲いかかってくる。シールドでは対処しきれないと判断した2名のベテラン航空歩兵は背中合わせの体勢となり、息を合わせた回避行動でビームを避けつつ、銃器で応戦し続けた。

「ちよこまかとー」

と、若本は九九式二号二型改13mm機関銃の弾倉を交換しつつ、持ち前の観察眼で槍状小型ネウロイの能力を冷静に分析する。

しかし、エース集団出合い501部隊のウィッチですら一度は苦戦した相手だ。若本徹子といえど初見での対応は、困難を極めた。

一方、機関銃も対物ライフルも無く、拳銃二挺で応戦しなければならない優人は火力が低下した分、迎撃能力も下がっている。

それに加え、機種転換訓練を行わず、不慣れなBf109G—2での飛行というハン

デもあつた。

やがて2機の槍状小型ネウロイが弾幕を掻い潜り、遂に優人の眼前まで迫った。だが次の瞬間、無数の銃弾が横殴りに叩きつけられ、小型ネウロイは白い破片と四散する。

「な、何だ？」

突然の援護に扶桑海軍ウイザードは戸惑いの声を上げる。直後、優人のインカムから聞き慣れた声が響いた。

『優人！無事か!?!』

「バルクホルン？」

呆然と、或いは嘖み締めるように優人は戦友の名を呟く。ハツとなつて銃弾が飛んできた方へ目をやると、複数の人影を視界に捉える。

両手にMG42Sを携えたゲルトルート・バルクホルン大尉。彼女と同じく、MG42Sを装備したエーリカ・ハルトマン中尉。若本と同様に九九式二号二号改13mm機関銃を構えた竹井醇子。そして、3名の武器とは異なり自動小銃のような形状の“BAR”——ブラウニー・オートマチック・ライフル——M1918と、たゆんと揺れる爆乳が目を引く“シャーリー”ことシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉。

第501統合航空団と原隊たる扶桑海軍遣欧艦隊第24戦隊で寝食を共にした戦友達が、優人達の危機に颯爽と現れ、助けに入ってくれたのだ。

バルクホルン等の後方には、さらに航空歩兵が6人程確認出来る。帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第3飛行隊のウィッチ達だ。

飛行隊長のアリヨーナ・クリューコフ親衛隊大尉を含めた親衛隊ウィッチ達は、現在501の指揮官を臨時で務めているバルクホルンの指揮下に入っていた。もちろん、一時的にだ。

状況確認するため、真つ直ぐ優人達の元へ向かってくるバルクホルン率いる501及び竹井と一旦分かれ、アリヨーナと彼女の飛行隊は一足早くグラーフ・ツエツペリンへ攻撃を開始する。

「優人ー」

今度はインカム越しではなく、優人の耳に直接バルクホルンの声が届く。

戦友の無事な姿を目にした堅物大尉の頬は上気し、瞳には涙が滲み、声には安堵の色が窺える。

「やっぱ生きてたんだ？悪運強いじゃ〜ん♪」

はにかみ笑いを浮かべたハルトマンも、からかうように声を掛けてくる。

だが、優人が彼女に言葉を返すことはなかった。いや、正確に言うとは出来なかったのだ。

「優人お〜っ！この野郎め！生きてやがったかあ〜っ！」

「ムグツ！」

いつにも増してハイテンションなりベリオンウィッチが、再会するや否や人目も憚らずにカバツと抱き着いてきた。

リベリオン陸軍の制服を押し上げんばかりに自己主張する、グラマラス・シャーリー“の爆乳が。世の男共を虜にする魅惑の果実が。扶桑海軍ウィザードの顔面に押し付けられる。

「この〜このお！心配させやがって！」

さらにシャーリーは、優人の後頭部と背中に腕を回すと、自分の方へ引き寄せた。

戦友の生存を知って欣喜雀躍するリベリオンウィッチにガツチリと拘束され、扶桑海軍ウィザードは身動きが取れなくなる。

さらに顔面を圧迫している巨大な乳房に口と鼻を塞がれてしまい、息をすることすら困難となった。

「お仕置きだ！このっ！このお〜っ♪」

「ん〜んんっ！ん〜っ！」

リベリオン産の良く育った2つの西瓜。その谷間に顔全体が埋まってしまい、扶桑海軍ウィザードは呼吸も儘ならない。大好物の爆乳だが、その感触を堪能するだけの余裕

は無かった。

そんなことは露知らず、シャーリーはお仕置きと称して優人相手に目一杯じゃれついでいる。

ウィッチとのスキンシップは、全ての男性にとつての夢である。だが当然ながら、この夢を叶えるのは非常に困難だ。

大抵の男は志し半ばで倒れ、悔しさのあまり夜な夜な涙で枕を濡らすこととなる。それをいとも容易くに成し遂げてしまうのが、宮藤優人という男だった。

こんなところを天城の乗員達が目にしようものなら、嫉妬に狂って何をするかわからない。

機関銃の集中砲火で蜂の巣にされるか。扶桑刀を使って優人を滅多刺しするか。対空機銃や高角砲で撃たれ、粉々の肉片に変えられるか。

尤も、別のベクトルで嫉妬に駆られている者は、今この場にもいるのだが……。

「お、おお、おおお前等あ！な、ななな、何をしているだつ！」

目の前でイチャコラしているリペリオンウィッチと扶桑海軍ウィザードの様を見たカールスラントの堅物大尉は、なんとも分かりやすく動揺する。

彼女の頬は、優人の無事を直に確認した先程よりも鮮やかに紅潮していた。

ワナワナと身体を震わせながら2人を指差すと、上擦り気味な口調で怒声を浴びせ

る。

「何って……再会のスキンシップだけど？」

と、振り返ったシャーリーは事も無げに応える。その物言いが、バルクホルンの神経を逆撫でし、更なる怒りと動揺を誘う。

「い、今は！せせせ、戦闘中でっ！な、なな、なんてっ！ふしだらなっ！」

「ごめん、シャーリー♪トウルルーデは自分が真っ先に優人に抱き着きたかったんだよ♪
シャーリーに先を越されちゃったから、焼き餅焼いてるんだよお♪」

と、悪戯っぽい笑みを浮かべたハルトマンが横から茶々を入れてくる。

「ハ、ハルトマン！出鱈目を言うな！」

バルクホルンはすぐさま怒号を飛ばして叱りつけるも、その程度でハルトマンを黙らせることなど出来るはずもなかった。

「そうかなあ？トウルルーデ、シャーリーが優人を抱き締めるのをすごい羨ましそうに見
——」

「ないないないないっ！そんなことは断じてないっ！」

堅物大尉の耳をつんざくような怒鳴り声が、ハルトマンの言葉を無理矢理遮る。

相棒の主張をやたらムキになって否定したバルクホルンは、これ以上追及されてなるものかと、リベリオンウィッチへ視線を戻す。

「リベリオン！貴様、いつまでそうしているつもりだ！優人を離せ！」

そう言つて優人に手を伸ばすバルクホルンだったが、シャーリーは自らの胸の中にいる扶桑海軍ウイザードを彼女から遠ざけてしまふ。

「何だよ、ちよつとくらしいいだろ？」

「ダメに決まつているだろうが！ネウロイを前にして、よくもそんな破廉恥極まりない真似を！」

「破廉恥つてのなんだよ!?あたしはただ、敵の勢力圏内で一晚中孤立していた優人を癒してやつてるだけだぞ！」

「何が疲れを癒しているだ！100万歩譲つて癒しているとして、そんな脂肪の塊を押し付ける必要が何処にある！」

「脂肪の塊とは御挨拶だな！あたしのダイナマイトバディには男を悩殺するだけじゃない！94.3センチのバストで包み込み、疲れや苦痛を癒してやることだって出来る！」

と、ドヤ顔で熱弁するシャーリーを軽蔑するように、バルクホルンはフンツと鼻を鳴らす。

「ふん！その無駄にデカイ胸を揺らして、男共に媚びを売つてただけだろうが！軍人の身で、なんてふしだらなヤツだ！」

「なんだよ！人をビッチみたいに言いやがって！さてはバルクホルン！自分の胸が小ぶりだからって、あたしに嫉妬してんのか!？」

「なっ?!そんなわけがあるか!だいたい、私の胸は小さくない!」

一体何を思ったのか。バルクホルンは反論するなり、突然タイと上着のボタンを全て外し、灰色の制服をバサツと豪快に脱ぎ捨てた。ここは敵制空圏内だというのに、回収はどうするつもりなのだろうか。

さらに彼女は、制服の下に着ていた白ワイシャツにも手を掛ける。ボタンを外す僅かな時間すら惜しいのか。バルクホルンは両手を使い、力任せな動作でシャツの胸部が開かれる。

なんとも大胆なやり方で、うら若き乙女の胸元が晒され、シャツの下から軍支給されたであろう白地のタンクトップが姿を現す。

軍の支給品に違わず、実用性一点張りのシンプルなデザインの内ナーは、生真面目な性格をしたバルクホルンらしいチョイスだが、味も素っ気も無い。

年頃なのだから、もう少し冒険して色気のある品を選んでも良さそうなものだ。

だが、その白布に包まれた乳房は、シャリーには及ばないものの、中々に発育が良いい。バルクホルン本人が言った通り決して小さくはなく、巨乳ないし豊乳と呼べるサイズであった。

「おいっ!」

「トウルデー、何してんの!?!」

突然始まった堅物大尉のストリップショー。目の当たりにしたハルトマンとシャリーは、揃って動揺する。

引き気味な戦友達を余所に、バルクホルンはシャツを脱ぎ捨て。タンクトップ越しに己の胸を見せつけるかのように持ち上げた。

「見ろ! 私の胸は小さくなどない! この胸で優人を癒してやることだつてでき……つて、何をやらせるんだ!」

「いや、トウルデーが勝手に脱いだんじゃん……」

戦友の奇行にすっかり呆れ果てているらしい。1人ポケットツッコミを披露するバルクホルンに対し、ハルトマンは冷静なツッコミを入れる。

「ん〜!ん〜っ!」

「おっと、忘れてた」

と、シャリー。バルクホルンとの舌戦に熱を入れ過ぎたために、自らの胸で抱いている扶桑海軍ウィザードの存在をすっかり忘れていた。

この様子では、優人が自分の爆乳のせいで呼吸困難になっていたことにも気が付いてはいまい。

「ぶはっ!? た、助かったあ……」

漸く解放された優人は、すぐさま肺いっぱい新鮮な空気を取り込む。解放されるのがあと少し遅ければ、優人は窒息死していただろう。

優人が一息ついたのを見計らい、爆乳リベリオンウィッチが声を掛ける。

「あつははははー! どうだ、あたしの胸は? 癒されたらろ?」

豪快に笑いながら訊ねるシャーリーを見るに、やはり自分のせいで扶桑の戦友が窒息死しかけたことには、まったく気付いていないようだ。

「ま、まあ……苦しかったけど。幸せな感じがしたよ」

優人が律儀に応えると、シャーリーは「だろお?」自慢げに胸を反らす。すると、質量の暴力とでも呼ぶべき巨大な乳房がたゆんと揺れた。

この爆乳に潰されての窒息死。男としては、それはそれで本望かもしれない。

ゴシップ記事に起因する心の幾分緩和されたので、シャーリーの言う94.3センチのバストによる癒し効果は、多少なりとも存在したのかもしれない。

まだ、柔らかく温かな乳袋の感触が顔に残っている優人は、ぼつが悪そうに後頭部を搔く。

「いやあく、身体張った甲斐があつたよ♪あつははははー!」

シャーリーは高笑いを続けながら、膨よかなバストとは対象的にキュツと細く引き締

まったウエストに両手を添える。

たったそれだけの仕草で、抜群のプロポーションが一層引き立った。

「徹子、来てくれたのね」

穏やかな声音に喜びの色を滲ませた竹井が、若本に声を掛ける。

戦場にいる緊張感の無い501部隊のメンバーが和気藹々と過ごす一方で、504部隊の戦闘隊長と空母機動部隊所属のベテランウィッチも、再会の喜びを噛み締めていた。

「同じ釜の飯を食った同期の頼みじや、無下にも出来ないからな」

と、若本は少しばかり口角を吊り上げる。性格が似通っているためだろうか。そのサバサバとした笑顔は、もう1人の同期である坂本美緒を連想させた。

「おーい、質問が2つあるんだが？」

と、優人が軽く手を上げると、竹井が「何かしら？」と応じる。

「ペリーヌやリーネやルツキーニの姿が無いみたいだが、何かあったのか？」

「ストライカーにトラブルがあつてさあ……出撃出来なくなっちゃつて。3人は天城でお留守番だよ」

竹井に代わってハルトマンが簡潔に説明する。優人は「そうか」と軽く流すように応じると、2つ目の質問をぶつけた。

「じゃあ、もう一つ。バルクホルンは、その……何で……そんな格好を？」

「え？……あつーきゃあああああ！」

気まずそうにチラチラと横目で視線を送ってくる優人の指摘を受け、バルクホルンは自分がインナー姿であることを思い出し、羞恥心からなんとも可愛らしい悲鳴を上げる。

裸よりはマシとはいえ、上下共に布一枚程度——上半身は丈が短めの臍出しタンクトップ、下半身は同色のローライズズボン——の無防備ではしたくない姿を異性に晒してしまった。

優人は優人で、シャリーリーの胸で窒息しないよう意識を繋ぎ止めるのに精一杯だったため、バルクホルンが脱衣した理由を知らない。

（こ、こんな……だらしのない姿を優人に！まさか、飛行中に露出をする変態だと思われたんじゃ……）

有らぬ誤解により、優人との関係に壁ができてしまうことを危惧したバルクホルンは、即座に弁明する。

「ち、違うんだ優人！これは……これはだな！軽量化、そう軽量化だ！軽蔑化によって、機動力がどれほど向上するかをテストしていたんだ！」

「あれえ？胸で優人を癒してあげるんじゃないの？」

「ちつがああああああう！出鱈目ばかり言うなああああああうっ！」

またしてもハルトマンが横槍を入れてきた。バルクホルンは、すかさず彼女の指摘を絶叫を上げて否定する。

やはりというか。大声だけでは、ハルトマンの減らず口を沈黙させることは出来なかった。

「え、トウルデー言つてたよ？この胸で優人を癒してや——」

「うわあああああうっ！」

すっかり乱心していたバルクホルンは、反射的に拳を出してしまう。だが、ハルトマンはそんな堅物大尉の剛拳を軽々と躲していく。

「わっ！危なっ！やめてよ、トウルデー！」

「黙れ！黙れ！黙れ！黙らんかあああああうっ！」

「な、何なんだ？」

状況に理解が追い付かず、優人が両の目を点にしていると、背後から囃し立てるような声がかかった。

「あらあら♪」

「中々オモテになって。結構ですなあ、色男♪」

（コイツら……人の気も知らないで……）

他人事だと愉快がる同期達に静かな怒りを燃やしていると、今度はシャーリーから質問がきた。

「ところで、芳佳やサーニヤがあたし達よりも先に来てるはずだけど？」

「そうだ！ミーナは!? ミーナは何処にいるんだ!? アイツは無事なのか!？」

ハツと我に還ったバルクホルンが、シャーリーに次いで優人を問い質す。

だが、それに対する扶桑海軍ウィザードの返答は、なんとも歯切れの悪いものであった。

「あ、いや……それは……あははははは」

と、優人は空笑いを浮かべる。何かを誤魔化す時や後ろめたいことがある際に、彼がよく見せる笑い方である。

まあ彼の態度から察するに、ミーナが五体満足の状態で生きていることは確かだろう。無論、芳佳達夜間哨戒組も無事なはずだ。

このシスコンのこと。妹と妹分の身に何かあれば、発狂していてもおかしくない。

そして、件の芳佳達というと。優人のある個人的な頼みを受け、北海に面したカールスラント本国北西部沿岸地域へと降りていた。

第28話 「宮藤兄妹の災難」

1944年9月某日、カールスラント北西部北海沿岸地域——

宮藤優人大尉と若本徹子中尉が、ネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンと交戦するのと時同じくして。

妹の宮藤芳佳軍曹、サーニャ・V・リトヴァク中尉。そして、エイラ・イルマタル・ユイテライネン少尉の3人は地上へと降りていた。

彼女達が垂直降下で向かった先には、優人と第501統合戦闘航空団司令のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐が潜伏していた沿岸の街があった。

「こんなにも何もかも壊されて……ひどい……」

ストライカーユニットを操りながら、眼下に広がる凄惨な光景へ目を向けていた芳佳は、悲痛な声を漏らす。

建物の殆んどが廃墟となり、海岸線を埋め尽くす膨大な量の瓦礫。民間人とも兵士ともつかない夥しい数の死体が、白骨化して街のあちこちに散らばっている。

かつては大勢の人で賑わい、誰もがありきたりながら平穏で幸せな日々を過ごしていたであろう街は、見る影もない。

「……………」

サーニヤもまた、哀しみに揺れる翡翠色の瞳の中に、変わり果てた街の惨憺たる姿を映していた。

オラーシヤウイツチを案じるように、彼女の傍らに寄り添うエイラも同様だ。

北欧の最前線を戦い抜いたスオムス空軍のトップエースであっても、街の惨状には表情を曇らせ、義憤を抱かずにはいられないものがあつた。

如何に戦う覚悟を決め、ウイツチ隊に志願している者であっても、その実は年齢相応にか弱い少女である。

メンタリテイが民間人と大差ない少女等には、戦争の現実を直視し、飲み下すことは不可能に近い。

「ホラー・2人共、ぼーっとするナヨ！早くミーナ中佐を見つけて天城に帰るゾー」

沈黙に堪え兼ねたのか。或いは芳佳とサーニヤを気遣ったのか。エイラは必要もなく声を張り上げ、哀然としている2人に行動を促す。

その甲斐あつて、芳佳とサーニヤはハツと我に還ると同時に、地上へ降りた目的を思い出した。

「そうね。エイラ、ごめんなさい」

「あ…………わ、分ければ良いんだけどサ…………」

感傷的になつていたことをエイラに叱咤されたと思つたのか。サーニヤは自省し、そして謝罪する。

一方で、咎める気など微塵も無かつたエイラは、ばつが悪そうに後頭部を搔く。

「宮藤！ 兄藤の言つてた建物は見つかつたのか？」

と、エイラは芳佳に話を振る。『兄藤』とはエイラが優人に付けた渾名である。兄の方の宮藤だから兄藤、と……。

エイラには悪いが、安直で捻りも面白味も無いネーミングセンスだ。

ちなみに、優人がサーニヤにちよつかい——と言つても、ただの世間話だが——を出したり、例によつてラツキースケベの才能を發揮した時のみ。渾名は安直な兄藤から、『エロ藤』という罵倒へ変化する。

「え〜つと……」

芳佳は額に手を翳し、街中に視線を巡らせた。彼女達3人は、グラーフ・ツエツペリとの戦闘で激しく消耗していたため、救援に駆け付けたバルクホルン等と入れ替わる形で空母天城へ帰投することになっている。

しかし、その前に扶桑の典型的な旅館をモデルとした和風様式のホテルへ立ち寄り、ミーナを回収しなければならなかつた。

優人と共に敵勢力下で行方不明となつていたミーナ。優人曰く、目立つた負傷もなく

無事とのことだが、ある事情により優人一人では連れ出すことが出来ず、やむ無くホテルに置いてきてしまったそうだ。

ネウロイの勢力圏内にいつまでも残しておけない。自分達の代わりにグラーフ・ツエツペリンを相手を引き受けた優人の頼みを聞き、芳佳達はこうしてミーナを迎えに来ていたのだった。

ミーナが待っている建物の特徴は予め聞いている。しかし、北歐出身のサーニャとエイラに扶桑式の建築様式をいまいちピンとこない。

なので建物の搜索は、自然と生粋の扶桑人である芳佳の役目となる。

「あーあれじゃない?」

全壊もしくは半壊した建物ばかりの街で、原形を留めているものは極僅か。芳佳はそれの中から、祖国の情緒漂う建物をすぐに見つけた。

「ヨシー・じゃあ、ワタシとサーニャは周囲を警戒してるから、お前が迎えに行ってくれヨ」

「はい、エイラさん!」

一二つ返事です了承する芳佳に、少し心配そうに眉を落としたサーニャが声を掛ける。

「芳佳ちゃん、もし何かあったらインカムで報せてね?」

「うん! ありがとう、サーニャちゃん!」

心配症なサーニヤを安心させるため、屈託の無い笑顔で応じると、芳佳はストライカーユニットを操り、件のホテルへ向かっていった。

「しっかしニア……」

芳佳の後ろ姿を見送りながら、エイラは怪訝そうな表情で腕を組んでいた。

「エイラ、どうしたの？」

「ナンでミーナ中佐を置いてこなければならなかったンダ？」

「きつと、優人さんのストライカーユニットが壊れて。それでミーナ中佐のユニットを借りたんじゃないかしら？」

と、サーニヤは自分の推測を述べる。彼女の言う通り、優人の『紫電改』こと紫電二一型は昨晚の戦闘で大破している。

それ故、優人はミーナのB f 1 0 9 G — 2を借りて。サーニヤ達の危機に単身駆け付けたのだ。

「それなら、ミーナ中佐が来れば良かったんじゃないカ？」

エイラの言うことも一理あった。いくら優人が遣り手のウィザードとはいえ、ろくに機種転換訓練も行わずに勝手が違う他国のユニットを使用し、さらに戦闘にまで参加するとなると、さすがに不安を禁じ得ない。

もちろん、サーニヤ達が知らないだけで、優人が過去に他国のストライカーユニット

を試す機会があつたのかもしれない。

まあ優人ほどの腕前と経験ならば、ぶつつけ本番でもなんとかかなりそうだが……。

「気になるナア……」

「ミーナ中佐に聞けば分かるわよ」

「それもそうダナ」

オラーシヤウィツチの言葉に納得したエイラは、考えるのを止めて警戒態勢に移る。

サーニヤも魔導針と広域探査能力を駆使し、周囲の警戒を始める。その時だった。

『わっ！ミーナ中佐！やめっ！』

「——っ!? 芳佳ちゃん! どうしたの!?!」

突然、インカム越しに芳佳の声が伝わる。子細は分からないが、なにやらただならぬ雰囲気だ。

「宮藤! どうかしたのか!?! おい、宮藤!」

エイラが即座に交信を試みるも、芳佳から返事は来ない。

「芳佳ちゃん!」

親友の危機を感じ取ったサーニヤは、一目散に芳佳の元へ向かい、エイラも慌てて彼女に追従していった。



同時刻、カールスラント北西部北海沿岸地域・上空――

「じゃあミーナは無事で、サーにゃん達は迎えに行つたんだね？」

優人から事の経緯を聞き終え、要点を分かりやすく纏めたエーリカ・ハルトマン中尉は、納得したように手の平をポンと叩く。

「そういうことだ」

と、優人が首肯する。ハルトマンは原隊からの相棒であるゲルトルート・バルクホルンへ振り返り、彼女に声を掛けた。

「だつてさ、トウルルーデー！」

「……………そうか……………」

戦友の言葉を背中で受けたバルクホルン大尉は、彼女らしからぬか細い声音で応じる。

優人やハルトマン、他のウィッチ達に背を向けているため、表情を窺い知ることは出来ない。だが、両の耳が鮮やかなピンク色に染まっているところ見るに、赤面しているのは確かだ。

軍服を脱ぎ捨ててしまったので、今はシャーリーからリベリオン陸軍の制服を借りて

いる。

カールスラント空軍支給のタンクトップの上から、カーキ色の上着を羽織っているわけだが、その背中は普段よりも小さく、弱々しいものだった。

「まったく……水練着姿だと思えば恥ずかしくはないだろうに……」

「徹子、誰しもがあなたみたいに図太いわけじゃないのよ……」

呆れたように言う若本を竹井が窘める。どうやら、この若本徹子という名の扶桑撫子は、つり目がちの表情や男勝りな表情に違わず豪胆な性格をしているらしい。

気が強く、厳格ながら面倒見の良い性分はバルクホルンと共通しているが、若本が坂本並みに豪快なのに対して、堅物大尉殿は生真面目な分、かなり繊細である。

異性相手に、自らの痴態——月下のストリップショー及び胸をはしたなく強調する——を晒してしまったシヨックには堪えられまい。

実は何故をしてしまったのか。バルクホルン自身にもわからない。口論で熱くなつたが故の一时的な気の迷いなのか。

或いは、爆乳リベリオンウィッチに「小さい胸」と煽られたことが、負けず嫌いな彼女を奇行に走らせたのやもしれない。

「ありや当分使い物にならないか？」

と、他人事のように言うシャーリーだが、バルクホルンがこうなってしまった原因の

一端は彼女にもある。

「ん〜……あ!」

役に立たなくなつたバルクホルンを見て、ハルトマンはどうしたものかと、難しい顔をして考え込んでいた。

だが、すぐに名案——または迷案——を思い付いたらしく、閃いたと言わんばかりにポンと手の平を叩く。

「ねえ、優う人お♪」

「ん?なんだよ?」

ニヤニヤと、明らかに何かを企んでいる顔で、ハルトマンが優人に声を掛ける。

これまでの経験則により、嫌な予感がして仕方がない扶桑海軍大尉は、訝しげに聞き返す。

「いつものトゥルーデに戻すために、ちよつとでいいから手伝つてよ♪」

そう言い、素早い動きで優人の背後に回ると、ハルトマンは彼の背中をグイグイ押しながらバルクホルンに近付いていった。

「おい、ハルトマン? なんなんだよ?」

「こつそり近付いて〜……いつけ〜! 優人お!」

「うわっ!」

ハルトマンは具体的に何をどうするのかも説明せず、バルクホルン目掛けて、優人を突き飛ばすという暴挙に出たのだった。

——むにゅん♪

「ひっ!？」

「……………あ……………」

堅物大尉が、驚愕の色を滲ませた可愛いらしい悲鳴を上げる。一拍置き、扶桑海軍ウィザードもまた間の抜けた声を漏らした。

「おお！優人！ナイスキャッチ♪」

と、自らが喉けた扶桑海軍ウィザードにパチパチと賞賛の拍手を送るハルトマンは、我が意を得たりとばかりに嬉々としている。

優人はただ衝突しただけではなかった。ぶつかった拍子に扶桑海軍ウィザードの両手が、タンクトップに包まれたバルクホルンの双丘をしっかりと捉えてしまっていた。つまり、お馴染みの展開である。

「な、な、なっ……………」

バルクホルンはゆっくりと肩越しに振り返った。突然飛んできて、自分の乳房を鷲掴みにした扶桑海軍ウィザードと至近距離で顔を合わせる。

顔は一層朱が増し、茹で蛸の涙目となっている。数秒の沈黙の後、耳をつんざくよう

な絶叫が彼女の口から飛び出した。

「何をするかあ〜っ！優人！一体何処を掴んでいるっ?！」

「えっ?!?!……あ、いや!こ、これはっ!ぶへっ?!」

なんとか弁明を試みようとする優人だが、激しく動揺したバルクホルンは聞く耳を持たない。

すぐさま強烈な肘鉄が放たれ、それは無情にも扶桑海軍ウィザードの脇腹に叩き困れるのだった。最早、お約束である。

「落ち込んでいる女性にセクハラを仕掛けるなどと!お前というヤツは!人の弱味に突っ込んで!墮ちるところまで墮ちたのかあ!?!」

「あぐあ!……バ、バルクホルン……苦しい!……」

怒り心頭のバルクホルンにギリギリと首を絞められ、優人は呼吸ができなくなる。

爆乳リベリオンウィッチの深い谷間を顔面で受けた時とは違い、純粋な苦痛しか感じられない。

トマトのように顔を真っ赤にした堅物大尉とは対照的に、扶桑海軍ウィザードの顔は段々と生気の薄い蒼色に変わっていった。

「バルクホルン大尉。お怒りは尤もだけど、離してあげて。それ以上やったら死んでしまっわ」

「……………ふん！命拾いしたな！」

「ゲホゲホッ！」

竹井の助け船で九死に一生を得た優人だが、バルクホルンからは完全に悪者扱いされている。

幸いというか、何というか。すぐハルトマンによるネタばらしが成された。

「うんうん♪やつぱりトウルーデには、優人からの乳揉みが一番の薬みたいだね♪」

「ハルトマンッ!?……………まさか、全て貴様の仕業かあ！」

「いやあ♪すっかり汐らしくなっちゃったトウルーデを元氣付けようと思つてさ♪あはは♪」

「付くかあ！こんなことでえー！」

バルクホルンは声を張り上げて否定するものの、実際のところは彼女に元氣が戻り、いつもの堅物大尉になっていた。

ウルトラエースの荒療治には、確かな効果があったようだ。501部隊結成以前からの相棒だけあって、扱いても心得ているらしい。

ただ単に、優人やバルクホルンに悪戯を仕掛け、2人の反応を面白がっているだけかもしれないが……………。

「なんと言うか、緊張感ゼロだな……………」

と、若本は呆れた様子である。初めこそ、久々の再会を果たした優人を好きに弄り回して楽しんでいた彼女だが、今は501一同のあまりに緩く、お気楽な空気に何とも言えぬ表情を浮かべている。

この場で、目の前の愉快な集団が各国のウィッチ隊から抜擢されたエース級で固められた精鋭部隊——第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』で、ガリア救国の英雄達だと言われても、大抵の人間は信じないだろう。

何せ、優人や坂本。そしてWエースたるバルクホルン、ハルトマンの実力を熟知し、認めている若本ですら彼女等のやり取りを見て、首を傾げたくなっているくらいだ。

「何だか懐かしいわね♪」

「？」

「第十二航空隊にいた頃の私達みたいじゃない？」

「……………確かにな」

優人と同じく、同期の桜である竹井に昔話を振られ、若本は苦笑気味に頷く。

若い時分の自分達——まだまだエースには程遠かった新人時代の優人、坂本、竹井、若本の4人もまた、501メンバーのように下らないことばかりを話し合い、バカみたいにはしゃいだりしたものだ。だった。

軍人としての自覚がまだまだ足りなかった。メンタルがそこいらの学生と変わらな

かったと言えばそれまでだ。

しかし、あの明るい雰囲気があったればこそ。扶桑海軍事変の厳しい戦況を乗り越えることができたというものだろう。

そしてそれらの過去は、世界的なエースにまで上り詰めた彼女等の現在を形作つているとも言える。

時間が許せば思い出話に花を咲かせたいところだが、今はそんな余裕は無い。

「と……いつまで遊んでいるなよ！早くあの化物をなんとかをしないと、取り返したばかりのガリアをまた失うことになるぞ！」

「言われなくたってわかっているよ……」

バルクホルンの肘鉄を諸に受けた脇腹を擦りながら、優人は若本の叱責に呻くように応じる。

言われるまでもない。グラーフ・ツエツペリンを取り込んだネウロツクの目的が、ネウロイ側にとってやや劣勢となった戦線を押し戻すことなのは明らか。

せつかく取り戻したペリーヌやアメリーの故郷を再びネウロイに明け渡すなど、あつてはならない。

なんとしてもネウロツク並びにグラーフ・ツエツペリンを撃破する必要がある。しかし、戦闘能力でウォーロツクやウォーロツクと融合した赤城を遥かに上回る今のグラ-

フ・ツエツペリン相手に、正面から挑んでも勝ち目は薄い。ましてや、今の501は全開時よりも、戦力が低下していた。

一体どうしたものか。優人は思考を働かせ、なんとか打開策を見い出そうとする。

「ん?」

何気無しに視線を走らせると、シャーリーの履いているストライカーユニットに目が留まった。

「シャーリー、それ!」

「ん?ああ、これか?」

シャーリーが使用しているのは使い慣れた愛機——P-51 “マスタング”ではなく、扶桑海軍の対地攻撃用ユニット——九九式艦上爆撃飛行脚二二型。空母天城の艦内格納庫の隅で埃を被っていた機体である。

元々は急降下爆撃用に開発・運用されていたユニットで、本大戦初期には爆撃任務等で活躍していたが、強力な飛行ネウロイが現れ始める——九九式艦爆の損耗率が高かつたのも理由の1つ——と、戦闘脚の配備が最優先となり、対地攻撃にはウィッチが装備するストライカーユニットではなく、爆撃機や攻撃機等の航空機が使われるようになっていった。

九九式艦爆より後発の“彗星”や“流星”及び“流星改”も、開発データをフィード

バックした航空機のみが前線に出るようになり、同名のストライカーユニットは殆んど使用されていないのが現状だ。

ウィッチ・ウイザードは稀少な存在。艦上航空歩兵となれば尚更であり、少ない人員を対地攻撃に回す余裕が無かったのも理由の一つである。

「P-51がちよつと使えなくてさ。代わりに天城にあったコイツ借りたんだよ」

そう言うシャーリーに、すかさず若本が反論……というよりは苦言を呈した。

「代わりと言うが、さすがにそいつで空戦は厳しいだろう？」

高性能ユニットであるP-51と低速且つ防御力も貧弱で空戦には向かない九九式艦爆が、彼女の愛機の代わりになるとはとても思えない。

統合戦闘航空団の一員だけあって、シャーリーの技量や魔法力の才能は確かだが、それだけでは補い切れないだろう。はつきり言つて戦力外だ。

しかし、優人は九九式艦爆を履いたシャーリーの姿を見て、ある作戦を思い付く。

「シャーリー、皆！俺に考えがあるんだ」

優人は構築した対グラーフ・ツエッペリン作戦案を、仲間達に聞かせ始めた。



数分前、カールスラント北西部北海沿岸地域・地上――

「ミーナ中佐あ！迎えにきましたよお！」

ミーナがいるらしい扶桑様式のホテルを玄関の引き戸を開き、小さな身体を屋内へ滑り込ませる。

建物内を見渡しながらミーナの姿を探し、彼女の名を呼んでみる。しかし、返事はない。

「あれ？……じゃないのかな？」

と、芳佳は小首を傾げて独り言ちる。玄関からさらに奥へ進むとロビーがあり、フロントや二階に続く階段も確認出来る。

空が晴れたのか。屋内に射し込む月明かりによつて、やや薄暗いながらも視界は良好であった。

「うくん……建物間違えちゃったのかなあ？」

芳佳は小首を傾げつつ、2階へ上がる。奥へ進みながら、部屋を一つ一つ確認していく。やはりミーナの姿はない。

それでも屋内の探索を続けていると、近くの和室から物音するのに気付いた。

「あ、……かな？ミーナ中佐！お迎えに来ましたあ！」

「入っていいわよお！」

襖の向こう側から、声楽家を連想させる澄んだ声が返ってくる。

思ったより元氣そうなその声音に、芳佳はホッと胸を撫で下ろした。

「失礼しま——」

「いらっしや〜い♪」

芳佳の声を遮るように、ミーナが和室から姿を現す。突然、視界に現れた501司令の美貌。理由は分からないが少しばかり頬が上気し、目元が艶かしく潤んでいた。

普段から年齢不相応にアダルトな雰囲気を身に纏っているミーナだが、今の彼女はいつにも増して色っぽい。そんな上官を前にして、芳佳は顔を強張らせつつゴクリと息を呑む。

「あ、あの！ミーナ中佐、お迎えに——」

「ありがとう♪」

またしても芳佳の言葉を遮ったミーナは、背を向けて室内に戻っていく。部屋のほぼ中心に敷いてあった布団に身を投げ、あお向けに寝転がった。

よく見ると、布団の周りには大量の酒瓶——全て扶桑酒——が散乱している。

「ミーナ中佐！お酒飲んだんですか!？」

「ええ、そうよ♪ああ〜♪久しぶりにたくさん飲んで良い気持ちいい♪」

なんとも幸せそうな笑顔応じるミーナの姿は、元の美しさや恭しさもあつて見苦しさ

は感じない。寧ろ絵にすらなっていた。

「もう！何やつてるんですか!?!早く帰りましょうよ!」

と、ミーナを連れ出そうとする芳佳だったが、やはりというか。そうは上手くいかなかった。

「芳佳ちゃ〜ん♪」

「え?きやつ!?!」

不意に手首を捕まれ、芳佳はミーナが寝ている布団へ引きずり込まれてしまう。

「そんなに急かさないでえ♪もつと、ゆつくりして行きましょうよ♪添い寝して、添い寝え〜♪」

「わっ!ミーナ中佐!やめっ!」

抵抗する間も無かった。芳佳はミーナに抱き竦められ、身動きが取れなくなった。

「う〜ん、良い抱き心地♪抱き枕にして今日はもうねるう♪」

「うう……」

ガツチリと拘束されている上、ミーナの豊富な胸を顔に押し付けられ、気も漫ろとなる。

「み、ミーナ中佐……寝るのなら、せめて天城に——」

「ひつど〜い!私の誘いを断るなんてえ!私のこと、ウィッチとしては年増だと思っ

甘く見てるのね！」

舌足らずな口調でそう言うと、ミーナは制服を脱いで下着姿になってしまった。

「どおだあく♪見ろお♪これが、成熟した女の身体よお♪」

と、大胆にも自らの肢体を見せつけてくる。胸の大ききこそシャーリーやリーネに劣っているものの、全体的なプロポーションでは上回っており、女体を形作る曲線はまるで芸術品のよう。芳佳も思わず「すごい」と感嘆を漏らした。

「芳佳ちゃん♪とても可愛いわあ♪このまま食べてもいいかしら？」

「わ、私は……美味しくくないですよ！どうせ食べるならもつと高いお肉とかが、その……いいと思います！」

よく分からない命乞い（？）をする芳佳を尻目に、ミーナは彼女の頬に手を添えて、ゆつくりと顔を寄せる。

「ふふ♪芳佳ちゃん♪」

「いやあああああああ！」

後に芳佳は、駆け付けたサーニヤとエイラによって救助されたそうなの。

第29話 「九四式艦爆乳と58kg爆弾1発」

1944年9月、帝政カールスラント北西部北海沿岸地域——

ネウロツクに取り込まれたカールスラントの正規空母——グラーフ・ツエツペリンが、西欧の空に再び姿を見せてから既に数時間が経過していた。

夜空を覆い隠していた黒雲は徐々に晴れ、白く儂げに輝く美しい満月が顔を覗かせている。

雲の隙間から漏れ出る月明かりに照らされた巨大な威容と対峙するのは、10名の少女——ウイツチだ。

連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウイツチーズ』のWエース——カールスラント空軍航空ウイツチのゲルトルート・バルクホルン大尉と、エーリカ・ハルトマン中尉。

アリヨーナ・クリューコフ親衛隊大尉率いる帝政カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウイツチーズ』第3飛行隊に除草する親衛隊ウイツチ6名。

そして、扶桑皇国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊を原隊とする竹井醇子大尉と、本大戦直前より同艦隊空母機動部隊に所属している若本徹子中尉。2人共、東洋の一大海洋国

家——扶桑皇国が誇る大エースである。

バルクホルンやハルトマンに比べてスコアこそ譲るものの、実力は決して劣らず、実戦経験においては寧ろ勝っている。

10人のウィッチ達は、現代の魔法の箒たるストライカーユニットを脚部に纏い、神秘的な月光と攻撃的な赤い光条で彩られる夜空を縦横無尽に飛び回り、果敢に立ち向かう様は勇猛さを見せつけながらも非常に美しい。

異形の怪物と命のやり取りをしているはずなのに、舞踏会宛らの優雅な舞いを見ているようだ。

「頼もしいな……」

戦闘空域よりも、さらに高高度に佇む扶桑皇国海軍ウィザードの宮藤優人大尉は、グラーフ・ツェツペリンに応戦中の戦友達を眼下に捉えつつ、独り言ちる。

グラーフ・ツェツペリンを手に入れたネウロツクは、エルベ川河口付近に存在する巢で戦力を補充した後、西欧の最前線へ向けて移動し始めた。

現状における西欧の最前線は、人類連合軍が失地回復に成功したガリア共和国だ。

グラーフ・ツェツペリンは、西部方面統合軍麾下の各国戦力が残敵掃討を行っている同国へ再度侵攻して、劣勢となりつつある戦線を押し戻す腹積もりらしい。

ヘルギガヤネーデルラント、そしてカールスラントとの国境付近に潜んでいた地上ネ

ウロイもまた、グラフ・ツエツペリンの出現に呼応するかのようになりアへの移動を開始していた。

グラフ・ツエツペリンは、今まで交戦したネウロイの中で言えば間違いなく最強の個体だ。

だが優人はもちろん、他の501隊員や扶桑海軍ウィッチの2人は勝つつもりである。

開戦時より欧州へ派遣されていた遣欧艦隊の一員として。部隊結成と同時にブリタニアの防衛と、ガリアの奪還を課せられていたストライクウィッチーズのメンバーとして。奪還したガリアをなんとしても守り抜く。

今この場にはいないペリーヌに、故郷を失う哀しみを二度味あわせてなるものか。

表情や言葉にこそ出さないが、カールスラント出身のバルクホルンとハルトマン、アリヨナ等はガリア防衛に対する想いが特に強いのだろう。

ガリアの人々と同じく祖国をネウロイに侵され、奪われたカールスラント人には、哀しみと苦痛。そして悔しさを理解している。

また、感情論抜きに考えてもガリアは西方からのカールスラント本国奪還の為に必要な国でもあった。

「上手いこと攻撃が分散されてる」

ややハスキーな声音が傍らから流れてきて、優人の耳朶にそつと触れる。

声の主はリベリオン陸軍第8航空軍から501部隊へ派遣されている航空ウィッチ——「ジャーリー」ことシャーロット・エルウィン・イエーガー大尉だ。

リベリオン航空軍総司令官の隷下には、12個の航空軍が置かれおり、ジャーリーの所属する第8航空軍は欧州派遣を主任務としている。

「グラーフ・ツエツペリンはバルクホルン達と親衛隊連中に意識が向いてる。あたしらがこっそり離れたことに気付いてないみたいだな」

と、言葉が続けるジャーリーを、優人は横目でチラリと見やった。

バルクホルンに上着を貸し与えているので、今の彼女はカーキ色のシャツに緑のネクタイと、見慣れた制服姿よりもラフな印象を受ける。

上着を羽織っているも、「グラマラス・ジャーリー」の由縁たるダイナマイトバディはとても隠せていなかったが、シャツ越しだとその少女離れた肢体——殊に西瓜の如く巨大な乳房が余計に目を引く。

以前、優人が扶桑海軍支給のワイシャツを貸し与えた際は、男物故に女性が着るにはサイズ大きめだったこともあり、ボディラインは然程目立たなかった。

しかし、女性用のシャツだとリベリオンウィッチの胸元に聳え立った頂きが悪目立ちしてしまい、それらを凝視する優人の邪念が早くも擡げている。

作戦行動中にも関わらず、扶桑海軍ウィザードは煩惱を抑えられないようだ。

「作戦の第一段階は順調♪」

そう言つて優人と顔を合わせると、シャーリーはニヒツと歯を見せて笑う。

リベリオンウィッチの眩しく、サバサバした笑顔に優人の邪な考えは忽ち消え失せ、代わりに気恥ずかしさで顔が熱くなる。

扶桑海軍ウィザードは、自分が赤面していること悟られぬようすぐに視線を外し、眼下の戦況へ目をやった。

「さて、そろそろあたしらの出番だよな？」

「あ、ああ」

リベリオンウィッチの確かめるような問いに、優人は緊張を孕んだ声色で短く返す。

優人の立案した作戦は大きく三段階に分かれており、第一段階はバルクホルン、ハルトマン、竹井、若本。そしてアリヨーナ達親衛隊ウィッチが囷となつて、グラーフ・ツエツペリンの注意を引くことだった。

シャーリーの言つた通り。グラーフ・ツエツペリンは囷役を引き受けてくれたバルクホルン達にばかり意識がいつているらしい。

扶桑海軍ウィザードが提案した作戦は、今のところかなり順調に進行している。順調過ぎて恐いくらいだ。

(あの化物と渡り合えるなんて……さすがだ！)

優人は円滑な進行状況に心中でガッツポーズすると共に、頼もしい戦友達へ称賛の言葉を送る。

一方で、危険な役目を押し付けている罪悪感も感じているが、その考えをすぐに振り払った。

彼女達はそれぞれ501のWエースと扶桑海軍航空ウィッチ隊の最精鋭。そして、同じく精鋭たるインペリアルウィッチーズなのだ。

歴戦の猛者である彼女達への必要以上の気遣いは、覚悟を決めて戦いに臨む者への侮辱でしかない。

彼女達は皆強い。信じるんだ。自分は皆の力を借りて良いんだ。

シャーリーの言う通り。作戦は第一段階を経て、第二段階へ以降しようとしている。優人とシャーリーの番だ。

ウィッチ達に報いたいのなら、自分の役目をしっかりと果たせ。優人は自分に強く言い聞かせる。

「シャーリー、頼むよ」

「おう！」

快活な声で応じると、シャーリーはダンスのように身を回転させ、優人の後ろへと

回った。

さらに背後から優人の前面へ両腕を伸ばし、そのまま彼をギュウツと抱き締める。

「……………少しくつつき過ぎじゃないか？」

爆乳リベリオンウィッチに密着され、優人は恥ずかしくなったらしい。頬を紅潮させ、身体を強張らせる。

年相応にスケベなくせして、女性の大胆なスキンシップには思春期の少年を想わせるウブな反応を示す扶桑海軍ウィザード。その様がおかしかったのか。シャーリーは笑声を立てた。

「あつははははー何だ？今更緊張してるんのか？」

大きく柔らかかで、それでいて弾力のある乳房を優人の背中に押し付けながら、シャーリーは悪戯つばい笑顔で訊く。

ブリタニアの501基地滞在中。優人はシャーリーから度々大胆なスキンシップを受けていた。

優人が異性だというのもお構い無し。典型的なりべリアン——あくまでも、扶桑人の主観ないし変型だが——を絵に描いたように自由奔放で開放的な性格のシャーリーは、積極的なアプローチを繰り返しては当惑する扶桑海軍ウィザードの反応を楽しみ。

時には、ラッキースケベという名の不可抗力が作用して、優人の方から意図せず彼女

の身体——主にたわわに実った胸元の膨らみに触れることも多々あった。

スキンシップの回数は、今更数え直すのもバカらしいほどだが、何度経験してもなれない。

実際今も、服越しとはいえグラマラス・シャーリー自慢の豊満ボディがピタリと密着していることで、心臓の動悸が普段の何倍も激しくなっていた。

優人は高鳴る胸をどうにか落ち着かせようとすることも、一向に静まる気配がない。彼の心臓は持ち主の意思に逆らい、ドキドキと早鐘を打ち続ける。

「しつかりくつつかないと、途中で離れちゃうだろう？ていうかこれ、言い出しつぺは優人だろ？」

「まあ、そうだけど……別に投げるだけでも……」

「せつかく美女の方から近寄ってきてるんだ。もつと喜びなよ♪」

と、シャーリーは笑みを深くし、優人の耳にフウツツと熱を帯びた息を吹きかけた。

こそばゆい感覚に襲われ、優人は「わっ!？」と驚きの声を上げる。強張っていた扶桑海軍ウィザードの身体がビクツツと震える。

「どうだ？緊張は解けたか♪」

期待通りの反応を示してくれた扶桑海軍ウィザードの様を見て、リベリオンウィッチはケラケラと愉快そうに笑う。

「おい……！シャーリー——」

「なあ、優人」

優人は自分を玩具にする戦友へ抗議しようとするも、彼の言葉は急に神妙な表情となったシャーリーの声に遮られてしまう。

何か言いたげな様子の扶桑海軍ウィザードを尻目に、リベリオンウィッチは言葉を紡いだ。

「こうしてると、思い出さないか？」

「？」

「あたしが501に来たばかりの頃、2人でツーリングに行つたろ？」

「あ、ああ……そうだな」

と、優人は応じる。シャーリーが501基地の配属となったのは、去年——43年の11月。

歳が近いことやシャーリーのフレンドリーさも相俟って、優人が彼女と親しくなるのに然程時間は掛からなかった。

ブリタニア滞在中。彼女はルッキニーと頻繁に出掛けていたが、優人と外出することも何度かあった。

シャーリーはデートと冗談めかしていたが、実際のところは基地最寄りの民間飛行場

でシルフィー・ソードフィツシュ——連絡機として使うという名目で、廃棄された機体をシャーリーが入手・レストアした上で私物化したものを——を2人で整備するばかりで、シヨツピングや映画鑑賞等デートらしいことは殆んどしていない。

強いて言えば、シャーリーのバイクの後ろに乗せても貰ってツーリングに出掛けたことが、一度だけあつたくらいか。

「いやあ、優人には感心したよ！今まであたしのバイク乗った男共ときたら、終始喧しく叫んでたり、泣きべそ掻いたり、泡吹いて気絶するような連中ばかりだったけど。優人は悲鳴一つ上げなかつただろ？ホント、大したヤツだよ♪」

「ま、まあな……」

楽しんで話すシャーリーに対し、優人は呟くような小さめの声で曖昧な返事で会話をやり過ごす。

かつて経験したシャーリーとのツーリングの記憶が呼び起こされ、優人は我知らず洗面を作った。

あの日は互いの休暇が偶々被っていたので、シャーリーの方から「あたしのバイクで少し遠出しないか？」とのお誘いがあり、優人と2つ返事でその申し出を受けたのだ。

まだ知り合つて日の浅かつたシャーリーが、何故他の誰でもなく優人をツーリングに誘つたのか。理由は分からないし、今更訊こうとも思わない。

おそらく彼女は、世にも珍しい魔法の使い手——ウイザードである優人に興味を抱いたのだろう。

扶桑やカールスラント、ブリタニア等。ウイツチの人口が多い国でも、ウイザードは魔法力が未発現の者を含め、数人程度しかないとされる。

新興国家故に、慢性的なウイツチ不足に悩まされているシャーリーの祖国——リベリオン合衆国には一人もいないかもしれない。

ちなみにツーリングについてだが、優人は「悲鳴一つ上げなかった」のではなく、恐くて声も出なかっただけである。

ツーリングの誘いに受けたのも、バイクに乗る際にシャーリーと密着した状態になる。つまりは、グラマラスなりベリオンウイツチの身体に堂々と触れられる、という下心も少からずあったからだ。

要するに優人は、シャーリーの称賛に値する人間では全然なかったりする。

もちろん、経歴と実績。なにより彼自身の人柄が証明しているように、単なるダメな男というわけでもない。

しかし、ツーリングの件だけを見れば、シャーリーの言う「大したヤツ」ではなく、寧ろ情けない男であった。

件の体験から、今までスケベ心からシャーリーと2人乗りに臨んだ男達が、バイク恐

怖症になったであろうことが、優人には容易に想像出来た。

日頃、ストライカーユニットを駆って高速飛行を実施している航空歩兵の彼ですら耐えられない事実こそが、その証左であろう。

或いは、「クイン・オブ・スピード」としての名声や10代半ばの少女とは思えぬ発育の良い身体につられてきた悪い虫を「平和的」に追い払おうと、意図的に無茶な運転をしているのか。

尤も、友人としても異性としても好感を抱いている優人に対し、シャーリーがそんな嫌がらせめいたことなどするはずがない。

バイクで爆走するのは、やはり彼女自身のスピードマニア気質によるものであろう。

「けど、何で今その話を？」

何故、唐突に思い出話を振ったのか。優人が怪訝そうに訊くと、シャーリーは真摯な口調で応えた。

「これって、ツーリングと同じだろ？あたしが優人を目的地まで連れて行ってやるんだから……」

「まあ、そうかもな♪今度のツーリングは随分と命懸けだけど……」

眼下に佇む黒い威容——巨大ネウロイと化したカールスラントの正規空母を見やり、優人は「やれやれ」と肩を竦める。

「なあ……優人……」

ふと優人を抱き締めるシャーリーの両腕に一層力が込められる。まるで、離さないと
言わんばかりに……。

砲弾の如く巨大なサイズを誇りながら、マシユマロのように柔らかな爆乳が持つのも
も言われぬ感触、体温。存在感や圧迫感は、服越してあってもしつかりと伝わっていた。
白磁の肌や長い髪から漂う甘い香りが優人の鼻腔を攪り、扶桑海軍ウィザードの頭を
クラクラさせる。

「グラーフ・ツエツペリン、ちゃんと仕留めてこいよ」

と、シャーリーは激励というよりは、何処か懇願するように囁く。

リベリオンウィッチの囁きに耳朶を打たれ、優人はハツと我に還る。

「え？あ、ああ……もちろん……」

「映画の約束、忘れてないからな」

優人が振り返ると、シャーリーが真剣な眼差しで彼を見つめていた。

碧く輝くりベリオンウィッチの瞳は、サファイアを連想させる一方で、熱を纏った蒼
い炎にも見える。

「さあ！いくぞー！」

「お、おう！」

ウィッチとウィザードの楽しいおしゃべりは終わり、2人は行動を開始する。

シャーリーに抱えられた優人は、彼女と共にグラーフ・ツエツペリンへ向かって高速で突き進んでいく。

ブリタニアの戦いを潜り抜けた戦友を己の胸に抱き、一気に急降下していくシャーリー。彼女のムツチリとしながらもスラリと伸びた色白の美脚には、他のウィッチ同様ストライカーユニットを装備している。

尤もシャーリーが操っているのは、使い慣れた彼女の愛機——ノースリベリオンP——51D “ムスタング”ではなく、扶桑皇国海軍の旧型対地攻撃用ユニット——九九式艦上爆撃飛行脚二二型であった。

優人は、九九式艦爆を身に纏ったりベリオンウィッチの姿に思考を刺激され、本作戰の立案に至ったのだ。

旧型且つ爆撃ユニット故に速力不足が目立ち、空戦に不向きな九九式艦爆だが、シャーリーの固有魔法『超加速』によってスペックを上回る速度で見せている。

慣れないユニットによるハンデを一切感じさせぬまま、シャーリーは突進し続けた。グラーフ・ツエツペリンの艦影を見据え、接近していく。

バルクホルン等に注意が向いていたグラーフ・ツエツペリンだったが、やがて急速で接近するウィッチとウィザードの存在に気付き、すかさず対空砲火で迎撃する。

しかし、シャーリーと優人。2人のいる位置はグラーフ・ツエツペリンの直上——艦船において防御が手薄な箇所の一つだ。

さらにグラーフ・ツエツペリンは、これまでの戦闘で砲台の数が減少しており、弾幕が薄くなっている。当然、超加速を使用するシャーリーのスピードに対応仕切れてるはずもない。

「っ!?!——」

赤い光条の幾つかが、優人とシャーリーの脇を掠めるように迸る。

直撃すれば人の身など、分子レベルにまで分解してしまうネウロイのビーム。光軸に込められた熱量を肌で感じ取り、優人の額から頬にかけて冷や汗が伝う。

作戦の第二段階は、対地攻撃用ユニットを纏ったシャーリーがグラーフ・ツエツペリンへ接近。抱えた優人を爆撃弾に見立て、敵の上面目掛けて投下するというものだった。

強力な魔法シールドを展開可能な優人だ。運動エネルギーを味方につけさえすれば、飛行甲板をぶち破って内部へ侵入出来るだろう。

ここまでが第二段階であり、内部に侵入した後には、優人がコアが存在すると推測される中樞まで移動し、直接破壊するのが第三段階だった。

かつてウォーロックに侵食され、ネウロイ化した赤城に対し、シャーリーが超加速を

活かして即席のカタパルトとなり、ルッキニーを射出。重ねて、高速で撃ち出されたルッキニーが固有魔法の『高熱』『多重シールド』を展開し、強力な弾丸となって突進。ウオーロックに打撃を与えている。

シャーリーが空母「天城」より借用した九九式艦爆を見た優人は、対地ユニットの爆弾投下からヒントを得て、リベリオンウィッチの手助けを借りた上で、先述の合体技を再現に思い至ったのだ。

優人が初めに提案したのは、あくまでもグラーフ・ツエツペリンの上部を狙い、遠距離からシャーリーに投げ込んでもらうことであつた。

だが、どうせなら確実を期したいというシャーリーからの意見具申があり、優人はグラーフ・ツエツペリンへの急降下爆撃の実施を決断したのだ。

いくらシャーリーがスピード自慢な世界的エースとはいえ、さすがに機体性能の陳腐化・老朽化が顕著となっている九九式艦爆で急降下爆撃をやらせるのは気が引けたが、そこはやはり共にブリタニアの戦いを潜り抜けた戦友を信頼することにした。

「シャーリーー！」

「おうー！」

優人は自身の両足に纏つたストライカーユニット——こちらも借り物、501航空団司令であるミーナ中佐のメッサーシャルフ社製「Bf109G-2」——の回転を上

げ、同時に声で合図する。

シャーリーは強い口調で領き、速度を緩めぬまま優人をグラーフ・ツエツペリン目掛けてブン投げ……もとい、投下した。

固有魔法『超加速』の恩恵を受けた優人は、凄まじいスピードでグラーフ・ツエツペリンの飛行甲板へ直進していく。

激突の寸前に、小さいながらも頑強な魔法シールドを展開。計画通り優人はグラーフ・ツエツペリンの甲板を突き破り、内部への侵入に成功する。

一方シャーリーも、降下機動から即座に身体を引き起こし、そのまま離脱していく。一拍置いて。無数の熱線が離れていくリベリオンウィッチへ殺到するも、優人のシールドアタックを受けて船体が大きく傾いていたグラーフ・ツエツペリンに、高速で離脱する正確な対空砲撃など出来るはずもなかった。



グラーフ・ツエツペリンの艦内に侵入した優人がまず目にしたのは、ネウロイの装甲を想わせる正六角形のパネルを組み合わせたような壁に四方を覆われた広い空間だった。

ウオーロックに取り込まれた赤城は、外見的にも内装的にも以前の面影をかなり残していたが、こちらは元のグラーフ・ツエツペリンから大幅に様相が変化してしまっている。

こちらは赤城と違い、融合して丸1日程時間が経過しているからなのか。

よく見ると、禍々しい黒色で染められた内壁の何か所かが赤く点滅している。

やはりウオーロックと融合した赤城のと同様、固定砲台が設置されているのだろうか。

「あれはっ!？」

扶桑海軍ウイザードの双眸が次に捉えたのは、ネウロイのコアたる正十二面体の赤い結晶だった。

天井と船底。それぞれより紫色の結晶が生えた柱のような物体で固定され、コアの向こうにはグラーフ・ツエツペリンを乗っ取った張本人——ネウロックが鎮座している。

「っ!？」

悠然と佇んでいたネウロックが、突然両腕を広げてビームを放った。優人は咄嗟にシールドを展開し、奇襲攻撃から身を守る。

「このっ!？」

優人は条件反射的に反撃に転じる。ホルスターからM712 シュネルファイアー

“を素早く抜くなり、魔法力を纏った弾倉一個分の銃弾をコアへ撃ち込む。さすがは扶桑海軍以来の大ベテランだけあって、狙いは正確だ。

しかし、ネウロックが抱き締めるような姿勢でコアを庇ったため、銃弾は全てその頑強な腕によつて弾かれてしまう。

「やっぱり、そう簡単にはいかないか？ならー！」

不意に優人の髪や目が蒼く輝き始める。それと同時に再装填を終えたシユネルフアイアーでネウロックを牽制しつつ、降下。船底にそつと手を触れる。

「妹達の恨みだー思い知れー！」

と、優人が激昂するのに前後して、艦内に蒼き閃光が煌めく。

そして、優人が手を触れている箇所を中心に、グラス・ツエツペリンの船体は芯まで凍てついていった。

これこそ宮藤優人扶桑海軍大尉の切り札——固有魔法の上位魔法たる覚醒魔法『絶対凍結』だ。

魔法力を冷気に変換させる固有魔法の『凍結』とは異なり、手で触れたネウロイの体内へ負の温度化の成された魔法力を流し込み、文字通り絶対凍結させる魔法である。

決まればネウロイの巢ですら、丸ごと凍結させることが可能とされている。謂わば、優人の必殺技だ。

しかし、強力な反面。膨大な量の魔法力を宿している優人でさえ、魔法力の殆んどを消費してしまう事態は避けられず、さらに肉体や精神にも多大な負担を掛ける等のデメリットも存在する。

また、使い方を誤れば味方を巻き込みかねない危険な技でもあるため、501や原隊の双方にて上官の許可無しでの使用は原則として硬く禁じられているほど。

そこまで強力な攻撃系魔法を喰らっては、然しものネウロックもグラーフ・ツエツペリンも、ただでは済まない。

船体もネウロックも、ネウロックが身を呈して守っていまコアも完全に凍りついていくようだった。

やがて、時間が止まってしまったかのように周囲を沈黙が支配し、さらに数秒の時を置いた後に全てが崩壊し始めた。



凍結・崩壊を始めたグラーフ・ツエツペリンの内部より、1つの機影が闇夜の中へ躍り出る。ネウロックだ。

間一髪のところ、完全な凍結から免れたネウロックは、砕け散ったグラーフ・ツエツ

ペリンの破片や冷気に紛れ、優人にもウィッチ達にも気付かれることなく戦闘空域を飛び去っていく。

身体の半分が凍てついたネウロツクは、飛行形態にも変形出来ず、フラフラと不安定な挙動で上昇していった。

やがてネウロツクは、月明かりに照らされた雲の上へと到達する。

ここまで来れば取り敢えずは安心だ、と言わんばかりにネウロツクは動きを止め、自らを照らし出す頭上の月を見上げていた。

魔法力不足による不完全な『絶対凍結』。濃い冷気と無数の破片による視界不良。ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐やアレクサンドラ・ウラジミールヴナ・リトヴァク——通称『サーニャ』——中尉等、感知系固有魔法の使い手の不在。

ネウロツクがここまで逃げて来れたのは、多数の幸運に恵まれたからだ。しかし、その幸運もこれまでのようだ。

突如、背後に敵の存在を感知し、ネウロツクは身を反転させる。白木拵えの扶桑刀を携えた全身黒づくめの出で立ちの東洋系美女が、ストライカーユニット——『Bf109K-4』の魔導エンジンを唸らせ、ネウロツクのすぐ後ろに滞空していた。

ネウロツクに向かって艶然と微笑みかけると、美女は右手で扶桑刀の柄を握った。動物的な本能で己の危機を理解したネウロツクは、ビーム砲を展開し、すぐさま臨戦態勢

に入る。

「随分とボロボロね……」

東洋系美女——行方不明になっていた悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐は笑みを深めると、白木の鞆から白刃を引き抜いた。

彼女の背後には、カールスラント製の艦上ストライカーユニット“Bf109T”及び航空機用汎用機関銃“MG151/20”を装備した親衛隊ウィッチ——グレーテル・ホフマン親衛隊大尉以下インペリアルウィッチーズ第1飛行隊——が他の6名程控えており、上官とは対照的に緊張した面持ちで武器を構えている。

「痛いでしょ？ 苦しいでしょ？ もう頑張らなくていいのよ？ 私のところに来なさい。誰にも見つからない場所で、あなたを匿ってあげるわ♪」

甘い言葉で懐柔しようとする悠貴の姿は、彼女の力を知らない者やネウロイを知的生命体と認めていない者が見たら、さぞかし滑稽に映ることだろう。

しかし、悠貴は理解している。自分に宿っている力を持つてすれば、目の前の異形を自らに忠実な奴隷に仕立てることが出来ると……。

ネウロックは悠貴の誘いを拒絶するかのように歪な雄叫びを上げると、彼女を狙ってビームを放つ。対する悠貴はそれを容易く回避し、そのまま一気に間合いを詰める。

「抵抗する気？ 悪いけど、今のあなたじゃ私には勝てない。無意味な悪足掻きはよしな

さい」

クスクスと嘲笑する悠貴は、次に魔法力を纏わせた白刃を、異形の存在へ向けて振り下ろすのだった。

第30話 「一難去つてまた一難」

1944年9月上旬、ブリタニア連邦・首都ロンドン——

ロンドンにある連合軍西部方面統合軍総司令部。ここで謎の武装集団による籠城事件が発生してから、既に丸1日が経過していた。

拳銃や短機関銃で武装した集団は、人類連合軍として対ネウロイ共同戦線を展開している各国から派遣された将軍・提督等が、大規模な欧州反攻作戦の為一同に介するこの機を狙つて会議を占拠。15名の将官達を人質に立て籠っている。

ブリタニア軍や在武カールスラント軍の憲兵隊、帝政カールスラント皇室親衛隊麾下の軍警察師団等が対応に当たり、事態の收拾及び人質救出に動いている。

しかしながら、彼等が実施中の救出作戦は遅々として進まぬまま、時間ばかりが徒らに過ぎていく。

それもそのはず。人質になっているのは、リベリオン陸軍欧州派遣軍総司令官——ドナルド・D・アイゼンハワー元帥をはじめとする各国軍の重鎮ばかりだ。

彼等の身に何かあれば、それだけで国際問題に発展しかねない。自分達の進退にも影響する。下手をすれば首も飛びかねない。

そんな不安が指揮官達の脳裏を度々過り、思いきった行動に出られない。各部隊は事件終息を試みながらも、二の足を踏んでいた。

(まったく……)

15名いる人質の1人——カールスラント空軍ウィッチ隊総監のアドルフィーネ・ガランド少将は、内心で舌打ちをする。

彼女を含めた人質は、全員会議用テーブルから窓際に移動させられ、パイプ椅子に座らされていた。

座り心地のよろしくない安っぽい椅子に尻を置き、両手を頭の後ろで組む様はまさに虜囚の身。今次大戦が人類とネウロイではなく人類対人類の戦争だったら、こんな風景も目にすることも多々あっただろう。

ガランドも、他の将官達も長時間緊張下に置かれている割には顔色が悪くなく、寧ろとても健康的である。

膠着したまま変化の訪れない現状に焦れ、苛立ちこそすれど。人質として自らの最悪の未来を想像し、恐怖することはないようだ。

連合軍上層部に席を置く将官としての責任感、各国軍の重鎮としてプライドがそうさせているのだろうか。

ガランドにいたっては籠城事件発生直後、人質になることを“レアな経験”だと皮肉

混じりに思うなどと、肝も座っている。

ただ、代わり映えのしない退屈な状況に、さすがの彼女も苛立ちを募らせていた。

(早くシャワーを浴びて、眠りたいな……)

と、ガランドは心中で嘆息する。彼女は最高司令部附の連合軍少将としてその辣腕を奮い、統合戦闘航空団等のウィッチ隊や基地の組織化と運営指導、各方面総司令部にて各国との調整や作戦指導等を日々こなしている。

反面、ウィッチ隊総監への就任やウィッチとして“あがり”を迎えたこと。さらにカールスラント皇帝——フリードリヒ4世の意向もあり、ガランドが航空ウィッチとして出撃し、ネウロイと交戦する機会はめっきり減っていた。

彼女は自らの現状に強い不満を抱いている。ストライカーユニットを操って空を飛び、ネウロイを相手取つての空戦を生き甲斐としていた彼女にとつて、これらを制限・禁止されることはストレス以外の何物でもなく、ある種の死活問題とも言える。

同じく一線を引いた同輩のウィッチからは「大袈裟だ」と呆れられているが、ガランドはそうは思わない。

各国軍との連絡・調整において、ウィッチであり現場主義とは反りが合わない頑迷な輩と顔を合わせなくてはならないことも多く、表向きは悠揚迫らぬ態度で臨みながらも、内心辟易している。

なによりも、多くの後輩達を最前線という名の死地へ送り出しておきながら、自身は安全快適な後方にいる事実、罪悪感から胸を痛めてもいた。

面倒な会議が終わったら、とつとと私室に戻ってシャワーを浴び、染み着いた汚れと疲れを綺麗に落とす。そして、ベッドに向かつて身を投げ出して、束の間の休息を満喫する気であった。知らず知らずのうちに重なっていた心労も、それで多少はマシになる。

だが、無慈悲な神はそれすらも許してくれなかつたらしい。

「は……了解致しました」

ふと涼やかな声がして、室内にいる者達の耳朵にそつと触れる。もちろん、ガランドの耳にも届いていた。

チラツと目をやると、武装集団のリーダー格らしき西洋系の女性がブツブツと独り言ちているのが確認出来る。

「速やかなに実行します……」

（一体誰と話している……？）

ガランドを含む各国の将官達は皆、一様に同じ疑問を抱いた。

リーダー格の女性は仲間達と会話しているわけでもなければ、通信機の類いを使用しているようにも見えない。

瞬き一つせずにジッと虚空に目を据え、実体を持たない何者かと交信しているよう

だった。

変な薬でもやっつけて、幻覚でも見ているのか。怪しげな宗教にどっぷりハマリ、苛烈で過激な思想にでも目覚めているのか。或いは、その両方か。

大戦初期、黒海方面より端を発したネウロイの大規模侵攻。ヨーロッパ大陸からの撤退を経験した欧州人の中には、戦災の悲惨な記憶から一時的にでも逃れるため、非合法な薬物に手を染める者。救いを求めて怪しげな宗教に傾倒する者が多い。

近年、人類の希望たるウィッチ・ウイザード。果ては、人類の仇敵であるはずのネウロイすらも信仰対象とした新興宗教が次々に誕生しては独自の教えを説き、信者を獲得している。

また、質の悪い教団は信者をターゲットに、非合法薬物の売買を密かに行っていた。

これら人の弱味に付け込む卑劣な犯罪は増加傾向にあり、現役軍人の戦争犯罪と並んで銃後の人々を脅かしている。人類の敵は、やはりネウロイだけではないということだろう。

だが、眼前の集団はそういった下卑た輩には見えず、また胡散臭い宗教家とも思えない。

何の目的があつてこんなバカげたことを企てたのか、ガランドには分からない。しかし、奇行に走っているリーダー格の女性をはじめとした武装集団のメンバーは、一様に

高潔な意思の下で団結・行動している。

少なくとも、カールスラント空軍ウィッチ隊総監殿はそう感じ、退屈だったこともあつて彼女達に興味を抱き始めていた。

——カチャツ！

自らに関心を寄せる元ウィッチを余所に、リーダー格の女性は拳銃——カールスラント製のPPK——を取り出し、撃鉄を起こしていた。

他のメンバーも、携行している拳銃や短機関銃を射撃位置へと持ち上げる。対するガランド、そして将官達の頬を嫌な汗が伝う。

「始めなさい」

永遠にも思える数秒が経ち、リーダー格の女性が冷やかな声色で、短く命令を出す。一拍置いて、複数の銃口が一斉に火を噴いた。鮮血が宙を舞い、殺風景な会議室を彩る。

しかし、銃弾の群れに貫かれたのはガランドでも、他の将官達でもなかった。我が身の息災に安堵する間も無く、彼等は目の前の惨状に目を見開く。

鉄の雨に晒され、全身から血を吹き出したのは、なんと立て籠り犯達だったのだ。

至近距離で互いを撃ち合い、肉が抉れ、血を飛ばし、部屋中を穢す。その様は、まさに地獄絵図と形容して差し支えないものだった。

立て籠り犯等は、リーダーの女性を残して次々と力尽き、床に伏していく。

「……………」

仲間達の死に微塵の動揺も見せず、リーダーの女性は彼等の同士討ち——正しくは集団自決——を無言・無表情。そして無感動に見届けていた。

死にきれず、苦痛に悶える仲間がいれば、頭部へ銃弾を叩き込んで楽にしてやる。

人間を射殺するという精神に多大な負荷を強いる行為を事務的に熟し、女性は自らが拵えた骸達を冷然と見据える。まともな感性と倫理観の持ち主であれば、今の彼女の姿に寒気や恐怖を抱かずにはいられないだろう。

女性は軽く息を吐き、ゆつくりと瞳を閉じる。PPKを握った右手を持ち上げると、銃口をこめかみに押し付けた。

彼女が何をするつもりなのか。ガランドも将軍達も即座に理解する。

「君……や、やめっ——」

——ズガアン！

自由ガリア軍代表——シャルル・ド・ゴール将軍が制止の声を掛けるも、言い切る前に引き金が絞られた。

一筋の閃光が発砲音と共に迸り、それから一瞬遅れて脳漿が飛び散る。美麗な容姿の女性は己の鮮血で真っ赤に染め上げたのだ。

一泊置いた後、女性の身体は前のめりに倒れ、血肉で彩られた床と接触。鈍い衝突音

と、生理的嫌悪感を催す飛沫音が会議室内に反響する。

何の前触れも無しに行われた集団自決ショー。犯人グループは突然正気を失ったようだった。

異常な光景を目の当たりにした将官達の誰もが、状況を理解出来ず呆然とする。無論、ガランドも例外ではない。

暫くして、廊下へと続く扉が勢い良く開かれ、短機関銃“MP40”で武装した兵士が大勢雪崩れ込んできた。

ガランドはすぐさま部隊章を確認する。兵士達は正規軍の人間ではないが、立て籠り犯のような危険な犯罪者集団でもない。

「随分と遅い御到着じゃないか……」

と、ガランドは皮肉に口元を歪ませる。部屋に突入してきたのは、皇室親衛隊隷下の軍警察師団に所属する親衛隊員等であつた。



翌朝、ガリア共和国パ・ド・カレー——

東の空から射し込む曙光が、ドーバー海峡に面したガリア沿岸——パ・ド・カレー港

を照らし始める。

淡い赤色で彩られた洋上を、黒鉄の威容が目を引く無数の艦艇群が遊弋している。遙か東方より派遣された扶桑皇国海軍外征部隊——遣欧艦隊麾下の機動部隊だ。

指揮官である岫口中将が直率する第二航空戦隊——蒼龍型航空母艦2隻を中核に編成された本艦隊は元々、海上部隊の主戦力としてガリア反攻作戦に参加するため西欧へ派遣されていた。

しかし、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の活躍によって、ガリア上空のネウロイの巢が消滅。ガリア国内に巢食う敵側の戦力も大幅に低下していった。

これに伴い、遣欧艦隊及び西部方面統合軍の両総司令部は上陸地点をノルマンディーからパ・ド・カレーへ変更した後、新たなガリアへの逆上陸作戦を実施。岫口中将指揮下の機動部隊は、地上戦力の支援に回されていた。

筑波型戦艦4隻で編成された第三戦隊の砲撃支援と、第二航空戦隊空母航空隊の援護を受け、西部方面統合軍主力部隊——ブリタニアとりベリオンの陸軍が中心——は、作戦開始時より快進撃を続けている。

また、補給任務を帯び、以前から欧州に派遣されていた扶桑海軍正規空母——赤城型航空母艦2番艦“天城”。

そして、3番艦「グラーフ・ツェッペリン」と共に帝政カールスラントへ売却され、現在は皇室親衛隊にて運用されている4番艦「ドクトル・エッケナー」の2隻も、岬口機動部隊の艦艇群同様パ・ド・カレー湾内に停泊している。

朝日が完全に顔を出すのと時同じくして。複数の機影が編隊を組んで北方より飛来し、艦隊へ接近していった。

機影群の正体はストライカーユニットを装備した航空歩兵。各々第501統合戦闘航空団、扶桑海軍航空隊、カールスラント皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』第3飛行隊に所属するウィッチ・ウィザードだ。

昨夜の戦闘による疲れが抜けていない身体で懸命にストライカーを飛ばし、なんとか母艦が停泊する海域まで辿り着いたのだ。

艦が眼前まで迫ると、航空歩兵等は二手のグループに分かれた。一方は天城、もう一方はドクトル・エッケナーの飛行甲板へ向けて降下していく。

「優人、もう少しだからな。頑張れよ」

「あ、ああ……」

天城の甲板へ垂直降下していったグループ——501と扶桑海軍のウィッチ・ウィザード達——の中に、両脇から2名のウィッチに肩を貸してもらい、どうにか飛行している少年がいた。

扶桑海軍遣欧艦隊から、501航空団へ派遣されている航空ウイザード——宮藤優人大尉だ。

右側を支え、共に飛んでくれているリベリオン陸軍のウイツチ——「シャーリー」——とシャーロット・E・イエーガー大尉が、心配そうに彼の顔を覗き込んでいる。

ネウロイ化したグラーフ・ツエツペリンとの激戦を終え、ウイツチ達は揃いも揃って満身創痍。疲労困憊といった体だが、優人は特に消耗しているように見えた。

自分の身を案じ、励ますように言葉を掛けてくれたシャーリーに対し、喘ぐように短い声しか返せない。その事実が彼の疲弊ぶりを物語っている。

「まったく、相変わらず軟弱だな。それとも書類仕事で身体が鈍ったのか？」

優人の左側を支えている扶桑海軍ウイツチ——若本徹子中尉が、シャーリーのものは正反対の辛辣な言葉を投げ掛ける。

若本の手厳しい態度を苦々しく思ったのか。シャーリーは軽く眉を蹙めた。

「徹子、言い過ぎだよ」

もう1人の扶桑海軍ウイツチである竹井醇子大尉も、若本の言動に多少問題を感じたらしく、即座に自重を促す。

「醇子、お前こそ少し甘いんじゃないのか？この後、地中海方面で504航空団副司令の任に着くんذار？そんなことでいいのか？」

と、若本は不機嫌そうに眉を吊り上げ、少々ムキになって反論する。が、竹井も負けじと語気を強めて言い返している。

2人のやり取りを横目で見ていたシャーリーはあることに気付いた。それは若本が怒っている、ということだった。

とはいっても、優人の不甲斐無い様を見て怒っているのではない。

先の戦闘で、優人が自分の身も省みずに無茶を行ったことが許せないのだ。

ネウロイ化したグラーフ・ツエッペリンを一撃で仕留めた優人の覚醒魔法『絶対凍結』。シャーリーがこの技を目にしたのは、今回で二度目である。

相変わらず凄まじい威力だったが、その分使い手に掛かる負担も激しい。ウィッチ2人に抱えられて飛んでいるのも、そのせいだ。

シャーリーと優人の付き合いは浅く、知り合ってまだ1年と経っていない。

ブリタニアで共に戦い、強い信頼関係で結ばれた戦友兼親友という間柄だが、まだまだ互いのことはよく知らない。

しかし、仲間やネウロイの危機に晒されている人々を守る為なら、どんな無茶でも迷わずに引き受けようとする優人の人柄を、シャーリーは嫌と言うほど理解していた。

自分の妹が、自分と同じような無茶をすると厳しく叱るくせしてこの体たらく。血は繋がっていないくとも、2人が兄妹なんだと改めて認識させられる。

だがシャーリーは、そんな優人の人格を尊重している反面、少し複雑な心境だった。優人が進んでリスクを冒そうとする度、彼女は不安と恐怖で心が押し潰されそうになる。

無事に帰って来ればホツと安堵し、喜びながらも危険を冒した優人を見て腹立たしくもなった。もちろん、彼を想っていればこそその感情だ。

他の501メンバーも、優人と肩を並べて戦った経験のある航空歩兵達も同じ気持ちである。

自分達でこれ程なのだ。妹の宮藤芳佳、同輩の坂本美緒、竹井等のより近い人々はさぞや気を揉んだことだろう。無論、無茶をするのは優人に限ったことではないが……。

つまり若本も憎まれ口を叩いているが、内心では心配で仕方ないのだ。ヤンチャな弟を気に掛ける姉の心境に近いだろうか。

性格は異なるものの、優しいのに素直じゃない一面は501のペリーヌ・クロステルマン中尉やゲルトルト・バルクホルンによく似ていた。

「よっーとうちやくつく♪ふあ……眠い……」

天城に着艦すると共に、カールスラント空軍ウィッチのエアリカ・ハルトマン中尉が呑気な声を漏らし、あろうことが大口開けて欠伸をする。

例によつて、規律の鬼と名高いバルクホルンが叱責するも、慣れきつてゐるハルトマンは風と受け流す。

「出迎へは無しか……？」

と、若本が細めた双眸で天城の甲板を見渡した。通常、空母の飛行甲板というものは、整備作業中の整備要員やら甲板員やらエンジンやらで騒々しくなつてゐるものだ。

しかし今の天城の甲板には、優人達のストライカーユニットを格納する為に用意されたとみられる発進ユニットが、エレベーター上に複数——事前に連絡したので若本の発進ユニットも用意されている——置かれてゐるだけで人つ子一人見当たらない。

甲板……いや、天城全体が、作戦行動の軍艦にしては不気味なほど静まり返つてゐる。「何故、誰もいないんだ？」

「……………妙ね」

若本に続き、バルクホルンが疑問を口にする。彼女の隣には、同じ疑問を抱いた竹井が自らの顎に手を添えつつ、飛行甲板を訝しげに観察してゐた。

「でもまあ、取り敢えずはストライカーユニットを脱ぎましよう？」

そう言うのと竹井は発進ユニットのあるエレベーターまで滑走し、自身の愛機——紫電改を固定する。

背中に担いでいた九九式二号二型改13mm機関銃も、武器ラックに格納する。

「あんな戦いの後じゃ、小休止くらい取らないと、身が保たないわ」
「だよねえ」

ハルトマンが賛成したのを皮切りに、一同は各自ストラライカーユニットと携行火器の格納を始めた。

優人も、メツサーシャルフ社製B f 1 0 9 G—2——本来の持ち主はミーナ——を、近場の発進ユニットに固定する。

「優人、自分で歩けそうか？」

まだ消耗から立ち直れていない優人を見て、シャーリーが心配そうに訊ねる。

「……………なんとか」

優人はフラフラとした足取りで立ち上がる。歩行出来なくはなさそうだが、やや覚束無い。

「おいおい、本当に大丈夫かよ？」

「大丈夫だ……自力で歩け——」

——ゴウンツ！

「何だ？」

優人の言葉を遮るかのように、エレベーターが唐突に稼働・降下を始めた。

帰艦したばかりの航空歩兵と機材を載せ、艦内格納へ降りていく。

——ガクツ!

「あ……」

「へ?」

——ボフツ!

突然の揺れに襲われた扶桑海軍ウィザードは、疲弊していたこともあつて立つていられず、前のめりに転倒。そのまま、すぐ目の前にいたりべりオンウィッチの爆乳へ顔から突っ込んでしまう。

お約束というか、なんと言うか。起きるべくして起きてしまったアクシデントだと言えよう。

「なっ!?!……」

「……………」

微かに羞恥の色を滲ませた声が頭上から降り、疲労で頭が鈍くなっていた優人は、自分の置かれた状況を理解するのに時間を要した。

まあ理解したところで、彼には硬直することしか出来ないのだが……。

柔らかな谷間に挟まれている優人の視界はゼロ。彼に胸の持ち主であるりべりオンウィッチの表情を窺い知ることが出来ないが、当のシャーリーは白い頬に仄かな紅を灯して当惑している。

数時間前にまったく同じことが起こり、その時は自分から優人に抱き着き、自慢の爆乳を押し付けてきた。

にも関わらず、不可抗力でダイナマイトボディをどうこうされるのは照れくさいらしい。

暫しの間、2人とその周囲を沈黙が支配していたが、やがてシャーリーは優人の背中和後頭部へ手を回し、自分の胸元へ引き寄せた。

「……………優人、お疲れ様♪」

自然と目尻が下がり、表情を穏やかなものへ変化させたシャーリーが、一昨晚以来苦境続きだった優人の労をねぎらう。

その姿からは溢れんばかりの母性が見受けられ、まるで我が子を慈しむ母親のようだ。いずれは愛する人との間に子を授かり、強く優しい立派な母親となることだろう。

優人もまた、シャーリーの行為を無言で受け入れている。衣服越しに伝わる乳房の感触と温かみを顔全体で堪能し、頭の中は真っ白。暫くはものを考えられそうにない。

「優人、リベリアン！き、きききききき……貴様等ああああああああ……！くくくくくくく……空母の飛行甲板で、なななななな……何をして!？」

「トウルーデ、落ち着きなよお」

「これが落ち着いていられるか！大体コイツらは！グラフ・ツエツペリンと戦う直前

にも！」

激しく狼狽え、今にも2人に飛びかかりかねない様子のバルクホルンを、ハルトマンが羽交い締めにして必死に押さえ込む。

ガリア解放の英雄達が子ども染みた戯れ合いを繰り返す様子を、竹井は微笑まじげに見守り、若本はジト目を向けていた。

「コイツらが、あの音に聞く第501統合戦闘航空団とはな……」

と、若本は呆れ混じりに嘆息する。数日行動を共にし、501の自由で奔放な隊風にすっかり馴染んだ竹井とは異なり、彼女は少々理解に苦しんでいる様子だ。

竹井は竹井で、統合戦闘航空団特有の和やかな空気を甚く気に入ったらしい。

後日、自分が戦闘隊長を務めるであろう第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』も、501のように楽しく賑やかな部隊にしたいとさえ思っている。

それは軍人としてあるまじき考えかもしれない。しかしネウロイとの戦いで、常に矢面に立たされるウィッチ達には心さやらげる場所が必要だ。

例えば、501司令——ミナー・ディートリンデ・ヴィルケ中佐は、基地を家。ウィッチ達のメンバーを家族と認識しているようにも見えた。

「皆さんー」

聞き慣れた……だが何処か切羽詰まったような声音が格納庫内に響き、ウィッチ達の

視線が声のした方へ集中する。

シャーリーの深く柔らかな谷間に酔いしれていた優人もハツと顔を上げ、後ろを振り返った。

奥の暗がりから軽やかな足音が聞こえ、次いで2人分の人影が浮かび上がる。

1人は亜麻色の長い髪を三つ編みに結んだ蒼色の瞳を持つグラマラスな体型の少女。もう1人は翡翠色の瞳と色素の薄い髪、北欧生まれであることを示す真っ白な肌が印象的な小柄な少女だった。

彼女達はブリタニア空軍軍曹——リネット・ビショップと、オラーシャ陸軍中尉——アレクサンドラ・ウラジミロヴナ・リトヴァク。

501部隊のメンバーで、仲間内ではそれぞれ“リーネ” “サーニヤ”の愛称で呼ばれている。

「リーネとサーニヤか」

「肩で息なんてして、どうしてたの？」

息を切らしながら駆け寄ってきたリーネ達に、バルクホルンとハルトマンが順に声を掛ける。

先の戦闘の折。芳佳、サーニヤ、エイラの3人は優人の指示を受け、地上へ降りてミーナを回収。自分達の隊長を連れ、グラーフ・ツェッペリンと交戦中のメンバー——優人、

バルクホルン、ハルトマン、シャーリー——よりも一足早く天城へ帰艦していた。

また、リーネを含めた3人——他にはペリーヌとルツキーニがいる——は、諸事情により出撃はせず、天城で待機となっていた。

「はあはあ……た、大変です。ミーナ隊長が……」

「それに……はあはあ……エイラや芳佳ちゃんも……」

「芳佳がどうかしたのか!？」

サーニヤの口から漏れた愛する妹の名を耳聴く聞きつけた扶桑海軍ウイザードは、弾かれたようにリベリオンウイツチから離れ、2人へ駆け寄っていく。

離れていく優人の後ろ姿を、シャーリーが少し寂しそうな表情で見つめていたが、優人が気付くことはなかった。

「じ、実は——」

「あらあ？」

リーネが乱れた息を整えつつ、サーニヤに代わって説明しようとする。

だが、そんな彼女の声を遮るかのように、また新たな声が格納庫内に響き渡った。

一同が目を向けると、声の発生源に1人の女性が佇んでいた。

彼女は501のメンバーにとって、とても関わり深い人物である。

「ミーナ!？」

と、バルクホルンが驚愕に目を見開く。声の主はミーナだった。

前述の通り。サーニヤ達と共に帰投したはずなので、ミーナが既に天城にいて優人達を出迎えることは、別段おかしくはない。おかしいのは彼女の出で立ちだった。

「やつほく♪……って、何その格好？」

隣で固まっているバルクホルンを余所に、ハルトマンは一昨日ぶりに再会した戦友兼上官にヒラヒラと手を振って挨拶する。

が、然しものウルトラエースも、今のミーナの服装は無視出来なかつた。

ミーナは見慣れた制服姿ではなく私服……よりストレートに言えば、下着姿だったのだ。

それも、黒い布地に深紅の薔薇の模様が描かれた凝ったデザインのブラとローライズズボン、ニーソックス。

ズボンとニーソックスは真っ赤なガーターベルトで繋がっており、コケティッシュな印象を受ける。

色彩といい、作りといい。なんと悩ましいデザインの衣服だろう。

ミーナ本人の美貌も相俟って、周囲を威圧せんばかりの色香を漂わせている。

「あ、優人お♪帰ってきたのねえ♪」

「うおっ!？」

ミーナはハルトマンの質問に応えず、跳び跳ねるかの如き動作で優人に抱き着いた。優人は、その拍子に危うく転倒しかけるも、どうにか持ちこたえ、ミーナを抱き留めることに成功する。

(う………これはまずい……非常にまずいぞ)

肌や髪の匂い、感触、温もり。シャリーの時とは違い、それらを衣服越しではなくほぼ直に触れ、感じることとなり、優人の心臓はすぐに早鐘を打ち始める。

同時に彼の中にある男の性というか。ケダモノの本能が首を擡げるも、扶桑海軍ウィザードは自らの理性を総動員して抑え込んだ。

「ミーナ、一体何を——」

「もう寂しかったわあ………」

ミーナは呂律の回らぬ口調で、スリスリと甘えるように身体を擦り付けてくる。

どうやら、扶桑酒を飲んだ際の酔いがまだ覚めていないらしい。

緋色の髪と同色の瞳は艶かしく潤み、目元は朱色に染まっている。

アルコールのせいで人格が豹変してしまっており、その上に見当識も低下し、優人を恋人か何かと誤認しているようだった。

「お願いだから、もっと早く帰ってきてえ♪私、あなたと一緒にベッドへ入らないと、眠れないのお♪」

「はあ!？」

酔いに任せてとんでもないことを言い出すミーナ。優人は素っ頓狂な声を上げる。

「み、ミーナ……一体何を言ってる……」

「どうなってるんだコリヤ？」

「いつものミーナじゃない……」

動揺を禁じ得ないバルクホルン、シャーリー、ハルトマンの3人が口々に言う。

今のミーナは、彼女達が知っている淑やかで気品に溢れたウィッチ隊長ではなく、淫らに男を誘う魔性の女となっている。

「なあに？ 恥ずかしがってるのお？ 私の寝込みを襲って、服を脱がせたクセにい♪」

「ばっ!?! 誤解を招く言い方するなよ!」

「え? それってどういう?」

と、聞き咎めたハルトマンが2人に訊ねる。すると、ミーナが彼女の方へ振り向き、ギロツと目を剥いた。

「フラウ……」

「な、何? あなた……柔らかそうな唇してるわね? 肌もとっても綺麗♪」

「え?」

「ねえ、今から私の部屋に来ない? あくんなことやこくんなこととして上げるわよ♪」

「い、いい！いいよ！間に合ってます！」

「遠慮しないの♪さあ、行きましよう？」

「や、やめてよ！もう！」

「待ちなさ〜い♪」

脱兎の如く逃げたずハルトマンを、肉食獣のようなミーナが追いかけていく。

立ち去っていく2人の姿を、優人とウィッチーズは呆然と見送る。

いつの間にか。リーネとサーニヤも姿を消していた。ミーナが現れた直後に、格納庫を去ったらしい。

「助かった……」

ミーナの意識がハルトマンに向けたことで、優人は結果的に解放された。

彼女が上手いこと逃げ切るのを祈りつつ、扶桑海軍ウィザードはホツと息を吐く。

しかし、喜びも束の間。優人は何者かによって羽交い締めにされる。

「わっ!?!何だ!?!」

背中に当たる柔らかな感触から、自分を拘束しているのがシャーリーだと優人は理解する。

何事かと思い、チラツと背後に目をやる。視線の先では、リベリオンウィッチがいつも通りのサバサバとした笑顔を浮かべていた。が、心なしか目が笑っていない。

「優人」

今度は正面から凄みの利いた声ができる。視線を前に戻すと、両拳にメリケンサックを装備したバルクホルンが視界に入った。

「さっきの話は本当か？」

「え？」

「ミーナの服を裸にひん剥いたそうだな？」

「あ……………」

「そうか、事実なんだな？」

と、バルクホルンは緩慢な動きで、拘束された優人の元に一步。また一步と、ゆっくり近づいていく。

「ま、待ってくれ！バルクホルン！おい、お前等！たすけろ！」

優人は藁に縋る思いで同期の桜達に助けを求める。しかし、彼女達は無慈悲だった。

「これは困ったな……………」

「ええ、助ける理由が見当たらないな」

と、若本と竹井は揃って肩を竦めてみせた。優人を救う気などサラサラないらしい。

「お前！そんな薄情な！」

「何処を見ている？」

声につられて正面へ向き直ると、鬼気迫る表情のバルクホルンが眼前まで迫っていた。

「ち、ちよつと……待っ——」

——ガッ!

優人の懇願は、鈍く重々しい一撃によって掻き消された。

第3 1話「淑女は慎ましやか」(改訂版)

1944年9月、早朝ブリタニア連邦ロンドン――

「はあ………！」

カールスラント空軍ウィッチ隊総監――アドルフイーネ・ガランド少将は、大きく溜め息を吐きながらベッドに身を投げた。

数分前にシャワーを浴び終えたばかりであるガランドの肌は上気してピンクの色彩が灯り、艶やかな裸体には客室備え付けのバスローブが巻かれている。

長い黒髪とスラリと伸びた170cmの長身には、まだ僅かばかりの温かな湯が滴っている。どうやら身体をちゃんと拭かなかつたらしい。

彼女が魔法力で守られているウィッチでなければ、明日には風邪を引くことだろう。肌を伝い、純白のシートにも水滴が垂れ、染みを作っている。しかし、ガランドはそんなことにする素振りも見せず、寝転がったまま脱力した様子で天井を仰ぐ。

彼女がいるのは、ロンドン市内にあるホテルの一室。西部方面統合軍総司令部へ出張する際、彼女は当ホテルを宿泊先として利用していた。

何度も泊まるうちにすっかり常連となり、ガランド自身が著名なウィッチなこと

あつてか。支配人やフロントのスタッフには顔と名を覚えられ、終始笑顔で対応される。

しかし、ガランドの方は揉み手でおべっかを使ってくる彼等のことを好ましく思っていない。

「2日もシャワーを浴びられなかったのは、随分久しぶりだな……」

ガランドは呆然と天井を眺めながら何気無しに呟く。本大戦初期の時点では、彼女はまだ現役のウィッチであつた。

ヒスパニア戦役を経験したベテラン航空ウィッチの1人として、カールスラント撤退戦やガリアから対岸に位置するブリタニアへの撤退作戦——ダイナモ作戦等の長い撤退戦に参加していた。

その都合上。現役時代は食事や入浴、休憩が摂れないこと等さらにあつたが、ネウロイとの戦闘を思えば然程苦でもなかった。ここまでの疲労感に襲われることも少なかった。

「やれやれ、歳は取りたくないものだな」

彼女はまだまだ若く、加齢を気にするような年齢ではない。が、ウィッチとして高齢であるためそう考えるのだろう。

近頃独り言が増えた自らを、ガランドはやはり老人のようだと自嘲しつつ、疲労で鈍

くなっている思考を働かせる。

思案するのは、一昨日の夜に彼女が巻き込まれた前代未聞の重大な事件——人類連合軍上層部に名を連ねる将官十数名を人質に取った籠城事件についてだ。

一昨日の晩。ロンドン市内にある西部方面統合軍総司令部庁舎内会議室にて。ガランドはブリタニアに滞在中の将官等と大規模反攻作戦及び506以降の統合戦闘航空団設立を主な議題に、会議——ガランドからすれば話し合いという名の子どもの喧嘩——をしていた。

順調に進行しているとは言い難い会議を狙い澄ましたかのように、件の籠城事件が起きたのだ。

ろくに警護もいかなかった会議室は、乗り込んで来た正体不明の武装集団の手により瞬く間に占拠され、会議に出席していたガランド等各国軍の重鎮15名は人質となった。

件の集団は、人類統合戦線に参加している各国軍隊の制式銃で武装し、着ていた服も扶桑海軍第二種軍装等、各軍にて全て支給される物ばかり。与していた人種もアジア系、欧米系、地中海人種と様々。

その多種多様な顔触れは、ガランドがダウディング元ブリタニア空軍大将と共に設立を後押しした統合戦闘航空団のメンバー構成に通ずるところもあり、ある意味壯観な光景であった。

その後。翌日の夜まで丸1日の間、ガランド達は生殺与奪を握られていた。会議に参加した将官の中には、ネウロイとの戦い以外では初めて命の危機に晒された者もいたことだろう。

そして昨晚。籠城事件の犯人等は唐突な集団自決。その直後に、発砲を聞き付けた皇室親衛隊軍警察師団が強行突入を敢行。犯人グループが既に全員死亡していたことから作戦は成功する。

人質となつて約24時間。将官達は漸く解放され、簡単な事情聴取と検査をだけを済ませ、各々帰路に就いた。

しかしながら事件は解決したものの、立て籠り犯の目的や彼等の正体等は以前不明のままである。

何が目的だったのか。何故人質を取っておきながら、何も要求しなかったのか。何故連合総司令部で事を起こしたのか。何故、突然集団自決に踏み切ったのか。わからないことだらけだ。

死体相手に尋問など出来る筈もなく、真相は闇の中。死人に口無しとはよく言ったものだ。

犯人グループの正体及び目的に関しては、高官等の間で「連合軍内部の不穏分子がクーデターを画策した」、との見解が成されている。

だが、これも情報量が圧倒的に不足している現状では推測の域を出ない。

仮にクーデターを謀ったと過程しても、籠城時に反乱の意思を示すための声明一つも出さなかったのは、やはり妙だ。

犯人等の遺体や持ち物——特に銃器類や軍関係の装備——等を徹底的に調べれば、或いは何か掴めたかもしれない。

しかし残念ながら、後の調査や犯人等の遺体を含む物証の回収・保管は、親衛隊麾下の諜報機関及び警察師団に一任されることが早々に決定し、カールスラント国防軍をはじめとするあらゆる組織の介入が許されなくなった。

籠城事件解決に尽力したカールスラント及びブリタニア軍の憲兵隊はもちろん、連合軍高官等からは抗議の声が上がったが、これらは程無くして鎮静化することとなる。

おそらくはカールスラント宰相か。或いはライナルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ親衛隊元帥が、各国の政府や軍上層部へ根回しを行ったのだろう。

「はあ……」

ガランドはうんざりしたように嘆息する。今回の事件で、国家・民族・宗教の垣根を越え、団結してネウロイに立ち向かわねばならない人類連合軍の様々な問題が露見してしまった。

連合軍にとって最も重要施設の一つである方面総司令部の警備を容易く擦り抜け、殆

んど将兵から怪しまれることもなく司令部施設内の奥へと進み、将官達が一同に介している会議室まで侵入・占拠したのだ。

この事実から、総司令部の警備態勢の杜撰さと、将兵達の警戒心の不足が窺える。

挙げ句、対応に当たった部隊は時間を丸一日費やしても事態收拾出来ず、結果無為な時を過ごしていた。

上層部に席を置く将官達が捕らわれた前代未聞の事件だったとしても、やはり憲兵隊や警察師団の練度不足・対応力不足の問題は避けられないだろう。

もし犯人グループが集団自決という奇行に走らなかつたら、籠城事件はより長引き、将官達の中から犠牲者も出ていたはず。もしそうなっていれば、今後の反攻作戦への影響は避けられなかつた。

これらの問題は、対ネウロイ戦やそれ以上に水面下で繰り広げられている国家間の覇権争いを重要視していたこと。協調し合わなければならぬ各国が、自国の発展にばかり意識向けていたこと。なにより多くの人間がネウロイばかりを敵だと思い、人間同士の争いを想定していなかつたこと等が原因だと思われる。

幸か不幸か。籠城事件の影響で一時的に指揮系統が麻痺し、通常通り機能していなかつた西部方面統合軍総司令部の役割を、親衛隊の西方装甲軍司令部が一時的に代行したため、ガリア方面の作戦行動にまで影響は及ばなかつた。

この報告を耳にした際、ガランドの心には引つ掛かるものがあつた。西方装甲軍——親衛隊の対応が早すぎる、と……。

それとほぼ同じ時期に、同親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』が総司令部の預かり知らぬところで活動していたとの報せを聞いた際は、キナ臭く思ったが……。

帝政カールスラント皇室親衛隊——殊に悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐率いるインペリアルウィッチーズの動向には、以前から不可解な点が多い。悠貴は一体何を企んでいるのやら……。

「……あの色情魔、何を企んでいる」

政敵に対する不信感を漏らすと、ガランドはゆっくり目蓋を閉じ、眠りの淵へ落ちていった。



翌朝、ガリア共和国パ・ド・カレー沖——

連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』。扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦赤城型航空母艦2番艦“天城”。そして、第1独立戦闘航空団『インペリアル

ウィッチーズ』を中心とした帝政カールスラント皇室親衛隊及び赤城型3番艦『ドクトル・エツケナー』。

指揮系統の異なる3つの部隊を一時的に編合し、編成された混成空母戦隊は、ネウロックに取り込まれ、超巨大ネウロイと化したグラーフ・ツエツペリンとの激戦を制し、ネウロイ側のガリア再侵攻の阻止に成功する。

戦力不足故にネウロックが出現したエルベ川河口付近の巢は破壊出来なかったものの、501部隊にとってはガリア解放に続く快挙であった。

一足早く扶桑へ帰国した501副司令兼ウィッチ隊戦闘隊長の坂本美緒扶桑海軍少佐がこの報せを聞けば、彼女の性格から仲間達と共にネウロックと戦えなかったことを強く悔やむだろう。

任務を終えた臨時編成の空母戦隊は間も無く解散となり、天城に乗艦していた親衛隊は即座に撤収。ドクトル・エツケナーに移譲、ポーツマスで補給を受けた後ノイエ・カールスラントへの帰路に就く予定だ。

昨晩の戦闘中で行方不明となっていたインペリアルウィッチーズ司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐もいつの間にか帰投していた。しかも、天城ではなくドクトル・エツケナーの方に……。

昨日。何食わぬ顔で501のメンバー数名と天城副長に儀礼程度の挨拶済ませると、

インペリアルウィッチーズや他の親衛隊將兵諸共ドクトル・エツケナーへ移乗していった。

あれだけの人員と物資を伴っていたにも関わらず、僅かな時間で撤収作業を終えるとは……。

もしま、皇室親衛隊の連中は作戦の成否に関係なく、早々に引き上げるつもりだったのだろうか。

結局501と竹井、そして艦長をはじめとする天城乗員達正規軍組は、共同戦線という名目で悠貴等親衛隊の面々に散々振り回され続けたわけだ。

天城艦内を我が物顔で闊歩された扶桑海軍將兵達は大変業腹だっただろう。

それは方面総司令部直属でありながら、インペリアルウィッチーズの小間使いにされた501の隊員達も同じだ。

特に軍人氣質故のバルクホルンは、政治色の強い親衛隊とは極めて折り合いが悪かったため、彼等がも立ち去った今も苛立ちを募らせていた。

ともあれ、これで天城は本来の役目である補給任務に戻れる。501のメンバーも、時期に各々原隊復帰——一部の隊員は予備役扱い——となるだろう。これで第501統合戦闘航空団も漸く解散だ。



天城艦内・ガントリーム——

「いっ………」

苦悶の表情を浮かべた扶桑海軍ウィザード——宮藤優人大尉は、右手で顔を押さえながら小声で呻く。

メリケンサックで携えたしたカールスラントウィッチの剛拳によつて蹂躪され、彼の顔はボロボロに変形していた。

治療が完了し、痛みは疾づくに消え失せているはずだが、どうも苦痛が身体に染み付いてしまっているように感じられる。一種のトラウマか。

強力な治癒魔法の使い手である妹が傍にいなければ、長期間の入院や整形手術を覚悟しなくてはならなかったかもしれない。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

と、心配そうに優人の顔を覗き込んでくるのは、彼の妹で同じく扶桑海軍航空歩兵の宮藤芳佳軍曹だ。

先述の通り。彼女は固有魔法『治癒魔法』が扱える。芳佳のおかげで、優人の顔面は短い時間で元の状態に修復されたのだった。

お兄ちゃん大好きっ子の芳佳としても、優人の変わり果てた痛々しくてを見てられなかったのだろう。

不条理且つ容赦の無い暴力をその身に受け、多発顔面骨折という重症を負っていた優人をほぼ完璧に治癒したのだから、大したものだ。

「うん、大丈夫だよ♪」

妹の声を聞いて相好を崩した優人は、安心させようと優しくに応じる。しかし、芳佳はまだ不安げだ。

「本当に？まだ痛むんじゃない？」

「平気だって……ほら！お前のおかげで、前よりずっと男前な顔になったよ！」

と、優人はすぐ隣に座っている芳佳の方へグツと身体を近付ける。

傷や痣が綺麗に無くなった顔を間近で見せることで、もう大丈夫だと確かめさせているのだ。

「あ、うん……」

ふと芳佳の柔らかな頬がポツと赤く染まり、恥ずかしそうに顔を伏せてしまう。

「どうしたんだ？」

「お兄ちゃん。やっぱりカッコいいなあ、って……」

「あんまり見ると、お代頂くぞ？」

ニヤついた優人は冗談めかして言う。芳佳はセーラー服のポケットから数枚の紙幣を取り出し、兄へ差し出す。

「こゝ、これで足りるかな？」

緊張を孕んだ声音で問う妹の手から紙幣を拾い上げ、優人は笑みを深めた。

次に紙幣を持っているのと反対側の手を使って、芳佳の顎を持ち上げる。

「あ……………」

「払つた分、好きだけ見ていいからな♪」

「……………うん……………」

優しく微笑み掛けるシスコン兄と、頬の朱を濃くするブラコン妹。彼等は時間が経つのも忘れ、暫しの間互いを見つめ合う。

「おいオマエ等、そーゆうのは余所でやれよナ」

完全に2人の世界に入ってしまった宮藤兄妹。カップルの如くいチャつく優人と芳佳に向かつて、ぶつきらぼうな声が自重を促す。

声の主は、スオムス空軍トップエース——エイラ・イルマタル・ユージェイライネン少尉だ。

彼女の傍らには、オラーシャ陸軍優秀なナイトウィッチ——アレクサンドラ・ウラジミールヴナ・リトヴャク中尉の姿もある。

「優人さんと芳佳ちゃん、スゴく仲良しね♪」

「フン、鬱陶しいだけダロ」

宮藤兄妹の仲睦まじい光景を柔らかな笑顔で見守るサーニャー——アレクサンドラのオラーシヤ語由来の愛称——とは対照的に、エイラは面白くなさそうに鼻を鳴らす。

「けど、何だか久々だよね♪」

両手を頭の後ろで組んだカールスラントウィッチ——エーリカ・ハルトマン中尉が、北欧出身者2人の言葉を継ぐ。

「優人とミーナは、丸1日敵地で孤立していたからな……」

ハルトマンの右隣では、同じくカールスラント空軍ウィッチであるゲルトルート・バルクホルン大尉が、胸の前で腕を組んで立っている。

彼女は先程から、宮藤兄妹の様子をチラチラと窺いながら、時折居心地悪そうに身体を揺すっていた。

それもそのはず。話を聞かずに事情も確かめずに早合点し、酷い誤解から優人の顔面を派手に凹ませたのはバルクホルンなのだ。

室内には、501以外にもウィッチが2名——扶桑海軍の竹井醇子大尉と若本徹子中尉の姿もあった。

竹井は宮藤兄妹のやり取りを「あらあら♪」と微笑ましそうに眺め、若本は例によつ

て呆れた様子で肩を竦めている。

現在ガンルームには、諸事情で天城に乗艦している竹井、若本両扶桑海軍ウィッチ及び501な隊員達が集まっていた。しかし、501の方は集まりが悪く、約半数——6名しかいない。

この場にはいない501メンバーのうち、司令のミーナは指揮系統が回復した西部方面総司令部に、ネウロックの件を報告するため、今は電信室にいるはずだ。

シャーリーとリーネは、それぞれルッキニーとペリーヌを探して、天城艦内を歩き回っている。

「ところでさあ、優人」

ふとハルトマンが悪戯っぽい笑みながら、優人に訊ねた。

「ホントにミーナとは何も無かったの？」

ネウロイ化したグラーフ・ツエッペリンとの初戦に臨んだ一昨日の夕刻。

紆余曲折あって、ネウロイの勢力下に墜落した優人と501部隊司令ミーナ・デイー
トリンデ・ヴィルケ中佐は、ネウロイから逃れるため廃屋に潜み、そこで丸1日の時を
過ごしていた。

優人とミーナに限って、間違いを起こしたりはしないだろうが、年頃の男女が2人きり
で何者にも介入されない環境で寝食を共にする。

そう聞けば余計な勘繰りをしたくなるのが、人情というものだ。

「残念ながら、お前が期待しているようなことは何も無かったよ」

「ちえくっ！優人の甲斐性無し！」

「止めんかハルトマン！はしたない！」

不満げに唇を尖らせるハルトマンを、バルクホルンが怒号を上げて叱責する。

生真面目な性格の彼女からすれば、この手の話題は聞くに堪えないものだ。

バルクホルンに限らず、芳佳やサーニヤも赤面した顔を俯かせるなど。ウブな反応を見せていた。

「悪いけど。孤立無援の状況で女に手を出すほど落ちぶれちゃいないさ」

「あら？優人って意外と紳士的なのね♪」

クスクスと笑声を立てながら、竹井が茶化すように言う。

「ふくん……あつ！優人見て！シャーリーとリーネがすっぽんぽん入ってきたよ！」

「なにっ!？」

ハルトマンが口にした魅力的な言葉につられ、優人は反射的に背後の扉を振り返る。

「……………あれ？」

当然といえば当然だが、501が誇る爆乳ウィッチ達の姿は何処にも無い。

「にやははは！引っ掛かったあ〜♪」

呆氣に取られる扶桑海軍ウイザードを指差し、ハルトマンは何とも楽しげに笑う。彼女の笑い声で、優人はハルトマンが自分を騙したことに漸く気付く。

普通は騙されないが、男の性というか。本能的なものが反応してしまったらしい。

「ハルトマン、お前っ！タチの悪い嘘を吐くな！」

「今ので引つ掛かったお前こそアホだろう？」

「優人。まったく、お前といかヤツは……」

「優人さ……宮藤大尉も、男の子なんですな……」

抗議の声を上げる優人に対し若本とバルクホルンが揃って軽蔑の眼差しを向け、サーニャは呼び方を他人行儀なものに変えて関係に距離を取ろうとしていた。

堅物大尉と扶桑海軍中尉はともかく、優しい性格のサーニャも、男性のスケベ心には少々敵しいようだ。

「ちよつと待て！俺の言い分も聞いてくれ！」

「是非聞かせてもらおうか？」

必死に懇願する優人に、バルクホルンが幾ばくかの慈悲を見せた。

「俺は女性が好きな健全な男だ。『ひよつとしたら』『もしかして』の僅かな可能性についてい縋つてしまふ純粋な男心を持つてるんだ！そこを理解してくれよ！」

「あくはいいい。純粋にスケベな男心でしょ？」

「エンガチヨ」

竹井とエイラまでもが容赦の無い追い討ちをかけてくる。

ほぼ孤立無援の状態になった優人は、傍らに控えている妹に助け舟を求めるが、それがまずかった。

「よ、芳佳……」

「お兄ちゃんのえつち……」

「なっ!?!」

最愛の妹にまで突き放されてしまい、扶桑海軍ウィザードは完全に孤立する。

ウィッチ達達の精神でダメージが蓄積していた優人の心に、芳佳が止めを刺したのだ。

「は、はははは……」

両の瞳に薄く涙を浮かべた優人は、乾いた笑い声を上げながら、フラフラと覚束無い足取りで歩き出す。

「ちよつと、風呂入ってさっぱりしてくるよ……お湯で煩惱を流さない……はははは……」

そう言い残し、ガンルームを後にする優人の哀愁漂う後ろ姿を、ウィッチ達は総出で見送った。

「少し苛め過ぎたかしら?」

「これくらい葉だろ？」

竹井が口に出した疑問に応じた若本が、さらに言葉が続ける。

「アイツがミーナ中佐に飲酒させたせいで、天城は大変だったんだからな」

ネウロイの勢力下で孤立した際、優人とミーナは廃墟となった扶桑旅館風のホテルに身を潜めていた。

ホテルには、ノイエ・カールスラント疎開時に持ち出せなかった品が多く残されており、厨房には大量の扶桑酒が置かれたままになっていた。

ミーナはその扶桑酒を飲んで悪酔いしてしまい、まず優人や自らを迎えに来た芳佳を誘惑染みた絡み酒を仕掛け、天城に戻ってからは艦内のウィッチや扶桑の海軍将兵に片っ端から手を出し、艦を大混乱に陥れたのだ。

この騒ぎは、ミーナがアルコールに負けて眠りに付くまで続いていた。

主な被害者は501の芳佳、エイラ、ルッキニー、ペリーヌ及び分隊長級を含めた天城乗員の大半。

皆一様に服が肌蹴け、口紅を引いた唇に酷似した赤い痣が複数できていたという点が共通している。

一体被害者達は、酔っ払って我を忘れた501部隊司令殿に“ナニ”をされたのだろうか。

しかし、事件が起きたのが、カールスラントの皇室親衛隊が天城から撤退した後だったこと。加害者及び被害者の殆んどが事件に関する記憶を失っていたことは、不幸中の幸いとも言うべきか。

残り当事者で話し合った結果。あまりにあんな出来事故、この一件は西部方面総司令部や遣欧艦隊へは報告せず秘密にしたまま、各々墓まで持つていくことに決まった。

「優人つてば、新人の時から女の子に好かれやすかったのに。あの天性の女難が祟つて悲惨な目にあつてたわよねえ♪」

「そんなヤツが、今やガリア解放の英雄とは。お前や美緒もそうだが、俺はすっかり先を越されたな……」

「今からでも統合戦闘航空団に志願してみたら?」

「バカ言え、俺は直に引退する身だぞ? よしんば入れたとして、余所の国の連中と上手くやれる気がしない」

「そんなことないと思うけど。ところで、あなたはもうしてまた天城に?」

と、竹井は雑談ついでに素朴な疑問をぶつける。昨日、対グラーフ・ツエツペリン戦の援軍という役目を終えて一度蒼龍に戻った若本が、何故再び天城を訪れているのか。

「おっと、忘れていたな。おい、優人の妹!」

竹井に訊かれたことで、天城へ来た用件を思い出したらしい。若本は芳佳に声を掛けた。

「あ、はーい！」

芳佳は返事をする、小走りで先輩ウィッチの元へ駆け寄っていく。

◇ ◇ ◇

同時刻、天城艦内・浴場——

「まったく、どいつもこいつも友達甲斐のない……」

脱衣所に来るまでの間に多少はメンタルが回復したらしい優人は、ブツブツと不平を漏らしながら服を脱いでいく。

「風呂から出た頃には芳佳の機嫌も直ってるよな？」

かような不安を胸中に滲ませつつ、脱衣籠に制服や下着を投げ込んで全裸になる。

「当番兵は……いないのか？」

優人はキョロキョロと周りを見回す。艦船において真水は貴重なものだ。

なので風呂も汲み上げ、濾過した海水を利用した湯である。

真水の湯は、配給された券——1枚で洗面器1杯——と引き換えて支給される。その

ため、当番兵が近くに控えているはずだが、見当たらない。

「トイレかな?」

そう結論付け、優人は勝手に配給券と真水の入った洗面器を交換すると、手拭いを肩にかけて浴室へ踏み入った。

程好い温度・湿度が保たれ、浴槽から立ち上る真つ白な湯気で満たされた浴室が、扶桑海軍ウィザードを出迎える。

「ふう〜……」

あまりの心地好さに自然と溜め息が漏れる。軍隊生活に組み込まれようと、扶桑人にとつて風呂は欠かせない存在だ。

「さて、身体を洗うか!」

「誰?!」

「……………えっ?」

どうやら先客がいたらしい。相手は優人の独り言に反応して声を返してきた。

軍艦の浴場に、自分以外の人間がいること自体は何もおかしくない。

問題なのは浴室内で反響し、優人の耳朵を打った相手方の声が、明らかに男のものであることだ。

次第に湯気が晴れていき、一寸先も見えづらかった浴室の全体像が露になる。もちろん

ん、先客の姿も……。

やがて、湯気の奥から一人の美少女が現れる。一点の曇りも見当たらない白い肌に華奢な体格。絹で織ったようにしなやかで光沢のある長い金髪と、同じ色彩を放つ瞳。

そして、トレードマークのメガネを掛けた少女は、自由ガリア空軍のエースウィッチ——ペリーヌ・クロステルマン中尉であった。

神の悪戯か、悪魔の罠か。浴室で遭遇してしまった優人とペリーヌは、あまりのことに双方思考が停止してしまっているようだ。

しばらくは、お互い一糸纏わぬ肢体を晒して呆然と見つめ合っていたが、次第にそれぞれが己の置かれた状況を理解し始める。

「あ……ああ……」

自分が今、裸で異性の前に立っていること。また、自分も優人の裸体をその双眸でバツチリ捉えてしまっていること。

それらを認識したペリーヌの顔が真っ赤に染まり、身体はワナワナと震え出す。

「わ、悪い！すぐ出て行くから！」

慌てた様子で両手を顔の前で振りつつ、優人は脱衣場へ退がっていく。だが、そんな彼の後退を阻むものがあつた。石鹼だ。

浴室であるため、石鹼が置かれていること自体は何らおかしくない。しかしその石鹼

は、どういいうわけか床に転がっていたのである。

——ツルツ!

「うわっ!」

「え? きゃあああああ!」

ペリーヌの美しき裸体に気を取られていた扶桑海軍ウィザードは、危険物が自らの足元に存在していることに気付けなかった。

石鹼を踏んで足を滑らせた優人は、そのまま前のめりに転んでしまう。

当然、正面にはペリーヌがいるので、彼女を巻き込む——或いは飛び付く形で激突し、2人は揃って転倒した。だが、これで終わりではなかった。

「うう、背中が……」

「いたたた……」

——ムニユン!

「へ?」

「……え?」

ペリーヌに覆い被さるようにして倒れた優人が、痛みを口にしつつ身体を起こす。

直後、扶桑海軍ウィザードとガリア貴族令嬢は、順に間の抜けた声を漏らし、硬直する。

優人の右手が、ペリーヌの小ぶりな胸の左乳房をしっかりと捉えていた。

熱い湯気に満たされた空間で凍り付く2人。数瞬間を置いた後、我に還った優人が焦り気味に弁明する。

「ペ、ペリーヌ！これはそのっ！」

「……………」

「え〜つと……………あの……………」

「……………」

未だ硬直しているペリーヌは、心ここに有らずといった感じだが、それでも慌てふためく優人の言葉に辛うじて耳を傾けている。

「ペリーヌの胸って、その……………大きくはないけど。何て言うか、淑女のような慎ましさがあるな」

何故そんなバカなことを言ったのか。それは優人自身にも分からない。衝撃的な出来事が続け様に起きたため、おかしくなっているのだろうか。

「〜っ！」

優人の爆弾発言に晒されたペリーヌは、顔を染め上げていた羞恥の紅を濃くし、声にならない悲鳴を上げる。それに伴い、彼女の使い魔であるシャルトリューの耳と尻尾が出現し、身体は青白い光を帯電し始める。

この後何が起きるのか。扶桑海軍ウィザードは即座に理解し、反射的に飛び退いた。だが、時既に遅し。

「ペリーヌ！や、やめ——」

「イヤアアアアアアアアア！」

ガリア貴族令嬢の放った青みを帯びた鋭い光が、情けない声で命乞いをする優人の言葉搔き消した。

目も開けて要られないほどの眩い閃光に呑み込まれながら優人は思う。自分は生きて故郷——扶桑に帰れるのだろうか、と……。

第32話 「扶桑海軍ウイザードの恐いもの」

1944年9月、ガリア共和国パ・ド・カレー沖——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊麾下の空母——赤城型航空母艦二番艦「天城」は、パ・ド・カレーの沖合いに停泊し、遣欧艦隊総司令部からの辞令を待っていた。

当艦の主な役割は、欧州方面への補給任務だ。これは本来、ウオーロックとの戦闘で轟沈した同型の一番艦「赤城」の任務で、主に扶桑海軍のウイッチが派遣されている統合戦闘航空団基地へ機材や武器、食糧等を海上輸送していた。

ブリタニアの戦いで赤城が失われた後は、同型艦の天城が役目をそのまま引き継いでいる。

赤城と天城。この2隻は、かつて第一航空戦隊としてウイッチをはじめとする航空戦力を伴い、扶桑海軍空母機動部隊の中核を担っていた。

艦の乗員・各種航空機のパイロットは海軍屈指の練度を誇り、ウイッチに至っては扶桑海軍変を戦い抜いた一騎当千の猛者が揃えられ、開戦当時世界最強の航空戦力を有する精鋭部隊であった。

その実力たるや。当時、陸で八面六臂の活躍を見せていたりバウ航空隊——海軍第十二航空艦隊が中心——と並び称され、欧州は疎か扶桑本国やりベリオン合衆国にまでその雷名を轟かせたほど。

しかし、大戦初期より激戦が続き、第一戦隊は空母こそ両艦共健在だったものの、人員を多くの人員を損失してしまふ。

それは航空歩兵も例外ではない。負傷者に戦死者、運良く五体満足で生き延びたウィッチも、多くが引退している。

この数年、第一戦隊戦力再建に努めたが、将兵の練度回復や航空歩兵の定員さえままならない状態だった。

尤も、航空歩兵については元々ウィッチ・ウィザードの人口が少ないせいでもあるが……。

緒戦を生き抜いた赤城型も、艦齢の長さを理由に一線を引き、第一航空戦隊には新たに2隻の軽空母——祥鳳と瑞鳳が編入された。

ただし、これらは大鳳型等の新鋭艦配備までの繋ぎの意味合いが強く、新たな正規空母就役後は他所へ移される予定である。

此度のネウロック掃討作戦は、補給任務を主とする天城と乗員達にとって久々の——新参の将兵にとっては、初めて経験する実戦となったことだろう。

第一航空戦隊所属時に比べて、練度も経験不足している天城には堪えたはずだ。疲労の色が浮かんだ乗員等の表情からも、それが窺える。

心身共に疲弊した彼等にとって、笑顔を振り撒きながら艦内を闊歩するウィッチ達の内容在は精神的な支えであり、目の保養でもあった。

修羅場慣れしていない若き海軍兵は、目麗しい乙女達を己が双瞳に映して陶然する一方で、ウィッチの従兵を命じられている男性兵士やウィッチ部隊に配属されるウィザード等。彼女等と近しい関係にあり、親しげに言葉を交わす者達に対しては、嫉妬と怨念の入り混じった感情を抱いている。

早い話が、良き出会いに恵まれない哀れな男共の僻みというものだ。



「ふう……」

天城の艦内に設けられた浴場では、西洋風の少女が湯浴みを楽しんでいた。

長い絹の如く美しい金髪をアップに纏めた少女は、熱い湯の張られた浴槽に身を沈め、ホツとしたように溜め息を零す。

「明るいうちの入浴も良いものですわね」

と、少女は誰に話し掛けるわけでもなく独り言ちる。その澄んだ声音から気品が感じられ、彼女の育ちの良さが窺えた。

身体が良い具合に温まると少女は目を閉じ、愛する祖国のこれからについて思いを馳せる。

彼女の生まれ育った国は、つい最近まで異形の怪物共に支配されていた。しかしそれも、連盟空軍精鋭部隊の活躍によって終わりを告げた。

数年間、我が物顔で居座り続けた怪物共の巢は跡形もなく消滅し、国土は解放され、国民の帰還を今か今かと待ち続けている。

精鋭部隊の名は第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』。カールスラント空軍のエースウィッチにして優秀な士官——ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐が指揮する多国籍ウィッチ部隊。

12名の所属メンバーは何れもエース級の航空歩兵。異形共の潜む巢を撃破し、敵に侵された領土の奪還という人類史上初の快挙を成し遂げた英雄達だ。

異形共の力を恐れる世界中の人々が、どれほど歓喜したことだろう。どれだけ勇気づけられたことだろう。

無論、少女もその一人なのだが、数年に渡る異形との激戦を経験した身としては、いつまでも手放しで喜んでいるわけにもいかない。問題は山積みなのだ。

異形の怪物の群れは国境を越え、自分達の勢力下にある土地へ敗走した。しかし、完全な勝利を手にしたわけではなかった。

敵は少女の祖国へ再度侵攻し、占領するだけの力を有している。ブリタニアの戦いで失った戦力も、異形共にとって大した損害ではないのかもしれない。

今この時も、未だ敵の占領下にある隣国内では異形の大群が蠢き、もう一度少女の国を襲おうと、虎視眈々と機会を狙っているのだろう。

先日、カールスラント方面から飛来した強力な飛行型の異形は、その為の斥候とも考えられた。

以前として侵略の脅威に晒されているわけだが、それでも多くの国民は、1日でも早い祖国への帰還を強く望んでいる。

少女は高貴な生まれであった。それ故、一刻も早く国を民が暮らせる状態にまで復興させることこそが、自分の義務と考えていた。だが、それは言うほど容易いものではない。

また、瘴気に蝕まれた国土は荒廃し、土地を耕し直すのはもちろん、川浚いもしなくてはならない。しかし、それは膨大な時間と労力、資金が不可欠だ。最悪の場合、ここまでする必要だけの収穫が得られないかもしれない。

それに加えて、解放されたばかりで当然食糧の備蓄も不足しており、他国から支援を

受ける必要があるが、十分な支援が得られなければ多くの民が餓死しかねない。

異形との戦いにおいて。本来の国力ほどの貢献が出来ず、避難・亡命等で様々な国・組織に多大な借りがある少女の国の政府では、外交で優位に立つことも難しかった。

交渉に踏み切ったとして、足元を見られるのは想像に難くない。

また、避難する際に財産の殆んどを持ち出せなかったため、少なくとも民が生活基盤を失つて貧困に喘ぎ、奴隷労働や強制売春に身を落としていた。おそらく、帰国が叶ったとしても状況は大して変わらないだろう。

どうすれば愛する祖国——ガリアを、かつてのような豊かな国を取り戻せる。どうすれば全ての民を幸せに出来る。少女は大層心を痛めていた。

某帝政国家首相の養女から、自分の知らない。或いは知ろうともしなかった事実を聞かされた時は、シヨックのあまり気を失いかけた。そうならずには済んだのは、持ち前の使命感と責任感で己を律したからだ。

だが、所詮はか弱い少女。突き付けられた現実——祖国復興の厳しさに心を打ちのめされている。

そのため、直後に持ちかけられた取り引きの内容が、彼女にはとても魅力的に思えたのだ。

高貴なる義務——“ノブレス・オブリージュ”を胸抱く少女は、密かに決意する。ガ

リアの為ならば、悪魔とだつて取り引きしてやろうと……。



数十分後、天城艦内通路——

「あつははははは！」

天城の艦内通路に、リベリオンウィッチの笑い声が響く。

胸を反らし、豪快に笑う少女の声に引かれて振り向いた乗員等は、まずその美しさに息を呑み、次に10代とは思えぬ発育の良さに残らず絶句する。

リベリオン陸軍の制服を以てしても隠し切れない特大サイズの胸。スカイブルーのズボンから伸びるはち切れんばかりの太腿。程好く肉が付いた尻。それらとは対象的にウエストはキュツと細く締まっている。

世の男共の理想を具現化したかのようなダイナマイトバディこそ、彼女が「グラマラス・シャーリー」と呼ばれる所以だ。

「それで文字通りペリーヌの雷が落ちたわけか！ 優人お！ お前も懲りないヤツだな！」
「優人つてば、ホントにえっちなんだからあゝ♪」

艦内浴場での一件を聞かされ、シャーロット・エルウィン・イエーガー大尉——通称

「シャーリー」はなんとも楽しげに笑い、彼女の傍らにいるロマーニヤ空軍ウィッチのフランチエスカ・ルツキーニ少尉が、リベリオンウィッチの尻馬に乗る。

「……………」

愉快そうな2人の数歩前を、扶桑海軍ウィザード——宮藤優人大尉が、居心地悪そうな表情で歩いている。何枚もの絆創膏が顔中に貼られ、焦げた髪の毛がプスを音を立てている。

ブリタニア空軍ウィッチの「リーネ」ことリネット・ピシヨップ軍曹が彼に付き添い、ガリア空軍ウィッチのペリーヌ・クロステルマン中尉が、不機嫌さを滲ませた面持ちで集団の先頭に立ち、歩を進めている。

浴場でひと悶着あった優人とペリーヌ。騒ぎを聞き付けて2人の元へ駆けつけたシャーリー、ルツキーニ、リーネの計5人は、仲間達のいるガンルームへ向かっていた。「優人さん、大丈夫ですか?」

変わり果てた姿の扶桑海軍ウィザードを心配して、リーネが訊ねる。

浴室にて。ペリーヌの放った固有魔法『雷撃(トネール)』を諸に受けたためであるが、ネウロイすら粉碎し得る攻撃系の固有魔法を生身で喰らい、この程度済んだのは僥倖と言えよう。

「だ、大丈夫だよ……」

後輩に気を遣わせまいと、優人はリーネに笑顔を向けるが、それは明らかな作り笑いであつた。

斜め後ろから見ていたシャーリーも、「無理しちゃつて……」と肩を竦めている。

ガリアウィッチの一撃は、かなり効いたらしい。優人の身体のうちこちには、まだ痛みや痺れが残っていた。

医務室を借りて休もうかとも思った。少し前に、天城に乗艦している軍医と顔を合わせ、彼からも「寝台が空いてる」と勧められが、ガンルームで仲間を待たせているので、遠慮させてもらったのだ。

決して、扶桑海軍ウイザードに向けられた笑顔に嫉妬と殺意の色が滲んでいたからでも、軍医の懐から短刀が顔を覗かせていたからでもない……はずである。

「しっかしなあ……」

と、ここでシャーリーが先頭を歩くペリーヌの背中に目を向ける。

「……………」

会話に加わらず、無言を貫いていた彼女だが、背後から聞こえる話し声に微妙な居心地の悪さを覚えながら、ガリア貴族令嬢は唇を尖らせていた。

「いくら裸見られて胸を触られたからつて——」

「触られたのではありませんわ！お兄さ……宮藤大尉は搦んだのです！私の、左胸を！」

そう言いながら、風呂場での出来事が脳裏に蘇ったらしい。ペリーヌの顔が熱を帯び始める。無理もない。

優人の天才的——或いは病的なほどの女難癖。もといラッキースケベ体質については、ペリーヌも重々承知している。

風呂場で鉢合わせたことに関しても、『ウィッチ入浴中』の札を掛け忘れた自分にも非がある。と、頭では理解していた。

しかし、持ち前の気の強さとプライドの高さ故に、中々認められずにいる。さらに、素直になれない理由はもう一つある。

（確かにリーネさんやシャーリーさんと比べれば、私の胸はちよつとだけ……ちよつとだけ小ぶりですわよ！けど、だからと言って……言うに事欠いて淑女のような慎ましさがあるだなんて！わざわざそんな風に仰らずとも！）

数十分前、優人に告げられた自身の胸に対する素直過ぎる感想がペリーヌの中に反響する。

それと同時に、浴室で目にした扶桑海軍ウィザードの肉体までもが、目蓋に浮かんできた。

ウブなガリア貴族令嬢は、自分が味わった羞恥と家族以外では初めて見た異性の裸と想起し、悶々としている。

「掴んだあ？ペリーヌって、掴めるほどオツパイあつたっけえ〜？」

と、シャーリーの隣を歩くルッキニーが怪訝そうな表情で疑問を口にする。

ペリーヌは即座に反応し、振り返るとまだ幼さが残るロマーニヤウイツチに向つて怒鳴つた。

「なっ?! 貴方はまたそんなことを!」

「だつてペリーヌのオツパイって、天城の飛行甲板みたいにペタンコでしょ? 掴めるわけないじゃん……」

「飛行甲板って! ほぼ真つ平らじゃありませんの!」

「にひひひい〜♪ 残念賞改め甲板胸って感じい?」

ペリーヌの反応が面白かつたのか。ルッキニーは意地の悪い笑みを浮かべて煽り続ける。

「誰が甲板胸ですつて?! 私の胸はそこまで平べつたくありませんわ! そもそも女性の価値は胸の大ききで決まるものではなくつてよ! 大ききだけでなく、肌の色に形の美しきも重よ……つて、貴方は私に何を言わせませすの!?!」

と、ペリーヌは胸について熱く語り、大阪出身の扶桑人の如く見事な一人ボケツッコミまで披露する。

ルッキニーに茶化されたとはいえ、己がガリア貴族の令嬢であることや淑女としての

振る舞いを忘れてしまったかのようなこれらの言動。ペリーヌが如何に動揺しているかが分かる。風呂場での一件は思った以上に堪えられない。

「むく、勝手に言ったクセに……」

ヒステリックに喚き散らすペリーヌに対し、ルツキーニはムスツとした表情で応じる。

一方のルツキーニは、追い討ちとばかりに扶桑皇国の諺を元にした言い回しで報復した。

「ていうか。ペリーヌの言ってることって、単なる負け胸の遠吠えじゃないの?」

「なあ!? 貴方って人はあゝっ! ああ言えば、こう言つてえゝっ!」

「ペリーヌさん、落ち着いて!」

怒りのあまりワナワナと身を震わせるペリーヌを、リーネが宥めようと口を挟む。

しかし、ガリア貴族令嬢に鋭い目付きで睨まれ、リーネは「ひっ!」と萎縮してしまふ。

「あ! そうだ!」

そう言つて、ルツキーニがポンと手を叩く。何かを思い出したらしい。

「優人! ちよつと来て!」

ルツキーニは優人の手を取り、彼を何処かへ連れて行くこうとする。

「ルツキーニ? どうしたの?」

「いいからいいから♪早く早くう〜!」

「分かったから、そんなに引っぱるなよ」

「ちよつとルツキーニさん! まだ話は——」

「ペリー又さん!」

「そうカツカすんなって……」

どうにも治まらないペリー又をリーネとシャーリーが押し止めている隙に、ロマーニヤ空軍ウィッチは扶桑海軍ウィザードを誘導する。

グイグイと引かれた手に若干の痛みを覚えながらも、優人はルツキーニに従い、彼女が連れて行かんとする場所まで付き合った。

「さ、入って入って♪」

案内されたのはルツキーニとシャーリーに割り当てられた船室だった。優人は手招きするルツキーニに促されるまま、扉を潜って入室する。

部屋に入った直後。男好きする甘い香りがして、扶桑海軍ウィザードの鼻腔を撥つた。

それは一時的にこの船室の主となつたりベリオンウィッチと、ロマーニヤウィッチの肌や髪の香りが染み付いたものである。

甘ったるい匂いにクラクラしつつ、優人は室内に目を凝らす。

2つあるベッドの内、シャリーが使っていると思しき右側のベッドと、無造作に置かれている衣類を視界に捉えた。

衣服の中に、カップサイズの大きいピンク色のブラを偶然見つけてしまい、優人は慌てて目を逸らす。

「ん〜つと……何処にしまったかなあ?」

もう片方のベッドでは、優人を部屋まで案内したロマーニヤウィッチが、ごそごそと荷物の中を探っている。

ルツキーニのベッドも、下着を含む衣類が乱雑に散らばっていた。

自由奔放で細かいことに拘らないシャリー、ルツキーニらしいと言えばそうだが、やはり見ている気持ちいいものではない。バルクホルンが知ったら何と言うだろうか。

軍人としての自覚うんぬんと、カールスラントの堅物大尉のように説教垂れるつもりは毛頭無いが、せめて下着くらいはしまっておいてほしいものだ。

「あーあつたあ〜♪」

どうやら探し物が見つかったらしい。ロマーニヤウィッチは制服の裾をヒラリと翻し、ウキウキした様子で優人の元へ小走りで戻ってくる。

自分よりずっと背の高い扶桑海軍ウィザードを上目遣いに見上げ、船室まで連れて来

由を説明し始めた。

「あのね♪アタシから優人にプレゼントがあるの♪」

「プレゼントと？俺に？」

「うん！」

頷きながら、ルツキーニは満面の笑みを浮かべる。純真無垢なあどけない笑顔。口元から覗く八重歯がとても可愛いらしい。

「優人、アタシがミーナ中佐や坂本少佐に怒られた時によく助けてくれでしょ？扶桑海軍のカツチヨイイ制服もくれたから、そのお礼♪」

と、ルツキーニは続ける。シャーリーが501へ派遣されてくる少し前まで、ルツキーニの世話は優人の担当だった。

5歳年下の妹——芳佳がいる彼ならば、小さい子どもの相手も慣れているだろう。

第501統合戦闘航空団司令のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐と、副司令兼戦闘隊長である坂本美緒少佐はそのように考え、優人をルツキーニの世話役に指名したのだった。

司令と副指司令の判断が功を奏し、配属当初から問題行動が目立っていたロマーニャウィッチも、多少大人しくなった……のだが、悪戯つ子な面には相変わらず手を焼かされていた。

ミーナに叱られ、坂本に怒鳴られている姿を基地のあちこちで見かけては、優人が庇ってやったものだ。

或いは無邪気で甘え上手なルツキーニに、幼き日の妹の姿を重ねていたのかもしれない。

やがて、優人はデスクワークに忙殺されるミーナの手伝いでルツキーニと過ごす機会が徐々に減っていき、彼女に次いで基地へ配属となったシャーリーが、代わりに面倒を見るようになった。

「そんなこと。別にいいのに……」

「ううん、どうしてもお礼がしたかったの！アタシ、一人っ子だから……優人といると、お兄ちゃんができたみたいで嬉しかったんだよ！」

そう言いながら、ルツキーニは笑顔を輝かせる。多少照れ臭さを感じているらしく、柔らかな頬には紅が灯っていた。

「ルツキーニは妹みたいなものだよ？お転婆で、少しだけ手がかかるけど……だからこそ可愛いんだ♪」

と、優人。彼に限らず、501のメンバー——先程からかわれていたペリーヌを含め——は、天真爛漫なロマーニャウィッチのことを妹のように思い、可愛いがついている。そういうえば、以前ルツキーニは優人のことを「パクパミたい」とも言っていた。ルツ

キーニからすれば、兄も父親も大差ないのかもしれない。

「にひひく♪そうでしよそうでしよ〜！」

ルツキーニは「えっへん」と無い胸を張って、得意気に応じる。

ロマーニヤウイツチの自信満々な態度に、優人は苦笑しつつも微笑ましく思う。彼女は本当に人懐っこく、甘え上手だ。

「だからね！好きで好きで大好きなお兄ちゃんの優人に、アタシの宝物をあげるね♪」

「お？ルツキーニの宝物だつて？何だろうなあ、ワクワクするよ〜！」

可愛い妹分の心が込もったプレゼントなら、どんな物でも嬉しい。

その一方で、ロマーニヤウイツチが口にした宝物というワードが、優人の興味を引いている。

贈る主のルツキーニが好むであろう期待するような素振りを見せつつ、プレゼントが彼女から手渡されるのを待った。

「ジャジャ〜ン！」

快活な掛け声と共に、ルツキーニは身体の後ろに隠していたプレゼントを優人へ向かって差し出す。

出てきたのは、赤いリボンで飾られた少々大きめの瓶だった。

目を凝らして見て見ると、中には複数の黒い物体が蠢いているのが分かる。

「スゴいでしよう！基地の中庭や林とかで見つけたアタシの宝物だよ？いっぱい捕まえたから、優人にも分けてあげる♪」

「……………」

「……………優人？」

「……………」

「優人お、どつたの？」

「……………」

「ねえ、優人つてばあ〜？」

「……………ぎぎ……………」

「ぎぎ……………」

「ぎいいいいいいいあああああああ〜っ！」

◇ ◇ ◇

悲鳴を聞きつけたシャーリー、リーネ、ペリーヌの3人が目にしたのは、通路の床に尻餅を着き、手足をバタつかせ、何かから必死に逃れようとする扶桑海軍ウィザードの姿だった。

「な、何だあ？」

恐れ戦く優人の姿を目にし、シャーリーは当惑を覚えた。リーネやペリーヌも、信じられないといった表情で目を瞬かせている。

海軍へ志願して以来、幾度も死地に立ち、ネウロイと戦い続けてきた歴戦の猛者。そして、ネウロイの支配からガリアを開放した12名の英雄の1人だ。

ストライクウィッチーズで唯一のウィザード——男ということもあって、部隊でも特に頼りにされている優人が、聞いたこともないような情けない叫び声を上げ、仲間に醜態を晒す。こんなことは初めてだった。

「優人ってば、どうしたの？」

と、少し遅れてルツキーニが通路に姿を見せる。優人がこうなったのは、どうやら彼女が原因らしい。

尤も、扶桑海軍ウィザードの身に何が起きたのか。ルツキーニも分かっていないようだった。

脅える優人をじつと見つめながら、不思議そうに首を傾げている。

（あれ？ルツキーニちゃん、何か持ってる？）

ロマーニャウィッチが大事そうに抱えている瓶の存在に気が付いたのは、リーネだった。

観察能力に優れたウィッチである彼女は、優人がその瓶——更に言えばその中身に恐怖しているのだ、といち早く理解する。

(瓶に入ってるのって……まさか、虫!?)

遠目で虫のシルエットを見咎めたりーネの背筋に、ゾクリと悪寒が走る。女の子にとって、虫は天敵なのだ。

「虫……ですわよね?」

と、ペリーヌが目を細める。彼女とシャーリーも、虫の存分に気付いたらしい。

「いやだ! やめろお! そんなもの近付けるな!」

扶桑海軍ウィザードにとって、虫は天敵どころではないようだ。

恐怖で見開かれた瞳からは涙が滝のように流れ、通路内に絶え間無く絶叫を響かせる。

ガリア解放の英雄が見る影もない。こんな惨めな姿を愛する妹が見たら、どう思うだろうか。

「何でえ? ツヤツヤで、ピカピカで、カッチョイイのに……」

虫に脅えて泣き喚く優人を目の当たりにしても、ルッキーニは特に驚いた様子もない。

自分のプレゼント——お気に入りの虫達を気に入ってもらえなかったことへの不満

を口にし、不機嫌そうに膨れている。

「ああ、やつぱりか……」

「女難癖や罪作りなところだけでなく、虫嫌いも相変わらななのね」

不意に何処か素っ気なく冷ややかな声と、それに続いて溜め息混じりの穏やか声がする。

振り返ると、2人の扶桑海軍ウィッチ——竹井醇子大尉と若本徹子中尉が、リーネ達のすぐ後ろに並んで立っていた。

純白の扶桑皇国海軍第二種軍装を身に纏う彼女等は、優人や坂本とは同期入隊の間柄であり、2人に負けず劣らずの大エースである。

「優人って、虫嫌いなのか?」

優人との付き合いが、自分達501の仲間よりずっと長いであろう2人にシャーリーが訊ねる。

「嫌いなんで平和なものじゃないわ」

と、竹井が苦笑気味に応じる。そして、シャーリー達に仔細を話始めた。

彼女曰く、優人の虫嫌いには常軌を逸しているらしい。虫を見かけて悲鳴を上げる。気絶する程度ならば、まだ良い方だという。

例えば、ウィザードとして扶桑海軍航空隊へ志願し、直後に勃発した扶桑海事変に参

加していた新人時代のこと。

ウラル方面の扶桑軍前線基地格納庫にて、運悪く“G”と鉢合わせてしまった優人は完全に正気を失い、その場で機関銃を乱射し、何人もの整備兵があの世界に行きかけた。

本大戦初期——リバウ滞在時には、蜘蛛や蜘蛛の巣と遭遇するなりカールスラント陸軍——ビフレスト作戦の過程で、本国から撤退してきた部隊——から無断で持ち出した火炎放射器で、巣が造られた建物諸共焼き付くそうとしたこともあった。

この時、燃やしかけた建物は弾薬庫だったのだが、恐怖のあまり我を忘れていた優人には、それを考える余裕など無かった。ボヤ騒ぎで済んだのは、不幸中の幸いと言える。「まさか優人さんが……」

「意外でしたわ……」

リーネとペリーヌが口々に言う。彼女達は優人の弱点が虫だと聞いて驚いている様子だが、シャーリーだけはなにやら得心がいったようにポンと手を叩く。

「なるほど。地上ネウロイとの戦いで、少し様子がおかしかったのはそのせいかな?」

リベリオンウィッチの問いに、竹井は肩を竦めてみせた。

「本物の虫ほどじゃないみたいだけれど、蜘蛛に似た容貌の個体が多い地上ネウロイも苦手みたいね。優人、そのせいで対地攻撃は少し不得手なのよ」

「つたく、虫ぐらいなんだ。情けないやつだな」

若本が鼻を鳴らし、悪態を吐く。自分が言われたわけでもないのに、リーネは身を縮こまらせる。

おっとり大人しい性格の彼女は、若本のみみたいに気が強く、ズバズバと物を言うタイプの人間に苦手意識を抱き易い。

高飛車でプライドの高い——心根はとても優しいのだが——ペリーヌとの仲も、芳佳が現れるまでは頗る悪かった。

そんなリーネの心中を察したのか。ブリタニアウィッチの傍まで歩み寄った竹井は、彼女の肩にそつと手を置く。

世界的エース——“リバウの貴婦人”の優しい微笑みに対し、リーネもまた笑顔を返した。

「……………静かになりましたわ」

と、ペリーヌが呟いた。通路内に喧しく響いていた悲鳴がいつの間にか止んでいる。

5人のウィッチが揃って目をやると、声の主である優人は白目を剥いたまま硬直していた。どうやら恐怖のあまり気絶してしまったようだ。

幼いロマーニヤウィッチが声を掛けながら、扶桑海軍ウィザードの身体をユサユサ揺すっている。

「力尽きたか？」

「そのようね……」

2人の扶桑海軍ウィッチは短く言葉を交わしつつ、呆れ混じりの溜め息を吐く。
斯くして。本日中午に予定されていた第501統合戦闘航空団の解散式は、数時間延期
となったのであった。

第33話 「感情の萌芽」

優人が氣を失つて数時間後、空母天城飛行甲板——

扶桑皇国海軍遣欧艦隊所属艦——赤城型航空母艦二番艦「天城」は、相変わらずパド・カレー沖合に停泊していた。

本来ならば天城は、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』解散に伴い、同航空団から第504統合戦闘航空団『アルダーウィッチーズ』へ引き継がれる各種物資及び人員を、ローニーヤの504基地まで輸送するはずであった。

しかし、成り行きで501や帝政カールスラント皇国親衛隊と共同戦線を敷き、ネウロックと交戦することとなった。それが昨夜のことだ。

数時間前——丁度優人が氣絶した時分——に、やや遅れて遣欧艦隊総司令部より新たな命令が届き、所在無さげな状況から漸く解放された。

命令は2つ。1つは501航空団の解散に合わせて、当初の輸送任務を果たしにローニーヤへ向かうこと。

もう1つは本国内で軍法会議にかけられる予定の艦長を拘束して、帰国後速やかに憲兵へ引き渡すこと。

何故、艦長が軍法会議で裁かれなくてはならないか。理由は極秘事項であり、知っているのは副長以下数名の乗員のみである。

「ああ……酷いめにあつたあ……」

優人は飛行甲板で胡座を掻いていた。大空を仰ぎ、胸中に残つた不快感を少しでも払おうとする。

「おいおい、大丈夫か？」

隣に座っているシャーリーが、心配半分からかい半分に訊ねる。

彼女のさばけた眩しい笑顔と、ダイナマイトボディもこれで見納めになるかもしれない。優人は秘かにそう思った。

「お兄ちゃん、今でも虫がダメなんだね。もう大丈夫なの？」

「うじゅ……ごめんなさ〜い」

シャーリーに続いて、妹の芳佳と妹分のルツキーニも声を掛ける。

からかい混じりなりベリオンウィッチとは違い、後の2人は神妙な面持ちであつた。

「アタシ、優人が虫が嫌いだって知らなかつたから……」

そう言つて、ルツキーニはシヨンボリと項垂れる。いじらしく思つた優人は、ロマーニヤウィッチの頭を優しく撫でてやる。

「気にしないで。確かに虫には驚いたけど、ルツキーニの気持ちはちゃんと伝わつたか

らさ♪」

爽やかな笑顔で応じるも、ルツキーニとの会話により瓶の中で蠢く昆虫共の姿が脳裏に浮かび上がり、優人は身震いした。

「ホント？ 優人、怒ってない？」

と、ルツキーニは上目遣いに問う。不安げに揺れる翡翠色の瞳を真つ直ぐ見据え、優人は微笑み掛けながら言う。

「何で俺がルツキーニを怒るの？」

「やたあゝ！ 優人大好きいゝ！」

「おわっ!？」

嬉しさのあまり飛び付くルツキーニ。仰向けに倒れた優人は、背中を思いつきり打ちつけてしまい、軽く涙目になっていた。

「まったく騒々しいですわね」

ふと呆れたような眩き声が耳朶に触れる。声の主はペリーヌだ。

ガリア貴族令嬢はルツキーニに抱えて起き上がった優人の前まで来ると、豪華なデザインのティーカップを一つ差し出した。

武骨な軍艦には不釣り合いなティーカップの中には、ハーブティーが注がれている。

「心身の疲労に効くハーブティーですわ。良ろしければ、お飲みになってください」

と、ペリーヌ。艦内浴場で優人に生まれたままの姿を見られて御機嫌斜めだった彼女だが、優人が気絶している間に機嫌は直ったらしい。

「ペリーヌ、ありがとう。いい香りだ」

ハーブティーのお礼に、優人はガリア貴族令嬢の頭を優しく撫でてやる。

ペリーヌは白い頬に紅を灯し、恥ずかしそうに顔を微かに俯かせるが、満更でもなさそう。

「おいおい宮藤大尉殿、モテるじゃないか♪」

ハーブティーを味わう優人をシャーリーが茶化す。しかし、彼女やハルトマンに散々イジられてきた優人には、これしきの冷やかしは最早慣れっこである。

「何だ？羨ましいのか？」

と、ハーブティーで口内を湿らせながら、優人は事も無げに言う。

扶桑海軍ウィザードの反応が面白くなかったのか。シャーリーは眉を顰める。しかし、すぐさま何か思いついたらしく、ニヤリと口角を吊り上げ、悪戯な笑みを見せるのだった。

「随分生意気だな？昨日は二度もあたしの谷間に顔を埋めていたくせに♪」

「ぶう〜っ！」

優人の口からハーブティーが盛大に吹き出る。せつかくペリーヌが用意してくれた

というのに無駄になってしまい、飛行甲板も汚してしまった。

「ゲホゲホッ！な、何だよ突然!？」

扶桑海軍ウィザードは派手に噎せながらも、涙目でシャーリーを睨みつける。

「あつはははは！優人お、お前つて本当に可愛いやつだなあ！」

シャーリーは腹を抱えながら、大空に響かんばかりの笑い声を上げる。

2人のやり取りを間近で聞いていたペリーヌは、頬の朱色が深くなっている。どうやら、悩ましい妄想が彼女の脳内を駆け巡っているらしい。

「ねえねえ！アタシには？」

ルッキニーが自分の分のハーブティーを要求する。現実に戻ったペリーヌは、意地の悪い笑みを浮かべて応じる。

「あら？ロマーニヤの田舎者にハーブティーの良さが分かりました？」

「むう……嫌な言い方あ」

ペリーヌの嫌味つたらしい物言いに、ルッキニーは頬を膨らませる。

どうやら、ガリア貴族令嬢は自らの胸を「甲板胸」とバカにされたことを根に持っているようだ。

「ペリーヌつて、シンデレラに出てくる意地悪な継母みたい」

「フンッ！なんつても言いなさい、私は寛大な心を持つガリア貴族。あなたに何を言わ

れようと——」

「……ペツタン胸」

「なっ!？」

ロマーニヤウイツチがボソリと呟いた一言を、ペリーヌは聞き逃さなかつた。

憤慨するガリア貴族令嬢は目尻を吊り上げ、ルツキーニに食って掛かる。

寛大(?)な心を持つ彼女も、胸に対する侮辱は聞き流せなかつたらしい。尤も、本当に寛大な心を持っているなら、『甲板胸』の謗りくらい大目に見てやればいい気がするが……。

「あ、あなたって人はあー!」

「やあくい! やあくい! ペツタン胸え!」

「待ちなさくい! 今日という今日は許しませんわよあー!」

自身を小馬鹿にしながら走り去っていくロマーニヤウイツチを、まんまと挑発に乗ったペリーヌが追いかけていく。もうすぐ解散式が始まるのだが、完全に忘れていたようだ。

優人と共に彼女達のやり取りを見ていたシャーリー「おいおい」と苦笑しつつ、2人を連れ戻そうと追い掛けて行く。

そして1人残された優人だが、制服に包まれていようとお構い無しに揺れるリベリオ

ンウィッチのたわわな果実を無意識に目で追い掛けていた。この男のこういつた性分も相変わらずである。

「助平が……」

不意に背後から声がして振り返ると、いつの間にか同期の桜である2人のウィッチ——竹井醇子大尉と若本徹子中尉が立っていた。

竹井は穏やかな表情でクスクスと小さく笑声を立て、若本は呆れと軽蔑を湛えた眼差しで扶桑海軍ウィザードを見ている。ちなみに先程の発言は若本のものだ。

彼女の言葉に應えることなく、優人は無言で立ち上がると、2人へ向き直った。

「優人ってば、本当に相変わらさね。罪作りなところも、えっちなところも♪」

「え、えっちって……」

竹井の言う「罪作り」がどういう意味なのか。ラッキースケベなクセして変に鈍感な男である優人には、今一つ理解出来ないようだが、「えっち」の意味はしつかりと自覚した上で理解していた。

そのため、長い付き合いの竹井達からこの手の話題を振られてしまうと、強く言い返せない。

「まったく……北郷先生と言ひ、陸軍の先輩達と言ひ。お前はデカ乳ぶら下げていれば誰でもいいのか？」

あまりにもストレート且つ辛辣な若本の物言い。竹井はやれやれと肩を竦め、優人はムツとする。

優人が扶桑海軍に入隊したのは、ちょうど彼が思春期に差し掛かった頃。異性に興味を持ち始める時期に、周りがウィッチに囲まれた環境で生活することとなった。

しかも師であり、上官でもあつた北郷章香少佐をはじめ、北郷の親友で陸軍第一飛行戦隊司令の江藤敏子中佐や彼女の指揮下にあつたウィッチ等。歳上の女性が矢鱈と多く。

北郷と江藤以外は、皆10代半ばと。501の年少組と大差ない年頃だったのだが、当時11歳だった優人からしてみれば、年齢も身体的な特徴——特に胸の発育——も大人と言つて差し支えないものであつた。

次期に成人を迎えようという北郷や江藤。ウィザードで歳下の少年である優人に興味を持ち、彼をちよくちよくからかつていた陸軍の先輩航空歩兵のお姉さん達。そして501においては、扶桑撫子とはまた異なる魅力を持つ各国軍のウィッチ達。

彼女等を前にして、邪な感情を抱かなかつたかと問われれば嘘になる。だがそれでも、まるで優人が女性の胸にしか重きを置いていないかのような若本の言い様は、失礼極まりないものだった。

「2人共、喧嘩はダメよ?」

「事実を言つたまでだ」

「お前の性格の悪さこそ相変わらずだな……」

睨み合う戦友達を宥める竹井。開き直つて、減らず口を繰り返す若本。彼女に睨みつ、悔しそうに呻く優人。

一見すると、優人と若本は仲が険悪に見えるが、これは再会時の挨拶のようなもの。2人とも根つこでは信頼し合っている。

501で言えば、バルクホルンとシャリーのような喧嘩友達に似たの関係だ。

ちなみに、舞鶴にて初めて若本と顔を合わせた優人の彼女に対する印象は最悪だった。

ウィッチとしての才覚から来る自信に満ち溢れた若本の立ち振舞いが、優人の目には傲慢で嫌な女に映っていたのだが、それも昔のこと。

「そんなことより、501航空団の解散は蒼龍の出航に間に合うだろうか？」

と、若本が別の話題に変える。当初の予定では、宮藤兄妹は天城に乗艦し、その足で扶桑へ帰国することになっていた。

しかし、ネウロツクの出現等の理由で天城が随分足止めを食らつてしまい、ロマーニヤに寄つた後の帰国では芳佳の復学予定日に間に合いそうもない。

そこで、第一航空戦隊——瑞鳳、祥鳳の軽空母2隻で構成——と入れ替わりで帰国す

る第二航空戦隊——蒼龍、飛龍の正規空母2隻で構成——に便乗する形で、扶桑に向かうことになった。

このような個人的な我が儘が罷り通るのも、一重に父親と親しい間柄にある遣欧艦隊司令長官——赤坂伊知郎大将の便宜があつたればこそだ。

優人は賢い男だ。必要とあらば……：それこそ、航空歩兵を含めた最前線で戦う将兵達の為、父親のコネを利用するのも厭わないが、一方で利己的な理由で赤坂に助力を請う等。周囲からの反感を買うような真似は一切していない。

「蒼龍の出航までまだまだ時間はあるだろ？」

「お前達の体たらくを見ていると不安になるんだ。美緒とヴィルケ中佐は、よくこんな手の掛かる部隊を指揮したもんだな」

501に対する若本の率直な感想に、優人は苦笑気味しつつも内心同意する。

身体の向きを180度変え、扶桑海軍ウィザードは共にブリタニアの戦いを潜り抜けた戦友達へ視線を移した。

優人が気絶していたのをいいことに、今の今まで昼寝していたらしいハルトマンが漸く甲板に現れ、そんな彼女に堅物大尉ことバルクホルンが、いつもの如く説教をしている。すぐ近くにミーナの姿も認められた。

上述の光景を、他の仲間以上に見慣れているであろう司令殿は、微笑半分苦笑半分と

いった表情で二人見守っている。

昨晩は悪酔いして宮藤兄妹に絡んだり、天城艦内で大暴れしたミーナだが、朝方にはすっかり酔いが醒め、自分が何をしでかしたのかも覚えてはいない様子だった。

残っているのは軽い頭痛と、彼女に襲われた者達が負った心の傷のみである。

カールスラント組の3人がいる位置から少し離れた場所では、北歐組——サーニヤとエイラが仲良く談笑していた。

エイラはなにやらモジモジと腰を揺すり、そんな彼女の様子にサーニヤは不思議そうに首を傾げている。こちらもいつも通りだ。

「あれ？リーネはまだ来ていないのか？」

三つ編みに結われた亜麻色の髪と、シャリーに次ぐサイズの爆乳が見当たらず、扶桑海軍ウィザードは怪訝そうに呟く。

優人が知る限り。リーネが、ハルトマンやルツキーニよりも遅れて集合場所に来たことはなかった。

「芳佳、何か聞いてないか？……………芳佳？」

「妹さんなら、少し前に何処かへ行ったわよ？」

最愛の妹の代わり、同期の桜の穏やかな方が応える。優人は「は？」と目の抜けた声を漏らす。

「あなたが他の娘とお楽しみ中にね♪」

「変な言い方するなよ」

右目を瞑ってウインクしながら冗談めかして言う竹井に抗議するも、直後にもう一人の同期による追い討ちを受けた。

「いい加減にしておかないと、そのうち最愛の妹に口も利いて貰えなくなるぞ?」

「そ、そんなことな!……うん、無いよ。多分……」

自信を持つて、「無い!」と言うことが出来ない扶桑海軍ウイザードの胸には不安が滲んでいた。

若本の言う通り。いつか本当に芳佳に愛想を尽かされるのではないかと……。



同時刻、天城艦内通路――

「もう!お兄ちゃんつてば!」

甲板にいる兄の元を離れた芳佳は、親友リーネと共に一旦艦内に戻っていた。

「すぐ女の子にデレデレするんだから!」

柔らかな頬を可愛らしく膨らませて、プンプンとご立腹な扶桑の戦友を見て、ブリタ

ニアウイツチは口元に優しげな笑みを湛えている。

リーネも、優人がシャーリー達とじやれあっている光景を目撃してはいたが、芳佳のように憤慨したり、扶桑海軍ウィザードを白眼視することはない。

「あんなんじや、将来女の人にならしない大人になっちゃうよ！」

「ふふっ♪」

「もうリーネちゃん！何笑ってるの？」

と、芳佳は親友に向かって声を張り上げた。自分の意見に同意するわけでも、否定して兄を擁護するわけでもなく、リーネは先程からずっと微笑んでばかりいる。

「ごめんね、芳佳ちゃんが優人さんのことをすごく気に掛けてるみたいだから♪」

「……………えっ?」

リーネの発言に、芳佳はハツとする。リーネはすかさず言葉が続けた。

「芳佳ちゃん、優人さんのこと好き？」

「う、うん…………好きだけど…………」

「それって兄妹としてかな？」

「ふえっ!?!」

意味深な問い掛けをするリーネに、芳佳はどう返せばいいのか分からず、場を取り繕うように足元へ視線を落とす。

幼い頃より、芳佳は兄——優人が大好きだった。しかし、それは具体的にどういう「好き」なのか。

リーネが言った通り兄妹としての好きなのか。家族に対する情なのか。或いは、それらとはまた違った意味合いの「好き」なのか。

自分自身の感情に、芳佳は明確な答えを見い出せずにいる。

——優人さんのことをすごく気に掛けてるみたいだから。

親友の言葉を反芻した芳佳の脳裏に、大好きな兄の顔が浮かび上がる。

ふと顔が熱を帯び始め、芳佳の胸中に秘められた心臓が激しく脈動する。

「どうしちゃったのかなあ?」

茶化すような口調のリーネが、芳佳の顔を覗き見る。例え相手が心を許した親友であつても、リーネが誰かをからかうなどは大変珍しい。

「な、何でもない!何でもない!何でもないんだから!」

ブンブンと首を左右に振ると、芳佳は逃げるようにその場を離れた。

親友のブリタニアウィッチがクスクスと立てている笑声を背中に受けつつ、彼女は真つ直ぐ甲板へ向かう。その間も、彼女の胸はトクントクンと早鐘を打ち続けた。

そして、この十数分後。彼女達、連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』は正式に解散となった。

メンバーは、それぞれ次の戦場に向かう者。帰国する者と様々であったが、自分達が1年も経たないうちに再び結集し、ストライクウィッチーズとして新たな戦場を駆けることになる予想出来た者は、この時点では1人もいなかった。



晩刻、南大西洋のとある海域――

北海方面にて実施された作戦を終え、帝政カールスラント皇室親衛隊麾下の大型航空母艦――“ドクトル・エツケナー”は、南リベリオンのノイエ・カールスラントを指し、帰還の途上にあつた。

海原の波音が響く大西洋上を静かに遊弋する黒鉄の威容は、まるで海に浮かぶ要塞のようだ。

夜空より降り注ぐ月光が船体白々と輝かせ、水面は武骨な艦影を幻想的に映し出している。

良く見ると、船体の表面に損傷が確認できた。言うまでもなく、全て先の作戦で負つたものだ。

ドクトル・エツケナーは、まず扶桑皇国海軍の正規空母として竣工し、次にカールス

ラント海軍。そして、現在はカールスラントの皇室親衛隊と。

幾度となく所属組織を変え、様々な人間の手で運用されてきた本艦だが、先の作戦では奇しくも本来の持ち主である扶桑海軍や彼等が駆る同型艦——天城と、戦隊を組んで行動を共にすることとなった。

世が世なら、ドクトル・エツケナーは赤城型航空母艦四番艦「愛鷹」として、大戦初期の扶桑海軍空母機動部隊に名を連ねていたかもしれない。

しかし、元々は建造途中の戦艦を改装して造られた空母。加えて、艦齢の古い艦でもあるドクトル・エツケナーだ。

ストライクウィッチーズや扶桑海軍の強力があつたとはいえ、ネウロツクやネウロツクと融合・ネウロイ化したて、かつての友軍に牙を剥いたグラフ・ツエツペリンとの戦闘は非常に厳しく、作戦中に受けたダメージが内部を含め船体の各所に多少なりとも影響を及ぼしていた。

口にこそ出さないものの、乗員達の中には無事ノイエ・カールスラントへ到達出来るのかどうか、訝しむ者も少なくない。

艦長及び幹部乗員の多くは、ブリタニアのポーツマスへ寄港を強く希望していた。十分な補給と修理を受けてからノイエ・カールスラントへ向かうべきだ、と。

しかし、ドクトル・エツケナーと艦載航空戦力を指揮統括する名目上の司令官——ゲ

オルグ・ゾンバルト親衛隊准将と、階級は下だが彼より強い発言力を持つ親衛隊大佐の意向が優先され、真つ直ぐ南リベリオンへ進路を取ることと相成った。



同刻同海域、ドクトル・エツケナー艦内――

帝政カールスラント皇室親衛隊大佐にして第1独立戦闘航空団司令『インペリアルウィッチーズ』――悠貴・フォン・アインツベルンにとつて、ドクトル・エツケナーはインペリアルウィッチーズの海上移動基地兼別荘のようなものだった。

扶桑の海軍からカールスラント海軍へ渡り、さらに親衛隊へ回つてきた中古品。戦艦を改装した艦艇で、空老朽化も進んでいる。

しかし、それでも戦艦や潜水艦が海軍の主力であるカールスラントにおいては、失われた同型艦――グラーフ・ツエツペリン共々貴重な空母であった。

海軍から親衛隊に移籍した後も、主に性質上空母航空隊としての運用も視野に入れているインペリアルウィッチーズにて重宝されていた。

インペリアルウィッチーズの作戦行動時はもちろん、航空団と自身の休憩所・宿泊先としてもよく利用している。

カールスラント宰相より政治的・資金的バックアップを受けているインペリアルウィッチーズ司令の意向で、ウィッチ達が利用する区画には豪華な内装が施され、煌びやかな調度品が所狭しと並べられている。

悠貴及び親衛隊ウィッチに対してのみではあるが、ルームサービスも備わっており、軍艦と言うよりは上流階級の人間が利用する豪華客船に近い。

「……………」

シャワーを浴び終えた悠貴は、自分の船室には戻らず、格納庫へ向かって歩みを進めていた。

勤務中に着用している親衛隊の士官用制服はシャワーを浴びる際、従兵に預けたため、今の彼女は深紅の高級バスローブに身を包んでいる。

成人にも満たない年齢の東洋系女性とは思えぬ豊満な肢体は、布一枚ではとても隠しきれない。

そんな格好で、悠貴は現役の軍人——正確には異なるのだが——が犇めく軍艦内を闊歩している。

いくらウィッチを守る為に、各国の政府と軍人が八方手を尽くしているとはいえ、無防備なことこの上ない。大胆と言うか、恐いもの知らずと言うか。

彼女自身の立場——親衛隊大佐で、カールスラント宰相の養女——もあり、危害を加

えようとする愚か者はいない。

だがしかし、格納庫へ着くまでに鉢合わせた親衛隊員の殆んどが、彼女の艶姿を前にすると否応なしに目を奪われてしまう。

男達皆は、上官に対して挙手敬礼をするのも忘れ、ただただその場に立ち尽くし、理想的過ぎるプロポーションに見とれていた。

悠貴が通り過ぎる一瞬、高級石鹸とブレンドされた女性特有の甘い香りに鼻腔を攪られ、男達をクラクラさせる。親衛隊大佐もまた彼等に対し、すれ違様に艶然と微笑みかける。

親衛隊員は頬を染めて惚けつつも、自らが皇室親衛隊員であったこと。絶世の美女と直接対面したことに、この上ない喜びと幸福を感じていた。

しかし、彼等は知らない。悠貴・フォン・アインツベルンが、自分達に一切興味を抱いていないことを……。

「アインツベルン大佐！お待ちしておりました！」

格納庫に到着した悠貴は、眼鏡を掛けた白衣姿の男性に声を掛けられた。

男性は直立不動の姿勢を崩さず、待ちかねたように声を弾ませつつも、どこか緊張した面持ちで親衛隊大佐と対面する。

「新しい研究材料の方は如何かしら？」

魔性の笑みを口元に湛え、悠貴は応じる。彼女の美貌に魅力された白衣姿の男性は、質問に答えるどころか一瞬言葉を忘れていた。

「へ？……あ！は、はい！」

一拍置いて現実に戻った男性は、上擦った声音で返事をする。

この男性は、悠貴が個人的に雇ったある分野の研究者である。人種はおそらくカールスラント系で、年齢は30歳前後といったところか。無精髭を生やした顔は、とても脆弱そうで頼り無さげな印象を受ける。

日に焼けしていない青白い肌やヒョロリとした身体つきからは不健康さが窺え、ボサボサの短い黒髪はろくに手入れもされていかない。

彼は、自身の身嗜みを気にする暇も無いほど多忙なのだろうか。或いは、研究以外の事柄にはあまり興味を抱かない性分なのだろうか。

どちらにせよ。男としてお世辞にも魅力的とは言い難い人物であることは明らかであり、インペリアルウィッチーズのウィッチや、殆んどが文武に秀でた者で占められている親衛隊員からは——悠貴から特別待遇で雇われていることも手伝って——敬遠されている。

殊に、インペリアルウィッチーズの中でも取り分け悠貴に心酔している親衛隊ウィッチ——グレーテル・ホフマン親衛隊大尉からは、蛇蝎の如く忌み嫌われていた。

未だ成熟しきっていない年齢にありながら、女性としての魅力に溢れ、見る者全てを虜にしかねない悠貴と彼は、極端に対照的な例と言える。

その一方で、研究者としては頗る優秀な人材であることは確かだ。

悠貴は彼の能力を見込んで、資金、機材、人材、設備等。ありとあらゆる物品を与え、思う存分研究に没頭してもらっていた。

「結論から言つて、アインツベルン大佐の御推測通りでした」

研究者の男性——デニスは、先程の間の抜けた声色とは違い、滑らかな口調で仔細を説明し始める。

「この個体。ネウロックは、かの石威博士が開発したウォーロックとほぼ同性能のコアコントロールシステムを有しております」

と、デニスは片手で背後の空間を指し示す。そこには先の作戦で501航空団、親衛隊、扶桑海軍と交戦・敗走したネウロックが、傷だらけの状態で拘束されていた。

取り込んだグラーフ・ツエツペリンのボディを失ったネウロックは、カールスラント方面へ撤退を試みるも、密かに鹵獲を計画していた悠貴の追撃に遭い、こうしてドクトル・エッケナーの艦内格納庫に収容されている。

直前の戦闘で余程消耗していたのだろう。ネウロックは、白木拵えの扶桑刀を携行した悠貴一人に敢え無く敗北し、鹵獲された今は魔法力を帯びた銀色の鎖で縛られ、聖銀

の杭まで打ち込まれている。それも1本や2本ではない。

複数の杭を打ち付けられ、力を抑え込まれたネウロツクは、戦闘で受けたダメージの修復もままならず、悔しげに唸っており、周りにはデニスの部下である研究員等が各々の仕事をしている。

怨敵である悠貴の姿を認めると、ネウロツクは捕まって以降、弱々しくなっていたバイザーの奥の光を再び輝かせ、ネウロイ特有の甲高い唸り声で威嚇し始めた。

自らを拘束している銀の鎖を力任せに引き千切ろうとするも、鎖はジャラジャラと金属音を響かせるばかりでびくともしない。

デニスは「ひいっ！」と情けなく悲鳴を上げ、他の研究員も皆血相変えて後退りする。今の今まで大人しく、まともに抵抗出来ないほど弱りきっていたはずの怪物が、怒りと凶暴性を剥き出しにして襲いかかろうとしているのだ。

「あら、困った子」

腰を抜かしかけているデニスや研究員達を余所に、悠貴は悠然とネウロツクを見据えている。

数瞬の後。親衛隊大佐は薄紅色の唇で美しい曲線を描きつつ、主任研究員であるデニスに声を掛けた。

「デニス」

脳髓まで蕩けてしまうほど甘美な声音が鼓膜に触れ、デニスにはハッと我に還る。次いで、声の主——悠貴へと視線を走らせた。

視線の先には、慈悲深くもコケティッシュな笑みを浮かべた麗しの親衛隊大佐が佇んでいる。

「全ての研究員を連れて格納庫から避難して頂けるかしら？」

「わ、分かりました。アインツベルン大佐は？」

「私は残りますわ。ちよつと愚図り出した子をあやさなくてはなりませんので……」

「は、はあ……」

なんと返せばいいのか分からず、デニスは気の抜けた返事をする。

彼としては、ネウロックという名の化物が暴れている恐ろしい空間から、一刻も早く逃げ出したかった。故に悠貴の指示に従うことは吝かではない。

デニスは、ガクガクと笑う膝を必死に動かし、他の研究員達と共に格納庫から避難していった。

1人残された悠貴は再びネウロックと向き合い、彼——もしくは彼女——に微笑み掛ける。

「漸く2人きりになれたわね」

悠貴は男を誘うかのような甘ったるい声色で、ネウロックに語りかける。

当然、ネウロツクから返ってくるのは、怒りと憎しみと苦しみの入り混じった歪な唸り声だけだ。

「あなたは私が嫌い？ 私はあなたが好きよ？ だって、あなたは私が欲しがっていたものを持つて来てくれたんだもの……」

そこまで話すと、悠貴はゆつたりとした動作で左腕を持ち上げた。

軍人のものとは思えない。白く、しなやかで、きめ細かい肌をした美しい腕だ。

だが次の瞬間、悠貴の白磁のような左腕は黒く変色し始めた。

変化は色色だけではない。正六角形を敷き詰めたような模様が浮かび上がり、繊細な指先は鋭く尖っていく。

およそ人間のものとは思えない。まるで旧時代——当時はネウロイではなく、怪異と呼ばれていた——のネウロイの如く変異した悠貴の醜い腕を見たネウロツクは、一瞬で大人しく静かになった。

「大丈夫、痛いのは少しの間だけ……」

そう言い、悠貴は変異した左手でネウロツクの体表にそつと触れる。

微細な振動が親衛隊大佐の手に伝わる。宿敵を目の前にして、あれほど逸り立っていたネウロツクが一転して怯え出し、その巨体を震わせていた。

「さあ、楽しんで」

悠貴が甘く囁くように言うのと同時に、彼女の左腕が槍状に変形し、ネウロツクの頑強な装甲をいとも容易く貫いた。装甲を突破した槍はネウロツクの体内へ侵入し、中で再び異形の腕に変形する。

異形の左腕は奥へと進んでいき、心臓部たるコアまで到達すると、禍々しい左手は正十二面体の赤い結晶体をガシツと掴んだ。

直後、ネウロツクは悲鳴にも似た雄叫び声を上げる。親衛隊大佐は、どこか満足げな表情でその叫びに耳を傾けていた。

第4章 『ストライクウィッチーズ2編』

プロローグ～親衛隊大佐～

とある海洋国家が太平洋方面へ進出した際に発見・到達したその島は、島と呼ぶには大きい。ちよつとした大陸程の面積を持っている。

動植物や地下資源が豊富にありながら、ほぼ無人という非常に好条件の揃った土地で。海洋国家は、この島を海洋進出の策源地として入植・開発を積極的に行い、自国の発展や領土拡大の足掛かりとなった。

時が経ち。海洋国家の言語で「南洋島」と名付けられた島は、本土の発展に伴い開発が加速し、人口も増加。中央部には「新京」という名の都市が築かれ、住民はここを南洋島の首都とした。



その「家族」は、新京から遠く離れた山奥に存在する小規模な集落で暮らしていた。総人口は100にも満たないだろう。木々が鬱蒼と生い茂る森林地帯を抜けなくて

はならない場所にあるため、他所から人が訪ねて来ることは殆んどない。新聞や郵便の配達員くらいだ。

外部との交流もろくになく、所謂“陸の孤島”状態。都市として栄えている新京とは対照的な寂れた集落である。

住民達は日々農業に勤しみ、自給自足生活の中で助け合つて生きていた。先述の“家族”を除いては。

魔法力と呼ばれる不思議な力を身に宿した存在——ウィッチであるとされている、集落生まれの女性。彼女を妻に迎えた余所者の夫。女性の力を受け継ぎ、発現の兆候を見せ始めている双子の兄妹。

集落における彼等の生活は、決して平穏なものではなかった。閉鎖的な環境下で暮らしているせいか。住民達は自分達とは違う存在を忌み嫌い、またひどく恐れてもいた。不可思議な力を宿した母子と、余所者の父親。この家族が集落の人々に害を成したわけではない。ただ異質だという理由で一家は迫害を受け、父親はその最中でなくなつた。愛する妻と、まだ幼い我が子を残して。

程無くして、母親は双子を連れて集落を去つた。夫の死を哀しむ暇はない。これから女手一つで子どもを育てていかなければならないのだ。

子ども達はなんとしても自分が守ると、母親は強く決心する。

周りと違うということ異質だということは、それだけで攻撃の対象になるのだ、と思
い知らされた彼女は、夫が残してくれた金で本土へ渡った。
自分達の素性を知る者がいない遠方の土地へと移り住み、家族3人で新たな生活を始
める為に。



「何なの、あなた達は?!」

家に押し入ってきた男共に向かって、母親が叫ぶ。軍服を着た青年達が薄笑いを浮か
べ、彼女を取り囲んでいる。

明らかに友好的ではない。ギラついた視線向けてくる男達を前に、母親の顔は恐怖に
歪んでいた。

彼女が咄嗟の判断で押し入れに隠した双子は、その光景を戸の隙間からじつと見つめ
ている。

「おいおい……コイツ、化物のクセに人の言葉をしゃべりやがるぜ?」

「化物? 私はウィッチで——」

「うるせえよ!」

化物呼ばわりしてきた男とは別の男が母親を殴り飛ばす。力任せに顔を殴られた母親は、短い悲鳴と共に倒れ込んだ。

男は透かさず覆い被り、そのまま母親に暴力の限りを尽くす。

自分達の母親が無茶苦茶にされる様子を、双子は声を押し殺して眺めているしかなかった。幸か不幸か。男達が壁になっていたために、双子は大好き母が惨たらしく翻られる光景を直接目にするにはなかった。

だが、喉が裂けんばかりに泣き叫ぶ母親の声と、愉悦と嗜虐に満ちた男の嘲笑は、双子の心を蝕んでいった。



1944年末、ブリタニア——

(また、あの日の夢……)

薄暗い室内のキングベッドの上で、悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐は、朝を迎えていた。最悪の目覚めだ。

悠貴はベッドから起き上がると、窓辺と向かう。勢い良くカーテンを開けると、眩い陽光が部屋へ射し込み、思わず目を細める。

あの忌々しい出来事から十数年が経ち、19歳となった悠貴は、目麗しい容姿を持つ者が多いウィッチの中でも取り分け美しい女性に成長していた。

帝政カールスラント皇室親衛隊の制服を着込んでいても、起伏が分かるほどスタイルが良い。

本人も自らの魅力に理解しており、己の美貌と処世術を駆使して、人類連合軍や各国政財界に幾つものパイプを作っている。

漸く光に慣れてきた双眸を窓外へ向けると、世界有数の大都市——ブリタニアの首都“ロンドン”の景色が眼前に広がっていた。

彼女は今、ブリタニアでも有数の高級ホテル最上階のスイートルームに宿泊している。自身の支援者であるブリタニアの実業家が、長期題材用にと用意してくれたものだ。

足首まで沈むほど深く柔らかい絨毯。清涼感のある香水の薫り。室内のあちこちに置かれた調度品は、どれも一流のもので、部屋自体も広々としていて内装も豪華。スイートルームに違わぬ居心地のいい空間が造り出されている。

しかし、当の悠貴は超一流のホテルや調度品に対し、欠片ほどの興味も抱いていない。彼女が望むのはただ一つ。この世に残った唯一の肉親である兄だけだった。

今すぐ兄に会いたい。抱き締め合って互いを感じたい、心の内に秘めた愛を囁きた

い。

「待ってて、お兄ちゃん……」

悠貴はそう独り言ちると、シャワーを浴びにバスルームへ歩いていった。

第1話「佐世保航空予備学校」

1944年末、扶桑皇国佐世保——

扶桑皇国海軍鎮守府が置かれた佐世保の街は、扶桑でも有数の軍港都市である。

その規模と、海軍工廠をはじめとする軍事施設の充実ぶりは、同じく鎮守府を構える他の軍港都市——横須賀・舞鶴等——にも引けを取らない。

佐世保南西部針尾島の南端に位置するウィッチ養成学校——佐世保航空予備学校も、佐世保鎮守府麾下の教育機関だ。

扶桑海軍で活躍した海軍航空隊の元ウィッチであり、“軍神”の誉れも高い北郷章香中佐が校長を拝命している。その薫陶の賜物か、生徒達は日々規則正しい様相で訓練に励んでいる。

◇ ◇ ◇

その佐世保航空予備学校。全校生徒を収容可能な講堂に、未来の扶桑海軍航空歩兵達が集められていた。

あどけなさを残した表情に緊張を滲ませた彼女達の正面には、当校の教官達が整然と立ち並ぶ。皆、〃元〃を含めたウィッチとウィザード。

何れも、戦闘の負傷や〃あがり〃を迎えて魔法力の減衰または喪失を理由に一線を退いている。しかし、数々の戦いを潜り抜けた歴戦の航空歩兵ばかりだ。

彼女等が実戦で培った技術と経験は、教練を通して海軍ウィッチを志す生徒達へと受け継がれ、ネウロイとの戦いで活かされることだろう。

「皆も知つての通り、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の活躍によりネウロイの占領下にあったガリア共和国が解放された」

凛々しい容貌の女性が、壇上から告げる。彼女こそが、本校の校長——〃軍神〃と名高い北郷章香中佐である。舞鶴航空隊から改組された第十二航空隊——北郷部隊を率い、扶桑海事変を戦い抜いた英傑としても知られている。

長い黒髪をポニーテールに纏めた姿は、武士然としていて勇ましく、〃軍神〃の渾名に相応しい威厳を感じさせる。反面、生徒一人ひとりに注がれる眼差しは慈愛に満ちた温かなものであった。

「これは人類初の快挙であり。人類連合軍は近い将来、橋頭堡を築いたガリアを拠点として、欧州における大規模な反攻を敢行するだろう」

講堂内に北郷の涼やかな声音が響く。生徒一同は直接不動の姿勢を崩さず、校長の言

葉に耳を傾ける。

「前線は一人でも多くのウィッチを必要としている。そこで我等扶桑皇国海軍も可及的速やかに人員を送り出す為、新たに練習艦隊を編成。各ウィッチ養成学校より志願者を募ることとなった」

練習艦隊。少尉候補生実務練習の為に編成される2隻以上の小規模な艦隊である。

艦隊司令長官には少将が当てられ、香取型練習巡洋艦2隻——「香取」「鹿島」が現練習艦隊に配備されている。乗船実習自体は単艦でも可能なのだが、戦術運動訓練や洋上給油訓練。曳航被曳航訓練等の重要な訓練は2隻以上でなければ実施できない。

海軍兵学校の卒業生は、少尉候補生として練習艦隊に配属され、実習を経た後に海軍少尉に任官された。

この点は、リベリオン・ブリタニア海軍と異なっており、これら2つの海軍では在学中に乗艦実習を重ね、卒業後直ちに通常軍艦に配属する方式を取っている。

艦隊で実習を行いつつ実施される遠洋航海は、海外を訪問しての国際親善及び若手海軍士官の国際的視野を深める良い機会でもあった。

外国港への入港に際しては、礼砲など須要の国際儀礼も行われている。

ただこれは、ウィッチを含めた海軍兵学校卒業生——ウィッチの教育課程は一年半程度だが——の話であり、一般・ウィッチ・ウィザード問わず、在学中の生徒が練習艦隊

に参加した例はなかった。

新たな練習艦隊は、艦上航空ウィッチの外洋訓練の為に編成された試験部隊であり、空母部隊配属を希望するウィッチ候補生のより実戦に即した訓練を目的としている。航空練習艦隊とも呼ぼうか。

今更言うまでもないことだが、対ネウロイ戦において最も重要な存在であるウィッチは数が非常に少なく、各戦線に展開する人類連合軍は、深刻な戦力不足——他の兵科でも対抗は可能——に悩まされていた。それは優秀なウィッチ・ウィザードを多く輩出しているカールスラント、ブリタニア、扶桑等でも同様だった。

扶桑海事変・ヒスパニア戦役・今次大戦初期。数々の戦いを経験したベテランウィッチ・ウィザードは、長引く戦いの最中で多くが引退・戦死し、それは人類側の総戦力低下を意味している。

質量と共に低下しつつある戦力を維持し、新兵等の練度を向上させる計画の一環として、航空練習艦隊が創設されたのだ。

前述の通り。まだ試験段階であり、常設部隊としてではなく、特設部隊として扱われる。

「この艦隊への配属は即ち、海軍航空隊配属への近道である。参加には相応の実力と覚悟が求められるだろう」

北郷は言葉を止めて瞳を伏せ、一拍置いてから強い口調で続けた。
「志願する者は挙手！」



列席する教官達の中に紛れ、現役のウィッチとウィザードの姿があつた。2人は北郷の教え子だ。

ウィッチ・ウィザード候補生時代に指導を受け、扶桑海事変では彼女の指揮する第十二航空隊の一員として、初陣を飾つた。

扶桑海軍遣欧艦隊機動部隊所属のエースウィッチ——若本徹子中尉。佐世保航空予備学校の生徒達が、練習航空艦隊配属のチャンスを目の当たりにして、目を爛々と輝かせている様に肩を竦めていた。無邪気なものだな、と。

扶桑海事変勃発を機に海軍航空隊へ志願し、今日まで戦い続けてきた彼女からすれば。新しい練習艦隊の創設などは、引退間近で未だネウロイを倒し切れていない自分の不始末を次の世代へ押し付ける、という愚行を飾り立てるパフォーマンスでしかなかった。

「で、ガリア解放の英雄様としてはどうなんだ？」

「……もつと時と場所を選んで質問してくれないか？」

所構わず質問してくる若本に対し、扶桑海軍遣欧艦隊第24航空戦隊——宮藤優人大尉は、ややウンザリした様子で彼女を窘める。

所謂「同期の桜」の關係にあるウィッチの表情を横目でチラリと窺う。彼女は、優人をからかうような薄い笑みを口元に湛えていた。

カールスラント空軍のエーリカ・ハルトマン中尉と、スオムス空軍のエイラ・イルマタル・ユージェイライネン少尉も、ニヤリと悪戯な笑顔を浮かべていた。優人は彼女達をよく知っている。

2人も若本も、一国を代表する高名なウィッチだ。ウルスラエース同士、通じるものがあるのかもしれない。

優人は視線を正面に戻す。何名かの生徒が、彼の方を見ては頬を赤らめたり、数人のグループで何やらコソコソと話しているのが目に付いた。

ガリアを解放した12人の英雄——連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』の1人である世界的エースウィザードに興味津々らしい。

(やれやれ……)

優人は小さく嘆息する。501解散後、欧州から離れて凱旋帰国を果たした彼と彼の妹は、何処にいても否応なしに人の目を引くようになってしまった。

称賛されることが嬉しくない、と言えば嘘になる。だが、ここまで注目されては監視されているのと大差無かった。気の休まる暇もない。

妹——扶桑海軍軍曹の宮藤芳佳も、復学した横須賀第四中学校の同級生や下級生、一部教師陣から毎日のようにもみくちやにされていると聞く。

欧州派遣任務が一段落したというのに、兄妹揃って当分平穏な生活は臨めそうになり。命懸けでブリタニアを守り、ガリアを奪還したというのにこの仕打ちとは、神も仏もありやしない。

優人が不条理な現実には辟易していると、若本がまた声を掛けてきた。

「なあ優人」

舌の根も乾かぬうちに、また無駄話を振ろうとしているらしい。生徒や他の教官達の間もあるのに、まったく気にする様子がない。

任官して何年も経っているはずだが、海軍士官としての自覚や礼節というものが足りてないのだろうか。

「遠洋航海に出る前に一発やらないか？」

「——っ!？」

同期の桜の口から飛び出た、度し難い誘い文句。優人は思わず転けそうになった。

2人の両隣に立っている教官等にも聞こえていたらしい。信じられないものを見る

ような目で、優人と若本を見ている。

「軍艦生活じゃ、何かと溜まるだろ？だから、出港前にスッキリさせてやる。これで航海任務や教導にも専念出来る、欲求不満でヒョッコ共に手を出す心配も無いわけだ」

と、得意気に語る若本。同期の桜の有り難迷惑な気遣い(?)に、優人は顔を顰める。会話から分かるように、航空練習艦隊への配属が決定している。一時的なものなので、正確には出向と言った方が正しいのかもしれない。

実戦経験や指揮経験が豊富であり、実力と戦績のある2人は、教官に適した人材と判断されたのだろう。

それぞれ空母機動部隊や統合戦闘航空団に配属されていたことも、少なからず影響していると思われる。

「安心しろ、航海中も時間を見つけて『手伝う』くらいはしてやるよ」

若本は片手で輪を作り、軽く上下に振って見せる。「誰にもシテやったこと無いから貴重だぞ?」という余計な情報も付け加えて。

(コイツ、こんなに下品だったか?)

或いは優人をからかっているのか。ともかく、彼女の言動はウィッチとして、海軍士官として。扶桑撫子として非常に好ましくないものだ。

これらの発言が同じ同期の桜である坂本美緒少佐や竹井醇子、かつて師事を受けた北

郷章香の口から飛び出るのかと思うと、ゾツとする。

気が付けば佐世保航空予備学校教官達も、無言の圧力と射るような鋭い視線で、2人に自重を促してきている。

悪童に絡まれている被害者だと言うのに、理不尽にもまるで共犯に扱いだ。

小学生の頃、距離を置いていたクラスメイトの悪戯にも、否応なしに巻き込まれた経験がある。まったくウンザリだ、と優人は心中で吐き捨てる。

まあ前向きに考えれば、部下のウィッチやウィッチ候補者生から鬼教官・鬼上官と恐れられている若本にも、親しい間柄の人間に冗談を言ったり冷やかしたりするような一面もあるということだ。先程の発言が冗談かどうかはさておき、だ。

なんとか破廉恥な同期の桜を黙らせられないか。優人が考えを巡らせ始めると、壇上の北郷が一際大きな声を張り上げた。

「そこで本日は、航空歩兵としての心構えをお話頂くため、扶桑海軍変時から海軍に在籍し、かの501航空団にも派遣されていた宮藤優人大尉にお越し頂いた！」

北郷がそう締め括ると、生徒達は色めきだった。連盟空軍統合戦闘航空団へ派遣される航空歩兵は、各国を代表するエース揃い。殆どどのウィッチ・ウィザードにとつて憧れの対象であり、目標と言うべき存在だ。

過去にも、竹井醇子大尉や下原定子少尉等。欧州で活躍した多数の航空歩兵が本校を

訪れ、講演を行っている。

「では宮藤大尉、壇上へ」

恩師に促され、優人は彼女と入れ替わるようにして登壇し、壇上から生徒達を見渡す。すると、燦んだ黒髪を三つ編み御下げにした一人の生徒と目が合う。

（あの娘は確か、三隅美也さんだったか？）

優人と目が合うなり、生徒——三隅美也慌てて目を逸らした。

生徒達のことは、予め北郷から知らされていた。三隅は佐世保航空予備学校の学年主席で、非常に優秀な生徒だと聞いているが、なるほど。優秀さからくる気の強さが、灰色がかかった黒い瞳に現れている。

（顔を赤くして、熱でもあるのか？）

三隅のそばかす混じりな頬が、朱色に染まっていることに、気が付く優人。自分が原因だということを、ガリア解放の英雄殿は知る由もない。

（せ、世界的なエースウィザードと。ガリア解放の英雄と、目が合っちゃった！ど、どどど……どうしょ！目を逸らしちゃった、不敬だと思われたかな？）

佐世保航空予備学校1年主席——三隅美也。

航空練習艦隊配属がほぼ決定している優等生は、己を焼く尽さんばかりの顔の火照りと、ドキドキと早鐘を打つ心臓を落ち着かせるのに、四苦八苦していた。



1時間後、佐世保航空予備学校・来賓室――

部屋へ通された優人は、来客用のソファ―に深く腰掛けていた。

背凭れに身を預け、大きく溜め息を吐く。ウィッチ候補生達の前向きで真つ直ぐな眼差しは、ベテランウィザードを大いに疲弊させたようだ。

「疲れたかな？」

遅れてやって来た北郷が、応接テーブルを挟んだ向かい側のソファ―に腰を下ろす。

彼女は、優人と同じく扶桑海軍の第二種軍装を着用している。ただし、現役時代違って紺色の水練着ではなく、上着と同色のスラックスを履いていた。

ウィッチだった頃の北郷は、上着のボタンを1つも留めず、水練着や水練着に包まれた己の肢体を堂々と晒していたものだ。

本人の豪快且つ開放的な人柄を表したかのような着込なし方ではあったが、男の身としては目のやり場に困る。

豊満なボディラインを訓練中だろうが、戦闘中だろうが構わず見せつけてくる上官と、彼女が指揮する第十二航空隊での日々は、当時まだ思春期であった優人少年にとつ

て、あまりに刺激が強過ぎた。

度々不自然な前屈み姿勢になつては、海軍の同輩達に訝しがられ、交流のあつた陸軍の先輩方からかわれたものだ。

「いえ、構いませんよ。これも可愛い後輩達の為ですから……」

と、優人は気取らず応じる。愛弟子の謙虚な態度に、北郷は肩を竦める。

「そう言つて貰えると助かるよ。生徒達も、憧れのウイザード殿の話が聞けて、とても嬉しそつたつたよ」

「な、なんかむず痒いですね……」

照れ臭そうに後頭部を掻く優人の姿を見据え、北郷はフツツと微笑み返す。

「君に任せて正解だつたね。言つちや悪いが、徹子じゃこうはいかないだろうし……」
「でしようね」

と、優人は苦笑気味に首肯する。若本は、変なところで口下手というか、加減を知らない。言葉に頼つて何かを伝え、論ずやり方には向かない性分だ。

部下の航空歩兵を叱責する際も、言動が厳格を通り越して必要以上にキツイ。登壇させようものなら、生徒達を叱咤激励するつもりが裏目に出て、彼女達の自信喪失に繋がりがねない。

一応説明しておくが、本人は自分のやり方で後輩達を指導しているだけで、悪気はな

い。自身の口下手さも——直す気は全く無いが——自覚している。

ちなみに当の若本は、さっそく練習艦隊へ志願した生徒に自分流の“洗練”を行っているらしい。艦隊配属前に退学希望者が出来ないといいが……。

「壇上に立つ君に皆見とれていたよ。さすが欧州派遣で大勢のウィッチを泣かせてきた男だ♪」

北郷はパチツと右目を瞑り、ウインクして見せる。髪型をはじめとする容姿と豪放磊落な性格等は、坂本美緒によく似て——正解には、坂本の方が北郷に影響されたのだが——いるが、これらの仕草を見て分かるように、彼女の方が幾分女性らしい。

もう26歳だったか。落ち着いた性格故に実年齢よりも大人びた印象を受けるが、ウィッチを引退して歳を重ねた今の彼女は、相応の色気も感じさせるものになっていた。

肌も、黒髪を束ねたポニーテールも、以前会った時より一層艶やかに見える。

「その噂、やつぱり本国にまで伝わってましたか……」

優人は強大な魔法力とはまた別にもう一つ。“天才的な才能”を持っており、その才能に起因するウィッチとのトラブルには事欠かない。殊に破廉恥なトラブルは頻繁に起きていた。

扶桑のウィッチだけでなく、リベリオンや欧州各国のウィッチも被害に遭っている

が、そのことで優人が彼女達から嫌われたり、糾弾されたりしないのは一種の人徳だろうか。

ある意味では、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐やグンドユラ・ラル少佐等の統合戦闘航空団司令と同等のカリスマ性があるのかもしれない。

「ネウロイよりも、ウィッチの撃墜スコアの方が多いいとも聞いているよ?」

はっはっはっはと豪快に笑いながら、予備学校校長殿は付け加える。

ウンザリだと言わんばかりに溜め息を吐き、優人は郷を恨めしそうに見返す。

ふと小気味良いのノック音が響く。続いて来賓室のドアが開かれ、一人の女性が入室してきた。

「章香いる? お邪魔するわよ」

短く切り揃えた黒髪と、意志の強そうな瞳が印象的なその女性は、北郷ぐらいの年齢——20代半ばだろうか。

黒いマフラーを首に巻いて、ベージュのコートを羽織り、その下にタートルネックとジーンズを着込んでいる。

かなりの美人で、服の上からでも分かるほどスタイルが良い。北郷と優人は、その女性が誰なのか知っていた。

「敏子! 来てくれたのか?」

「江藤中佐、お久しぶりですー」

ソファーから立ち上がろうとする2人を手で制すると、背後に控えていた案内役らしき学校職員にコートとマフラーを預け、優人のすぐ隣にドカツと腰を下ろす。

江藤敏子。元扶桑陸軍中佐で、飛行第1戦隊の戦隊長を務めていた、明るくざつくばらんな性格のウィッチだ。

大陸側のネウロイ——当時は怪異と呼ばれていた——に対し、宮藤理論採用前の旧式ストライカーユニットで戦功を挙げ、華麗な機動と巧みなシールド操作により、操縦の神様”と渾名されていた。

北郷とは陸海軍の垣根を越えた親友であり、その縁から第十二航空隊と飛行第1戦隊は積極的に交流し、模擬戦も行っていた。

扶桑海軍変終結後、負傷を機に惜しまれつつも引退。現在は、明野陸軍飛行学校近くで喫茶店を経営している。

「店が定休日で暇だから、顔を見に来たの。優人君も久しぶりね♪けど、今は中佐じゃないのよ?」

まず北郷に声を掛け、優人にも軽く挨拶する。現役時代と変わらぬサバけた笑顔に大人の色香が滲んでいた。

北郷と同様、彼女も10代の少女から大人の女性に成長しているということだろう。

優人が会釈で応じると、江藤は彼の顔を繁々と観察し始めた。

「女の子みたいに小さかったボウヤがガリア解放の英雄で、しかもこんなイケメンに育つなんて。唾つけといた方が良かったかしら？」

「は、はあ……」

優人が冗談めかした江藤の発言に当惑していると、恩師の高らかな笑い声が、またしても彼の耳朵を打った。

「はっはっはっ！年長者まで虜にするなんて、我が弟子はつくづく罪な男だな！」

「北郷先生……」

何故か嬉しそうな北郷に対し、優人はもう勘弁してくれ、と言った感じで肩を落とす。「何？年増ウィッチに惚れられるのは迷惑なのかしら？」

と、江藤を扶桑海軍ウィザードを睨めつける。自分では不服なのか、とでも言いたげだ。

「いやいや！そう言うわけじゃ……」

「本当？」

「本当本当！江藤中佐みたいな美人に好かれて嬉しくないわけじゃないですか！」

必死に弁明する優人。江藤は尚も彼を睨み付けていたが、やがて納得したかのように頷いた。

「よろしい、今度私の店に来なさい。美味しいコーヒーを飲ませてあげるから。」
「ぜ、是非……」

やや上擦つた声で応じる優人の頬を、嫌な汗が伝う。江藤は怒らせると恐いと、北郷から予め聞いていた。しかし、聞くのと実際に体験するのでは訳が違う。

口調自体は何処か子どもを叱りつけるものだった。彼女や北郷にとつては、欧州で百戦錬磨を潜り抜けてきた優人でさえ、まだまだヒョッコだということだろうか。

「しかし、江藤にも靡かないなんて。やはり、噂通り坂本と付き合——」
「違います」

北郷の推察を、優人は間髪入れず否定する。随分とハッキリした物言いだったが、別に坂本と交際したり、そういった関係だと誤解されるのが嫌な訳ではなかった。

更なる誤解や余計な揉め事を回避する為には、キツパリと否定しておく必要があるからだ。

「おや？ 違うのか？」

「まあ、501航空団には他にも魅力的な娘がいるみたいだし……」

と、江藤が話に割り込んできた。彼女も北郷も、武人肌な面を持つとはいっても、やはり女性だ。恋愛話に対し、大いに関心があるとみえる。

「優人君ならヴィルケ中佐か、イエーガー大尉みたいなスタイルの良い娘が好みじゃな

い？あ、ビシヨップ軍曹も中々良いもの持つてるわよね？」

江藤は顎を人差し指と親指で挟み、自身の見解を述べる。その声音は、なんとも愉快そうだった。

個人的な交流・直接的な接点等が殆んど無かったにも関わらず、彼女は優人の好みのタイプを熟知しているらしい。

扶桑海軍ウィザードは、先程とは異なる意味で彼女を恐ろしく思った。

「どうなの？」

瞳をキラキラ輝かせながら訊いてくる江藤に対し、優人は溜め息混じりに応じる。

「黙秘権を行使します」

「まさか、ルツキーニ少尉かい？」

「先生、怒りますよ？」

北郷の問いに優人は思わず声を荒げると、口角を吊り上げた江藤が透かさず煽つてきた。

「恥ずかしがることないわよ？恋に年齢も、童女趣味も関係ないんだから♪」

（この人達は……）

明らかに自分で遊んでいる大先輩2人。苛立つ優人を他所に、江藤が持参した紙袋から外国製のチョコレート缶を取り出す。

「まあまあ、そう熱り立たない。これでも食べて落ち着いて」

「お、これは良い物をお茶にしようか?」

ソファーから立ち上がり、北郷はお茶を煎れる。本来なら給仕または従兵の仕事であるが、上官風を吹かすことなく自分でやるのが北郷章香という人間だ。

程無くして。応接テーブルにチョコレートと、3人分の緑茶が並べられる。

意外に思うかもしれないが、緑茶はチョコレートと相性の良い飲み物だ。

主張しすぎない扶桑の緑茶は、チョコレートの風味を際立たせ、尚且つスッキリとした飲み口が後味をさっぱりさせてくれる。

「北郷先生」

お茶を始めて間も無くノック音が室内に響き、開かれたドアからウィッチ候補生が顔を覗かせた。

「国崎教官がお呼びです」

「ああ、わかった。ちよつと行ってくるよ」

短く応じた北郷はソファーから立ち上がり、退室する前に2人に断つてから来賓室を出る。

足音が遠ざかり、やがて完全に聞こえなくなったところで、江藤が優人の方へ顔を向けた。

「……2人きりになったわね♪」

口元に薄い笑みを湛えながら江藤は言う。ギラついた彼女の双眸が、じくつと優人を見つめている。

獲物に狙いを定めた獣そのものな瞳。本能的に危険を察した優人の背中に寒気が走る。

「そうですね、つて……ええ〜っ!？」

不意に江藤がズイツと身を寄せてきた。優人は素っ頓狂な叫び声を上げ、迫られた分だけ後退る。

「ここら、逃げない!」

さらに間合いを詰めてくる江藤。優人も合わせて後退するが、背中に当たった肘置きによつて逃げ場を失う。

「ホント、イイ男になったわね♪身体の方も立派に成長して……」

扶桑海軍ウィザードの身体を舐め回すように眺めていたかと思えば、服越しにペタペタと触り始める。

「江藤中佐、何して!？」

「う〜ん、制服越しじゃ分からないわね。ちよつと脱ぎなさい!」

「は?」

「は？・じゃないわよー！」

目の抜けた声色で聞き返す扶桑海軍ウィザードの胸元に、引退して元陸軍ウィッチは呆れた様子で両手を伸ばした。

「欧州の戦いで鍛え抜かれ、苛め抜かれた身体を……お姉さんに見せてみなさい♪」

かような発言とともに江藤はペロツと舐めずりする。彼女の瞳はギラギラと輝いて、なんとというか身の危機を本能的に感じさせるものだった。

「や、やめてくださいー！」

優人が悲鳴とも懇願ともつかない声を上げる。江藤が第二種軍装のボタンを外し始めたからだ。

「いいじゃない、減るもんじゃないんだし♪」

扶桑海軍ウィザードの抵抗などはお構い無しに、江藤は次々とボタンを外していく。異様に慣れた手つき。他にも似たような被害を受けた者がいるのだろうか。

「そういう問題じゃありませんよー！」

いよいよますます、と焦る優人。江藤は既に全てのボタンを外し終えた上着を彼から剥ぎ取り、その下のシャツにも手を伸ばす。

必死の抵抗を続ける扶桑海軍ウィザードだったが、不意に来賓室の扉が開かれ、2人組の生徒が部屋に入ってきた。

「北郷先生、質問したいことが——」

北郷と入れ違いになって部屋を訪れたらしい2人の生徒は、室内にいた優人と江藤を見て硬直する。

上半身がシャツ半脱ぎ状態になっている現役海軍ウィザード。彼を押し倒し、服を脱がしにかかっている元陸軍ウィッチ。事情を知らぬ者が、この光景を見たらどう思うか。想像に難くない。

「し、失礼しました!」

「どうぞ御緩りと!」

熟れたトマトの如く顔を真っ赤にした生徒達は、そのまま逃げるように走り去っていった。

この日から暫くの間。宮藤優人大尉が、陸軍の江藤敏子元中佐と“イケナイ関係”にあるとの噂が、佐世保航空予備学校内を駆け巡ったという。

ちなみに、江藤が持参した外国製チョコレートはただのチョコではなく、所謂ウイスキーボンボン。

優人がブリタニア滞在時。遣欧艦隊司令長官の赤坂伊知郎大将——当時中将——から贈られ、501隊員等に振る舞ったものと同じ品。つまり、そういうことだ。

第2話「欧州からの便り」

1944年末、扶桑皇国・関東地方上空――

扶桑海軍佐世保鎮守府隷下のウィッチ養成学校――佐世保佐世保航空予備学校での講演を終え、優人は横須賀への帰路に就いていた。

横須賀海軍航空隊所属の「二式大艇」――制式名称は二式飛行艇――に乗り込み、空路を利用して佐世保へ横須賀間を移動中だ。

「あゝ、つたく……」

二式大艇の旅客室内に、ウンザリだと言わんばかりにぼやく扶桑海軍ウィザードの姿があった。

日帰り出張で佐世保まで赴き、ウィッチ養成学校で講演を行う。

それだけのことなのだが、持つて生まれた有り難くも無い才能――ある意味呪いだすが、御多分に漏れずウィッチ絡みのトラブルを引き寄せたのだ。

自らが持参したウィスキーボンボンで悪酔いした江藤元陸軍中佐。酔っ払った彼女に絡まれ、現場を目撃したウィッチ候補生にあらぬ誤解を受け、その誤解に背鰭・尾鰭が付いた噂が学校関係者の間を駆け巡り、その日のうちに佐世保軍港にまで広がること

と相成った。

教官の何人かからは白眼視され、現地で別れた若本には冷やかされ、佐世保軍港の将兵等からも、二式大艇へ搭乗する際に嫉妬と怨念を孕んだ視線を向けられ、優人は胃に穴が空く想いだった。

不幸ぶるのは柄ではないが、こんな仕打ちをする神様はおそらく自分のことが嫌いに違いない。と、思いたくなる。

「当分、佐世保には行けないな……」

優人は嘆息しつつも、地元の横須賀でなかっただけマシだと考えることにした。

自分の中で折り合いをつけたウィザードは、気持ちを切り換え、鞆から幾つか封筒を取り出す。

今朝。横須賀鎮守府で受け取ったそれは、何れも欧州から送られてきた国際郵便で、連合軍や各国軍検閲済みを示す印が押されている。

封筒は全部で3通。差出人はそれぞれミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ、ゲルトルト・バルクホルン、シャーロット・E・イエーガー。元501のメンバーで、共にブリタニアの戦いを潜り抜けた戦友達だ。

第501統合戦闘航空団司令兼501ウィッチ隊隊長のミーナ中佐は、メンバーから絶大な信頼を置かれている有能な指揮官である。

勇猛果敢、才色兼備等の言葉がよく似合う世界的に有名なウィッチの1人で、所属するカールスラント空軍でも指折りのエースだ。

一方で、軍務を離れば優しく包容力のある女性として顔を見せる。

年齢の割に落ち着いた人柄、501隊員を見守る姿は、まるで我が子を慈しむ母親のよう。あらゆる能力値の高さも相俟って、理想的な上官の一つの形と言えるだろう。

ゲルトルート・バルクホルンと、シャーロット・エルウィン・イエーガー両大尉は、年齢が近く階級が同じということもあり、501では特に親しい間柄にあった。

2人共、各々の御国柄を極端に表したような人柄で。正反対な性格からよく衝突するも、実際は「喧嘩するほど」な関係である。

バルクホルンとシャーリーが口論になり、優人が仲裁に入る。そして、運悪く——または幸運(?)にも——優人の手が彼女達の胸や尻を捉えてしまう不慮の事故が頻発するのが、3人の日常だった。

雰囲気的には同じ部隊に所属する戦友というよりは、同じ学校に通っている学友といった方が正しいか。

「皆、どうしてるかな?」

501が解散したのはほんの数ヶ月前だというのに、ブリタニアで過ごした日々が随分と懐かしく感じられる。

仲間であり、家族でもあった501メンバーとの記憶に想いを馳せつつ、まずはミーナから送られた封筒を開き、中から取り出した便乗に視線を走らせる。デスクワーク慣れた彼女らしい繊細な筆運びで、近状が綴られていた。

◇ ◇ ◇

『敬愛する宮藤優人様へ。』

お久しぶりね、すぐに手紙を出せずにごめんなさい。

ガリアが解放されて以来、西部の戦況が大きく変わったものだから、中々暇が無くて……。

秋から冬に掛けて。連合軍主導の大きな作戦やネウロイの大規模な攻勢があつたけど。今は戦況が少し落ち着いているので。あなたや芳佳さん、美緒に手紙を書くことが出来るようになったわ。

ブリタニアにいた頃は、毎日書類仕事に忙殺されて。もう紙も文字も見たくないと思っていたのに。今は手紙を書くことをこんなにも嬉しく感じるなんて、不思議なものね。

戦時下の最前線で嬉しいだなんて、少し不謹慎かしら？

ダメね。せっかく手紙を書いているのに、軍や戦闘に関する話ばかり。長く軍にいたせいで、一般の女性らしい感覚から遠のいてしまっているのかも……。

話を変えましょう。501が解散になった後も、私とトウルデーとエーリカは、同じ戦場で戦っているわ。

エーリカは空では頼りになるのに、作戦外では相変わらずズボラな面が目立って、トウルデーのお世話になりっぱなしよ。

トウルデーは、そんなエーリカを毎日のように叱りつつも、しつかり面倒を見てるわ。まるで仲の良い姉妹ね。2人を見てみると、微笑ましい気持ちになるの。

あなたと芳佳さんも、変わらず仲の良い兄妹なんでしょうね。私はひとりっ子だから、少し羨ましいわ。

優人のことだから、また欧州に来ることもあるんでしょう？

良ければ、その時はまた『デスクワークデート』しましょうね。それまでに、甘党のあなたでも飲みやすいコーヒーの豆を調達しておくわ♪

あなたの家族　カールスラント空軍第3戦闘航空団　ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐』



「……………また、俺を書類仕事でコキ使うつもりかよ」

手紙を読み終えた優人は、洗面を作って独り言ちる。デスクワークデートと都合良く美化した表現が、なんとも腹立たしい。

ミーナほどの美女と2人きりの状況と、彼女の言う自分向けのコーヒーは非常に魅力的だ。

しかし、その為だけに彼女のデスクワークの手伝い——実質肩代わり——をしようとは思わない。

なまじ書類仕事が得意なせいで、ブリタニア滞在時はミーナに度々手伝いを頼ま——命令さ——れ、1日の大半を山積みされた書類との格闘に費やしていた。

まさに地獄のような思い出。それこそ、単機で大型ネウロイと交戦した方がまだマシに感じるほどである。

優人は激しく首を振って、忌々しい記憶を頭から追い出すと、次にバルクホルンからの手紙を読み始めた。



『拝啓 宮藤優人扶桑皇国海軍大尉殿。

今年秋、欧州西部戦線にて。連合軍最高司令部及び西部方面統合軍総司令部の両司令部がある作戦の実施を許可した。

作戦司令官は、連合軍内でも強硬派として知られるブリタニア陸軍のバーナード・モントゴメリー大將。北アフリカに駐留していた、ブリタニア陸軍第8軍の元司令官だ。

彼が自ら立案・指揮した作戦は、ブリタニアの攻撃主力のウィッチ部隊及び地上支援担当の空挺部隊にライン川を突破させ、カールスラント北西の巢を撃破。

余勢を駆つて、エルベ川まで進撃して防衛線を構築する、というものだ。

来るべき欧州反攻作戦に備えての前線基地を設営。海路の確保による補給能力向上も視野に入れており、作戦実施のメリツトは非常に大きい。

モントゴメリー大將もまた「作戦が成功すれば、サトウルヌス祭までにカールスラントを奪還できる」と自軍の将兵等を鼓舞していた。

しかし、複雑過ぎる計画に比べて事前の準備・偵察が不足しており、さらに「ガリアから敗走した残党」とネウロイの戦力を過小評価していたことが仇となつて作戦は思うように進展せず、難航。

通信機の故障や悪天候等の不運も重なり、一部部隊がライン川を突破した程度に留ま

る。

西部方面統合軍総司令部はライン川突破を諦め、連合軍最高司令部は、モントゴメリー大將に作戦の中止を命令。

同時期に新たなネウロイの巢「グレゴリー」がオラーシャ帝国北西部に出現したこともあつて、欧州における全面的な反攻作戦の延期が決定される。

その後。私達カールスラントウイツ部隊が、現地のブリタニア軍部隊と強固な防衛線を築き、以降ライン川の防備に努めた。

結果。冬に大規模な攻勢に打って出たネウロイを、一時的な混乱のみで撃退。西部の戦線は膠着状態となる。

確実に勝利へと近付いてはいるが、カールスラント本国奪還という悲願達成には、まだ多くの時間を要すると思われる。

あなたの戦友　カールスラント空軍第52戦闘航空団ゲルトルート・バルクホルン大尉

追伸：友人宛に手紙を書くなど初めてで。おかしなところがあつたら、その……すまない』

◇
◇
◇

「……………これじゃ、報告書だよ」

カールスラントの堅物大尉が認めた手紙は、優人が軍隊生活で幾度となく目にした、或いは作成した戦況報告書そのものだつた。

欧州の——主に西部戦線の戦況については、懇切丁寧に纏められていたが、私的な内容が全く見当たらない。

良くも悪くも軍人氣質で生真面目なバルクホルンらしいとも言えるが、友人宛の手紙なのだから、もっと肩の力を抜いて気楽に書けばいいものを。

相変わらず、軍務に無関係な事柄に関しては万事不器用らしい。

口元に苦笑を湛えたまま、扶桑海軍ウィザードは最後の手紙を読み上げる。

◇
◇
◇

『親愛なる宮藤優人扶桑海軍大尉殿へ

よお、元気にやっつてるか？

急に手紙を出して悪いな。なんだかそっちの様子が気になってき。

皆と別れた後。あたしはルツキーニを故郷のローマに送り届けたんだけど、タイミングの悪いことに着いた時にはもうあいつの家族は疎開してたんだ。

それからはルツキーニの家族を追ってシチリア島へ。その後もサルデーニャ島や北アフリカと、地中海方面を転々としてるよ。ま、気儘な旅さ。

ブリタニアにいた頃の忙がしさが無いおかげで、整備にかかる時間は長くなつたけど、それでも砂漠でのストライカーユニットの整備は、基地の格納庫とは比べようもないほど大変なんだよ。

魔導エンジンのあるところに砂が入り込むし、気を抜いているとすぐエンストを起す。昼間の暑さや夜中の冷え込みよりも、そっちの方に参ってるよ。

また最高速度に挑戦しようと思うんだけど、当分先になりそうだな。

そうそう。最近、独学で料理の勉強してさ。ちよつとしたパスタ料理を覚えたんだ。意外だろ？

といつても、茹でて缶詰のトマトソースをかけるだけだけどな。

まあそれでも、ルツキーニは喜んでくれる。毎日のようにパスタをせがまれて大変な反面、美味しいって言ってくれるんだ。なんだか嬉しいよ。

優人や芳佳、リーネもこんな気持ちだったんだな。ブリタニアにいるうちにお前等か

ら料理教わつとくんだつたよ。

ルッキーニも元気さ。けど、時々皆に会いたいわって寂しそうにしてる。

一応あいつもお湯は沸わかせるようになったから、一緒に楽しく料理してるよ。

お前や芳佳、坂本少佐は元気にしてるか？良かったら返事を書いて教えてくれ。

いつかの映画の約束、忘れんなよ？それじゃ。

リベリオン陸軍第8航空軍シャローット・エルウイン・イエーガー大尉

PS：お前は後輩の教練指導とかデスクワークとかで忙しいだろうから、手紙と一緒にちよつとした「プレゼント」を送っておくよ。



「プレゼント？」

首を傾げつつ、優人は封筒の中を探る。先程の便箋とは別に、写真が複数枚入っていた。

北アフリカの何処かにある砂漠のオアシスで撮影されたようだ。送り主のリベリオ

ンウィッチが様々なポーズを取り、カメラに向かって笑顔を振り撒いている。

数枚ある写真は、何れも胸や尻やウエストの括れを上手く強調した大胆なものだった。

見慣れたりベリオン陸軍の制服姿でありながら、自他共に認めるスタイルの良さを存分に活かし、健康的な色気を巧みに演出している。

己の美貌と、*「グラマラス・シャーリー」*の由来であるダイナマイトバディ。そして自らを美しく魅せる方法を心得ている彼女は、ウィッチのみならずモデルの才能もあるのかも知れない。

よく見ると、撮影者の指らしき細長い影が端に掛かっている。レンズに指を掛け、気付かぬままシャッターを切ったのだろう。撮影慣れしていない人間の初歩的なミスだ。シャーリーが一人で写っていることから察するに、カメラを回したのは、おそらくルッキーニだろう。

しかし、扶桑海軍ウィザードはロマーニヤウィッチのミスを特別気にする様子もなく、写真を一枚ずつチェックしていく。

戦友が自作し、*「プレゼント」*と称して送り付けてきたグラビア写真にすっかり魅力されてしまった。

「はいっ！」

だが最後の一枚を確認した途端、突如優人は派手に吹き出してしまふ。

それまで取り憑かれたように写真へ向けられていた両目は、驚愕に見開かれている。扶桑海軍ウイザードを大いに動揺させた写真には、水着姿のシャーリーが収められていた。

オアシスで撮影がてら水浴びをしていたのだろうか、問題は着ている水着が非常に布面積が少ない、あまりに大胆過ぎるデザインの三角白ビキニだということだ。

水着のサイズが合っていないとか、肌の露出が少ないとか。そういうレベルの話ではない。

トップ・ボトム共に、本当に大事な部分しか隠せていない。裸同然のものだった。

当のシャーリーは恥ずかしげもなく水着を着込なし、前屈みの姿勢で、カメラに向かって怪しく微笑んでいる。

セクシーポーズが様になっており、只でさえ巨大な乳房を大きく見せていた。

さらに谷間を矢印で指し示す『Look at this』の一文が否応なしに優人の視線を胸元へ誘導する。

「あ、あいつ！何考えて……」

片手で顔を抑えながら、優人は項垂れる。あまりにも刺激的——見る人によつては下品——な戦友のセクシーショットとでも言うべき写真。他の501メンバーが見たら、

どんな反応をするだろうか。

バルクホルンあたりなら間違いないく卒倒するか、怒り狂うか。

融通の利かない堅物大尉に比べれば、柔軟性と寛容性を持ち併せている優人であつても、扱いに困る代物だ。

「……………「んなんどうしろと?」

「グラマラス・シャーリー」の悪ふざけを迷惑に思いつつも、扶桑海軍ウイザードはセクシーショット写真を制服のポケットに押む。

疚しいことは何も無いのに、彼の心臓が早鐘を打っている。

何気無しに窓外へ目を向けると、東の空が白み始めていた。間も無く夜が明ける。

そう思つた途端、抗い難い眠気に襲われ、優人は己の両頬をパンパンと強めに叩く。程無くして。宮藤優人大尉を乗せた二式大艇は、定刻通り横須賀軍港へ到着した。

◇ ◇ ◇

早朝、扶桑皇国・横須賀――

大きな港で栄える横須賀港。扶桑皇国海軍横須賀鎮守府が置かれ、海軍工廠や製鉄所等が建ち並ぶ軍港都市で、佐世保と同様、扶桑海軍の拠点の一つだ。

軍港施設の周りには住宅街と商店街が広がり、海と山に囲まれた風光明媚な土地である。優人が育った宮藤診療所は山の中にあり、その山を越えると芳佳が通っている横須賀第四女子中学校がある。

「お待ちしておりました、宮藤大尉！」

鎮守府正門を出た優人を出迎えたのは、1人の扶桑海軍下士官と、1両の九五式小型自動車だった。

直立不動の姿勢と、堂に入った挙手敬礼からは、本人の実直さと生真面目さが滲み出ている。

「土方」

優人は怪訝そうに应じる。彼のは土方圭助。横須賀鎮守府所属の兵曹で、優人の戦友——坂本美緒少佐の副官任務を担当する従兵だ。

「どうしたんだ？」

「坂本少佐から大尉を御自宅まで御送りせよ、との御命令を受けておりますので。どうぞ」

事情を簡潔に説明すると、土方は助手のドアを開け、上官である少年に乗車を促す。

（土方の仕事じゃないけどなあ……）

優人が誰かに車の運転を任せるとすれば、それは自分の従兵だ。上官の命令とはい

え、他の航空歩兵附の兵曹にやらせる仕事ではない。

土方の運転する車を帰宅の足代わりに使うのは気が引けたが、坂本が予め命令している以上、優人が何を言ったところで引き下がらないだろう。

ペリーヌほどではないが崇拜レベルで坂本を慕い、バルクホルンに及ばない程度には堅物な海軍兵曹。それが土方圭助だ。

「じゃあ、家まで頼むよ」

そう言つて、観念した優人が助手席へ乗り込んだ瞬間だった。

——ちゅどくん！

「……………は？」

突如、優人の実家——宮藤診療所がある山で爆発が起き、爆炎と黒煙が空高く舞い上がった。

街の人々と横須賀鎮守府所属の海軍将兵達は皆、爆音につられて一様に爆心地を振り返っていた。が、すぐに何事も無かったかのように各々の日常へ戻る。

すぐ近くで爆発が起きたというのに、殆んどの人間が爆心地を一瞥する以上の反応を示さない。

端から見れば、異様且つ異常な光景だろう。しかし、横須賀の住人にとっては見慣れた日常的一幕に過ぎなかった。

（診療所と畑は無事だろうな……）

優人は内心で嘆息しつつ、「出してくれ」と土方に声を掛ける。土方は「はっ！」と短く応じ、キーを回す。

助手席に座る上官を、チラリと横目で一瞥した後。海軍兵曹は車を発進させた。

彼の何か言いたげな視線に気付いていたのか。扶桑海軍ウィザードは、居心地悪そうに身体を揺すった。

◇ ◇ ◇

1時間後、宮藤診療所――

扶桑海軍予備役――宮藤芳佳曹長は、勤勉とは言えない。しかし、決して自堕落な人間ではない。寧ろ働き者の部類である。

今年の4月。初めての渡欧で航空母艦「赤城」へ乗艦した際、炊事・洗濯・甲板磨き等の清掃作業に精を出していたことが、その証左だろう。

扶桑海軍及び連盟空軍への入隊後も、基地の炊事をはじめ様々雑務を熟していた。もちろん、訓練にも熱心に励み。実戦では、ネウロイとの戦闘ではベテラン・エースと称される上級者顔負けの勇猛果敢ぶりを見せていた。

そんな芳佳だが、ブリタニアでの戦いを終え、扶桑に帰国した今は入隊以前と同様、一介の中学生に戻っている。

いや、同様というのは些か語弊がある。欧州での活躍——兄や仲間と共にガリア解放を成し遂げ、英雄となつてしまつた彼女は、少なくとも一般人としての生活は送れない。街を歩けば握手やサインをねだられ、学校ではクラスメイト等の同級生・下級生に囲まれ、羨望の眼差しを向けられながら質問責めに合う。

その疲れのせいか。或いは扶桑本国の平和の空気に当てられてか。少々だらしなさが目立つようになっていた。

「うう〜ん……」

自室に敷かれた布団に包まり、芳佳は寝返りを打っていた。

質素なカーテンで閉じられた窓を通して、チュンチュンと囀るスズメ達の声が聞こえる。

軍体の起床ラッパのような喧しいは一切無い。優しく、心地好い目覚ましだ。が、当の芳佳は起きる気配がない。

(もう朝あ……?)

芳佳は低く呻き声を上げ、布団を頭から被り直す。スズメが合唱しているということ、既に朝日が昇っているということだ。

掛布団の隙間から、薄目で枕元の目覚まし時計を確認する。針は起床時間を指していた。

家の手伝いもある、そろそろ起きなくてはならない。それは芳佳自身分かっている。だが、それとは比べものにならないほど大きく、抗い難い眠気と、それに起因する睡眠欲求。冬の寒さから逃れたい気持ちだが、起床を妨げていた。

早起きが習慣になっていた——寝坊することも多々あった——が、扶桑の実家に戻ってからは少々……いや、かなり気が緩んでしまっている。

やはり最前線の欧州に比べて平和過ぎる故郷の雰囲気と、実家に戻った安心感がそうさせているのか。

「——」
何者かの声に耳朶を打たれ、芳佳は一度閉じた目を半分だけ開けた。

何を言っているのか、よく聞き取れない。が、鼓膜に齎らされた程好い刺激により、意識が徐々にハッキリし始める。

「う……ん……」

何時の間にか、カーテンが開けられていたカーテン。窓から朝日が射し込み、芳佳へ容赦なく降り注ぐ。

起きている時は心地良いお日様の光も、眠っていたい今は不快にしか感じられない。

掛布団をさらに深く被り、些細な抵抗を試みる。

「はあ……」

既に大分意識がハッキリしている芳佳は、その呆れ混じりな溜め息を聞き逃さなかつた。

顔は見えてないが、おそらく両親か祖母が起こしに来てくれているのだろう。

芳佳からすれば、溜め息を吐かれたのはちよつとショックだが、今日は休日。学生は休みの日に二度寝するものだ。『特権』は有意義に利用させて貰いたい。

「起きる気無しか。まあ、今日は休みらしいし。また後で起こしに来よう」

声の主はそう独り言ちて、その場から立ち去ろうとする。

「せっかくだから一緒に朝御飯食べようと思ったんだけどな」

（ごめんさい。でも、まだ眠……あれ？）

相手の声色で、芳佳は漸く自分の勘違に気付いた。起こしにきたのは両親でなければ、祖母でもない。

幼い日々を共に過ごし、ブリタニアの戦いを共に潜り抜けた優しく、頼りになる。大好きな兄だったのだ。

海軍の仕事で軍港都市の佐世保遠出すると言っていたが、予定より早く帰って来れたらしい。

驚きと喜び。そして、だらしなない妹だと思われてしまう不安に駆られた芳佳は、一瞬で完全覚醒に至った。

勢い良く布団から飛び起き、部屋の外へと消える人影へと手を伸ばす。

「お兄ちゃん！ち、ちよつと待つ……きやあ?」

「え?」

余程慌てていたのだろう。布団に足を取られた芳佳は、バランスを崩して前のめりに倒れる。鼻先から畳目掛けて突っ込み、顔全体で激突する。

——バンツ!

芳佳の視界が暗転するのとはほぼ同時に、室内に鈍い音響く。それらに次いで鼻梁に鈍い痛みが走った。

「だ、大丈夫か!」

「……………」

自分を心配する兄の言葉に、芳佳は何も返さない。いや、返せない。

暫くの間。彼女は恥ずかしさのあまりに、転倒した状態から顔を上げることが出来なかった。

◇
◇
◇

一方、その頃。北アフリカ地域――

(やつぱりあのビキニ、ちよつと下品だったよな。それにプレゼントで自分のグラビア写真送るなんて、もしナルシストとか思われてドン引きされてたら……)

「スヤア〜……スヤア〜……」

(ああ、あたしはなんてことを〜っ！)

オアシスで野営中のリベリオン陸軍シャーロット・エルウィン・イエーガー大尉――
通称「シャーリー」と、ロマーニヤ空軍フランチェスカ・ルツキーニ少尉。

シャーリーは何やら酷く後悔しながら眠れぬ夜を過ごしていたが、隣でグツスリ眠っているルツキーニ。そして彼女から「プレゼント」を贈られた宮藤優人扶桑海軍大尉は、知る由もない。

第3話「宮藤家の日常」

完全に目が覚め、パジャマから洋服——水練着にセーラー服の重ね着だが、本人にとつては普段着も同じ——に着替えた芳佳を連れ、居間へ移動した優人は朝食を摂る。

長年の海軍生活において。基地・艦艇共々椅子に座つて食事をしてきたため、和室の畳に座り食事をする習慣は多少の違和感を覚えた。

扶桑人らしからぬ感覚かもしれないが、軍隊生活や欧州派遣任務に数年もの時を費やせばこうもなろう。

「やっぱり母さんの手料理は最高だなあ♪」

優人は絶妙な塩加減の焼き鮭と白米を口に運び、御碗を傾けて味噌汁を喉へ流し、続いて卵焼きも頬張る。

気持ちの良い食べっぷりだ。あまりの美味しさに頬が緩んでいるのが良く分かる。

料理の腕前なら優人や芳佳はもちろん、元501隊員のバルクホルン、リーネ、サーニャ。下原少尉や雁淵中尉等の海軍航空隊所属ウィッチもかなりの腕前だ。

しかし、やはりというか。所謂「おふくろの味」には敵わない。レパートリーも扶桑料理に限らず、各国料理までと手広く、質量共に隙がない。

「うふふ、褒めてもおかわりしかでないわよ?」

優人の養母——宮藤清佳はそう言うと、空になった小皿に追加の卵焼きを載せる。卵焼きが大好物——優人の場合、苦手な物の方が少ないが——な愛息の為、予め多めに作っているようだ。

「あーありがとう!」

追加の卵焼きを見るなり、嬉々としてパクつく優人。そんな息子を清佳は微笑ましげに見つめていた。

何であれ、人の役に立てること。人が喜ぶ姿を目にすると、自分のことのような幸せを感じる。

清佳は、魔法力以外にもそのような美質を持つ素晴らしい女性であった。

それらの長所は彼女に育てられた兄妹にも、確かに受け継がれている。

「うくん……ちよつと甘過ぎないかな?」

ふと穏やかな男性の声がある。誰かは考えるまでもなかった。宮藤診療所もとい宮藤家において、男性は優人ともう一人しかいないのだから……。

「あなた! 摘まみ食いはダメよ!」

清佳にそう咎められたのは彼女の夫にして、優人と芳佳の父——宮藤一郎だった。

遅れて朝食の席に顔を見せた彼は、事故現場か戦場から戻ったのではないかと思うほ

ど、酷い様相だった。

年季の入ったヨレヨレの服は、ボロボロに焼け焦げ、顔や髪も所々煤で汚れている。「何だよお、優人は良くてどうして僕はダメなんだ？」

と、一郎は唇を尖らせて不平を漏らす。まるで親に叱られた子どものような反応を見せる父親に向かって、優人が毒づいた。

「実験で離れ屋を丸々吹き飛ばす大バカに食わせる飯は無いんだよ」

先程の上機嫌ぶりから一転し、優人の表情と声色が不機嫌なものに変わる。

息子からキツイ御言葉を賜った一郎はまた、ムスツとして反論するのだった。

「優人。お前なあ、親に向かってバカはないだろう？」

「じゃあ、アホ」

「ぐっ！」

「あんぼんたん」

「のわっ！」

「ドジ」

「ぐえっ!?!」

仮にも養父である一郎に対し、扶桑海軍ウィザードは辛辣な態度を崩さない。

彼の口から次々と吐き出される侮蔑の言葉。そのひとつひとつが鋭く尖った刃先を

有する槍となつて、一郎の心に突き刺さる。

魔導エンジンの開発やストライカーユニットに関連する様々な新技術を確立した功績から、「ストライカーユニットの父」と渾名されている宮藤一郎も、息子の前では形無しだ。

「優人、もうその辺にしなさい。ほら、あなたは早く着替えて！顔も洗つてきて！」

「う、うん」

「……………」

清佳の仲裁によつて、朝の親子喧嘩——優人が言葉の暴力で一方的に攻め立てていただけだが——は、取り敢えず中断される。

一郎はトボトボと洗面所に向かい、優人はシヨボくれた父の後ろ姿を睨みつつ、無言で味噌汁の入った御碗を傾けた。

哀愁漂う背中を見てみると、まるで自分が悪いかのように錯覚してしまいそうだから不思議だ。

「つたく……………」

と、優人がウンザリしたように吐き捨てる。家族以外の目が無いとはいえ、自らの幼い——もつと言えば大人気ない一面を恥ずかしげもなく晒す養父の有り様に、彼は辟易している。

「優人、あんまり大人さんに冷たくしないで……」

「父さんは優しくしたり、励ましたら調子に乗るタイプだから、これくらいが丁度良いんだよ」

自分を諫める養母の言葉に、反論した扶桑海軍ウイザードは、そのまま食事を再開する。

父親に対して必要以上に当たりがキツイが、嫌っているわけではない。

寧ろ死んだと報され、二度と会えないと思っていた父とまたこうやって言葉を交わし、今朝のように食事を共に出来ることが嬉しくて仕方がないはずだ。

「もお……」

清佳は困ったように苦笑すると、優人の隣に座る芳佳へ視線を走らせる。

「芳佳も、あんまり遅くまで勉強しないで。今日みたいに起きられなかったら、またお兄ちゃんにだらしないところを見られるわよ？」

「言わないでよお！」

紅を残した頬を膨らませ、芳佳は母に抗議する。まだ羞恥が抜けきっていない妹の頭を、優人はポンポンと撫でてやった。

「随分熱心に勉強して、芳佳は偉いな」

「あ、えへへ♪ありがとう、お兄ちゃん」

兄に褒められたことが余程嬉しいのか。芳佳は赤面から一転、向日葵のような笑顔で応える。

横須賀第四中学校復学した時点の芳佳は、出席日数こそ不足していたものの、エース部隊である第501統合戦闘航空団で実績を挙げたことが学校側に評価され、卒業が決定。成績最優秀者を差し置いて、卒業式で生徒代表を務めるに至った。

留年等の心配が無くなった今、医学校の入学試験に合格する為、猛勉強中である。

本格的に医学を学ぶことで『治癒魔法』をより効果的に扱えるようなり、強力だが万能ではない魔法力以外の治療法を会得し、何れは診療所を継ぐつもりでいた。

「でも夜更かしは関心しないな。そんなやり方じゃ何も身に付かない、美容にも良くないぞっ。」

芳佳を窘めつつ、優人は彼女の頬を人差し指でツンと突く。

染み1つ見当たらない美肌はぷにと柔らかく、まるで赤ん坊のようで、癖になりそうだ。

「はあ〜い」

やや気の抜けた声音で応じ、芳佳は朝食を再開する。正直な話、今の芳佳の学力で志望校合格はかなり厳しい。

元々彼女は成績が芳しくないことに加え、ブリタニアに滞在していた数カ月間、学校

を休学していた。

出席日数の不足は、501部隊の一員としての実績が認められて何とかあったが、学業は同級生等に比べて明らかに遅れを取っている。

猛勉強で遅れを取り戻せたとしても、志望校の合格ラインへはとても届きそうもなかった。

だが一方で、彼女には本番に非常に強いという長所が存在する。

(……)一番に強い精神の凶太さを持つ芳佳なら或いは……)

実際ブリタニアの戦いでは、要所要所で新兵とは思えぬ力を発揮していた。学業方面でも同じかは分からないが……。

(はは、俺も大概シスコンだな……)

己の兄バカっぷりに優人は苦笑する。彼の心境を知ってか知らずか。芳佳は兄に振り向き、首を傾げて見せた。

「どうしたの?」

「うん? やっぱり芳佳は可愛いなあって思って♪」

誤魔化そうとして何故かクサイ台詞が出てしまい、優人は気恥ずかしそうな所作で後頭部を搔く。

「もうっ! 褒めても何も出ないよ?」

と、芳佳もまた照れ臭そうに微笑み返す。彼女の頬に再び仄かな朱が射し込む。

義理とはいえ兄妹だというのに、笑顔で見つめ合う2人の姿は、まるで恋人同士。すつかり「2人の世界」に浸ってしまっている。

「母さん、タオルが見当たらんよ!」

そんな甘つたるい空気をぶち壊すように、一郎が居間へ戻ってきた。

洗顔の途中らしく、びしょ濡れになった顔から幾つもの水滴を床や畳に垂らしている。眼鏡を掛けていないせいで、歩き方もぎこちない。

「ちよつとあなた!床を濡らさな——」

「あ、失礼」

一郎は手探りで清佳の割烹着を掴むと、そのまま割烹着で顔を拭き始めるのだった。

「ちよつと、それで拭かないで!」

「ふう、助かったよ。ありがとう♪」

顔を拭き終えた一郎は、屈託の無い顔で礼を述べる。床とタオル代わりに使った割烹着をびしょ濡れにしたことに対する謝罪も無ければ、悪びれる様子もない。

「もう!タオルなら洗面所の脇に掛けてあるでしょう?次からそれを使ってください!」

軽い苛立ちを覚えた清佳は、一郎をピシヤリと叱りつける。

その姿は完全に悪童叱りつける母親のそれで、彼女と一郎は夫婦というよりは親子のようだ。

(ホント、この人は……)

内心で呆れつつも、優人の口元には薄い笑みが浮かんでいた。

それもその筈。父の訃報を聞いて以来、叶わぬ夢とばかり思っていた家族団欒。それが再び日常として戻ってきたのだ。

国内外で魔法力と内燃機関の融合技術の研究の第一人者及び知られる一郎は、自らが提唱した理論——所謂「宮藤理論」を採用したまったく新しいタイプのストライカーユニットを開発した凄腕の技術者。

ブリタニアのストライカーユニット共同研究所で起きた爆発事故に巻き込まれて死亡したと思われていたが、紆余曲折あつて生存。数カ月、搬送先のロンドンの病院で昏睡状態から目覚め、扶桑海軍遣欧艦隊に保護されていた。

ガリア解放の英雄となった宮藤兄妹や旧知の海軍士官——坂本美緒少佐と共に凱旋帰国を果たした一郎は、かつての勤め先である宮菱重工の航空機部門に復帰。新型ストライカーユニットの開発に従事している。

数年の深い眠りを経て、研究に対する熱意は些かも衰えておらず、自宅の離れ屋を私的な研究室として、暇さえあればよりハイスペックでコストパフォーマンスに優れた

新型魔導エンジンの開発に没頭していた。

一方、その熱心が反つて仇となることも屢々ある。探究心が強過ぎるほど強い一郎は、「理論上可能」と主張しながら信頼性を度外視したハチャメチャな魔導エンジンを開発しては暴走させ、離れ屋を丸々吹き飛ばすレベルの爆発を頻繁に引き起こしていた。優人が横須賀鎮守府前で目撃した爆炎の正体もコレである。

数日に1回のペースで起きる爆発に、横須賀の住人は慣れきつてしまっている。つまり、それだけ同じ失敗を繰り返してきたということだ。

離れ屋の修繕費。及び何処から調達したかも分からぬ怪しげな実験器機や資材——ジャンクパーツ含む——の数々。これは芳佳が医学校への進学を応援している宮藤家の家計に小さくない打撃を与えていた。

これ等の事情もあって、優人は一郎に対し矢鱈と当たりのキツイ。

だが、何だかんだ言つて内心では優人も、何者かも分からぬ自分引き取り育ててくれた一郎に強い恩義感じており、また宮藤式ストライカーユニット開発という偉業を成し遂げた彼を自慢の父親と慕い、心から尊敬している。

「ははは、(一)めん(一)めん」

一郎は誤魔化すように笑いながら優人と芳佳の向かい側に座り、自身の朝食に向かつて手を合わせた。

「では、いただきますー！」

扶桑特有の食事前の挨拶を済ませた一郎は、凄まじい勢いで朝食を食べ始める。

しかし、がつつき食べ散らかすかのような所作にはマナーもへったくれもない。

ブリタニアの501基地で、似たような食べ方をシャーリーとルツキーニがしていたと、優人は記憶している。

だが、2人ほどの美女ならいざ知らず。中年男性の場合は汚いとまではいかないまでも、見苦しいものがあつた。

「お、お父さん……」

「爆発に巻き込まれた割には随分と元気だな。食欲旺盛だし……」

父親の食事マナーの悪さに軽く引いている妹と、又しても嫌味をぶつけてくる兄。一郎は味噌汁を煽りながら不満げに応じる。

「やめてくれよ、食事時だぞ？」

「大体何だよ。庭に積み上げられてたガラクタの山は？」

「あ、あれはガラクタじゃない！そのだな、父さんの研究にどうしても、どうしても必要な資材なんだ……」

歯切れ悪く応える父親に対し、優人は容赦無く追及していった。

「南リベリオン産の爆薬も？」

「う?！」

「立派な危険物だよな? 一体何に使うんだよ? え?」

「え? あゝ……あははははは」

乾いた笑いで誤魔化しに掛かる一郎を、優人は鋭く睨み返す。

父子間で気ままずい沈黙が流れる中、割烹着を外した清佳が一郎の隣に腰を下ろし、団欒に加わる。

「ところで優人、今日はお休みよね?」

夫に助け船を出したのだらう。清佳は然り気無く話題を変えてきた。

「何年もお勤めしたことだし、暫くはお休みを貰えるのかしら?」

「え? じゃあ、お兄ちゃん卒業式来てくれる!?」

清佳の「お休み」という言葉に反応し、芳佳は期待と興奮に瞳を耀かせながら訊ねる。

3カ月後、芳佳の通う横須賀第四女子中学校で卒業式が挙行される。芳佳も卒業生一人だ。

しかも彼女は、ガリア解放の功績を評価されて卒業生代表を選ばれている。

宮藤芳佳にとって3月に実施される卒業式は、新たな旅立ちの日であると共に、自身の晴れ舞台でもあった。

「……………」

「お兄ちゃん?」

「ごめん、芳佳」

申し訳無さそうに顔を伏せ、優人は妹に謝罪の言葉を述べた。

「え?」

目を丸くする芳佳に、優人は訳を説明する。扶桑海軍航空歩兵の練度及び空母運用能力な向上を目的に編成・運用される新たな練習艦隊に教官として配属されること。

件の練習艦隊へ配属される以上。横須賀〜ハワイ間を往復する約2〜3カ月もの期間を遠洋練習航海に参加しなくてはならないこと。

そして初航海は、来年1月半ばに開始される予定となっており、卒業式の実施される3月中にはまず帰国出来ないことを……。

更に不運は重なり、一郎もまた優人とほぼ同じ時期に遠方で大事な仕事——軍機に触れるため、詳細は話せないとのこと——があるため、出席を断念している。

赤坂大将直々の御指名なこともあり、彼意外の技術者に代わってもらおうわけにもいかないそうなの。

「そうなんだ……」

話を聞き終えた芳佳は、シユンと表情を曇らせた。爛々と耀いていた双眸が一転して

暗くなる。

小学校の卒業式は母と祖母のみだったが、今年は大好き兄と生きて帰って来てくれた父も出席してくれると思ひ、楽しみにしていただけにシヨックが大きい。

「卒業式に出られなくて本当にごめんな」

優人とて、妹が卒業生代表に選ばれたとあつてはなんとしても出席したい。しかし、命令されれば従わなくてはならないのが軍人だ。

芳佳がブリタニアでやったような軍規に反する行動は出来ない。ましてや優人は士官で、下士官の芳佳より遙かに階級が上であり、その分責任も重い。

「ううん、いいの。お仕事なんだから仕方ないよ……」

芳佳は弱々しく頭を振り、力の無い笑顔で「気にしないよ」と告げ、必死に物分かりの良い子を演じる。そんな妹の姿が、優人にはとても痛々しく見えた。

ブリタニア滞在中、兄妹喧嘩が原因で優人を負傷させてしまったことがあり、芳佳は今でもそのことを引きずっている。

そのためか。以前に比べて、優人にあまり甘えなく——親しい人間でなければ、気付かない程度の微細な変化だが——なっていた。

しかし、優人としては以前のように甘えて欲しい。もう少し我が儘を言つて欲しい、というのが本音である。

軍務を口実に約7年も家族の元を離れ、妹の世話や親の手伝いを怠っていた優人とつて、下手に遠慮されることは反つて堪えるのだ。

「はいはい！暗い話はここままで！」

と、清佳がパンパンと手を叩いて鳴らし、家族の視線を自身へ向けさせる。

本人前ではとても言えないが、その所作と口調は何処かミーナと似ていた。

「あなた。優人も戻ったことですし、例の話を2人に聞かせてあげましょう？ね？」

「ああ、そうだな」

一郎は清佳の提案に頷くと、優人と芳佳のいる方へ視線を戻す。

「例の話？」

「お父さん？お母さん？」

揃つてクエスチョンマークを浮かべる優人と芳佳。一郎は軽く咳払いをしてから、話を切り出した。

「実はだな、我が家にもう1人家族が増えることになった。时期的には来年の夏頃か？」

「ええ、それくらいね」

「え？……それつて、まさか」

「？」

一郎が説明から優人は何かを察し、芳佳は今一ピンとこないらしく、首を傾げている。

「ふふ……」

2人の様子に清佳は小さく笑顔を立てると、一郎の言葉を継ぐ形で話を続ける。彼女は自らの腹部に両手を添え、さらに慈しむような優しい眼差しを注いでいた。

「優人、芳佳。お母さんね、あなた達の新しい兄弟を授かったの……」

◇ ◇ ◇

同日同時刻、南リベリオン――

ノイエ・カールスラント首都“ノイエス・ベルリン”の郊外には、帝政カールスラント皇室親衛隊管理下の研究施設が存在し、約1年前から稼働状態にある。しかし、その外観はなんとも異質で、物々しい雰囲気を漂わせていた。

四方を高いフェンスや監視塔に囲まれ、唯一敷地内へ出入りが可能な正門は、カールスラント製の自動小銃“MP43”を携えた親衛隊の兵士が警備に当たり、監視塔ではスコープ付のKar98kを構えた狙撃兵が常駐し、施設外周を警戒している。

この厳重な警備体制は、研究施設というよりは捕虜収容所。若しくは、凶悪犯ばかりを収監している刑務所のようなだ。

研究機材や食料、医薬品等の物資が定期的に運び込まれている一方で、人の出入りは

殆んど見られない。

さすがに施設職員が休暇を貰って外出することはあるようだが、どうも箝口令が敷かれているらしく、施設の実態及び研究の内容はその一切が不明となっている。得体の知れない不気味な場所だが、最近はある人物が頻繁に訪れていた。

皇室親衛隊第1独立戦闘航空団『インペリアルウィッチーズ』司令——悠貴・フォン・アインツベルン親衛隊大佐である。



施設内第1研究室——

「如何でしょうかアインツベルン大佐？」

年若い男性研究員が、隣に立つ悠貴に声を掛ける。男性は第1研究室所属の主任研究員だ。

度の強い眼鏡を掛け、年季の入ったヨレヨレの白衣を着ている。

自分を美しく見せる術を心得ている悠貴とは対照的に、身嗜みにはあまり気を遣わないタイプのようなのだ。

ひよろりとした身体つきと色白な肌からは、典型的な研究者にありがちな不健康さが

垣間見える。

「……………」

機材が所狭しと並ぶ薄暗い研究室で、悠貴は「ある一点」を見つめていた。

照明が落とされた研究室では「それ」が唯一の光源であり、室内を鈍く照らしている。

ガリアが解放されて以来。彼女はこの施設へ足繁く通い、場合によつては泊まり込むこととあつた。

彼女にとつて、この施設で行われている研究は非常に興味深いものらしく、進捗状況や成果を纏めた最新の報告は細かくチェックしている。

「今のところ、全て順調に運んでおります。しかし……………」

悠貴の返答を待たず、主任研究員は言葉を続けた。悠貴は視線を動かさぬまま、無言で耳を傾ける。

「まさか魔法力がネウロイにとつて毒にも薬にもなる物質だとは、日頃から目にしている私でさえ未だに信じられません」

饒舌に心境を語りつつ、主任研究員は横目でチラチラと悠貴の様子を窺う。

大学を卒業してから研究一筋の人生を歩み続け、女性とは縁遠い生活を送っていた。

周囲から「研究者の職を奪われれば何も残らない」と陰口を叩かれているような冴え

ない男が、今やカールスラント宰相息女御抱えの研究者に抜擢されている。大変な名誉だ。

周りからも悠貴のお気に入りとして認識され、嫉妬の対象となり相応の苦勞もしているが、同時に『インペリアルウィッチーズ』司令の寵愛を受けている現状が、彼の心を優越感で満たしていた。

その上、彼は悠貴と何度も夜を共にしている。この事実を同僚達が知ったらどう思うだろう。

「これを公表すれば、生物学会にとつともなく大きな衝撃が走——」

長々と話していた主任研究員が、唐突に黙り込んだ。公表という単語に反応した親衛隊大佐が、射殺さんばかりの鋭利な眼差しを向けてきたからだだった。

「え、あつ……も、もちろん！そんなことは致しません……」

慌てて取り繕おうとする主任研究員の額には嫌な汗が滲んでおり、瞳にも明らかに脅えの色が射していた。一方、悠貴は沈黙を保ったままだ。

「え〜つと、それから……プロトタイプの2体は、既に白海と太平洋方面で試験運用中ですので、詳細は後ほど。まさか、あのような方法でネウロイのコアをし——」

主任研究員の話が再度中断された。いつの間に入ってきたのか。2名の親衛隊兵士に、左右から挟み込まれる形で取り押えていた。

「あなたは素晴らしい研究者よ。私の期待によく応えてくれて……」

艶やか笑みを浮かべ、主任研究員を賞賛する悠貴。だが次の瞬間、彼女の表情から笑顔が消え失せ、冷徹な本性を露にする。

「その口の軽さを除いて、だけれど。連れていきなさい！」

親衛隊兵士にそう命じる彼女は、既に主任研究員を見てなどいなかった。

「た、大佐！アインツベルン大佐！どうかお許しを！アインツベルン大佐あ！」

自身が切り捨てられたことを漸く理解した主任研究員は、必死に慈悲を乞う。

だが、その声は虚しく響くばかりで、悠貴・フォン・アインツベルンの耳に届くことはなかった。

そもそも、〃元〃主任研究員のことなど初めから眼中になかったのだ。

少しばかり〃ベッドで優しく〃はしてやったが、それは彼が行っていた〃研究〃を一定の段階まで進める為に必要だったからに過ぎない。

彼女にとって、『インペリアルウィッチーズ』をはじめとする自身の派閥の人間も、その他の自分を支援している輩共も、目的を達成する為の駒でしかない。

「漸く、〃〃〃まで来た」

眼前の培養槽の中で鈍い光を放っている正十二面体の赤い結晶に向かって、悠貴は何者かに語り掛けるように独り言ちた。

「これで取り戻せる。あの日々を……お兄ちゃん」

第4話 「悪夢とすき焼き」

「ん〜……もう朝?」

扶桑皇国海軍遣欧艦隊から連盟空軍第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』へ派遣されている航空ウィッチ——宮藤芳佳軍曹は、宛がわれた自室で目覚めの良い朝を迎えていた。

眩しい朝日が窓から差し込み、小鳥の小気味良い囀りがそと耳朶に触れる。

それはいつも通りの朝で、いつも通りの1日が始まるはずだった。しかし、いつもとは何かが違うっていた。

「う〜ん、なんかあんまり寝た気が……あれ?お兄ちゃん?」

と、寝惚け眼でベッド上に走らせる芳佳。統合戦闘航空団ウィッチ部隊のメンバーは、士官・下士官問わず全員に基地宿舎の個室を与えられる。

本来は芳佳も1人部屋なのだが、今はウォーロックの暴走で部屋を失った彼女の兄も利用していた。

芳佳と同じく扶桑海軍遣欧艦隊を原隊に持つ航空ウィザード——宮藤優人大尉。

同室になって以降、1つのベッドで仲良く眠っていた2人だが、どういうわけか優人の姿が見当たらない。

芳佳は首を巡らせ、時計を確認する。この時間帯、いつもなら優人はまだ部屋にいて、着替えや洗顔等をしている。

用事があつて先に部屋を出たのだろうか。自分は兄から何か聞かされていただろうか。記憶を辿ってみるも、心当たりはない。

「あつーのんびりしてたら遅刻しちゃうよー!」

芳佳がぼーっと考えている間に、時計の針が起床時刻を差し示していた。数瞬遅れて、基地中に起床ラッパが響き渡った。

弾むようにベッドから飛び出すと、芳佳は慌てて服を着替え、身嗜みを整え始める。「もおー!坂本さんに叱られちゃうよおーっ!」

髪に僅かな寝癖を残しつつ、芳佳は食堂へ向けて猛ダッシュして行った。



「あ、芳佳ちゃんおはよう!」

遅刻ギリギリで食堂に滑り込んだ芳佳を迎えたのは、リネット・ビジョップ。通称 //

リーネ”だった。

エプロン姿で朝食の準備をしていた彼女は、芳佳に向かって優しく微笑みかける。

「おはようリーネちゃん！ごめんね、今日は私も当番なのに……すぐに手伝うから！」
「まったく、朝から賑やかなこと」

リーネに謝意を述べ、厨房へ入ろうとした芳佳の背中に第3者の声が掛かる。ガリア
貴族令嬢のペリーヌ・クロステルマンだ。

「あ、ペリーヌさん。いたんですか？」

「貴方が来るずっと前からいましたよっ！」

悪気無しに訊く芳佳に対して、ペリーヌは両目を吊り上げてヒステリックに怒鳴り散らす。

「うじゅ……ペリーヌ、うるさくい」

「うるさいぞ、ツンツン眼鏡。サーニヤが起きるダロ」

テーブルに突っ伏して眠っていたルツキーニが、寝惚け眼を擦りながらペリーヌに抗議する。

席に着いたままコックリコックリと船を漕いでいるサーニヤを世話していたエイラも、ロマーニヤウィッチに続いて不平を述べた。

「エイラさん！その呼び方はやめなさいと何度も——」

「まあまあ、朝から猛り立つなよ」

と、ルッキーニの隣に座っているシャーリーがペリーヌを宥めに入る。

「扶桑の諺にも『短気は損気』ってあるぜ?」

「なっ!? 誰が短気ですって! 私は貴方が思っているよりも遥かに寛大ですわよ!」

どうやら毒蛇だったらしい。腹の虫が治まらないガリア貴族令嬢と、リベリオンウィッチのやり取りは、その後暫くの間続いた。

そんな2人を余所に、芳佳は食堂中に視線を走らせ、兄の姿を探す。

(お兄ちゃん、ここにもいない。どうしたんだろ?)

「はい、芳佳ちゃん」

「あ、ありがとう」

朝食を乗せたトレイをリーネから差し出され、芳佳は礼と共に受け取る。

「どうかしたの?」

「リーネちゃん、お兄ちゃんが何処にいるか知らない?」

「……………え?」

「朝から会えてないんだよねえ、部屋にもいなかったし…………」

「……………?」

リーネは不思議そうに首を傾げると、芳佳に対し予想外の言葉を発したのだった。

「お兄ちゃんって？芳佳ちゃん、お兄さんがいたの？」

「……えっ!？」

芳佳は耳を疑った。リーネが兄を、優人を知らないとはどういうことなのか。

「何言ってるのリーネちゃん？お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ、扶桑海軍の宮藤優人！」

「えっと……ごめん、わからない。芳佳ちゃんの従兵さんかな？」

困ったような表情で、申し訳なさそうに訊いてくるリーネ。彼女の言動に芳佳は益々混乱した。

「どうしたんだ？」

2人を心配したシャーリーが声を掛けてきた。彼女だけではない。先に食堂へ来ていたウィッチ達が、芳佳の元へ集まっている。

「シャーリーさん！シャーリーさんはお兄ちゃんを！宮藤優人を知ってますよね？」

「ゆうと？誰だそれ？」

シャーリーの反応はリーネと同じだった。他の4人にも視線で問い掛けるも、誰も優人を覚えていない。いや、そもそも彼のことを忘れてしまっているようだった。

「おはよう、皆さん♪」

ふと重々しい空気が支配する食堂内に、音楽家を思わせる澄んだ声音が響く。

501司令のミーナが、副司令兼戦闘隊長の坂本。そして同郷のバルクホルン、ハル

トマンと共に食堂に現れたのだ。

「お前達、朝からどうしたんだ？」

「なんか微妙な空気だね？」

隊員等の様子がおかしいことに気付いた坂本と、ハルトマンが順に声を掛ける。

「おはようございませう♪坂本少佐あ！」

「坂本少佐、なんか芳佳が変なんだよ」

敬愛する坂本の前にして表情を輝かせるペリーヌ。上官からの質問には、シャーリーが後頭部を掻きながら応じた。

「変？芳佳さんが？」

「芳佳、どうかしたのか？」

501の司令と副司令が、揃って怪訝そうな目を芳佳に向ける。

「坂（本さん！）そうだよ、坂本さんなら！」

兄の長年の戦友で親友の彼女なら或いは。芳佳は藁にも縋る想いで、坂本を問い詰めた。

「坂本さん！」

「ん？」

「坂本さんは、お兄ちゃんが今どこにいるか知りませんか!？」

「お兄……ちゃん？」

「はい！宮藤優人！私の兄で、坂本さんの——」

「いや、知らんな」

「っ!？」

坂本の言葉に、芳佳の全身から力が抜ける。何故、どうして、501の誰も、坂本さえも兄を覚えていないのか。

「芳佳さん、夢でも見たの？」

（夢……？そんな、だって……!）

ミーナの問いに、芳佳は頭を振る。大好きな兄と過ごした日々が夢なんてこと。あるはずがない。

「ずっと一緒に！ここに来てからは一緒にネウロイと戦って！一緒にウォロックを倒して！ガリアを解放して！今はずっと同じ部屋で！」

「……貴方、何を言ってるんですの？」

「ウォロックに止めを刺したのは、オマエダロ？」

「それに、芳佳ちゃんはずっと一人で部屋を使っていたわ」

「うじゅ……芳佳なんか変」

「お前、本当にどうしたんだ？」

ペリーヌ、エイラ、サーニヤ、ルツキーニ、バルクホルンから順に口を開く。

501の誰も兄を覚えていない。それどころか、まるで宮藤優人という人間など、初めから存在していなかったかのような口ぶりだ。

嘘や冗談にしてはあまりに質が悪い。堪えられなくなった芳佳は、脇目も振らずその場を駆け出した。

「芳佳ちゃん！」

背中にリーネの声が掛かる。だが、芳佳は振り向くことも足を止めることもせず、自室へ向かつてひたすら走った。

やがて部屋に着き、震える指でドアを開ける。だが、そこに兄の姿は無かった。

起床時は気付かなかったが、衣類や嗜好品等の持ち物までもが跡形も無く消えている。

「そんな……」

自然と涙が溢れる。何故、兄がいないのだろうか。何故、他の誰も覚えて無い中、自分だけがこんなにハッキリ覚えてるのだろうか。

何故、こんなに逢いたいと思ってるのに、何処にもいないのだろうか。

「いや、いやだよ。こんなのいやだよ、お兄ちゃん……」

流れる涙。漏れ出る嗚咽。哀しみのあまり張り裂けそうな胸に抱くのは兄に逢いた

い、傍にいて欲しいという想い。

「お兄ちゃああああああああん！」

堪えられなくなつた芳佳は、喉が潰れんばかりの大声を上げて泣き叫ぶのだった。

◇ ◇ ◇

1945年1月某日、扶桑皇国・横須賀――

麗された末に目を覚ました芳佳の視界が、薄暗い天井を捉える。そこは自分の部屋で、彼女は布団に入っていた。身体中ビツシヨリと嫌な汗を掻き、心臓がドクンドクンと早鐘を打っている。

(……………夢?)

身体を起こした芳佳は、汗で額に張り付いた前髪を掻き上げると、すぐ隣に敷かれてある優人の布団を見た。

(そつか。お兄ちゃん、今夜は坂本さんと約束があるって……)

悪夢が現実でなかったことに、芳佳は心の底から安堵する。

一方で、あまりにリアルな夢を見たためなのか。言い知れぬ不安と恐怖が彼女の胸中に滲んでいた。

「お兄ちゃん……」

優人の布団に手を伸ばし、枕を手に取る。兄の匂いがするそれを強く抱き締め、芳佳は一筋の涙を零す。

◇ ◇ ◇

同時刻、横須賀鎮守府――

扶桑皇国海軍横須賀軍港。その司令部庁舎内の食堂に純白の扶桑海軍第二種軍装を身に纏った2人の海軍士官が訪れていた。

ガリア解放の立役者として凱旋帰国を果たした宮藤優人大尉と、坂本美緒少佐だ。

窓側の席を借り受けている2人は、鍋が置かれたテーブルを挟むように向かい合っていた。

食事時は、多数の海軍将兵や軍属で賑わっている食堂も今は優人と坂本だけ。閑散とした雰囲気にも包まれ、照明も2人のいる窓側に絞られている。

「何だ？食わんのか？」

と、坂本が訊く。2人がつついている鍋料理は、すき焼き鍋だった。

醤油、砂糖、酒をベースにした割り下、牛肉にネギ、春菊、焼き豆腐などの具材を添

え、共に煮た豪勢な扶桑が誇る鍋料理である。

鍋から取った数切れの肉を小皿の生卵を染み込ませ、口元に運ぶ。濃厚ながらもしつこさの無い牛肉の旨味で、扶桑ウィッチの口内が満たされていく。

「何で、()なんだ？」

伏せていた顔を持ち上げ、やや不機嫌そうな口調で訊き返す。

美食家——というより食い意地が張っている——優人が、扶桑皇国でも指折りの高級料理を前にしているにも関わらず、表情がどこか暗い。

「ん？」

茶碗の白米を掻き込みながら、坂本は不思議そうに首を傾げる。

「すき焼き食うならもつと他に良い場所あるだろ？横浜とか東京とか、それこそ横須賀市内にだって！それなのに……何で、それによって軍港の食堂なんだよ？」

「うだうだ言つてないで食え。せつかくのすき焼きだぞ？」

不満タラタラな優人を宥めつつ、坂本は鍋に追加の牛肉を加える。食材は全て坂本が持参したものであるため、実質彼女の奢りだ。

不満など言ったら罰が当たるといふものだが、どうも優人は得心がいかないらしい。「つたく、遠洋航海前の。陸最後の外食が味も素っ気も無い軍港内の食堂でなんて。」

ああ、なんて惨めだあ……芳佳にも当分会えないし」

優人らしからぬネガティブな思考と発言。妹にも、501や扶桑海軍の戦友達にもこんな情けない姿を晒したこと——ラッキースケベなハプニング以外は——はなかった。

或いは付き合いが長く、気の置けない間柄の坂本と2人きりだからこそ、こういった面を見せているのかもしれない。

「まったく、帰国してすっかり腑抜けてしまったようだな」

「うるさいな。俺は案外繊細なんだよ」

「自分で言うか？」

「そもそも、お前が教官職を押し付けてきたりしなけりや、遠洋航海にも参加せずにする。芳佳の卒業式にだつて出られたんだぞ？」

「またその話か……」

坂本はウンザリだと言わんばかりの声色で応じ、扶桑茶が注がれた湯呑みを手に取る。

航空練習艦隊の教官職は、元々扶桑海軍遣欧艦隊空母機動部隊所属の若本と、帰国してから海軍ウィッチ養成学校で後進の育成に勤しんでいた坂本の2名が召集されるはずだった。

しかし、3カ月の勤務を経た後、突如教官職を退官。それに伴い、空席となった航空

練習艦隊の教官には、横須賀鎮守府で内勤に従事していた優人が選ばれたのだ。

「人に教官の役目を押し付けて、山に籠って。一体何するつもりだ？」

「私はまだ、飛ばなければならんから……」

坂本はそう言つて、優人の小皿に肉を一枚置く。良く煮えられており、見るからに美味そうな牛肉だ。

芳醇な香りに誘われ、扶桑海軍ウィザードは肉へと箸を伸ばす。食欲が無いわけではないらしい。

「美味いか？」

「ああ……」

「なら、これはどうだ？」

さらにもう一枚、牛肉が優人の小皿に渡される。今度の肉はまだ赤身が残っており、十分に煮られていないようだった。

優人は牛肉を箸で摘まみ上げ、怪訝そうな表情で矯めつ眇めつ眺めるた後、口へ放り込んだ。

「つ?!何だこれ?!」

やはり生焼け肉だったらしく、扶桑海軍ウィザードはすぐさま吐き出す。

「ウィッチやウィザードと同じなんだ、肉っていうのは……」

半端に煮られた牛肉に悶絶する優人を他所に、突如真剣な眼差しで語り始める。

「はっ？」

「高かろうが、肉質が良かろうが焼きが甘かったり、煮足りないようでは意味がない。焼かれて、煮られて味を磨くんだ」

「……………」

「航空歩兵も、いくら魔法力や飛ぶ才能が優れていようが所詮は結局は世間知らずの子ども。勇ましく見せたところで、士気も覚悟も本職の軍人に及ばない」

「……俺達は軍人気取りの半端モノってわけか？」

「そうだ。だからこそお前も私も他の航空歩兵も、もつと煮て焼かれなければならない」

語り続ける坂本の話に耳を傾けつつも、優人は己の頭上で疑問符を踊らせていた。

彼女は、対ネウロイ戦の主力に位置づけられているウィッチ・ウィザード——つまり自分達のことを「世間知らずの子ども」で「本職の軍人には及ばない」存分と称している。

確かに一理あるかもしれない。だが、謙虚を通り越して自己卑下とも取れる弱気な発言は、勇猛果敢なウィッチとして知られる坂本美緒らしくない。

「欧州の戦いに身を投じてから魔法力の減退を自覚するまで。そんな当たり前のことも忘れてしまっていた……」

「だからお前は、山に籠って新しい戦い方を模索すると?」

魔法力を失ってしまえば、ウィッチだろうとウィザードだろうと“ただの人間”に成り下がる。

以前のようにネウロイと戦うのはもちろん、軍内での居場所も失くしかねない。

半生を戦いと軍隊生活に捧げた坂本美緒という女にとって、それは存在価値を見失うのと同義だった。

優人として、他人事ではない。宮藤の姓を名乗っていても、彼は両親の血を継いでいない養子だ。

秋元家の血筋でない以上、母や祖母のように成人後も魔法力を維持出来る保証は何処にもない。

年齢的にも、いつ魔法力の減退が始まってもおかしくないのだ。

「あと2、3年……いや、1年でもウィッチを続けられるなら何でもするさ。」

「坂本」

「私が戻るまで、ウィッチ候補生のヒヨツ子共のお守りは任せたぞ!」

汐らしくしていた坂本が、いつものようにサバけた笑顔を見せる。

「未来のウィッチ隊指揮官達を、傍で支えてくれる連中は何人いても良いはずだ」

「未来の指揮官、芳佳達のことか?」

未来のウィッチ隊指揮官、その言葉が誰を示しているのか。扶桑海軍ウィザードが理解するのに、時間はかからなかった。

優人の義妹——宮藤芳佳。502に滞在中の雁淵孝美、管野直枝、下原定子。扶桑陸軍には黒田那佳、504に派遣されている中島錦に諏訪天姫。何れも将来有望なウィッチだ。

「芳佳も他の連中も良い腕を持っている」

扶桑海軍ウィッチは優人の問いに深く頷きつつ、話を続ける。

「だが、アイツの後に続く連中はまだ生焼けばかりだ」

優人は無言だったものの、内心では（確かにな……）と同意していた。

熱心な宣伝活動が功を奏し、扶桑軍のウィッチ・ウィザードの総数は陸海軍共に——候補生を含め——過去最大の規模になっている。

しかし、大半は実戦を知らず、練度も低い。座学知識と志で戦いを理解したつもりになっている半端モノばかりだ。

扶桑海事変やカールスラント撤退戦のような激戦に放り込まれば、逃げ出す者や命を落とす者は後を絶たないだろう。

「勉強や実技に励むのもいい、歴戦のウィッチに憧れるのもな。だが、それぐらいで務まるほどネウロイとの戦いは甘くない……最後は力だ」

優人の胸の内を察したかのように、坂本はさらに言葉が続ける。

「それが、私やお前が長年軍にいる理由でもあるからな」

「……だな。よし！なら俺も遠洋航海前に腹いっぱい食うか！」

と、意気込んだ優人はすき焼き鍋に箸を伸ばし、手近な肉を掴もうとする。しかし、彼が狙っていた牛肉は一瞬で彼の視界から消え去ってしまう。

「あ……」

「早く食わねば盗られるぞ？」

「お前っ！人がせっかくやる気になってるってのに……！」

目当ての牛肉を掻っ攫った戦友を、優人は怨めしそうに睨み付けるも、当の坂本は風と受け流し、横取りした肉に舌鼓を打っている。

「まあ、そう熱り立つな。代わりの肉はまだいくらでもあるぞ？3人前もあれば——」

「10人前だ！」

言葉を遮り、追加の肉を声高に要求する優人。対する坂本は「はっはっはっ！」と豪快に笑う。

「それでこそ、宮藤優人だ！」



約1時間後――

食事を終え、坂本とも別れた優人は、牛肉を詰め込んだ腹を抱えながら帰宅の途に就いていた。

がつつき過ぎたせいで腹が膨れ気味になっているが、厚手のコートを羽織っているおかげで目立たずに済んでいる。

「ん？」

宮藤診療所に続く山道。その入り口に佇む人影が、扶桑海軍ウイザードの目に留まった。

小柄なシルエットと、身に纏った薄緑色の甚平。その上に羽織っている質素なデザイン半纏には見覚えがある。

「あ、お兄ちゃん♪」

「芳佳」

兄の存在に気付き、芳佳は駆け寄った。薄暗い夜道でも、口元から白い吐息が漏れ出ているのが分かる。

「お前、何で？」

「えへへ、お兄ちゃんを迎えに来たんだ♪」

屈託の無い笑顔で応じる芳佳。優人にとって妹の笑顔は、夜の闇を払い、冬の寒さを吹き飛ばさんばかりの眩しさと温もりを感じさせるものだが、今回は少し事情が異なっていた。

「……いつから?」

「え?」

「いつからここで待ってたんだ?」

と、優人は訊ねる。扶桑海軍ウィザードの鋭い——妹のこととなると特に——観察眼は、芳佳がブルブルと小刻みに震えているのを見逃さなかった。

「待ってないよ、今来たところで——」

「……………」

「え〜つと、10分くらい?」

「……………」

「2時間くらい、です。うう……」

兄からの無言の圧力に屈し、芳佳はシヨボくれながら白状する。すると、狙い済ましとかのように冷風が吹き、芳佳を襲った。

魔法力で守られているウィッチとはいえ、寝間着で真冬の夜に出歩くなど無茶もいところ。防寒対策が半纏だけでは心許ない。

「まったく……」

見兼ねた優人は呆れたように呟くと、首からマフラーを外して妹の首に巻いてやる。

「これで、少しはマシになるだろう？」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

「こんな時間にこんな場所に突っ立ってたら身体に障るぞ？」

「だ、大丈夫だよ。ほら、私って風邪引いたことないし！」

「これからも引かないとは限らないんだよ」

「あう！」

優人に指で額を小突かれ、芳佳は間の抜けた声を漏らす。

例え彼女の言う通り風邪を引かないとしても、少女が夜中に一人で出歩くこと自体が問題なのだ。

今の御時世、ウィッチだと分かった上でちよっかいを出してくる不逞の輩も少なからず存在する。

組織内の花形をウィッチ・ウィザードに奪われ、逆恨みする軍関係者。ネウロイを神と崇める怪しげな宗教団体。破廉恥な目的で手を出す変質者と、実例を挙げたらキリがない。

これらの危険についてたっぷり話してやりたいところだが、生憎と優人は長々と説教

するのも、されるのも嫌いだ。それに悪戯に恐怖を煽るようなやり方も好きではなかった。

今は早く家に帰り、冷えた妹の身体を暖めてやらねば本当に風邪を引いてしまう。

「ほら、そろそろ帰るぞ?」

そう言うのと、優人は芳佳の手を取った。長時間寒さに晒されていた手は、当然ながら冷えている。

「お兄ちゃんの手、暖かいね」

「お前の手が冷たいんだよ」

「えへへ、ごめんなさい♪」

口では謝りつつも、芳佳の頬は緩み切っていた。理由はどうあれ、兄と手を繋いで歩けることが嬉しいらしい。

「……ねえ、お兄ちゃん」

「ん?」

山道に入ろうとした兄を芳佳が呼び止める。声につられ、優人は振り返った。

「ちよつとだけ、夜のお散歩してから帰らない?」

先程とは打って変わり芳佳は哀しげな表情を浮かべている。

「芳佳?」

「お願い」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………わかったよ、少しだけだぞ?」

見つめ合いの末、妹のいじらしい態度に弱い兄が根負けしたのだった。

「やったあ〜!」

嬉しさのあまり跳び跳ねて喜ぶ芳佳。欣喜雀躍とする妹に対し、優人は疑問をぶつける。

「けど、何でわざわざ夜に?明日休みだし、なんなら1日中付き合えるぞ?」

「あつ、うん……………その……………」

優人の問い掛けに、芳佳は口籠った。夜の散歩に誘ったのは思いつきではなく、明確な理由がある。件の悪夢だ。

しかし、芳佳は話したくなかった。話してしまえば、夢で終わらず現実になってしまう。そんな気がする。

「たまには、夜に出歩くのも良いかなって……………」

「?……そっか」

曖昧で納得し難いものだったが、優人がそれ以上追及することはなかった。

その後。2人は日付が変わるまで夜の街を歩き回り、いつもより大分遅く床に就いたのだった。

第5話「航空練習艦隊と第一艦隊」

1945年1月某日、扶桑皇国横須賀鎮守府——

早朝の横須賀軍港に、多数の艦艇が停泊している。全て、新設された航空練習艦隊へ動員される扶桑海軍隷下の艦艇群であり、記念すべき最初の遠洋航海を間近に控えていた。

海軍兵学校をはじめとするウィッチ養成学校在学中のウィッチ候補生達と、教官数名を乗せた2隻の航空母艦——加賀型航空母艦“加賀”及び“土佐”——を主幹とし、複数の戦艦・駆逐艦を護衛に伴い、扶桑くハワイ間を往復する予定である。

ハワイにはリベリオン合衆国海軍太平洋艦隊の司令部が置かれており、扶桑海軍連合艦隊麾下の各部隊とは、大戦直前より定期的に合同演習を実施している。また、扶桑海軍士官の中には自身に磨きをかける為リベリオンへ留学する者も多い。

これらの事情から、ウィッチ候補生及び士官候補生の育成を目的とした遠洋航海に適したルートと言える。



空母「加賀」・ガンルーム——

航空練習艦隊旗艦——加賀型航空母艦1番艦「加賀」及び2番艦「土佐」は、カールスラントへ譲渡された赤城型3番艦「愛宕」及び4番艦「愛鷹」——譲渡後、旧愛宕は「グラーフ・ツエツペリン」。旧愛鷹は「ドクトル・エツケナー」にそれぞれ改名された——の代替として、当時建造中だった2隻の加賀型戦艦を改装・空母化し、異なる艦種へ生まれ変わらせたものだ。

だが、蒼龍型の登場後は相対的に旧式化。艦齢の長い戦艦改装空母の加賀型は、目立った活躍も無いまま機動部隊から外された。

本格的な欧州派遣を目前にして一線を引いた老朽艦だが、当練習艦隊が試験的に設立されたのを機に、練習空母という新たな役割を得たのだ。

訓練用空母としては既に「鳳翔」が存在するが、あちらは飛行甲板延長等の改修が仇となり、外洋航行能力を失ってしまっている為、遠洋航海には向かない。

「気を付け！」

加賀に乗艦して間もなく、ウィッチ候補生達に集合が掛かる。ガンルームに集まった彼女等に対し、教官の1人——若本徹子中尉が声高に号令する。

若本の傍らには同輩であり、第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』に

も招聘された歴戦の猛者——宮藤優人大尉が立っている。彼も本練習艦隊——厳密には、本来教官を任されるはずだった坂本美緒少佐の代理の——教官であった。

ガリア解放の1人である宮藤優人大尉と、扶桑最強のウィッチと名高い若本徹子中尉。2人の前に整列した候補生達は、遠洋航海前に世界的エースでもある教官達から訓示があるに違いない、と一様に気を引き締める。

(一)、この御二人が宮藤大尉と若本中尉！まさかお会い出来るなんてえええええええええ！)

ピリピリと張り詰めた空気が支配するガントリーム内で、人知れず歓喜の叫び声を上げている者がいた。海軍兵学校か、本艦隊に参加している服部静夏候補生だ。

(扶桑海事変や欧州の最前線で活躍した英傑！まさか御尊顔を拝する日が来るなんてえええええ！)

扶桑海軍事変勃発時にウィッチ・ウィツザードへ志願し、リバウをはじめ欧州各地の激戦を潜り抜けた生きる伝説。その威風堂々たる姿を前に、服部は内心狂喜していた。軍人家系の出身で、幼い頃から使命感を叩き込まれて育ってきた彼女は、規律や教則を頑なに守ろうとする杓子定規な生真面目な性格をしている。

だが、彼女として年齢相応の少女。憧れの英雄を目の当たりして感極まっていた。

直立不動の姿勢を崩さないながらもソワソワと落ち着かない様子で、これから自分達

の教官となる2人を映した瞳は眩しいほどに輝いている。

尤も、心中で密かに喜びの声を上げているのは、彼女だけではない。遠洋航海に参加している候補生全員が同じ心境であった。

扶桑海軍に属する若手の航空歩兵やその候補生にとつては、映画スターのような存在。それほどの人物が自分達の教官を務めると聞けば、心沸き立つのも無理はないだろう。

一方で、他の候補生とは異なるベクトルで教官達……いや、優人を猛烈に慕っている者もいた。

(宮藤大尉、またお会いできるなんて♪)

熱を帯びた眼差しを優人に注いでいるのは、佐世保航空予備学校学年主席——三隅美也候補生である。

頬を紅潮させ、胸をトクンと高鳴らせている彼女の姿はまさに恋する乙女。姿勢こそ直立不動だが、表情はウツトリと恍惚しており、いつ若本の叱責が飛んでくるか分かつたもんじやない。

またしても、ウィッチー人を手籠めにしてしまった優人だが、当の本人は知る由もなかった。

「お前も知つての通り。これから我々は空母部隊の運用能力向上を兼ねた遠洋航海に出

る」

今次遠洋航海について若本が説明を始め、それを合図に場の空気も一変する。先輩達へ羨望の眼差しを注いでいたウィッチ候補生の間に一層強く鋭い緊張が漂い、全員が我知らず表情を強張らせる。

「練習艦隊とは言つても海軍のいち部隊であることに変わりはない。船旅気分に参加しているふざけたヤツは、俺が海に叩き落としてやるからそのつもりでいろ！」

叱咤を通り越して恫喝と取られかねない若本の発言。間近で聞いている優人は、小さく溜め息を漏らす。

まだ教練も始まっていないというのに、候補生の何人かは目の前の鬼教官にすっかり脅え、縮こまってしまった。

(おいおい……)

戦友の教官ぶりを観察していた優人は、その体たらくに軽く肩を竦める。

叱咤激励して後輩を奮い立たせようしたのだろうが、すっかり萎縮してしまった彼女達を見るに、逆効果なのは明らかだ。

(ま、スコア稼いだトップエースだからって教官としても優秀とは限らないけど……)

若本が無能な教官かと言えばそうではない。だが、生来の荒つぽさ故か。リバウ時代の坂本美緒をも上回る鬼教官ぶりを発揮している。

こうなつてしまつては誰かが両者の間に立ち、緩衝材としての役割を果たさなくてはならない。

(それは俺の仕事かな?)

艦隊における自身の役割を認識した扶桑海軍ウィザードは、これから教え子となる少女達をじつと見据える。

坂本の師事を受けた服部静夏だけは、将来有望なウィッチとして海軍兵学校に推薦された士官候補生でもあるが、彼女とて本格的な空母発着艦訓練や洋上飛行の訓練を行ったことはない。百戦錬磨の優人からすれば、全員大差無いヒヨッコだった。

「俺と宮藤大尉が、この航海で海軍ウィッチの何たるかを叩き込んでやる! 扶桑へ戻るまでにもものになるか、ならないかはお前等次第だ!」

「「はい!」」

「声が小さい!」

「「はいっ!」」

若本が怒号を飛ばし、ウィッチ候補生達は一斉に声を張り上げる。中でも士官候補生の服部静夏と、佐世保航空予備学校から参加している三隅美也の2人は一際声が大きく、気合い十分といった様子だ。

「よおし! まずは準備運動、飛行甲板でランニングだ! 手始めに艦首から艦尾間を往復

！さあ、わかったら甲板へ行け！駆け足！」

フソウオオカミが三度吠え、ウィッチ候補生達が直ぐ様走り去って行く。未来の航空歩兵達が遠洋航海を振り返った際、真つ先に思い出す地獄の猛訓練が始まったのだつた。



程無くして参加艦艇集結を終えた航空練習艦隊は、直ちに横須賀を出港。目的地であるリベリオン領ハワイへ進路を取る。

太平洋洋上を突き進む練習艦隊。その旗艦「加賀」の飛行甲板上では、ウィッチ候補生達が既に何十往復も走らされていた。

「ウィッチの基本はまず体力だ！走れ走れ走れ！ほら、ペースが落とすな！」
「は、はいっ！」

若本の気迫に圧され、よろけていた一部の候補生がスピードを上げる。

ペースが落ちる者。脱落しかける者が現れると、若本は竹刀を甲板に叩きつけながら叱咤する。今の彼女は、誰がどう見ても立派な鬼教官だ。

甲板で各々作業に当たっている加賀乗員等の姿もある。若本が声を張り上げる度、自分

が叱られている訳でもないのに条件反射で肩が跳ね上がっている。

「坂本よりスパルタなんじや……?」

と、扶桑海軍ウィザードは苦笑気味に呟く。常に生命の危険が伴う実戦ではないにも関わらず、後輩達の無事を心から祈った。同時に、妥協も容赦も一切しないであろう若本の教え子になってしまった彼女等に対し、本気で同情していた。

訓練初日で、一体何人のウィッチ候補生が疲労と筋肉痛に苛まれ、動けなくなることやら……。

やがて、脱落者が現れ始めた。汗塗れとなった候補生等が、水練着や制服を肌張りつかながら次々と甲板に倒れ込む。

仰向けの状態で倒れた候補生の中には発育の良い者もあり、呼吸を整えようとして豊かな胸を上下させている。男の身としては少々目の毒だった。

「しっかし……」

頭にスパルタが付く訓練風景から視線を外すと、優人は艦隊の布陣を訝しげに確認する。彼が乗艦している戦艦改装空母“加賀”、その後方を同型2番艦“土佐”が追従している。

優人が予め聞いていた話では、航空練習艦隊は“加賀”と“土佐”のみで構成される

小艦隊——戦隊規模——のはずだった。

しかし、実際は加賀型2隻の随伴艦として多数の艦艇が動員しており、扶桑海軍所属の比較的旧型の駆逐艦他。リベリオンから購入した数隻のフレッチャー級駆逐艦と、高速戦艦で知られる筑波型戦艦の“生駒”及び“妙義”を加えた1個機動部隊に匹敵する大艦隊と成っていた。

「特設の訓練部隊、のわりには物々しいな……」

いくら扶桑皇国が世界屈指の海軍戦力を有する海洋国家とはいえ、練習艦隊で一線級に準ずる過剰な規模と戦力。異様を通り越して異常だ。

艦隊司令長官からは出港直前に「若きウィッチ候補生に空母部隊の環境に手早く慣れてもらおう為」と説明されたが、表面上は納得したように振る舞ったものの、優人の不審は消えていない。

殊に、大和型に次ぐ新鋭戦艦である筑波型が2隻も動員されている現状が、優人の疑念を一層強くしている。

「……何かあるのか?」

ふと優人の頬を撫でるかのように風に吹いた。爽やかな潮風に混じったキナ臭さに、扶桑海軍ウィザードは思わず顔を顰めるのだった。



数日後、空母「加賀」艦内浴場――

扶桑を発つてからどれほどの日数が経っているのだろう。まだ2、3日程度だろうが、体感ではその数倍が過ぎているように思えた。

空母部隊の運用能力向上を兼ねた遠洋航海と猛訓練の日々は、自分達が扶桑本国とハワイ諸島間の何処かにいる、というレベルの認識しか与えてくれない。

「いつつ……これじゃあ、欧州に派遣される前に死んじゃうわよ」

湯が傷に滲みる痛みに、三隅美也は顔を歪めた。体力と気力が尽きて倒れるまで終わらないランニング。それから休む間もなく行われたのが模擬空中戦だ。

ロッテを組んだ相方と共に優人と若本のベテランコンビに挑み、徹底的に打ちのめされた彼女は、訓練後暫くは腰が抜けて暫く動くことも出来なかった。

「宮藤大尉にも、みつともない姿見せちゃったし……」

そう独り言ち、三隅はガツカリと肩を落とす。訓練後、三隅は発進ユニットの傍に倒れ、動けずにいた。それを見兼ねた優人に抱きかかえられて脱衣場まで運ばれてきたのだ。

暫くして。どうにか動けるようになった三隅は洗体を済ませ、熱い湯が張られた浴槽にゆつくりと身を沈める。

裸身を包み見込む温かな湯がなんとも心地よく、痛みや疲労が溶けていくようだ。

「汗臭い娘とか、思われちゃったかな？」

敬愛する上官の腕に抱かれて嬉しい反面、情けない姿を晒してしまい、軽蔑されていないか不安で仕方がない。

ガラツ！——

「え？」

ふと戸が開き、誰かが浴室に入ってくる。振り向いた三隅の視線の先に、凜々しい風貌の美女が佇んでいた。

「あつ？三隅候補生も御入浴中でしたか？」

礼儀正しい言葉遣いで声を掛けると、服部は浴室内へ足を踏み入れる。長く艶やかな黒髪を靡かせながら歩く扶桑撫子然とした姿に、三隅は思わず見惚れた。

「三隅候補生？どうかしたのですか？」

返事が無く、ただ無言のまま見つめ返してくる先客に、服部は不思議そうに首を傾げる。

「へ？あ、いや……何でもないわ」

相手の問い掛けで我に還った三隅は、気恥ずかしそうに視線を反らした。よく見る

と、そばかす混じりの頬が紅潮していた。

「……………」

頭にクエスチョンマークを踊らせ続ける服部だが、それ以上は何も訊かず、せつせと髪と身体を洗い始める。

彼女は普段、青いリボンで長い黒髪をポニーテールに纏めているため、三隅が髪を下ろした服部を見るのはこれが初めてだ。

(何か、変な気分……………)

と、三隅は内心で独り言ちる。練習艦隊に参加しているウィッチ候補生の中で、兵学校出身の士官候補生は服部だけだ。

聞いた話によると、兵学校の飛行学生に選抜される前は、かの坂本美緒少佐の指導を受けていたらしい。

そのこともあつて、三隅は秘かに服部をライバル視していた。しかし、いざ2人きりになると妙に緊張してしまう。

「ふう……………」

洗体を終え、髪にタオルを巻いた服部が湯船に身を沈める。心地好さげな吐息につられるように、三隅は横目でチラリと観察する。そして、彼女の美しさに思わず歯噛みする。

そばかす顔の地味な風貌の自分とは異なり、服部の肌には染み一つ見当たらない。透き通るような美しい肌をしていた。

また、歳の割に発育もかなり良く、少なくとも胸部の「主砲の口径」は同世代の扶桑人女性と比べ、明らかに優越している。もちろん、三隅よりもだ。

女の命と称される髪にしても、服部が典型的な扶桑撫子を連想させる清楚で艶やかな黒髪なのに対し、三隅は同じ黒髪でもやや色がくすんでいる。

(成績でも、キャリアでも、見た目の美しさでも負けるなんて……！)

士官候補生という自分とは段違いのエリートコースを歩み、優人や若本と並んで世界的に有名活躍有能なウィッチ——坂本美緒少佐お墨付きを貰うほど優秀なウィッチ候補生である服部静夏。本遠洋航海中に実施された訓練の成績でも、彼女は三隅を含めた全ての候補生を上回っていた。

また、服部は代々多くの軍人を輩出してきた名門家系の出であるが、それを鼻に掛けることもなければ、成績で自分を下回る他の訓練生を侮り、見下すような素振りも見せない。

一方、三隅は新興資産家の令嬢という育ちの良さと、ウィッチ候補生としての優秀さからくる自負心故か、些か傲慢なところがあり、自分と同じく佐世保航空予備学校に通っていたとある「落ちこぼれの生徒」をあからさまに見下してすらいた。

先述の生徒と共に交流を経て——根が素直なこともあり——良い方向へ変化しているのだが、三隅は自らが人格面でも服部に負けているように思えてならなかった。

尤も、服部は品行方正な人物に間違いは無いものの、やはりひとりの人間である以上、当然欠点は存在する。が、人格面を含め複数の分野で黒星を付けられた三隅には、人格者のように映っているらしい。

“佐世保の英雄”——雁縁孝美扶桑海軍中尉を、自身の理想として意識し、孝美のようないやうなウイッチになろうと気を張る傾向にあった彼女にとって、服部静夏は同世代で初めての好敵手に成り得る相手であった。

「あの?」

「え?」

服部に声を掛けられ、三隅は一度正面に戻ってあった視線を再び彼女へ向ける。

いつの間に関合いを詰めていたのか。服部はすぐ傍まで来ており、華やかな美貌で三隅の視界が埋まった。

端に映る件の“主砲”も重力に引かれる形で強調され、目のやり場に困ることこの上ない。

「先程から私のことをジロジロと見ているようですが?」

「あ、いや……」

「もしや、私が何か気に障るようなことを？」

「——っ!? な、何でもないわっ!」

申し訳なきように訊いて来る服部。彼女に対する心苦しさと気恥ずかしさで居た堪れない気持ちとなった三隅は、浴槽から上がると逃げるように浴場を後にする。

残された服部は、三隅が潜って行った戸口を見つめながら、怪訝そうに首を傾げていた。

◇ ◇ ◇

(もうっ! 何なの私ってば! 入浴中の他人様をジロジロ見るなんて失礼じゃない! しかも何で逃げるように出て来ちゃったのよ!)

浴場を飛び出した三隅は、艦内の通路を一心不乱に駆け回っていた。途中、士官を含めた加賀の乗員が声を掛けるも、彼女は止まらず走り続けた。

同性の入浴姿を横目で盗見し、それを看破された程度でそこまで自己嫌悪やパニックに陥る必要も無さそうだが、もしかすると根が物凄く繊細でウブなのかもしれない。

——ドガッ!

「きゃっ!」

「おっ？」

脇目も振らずに艦内を走り回った末、三隅は遂に何者かと衝突する。相手は第二種軍装を身に纏った士官らしき男性だった。彼に顔からぶつかつた三隅は、痛みのあまり目尻に涙を浮かべている。

「いつつ……つて、宮藤大尉!？」

三隅は、赤くなつた額を両手で押さえながらゆっくりと目蓋を開く。

すると、三隅が秘かに憧憬の念を抱いている航空ウィザード——宮藤優人が彼女の真正面に立っているのが見えた。

「こ、これは大変失礼しましたっ！」

三隅は直ぐ様直立不動及び挙手敬礼の姿勢を取つて謝罪する。声音がやや上擦り気味なのは慌てているからだろう。

「あ、ああ……」

一方で、優人は三隅の謝罪に応じるところか、何処か気まずそうに彼女から目を逸らしている。

数瞬置いた後。優人は第二種軍装の上着を脱ぐと、それを三隅に着せてやるのだつた。

「宮藤大尉？」

「……………お前、何て格好してんだよ」

「え？……………あつ!？」

優人に指摘され、三隅は気付く。一目散に浴場から走り去った自分が、セーラー服や水練着は疎か、晒すら巻いていない生まれのままの姿であるということ。

そして、そんな破廉恥な格好で大勢の目がある。『加賀』の艦内を駆け回っていたことに……………。

「あ、ああ……………!」

「み、三隅候補生？」

「いやあああああああああああああああああああああああああああああ
くっ!」

堪えられなくなった三隅が、感情に任せて絶叫する。耳を劈かんばかりの悲鳴が、乙女の羞恥を帯びて艦内へと響き渡ったのだった。



ミッドウェー島は、ハワイ諸島北西に位置する環礁である。今次大戦の主戦場である欧州方面から遙か遠方のリベリオン領土太平洋諸島に属し、小規模ながら陸海軍及び海

兵隊から成る守備隊も配置され、飛行場も存在する。

ミッドウエー島の守備隊は、リベリオン海軍太平洋艦隊と人類連合軍太平洋方面統合軍総司令部麾下にあるが、数多の艦艇と100名以上の航空歩兵を抱える同軍の中では二線級として扱われ、ウィッチャーやウィザードも配備されていなかった。

世が世ならば、広大な太平洋を戦場とする扶桑皇国とリベリオン合衆国の人類間戦争が勃発し、ミッドウエー島は太平洋艦隊の拠点であるハワイの哨戒拠点として活用されたかもしれない。

しかし、実際にはそんな戦争などは起きず。ミッドウエー島は辺境の軍事拠点と認識させることが常であった。

よもや、そのような辺鄙な場所に。ましてやネウロイの影響が殆んど無い太平洋方面に、マザータイプのネウロイが出現するなど。誰に予想出来ただろう。

44年末。何の前触れも無く北太平洋洋上に出現したマザーネウロイは、即座にミッドウエー島を強襲。1人を航空歩兵も持たないミッドウエー守備隊は瞬く間に壊滅し、島はネウロイの勢力下に置かれた。

ミッドウエーを手中に納めたマザーネウロイは、自らが生み出した飛行ネウロイ群を次の攻撃目標であり、太平洋方面のリベリオン軍及び連合軍の拠点であるハワイへと差し向ける。

ハワイに駐留するリベリオン陸海両軍と太平洋方面総司令部は、ミッドウェー守備隊からの報告でネウロイの出現を把握はしていた。

しかし、ネウロイの来襲があまりに迅速だったこと。レーダーで大編隊を捕捉していたが、担当要員がレーダーの扱いに不慣れであったこと。そして、上述の報告を受けた上官が予定されていたリベリオン軍機の到着と勘違いしたこと。これらの要因から、ネウロイのハワイ攻撃を許してしまう。

リベリオン海軍太平洋艦隊及び遠征していた扶桑海軍隷下の艦艇は、真つ先に飛行ネウロイの標的となった。多数の艦が大破または撃沈され、その中には10隻近い戦艦も含まれている。

また、ハワイ航空部隊に配備されていた航空機・ストライカーユニット等の機材の内、188機を損失。159機を損傷していた。

不幸中の幸いとも言うべきか。空母打撃部隊——第38任務部隊は、欧州派遣や訓練航海で遠征しており難を逃れている。

急ぎ迎撃に上がったウィッチ隊・戦闘機隊の健闘もあって、なんとかネウロイを撃退。敵はミッドウェー島へ後退していった。

ウィッチからも負傷者が出る等。甚大な被害をこうむりながらも、リベリオン軍はハワイ防衛を成功させた。

その後、ハワイ諸島近海で慣熟訓練を行っていた扶桑皇国海軍の新鋭空母“大鳳”が、単艦でネウロイ追撃を試みるも、すぐに帰投命令が下ったために断念する。

ネウロイのハワイ奇襲と真珠湾攻撃を許してしまった責任を問われ、太平洋方面統合軍最高司令官キンメル元帥並びにハワイ方面陸軍司令官シヨート中将の2名は、リベリオン合衆国大統領の意向により司令官職解任の憂き目に遭う。

キンメルの後任には、太平洋艦隊司令長官——クリフォード・ウインストン・ニミッツ大将が元帥へ昇格の上で就任し、統合軍最高司令官を務めつつ、艦隊司令長官も兼任することとなった。

一方、ミッドウエー島奪還作戦については、扶桑皇国海軍が主導での実施が決定する。また、同海軍軍令部を意向により、艦搭載型試作戦略兵器の稼働及び実戦試験も兼ねることとなった。



1945年1月某日、北太平洋ミッドウエー沖——

ミッドウエー奪還作戦。作戦名が示す通り、マザーネウロイによって占領されたりベリオン合衆国の領土——ミッドウエー島の奪還を目的に計画・立案されたものだ。

この作戦は、太平洋方面総司令部指揮の下。扶桑皇国海軍とリベリオン合衆国海軍の合同で実施する作戦である。

ざっくり言えば、敵占領下のミッドウエー島に対し、両海軍麾下の艦隊が挟撃を敢行。集結させた全ての戦力を以てして、ネウロイを一挙に駆逐する作戦だ。

リベリオン海軍は、太平洋艦隊から派遣された太平洋艦隊隷下の第38任務部隊を。

扶桑海軍は、かつての連合艦隊旗艦——戦艦「長門」と同型艦の「陸奥」有する東雲修一中将麾下の特務部隊を。それぞれミッドウエー方面へ派遣する。

「……………」

太平洋方面統合軍最高司令官補佐でもある東雲修一中将は、旗艦「長門」の艦橋にて、自身の艦隊を指揮していた。

敵めしい表情で双眼鏡を手に取り、艦橋の外の景色——艦隊進行方向へ射るような眼差しを向けている。

視線の先にあるのはもちろん、現在ネウロイの根拠地として機能しているミッドウエー島だ。

今次大戦の緒戦において東雲は、赤城・天城・蒼龍・飛龍の大型航空母艦4隻を中核とする遣欧艦隊機動部隊の指揮官として対ネウロイ防衛戦に参加し、統合軍最高司令官補佐の任に就き、総司令部付になるまでは、空母・軽空母を主力として新たに編成され

た第三艦隊の司令長官を努めていた。

が、艦隊派且つ水雷専門——反ウィッチ・ウイザードというわけではない——である東雲に航空方面は畑違いであり、空母機動部隊の指揮官には相応しくない、と判断した海軍上層部の意向で司令長官の任を解かれ、意向は本国鎮守府や第一艦隊の司令長官を歴任する。

航空歩兵や空母部隊が主力を担うようになった扶桑海軍において、水雷畑出身でありながら第一航空戦隊を直率した東雲のことを「愚か者」「冴えない司令官」などと酷評する者も多いが、彼は決して無能ではない。

水雷戦隊の指揮官時代には、勇猛果敢な提督として知られており、扶桑を代表する水雷戦のエキスパートとして海外にも名が通っていた。

さらに艦艇の扱いに長けており、欧州派遣時には鈍重で艦橋が左舷に寄っていて操艦しづらい赤城の操艦を自ら命じ、中型飛行ネウロイが放った7発もの光線を悠々と躲し、艦橋要員を驚かせている。

部下の教育にも熱心で、多くの部下から「厳しくも部下思いの指揮官」として秘事に信頼されていた。

そして、本日。過去の汚名を灌ぐべく、直率する第二戦隊——“長門”と“陸奥”で構成——を中核とする第一艦隊を率いて戦場へ向かう。

この第一艦隊は、本大戦において不遇に扱われてきた点が東雲と共通していた。

主戦場である欧州方面へ出撃する機会が、他の部隊と比べて非常に少なく、特に戦艦のみで編成された第二戦隊は、柱島に常時停泊しており、そのため「柱島艦隊」と揶揄されている。

やがて大和型、紀伊型、筑波型等の新鋭戦艦と、巡洋艦の殆どは第一機動艦隊麾下の第二艦隊へ移籍となり、残存の艦艇は瀬戸内海で訓練艦隊として扱われ、戦闘艦隊としては形骸化していた。

しかし、それも今日まで。ミッドウエー奪還作戦の主力に選ばれた第一艦隊は、この機会に自らの存在意義を示さんと敵地を目指して荒れ狂う洋上を突き進んでいる。

戦陣を切るのは、東雲の乗艦——第一艦隊及び第二戦隊旗艦の「長門」。扶桑海事変終盤では連合艦隊旗艦として参戦し、荒れ狂う海とネウロイの波状攻撃に晒される中で陣頭指揮を取った歴戦の猛者だ。

「……………」

東雲は艦橋の誰とも言葉を交わすこと無く、ただただ双眼鏡越しにミッドウエー島を静かに見据えていた。

既にリベリオン海軍の第38任務部隊がミッドウエー島のネウロイ会敵、空母から発艦したウィッチ・航空機部隊が交戦している。

ミッドウエー奪還作戦は予定通り進行している。リベリオン海軍とネウロイが一退の攻防を繰り広げる様を遠目で観察しつつ、東雲は心中で確信してた。

リベリオン側の役目は、今次作戦の“切り札”——試作戦略兵器を搭載した“陸奥”の準備が完了するまでの間、敵ネウロイ群を引き付け消耗させることだ。

「間もなく、ネウロイの攻撃範囲内に入ります！」

「陸奥、完全起動まであと一分」

レーダー要員と、宮菱重工業から派遣されている技術者の声が艦橋に響く。

数名の助手と共に長門に乗り込んでいるこの技術者は艦搭載型の試作戦略兵器を開発者であるが、専門は航空工学や魔法力と内燃機関の融合の研究である。

参謀及び艦橋要員等は、技術者を訝しげな目で見ていた。彼は世界的にも名の通った生きる偉人とも呼ぶべき人物であり、殊に人類とネウロイの戦いにおいては、多大な功績を上げていた。

しかし、彼が来たからどうだと言うのだ。何故、“切り札”とやらの詳細を未だ我々に説明しないのだ。

相対的に老朽化した艦艇である長門型2隻に今次作戦の旗艦と切り札の役割を与えてしまつて良いのだろうか。

戦艦が必要だというならば、第二艦隊からより優れた紀伊型か筑波型の派遣を要請し

て然るべきではないのか。

そもそも何故、「長門」と「陸奥」を接舷させて航行してるのか。何故、「陸奥」の方は無人運用なのか。

何より、ウィッチも空母部隊もない第一艦隊のみで作戦に参加することは明らかに無謀だ。

まさか、軍令部は自分達に討ち死にを要求しているのか。貧乏クジを引かされているのか。

時間が経過するのに比例して、艦橋要員等の不審感が段々と強くなっていく。

だが、件の技術者も彼等の司令長官も、そんなものは何処吹く風。淡々の「切り札」の稼働準備を進めている。

「完全起動まであと10秒！」

と、技術者が先程よりも大きな声で叫ぶ。彼の声音と表情には、緊張が滲んでいた。「9、8、7、6、5、4、3、2、1……0！」

カウントダウンが終わり、いよいよ「切り札」。戦略兵器の試作機が起動する。

しかし、その正体と技術者——宮藤一郎が発した言葉は、東雲を除く第一艦隊将兵の誰もが想像もしない……いや、出来ないものであった。

「試作型コアコントロールシステム起動！戦艦「陸奥」、ネウロイ化開始！」